

クロスアンジュ 天使と竜の輪舞 銀河の守護者

オービタル

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

真実の地球で双子の兄妹は父を越えようとしていた。母はノーマ（真の人間）で父はかつて全てを滅ぼそうとしていた邪神皇ドウムを倒した超古代種族、ヴェクタ人である。

そんなある日、双子の兄妹は星空を眺めていると不思議な宇宙船が墜落した。そして、その宇宙船に乗っている謎の美少女は一体何者なのか………一方、ある別宇宙では機械生命体軍事組織「アジマス連邦」が低レベルの文明の星と種族を滅ぼしていた。

果たして、勇敢なる双子の兄妹は全ての宇宙を救いに別の宇宙へと旅に出る。

「クロスアンジュ 天使と竜の輪舞 ジェミナライズ」の続きになります。

## 目次

オリジナル主人公、キャラ、前作キャラ&機体

### 星の海編

第1話：加速する運命	10
第2話：エミリア・ヴァルネア・クリーフ	15
第3話：アジマス連邦襲来	27
第4話：太陽の覚醒	34
第5話：旅立ち	39
第6話：実戦	53
第7話：歴史	62
第8話：イプシロン皇太子	70
第9話：暗証コード	84
第10話：協定条約	89
第11話：ネオ・アウローラ	96
第12話：ヒルデガルド・シユリーフオークト	118
第13話：両親の過去	137
第14話：ダーク・シン再来	146
第15話：水の惑星アクア	155
第16話：電光石火	167
第17話：墮天使降臨	176
ホライゾン編	
第18話：ヴァランドール皇国	194
第19話：妖精神龍	213
第20話：空からの姫君	230

第21話：Q人の遺産	241
第22話：ネオ・ミスルギ皇国の進攻	264
前編	
第23話：ネオ・ミスルギ皇国の進攻	279
中編	
第24話：ネオ・ミスルギ皇国の進攻	296
後編	
キャラ紹介『第2』	306
第25話：潜入	311
第26話：幹部	322
第27話：絶望の瞬間	337
第28話：聖地『ユグドラシル9』	348
第29話：護星神への試練	356
第30話：聖騎士 シグムント復活	364
第31話：真実	378
第32話：シンセシス	391
第33話：新たなる預言と黙示録	406
第34話：新たな力	420
第35話：二人の決断	437
第36話：奴隷解放	455
第37話：邪神覚醒	469
第38話：再会	479
第39話：真の力	497
第40話：神々の戦い	508
前編	
第41話：神々の戦い	517
中編	
第42話：神々の戦い	526
中編	
第43話：陽弥の闇	530
第44話：アプスとニケの祝福	539

第45話：邪神皇帝VS獄闇の皇神帝 546

歴史の始まり編

第46話：軍事施設 565

第47話：もう一人の英雄 576

第48話：惑星ローク 588

第49話：感染 606

第50話：フォーチュンベイビー計画 619

第51話：聖女イレーネ・ファレンス 634

第52話：運命 654

第53話：小さき戦士達 670

第54話：黒き民族達 686

第55話：禍々しき真実 698

第56話：グランドスファイア 716

第57話：来るべき備え 736

第58話：復活せし太陽 749

第59話：闇の根源 772

第60話：アルマロス再来 788

最終決戦編

第61話：大戦前夜 前編 804

第62話：大戦前夜 中編 826

第63話：大戦前夜 後編 832

第64話：時空大戦 前編 836

第65話：時空大戦 中編 841

第66話：時空大戦 後編 854

最終話：銀河の守護者 868

エピローグ：未来へ

外伝：二人からの祝福

外伝：許し

Lost Souls 編

afterstory01：選ばれし者

afterstory02：留学生

afterstory03：起動

afterstory04：ザークフセクター

afterstory05：ヴァルキュリアス

afterstory06：因縁

afterstory07：罨

afterstory08：大いなる旅立ち

afterstory09：空の世界

afterstory10：来るべき厄災

afterstory11：目覚めし厄災

afterstory12：エルダーの誇り

afterstory13：復活のD

afterstory14：ドレギアスの野望

afterstory15：思い

afterstory16：幽霊要塞

afterstory17：侵略

afterstory18：孤独の少女

afterstory19：囚われし魂

afterstory20：皆の決意

afterstory21：もう一人の異次元生命体

879

883

889

—————

—————

—————

—————

—————

—————

—————

—————

—————

—————

—————

—————

—————

—————

—————

—————

—————

—————

—————

—————

—————

—————

—————

891

896

900

914

922

934

951

958

963

978

987

999

1006

1017

1025

1032

1044

1056

1066

1075

1086

afterstory43	： 勇人の剣	1262
Final Wars編		
afterstory42	： 破壊神帝 降臨：後編	1251
afterstory41	： 破壊神帝 降臨：前編	1242
afterstory40	： 超決戦：後編	1231
afterstory39	： 超決戦：前編	1222
afterstory38	： 完全体、その名は……	1207
afterstory37	： カリュプソ騒乱	1200
afterstory36	： 家族	1194
1186		
afterstory35	： Quantam contact	1177
afterstory34	： 数々の勢力	1168
afterstory33	： 曙光の祝福	1157
afterstory32	： 究極の機体	1150
afterstory31	： 陽弥とエミリア	1147
afterstory30	： 熱と金と決意	1141
afterstory29	： 生きる希望	1137
afterstory28	： 獣の闘心	1133
afterstory28	： 陽弥VSギガオロチ	1126
afterstory27	： 龍装光の試練	1123
afterstory26	： 対決 帝国軍VS神々	1121
afterstory25	： 新たな勢力	1106
afterstory24	： 忍び寄る影	1099
afterstory23	： 虚無の空間	1096
afterstory22	： 見学	1096





## オリジナル主人公、キャラ、前作キャラ&機体

オリジナル主人公、キャラ、前作キャラ

陽弥・ギデオ

性別：男性

年齢：18歳↓1668歳

身長：171cm

体重：65kg

cv：松岡禎丞

本作のオリジナル主人公で前作の主人公 シン・ギデオンとヒロインであるヒルダの息子

双子の妹であるルナに心配を掛けており、ソフィアから『赤い単細胞』と言われおり、タスクとシン以上のラッキースケベの体質を持っている。

シンとヒルダから英才教育と訓練されていた。

26話で、自分は15年前に死んだ人と判明し、ジュリオからクアンタ人の遺産の一つ、最大のエネルギーを持つ”インフィニティソウル”を奪われるが、ラルフに助けられ、1650年間ユグドラシル9に滞在し、遥々未来から来た自分とエミリアの娘”マナ”が未来の自分からインフィニティソウルを借りて、人間世界ミッドガンドを護る護星神へ生まれ変わり、邪神皇帝クトゥルフに勝る程の真のシンセスへ覚醒した。

使用機体：アーキバスII 陽弥・カスタム↓シグムディア

ルナ・ギデオ

性別：女性

年齢：18歳

身長：170cm

体重：51kg

c v : 中尾衣里

本作のサブ主人公で前作の主人公 シン・ギデオンとヒロインであるヒルダの娘

いつも双子の兄である陽弥と両親を心配している。

陽弥同様、シンとヒルダに英才教育と訓練されていた。

エミリア・ヴァルネア・クリーフ

性別：女性

年齢：17歳

身長：168cm

体重：51kg

c v : 早耳沙織

本作のヒロイン 惑星ホライゾンに存在する五大国家の一つ、エルシュリア王国の第一王女であり、アジマス連邦の襲撃で、運良く謎の宇宙船に乗られ、陽弥達のいる地球にワープした。気は優しいが、陽弥の突然なラッキースケベハプニングになると怒る。でも、心の中では陽弥に恋心を抱いており、本人はまだ知っていない。

そしてアンジュの歌…… 『光の歌』、サラの歌…… 『風の歌』と並び、第3の永遠語り…… 『時の歌』と本人も知らない隠された力を持っている。

その正体はかつてあらゆる生命体を生み出したクアンタ人の末裔、ジュリオに拐われダークマタージュエルによって操られたが、心の中では自分の心臓であるクアンタニウムハートが理性を護っていてくれた。彼女も陽弥同様シンセシスに覚醒した。

使用機体：シグニュー

ソフィア

性別：女性

年齢：19歳

身長：169  
体重：53

c v : 小松未可子

本作のオリジナルキャラで、原作の主人公アンジュとタスクの娘  
性格はマイペースで母親譲りの金髪をしており、いつも陽弥と喧嘩  
する。

アレクトラ

性格：女性

年齢：17歳

身長：171

体重：53

c v : 渡辺明乃

ヘルガスト人のウィルとサリアの娘 母親と違って、性格はヤン  
キーでウィルとサリアの事を親父とお袋と呼んでいる。

リヨウマ・ネイル

性格：男性

年齢：18歳

身長：178

体重：64

c v : 逢坂良太

ドラゴレイド人の指導者 スワンネイルの一族 リユウガ・ネイル  
とフレイヤの一族 サラマンディーネの息子

心優しいが、怒るとドラゴレイドの力が覚醒して、獣化になれる。  
初の人型の男性とも言える。

アリス

対アジマス連邦光速特装戦艦ウラノスの艦長を務めており、20年前、彼女の故郷スカイタウンでシン・ギデオンに救われたことがある。

ヴィヴィアン

性別：女性

年齢：34歳

原作のキャラで、昔はピーキーだったけれども、20年後、凛々しい美少女に変わり、陽弥達をまとめる隊長を務めている。

使用機体 レイザー改

シン・ギデオン

年齢：37歳

前作のジェミナライズのオリジナル主人公であり、父親のヴェクタ人であるサムと古の民である母親のアリアのハーフで妹のココの兄でもありながら、陽弥とルナの父親。

前世ではパンドラメールを開発したヴェクタの科学者であったが、現世では、三大将の一人であり、愛する妻と双子と二人の妹達と母と生活している。

20年前、この世を滅ぼそうとしていた邪神皇から世界を救ったと称えられ、軍人からでは『神殺しのヴェクタ人』と呼ばれている。

使用機体：ペルシウス・オーバーライズ、ペガシオーネス

(詳細は前作のジェミナライズに投稿されています。)

ヒルダ (ヒルデガルド)・ギデオン (シュリーフオークト)

年齢：37歳

前作のジェミナライズのヒロインで、今ではシンの愛妻でオリジナル主人公陽弥とルナの母親。

20年前、ラストリベルタス戦後、真実の地球でシンと共に歩み始め、二年後に結婚……………そして九ヶ月後に双子である第一児の

陽弥と第二児のルナを無事に出産。

そして愛する夫と双子と一緒に暮らしている。

使用機体：アーキバス ヒルダ・カスタム、テオドーラ・ミカエル  
モード

オリジナル機体

アーキバスⅡ 陽弥・カスタム

型式番号：V S A I S K W 7 0 4

全高：8・7 m

頭頂部：8・5 m

陽弥専用の機体。

元々は父親のシンが試作機として使われたアーキバスの後継機、初の対空間用パラメイルでもある。

一般用は白と赤、指揮官用は白と黒い色と装備、機動力に分けているが陽弥のはシンが使っていたが、太陽の神”ヘリオス”の力に覚醒し、白からヒルダと同じ、赤と黄色に変わり、機動力、推進力も大幅に上がった。射撃兵器のプラズマビームライフルは通常のビームライフルと違って、光熱力と貫通力が非常に高く、敵の装甲を溶かしたり、掠れても光熱力で破壊することが出来る。

武装

プラズマビームライフル

シールド

ビームソード

高火力アサルトブレード

脚部隠し武器 ”プラズマダガー”

ゼロ距離技『プロミネンスフィンガー』

## セイレーン

型式番号：V S A | E P E 0 0 5

全高：8・6 m

頭頂部：8・4 m

ルナ専用の機体

アジマス連邦に対抗するためにシンとプロセアンのジャヴィックが作り上げた特殊なセイクリッドメイル。

通常のセイクリッドメイルとは違って、中衛、後衛に適した機体であり、呪紋を使って味方を援護したり、支援できる。

## 武装

プロセアン製スペリオルロッド

脚部隠し武器 ” プラズマダガー ”

ゼロ距離必殺 『ルナティックフィンガー』

## エリザベス

型式番号：A W | C B X 0 0 8

全高：7・8 m

頭頂部：7・3 m

ソフィア専用の機体

メイとロバートとジャヴィックが開発したヴィルキス、クレオパトラ、テオドーラ、レイジア、ヴィクトリア、エイレーネに続くラグナメイル8号機

他のラグナメイルと違って、空間用にされており、高機動力と反応速度が高く、敵を翻弄させる。

## 武器

零式超硬度斬鱗刀ラツイーエル

ビームシールド

ビームライフル

アサルトライフル

レイジア・マークII

型式番号：AW-CBX003

全高：8.4 m

頭頂部：8.1 m

アレクトラ専用の機体

ウイルが使っていた指輪とラグナメイル『レイジア』を娘のアレクトラに継がせ、改造された機体。出力を大幅に上がり、レーダー範囲を広くなり、遠距離にいる敵機も確認できる。

武器

ビームライフル

ビームシールド

バスターライフル

零式超硬度斬鱗刀ラツイーエル

鋼龍號

型式番号：試作機 式式

全高：10.2 m

頭頂部：9.3 m

リョウマ専用の機体

リョウマが乗る機体で、リユウガのヤマトのデータとサラマンデーネの焰龍號のスペアパーツを組み合わせた機体。収斂時空砲を放つことは出来ないが、3つの形態に変形することが可能になる。飛翔形態、駆逐形態、獣龍形態になる。

武装

バスターランチャー

腕部固定武装ビームガン

腕部固定超硬度電光劍『轟雷』

シグムント↓シグムディア

型式番号：ZBX1003↓VBQ1001

全高：11.9m

頭頂部：11.0m

ユグドラシル9の奥深くの神殿に封印されていたパンドラメール3号機であったが、その正体はかつてクアンタ人によって作られた人造生命体であった。

訳あってヴェクタの祖先達に拾われ、改造を受け、オリジナルのパンドラメールであるペルシウスやヒミコを生み出し、3号機として活躍していた。

両生類のような肌と蟲のような四つの目と甲殻系の虫の顎と4枚のビームウイング、そして鋭い牙と爪を持っており、あらゆる種族の言語を話すことが出来る。

陽弥をマスターと認め、コードネーム001からシグムディアとして陽弥と共に戦うことになった。

格闘戦でのメインウェポンは陽弥が持つ、七星剣と魔剣グラムの二刀流で、相手を切り裂き、さらに両方の剣を合体すれば、長剣となり、広範囲攻撃ができる。

格闘戦でのサブウェポンは両方の手首から高周波のエーテル粒子の刃を放つサーメットブレードを展開して、敵を八つ裂きにしたり、刺剣としても役立つ事ができる。さらに、肘からもサーメットブレードを展開することで、手首のサーメットブレードを展開して、メインウェポンと同じく広範囲攻撃が可能となる。

射撃でのメインウェポンはハイパーノバビームライフル(超高周波荷電粒子突撃銃)でシグムディアしか扱えない最強のビームライフル。

通常のビームライフルと違って、出力と火力が最大で、しかも充電式であり、減量にも困らない。

さらに陽弥のフェイスガードに搭載されているXレイバイザーシステムを起動すれば、相手の急所やフォドラニウムの不具合、そして分からないシステムを透視することが出来る。



武装

七星剣&魔剣グラム

サーメットブレード

ハイパーノバビームライフル

## 星の海編

### 第1話：加速する運命

ドゥームの戦いから、20年後……地球の砂浜に藍髪の男性が赤髪の青年を木刀で稽古していた。藍髪の男性が赤髪の青年の攻撃を回避し、後ろに回り込み、青年を蹴り飛ばした。

「グアッー」

蹴り飛ばされた青年は砂の中に埋もれたが、直ぐに立ち上がった。すると藍髪の男性が問う。

「ほお、俺の蹴りに耐えるとは……それでこそ、俺の息子、陽弥だ」

「当たり前だろ！俺は伝説の邪神殺しのヴェクタ人……シンとメイルライダー ヒルダの子だからな！手加減はしないからな！……父さん！」

陽弥はもうスピードでシンに木刀を構え、突き付けたが、シンは木刀を捨て、陽弥の木刀を白羽取りで防御した。

「白羽取りっ!？」

「甘いー」

シンは木刀を深く砂浜に差し込み、と陽弥は木刀を抜こうとした直後、シンはスタンブレードを取りだし、陽弥の首元に近づける。

「それだけか？」

すると陽弥は木刀を捨て、倒れた。

「……………あ~~~~！強すぎるー！」

「何だ？もう降参か……？」

「だってよー！父さん強すぎる！いくら英才教育やトレーニングだからって！トレーニング相手が神をぶつ飛ばした英雄であり、俺の父親だからよ！思ったんだけど何で11年間、俺とルナが、父さんと母さんの英才教育を受けるんだ？」

「……………」

するとシンは黙り込む。



夜になると陽弥は家から出て、星を眺めていた。

「…………… 父さん……………」

「お兄ちゃん♪」

その時、後ろからルナが現れる。

「ルナ？」

「どうしたの？…………… こんな所で……………」

「別に……………！」

「ふくん……………」

兄妹揃って、星を眺めていると陽弥がルナに問う。

「なあ、ルナ……………」

「何？」

「前から思ったんだけど…………… 父さんと母さん…………… 俺達に…………… 何か隠してると思うんだ……………」

「何で？」

「何でって…………… 考えてみるよ？…………… 俺らがまだ6歳の頃にいきなり英才教育とトレーニングで俺らを鍛えたり、学習力を身に付けさせたり、それで…………… 何の意味があるのか？」

「分からないよ…………… でも、お父さんとお母さんは私達兄妹と違って…………… 酷い状況で生きて生活して…………… お父さんが邪神の皇を倒して…………… 平和な世界を作った…………… そして私達が産まれてきた…………… だから、お父さんとお母さんは私達の為に勉強や体力を強く教えているのよ……………」

「そっか？…………… 俺には別の理由と言えるが…………… くん……………」

「どうしたの？」

「なあ、ルナ…………… あれって…………… 流れ星だよな」

陽弥の指差す方向に何か光っており、すると流れ星に変わった。

「うん……………」

「流れ星ってどんな色をしてるんだ？」

「どんな色って普通に青?」

「お前もそう思ったか……じゃあ、あの流れ星……何であるに真っ赤になってるんだ?」

「……確かに……真っ赤?……ちよつと待って!」

「どうした!」

「あれ!流れ星じゃない!!」

「え?!」

その時、流れ星が段々と大きくなり、炎と煙を上げながら森の方へ落下した。

「!!」

「!!」  
風圧が無くなると陽弥とルナは流れ星が落ちた所を見ると複数の木が炎上しているのが分かった。

「何?……今の?!」

「分からない!?でも、何かヤバイ事が起こってるだろ!ルナ!お前は父さんと母さんをお兄ちゃんと呼んでくれ!」

「お兄ちゃんは?!」

「あれが何なのか突き止める!」

陽弥は腰部からサブマシンガン『M-6 テンペスト』を取り出すとルナもM-6 テンペストを取り出す。

「ルナ!」

「何、無茶なことを言ってるの?!お兄ちゃんだけだったらピンチな時、誰も助けてくれないよ?」

「ハア……父さんと母さんに怒られても知らないぞ!」

「分かってるわよ!」

陽弥とルナは急いで流れ星が落ちた場所へ向かって行った。

【オリキヤラ】

陽弥・ギデオンの

前作の『クロスアンジュ 天使と竜の輪舞 ジェミナライズ』オリ  
ジナル主人公”シン・ギデオン”とヒルダの息子で双子の妹のルナの  
兄であり、友達のソフィアから『赤い単細胞』と呼ばれる青年。

使用機体：アーキバス II 陽弥・カスタム

ルナ・ギデオンの

前作の『クロスアンジュ 天使と竜の輪舞 ジェミナライズ』オリ  
ジナル主人公”シン・ギデオン”とヒルダの娘ので双子の兄の陽弥の  
妹であり、家族思いのある少女。

使用機体：セイレーン

## 第2話：エミリア・ヴァルネア・クリーフ

陽弥とルナは流れ星が落下した森の中に入り込むとルナが陽弥に問う。

「ねえ、お兄ちゃん」

「何だ？」

「私の推測だと思うんだけど……あれ……流れ星と言うより……スペースシップだと思うの……」

「スペースシップねえ……それが本当なら、何であんなに燃えていたんだ？」

「分からない……只……」

ルナが言うとした直後、空が急に明るくなり、陽弥とルナが上を見ると見たことのない円盤型のスペースシップが飛んでいた。

「何あれ!？」

「見たことのないスペースシップだ!」

「狙いは……僕達と同じって言うことか……」

「どうするの?」

「決まってるだろ……!早いとこ、アイツらよりも先に速く着くとだ!ルナ!」

「分かったわ!」

「行くぞ!」

「ええ!」

2分後、陽弥とルナは落下した所に着いた。

「これは……?」

「やっぱり……」

それは白く輝くシリンダー型の宇宙船であり、右のスラスターが破損していた。

「右のスラスターが破損している!」

その時、宇宙船が光だした。

「何だ?!」

「眩しい!」

すると宇宙船のハッチが開き、中から黄緑色の光輝く球体

が現れる。そして球体は地面に着地すると光が消え、中から白衣の

少女が現れ、その場で倒れた。

「何だったんだ?!」

「見て!お兄ちゃん!」

二人が見たのは森のような綺麗な緑色の髪と貴族風な白衣を着た少女が倒れていた。

「人だ!」

陽弥とルナは急いで倒れている少女の所に近付いた直後、上からさつき見た円盤型のスペースシップが現れた。

「あれは!」

「さつきのスペースシップ!」

すると円盤型のスペースシップのハッチが開き、中から6つの機械の体をした人物が、陽弥とルナの所に降下してきた。

「何……?!」

ルナは少女を抱き上げ、陽弥はテンペストを向けた。

「誰だ……?!」

その時、機械の体をした人物が話し掛けてきた。

『その実験体をここに置け』

その言葉にルナが怒鳴る。

「実験体って!?!……冗談言わないでよ!こんな状態の少女を置けなんて!酷すぎますよ!」

『………止む終えない………排除せよ!』

機械の体をした6体は腕部が変形しアームキャノンへと変わり、陽弥達に向けて、パルスガン発砲した。陽弥はポケットから球を取りだ



し、地面に叩き落とすと球が光、陽弥達を包み込むような球体に変わり、パルスガンの攻撃から陽弥とルナを守った。

「クソッ！」

「貴方達は何でこの人を実験体にするの!？」

「うるさい！猿が！……… 貴様ら…… 我々、アジマス連邦軍に逆らった事を後悔するが良い!!殺れ!!」

「アジマス連邦……?!」

その時、アジマス連邦軍のマザーシップの主砲が陽弥達に向けられた。

「!!」

主砲に粒子の光が集まった直後、別の方向から緑の光が一直線に向かってきてアジマス連邦軍のマザーシップの主砲を貫通し、爆発した。

「何だ!?!」

「!?!」

その時、上空からペルシウス・オーバーライズが飛来し、マザーシップの底部にある主砲をダイヤモンド・ヴァルキュリアで全て破壊した。

「何だあの機体は!?!」

「父さん！」

「お父さん！」

すると陽弥とルナの耳に装着されている通信機からシンの声が聞こえた。

「陽弥！ルナ！大丈夫か!？」

「それより！父さん！アジマス連邦はこの人を狙っているんだ！」

「アジマス連邦……?!」

シンはペルシウスを旋回し、陽弥達を見るとルナが抱き抱えている少女とアジマス連邦兵が6体いるのを確認し、陽弥とルナに報告した。

「なるほど……」

シンは納得するとペルシウスの腰部にあるもう一つのダイヤモンド

ジョン・ヴァルキュリアを取りだし、持っていたデイメンジョン・ヴァルキュリアと連結し、デイメンジョン・ヴァルキュリアを薙刀モードに切り替え、アジマス連邦軍マザーシップに突撃した。そしてアジマス連邦軍マザーシップからカタパルトが開き、中から多数のアジマス連邦大型兵と戦闘機が射出され、パルスキャノンを乱射してきた。シンは、デイメンジョン・ヴァルキュリアで振り回し、パルスキャノンの攻撃を防御する。そして振り回しながら接近し、デイメンジョン・ヴァルキュリアでアジマス連邦大型兵を斬り倒し、飛んでくる戦闘機はデイメンジョン・ヴァルキュリアをライフルモードに切り替え、2丁拳銃で破壊する。それをマザーシップのブリッジから見ていたアジマス連邦兵が驚く。

「バカな!? こんな事が…… たった一体の猿を相手してるのに…… 何故こんなに!!」

アジマス連邦兵の艦長が唾然しているとシンはペルシウスの頭部のビームバルカンを発砲して陽弥とルナの所にいるアジマス連邦兵6体を一掃し、マザーシップのブリッジの目の前まで近付いた。

「!!!」

アジマス連邦兵は驚き、ペルシウスが二つのデイメンジョン・ヴァルキュリアをソードモードに切り替え、マザーシップのブリッジごと斬った。

「お許してください!…… professor E!!!」

マザーシップの艦長が最後に謎の言葉を吐くと同時に艦橋が爆発し、マザーシップがゆらゆらと墜落した。

その光景を見ていた陽弥とルナは一安心した。

「助かったあ……」

するとペルシウスが陽弥とルナの所に着陸するとコックピットのハッチが開き、中からシンが現れ、陽弥とルナの所に近付くとシンは陽弥とルナの頭に拳骨した。

「痛つて〜!!?」

「何で?!」

「勝手に単独行動をしたから二人とも一緒に拳骨だ! 本当なら二発

だったけど…… その子を守っていたからここは許して一発だけと……」

「クツソ〜!」

陽弥は頭を撫でながら痛みを和らいだ後、状況を説明した。

「なるほど…… 俺が一回レゾナンスで相手してきたアジマス連邦がその子を狙っている…… う〜ん」

「アジマス連邦を倒した父さんなら分かるかなあつて……」

「正直、俺もアジマス連邦の事は分からないけど、やり方は許さない…… とにかくその子をマギー病院に連れていこう……」

二人は領き、シンはヒルダとアリアに連絡してその子をマギーの病院に連れていった。

映写機台に寝かされた少女はマギーに検査していた。するとアンジユとタスク、リュウガとサラマンディーネが見舞いに来た。

「何なのあの子?」

「分からない…… けど、俺が一回相手したアジマス連邦に追いかけてられていたと思う。」

「何?その…… あけ…… まし…… 連邦って?」

「アジマス連邦…… 機械生命体だけの軍事組織で低文明を持つ惑星に武力行使で侵略し、自分達の領土に変えるために、俺ら見たいな有機生命体を奴隷する奴等だ。」

「何て卑劣な者達だなのでしょう…… 何も罪のない者達を武力で支配下に置き、奴隷にするなんて……」

「しかも、惑星レゾナンスの次は別の惑星か…… 諦めのない連中だ…… こっちの機械生命体種族 ゲス の方が一番いいよ…… 彼等は元々はクオリアンによって作られた対話インターフェイスシ

ステムを持った人工知能種族……昔は敵対同士だったけど、現在はこうやって分かり合えて一緒に暮らしているからなあ……」

「しかし……何故アジマス連邦はあの子を？」

するとマギーがシン達に近付いてきて報告した。

「あの子が目を覚ましたよ……」

「本当!？」

「ええ、会いに行ったら？」

「分かりました!」

陽弥とルナはあの子がいる病室へ向かった。

陽弥とルナは病室の扉を開き、その少女がこちらを向くと突然、少女が警戒して棚に置いてある白衣の中から短剣を持ち、陽弥とルナに突き付けた。

「待って……!」

しかし、少女は陽弥の話を聞かずに短剣を持って突進してきた。

「おっと!!」

「うわあっ!」

陽弥とルナは回避すると少女は何故か陽弥に突進する。

「何で俺なっ!？」

すると陽弥の足元に薬用の容器が転がっており、陽弥はそれに気付かず、バランスを崩し、少女の方へ倒れた。

「あだっ!!」

「!？」

倒れた陽弥と少女は何故こうなったのか少女の股に陽弥の頭が当たっているのが、それを見ていたルナは赤くなり、シンとヒルダは呆れた顔で陽弥を見て、アンジュとタスク、リュウガとサラマンディーネは唾然していた。

少女は気が付くと自分の股に陽弥の頭があることに顔を真っ赤にし、陽弥も気が付くと自分の目の前に少女の股があることに顔を赤くする。

「ゴッ!ゴメン!これは!その……」

「きやあああああああ〜〜〜〜〜」  
「ぐえっ!」

少女が悲鳴を上げると陽弥の下顎、目掛けてアツパーして陽弥は吹っ飛ばされた。それを見ていたアンジュとタスクはあの頃の事を思い出す。

「あの光景……まるで私とタスクが出会った時に似ている。」  
するとタスクも言う。

「俺も……思った。」

再び、陽弥は起き上がり、何とか説得しようと思っただけでなく、少女は正気を取り戻した。

「まだ……怒ってる?」

「……………」

「ハア……どうすれば良いんだ?」

「お兄ちゃん……………」

「何だ?」

「私に任せて♪」

陽弥が変わって、ルナが話し相手をする事になった。

「名前は?…………… あっ!そっか!…………… 私はルナ…………… こっちの赤髪の人はお兄ちゃんのお父さんとお母さんとお婆ちゃん…………… アンジュさん、タスクさん、リュウガさん、サラマインディーネさん。」

皆は少女に挨拶し、ルナは話を続ける。

「貴方の名前は?」

「…………… リア…………… ヴァ…………… ア…………… リー……………」

「ん?」

「…………… エミリア・ヴァルネア・クリーフ……………」

「エミリア・ヴァルネア・クリーフさんですか…………… 良い名前だね…………… エミリアさんと呼んでも良いのでしょうか?」

「…………… 良いですけど……………」

「良かった♪そう言えば、エミリアさんはどうしてあのシリンダー型のスペースシップに乗っていたのですか?」

「スペース…… シップ??」

「ほら、あの白く輝いている……………」

「!!」

するとエミリアが突然、頭を抑え、震えだした。

「どうしたの!?!」

「…………… 御父様!…………… 御母様!…………… そうだ!」

「え?」

突然、エミリアが立ち上がり、扉の方へ走っていった。

「!!?」

エミリアはマギーの病院内の廊下を走り、陽弥とルナは追いかけた。

そしてエミリアは出口の方へ走り、外へ出ると辺りを見渡した。

「ここは…………… 何処なの?!エルシュリア王国は?!」

そしてエミリアを追って、陽弥とルナが到着する。

「おい!お前!」

「?」

「勝手に病院から出たら駄目だろ!」

するとエミリアは陽弥の所に近付き、話し掛けてきた。

「ねえ!貴方!ここは何処なの?!エルシュリア王国はどどつちななの?!  
アイツらは何処にいるの?!」

「まあ!落ち着け!…………… ここはアウラの都でエルシュリア王国って  
言う国はないぞ」

「嘘を言わないで下さい!」

「嘘じゃないって!」

するとサラマンディーネがエミリアに話す。

「陽弥殿は嘘を申してはおりません…………… 全て誠であります。」

「何で……………?」

「恐らく、エルシュリア王国と言うのは…………… 信じられないかも知れ  
ませんが…………… これを見てください」

サラマンディーネがポケットからある装置を取りだし、ボタンを押  
すとホログラム映像で映し出されている地球が浮かび、エミリアは驚

く。

「何なのこれ……魔法?!?!」

「いえ、私達はこれを『ホログラム』と呼んでいます。」

「ホロ……グ……ラム？」

「貴女が言う国は何処にありますか？」

サラマンディーネはホログラム映像で映し出されている地球を回し、エミリアが言うエルシュリア王国が何処にあるのか探した。

しかし、エミリアが言うエルシュリア王国と言う国は何処にもなかった。

「そんな……私は一人になってしまったの……？」

エミリアがその場で泣き崩れるとサラマンディーネが教える。

「エミリア殿……」

「何も言わないで下さい……国が亡くなっては私にはもう……」

「……世界が多数ありましたら？」

「え？」

「分かりやすく申しますと……夜空に見える星の彼方には無数の世界があります。貴女がエルシュリア王国がある世界もあの星の何処かにあります。そして貴女が今、ここにいる世界も星の一つです。」

「つまり……エルシュリア王国は？」

「はい……亡くなっておられません……安心してください。」

エミリアはサラマンディーネが自分の世界は亡くなってはいないとの事でさらに泣き崩れる。

「~~~~~!!!」

エミリアはおとなしく、病室に戻り、前の事と自分が何者なのかも話した。それを聞いた陽弥とルナとアンジユが驚く。

「「ええええええ~~~~~!!!」」

「貴女！エルシュリア王国のお姫さまなの!？」

「はい、正確におっしゃりますと…… エルシュリア王国 16第

国王アストラッド・ヴァルネア・クリーフ17世の第一王女 エミリア・ヴァルネア・クリーフなのです。」

「へえ〜…………… あんたもあつちのお姫さまなんだ……………」

「え？どういう事なのですか？」

「アンジュさんは…………… 元は貴女と同じ、別の世界のお姫さまだったのよ」

「まあ！そうだったのですか？」

「ええ、今は人類銀河共和国の女帝だけどね」

「女帝!?!」

「アンジュさんはこう見えて、凄いい人なのよ！こちらのサラマンディーネもこのアウラの都のお姫さまなの、」

「サラマンディーネ様も!」

「その通りですわ、エミリア殿…………… そして私の夫 リユウガ・ネイルもアンジュや貴女と同じく別の世界から来た皇子なのですから……………」

「驚きましたわ！ここに居る皆さま方が皆、王家の者なんて…………… 何てお恥ずかしい事をしたのでしょうか。陽弥様も大変、申し訳ないことを……………」

「嫌、良いんだよ…………… 俺ら家族は王家じゃないけど……………」

「王家ではない?」

「まあ、簡単に言えばアンジュさんやサラマンディーネやリユウガさん見たいな王家の者とは違うのよ……………」

「俺達はかつて、この世界を滅ぼそうとしていた邪神の皇から世界を守り、邪神の皇を封印した伝説の一族の末裔…………… ヴェクタ……………」

「ヴェクタ？それはアンジュ様やサラマンディーネ様やリユウガ様見たいな王家の者よりも?」

「まあ、そんな感じかな?」

「そして復活した邪神の皇は再び、世界を覆い尽くそうとしたが俺



と……………」

「私の……………」

「お父さんが……………」

陽弥とルナは同時にシンの方を見た。

「……………」

「貴方様が悪しき神を倒した勇者ですか？」

「まあ、そうなるかな……………」  
「そして……………」  
「お前の世界を支配しているのが……………」  
「機械生命体種族が集まった軍事組織『アジマス連邦』だ。前に俺はアジマス連邦が支配していた世界をを解放したことがある。」

「解放?!そんなことが可能なのですか?!」

「そうだ……………」  
「その為にはお前の世界に行く必要がある。それと……………」  
「お供が必要だろ？」

「はい、確かに私の世界に行くには多数の困難が待ち構えているでしょう……………」  
「陽弥様とルナ様の御父様……………」  
「どうか……………」  
「お願いします……………」  
「! 私達の世界を……………」  
「アジマス連邦から……………」  
「護ってください……………」  
「!」

エミリアは皆の前で深く頭を下げた。

「どうする……………」

「ヒルダがシンに問う。するとシンは大きく息を吸い吐くと、答えた。」

「……………」  
「本気か？」

「……………」  
「はい!」

「本当は俺らみたいなの、この科学力を低文明の者達に見せたくなかったけど……………」  
「お前は、この世界の物を見てしまった。それでも……………」  
「お前は元の世界に帰りたいか？」

「……………」  
「はい!覚悟は出来ています!」

「……………」  
「良かろう。でも、その前にお前が乗ってきたあのスペースシップ……………」  
「少し貸して貰えるかね？」

「え?あ、はい……………」

「よし……………」  
「それじゃ、あんたに付いていくお供を紹介しよう。」



### 第3話：アジマス連邦襲来

突如、地球軌道上にて襲来してきた正体不明の艦隊は真っ直ぐ大気圏を突入してきた。

「α將軍…… 大気圏突入…… 完了致しました。」

「…… 追撃に向かった仲間が消息たったからなあ…… この星の猿共は野蠻かもしれない…… だが、我らの敵ではない…… 灰にしてくれようぞ！」

その時、艦隊の2時方向からセイクリッドメール5機が偵察していた。

「何だあれは……？」

「ハ！恐らく、この星の軍の偵察部隊と見られます！」

「…… ハエ共目が！撃ち落とせ！」

α將軍がアジマス連邦艦隊に連絡すると艦隊から対空パルスキャノンが乱射され、5機の内、3機が撃墜され、2機は急いで退却した。

「フーン！口ほどでもない……！」

その頃、アウラの都に撤退した偵察部隊が報告した結果、間違いなく「アジマス連邦の」と判明した。

「間違いなくアジマス連邦だな！」

「はい！巡洋艦及び、駆逐艦、強襲艦、母艦その中に旗艦らしき艦も！」

偵察部隊が持ち場に戻っていくとシンは拳を壁に叩きつけた。

「やっぱり、お姫さまが狙いか！陽弥！ルナ！」

「はー！」

「お前達はお姫さまを守るためにシエルターに避難しろ！」

「そんな!?俺は戦えるぞ！」

「良いから言うことを聞け！タスク！リュウガ！行くぞ！」

シンはA R Sスーツを装着するとタスクとリュウガもA R Sスーツを装着し、格納庫へと向かっていった。

「クソッ！父さんの奴！」

「ちよつとお兄ちゃん!?!」

「俺も行く！ルナはエミリアと母さんと婆ちゃんを守ってくれ！」

「そんな〜！」

陽弥は急いでシンの後を追った。

格納庫ではセイクリッドメイル ブレイブ、サイクルフス、バンシーとパラメイル グレイブ、アーキバス、アーキバスII、ハウザーが次々とカタパルトから射出されていた。その中にシン達のパンドラメイル、ペルシウス、ヘラクレス、ヤマトが配備されており、シンとタスクとリュウガは使用しているパンドラメイルメイルに乗り込んでいる。

「リュウガ・ネイル！ヤマト 参る！」

リュウガのヤマトが射出され、次にタスクも出る。

「タスク！ ヘラクレス 行きます！」

タスクのヘラクレスも射出され、最後にシンのペルシウスがペガシオーンに乗った。

「シン・ギデオーン！ ペルシウス・オーバーライズ 出るぞー！」

シンはペガシオーンネスの手綱を引くとペガシオーンネスが鳴き声を上げ、空を駆け巡った。それに続くかのように連合クルーザー、同盟クルーザー、共和国クルーザーも発進する。

アウラの都の上空でシン達は陣形を組、アジマス連邦艦隊が強襲してくる様子を伺っていた。

「来ましたー！」

アサリイ兵が雲の上を指すと同時に雲の中に多数の黒い影が現れ

た。そして、雲からユラリと青黒く、巨大な戦艦が現れ、巨大な戦艦の後方から、多数の艦隊が襲来してきた。

「全機！構え!!」

シンの指示に全セイクリッドメール隊、パラメール隊、艦隊もアジマス連邦艦隊に武器を向けた。

「まだまだぞ…………… 合図で撃て……………」

そして、それを旗艦の艦橋から見ていたα将軍はアジマス連邦兵に命令する。

『猿目…………… 我らに抗うか…………… 良かろう!…………… 全艦隊に告ぐ! この星の猿共は我らアジマス連邦に牙を向けた。よつて彼らに…………… 制裁を下す!!』

アジマス連邦艦隊から無数の大型アジマス連邦兵と戦闘機が向かってきた。

それを見ていたシン達は兵器のセーフティをオフにする。

「まだまだぞー!」

アジマス連邦兵が真っ直ぐシン達の所へ向かってくる。

「まだまだ!」

どんどんとアジマス連邦兵がシン達の所へと近付き、50メートル辺りになるとシンは合図した。

「全機！一斉射撃！攻撃開始!」

シンの合図と共に全機、全艦隊は一斉射撃を開始した。

「散らばれ!」

シンの命令すると全機は散開しながら攻撃した。多数のアジマス連邦兵と戦闘機、艦隊も攻撃してきた。多数のアジマス連邦兵やセイ

クリッドメイル、パラメイルが墜落、爆破され、シンはペガシオーネ  
スで駆け巡り、アジマス連邦艦隊に突っ込んだ。シンがデイメンジ  
ン・ヴァルキュリアを連結するとデイメンジョン・ヴァルキュリアか  
ら超大型エネルギーブレードを放出し、アジマス連邦巡洋艦の装甲に  
突き刺し、ペガシオーネスを走らせながら内部ごと破壊し、撃沈させ  
た。タスクの方は二刀流のルミナス・ブレードでヘラクレスに向かっ  
てくるアジマス連邦兵を回転斬りをしながらアジマス連邦兵を切り  
刻んだ。

そしてリユウガはバスターライフルとバスターランチャーを持ち、  
アクロバティック戦法でアジマス連邦戦闘機を撃ち落としていく。  
それを見ていたα将軍が驚く。

『おおく！この猿共は我々に近いテクノロジーを持っているようだ  
なあ……………』

『α将軍！』

『どうした……………？』

『あの3機の機体の詳細が突き止めました！』

『あの3機？我々と互角に戦闘しているあれか……………？』

『はい！馬型の機体に乗っている有機生命体は……………ヴェクタ人  
です！』

『ヴェクタ人だと……………あり得ない！ヴェクタは絶滅したはずだ  
！……………するとあの3機の機体はパンドラメイルか……………だか  
ら我々と互角と戦える訳か……………面白い!!』

するとα将軍は立ち上がり、何処かに行こうとした。

『α将軍!!どちらに!』

『格納庫だ……………我が愛馬！ザムザ・ギムガラムを出せ！我、自ら

出る!』

『!!?』

!!  
!ジマス連邦兵が驚き、α将軍は格納庫へと行くとアジマス連邦兵  
が言う。

『α将軍自ら出るなんて……………見たことないぞ!』

『ああ……………!あそこまでα将軍を動かすほどの戦闘って……………

初めてだよな？確か…… α将軍が出陣したの……… 何回だ？」  
『一回……』

アジマス連邦兵は笑っていたα将軍に怯えた。

その頃、アウラの都防衛省の発着場では陽弥がいた。

「あく！どれもこれも！全部出動しちまっている！どうすれば  
?!……………?……………」

すると陽弥は気付かなかったのか上の格納庫に1機だけのアーキ  
バスⅡが保管されていた。

「あるじゃないか！」

陽弥はホワイトとネイビーのカラーをしているアーキバスⅡを動  
かすとアーキバスⅡは起動し、シン達のいる戦場へ向かっていった。

その頃、シン達はアジマス連邦兵を駆逐していた。

「これなら勝てる！」

「ああー！」

「?!……………シン！タスク！上を見ろ！」  
「!？」

リュウガがシンとタスクに警告を言い、シンとタスクは上を見た。  
そこにはペルシウス並の大きさを持つ機体が浮遊しており、肩部と脚  
部の部分だけ妙に大きく、ラインが赤く発光し、頭部のモノアイが緑

に光る。

「何だあれは?! 新型か?!」

リュウガはバスターランチャーをその機体に向けた直後、巨体な機体がいつの間にか姿を消していた。

「何処だ?! 何処に……………?!」

シン達が謎の機体を探している直後、ヤマトが吹き飛ばされた。シンとタスクは後ろを見ると謎の機体の腕部が変型して、巨体な剛腕になっていった。シン達が武器を構えた直後、謎の機体から通信が開かれた。

『そこまでだ……………』

「!」

「おとなしく、攻撃を止めよ、ヴェクタ人……………」

シンは驚いた直後、謎の機体がタスク目掛けて、巨大な剛腕を振り回した。

「クッー」

タスクはルミナス・ブレードで防御するが吹き飛ばされた。

「タスクー」

シンがタスクの所に向かう直後、シンの目の前に謎の機体が剛腕を向けてきた。

『無駄な抵抗はよせ……………』

「…………… まず、お前は名前は何だ?」

『GC-56 ジェネラル・α……………』

「お前らは…………… 何故あのお姫さまを狙っているんだ? 何が目的なんだ?」

『黙れヴェクタ人! あの御方の為だ!』

その時、α将軍が放った言葉にシンは思い出す。

『あの御方……………?! 前のテロリストが言っていた奴か…………… ここはペースを合わせた後に……………』

その時、別の方向から声が聞こえてきた。

「父さくん!」



「!?」

「『あれは……?』」

12時の方向からアーキバスⅡに乗った陽弥が飛んできた。

「陽弥!? 何でアイツが!!?」

## 第4話：太陽の覚醒

突然、目の前にアーキバスⅡに乗っている陽弥が来ていることにシンは驚きを隠せなかった。

「馬鹿っ！来るんじゃないやねえ！」

「ほお、子供のヴェクタ人か……………丁度良い……………貴様の態度が変わったから……………さぞかし大切な子猿だろう……………」

「α……………まさか!？」

α将軍のザムザ・ギムガルムのモノアイが陽弥のアーキバスⅡをロックオンして、背部から高周波エネルギーアックスを展開し、陽弥のアーキバスⅡの方へ向かった。

「まずい！」

シンは急いでペルシウスを動かし、ハイパーオーグメントモードを使い陽弥の所へ向かっていった。

一方、陽弥は操作が効かないのか、あちこちのボタンを押してアーキバスⅡを動かしていた。

「何で言うこと聞かないんだ!!コイツは!」

その時、陽弥の前方にα将軍が乗るザムザ・ギムガルムが襲ってきた。陽弥はアーキバスⅡを旋回したがザムザ・ギムガルムの高周波エネルギーアックスの刃がアーキバスⅡのサブウイングを斬り落とした。左のサブウイングが斬られ、左のサブウイングが無くなったアーキバスⅡは旋回しながら墜落していた。

「うわあああ……………!!!」

陽弥が叫んでいる直後、ペルシウスが現れ、アーキバスⅡをキャッチした。

「大丈夫か!？」

「父さん！」

するとペルシウスの後方から高周波エネルギーアックスを降り下ろそうとするザムザ・ギムガルムが現れた。それに気付いた陽弥はシンに言う。

「父さん！後ろー！」

シンはデイメンジョン・ヴァルキュリアを取りだし、ザムザ・ギムガルムの高周波エネルギーアックスの攻撃を防御する。

「ライトソードビット！ダークビットレーザー！リフレクタービット！展開！」

ペルシウスの左腕のゾディアック・ミラージュがリフレクタービットが展開され、さらにペガシオーンネスのウイングに装着されているライトソードビットとダークビットレーザーを展開させ、ザムザ・ギムガルムに攻撃した。

「クツ！」

ザムザ・ギムガルムは下がり、こっちに突撃してくるライトソードビットを回避した。

「『猿が!!調子に乗るな!! パルスフィールド!』」

$\alpha$  将軍が叫ぶとザムザ・ギムガルムの肩部が露出展開し、中から電磁波を出す粒子が溢れ出て、ザムザ・ギムガルムの空域にばらまいた。すると攻撃しているソードビット、ビットレーザー、リフレクタービットの動きが停止してしまい、落ちていった。それを見ていたシンは驚く。

「何?！」

「『こんな程度か?..... ヴェクタ人と猿共のテクノロジーは!』」

ザムザ・ギムガルムがもう一つの高周波エネルギーアックスを持ち、ペルシウスに斬りかかり、ペルシウスもデイメンジョン・ヴァルキュリアを二刀流で防御する。

「『猿がああああ!!』」

「黙れええええ!!」

その直後、デイメンジョン・ヴァルキュリアが折れてしまい、ザムザ・ギムガルムのエネルギーアックスがペルシウスの頭部を破壊した。



『!!!』

背負い投げされたザムザ・ギムガルムは体制を整え、叫んだ。

『野蛮な猿が!!!』

ザムザ・ギムガルムの腕が変型して、巨体なアームガトリングキャノンへと変わり陽弥のアーキバスⅡ目掛けて、乱射した。しかし、弾道が見えているのかザムザ・ギムガルムのガトリングの弾丸を素手で受け止められ、ガトリングの銃声が止むと同時にアーキバスⅡの手からガトリングの弾丸が落ちていった。

『何だと……?!?』

すると陽弥のアーキバスⅡは背部のウイングに装備されているアサルトブレードを持つとアサルトブレードの刃がオレンジに輝いた。するとアーキバスⅡはザムザ・ギムガルムに向かっていき、アサルトブレードを振り回した。α将軍はザムザ・ギムガルムでの高周波エネルギーアックスで防御したがアーキバスⅡのアサルトブレードの刃が高周波エネルギーアックスと腕も切り裂き、ザムザ・ギムガルムの頭部を掴み、握り潰した。

『グアアアアア!!!』

するとアーキバスⅡが握り潰した頭部に手を突っ込み、モノアイごともぎ取り、巨体なザムザ・ギムガルムを持ち上げ、それを上に投げるとアーキバスⅡの拳が真っ赤になり、落ちてくるザムザ・ギムガルムの胸部を貫く。幸い、α将軍のコックピットの真上を貫いたが操作が聞かなくなった。

『クソッ!!』

そして動けなくなったザムザ・ギムガルムの腕をアーキバスが持ち上げ、ザムザ・ギムガルムを投げ飛ばした。ザムザ・ギムガルムはロボロの状態でアジマス連邦兵に救難信号を送る。

『至急……… 救援に来てくれ!………』

通信を終えると目の前にアーキバスⅡが立っており、アーキバスⅡは真っ赤な手をドリルのように回転し始め、ザムザ・ギムガルムの装甲を溶通し、コックピットの下部を貫いた。

「グ！………」

α将軍は下半身の所を溶通され、歩けない状態になっていた。そしてアーキバスⅡは、また真つ赤な手をドリルのように回転し始めた。

「殺られる！」

その時、アーキバスⅡの頭上からα将軍の旗艦が飛来し、陽弥目掛けて、メガ粒子砲を放ち、その隙にアジマス連邦兵がα将軍とザムザ・ギムガルムを運んだ。そしてアジマス連邦兵が全艦隊に命令する。

「撤退せよ！撤退せよ！α将軍が負傷した！侵略は失敗した！繰り返し！撤退せよ！撤退せよ！………」

それを聞いたアジマス連邦兵達は急いで艦隊に戻り、大気圏外を離脱し、本部へと退却した。

その光景を見ていたシン達は一安心すると陽弥が乗っているアーキバスⅡが倒れた。

「陽弥っ！！………」

シンが向かおうとするが腹部に刺さってある破片のせいで上手く歩くことが出来ない。その時、丁度近くにタスクとリュウガが現れ、シンを抱え、陽弥の所に向かった。

## 第5話：旅立ち

アジマス連邦の戦いから3日が達ち…………… 陽弥が目を開けた  
「ここは……………？」

陽弥は辺りを見回していると、ドアが開き、陽弥は開いた場所を見るとそこには花瓶を持ったルナがいた。

「ルナ……………？」

するとルナが唾然したまま花瓶を落とした。

「お兄ちゃん!？」

ルナが陽弥の名を呼び、近付いた。

「生きてるよね!？」

陽弥は起き上がり、自分の両手を見て、握ったり、開いたりして確かめた。

「……………生きてる……………生きてる……………！」

「良かった！」

「ルナ……………」

「ちよつと待ってて！マギーさんとお母さん呼んでくるから！」

マギーがシンの容態を確認し終わると報告する。

「得にも症状もない、今日で退院OKだ。」

「良かった！」

「ごめん……………ルナ……………母さんも……………うわっ!？」

突然、ヒルダが陽弥に抱きついた。

「あんたが無事で良かった……………！」

「え?……………どう言うこと?……………父さんは!？」

「……………」

「お兄ちゃん……………お父さんは……………」

別の部屋で体中包帯で巻き付けられているシンは横たわっており大きな機械と人工呼吸器、いろんな点滴を受けていた。それを窓から見ていた陽弥は何も言えない状態になっていた。

「お前を守ろうと庇い…………… 腹部にモニター画面の破片が刺さって大量の流血で…………… 緊急手術で何とかなっただけど……………」

「お母さんの血液だけじゃ足りないって、マギーさんが……………」

「何とかあの戦いで助かったタスクとリュウガが血の提供者を探しているんだ……………」

すると陽弥は悲しい表情でその場から出ていった。

「お兄ちゃん!？」

「ほっとけ……………」

「けど!？」

「アイツは…………… 今、ここで自分が犯した責任に気付いたんだ。シンも陽弥も無茶なことするもんだ……………」

「……………」  
沈む太陽が見える場所で陽弥は落ち込んでいた。

「……………」  
陽弥はあの時、父親の言うことを聞いていれば、と思いつくとその場で泣き崩れた。

「俺のせいだ…………… 俺のせいで父さんは……………!？」



すると陽弥の元にエミリアが来る。

「陽弥様……………」

「ほっといてくれ……………」

「……………悲しい気持ちは分かります……………だから……………」

「だから何だ……………?」

「え?」

「俺は父さんと違って強くない……………只の腰抜けなんだ……………だから、ほっといてくれ……………!」

「……………」

するとエミリアは陽弥の胸ぐらを掴みあげると陽弥の頬目掛けて、平手打ちした。

パンツツ!!!!

陽弥は叩かれた頬を抑え、エミリアを見る。

「何、言い訳を言っているのですか! 貴方様は!! 強くないから自分を責めるのですか!?! 自分のせいでお父様をあんな状態にしたのですか!?!」

「……………」

「それに…………… 貴方のお父様は…………… あの後、お腹に破片が刺さったまま必死に貴方を助けようとしていたのですよ!」

「え?!」

「シンさんは…………… 必死に! 必死に! 貴方の名を呼び続けていたのですよ!」

「……………」

「それと!」

エミリアはポケットからあるチップを陽弥に渡した。

「それは?」

「シンさんが陽弥様にやっってくださいって!!!」

「父さんが?!」

陽弥は父親のチップをデバイスにセットするとモニター画面から、まだ青年期のシンとお腹に子供を身ごもっていた妊娠中のヒルダが映った。

「あー、テス、テス…… 良し！陽弥！ルナ！元気か!?ほら！ヒルダも！」

ヒルダは恐る恐る、カメラに向かって挨拶した。

「あー…… こんちは…… 陽弥、ルナ…… 辛い事に悩んでるか?…… 嫌、良いんだよ！辛い事がなかったら、でも……」

「どんな事があっても…… 逃げるな…… さ…… 例え俺が酷い状態になっても！諦めずに正々堂々と！立ち向かえ！」

「早く…… アンタ等に会って、この平和な世界で二人で生きてほしいよ！」

ヒルダは大きいお腹を撫でた直後、ヒルダが言う。

「あ！」

「どうした!?!」

「今、蹴った！」

「マジ!?どれどれ?…… あ！」

するとシンの足がカメラのスタンドカメラが転倒して映像はその場で終了した。それを見ていた陽弥は泣き崩れた。

「俺って馬鹿だなあ…… こんな事でメソメソするなんて…… ありがとう…… ！父さん!…… 母さん!……」

俺とルナを産んでくれて…… ！…… ありがとう！」

エミリアは泣き崩れる陽弥をそつと抱いた。

泣き止んだ陽弥はエミリアと一緒に家に帰っていた。

「すまん、エミリア…… お前にまで迷惑を掛けて……」

「良いですよ……」

家に到着するとドアの所に母親ヒルダとルナと祖母アリアが待つ

ていた。

「母さん……………」

するとヒルダは怒った表情で陽弥に近付いた。

「…………… その…………… あの……………」

「見せたいものがある……………」

「え？」

「ルナもよ」

「私も!？」

「付いてきな、」

陽弥達はヒルダに連れられ、地下室へ向かった。

地下室に入ると中は暗く、何も見えなかった。

「母さん…………… ここは？」

するとヒルダは近くにあるスイッチを押すと電灯が付いた

「!?!」

電灯が付き、辺りが明るくなると同時に陽弥とルナとエミリアが目の前にある物に驚く。

「こっ…これは……………!??」

それは蒼く、トロイの木馬のような形をしており、その横にNーアキュラと同じエックス型のウィングとブースターが装備されていた。(分かりやすく言えば、ガンダムSEEDのアークエンジェルとドミニオン見たいな艦です)

「…………… シンとジャヴィックとロバートとメイと皆が……………」

アジマス連邦軍に対抗するために造られた超光速旗艦『ウラノス』よ……………」

「ウラノス!？」

「そして…………… アンタ達がこれから姫さんを護るために造られたセイクリッドメールよ……………」

ヒルダは次のボタンを押すと電灯が付き、陽弥が乗った紅いアーキバスⅡともう1機は見たことのない装甲をしており、女性のような体型をしており、手元に絵本に出てくる魔法使いが使う長杖みたいなスピアを持っていて、後の3機は天使のような機体が2機と焰龍號とヤマトに似た機体だった。

「このアーキバスⅡって俺が出撃に使った!」

「アタシのはこれ!」

「当たり前だろ!..... お前らの為にシンとアタシが英才教育、トレーニングしてやったんだぞ!」

「え?!」

「お前ら気付いてなかったのか!?!..... ハア..... シンが今、ここにいたら、呆れてため息 付くぞ!」

「だけど、母さん! 思ったことなんだけど、何で俺等にエミリアの護衛をさせるんだ!?!」

「そうだよ!」

「..... アンタ達の為だつて、言っただろ..... いつかこの地球にお姫さまが来るつて..... ジャヴィックが予測していたんだよ.....」

「ジャヴィック提督が.....!?!」

「勿論、シンとアタシはそれを否定したよ..... せつかく家族と共に平和の道で歩んでいたのに..... 陽弥とルナを戦場に行かせたくなかった。けど、ジャヴィックは..... お前らの子供が殺らなければ、一体誰が殺るのか? つて..... アタシも覚悟はしていたよ..... だからアンタ達、二人のために英才教育とセイクリッドメイルの操縦も戦術も教えてきたんだよ.....」

「母さん.....」

「何だ?」

「..... 俺はやる!」

「?」

「父さんから受け継いだ..... この思い..... 絶対に無駄にはしないと..... 約束したんだ..... !だから!俺はエミリアの母星を

護りたい！嫌、エミリアの世界を護りたいんだ！」

すると突然、ヒルダが笑いだした。

「…………… フフフ…………… アツハハハハ〜！」

「!?」

「ハア〜…………… アンタのその台詞…………… お父さんに似てたよ！」

「俺と父さんの台詞が…………… 似てた？」

「ああ、アンタらが産まれる18年前、アイツはドゥームを止める時、その台詞を言っていたんだ。『この宇宙と他の宇宙を守りたい』って」「父さん…………… そんなことを……………」

「それに…………… アンタのその目…………… あの頃のシンに似てるよ…………… 行ってこい…………… ルナも……………」

「…………… 分かった」

「…………… 必ず…………… 生きて帰ってきます！お母さん！」

「あ！でも…………… あの3機とウラノスを動かすのは手配してるの？」

「…………… 心配はない…………… もうとつくに手配しているよ……………」

「お前たち！」

すると電灯で灯りが照らされていない影から数十人の人が来た。

「彼らは!?」

「アンタ達が言ってた手配したウラノスのクルーだ……………」

「どうも、シンさんから手配され、ウラノスの艦長を勤める アリスです。私は惑星エリシアで貴方達のお父さんに助けて貰ったことがあります。そして……………」

アリスの後ろからピンクのロングヘアーをした女性が現れ、陽弥とルナに挨拶する。

「ほいほ〜い！陽つちとルナつち！久しぶりだなく♪」

「ヴィヴィアンさん!?…………… 母さん何でヴィヴィアンさんがウラノスのクルーに!?」

陽弥とルナがヴィヴィアンに質問するとヴィヴィアンは突然、陽弥とルナにクイズを出す。

「さてここでクイズです♪アタシな何故ここにいるのでしょうか？」  
「え?!」

「ブー!世界はアンタらをまとめる為にこの艦を護衛する隊長務める為にウラノスのクルーになったんだよ!」

「ヴィヴィアンさんが……………俺等をまとめる隊長!」

「そして整備班長は……………」

「久しぶり♪」

「メイさんも!」

「まっ、そう言うことだ……………そしてアンタらと一緒に戦う残りの三人は……………」

するとヴィヴィアンの後ろからツンデレの金髪の女性とヤンキーで青髪の女性と穏やかな表情をした龍の翼と尻尾を持つ男性だった。  
「久しぶりだね、紅い単細胞とルナちゃん♪べっ……………別にアンタ達のためじゃないからね!ママが行きなさいって行ったから!」

「ソフィア!」

「アタイも忘れるなよっ!」

「アレクトラも!」

「拙者も忘れないでほしい……………」

「リヨウマまでも!」

「それじゃ、皆さん揃いましたね?一時間後に離陸準備を!」

「了解!」

「え?!一時間後って!もう出発するの!」

「当然です!貴方達も急いで支度しなさい!」

「え?!はい!」

陽弥とルナは急いで自分の部屋へと向かい、荷物をまとめた。

そして陽弥とルナは病室の窓から寝ている父親を見ていた。

「父さん……………俺は父さんの意志を継いでこの宇宙と皆を護る。」

だから心配しないでくれ……！」

「私も…… お父さんのヴェクタの意志を継いで、お兄ちゃんと一緒に戦う…… 今までお父さんに守りっぱなしだったけどだから安心して休んでいて、後は私達に任せて……！」

「行こうか……？」

「ええ……」

陽弥とルナは病院を出ると同時に寝ているシンが笑った。

ウラノスの所に行くともう既に、ウラノスに大型ブースターが付けられており、打ち上げられる準備に掛かっていた。

そこには母親のヒルダと祖母のアリア、叔母のココとミランダとアンジュとタスク、ウイルとサリア、リユウガとサラとスメラギとカヤが待っていた。陽弥達はそれぞれの家族の所に向かった。

「頑張つてこいよ…… 陽弥…… ルナ……」

ヒルダが陽弥とルナを優しく抱き締める。

「生きてお父さんの所に帰ってこいよ……」

「母さん…… お母さん……」

「お婆ちゃんは貴方達の事を応援しているよ……」

「婆ちゃん……」

「お兄さんの事は任せて！陽弥！ルナ！」

「アタシ達がヒルダ姉様達を護るから！」

「ココ叔母さん…… ミランダ叔母さん……」

そしてソフィアはアンジュとタスクから持ち物点検されていた。

「あれ持った?!これ持った?!それは予備のちゃんとする?!」

「ママ…… もう良いから、大丈夫だって！」

「そう?…… ソフィアの場合、大丈夫とか言つて、結局は忘れるじゃ

ない」

「大丈夫だつて！ママ！パパ！」

「アンジュ……ソフィアが言うんだ……心配は…あだっ!?」

突然、アンジュがタスクの横腹を殴る。

「何、呑気に言ってるの?!タスク！ちよつとは心配しなさい！」

「そんな〜！」

そしてアレクトラはヘルガストでもあり、父であるウイルと母のサリアと話していた。

「準備は？」

「バッチリだよ！親父！」

「アレクトラ！お父さんにそんな言葉を言わないの！」

「良いじゃないか、サリア……アレクトラはアジマス連邦に俺等ヘルガストの底力を見せつけようとしてるんだ！そんなきつく言うことないだろう？」

「ハア〜！全く、これだから……」

「大丈夫だつて！お袋！アイツ等がピンチな時、アタシがアジマス連邦兵の顔面をぶん殴ってやるからよ！」

「おう！それでこそ、俺たちの娘だ！」

ウイルはアレクトラの頭を撫でるとサリアは仕方なく、一緒に撫でた。

一方、リヨウマはリュウガ、サラと話していた。

「父上、母上、叔父上、叔母上……行って参ります。」

「行ってこい……リヨウマ……」

「必ずや……生きて戻って来るのだぞ……」

「私は……貴方の事をずっと思っているよ……」

サラはリヨウマの頭を撫でるとリヨウマの顔が赤くなった。

「母上……」

陽弥達は家族に別れを言い、ウラノスに乗り込んだ。

そして戦艦ウラノスが発進し、レールに乗って、射出された。ウラノスは勢いよく大気圏を突然した。



そしてウラノスが去るの見ていたヒルダはシンの病室へと向かった。ヒルダが寝ているシンに話した。

「いい加減、寝るフリは止めろよ」

するとシンが起き、ヒルダに話しかける。

「何時から気付いた？」

「陽弥が出ていく前よ……」

「ハハハ……でも、これからだな……アイツ等の物語は……」

「ああ……」

「さて、そろそろ始めるか……！」

するとシンはデバイスを取りだすと、キーボードが現れ、それを打ち始めた。

「何やってんだ？」

「あの戦いでα将軍が言っていた『あの御方』って奴を調べる。そして奴等のアーマーも調べる。」

「どう言う事……？」

「16年前……惑星ヴェクタで起こった多発爆破テロの事件は知っているだろう？」

「ああ、あれか……あれって結局はあの生きる価値のない人間が暴動を起こし、起こした原初も闇の……って！まさか!？」

「そのまさかだよ……アイツ等を暴動させた犯人こそがα将軍が言ったあの御方って奴だ……世間には暴露せず、母さんに頼んで政府や関係者もその事をひたすら隠し続けながら、俺達は探っていたんだよ……」

「つまり、アジマス連邦の裏で、ソイツが操っているって訳かい？」

「そう、そして今から回収部隊を送ってアジマス連邦兵の残骸を調べよ。」

「ふくん……あ！それと……」

するとヒルダはシンの唇にキスした。シンはキスされた事に驚くとヒルダが言う。

「お帰り、アタシの旦那様……」

陽弥とルナとエミリアはウラノスの艦橋に行くと全クルーが陽弥達を待っていた。

「凄いですわ……」

「皆さん……集まりましたね？」

「はい！」

「早速、これからの任務を報告します。」

アリスが艦橋のモニターを展開するとモニター画面にエミリアが乗ってきたシリンダー型のスペースシップが映った。

「エミリア・ヴァルネア・クリーフ姫殿下が乗 ってきたとされるスペースシップ……これは私達の宇宙には存在しないスペースシップだったは……恐らく、このスペースシップは私達の住む宇宙の遙か遠くに存在する別の宇宙ある。つまり、エミリア姫殿下も……別の銀河から来て、私達のいる銀河に辿り着いたと言う事になる。」

「つまり、エミリアは別の銀河出身で……あのスペースシップがワープし続けて、ここにやって来たと言う事？」

「その通りです。恐らく、アジマス連邦もそこに……そこで私達が乗るこのウラノスで、エミリア姫殿下の故郷エルシュリア王国……いえ、母星に行き、エミリア姫殿下のお父上とお母上と各国の民を救います。そのためには彼方の宇宙に生きる種族と同盟を組み、一気にアジマス連邦に強襲と奇襲を仕掛けます。」

「質問♪」

「何ですか、ヴィヴィアン？」

「それって本当に上手く行くのですか？」

「やってみなくては分かりません。それだけです。」

「ふくん」

「他に、何か質問はありませんか？」

「……」

アリスが問うと陽弥達は無言のままだった。

「え?!何もないの!?!」

「うん、うん………」

「……仕方ない……報告は以上!解散!」

全員が解散し持ち場に戻るとアリスは疲れて、グツタリしていた。

「ハア……シンさんも何を考えているのですか?」

アリスは色々吐きながら艦長としての果たすべき、大仕事を務めていた。

一方、アジマス連邦艦隊が低文明レベルの惑星や種族を捕獲し、そしてある開拓中の惑星に武力行使をしていた。

逃げ回る人々、捕獲される人々、殺される人々がいた。

「こちら!開拓惑星メトロ!アジマス連邦軍に攻撃を受けています!

大至急、応援を!!キャアア!!」

「皆、逃げろおおお!!きやつ等は我々を家畜と思っておる!!」

「危ないです!逃げてください!」

アジマス連邦兵が銃口を逃げ回る人々に向けネットランチャーを射出し、捕獲した。

「離せ!離すんだ!!」

人々は抗うが電磁ネットには敵わなかった。

「任務完了……これより、奴隷を輸送……ん?」

すると瓦礫の中から、ロケット型のスペースシップが飛び去った。

「逃げられたか…… 追撃部隊を送るのだ……！」  
「了解！」

アジマス連邦兵が急いでロケット型のスペースシップを追った。

## 第6話：実戦

ウラノスに乗った陽弥とルナとエミリアは食道にいた。

するとエミリアがある茶色く泥々の液体が掛かったライスを見てルナに質問してきた。

「これは何ですか?」

「ん?それはカレーライスって言う料理だよ♪」

ルナは穏やかな表情でカレーライスを食べていた。エミリアが恐る恐るスプーンを手に持ち、カレーの一口サイズを掬い上げ、そして口の中に入れた瞬間、ほんのりと広がる食感とごろっとした野菜と隠し味にリンゴと蜂蜜がエミリアの舌を包み込んだ。

「美味しい……?!」

「そうでしょ?」

「こんなに美味しい料理を食べたのは初めてです!」

「そりゃ、そうよ!だってこのカレーはユナちゃんが作った料理だもの」

すると食道のカウンターからユナがひよっこり現れ、ニッコリした表情でルナとエミリアに手を振った。

「それとユナは色んな料理も作れるからなあ…… さすが、カズさんとエルシャさんの娘だよ」

陽弥が説明していると艦内に放送が流れる。

『間もなく、ワープドライブを開始します。各部の者は速やかに自室に戻り、ワープドライブの衝撃に備えてください。繰り返します 間もなく……』

すると、エミリアが陽弥に問う。

「あの、ワープドライブとは、一体何なのですか?」

『次元跳躍』…… 宇宙は何万光年も掛かる。だから一つ一つ跳んでいくって訳だ。」

「~?」

「つまり、ん…… そうだ! エミリアさんの世界には移動用の魔

法がありますか？」

「ええ……特に転移魔法があります。」

「ワープドライブもそう言った転移魔法と同じです。」

「お前ら、そろそろ自室に戻るぞ……」

「分かった。」

「ええ、」

陽弥達は自室に戻り、シートベルトをすると艦内が揺れ始めた。すると艦内に放送が流れる。

『ワープドライブ 開始』

ウラノスの装甲が青く光、前方から巨体なワームホールが現れ、ウラノスはワームホールの中に吸い込まれた。

そして、とある空間からワームホールが現れ、中から青く光ウラノスが現れた。

『ワープドライブ終了』

艦内の放送が終了すると同時に自室に待機していた陽弥達が出てきた。

「あく、くたびれた。」

「ほんとですねぇ」

陽弥達が背を伸ばそうとした直後、突然、警報がなった。

「!?!?」

『総員に告ぐ!総員に告ぐ!前方にアジマス連邦艦隊と正体不明船を確認!戦闘部隊は直ちに迎撃に当たり、直ちに民間船の救助に向かってください!繰り返し……総員に告ぐ!総員に告ぐ!……』

「いきなりアジマス連邦と遭遇かよ!?たくっ!行くぞルナ!」

「分かった!」

エミリアとルナは急いで格納庫へと向かった。

既に格納庫にはタクティカルアーマーを見に纏ったヴィヴィアン、ソフィア、アレクトラ、リヨウマ、ウラノス戦闘部隊がいた。

「遅いぞ！陽弥！ルナ！」

陽弥とルナもタクティカルアーマーを見に纏いヴィヴィアンの所に向かった。

「遅れてすみません！」

「よし！皆、聞いてくれ！アジマス連邦艦隊が民間船を追って真っ直ぐこつちに向かっている。何としてでも姫さんとその民間船を守るぞ！良いか？」

「了解!!」

陽弥達はヴィヴィアンに敬礼し、各機に乗り込んだ。すると陽弥の元にメイが来た。

「陽弥！」

「メイさん？」

「君のアーキバスⅡに対アジマス連邦兵器 プラズマビームライフル」と高火力ヒートソード”が出来たところなんだ！」

「ほんとですか!？」

「まあ、試作兵器だったけど、丁度良いから使ってくれ！」

「分かりました！」

陽弥のアーキバスⅡにプラズマビームライフルと高火力ヒートアサルトブレードが装備され、陽弥達はカタパルト台に乗せられた。

「陽弥・ギデオン……アーキバスⅡ発進準備よし！」

「ルナ・ギデオン……セイレーン発進準備良いよ！」

「ソフィア……エリザベス発進準備よし！」

「アレクトラ……レイジアマークⅠⅠ発進準備OK！」

「リヨウマ・ネイル……鋼龍號出陣よし！」

「ヴィヴィアン!……レイザー改出れるぜ♪」

「進路クリア！オールグリーン！」

「私に続け♪」

ヴィヴィアンのレイザー改がカタパルトから射出され、陽弥達もヴィヴィアンに続き、射出された。

その頃、アジマス連邦艦隊はロケット型のスペースシップを追撃していた。

「無駄な足掻きは止めろ！お前ら猿共は我々の管理下にいる！大人しく投降せ・・・っ!?!」

突然、アジマス連邦巡洋艦が何かに直撃し、爆発した。

「何だ?!」

「前方に種族銀河同盟の戦艦を確認!」

「何だと!?!」

アジマス連邦の艦長がモニター画面を出すと艦首両舷に225cm 連装高エネルギー収束火線砲「ゴットフリートMk. 89」と110cm単装リニアカノン「バリアントMk. 11」を構えたウラノスと多数のセイクリッドメールが映った。するとアジマス連邦艦に通信回線が開きウラノスからアリスの声がした。

「アジマス連邦艦隊に告ぐ！今すぐ民間船に攻撃を止め、速やかに帰艦せよ!」

それを聞いていたアジマス連邦兵が艦長に言う。

「艦長！指示を!」

「えくい!!蹴散らせ!!所詮奴等も猿だ!全艦攻撃開始!」

艦長の命令にアジマス連邦艦の主砲がウラノスに向けられた。それを見ていたアリスも命令する。

「やはり・・・簡単には引き下がらないか・・・ 総員！戦闘体制！これより！アジマス連邦艦隊を迎撃する!」

ウラノスもゴットフリート、バリアントをアジマス連邦艦隊に向けた。そして、それぞれの艦長が命令し、叫ぶ。

「全艦！メガ粒子砲発射!!」

「ゴットフリート！バリアント！撃てえ!!」

ウラノスとアジマス連邦艦隊の主砲からビームが発射され、激戦化



した。それと同時にアジマス連邦艦隊から大型アジマス連邦兵と戦闘機が射出され、セイクリッドメイルと戦っていた。

陽弥のアーキバスⅡが大型アジマス連邦兵のパルスキャノンの攻撃をかわすと陽弥の後ろにいたルナのセイレーンがロッドを展開し、振りかざし、呪文を唱え始めた。

「シャイニングランサー!!」

すると大型アジマス連邦兵と戦闘機の真上から魔方陣が現れ、その中から光の槍が降り注ぎ、大型アジマス連邦兵と戦闘機を貫いていく。ソフィアのエリザベスがウィングに収納されているラツィーエルを取り出すとラツィーエルからエネルギーブレードが放出され、アジマス連邦艦隊を切り裂いて行った。

アレクトラのレイジアマークⅠⅠがビームバスターライフルを取りだし、リヨウマの鋼龍號のバスターランチャーで陣形を組み、回転しながら光学兵器を乱射し、アジマス大型連邦兵と戦闘機を撃墜していた。

ヴィヴィアンのレーザー改のサブウィングに装備されているブーメランブレードを取り出すとブーメランブレードの刃が青くひかり、ブーメランブレードを投げるとアジマス大型連邦兵を真つ二つにし、陽弥のアーキバスⅡのプラズマビームライフルが大型アジマス連邦兵と戦闘機の装甲を溶かしていくと、アーキバスⅡの後ろから大型アジマス連邦兵が回り込み、腕部が変形してソニックブレードを振りかざした。

陽弥はそれに気づき、ウィングに装備されている高火力ヒートアサルトブレードを取り出すと同時にアサルトブレードの刃がオレンジに輝き、ヒートアサルトブレードでソニックブレードの攻撃を防御した。

「『己えええ!!』」

大型アジマス連邦兵が怒声を上げると出力を上げ、陽弥を押ししていた。すると陽弥も怒声を上げた。

「クッーっのおおおお!!」

陽弥のアーキバスⅡに装備されているシールドからビームソード

が放出され、大型アジマス連邦兵を両腕を切断し、プラズマビームライフルで頭部に向けて撃つと大型アジマス連邦兵が爆発した。

そして他のセイクリッドメイユ達は次々と大型アジマス連邦兵と戦闘機を撃墜していく、それを見ていたアジマス連邦の兵達は驚きを隠せなかった。

「そんな……馬鹿な!?……我々が原始猿共に負けてるだどっ!?……!?」

アジマス連邦巡洋艦がウラノスのゴットフリートで貫かれ、爆発した。アジマス連邦兵は混乱した。

「こんなの……あり得ない……あり得ない!!我々は高等なる機械生命体!アジマス連邦だ!!貴様ら下等な原始猿と違うんだ!なのに何故!」

するとアジマス連邦旗艦の目の前にアーキバスIIが現れ、プラズマビームライフルを構えた。すると旗艦の艦橋のモニター画面から陽弥の姿が映る。

「……一つ言っておく、俺は猿でも、何でもねえ……俺は只のヴェクタ人だ……」

「ヴェ……!?ヴェクタ人だと!?……邪神の皇を率いる軍と対等!互角だったあの!!……伝説の超古代種族であり、連合五大勢力の一つ!!」

艦長が叫んだ瞬間、プラズマビームライフルの灼熱の閃光が艦橋を破壊した。陽弥達は直ぐに退避すると旗艦が破壊された事により、アジマス連邦艦隊はその場から退却していった。

陽弥達はウラノスに戻る途中、ロケット型のスペースシップが漂っているのを確認すると陽弥はロケット型のスペースシップを回収し、ウラノスへと戻った。

ウラノスの格納庫に戻り、隊員が回収したロケット型のスペース

シップのハッチをハッキングしていた。

「後……もう少し………出来た！」

隊員がハッキングし終えたと同時にスペースシップのハッチが開いた。中を確認しようとして陽弥が覗こうとした直後、中から黒い物体が陽弥に飛び付いてきた。

「うわあっ!!？」

「お兄ちゃんー！」

それを見ていたルナ達はアサルトライフルを黒い物体に向けた。すると、

「待てっ！こいつは………」

陽弥が起き上がり、黒い物体の正体を皆に見せた。

「これって………!!？」

それは生後3ヶ月にもなる子犬だった。

「………子犬？何で………子犬が？」

ルナがスペースシップの中を確認するとその奥に黒い影があった。ルナは持っていたライトで奥を照らすとそれは、少年五人、少女六人、そして青年の男性二人、女性が三人の民間人が子供を庇うように威嚇してきた。ルナが手を差し伸べた直後、エミリアが止める。

「待って………私に任せて………」

するとエミリアが歌い始めた。

「これは………」

「この歌は………」

「私のママと………」

「父上、母上の歌と似ている………」

するとエミリアの歌にひかれ、一人の少女が前に出てきた。

「お姉ちゃん達………銀河連邦の人？」

少女が放った突然の言葉にルナは悲しい表情になるがそこに子犬を抱いた陽弥が現れて、少女に言う。

「そうであり、そうでないものかな………俺たちは………種族

銀河同盟と言う軍の者で………今、アジマス連邦と敵対している組織だ………もう安心だよ………」

ルナは悲しかった表情が陽弥の行動を見て、変わった。

「さっ…… もう大丈夫よ♪」

すると雪崩れ込むように子供達が泣きながら、陽弥やルナ、エミリア達にも抱き付いてきた。

「大丈夫…… もう大丈夫だ……」

子供達はウラノス内部にある子供部屋に輸送する途中、青年五人はアリス艦長に呼ばれた。

「あの…… さっきはありがとうございます。」

「良いのですよ…… それより、貴方達ははどうして、アジマス連邦軍に追われてたのですか？」

「……」

翠色の髪の女性 ニーナが言うには、彼らの母星はアジマス連邦によって滅ぼされたが運良く、アジマス連邦に対抗するために設立された銀河連邦が駆け付けて助けられた。そこで連邦軍は環境に適した辺境惑星メトロに移住させて、そこで私達は開拓しようと作業をしたが、そこにアジマス連邦軍が襲撃してきて、銀河連邦も陥落寸前に落とされ、他の人達はアジマス連邦に連行され、運良く彼らは脱出シヤトルに逃げ込んだが、アジマス連邦がそれに気付き追撃してきた。

逃げてる最中にそこで陽弥達と出会ったと、

「成る程、つまりこの宇宙では銀河連邦と言う軍がアジマス連邦と敵対している訳ですね？」

「はい……」

「成る程…… 良し」

「あの、どうなさるのですか？」

「…… 今から、銀河連邦と協定を結びに行くのです。」

「ええ!?……………つまり!?!」

「貴方達のご両親を救出します。」

それを聞いた五人は泣き崩れたが、その後に大喜びした。  
そして艦内に放送が流れる。

『総員に告ぐ、総員に告ぐ……………これより私達は銀河連邦との協定条約を結びに……………この宇宙の……………『地球』に進路を変えます。』

地球と言う言葉に陽弥は驚く。

「地球に行く!?!」

「お兄ちゃん……………この宇宙って言ってたでしょ?」

「あ!そうだった……………」

ウラノスがワープドライブを起動し、地球に進路を向けて、ワープした。

## 第7話：歴史

その頃、銀河連邦本部ではアジマス連邦に対抗するための会議が開かれていた。

「このままではアジマス連邦の思うがままになってしまう！やはりここは、各惑星のコロニー防衛軍に応援を要請し、武装を強化したほうがっ！」

「だが、応援を要請したらコロニーにいる民間人はどうなる？要請すればコロニーの警戒が手薄になってしまうぞ？」

「くっ！……」

若き上官が悔やんでいると、

「上官!!」

「何だ?!会議中だぞ!」

「それが……!大気圏外に……未知の次元反応を観測しました!」

「何だって!?!アジマス連邦の新型兵器か?!」

「いえ、全くの別の物です!」

連邦の会議は中断され、数人の上官達は至急司令部へと向かって行った。

司令部のドアが開くとオペレーター達が騒いでいた。

「こんな状況は初めて見た……!?!」

すると男性のオペレーターが報告する。

「ルナベースのコロニー衛星から映像を受信出来ました!」

「見せろ」

「はい!」

オペレーターがモニター画面を出すと月面近く映像が出ていた。そして同じく頃、月面基地ではグリフィン級連邦艦と連邦戦闘機、対アジマス連邦人形兵器『MEC』が警戒体制をしていた。

「来ます!」

すると前方からワームホールが現れ、中からネイビーカラーをした木馬型の戦艦が現れた。

「何だあの戦艦は!?!」

「木馬のような形をしているなあ」

その時、全連邦艦内に放送が流れる。

『攻撃を中止してください』

!?!

「『こちらは敵意を否定している。繰り返す、我々は敵意を否定している。』」

「もしかして…………… 味方!?!…………… つ!?!艦長!?!」

「私はこの第2銀河連邦艦隊 旗艦ゼウス艦長 スティープだ。お前達は一体何者だ?」

『私は種族銀河同盟加担国家 人類銀河共和国軍所属 超光速旗艦 ウラノス艦長 アリスです。』

「人類銀河共和国? そんな国家はない! 本当の事を言え!」

「仕方ありません。信じられないかも知れませんが、私達は貴方達の銀河系より、遠く離れた別の銀河系から来た地球人なのです。』

「別の銀河系から来た地球人!?! その…………… 我々銀河連邦に何の要件で来たのだ!?!」

「要件は貴方達が前に、アジマス連邦の攻撃を受けた人達がメトロクに移住して来たが、アジマス連邦が襲撃してきて、逃げ延びた子供達を保護している。』」

「保護している!?! まさか…………… あのアジマス連邦と殺り会ったのか!?! たったの1隻で!?!」

『そうです。』

「信じられん!?! 我々銀河連邦の戦力で複数で相手したアジマス連邦が…………… 良かろう!」

『感謝いたします。』

ウラノスは連邦艦隊と共に月面基地『ルナベース』へと向かった。

ウラノスはルナベースの港に発着すると、銀河連邦兵がウラノスを囲むと同時に、ウラノスのハッチが開き、アリス艦長が現れた。アリス艦長は会議室に呼ばれた。

そして陽弥達はアリス艦長の命令で自室に待機していた。

「何かつまらないなあ〜」

「しようがないでしょお兄ちゃん、アリス艦長は今、連邦の上官と会議中だから、アタシ達は自室で待機」

「と言つても、銀河連邦との協定条約が出来なかったらどうするんだ？」

「それは……………」

「まっ……その件は置いて、一番気になっていたのは……何でアジマス連邦がエミリアを狙っているかだ。」

「向こうからでは、奴隷だから？」

「それもありだけど……良く考えてみて？奴隷だったら一人逃がしたら、その他ので足りるじゃん？だけど……………何でエミリアの場合あんなに死ぬ気で捕らえようとしているのか……………」

「……………確かに……………」

「そう言えば……………」

「何か心当たりがあるの……………お兄ちゃん？」

「ああ、俺達側の地球にアジマス連邦が襲撃してきたのを皆……………覚えているよなあ？」

「……………うん……………」

「あの時、父さんとタスクさんとリュウガさんが相手していた……………」

α将軍が……………『あの御方』つて……………言つてたんだ」

「“あの御方”？」

「あの御方つて？」

「分からない……………分からないけど……………」

「けど……………？」

「多分……………そいつが……………アジマス連邦の首領だと思う。」

「首領かあ……………つまり、アジマス連邦の首領を倒せば、占領された星々が解放される……………つて言う訳か？」



「恐らくは……………」

「うくん…………… 考えても仕方がないかあ…………… そうだ！エミリアに俺達の世界の歴史を教えたら？」

「そんな長話…………… 待てよ、良いね！それだったら、充分な暇潰しになるかも、赤い単細胞良い案思い付くじゃん！」

「良い？まず…………… どころか辺話す？」

「はあ、分かったわ…………… 私が話す。」

全てはこの話から始まった……………

遠い、遠い…………… 遥かな昔…………… 地球はあらゆる問題を

抱え、争っていました。

そこで政府は地球の人口を減らすために新たな新天地を探すために計画を進め、発見した…………… ヲヱクタ…………… 陽弥とルナの先祖の…………… 地球人にとっては…………… 第2の故郷と読んだ。そして地球人はヲクタ星に移住し、そこから、別の星系へ交流し、様々な種族との協定を結んだ。

科学力と呪紋に適した種族『エルダー人』、銀河の監視者と呼ばれる組織『モーフィス』、銀河の治安を護る種族『ザンダー人』、武力と科学力、バイオテイクス、テレキネシス、未来視と言う能力が使える古代種族『プロセアン』と共に未来を歩んでいたが、突然異次元から『リーパー』と言う邪神族と…………… かつて太陽神ヘリオス、月光の女神セレーネによって封印された全ての邪神を統治できる最強最悪の邪神の皇帝『ドゥーム』が襲来し、様々な星々の生命を捕食していった。それを察知した。

プロセアン帝国は急いでヲクタ同盟国、エルダー共和国、モーフィス、ザンダー中立国に援軍を要請し、種族銀河連合は迎撃に当

たつたが、無限の再生増殖力を持つ、邪神族に勝てなかったが……  
ヴェクタ人は最終手段として、パラメイルの原型ラグナメイル  
の…… それのまた原型……で…… 神も悪魔も滅ぼせ  
る…… 原初の禁断の機体『パンドラメイル』を投入した。

ペルシウス、ジャンヌ、ヘラクレス、シグムント、ヤマト、ヒミコ、  
百鬼、百魂、百霊、百妖の10機のパンドラメイルでリーパーを形勢  
逆転し、もう1つの最終兵器……惑星、時空、多次元、銀河をも操  
作できる兵器『ギヤラリック・リング』を投入し、邪神皇ドウムと  
リーパーと共に味方を巻き込んで、別の次元へと追放したが……  
超高度の科学力を持ったヴェクタ人は味方を巻き込んだ罪に囚われ、  
ヴェクタ星を捨て、別の星系へ追放された。

時は流れて、100年後、追放されたヴェクタに反乱を起こした種  
族が現れた。

『ヘルガスト』…… 皇帝スカラーヴィサリがヴェクタ政府に武力  
行使したが、返り討ちにされ、ヘルガストは環境悪化で開拓中の惑星  
『ヘルガン』に追放され、10年後、戦力を蓄え、ヴェクタ星に侵略  
してきたが、またしても返り討ちにされ、ヘルガンに撤退した。

ヴェクタ政府はヘルガンに強襲作戦を命じし、大艦隊を引き連  
れ、ヘルガンに刃向かった。

そして同じ頃、ヘルガストにも恐るべき計画を進めていた。ペトル  
サイトと呼ばれる反重力粒子を使った兵器で地球侵略を準備してい  
た。

ヴェクタとヘルガスト…… 激しい攻防戦を繰り広げた。

そしてヴェクタはペトルサイト兵器を破壊したが、ペトルサイト粒  
子の炎がヘルガンを覆い尽くし、惑星ヘルガンは不毛の地と化し  
た。

両国政府は危うい停戦条約し、生き残ったヘルガスト住民は難民に  
なり、ヘルガンを奪った種族ヴェクタの隣に住まわされた。

さらに、その700年後、地球では孤島に見せかけたアルゼナルと  
言う素粒子研究所でエンブリヲと言う科学者が多次元宇宙を航空す  
るために原初のラグナメイル『ヒステリカ』を開発した。

だが、実験中に事故があり、孤島ごと時空の間と言う次元の中心点に跳ばされた。

そして最悪なことに時空の間には700年前、種族銀河連合によって封印された邪神皇ドウムが甦り、エンブリヲに悪魔の囁きで地球の政府をたぶらかし、ヴェクタ星に侵攻してきた。

奴の狙いは10機のパンドラメールとギャラリック・リングだった。

7機のパンドラメールとギャラリック・リングは地球政府に強奪されたが、残りの3機のパンドラメール ジャンヌ、ヤマト、シグムントはヴェクタ人住民と共に別次元の彼方に消えた。

その後、地球ではリヨウマの種族 ドラゴレイドの宝物『ドラゴニウム』巡っての統合経済連合と汎大陸同盟機構による第7次世界大戦『ラグナルク』”Dwar”と呼ばれる【終末大戦】が開戦された。

統合経済連合政府は戦争に終止符を打破するためにパンドラメールのデータを元にヒステリカと同じラグナメールを6機を投入し、汎大陸同盟機構の各国に収斂時空砲を放った。

しかし、各国にあるドラゴニウムを貯蔵する塔『アウラの塔』が収斂時空砲による次元共鳴を起こし、大爆発を起こした。

そのせいで……… 環境汚染化し、地球文明は滅んだ。

地下に逃れた人々はある……… 二つの決断を言いました。

- ・新天地を探しに宇宙に出るか
- ・自らの体を改造し、地球に散らばるドラゴニウムを浄化するか

「まっ……… 話せるのはこれぐらいかな？」

「え？……… でも、その後はどうなったのですか？」

「そこまでは分からない、ママとパパがその後の事を話してくれなかった………」

「拙者も……… 父上と母上、叔父上、叔母上も申し上げなかった。」

「アタシも……… 話の続きを聞きたかったけど親父とお袋が黙り

込んだからなあ……………想像以上な話なんだろうなあ」

「俺等も同じ……………ただ、分かった事とそのソフィアが話した事と母さんが言った……………その間の後に復活した邪神皇ドウムがまた星々を捕食しようとしたが、父さんが阻止した事だけだ。」

「皆の親はどうして始まりと終わりの間の話してくれないんだろう？」

「うくん……………」

「謎だなあ……………」

「……………そうだ！」

「何が？」

「ヴィヴィアン隊長とメイさんなら知っているかも！」

「名案だ！メイさんは少し難しいかも知れないけど……………隊長ならっ！」

その時、艦内に警報が鳴り響く。

「何だ……………!?」

『緊急事態発生!!緊急事態発生!!アジマス連邦の大艦隊が地球に迫っています！全乗組員は至急迎撃に当たってください！繰り返し……』

「ちっ！アジマス連邦め！エミリアと逃げ延びた難民を取り返しに来やがったか！」

「しつこい連中だ！……………皆、行くぞ！」

「おおー！」

陽弥達は急いで格納庫に向かった。

『皆様……………どうか、ご無事で……………！』

エミリアが両手を握り、陽弥達を強く祈った。

そして木星軌道付近にワームホールが現れ、その中から複数のアジマス連邦大艦隊が現れた。その中にα将軍の旗艦がおり、艦橋にα将軍とその後ろに4つの影がいた。

『さあ、下等な猿の同類を肅清するぞ………！』

α将軍の目が赤く光、4つの影の目も青、黄、緑、紫、オレンジに光輝いていた。その4つの影の中の青い目をした高貴の装甲をした人物が笑っていた。

そして同じ頃、とある銀河系で赤紫の戦闘艦が浮遊しており、戦闘艦の艦橋に耳が尖って、体中傷だらけの孤高の洗戦士と桃色で輝いている目をした女性型のアンドロイドが銀河連邦の通信をハックしており、情報を見ていた。

「全く………これだから地球人は………」

『隊長………どうしますか？ 指示を………』

「仕方がない………△(デルタ)、進路を地球に変えろ………アホ共を援護するぞ！」

『かしこまりました。』

△は戦闘艦の舵を右に回し、ワームホールを開き、地球へと向かった。

## 第8話：イプシロン皇太子

ルナベース軌道上には既にグリフィン級、フリゲート級、シグナス級の戦艦と連邦戦闘機、MECが警戒していた。その中にウラノスと陽弥達の機体と滞在していた。

「アレクトラ！一体奴等は何処から来るんだ!？」

「待ってる！今、計算してるから!!」

「クソッ！早くやってくれ!」

「言われなくてもやっつる!!」

アレクトラがさらにデバイスとレイジアのシステムを使い、情報を調べた。そして、

「分かった!」

「何処だ!？」

「もう火星付近にいる!」

「火星に!?!早すぎる!」

「っ!..... たった今、火星で以上な磁場の反応がした!来るよ!」

陽弥達は武器を構えると同時に連邦艦隊も主砲を火星方面へ向けた。するとその方向からワームホールが現れ、中からアジマス連邦の大艦隊が現れたその直後、アジマス連邦艦隊の主砲からメガ粒子ビームが放たれ、フリゲート級連邦巡洋艦が二隻、撃沈された。

「全機、全艦隊!攻撃開始!!」

スプライサー級連邦戦闘機がプレシキデル・ビームガンが放たれ、アジマス連邦巡洋艦に直撃するが、敵の対空パルスキャノンで撃破される。

アジマス連邦巡洋艦のハッチから大型アジマス連邦兵と戦闘機が射出され、連邦のMECのハンドガン式アームキャノンの攻撃をかわり、腕部のソニックブレードを展開し、振りかざした。

「ああ..... !あああああ!!」

MECのコックピットにいる連邦兵が叫び、ソニックブレードで切り裂かれ、爆破した。

爆煙の中から大型アジマス連邦兵の赤い目が輝いた直後、二時の方からオレンジのビームが飛んできて、掠れたかと思いきや、装甲が溶け、爆発し、撃つてきた方向から陽弥のアーキバスIIが飛来し、空間を駆け回りながらアジマス連邦兵と戦闘機、艦隊を撃破していた。

「敵が多すぎるー！」

陽弥が叫ぶと同時に別の方では、ルナがセイレーンのロッドで魔方阵を作り、アジマス連邦兵の攻撃から連邦艦隊を守っていた。

「きりがないわー！」

アジマス連邦駆逐艦を撃破したソフィアがエリザベスのビームシールドでアジマス連邦兵の攻撃を防御していた直後、アジマス連邦兵の攻撃が止んだ。

「何……………!?!」

するとアジマス連邦兵が下がり、その中から緑の発光部で輝いていたスマートな女性型の変った体型をしたアジマス連邦兵が現れた。

「何なのよこいつは!?!」

『あゝら、レディに向かつてこいつとは……………酷いねえ〜』

「!?っ」

『自己紹介がまだだったねえ、私はアジマス連邦五大將軍の一人……………”深淵のγ”……………まあ、αはγ(ガンマ)と呼んでいるわ、』

ガンマがソフィアのエリザベスにビームレイピアを突き付け、ソフィアもラツイーエルでガンマに振りかざした。

一方、アレクトラはビームバスターライフルでアジマス連邦戦闘機を撃沈した。

「ふう、疲れる……………」

するとコックピット内で警報が鳴り、アレクトラは11時の方向を確認しようと上を見た直後、体型が細く、下半身がタコのようなアームで、黄色い発光部で輝いていた。

「何だ!？」

『君……強さとは何か知っていますか?』

「はっ?」

『これだから猿は……僕はΣ二世……惑星レゾナンスを管理していたΣの子……その後継ぎ……”閃光のΣ

”……君は強さとは何か知っていますか?』

「はっ?だから何言ってるんだよ!」

アレクトラがレイジアのビームバスターライフルをΣに発砲した直後、Σの体が分裂し、バスターライフルのビームをかわした。

「分裂した!」

Σの体が元に戻り、両手から、ビームリングを展開し、アレクトラに襲い掛かった。

その頃、リヨウマの鋼龍號がバスターランチャー、天雷でアジマス連邦兵を斬り刻んだ直後、リヨウマは殺気を感じ、後方から来る赤黒いビームをかわした。

「何奴!？」

『ほお、俺の攻撃をかわすとは……猿の中に骨が立つものがいたとは……嬉しいねえ!!俺様の名は!美食のβ!!機械だけど猿を喰らう!よって、お前は俺様のメインディッシュだ!!』

βは背部から巨大なハンマーを持ち、鋼龍號に向けて、振り回した。



その一方でルナは魔方阵でアジマス艦隊を撃沈していた。

「シャイニングランサー！」

光の槍が艦隊に突き刺さり、爆発した。

「このままじゃ、皆が！………っ!？」

その時、セイレーンの真上から巨大なアックスが振り落とされた。

ルナは急いで回避した。

「貴女は?!」

巨大なアックスを振り落としたのは赤い発光部を輝かせた

ザムザ・ギムガルムだった。

「貴様は………あのヴェクタ人の娘か………」

「娘?!………お父さんを知っているの!？」

「ああ、あのヴェクタ人を相手したのは我だ………」

「っ!!!」

ルナの心は今、怒りの炎に燃え、α将軍を睨んだ。

「よくも………よくもお父さんを!!!」

ルナは怒声を上げ、ロッドを振るうと目の前から魔方阵が現れ、叫

んだ。

「ダークイーター!!」

魔方阵から禍々しい黒い影が現れ、不気味な口を開けてザムザ・ギ

ムガルムを捕食しようとしていた。

「馬鹿めっ!!」

ザムザ・ギムガルムの目が赤く光、光周波ギガントアックスを振り

落とし、叫んだ。

「インパクト・カイザー!!!!!!」

地面も何もない空間がギガントアックスで割れ、その亀裂から地獄

の炎が放たれ、ルナが放ったダークイーターへと突進し、二つの技が

ぶつかった直後、閃光が起こった。

その光景を見ていた陽弥は急いでルナの所に向かっていた。

「ルナっ!!」

その直後、後方に……………違和感を感じた。陽弥は後ろを振り向くと、そこには白い装甲と青く発光して、翼を広げて、陽弥を見ていた。  
「っ!!」

陽弥は急いで後方に下がり、警戒体制した。

「お……………お前は……………!?!」

「君は……………どうして彼らを護るんだ?」

「え?!」

「彼ら地球人は弱き存在だ……………我らアジマス連邦見たいな強者こそがこの宇宙に君臨すべき存在……………なのに何故、彼らを護ろうとしているんだ?」

「……………同じ生命だからだ!」

「?」

「人間は……………!お前達が思っているような猿なんかじゃない!人間……………否!人類は……………確かにお前らのような賢い力を持っていない、それと傲慢!……………けど、人類はお前らよりも凄い力を持っている!……………それは力を合わせることだ!……………力を合わせることで辛い事や痛い事やどんな困難も乗り越えられる!お前ら屑鉄野郎の奴隷じゃない!」

「……………分かった」

「え?!」

すると青のアジマス連邦兵が消え、その直後、陽弥の耳元に消えたアジマス連邦兵の声を聞く

「そんな物……………下らん戯れ言に過ぎんな……………」

「っ!」

その直後、青のアジマス連邦兵が陽弥を蹴り上げると同時に吹き飛ばされた陽弥を追い抜いて、叩き付けた。

「覚えておけ!……………我の名はアジマス連邦国第二皇太子……………」

E (イプシロン) だ」

「グッ!……………第二皇太子……………だと……………つまり、大ボスの弟って言う事か!」

持ち直した陽弥はウィングから高火力ヒートアサルトブレードを取りだし、構えた。

「ヴェクタ人 シン・ギデオンとメイルライダー ヒルダの子！ 陽弥・ギデオン！参る!!」

陽弥はアーキバスⅡの出力を最大に上げ、イプシロンに突撃し、イプシロンも出力を上げ、腰部に収納していた二刀流『デュアルエナジーブレード』を抜刀し、アーキバスⅡに突撃した。剣と刀の刃がぶつかり合い、刃から火花が出ていた。

『剣筋は対した物だなあ』

「お前もな！」

陽弥とイプシロンの攻撃速度が加速し、目にも止まらぬ速さになった。それを見ていたヴィヴィアンは興奮しており、メイとアリス艦長とオペレーター、エミリアは驚いていた。

「すげえ！」

「何だ……あの戦いは……?!」

『陽弥様……』

一方、ルナはα将軍のザムザ・ギムガルムの光周波ギガントアックスに苦戦していた。

「ハア、ハア、ハア……」

『どうした!……我を倒したいのだから?』

「うあああああ~~~~!!」

ルナは怒りながらロッドからビームの刃が放出し、ザムザ・ギムガルムに突き付けて、突撃した。しかし、ザムザ・ギムガルムがスラツとかわし、セイレーンの後ろに回り込んだ。

「っ!？」

ルナは後ろを振り向こうとした瞬間、ザムザ・ギムガルムの剛腕がセイレーンを殴り飛ばした。

『諦める……：：： 我らは貴様らの相手をしている暇などないのだ。』』

α将軍が艦砲射撃しているウラノスを見た。

「っ！」

ルナはα将軍の方向を見て気付いたが、α将軍はルナより先にウラノスへ向かった。

「マズイ!!」

ルナは急いでアリス艦長に通信を開く。

一方、ウラノスではアリスがオペレーターに指示をしていた直後だった。

「艦長！ルナさんから通信です！」

「開いて！」

「はい！」

「どうしたの?!」

『「アリス艦長！大変です！α将軍がそちらに向かっていきます！狙いはエミリアさんです！」』

「何だっ!?」

するとオペレーターが艦長に報告する。

「左舷から強力な熱源反応が真っ直ぐこちらに向かっていきます！」

「マズイわ！総員！左舷から来る赤黒い装甲したアジマス連邦兵をウラノスに到達させるな！何があっても!!」

アリス艦長の指示にウラノスのゴットフリートとバリアントと対空ミサイルが起動した。

「ゴットフリート！バリアント！コリントス！射てえ！」

艦長が命令するとウラノスから多数の対空防御ミサイルが射出し、ゴットフリートとバリアントから粒子ビームがザムザ・ギムガラムに向かって放たれる。

『「フンッ！愚か者がっ!!!」』

α将軍は怒声を上げ、対空防御ミサイルをかわし、持っていた光周

波ギガントアックスがロングビームライフルへと変形し、対空防衛ミサイルを撃破した。さらにゴットフリートとバリアントの粒子ビームもスラリとかわした。

「?」

α将軍の前方からグリフィン級の銀河連邦艦が立ち塞がった。

「邪魔だ!!」

α将軍は叫びながら、ロングビームライフルをギガントアックスに切り換え、連邦艦の艦橋に近付き、ギガントアックスを降り下ろした。連邦艦は艦橋を破壊され、火を吹きながら撃沈された。α将軍は赤い目で睨み、ウラノスの艦橋に近付いた。

「今度こそ！ 姫殿下を貰うぞ！」

ザムザ・ギムガラムのギガントアックスが振りかざされ、アリス艦長は絶望の淵へ追いやられた。

「クッー」

その直後、自動バルカン砲塔「イーゲルシュテルン」が勝手に起動し、ザムザ・ギムガラムを射ち始め、装甲を貫いていた。

「何っ?」

アリス艦長は驚き、急いでメイ整備長に連絡する。

「メイ整備長！ イーゲルシュテルンが勝手に!?!」

「それが、あの子達が勝手にイーゲルシュテルンを操作してるのよ!?!」

「ええ!?!」

艦長とオペレーターが驚いた直後、別の通信が入る。

「ブリッジ！ 僕達も戦えます！」

「当たれっ!! 当たれっ!!」

「お父さんとお母さんの仇!!!」

バルカン砲塔の砲弾がザムザ・ギムガラムの装甲を貫き、蜂の巣状態になり、コックピットにいるα将軍が叫ぶ。

「グアアアアアアア~~~~!!!」

それと同時にヴィヴィアンのレイザー改がブーメランブレード投げ、ルナのセイレーンが魔方陣を作り、シャイニングランサーで止め

を刺す。

「『バカな…………… 四大將軍の我が…………… 破れるだと…………… !!? 御許しください…………… イプシロン皇太子…………… アジマス陛下…………… プロフェツサー』E”…………… !!」

α將軍はその言葉を言い終わると同時にザムザ・ギムガルムごと爆発した。

その頃、陽弥とイプシロンは互角同士の光速の戦いを繰り広げていた。

「『そうだ!もつと!…………… もつと我を楽しませろ!おおおおお

おおお〜〜!!!!』

「ハアアアアアア〜〜!!!!』

互い共、突っ込んで来たその時、両者を止めるかのように

上から粒子ビームが降ってきた。

「っ!?!」

「『っ!?!』

二人は戦闘を止め、粒子ビームが降ってきた方向を見るとそこには異形の赤紫の戦闘艦が主砲を向けていた。

「何だあの戦闘艦は…………… !!? 今までの敵とは何かが違う……………

!」

その時、イプシロン皇太子が言う。

「『あれは…………… !!?まさか…………… !! エルダー共和国軍第13

独立機甲部隊戦闘艦”アムザニ”か!!!』

「エルダー共和国!?!」

その時、戦闘艦から一つの光が現れ、真っ直ぐ陽弥とイプシロンの所に迫ってきた。

「!?!」

「!?」

光が陽弥とイプシロンの所に付くと同時に正体を現した。赤紫と黒の装甲をしており、手元到大鎌を持った機体だった。

「何だコイツは!?けど、あの機体の間接部は……明らかにセイクリッドメイルの間接だ……!」

「あの大鎌……まさかっ!」

すると謎の機体が動きだし、大鎌の光の刃が三枚に別れ、イプシロン攻撃してきた。

「クッ!やはり……!」

イプシロンはデュアルエナジーブレードであった防御するが謎のセイクリッドメイルの出力が最大なのか、イプシロンが押されていた。イプシロンの腕が変形して、アームキャノンへと変わり、謎のセイクリッドメイルに乱射した。

しかし、謎のセイクリッドメイルは後方に下がりイプシロンのアームキャノンのビームを回避した。それを見ていた陽弥が驚く。

「何て速さだ!」

イプシロンは射つのを止め、デュアルエナジーブレードを抜刀し、接近戦を仕掛けてきた。

謎のセイクリッドメイルは三枚刃の大鎌を突き付け、イプシロンへと向かった。両者の刃が混じり合ったその直後、衝撃波が来た。

「クッ!」

陽弥はアーキバスIIの出力を最大に上げ、左腕のシールドで衝撃波を防ぐ。謎のセイクリッドメイルとイプシロンの刃から稲光が発生し、両者機体の後ろから凄まじいオーラを発生していた。その直後、ウラノスの方から爆発が起きた。

「何だ!」

「?!」

イプシロンがコックピットのモニター画面をズームするとザムザ・ギムガラムが火を吹いていることに気付き、突然謎のセイクリッドメイルとの戦闘を止めた。

「 $\alpha$ が殺られたか……」

するとイプシロンのモニター画面に所在不明の通信が開く。

『戦闘を中断するとは…… お前らしくないなあ……』

『フンツ…… 裏切り者を匿ったエルダーの生き残りが……！』

「……… 生き残り……… か……… 正確では文明を捨てたんだが、」

『だが、お前はエルダー人だ……… 次は陽弥・ギデオンとの戦いを邪魔すれば……… 本気でお前を……… 殺す………！』

『その時は俺も本気を出すけどなあ………』

『覚えておけ……… エルダー共和国軍第13独立機甲部隊隊長……… エイルマツト・P・タナトス……… 嫌、”エルダーの死神”………！』

イプシロンは言い終えると同時に残った三体の将軍に通信回線を開く。

『聞け、お前たち！ αが殺られた……… 姫殿下の強奪は失敗した。即時、本拠地 惑星”ホライゾン”へ退却せよ……… 繰り返し……… 姫殿下の………』

それを聞いたらγ、Σ、Bは驚き、アジマス連邦艦隊が旋回し、銀河連邦から遠ざかっていく。

『αが殺られた?!……… イプシロンの旦那！本当かよ?!』

『本当の……… 事だ………』

『あらあら……… まさか”地獄のα”が殺られるなんて……… 彼……… 油断しちやっただの?』

『まあ、良いよ……… 僕……… アイツ嫌いだったから……… 多分、僕達……… あの御方に怒られますよ』

『アジマス陛下の事ですか?……… 彼、怖いからねえ………』

『それはどうでも良い！俺は説教よりデイナーが楽しみなんだよ！……… γ！今日のデイナーは何だ?』

『ガーリック入りのオイルソースのギアですわ………』

『よっしやああ!!』

『B……… うるさい………』



『良いじゃねえかよお!!?』

『良くないです……』

三体の将軍は相変わらぬ口喧嘩をして艦隊と共にワームホールに入り、本拠地と思われる……惑星ホライゾンへと帰還した。

そしてウラノスへ帰還した陽弥達は格納庫にエミリアがいた。陽弥の方に走ってきた。

「陽弥様!」

「エミリア!?!…… うわあつ!?!」

すると走ってきたエミリアが陽弥に抱き付いてきて、周りの人達の顔が赤くなる。

「ごめん……」

陽弥は謝ると同時に抱き付いてきたエミリアの頭を優しく、撫でた。その時、格納庫に放送が流れた。

『陽弥・ギデオン様とルナ・ギデオン様……至急ブリッジに来てください……繰り返します。』

「アリス艦長が……?」

陽弥とルナは急いでウラノスのブリッジに向かった。

ブリッジに向かうとアリス艦長が待っていた。

「遅くなりました!!……アリス艦長、話とは?」

「実は……」

すると突然、ウラノスのモニター画面が現れ、そこに映ったのは、体中が傷だらけで、赤紫のアーマーを着たエルダー人だった。

『自己紹介がまだだったな、俺の名はエルダー共和国軍第13独立機甲部隊隊長であり、エルダー戦闘艦“アムザニ”の艦長 エイルマツ

ト・P・タナトスだ。」

「初めまして、私はこの超光速旗艦ウラノスの艦長 アリスです。」

『用件があつて、通信している。』

「それで?..... あなたの御用件は何ですか?」

『..... この俺と..... 手を組まないか?』

「ええ!」

エイルマツトが放った言葉に陽弥達は驚き、何も言えなかった。

その頃..... アジマス連邦国..... 通称 「アヴァロン」

”では..... 皇家の者だけにしか許されない最上層、貴族系の者達の住む上層、一般の住む中層、スラム街が並び、暴力と支配に満ちた下層、そして..... 奴隷や捕虜達を労働させる地獄の最下層の五つの階層に別れての惑星型コロニー..... そのコロニーは今まさに..... エミリアの故郷..... 惑星ホライゾンの大気圏外に滞在しており、惑星型コロニーと繋がっている軌道上エレベーターと星のエネルギーを吸い付くしているエネルギー吸引機が繋がられていた。

そして最上層から最下層の映像を見ていた人物がいた。

白き衣のような装甲をしており、玉座に座っていた。そして玉座に座っている皇家の所に青黒い布で体を包み込んでおり、フードの下に仮面で顔を隠している人物が現れた。

『順調か..... プロフェッサー”E”..... ?』

『はい、陛下..... 着々とホライゾンに惑星ホライゾンに存在する五大大陸国家の二つ、エルシユリア王国と魔法に長けたエルフ族、ダークエルフ族、ハイエルフ族、ハーフェルフ族が共存する国..... アテナイ共和国を攻め落とし、奴隷達を確保しています。』

「『それで?..... 残りの三カ国は?』」

「『ええ、その件ですが..... 三カ国の内、機械だらけの帝国..... ヴアルヴァートル帝国は..... 二カ国のグラシオン連合とバランドール皇国と同盟を結び、まだ我々に反抗しています。』」

「『呆れる..... 何故、彼らは我々が支配される事を恐れるのか?』」

「『分かりません..... だが、彼らを打開させる方法があります。』」

「『ほお?.....』」

「『これです。』」

「『プロフェツサー”E”が巨大なモニターを展開させ、そのモニター画面にエミリアの姿が映っていた。』」

「『この者は.....?』」

「『陥落させたエルシユリア王国の第一王女..... エミリア・ヴァルネア・クリーフです。彼女はまだ、自分の存在と本当の力..... そして..... 自分が何者であり..... どう言う種族なのか気付いていません.....』」

するとプロフェツサー”E”は仮面の下で笑っていた。

## 第9話：暗証コード

一方、陽弥達の故郷…… トウルーアースでは……

「良し！良いぞ！良いぞ！そのまま降ろしてくれ！」

惑星連合のジャイロ3機がシン達が撃退したアジマス連邦の巡洋艦の残骸を回収していた。その中に退院して、車椅子に乗っているシンとそれを仕切っていたヒルダがいた。

「予想以上に回収したなあ……」

「当たり前だろ!? あんたがそんな状態だから、代わりにやってるんだよ！」

「すいません……」

シンが落ち込むと、サラリアンのモーデインとゲスのリージョンとサイとクリスが来た。

「シン！」

「よく来てくれました！モーデインさん！」

「こちらこそ、怪我の方は大丈夫ですか？」

「ええ…… 後はリハビリをスパルタでやれば、完璧に復帰出来ます。向こうで活躍している陽弥とルナに追い付ける。」

「そうか、彼らには辛い事をさせてしまっているからねえ…… その件について、私も同行してほしいのだ。医療のスペシャリストがいれば、彼らも安心して戦えるだろう。」

「ありがとうございます。」

「では、早速取りかかろうとしますか？」

「勿論です。」

シン達はアジマス連邦の残骸を研究センターに運んだ。

研究センターには既にハッカーやオペレーターが作業しており、ゲス達がネットワークを使って情報を収集していた。

そしてシンは車椅子のまま、膝の上にノートパソコンを置き、ケーブルをリージョンの後頭部に差し込んだ。

それに続き、モーデインとサイも他のゲスの後頭部にケーブルを差し込み、デバイスを展開した。

「それじゃあ、始めるか！モーデイン！サイ！」

「よし！」

「ハッキング開始！」

シンの声にハッカー達は一斉にデバイスのボタンを打ち始めた。全員が集中モードになっており、周りの空気が段々と変わっていくのにヒルダとクリスが驚く。

「すげえ!？」

「うん！うん！」

「サイ！このデータベースをバックアップしてくれ！」

「分かった！」

「シンさん！アジマス連邦のファイアーウォールが来ました。」

「俺に任せろ！」

するとシンの打つ速度が速くなり、アジマス連邦のファイアーウォールを簡単に破った。

「開いたぞ！」

「第2ファイアーウォール！来ます！」

「おっし!!」

するとモーデインがハッキングしながら言う。

「フム、興味深い…… アジマス連邦のデータと情報は我々のテクノロジーを超えている。これを利用すればアジマス連邦の目的が解るかも知れない。」

モーデインは独り言は喋りながら、作業を進めた。すると出入り口の方から、バンとカズ、フィーリが来た。

「シン！」

「よく来てくれた！手伝ってくれ！」

「分かった！」

「任せとけ！」

「お手伝いします！」

バンとカズとフィーリはそれぞれの位置に付き、ハッキングを開始した。それを見ていたクリスはあることに気付く

「凄い……………！第一部隊がそろっ……………？」

「どうした？」

「待って!?……………と言う事は次来るのは……………」

「俺も来たぜ！」

「私もな！」

「ハンクにゾーラも！」

「シン！手伝うぞ！」

「頼む！」

「第一部隊が……………揃った……………」

「終わった!……………さあて、情報とデータを拝見させて貰うぞ……………！」

「アジマス連邦は各惑星に存在する低文明を持つ種族を捕獲し、奴隷にしているらしい……………そして何カ所に焼き印を押すらしい……………」

「焼き印を……………!？」

「エグい事をするなあ……………」

「待って！これもあった！」

「何!？」

「……………コードネーム……………プロフェッサー”E”……………」

「プロフェッサー”E”!？」

一同が叫ぶ。

「彼はアジマス陛下の側近で、参謀をやっているらしい。さらに、アジマス連邦の民の貧相人にも捕獲した人達と一緒に奴隷をさせているらしい。」

「同じ仲間なのにどうして!？」

「後……………これもさらにエグい事が載っている。」

「何?？」

「…………… 捕獲した人達の中に…………… 幼児もいて、その子達にも奴隷をさせている…………… 大人と違って電磁警棒じゃなく、ムチ打ちだつて……………」

「そんなの酷い！」

「アジマス連邦兵より、コイツの方が一番ゲス野郎じゃないか!!」

「後…………… 赤ん坊は頭を押さえつけて、額に焼き印を押すらしい、そして大きくなるに末、奴隷のまま……………」

すると突然、ゾーラが怒声を上げまくる。

「コイツツ!! 外道にも程がある!!」

「アジマス連邦のリーダーはこの事を知っているんか!」

「多分…………… 知らないだろう……………」

「そんな…………… !!」

「ちよつと待てっ!…………… あの姫さんの事も書かれている」

「え!」

「…………… 永遠語り 『時の歌』…………… ?!」

「時の歌!」

すると研究者のデバイスのモニター画面が突然、消えた。

「なっ!? まずい!!」

「どうした!」

「強制シャットダウンされた!」

「嘘?!」

次々に研究者達のモニター画面が黒くなり、残るはシンのモニターになった。

「ああ〜! 駄目だ! 駄目だ! 消える! 消える!」

そしてとうとう、シンのモニター画面も黒くなり、シンは落ち込んだ表情になり、まるでボクサーが死んだかのような光景になっていた。

「どうした…………… !」

「…………… 消えた……………」

「何が…………… !」

「…………… 全部のデータが強制に消去された。」

「全部?!」

「ああ、あの姫さんに関するデータも全て……………」

「マジかよ……………?!」

「つまり、そのデータだけは見られなくなかったんだろう。」

するとモーデインが落ち込んだシンの代わりに説明する。

「でも、一つだけ、分かったことがある……………」

「永遠語り『時の歌』です……………！アンジュとサラマンディーネの永遠語り『光の歌』と『風の歌』と並ぶ、第三の伝承歌だと言うことが……………。恐らく、その歌には何か凄い事が載っていたかもしれない。」

「それでアジマス連邦がこの残骸の全部のデータを消去したんだな……………。俺達に知られてはいけないと何か……………」

「恐らく……………」

「ん?…………… どうした……………?」

シンが何かを考えているヒルダに言う。

「プロフェッサー”E”……………。どっかで聞いた名前だなあ、」

「え!」

「どっかって…………… 何処で?!」

「分かんないんだよ!あの”E”っていうコードネームが何処かで聞いて、見た事がある頭文字何だよ!」

「E…………… E……………」

「エンブリヲ?」

ゾーラが突然彼の名を言い、一同が驚き、周りの空気が一瞬に凍り付いた。落ち込んでいたシンも驚く。

「ん?…………… 悪いこと言った?」

研究センター内の皆はただ、啞然するだけだった。



## 第10話：協定条約

一方、陽弥達は、エイルマツトが放った同盟条約に悩んでいた。

「アリス艦長…………… どうするのですか？」

ルナがアリス艦長に言うと、艦長は答える。

「…………… それより…………… 何故…………… 貴方は戦うのですか？」

「え…………… !？」

「俺の要求に答えろ…………… エリシア人……………」

「それよりも…………… 私の質問に答えてください…………… !…………… 何故、貴方がここにいて、どうして…………… 人類銀河共和国にアジマス連邦が地球に襲来した時に…………… シンさんを助けなく、只、軌道上でじつと見ていたのですか？」

「!？」

陽弥とルナと三人のオペレーターとメイが驚くと同時に、エイルマツトは答える。

「…………… コイツの為だったからだ。」

するとエイルマツトの後ろに下がるとある人物が現れ、それを見ていた陽弥達は驚き隠せなかった。それは、軽量装甲をしており、その装甲から桃色に発光するライン、そして女性型のアジマス連邦兵だった。

「アっ!?!…………… アジマス連邦兵!?!？」

「コイツは△【デルタ】…………… 彼等からはこう呼ぶものもいた…………… アジマス連邦第一皇女……………」

「ええ、!?!アジマス連邦第一皇女…………… だと!?!」

「訳を話せ……………」

「『貴殿方々にお願いがあります。』」

「何なのですか？」

「…………… アジマス連邦…………… アジマス兄上、イブシロンを…………… 止めてください…………… そして、武力行使を…………… 停止させてやってください……………」

「っ!?!何故?!」

「何故ならば……元々アジマス連邦は……ある共存を願っていた古代種族に作られた生命体です。」

「ある古代種族……?!」

「彼等は……私達、アジマス連邦を作ると同時に様々な生命を作り上げていった。その生命の中に人類も含まれています。」

「人類も作り上げた!?!?」

「そのような話……!! 惑星エリシアを管理するスーパーコンピュータ『アイリス』でも聞いたことがありませんわ……!」

「そのアイリスもまた……彼等が作り上げたマザーコンピュータをサポートするサブコンピュータの一部です。」

「ええ、!?!」

アリスは驚いた。自分の故郷を管理し、全ての銀河の事を知っているスーパーコンピュータ『アイリス』がその古代種族が造り上げたサブコンピュータの一部の事に、

「様々な生命を造り上げた彼等はある事を話しました。全てをも凌駕する無限の極限、極大、究極にして最高の万能の力を三つも造り上げた。」

《三つの……万能の力……?!》

「しかし、その力を造り上げた彼等の中に……優秀で才能であった科学者は力の危うさに負け、それを悪用し、全時空を支配しようとしていた者がいた……彼はその力に潜む悪魔の囁き耳を傾けてしまい、その力の一部が彼の体と遺伝子を強制改造され、醜い姿になり、神をも凌駕する力を手に入れた。」

「醜い姿に……!?!……まさか……それって……!」

「そう……貴方達双子の父親が倒した……元は有機生命体だった者……邪神皇ドウムです。」

「!!」

「ドウムは創造種と私達……アジマス人を滅ぼそうとしました。その時、奇跡が起きたのです。創造種の一人がある祈りと無限の力の一つを使い……二体の神を召喚させた。」

「召喚……って！」

「二体の神は激しい戦いをし、ようやくドゥームを混沌の間に封印することが出来ました。ですが……創造種は既に……滅んでおり、アジマス人だけが生き残ってしまいました。悲しみに溺れたアジマス人は創造種を怨み、自分達だけの独立国家……アジマス連邦を築き上げたのです。」

「っ！……その創造種が……俺らと同じ……有機生命体だったのか……」

「その通りです。ヴェクタの少年よ……」

「だからって……！私達、他の有機生命体に八つ当たりはないよ！」  
「ルナの言う通りです。確かに貴女の種族アジマス人には辛い過去かもしれないませんが……やはり、止めなくてはなりません……！」

「で……どうするのだ？……俺との協定条約を結ぶのか……それとも助けを借りずに挑むか……」

その時、後ろから別の声がした。

「同盟を……結びます！」

「っ！？」

陽弥達は後ろを振り向くとそこには避難民の青年や子供達がいた。

「知らなかった……アンタ達の事も……何でそんなことをするのかも……ここで分かった！……俺ら……止めます！」

「私達も……！」

「僕も……！」

「皆……」

すると別のモニターが開き、銀河連邦兵のステイプが映った。

「その話……我らも加戦しよう……！我ら銀河連邦は種族銀河同盟との……協定条約を結ぶ！」

「え！？……良いのですか……！」

「当たり前だ……彼方側、此方側……関係ない！……我

らも貴殿方と同じ地球人であり、在るべき生命だ。」

「私も……止めたい！……アジマス連邦の過去がそんなに苦しく辛かった事に、私は決意しました。陽弥様やその古代種族のような共存出来る世界に変えたい。」

「契約成立だな……」

「ええ……」

「さて、実は……条約したのには理由がある。」

「何でしょうか……ステイブ艦長？」

「条約した理由は……これから行われる作戦でだ……上層部の者達がこの作戦には君たちの力が必要と言っていた。その作戦の内容はそこにいる難民の子供達の新しい故郷……”開拓惑星メトロ”に……アジマス連邦の軍が……今まさに彼らを奴隷にされている。このままではこの子達の両親方々はアジマス連邦の奴隷になる一方どころか、殺されてしまうのだ。そこで君達の出番なのだ。」

「頼む……！」

「……良いでしょう……」

「感謝する……！」

ステイブが敬礼すると同時にモニター画面が消えた。

「さて……総員に告ぐ！これより、我らは、銀河連邦と共に開拓惑星メトロを奪還する！良いですか!？」

アリス艦長の言葉に陽弥達は敬礼する。

「《了解!!》」

そしてウラノスはエイルマットの戦闘艦”アムザニ”と銀河連邦旗艦”ゼウス”率いる大艦隊を引き連れ、共にワームホールを開き、”開拓惑星メトロ”へと向かって行った。

そしてその頃、”開拓惑星メトロ”では……………

「あああああ~~~~~!!!」

アジマス連邦兵が女性の奴隷の背中に電磁ウィップを振るっていた。

『モタモタするな!』

アジマス連邦兵が叫び、労働者にウィップを振り回していた。

別の所では奴隷達に焼き印を押していた。

「ぐあああああああ~~~~~!!!」

ビームで放出している焼き印は熱く、まさに地獄の痛みでもあった。

「お願いします!その子だけは!その子だけは!」

母親らしき女性は必死に乳飲み子を離さないようにしていた。

しかし、アジマス連邦兵が女性に電磁ウィップを振り付け、乳飲み

子を奪い取った。

「お願い!やめて!やめてえ!!!」

ビームの焼き印が乳飲み子の額に付けられ、悲鳴を上げていた。

うぎやあああ~~~~~!!!うぎやあああ~~~~~!!!

女性も泣きながら焼き印を押し付けられた我が子を抱き締めた。

「ホラッ!とつとと歩け!」

アジマス連邦兵が女性を蹴りあげると一人の男性がアジマス連邦兵を押し倒した。

「アンタら!子供も奴隷にするつもりか!」

男性が怒鳴るとアジマス連邦兵達が男性にアームキャノンを突き付けて、囲んだ。

すると向こうから、誰かが来るのが見えた。アジマス連邦兵がその人物に敬礼する。

『M(ミュー)殿下!』

ミューと名乗るアジマス連邦の者は男性に近寄り、慰めた。

「大丈夫ですか……………」

すると向こうからも別の声がした。

「ミュー!!」

現れたのはスマートな体型をした男性型のアジマス連邦の貴族だった。

「パラス兄様……………」

そしてパラスの横に体型がゴツく太っており、移動式の椅子に乗っていた。

「ミュー兄、何故そのような人物を助けるのですか？」

「……………」

「分かった……………じゃあ、」

するとパラスはアジマス連邦兵が持っていた電磁ウィップを奪い取り、ミューの所に投げた。

「っ!？」

「……………お前がやれ、」

「っ!？」

「お前は有機生命体には優しいからなあ、人間は好きだろ？殺したくなかったらお前がそれを使って罰を与えろ！」

「……………嫌だ！」

「さあー！」

「……………嫌だ！」

するとパラスはアームキャノンに切り替え、ミューの方に射った。  
「やらなければ……………」

パラスはアームキャノンを奴隷達の方に銃口を向けた。

「待ってくれ……………俺がやる……………！」

「それでこそ、俺の弟だ……………」

パラスは太った人物と共に建造中の宮殿に帰っていった。

そしてミューは電磁ウィップを手に持ち、縛られて背を向けられた男性の前に立った。

「すまん……………すまん！」

ミューは電磁ウィップを振り付けると男性はあまりの激痛に耐えられなく、悲鳴を上げた。

「あああああ~~~~~!!!」

ミューの目元にはオイルが漏れており、まるで泣いているようにも見えた。

そして宮殿内の上層部にはパラスがメインモニターで開拓惑星メトロの軌道上にある衛生機を使って、見張っていた。するとパラスの後ろから黒いマントで顔を隠していた人物が現れた。

「おっ！来たか……………」

すると黒いマントを着た人物の顔からX型のバイザーが青白く光った。

そして、その頃……………

「そっちは終わっているか？」

「もう終わっています！」

シンは作業員に命令し、心の中で子供達の事を思っていた。

「よし……………『待ってろ……………陽弥……………ルナ……………』」

シンは巨体な何かを開発していた。

## 第1話：ネオ・アウローラ

開拓惑星メトロの軌道上にある無人防衛衛生機が大気圏外から来る敵を見張っていた。

「?」

すると目の前にワームホールが突然と現れ、中からウラノスとアムザニ、ゼウスと連邦艦隊が現れる。

「っ!!!」

無人衛生機は急いで攻撃体制と報告しようとした直後、グリフィン級の連邦艦の空間魚雷が発射され、無人衛生機を破壊した。そして第2銀河連邦旗艦“ゼウス”の艦長 スティーブが叫ぶ。

「各艦！大気圏突入の準備を！」

ステイーブの命令に銀河連邦艦隊はメトロに行くと、連邦艦やアムザニ、ウラノスの装甲が赤くなり、大気圏を突入した。それを宮殿から見ていたパラスが言う。

「銀河連邦だ?!?クソッ!..... 全機！対空カノン砲、一斉発射！それと高電磁シールドで敵を宮殿付近に浸入させるな！」

パラスが怒鳴り、宮殿から距離が離れている北西、北東、南東、南西にある基地から対空カノン砲と巨体な衛生タワーが展開され、上空から降下してくる連邦艦隊をに向けて、撃ち始め、宮殿や基地にシールドを展開した。それに続き、何も無い陸地からハッチが開き、アジマス連邦戦闘機とアジマス連邦大型兵、アジマス連邦戦車が出動し、援護射撃する。

そして銀河連邦艦隊もそれぞれのカタパルトが開き、ジェットウイングを装備したMECとスプライザーZ、爆撃機スプライサーGとステイレット型高速戦闘機スプライサーXが射出され、迎撃に当たった。ウラノスもゴットフリート、イーゲルシュテルン、バリアント、対空防御ミサイルでアジマス連邦の兵器を破壊していた。そして、ウラノスのカタパルトハッチが開き、中から陽弥達が射出され、ヴィヴィアンが作戦をブリーフィングする。

「良いか?!アジマス連邦の宮殿を叩き込むために、六つの対空カノン



砲のある基地に突入し、基地を破壊したら、残存した兵力で一気に宮殿へ叩き込むよ！良いね!？」

「イエス！ママ!」

早速、陽弥達はヴィヴィアンの指示通りに六つの基地に行くために3チームに別れて行動する。ヴィヴィアン、アレクトラは南西の基地に……ソフィア、リヨウマは南東の基地に……陽弥、ルナは北東の基地に……エイルマツトはデルタと一緒にアムザニで北西の基地へ散開した。

陽弥とルナはアーキバスIIとセイレーンの出力を最大限に上げ、北東の基地に向かっていくと、シールドを張っており、7機の対空カノン砲と基地を護る4機のプラズマ回転砲台の銃口が接近してくる陽弥とルナに目掛けて、射ち始めた。

陽弥とルナはアーキバスIIとセイレーンでプラズマ弾をかわし、アーキバスIIの先端部に装備されているプラズマビームライフルで一気に、2機のプラズマ砲台を破壊した。次にルナのセイレーンが駆逐形態に切り替え、ロッドを持ち構え、呪文を唱え始めた。

「バーニングスピリッツ!!」

残り、2機のプラズマ砲台の付近から巨体な魔方陣が現れ、その中から三つ首で周りに爆炎を纏ったケルベロスを召喚し、2機のプラズマ砲台に噛み付き、2機のプラズマ砲台を引きちぎった。ケルベロスは基地の周りにいるアジマス連邦兵にも襲い掛かった。アジマス連邦兵は悲鳴を上げて逃げ回っている隙に陽弥とルナはアーキバスIIとセイレーンから降り、背部に収納されている三点式バーストのアサルトライフル『アーガスライフル』を持ち、此方に向かってくるアジマス連邦兵を撃ち倒していく。

「お兄ちゃん！後ろ！」

ルナは後ろにある基地の高台からアジマス連邦の狙撃兵が陽弥を狙っていた。するとルナの体から青いオーラと電磁波が放たれ、ルナはアジマス連邦狙撃兵に手を差し伸ばすと、アジマス連邦狙撃兵の後ろに黒い物体が現れ、アジマス連邦狙撃兵が突然、宙に浮き始めた。

『なっ?!何だこれは!?!』

『助けてくれ〜!!』

『どうなってるんだ!?!』

アジマス連邦狙撃兵が騒いでる隙にルナは腰部にあるフルオート式サブマシンガン『テンペスト』を持ち、狙撃兵に向けて乱射した。すると別の方からカーポンブレードを突きつけたアジマス連邦兵がルナに迫っていた。すると上からケルベロスが現れ、アジマス連邦兵を噛み殺し、ルナに近づいてくるアジマス連邦兵達を倒していた。

それを見ていた陽弥は驚いていた。

「アイツ……………何時の間にあんな技を!?!」

陽弥はルナを見て唾然しているとケルベロスが陽弥の所に向かってきた。

「え?!」

ケルベロスは炎の牙を向けて、陽弥に飛びかかった。

「ええ!?!」

だが、ケルベロスは陽弥を飛び越し、陽弥を狙っていた大型兵に襲い掛かり、炎の牙で首をへし折り、鋭い炎の爪で大型兵を切り裂いた。ケルベロスは大型兵を倒した後、陽弥の所に行き、倒れた陽弥を起き上がらせた。

「……………ありがとう」

するとケルベロスは大きく長い舌で陽弥を舐め、そして急いでルナの所に戻った。

「……………最悪……………」

すると生きていたのかケルベロスによって上半身になったアジマス連邦兵が左手にカーポンブレードを持ち、陽弥に忍び寄ったが、陽弥はケルベロスのお陰で、体中がベトベトで気が立っており、腰部あるフォトンソードを持ち、後ろに投げた。すると運良く忍び寄るアジマス連邦の頭部に突き刺さり、陽弥は「アッ!」と言い放ち、アジマス連邦兵は倒れた。陽弥はフォトンソードを抜き取り、急いでルナの所に戻った。

そして陽弥とルナは基地の中に侵入し、中にいるアジマス連邦兵達を倒していった。

そして基地のエンジンルームに入るとそこは、  
「何だこれ……………!?!」

とてつもない量のケーブルとコード、大きなコンピュータやエーテル粒子が入っている貯蔵タンクがビッシリ並んでいた。

「さあてーやるかー!」

「うん!」

陽弥とルナはエンジンルームのエーテル粒子貯蔵タンクにC4を設置した。そして同じ頃、北西、南西、南東の基地にもヴィヴィアン達がアジマス連邦兵を片付け、エンジンルームにC4を設置していた。

「良し!ここから離れよう!」

「分かったわ!」

陽弥とルナは基地から脱出しようとしたその時、二人の背後に……………異様で冷たい何かを感じた。それは今まで会ってきた者ではないと分かり、二人は一緒に振り向き、アーガスライフルとテノペストを背後にいる人物に向けた。

「っ!!?!」

それは……………黒いマントで素顔を隠し、その足元には青白く光るフェイゾン、そして右腕には黒いアームキャノンがあった。

二人は警戒しながら、その人物に話しかけた。

「お前っ!……………何者だ!?!」

『……………』

しかし、その人物は陽弥の質問に答えなく、只、二人をじつと……………見ていた。

「答えっ!!」

するとようやくその人物が喋り出す。

『白い……………』

「っ!?!」

『君達……………白い……………僕じゃない……………』

「白い僕じゃ……………ない……………?!」

するとその黒い人物は宙に浮き、右腕のアームキャノンで天上を破

壊し、上から日光が漏れ、黒い人物はそこから出ていった。

「何だったんだ…… アイツ……?!」

「分からない…… けど、私の…… 心臓の鼓動が物凄く早くなつたのよ……」

「俺もだ…… まるで心臓が俺達に……」

「……………」 ”絶対にその黒い人物だけは戦つてはいけない”  
と……………」

すると陽弥とルナの通信からヴィヴィアンの声がした。

「陽弥！ルナちゃん！そっちも終わった？」

「……………」

「どうしたんだ？」

「…………… つ！あ！…………… いえ、何でもありません！」

「こちらもです！」

「おっ！そっか、そっか！それじゃその基地から退避するんだよ！」  
「了解!!」

陽弥とルナは至急、基地から脱出し、そしてエンジンルームに設置されたC4爆弾が起爆し、基地ごと対空カノン砲が破壊され、宮殿を覆い囲っていた高電磁シールドが解除され、宮殿付近は無力となった。

そして銀河連邦戦闘爆撃機スプライサーGが陸上にあるカタパルトや戦車目掛けて、ミサイルや爆弾を落としていった。

そして残存した銀河連邦艦隊は輸送シップを送り、陸地に着陸すると、ハッチが開き、銀河連邦兵士が出てきて、アジマス連邦兵士を倒していった。

そして宮殿内ではパラス男爵が慌てていた。

「何をしているんだ!?お前ら！」

「しかし、銀河連邦艦隊と種族銀河同盟が相手では無理です！」

「くくくく!……………!…………… フフフフフ」

「どうなされたのですか……………!?」

「『こうなったらあれを使う……！』」

「『あれとは？……まさか!?……いけません！あの生物兵器とモウラーマークIIを使つては!!』」

「解き放てっ!!」

「ダメです！まだ同胞が陸地につ!!……」

その時、パラスのアームキャノンのビームがアジマス連邦のオペレーターの頭部を破壊した。それを見ていたオペレーター達は怯えた。

「『何ぼさつと見てんだよ!!?さつさと全モウラーマークIIと……スレッシャーモウを解き放てっ!!それとドルバ・ギムガラムも出せ!!俺も出る！護衛も出る！それと……ミューもだ!!』」

パラスはマントを脱ぎ捨て、司令室から格納庫へと向かった。

そして宮殿の門付近には既に銀河連邦兵士が迫っていた。

「良し！一気に叩き込むぞー！」

「《おおおおお~~~~!!!!》」

皆の掛け声が鳴り響いた直後、地震が起きた。

「な!?何だ!!?」

すると地面から巨体なタワーが出てきて、そして宮殿の後方から四足で歩行している巨体なロボットが5隻現れた。

「何だあれは!?」

するとモウラーマークIIの周りからハッチが開き、無数のミサイルを発射してきた。

「逃げるー！逃げる!!逃げるおおお!!」

陸地にいた銀河連邦兵士とアジマス連邦兵士がモウラーのミサイルの爆撃に巻き込まれる中、出現したタワーが変形し、巨体な大鐘になった。それをウラノスから見えていたアリスが叫ぶ。

「あれは……………まさか!!!」

アリスは急いでステイブに通信を開く。

「ステイブ艦長!!急いで兵士を回収してください!!今すぐ!!!」

しかし、変形した大鐘が、地面に向けて叩き付けられ、大鐘が地中にまで鳴り響いた。

「あ……………ああ……………!!!」

アリスが怯え、辺りが静かになると同時にモウラーマークII5隻がその場から退避する。

「今度は何だ……………!!」

すると日射しの方から、何かが近づいてくるのが見えた。地面が盛り上がり、しかもフリゲート級の戦艦をも超えていた。そして、盛り上がりが無くなった直後、連邦兵士のしたから数十メートルもある巨体な蛇のような体形をした昆虫が出てきて、銀河連邦兵士達を襲い掛かった。

その光景を見ていたアリスは言う。

「何てと言うことを……………！アジマス連邦……………貴方達はクローガンの母星 トウチャンカに生息する守り主……………スレッツシャーモウを捕獲して、自分達の兵器にしたのね……………!!」

その時、ウラノスが激しく揺れる。

「損害状況は!？」

「外壁装甲が破れ……………っ!」

「どうした?!」

「エミリア姫殿下の反応が消失しました!」

「何ですって!……………メイ!」

メイがエミリアの自室に向かうとそこにはパラス男爵が気を失っているエミリアを抱えており、その横に深緑の色をした。機体 ドルバ・ギムガルムが待機していた。

「待ちなさい！」

メイがアサルトライフル『アベンジャー』を構えるとパラス男爵の手からフラッシュを放ち、メイが怯んでいる隙にパラス男爵はエミリアを抱え、ドルバ・ギムガルムに乗り込み、宮殿へと戻った。そしてメイは急いでアリスに報告する。

「艦長!!エミリアさんが連れ拐われた!」

「何ですって!?!ステイブ!」

「分かっている!」

ステイブの旗艦 ゼウスからMECが出動し、サブマシンガン式アームキャノンでパラスを追撃する。

「目障りだっ!殺れ、ミュー!」

「クツ………!」

ミューは怒鳴っているパラスの命令に従い、ドルバ・ギムガルムの武器 ”超音波振動槍” ソニックスピア”を取りだし、追撃しているMECに投げ付けた。スピアがMECに突き刺さり、爆破した。ドルバ・ギムガルムが宮殿の中に入ると宮殿の前にレーザーフェンスが張られ、通れなくなった。

するとレーザーフェンスは艦隊を取り囲むように大きく張られ、ウラノスとアムザニ、ゼウス、連邦艦隊、陽弥達と共に閉じ込められた。

「レーザーフェンスだ!?!」

「彼ら!私達をこの中に閉じ込めて、スレッシャーモウとモウラーの餌食にするつもりだわ!」

「止める方法は!?!」

「止める方法はただ一つ…… フェンスを破壊して宮殿内に入ることです。そのためにはモウラーを倒し、スレッシャーモウを落ち着かせることです。」

「だけど、どうすれば!?!」

「クツ………」

アリスが悔しがっていると、別の通信が入る。

「苦戦しているようだなあ?」

「っ!?!この声は………!?!」

「艦長!! 上空に所在不明艦が飛来しました!」

レーザーフェンスの外からワームホールが出現し、中から全スペースシップを連結し、量子フィールドを纏った新しいアウローラだった。

「あれは……………何だ……………!?!」

「種族銀河同盟の者です!」

「銀河同盟の者……………!?!」

「彼の名は……………シン・ギデオン……………ウラノスクルーの陽弥とルナの実父です。」

一方、通信を聞いていた陽弥とルナは驚きを隠せなかった。

「父さん!」

「お父さん!?!」

「『よう、お前達……………無事で良かった。』」

「それより! 父さん! エミリアが!」

「分かっている。ちよつとアリスと話がある。」

シンはアリス艦長に通信回線を開く。

「『久しぶりだな、アリス』」

「御会いできて光栄です! シンさん!」

「『ハハハ……………今はこのネオ・アウローラの艦長だがな、』」

「シン艦長、援軍の要請を……………」

「『分かっている。姫殿下が拐われたんだろ? 我らに任せろ……………左舷旋回! 目標! モウラー5隻! 主砲用意!!』」

ネオ・アウローラの3連装主砲がモウラー2隻を捕捉し、エネルギーをチャージする。

「このネオ・アウローラの力を舐めては行かないぞ……………」

「艦長! 何時でも射てます!」

「よし! ネオ・アウローラの新兵器! ドラゴパーティクル砲! 発射ああ!!」

「発射します!」

アサリイ人が主砲のトリガーを引くと、砲口から翠の閃光が輝き、モウラー2隻を欠片も残さず、灰へと化した。それを宮殿内のモニ



ター画面から見ていたパラスは驚きを隠せなく、啞然していた。

『ば！馬鹿な!?!?あのモウラーを一撃で!.....一撃で2隻も.....!!??!!』

『パラス男爵!ネオ・アウローラの主砲が残存するモウラー3隻を捕捉されました!!』

『クツ!まさか厄介な敵を相手をするなんて!.....!.....ドルバ・ギムガラムを出せえ!!俺自ら出る!ミュー!行くぞ!』

しかし、ミューは返事をしなかった。

『何をしているんだ!?』

『.....もう、パラス兄様の命令は.....断じて聞かない!!!』

『貴様!裏切るつもりか!?』

「彼等も!我々と同じ、5000億年前.....古代種族.....Q人に作『られた生命です!私は彼らと、この人をあの方に差し出すつもりはありません!目を覚ましてください!!!』

『己れえ!!!この裏切り者が!!!』

パラスの腕がソニックブレードに変形し、ミュー襲い掛かった。しかし、ミューはパラスの攻撃をかわし、腕を掴み、背負い投げをした。そしてミューは台に寝かせられているエミリアを担ぎ上げ、出入り口の方へ向かった。

『己れええええ!!!ミュー!この裏切り者が!.....お前ら!反逆者ミューを殺せ!そしてあの娘を取り返せ!!!』

エミリアは目を覚ますと誰かに抱っこされているのに気付く。

「ここは.....?」

「気が付きましたか.....」

「ひっ!?」

「安心してください.....自分は貴方の味方です。」

「どうして……………私を……………」

「詳しいことは……………後でっ!!」

門の目の前にパルスライフルを構えたアジマス連邦兵士が叫んだ。  
「いたぞー!」

「しつかり捕まってください!」

するとミューのスピードが速くなり、超速でアジマス連邦兵士の首をへし折った。

「貴方……………今、何を……………!?」

ミューは門を開け、エミリアを担ぐと上空に赤と藍色の機体が浮遊していた。

「赤い機体……………あれですね?」

「え?……………陽弥様!」

上空を飛んでいた陽弥は宮殿の門の前にエミリアとミューがいることに気付く。

「ん!?……………エミリア!何であんな所に!」

するとミューがエミリアを庇う。

「危ない!」

門からドルバ・ギムガラムが現れ、ソニックスピアを構え、ミューに突き刺そうとしたが陽弥のアーキバスⅡの高火力ヒートアサルトブレードで防御する。

「何だ貴様!?邪魔するなああああ!!!」

「それはこっちの台詞だ!!!」

陽弥はアーキバスⅡの左腕のシールドからビームソードを放出し、ドルバ・ギムガラムでの腕に斬り付けたが、ドルバ・ギムガラムの肩から、サブアームが出てきて、アーキバスⅡの左腕を掴み、蹴り飛ばした。

「クッ!強い!」

「お兄ちゃん!」

「ルナ!」

上空からルナのセイレーンが呪文を使い、ドルバ・ギムガラムの真上から魔方陣が現れ、シャイニングランサーの光の槍が落ちてきた。

しかし、パラスは間一髪で回避し、サブアームを展開し、もう一つのソニックスピアを持ち構えた。

「二人で掛かってこい！」

「あのスピアが厄介だ……！」

陽弥のアーキバスⅡが先攻し、ルナのセイレーンが援護する。アーキバスⅡのプラズマビームライフルで迎撃するがドルバ・ギムガルムは2本のスピアをサブアームと一緒に振り回し、プラズマビームライフルの高熱線を弾いた直後、目の前にアーキバスⅡがおり、高火力ヒートアサルトブレードでサブアームを斬ると、ドルバ・ギムガルムの後方へと回り込んだルナのセイレーンが足の踵に装備されている溶接ダガーを展開し、ドルバ・ギムガルムの後頭部に刺そうとした。

「もらったー！」

「甘いー！」

ドルバ・ギムガルムの右腕が動き、セイレーンの脚を掴むと今度は左手で陽弥のアーキバスⅡの首を掴み上げ、2機を放り投げた。

「ぐあつー！」

「きやあ!!」

「さてと…… 邪魔がいなくなった……」

パラスは一安心すると門の宮殿の所にいるミューとエミリアを睨んだ。

「姫様！…… お下がりにくださいー！」

「でも……！」

ドルバ・ギムガルムがミューとエミリアの所に近付き、ドルバ・ギムガルムの左腕が変形し、アームキャノンへと変わり、ミューとエミリアに銃口を向けて叫んだ。

「これで最後だあああ!!ミュー~~~~~!!!」

アームキャノンの銃口から閃光が出た直後、エミリアの瞳の色が青から緑へと変わった直後、ナニガ起こったのかドルバ・ギムガルムが吹き飛ばされた。ミューは何が起こったのか、エミリアの方を見ると、

「エミリア様……!!?」

何とエミリアのドレスが白衣だった筈が見たことのない服装に変わっていた。翡翠の羽衣と真紅と純白と翠の色をした巫女のような服、頭には見たことのない冠をしており、そしてエミリアの素足から何故かどうなっているのか水面があり、その上に浮遊しており、さらにミューを驚かせたのが、エミリアの背中から虹色に輝く、アゲハチョウのような神秘に満ちた羽が生えていた。するとエミリアが水面を滑りながら舞い躍り、歌い始めた。

「光よ 来たれり

曙光の理

天の導き

古の力を解き放つ

時空の彼方へ

聖地あり

ラグナ ラグナロク

永遠のエルラグナ……

風よ 来たれり

神速の理

波の導き

聖地へ誘い

時空の中心

銀河の核

ラグナ ラグナロク  
生命のエルラグナ……………」

そしてエミリアの歌は上空に浮遊する艦隊にも聞こえていた。

「何だこの歌は!?!」

「この歌…………… 確かエミリア姫殿下の……………!」

「これが……………」 ”永遠語り” 『時の歌』……………!」

すると暴れまわっていたスレッツシャーモウが落ち着き、銀河連邦兵士を襲わなくなり、地中へと帰っていった。

その頃、倒れたパラスのドルバ・ギムガルムが起き上がり、エミリアを睨んだ。

「『小生意気な!』」

ドルバ・ギムガルムのソニックスピアがエミリアに突き刺そうとした瞬間、背後に倒れていた陽弥とルナの様子が一変した。

「『何だ!?!』」

陽弥とルナのアーキバスⅡとセイレーンが起き上がった瞬間、陽弥のアーキバスⅡの装甲が真っ赤に光始め、その後ろに太陽の形をした光の紋章が浮かび、同じくセイレーンの装甲が青と紫色に変色し、その後ろに三日月と思われる紋章が浮かび上がった。

「まだ動けつ…………… 何!?!」

ドルバ・ギムガルムの頭部がセレーネモードに切り替わったセイレーンの膝蹴りで吹き飛び、ヘリオスモードになったアーキバスⅡの手がドルバ・ギムガルムのコックピットを掴むと同時にセイレーンも掴む。するとアーキバスⅡの手が太陽のように真っ赤に染まり、セイレーンの手も月のような水が溢れ出た。

「『何をするつもりだ!?!』」

パラスが質問した直後、陽弥とルナは渾身を込めて、叫んだ。

「プロミネンスフィンガー!!」

「ルナティックフィンガー!!」



れる。

「シン艦長!!落ち着いてください!」

「だが!まだあそこには陽弥とルナがいるんだ!」

「しかし、特異点の反応が急激に下がっております!」

「だけど!」

「もう……………ダメ!」

そして、セイレーンの右足がショートしてしま<sup>い!</sup>、アーキバスIIごと渦の中に吸い込まれた。

「うわああああああああ~~~~~!!!!!!」

そして、渦は陽弥とルナを吸い込んだ直後に消<sup>え!</sup>えた。

それを見ていたシンは助けられなかったことに悔<sup>い!</sup>やんでいた。

「クソツ!」

その頃、渦の中に吸い込まれた陽弥とルナ達は何処か知らない瓦礫がたくさんある場所に倒れていた。陽弥達は機体から放り投げ出されていた。

「……………ん?」

陽弥は気が付き、目を覚まして起き上がった。

「ここは……………何処だ……………?!」

「ルナ!……………ルナ!……………しっかりしろ!」

「うくん?お兄ちゃん?」

「良かった!無事で……………」

「あ！エミリアさんは!?!」

「そうだ！何処に!?!」

二人はエミリアが探すと別の声の主が二人に言う。

『心配ありません。』

「誰!?!」

「アジマス連邦兵!!エミリアさんを離せ!」

ルナはテンペストをミューに向ける。

『落ち着いてください。私の名はコードネーム”ミュー”……………』

訳あつて、アジマス連邦の反逆者になりました。貴方達と姫様には危害を加えません。』

「本当か……………!?!」

『はい……………陽弥さんとルナさんでしたね?』

「え?はい……………」

『どうか、鞍替えしてください。』

「鞍替え!?!……………どうやるの?」

『選ぶのです。どちらに付かせるか個人で決めてください。もう有機生命体達の苦しむ姿に我慢なりません。』

「それじゃ、つまり……………アジマス連邦に付かなくても良いってことか!?!」

『アジマス連邦のあの行動をほっておけば、プロフェッサーEの思いのままになる。』

「プロフェッサーE……………?」

「誰だソイツは?」

『彼は……………』

ミューがプロフェッサーEの事を話した。

プロフェッサーE……………謎に満ちた人物で50年前に機能が停止していた我々アジマス人と星間コロニー国家『アヴァロン』を再起動してくれた。

するとプロフェッサーEは国家を再建するためにこう言ったんだ。

『人間達を奴隷にすれば……………キミたちハ贅沢な暮らしが出来て、再建に必要な人材にもなるだろう。』って……………もちろん、賛成派



と否定派に別れた。

結果、賛成派になってしまい、奴隷狩りが始まったと……………

「何だよそれ!？」

「でも…………… 何でエミリアさんを狙うのですか?」

『分かりません…………… 只、言えるのが…………… それを知っている者は…………… アジマス陛下とイプシロン皇太子、五大將軍だと思いません。』

「ん〜」

その時、後ろの瓦礫が突然崩れた。陽弥が後ろを見るとボロボロの服を着た少女が驚き、その場から逃げた。

「あっ!、待てっ! エミリアを頼む!」

陽弥はエミリアをルナに任して、逃げた少女を追った。

「ちよつと!？」

『やれやれ』

ルナはエミリアをミューにおんぶさせ、陽弥の跡を追った。

陽弥は逃げた少女を追って、古びた建物が並んだ市街地の広間に出た。

「何処だアイツは?…………… ここが何なのか尋ねないと……………」

「ちよつとお兄ちゃん!」

「ルナ! ミューも!」

『勝手に単独行動は危険です。』

「けど、女の子が……………」

その時、裏通りの方から物音がした。

「こつちだ!」

「もう!」

陽弥達は物音がした裏通りへと向かった。狭い道を通り、その向こうに光が見えた。裏通りを抜けるとそこは何か商店街が並んでいた形跡がある廃墟に出た。

「ここは……………商店街？」

「けど……………何か……………寂しい……………所……………」

「ん？」

ミューがあるボロボロの家に入った。中は荒れ果てており、そこでミューが見たのは、瓦礫に人の骨がくっついていて……………確認すると赤髪をした女性が茶髪の男性と抱き合って死んだらしいと……………そしてミューはある棚の上にあるものを見る。それは冊の量が多く、本のタイトルに”アルバム”と

書かれており、中を開くと赤髪の少女と同じ赤髪の女性と茶髪の男性が写っていた。きつとあの瓦礫とくっついていて親子に違いないと、ミューはさらにページを捲ると今度は赤髪の少女と全く違う赤髪のツインテールをした少女と藍髪の少年が写っていた。

ミューはその写真をカバーから抜き取り、裏を見ると年数が書かれていた。

西暦3152年 6月14日 日曜日 午後1時27分

「……………ここも昔は……………平和な街だったのか……………ん？」

ミューは写真の裏に誰かの名前が書かれている事に気付き、スキヤンする。

「『ヒルデガルド・シュリーフオークト……………シン・ギデオ……………シン・ギデオ……………!?!』」

ミューは思った。陽弥とルナの父親と母親の子供の頃の写真が何故ここにあるのか……………これは……………調べなければいけない。シン・ギデオンの過去を……………

ミューはその写真をポーチの中にしまうと何か二階から物音が聞こえた。ミューは通信機で陽弥とルナを呼んだ。

「ミュー、ここに何かあるのか？」

「そうではありませんが……二階から物音がしました。きっと、さつき逃げた少女だと思います。」

「良し！」

陽弥達は二階に上がり、一つ一つの部屋を開けたが、誰もいなかった。

そして最後の部屋はルナが開けた。

「ここにもいない……子供の部屋……みたいだね……ん？」

「これって……地図？」

「welcome to ……ユナイテッド……エン

デラント……あれ？……エンデラント……何処

かで聞いたことがあるような……え!？」

地図の中から一枚の写真が出てきて、ルナはそれを拾い上げ見ると、

「っ!？」

それは、学校の発表会で賞を見せている まだ六歳の時のシン・ギデオンが写っていた。

「お父さん!？」

さらに、写真の裏からまた、別の写真が出てきた。ルナはそれも拾い上げて見ると、そこには子供の頃のシン・ギデオンとそれと一緒に写っている陽弥とルナの亡き祖父 サム・ギデオンとロバートと金髪の女性と茶髪で憎たらしい表情をした男性が白色の建物と一緒に写っていた。

「もし、これがお父さんなら……お父さんの肩に触れているこの男性……もしかしたら……おじいちゃん……？」

その時、後ろの棚が開き、中からボロボロの服を着た少女が飛び出し、逃げた。

「あーお兄ちゃんー！」

ルナが叫ぶと陽弥が横の部屋から飛び出して来て、少女を取り押さえる。

「離して！」

「落ち着けて！」

「このっ！」

少女の蹴りが陽弥の顔面に直撃し、陽弥は階段から転げ落ち、その様子を見に来たミューが来ると陽弥が転げ落ちて来て、巻き沿いになる。そしてようやく、エミリアが目を覚ますと何か胸の所が重くて動けないと思い見ると、エミリアは顔を真っ赤に染まった。何故ならエミリアの胸に陽弥の顔が突っ込んでおり、陽弥の両手がエミリアの胸に触れていたから、陽弥は意識を取り戻すと、目の前が真っ暗で何も見えなかったが両手に何か柔らかい物があると離れてみると、

「あ……………」

「あ……………」

「……………ごっ！ごめん！これには深い訳がっ!!」

「……………アアアアアアアアアアアアアアアア……………」

「……………」

!!! エミリアはとてつもない悲鳴を上げ、渾身を込めて、陽弥を蹴り上げた。陽弥は天井まで吹っ飛ばされ、その場で気絶した。そしてエミリアは気が付くと、陽弥を吹っ飛ばした事に気付き、慌てて、助ける。

一方、陽弥達から逃げた少女は何処か知らない隠れ家に入り、中にいるたくさんの人達に知らせる！

「大変！大変！また盗賊達が来たよ！」

人々が慌てていると、

「皆、落ち着いて！まずは最優先で女、子供、お年寄りを避難所に！男達は警戒体制を！」

赤髪でロングの女性は、仲間達に指示し、男達は倉庫から武器を持ち、持ち場へと向かっていった。赤髪の女性は手にアサルトライフルを持ち、青い空を見上げる。

「ママ……………見守っていて……………！」

すると赤髪の女性は首からバンドントを取りだし、中から赤髪のツインテールをしたヒルダの写真があった。

「お姉さま……………いつか、絶対に会う！」

赤髪の女性は胸を張って持ち場に付いた。

## 第12話：ヒルデガルド・シユリーフオークト

エミリアに吹き飛ばされた陽弥は目を覚まし、少女の跡を追った。

「一体何処に……………」

するとミューが教える。

『……………こつちです。』

「え？何で分かるんだ!？」

『足跡がくつきり残っています。私は機械生命体であり、物体をスキャンすることも可能ですから、』

「そりゃあ、助かる。案内してくれ」

『かしこまりました。』

ミューはその足跡をスキャンしながら少女を追い、陽弥達はミューの跡を追う。

夕暮れになり、街を出ると、目の前に城塞らしき建物が見えた。

「あれか?」

『ええ、足跡の結果……………間違いなくあの建物内に逃げ込んだ模様です。それと……………微かですが、建物内に多数の生体反応を確認しました。』

「本当!？」

陽弥が驚いた直後、ミューが陽弥を押し倒す。

「うわっ!何するんだっ!？」

その時、陽弥の足元にスナイパーライフルの銃弾が弾け、ミューの体全体に無数の赤いレーザーポイントが付いた。

「っ!？」

「盗賊共!おとなしく立ち去れ!」

城塞の見張り台にたくさんの人達が猟銃やスナイパーライフルを構えていた。

「え!? 違う! 違う! 俺ら盗賊じゃない!」

「嘘付くな!! マナで物資を強奪するくせに!!」

「本当だつて! と言うか」 マナ” っ て何だよ!? 意味分からんよ!!」

「とぼけても無駄だ! 覚悟しろよ! 盗賊が!」

難民が銃の引き金を引こうとした瞬間、

「待つんだ!」

女性の声がして、難民を止める。

「ヒルダさん!」

「ヒルダ……………!!??」

すると砦から赤い髪の毛をしており、ロングヘアをして、防弾スーツを着用した女性が現れた。陽弥とルナは驚いた。その女性の顔が実の母と似ていたから、

そしてその女性は陽弥とルナのタクティカルスーツを観察した。

「……………あなた達、見たところ盗賊ではないみたいだね……………」

何処から来たの?」

「……………」

「?……………どうしたの?」

「え!? いえ、別に何も! 俺は陽弥……………こつちが妹のルナ

で……………エミリアと……………誰だっけ?」

『ミューです。』

「名前は聞いていない……………何処から来たの?」

「えつと……………実は……………」

陽弥はその女性にこれまでの事を教えた。エミリアの事も、ミューの事も陽弥達の任務も……………

そしてその女性が言う。

「種族銀河同盟!……………聞いた事がない組織だな……………それと

星から来たって……………」

「けど、俺たちは正真正銘……………別の宇宙から来たんだ。信じ  
て……………くれる?」

「…………… まあ良い…………… アタシ達の前線基地に入れてやる。」

「ありがとうございます！まつ！」

「ただし！…………… 不審な行為はするなよ…………… 良い？」

「ああ…………… はい……………」

陽弥達はその女性から許しを得て、前線基地に入れてくれた。陽弥とルナの機体はその女性と仲間達が回収してくれるらしいと…………… 中は大量の武器や機銃、そして大勢の人達が闇屋見たいに店が並んでいて、まるで街道になっていた。

「凄いなあ…………… ん？」

街道を歩いていると陽弥達が追っていた少女がいた。

「あ…………… お前！」

「!？」

向こうは陽弥達がいることに驚き、側にいた。男性の後ろに隠れる。すると男性が陽弥に話しかける。

「あのう、この子が何を？」

陽弥はその子の事を話した。名前はミホと言い、三年前に母親が病死してしまい、父親と二人暮らしをしているらしい…………… 父親が言うには、あの時…………… 薬が盗賊に盗まれなかったら妻は死なずにすんだのだが、見ての通り…………… 薬はなく、病に苦しむ人々があり、死に絶えていた。20年前までは平和だったのに……………

「平和って…………… あんたまさか…………… !？」

「ああ、そのまさかだ…………… 20年前まではマナの光で溢れていた世界だったのに…………… ノーマ達の反乱で…………… 目が覚めたんだ」

「「ノーマ達の反乱？」」

「あんたら知らないのかい？…………… まあ、無理もない…………… あんた達を見ると多分…………… 18歳に近いだろうな…………… あ！良ければ、私の家に来なさい……………」

「ありがとうございます。」



陽弥とルナ、エミリア、ミューはおじさんの家に招かれた。エミリアはミホと遊んでおり、ミホのお父さんは皆に紅茶を入れて、運んできてくれた。

「さあ、御上がり……………」

「ありがとうございます。」

「あなたは良いのかい？」

『「自分は機械生命体ですから、紅茶は無理です。」』

「機械生命体？……………ハハハ、あんた面白いことを言うね

？……………で、何を話そうとしたんだっけ？……………あ！そ

う、そう、ノーマの反乱の事を話そうとしたんだ……………では、話そ

う。」

男性はノーマの反乱の事を話した。

今から数年……………この世界は、マナと言う情報技術と呼ばれる力で人類は争いもなく、平和に暮らしていた。しかし、そんなマナを使えない者もいた……………「ノーマ」、マナが使えない、人間ならざる者……………マナが使える人間にとって、ノーマは反社会的不審物とされ、人間達から嫌われ、差別される運命になっていた。

それを聞いたルナが言う。

「そんな……………!?……………そんな力を持っている人間が持っていない人間を差別するなんて……………!?」

「まあまあ、落ち着いて聞きなさい。」

それから、その平和が長く続くと思われたが、突如……………この世界から追放されたマナが適合しない人間が現れた。

反乱分子「古の民」と呼ばれるテロリスト集団だ。

「っ!?」

陽弥とルナは思った。ソフィアの父親、タスク達の存在に……………

そして古の民は旧ミスルギ皇国から絶対兵器「ラグナメール」の一つ……………ヴィルキスを強奪した。古の民は……………そのヴィルキ

スを持つて、異世界から進攻してくるドラゴンと呼ばれる化物を排除するノーマ達と共に反乱を起こし、

「リベルタス」と呼ばれる。内戦が始まった。しかし、古の民達は敗北した。

「敗北した!?!…………… 何で!?!」

「何でと言われても…………… この世界を作った創造主だよ」

「創造主…………… !?!」

「創造主の名は…………… ”エンブリフ”、かつては人間だったが、この世界を造り上げた神とも呼ばれる者だ。」

「神とも…………… 呼ばれる!?!」

「それからじゃ……………」

残ったノーマ達は毎日のようにドラゴンを排除していた。するとそのノーマ達の中にはかつて皇家だった者が二人いたと……………

「二人…………… ?」

「その二人の名は…………… かつて、元ガリア帝国第一皇女 アレクトラ・マリアフォン・レーベンヘルツと元ミスルギ皇国第一皇女 アンジュリーゼ・斑鳩・ミスルギだった。」

「アレクトラとアンジュリーゼ…………… !?!」

「おや? あんたらその名前は知っていたのかい?」

「ええ、アンジュリーゼ…………… いや、アンジュさんは俺たちの住む人類銀河共和国の女王であり、アレクトラは…………… ウイルさんとサリアさんの娘なのです!」

「ほお、アンタ等はやっぱり面白いことを言うなあ……………」

「信じられないかも知れませんが本当の事です!」

「これこれ、まだ私の話は終わってないぞ」

「あ! すいません! つい、興奮してしまい……………」

「良いんだよ、誰もそう言う事もあるんだよ。」

男性は話の続きをした。アルゼナルと呼ばれるノーマの収容施設がかつてアンジュリーゼをノーマだと暴露し、父であるジュライ・飛鳥・ミスルギを首吊りの刑にした。馬鹿皇子であり、偽帝”ジュリオ・飛鳥・ミスルギ”…………… かつてアンジュリーゼの兄だった者だ。

「アンジュさんの…… お兄さん」

そしてそのジュリオはアルゼナルを襲撃してきた。狙いは当然、アンジュリーゼと絶対兵器「ラグナメール」の強奪……。前にアンジュリーゼを捕獲して、首吊りの刑にしようとしたが逃げられ……。そのときにアンジュリーゼに付けられた傷の恨みを張らすつもりだったが、そこにこの世界を造り上げた神とも呼ばれる存在 エンブリヲが現れ、ラグナメールの収斂時空砲でジュリオを葬った。そしてその三日後……。突然、人間達のマナが使えなくなり、世界中は大パニックになった。そしてそこにアンジュリーゼを率いるノーマ達がエンブリヲを倒すために様々な種族とドラゴンとの同盟を結び、ミスルギ皇国に進攻し、ラストリベルタスを開いた。そしてエンブリヲを倒し、彼らは何処か知らない世界に行き、平和に暮らしている。そして……

「私たちは、この絶望の世界で……。明日への道を歩んでいるんだ。」

「そんな事が……」

「皮肉だろ？…… マナを持っていた者は皆差別される運命になっただよ……。けど、それも事実だ。私たちはマナの真実を知らなかっただけだ。私たちが本当の化物だったんだなど、」

すると男性は泣き崩れた。

「ごめんな……。ごめんな……」

陽弥達は家から出ると、皆で話し合った。

「あの人の話……。どう思う？」

「信じられないかも知れんが……。あんなに泣き崩れ方は以上だった。」

『……………』

するとミューが考え込む。

「どうしたんだ？」

『陽弥さん、ルナさん…………… 渡したい物があります。』

「渡したい物？」

ミューはポーチからある写真を渡すと、それを見た陽弥とルナとエミリアは驚く。

「これはっ!?!…………… 父さんと母さん!?!」

『恐らく、貴方の両親は元々この世界に住んでいたのかもしれない。』

「どういふこと!?!」

『私の計算によれば、君達の父親 シン・ギデオンはヴェクタ出身であります。今、我々がいる世界は…………… 貴方達の母親…………… ヒルダさんの故郷「エンデラント連合」だと思います。』

「……………」

陽弥とルナは街道を見回しながら言う。

「ここが…………… 母さんの……………」

「お母さんの…………… 故郷……………」

「エンデラント……………!!」

その頃、何処か知らない廃墟で……………

「お頭ツ！」

「何だ？」

「あの避難所を偵察していたら、二機のパラメイルが運ばれていました。」

「二機のパラメイルだと?…………… フツ！面白い！俺に楯突こうとして

いるな…………… 野郎共!」

「《おおおおくく!!》」

「今から避難所を潰し!そのパラメイルと水と食い物と女、子供を  
かつさらいに行くぞ!」

「《うおおおおおおおおくくくくくく!!!!》」

武器を持った集団が叫び、その後ろにとてつもなく大きな影が写っ  
ていた。

一方、陽弥達はここが母の生まれ故郷…………… エンデラントにいる  
事に驚いていた。

「ここがエンデラント……………!?…………… 冗談じゃないよな?」

「冗談ではありません。100%です。」

「…………… 嘘だろ…………… 俺らが飛んできた世界って…………… 母さ

んの故郷かよ…………… けど、何で父さんと母さんこの事を?」

「分からない…………… でも、お父さんとお母さんは私達には言えない何  
か秘密を持っているのよ。きつと……………」

その時、街道のあちこちにあるスピーカーから、警報がなる。

「何だ?」

陽弥は近くにいた。住民に話す。

「何が起こっているのですか!?!」

「盗賊共が来たんだ!アイツ等きつとアンタ達のパラメイルも狙って  
いるに違いないんだ!」

「え?!」

陽弥達は急いで砦に向かっていった。ミューは陽弥の命令でエミ  
リアを守ってほしいと……………

砦に向かうと既に戦鬪が始まっており、銃声が鳴り響く。

「状況はどうなっている?！」

「奴等は、きつと陽弥さんとルナさんのパラメールも狙っています。あれが奪われるとこの避難所は陥落します。」

「クソッ! 何としてでも彼処に行かなければならないんだ!.....」  
狙撃兵は城壁から支援攻撃! 衛生兵は負傷した者の応急処置! 近衛兵は急いでレジスタンスに援軍を要請して!」

「了解!!」

兵隊達は急いで、持ち場に行くと、そこに陽弥達もやってくる。

「ヒルダさん!」

「貴方達!?! 何でここに!?! 急いでシエルターに避難して!」

「いえ! 俺たちも戦います!」

「貴方達.....」

陽弥は急いでアーキバスIIに乗り込み、起動させ、プラズマビームライフルを持って、城壁の外へと向かった。

城壁の外では、既に内戦状態になっており、盗賊達は戦車で兵隊達を一掃していた。

「行け! 行け!」

「お前ら皆殺しだ!」

「金や食い物、女と子供を寄越せ!!」

戦車の砲口から火が吹き、兵隊達を倒していく。その時、走行中の戦車の真上からオレンジのビームが戦車の装甲を貫き、戦車は爆発する。

「何だ?!」

盗賊達は上を見上げるとプラズマビームライフルを構えたアーキバスIIが浮遊していた。

「パラメイルだ!!」

「殺つちまえ!」

戦車部隊が一齐に砲撃してきたが、陽弥はスラリと回避し、迎撃する。

「何だあの武器は!?!」

「あんなの何処からあんだよ!?!」

それを上空から聞いていた陽弥が言う。

「掛かってこい!俺が相手してやる!」

アーキバスⅡのプラズマビームライフルの銃口から光熱のビームが撃ち込まれ、戦車は火を吹き上げる。それを見ていた盗賊共は悲鳴を上げる。

「あんなの無理だ!!」

「勝てっこない!!」

盗賊達が逃げ回っていると目の前から別の砲台が現れ、アーキバスⅡに射つ。陽弥はそれを間一髪回避し、確認する。

「何だあれは!?!」

それは数メートルあり、四足でゆっくり歩行している亀型で、その甲羅の上に巨体な砲台が一つ、その砲台を守るかのように対空砲が六つ、そして、全面に対空機関砲が並んでいた。すると亀型の要塞の艦橋から声を上げて陽弥に言う。

『オーイ!お前!俺様は盗賊『ジャツカル・スケルトン』のリーダー  
スラッグだ!おとなしく、その機体と食い物と女を寄越せ!!さもな  
いと!』

亀型の要塞の甲羅に装備されている大型パルスランチャー  
から巨体な電磁ボールが右にある廃墟へ発射された。

その巨体な電磁ボールが廃墟に直撃すると、その場所もろとも爆破  
した。

「こうなりたくなければ大人しく渡すんだな!ハハハハハハ!!!」

スラッグが笑っている直後、ルナのセイレーンが飛来し、ロッドを  
突き上げ、呪文を唱えた。

「サンシャイン!!」

要塞上空から八つの光が出現し、その光からレーザーを放出し、無数に並ぶ対空機関砲を破壊した。

「何だと!？」

するとルナが艦橋の通信機をハッキングし、通信回線を開く。

「貴方達はこうしてこんな酷いことをするの!?! 同じ人間なのに!?!」

「人間?..... はっ!、バカかお前は!?! 人間と言うのはなあ、力を持つものこそが真の人間だ! こいつら見たいな弱っちいゴミは排除しなきゃならねえんだよ!」

「貴様っ!!」

陽弥が叫んだその時、陽弥とルナの後ろから緑の閃光で輝くビームがパルスランチャーを守る対空砲が破壊される。

「今度は何だ!?!」

陽弥とルナは素早く後ろを振り向くと、二人は驚いた。

数メートル先に、紅いラグナメイル..... テオドーラがビーム

ライフルを構えていた。その機体を見た陽弥とルナは唾を飲み込む。

「..... 母さん..... !?!」

「お母さん..... !?!」

「アンタ達! 無事か!?!」

ヒルダはアーキバスIIとセイレーンに近付き、二人の安否を確認する。

「大丈夫だけど..... 何でここに?」

「..... シンから聞いたんだよ!! アンタ等が黒い渦の中に吸い込まれたって! そんなでシンが心当たりがあると行ってたけど、案の定だった訳だよ!」

「父さんが..... 俺らがここにいることに気づいた!?!」

「それより..... エミール!!」

「っ!?!..... ま!..... まさか!?! お前はヒルダか!?! 何でお前が生きてんだよ!?!」

「黙れっ!!!」

「!?!」

「この世界の文明が滅んでしまってもアンタのその性格は変わらない



な！あの時の事は絶対に忘れていないぞ！まだアタシが5だった頃、アタシがノーマって言うことに気付き、検察官に告げ口しやがって！！」

「うるせえ！ノーマの分際が！テメエはいつもいつもシンにベタ惚れしやがって！！俺が救ってやったじゃないか!?」

「救ってやった!?ふざけんよ」

その時、別の方向から、また違うビームが飛んできた。陽弥達はその方向を見て、また唾を飲み込んだ。

「何だあれは!?」

エミールがその方向を見ると、それはペガシオーネスに乗っているシンのペルシウスだった。すると通信回線が開くと同時にシンが怒鳴る。

「貴様だったのか!!!エミール!!!」

「ま！まさか……!!シン!?!」

「当たり前だ！そうか、ヒルダがノーマだって検察官に言ったのは……殺す！それと陽弥とルナにも手を出したな……!!!」  
「生かしてはおけん!!こんな怒りは今までで始めてだ!!」

シンはペガシオーネスで駆け巡り、ヒルダもテオドーラを飛翔形態に変え、シンと一緒に突撃した。エミールは舌打ちし、部下に命令し、迎撃したが、シンはオーグメントモードを発動し、対空砲の弾道を見て、かわしまくる。一方、ヒルダもテオドーラをミカエルモードの光の障壁を展開し、旋回しながら、ペルシウスと共に突撃していく。それを見ていたエミールは驚く。

「当たらない……!!この距離で!?!」

するとペルシウスは腰部に装備されているディメンジョン・ヴァルキュリアを二丁拳銃に切り替え、残りの対空砲を破壊した。そしてヒルダのテオドーラが駆逐形態に変形し、ウイングに収納されているラツイーエルを抜刀すると、刃からエネルギーブレードを放出し、巨体なパルスランチャーを真っ二つにした。そしてヒルダは要塞の艦橋にいるエミールに向けて、エネルギーブレードを投げ付けた。そしてエネルギーブレードは艦橋に突き刺さり、ヒルダはエネルギーブレード

ドを回収したと同時に、要塞は火を吹きながら倒れ、大爆発した。陽弥とルナは父親と母親の戦闘を見て、驚きながら唾然していた。

陽弥とルナは地上に降りて、シンとヒルダの所に向かった。

「父さん！母さん！」

「お父さん！お母さん！」

すると、シンとヒルダが陽弥とルナに抱き付いてきた。

「お前達、無事か?!」

「二人共、怪我してねえよな?!」

「大丈夫」

「良かった！」

「もう、会えないかと思ったよ！」

シンとヒルダはさらに抱き付く。すると、爆発した要塞の残骸からエミールが出てきた。

「まだー、まだー!!!」

陽弥達は驚き、エミールは怒声を上げた。

「俺達は！大盗賊団ジャツカル・スケルトン！……プロフェツサーEの為なら！……この命！贄に出してやる!!お前ら！」

陽弥達は、エミールがプロフェツサーEの名を言った事に驚くと、残骸から生き残った盗賊達が五く六人姿を現すと、エミール達はジャケツトの中から、何か赤黒い液体が入った瓶を出して、コルクを開けて叫んだ。

「リーパー・エクス（死神の細胞）!!!」

エミールはその赤黒い液体を飲むと同時に盗賊達もリーパー・エキスを取りだし、飲み干す。

「プハアツ！効くぜ!!!……う!!……あああああああああああ~~~~!!!」

エミールと盗賊達が突然苦しみますと、エミールの体が変わっていく。全身の筋肉が盛り上がり、青筋が見えていき、体の色が白くなり、手足の爪と耳が伸びて、鋭く尖り、背中から肉を破って、悪魔のような翼が肉を破って生え始め、髪の毛が全部落ち、目の回りと瞳が赤と



《ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!》

シンが赤黒く発射するデュアルビームセイバーを抜刀し、突撃した。エミールは突撃するシンに巨体な拳を振るう。しかし、シンは巨体な腕に跳び移りビームセイバーで腕を切り落とす。エミールは悲鳴を上げ、もう片方の腕でシンを吹き飛ばした。エミールは変異した盗賊達に命令すると、盗賊達の口から赤色の血肉爆弾を発射し、肉爆弾が血をぶちまけながら爆発する。しかし、シンはマテリアライズを発動し、ビームシールドで肉爆弾の衝撃から守っていた。シンは笑うと今度はレーザーキャノンマテリアライズし、盗賊2体にレーザーの閃光を浴びさせた。キャノンから発射されたレーザーは変異した盗賊の肉を焼き斬り、そして燃やす。斬った体から内蔵が溢れ出てきて、変異した盗賊2体は倒れた。それを見た変異したエミールは翼を広げ、シンに向かってきた。

しかし、シンは余裕な表情を見せると今度は巨体な機械で出来た剛腕『ナツクルバンカー』をマテリアライズし、両腕に装着させ、さらにオムニツールデバイスを起動しナツクルバンカーの表面にオレングジに輝く、オムニナツクルガードを纏った。

「さあー掛かってこいー!」

シンがナツクルバンカーを構えると変異した盗賊の1体がシンに襲い掛かると、シンはナツクルバンカーで変異した盗賊の頭に打ち込んだ。変異した盗賊の頭から大量の肉片と目玉、脳が飛び散り、変異した盗賊は倒れた。

変異した盗賊が倒れた事に変異したエミールは怒りだした。

「己え!!よくも仲間を!!」

すると怒りだしたエミールの腕が変異して、肉が裂けていき、中から骨が現れ、その骨が段々と長刀に変わった。

それに驚いたエミールはシンを睨みながら、笑った。

そしてシンはエミールの骨刀を見て、驚く。

「そんなのありかよ!?!」

シンが驚いていた直後、エミールが先攻してきた。シンはナツクルバンカーで防御するが、エミールの威力が強いせいか、押されていた。

しかし、シンはARSスーツの背部にあるARSドライブが全速で回転し始めると、さつきまで押されていたシンが急激にエミールを押し始めた。

「どっせええええええい!!!」

シンが叫び、左腕のナツク!ルバンカーで防御たまま、右腕のナツク!ルバンカーを下に下ろすと、そのままエミールの顎に向けて、アツ!パーでエミールを殴り飛ばす。殴り飛ばされたエミールはそのまま、倒れる。

「これで……!!終わりだあああ!!……っが!?!?!」

シンがエミールに止めを刺そうとしたその時、シンも倒れる。よく見るとシンの腹部から血が出ていた。

「縫った傷……こんな時に……!!」

そして倒れたエミールが起き上がると、シンが負傷している事に気が付き、にやけた。

「それえ!!チャンスだ!」

変異したエミールと盗賊を含めて三体がシンに襲い掛かった。シンは絶望に落ちたその時、左の方から何発の銃弾がエミールと盗賊に向けて、乱射してきた。

「!?!!」

エミールと盗賊が見ると、その向こうに見たことのない機体が昆虫のように走行してきており、後部に装備されているリニアアサルトライフルで迎撃していた。

(分かりやすく言えば、コードギアス亡国のアキトに出てくるKMF「ナイトメアフレーム」アレクサンダー、その物です。)

それは砦の向こうからも見えていた。リーダーらしき赤髪の女性は双眼鏡で確認する。

「レジスタンスだ……!!」

レジスタンスの機体 対リーパー殲滅変型兵器『インゼクテイアメイル』のリニアアサルトライフルの銃弾がエミールと盗賊に乱射してくる。盗賊の2体はリニアアサルトライフルの猛攻により、頭部を破壊されたがエミールは雄叫びを上げた。



避難所の門が開き、中にはいると…………

「「え?!」」

皆から盛大な拍手と笑顔が贈られていた。

「……………これは……………一体?」

「感謝です。盗賊から守っていただいた事に……………」

すると赤髪の女性はヒルダを見て、驚く。

「どうしたのですか?」

「……………」

陽弥は女性はに話す。

「あの?母さんに何か?」

「お姉さま……………!」

「……………えっ!?!??」

突然、その女性がヒルダの事をお姉さまと呼んだことに、陽弥とルナは驚く。

「お母さん……………今、あの人……………」

「黙って……………!」

「え?」

ルナを黙らせると、ヒルダがその女性に話し掛ける。

「何でアンタがここにいるんだよ?」

「……………皆を……………早く、ヴェクタ星に……………」

「それだけか?」

「え?」

「それだけかって言ってるんだ……………」

「……………はい」

「ん?……………アンタらしくないなあ、どうしたんだ……………?」

「……………ママとパパは……………死んでしまいました。」

「ふくん……………それで?」

「それでって!?!……………だってママとパパだよ!?!」

「それがどうした？、あのクソ婆とクソ爺は……………私を……………  
捨てた奴らだよ……………」

「捨てた!?!」

陽弥とルナはヒルダが放った言葉に驚いた。

そして今、明かされる……………シンとヒルダの過去が……………



### 第13話：両親の過去

避難所の指令室で衛兵達が話し合っていた。

「ヒルダさん…………… あの人と何か会ったのですか？」

「うん…………… あの人…………… ヒルダさんの姉貴なんだって、」

「嘘っ!？」

「しかも、ヒルダさんと同じ名前らしい、」

「同じ名前って!?!…………… どういう事!？」

「何でも…………… シュリーフォークト家にノーマである娘がいたんだって…………… けど、地元の友達にノーマだって言うことがバレて、アルゼナルに…………… そして母親は絶望の悲しみに溺れ…………… 生まれてきた第二児に…………… リーダーと同じ名前付けたらしいんだ。」

「…………… マジかよ…………… !？」

「マジなんだって……………」

一方、陽弥達はヒルデガルド・シュリーフォークトの家に、シンは医療チームに引き取られ、手術しているらしい。そして、ヒルダはヒルデガルドを睨んでいた。

「……………」

「あのう…………… えっと…………… お義兄さん…………… 大丈夫で

すかねえ…………… ?」

「……………」

「すみません…………… こんな再会になって……………」

「いつから、この集団を作ったんだ？」

「え?!」

「いつから…………… ?」

「…………… 20年前です…………… 当時の私はノーマは非社会的不要人材と思っていました。ですが、20年前のあの日、私の村がマナが使えなくなりました…………… ママもパパがマナが使えないって、大喧嘩して、対には私までも八つ当たりをし始め、そして…………… 山の方から…………… おぞましき嵐がやって来て…………… パパもママも…………… 皆……………」

「時空融合」

「え？」

「時空融合…………… 人と物が混じり合いながら死ぬ…………… アイツのシステムだよ」

「アイツ……………？」

「アンタ達の使っていたマナ…………… それを作った張本人…………… エンブリヲだよ」

「エンブリヲ!？」

陽弥とルナが驚く。

「アンタ達は…………… アイツの事は少し知らないだろ？」

二人は頷く。

「教えてやるよ…………… エンブリヲと…………… アタシとシンの過去を…………… 聞きたかったんだろ？」

ヒルダはミューに問う。

『もちろんです。私は貴方方の過去を詳しく聞きたかったのです。』  
「…………… じゃあ、話そう。あれは…………… 32年前の事だった……………」

32年前……………

シュリーフオークトの屋敷のドアにノックする音がした。

「はいー！」

シュリーフオークト家の主がドアを開けると、白衣を着た男性と足の元に怖がっているかのように男性の後ろに隠れる男児がいた。

「どうも、昨日この住居に引っ越してきた、サム・ギデオンです。こちらは息子のシンです。シン……………ご挨拶は？」

まだ五歳だったシンは恐る恐る前に出て、シュリーフオークト家の主に挨拶した。

「こ……………こんにちは……………」

「こんにちは……………君、いくつ？友達は？」

シンは恐れながら左右に首を振りながら、五本の指で答えた。

「お！私の娘と同じ歳だ……………」

するとシュリーフオークトの主の後ろから、赤い髪とツインテールをした少女が出てきた。

「パパ！どうしたの？……………ん？」

赤髪の少女はシンを見た。するとシンはサムの後ろに隠れた。

「……………良し！」

その時、少女はシンの手を無理矢理、握り、家の中に入った。

「あ！コラっ！ヒルダ！」

ヒルダはシンを連れて、部屋に入った。

「何して遊ぶ？」

「……………」

「あ！そうだ！」

ヒルダは何かを思い付き、棚にある物を出した。それは長方形型の積み木に見えるが、それが何個もあり、ヒルダがどんどん積み重ねていった。

「それは？」

「ニュージェンガって言うゲームだよ♪」

「へく、どんなの？」

「こーやって、」

ヒルダは積み重ねた積み木の1つを外した。

「1つずつ外して行って、これが崩れたら負けなの…………… 次は貴方…………… えくつと、名前は？」

「シン…………… シン・ギデオン…………… 君は？」

「アタシ？…………… アタシはヒルデガルド・シユリーフォークト…………… ヒルダって言っても良いよ♪」

シンはジェンガの積み木を一つ取り、次にヒルダ、次にシンと繰り返していた。そして32回目…………… シンがギリギリのを抜き取った直後、重ねていたジェンガがバラバラに倒れた。

「シンの負け〜！」

「え〜！もう一回〜！」

そうしていく内に…………… シンとヒルダの心に絆が出来た。

それを聞いた陽弥とルナとミューとエミリアとヒルデガルドはキョトンとしていた。

「あの頃のシンは臆病者だったけど…………… 今じゃ、アタシの立派な旦那だよ……………」

「それだけ……………?!」

「まだよ、あく…………… あの時のシンとのファーストキス…………… 良かったなあ〜」

「えええ!!!?」

陽弥とルナとエミリアが驚く。  
「そこからなんだ……………あのクズ野郎が転入してきたのが……………」

ヒルダとシンの通う学校に転入生がやって来た。

「エミール・ブライアンです。よろしくお願いします。」

生徒達は拍手し、自分の席はシンの後ろの方にあると……………最初は何もなく、普通に勉強したり、一緒に遊んだり、エミール財閥の屋敷にも招待された。でも、エミールが興味津々に見て学んでいたのは、シンの父親 サム・ギデオンの研究だった。彼はサムの研究や発明……………そして機械の勉強に育んだ。それからエミールと出会ってから2ヶ月が過ぎた時、事件は起きた……………あの雨の日……………

検察官達がシユリーフォークト家に集まってきた。その時、私は……………

「ママ！ママ！」

「お願いです！娘は……………ヒルダだけは……………！！」

「ママ！嫌っ！！！」

アタシは検察官のパトカーに乗せられ……………その時、シンも来てくれた。

「シン！！嫌！！ママ！！シン！！」

パトカーの中でアタシは叫びながらも、シンは必死に追いかけた。

シンの姿が見えなくなった直後、エミールの姿が見えた。するとエミールはアタシの泣き顔見て、嘲笑ったんだ。理由は簡単だ……サム・ギデオン……嫌、お義父さんの……ヴェクタの端末で、アタシの秘密を知って……検察官に報告したんだ。それから……アタシはエミールを憎んだんだ……

その話を聞いた陽弥とルナは落ち込み、エミリアは泣いており、ミューは驚きの表情をして、ヒルデガルドは悲しい表情をした。

『なんて、酷い事を……これが、外道と言うのか……』  
「ああ、そうだ。そして……」

「そして、ヒルダが検察官に連れ去られた後の事だ。」

突然後ろから、車イスに乗っているシンが話しかけてきた。

「シン!？」

「父さん!？」

「お父さん!？」

「シン！大丈夫なんか!？」

「大丈夫……痛みは……慣れっこだから、その後だった……」

シンはあの時、ヒルダが好きで……昔、孤独だった俺を優位、友達としてくれたのが嬉しく、そしてヒルダにこの気持ちを告白しようとしてシユリーフオークトの屋敷に向かったんだが、

「後の事はヒルダから言ったからなあ……それからだ。俺の戦いが始まったのが……」

シンは泣きながら、実家である『DARPA』（ダーパ）社に帰ると、ダーパ社が……炎上していた。俺は何が起こったのか分からない

く、とにかく裏口の方へ行き、父さんの所へ向かったんだ。中はボロボロで……その場には……旧ヘルガスト連盟帝国兵や研究者の死体がたくさん、転がっていた。その時のヘルガスト連盟帝国は双子のパンドラメール『ペルシウス』と『ヒミコ』を強奪しに来たと思われる。研究所の最下部に行くところにはヘルガスト連盟帝国兵が父さんとロバート、エレナと殺り合っていた。その時、ヘルガスト兵が俺に気付き、ライフルで撃ってきた。そして……エレナさんは、俺を庇って死んだ。そして……父さんはその時……ケビンに何発か撃たれていた。ロバートは一人で時間稼ぎをして、父さんはその時に俺に……ARSスーツとペルシウスを託した。そこから俺はペルシウスに乗り込み、海の彼方へ逃げたんだ。

「どうだ？……これが俺の過去だ。」

「……………」

「そして、ある孤島で……まだ少年だったタスクと出会った。その孤島で10年滞在し、己を強化して、ヒルダがいるアルゼナルへと向かっていったんだ。」

「その時はビックリしたよ……アタシを助けに来なかったシンを諦めかけた時、10年後に来るとは思ってもいなかったよ」

「俺も……あの可愛かったヒルダがまさか……意地っ張りでツンデレの、ゴブツ!!!」

突然、ヒルダの左エルボーがシンの脇に直撃する。

「いくら怪我人でもぶっ潰すぞ……」

ヒルダは怒りながら、シンに拳を見せつける。

「はい、すいませんでした。(T|T)」

「それから……何だったっけ？」

それからヒルダはアルゼナルにシンが来たことにより、状況が変わった。普通はドラゴンが来るのに、スペースパイレーツやヘルガスト連盟帝国の襲撃する日もあった。そんな翌日、惑星連合と名乗る軍が現れ、シンを引き取った。そして引き取れて、その数日後、ヘルガストがアンジュとヒルダを拐った。しかし、アンジュとヒルダはヘルガストをボコボコにして、それぞれの行く先へ向かった。アンジュは…… レジスタンスのリーダーになる前の妹『シルヴィア・斑鳩・ミスルギ』モモカと共に救出へ、ヒルダは10年ぶりのエンデラント連合にいる母親へ会いに……。だが、アンジュの方はあのバカ皇子『ジュリオ・飛鳥・ミスルギ』の罠に掛かり、首吊りの刑にされそうになったが……。運良く、助け出した。一方ヒルダの方は……。母親に会えたが母親は……。ヒルダが去った後にもう一人の子が生まれていた。その娘にヒルダと同じ名前を付けたらしく、母親が前のヒルダにアップルパイを投げ付け、暴言を吹きまくった。”アンタなんか、生まれてこなければよかったのよ!!!”って……。そしてヒルダは泣き崩れ、その場から逃げ出した……。

その話が終わると陽弥達は何も言えない表情になっていた。

「これが……。俺らの過去話だ……。おかしいだろ？笑ってくれよ！……。俺らはアンタ達をこの世界に連れて来させたかったんだ。この絶望の世界で生きるバカどもから俺らは殺し合っていたんだ。お前たちを戦わせないように……。」

シンが泣き崩れながら、陽弥達の目の前で笑っていた。その光景を見ていた陽弥とルナは落ち込んだ表情になり、ルナは陽弥に言う。

「……お父さんとお母さんの事が可哀想に見えてきた。」

するとミューが問う。

『私の計算で結果が出た。マナと言うのは、そのエンブリヲと言う科



学者が作り、その人間達を操り人形のように奴隷させた結果、ドゥームに騙された。そして貴方がドゥームを葬った。』」

そして泣き直ったシンはミューの問いに答える。

「その通りだ。ドゥームは前世の俺の兄の体に乗っ取って、エンブリフに近付き、ヒミコを強奪して、封印したヴェクタ人に復讐を誓った。だが、ペルシウスと俺の体内にあるヘリオス様とセレーネ様から下さったリーパーの細胞を破壊する細胞で奴の心臓でもある惑星リイボラごとリーパーを絶滅させた。それと…………… 気になった事が一つ…………… お前らアジマス人は…………… リーパーの事を話さなかった。つまり、リーパーが何なのか知っているのか？」

「…………… その事は…………… っ!!!?」

ミューが突然、スキヤニングモードに切り替わったことに皆は驚く。

「どうした!？」

「『正体不明の生命体を確認!…………… 何だこの膨大なフェイゾンエネルギーは!?!』」

「フェイゾンエネルギー!?!今、フェイゾンエネルギーと言ったな!?!」

シンが慌てながらミューの肩に強く触れる。

「ええ、」

「奴だ!?!」

シンは車イスを動かしながら外に出る。

その頃、雪の降る夜…………… 闇夜から青白く輝くダーク・シンがワームホールから現れた。

「シン…………… やつと見つけた。我が宿敵よ!」

ダーク・シンのフェイイスが曲がり、まるで笑っているように避難所に向かって飛んでいく。

## 第14話：ダーク・シン再来

雪が降る避難所の格納庫、シンはペルシウスに乗り込もうとしていたが、ヒルダとルナに止められていた。

「お前らは彼奴の事を知らないだけだ!!!」

「だからって！怪我人のアンタを向かわせるわけないだろ!?!」

「そうよ！お父さんそんな体で動いたら！今度こそ死んじやうよつ!!」

「だけど…………… 彼奴は…………… ダーク・シンは…………… 侮って戦うような相手じゃない!」

「なつ!?何だよ!?…………… その…………… ダーク・シンって!?!」

「16年前…………… この大破した地球で惑星連合所属のブラボー中隊がリーパーの残党を追撃に向かっていった。その4時間後、突然…………… ブラボー中隊の通信が途絶えて、アンジュとコリンサスに頼まれて、タスクと調査に向かった。その時に、奴と出くわしたんだ。ダーク・シンと……………」

「つで、その中隊は!?!」

「…………… リーパー残党兵と共に…………… ダーク・シンに皆殺しされた。」

それを聞いた陽弥達は驚きを隠せなかった。束で掛かった者達がほんのあっさりと殺られる事に、

「ダーク・シンは俺とタスクを見て笑っていた。俺とタスクのARSでやっと互角に戦えたんだ。結果は惨敗だけど…………… だから！俺しか殺り合えないんだ!!」

その時、ヒルダの平手打ちがシンの頬に炸裂した。

「っ!?!」

「いい加減にせつ!!このアホが!!アンタは今、動けない状況なんだよ!!誰がこの子達を守れるのか!?誰がこの子達を強くするのか!?!」

ヒルダが怒鳴り付けるとシンは起き上がり、陽弥とルナを見る。

「…………… すま ん…………… ヒル

ダ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 陽弥、ルナ!!」

「はい!!」

「お前たちに・・・・・・・・・・・・・・・・ 手をやる・・・・・・・・・・・・・・・・ 手を出せ」

シンは陽弥とルナの差し伸べた手に、赤と青の腕輪を付けた。

「これは？」

「お前らが生まれた7日後に・・・・・・・・・・・・・・・・ ヘリオス様とセレーネ様がお前らのために用意してくれた・・・・・・・・・・・・・・・・ ” 銀河七聖龍の腕輪 ” だ。」

「銀河聖龍の腕輪？・・・・・・・・・・・・・・・・ 父さん、それって何なんだ一体？」

「説明は後、それがお前を護ってくれたり、力を貸してくれる。ダーク・シンにも勝てる。さあ！行け！」

「わ！分かった!?!」

陽弥とルナはそれぞれの機体に取り込み、外壁へ向かっていくと、シンは心の中で祈った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ どうか、彼らが来てくれますように・・・・・・・・・・・・・・・・」

避難所の最終防衛ラインには、既にレジスタンスのインゼクティアメイルがリニアアサルトライフルやレールガン、を構えていた。それを見ていた陽弥とルナは驚いた。

「凄い戦力だなあ、」

「正に大部隊よ、お兄ちゃん・・・・・・・・・・・・・・・・」

するとライトが上空に照らされ、そこにダーク・シンが浮遊していた。

「その黒いの!!無駄な抵抗を止め、おとなしく投降しろ！3秒以内

に降りてこなければ攻撃……っ!？」

「ダーク・シンが息なり、降りてきて、右手のアームキャノンでフェイズンビームを乱射する。」

「もう一人の僕………！白の僕は何処なのだああああ!!!？」

「ダーク・シンは叫びながら乱射すると上空から陽弥とルナのアーキバスIIとセイレーンのコックピットハッチから、陽弥とルナがライフルとサブマシンガンを構えた。」

「こいつがっ!？」

「もう一人のお父さん………まるで影みたい………」

「ん？そなた達は………確か、パラスの基地で会った事が………」

「パラスの基地!?!………は!？」

「陽弥はパラスの対空カノン砲がある基地の事を思い出す。エンジンルームで見たあの黒い物体に………」

「あの時の黒いの!?!」

「そうだが?さて、二人ともに言う。もう一人の僕は何処にいる?」

「………」

「残念だけど、父さんは重傷負っているんだ。」

「父さん?………そうか、君達はもう一人の僕の子供か………」

「そうよ!………それが何?」

「………本来なら、僕の仕事はもう一人の僕とまた、戦って見たかったけど………気が変わった。」

「!?!」

「………標的をもう一人の僕と………君達にした。」

「ダーク・シンのバイザーが左上に傾き、笑ってるかのような表情をした。それを見た陽弥とルナの背筋が凍りついた直後、ダーク・シンのアームキャノンが陽弥の方に向けられた。」

「っ!ヤバッ!!」

ダーク・シンのアームキャノンから大量のフェイズンビームが放たれた。陽弥とルナは回避して、アーガスライフルとテンペストで迎撃した。ダーク・シンは浮遊し、陽弥とルナの攻撃を回避する。

「弱い……………」

ダーク・シンは回避しながら、陽弥とルナに言う。

「弱すぎる……………もう一人の僕は僕を圧倒するほどの力を持っている。なのに、君たちは僕を圧倒出来る力を持っていない。」

するとダーク・シンのアームキャノン砲から青白い突起物が出てきた。それを見た陽弥とルナが驚く。

「ミサイル!!?」

ダーク・シンのアームキャノンからハイパーミサイルが発射され、陽弥とルナの付近で爆発した。その爆発に陽弥とルナが吹き飛ばす。

「うわあああああああ!!!」

「キヤアアアアアアア!!!」

二人とも爆風で廃墟の壁にめり込んだ。

「グッ……………クソ……………」

「つ……………強い……………これがお父さんが戦ったもう

一人の自分……………?!」

「今度こそ……………その命……………消去する。」

ダーク・シンのアームキャノン砲が青白い粒子が集まり、ハイパーチャージビームを放とうとしたその時、陽弥とルナの手に付けられている腕輪が光ると、

上空から赤と青の流星が落下し、ダーク・シンを吹き飛ばす。ダーク・シンは起き上がると、煙の中に何か大きな影二つが見えた。

「何だ……………?」

煙が晴れると、それは負傷した陽弥とルナを驚かせた。

「何だあれ……………!?!」

「綺麗な……………ドラゴンだ……………!」

それは、真紅と蒼海の色を持ち、翼から光の翼を生やし、体から炎と水が蛇のように動く、2体のドラゴンが陽弥とルナを護っていた。すると2体のドラゴンは雄叫びを上げる。



陽弥は後方にいるレジスタンスの軍人が瓦礫の中に埋まった仲間を助けだそうしていた。

『坊主…………… 我の力を使え、』

「え!？」

『あの者を助けたいのだから? なら、奴に我の力を思い知らせろ!』

「…………… 分かった!」

すると陽弥の手のひらからオレンジの光る紅炎が集まっていき、それを差しのばした。

『叫ぶのだ、坊主よ! 剛火炎とつ!!!』

「剛火炎!!!」

すると、差し伸ばした手のひらからオレンジの光が玉になった直後、ドラゴンズが口から火を吐くように勢い良く灼熱の火炎を放射したと同時に、ダーク・シンもハイパーチャージビームを放ち、両者の攻撃がぶつかり合う。明らかに陽弥の方が押されているが、段々とダーク・シンのハイパーチャージビームの威力が弱まっていき、剛火炎の灼熱の火炎がハイパーチャージビームを押し出し、ダーク・シンに直撃した。ダーク・シンは剛火炎の熱さに耐えきれず、フェイゾン粒子へと変わっていくと陽弥とルナに言う。

「これで…………… 終わりではないぞ…………… いつか、甦つて…………… そなたらの父親とその一族と仲間…………… 殺す…………… !!」

ダーク・シンは最後の言葉を吐き、消えていった。

そして、陽弥とルナは一件落着すると、アーマーが外れ、元の太陽神龍と月光神龍へと戻った。

『我等は休むぞ……………』

2体の体が光輝き、陽弥とルナの腕輪の中に入っていた。すると陽弥が突然、地面に膝をつき、荒い呼吸をしており、それをルナが支えた。

「ハア…………… ハア…………… ハア……………」

「お兄ちゃん! 大丈夫!？」

「…………… ハア…………… ハア…………… 大丈夫…………… 大

丈夫……」

「本当に……?!」

「ルナはあの時、使ってなかったから良かったけど……あれ、息なり俺の元気を消耗してしまうから、」

「そんなに消耗するの?」

「ああ、激しくな……とにかく、レジスタンスの人達を助けな  
いと、」

陽弥とルナは急いで、生き残ったレジスタンスの人達を救出に向  
かった。

陽弥とルナは避難所に戻ると、その上空にウラノスとネオ・アウ  
ローラが待機していた。ネオ・アウローラにレジスタンスや避難民を  
乗せて、ヴェクタ星に移住させると、既に各地域にも惑星連合  
と非加盟種族同盟国の艦隊を向かわせているらしい。そしてシンは  
車イスに乗ったまま、陽弥とルナに別れを告げる。

「もう行くの?」

「ああ、向こうでの仕事があるからなあ、それに……」

シンはエミリアを見る。

「あおう、私の顔に何か?」

「……嫌、ありませんよ……それじゃ陽弥、ル  
ナ……頼んだぞ。」

「分かった。」

シンはヒルダに車イスを押しもらい、ネオ・アウローラへと戻り、  
真の地球に戻り、陽弥達も、ウラノスに乗り込み、ワームホールを開  
き、惑星ホライゾンへと向かって行った。

そしてネオ・アウローラの格納庫では、

「やっぱり言えないなあ……これは、」

シンの目の前にあるシートで隠されている大きな何かがあり、シン



はそのシートを剥ぐと、その正体はエミリアが乗ってきたシリンダー型のスペースシップだった。

「古に伝わる超古代種族……… Q人かあ……… 嫌、正確に言えば、”原初の種族” か……… こりや、ジャヴィツク提督と、ヘラ・ヴィサリ女帝に協力要請して……… 彼らとコンタクトを取るしかないなあ………」

シンは謎の言葉を言い、格納から立ち去った。

するとシリンダー型のスペースシップの画面が明るくなり、画面から妖精と思われる紋章が描かれた。

その頃、ウラノス内にあるエミリアの部屋では、エミリアがぐつぐつと寝ており、何か夢を見ていた。それは……… 何処か知らない不思議な世界だった。黄金に輝く建物と見たことのない文字、そして空に大陸が浮いており、そこから滝が流れ落ちていた。

「何？」

すると、エミリアの目の前が光輝き始め、別の夢になった。

白衣を着た人物達が何かを研究していた。するとその人物は、水色の液体が入っている容器を人が一人、入るくらいのカプセルに容器に入っている液体をスポイトで一滴取り、それをカプセルの中に落とし、カプセルのハッチを閉めた。するとカプセル内が曇っていき、段々の中が見えなくなつて数分後、カプセル内の曇りが晴れていき、白衣を着た人物はカプセルのハッチを開くと中から、素肌の人が出てきた。するとその人物が隣にいる人物に話しかける。

「よし、この生命体の名前を001にしよう。」

「では、女性体002を作り上げよう。」

その時、光が輝き、エミリアは夢から覚めた。

「…………… 001と002…………… 何なのでしよう……………」  
「今のは……………」  
それと同時にエミリアの瞳が妖精の紋章が翡翠色に輝いていた。



「暇だよ。」

「暇で御座る。」

「暇だよ。」

「……………ちよつとアンタ達！ぐうたらすんな!!」

「じゃあ、何すれば良いんだよ!?!」

「それ は！…………… あ…………… え っつ

と…………… 分からん。とにかく！ぐうたらすんな!!」

「へいへい」

「つたく！…………… ん？何やってるのリヨウマ?」

ソフィアがリヨウマが座禅をしている事に気付く。

「瞑想…………… こうやって、足を組んで、目をつむり、心を集中しているのだよ…………… 父上と母上と叔父上と叔母上もやっていたから、」

「ふくん……………」

ソフィアも瞑想を使い、リヨウマと同じ様な行動をする。それから数分後……………

「グギギギギギギギギギ」

「……………」

「グギギギギギギギギツ!!あゝゝ!!!やってられん!」

ソフィアが座禅した足が痺れた事に怒鳴る。

「しようがないよ、何せドラゴレイドとアウラの民は異文化が似ているからなあ……………」

「きく!!!」

ソフィアは怒りながら、部屋を出ていった。

「何を怒っているの御座るのでしようか?」

数時間後、ようやく陸地を見つけ、給水作業を始めた。



こした時に人魚の少女がそれに巻き込まれて、外に放り投げ出されたとの疑惑があった。

「しかし、拙者の角が範囲に入っている生命体を感知できて、知らせてくれるはずなのだが、」

「別の何か?」

「そうなんだ……………」

すると人魚がリヨウマを見て、何かを言い出した。

「何て言ってるんだ?」

「ちよつと待って、」

リヨウマは水槽の入り口に行くと、人魚がリヨウマに飛び付いてきた。

「うわあっ!!?」

「御願いです!私の国を守ってください!」

「え!?!」

「あ!申し遅れました!私はローレライ ローレル・ウルド・ネプチューンで、マーメルド共和国 国王ポセディア・ウルド・ネプチューンの娘です。」

するとリヨウマは翼を広げ、メロウの前で膝を付き、顔を下げて、挨拶した。

「自分は…………… 種族銀河同盟の三大国家 非加盟種族同盟国

加担種族 ドラゴレイドの国王 スワン・ネイルの一族 リユウガ・

ネイルと人類銀河共和国加担種族 アウラの民のフレイヤの一族

近衛中将 サラマンディーネの子 リヨウマ・ネイルで御座る。」

「お願いします!リヨウマ様!どうかマーメルド共和国を宇宙海賊カルディアノンから我が国に伝わる伝説の宝玉 七聖龍の宝玉を守ってください!」

「七聖龍の宝玉!?!今、アンタ…………… 七聖龍の宝玉って言わなかった!?!」

「え!?!…………… はい…………… ?」

「それが何でこの惑星に?」

「…………… 守護神なのです。代々私達の先祖は、七聖龍を祀られ

ていたので、私達、マーメルディア人からでは海を守る守護神なので  
す。」

「それが…………… 何で宇宙海賊に狙われているんだ？」

「恐らく、海の神の膨大な力が狙いかも知れません。」

「どうするので御座るか？」

「…………… 決まっているだろ！…………… 俺達 種族銀河同盟は  
これから、マーメルド共和国に行き、宇宙海賊カルディアノンを討伐  
しに行く！艦長！ご指示を！」

『私も同意件です。全乗組員に告ぐ！これより、我々はマーメルド共  
和国に向かい、宇宙海賊を討伐し、マーメルディア人を救出する！全  
クルーは発進準備を！』

「了解！！」

陽弥とリヨウマは敬礼するとローレライは分からなく慌てて、陽弥  
とリヨウマと同じポーズをする。

準備が整い、ウラノスを潜水モードに切り替えると、ウラノスの艦  
橋が内部に格納され、ウイングも閉じて、カタパルトである木馬の前  
足が横になり、木馬型から突起型の形態へと変わった。（分かりやすく  
言えば、ガンダムAGEの戦艦ディーヴァの第一形態です。）そしてウ  
ラノスはローレライ案内に従い、海底の奥深くにあるマーメルド共和  
国へと潜水した。

艦内のテラスが開き、陽弥達が行くと、全面に防水ガラスが貼られ  
ており、太陽の光が青く輝く海中を照らしており、鮮やかな色をした  
魚と水性生物達が泳いでいた。その光景に陽弥達は驚く。得にヴィ  
ヴィアンとメトロの子供たちとエミリアだった。

《うわあ~~~~!!!》

「綺麗ですわ！」

「スゲー!!!」

「こりや、対したもんだ。」

すると、エミリアの所の防水ガラスから、龍の様なおとなしい水性生物が来た。(分かりやすく言えば、モンスターハンタートライGに出てくるモンスター『エピオス』に似ており、頭に一角が生えている水性生物です。)

エミリアはキョトンとすると、あちらもキョトンとする。するとローレライがエミリアに説明する。

「その水性生物はパリアトプスですわ、」

「パリアトプス？」

「惑星アクアに存在する草食水性生物です。海中の岩に付着している苔とワカメを食べて、生活しており、肉食水性生物から子供を守るために、あの一角から、電気を出して、攻撃してきます。私達が攻撃しなければ良いおとなしい水性生物です。」

「この世界にも…………… いろんな生き物がいたのですねあ、」

「話はリョウマ様から聞きました。貴方の世界がアジマス連邦に支配されていると…………… 何と言えば良いのか…………… 私達マーメルディア人の世界ではアジマス連邦は機械でできているために、水を嫌っていて、この惑星は安全なのですが…………… まさか、宇宙海賊が来るとは思ってもおりませんでした。」

「メロウ様…………… その宇宙海賊カルディアノンのついて、お話しをしてください。彼らはどんな人なのですか？」

「はい、宇宙海賊カルディアノンは惑星カルディアノンを母星とする種族で、予想以上の残虐で、暴力、権力、科学力を持ったトカゲが進化した種族です。あらゆる文明レベルの低い惑星に武力行使で、侵略しているのです。」

「侵略!?アジマス連邦と同じですわ……………」

「確かにアジマス連邦と同じ行動ですが、アジマス連邦と違って、奴隷ではなく…………… 捕獲して、自分達の生物兵器を作り上げる実験材料にするのです。」

「何て酷い事を…………… !!」

「それがきっかけに、私達マーメルディア人には膨大な実験材料と国



に伝わる伝説の宝玉、七聖龍の宝玉を宇宙海賊カルディアノンの首領  
ニユートがその力を欲しており、それを手にすれば、銀河一の荒く  
れ者になれると判断したのでしょうか。」

「メロウ様！」

「ん？」

「必ず、貴方の国を助けます！だから、もう少しの辛抱です！」

「……………ありがとうございます……………！」

ローレイは膝を付き、泣き崩れてるのを、エミリアが励ます。そ  
れを見ていたリヨウマは拳を握る。

ウラノスのVRトレーニングルームでは、エイルマットがエルダー  
サイスを振り上げ下げていた。するとそこに、リヨウマが来る。

「何の様だ。ドラゴレイドの若造……………？」

「……………相手して……………貰えませんか？」

「……………ほお、何故だ？」

「……………ローレイ殿の悲しさと陽弥とルナ殿の七聖龍の力を見  
て、判断しました。拙者もローレイ殿を守る武士になり、陽弥と  
ルナ殿のお役に立ちたい……………だから、お願いします  
……………貴方の弟子にしてください!!……………」

リヨウマが刀を置き、地面に頭を付けて、土下座した。

「……………顔を上げろ」

エイルマットの声にリヨウマは顔を上げると、エイルマットの腕か  
ら、龍の様な物体が現れ、それを地面に叩き付けると、地面から無数  
の赤黒いドラゴンがリヨウマに向かって、突撃してきた。リヨウマは

驚き、それを回避すると、龍は爆発して、消えた。

「吼竜破」……………対象の敵に地獄の竜が襲いかかる。これを学

べ……………」

「……………」

「?……………どうした?とつとと俺の技の特訓をやれ!!」

「!……………はい!師匠!!」

リョウマは刀を持ち、エイルマツトの相手をして、特訓た。

その頃、ある海中で、

「船長!船長!所属不明ノ非行物体ガ、此方に接近シテイマス!!」

「所属不明ダト……………?ダトスレバ、アノ人魚姫カ……………マア

良イ、七聖龍ノ力を手ニスル鍵ガ揃ッタ……………」

「ドウシマスカ?」

「……………アノ手を使オウ……………フフフフフ……………」

「あれです!あれがマーメルド共和国です!」

ローレライの声に陽弥達が見た物は……………

「あれが…………… マーメルド共和国?」

それは…………… 海底奥深くに街があり、街道の光が暗闇を照らすかのように輝いており、その街道の行く先に緑に輝くクリスタルで出来た城があり、その城の左右にある大きな塔から、この街を守るかの様に巨体な泡でマーメルド共和国を包んでいた。

「綺麗……………!」

「泡で浸水を防いでいるんだ……………!」

「こんな科学力があるなんて、対した物です。」

すると、城門から多数のマーメルディア人の兵隊と潜水艇が現れ、ウラノスを取り囲んだ。

「お前たち! 宇宙海賊カルディアノンか!!! おとなしく降伏するんだ!!」

「待って下さい! 皆様! 私がこの方々を連れてきただけです!」

「姫様!?! まさか!…………… 卑怯だぞ! 姫様を人質するとは! 許さん! 許さんぞ!!! 近衛兵、潜水艇、攻撃用意!!!」

近衛兵たちの槍と潜水艇の銃口から、レーザーが発射された。

「まづい! 電磁シールド!! を展開して!!!」

「了解!!!」

アリスがオペレーターに命令して、ウラノスの電磁シールドを起動させ、電磁シールドでマーメルディア兵のレーザーを防御した。

「御願いです! 私の話…………… キヤアツ!!!」

ローレライが倒れる直後、リヨウマが支える。

「大丈夫で御座るか?」

「リヨウマ様!」

「クソツ! どうやったら彼等を説得出来るんだ!?!」

「お兄ちゃん!」

「ルナ?」

「私に任せて♪」

ルナが艦橋を離れ、酸素マスクを装備し、海の中へ潜水し、マーメルディア兵達の前に出た。



「良いのですよ♪所でお父様とお母様はご無事でいらっしやいますか!?!」

「ご無事で御らっしやいますとも!国王陛下、王妃様も離ればなれになったローレライ様の事を心配しております。」

「まあ!ありがとうございます!」

陽弥達がメロウと一緒に城へと向かうと、一人の兵隊が何故か泣いていた。

「スミマセン……………姫様……………!!」

城の城門が開き、中から大きな体と髭をした男性とローレライと同じサイズの女性が現れた。

「お父様!お母様!」

「ローレライ!!」

ローレライが両親の元へ向かった直後、リヨウマの角から微かな電磁波を感じて、ローレライを止める。

「待つのだ!ローレライ殿!」

「え?」

「……………様子がおかしい……………」

「どういう事ですか?!」

すると国王はローレライに警告する。

「ローレライ……………逃げるのです……………!私達と民も近衛兵達は……………宇宙海賊カルディアノンに操られているのです!!これは……………お前を誘き寄せる……………罠だ!」

「っ!!」

するとリヨウマとエイルマツトは国王と王妃の横に何かがいることに気付いた。

「師匠!」

「やるか!」

「吼竜破!!!」

エイルマツトは吼竜破を放ち、それに続き、リヨウマは威力が弱い吼竜破を放ち、国王と王妃の横にいる者を吹き飛ばした。

「グワツ!!!」

光学迷彩を使っていたカルディアノン達が姿を現した。

「そんなー!」

すると陽弥達の上を通るように大きな影が浮かび上がった。陽弥達は上を見ると、それは数キロメートルもある巨体要塞だった。すると国王と王妃の後ろから翼が生えているカルディアノンが現れた。

「引ッ捕ラエロ!!」

「お父様!お母様!」

リヨウマがローレライを連れ逃げると、リヨウマの目の前にカルディアノン達がドラゴニックバスターガンを構えていた。リヨウマが舌打ちをするとエイルマツトが飛び出し、エルダーサイスを回転しながら、カルディアノンの攻撃を防御したり、近付いて、カルディアノンを切り裂いた。

「血風大車輪!!」

「グワアアア~~~~!!!」

「若造!その姫さんを連れて逃げるんだ!赤髪の若造!」

「!?」

「そっちの姫さんもだ連れて逃げろ!」

「分かった!.....ルナ!」

「分かったわ!エミリアさん!こっち!!ローレライさんも!!」

「はい!!」

エミリアとローレライは陽弥とリヨウマの指示に従い、二人を連れて逃げた。

「逃ガスナ!!追エ!!」

カルディアノン達が翼を展開して、リヨウマ達を追った。

## 第16話：電光石火

リヨウマ達はカルディアノン達の追撃から逃げていた。

「クソツ！どうすればアイツ等を振りきれんだ!？」

「拙者に任せて！鋼龍號!!」

リヨウマが鋼龍號の名を呼ぶと、鋼龍號がウラノスから射出され、リヨウマ達の所へ来てくれた。

「鋼龍號！」

すると鋼龍號のバイザーが赤く光りだすと、鋼龍號が変形し始め、銀翼の翼を持つワイバーンへと変わった。鋼龍號は変形した頭部の口からホーミングレーザーを放ち、追撃してくるカルディアノンを撃退する。

「良し！なら、俺も！太陽神龍!!」

陽弥が腕輪を掲げると、赤い水晶から太陽神龍が現れた。

「龍装光!!」

陽弥が叫び、太陽神龍が雄叫びを上げ、陽弥の体を包み込み、紅と黄色のアーマーを装着された。陽弥は腰部に手を伸ばすと、何も無いところから紅炎が吹き出し、紅炎が消えると現れたのは太陽の紋章がある剣だった。

「太陽神劍!!」

陽弥は近付いてくるカルディアノン達を切り裂いていった。すると鶏冠の様な頭をしたカルディアノンが現れた。

「何ヲグズグズヤツテイルンダア!!ガキ相手ニ!!」

そのカルディアノンは他のカルディアノンと違って、両手にドラゴンクロウを装備していた。

「アイツは!？」

「間違いありません……………彼です!……………宇宙海賊カル

ディアノンの船長……………ニユートです!」

「ローレライ!!オトナシク銀河七聖龍ノ宝玉ヲ渡セ!!!」

「何度も言いますが！あれは貴方が使える物ではありません!」

「ウルサイ！黙レ!!!ソレト……………」

「ソコノ姫サンダツタカナア!..... アジマス連邦がオマエヲ  
探シテイタゾ!!ソイツヲアジマス連邦ニ連レテイケバ..... 報  
酬トシテ..... 8000万クレジツトと1億キャツシユヲク  
レルツヲヨオ!!!」  
「ニニつ!!!?」  
する!!リヨウマはニユートの話で手を強く握りしめながら、怒鳴  
る。

「貴様ら!!金に目が眩んだのかああ!!??」  
「ダツテヨオ!」プロフェツサーE”ガ言!!タカラヨオ..... 金  
ガ貰エルンナラ容赦ワシネエゼ!!!」  
「貴様らあああああああ~~~~~」

「絶対に許さんぞ!!!金に目が眩んだ者が!!容赦はせんぞ!!!」  
するとリヨウマの体が急激に大きくなり始め、鋭い爪、鋭い牙、尻  
尾、龍の様な顔、腕から紅い模様がある白鳥の様な純白の羽が生えて  
いき、人型だったリヨウマがあつという間に先祖の様な白鳥の様な  
体毛と翼を持った2メートルもあるドラゴンへと変異し、雄叫びを上  
げた。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」  
「ドラゴレイドの本能だ!!リヨウマの先祖は名前の通り..... ス  
ワンネイル..... つまり、白鳥を意味しているんだ!」

リヨウマは雄叫びを上げ終わると、ニユートに飛び掛かった。  
「化物ガツ!!」

ニユートはドラゴンクローで防御するが、リヨウマの鋭い爪が炸裂  
する。  
「グツ!!!」

ニユートは怯んだ直後、リヨウマの尻尾が振りかざされ、ニユート  
を叩き潰す。しかし、ニユートはリヨウマの尻尾を掴み、投げ回した。  
「クタバレ!!!」

ニユートはリヨウマを投げ飛ばした後、他のカルデアアノン達が  
リヨウマを取り囲むとアンカーを発射し、暴れるリヨウマの動きを止  
める。



「才前等!!!アイツ等ヲ連レテ来イ!!!」

「ソファイア!、アレクトラ!、エイルマツト!皆!!!」

「すまん……………!!……………油断した。」

「オイ!才前!」

「っ!?!」

「コイツ等ガ殺サレタクナカツタラ……………トットト二人ノ姫サンを渡しな!ソレト……………才前等ノ持ツテイル銀河七聖龍ノ二ツモダ……………早クシロ!!」

ソファイアの首もとにドラゴニックバスターガンを突き付ける。陽弥とルナはおとなしく武器を捨て、腕輪を外し、カルディアノン達に渡した。

「ハハハハハハ!!!マサカ銀河七聖龍ノ三ツモ手ニハイルナンテスゲエヨ!!コレデ我々ワコノ宇宙ノ神にナレル!!!……………ハハハハハハハハハハ!!!」

陽弥達はカルディアノン達に連れられ、城の地下室にある宝物庫に来た。

「サア、扉ヲ開ケルノダ……………」

ニュートがローレライに言うと、ローレライは宝物庫の門にある音声認証コードを唱えた。

「太陽よ……………暗黒に染まり……………月よ……………影に染まり……………稲妻の如く速さ、稲光で敵を倒し……………雷鳴を鳴り響かせ、ここに現れよ……………」

ローレライが唱えた直後、門が開き、中には金銀の財宝と宝石の山、そしてその向こうの台に水色の結晶体が浮遊していた。

「オオ!コレガ三ツ目ノ銀河七聖龍……………雷光神龍!!ツイニ!ツ

「イニ！俺達ノ物ダ!!!」

ニユートが笑い声を上げると結晶体が強く光始めた。

「サア！雷光神龍ヨ!!俺ニカヲ与エテクレエエエエ!!!」

すると取り押さえられているリヨウマは暗い意識の中にいた。

「っ!.....ここは?」

「目覚めたか.....若造が.....」

「何奴!」

「まあ、落ち着け.....」

すると暗い空間から稲光が輝き、現れたのは体中電気を放ち、稲妻の角をした龍がリヨウマの目の前にいた。

「わしの名は雷光神龍..... 銀河七聖龍の一体じゃ.....」

「雷光神龍!」

「実はな..... わしがここに来た理由は..... お主に力を貸そうと思うのじゃ.....」

「拙者に..... 力を貸す.....!」

「宝物庫から見とおったぞ..... お主はまだ獣化に慣れていないようじゃ..... その為だ。」

「..... あの力?..... っ!」

「また..... 人を傷付けようとしたのか.....」

「だが、安心するのだ。わしが来たから、その力を制御出来る。」

「..... 御願います!どうか拙者に..... 皆を護れる力を!!!」

「承知!!!」

すると雷光神龍が水色の結晶体に変わり、サラマンディーネの刀の刃に宿った。そして意識を取り戻したリヨウマは獣化のまま、叫ぶ。

「来い！雷光神龍!!!」

水色の結晶体が強く輝き、ニユート達の目を目眩まします。  
「ナツ!?!何ダト!?!」

水色の結晶体は光へとなり、リヨウマの刀の刃に宿り、リヨウマはそれを確認すると、叫ぶ。

「龍装光!!!」

するとリヨウマの体から電気が飛び散り、押さえていたカルディアノン達が感電した。そしてリヨウマの体が光、稲妻の龍になり、とても速い速さで陽弥達を押さえていたカルディアノン達を倒す。そして結晶体があった台にリヨウマは立ち、光で目眩ましされたニュートはリヨウマの姿を見て驚く。黄金の稲妻のラインと漆黒のアーマー、そして首に巻かれている黄色いスカーフをして、X型の紅いバィザーが輝いていた。それは正に…… 忍(シノビ)と言える姿だった。

「何故ダ!? 銀河七聖龍ノカワ俺ニフサワシイハズ!!! 返セ!!!」

「無駄だ…… お前には…… この銀河七聖龍の力は重すぎる…… それと…… 脳内レベルが権力だけのお前は…… 黄泉の国へと送って殺るぞ…… !!」

リヨウマがサランディイーネの刀を抜刀すると刃から電流が流れた。カルディアノン達がドラゴニックバスターガンを乱射するが、稲妻の様な速さを持つリヨウマの敵ではなかった。超速の中でカルディアノン達の脇腹、横腹に切りつけ、カルディアノン達を再起不能にした。カルディアノン達は何が起こったのか分からなく、声が出せずに倒れた。それを見…… いたニュートは驚いていた。

「つ……」

「!!!!!!」

「これで終わりか?」  
リヨウマは奪われた陽弥とルナの腕輪を取り返し、本人に投げ返した。

「サンキューー! リヨウマー!」

「ありがとう!」

陽弥とルナは早速腕輪を身につけ、叫んだ。

「龍装光!!!」

二人の体が炎と水で覆われ、それぞれのアーマーを装着した。

「さあ! 来い!」

「これまでの御返しをしてやるよ!!」

「チツ!!…… イイ気ニナツテンジャネエ!!」

「ハッ! 逃げるのか!」

「陽弥殿……ここは拙者に……」

「雷龍破つ!!!」

リヨウマの手の平から漆黒の龍と雷の龍がカルディアノン要塞を撃ち抜いた。要塞が破壊されたことにより、操られていた国王と王妃と兵隊、民も自由になった。

「自由だ！自由だぞー！」

「助かったんだ！」

要塞が破壊され、瓦礫の中に埋もれているニユートは起き上がる。

「クソツ!!コンナハズジヤナカツタノニ!!」

ソコニ龍装光をした陽弥とルナとリヨウマ達が来た。

「お前の負けだ！ニユート!!」

「クツ！コウナツタラ………最後ノ奥ノ手!!」

するとニユートはどうやったのか、空間転送で何かを持ち出した。それは陽弥とルナも覚えている物だった。

「まさか!!!それは!？」

「へッ！リーパー・エキス!!」

ニユートは口で瓶のコルクを抜き取り、赤黒い液体を飲む。

「プハアツ!………効クゼエ!!………ツ!!………ウウ

!………ウウ!………ガアアア!!」

ニユートの体の変異し始め、トカゲ人間だった。ニユートがみると大きくなり、恐竜の様な体格をしたドラゴンへと変わり果てた。陽弥達が驚くとニユートが足を上げて陽弥達を踏み潰そうとした。

「血祭りニ殺ツテヤル!!!」

運良く、陽弥達はニユートの攻撃を回避すると、ウラノスに連絡する。

「メイさん！俺のアーキバスIIを!!」

『分かってる!!それと君のお父さんが「これを陽弥に」って!!!』

「父さんが!？」

『よし！アーキバスII タイプ ブラスト!!!射出!!!』

メイが肩とバックパックにブラスタランチャーを二つ装備させたアーキバスIIをウラノスのカタパルトに乗せて、射出した。すると

アーキバスⅡの装甲の色が赤と黄から緑と青に変色した。  
(分かりやすく言えば、ブラストインパルスのランチャーパックを装備した感じです。)

一方、陽弥達は変異したニュートを相手していた。リヨウマが刀を抜刀し、飛び上がったが、ニュートは巨体な尻尾で叩き落とす。

「うわああああくく!!!」

叩き落とされたリヨウマの所に陽弥達が駆け寄る。

「大丈夫か!」

「ああ!……ハッ!」

リヨウマは上を見ると、ニュートが大きな足で踏み潰そうとしていたその直後、紅い閃光が輝き、光線がニュートの頭に直撃する。陽弥が光線が来た方向を見ると、上空にブラスターランチャーを構えたアーキバスⅡが飛来していた。

「俺のアーキバスだ!」

陽弥はアーキバスⅡに飛び乗り、操縦した。アーキバスⅡの肩に装備されているシオルダーブラストの銃口からペトルサイト粒子の炎を吹き出す。

ペトルサイト粒子の炎はニュートの鱗を溶かしていき、ニュートは悲鳴を上げる。

次にバックパックに装備されているブラスターランチャーがアーキバスⅡの脇に展開し、両手でブラスターランチャーのトリガーを引き、高エネルギービームで応戦する。

ニュートは巨体な尻尾でアーキバスⅡを叩き落とそうとしていた。するとアーキバスⅡのブラスターランチャーを収納させ、4連ミサイルランチャーを発射し、尻尾を破壊した。

最後にアーキバスⅡの腕部に取り付けられている二つの棒状を連結すると伸びていき、そして両先端部から十字型のビーム刃を放出し、ジャベリンを回しながらニュートを切り裂いていった。ニュート

はバラバラになり、溶けていく。するとニュートがうめき声を出しながら、陽弥達に言う。

「ブヘッ！……ハア……ハア……ハア……コレデ……終ワリト思ウナア……ハア……ハア……ハア……プロフェツサー”E”わオ前ラノ考エテイル人物ジャナイゾ……イツカ……プロフェツサー”E”ガ……コノ世ノ全テノ……銀河ヤ次元ヤ時空ヲ……支配シテクレル!!!”

その直後、ジャベリンがバラバラになったニュートの頭に突き刺した。

「黙れ！このクズ野郎！俺らは絶対にソイツに負けんぞ!!”

陽弥は溶けながら不気味に笑うニュートの肉片を睨み付けた。

その頃、アヴァロンでは………

玉座の間にいるアジマス陛下とプロフェツサー”E”が話していた。

『陛下………何を考えらっしゃるのですか………?』

『ホライゾンに住む有機生命体はまだ抗っていると………昔を思い出す。』

『昔とは………?』

『我々を誕生させた創造者達………Q人は愚かな欲望に満ちた同胞が創造者達を滅ぼし、我々に憎しみと言う感情を植え付けた。ホライゾンに住む有機生命体達は昔と同じで………我々に憎しみを持っているのだろうか………』

『………それが人間と言う物です………彼らは昔から変わ

らず、欲望に満ちた種族でございます。』

『そうか………プロフェッサー”E”………』

『何でしょうか、陛下?』

『そう言えば………お主が開発した新しき四将軍はどうなっている?』

『惑星ホライゾン出身………エルシユリア王国第一王女………エミリア・ヴァルネア・クリーフと種族銀河同盟の者達が惑星アクアに滞在しております。それに………下品な宇宙海賊のカルディアノン人達は失敗しましたけど………その為、惑星アクアに新しき四将軍の一人………”永遠のエヴァ”を任務に動向させました。』

””永遠のエヴァ?”』

『はい、陛下………彼は優秀な試作品で、彼らの持つ銀河七聖龍の力を上回っておるので、エミリア姫様の簡単に奪取出来ます。』

『ほお、それは見事な兵士だな』

『はい!陛下………』

プロフェッサー”E”が陛下の前で御辞儀をすると、口元が少し笑っている表情になった。

その頃、惑星アクア海中では、パリアトプス達の死骸が海面へ浮かび上がり、その中に何か黒い障気が他のパリアトプスを殺して行き、その黒い障気の中に黄金に光る天使の様なアジマス連邦兵が潜水していた。

## 第17話：墮天使降臨

マーメルド王国には宇宙海賊カルデアノンの支配から解放された事に国民は喜び、陽弥達にパーティーを開いてくれると国王ネプチューンがアリス言う。

「パーティーを開くと?」

「そうじゃ…… お主らには我々の命と国を守ってくれた恩がある。それでパーティーを開くのじゃ、」

「けど、私達はこれからエミリア姫殿下の故郷へ行かないと……」

するとアリスの元にヴィヴィアンが来る。

「良いんじゃない?パーティーしてくれるって言うから、それにアタシにとっては久しぶりだしさ?」

「ヴィヴィアン隊長!だけど!」

「そんじゃ!おっちゃん!始めよっか♪」

「ハア〜」

ヴィヴィアンは大喜びするが、アリスは顔を押しさえ、ため息する。

城下町にはそれぞれの店から城に使用されている酒や飲み物、料理、お菓子が城に運ばれ、プロの料理人達が調理する。

宴会場には既にマーメルディアの人達が沢山いた。

陽弥が宴会場でうろついていると宴会場のテラスにエミリアがいた。エミリアは薄暗い海を見上げた。

「……………」

「どうしたの?」

「陽弥様……………」

「何、一人で黄昏ているんだ?」



「…………… マーメルド王国を見ていと…………… エルシュリア王国を思い出します。」

「そうか…………… そう言えば、エミリアのエルシュリア王国ってどんな国なんだ？」

「草原があり、欲のない国です。国民は穏やかで、清らか、そして愛情に溢れており、いつも笑って生活しております。他にもエルフやダークエルフ、ハイエルフ、ハーフエルフ達の住む国”アテナイ共和国” 魔法と機械の国の”ヴァルヴァートル帝国” 科学と魔法で満ちた”グラシオン連合” 交易が盛んな”バルンドール皇国”があります。」

「そんなにあるんだ…………… 俺らの方は20年前、俺の父さんと母さんがアンジユさんと共に偽りの地球で邪神皇ドウムを倒して、三大国家…………… つまり「種族銀河同盟」を樹立して、治安を守っているからなあ……………」

すると陽弥はエミリアの顔を見て、赤くなる。

「あのさ…………… えつと…………… もし、無事にエミリアの故郷に行けたら……………」

「俺…………… 私……………」

「っ!?!」

二人は同時に顔を赤くなり、お互い背を向けあった。するとエミリアが陽弥に言う。

「私も…………… 陽弥様と未来を歩んでみたい……………」

「エミリア……………」

するとエミリアの目が閉じ、陽弥に唇を差し出してきた。

「っ!?!……………」

陽弥はさらに顔が赤くなると、勇気を込めて、エミリアの唇に自分の唇を近づけたその時、中から、悲鳴が聞こえた。

「キヤアアアアアアア~~~~~!!!」

「っ!?!」

陽弥とルナは驚き、宴会場へと向かうと国王が膝をつき、胸を押さえていた。

「お父様!?!」

「貴方!?!」

「きっ!..... きおった!..... きよったぞ  
!.....」

「何がです!?!」

「何だこの闇の心!?!..... 底無しの暗き海底!!! 本当にこいつは機  
械生命体なのかあ!?!」

すると陽弥が言う。

「まさか! アジマス連邦.....!?!」

「..... たぶん..... だが、きよるのは普通ではない何か  
だ.....」

「国王!!!」

「どうしたのじゃ!?!」

「大変です! 王国付近から大量のパリアトプスの死骸が流れています  
!!」

「何じゃと!?!?!」

国王が叫び、急いで、王国の門へと向かった。

王国の門へ行くと、そこには白眼になっているパリアトプスの死骸  
が大量にあった。

「何だ..... これは!?!」

すると門が開門され、外から偵察兵が焦りながら来た。

「ハア! ハア! ハア!」

「どうしたのじゃ!?!」

「伝令! 向こうからアジマス連邦らしき黄金の連邦兵が来ます!」  
「..... 人数は?」

「一体だけです！」

「何じゃと!?!」

「その黄金の連邦兵の周りには黒い障気が這い廻っており、その障気に触れたパリアトプス達が死んで行きました。」

「たぶん……プロフェッサー E は奥の手を使ったのでしよう……恐らく……エミリアを狙っています。」

「良し!マーメルド八人衆!」

国王がその名を言うとうと国王の元に分厚い鎧を持ったマーメルディアの兵隊8人が駆けつけた。

「国王……お呼びでしょうか？」

「ああ、」

「で、人数は？」

「一体……… だけど……… 甘く見るな!……… 甘く見ると……… 死ぬぞ……… !」

すると八人衆は黙り混む。

「「「「「「………」」」」」」

「城の方はわしが守る!お前達は部隊と共に迎え撃て!」

「「「「「「おお、!」」」」」」

八人衆が掛け声を上げ、直ぐに部隊と共に迎撃に向かっていった。すると国王の足元にメトロの少女…… ユミがいた。

「ダメじゃないか、勝手に出たら………」

「うわあ!クロ?」

子犬のクロがユミに飛び付き、震える。

「どうしたの?寒いのか?具合が悪いのか?」

「分かるんだよ…… さあ、ほらっ………」

ユミは城門の中に入ると、国王自ら門を閉め、冷や汗をかいた状態で外を睨み、城門を閉じる。

その頃、王国に近い渓谷に黄金に輝くエヴァが天使の翼を広げ、渓谷の谷底を見る。そしてその近くに八人衆の二人へイハチとゴロウが岩場の陰で様子を伺っていた直後、エヴァがもうスピードで岩場の方に向かうと、へイハチが剣を振りかざした。しかし、エヴァはそれを軽々と回避し、へイハチの胸ぐらを掴み上げ、背負い投げをして、へイハチを倒す。その後ろから槍を突き刺そうとしたゴロウが突撃してきたが、エヴァは槍を掴み止め、ゴロウの首を締め上げ、ゴロウは気絶した。

再起不能になった事を確認するとエヴァはそのまま無言のまま渓谷の谷底へと向かう。

そして城内では国王が八人衆の気を感じとる。

「へイハチ……………ゴロウ……………」

ローレライが国王に問う。

「二人殺られたの!?!」

「いや、気絶されたただけだ。」

すると陽弥も問う。

「大丈夫ですか!?!」

「大丈夫だ……………! 八人衆がそう簡単にやられる者じゃない……………」

一方、パリアトプス部隊と潜水艇部隊という八人衆の三人スズ、カサゴル、ツツシは剣を構えていた。するとツツシが言う。

「ヘイハチとゴロウはやられたか……………」

「何としてでも、恩人の姫さんを守るぞ……………」

「おお！」

すると向こうからエヴァがゆっくりと歩いてくるのが見えて、三人と部隊が突撃すると、向こうも突撃してきた。カサゴルが剣を降り下ろし、スズも同時に槍を突き刺す。しかし、エヴァは二人の攻撃を回避した。パリアトプス部隊が突撃し、パリアトプスの一角から電撃を放ち、エヴァの動きを止めるが、エヴァは回避した。部隊が陣形を整えると、エヴァは笑い、翼を広げると、複数の渦潮が現れ、部隊や八人衆の三人を倒した。そしてエヴァは王国に入り込んだ。

そして城内にいる国王が三人の気が消えた事を報告する。

「スズ…………… カサゴル…………… ツツシ…………… これで

5人…………… そして部隊も……………」

するとローレライが鎧と剣と盾を持って、国王に言う。

「お父様……………！私もリヨウマ様のお手伝いを……………！」

ローレライが国王に言った直後、王妃が止める。

「止めなさい！彼らは貴方も守ろうと必死なのです！行ったら彼らの  
思いは……………」

するとソフィアが国王に問う。

「ねえ！逃げようよ！」

「駄目だ……………何処へ逃げても……………奴は追っ掛けてく  
る……………」

国王は只、ひたすらそこで黙り混んだ。

その頃、街道では、リヨウマとエイルマツトと八人衆の三人ブライ、  
カンベエ、セイリュウが多数の近衛兵達と共にバリケードを立てて、  
エヴァが来るのを待っていた。

「残ったのはわしら、三人だけか……………ブライ」

「そうだな……………カンベエ……………お前さん等には申し訳ないこ  
としてすいません……………」

「いえ、拙者が言い出した事です。一人増えれば戦力も上がります。」  
「来ました……………！」

セイリュウがエヴァが来たことを確認し、リヨウマ達は武器を抜刀  
し、迎え撃つ。

「抜かるなよ……………」

「はい……………！師匠……………！」

「龍装光!!」

リヨウマは龍装光をして、エヴァに斬りかかる。しかし、エヴァは  
リヨウマの刀を指で受け止め、払いのけるとエイルマツトがエルダー  
サイスを降り下げる。エヴァはエイルマツトの攻撃を回避して、残り

の八人衆に集中攻撃をして、三人を気絶させる。

「ゴイツ！只のアジマス連邦兵じゃない！」

「ならば！吼竜破!!」

「拙者も！雷竜破!!」

エイルマツトとリヨウマは同時に漆黒の龍と稲妻の龍を使い、合体技でエヴァに激突した。

「やったー！」

二人はホツとした直後、何が起こったのか、リヨウマを通りすぎると殴られる音が聞こえた。

「っ!?!」

リヨウマは後ろを見ると、エイルマツトの腹にエヴァの拳があった。エイルマツトはエヴァの攻撃で血を吐き、その場に倒れた。

「ゴフツ!?!」

リヨウマは急いでエイルマツトを呼ぶ。

「師匠!!ハッー！」

その直後、エヴァが目にも止まらぬ早さでリヨウマに接近した。

「クソツ！」

リヨウマは刀を降り下げるが、またしても、指で受け止められる。

「ば……………馬鹿な……………!?!」

するとエヴァの手から黒い光粒子が集まり、それをリヨウマにぶつめた。ぶつかった瞬間、とてつもない衝撃音が鳴り響く。

一方、城内では、突然、衝撃音と地面が揺れて、皆はパニックになっていた。

「何だ!?!」

陽弥が言った直後、国王が持っていた武器を抜刀し始め、皆に報告する。

「ブライ……………カンベエ……………セイリユウ……………そして傷ありと籠の若造もやられた……………」

「ええく!!!」

皆は驚き、ローレライが口を抑える。

「そんな……………」

その直後、国王は城門を睨みながら言う。

「来た……………」

すると海の中なのに風が吹き、城内にいる陽弥達を恐怖させる。すると国王は腰部にある短剣をそつと抜き、息よいく、城門に投げつけた。

「フツ！」

投げつけた短剣は城門を突き破ると同時に国王は剣を持ち、城門へと走り、城門ごと破壊するとその横にエヴァが

おり、手に持っていた短剣を捨てた。

「行くぞ！」

「分かりました！」

国王が槍を持った王妃に言い、迎撃する。

「ハア〜!!」

国王が剣を突き付けると、エヴァは脇を広げ、剣を掴む。国王は剣を抜こうとしたが、びくともせず、エヴァは掴みとった剣をへし折った。それにより、倒れた国王はへし折られた剣を見て、驚く。

「そんな!?家宝の剣が!……………っ!」

するとエヴァは国王の首を締め上げ、気絶させる。そして王妃が槍を突きつけてきた。

「貴方!……………っ!」

しかし、エヴァは高く飛び上がり、王妃の後ろに回り込み、国王と同じく、首を締め上げて気絶させる。するとローレライがエヴァに飛びかかった。

「よくも!お父様とお母様を!」



ローレライがエヴァを動かそうとしたけど、エヴァは何も動かず、ローレライを背負い投げした。

「ギャアッー」

ローレライは倒れ、起き上がろうとした瞬間、エヴァはローレライの首を締め上げ、気絶させた。

エヴァはローレライから離れると、後ろから龍装光をした陽弥とルナが太陽神剣と月光神剣を振りかざしてきた。しかし、エヴァは太陽神剣と月光神剣を指で受け止めると、陽弥達に言う。

「ほお、2体の銀河七聖龍の加護を持つ者か…………… さっきの龍の若造も銀河七聖龍の力で良い戦いをしてくれたよ」

「クツッ！」

陽弥が舌打ちをし、オムニブレードを展開すると、エヴァの蹴りが陽弥の横腹に直撃し、陽弥は吹き飛ばされた。

「それだけか……………？」

ルナは急いでエヴァから離れ、エミリアを守ろうと、前にたった。「愚かな人類よ！我の名は”永遠のエヴァ”！新しき四將軍の一人だ！」

「三「四將軍!?!?!」」

皆が驚き!!アレクトラが言う。

「つまり……………新キャラって言う感じか……………」

「その通りだ…………… 人類とヘルガストのクォーターよ…………… 嫌…………… 皇帝スカラー・ヴィサリの末裔よ……………」

「ハッ!?私か!?皇帝の末裔!?冗談でしょ!?私の親父とお袋は正真正銘ヘルガストと人間だぞ、おい!?!」

「そう言うのは無理がある。何しろ、貴様の父親は捨て子だったからなあ……………」

「え!?すると女帝ヘラは!?!」

「…………… お前の曾祖母にあたる人物だ。」

「そんな!?何でそんなことがっ!?!」

その直後、エヴァは目にも止まらぬ速さでアレクトラの所に立ち、アレクトラの腹に峰打ちした。

「お前のDNAと神経質をスキャンしたのさ……………これだから  
ヘルガスト人は……………」

「クソ……………」

アレクトラはお腹を抑え、気絶した。

「アレクトラ!!」

ソフィアが叫び、持っていたアーガスライフルをエヴァに向けた。

「邪魔だ……………」

するとエヴァは気絶して倒れたアレクトラを掴み上げ、ソフィアと  
ヴィヴィアン方に投げた。

「キヤアツ!!」

「ソフィア!!」

瓦礫の中から吹き飛ばされた陽弥が叫び、エミリアを守っているル  
ナに言う。

「ハッ！ルナ！エミリアを連れて逃げろおおおお！」

「わかっ！」

「させるか!!!」

エヴァが何をしたのかルナがまるで時間が止まったかのように、動  
きが止まった。

「ハッ……………!?!」

「ルナアアアアアア!!」

陽弥が叫び、急いでエミリアの方に走り、エミリアの手を掴み、そ  
の場から離れようとした。

「クッ……………クソッ！」

だが、エヴァは飛び上がり、陽弥とエミリアの前に立つ。

「無駄なことは止めろ……………」

陽弥は太陽神剣を構え、必死にエミリアを守ろうとしていた。

「絶対に……………渡さんぞー！」

するとエヴァの腕が陽弥の胸に直撃し、陽弥はお腹を抑えて、苦し  
む。

「っ!!」

「いい加減無駄な行為は止めろ。」

「まだ！……………終わって……………!!!」

「……………ゲームオーバーだ……………坊や……………」

「ふぎけんな……………！」

「それと……………」

そして、殴られる音がして、辺りが静かになると、城門から気絶したエミリアをかついだエヴァが出てきて、「プロフェッサー”E””に通信し、報告する。

「こちら、エヴァ……………エミリア・ヴァルネア・クリーフの捕獲に成功……………そして任務完了致しました。」

『良し、ではアヴァロンに帰還せよ……………そろそろ、計画を開始するぞ……………』

「了解しました……………」

エヴァは「プロフェッサー”E””の通信を終えると、空を見上げた。「プロフェッサー”E”……………貴方は何故この姫様をそんなに興味をお持ちですかねえ……………」

そして、エヴァはその場で、ワームホールを開き、気絶したエミリアを連れて、アヴァロンへと帰還した。

朝になり、陽弥達は悔しがっていた。国王は城の最上階に上がり、空に向かって、念仏を唱えていた。

「本当にエミリアの居場所が分かるのですか？」

手に包帯を巻いたソフィアが言う。

「大丈夫、お父様を信じて……………こう見えてお父様は星の核と心が通じ会えるのですから……………」

首に包帯を巻いたローレイが言う。包帯だらけの八人衆が陽弥達に謝罪する。

「恩人にすまんことをした……………俺たちがいながら……………」  
するとアレクトラが言う。

「アンタ達のせいじゃないよ……………あの墮天使野郎！私が高家のヘルガスト人の女性だと分かっていながら、皆には強気な攻撃なのに、私だけ手加減しやがって……………私だけ弱いもの扱い!?……………今度会ったら、絶対にアイツの翼を引きちぎって後悔させてやる……………!!!」

アレクトラは怒りながら、歯を食い縛り、拳を強く握り締めた。そして腕と頭に包帯巻いた陽弥が言う。

「エミリアを絶対に助ける！」  
すると国王が皆に叫ぶ。

「……………っ！分かったぞおおおおお！」

国王が報告すると皆一斉に問う。

《何処です!?!》

「惑星ホライゾン!!!そこにあの姫さんが捕らわれている!!」

「よし！直ぐそこに行こう！」

「待つんじゃ！」

「何故です?!」

「惑星ホライゾンには……………アジマス連邦兵達がわんさかい……………何故なら……………」

その頃、エミリアは王座の間に倒れていた。

「うくん……………ここは……………?」

エミリアが目を覚ますと、何処からか声が聞こえた。

『ようこそ……………姫殿下……………ここはアヴァロン……………』

するとライトが付けれられ、エミリアの前方に玉座に座ったプロフェツサー”E”が照らされていた。

「貴方は……………!?!」

『これはこれは……………申し遅れました……………私の名はプロフェツサー”E”……………偉大なるアジマス陛下の側近でございます。そして……………』

プロフェツサー”E”の頭上から両腕を鎖で縛られ、吊り下げられているアジマス陛下が下ろされていた。

『ハア、ハア、ハア……………』

『え?!』

エミリアはアジマス陛下を見て、何が何だか分からなくなり、混乱していた。

『哀れな……………捕らえた奴隷を全て……………解放しようとする戦争を止めさせようとした馬鹿な機械人形の王……………アジマス陛下でございませう。』

すると吊り下げられているアジマスがプロフェツサー”E”に怒鳴り上げる。

『プロフェツサー”E”!!お前は会った時からこれを狙っていたのかか!!!!?だが、我をこの様な事をした罪を受けるが良い!』

『それはどうですかなあ……………?』

すると別の門が開き、中から鎖で縛られたβとΣ……………そして二人に繋がれている鎖を持ったγと青から緑の発光しているイプシロン皇太子がβとΣにエナジーブレードを突きつけていた。

『B!Σ!それに……………γ!イプシロン!何故だ!?!』

『陛下!……………γは……………最初からプロフェツサー”E”の仲間だったのです!イプシロン皇太子はプロフェツサー”E”のナノウイルスでブレインジャックされています!!!』

『何だ?!』

アジマスは驚くと、プロフェッサー”E”が笑う。

『ハハハ！こんな事もあるのかと最初から対策をしていたのですよ！』

すると、アジマスはプロフェッサー”E”を睨む。

『そうか……………ここそ隠れて何かを開発していたのはこれのためだったのか!!!……………”永遠のエヴァ”も含めて……………!!』

「その通りですよ！アジマス陛下！アジマス人は皆！……………私の計画の為の人材だからねえ……………」

『どういう事だ!!!』

『こう言う事です……………アポカリプス！』

すると別の門から、大量の砂見たいな突起物が流れ、段々と、人型へと形を変えると、今度は大きなモニターが現れ、緑に発光する女性の顔が映った。

『何でしょうか……………新陛下？』

『アジマス陛下をスウィートルームへ案内しなさい……………あ！それと、陛下……………このAIの名はアポカリプス……………新しきアジマス四將軍の一人です。』

『もう一人は人工知能!?……………まさか!?……………お前は……………!!!』

『その通りです。全ては私が作った……………嫌……………僕の計画だったのですよ!!!』

するとプロフェッサー”E”は顔に付けていた仮面をアジマスに見せ付けた。

『お！お前は……………!!!』

アジマスは驚くとプロフェッサー”E”が言う。

『……………ああ、この顔の事ですか?……………この顔に付いている傷は前に……………創造者によって付けられた傷ですよ……………まあ、それは置いといて……………』

プロフェッサー”E”がアポカリプスに首をクイッと傾けると、アポカリプスは砂状の突起物『マイクロロボット』を操り、アジマスとΣ



そして、陽弥は空を見上げていた。エミリアを守れなかった事に悔やんでいた。

「……………」  
「どうしたの？」

陽弥の元にルナが問う。

「ルナ……………」

「エミリアさんの事を思っているの？」  
「……………」

「……………」 好きになっただね？」

「……………」 ああ、あの時…………… もっと早く告白して、もっと強ければ…………… こんな事には……………」

「分かるよ…………… お兄ちゃんの気持ち…………… 私も同じ…………… 実は…………… エミリアさんもお兄ちゃんの事が好きだったらしいの……………」

「え……………?!」

「お兄ちゃんの…………… 強い瞳を見て…………… 惚れたらしく、今もエミリアさんはお兄ちゃんに恋心を抱いているの……………」

「……………」 そうだったんだ…………… ルナ…………… 俺、決めた。」

「何を？」

「……………」 エミリアに再会したときに…………… ガチで告って見ようかと思う！」

すると陽弥の顔が赤くなり、拳を握る。  
「おおくく!!! 良し! 私も皇子を応援する!」

「ありがとう! ルナ……………!」  
「おーい! そろそろ行くぞ!」

リヨウマと一緒にエミリアを助けに行くローレイが陽弥とルナ



を読んでいた。

「分かった！……行こう！ルナ！惑星ホライゾンへ!!」  
「うん！」

陽弥とルナはウラノスへ乗り込むと、ウラノスはマーメルド王国から飛び去り、国からローレイライを見送る民と八人衆、国王と王妃が心配そうに見送っていた。

そして、陽弥は心の中で叫ぶ。

「待っていてくれ！エミリア！」

ウラノスはマーメルド王国から離れ、惑星ホライゾン及び、アジマス連邦……現在は新星要塞国家……ネオ・ミスルギ皇国があるアヴァロンへと向かっていった。

## ホライゾン編

### 第18話：ヴァラントール皇国

ワームホールが開き、中からウラノスが現れた。そして目の前に……………

「あれが……………」

「間違いありません……………あれが惑星ホライゾンです。そして……………」

アリスがモニター画面に映った惑星ホライゾンの後ろを映すと黄金に輝く巨体な機械の惑星が見えた。

「あれがアジマス連邦の本拠地……………アヴァロ……………」

「あれが……………?!」

「デ！デカすぎる……………!! あんな惑星型の要塞が国家……………!?!」

「正に総戦力の塊だ……………」

皆はアヴァロンを見て、冷や汗をかくとアレクトラが言う。

「それで……………何処に行ったら良いんだ?」

「アジマス連邦に気付かれないよう……………奴等の本拠地が見えない陸地に大気圏突入して、近くの林へ着陸する……………皆良いわね?」

《了解!!》

陽弥達は敬礼し、ウラノスはアヴァロンが見えない惑星の裏へと大気圏突入した。

大気圏突入し、航空モードに切り替えるとウラノスの目の前に大きな廃墟が見えた。すると陽弥がエミリアの言葉を思い出す。王国の周りには緑の草原で溢れていた事に……。ウラノスは廃墟になったエルシュリア王国に足を踏み入れた。

「ここが……。エミリアが言っていたエルシュリア王国……!?!」

「酷い……。エミリア様の国をこんな風にするなんて……。!」

車イスに乗っているローレイが悲しむ。

「ここまでやるなんて……。アジマス連邦の上の者は気付かないのかよ!?!」

「仕方ないよ……。上の者はプロフェッサー”E”に利用されているんだから……。取り敢えず……。ここでキャンプしよう……。」

陽弥達は廃墟化したエルシュリア王国でキャンプすることになった。

夜になり、辺りは真っ暗……。大気圏外に存在するアヴァロンのせいで星が見えない……。するとウラノスを見張っていた陽弥は舌打ちした。

「これが今のエルシュリア王国か……。クツ!」

すると陽弥は森の方に何かがいることに気付く。

「ん?」

良く見ると、森の中にある木の裏に金髪の少女が隠れて、陽弥を見ていた。

「おい!君!」

陽弥がその少女に叫ぶと、少女はビックリして、森の奥へと逃げる。

「あ！待ってくれ！」

陽弥は逃げた少女を追っていくと、寝ていたルナが起きる。

「うくん……お兄ちゃん？」

陽弥は森の奥へと逃げた少女を追っていた。

「待ってくれ！俺は怪しい者じゃない！」

木の枝のせいで視界を邪魔され、陽弥は枝を払い除けると追っていた少女はいなくなっていた。

「あれ？……何処行っただ？」

陽弥は辺りを搜索すると上の木の陰に隠れている金髪の少女が腰部から短剣を抜き取りだし、陽弥に飛び掛かった。しかし、陽弥は先に気付き、少女が持っている短剣の手首を掴む。

「離せ！話すのです！」

「え?!」

陽弥はその子が持っている短剣を見て驚く。これはエミリアと出会うときに陽弥を刺そうとした短剣と同じだった。

「ねえ！君！その短剣何処で?!」

陽弥が質問すると少女は抗いながら答えた。

「無礼者！私を誰だと思っているのですか?!私はエルシユリア王国第2王女　マリア・ヴァルネア・クリーフですよ！」

その少女の名前に陽弥は驚く。

「ちよつと待って！エルシユリア王国第2王女……!!?お前！まさか！エミリアの妹……!!?」

陽弥が問い出すと金髪の少女”マリア”も問い出す。

「え?!ちよつと待って下さい！貴方様は……エミリア御姉様をご存じなのですか……!!?」

「ああ、今はエミリアを奪還しようこの惑星にやって来たん

だ……………」

「え？惑星!?何の事ですか!？」

「あく!そっか……………この世界の人達は俺らの事を知らないんだった……………」

するとそこに陽弥を追って、ルナが現れる。

「お兄ちゃん？」

「ルナ!何でここに？」

「お兄ちゃんを追ったら、その人が……………」

「ああ、この人は……………えくと……………何だっけ？」

「マリア・ヴァルネア・クリーフです。」

マリアは落ち着いた表情でルナに言う。ルナも驚いた。

「ヴァルネア!?もしかして……………!エミリアさんの……………!!」

「妹らしいんだ。」

すると陽弥とルナの話にマリアが入り込む。

「あおう、失礼ですが、貴方方は何者なのですか？」

陽弥とルナは自分たちが何者でエミリアの事をマリアに話した。

エミリアが惑星型要塞アヴァロンに居り、御両親と一緒にいる事に泣いていた。

「そうだったのですか……………御姉様も……………お父様……………」

お母様……………!!」

「大丈夫ですよ、マリアさん……………私達が必ず、エミリアさん達を取り戻します!」

「ありがとうございます……」

「所で……… 何でマリアがここに？」

「実は………」

マリアは12年前の悲劇の事を話した。あの時……… エルシュリア王国は何事もなく平穏な日常をしていた。しかし、突如……… 空から大きな空舟が現れ、エルシュリア王国を襲撃してきた。彼らは見たことのない鎧を着用しており、兵隊達の攻撃は全く通じなく、民も空舟に強制的に乗せられ、空へと帰っていった。その時のマリアは6歳だったので……… 執事のセバスチャンと女騎士団長のカトリーナに護衛されていて、何人かの民や兵隊達と共にエルシュリア王国に近くて、結界で護られ、交易が盛んな皇国……… ヴァラントール皇国に避難していると……… だけどマリアはこつそりと兵隊達の目を盗みヴァラントール皇国から出て、破壊されたエルシュリア王国の所でエミリアと父と母の帰りを待っているらしいと……… 「そうだったのですか……… だけど、安心して！私達が来たからには、アジマス連邦の好きにはさせないから……… 良かったら、私達の戦艦に来たら？」

「戦艦？」

陽弥とルナはマリアを連れて、ウラノスへと戻った。

陽弥とルナに連れられたマリアはウラノスを見て驚く。

「これは！……… 木馬!？」

「うーん、正確に言えば戦艦ウラノスだけど、これ私達のお父さんが作ったの………」

「ルナさんのお父様が？」

「神殺しのヴェクタ……… 俺らが生まれる20年前……… ドウムと言う邪神の皇が現れて、それに立ち向かったのが、俺達の父さんなんだ……… 母さんも含めて……… それより、行こう……… ウラノスへ………」

「分かった……… マリアさん、行きましょう」

「ええ、」

陽弥とルナとマリアはウラノスへと入っていった。

そして陽弥とルナとマリアは格納庫にいた。

「ようこそ！、種族銀河同盟軍戦艦ウラノスに♪」

「凄いですわ！御姉様はこの舟に乗って…………… あれは？」

マリアが陽弥達の機体を見て、質問する。

「あ！あれはアジマス連邦に対抗するために造られた可変式兵器『セイクリッドメール』と『ラグナメール』よ♪」

「セイクリッドメールとラグナメール……………？」

「私達はこれに乗ってアジマス連邦に立ち向かったのよ♪」

「凄いですわ……………！」

「元々は俺の父さんの機体『パンドラメール』のデータから開発した量産型だけだな、」

「あ！そうだ！皆を呼んでくる！」

「何で？」

「自己紹介！」

ルナは急いでソフィア達を呼びに行くと、陽弥が言う。

「やれやれ、あ！申し遅れた…………… 俺は陽弥…………… 陽弥・ギデオ  
ン…………… ヴェクタ人…………… シン・ギデオンとメールライ  
ダー…………… ヒルダの子だ…………… そして、皆を呼びに行ったのが、  
双子の妹の…………… ルナ・ギデオンだ。」

ソフィア達が集まり、一人ずつ自己紹介する。

「私はソフィア……………古の民……………タスクとメイルライダー……………ア  
ンジユの娘」

「私はアレクトラ……………ヘルガスト人……………ウイルとメイルライ  
ダー……………サリアの娘……………よろしく、」

「拙者はリヨウマ・ネイル……………気軽にリヨウマと……………ドラゴ  
レイド人……………リユウガ・ネイルと指導者サラマンディーネの子で  
御座る。」

『『私はミュー……………訳あつてアジマス連邦から同盟軍に寝返りま  
した。』』

『△です……………ミューと同じく、アジマス連邦から同盟軍に寝  
返った者です。』』

「私はヴィヴィア〜ン！よろしくね♪」

「アタシはメイ、皆の機体を整備する班長よ♪そして……………」  
「エイルマツトだ……………」

「私はアリス……………このウラノスの艦長を務めています。さて、マ  
リア姫殿下……………貴方達が避難しているヴァランドール皇国に  
案内して貰えませんか？是非ともヴァランドール皇国の皇帝に話し  
たいのです。」

「分かりました……………！」

夜が明けると同時にウラノスは浮上し、マリアに従い、エルシユリ  
ア王国の東方にある皇国、ヴァランドール皇国へと発進した。



そして、その頃…… ヴァラントール皇国西側の城門付近で多数の兵隊達がマリアを捜索していた。

《姫様〜！何処にいらっしやるのですか〜!? マリア様〜!》

その中に鎧を着た女騎士とタキシードを着た老人がいた。

「あく〜!! どうしよう! マリア様がアジマス連邦かオーク達に捕まっただけならば……! 連れ拐われたアストラッド国王とアリシア王妃とエミリア姫殿下に何て言えば……!?!」

「大丈夫ですよ、マリア姫様もエミリア姫様も国王と王妃もアテナイの国王と王妃や王子、民達もきつと生きています……!」

「セバスチャン……!」

二人は心配そうにしていると城門から馬に乗って駆ける兵がカトリヌに報告してきた、

「申し上げます!! 皇国東方面からオーク軍が来ている!」

「何だっ!?」

二人は急いでヴァラントール皇国東側城門へと向かっていった。

東側城門外では、既に戦場になっていた。分厚い鎧を着たオークと無数に来るゴブリン、そして…… 鋼鉄の棍棒を振り回しまくるトロールがヴァラントール皇国兵達を血祭りにする。

「オラア! 酒と食い物と女を寄越せ!!」

「誰がお前ら見たいな解せんな者に!」

ヴァラントール皇国兵が盾を構えるがオークの弓部隊が弓矢を構え放ち、ヴァラントール皇国兵を殺していく。それを丘から見ているオークの首領、ドルバフの弟…… ガムルが年老いたゴブリンの参謀と笑っていた。

「ヒヒヒ…… 親分上手くいきましたねえ?」

「だろ?、アジマス連邦の奴等が三大国同盟と殺り合ったおかげで、この砦の守備力も薄くなったよ! そおれ! どんどん攻めろお!!」

ガムルが叫ぶとオークとゴブリン、トロール達が雄叫びを上げる。  
「もうダメだ………！」

ヴァランドール皇国兵達が圧される直後、後方から馬に乗った鎧騎士達が剣と盾を構え、オーク兵達の中を駆け巡り、剣でオーク達の首を切り裂く。

「大丈夫か!？」

鎧騎士達を先導していたのはエルシユリア王国騎士団長カトリーヌは倒れているヴァランドール皇国兵を救出する。

「カトリーヌ騎士団長！」

「負傷した兵達の回収を最優先！弓兵！構え！」

カトリーヌが剣を突き上げると城門の見張り台からヴァランドール皇国弓兵が列ずつ並び、ヴァランドール皇国将軍アトラスが叫ぶ。

「放てえ!!」

アトラス将軍とカトリーヌ騎士団長が同時に剣と手を振り下げると、弓兵は一斉に弓糸を引き離し、矢が舞い上がり、そして雨のようにオークへと降り注ぐ。それを丘から見ていたガムルがとゴブリン参謀が驚く。

「親分！カトリーヌ騎士団長です！」

「フン！あの女に快樂を教えてやるぞ！」

するとガムルの後方から、巨体な大砲が現れた。

そして、カトリーヌは必死に剣を振り下げ、オークやゴブリンを切り裂いていった。

「クツ！コイツら！これだけの戦力なのにどうして!？」

「騎士団長！敵の魔導砲です！」

「何!？」

カトリーヌが見た先に四輪の馬車に乗せられた巨体な大砲が真っ直ぐ、城門を向かっており、砲口から紫に輝く光が集まっていく。

「まずい！全員！退避!!退避!!」

「撃てえ!!」

カトリーヌが兵隊を退避させるが遅かった。魔導砲の砲口から紫

の粒子が放たれ、結界が張られている城門が破壊された。それを見た  
ヴァランドール皇国兵とカトリーヌ達は驚く。

「結界がっ!?!」

その時、カトリーヌの後方からガムルが笑い声を上げながら歩いて  
くる。

「ハハハハ!!カトリーヌ!残念だったなあ!これでヴァランドール  
皇国も堕ちて、俺様の国になる!そしてお前らは…………俺らの家  
畜になる運命なんだよ!!!ハハハハ!!」

「クッ!戯れ言を!!」

「殺ってみろよ!?!」

カトリーヌは剣を持ち、ガムルの腹に突き刺そうとした。

「ハア〜!」

しかし、重装備のオーク兵が槍と盾を構え、カトリーヌの攻撃を防  
いだ。

「っ!?!」

「バカが!」

ガムルは巨大なハンマーを振り下げ、カトリーヌを吹き飛ばした。  
吹き飛ばされたカトリーヌは悔しがっていた。

「クッ…………クッ…………国王陛下…………王妃様…………エミ  
リア姫殿下…………マリア姫殿下…………申し訳ございませ  
ん…………」

そして、ガムルはカトリーヌの体を見て、にやけていた。

「グへへへ〜!!」

「クッ!」

誰もが絶望したその時、何処からか少年の声が聞こえた。

「そうはさせん!!」

「何だ!?!」

ガムルが上を見上げると、太陽の彼方から、龍装光をした陽弥が落  
下して来た。そして…………

「剛火炎!!」

陽弥は落下しながら、剛火炎を放ち、カトリーヌの周りにはいる

オークとゴブリン兵を焼き尽くす。

「何だ!!?」

「太陽神剣!!」

陸地に着地した陽弥は太陽神剣を抜刀し、重装備のオーク兵とゴブリン兵、そしてトロールを切り裂いていく。

「何なんだアイツは!!お前ら殺れ!!」

重装備のオークとゴブリンとトロールが陽弥を囲んだ。

「いくら強くても……………この数は無理だろうがな……………!」

ガムルが笑うと今度は女性の声が聞こえた。

「それはこっちの台詞よ!」

上空からセイレーンが現れ、龍装光をしたルナは現れ、絶対零度を放った。

「絶対零度!!」

オークとゴブリン兵が凍り付き、陽弥は遠隔操作でアーキバスIIを呼び、アーキバスIIが飛来し、それに乗り込んだ。それに続き、龍装光をしたリヨウマも現れ、雷竜破を放つ。

「雷竜破!!」

漆黒と稲妻の龍達がトロール達の腹に風穴を開けていき、そして、森の方から、ウラノスが飛来し、強襲ミサイルで、オーク達を撃破していく。その強さにオークやゴブリン達が森の方へと逃げる。

「お前等あ!!逃げるな!!臆病者が!!……………っ!」

ガムルが叫ぶと、上空から陽弥のアーキバスIIが降下した。そしてガムルは後ろを振り向き、冷や汗をかきながら、笑う。

「ハハハハ……………ハハハハ!!何だコイツ……………機械の癖に赤色してやがる……………」

「そりゃ、どうも……………!」

陽弥はガムルに返事を返すと、アーキバスIIのヒートアサルトブレードを抜刀し、ガムルを真っ二つにした。ガムルが真っ二つにされた事により、オーク達は陽弥のアーキバスIIを見て、怯えながら森へと撤退していった。

「撤退!撤退!!」

戦場にはオーク軍一人居らず、ヴァランドール皇国兵達だけが残っていた。カトリーヌは陽弥達の機体を見て、啞然していた。するとアーキバスⅡのコックピットハッチが開き、中から陽弥が出てきた。そして陽弥はカトリーヌに近付き、カトリーヌに安否確認をする。

「大丈夫？」

「え?! ええ、貴方達達は一体何者だ？」

「カトリーヌ!」

すると着陸したウラノスからマリアが現れ、カトリーヌへと走ってきた。

「姫様!」

セバスチャンとカトリーヌが走ってきたマリアを抱き締める。

「よくぞ(ご)無事で……………!」

するとマリアは陽弥達に指を指した。

「助けて貰ったのです!」

「姫様…………… 彼等は一体何者なのですか? アジマス連邦と同じ空飛ぶ舟をお持ちですが……………」

すると陽弥はカトリーヌとセバスチャン、ヴァランドール皇国兵達に答える。

「俺たちは…………… アンタ達の世界を救いに来た…………… 種族銀河同盟軍だ…………… !そして…………… エミリアを救いに来たんだ…………… !」

突然、陽弥がエミリアの名を言ったことに、カトリーヌとセバスチャンは驚く。

「エミリア姫殿下を救いに! エミリア様は(ご)無事なのですか!？」

「すまん…………… 途中で…………… 連れ拐われたんだ。」

「まさか…………… 奴隷に!？」

『いいえ、それはあり得ません…………… 』

すると陽弥の所にミューが来た。

「アジマス連邦兵!」

カトリーヌとセバスチャンとヴァランドール皇国兵が叫び、皆、武器を構える。

「待て！待て！ミューと△はアジマス連邦から裏切ったんだ……………俺達の味方だ。」

「そうなのか……………？それより、いいえとはどう言う事なのだ!?説明してくれ！」

カトリーヌ達が武器をしまうとミューが説明する。

『アジマス連邦は皆様方々の場合…………… 奴隷として捕獲しますが、エミリア様の場合…………… プロフェッサー”E”が連れて来させろと、なります。』

「エミリアは特別扱いか…………… でも、何でプロフェッサー”E”はエミリアをそんなに……………？」

『分かりません…………… だけど、言える事は…………… 先のメトロでの戦闘で、彼女の歌に鍵があると判明…………… それにより、陽弥とルナのヘリオスとセレーネの力が覚醒したことです。』

「俺達の……………？」

「それって…………… 御姉様が歌っていたものですか？」

突然、マリアが驚愕な事実を話した事に陽弥達は驚く。

「知ってるの……………!?」

「え!?はい…………… 私が眠れない時に…………… エミリア御姉様が歌ってくれたのです。」

「それって…………… どう言う歌…………… !?何か…………… ラグナつて…………… 言っていた??」

「う〜ん…………… あ…………… はい！言ってみました！」

「やっぱり！」

「家のママとサラマンディーネさんが歌った永遠語りなら録音してあるよ……………！」

ソフィアはポーチから録音機を取りだし、スイッチを入れると、まだ若い頃のアンジュが歌っていた永遠語り”光の歌”とサラマンディーネの”風の歌”を再生するとマリア達も驚く。

「あ！似ている……………！この歌…………… エミリア御姉様の歌に似ている……………」

「本当だ…………… 確かに似ている……………」

「と言うことは…………… エミリアが歌ったあれは…………… アン  
ジュさんとサラマンディーネさんと同じ…………… 永遠語りだったん  
だ…………… !けど、それとエミリアと何の関係してるん  
だ……………?!」

「『分かりません…………… 只、言える事は一つです…………… エミリ  
ア様とアジマス連邦は何かと関係しております……………』」

「あとう……………?」

するとセバスチャンが二人の話に割り込んだ。

「『何?』」

「それなら、このヴァランドール皇国の皇帝…………… リチャード陛  
下にその事を話してはどうですかなあ?その方が良いと思いま  
す……………」

セバスチャンの言う通りにして、陽弥達はヴァランドール皇国の国  
皇 リチャード”に会ってみた。

アリスは王座の間でリチャード国皇と謁見し、ホログラム映像を  
使って、説明した。そして、リチャードは納得したような表情で悩む。  
「種族銀河同盟軍か…………… 我々の他にもアジマス連邦と戦っ  
ていた者達がいたとは…………… そしてエルシユリア王国の第  
一王女が連れ去られたとなると…………… 三大国家も大変な事態に  
なるなあ…………… それとエミリア姫のその歌が鍵を握っている  
と…………… ううん…………… 難しくなるなあ…………… 良し!一応、こ

の事は三大国家の二つの国の王達に知らせとく…………… それ  
と…………… 第2王女を君たちはヴァランドール皇国で、滞在して、休  
んでおくれ、疲れを取らぬと…………… 後で、筋肉痛になるから

なあ……………」

「有りがたき光栄です……………」リチャード陛下、

「うむ、下がってよいぞ……………」

「では、」

アリスはリチャード陛下に敬礼し終わると、王座の間から出ていった。

その頃、陽弥達はヴァランドール皇国城下町を観光していた。ウラノスは港の邪魔になると思い、港に近い小さな山に待機している。港には多数の島々に住む部族や村の物資が交易船から運ばれており、屋台が並んでおり、その土地や他の大陸の料理を出品したり、調理していた。

「文明レベルは西洋と北欧の異文化だね、」

「だな、それに……………」エミリアのいった通り、本当にここは良いところだ……………」故郷と同じで……………」皆穏やかで、優雅に暮らしている。それと交易も盛んだなあ……………」

「そうだねえ、」

陽弥とルナが満喫していると陽弥の元にヴァランドール皇国に住む子供達が訪ねてきた。

「ん？」

「ねえ、ねえ！お兄ちゃん達って、何処から来たの？」

「変わった洋服着てる」



「何これ？」

すると男の子が陽弥の腰部に収納していたマグナム式ブラスター

『フアランクス』を抜き取ってしまった。

「わ！それは触っちゃ駄目だよ!？」

陽弥は急いでフアランクスを収納する。

「え？何で？」

「何でなの？」

「これは子供や此処の人達には危険すぎる武器なんだよ。」

「ふくん…………… どのなの？」

「どなのって……………!？」

「…………… うくん、分かりやすく言ったら…………… 魔法が使えない人の為の武器みたいなものだ。相手に直接、魔法弾をぶつける感じだ。」

それを聞いた子供達は関心する。

《凄くいい!!》

「スゲエよ！兄ちゃん達！俺達の世界を救うために、空からくるアジマス連邦と戦ってるんだろ？俺も兄ちゃん達見たいな強い兵隊になれたら良いなあ〜」

「強い兵隊？…………… ハハハ、止めときな…………… 俺ら見たいな軍人よりも、この世界の兵隊になった方が、楽だぜ……………」

「えく!?だって、兄ちゃん達…………… あんな凄い機械人形を使って戦ってるんだろ？俺も使いたいくくく!!戦って見たいくく!!」

「ハハハハ……………」

陽弥はさらに、自分たちの故郷の事を教えた。

一方、リヨウマは車イスに乗っているローレライが屋台にある装飾物や装飾品を見ていた。

「これはどうですかね、リヨウマ様？」

「うくん…………… 確かに、これも良いが、」

二人の仲はまるで、新婚さんの様だったその光景を見ていたソフィアはプルプル震えながら、悔しがっていた。

「アイツ等…………… 何やっているの……………?」

「二人の両親から何か土産物を買ってきて来れって、なっているんだよ……………私も言われたからねえ……………親父が太古の地球に存在したお菓子『カステラ』って言うケーキが食べたいって言うけど、あつちでは値段が高いのにこっちは激安かったから今から買いに行こうと思っっているんだ。」

「そう、行つてらっしゃい……………」

「ほな、行つてくるゝ♪……………」

陽気なアレクトラはカステラが売っている店へと向かっていくと、一人になつたソフィアが心の中で、叫ぶ。

「……………私だけ、頼まれてないって言うのはどう言うこととおおおおお!???」

そして、ヴィヴィアンは能天気な、屋台に売られている焼きイカをメイと食べていた。

「ここの焼きイカも！超々美味しい♪」

「ヴィヴィアン、良く食べるね〜?」

「当たり前でしょ♪、私の胃袋はブラックホールだからなっ♪」

「ハア〜……………もつと食っていたら、お金がすつからかんになつちやうよ?」

「大丈夫！大丈夫〜♪」

相変わらず、ヴィヴィアンは能天気だった。

その頃、とある廃墟となつた洋館近くにある鉱山ではオーク軍がいた。そしてそこに、ガムルと一緒にいたゴブリンの参謀がおり、オークのリーダーに報告した。

「お頭！お頭！」

「どうした……………？」

「お頭の弟……………ガムルが殺られました！」

ゴブリンの参謀の報告でオークの首領であり、ガムルの兄バモラは持っていたワイングラスを落とし、疑問な表情でゴブリンの参謀を睨んだ。

「何……………？」

バモラが立ち上がると座っていた椅子を蹴り飛ばし、ゴブリンの参謀の首を掴み、締め上げる。

「冗談も程々にしろ……………！ガムルが殺られただと……………!?誰にだ……………!?アジマス連邦なら仕方ないが……………誰に殺られたんだ……………!?」

「種族銀河同盟と名乗る奴等です……………!!アジマス連邦と同じで別の世界からやって来たのです……………!!」

するとバモラは参謀を首を離し、質問する。

「種族銀河同盟……………何だソイツ等は……………？」

「へ……………奴等はエルシュリア王国第2王女 マリア・ヴァルネア・クリーフを保護し、現在ヴァランドール皇国に滞在しております……………！」

「ほお……………ソイツ等は……………見たことのない機械人形と天駆ける木馬を持っているのか？」

「へい……………奴等はアジマス連邦に対等するために使っているのです……………！」

するとバモラが考え込み、数秒後に何かを思い付いた表情をした。  
「……………もし……………俺らがそれを持っていたら？」

「え!?俺たちが種族銀河同盟の木馬と機械人形を持っていたら……………っ……………あゝ、」

ゴブリンの参謀もバモラの考えている事が分かり出すと、ゴブリンの参謀も笑う。

「武器を持って……………！」

「へい……………」

バモラが命令を出し、ゴブリンの参謀がオーク達に知らせる。ゴブ

リンの参謀が去ると、バモラは扉を開き、中から機械でできたコンテナを取り出した。

「さてと…………… 木馬と機械人形を奪いに行くか…………… それと……………」

バモラはコンテナを開けた。

「こいつを試すときが来たぜ……………！」

中に入っていたのは美しい刃を持つ細剣が入っており、細剣の周りには植物が生えており、その剣の翡翠色に輝く宝石が付けられている。バモラはそれを見て、笑う。

## 第19話：妖精神龍

陽弥とルナは子供達に故郷の事を教え終えたとウラノスに戻ろうとしていた。

「疲れた〜」

「そうよねえ、色々あの子達に教えたから、」

「そうだけど………… あれは、焦ったなあ、」

「銃を取り出した事？」

「それ、あれはビックリしたし、冷や汗かいたぞ……………」

その時、陽弥の後方からフードを被った人物が走ってきて、陽弥の腰部に収納されているフランクスを盗んだ。

「あの野郎………… !!待てっ!!」

「ちよつと!……………」

「皆!急いで来て!緊急事態なの!」

その頃、陽弥はフランクスを盗んだフードの人物を追っていた。  
「待つんだ!お前!!」

フードの人物は華麗なアクロバティックを使い、路上に置かれている物資を軽々と回避していく。それに続き、陽弥も回避する。するとフードの人物は腕からワイヤーが飛び出し、2階建ての建物の屋根に引っ掻けると、それをよじ登り出した。しかし、陽弥は問答無用で走り高跳びし、よじ登っているフードの人物に飛び付いた。

「返せ!」

「チッ!」

フードの人物は陽弥を振りほどこうと陽弥の顔面に蹴りを入れようとしたら、陽弥はその蹴りに気付き、片手で蹴りを防いだ。

「まだだ！」

フードの人物はワイヤーを回し、陽弥ごと、屋根に登った。

「とつとつ、離せ！」

フードの人物は空手チョップで陽弥の首に打とうとしたが、陽弥はフードの人物の空手チョップを白羽取りで防御する。

「出来る！」

「お前こそ！」

陽弥は腕からオムニブレードを展開すると、フードの人物も腕から緑に輝くオムニブレードを展開した。それを見た陽弥は驚いた。

「オムニブレード!?..... しかも緑?!」

二つのオムニブレードの刃がぶつかり合い、両者睨み合う。

「そろそろ、本気出すぞ！」

「それはこっちも同じだ！」

二人はオムニブレードを斬り付けたり、回避したりとの戦闘だった。すると陽弥とフードの人物の口元が少しだけ、笑っているかのような表情をしていた。

「ここまで中々やるのはお前が初めてだ！」

「ありがとうっ！」

フードの人物が陽弥に言い返すと、オムニブレードの刃をロング状に伸ばし、陽弥に斬りかかった。すると陽弥はオムニブレードを収納し始め、オムニシールドを展開した。

「何っ!？」

「貫ったあああ〜!!」

陽弥が叫び、フードの人物の腹に蹴りつけた。フードの人物は倒れ、立て直そうとすると陽弥のオムニブレードが彼の股の谷間に目掛けて、突き刺した。

「ヒッ！」

すると陽弥はオムニブレードを抜き取り、フードの人物の首もとに刃を近付けた。

「今のはわざとだ……さっさと俺のフアランクスを返せ……！」

するとフードの人物は大声で叫んだ。

「……ハア〜！やられた！やっぱり強いなあ!？」

「当たり前だ……俺を誰だと思ってるんだ？」

「分かってる、分かってるって……シン・ギデオンとヒルダ・ギデオンの子供……陽弥・ギデオンだろ？」

フードの男は出会ったこともないのに陽弥と父親と母親の名前を言ったことに陽弥は驚いた。

「え?!何で俺の名前を……!？」

「説明はまた今度♪……はいこれ、返すよ♪」

フードの人物はフアランクスを取りだし、それを陽弥に投げ返した。

「あー！」

陽弥はそれを受け止め、フードの人物を見ると、既にフードの人物は消えていた。

「あれ……?!消えた……！」

陽弥はそのまま、ルナ達の所に戻った。陽弥が居なくなった事を確認し、光学迷彩でステルス状態を解除したフードの男は屋根から降りると、腕の端末から通信音が鳴る。男は直ぐに通信を開くと、モニター画面に緑の髪の色をしており、見たことのない服装をした美女が映っており、怒っていた。

「もう！ルーカスさん！何やっているのですか!？」

「あく、悪い悪い、ちよつと相手したかっただけなんだ。今度、シタデルでデートしてやるから、勘弁してくれ……?」

「本当ですか!？」

「本当だよ……だから、おとなしくそこで待っているんだぞ……俺のプリンセスさん……」

「分かりましたわ!…… my darling♪」

美女は顔を赤くしながら、フードの男にウインクで返した。

「ハハハ……それじゃ、愛してるよ♪」

「私もよ♪」

フードの男と美女の通信が終了すると、男は空を見上げた。

「デートするために、早いとこ奴を拘束しなきゃなあ……………」

フードの男…………… ルーカスは光学迷彩を使い、行動した。

陽弥はルナの所に戻ると、ルナが慌てていた。

「お兄ちゃん……………！ファランクスは!？」

「返してくれた……………なんか、俺と戦って見たかったって……………」

「そう、良かったあ……………あ！それより、大変なの!？」

「大変って……………何が?」

「ヴァランドール皇国の偵察兵の報告によると、オークの軍隊がこちらに迫っているの!？」

「何だって!？」

陽弥とルナは急いで、城門へと向かっていった。

城門の砦には既に弓兵や射兵と城門には重装備の兵隊達に守られており、大砲も用意されていた。

「何が起こったのですか!？」

馬に乗ったカトリーヌが説明する。

「どうやら、お前達が殺ったオークの將軍ガムルの兄バモラがかなり



の大軍を連れて、復讐しようとしているんだ。しかも、多数の魔導砲も確認された。いくら、お前達の戦力でも、あれだけの強力な魔導砲では勝てません」

「心配するなつて！」

「え?!」

「俺らにはセイクリッドメールとラグナメールがあるから大丈夫！」

「セイクリッドメールと………ラグナメール………!?」

陽弥達はウラノス（アトラス）に戻り、急いで自分達の機体に乗り込み構えた。

そして、数分待つと、森林からオーク軍が突撃してきた。それを確認したカトリーヌは城門の上にある見張り台にいるアトラス将軍に合図した。

「来ます！」

「弓兵隊！射兵隊！構え！」

アトラスが命令すると、弓兵が斜め45度に矢を引き構え、ボウガンを持った射兵も構える。

「まだだぞ！」

アトラス将軍が兵隊達に敵がさらに近付くのを待つ命令をする。

「まだだぞ………！」

アトラス将軍はさらに待ち、オーク軍がヴァランドール皇国兵隊の数メートルに近付いた直後、アトラス将軍が命令をした。

「放てえええええ!!」

一斉に砦から無数の矢が放たれ、雨のように降り注ぎ、オーク軍を一掃する。そして、カトリーヌも叫ぶ。

「掛かれええええええ!!」

カトリューヌと共にヴァランドール皇国兵達は、槍と盾を構え、突撃に入り、矢で混乱していたオークの胴体に向けて、刃を突き刺した。そして、上空から見ていたウラノスもカタパルトハッチが開き、陽弥達が発進準備をしていた。

「陽弥・ギデオーン！出る！」

「ルナ・ギデオーン！出ます！」

「ソフィア！出るよ！」

「アレクトラ！行くぜ！」

「リヨウマ・ネイル！参る！」

陽弥達は一斉にカタパルトから発進して、ヴァランドール皇国軍の援護に向かう。

陽弥のアーキバスⅡのプラズマビームライフルがオーク達を焼き付くし、ルナのセイレーンのスタッフからシャイニングランサーを展開し、上からオーク目掛けて、光の槍の雨が降り注ぎ、ソフィアのエリザベスのラツイーエルがトロール6体を回転切りで真つ二つにし、アレクトラのバスターライフルがゴブリンの群れに向けて発砲し、リヨウマの鋼龍號がワイバーン形態でオーク達を掴み上げ、そのまま、落としながら、口からビームバスター砲を放つ。その光景にヴァランドール皇国兵達は唾を飲み込んでしまった。

「凄い……………！我々が苦戦したオーク達が……………意図も簡単に容易く倒すなんて……………種族銀河同盟……………」

我々はとてつもない味方を付けてしまった……………！」

すると森の奥深くから紫に光る魔導弾が多数発射された。

それに気付いた陽弥はシールドで防ぐ、そしてウラノスにいるアリス艦長に通信する。

「あれだな！アリス艦長！あの魔導砲は危険です！援護を！」

すると、ウラノスが下の方に斜めに転回すると、副主砲を森の方に向けた。

「ゴットフリート！撃てえ!!」

主砲から翠の光線が発射され、森の中に配備している魔導砲に直撃

し、爆発した。その爆発を見て、カトリーヌとアトラスは唾然していた。

「何と言う破壊力だ……！」

焼けた森の奥の方から巨大なハイエナ型の獣に乗ったバモラが怯えているオークに怒鳴る。

「何をやっているんだ!!!お前ら!!」

「しかしバモラ様!いくらなんでもあんな強すぎる相手じゃ……っ!」

すると、バモラは鞘に収納していた細剣を抜刀し、オークの首に突き刺した。

「気合いで殺れや!気合いで!ったく!どいつもこいつも役立つがっ!!それじゃ、あの機械人形と空舟が手に入らねえだろ!仕方ねえ……今、使うか……」

バモラは首に刺さったオークの死体からレイピアを抜き取り、陽弥達の前に姿を現した。それに気付いたヴァランドール皇国兵達はカトリーヌに報告する。

「カトリーヌ騎士団長!!バモラです!」

「何?!」

カトリーヌが見ると、確かに森の中から、巨体なハイエナに乗っているバモラを見て、叫ぶ。

「アイツを殺れば……!全軍!一気に押し込め!敵将!バモラの首を狙え!」

「馬鹿め!お前らだけ良い味方と戦力を持っていると思ったら大間違いだぜ!」

すると、バモラは鞘からレイピアを取りだし、呪文を唱え始めた。すると、レイピアが紫に光り、輝き始めた。

「古より復活せし、目覚めよ!……そして、黒き闇の胞子で敵を黄泉へと還らせよ!……!出でよ!闇妖精精神龍!ダークネス!



「ちよっ!!」

陽弥が止めようとしたが、ソフィアは陽弥の忠告を無視し、ダークネス・フェアリー・ドラゴンの後を追って、城下町内へ入った。

「たくっ! アイツは!.....っ!」

その時、森林からオーク軍の魔導砲が陽弥達に目掛けて、発砲した。「クソッ! アイツ等はどれだけ魔導砲を持っていやがるんだよ!?! 行くぞ! 皆!」

「「おう!」」

陽弥達は森林から放つ魔導砲を迎撃しに向かった。

その頃、城下町では、家が燃え、沢山のヴァランドールの民達の悲鳴が聞こえていた。そこにエリザベスに乗っているソフィアがダークネス・フェアリー・ドラゴンを搜索していた。

「何処?!? 何処なのよ! あのドラゴン.....!」

すると、西の方向からドラゴンの咆哮が聞こえた。

「あっちか!?!」

ソフィアは西の方へエリザベスを旋回させ、向かうとそこにはいなかった。

「ええっ!?!」

ソフィアが驚くと、今度はソフィアがいた北の方からドラゴンの咆哮が聞こえてきた。

「何処に行くのよアイツは!?!」

ソフィアはエリザベスを旋回して、向かうとそこにもいなかった。

「..... 何処にいるのよ!?!」

ソフィアが怒鳴ると、あることに気付く。まるで..... 誘

い込んでいるかのようにな……

「っ?!……………まさか……………」

その時、ソフィアの背後からこの世とは思えない殺気を感じた。ソフィアは冷や汗をかきながら、ラツィーエルとビームライフルを持ち、後ろを振り向くと……………

「ハッ!!!」

ソフィアの目の前に紫の鱗と禍々しい羽を羽ばたかせ、クワガタの様な鋼の顎でギチギチと音を発て、頭に黒緑の結晶を輝かせたダークネス・フェアリー・ドラゴンがデカイ体でソフィア圧迫していた。

「私を……………おちよくつていたのね?!絶対に許さなっ!!」

エリザベスのラツィーエルの刃から光エネルギーブレードを放出した直後、ダークネス・フェアリー・ドラゴンの尻尾が物凄いスピードでエリザベスを風ぎ払った。

「ガアッー」

ソフィアのエリザベスが吹き飛ばされ、瓦礫の中に埋まり、体制を整えようとぶちギレる。

「アイツ……………アタシが弱いと思っていやがる!……………なら!!!」

ソフィアの指輪が光だし、エリザベスの装甲の色が白から青へ変色し、アリエル・モードにチェンジし、次元跳躍を使い、ダークネス・フェアリー・ドラゴンへと向かっていった。

「ママのヴィルキスの能力が使えるー!これなら!!」

ソフィアはダークネス・フェアリー・ドラゴンの後ろに回り込み、ビームライフルを連射する。ダークネス・フェアリー・ドラゴンはビームライフルの粒子弾に苦しみ、後方にいるエリザベスに向けて、口から毒蟲の大群を吐いた。ソフィアは直ぐにエリザベスのモードをアリエルからミカエルにチェンジし、ビームコーティングで毒蟲の攻撃を防御し、光エネルギーブレードを放出したラツィーエルを振り回し、毒蟲を焼き付くした後、アリエル・モードにチェンジし、ダークネス・フェアリー・ドラゴンを迎撃する。

「どうだ!!速くて見えないだろう……………!?!」

調子が良いソフィアだったが、ダークネス・フェアリー・ドラゴンが一瞬にして消えた時、アリエル・モードの次元跳躍システムを使っているのに、エリザベスの後方にダークネス・フェアリー・ドラゴンが現れていた。

「そんな!?!」

そして、ダークネス・フェアリー・ドラゴンが蟲の羽をバタバタと羽音を鳴らし、その超音波と暴風により、エリザベスは吹き飛ばされ、エリザベスは崩れた建物の壁にめり込まれていた。

「嘘……………!?!アタシのエリザベスのアリエル・モードをも超越してるって事……………!?!」

ソフィアはダークネス・フェアリー・ドラゴンを見ると、ダークネス・フェアリー・ドラゴンが口元をクイツと傾け、ソフィアに向けて、にやけ顔をした。それを見たソフィアはついに、頭のネジが取れた。「っ!……………馬鹿にしゃがって!!」

ソフィアは怒り、アリエル・モードの次元跳躍システムでダークネス・フェアリー・ドラゴンの後方に回り込み、ダークネス・フェアリー・ドラゴンもとてつもないスピードでエリザベスの後方に回り込んだ。しかし、そこにエリザベスはいなくなっていた。辺りを搜索している直後、ダークネス・フェアリー・ドラゴンの下方にエリザベスが次元跳躍システムを使って、回り込み、下方からビームライフルを乱射した。

「もつと……………もつと!……………もつと速く!」

エリザベスとダークネス・フェアリー・ドラゴンの跳躍はもう、眼で追い付けないほどの加速し、神速を使って、空気の中での戦いになっていた。その速さは……………マツハ7!!

「こいつ以上に!!」

ダークネス・フェアリー・ドラゴンが尻尾を振り下げると同時に、次元跳躍システムを使い、ダークネス・フェアリー・ドラゴンの頭部へと近付いた。

「この野郎おおおおお……………!!!」

ソフィアは渾身の力を込めて、ラツィーエルを黒緑の結晶に突き刺

すと黒緑の結晶がわれて、中から翡翠に輝く結晶体が姿を現した。  
「当たった……………!?」

その時、翡翠の結晶体が光だし、その光がソフィアとダークネス・フェアリー・ドラゴンを包み込んだ。

ソフィアは目を覚ますと、そこは黒くて何も無い空間だった。

「何……………ここ!?」

ソフィアが辺りを見回すと、目の前が明るくなり、ソフィアの目を眩ます。

「っ!?」

光が消え、ソフィアは目を開けるとそこには蝶のような虹の羽を持ち、翡翠の鱗をしており、サファイアの様な綺麗な瞳をしたドラゴンがいた。すると、そのドラゴンが急にあくびをし、ソフィアに語った。  
『ふあく!…………… わらわを解放したのは何処のどいつじゃ……………?そこのお主か……………?』

「え!?!」

『お主に言っているのじゃ、雌の原始人……………』

「っ!?誰が雌の原始人よ!?!」

『おう、おう、あれだけの攻撃を喰らって、まだピンピンしていると……………お主……………面白いのう……………?』

「ムキ……………!」

ソフィアがカンカンになると、ドラゴンが頼み事をする。

『そうじゃ、お主に御願いをしようじゃないか?』

「御願い?」

『わらわはよりも美しい存在を消してほしいのじゃよ』



「……………えっ?!」

『何?……………消してほしくないのか?……………お主も綺麗な存在だが、わらわに攻撃を当てたからなあ……………ちよいと此方に来い……………』

「えっ?!……………分かったわよ……………」

ソフィアは恐る恐るドラゴンに近付くと、ドラゴンがソフィアの頭に触角を当てる。そしてドラゴンはソフィアの記憶を見通す。

『……………ほお……………コヤツは……………中々綺麗な者じゃのう……………決めた!……………コヤツの美貌を貰おう♪』

「誰を?」

ソフィアがドラゴンに訪ねる。

『お主が相手した?と言う奴じゃ……………ソイツは中々な美貌を持っている……………わらわの能力ならば、ソヤツを倒せる……………どうする?わらわからの御願いを申し受けるか?それとも、喰われ死ぬか?』

「……………決まってるじゃない!」

『?』

「貴女からの御願い……………受けようじゃない!何せ、アイツ……………ムカつくから……………」

ソフィアが決心した表情でドラゴンに言うとドラゴンは納得した様な笑顔でソフィアに語った。

『……………なら、契約完了だな……………わらわの力……………存分に使うが良い!!このわらわ……………妖精神龍の力を!!』

すると妖精神龍の体が光だし、ソフィアの指に身に付けている指輪に入り込んだ。

その頃、オーク軍の魔導砲によって陽弥達は苦戦していた。

「うわあああああ~~~~!!!」

リヨウマの鋼龍號が吹き飛ばされるが、陽弥のアーキバスIIが受け止める。

「あの魔導砲!.....威力がでかすぎる!」

「このままだと、ヴァランドール皇国が妖精神龍とオークに支配される!」

ルナがヴァランドール皇国を見ると、バモラが笑い出す。

「ハハハハハハ!!!見たか!これが俺らの力だ!この細剣の力があれば、貴様らのその機械人形と空舟も手に入るのも当然!さあ、おとなしくそれを渡せ!差もなくば.....」

陽弥達が歯を食い縛っていると、城門から別の声が聞こえてきた。

「差もなくば.....何て?」

「っ!」

「「っ?!」」

陽弥達は城門を見ると、そこにはかなり装甲が破壊されたエリザベスだった。するとエリザベスのコックピットハッチが開き、中から、頭から血を流したソフィアが出てきた。

「ソフィア!」

するとバモラはソフィアの体を見て、言う。

「ほお、中には上物の美女か.....俺の性奴隷にしてやろう!闇

妖精神龍!!!」

バモラが叫び、ヴァランドール皇国からダークネス・フェアリー・ドラゴンが現れた。

「まずい!このままだと、」

「殺ってみなさい.....!」

ソフィアは武器を取り出さず、全く恐怖心が出ていなかった。

「妖精神龍よあの者を捕らえよ!!」

「.....」





ソフィアは落ち着いた表情で陽弥の所に向かった。

陽弥達は戻ると、国皇と兵隊達が感謝していた。

「貴方は我らの皇国と民も救ってくれました。御礼に質問してください…… どんな秘密も隠し事も話します。」

「え!? 隠し事って……」

「じゃあ、俺が言う……」

「ちよつと陽弥……!?」

「この舟を知っていますか？」

突然、陽弥はデバイスを取りだし、エミリアが乗ってきたシリンドー型のスペースシップを映し出した。するとリチャード国皇が驚く。

「そ!…… それを何処で!？」

「エミリアがアジマス連邦から逃げる時にこの舟に乗ったと言っていた。アリス艦長から聞きましたよ? 貴方はエルシユリア王国の第一王女が連れさられたら大変な事になるって…… 第二王女はどうして言わなかったのですか?」

「う……!」

「陽弥、そこまで言うなんてやり過ぎだよ……!？」

ソフィアが止めに入ると、リチャード国皇が言う。

「分かった……」

「え!？」

「話してやろう…… エミリア・ヴァルネア・クリーフ王女とアストラッド・ヴァルネア・クリーフ国王と我ら三大国家の王達の秘密を……」

リチャード国皇は陽弥達の前でついにエミリアの事を話す……

## 第20話：空からの姫君

リチャード陛下は陽弥達に全てを話した

「あれは…………… 17年前に坂の掘る…………… 我らがヴァ  
ランドール皇国とヴァルヴァートル帝国、グラシオン連合、エルシュ  
リア王国、アテナイ共和国の王達が…………… 世界の中心  
部…………… エルシュリア王国での国家会議があつた時だつ  
た……………」

17年前…………… エルシュリア王国…………… 国家会議の中、  
ヴァルヴァートル帝国の皇帝ユージーンがグラシオン連合の女大統  
領マリーナとヴァルヴァートル皇国の国皇リチャードの意見に反対  
していた。

どうやら、オーク軍が次々と村を攻めていたらしく、ヴァランドー  
ル皇国とグラシオン連合は村に兵を贈ることに否定していたらしく、  
エルシュリア王国のアストラッド国王とアテナイ共和国のハイエル  
フ族の女王ナタリアはユージーン皇帝に賛成していたと、国家会議が  
終わると、アストラッドは深く悩んでいた。

「うくん……………」

「どうなされたのですか？」

「嫌、これで良かったのかと…………… ユージーン皇帝はああ見え  
て、民思いだから……………」

「そうでしたね…………… 本当にオーク軍との戦争が始まりますのね」

「だな……………」

アストラッドとナタリアはそれぞれの国家へと帰っていった。

エルシュリア王国の城の王室でアストラッド王は王妃のアリシアと夜空を眺めていた。

「今宵は良いなあ、」

「そうですね……………」

「こんな夜空を見れるのは……………後、何日だろう……………？」  
「ええ……………」

二人は悲しい表情になり、アストラッド王は夜空を見上げた。

「ん？」

すると、アストラッド王は夜空を見て、何かに気付いた。

「何だあれは……………!？」

それは火を吹きながら、エルシュリア王国に近い、森へと墜落した。

「堕ちて来た!？」

アストラッド王は堕ちてきた落下物を調べに準備する。

「アリシアはここで待っておれ!」

「貴方!？」

「私は直ぐに衛兵達と共に堕ちた星の所へ向かう……………!」  
「分かりましたわ……………!」

そして、アストラッド王は衛兵と共に、森へと落ちた落下物を調べに向かった。

森の中は暗く、そして何も見えない……………エルシユリア王国の衛兵とアストラッド王は光の魔法とカンテラの灯りを頼りに、落下物の捜索をしていた。

「確か……………この辺りだった様な……………」

「国王様！」

「どうした!?!」

衛兵が駆けつけ、アストラッド王に報告する。

「見つけました！」

アストラッドは早速、衛兵に案内して貰った。落下物が落ちた所に行くと、そこには大きなクレーターがあり、アストラッド王は足を踏み入れた。そしてアストラッド達の目の前にとてつもない物があつた。

「何だ……………これは!?!」

「国王様……………これは……………一体……………!?!」

それは見たことのない装甲をしており、左のバーニアの所が破壊されており、まだ緑の発光部ラインが光っている大きなスターシップだった。

「落ちてきたのは星の欠片ではなく……………見たところ……………船だ……………一体なぜ……………??」

アストラッド王が近付くと、何処からか泣き声が聞こえてきた。アストラッド王はスターシップの横を見ると、シリンダー型の小型スターシップが突き刺さっていた。

「あれは?」

アストラッド王と衛兵隊が向かっていった。アストラッド王は小型のスターシップに近付き、触れると、スターシップのハッチが溶けていき、中から機械で出来たカプセルがあつた。

「っ!?!」

アストラッド王はカプセルの中身を見ると、そこには緑の髪をした女の子の赤ちゃん泣いていた。



「赤ん坊……………?!……………?!」

アストラッド王が赤ん坊を見て驚くとまだ中に何か人影が見えた。それは見たことのない鎧を装着した傷だらけの老兵が倒れていた。それを見たアストラッド王は老兵や衛兵に言う。

「おい……………君?!誰か!この者を速く城へ……………!」

その時、傷だらけの老兵は目を覚まし、アストラッド王の腕を掴む。

「待ってくれ……………」

「どうした……………?」

すると老兵の瞳がエメラルドのように光だした。

「うわあっ!!」

老兵はアストラッド国王の頭の中に、これからの事を映像で伝えた。

それは邪神皇ドゥームが始まりの種族Q人と機械人のアジマス人を滅ぼしており、我が娘は二柱の双子の神を召喚し、ドゥームを封印した。

そして、僅かなQ人は移民船に乗り込み、聖地を脱出した。それから、数億年後、ドゥームが復活すると同時に、我が娘に子供が産まれた。

我が娘は産まれて直ぐこの世を去り、星の海は暗黒の闇に飲まれたかと思いきや、我々、Q人が誕生させた生命達が、種族銀河連合を樹立し、圧倒的な科学力で、ドゥーム率いる邪神軍団を封印した。

しかし、時は流れ、ドゥームは二度目の復活を果たしたが、聖なる8人の勇者達が邪神皇と邪神軍団と邪神皇の心臓を滅ぼした。

それから、我はその地球人に訪ねようと地球へと向かったが……………プロフェツサー”E”……………ジュリオ・飛鳥・ミスルギがアジマス人達を従え、我が孫娘を奪いに来た。狙いは我が孫娘に宿る力が狙いだった。

何とか地球に向かうとワープライブしたが、奴等はしぶとくワープライブで追撃してきた。

何としてでも、降りきらなければと……………しかし、敵の空間魚雷が発射され、船の姿勢制御ユニットと航空制御ユニットが破壊さ

れ、我が船は惑星ホライゾンへと墜落した。

映像が終わるとアストラッド王は赤ん坊をみる。

「この赤ん坊が……その!?!」

アストラッド王は答えると、傷だらけの老兵は予言を言う。

「そうだ……私が孫娘……最後のQの姫

君……エミリアだ……今もアジマス連邦はその娘

を探し回っている……!だが……我は予言す

る……17年後……アジマス連邦がこの地に襲来した

とき、別の時空の彼方にある……私が向かおうとした地球や

それぞれ星からやってくる龍の衣を纏いし7人の銀河の守護

者……”ガーディアンズオブギャラクシー”が……

銀河……そして、多次元宇宙と……我が孫娘エミリアを

守ることになる!それまで……我が孫娘の事を頼む

ぞ……!」

老兵は力尽きると体が光だし、粒子となって消えていき、鎧だけが

残った。

そして、アストラッド王はカプセルの中に入っている赤ん坊を見

て、決意した。

翌日、アストラッド王は国家会議にその老兵の事を全て話した。

「本当だって……!」

「もう少しましな虚言を語れ……空から船が堕ちて来て、そ

の老兵がこの娘を預かってくれと……!」

「そんな筈はありませんよ……少しは落ち着いて下さい、アス

トラッド国王…………… そのアジマス連邦と言う国家は来ませんよ……………」

ユージーン皇帝は怒鳴り上げ、マリーナ大統領は信じてくれなかった。

「しかし！」

するとリチャード陛下はアストラッド王に言う。

「…………… 私は…………… アストラッド国王を信じます。」

《!?》

「そのアジマス連邦に対抗するために…………… グラシオン連合の魔法と科学力…………… ヴアルヴァートル帝国の兵力と防壁力…………… 我らヴァランドール皇国の戦力とアテナイ共和国の得意魔法での攻撃とエルシユリア王国と合わされば、アジマス連邦からの襲来を防ぐ事ができます。」

「はあっ!?お前は何言っているのだ!？」

「ですから！それが本当なら、やはり、対策をすれば……………！」

「そんなデタラメがいるなんて、有り得ない！だいたい、何故リチャード国王もアストラッド国王の話信じるのですか!？」

「…………… こんなにも必死に申しているのに…………… 黙つ

て無視するなど、断じて行いません。」

「安心して下さい…………… アストラッド国王…………… 何とかし

て見せます……………」

「ありがとう…………… ありがとう……………！」

だが、17年後…………… アストラッド国王の言う通りになった。アジマス連邦がエミリアを見つけ、エルシユリア王国とアテナイ共和国を陥落させた。

ヴァランドール皇国は成す術もなく全滅にまで、追い込まれた。アジマス連邦を信じなかったユージーン皇帝と大統領マリーナもようやく信じて貰い、グラシオン連合、ヴァルヴァートル帝国、ヴァランドール皇国は同盟を結び、三大国家同盟を樹立した。

戦いは激しくなり、ヴァルヴァートル帝国軍とグラシオン連合軍も苦戦した。

ヴァルヴァートル帝国に近くにある空の橋を占拠するのも時間が掛かった。しかし、一番近くにある前線基地であるヴァルヴァートル帝国が優位つの大柱だった。

そのお陰で、アジマス連邦兵の残骸をグラシオン連合が研究して、対アジマス連邦兵器や武器を作り上げ、前線基地であるヴァルヴァートル帝国の砦に研究し、造り上げた電磁シールドと言う光の防壁を張ることが出来た。

これでガーディアンズオブギャラクシー達が来るまで時間が稼げると、そして2年後、君達がやって来てくれた。

リチャード陛下の話が終わると、皆は落ち込んだ。

「そう言う事だったのですか……………」

「我々は…………… Q人の姫君であるエミリアを守れなかった…………… その事に我らは今も悔やんでいるのだ。」

すると陽弥が答える。

「大丈夫だ……………！」

「え!?!」

「俺等が…………… エミリアを取り返して見せます……………！」

「ちよつと陽弥!?!分かってているの……………!?!相手の国はもう直ぐそこにいるのよ!?!突入する前に見たでしょ!?!あんな巨大な惑星型要塞を惑星ホライゾン並みだったよ!?!……………あれだけデカかったら内部にいるアジマス連邦兵も物凄い数なんだよ!?!いくらパパとママを含めての戦力でも、あの数は無理にも程があるよ!」

ソフィアが止めるが、陽弥は決意する。

「……………それでも……………俺は行く……………彼女

が待っているんだから、」

陽弥の言葉にルナも言う。

「…………… 全く…………… お兄ちゃんたら、エミリアさんの話になると強きになるなんて、ようやく分かったわ、どうしてソフィアさんがお兄ちゃんの事を”赤い単細胞”と呼ばれているのが……………」  
「何が？」

「お兄ちゃんは知らない方が良いと思うよ♪でも、お兄ちゃんやりチャード陛下の言う通り…………… 私もエミリアさんがエヴァに連れ拐われた事に悔やんでいた。だから、私も！」

「…………… ハア、仕方ない、私も行くわよ！どこからでも掛かってきなさい!!アジマス連邦!!」

「皆……………」

陽弥が皆を見て、涙を流す。リチャードも納得すると陽弥の行動がまるで、17年前のアストラッド王に見えた。

陽弥達はヴァラントール皇国から同盟軍の前線基地でもあるヴァルヴァートル帝国へと進路を変え、離陸の準備をしていた。

「では、ヴァラントール帝国へと向かうのですね？」

「ええ、」

「もし、ヴァルヴァートル帝国に着きまして、ユージン皇帝とグラシオン連合のマリーナ大統領に出会いましたら、この手紙を……………」

「この手紙は？」

「私からのです。」

「分かりました…………… お会いできましたら、渡しておきます。」

「ありがとうございます……………」

リチャード陛下が深く御辞儀をすると、陽弥も御辞儀をした後、陽弥達はウラノスに乗り、北の大地にある国家…………… ヴァルヴァートル帝国へと向かっていった。

その頃、陽弥達がヴァルヴァートル帝国に向かっていている時、ヴァラ  
ンドール皇国森林の奥……………ソフィアによって敗れたバモラが  
傷だらけの姿で森の中を歩いていった。

「糞お!!こんな筈じゃなかった!……………いつか、アジマス連  
邦が敗れたら、アイツ等の祝いの日に攻め込んで殺る!!」

バモラが暴言を吐きまくっていると、木の上から、フードの男が降  
りてきて、オムニブレードを展開し、バモラの背中に斬り付けた。

「フツ……………!」

「グアアアア!!」

バモラは倒れ、後方にいるフードの男に言う。

「だ!?誰だ……………?!」

「全く……………オークの豚はいつも○○の事しか考えていないの  
か?……………まあ、良いや……………第1の標的を排除する  
か、」

「標的……………?!どういう事だ!」

「教えよう……………」

フードの男は、フードを外した。髪の色は赤く、瞳の色はアメジス  
トのように蒼く、近未来風の服をしていた。そしてその男はポーチか  
ら、手帳を取りだし、バモラに見せつけた。

「俺の名は……………ルーカス……………次元警察だ!」

「次元警察!」

ルーカスはバモラに言う。

「次元警察条約第一条!低レベルの文明がある惑星に近未来で進化し  
た科学兵器とバイオテクノロジー兵器を闇取引、売り渡しを禁ずる条  
約……………闇取引禁止条約……………銀河連邦条約第一条未開惑星保護  
条約違反により、ドウームの細胞から摘出したリーパー・エキスを使  
用し、リーパー化したお前を排除する!」

「ほごげ！俺はここで終わるわけには行かねえんだよ!!」

「黙れ！時空神龍!!」

ルーカスが叫ぶと、上から、蒼き閃光が降りてきた。

「何!?!」

ルーカスの後ろにダイヤモンドの様な体と翼を持ったドラゴンが浮遊していた。

「龍装光!!」

ルーカスが叫ぶと時空神龍は光だし、ルーカスを包み込んだ。ダイヤモンドで出来た装甲と両腕にダイヤモンドの剣を装備したルーカスになっていた。そして、ルーカスは飛び上がり、平手から、緑の粒子砲をバモラに放った。

「ネビュラブレイカー!!」

「ああああああ~~~~~!!!」

バモラはあつけなく、ルーカスのネビュラブレイカーによって、灰になった。バモラを排除したルーカスは龍装光を解除して、オムニツールで報告する。

「第1のミッションは完了つと♪……………残り第2のミッションと第3のミッションだ……………第2のミッションの内容は……………何!?!」

書かれていた内容は……………

『彼等と接触し、次に起こる攻防戦に参加しろ。』

それを見たルーカスは驚く。

「マジかよ……………!シンクレア長官は何を考えているんだろうか……………?!まあ、良いや……………」

ルーカスはオムニツールをしまうと空に向かって、叫ぶ。

「ジークフリード!」

すると上空から蒼と白のツートンカラーをした機体が降下してきた。その時、ルーカスの機体『ジークフリード』が喋り出す。

『ルーカス様……………次のミッションと行き先はどちらですか?』

「ウラノスのクルーとの接触して、攻防戦に参加しろと行き先はヴァ

ルヴァアトール帝国だ……………！」

『かしくまりました。』

「後、目立たぬように、ステルス機能と上からの情報及び、監視を頼む。」

『かしくまりました。ルーカス様』

ルーカスはジークフリードに乗り込み、陽弥が向かっているヴァルヴァアトール帝国へと向かった。

一方、真実の地球でシンはギャラリック・リングを使い、ワームホールを起動した。するとワームホールの中から、赤髪の青年が出てきた。そしてシンはその赤髪の青年に挨拶する。

「貴方が味方になってくれて…………… 光栄です……………」



## 第21話：Q人の遺産

一方、真実の地球では、ギャラリック・リングを使い、ある人物を呼び出した。

「貴方が味方になってくれて光栄です…………… クロウさん……………」

その男はかつて、重傷を負ったシンを助けてくれた人物…………… 時空を越えて過去の英雄がシンの世界に来てくれた。

「シン…………… 久しぶりだなあ……………！」

「こちらものです…………… クロウさん……………！」

車イスに乗っているシンはクロウに近付き、握手を交わす。

「おい、シン…………… 彼等は誰なんだ？」

クロウがヒルダ達を見て、問う。

「あ…………… 紹介します。こちらは妻のヒルダ…………… 妹のココとミランダ…………… そして……………」

「母のエリアです。シンから聞きましたよ…………… 息子を助けてくれて、本当にありがとうございます。」

「いえいえ、私もシンを助けていなかったら、シンの世界も救えなかったでしょう。あ！申し遅れました！私の名はクロウ…………… クロウ・F・アルメディオです。元SRF隊員スペースシップ1号機”アキュラ”の船長でした。」

「早速ですが、クロウさん…………… 貴方の力が必要なのです。私の孫達が今、ホライゾンの姫君”エミリア・ヴァルネア・クリーフ”がアジマス連邦に捕らわれているのです。現在私の孫の陽弥とルナ達がそこにいるのです。あの子達には…………… 上官が必要なのです。」

「分かりました。全力で彼等を助けます！」

「ありがとうございます……………！」

エリアはクロウに深く御辞儀をするとシンがクロウを呼ぶ。

「クロウさん…………… 提督が貴方を呼んでいました。」

「提督？」

クロウはシンに連れられ、ジャヴィック提督の所へ案内された。

部屋に入ると、ジャヴィックが待つていた。

「お前が過去の地球人か……………」

「はい、クロウ・F・アルメディオと申します。」

「では、君に任務を与える。」

ジャヴィックはクロウに任務を話した。内容はアジマス連邦の動きとその影で操るプロフェッサー”E”と名乗る人物の正体を探るため、ゲストとトゥーリアンの部隊をクロウの部隊に配属させ、アサリの母星『セツシア』に行き、超考古学者”リアラ”と会見し、セツシアにあるQ人の遺跡調査及び、遺産とデータを持ち帰る事となっている。

「それだけですか？」

「それと……………シンから、言われているだろうか？」

「はい、シンの息子、娘とウラノスクルの援護を、と」

「よろしい、Nーアキュラに向かえ、」

「Nーアキュラ!？」

「シンが動けない代わりに、お前がアキュラの船長だ……………既にアキュラにはゲストとトゥーリアンの部隊が待機している。」

「ありがとうございます……………！」

クロウはNーアキュラがある格納庫に向かった。

格納庫に行くとNーアキュラがあり、クロウは早速、乗るとブリッジへと入った。あらゆる機械や端末、目の前に船長が座るデツキもあった。クロウは椅子に座ると昔の事を思い出す。

「久しぶりだなあ……………アキュラ……………また共に戦えるな

んて…………… エッジ…………… レイミ…………… フェイズもいた  
ら……………」

クロウが仲間の事を思っていると後ろの扉が開き、中から、顔に火傷を負ったトウーリアン兵士が来た。

「アルメディオ船長」

トウーリアン兵士はクロウに敬礼した。

「君は？」

「自分はトウーリアン第7空軍所属ギャレス・ヴァリアンです」

「君は見たところ…………… 狙撃兵？」

「ええ、自分は、スナイパーが得意のです。船長の背中は私に任せて下さい。」

ギャレスはクロウに笑顔を見せるとクロウは興奮する。

「おお！頼もしいぞ、これから…………… よろしく、ギャレス！」

「はい！」

ギャレスはクロウに強く敬礼し、持ち場へと戻った。

そして準備が出来、Nーアキュラは発進し、アサリイの母星“セツシア”へと向かった。

セツシアの大気圏外にワームホールが現れ、中からNーアキュラが出てきた。ブリッジにいるクロウは早速、任務を確認する。

「さて、まずはアサリイ人の故郷『セツシア』からだ……………」

Nーアキュラがセツシアへと大気圏突入し、それが終わると黄昏の如く、綺麗な夕陽が街を照らしていた。着陸地点に向かうと、アサリイ人の兵士がガンシップで案内され、NーアキュラはQ人の遺跡に近い高層ビルに着陸した。すると白衣を着たアサリイが現れ、クロウに近付いた。

「お待ちしておりました。」

「リアラ教授ですか？」

「ええ、私がリアラ・ティツソーニです。前はプロセアンの遺跡の研究者でした。今ではQ人の考古学者を務めております。」

「お会いできて光栄です。」

リアラとクロウは握手を交わすとQ人の遺跡へと案内された。

「早速ですが、見せて貰いたい遺跡や物があります。」

リアラに案内され、クロウが見たものは、純白で、文字がズラリと並んだ巨大な門がクロウの前に現れた。門の近くに研究者達が門に描かれている文字を調べていた。

「これです。地球に存在する邪馬台国と言う場所にこれと同じ遺跡が在ったのです。地球の方では僅かな情報が入手出来ましたが、私達のセツシアにあるこの遺跡は普通の遺跡とは何かが違うのです。」

「何が？」

「これです。」

リアラが指を指した方向を見ると大きな絵文字が並んでいた

「これは……………絵文字？」

「はい、門の上にある絵文字です。邪馬台国に在った門の奥にある古墳には微かでしたが、これまでにないとてもないエネルギー波とあの絵文字があったのです。エネルギー波の方は恐らく、邪馬台国の女王”卑弥呼”はその力を使って、アウラの都……………いいえ、地球に存在ある大陸”日本”を納めていたらしいと……………」

クロウは恐る恐る門に近付き、触れた。すると……………」

『門を開けて……………Qの光を解放して……………開暗

証コードは……………私の名は……………』

突然、クロウの頭の中から、女性の声が響き渡り、クロウは冷静にし、その名を答えた。

「……………アーク、」

クロウは答えると門に描かれている文字が光だし、純白の門が白銀に輝き始めた。

「っ!？」

「こーこれはっ!?!」

すると開けられなかった門がゆっくりと開き始め、皆は唾然した。

「開いた……………!?!」

「我々とプロセアンのテクノロジ―でもこじ開けることが出来なかった門が……………こんなあつさりど!?!」

クロウ達は門の奥へ行くと奥間にある台座の上に光の粒子が浮いていた。

「これは……………一体……………!?!」

リアラが光の粒子を見て驚くと、クロウは冷静のまま、答えた。

「アーク……………」

「アーク……………?!」

「この光が……………俺の頭の中で……………そう言っているんだ……………」

クロウの言葉にリアラは驚く。

「頭の中で……………!?!つまり、テレパシーと言う事ですか?!だから、我々の技術でも開けられなかった訳ですか……………」

「Q人は……………遙か昔にセツシアに降りた時に、アークを置いていった……………いつか、この声……………テレパシーが通じる者を待ち続け……………長い年月を得て……………」

ようやく、解放されたと言う」

クロウは恐る恐る光の粒子に触れた……………その直後、光の粒子が強く光だし、その光がクロウを包み込んだ。光によって包み込まれたクロウは目を覚ますと、水の上に浮かんでおり、白い空間にいた。辺りを見渡していると、クロウの後ろから、鳴き声が聞こえてきた。クロウは後ろを振り向くと、それは純白の翼と神獣の様な体と槌爪とたくさんの角が生えており、水の上を歩きながら、クロウに近付く、金色の体毛をしたドラゴンだった。(分かりやすく申しますと、ものけ姫に出てきた生と死を司る森の神”シシ神”の様な姿と頭部が龍の様な感じです。)

クロウは驚き、金色のドラゴンに答える

「君は……………!?!」

すると金色のドラゴンはクロウの問に答える。

「私の名はアーク……………かつて銀河七聖龍の一体であり、長だった……………聖光神皇龍”ゴッドシャイニングドラゴン”でした……………今ではQ人の三つの力の一つ……………クロウと言いましたね……………? 貴方に御願いがありません……………」

「御願いは……………?」

するとアークは悲しそうな表情でクロウに答える。

「プロフェッサー”E”の計画を何としても、止めさせて下さい……………そして……………運命を変えさせてはいけません……………」

「運命を変える……………」

「!???? どういう事なんだ!?!」

「彼の狙いは……………!! Q人の姫君……………」

” エミリア……………」

するとクロウの頭の中から、エミリアの姿が映る。

「彼女に宿る力……………そして……………『魂』でもありません……………それが奪われると……………この宇宙と……………多次元も……………貴方の大切な人達も……………やがて消え行くでしょう……………」

その直後、クロウの頭の中から、もう一つの風景が移り込んで……………山は燃え、大地が抉られ、空は赤く、戦火の炎と恐怖と哀しみに包まれていた。

「かつて、それを巡っての争いが起こりました……………創造主Q人の聖地で……………我々の力を欲する心を持つ闇の意思と……………黄昏の如く穏やかな心持ちそれを阻止せんと戦った光の意思の……………二つの種族との分担し、争われ、両種族はアジマス人にも被害が及びました。そして、闇の意思を持つ者に対抗すべく、光の意思を持つ者に姫巫女使わせました。姫巫女は光と闇の両方の力を持つ双子神を召喚し、闇の意思を持つ者達は次元の彼方へと追放……………そこは聖地とは異なる闇の聖地とも言える……………光の惑星ルミナスの双子星……………闇……………」

の惑星リイボラへと……………」

アークが悲しそうな表情になっていると…………… 突如、空間が揺れた。

「何だ!？」

クロウが驚く、アークは上の方へ見上げ、答える。

「…………… 闇の意思を継ぐ者が…………… 私の力に勘づき、奪いに来ました。」

「どうすれば!？」

クロウが言うと、アークは強き瞳で答えた。

「私との…………… 銀河七聖龍との契約をすれば、闇の意思に対抗出来ます。」

「…………… やって来れ!」

「…………… 準備して…………… !!」

するとアークが強く光だし、クロウの体に纏った

その頃、セツシアの都市では、高層ビルの窓から、火が吹き溢れ、被害者も出ていた。すると窓から黒い砂状の機械が流れ出て、アサリイ兵士達をを翻弄する。

「Q人の遺産…………… アークは何処だ……………」

黒い砂状の機械”マイクロボット”を操っていたのは、黄金のフレームをしたAIのアポカリプスだった。AIの為、戦闘用体でマイクロボットで、アサリイ人の兵士の首を掴む。

「邪魔だ……………」

アポカリプスはそう言うとアサリイ人の兵士を投げ飛ばした。すると、アポカリプスの上から、シンに渡したクロウの愛用の武器 ”

「ビームセイバー」を二刀流で回転切りをしてきた。アポカリプスは回避すると同時にマイクロロボットで防御した。クロウは距離を拂って下がり、名を言う。

「俺の名はクロウ！クロウ・F・アルメディオ！……………お前の名は……………!?」

アポカリプスも自分の名前を答える。

「……………新星国家　ネオ・ミスルギ皇国新皇帝　エンペラー・ジュリオに支える　真・四將軍の一人……………アポカリプスだ……………」

アポカリプスの言葉に現地に向かったギャレスとリアラとアサリイ人の兵士達は驚く。

《ネオ・ミスルギ皇国……………!?》

皆が驚き、クロウは何の事なのか、分からなくなっていた。そして、アポカリプスは話を続ける。

「『そうだ……………我々、アジマス連邦は今度から、ネオ・ミスルギ皇国へとなった……………それより、お前の体から……………Q人の遺産の一つ……………アークを感じる……………』」

クロウは驚き、ビームセイバーを構える。

「っ！」  
「命が惜しければ……………おとなしく、アークを渡せ……………」

アポカリプスが手クロウへ差し伸べると、クロウは冷や汗をかきながら、答える。

「断ると言ったら……………?」  
「……………死んでも、取り出してやる……………」

その直後、アポカリプスが先に動きだし、マイクロロボットが形を変え、槍状の突起物へとなり、クロウに襲い掛かった。

「っ!」

クロウは急いで、ビームセイバーで防御し、カウンター攻撃をするが、マイクロロボットが偽造のアポカリプスを作り、クロウを翻弄するが、クロウはムーア人の力を使い、本物のアポカリプスに攻撃してい



た。

『フッ！中々、やるじゃない……………流石、過去の人類ですわ……………』

「お前こそー」

『なら……………これはどうでしょう……………？』

すると、マイクロボットはアポカリプスに包み込み、球体へとなると、球体の周りある隙間から、ビームガンを作り出し、回転しながら、クロウに近付き、造り上げたビームガンを隙間から、乱射する。

「クソッ！」

クロウは防御するが、無数に飛んでくるビームで、苦戦し、アポカリプスは球体の中で笑う。するとビームガンの間から、ソニックブレードを突き付けると高速回転斬りで、クロウを吹き飛ばす。

「うわあああああああゝゝゝゝゝゝ!!!」

吹き飛ばされたクロウは壁に激突し、倒れる。頭から血を流し、真紅のプロテクトアーマーは損傷していた。だが、クロウはそれでも、立ち上がろうとしていた。

「こんな所で……………！殺られるわけには……………行かない!!!」

クロウの頭の中にお腹を膨らませ、赤子を身籠った妻「イレエネ」と一緒に住むメリクルの姿を思い浮かべる。その直後、クロウの耳から、アークの声が響き渡り、クロウに声を掛ける。

「っ?」

「私の力を使いなさい……………叫ぶのです……………」龍装光」と……………!!」

アークの声を聞き、傷だらけのクロウは立ち上がる。

「分かった!!!」

立ち上がったクロウは叫ぶ。

「光と闇を超えろ！混沌と神をも照らすその閃きと輝き！聖光神皇龍!!ゴッドシャイニングドラゴン!!……………龍装光!!!」

するとクロウの体から、アーク……………またの名をゴッドシャイニングドラゴンが現れ、巨大な体でセツシアの都市を包み込んだ。

「『これが！……アーク……!!??』」

そして、ゴッドシャイニングドラゴンは雄叫びを上げると、光になり、クロウを包み込んだ。傷だらけのプロテクトアーマーが自己修復され、真紅のアーマーが白と金色と赤色に分けられているアーマーに変わり、背中から表面が白色と裏面が赤色のマントが現れて広げられ、聖光の紋章が後ろに浮かび上がり、後頭部から白き機械が身に付けられ、黄色のバイザーが輝いた直後、アーマーから神秘の光を放ちアポカリプスを照らす。その光の圧迫にアポカリプスは押される。

「っ!？」

さらにリアラ達もクロウの光に押されていた。クロウは自分の姿を確認すると、驚いていた。

「凄い……これが……!？」

クロウが驚いているその時、アークの声が聞こえてきた。

「これがQ人の遺産……アークの力です。存分に戦いなさい……」

クロウは叫ぶと両手を大きく広げると、2本の聖剣ファールエルが出現し、クロウは二刀流の聖剣を持ち、アポカリプスに聖剣の刃を突き付け、構える。

「ああ!!……デュアルアークブレード!!」

アポカリプスは怒り、球体のまま、突進してきたが、光の波動で、球体が崩れ、吹き飛ばされた。

「『己れっ!!!』」

アポカリプスは立ち上がると、指をクロウに指すと、無数のマイクロロボットが津波の様に押し寄せてきた。

「『マイクロロボット!!……殺りなさい!!』」

アポカリプスが叫ぶと、マイクロロボットが蛇のように襲い掛かると、クロウは腕を地面に突き付け、叫ぶ。

「アークシールド!!」

クロウの腕から光の盾が展開され、マイクロロボットが弾かれた。

「必殺……!!」

クロウが言うと2本の聖剣ファールエルの刃が光輝き始めた直後、

二刀流の聖剣ファールウエルを地面に叩き下ろした。

「グランザッパー!!!」

その直後、叩き下ろした剣の刃から鋭い波動がアポカリプスを襲った。

「っ!!??」

アポカリプスはマイクロロボットで壁を造り上げて防ぐがクロウの威力が凄まじく、マイクロロボットの壁が溶け始めた。

「クッ!!」

波動が終え、前方を確認しようとして壁に隙間を開けた直後、既にその目の前にクロウが二刀流を構えていた。

「ハッ!!」

「天空光剣!!へヴンズ・ソード!!!」

2本の聖剣ファールウエルが光だし、光粒子の刃を放出しながら、マイクロロボットの壁ごと、アポカリプスを切り裂いた。マイクロロボットの壁はあっさりと斬られ、アポカリプスの左腕も斬ると、アポカリプスは急いで、距離を取り、離れた。アポカリプスは自分の左腕を見て驚く。

「何っ!!」

四将軍のエヴァと同じく、黄金のフレームをしているのに、まさかのあっさりと斬られた事にさらに驚く。

「ばっ………!馬鹿な!………このフレームは

対銀河七聖龍に作られた合金の筈………!」

あっさりとは驚いていると、クロウが言う。

「フレームの耐久度にも限度があるんだ………いくら良い装備に変えても………聖光神皇龍のパワーには勝てない………いい加減、諦めるんだ………!」

「クソ………!」

もうアポカリプスには得意攻撃とするマイクロロボットがなく、悔しがつっていると、アポカリプスの端末から通信が入り、アポカリプスは通信を開くと、相手はジュリオ・飛鳥・ミスルギからだった。

「こちら、アポカリプス………ええ………了解し

ました。』」

アポカリプスは通信を終えるとクロウに言う。

『残念ですが、命拾いしましたね……………次に会った時が貴方の最後ですからねえ……………』

「挑む所だ……………！」

クロウは答えるとアポカリプスは空高く舞い上がり、セツシアから大気圏外へ離脱した。

その後、クロウは通信を開くとモニター画面が現れ、画面からジャヴィック提督とシンとアンジュと一緒に映っていた。そしてクロウはジャヴィック提督に説明した。

「Q人の遺産は三つの力だったのか……………」

「はい……………更にそれが後、二つ残っています。それと……………」

「「それと？」」

「アークを狙いに来たアポカリプスはアジマス連邦からネオ・ミスルギ皇国と言ったのです。」

クロウの言葉にジャヴィックとアンジュとシンは驚き、凍りついた空気で、恐る恐るクロウに答える。

「……………今、何て言った？」

シンが震えながら、クロウに答えると、クロウは言う。

「え？ネオ・ミスルギ皇国って……………」

クロウが答えた直後、シンがジャヴィック提督に言う。

「提督……………」

「本当か!? ネオ・ミスルギ皇国と…………… 奴は言ったのか!?」

「え!? あ、はい…………… そして、新皇帝エンペラー・ジュリオと……………」

するとアンジュも驚く。

「ジュリオですって!?」

「えっ!?」

「…………… そうか!…………… アイツだったんだなあ!!!」

シンが怒りながら、言う。クロウは質問する。

「どういう事、何ですか!?」

「説明している暇もない! クロウさん! 早く惑星ホライゾンに行ってください! 今すぐに!!!」

シンは焦りながら、次の任務を言い、クロウは驚く。

「え!? お…………… おお! 分かった!」

そして通信が終わるとクロウは深く考え込む。

「シンの奴…………… 何であんなに驚いた表情になっているんだ?」

するとギャレスとリアラが来て、答える。

「クロウ船長…………… ギデオンさん達が驚いたのは……………」

ジュリオが生きていた事です。」

「え?…………… どういう事なんだ、ギャレス…………… ?」

「ジュリオと言う大馬鹿皇子は……………」

ギャレスはクロウにジュリオと言う男について話した。

20年前…………… 人類銀河共和国がある地球のもう一

つの地球…………… エンブリヲと言う神気取りの支配者が管理する…………… コード・アースと言う地球が在った…………… その

コード・アースに移住してきた人類は『マナ』と言う高度社会システムがあり、人類は魔法が使えるようになった。けど、それはトウル・

エデン…………… つまり、本当の地球に存在する…………… アウラと言

う始まりのドラゴンから放出するドラゴニウム…………… ドラゴレ

イド人の宝だったらしく……エンブリヲはアウラを盗み……偽りの人類にマナを与えていた。しかし、そのマナが使えない人類……ノーマも生まれた……ノーマはマナを使えなく、偽りの人類から差別され、拷問され、強姦され、その挙げ句……”化物”と呼ばれていった……

過去の事実を聞いたクロウは驚きを隠せない表情で言う。

「何なんだよそれ……!?」

「特にそのノーマを毛嫌いしていた人物が……ジュリオ・飛鳥・ミスルギ……人類銀河共和国の総統の女王 アンジュとレジスタンスのリーダー シルヴィアの実兄……アングジュの娘 ソフィアの叔父なのです。」

「え!?あの提督の隣に居た……女性のお兄さん……!?」

「ええ、ジュリオはかつて、アンジュさんを陥れた事もありました。ノーマであるアンジュさんをひたすら隠し続けた父親と母親を殺し、自分が皇座についたのです。」

「要するに、自分が皇になるつもりだったな？」

「はい、そしてアルゼナルにノーマ管理委員会の国連が襲撃してきました。狙いはアンジュさんと彼女のラクナメール ヴイルキスとラクナメールを動かずメールライダー、そしてシン・ギデオンさんとパンドラメール ペルシウスの強奪でした。残りのノーマ達は虐殺していました。結果、エンブリヲはノーマの虐殺を見て、ジュリオはエンブリヲのラクナメール ヒステリカのデイスコード・フェイザーによって、消去されました。」

クロウはさらに驚くと。

「消去された……!?そんな屑野郎が何故……生きていたんだ……?」

「恐らく、彼処にいたのは……エンブリヲの他にもドウムかも知れません……」

「ドウム……?」

「船長は……知らなかったでしょうが、ギデオンさんが倒した邪

神皇の事です。」

「邪神皇!? それって、俺とシンが出会った時に見た壁画に描かれていたあれか!？」

「壁画?」

「え?!…………… あ、そつか…………… こつちの次元にはロークと言う星がまだ、見つかって無いんだった…………… 俺とイレーネが住む惑星ロークには、シンの先祖が残したヴェクタの遺跡が残っていたんだ…………… その時の遺跡の壁に描かれていた邪神皇があったんだ。」

「そんなことが…………… !？」

「ああ、ギャレスが言った邪神皇ってソイツの事か?」

「ええ…………… 私の推論では、恐らく…………… ドウムはあの時、エンブリヲのデイスコード・フェイザーに直撃する直後にジュリオを助けたのでしよう。そして、アジマス連邦…………… 嫌、今はネオ・ミスルギ皇国となっていていますが、狙いはまだ分かりません……………」

「そうか……………」

クロウは考え込むと、扉が開くと、シンの教官のロボットが現れた。

「クロウ」

「誰なんだ?」

「整備班長のロボットだ…………… たった今、シンから通信が来たんだ。」

「シンから?」

クロウは通信を入れるとシンが映った。

「話は…………… ギャレスから聞いているだろう?」

「ああ、」

クロウは返事をする、シンは手で額に触れながら、答える。

「何て事だ…………… まさかプロフェッサー”E”の正体がエンブリヲじゃなく、エンペラージュリオ…………… ジュリオ・飛鳥・ミスルギだったなんて…………… 何としてでも、アイツのやっている事を止めないとなあ、」

「それで、俺はシンの息子、娘に会えば良いのか？」

「ああ、クロウさん…………… どうか、あの子達を守ってやってくれ……………！」

するとシンは車イスから降り、松葉杖を地面に置くと、クロウの目の前で土下座した。

「この通り！」

クロウは土下座しているシンを見て、慌てる。

「嫌々！そこまでしなくても……………！」

するとリアラがクロウに報告してきた。

「クロウ船長！前方から、救難信号を送っている戦闘機を確認！これは…………… アジマス連邦の!?」

「どういう事なんだ……………！」

「外のモニターに映します！」

リアラがセツシアの大気圏外に滞在している通信衛星カメラの映像をモニター画面に移すと、損傷しているアジマス連邦の戦闘機がユラユラと浮遊していた。

「被弾している……………！」

クロウが言うとシンは無表情でクロウに言う。

「クロウさん…………… 戦闘機の回収と中にいるパイロットの安否確認をしてくれ！」

「どうしたんだ……………！」

「…………… あの戦闘機の中にいるパイロットは、何か情報を持ち逃げたかもしれない…………… ジュリオの狙いを知るチャンスだ……………！」

「分かった！」

「それと、クロウさん！」

「何だ？」

「格納庫にクロウさん専用のアーキバスⅡのカスタムがありません…………… 使ってみてください」

「分かった！」

クロウは急いで格納庫に行き、大気圏外突入ブースターと大気圏突



入用のバックパックを装備したアーキバスⅡに乗り込み、セツシアの大気圏外へ出た

クロウのアーキバスⅡが損傷しているアジマス連邦戦闘機をキャッチし、空間用のマスクを被り、外へ出て、戦闘機のゴクピットの防護ガラスに付着した霜を拭くと中に奴隷の服装をした男女とそれを守るかのように紫と黄色のアジマス連邦兵の2体があった。

「おい！大丈夫か!?……………しっかりしろ!!」

クロウは急いで戦闘機を回収すると、Nーアキュラが駆けつけてきて、戦闘機をNーアキュラの中に入れた。

数字間後、アジマス連邦の戦闘機に乗っていた男はようやく目を覚ました。

「う……………ここは……………?」

「貴方!」

男は横にいる女性を見て、言う。

「アリシア……………?」

「良かった!」

アリシアは男の人を抱くと、男はベッドから起き上がり、周りを見る。

「私は一体……………?」

「気がついた様ですね、」

男は横にいるリアラとクロウ、ギャレスを見て、驚く。

「君達は?」

するとクロウが前に出て、答える。

「俺はクロウ…………… クロウ・F・アルメデイオ このスペースシップ1号船“Nーアキュラ”の船長だ……………」

「ああ！失礼、私の名はアストラッド・ヴァルネア・クリーフ…………… エルシュリア王国の国王だ。」

「妻のアリシア王妃です。」

男女それぞれの名前を言うとモニター画面に映ったシンが驚く。

「ヴァルネア・クリーフ!? それじゃ、貴方達が、エミリアの……………!?」

「エミリア!? エミリアを知っているのか!?」

「はい…………… ですが、」

シンは悲しそうな表情でこれまでの事をアストラッドとアリシアに話した。

そしてアストラッド王も…………… どうやら、幽閉されたアジマス陛下は同じく囚われのBとΣに頼み、重要人物であるエミリアの義理の父母の解放してもらい、脱出を試みたが、港まで後数メートルの途中で、エヴァとγとマインドコントロールされたイプシロン皇太子に発見されたが、運良く、アジマス反政府軍の三人…………… Ωとジクスとキサナドゥに助けられ、待機していた戦闘機で脱出できたが、アヴァロンの防空ミサイルシステムが発動され、戦闘機はワープする直後に撃墜され、そのままワームホールへと吸い込まれた。

アストラッド王は悲しそうな表情でクロウとシンに言う。

「そうか…………… 連れ拐われたのか、」

するとシンが謝罪する。

「すみません…………… もっと、我々のウラノスの武装を大幅に強化しておけば、」

「良いのだ…………… こうなると言うのは、絶対にあることなんですから、」

「それより、あのアジマス連邦…………… ΣとBの方は?」

「修理している、ただ、損傷して、端末とシステムとメモリがメチャクチャに破壊されている。恐らく、この二人を逃がすために、必死だっ

たと言うわけだよ、」

その時、アストラッド王はあることを思い出す。

「ハッ！そうだった！貴方達に言わなければならぬことがあります！！」

「何だ?!エンペラージュリオの狙いか!?!」

「それもあります！それと、早く……………早くエミリアを助けてやってください!!」

「わかっていきます！俺達も全力で、エミリアさんを救出します！それまで、もう辛抱です。」

「ありがとう……………!!」

「だが、相手がネオ・ミスルギだと……………こっちの戦力では、足りない……………」

シンが困っているとクロウが笑う

「心配ない……………!」

「え?」

「実は……………」

クロウが取り出したのは、謎の端末だった。

「それは?」

「困ったことがあつた時に使ってくれ」と彼等がくれたんだ……………多分彼等と交渉するためには……………シンや提

督……………皆も必要なんだ……………」

「分かった……………皆を呼んでくる……………!」

シンは急いで惑星連合、ヘルガスト、同盟国、共和国、ヴェクタ防衛軍、スペースパイレーツ、銀河連邦の偉い方に通信回線を開き始めた。

正にその頃、アヴァロンの皇室の間で待機しているジュリオの所に  
γが呼びに来た。

「準備は整いましたよ、ジュリオ陛下」

「よろしい！………記念すべき、新たな人類の誕生だ………

γよ！………アポカリプス！」

ジュリオがアポカリプスに声を掛けるとAIになっっているアポカリ  
プスがアヴァロンのメインシステムのハッキングをしていた。

「了解しました。」

アポカリプスはハッキングを開始すると、あっという間にアヴァロ  
ンの全システムをジャックする。

「システムログイン………08437521………2

3851902………ファイアウォールに侵

入………ハッキングに成功いたしました。」

「よし、」

そして、テラスのカーテンが開き、ジュリオは堂々と外に出た。

アヴァロンの各層の広場では、アジマス人達が陛下の大事な話があ  
るとの情報に、巨大なモニター画面の前に集まっていた。するとモニ  
ター画面からノイズと騒音が鳴り現れると映ったのはアジマス陛下  
ではなく、ジュリオだった。

「皆の衆!!」

「誰だ？アイツは？」

「人間!？」

「どういう事なんだ？」

「アジマス陛下は？」

「諸君らに………良いものを見せよう！」

ジュリオが下がると、下からハッチが開き、中から十字架貼りにさ  
れているアジマス陛下が映った。それを見た女性のアジマス人達は  
悲鳴を上げた

「きゃ〜!!!」

「アジマス陛下だ!!」

「何で彼が十字架貼りにされているんだ?」

「お前! 無礼だぞ!!」

アジマスの民はジュリオに向けて、反発の声が鳴り響くと、ジュリオはアポカリプスに言う。

「では、アポカリプス…………… やりなさい……………」

「はい、陛下…………… これより、アップロード、ブレインジャックを開始する。」

アポカリプスが緑色に光輝き始めると、アジマス人の様子が異変してきた。頭を抑えたり、倒れて回転するものや、訳の分からないコード番号を言い始め出した直後、辺りが静かになった。そしてアジマス人は苦痛から解放され、立ち上がると同時にジュリオが言う。

「皆の衆! この国の国皇は誰かね?」

ジュリオは問い出すと、急にアジマス人達が礼儀正しく、整列し、ジュリオに向かって、大声で答えた。

《このアヴアロンは…………… ジュリオ・飛鳥・ミスルギ…………… エンペラージュリオ陛下の物です。エンペラージュリオ様!!!》

「よろしい! 今から、君達アジマス人は…………… ミスルギ人へと生まれ変われ!」

《はい、陛下!》

するとアジマス人達に変形し始め、白と黄色のアーマーと黄金のフレームへと変わり、モノアイのカラーが青から、緑へと変色した。

「これで…………… この国は私の物だ…………… !! ネオ・ミスルギ皇国に万歳!!」

ジュリオが大声で言うミスルギ人達へと変えられたアジマス人達も大声で言う。

《ネオ・ミスルギ皇国万歳!!!》

「これより! 我々、ネオ・ミスルギ皇国軍は…………… 三大国家同盟を落とす! 情けは無用だ! 存分に奴隷共を捕らえてこい!!」

《イエス! マイ、エンペラー!!!》

港に滞在しているミスルギ皇国軍兵士達は膨大な戦力と数を連れて、ホライゾンへと突入しに向かつていった。

「さあ、始めよう……………我々新しき人類……………」新人類”の誕生だ……………そして……………」

すると各層の都市の地中から巨大なリング型の機械が現れ、そのリングからワームホールが起動した。するとワームホールの中から、無数の人々が来場してきた直後、今度は、各層の広場の中心から、巨大な塔が出現し、来場してきた無数の人々が驚く。

そしてジュリオオが塔に手を差し伸べると、塔の頭頂部から黄緑に輝く光波が各層一斉に拡散すると、来場してきた人々の手から光がポツンと出てきた。

「これって……………」

!!!?

「マナだ……………マナの光だあああああ!!!!!!」

「俺達人間に戻るんだ!!!」

「ここが新しいミスルギ皇国なんだああ!!!」

「またあの時の様に暮らせる様になるんだな!」

「そうなんだよ!!」

「やった!やったああ!!」

「ジュリオ陛下だ!!!」

「生きていたのですね!!」

「ありがとうございます!ジュリオ陛下あああ!!!」

「我らを導く偉大な皇帝ジュリオ陛下ああ!!!」

元偽りの地球人達はマナの光が戻ってきた事に狂喜を上げると、ジュリオオも喜びながら、叫ぶ。

「これで、私の復讐が完遂出来る!!忌々しいノーマとドラゴンとあのヴェクタのガキも!!覚悟しておれよ!アンジュリーゼエエエエエ!!!」

ジュリオオは高い笑い声を上げ、新・ミスルギ皇国の民と共に喜んでいた。その光景を宮殿から別の場所にある大きな塔の窓からエミリアがいた。エミリアは狂喜を上げるミスルギの民を見て、恐怖していた。

「案内人達が私達の世界を食るのですか……………?!」

そしてエミリアは用意されていたベッドの中に隠れ、震えながら、手を握りしめ、祈っていた。

「陽弥様……………！助けて……………!!」

その日…………… アヴァロンは完全にネオ・ミスルギ皇国に樹立

され、その夜、ミスルギ皇国の民の笑い声がエミリアのいる塔まで、聞こえており、エミリアは眠れなかった……………

## 第22話：ネオ・ミスルギ皇国の進攻 前編

その頃、ホライゾンにいる陽弥達は北の国、雪原が広がる大地に上陸し、そしてそこに、ヴァランドール皇国の3倍もある国、ヴァルヴァートル帝国に到着した。もちろん、ヴァルヴァートル帝国兵には警戒されたが、陽弥がリチャード陛下に渡された手紙をヴァルヴァートル帝国兵士の一人に渡し、手紙の内容を見て、入国を認めてくれた。「すいませんでした。まさか、あなた達が星の海から来た守護者だったとは、」

「いえいえ、よくあることですから、」  
「では、入国を許可します。」

巨大な城門が開門され、ウラノスはヴァルヴァートル帝国へと入国すると、ヴァルヴァートル帝国の住民達が啞然した表情で、ウラノスを見ていた。ローレライとリヨウマはウラノスの窓からその光景を見ていた。

「凄い建物が並んでいますわねえ、」

「拙者の故郷は緑溢れる都市なんだが………ここは何だろう？………何故か、寂しく感じる………」

リヨウマが悲しそうな表現で、ヴァルヴァートル帝国の都市を眺めていた。

ヴァルヴァートル帝国の帝都の中心に入ると、その奥に魔法で浮遊している機械と鉄塔から煙が上がっている大きな建物が見えてきた。

「あれが………ユージーン皇帝陛下の城………」

そして、陽弥達はウラノスから降り、ユージーン皇帝がいる玉座の間に足を踏み入れた。そしてそこに、ユージーン皇帝が厳しい表情で



陽弥達を見ていた。

「お前らが、星から来た守護者か……………?」

ユーージーン皇帝はアリスに問うと、アリスは答える。

「はい、ユーージーン皇帝陛下……………我々はエミリアの奪還とホライゾンの救護するために、遥々星の彼方にある地球から、やって来ました。」

「そうか……………なら、良い……………とにかく、長旅で疲れているだろう……………帝都ボルグを歩き回って良いぞ……………」

「ありがとうございます……………では、」

アリスはそう言うと、陽弥達と共に、玉座の間を出ようとした。

「……………それから、お願いがある……………」

「何でしょうか?」

「私の息子がいるかもしれない……………」

「見かけたら、声を掛けて連れ戻してくれないかなあ?」

「分かりました。」

アリスはユーージーン皇帝の頼みを受け、玉座の間を出ていった。

陽弥達は城から出て、帝都ボルグを観光すると、帝都ボルグの風景が偽の地球に似ている事に気付く。

「偽の地球と同じ風景だ……………」

「うん、」

「きつと、アジマス連邦の攻撃で貧しくなっているんだよ……………ほら、」

陽弥はソフィアの指差す方向を見ると、アジマス連邦の攻撃で、住宅街の屋根瓦や壁が酷く損傷していた。

「本当だ……………」

「そして……………」

陽弥達が見たものは、城壁の塔の上に巨大な結晶石がヴアルヴァートル帝国の各城壁の塔の上に浮遊していた。

「あれが……………リチャード陛下が言っていた電磁シールドを発生させる城壁……………嫌、城壁と言うより、クリスタルか……………」

すると、ルナはあちこち辺りを見回しながら、陽弥に言う。

「あれっ?!……………アレクトラさんは?」

「え?……………そう言えば……………!」

陽弥達は帝都ボルグで迷ったアレクトラを捜索していった。

その頃、仲間とはぐれたアレクトラは……………

「あちやく、完全に迷ってしまった……………」

アレクトラがあちこち歩いていると……………

「よお!姉ちゃん!」

「?」

アレクトラの後ろにチンピラが三人がおり、不潔な目でアレクトラの体を眺めていた。

「迷子かあ?……………迷子なら、俺らが送ってやってやるよお?」

「別に……………」

「ヒヒヒ、」

チンピラが不気味な笑い声をするとアレクトラは何か決心した様な表情になり、鋭い目付きでチンピラ三人を睨んだ。

「アンタ等は私にボコられる覚悟は出来ているのか……………?」  
「ハア? 何言いやがってんだ、コイツは?」

チンピラの一人が言うのとアレクトラはため息を吐くと同時に戦闘体制をする。

「フウ…………… どっからでも、掛かってきな! このチンピラ共が!!」

その言葉に三人は切れ、殴り掛かってきた。

「「うらあ〜!!」」

アレクトラは一人目の攻撃を簡単に回避し、右肘を殴り掛かってきたチンピラの背中にぶつけ、もう一人のチンピラに右ストレートが炸裂し、三人目のチンピラにはドロップキックをした。

「ホラホラっ! どうしたあ?!」

アレクトラが手をクイッククイックとし、三人のチンピラに挑発をする。

「私を強姦したいんだろ!」

「「やあ〜!」」

今度は、三人がかりで飛びかかったが、アレクトラは飛び上がり、三人の頭を蹴り上げた。

「アホど… もっ!」

倒れた一人がアレクトラを転ばし、二人のチンピラがアレクトラの両手を拘束した。

「捕まえた!!」

「クツ!!」

アレクトラが必死に抵抗するが、二人の力が強く、このまま強姦されると思いきや、アレクトラの頭上から、マントとフードで姿を隠した人物がアレクトラを拘束しているチンピラに殴り掛かった。

「フッ!」

フードの少年は華麗な素早さで二人のチンピラを翻弄し、同士打ちさせると、あっという間に気絶した。

「このガキっ!!」

最後になってしまったチンピラの一人が少年に右ストレートを振

りかぎすと、少年は高く飛び上がり、

左足を上げ、チンピラの頭目掛けて踵落として止めを刺すとチンピラはゆっくりと倒れた。フードの少年は手に付着していた埃をはたき落とすと、アレクトラに近付き、手を差し伸べ、安否確認をした。

「…………… 大丈夫？」

「え？…………… ありがとう……………」

アレクトラは少年の握り立ち上がると同時に強い風が吹き、少年のフードが後ろに下がり、素顔が露になった。

「あ……………！」

その少年の肌は白く、左右の瞳の色が黒と白に別れており、灰色の髪をしているイケメンだった。その少年の魅力

にアレクトラの頬が赤く染まった。すると少年はアレクトラに問う。

「あのう…………… 僕の顔に何か？」

「……………」

「ん？、あの……………」

「え！…………… あ、嫌…………… 何も……………！」

「そっか…………… 良かった……………」

「自己紹介がまだだったね？…………… 僕はルチル…………… 君は？」

「……………」

ルチルと名乗る少年はアレクトラに名前を聞く。

「…………… アレクトラ……………」

「アレクトラ…………… 良い名前だよ♪」

するとアレクトラとルチルの逆方向から、多数の足音が聞こえてきた。

「いけない…………… もう、ここまで来たのか……………」

「こつちー！」

「え?!ちよつ!？」

アレクトラはルチルの手を引っ張り、壁と壁の隙間に入り込み、身を隠した。そしてそこに、ヴァルヴァートル帝国兵士が駆け付けて来た。

「どうだ！いたか?!」

「駄目だ……ここにもいない、」

「ハア……困ったなあ、とにかく、俺は向こうを探す!」

「分かった!速いところ皇子様を見つけないと、ユーージーン皇帝陛下に怒られる……!」

兵士はその言葉を言うと、直ぐに立ち去った。そして兵士が立ち去った事を確認し、アレクトラとルチルは隙間から出る。

「行った?」

「行ったよ、速く出てきなさい。」

「うん、分かった……」

「ハア、苦しかったあ……」

その後、アレクトラはルチルに連れられ、帝都ボルグにあるお店や工業所へ案内された。するとアレクトラが大きな歯車が回転する工場を見ると、ルチルはアレクトラの視線

を見て、答える。

「この工場の動力源はヴァルヴァートル帝国付近に鉱山があつて、その鉱山からフォドラニウムのエネルギーを採っているんだ。」

「フォドラニウム?」

「未知の力を持っている鉱石の事だよ、このエネルギーで、暖房やお湯を沸かす様になつているんだ……けど、」

「けど?」

するとルチルが悲しい表情をする。

「……空の橋の争奪戦の時に、帝国は大打撃を受けて……貴重なフォドラニウムの採掘が酷くなって……」

「採れなくなっているの?」

「うん……フォドラニウムのエネルギーが空の橋の争奪戦で減少してしまつて、今、採れるフォドラニウムは僅かなエネルギーしかないんだ。けど、グラシオン連合の科学者達が何とか、フォドラニウムのエネルギーを増幅させようと懸命になつているんだ……」

「……アタシの故郷も……同じだった……」

「え……………」

「私の故郷も……………昔は酷い環境だったんだ……………この国と違って……………空気は汚染されていて、難病で病死する人も多発していた。けど、陽弥の親父さんが、ヘルガストの人民を救おうと空気中の汚染物質を除去してくれる機械『フォトン』を開発してくれたおかげで……………皆が難病から解放されて、元気になった……………」

「へー、凄いなあ……………」

「だろ？、流石だよ……………アタシの親戚は……………」

「親戚？」

「ああ、親戚の種族ヴェクタとアタシの種族ヘルガストは……………言わば、双子関係の種族なんだ。それで……………」

アレクトラがルチルに皆の事を説明している頃、影でアレクトラを見守る陽弥達が覗いていた。するとソフィアが陽弥に質問してくる。

「ちよつとあの二人いつの間にあんな関係を持ったの？」

「知らないよ……………」

二人が喧嘩しているとローレライが興奮状態で陽弥達に語りだした。

「きつとこうでしょう……………！アレクトラさんが、迷っていたとき、不良に絡まれ、まあ大変！その時、何処からともなく現れ、悪漢からアレクトラさんを守り、愛の逃避行をしているのですわ！なんてロマンチックな展開ですわ！！♪」

ローレライの興奮状態に皆は呆れた顔をして、心の中で一斉に思い込む。

《この人魚姫さん……………何考えているんだ？》

すると何処からか途もなく警報が鳴り響いて来た。

「何だ?!」

「何だ……………このサイレンは……………?!」

アレクトラが辺りを見回しているとルチルが厳しい表情で城壁を見上げる。

「まさか……………」

「え？」

「何でもありません、それじゃ、僕はこの辺で！」

ルチルはそう言うとは何処かへと消えていった。

「あールチル！」

アレクトラがルチルを追い掛けようとした時、陽弥達が駆け付ける。

「アレクトラ！」

「皆！」

全員集合すると皆のオムニツールから通信が来た。陽弥達は通信を開くとモニターにアリスが映った。

『皆！まだ帝都にいる!?』

「え!?あ、はい……………！」

「今、ヴァルヴァートル帝国偵察兵が報告してきたの！アジマス連邦の軍勢がヴァルヴァートル帝国とグラシオン連合とヴァランドール皇国へ同時に進攻しているの！」

「何だつて?!」

「けど、ユージーン皇帝陛下に言うと、アジマス連邦は直ぐには襲撃しないと思う。必ず、前線基地を作り上げると思う。」

「つまり、警戒体制をつつと言う事か?!」

「ええ！」

「了解！」

陽弥達はアリスの通信を切ると急いでウラノスへと戻った。

暁が闇の中へ堕ちていくと時…………… 帝国ボルグの住民達は急いで荷物をまとめ、皇帝の城の地下へと避難しに行った。そして…………… その上空を陽弥とルナが見回っていた。

「この辺の人達……………皆、居らんくなつたなあ、」

「仕方ないよ…………… この辺りは電磁シールドのある城壁に近いか

ら、」

「なるほど、つまり……………この辺りが一番攻撃を受けやすいって事か……………」

「……………だけど安心して、ヴァルヴァートルの女性、子供、老人はヴァルヴァートルの城に避難する事になっているらしいの……………」

「へえ〜」

するとルナは陽弥に言う。

「それと、驚いちゃったよ……………まさかエミリアさんがQ人の生き残りだったなんて……………お兄ちゃんは何で疑問に思ったの？」

ルナが質問すると陽弥は答えた。

「……………エヴァが……………教えてくれたんだ……………」

「え?!」

突然の言葉にルナは驚き、陽弥はそのまま続ける。

「アイツが……………エミリアを連れ拐う直前に言ったんだ……………」

陽弥はルナに前の事を言う。

マーメルド王国 城内……………

陽弥は太陽神剣をエヴァに突き付け、エミリアを守ろうとすると、エヴァが陽弥に語りかける。

「それと……………エミリア王女殿下は……………普通の人間ではない……………」

「え?!……………どういう事なんだ!?!」

陽弥が問うとエヴァが消え、陽弥の横に回り込み、陽弥の耳元に小声で言う。

「……………知りたければ……………エミリア王女殿下の故郷にいるリチャードに言え……………」

エヴァはそれを言うと陽弥の首目掛けて、エヴァの空手チョップが炸裂し、陽弥は気を失い、倒れた。



「うっ！」

「陽弥様あ!!……………っ！」

エミリアは倒れた陽弥を助けようとする、エヴァはエミリアの口を塞ぎ、気絶させた。

「クソ……………！」

「彼なら…………… エミリアの事を知っている……………」

エヴァはエミリアを抱えたまま、城から出ると同時に陽弥はそこで気絶した。

陽弥の話が終わるとエミリアはさらに驚く。

「そんな事を!？」

「ああ、」

「だから、お兄ちゃんはりチャード陛下にエミリアさんの事を言ったのね?…………… でも、何でエヴァがそんな事を……………？」

「分からない…………… だから俺は、アイツに聞いてみたいんだ…………… 何で俺に、教えたのかを……………」

「確かに…………… エヴァは何を考えているんだろう……………」

二人は考え込むとヴァルヴァートル帝国兵が叫ぶ。

「敵だああくく!!」

「っ!？」

「敵が来たぞおおおくく!!」

「ついに来たか……………！」

陽弥がアーキバスIIのメインカメラのズームを最大にすると、夕陽に多数の黒い物体が浮遊しており、その下に何万体の黄金のフレームをした兵隊達が進行していた。丁度その頃、別の場所で警戒していたウラノスの乗組員も言う。

「大丈夫だよ…………… 皇帝陛下が言うには奴等は必ず前線基地を建てる筈……………！」

乗組員が頷いた直後、無数のレーザーが先攻し始め、城壁の塔に浮いていたクリスタルが電磁シールドを展開し、レーザー攻撃を防御した。そしてアジマス連邦が先攻してきた事に混乱していた。

「っ!？」

「息なり!？」

「どうなっているんだ!?!？」

「陣を確保するんじゃないか?！」

「分からない!!」

陽弥達が混乱していると城壁に武装したミューとデルタが報告する。

「何でだろう?!…………… おかしい……………！」

「何が?!」

「スキヤンした結果…………… 彼等の受信コードとデータが誰かに書き換えられている…………… それに詳細データも分からない!」  
《ええ!?!》

陽弥達は驚くとデルタが答える。

「恐らく、プロフェツサー”E”が動き出したのでしよう……………！」

「そうか…………… ようやつと黒幕も動き出したのか!」

すると、アレクトラのレイジア mk IIが高速で先行した。

「なら、息なり先攻してもおかしくないか…………… ! 丁度良い! 派手に荒れてやるぜっ!」

「待て!アレクトラ!!」

陽弥が止めるが、アレクトラは無視し、ネオ・ミスルギ皇国兵の攻撃を回避する。

「クッ!」

華麗な動きで敵陣に近付き、地上にいる小型のネオ・ミスルギ皇国兵にビームライフルを撃つが、ネオ・ミスルギ皇国兵の黄金のフレームが輝いた直後、ビームが弾かれた。それを見ていたアレクトラは驚

く。

「ビームが弾かれた!!？」

その直後、ネオ・ミスルギ皇国兵の戦闘艦三隻の主砲がレイジアに向けられ、発砲してきた。アレクトラはレイジアのビームシールドで防御するが、敵の猛攻が激しく、押されていた。

「あああああ~~~~~!!!」

その光景に陽弥達は叫ぶ。

「あの馬鹿っ!!皆行くぞ!!」

「分かった!」

「承知!」

「たくっ、アレクトラったら、!!」

陽弥達は急いで、アレクトラの救出に向かった。

城門付近では、ヴァルヴァートル帝国兵のガンランスのビームが効果が無く、陣形フアランクスで身を守っていた。

「我々の攻撃が効かないだど!!」

「コイツら!..... 本当にあのマジマス連邦なのか!？」

「だけど、今まで見てきただろ!あの機械の姿を!」

「けど、何でアイツ等の体が金色になっているんだよ!？」

「それはっ!どわっ!」

ヴァルヴァートル帝国兵の盾がレーザーで貫通され、絶体絶命の時、上空から陽弥のアーキバスIIが飛来し、シールドでヴァルヴァートル帝国兵を守る。

「大丈夫か!？」

「え?はい!」

陽弥はヴァルヴァートル帝国兵の安否を確認した後、搭乗したまま龍装光をすると、アーキバスIIのヒートアサルトブレードが陽弥が使用していた太陽神剣に変わり、それを抜刀し、ネオ・ミスルギ皇国兵を切り裂いた。ビームでは無効果になってしまいが、銀河七聖龍の力を使えば、勝てるかと確信し、皆に通信回線を開き、教える。

「皆!アイツ等に対抗出来るのは、銀河七聖龍の力だけだ!」  
するとルナが陽弥に報告する。

「けど、ヴィヴィアン隊長とエイルマツトさんとミューとデルタさんとアリス艦長達はどうやってアイツ等に立ち向かうの!?!」

ルナが戸惑っている、ヴィヴィアンが通信してきた。

「アタシ達は城壁を守るから、存分に戦ってくれ!」

「ヴィヴィアン隊長!?!」

それと同時にエイルマツトも通信してきた。

「お前達は奴等に集中しておけ、ここは俺等が守る!」

「分かりました! 師匠!」

リヨウマは御辞儀すると搭乗のまま叫んだ。

「龍装光!」

そしてソフィアとルナも龍装光と叫んだ。

「それじゃ、御言葉に甘えて! 龍装光!」

「龍装光!?!」

赤、黄、青、緑の閃光がネオ・ミスルギ皇国兵の装甲を貫き、四人は奥義を発動した。

「剛火炎!?!」

「絶対零度!?!」

「雷竜破!?!」

「火燐粉!?!」

ソフィアが放った火燐粉を陽弥の剛火炎で周りにいたネオ・ミスルギ皇国兵達が火燐粉の爆裂により、粉碎され、ルナが絶対零度を放つとネオ・ミスルギ皇国兵は凍り付き、それをリヨウマが雷竜破を放つと絶対零度の氷で感電し、ネオ・ミスルギ皇国兵はスタンした。そして陽弥はアレクトラを救出する。

「アレクトラ! 大丈夫か!?!」

「ああ!」

陽弥がプラスマビームライフルで応戦するが、敵の黄金のフレームでビームは弾かれ、陽弥達に迫っていた。

「コイツら、何れだけ増えるんだよ!?!」

「敵が多すぎる!?!」

それはルナ達も同じで、倒しても倒しても、増えるだけだった。す

るとアレクトラが辺りを見回していると、鎧を身に付けた白馬に乗っている騎士を見ると、何かに気付いた。

「ちよつと待つて……………!?」

アレクトラはレイジアを飛翔形態へ変形し、白馬に乗った騎士を追い掛けた。

「アレクトラ!?」

陽弥が止めようとしたその時、上空から、4つの流星が落下した。「なっ!?」

落下時……………煙で見えなかったが、段々と煙が晴れていき、4つの影が姿を現した。

「あれは……………!!!」

4つの影の一人は……………マーメルドで陽弥達を苦しめたエヴァと……………」

「エヴァ!!」

別の地球で銀河連邦を苦しめ、ソフィアを馬鹿にしていたγと……………」

「γ!!」

陽弥の宿敵……………イプシロンと……………」

「イプシロン!?!」

そして、大きな装甲を装着されたアポカリプスだった。

「後、一人……………誰だ?」

するとエヴァがヴァルヴァートル帝国に向かって、叫ぶ。

「我等は 真・四將軍!!新星要塞国家ネオ・ミスルギ皇国の新皇帝ジュリオ・飛鳥・ミスルギ陛下に支える四天王だ!!!」

エヴァの突然の言葉に陽弥達は驚いた。

「ネオ・ミスルギ!?!どういう事なんだ!?!」

陽弥が質問するが、エヴァ達は一斉に陽弥達に飛び掛かった。

その頃、アレクトラは彼の名を呼んでいた。

「おい!ルチル!……………ルチル!」

するとアレクトラの2時の方向に白馬に乗った騎士を見つけた。

「ルチル！」

アレクトラはレイジアの出力を最大にし、ルチルの所へ向かった。

ルチルはネオ・ミスルギ皇国兵に囲まれ、絶体絶命の時、アレクトラがラツイーエルでネオ・ミスルギ皇国兵を吹き払った。

「ルチル！」

「アレクトラ!？」

「お前が、何でここにいるんだ!？」

「僕は……………」

「皇太子様あ！後ろ!!」

「っ!」

ヴァルヴァートル帝国兵がルチルに報告するとルチルの後ろに大型ネオ・ミスルギ皇国兵がハンマーを降り下げようとしたが、アレクトラはレイジアのビームライフルの銃口を大型ネオ・ミスルギ皇国兵の装甲に近付け発砲した。大型ネオ・ミスルギ皇国兵の胴体に風穴が空き、倒れた。そしてアレクトラはルチルに質問した。

「皇太子っ?! あんたまさか……………?!」

ルチルは顔を上げ、アレクトラに言う。

「…………… 僕は…………… 第19代ヴァルヴァートル帝国皇帝

ユージーン・ヘリッドの息子…………… 次期ヴァルヴァートル帝

国皇帝…………… ルチル・ヘリッドなんだ……………!」

ルチルの正体を知ったアレクトラは驚きを隠せなかった。

## 第23話：ネオ・ミスルギ皇国の進攻 中編

その頃、陽弥達はエヴァ達の攻撃を受けていた。陽弥はエヴァのソニックブレードとレーザーブレードをヒートアサルトブレードとシールドソードで防御した。

「ほお、少しは腕を上げたなあ……………」

「当然だ！」

陽弥はエヴァを押し上げ、エヴァを蹴り飛ばすが、エヴァは体制を持ち直し、陽弥に斬りかかった。

「まさかネオ・ミスルギ皇国兵の対銀河七聖龍フレームにしたのが…………… まさか無効果になってしまうなんて……………」

「どういう事なんだ！しかもネオ・ミスルギ皇国って何だ!!？」

「見ての通り…………… 新国家だ……………」

エヴァが言うのとソフィアと戦っているγも言う

「我々ネオ・ミスルギ皇国こそ…………… この宇宙を正しき道へと歩ませる……………」 ”正義の味方”ですよ……………」

「ふざけないでよ!!何が”正義の味方”だ?…………… 違う!あんた達の方がよっぽど悪者に見えるけど!」

「あら、そう?」

γはレーザーレイピアの高速な突き技でソフィアに攻撃した。そしてリヨウマは重装備のアポカリプスに轟雷で斬りかかるが、アポカリプスの装甲は硬く、斬れなかった。

「お前達旧人類は我々のネオ・ミスルギ皇国の社会貢献の為に必要な人材なのですよ……………」

「お主らは…………… 何処まで性根が闇に染まっているのですか!？」

リヨウマは鋼龍號のバスターランチャーを射つがアポカリプスのフレームのせいでランチャーのビームが弾かれた。その頃、ルナはセイレーンでイプシロンに返事をするが……………

「イプシロン!返事をして!」

「……………」

「駄目だ!反応が無いわ!」

ルナはイプシロンの攻撃を回避し、防御体制をした。

陽弥はエヴァのソニックブレードをシールドソードで防御し、ヒー  
トアサルトブレードをレーザーブレードにぶつけ、両者動けないよう  
にした。

「お前らはこんなので良いのか!?アジマス人を戦争用の道具にして!!  
彼らだって、家族や友達、愛する人がいるんだぞ!!」

「……………私はジュリオ皇帝に従うまでだ……………」

「じゃあ……………何で、お前はあの時……………エミリアの事を  
言っただんだ……………?!」

「……………自分の眼と耳で確かめろ……………そして……………  
急いだ方が良いぞ……………」

「え……………!?!」

「我が要塞国家ネオ・ミスルギ皇国の新皇帝ジュリオはアヴァロンの  
環境を変えてしまった……………アヴァロンで待っているぞ……………」

エヴァはそう言うと言動が取れないエヴァの腕が展開され、四本  
の腕になると手が回転し、ドリルアームで陽弥のアーキバスIIの肩を  
貫く。陽弥は舌打ちすると、ドリルアームを斬り、エヴァの距離から  
離れ、防御体制を整える。

その頃アレクトラはルチルがヴァルヴァートル帝国の皇太子だつ  
たと言うことに驚いていた。

「あんたが……………皇太子!?!」

「そう、僕は……………次期皇帝になる者なんだ……………父  
は……………病気の為……………僕が代わりに……………戦線に出てい  
るんだ……………戦で亡くなった兄さんや母さんの為な  
ら……………!」

ルチルが心に決めた事を言った直後、後方からネオ・ミスルギ皇国  
兵が迫ってくるとアレクトラはレイジアのラツィーエルを抜刀し、ネ  
オ・ミスルギ皇国兵を切り裂いた。



「…………… あんたって…………… 結構、家族思いなんだねえ……………  
よし！私も一緒に戦ってやるよ！」

「アレクトラ?!」

「大丈夫！私と一緒にいれば百人力になるからなあ！それにつ！」

顔が赤くなつたアレクトラはレイジアでネオ・ミスルギ皇国兵の首を掴み、投げ飛ばした。

「あんたの事が好きになつたんだよ……………」

「何か言つた？」

ルチルはアレクトラが言つた言葉を聞いていなかったが、アレクトラはツンデレになつた。

「…………… 何もないって！それじゃつ…………… 行くよ！」

そして城壁で守っている△はエナジーリングでネオ・ミスルギ皇国兵を切り裂きながら、叫ぶ。

「民達よ！目を覚ましてください！貴方達は“プロフェツサー”E”に騙されているのです！」

しかし、△の声は彼等に全く届かず、ネオ・ミスルギ皇国兵は△へ目掛けてレーザーを乱射し、爆発した。煙が晴れるとミューが大型リフレクターシールドで△を護っていた。

「デルタ様！御下がり下さい!!」

「しかし！」

「もう、彼等には我々の声は届いていないのです！」

「そんな……………！」

ミューは構わず、腕に装備されているソニックブレードを展開し、

ネオ・ミスルギ皇国兵に突っ込んで行った。

一方、陽弥達はネオ・ミスルギ皇国兵とエヴァ達に囲まれていた。  
「クソツ！」

「お兄ちゃん！もう駄目だよ！」

「諦めるな！皆頑張って戦っているんだ！」

「だけど、この数は想像以上だよ！」

陽弥達が混乱していると上空に浮遊している巡洋艦の主砲が陽弥達の方に向けられた。

「もうダメだ……………！」

誰もが、絶望になった直後、突然巡洋艦が爆発した。

「何だ……………!?!」

すると燃え盛る巡洋艦から出てくる爆煙の中から、見たことのない機体が陽弥達の前に現れた。そして中にいるライダーが叫ぶ。

「助っ人参戦!!♪」

「誰……………?!」

陽弥達が茫然していると青年は答える。

「説明は後……………アポカリプスとイプシロンは俺に任せて！ジークフリード！」

「yes my master!!」

ジークフリードと名乗る機体は青年の命令を受け、流星の様な速さで、アポカリプスとイプシロンを吹き飛ばした。

「共に戦おう！俺らは一心同体！重龍装光!!」

青年が叫ぶと機体からダイアモンドを纏った美しき龍が現れ、ジークフリードの回り始めると、ジークフリードが青く光だし、光が消えるとジークフリードの全身の装甲が時空神龍のダイアモンドの装甲になっていた。それを見ていた陽弥達は驚く。

「機体に纏った!?!という事は……………アイツ銀河七聖龍に選ばれし守護者つて言う事か……………!?!」

アポカリプスが背部に装着されているコンテナが開き、中からマイクロロボットが無数に出てきて、ジークフリードに襲い掛かった。

「次元バリア展開!!」

青年が叫ぶと黒い球体が現れ、ジークフリードを飲み込んだ。するとマイクロロボットは黒い球体に分解され、アポカリプスは驚く。

「何!？」

そしてジークフリードのコックピットにいる青年は愛する少女に通信を開いた。

「キャサリンー！空間転送を!!」

「分かったわ!!」

キャサリンと名乗る美少女はジークフリードにライフルを転送させた。そして黒い球体を解除したジークフリードはライフルをアポカリプスに撃った。するとアポカリプスの右手に風穴が出来た。

「何!?!銀河七聖龍の力も受け付けないフレームがっ!?!」

アポカリプスが手に集中している隙に青年は叫ぶ。

「ビームサーベル!」

ジークフリードの肩が露出展開し、中から突起物が出てきて、ジークフリードは抜刀すると緑の閃光の刃を放出し、アポカリプスに斬りつけたが、イプシロンが二刀流のレーザーブレードでジークフリードのビームサーベルを防御すると青年は叫ぶ。

「ビット!!」

ジークフリードのウイングから二つの煙突形状のビットが展開され、真っ先にアポカリプスへと向かい追撃してきた。

「クッ!」

アポカリプスは何とかビットを降りきろうとするが、ビットは凄まじきスピードでアポカリプスを追撃する。するとアポカリプスは肩部が露出展開し、 $\alpha$ と同じパルスフィールドを発生したが、ビットはパルスフィールドの電磁波を受けず、アポカリプスの肩部を破壊した。

「機能が停止しない!?!何故だ!?!」

「アンタ達の為に遠隔操作攻撃機にちよつとしたシステムを組み込んだ。」

だのさー！」

「最悪な敵を相手してしまった……！」

アポカリプスが指をクイクイと動かすとイプシロンがジークフリードの後方に襲い掛かった。

「空間転送！バスターソード！」

ジークフリードの手から大剣（分かりやすく言えば、ガンダム00のガンダムスローネツヴァイのGNバスターソードの青いバージョンです。）が出現し、イプシロンの攻撃を防御するとアポカリプスが隙を突き、後方に旋回したジークフリードの横にソニックブレードを掲げる。

「貰った!!」

すると青年は横にいるアポカリプスを確認し、叫ぶ。

「空間転送！フラップ！」

ジークフリードの右肩から小型の煙突形状のビットが4機出現し、青く光るエーテル粒子砲をアポカリプスに向けて乱射した。

「グアツ!!近距離攻撃機だ?!」

アポカリプスの胸元にエーテル粒子砲で風穴が空き、墜落していくとイプシロンがアポカリプスを抱え、アヴァロンへと戻っていく。アポカリプスはエヴァに通信をした。

「こちらアポカリプス………一時戦線離脱する………！」

「分かった………後は私とγで殺る………それと………試

作機“デストロイア”達を起動させる………良いな?」

「了解………」

エヴァは謎の計画をアポカリプスに発動させた。

アポカリプスとの戦いを終えた青年はその戦いに驚く陽弥に近付いた。

「凄い………俺達が苦戦した四將軍の二人を………だった一人

で…………… アイツ…………… 何者……………?!

陽弥はジークフリードを見て唾然していると、ジークフリードのコックピットが開き、青年が顔を見せる。

「っ!？」

「…………… 久しぶりだなあ!陽弥!」

青年が陽弥を呼ぶと、陽弥はあることに気付いた。

「え?その声…………… 俺のファランクスを盗んだ!!」

「ハハハ…………… !ビックリだろ?」

「お前…………… 何者なんだ?」

「俺は…………… (うゝん、名前を変えた方が良いか…………… なら、昔の名を使うか…………… )ルーだ」

「ルー…………… 頼む、お前のその力が必要なんだ…………… 協力してくれないか?」

「言われなくとも、こっちのど偉いさんから許可してくれとるから♪」

「良し!行こう!」

「おう!」

陽弥と”ルー”は急いで、ルナの所へと戻った。

そしてアレクトラとルチルはネオ・ミスルギ皇国兵に苦戦していた。

「切りがない!」

アレクトラが叫ぶと空から赤い流星群が落下し、ヴァルヴァートル帝国の城壁の塔に浮遊しているクリスタルが粉々に砕けた。

「っ!？」

「シールドが!!」

「何で!?!シールドの耐久力は十分あるのに!?!…………… っ!？」

1. 二人は混乱していると、崩れたクリスタルの中から大型兵よりも5倍の大きさを持つ天使の様な巨体な機体が浮遊していた。



「ルー!?お前っ!?この速さに追い付けるのか!？」

「当たり前だ!俺は時空神龍に選ばれし者だからなあ!」

ルーはジークフリードのビームサーベルでデストロイアを突き刺したが、デストロイアの装甲の表面に量子フィールドが張られており、ビームサーベルの威力が弱くなっていた。

「こいつの装甲……………堅いなあ!……………なら!」

ジークフリードはビームサーベルを収納すると量子フィールドに手を差し伸べて叫ぶ。

「空間転送!パイルバンカー!」

ジークフリードの手のひらから突起状の金属がフィールドを貫くと同時にフィールドの内部で爆裂した。そのおかげでフィールド内の装甲が爆裂で内部のコードが丸出しになり、ジークフリードはビームサーベルを抜刀し、デストロイアの剥き出しのコードに突き刺した。

「切り裂く!」

ルーは叫びながら、ビームサーベルを突き刺したまま横に動かし、デストロイアを真つ二つにした。

「良し!」

陽弥とルーは急いで、ヴァルヴァートル帝国にいるデストロイア達の所へ行くと3機のデストロイアとネオ・ミスルギ皇国兵の戦闘機が追撃してきた。

「追っかけてくるぞ!」

陽弥は追撃されていることに気づき、デストロイアはルーをスキヤンする。

「スキヤン開始……………測定不能……………時空神龍に選ばれし者……………排除します!」

3機のデストロイアのブースターからクローアームが現れ、ビームバルカンを乱射し、それと同時に戦闘機も拡散レーザー砲を放つ。

「降下なの!」

陽弥とルーは敵の追撃を回避しながら、プラズマビームライフルとジークフリードのライフルで戦闘機を破壊し、二人で射ち、1機のデ

ストロイアが爆発した。

「1機撃墜―！」

「後、2機だ!!」

ルーがライフルを連射するがデストロイアは散開しながらルーのライフルの粒子砲を回避する。

「ったく―！」

ルーは舌打ちすると、ビットとフラップを全展開したが、デストロイアは読まれているのか、ビットとフラップの攻撃を回避する。

「クソ―うろろすんな―！」

ルーは怒り、ジークフリードのライフルをレーザーに切り換え、デストロイアを追撃しながら、2機共破壊した。

「1機、2機撃墜―！」

終わったかと思っただ直後、爆発したデストロイアの煙から、もう1機のデストロイアが2本のクローアームから放出している大型ビームソードを突き付けてきた。

「何―！」

「もう一体いたのか!?!……………クソ―！」

「殺られる―！」

二人はデストロイアに撃墜される直後、上空から光粒子のビームが放たれ、陽弥とルーに襲い掛かるデストロイアの量子フィールドと装甲を貫通した。

「何だ!?!」

陽弥とルーが上を見上げると、雲から、光が指し照らされ、その中に白と黄金のアーマー、紅白のマントをしたアーキバスⅡがビームライフルを持ったまま、浮遊していた。その光景に皆は呆然する。

「あれって……………アーキバスⅡ……………!?!」

「何て……………神々しい……………！」

「あれは……………一体!?!」

「スゲー！」

「この感じ……………まさか……………」

「あれは……………？」



「…………… Q人の遺産……………」アーク」

陽弥達が茫然しているとそのアーキバスⅡが地上に降下し、地面に手を乗せるとそのライダーは言う。

「皆を戦いやすくしてやるぞ! 神の領域!」

するとそのアーキバスⅡの手から光粒子波が広がり、ヴァルヴァートル帝国兵と陽弥達に巻き込むと……………

「何だ? この力は……………」?

「何だろう…………… 体の中から力が湧いてくる……………」!

ヴァルヴァートル帝国兵がよそ見しているとネオ・ミスルギ皇国兵がヴァルヴァートル帝国兵に襲い掛かかり、ヴァルヴァートル帝国兵は尽かさずガンランスを撃つと、ネオ・ミスルギ皇国兵を破壊した。

「攻撃が…………… 効いている!」

「つまり!」

「俺たちはまだ…………… 負けていないって事さ!!」

ヴァルヴァートル帝国兵が大声を上げ、隊列を組み直し、ガンランスを乱射した。ネオ・ミスルギ皇国兵はガンランスの攻撃に次々と倒れていく。

「凄い…………… こんな力が湧いてくるなんて…………… アイツ一体…………… 何者なんだ……………?!」

陽弥達が啞然していると、エイルマツトがジャックに乗ったまま、通信回線を開き、説明した。

「クロウ・F・アルメディオ…………… 友人だ……………」

そのアーキバスⅡに乗っているライダーの名前が分かると同時に、空から、陽弥とルナの父親 シンのネオ・アウローラと種族銀河同盟の艦隊が飛来してきた。

「あれは!」

「種族銀河同盟!…………… 父さん達だ!!」

「久しぶりだなあ、陽弥」

「父さん! 何でここに!」

「詳しい事情は後だ…………… それと皆、連れてきた!!」

シンが叫ぶとアウローラのカタパルトからタスクのヘラクレス、

リュウガのヤマト、ファイリのジャンヌ、ウイルのカタストロフ、ハンクとゾーラのバンシー、バンのブレイブ、カズとサイのサイクルプスが発進し、アンジユのヴェルクス、サラマンディーネの焰龍號とお付きのナーガの蒼龍號とカナメの碧龍號、サリアのクレオパトラ、ヒルダのアーキバス、エルシャのハウザー、ロザリーのグレイブ、クリスのハウザーが横に並び、ネオ・ミスルギ皇国に怒りの表情を見せると武器を構え、一斉射撃した。

「もしかして……………第一部隊と第一中隊!？」

「そうだ!さらに……………!向こうで交渉が成立した!」

「交渉成立……………?」

すると陽弥達の通信機から二人の声が聞こえてきた。

「初めまして、私の名はジオット……………銀河の監視者『モーフイス』の総統です。」

「同じく、私はラスタルト 我々はノバ軍 ザンダー共和国の指揮官をやっています。」

「我々、種族銀河連合は……………同盟国と共に……………ネオ・ミスルギ皇国を打破します!!」

二つの勢力はネオ・ミスルギ皇国に被害を受けているグラシオン連合、ヴァランドール皇国へ向かっていった。

「凄い……………!」

「皆!」

陽弥達が唾然していると、アンジユが娘であるソフィアに安否を確認する。

「ソフィア!元気にしてた?」

「うん!」

ソフィアは答えるとアレクトラの父親 ウイルがネオ・ミスルギ皇国兵に言う。

「お前ら!覚悟しとけよ!!俺たちにちよっかい掛けた分!!3倍で返して殺るぜえ!!」

ウイルの行動にサリアは手で顔を隠し、



「じゃあ、やれ、」

「ふう………龍装光!!」

二人は息ピッタリと叫ぶと黒と白の宝石が光、アレクトラとルチルを包み込み、二つが合体した。

「双頭神龍!!」

左右が白と黒に別れており、白の方は生身の龍の体をしており、黒の方は機械で出来た龍になっていた。するとネオ・ミスルギ皇国兵達がレーザー兵器を一斉射撃してきた双頭神龍は右手を空手技の様に八卦をした。

「ブラックホール!!」

すると双頭神龍の手のひらからブラックホールが出現し、レーザーを吸い込むと、次に左手を突きだした。

「ホワイトホール!!」

左手からホワイトホールが出現し、ホワイトホールからレーザーが吐き出され、それをネオ・ミスルギ皇国に向けて、返り討ちにした。いた。

一方、陽弥達は次々とネオ・ミスルギ皇国を倒していくと、双頭神龍になったアレクトラとルチルが飛んで現れた。

「アレクトラ!」

「おう!」

アレクトラとルチルの声と一緒にあっており、分からなくなっていた。

「お前の声………ごちゃごちゃになっているなあ………」

「そうか? 結構………これカツコイイけどなあ! アハハハ!!」

「はあ、そうか………」

「ほら! グダグダしているとおいでなさったぞ!」

「？」

陽弥達の目の前にネオ・ミスルギ皇国兵達が陣形を整え、レーザー兵器を構えていた。

「銀河七聖龍も揃った！父さん達も来てくれた！………殺つてやろうじゃないか！………つ?!」

陽弥達が戦おうとした直後、陽弥の胸が虹色に光、それが段々と大きくなる。

「何だ?!この光は………?!」

陽弥が驚き、数メートルの光る虹の球体から波動が広がるとネオ・ミスルギ皇国兵達が突然と倒れ始めた。デストロイアも巡洋艦も墜落し、エヴァはそれを見て、驚く。

「この力………まさか?!………嫌、あり得ない………なら、何故………あの少年に”あの力”が………γ………」

「ん？」

「撤退するぞ………!」

「………は!？」

「今の戦力で同盟とモーフィスとノバ軍を相手すれば、元もこうもない………アヴァロンに戻って体制を整え直すぞ………」

「ちよつと待つて!今、殺り合おうと言う時に!？」

エヴァとγは残ったネオ・ミスルギ皇国兵を連れ、アヴァロンへと撤退していった。その光景にヴィヴィアンは言う。

「あれ?………逃げていく………!？」

「もしかして………こちらの戦力がネオ・ミスルギ皇国よりも上回っていた………と言う事か?」

陽弥がそれを見上げ、心の中で言う。

「………アヴァロンで待っている………どう言う事何だ………一体?」

その様子にルーは陽弥を見る。

「………」

戦闘が終え、陽弥達はそれぞれの家族の所へ向かった。

「父さん！母さん！」「お父さん！お母さん！」

陽弥とルナの前に松葉杖を持ったシンとヒルダとココとミランダがいた。

「よく無事だったなあ、陽弥……ルナ……」

「父さんも……松葉杖に変えたの？」

「ああ、完璧にリハビリが済めば、ペルシウスに騎乗しても良いと、マギーに言われた。」

「そっか、良かった……母さん達はどうしてここに？」

「復帰したんだ」

「復帰した!?!」

驚くべきことに陽弥とルナは言う。

「どういう事!?父さん!……母さんは軍を辞めたのに!?!」

「色々あって事情が変わったんだ……ネオ・ミスルギ皇国の事で……」

「ネオ・ミスルギ……?父さんそれって……? どういう事何だ?」

シンが陽弥に話そうとするとクロウが現れた。

「それは……俺から話そう……」

「あなたは？」

「俺はクロウ……クロウ・F・アルメデイオだ……」

クロウは自己紹介をすると陽弥とルナに説明した。

その頃、撤退していったエヴァ達は……

「何だあの力は……!?エヴァ!あのヴェクタの若造から放った

力は何なのだ!？」

「分かりません…………… さらに分析が必要です陛下……………」

怒り食らうジュリオは徘徊し始めた。

「チツ！惑星ホライゾンから採れる銀河七聖龍や光学兵器にも対抗出来る合金”フオドラニウム”をフレーム化した筈なのに…………… アークは忌々しきアンジュリーゼの元に！そしてアンジュリーゼが増援として来るなんて！おまけにモーフィスとザンダー共和国がアンジュリーゼ率いる化物共と同盟になってしまった!!」

「陛下、落ち着いてくだ……………」

エヴァがジュリオに話しかけるとジュリオはワイングラスを持ち、エヴァの顔に投げ付けた。

「うるさい!!今、私に声を掛けるなっ!!」

エヴァは悲しい表情でジュリオに謝罪する。

「…………… 申し訳…………… ありません」

「ハア…………… ハア…………… ハア…………… まあ、良い……………」

!!アークは奴等の元にあるが、Qの姫の持つ力と……………」

するとジュリオは長裾から右手を見せた。

「ドウム様から託されたダークマタージュエルはここにあるのだからなあ…………… !!」

ジュリオの右手に紫の結晶体が赤筋と青筋を発しながら、右手に侵食していた。

「それとアポカリプス……………」

「はい、陛下」

「エミリア姫君はどうなっている?」

「まだ、部屋にいます…………… 御安心を……………」

「そうか、なら…………… このドウム様から託されたダークマタージュエルの力を試すか……………」

ジュリオが笑うと同時に紫の結晶体が輝き、その奥に何かの欠片の様な石が見えた。

## 第24話：ネオ・ミスルギ皇国の進攻 後編

陽弥はクロウの話を聞いた。

「俺はクロウ……………クロウ・F・アルメディオだ……………」

「クロウ……………あれ？その人……………何処かで聞いたような……………」

陽弥がクロウの名を思い出そうとしたとき、ルーが驚き、叫ぶ。

「クロウ・F・アルメディオ?!?!」

《?》

皆がルーに振り向き、シンが陽弥に言う。

「何だ？この若造は？」

「……………あ！失礼しました！私はルーと申します！」

「……………ルーか、なら聞こう……………クロウさんを知っているのか？」

「え?……………はい！宇宙歴10年(西暦2064年)に核ミサイルでの戦争に荒れた地球と人口の為に宇宙にある多数の惑星を開拓するため、五隻のSRFスペースシップが開発された！その中で……………SRFスペースシップ1号機“アキュラ”の船長として……………政府からは“紅き鷲”との異名とも呼ばれ、数々の功績を持つ人物!……………過去の人が……………どうしてここに……………!?”

ルーが質問をするとクロウは答える。

「……………友人のシンが……………助けを求めていたから……………」

するとルーは走ってきて、クロウの前で敬礼した。

「御会いできて光栄です！クロウ・F・アルメディオさん！」

クロウは焦り、ルーに言う。

「えくと……………話の続きに戻ってもいいかな？」

「え!?あ！はい！すいません……………興奮してしまって……………」

「嫌、良いんだよ……………じゃあ、話に戻そう。」



クロウは陽弥達に話した。プロフェッサー”E”……………またの名をエンペラージュリオは△とイプシロンの兄、アジマス陛下を拘束し、アジマス連邦から新国家”ネオ・ミスルギ皇国”を名乗り、四將軍の一人『アポカリプス』がアジマス人をブレインジャックでネオ・ミスルギ皇国を守る兵隊に変え、超空間ゲートでアヴァロンに偽りの地球人を招き入れ、自分達の新しき住みかを手に入れたと……………」

それを聞いた陽弥は暴言を吐いた。

「クソツ!! 全てはその馬鹿皇子の仕業だったんだな!」

「ああ、俺があの時…………… ノーマ管理委員会がアルゼナル襲撃後…………… ジュリオの安否を確認しとけば…………… 全く、無視した自分と…………… ドウムに集中しすぎた自分と…………… それを行動しなかった自分に腹が立つ……………!」

シンは拳を強く握りしめるとヒルダが慰める。

「あんたのせいじゃないって……………!」

「これから…………… どうなるの?」

陽弥が問うとシンが説明する。

「モーフィスとザンダーと俺らは各国の付近に前線基地を建設するらしい…………… 銀河連邦には各惑星にいる奴等の行動と情報を偵察をするらしい…………… だけど…………… 問題は奴等の本拠地が目の前にあり、情報入手しやすいが……………」

「入れば”地獄”…………… と?」

クロウが答えるとシンは頷く。

「そうだ…………… 内部には既に偽りの人間達が住み着いている…………… そこで…………… クロウさんの出番なのだ……………」

するとシンはブリーフィングデスクのスイッチを起動するとデスクからフォドラニウムの写真と映像、データが映し出された。

「奴等のフレイムには、この惑星で採れるフォドラニウムと言うことが判明した。良い情報と悪い情報に別けられた。どっちが聞きたい

？」

シンが問うと陽弥達は答えた。

「悪い情報……」

「悪い情報はこのフォドラニウムは俺のアークトルーの時空神龍の力無しだと君達の力は無効になる。」

「良い情報は？」

「良い情報は、このフォドラニウムからジャミングらしき電磁波が流れている。つまり、俺達の技術があれば、このフォドラニウムを使って、奴等の本拠地”アヴァロン”に侵入することが出来る。そこで俺とルー……そして……」

シンとヒルダとクロウの視線が陽弥へ向けられた。

「……?!」

陽弥は皆の目線が自分に向けられている事に気づき、その場で驚く。

「俺!？」

「優位つ、エヴァに立ち向かえたのはお前だけだ。バレたら俺とルーが援護してくれるから……」

「ちよつと待つて！俺!?クロウさんとルーは互角に戦えるけど、俺がエヴァを殺れ!?無茶苦茶だよ！」

「心配するな、お前のアーキバスを限界までに強化する。」

「ちよつと待つ！」

陽弥は質問しようとしたが、シンは強き瞳で陽弥を黙らせた。

「良いな……?」

さすがの陽弥はシンの圧迫感に押され、言う。

「………は、はい………分かりました………」

「今日に行かないが、明後日にアヴァロンに出発だ………」

陽弥達は敬礼し、シンは自室へと戻って行った。

父親の話を終えた陽弥はルナと共に前線基地の廊下を歩いていた。

「はあ、何で俺が？」

陽弥は落ち込んでいるとルナが慰める。

「仕方ないよ、お兄ちゃん…………… そのかわり、私がお父さんとお母さんを守るから……………」

「お前は良いよな、任務が護衛で…………… ソフィアはアンジュさんとタスクさんと共にヴァランドール皇国に滞在しているモーフイスの巨大要塞 Enn II ”へ…………… リヨウマはローレイとサラマンディーネさんとリュウガさん達と一緒にグラシオン連合に滞在しているザンダー共和国のノバ軍との援軍として向かい…………… 種族銀河同盟はヴァルヴァートル帝国を支援し…………… アレクトラとルチルとルナはその護衛だ…………… 父さんは一体何を考えているんだろうか？」

陽弥がルナをジド見するとルナは焦り、これからの事を言う。

「まあ、それは置いといて…………… とにかくこれからの事を考えないとね？お兄ちゃんは明後日に、」

ルナが話していた直後、知らない二人一組の男女が陽弥とルナに話し掛けてきた。

「あのおう、もし？」

「ん？」

「貴方が陽弥・ギデオンとルナ・ギデオンさんですかね？」

「え？…………… はい」

二人は素直に名を答えると男と女も自分の名前を言う。

「私はアストラッド・ヴァルネア・クリーフ……………」

「妻のアリシア・ヴァルネア・クリーフです。」

「……………え?!……………」

二人はその名に驚き、ルナが答える。

「エミリアの御両親!」

「はい……………正確に言えば、育ての親です。」

「え!?でも……………何で貴方達がここに!?!」

「アストラッドさん!」

するとアストラッドが来た方向から、シンとヒルダが駆け付けてきた。

「勝手に動き回られたら困ります!まだ貴方の傷は癒えていないのですから……………」

「だが、これだけは伝えなければ行けなかったのだ……………君のご

子息に……………ジュリオのもう一つの狙いを……………!」

「『もう一つの狙い!』!」

「最下層に囚われていたときに聞いたのだ……………奴等の話を……………」

この世界や銀河の他に……………別の世界をも

ネオ・ミスルギ皇国の支配下に置くつもりだ……………ネオ・ミス

ルギ皇国の名を銀河中に知らしめると思う。」

アストラッドが言った直後、突然廊下の灯りが消え、真っ暗になると廊下の壁から緑に発光する映像が各国家、基地に出現した。そしてその映像から声がした。

『知らしめるのではない!……………皇国の存在を露にするのだ……………』

「ッ!?!」

陽弥達はその映像に映し出されているジュリオを警戒する。

「やあやあ……………薄汚いノーマや同盟、連合、連邦、共和国、帝

国諸君……………ごきげんよう……………」

「ジュリオ!お前は一体何を考えているんだ!?!」

シンが問出すとジュリオは答える。

「さあ、ねえ?……………私は只、愚かな貴様達に聖なる鉄槌を下しているだけだ……………」

その事にシンは怒り出す。

「何も罪もない人達を奴隷にするのが聖なる鉄槌かよ！それに…………… エンブリヲに棄てられたのに、まだノーマを殺るのかよ!?」

「フフフ…………… そう言えばそんなこと…………… アルゼナルで会ったねえ…………… だけど今は四將軍の他にも彼等に従う4人の幹部が何億人もアジマス人…………… 嫌、ネオ・ミスルギ皇国を守る兵隊とデストロイアと量産型ギムガルムと量産型要塞ギガンテスもいるから、誰も太刀打ちできないよ…………… 幹部達にも皆…………… この惑星ホライゾンで採れるフォドラニウムとドウム様から授かりしもう一つのQ人の遺産“ダークマタージュエル”から放つエネルギーで”リーパー・エクス”の完全体を装備されているからねえ…………… 前の空の橋の強奪争で大量のフォドラニウムが採れたからなあ、そのお陰でこのアヴァロンに元いた私の世界から人類を連れてきて、フォドラニウムをマナの換わりとして役立っているからねえ……………」

ジュリオの言葉にシンは切れた。

「ふざけんな！この盗人が!!お前から見たいな屑野郎には新しき生活と未来なんて無い！現実から逃げ続けている臆病者達が!!」

「ハハハハハハ!!その言葉…………… いつか必ず返して殺るよ…………… あ、そうそう、アンジュリーゼ……………」

すると顔に付けていた半面の仮面を外すと頬に斬られた傷が付いていた。

「見ろ！これはお前に付けられた傷だ…………… 裏切り者のシルヴィアとミステイも荻野目も皆肉詰めにしてやるから…………… 覚悟しておれよ…………… !!」

ジュリオはそれを言うとき映像が切れ、マナが消え、暗かった廊下の灯りが付いた。

「父さん…………… 今のが…………… アンジュさんのお兄さん？」

「そうだ……………」

「一つ言っただい？」

「ん？」

「……………生きる価値もねえ!! 屑野郎だああああ!!……………何だああの野郎!?!? 聖なる鉄槌!?!? ふぎけんなよ! 人々を奴隷にしがたって!! ヴェクタ星! 社会貢献しているヒルデ・ガルド叔母さんやあの人達の方がまだ良い方だ!!」

陽弥は怒りながら、何処かへ行く。

「お兄ちゃん!」

「ルナ……………!」

ルナが陽弥を追うとしたら、シンが止めた。

「ほつといた方が良い……………」

「けど! お父さん!」

「シンの言う通りだ……………ルナ……………辞めた方が良いよ……………」

「お母さんも……………」

ルナは心配そうに陽弥を見る。

正にその頃、グラシオン連合の付近、モーフィスの要塞基地”E n II”にいるアンジュは怒りながら、壁を殴った。

「糞っ!!」

怒りで興奮しているアンジュをタスクとモモカが抑える。

「落ち着いてアンジュ……………!」

「あんな事を言ったのよ!?!? これが無言で黙ってられる!?!?」

「アンジュリーゼ様! 落ち着いて下さい!」

「何が肉詰めだ! アイツの方が肉詰めだ!!」

怒り食らうアンジュはジュリオのいるアヴァロンへ睨み付けた。

そしてヴアランドール皇国付近のノバ軍の前線基地にいるリヨウマと共に滞在しているエイルマツトはジュリオの映像を見て、一緒にいる△とミューに話す。

「△、ミュー……………」

「はい？」

「あのジュリオと言う男だ…………… お前らはどう思う？」

「最低です。」

「人間としての恥を知れです。」

「そうか…………… 昔の地球人はあんな野蛮な種族ではなかった…………… だが、あれは地球人でもない…………… 混沌の闇に染まった魂…………… その物だ……………」

「へ？」

「言っている意味は…………… アイツ等こそが…………… ”化物”だ……………」

「エイルマツトの言葉に二人（二体）は考え込む。」

その頃、陽弥はシュミレーシヨンルームで特訓をしていた。そしてそこにバタリアン兵士が歩いてきた。

「そのシュミレーシヨンルームは誰が使っているのですか？」

バタリアン兵士が銀河共和国の女性の兵士に話しかけた直後、シュミレーシヨンルームからとてつもない轟音と震動が鳴り響いた。二人はのろけると女性の兵士がバタリアン兵士に答える。

「陽弥・ギデオンさんです。」

女性が陽弥の名を答えるとまた震動がなり、今度は壁が凸り、二人は驚く。

「っ!!??」

「現在、陽弥さんはジュリオの言葉に切れておらっしやいます……」  
「なるほど……」

そしてルーム内でシユミレーション用の無人機ゲオルグードロイドがマシンガンを乱射し、陽弥は龍装光を使い、マシンガンの銃弾を回避し、ドロイドを破壊していった。

「ハア……ハア……ハア……ハア……必ず助けるぞ……  
エミリア……あんな奴に吞まれるなよ……！」

陽弥がシャワールームへ行こうとしていると本人の体の中にある謎の光がアヴァロンに捕らわれているエミリアの力と共鳴していた。

一方、アヴァロンに囚われているエミリアは寝室で寝ていると夢を見ていた。

「うくん……」

それは何かの実験をしている夢だった。白衣を着た二人はクロウの持つアークとジュリオが持っているダークマタージュエルとエミリアに秘められている緑の光がトライアングル状の機械に埋め込まれていた。

「始めるぞ……」

白衣を着た男は機械のスイッチを入れると機械が回転し始めた。



「こ！……これは……?!」

「どうした!？」

「三つのエネルギーが共鳴している！何だこの数値は!？」

機械に付けられているメーターがマックスへとなると三つのエネルギーの中心から虹色に光るエネルギーが出現した。

「これは……?!」

「三つのエネルギーが……コアとなる源を作り出したのか……?!」

「数値は……回転し続けている……つまり、このエネルギーは……無限なのか？」

「無限……?」

もう一人の男が謎の言葉を言うと夢は途切れてしまった。エミリアは意識の中で言う。

「無限?……何……今の?」

## キャラ紹介 『第2』

名前：ミュー

性別：男

出身：アヴァロン

心優しきアジマス人で、身分は男爵であったが陽弥達と出会い、エミリアの世話をする執事なり、バトルモードに入ると、落ち着いた表情になる。メイに貰った長距離スナイパーライフル『ジャベリン』は貫通力が非常に高く、膜式のシールドも貫通する事が出来る。

武器：長距離スナイパーライフル『ジャベリン』

レーザーブレード×2

名前：△（デルタ）

性別：女

出身：アヴァロン

アヴァロンの女帝であり、反アジマス連邦政府のリーダーでもある。二人の兄、囚われの皇帝アジマス陛下と操られているイプシロン皇太子を心配している。

デルタ専用の武器は『ビームリング』で相手を切り裂いたり、投げつけたりする事が出来る。

武器：ビームリング×2

レーザーブレード×2

ジュリオ・飛鳥・ミスルギ

性別：男

出身：ミスルギ皇国↓アヴァロン（ネオ・ミスルギ皇国）

Cv：鳥海浩輔

原作通り……冷酷で卑劣なナルシストでノーマを毛嫌いしている。

アンジュとシルヴィアの兄で元ミスルギ皇国の皇太子であったが、洗礼の儀でアンジュがノーマだと国民の前で暴露し、皇位から引きずり下ろし、自分が皇位の座に付き、神聖皇帝ジュリオ一世となり、元ミスルギ皇国の皇帝でアンジュとシルヴィア、そしてジュリオの父親”ジュライ・飛鳥・ミスルギ”をアンジュがノーマであった事を隠し続けた罪で拘束され、国民を欺いた在任として首吊りの刑で処刑された。

さらに、アンジュが生きているか確かめるために、シルヴィアとモカを利用し、アルゼナルから使者として送られたモカとアンジュを父親と同じ運命にしようとしたが、シン達が駆け付けてきて、阻止され、アンジュに頬に傷を付けられた。

そして原作のラスボスであったエンブリヲに”世界を創り直す”と言う言葉に嬉々と賛同するも、ジュリオは”世界を創り直す”事を「ノーマを殲滅する」と勘違いし、アルゼナルへ自ら指揮を執り、アンジュ達ノーマを大虐殺を展開するが、エンブリヲはジュリオが行った行動に呆れ、ヒステリカのデイスコード・フェイザーにより、旗艦ごと木っ端微塵に吹き飛び、哀れな最後かと思われたが、

エンブリヲと共に来ていたアルベルト（ドウムが）ヒステリカのデイスコード・フェイザーの攻撃から助けだし、時間を遡り、50年前の再起動していなかったアヴァロンに転移され、元々Q人の科学者であったドウムの姿を醜い姿に変えてしまったQ人の遺産”ダークマタージュエル”を授かり、アヴァロンを再起動させると同時にアジマス人を復活させ、自らをプロフェッサー”E”と名乗り、20年後、Q人の末裔であるエミリアを捕らえ、アジマス陛下を皇位の座から引きずり下ろし、自らアヴァロンの皇帝に付き、アジマス連邦からネオ・ミスルギ皇国を樹立させ、銀河征服、奴隷狩りを開始した。

名前：エヴァ

性別：男

出身：アヴァロン（ネオ・ミスルギ皇国）

ジュリオが作り出した四將軍の一人で天使の様な姿をしている。

冷酷で孤独な謎の機械生命体でもあり、惑星アクアで陽弥にエミリアの正体の事を教えた。

武器：ビームソード

レーザーブレード

エナジーソード

名前：γ

性別：女

出身：アヴァロン（ネオ・ミスルギ皇国）

元はアジマス人であったが、内部でジュリオと暗躍し、アジマス陛下を裏切り、ジュリオに忠誠を誓う四將軍の一人。

自分より綺麗な女性を殺すのが趣味らしく、いつも自分の方が銀河一の美貌を持つ者と呼ばれ続けている。

武器：ビームレイピア

名前：イプシロン

性別：男

出身：アヴァロン（ネオ・ミスルギ皇国）

本当はアジマス連邦の皇帝アジマスの弟であったが、ジュリオにナ

ノウイルスによって操られ、四將軍の一人にされている。

武器：エナジーブレード×2

レーザーブレード×2

名前：アポカリプス

性別：A I

出身：アヴァロン（ネオ・ミスルギ皇国）

能力：全アジマス人と艦隊を操ることや乗り移ることが出来る。

ジュリオが造り上げた人工知能で四將軍の一人でもある。

冷酷な性格でジュリオに忠誠を誓っており、アジマス人達を兵隊に変型させ、捕らえられた奴隷達を管理している。

戦闘時にはタイプに合わせてのフレイムがあり、武器は変幻自在に操ることが出来る砂状のロボット”マイクロロボット”で攻撃や防御、さらに敵を翻弄する事や相手に成り済ますことも出来る。

そして宿敵はアークに選ばれたクロウ・F・アルメディオで、命を狙っている。

武器：マイクロロボット

名前：クロウ・F・アルメディオ

性別：男

出身：惑星ローク（過去）

C v：浜田 賢二

元アルメディオ財閥の御曹司。

元々は地球人であったが惑星ロークにいる愛妻のイレエネ・ファールレンスとメリクル・シヤムロットと共に平和に暮らしていたが、未来の親友のシンに呼ばれ、銀河七聖龍のアークに選ばれ、陽弥達と共に戦う事になった。

スペースシップ001号機アキュラの元船長であったが、シンが所有していたNーアキュラの船長代理として、仲間のギャレスとリアラ共に愛する家族の為に星の海を守る事になった。

武器：デュアルビームセイバー

使用機体：アーキバスII クロウ・カスタム

名前：エイルマツト・P・タナトス

性別：男

出身：エルダー星

C v：東地 宏樹

元エルダー共和国軍第13独立機甲部隊隊長であったが、エルダー人は文明を棄て別の惑星に移住し、一からやり直しになったが、本人はかつて失った仲間達への弔いの為に銀河を旅していたが、訳あって、アジマス連邦の女帝であるデルタと出会い、弟子であるリヨウマを教育し、ネオ・ミスルギ皇国に立ち向かっている。

無慈悲で無口だが、責任感が強く、部下達からの信頼は厚く、バロツクダーク戦で共に戦ったクロウとネオ・ミスルギ皇国での戦友はシンに別れている。使用する機体と戦艦はリツパーとアムザニ

武器：レーザーサイス（鎌）

## 第25話：潜入

各国家に別れた皆はネオ・ミスルギ皇国に備えて、特訓していた。たまにクロウに呼び出され模擬戦や練習相手をされた……。そして明後日……。陽弥とクロウ、ルーはブリーフィングルームでシンが作戦内容を説明した。

「これから、説明する作戦は最も危険な行為でもある。まず、奴等の残骸から回収したフォドラニウムを使ったステルスシステム『ミストカーテン』を起動し、敵要塞の外壁に穴を開け、ネオ・ミスルギ皇国へ侵入する。」

「ネオ・ミスルギ皇国に入ったら必ずやること……。情報収集だ……。」

するとシンはデスクの上に昔の服3着を見せた。

「父さん、これは？」

「見ての通り偽りの人間達が使っていた服だ……。それと……。これを持っていきなさい」

するとシンはポーチから九つの緑の液体が入っている小瓶を三人に三個ずつ分けた。

「これは？」

「本当はやりたくなかったが……。お前のじいちゃんの研究データを元に作り上げた擬似マナが使える薬だ。」

「マナ!？」

「多分……。中には多数の警備兵が配備されていると思う。そこで……。」

シンが説明する直後、クロウが分かったかのような表情をして、答えた。

「偽りの人間に成り済ますって言うことなんだな？」

「そうだ、流石クロウさんだ……。成り済ますした後、奴等のデータを解析し、身分証も作り出す。ネオ・ミスルギ皇国の都市に入ったら絶対に目立たないことや変装していることや怪しい行動が

バレないようにだ。」

「「分かった」」

「よし………そして、アヴァロンに潜入するために彼らも協力してくれるそうだ。」

「彼ら?」

陽弥が言うと二人の影が近付いて来て、ドアが開き中から現れたのは紫の発光ラインをしたβと黄色の発光ラインをしたΣが姿を現し、陽弥は驚き、警戒体制を取る。

「Σ!?!β!?!」

陽弥が2体の名を言うと、βとΣは返事を返した。

「また会ったな!ヴェクタの小僧!」

「お久し振りです。」

「でも、何でお前らがここに!?!」

「決まっているだろ!あの偽皇ジュリオをぶっ倒しに行くんだ!」

「彼は陛下に無礼な事と民を道具の様に使っております。その様な外道は許せません。」

するとΣは手の平から、3D映像の反アジマス連邦政府の写真を見せた。

「その為、アヴァロンに残っている反アジマス連邦政府に協力を申し入れるんだよ!」

βが言うと、シンは納得する。

「なるほど、反アジマス連邦政府なら、アヴァロン内部で起こっている事も知っているかもしれないなあ………」

「シンの旦那!俺らのギムガラムは用意してくれたのか?」

「ああ、△が反アジマス連邦政府に頼んで、お前達のギムガラムを届けしてくれた。さらに最新式の武器も装備されている。」

「よっしゃ!腕がなるぜ!!」

βは両方の拳をぶつけ合うと陽弥は言う。

「アンタ達が味方なら、10000人力だ……頼むぞ!」

「おう!」

「任せてください、恩師から救ってくれたこの恩……必ずご子息



を御守りします。」

「頼む……………クロウさんも」

「言われなくても分かっている。」

「ありがとう……………ひよつとしたら私も行くと思う。」

「父さんも!?!」

「ああ、傷も癒えた……………ペルシウスは使わないが、俺専用のアーキバスⅡカスタムで後で、向かうと思う。それまで耐えてくれ。」

「「了解!!!」」

陽弥達は早速準備に取り掛かった。

格納庫ではメイが陽弥のアーキバスⅡを改造しておりを陽弥はそれを見て驚く。

「これが俺のアーキバスⅡか……………」

陽弥のアーキバスⅡのパックに惑星アクアに使われたブラスタールパックとそのブラスタールの両側に2本の長刀が装備されていた。その光景を見て、メイが説明する。

「うん!前に使ったブラスタールパックと対艦長刀「ダーインスレイブ」も一緒にさせた。簡単に言ったらパーフェクトアーキバスⅡかな?」「完全なアーキバスⅡか……………」

「出力も火力、機動力、回避力も限界まで強化したから、これでエヴァと互角に戦えるよ」

「そっか……………ありがとうございます!メイ整備長」

陽弥はメイに深く御礼をすると、メイは笑った。

「良いよ、良いよ私も頑張らないと亡くなったお姉に笑われちゃうか

らね♪」

メイは首に掛けられているペンダントを取りだすと、中にはメイの姉「フェイ・リン」の写真が貼られていた。

陽弥達は出発し、宇宙空間に出ると、目の前に黄金に輝くアヴァロンがホライゾンの真上に浮遊していた。そして陽弥達は $\Sigma$ と $\beta$ に連れられ、アヴァロンの外壁に着地した。

「父さんが開発してくれたジャミング装置で……………何とか気付かずにアヴァロンの外壁に付いた……………」  
「よし、開けます。」

$\Sigma$ が外壁の暗証コードを入力すると、陽弥達の機体で動かせるダイヤル式のレバーが現れ、 $\Sigma$ は左回転に回すと、アヴァロンの外壁が、ゆっくりと開いた。中は暗く、何も見えなかった。

「……………ここからが地獄の門への入り口か……………」  
「らしいね……………」

「それでは、入ります。」

陽弥達は機体ごとアヴァロンの中に潜入し、 $\Sigma$ に案内された。 $\beta$ は敵に気付かれないように外壁の扉を閉めた。中は暗く、機体のライトで道を照らしていた。

「その角を右です。」  
陽弥達は $\Sigma$ の言う通り、右の角を曲がると目の前に三つに別れている道があった。

「三つに別れている道の真っ直ぐ行き、その角を左です。」  
 $\Sigma$ の言う通りに真っ直ぐ行き、左の角を曲がって行った。  
「決行この道……………高さや幅が広いなあ、俺のアーキバスの装備でギリギリだ……………」

すると目の前に壁が見えてきて、陽弥達は止まると $\Sigma$ が言う。

「ここから先は………降りて行きましょう。」

「何でだ？」

「この先は小型の回路があります。大型の回路を歩きますとバレル確率が高くなります。」

「なるほど、」

陽弥達は機体から降り、Σに下層に繋がる回路を歩いていった。

「っ!？」

「どうした？」

「隠れて………！」

Σが何かに気付き、角の影や、上にながって身を隠したり、光学迷彩を使い、壁と同化して身を隠すと、段々と足音が聞こえてきた。

「あれは!？」

陽弥が見たものは偽りの人間二人が銃剣を持って、回路を歩いている姿だった。

「どうやら、移住して来た人達が最下層を見回っているのでしょう。」

「行きました。」

Σは見回りがいなくなったことを報告し、クロウが答える。

「ここまで広がってるとは………まずいなあ、」

「おうー早いとこ、ここから出て、反アジマス連邦政府のアジトへ合流しないとなあ、」

βがやる気満々の姿を見ると、陽弥は横にあるパイプの間から、灯りが指し漏れている事に気付いた。

「ん?」

陽弥は恐る恐るパイプの間隙に近づき、覗くと思わぬ光景を見て、驚く。

「っ!？」

それは偽りの人間や、操られたアジマス人が捕らえた奴隷達を鞭打ちで労働していた事に、中にはエルフや、ダークエルフ、ハイエルフ、ハーフエルフとエルシユリア王国の民や拐われたメトロの人達が苦しみと悲鳴を上げており、陽弥は歯を食い縛りながら、拳を強く握り締めた。

「これが……人間のやることなのか？」

陽弥は怒りを込み上げてみると、クロウが厳しい表情をした。

「俺らの世界は……… 奴隷なんて昔の歴史の事だった。だが、これは……… 酷すぎる……… 焼き印を付けるとは………」

クロウも歯を食い縛りながら、拳を握り締める。

「助けたいのは分かる……… だが、迂闊に動くとアポカリプスや乗っ取られたアジマス人や住民にバレる……… 今、辛抱強く待つんだ。」

「クッ！俺らは……… 黙って見るだけかよ………」

陽弥はΣに連れられ、最下層から下層に通じている通路を案内しながら上上がり、ドアを開くと何処かの倉庫に入った。

「到着致しました。」

「ここが我々がいた下から二番目の場所の下層スラム街です。」

「ここが……… アヴァロンの下層………」

「よし、ここからは……… 情報収集の為にシンから渡された服に着替えるぞ……… お前達は？」

「旦那から貰ったシステムで姿を変える。」

βは余裕満々に答えるとβとΣは叫んだ。

「トランスフォーム!!」

βとΣの各部が変形し始め、段々と色が変わっていき、βは黒人の男性になり、Σは眼鏡をかけている青年に変わった。

「スゲエ!?人になった!」

「これでも、四將軍の一人だったからなあ」

「私達もマナが使えるシステムを組み込まれましたので、情報収集も簡単に済むでしょう。」

「だけど、路地裏から出てきたら、見回りから、怪しまれるんじゃない?」

陽弥が困っているとルーがある事を思い付いた。

「何なら……… 俺に任せろ」

「?」

陽弥達は首を傾げるとルーはドアをノックした。するとドアが開き、出てきたのはボロボロの服を着た男の子だった。

「坊主……」

するとルーはポーチから何かを取りだし、男の子に渡すと、何かを話し出した後、命令した。

「見回りと兵隊がいないか教えて……」

男の子はルーの命令に従い、辺りを見回した後、ドアをノックし、ルーに知らせる。

「いないよ」

「ありがとう」

「それで……… 美味しい物食べよ♪」

「分かった!」

男の子は元気よく返事し、何処かへと向かっていった。それを見ていた陽弥はルーに問い出した。

「ルー……… 何を渡したんだ?」

「この金貨5〜6枚を使って取引したんだ。」

ルーはポーチから金貨を取りだし、陽弥に見せた  
「なるほど、」

「念の為……… 皆に何枚か渡しておく」

ルーは陽弥達に金貨30枚ずつに分けて、渡した。

「それじゃ、情報収集をするために……… 散会……… 何か分かった事があればここに集合だ。」

陽弥達は早速情報収集をするため散り散りになって行動した。

何処もかしくもボロ屋や闇市場が並んでおり、麻薬や兵器を売っていた。そして驚いた事にそこに住む人々はマナの光を使っていなかった。

「何処も誰もマナを使っていない……… この下層スラムはフォドラニウムの加護を受けないのか?」

陽弥は闇市場を歩いていると誰かが陽弥を呼んでいた。

「御兄さん! 御兄さん!」

「ん?」

陽弥を呼んでいた声の主は小さなテントから聞こえていた。

「ちよつと寄ってらっしやい！」

陽弥は恐る恐るテントの中を見ると周りには不気味な飾りや目玉、そして呪いの護符が貼られていた。そしてそこにテーブルの上に水晶が置かれており、その横に老婆がいた。

「アンタ占いは信じるか？」

「占い？」

「わしは占いをするのが得意のじや、じやが誰も占いを信じてくれぬ…………… インチキ婆あと言われておるのじや、」

「ふくん…………… 一回だけ占う。」

「任せよ！」

老婆は水晶に手を笠指、呪文を唱え始めると答え出した。

「おお！見える！見えるぞ〜！」

「何が？」

「とてつもなく禍々しい大きな闇の華じや」

「闇の華？」

「そして…………… その華の中で皇帝が拳銃を御主に向けて……………」

全部で6発が御主の胸に直撃している。」

「6発も!？」

「ああ、そして…………… その6発を受けて御主は死ぬ……………」

「間近よ……………」

「じやが、安心せよ…………… その運命を回避する事なら出来る…………… いわゆる…………… ”コンティニュー（やり直し）” じや」

「なるほど、なるほど……………」

「どうじや？それじや、お代は金貨10枚じや」

「(げ!?!息なり高いなあ、まあ良いか…………… 嘘だつたら殴るけどな)…………… 分かった。」

陽弥はポーチから金貨10枚を取りだし、占い師の老婆に渡し、情報収集へ移りに戻った。だが、この時…………… 占い師の老婆の語った予知が起こる事を本人はまだ、気付いていなかった。

数字間後、陽弥達はさつきいた倉庫の中に戻り、それぞれの情報を話した。

「何か情報は？」

陽弥がが問い出すとルーは答える。

「俺の方は……このスラム街では貧相人はマナの加護を渡さないらしく……加護を渡すのは中層と上層、最上層だけらしいんだ。」

「何て酷いことを……そっちは？」

次はクロウが答えた。

「情報はないが、面白いものを見た。この下層スラムの上を見てみる。」

陽弥達は窓から下層スラムの上空を見ると、何か大きく建造中の建物が見えた。

「何だ？あのデカイのは？」

陽弥が驚くとΣが言う。

「何か……パーツの様な物ですね。あんな大きな物はこの頃下層スラムにはありませんでした。恐らく、私達がない間に建造していたのでしよう……」

「Σさんは？」

「私の方はジュリオを恨む連中もいました。その人らの話を聞くと……最上層にある宮殿……つまり、ジュリオのいる宮殿です。その宮殿付近に建っている塔から……美しい女性の歌が聴こえてくるって……前に見回っていた兵隊が言っていたと……」

「歌が！……それって……!?」

陽弥が大声で言うとき、Σが陽弥の口を抑える。

「声が大きい……！」

「ごめん……」

「それって…………… エミリアの事か？」

「可能性はあるが…………… 問題は一つあります。」

「何？」

「検問所です…………… 彼処はかなりの警備が硬くて、身分証とDNAをスキャンされます…………… 一発目で情報不足や確認ややり直しになったらアウトですが…………… 問題はそれだけじゃありません、私とβは脱走したから、もしスキャンされたら一発でばれま……………」

Σがそう言うのとβはある提案を言う。

「そこで、俺達はここで反アジマス連邦政府軍のアジトへ向かう。そして最上層に繋がる通路でお前たちと合流する。」

「分かった……………」

Σとβは反アジマス連邦の本部へと通じるマンホールの中に入っ…………… ていった。

そして陽弥達も中層に通じる検問所へと足を踏み入れた。

「さあ、地獄に通じる門に来たぞ……………」

「本当に大丈夫何ですか？…………… 偽物のマナとDNAと身分証…………… で……………？」

ルーが心配するとクロウは根を貼って答える。

「大丈夫だ…………… 絶対に……………」

次の人が行くと、クロウの番が来た。緑に光るセンサーがクロウの体をスキャンし、検問の兵が答えた。

「よし、行って良い…………… 次！」

ルーはそれに続き、検問の兵がルーをスキャンし終え、答えた。

「よし…………… 次！」

最後に陽弥の番が来てしまった。陽弥は緊張しながら、唾を飲み込む。

「…………… (ゴクリ！)」

センサーが陽弥をスキャンし、それが終わると兵は答えた。



「……………行って良い！」

陽弥は冷や汗をかき、急いでクロウとルーの所へ合流した。

「……………ハア、焦った……………」

「第一関門はクリアしたが、気を抜くな……………まだ中層と上層を繋ぐ第二関門と上層と最上層を繋ぐ第三関門がある。注意しろ……………」

「了解……………!!」

二人は敬礼し、中層へと上がっていった。

「待っていてくれ……………エミリア……………今、助けに行く……………!!」

陽弥達が中層へと向かう事が出来るエレベーターに乗る中……………先の検問所の何人のデータデバイスに陽弥のだけ、エラーが出ていたことに、兵は気付いていなかった。

## 第26話：幹部

陽弥達はエレベーターの戸が開くとそこは、西洋の町が広がっており、要塞なのに青い空と雲が存在していた。

「ここが…………… 中層エリア……………」

陽弥はその光景に見て驚き、マナの光を使用している人達や使用していない人達が街道を歩いていた。

「マナの光を使用している人達が…………… たくさんいる…………… 父さんと母さんとヒルデガルド叔母さんのいたエンデラントも…………… こんな感じだったのかなあ？」

「そうだろうなあ…………… だけど、」

ルーの眼が指す方向にマナの光で移動しているトラックの荷台の檻の中に奴隷達がいた。

「奴隷売り場か……………」

「俺のいた世界の人類はこんな事をしないんだ……………」

「…………… まあ、その事は後にして…………… 先ずは情報収集だ……………」

「じゃあ…………… 後で……………」

クロウとルーと陽弥は散会し中層エリアでの情報収集を開始した。

晴哉は中層エリアの街道を歩いていた。

「中層は普通なんだ…………… 下層スラムと違って……………」

陽弥が歩いているとネオ・ミスルギ皇国の検察官が陽弥に声をかけてきた。

「そこのお前……………！」

陽弥は立ち止まり、冷や汗をかく。

「…………… (まずい…………… これが父さんの言っていた  
ノーマを拘束する検察官か……………！)…………… 何で

しょう?」

「この辺りに羽を持つ少女は見かけなかったか?」

「…………… 羽を持った少女?」

陽弥が問うと、検察官は陽弥の服装を見て、納得したかのように、陽弥に説明した。

「知らないのか?……………なるほど…………… 下層スラムにいたなら仕方がない…………… 最上層から逃げ出したらしく、我々ネオ・ミスルギ四將軍の幹部達から指令が出て、捕らえた者には報酬金と偉大な皇帝ジュリオ様のいる宮殿に招待されるとの伝令が出ている。念のため、市民にも協力している。だが…………… もし匿ったりすれば宇宙一最悪の銀河牢獄“ゾル・ドゥー”へ連行する…………… お前…………… 何か知らんか?」

「…………… 知らん」

「そうか…………… 失礼する。」

検察官はそのまま、その羽を持つ少女とやらを探しに任務に戻った。

「銀河牢獄ゾル・ドゥーかあ……………」

陽弥は安心感を取り戻し、情報収集に戻った直後、後ろから、フーッと顔を隠した少女が陽弥の背中にぶつかってきた。

「痛っ?」

「ごめんなさい……………!」

その少女はペコリと頭を下げ、去っていった。

「何だ……………? まあ、良いや……………」

陽弥は立ち上がると、近くに酒場があった。

「酒場なら…………… 何か情報が出ているかもしれない……………」

酒場に入るとバーの前にルーがコーヒーを飲んでいた。

「あ!…………… ルー」

「お! 陽弥も……………?」

「ああ、酒場なら何か情報があると思って……………」

「俺も同じだ」

「そういやあ、さつき……………」

「さつき検察官から協力要請がきただろ？」

「お前もか……………羽のある少女って言っていたなお……………」

「関係ないだろ？俺らの任務は……………」

陽弥とルーは寛いでいるとドアからとてつもない音が鳴り、酒場にいた陽弥とルーや客達は一齐にその方向に向いた。

「っ!？」

現れたのは体が大きく、仁王立ちをした大男だった。

「聞けええええい!!市民よ!!私はネオ・ミスルギ四將軍に支えるアポカリプス様の幹部!オルトだあ!!」

オルトと名乗る大男は叫び、尋問してきた。

「今ここに……………ネオ・ミスルギ皇國皇帝ジュリオ陛下に齒向かう者が紛れ込んでいると!!」

その事に陽弥とルーは焦る。

「……………ルー、ヤバイんじゃないか？」

「幹部となると……………厄介だなあ……………でも、何でここにいらつて言うのが分かるんだ。」

するとオルトは陽弥とルーの話している事に気付き、二人に近付いた。

「そっ!?!」

オルトが陽弥とルーの間に迫り、厳しい表情で尋問する。

「何を話しているんだ!？」

「……………」

二人はもうダメかと思いきや、隣に座っていた男性が急に立ち上がり、ポケットから球を取りだし、床に投げつけた途端、球から硫酸のガスが撒き散らし、その間に男性は酒場から逃げ出した。しかし、

「っ!？」

男性の目の前にオルトが立ち塞がっていた。

「硫酸化炭素の煙幕で!!この私から逃げられると思ったか!!闇組織め!!!!」

オルトは男性の胸ぐらを掴み、男性の左袖を捲ると赤い棺のタトウとポケットから何かのメモ帳が出てきて、オルトはそれを拾い

上げ、メモ帳に書かれている内容を読んだ。

「ふん！ジュリオ暗殺か……………この者をゾル・ドゥーへ連れていけ!!」

「ハッ！」

オルトが多数の検察官に命令し、男性を拘束し、連行した。

「クソツ!!覚えていやがれ!!俺らは絶対にあの皇帝を殺してやる!!娘の仇を取ってやる!!」

男性は抗いながら、成す術もなく、ゾル・ドゥーへと連行された。その光景に陽弥とルーは焦る。

「ヤバイぞ……………これ」

「……………そうだな」

陽弥とルーは慎重にオルトの眼を盗み、酒場から出た直後、

「待てえええええい!!!」

「っ!!」

「種族銀河同盟のスパイが!!」

「っ!!??」

オルトが叫び、陽弥とルーは足を止めてしまった。

「……………何の事でしょう?」

「惚けても無駄だ!!下層スラムでの検問所の入所データにお前のデータだけ妙に……………マナの光が大きいのだ!!」

「……………え?」

「言えることは簡単な事だ!……………あの検問所でアポカリプス様はお前を見ていたんだよ!!お前の体の中に宿る力をスキャンできるからなあ!!」

その事に陽弥とルーは驚く。

「……………(ばーバレている!!)」

「……………あの時点で気付かれたって事かよ!!」

検察官達が陽弥とルーを囲み、二人はもうダメかと思いきや、二人の上から、ビームセイバーを持ったクロウが参上してきた。

「クロウさん!!」

「二人とも!!逃げるぞ!!」

クロウが回転し始めると、竜巻が起こり、検察官を吹き飛ばした。「でっ！どうやって逃げるの!?!」

「広場に向かうぞ!!」

陽弥とルーはクロウに続き、広場へ向かうと、サイレンが鳴り響いた。広場に着くと目の前に検察官やネオ・ミスルギ皇国兵が待ち構えていた。

「チツ！囲まれたー！」

「逃がさないぞ……………」

陽弥達の目の前にオルトが現れると、一体のネオ・ミスルギ皇国兵が急に爆発しだした。

「何だ!?!」

その時、検察官の一人が叫んだ。

「反アジマス連邦だあああ!!!」

オルトの後方から赤いビームフラッグを掲げ、前進してくる黒い兵隊が現れた。

「来てくれたか!!」

反アジマス連邦の軍隊の中から、BとΣがホバーで走行しながら、ガトリングガンとサブマシンガンを乱射してきた。

「すまん!!遅れてしまった!!」

「β!」

「お前のアーキバスIIを持ってきた!!」

すると広場の噴水から陽弥のアーキバスIIが出現した。

「ありがとう!!」

オルトは陽弥を見て、怒鳴る。

「最悪だ!!……………セイクリッドメイユをこのエリアで使用するのは!!アイツ……………絶対に許さん!!」

陽弥はアーキバスIIに乗り込み、起動し、検問所へと向かった。

「行け！陽弥!!」

陽弥のアーキバスIIがもうスピードで飛行し、上層に繋ぐ検問所が見えてきた。

「良し！検問所だ!!」

陽弥はアーキバスⅡの出力を最大にし、検問所を突き抜けると黄金に輝く、たくさんの豪邸や庭が広がっていた。

「ここが上層エリアか！」

陽弥はその光景を見てみると、後方から紫と青のギムガラムが襲来してきた。

「っ!？」

すると陽弥のアーキバスⅡの通信機から不気味な女の声が出た。

「フヒヒヒ…………… 咎人…………… 来た…………… 排除する……………

私…………… ミラーナ…………… 美しきγ様に支える幹部……………」

それに続き、今度は青いギムガラムも通信してきた。

「同じく…………… 僕はイプシロン様に支える幹部のテストアロ  
スです…………… 自己紹介が済みましたので…………… 貴方  
をジュリオ陛下の元に連行します！」

「ふざけんな！誰がああ野郎の所に！」

「陛下の悪口を言うな！」

テストアのギムガラムがビームライフルを構えると、陽弥のアーキバスⅡは背部に装備されているブラスタで応戦する。

「喰らえ！」

ブラスタのビームが発射され、テストとミラーナはそれを回避した。

「クッ！神聖な貴族の居住区を!!…………… 許さん！この野蛮な

ヴェクタ人め！」

「許さんのはそつちの方だ!!ここはアジマス人の暮らす世界  
だ…………… おとなしく元いた世界に帰れ!!」

「断る……………！」

「っ!？」

「君は知らない…………… 僕の過去はかつて…………… ヴエルダ王  
朝の街にあった…………… 平和だったヴェルダ王朝の民達が突然、  
マナの光を失い…………… 暴動が起き…………… 唯一…………… 僕の  
肉親は父だった…………… 時空融合から僕を庇って死んだ

!..... そんな絶望の世界で僕は!..... たった一人で生きてきた!今も!下層スラムで生きる人々はマナが使えなく、苦しんでいる!..... 僕はもう失いたくない!これ以上の死人を出すのは!!」

テストは怒鳴るとギムガルの腕が変形し、レーザーブレードをアーキバスIIに振りかざすと、陽弥は背部に装備されているもう一つの武器、対艦ビーム長刀“ダインスレイブ”を抜刀し、テストのギムガルのレーザーブレードの攻撃を防御した。

「お前もそう望んでいるなら何でジュリオに従うんだ?」

「陛下は..... 膨大なエネルギーを持つ光の力仕事”アーク”

と..... 陛下の持つ闇の力”ダークマタージュエル”

と..... 姫殿下に宿る第三の力ともう一つ.....

お前に宿る無限の力を欲していると

!!!..... 陛下の元に連行すれば下層スラムの住民にもマナの

光の加護を授けようと!!!これで..... あの頃の生活に戻る

!!」

「あの頃の生活?..... 笑わせるぜ.....」

「へ!」

陽弥はそう言うとテストを蹴り上げ、ダインスレイブでギムガルの両足を切断し、地面に叩き落とした。

「ジュリオはそんな約束をしない..... ただ民衆を自分の為

の道具にしか思っていない..... さらに奴は他の種族の惑星を略奪

してその種族を奴隷にしている..... アヴァロンもその一つ

だ..... 元々はアジマス人の故郷なのに、ジュリオはそれを奪

い、主導権を自分の物にした..... 現実から逃げている臆病な皇

帝だ.....!!!」

陽弥はダインスレイブをギムガルに突き付けると、テストは怯える。

「ひいっ!」

「仕方ない..... 良いことを教えてやろうか?..... 他の

人類..... 俺の叔母さん達は..... 現実から逃げ



ず…… 前を向いて歩いている…… だから、現実から逃げず、抗え……」

陽弥はそれを言うと、ダーインスレイブを直し、上層エリアの真上にある最上層へと向かっていった。するとそこにミラーナが駆け付けてきて、テスタを救助する。

「テス君…… 大丈夫？」

「……」

陽弥はダーインスレイブで最上層のシャッターを切り刻み、突入すると、そこには黄金に輝く宮殿が目の前にあった。

「着いた!!」

そして陽弥は宮殿を見渡すとエミリアのいる塔を見つけた。

「あの塔だな！」

陽弥は猛スピードでエミリアのいる塔へ向かっていった。

「エミリアアアアア!!」

陽弥は塔に着くと高火力ヒートアサルトブレードを抜刀し、壁を切り裂いた。

「エミリア！助けに来たぞ！」

中を見ると…… それはもぬけの殻だった。

「あれ？」

陽弥は部屋の中を確認しようとしたその時、黒い影が陽弥に突進してきた。

「うわあっ!!?!」

陽弥は地面に叩き落とされ、体制を整え戻すと、現れたのは……

「何だ!?!」

それは体型が細く、両腕が紫に光るビームセイバーと黒いアゲハ蝶と思われる美しい羽を羽ばたかせ、降下した。

「黒い……………ギムガルム!?!」

すると黒いギムガルムはビームセイバーを構えた。

「ほお……………殺ろうと言うわけか……………!?!」

陽弥はそう言うと、ダインスレイブを二刀流で掛かり、黒いギムガルムの華麗な攻撃を防御する。

「何だろう……………この感じ?……………心がざわめいている……………何でだ?」

そしてダインスレイブとビームセイバーの刃がぶつかると、陽弥はアーキバスIIの頭部で黒いギムガルムの頭部ごとぶつけ、黒いギムガルムが怯んでいる隙に上へ舞い上がり、ダインスレイブを降り下ろした。

「貰ったああああ!!」

陽弥の渾身の一撃が黒いギムガルムのコックピットを切り裂き、コックピットの内部が露になった。

「……………へ!?!」

突然、陽弥がそのコックピットの中にある事に気付く。

「人……………!?!」

それは黒いタクティカルスーツを着用している女性で、黒いロングヘアで黒いバイザーをしていた。するとその女性はバイザーをオフにすると顔が露になると陽弥はその顔を見て、驚く。

「っ!!!」

すると陽弥が開けた穴からクロウのアーキバスIIとルーのジークフリード、ΣとBが現れた。

「陽弥!!」

「陽弥様!!」

「どうしたんだ!?!」

クロウが陽弥に問だすと、陽弥は言う。

「……………何で!?!……………何でお前が!?!」

「一体………っ!!?」

クロウは黒いギムガルムを見て、驚く。

「嘘………だろ!？」

それに続き、ルーも驚く。

「何で………彼女が………!!?」

すると陽弥は手で頭を抑え、慌てながら答える。

「何でだ!?!………何で………エミリアが!!?」

黒いギムガルムのコックピットの中に緑の髪ではなく、黒い髪になって、その瞳に輝きがなくなっている変わり果てたエミリアの姿だった。

「最悪な再会ですね………これは!!」

Σがサブマシンガンを構えると、テスト、ミラーナ、オルトのギムガルムが現れた。すると三人はエミリアの前に近づき、膝間付き、敬礼した。

「「エミリア・レグレシア・クアンタ姫様!!」」

「え!？」

彼らの言葉に陽弥達は驚くと、宮殿の門から拍手が聞こえてくる。

「彼女の本名だよ………」

門から現れたのは変わらない笑顔をしながら拍手をするジュリオ

だった。

「ジュリオ!!」

「いやいや……………まさか、このアヴァロンに侵入するとは……………間抜けな連中だな、」

「ふぎけるな!お前!……………エミリアに何をした!?!」

「ダークマタージュエルの力で洗脳させただけだよ……………そして、」

ジュリオの後方から、エヴァが現れ、陽弥に言う。

「私の幹部だ……………」

「エヴァ!!」

「彼らは我ら四將軍の幹部……………その名も”四星騎士”だとしてエミリアは四星騎士の団長”冥王の姫騎士”と呼ぶ」

「そして僕は”流星の戦士”です。」

「フヒヒヒ……………私……………黒星の魔術師」

「そして俺は!星刻の番人だ!!」

テスト、ミラーナ、オルトはそれぞれの呼び名を言うとジュリオが命令してきた。

「お前たち……………殺れ!!」

「二イエス!マイエンペラー!!」

三人は敬礼し、陽弥達に襲い掛かってきた。

「エミリア……………彼処にいる彼の力を奪ってきなさい……………」

ジュリオはエミリアに命令するとエミリアは言う。

「……………イエス……………マイエンペラー……………」

エミリアはビームセイバーを突き付けてきて、陽弥に襲い掛かる。

「エミリア!!」

陽弥は武器を抜刀せず、シールドでエミリアの攻撃を防御する。

「俺は!お前と戦いたくない!!目を覚ましてくれ!!!」

しかし、陽弥の声は本人届かず、エミリアのビームセイバーが陽弥の頭上に降り下ろそうとしていた。

「っ!」

絶体絶命の時、穴から、藍と白のカラーリングをしたアーキバスIIが現れ、ビームナギナタでエミリアのビームセイバーを防御し、陽弥を守る。

「陽弥ああああ!!」

「父さん!」

シンはビームナギナタで振り払い、陽弥を守るように、体制を整える。

「陽弥!待たせたな!!」

「父さん!それより、エミリアが!」

「ああ、分かっている……………まさかこう来るとは思っていなかったよ……………!!」

するとジュリオは陽弥とシンを見て、笑う。

「フハハハハ!!まさかヴェクタの親子が来るとは……………素晴らしい!!偽りの地球人で我々新人類を脅かす存在”超人類”と出会えるなんて……………素晴らしすぎる!!これもドゥーム様の思し召し!!」

陽弥はジュリオが何を言っているのか分からなくなると、シンは怒鳴る。

「黙れ!ジュリオ!!そうか……………お前はドゥーム崇拝者か……………その崇拝者が何で皇帝の座に付いているのか!?!それともう一つ……………何でお前はアークとダークマタージュエルとこの姫さんの力を欲しているんだ?」

シンが質問するとジュリオは答える。

「決まってるだろ!……………マナの復活だよ!Q人が遺した三つの遺産”アーク”、”ダークマタージュエル”そして……………三つの中でも最大のエネルギーを持つ遺産”クアンタニウム”を使い……………アウラのドラゴニウムの補充なしの無限のマナの光を作り上げ!!永遠の皇国として君臨するのだ!!」

「クアンタニウム?……………あの姫さんの力の事か……………」

「さらに!!この三つの力が揃いし時!最強の力が出てくると言う!」

「?」

「三つの力が揃いし時!次元の核とも言える存在!!その名も”無限!!”その無限を私に宿れば!!永遠の不老不死と全てを操る事が出来る!!」  
「全て!?どういう事だ!?!」

「分からないのかね?それでも超人類の末裔か?」

「……………まさか!?!?」

「ああ、そのまさかだよ!得にクアンタニウム力はあらゆる種族と和解出来る力を持つ……………ダークマタージュエルはノーマやあらゆる種族、神をも操る事が出来る!アークはあらゆる驚異を排除出来る!そして無限の力は……………あらゆる世界と……………過去や未来を跳躍、変革を持っている!それがあれば私は神を越えた存在!”神皇”としてあらゆる世界の過去と未来に永久に君臨するのだ!!」

衝撃の事に陽弥達は驚く。

「?!?!過去と未来を跳躍!?まさかこのアヴァロンは……………!!!!」

「そうだ……………この要塞国家自体が……………”タイムマシン”なのだよ!!後はクアンタニウムを取りだし、ドゥーム様の手助けをするだけ、」

シンはジュリオの狙いが分かったかのように答える。

「と言うことは…このアヴァロンを使つて!!」

そして陽弥もジュリオの狙いに気付く。

「過去に行きーラストリベルタスを妨害するつもりなんだな!?!」

「そうだ……………賢い奴だお前は……………」

するとΣとBがガトリングガンとサブマシンガンを構える。

「そうはさせんぞ!!」

「邪魔をするな!!アポカリプス、γ……………殺れ!!」

「了解しました。」

「アポカリプス!!」

「γ!!」

二体は重装備をしたアポカリプスとγを睨み付ける。

「あら、お久しぶり……………B、Σ」

「貴様!!」

「父さん!早くしないとー!」

「分かっている!けど!!」

エミリアが光速でビームセイバーを切りつけてきて、シンはそれを防御する。するとジュリオは語り出す。

「だけど!.....私の元に三つの力は揃ったが無限の力は出現しなかった.....」

《へ!?!》

「見せてやろう.....我が神.....ドウム様から授かりし、  
ダークマタージュエルの本当の力を.....龍装光!!」

突然、ジュリオが龍装光と叫んだ事に陽弥達は驚く。

《龍装光!?!》

するとジュリオの腕に食い込んでいたダークマタージュエルから禍々しい百の眼を持ち、二つの口を開かせ、二枚の悪魔の翼を広げた漆黒の龍が召喚され、ジュリオの体に纏い始め、クロウの龍装光と同じアーマーになり、黒いマントを広げ、ドウムの剣だった邪心剣アメズヤクラを抜刀し、叫ぶ。(見た目はクロウの龍装光の黄金と白から黒と赤のバージョンだと思ってください。)

「これがドウム様から授かりしダークマタージュエルの本当の力!!  
その名も偽りの銀河七聖龍 邪神龍皇ドウム・ドラゴンだ!!」

「何!?!」

陽弥達が驚くと、ジュリオが消え、陽弥のアーキバスIIのコックピットの上に立っていた。

「さらに.....私の前に驚くべき者が現れるとは.....」  
「っ!?!」

ジュリオは陽弥のアーキバスIIのコックピットを引き剥がし、陽弥はフアランクスを構えた直後、ジュリオの黒い腕が伸び、陽弥の心臓に突き刺さった。

「うっ!?!」

その光景にシンは叫ぶ。

「陽弥ああああ!!」

するとジュリオは陽弥の心臓をえぐり出すと、シン達は驚く。それはジュリオがえぐり出した陽弥の心臓が虹色に光っていた。

「フハハハハハ!!ハハハハハハハハハハ!!まさかお前の心臓に宿っていたとはなあ!」

陽弥は息が荒くなりながら、問う。

「どう……………いう事な……………んだ!」

「まだ分からないのか?……………無限の力、インフィニティソウル」と呼ぶべきかな、インフィニティソウルの出現条件は一つ……………死人に宿る事だよ!!」

「……………へ!」

「何!」

シンはその事に驚くと、ジュリオは鼻笑いをして、とてつもない事を言う。

「それと……………この光景は全惑星に放送している!」

既にアポカリプスが全惑星中の放送をジャックし、アヴァロンで起こっている映像を流しており、それを見ていたヒルダやルナ、アンジュもサラ、タスクやリュウガ、地球にいるアリア達も衝撃な映像を見て驚く。

「教えてやろう……………私が語った意味を……………このインフィニティソウルは死者にしか宿らない!……………つまり、お前は死んだ人間!……………今もこの現世に生きる死者なのだよ!!」

ジュリオの放った言葉に陽弥達や全惑星に生きる種族も驚いた。



## 第27話：絶望の瞬間

その頃、ホライゾンでは、ヒルダとルナがジュリオが陽弥に驚愕な真実を放った映像を見て、怒鳴る。

「ふぎけんな!!陽弥が死人!?デマを言ってんじゃねえぞ!!ゴラアツ!!」

「そうよ!お兄ちゃんが死人な訳ない!!」

ヒルダとルナはジュリオの暴言を吐き続けていた。

正にその頃、陽弥はジュリオの解き放った言葉に混乱し、問出した。

「どういう事なんだよ……………!?俺が死人て!」

「まだ分からないのか?死人死人だよ!」

「クッ!」

陽弥はジュリオに頭突きをして、怯んだジュリオの隙を見て、掴んでいた陽弥の心臓でもあるインファイニティソウルを取り返した。するとインファイニティソウルは陽弥の体の中に入り、皮膚が再生していく。

「流石、インファイニティソウル!不老不死どころか無限の再生能力を持っていてとは……………正に死人だよ君は……………」

「違う!俺は人間だ!!」

「まだ言うか……………殺れ」

ジュリオがエヴァとエミリアに指を陽弥の方に指し命令すると、エヴァとエミリアが猛スピードで陽弥の腹に強烈な右ストレートが襲い掛かった。

「ゴブツ!!」

陽弥はあまりの痛さに耐えれなく、口から血を吐くと、今度はエミリアのギムガラムのビームセイバーがアーキバスⅡの背部を切断した。陽弥は血を吐きながら、倒れた。その光景にシンは怒り食らう。「ジュリオ!! 貴様!!」

シンのアーキバスⅡはビームナギナタを振り回しながら、ジュリオの頭上に降り下ろそうとした直後、ジュリオはアーキバスⅡのコックピットの上に立っており、ジュリオの膝蹴りがシンのアーキバスⅡの頭部を破壊した。

「メインカメラを破壊しただど!?..... グアツ!!」

ジュリオは伸びた腕でシンのアーキバスⅡを吹き飛ばした。

「シンークソツー!」

クロウはビームライフルでシンを助けようとジュリオに乱射する。ジュリオはクロウのビームライフルの攻撃を弾き、下がっていく。

「フハハハ!! そんな光学兵器で私を倒せるかな?」

「大丈夫か!」

「ああ.....!!」

シンがアーキバスⅡから降りて、手元からビームセイバーを抜刀した。

「こうなったら.....皆で!!」

シンがジュリオにビームセイバーを構えると、倒れていたアーキバスⅡの中から血だらけの陽弥がカーニフェクスハンドガンと太陽神剣を持った龍装光を発動したまま、よろよると出てきた。

「陽弥!」

「俺も戦う.....! コイツをぶつ殺す!!」

陽弥は大声を上げ、太陽神剣をジュリオに突き付けると後方から、BとΣが陽弥を護衛するように囲んだ。

「俺も.....同じだ!!」

ルーもジークフリードからビームサーベルを抜刀した。

四星騎士と四將軍はジュリオを守ろうとしていると、

「下がれ.....」

「しかし、陛下!」

「ソイツ等は………本気で死にたいようだ………」

「此方も………本気で掛かる!!」

「殺れるものなら………殺ってみろ!!」

ジュリオがアメズヤクラを振りかざすと、クロウとルーは龍装光を発動し、シンもARSモードを発動した。ジュリオはアメズヤクラをクロウに突き刺そうと襲い掛かり、シンはビームセイバーでアメズヤクラを防御し、ルーもビームサーベルでジュリオに斬りかかろうとした。するとジュリオの腕が変異し、ドウムドラゴンの頭部に変わり、百の眼がルーを鋭く睨むとルー目掛けて伸びて行き、ジークフリードごと噛み殺そうとしたとき、Bがガトリングガンを乱射し、ドウムドラゴンの気をそらすと、陽弥はジュリオの腕に乗り、ドウムドラゴンの首の上を走りながら、カーニフェクスで首目掛けて、発砲し、太陽神剣でドウムドラゴンの頭部に突き刺した。

「アアアアアアアアア~~~~~!!!」

ジュリオはあまりの痛さに悲鳴を上げ、陽弥を睨み、ドウムドラゴンの首がさらに伸び、陽弥目掛けて、突っ込むと、Σが体を分離して、ファンネル形態になり、ドウムドラゴンに目掛けて、レーザーを発砲し続ける。するとレーザーがドウムムの眼を貫通し、ジュリオはまたしても痛がる。

「アアッ!!!」

ジュリオが怯んでいる隙にクロウが光の剣ファアウエルを二刀流で抜刀し、猛スピードでジュリオに近付き、叫ぶ。

「ブレードライジング!!」

2本の剣がジュリオの体をクロス字に切り裂き、最後に二刀流のファアウエルを合体させ、大剣に変わり、そのままジュリオの心臓に突き刺した。そしてクロウは飛び上がり、手から粒子の球体を出すとそれをジュリオに向けて、放った。

「セイントバスター!!!」

球体から無数の光線を放出し、ジュリオを焼き付くしていく。

「グアアアアア~~~~~!!!」

そして爆発が起こりをアヴァロンが揺れる。クロウは降下した。

「やったか？」

段々と煙が晴れて行き、そこにはジュリオの姿はなかった。

「倒したのか？」

「そうだよ！俺達だけで倒したんだ！」

「よつしやああああああ!!！」

誰もが喜んだその時、後方から黒い影が伸び、陽弥の胸を貫いた。

「……………え？」

《っ!?!》

シン達は一齐に陽弥の方を見ると陽弥の胸にジュリオの腕でもあるドウムドラゴンがインフィニティソウルを加えていた。そしてジュリオは笑っていた。

「ハハハハハハハハ!!!!」  
「ついに手に入れた!!！」

ジュリオは渾身を込めて、陽弥からインフィニティソウルを奪い、陽弥は倒れる。その光景にシンは叫ぶ。

「陽弥ああああ!!！」

シンは急いで息子所へ行こうとしたその時、上空からデストロイアが襲来し、シン達を囲み、クローアームでシンとクロウ、ルー、ΣとBを取り抑える。

「グッ!!！」

シンが抗っている間、ジュリオは陽弥から奪ったインフィニティソウルを強制的に押し込んだ。

「ついに！ついにインフィニティソウルが我が元に!!！」

するとジュリオは倒れた陽弥を見て、鋭い目付きで、他のデストロイアに命令する。

「その汚ならしいゴミは処分せよ！」

『かしくまりました』

5体のデストロイアが解き放たれ、クローアームの砲口からビームサーベルを放出し、倒れた陽弥に接近する。

「止めるおお!!！」

シンは叫び、ホライゾンにいるヒルダやルナ達も叫ぶ

《止めてえええ!!》



着いた先はヴァルヴァートル帝国付近の前線基地だった。

「あれ!?ここは……………」

「シン!!」

「お父さん!」

「?」

シンの目先にヒルダとルナ、そして医療班が駆け付ける。

「大丈夫か!」

「ああ、」

「それより、お父さん!お兄ちゃんを!」

「分かっている!」

すると陽弥を抱えている白いヒステリカはこちらに来る医療班を確認すると女神像の目からレーザーを放ち、警戒させる。

「っ!」

「何するんだ!」

「この若者は……………我々が預かる!手を出すものは……………殺す!」

「ふざけんな!!陽弥を……………息子を返せ!」

ヒルダが怒鳴ると、白いヒステリカは上昇した。ヒステリカから放たれる風圧に、シン達は圧される。

「クツ!陽弥あ!!」

白いヒステリカは駆逐形態から飛翔形態へと変形し、次元跳躍を発動し、陽弥を連れ何処へと消えた。その光景にシンは茫然する。

「……………」

陽

弥……………」

ク

ソオオオオオオオオオオオオ!!!」

シンは悔しい思いに地面に拳をぶつける。ヒルダは空を見上げ、陽弥を心配する。

「陽弥……………」

その頃、左目を失ったジュリオは怒り食らいながら、暴れていた。

「クソッ!クソッ!クソッ!クソッ!クソッ!クソッ!クソッ!クソッ!」

「陛下……………」

「落ち着いて」

アポカリプスがジュリオを慰めようとしたとき、ジュリオは怒鳴る。

「黙れ!!」

「すいません……………」

「何故エンブリヲのラグナメールが……………」

「あの場に……………」

「アポ

カリプス!彼奴のデータは?」

「分かりません」

「何……………」

「?」

「分析した結果……………」

「彼はこの次元の者ではありません……………」

「さ

らに彼の体温と呼吸、脈拍数を測りましたが、」

「測りましたが?」

「彼の体温は低温状態及び、呼吸や脈が動いていませんでした。」  
衝撃な事にジュリオは驚く。

「何!?それだと奴はとつくに死んでいるではないか!？」

「恐らく、」

「一体何者なんだ…………… 奴は……………」

ジュリオは爪を噛みながら、深く考え込む。

その頃、とある空間で陽弥は…………… 闇の中をさま迷って

いた。すると目の前にある世界の文明が浮かび上がる。

「これは……………」

一つは辺り一面が砂漠でそこにピラミッドやスフィンクスがあり、もう一つは山の上に古代都市がまるで空中に浮かんでいた。

「これは……………?」

さらに陽弥の頭の中に自分と同じ文明を持つ世界や、超古代のテクノロジーが頭の中に入ってくる。

「世界はこんなに広いんだ……………」

するとその中に自分の世界もあった。

「俺の住む世界……………」

すると惑星ホライゾンが見てくると、ヴァルヴァートル帝国が燃えており、辺り一面が炎と血の海になっており、その血の海に……………」

「…………… 皆!!」

そして陽弥は意識の中から目を覚ました。気が付くと酸素マスクをしており、何か深緑液体が入ったカプセルの中にいた。陽弥は混乱している、カプセルの外に数人の白衣を着た科学者が数人いた。そして科学者の一人がカプセルのスイッチを押すと、液体が外へ排水され、陽弥はカプセルから出され、その場に倒れた。陽弥は混乱しながら、周りにいる科学者達に話しかける。



「ここは……?!」

すると陽弥の目の前にある通路から数人の防護スーツを着た人達が駆け付け、陽弥の脈拍を検査する。

「脈拍は………大丈夫です」

「よろしい………この青年を部屋に案内しろ」

《了解しました!!》

防護スーツをした数人は隊長らしき人物に敬礼すると陽弥にタオルを渡し、部屋まで案内された。

「少々お待ちください………服はロッカーの中にあります。」

防護スーツの人は陽弥にそう言うのと去っていった。陽弥はロッカーの中を開けると白いスーツがあった。陽弥はそれを着るとスーツはブカブカだった。するとブカブカだったスーツが突然、陽弥の体に装着された。

「何だこれ!」

そして陽弥の胸に太陽と思われるのマークが浮かび上がる。

「太陽のマーク?」

陽弥がマークを見落としていると、ドアが開き、軍らしき人が入ってきた。

「誰?」

「怪しい者ではありません………私はシエパード………」

第17艦隊を率いる旗艦アンブロシアの艦長を務めている。」

「………アンブロシア?」

「まあ、無理もない、君は今まで………650年も眠っていたのだからなあ………」

「650年!」

その年数に陽弥は驚く。

「そうだ………しかし、この次元の狭間ではなあ」

「次元の狭間!?時空の狭間ではなく!」

「そうだ………次元の狭間は時空狭間とは違う世界だ何故な

ら、お前がいた世界とこの狭間も時が止まっているのだからなあ、」

「え!」

「我々、多民族次元革命連合『レボリユード』」はあらゆる多次元に生きる種族と交流し、共に歩んでいるが、次元の狭間の磁場の影響で我々と多民族は不老長寿になったのだ。」

「……………マジ!?」

「マジのマジ……………大マジだ……………」

「つまり、俺のいた世界は今も時が止まっているのか?」

「そうだ……………そしてジュリオとの戦闘で死にかけたお前を私の部下が助けたのだ……………ラルフ」

すると開いたドアから旧A R Sスーツを着用している黒髪の青年が現れた。

「よお、俺の名はラルフ……………アンタと同じ……………」

ヴェクタ人だ」

ラルフと名のる青年の言葉に陽弥は驚く。

「ヴェクタ人!!!」

「そうだ……………分かりやすく言うと……………お前の従兄と言っても良いかな?」

「俺の……………従兄……………」

「付いてきな、ここが何処なのか案内してやる……………」  
陽弥はラルフに付いていった。

施設から出ると、陽弥が見た光景は……………多数の島が空に浮かんでおり、他にもドーム型のコロニーもあり、山や湖や海が広がっており、そして陽弥がいた施設の真上にこの世とは思えない程の惑星以上の高さを持つ巨大な樹木が聳えていた。

「(っ)は……………!?」

「……………ようこそ!我々多民族次元革命連合の本拠地……………北欧の神々の聖地とも言える場所……………『ユグドラシル9』に!!」

「ユグドラシル9……………」  
陽弥はその広大な領域に足を踏み入れ……………彼らに歓迎さ  
れることになった。

## 第28話：聖地『ユグドラシル9』

陽弥はその広大な領域に啞然していた。

「驚いた？」

「…………… ああ、」

「そんなじゃ、これから俺の家まで案内してやる。付いてきな、ラルフが先導して行くと、何かの音が空から聞こえてきた。」

「ん？」

すると空の彼方から、旧人類が作り出した戦闘機に似ているファイター3機が旋回していた。(分かりやすく言えば、マクロスF”VF-25 メサイア”の間接部がパラメイルの間接部になっている機体と思つて下さい。)

「あれは？」

「ああ、あれは俺ら多民族次元革命連合の主力兵器『ガルドメイル』」

「ガルドメイル？」

「乗れたかったらこのユグドラシルを創つた神様に会うと良いぞ」

「神様？神様つて…………… あの？」

「そう、何年か前の俺らヴェクタの先祖はドゥームの奇襲に会い、ギャリック・リングのハイパーゲートで運良く、この聖地にたどり着き、ここで1200年も住んでいる。」

その事に陽弥は驚く。

「1200年も!？」

「ああ、正確に言えば俺は…………… 1220歳だ」

「じゃあ、俺の歳は…………… 650年眠つて…………… 18を足すか

ら…………… 668歳?!」

自分の現在の歳に驚く。陽弥にラルフは笑う。

「ハハハ…………… そうなるね、それ…………… 着いたぞ」

そこは紛れもない普通の家だった。

「これが？」

「そう、よろしくな…………… 新人♪」

ラルフは陽弥の肩を”ポン”と叩くと、ドアを開けた。  
「ただいま、」

すると階段から4〜5人の男の子と女の子が喜びながら、下りてきた。

《お帰り!!》

「ねえ！ねえ！他の世界どんなだった？」

「僕も行ってみたい！」

「腹へったー！」

「お腹すいた〜！」

「にいにい、その人誰？」

「にいにいのお供？」

「う〜ん……………俺と同じヴェクタ人だ」

「ヴェクタ人?!」

子供達は陽弥がヴェクタ人だと知ると大喜びを上げた。

《ヤッター!!》

「ラルフ……………この子供達……………まさか」

「俺の弟と妹たちだが……………それが？」

「ええ〜!!?」

「俺含めて、7人だ」

「スゲエ……………」

「両親は……………あの襲撃時に俺と弟と妹を助けるために死んだ……………それでも、俺は弟と妹を守りたいと思っているんだ……………今日は遅いから、早くご飯と風呂を済まして、寝よう……………明日、リニアレールのモノレールでユグドラシル9のコロニーの町と9つの世界を紹介する……………」

陽弥はラルフの実家に寝泊まりした。

陽弥はラルフと共にモノレールに乗っており、ヴェクタ人の町へと向かっていた。

「早いなあ、」

「辺り前だ……昔にあった技術を応用してさらに改良したのだ……そろそろ見えるぞ……」

トンネルを抜けると日射しで半径数百キロもあるドーム型のコロニーが見えてきた。

「あれが？」

「ああ、俺達ヴェクタ人のコロニーの町……NV（ニューヴェクタ）シティだ……そして、」

モノレールがコロニーに入ると大きな建物が見えてきた。

「町の中心にある大きな建物がNVSA（新・ヴェクタ保安局）……これから俺とお前の新しい本部になる。」

陽弥とラルフはNVSAの階段を上がっていると出入口の方にシエパードが待っていた。

「おお、来たかラルフと陽弥も」

「シエパード艦長！」

ラルフはシエパードに向けて、敬礼をした。

「下ろして良いぞ……」

「そういえば、陽弥は9つの世界に住む種族の事は知っているかな？」

「え？いえ……っ?!」

すると陽弥の後ろから大きな大男が現れた。

「紹介する……彼はヴェクタ人の男性と9つの世界の一つ炎

の巨人の住む世界ムスペルヘイムの女巨人のハーフの………  
バルト・フェルドだ」

「よろしくな！」

バルトと名のる巨人は陽弥に挨拶する。

「そして此方は………」

「御会いできて光栄です。陽弥さん」

現れたのは金色のロングヘアーをしており、美しい羽をした綺麗な女性が陽弥に礼儀正しく、御辞儀する。

「彼は9つの世界の1つアルブヘイムに住む光の妖精ライトエルフの男性とヴェクタ人の女性のハーフ…… キャリー・シアローゼ………」

「皆ヴェクタ人のハーフなんだ………」

「そうだ……… まだいるぞ、霜の巨人の住む世界ヨトウンヘイムのハーフ女性とスヴァルトアルブヘイムのハーフ男性とそこにいるラルフ・フレイもヴァナヘイムに住む神支える使者の息子だからなあ、」  
「え!?ラルフって……… 神の子!?!」

「正確に言えば、デミゴット（半神半人）だ………」

「そして君は……… ヲクタ人であるサム・ギデオンとミットガンド（人間世界）の女性アリア・リーヴの血を受け継いでいるクォーターだ。」

「え!?じいちゃんを知っているのか!?!」

「ああ、プロセアンの使者でもあるジャヴィックと共にミットガンドへ偵察に向かわせたのだが……… ジャヴィックがサムの死亡を知らせた時……… 悲しんだ……… だが、サムにはご息が二人もいた。そのご子息であるシン・ギデオンが悪き我らヴェクタの敵ドウムを倒したとき……… サムの死は無駄ではなかったと思っていたよ………」

「じいちゃん……… そんな事を隠していたんだ………」

「そして今……… そこにいるラルフはお前の祖父サムの姉の子でもある。」

「ああ、納得！」





「……………マジかよ?」

「その為……………陽弥とラルフやバルト、キャリーも含む9人は……………ジュリオをの持つダークマタージュエル……………またの名を……………《業魔の怨念》を一刻も早く破壊しなければならぬ……………そして未来に生きる生命を護らなければならぬ……………我々も多次元にいる各多種族次元革命連合にも集合している……………」

すると陽弥は心を決心し、シエパードに言う。

「……………やっつてやるよ」

「?」

「やっつてやるよ!俺!……………護星神になってやる!あの時約束したんだ!この世界や他の世界も守るつて!!500の邪神が相手してやるよ!!そして……………あの糞ジュリオにこの世とは思えない程の痛い一撃を味会わせてやるよ!」

「なら、護星神になる準備が必要だな……………9つ世界の力を習得しなければならぬ……………そして……………陽弥付いてきなさい……………」

「え?はい……………」

陽弥はシエパードに連れられN V S Aの地下へ案内された。

陽弥が辿り着いた先は地下に古代神殿の様な場所だった。

「地下にこんな古代神殿が……………ここは?」

「ここはかつて……………Q人……………クアンタ人が造り上げた神殿だ」

「クアンタ人が!」

「ああ、そして……………」

シエパードは電灯のスイッチを入れると、灯りが照らされた先に剣を地面に突き刺した古びた機体が立っていた。(分かりやすく言えば、聖戦士 サーバインがウルトラマンティガの様に石化した感じですよ。)

「これは！」

「かつて…………… 我々の先祖が造りし、3番目の禁断の機体……………」 ” パンドラメール シグムント”  
だ……………!!」

「これが…………… シグムント……………」

「だが、シグムントは普通の機体ではない…………… 後継者を探しているんだ。」

「後継者を？」

「ペルシウス、ジャンヌ、ヘラクレス、ヤマトはそのパイロットの能力によって扱うことが出来る。そして双子機である、ヒミコ及び百鬼、百魂、百霊、百妖は感情によって扱うことが出来る。だが、シグムントは…………… 本当に相応しいパイロットを探している…………… そうまるで虎の如く…………… 虎は、誰の言うことに従わない…………… そしてどんなに恐ろしい力が立ち塞がっても…………… 虎は恐れない…………… その咆哮は悪鬼も怖れる…………… シグムントはそういう機体なのだ。」

「つまり…………… シグムントは自分より強い奴にだけは言うことを聞くって訳か？」

「そうだ……………」

「なら、やってやるよ！護星神の道のついでにシグムントを乗りこなす…………… 待ってるよ…………… 父さん、母さん、ルナ、エミリア、皆!!」

陽弥は拳を握り締め、シグムントに向けて、雄叫びを上げる。

「やれやれ、頼もしい青年を連れてきてしまったか…………… 果たして…………… 彼はあれを引き抜くことが出来るか……………」

シエパードは神殿の下の方に目を向ける。

その下に緑が溢れ、光が湖に射し込み、その湖の真ん中に蒼と紅に別れた剣が台座に突き刺さっていた。

## 第29話：護星神への試練

陽弥がユグドラシル9に滞在して、2日……………陽弥は霜の巨人達の住む世界ヨトウンヘイムに来て、そこで霜の巨人の王”スリユム”に相手をされていた。

「あああああ~~~~~!!!」

陽弥はスリユムの氷の巨斧に振り回されながら、逃げていた。

「逃げたらダメだ……………！恐れを亡くして相手に堂々と立ち向かえ！それが護星神の極なる力の一つだ!!」

「だって！息なり、巨人を相手するなんて、しかも龍装光を無しで戦えなんて、無理だよ!!どわっ!!」

「オラオラアアア!!どうした腰抜けめ!!それでも護星神に選ばれた守護者なのかあ?!」

「クツ！やるしかない!!剛火炎!!」

陽弥はスリユムに向けて、灼熱の炎を吹き放ち、スリユムは顔を火傷し、怯む。

「グアアアアア~~~~!!!」

「今だ！」

陽弥は飛び上がり、スリユムの顔に近づいたと思いきや、スリユムの手が陽弥に直撃し、吹き飛ばされた。

「痛~~~~！けど！まだまだ!!」

陽弥は剛火炎を放ち、スリユムを倒していた。シェパードの所にラルフが来る。

「凄いなあアイツは……………俺でも三年掛かったスリユムを2日でこう追い詰めるとは……………流石サム叔父さんの孫だ。」

「だが、護星神の試練の序盤に過ぎない……………後、8つの試練が残っているのだからなあ、」

その後、陽弥はスリユムに返り討ちにされてボコボコされた。

陽弥はラルフの家で疲れはてていた。

「あああゝゝ!!!強すぎる!あの巨人王強すぎる……………しかも父さんの2倍強すぎる……………!」

「当たり前だ……………霜の巨人王スリウムは全てを凍てつく世界に変えた者だからなあ……………結果アース神族の主神オーデインの息子、雷神トールによって倒された。」

「へえ、北欧神話って色々謎だらけなんだなあ……………」

「神話には伝説とは全く違う真実もあるからなあ……………そろそろ消すぞ……………明日も護星神の試練の第一関門をクリアしないと駄目だからなあ……………」

「分かった……………お休み……………」

明日に備えて、就寝した。

翌日、陽弥はスリウムに再戦を申し出た。陽弥はスリウムの巨斧を回避し、剛火炎で拳を纏い、炎の拳に変わった。

「さあ!掛かってこい……………!!!」

陽弥は拳同士をぶつけ、構える。するとスリウムは氷の巨斧を振り下ろした。陽弥は炎の拳で氷の巨斧を白羽取りをし、氷の巨斧が陽弥の炎の拳の熱で溶けていく。スリウムは焦り、斧を戻そうと後ろに下がろうとした時、陽弥が隙を付き、巨斧から離れ、スリウムの目の前

に飛び上がり、炎の拳でスリユムの顔面に拳をぶつけた。

「グアツ!!」

炎の拳で火傷を負ったスリユムが倒れかけた時、陽弥はスリユムの後方に回り込み、スリユムの足に目掛けて、百裂拳をする。

「熱っ!!」

スリユムはあまりの熱さに耐えきれず、倒れると、陽弥はスリユムの前方に回り込んで、自分ごと回転し始めると炎の拳から遠心力により、プロミネンスが起こっていた。そしてそのプロミネンスが陽弥を包み込み、紅炎を纏った巨大なドリルに変わり、倒れたスリユム目掛けて、紅炎のドリルを回転し、突撃してきた。紅炎のドリルがスリユムの氷の鎧を溶かしつつ、そして溶かした氷の鎧の穴から胴体が現れ、陽弥は回転を止め、渾身の一撃で炎を纏った踵落としをした。

「オラアツ!!止めだ!!」

スリユムは陽弥の踵落としで下の方へ氷の地面ごと、叩き落とされた。

シエパードとラルフは陽弥の強さに驚いていた。

「おお!!」

そして陽弥が降りてくると、シエパードに向かって大声で喜ぶ。

「よっしやああああ!!第一関門クリアだ!!」

「まさか……………あのスリユムを三日でクリアした……………しかも龍装光を使わず、炎を両手に纏い、氷を溶かすとは……………中々、やるなあ……………」

「ええ、驚きですよ……………」

誰もが喜んでいる直後、突然の揺れが来た。

「何だ!？」

「シエパード艦長!大変です!」

「どうした?!」

「ユグドラシル9に……………侵入者が!!」

「バカな?!ここは次元の狭間だぞ!」

その事に皆は驚いた。

その頃、コロニーの対空間用強化ガラスに何か赤黒い人影がガラスを突き破った。その赤黒いのはゆっくりと降下してきた。陽弥達が駆け付けると、その赤黒いのはゆっくりと顔を上げた。

「お前は!!」

「久しいなあ……………陽弥・ギデオン……………」

陽弥はその者の顔を見て、驚く。

「ダーク・シン!!」

「残念だが……………それは昔の名だ……………今の名は……………スカーレット・ソルと呼んでも貰おう。」

陽弥とスカーレット・ソル……………両者は戦闘体制に入り、両者武器を構える。

「いざ!勝負!!」

陽弥の炎の拳とスカーレット・ソルの爪がぶつかった直後、衝撃波がラルフ達を圧す。

「何だあの戦いは?!」

シエパードは陽弥の戦いに驚くと、両者は天高く舞い上がり、ラッシュを繰り返す。そして陽弥の蹴りがスカーレット・ソルに炸裂し、地面へ吹き飛ばされる。その隙に陽弥はスカーレット・ソルが地面に激突する前に先回りし構える。

「貰ったああああ!!」

陽弥は炎の拳で振り上げようとした直後、スカーレット・ソルが目の前から消えた。

「甘いー!」

するとスカーレット・ソルは陽弥の後方に回り込んでおり、爪で陽弥を切り裂こうとしたが、陽弥の炎の拳がスカーレット・ソルの爪を

防御し、陽弥はスカーレット・ソルの横腹目掛けて、ラツシュする。  
「クッー！」

「はあああああ!!」

陽弥はさらにラツシュをし、スカーレット・ソルが舌打ちすると、スカーレット・ソルの横腹から禍々しき龍の頭部が現れ、目にも見えな  
い速さで陽弥の左腕を喰い千切った。

「っ!？」

陽弥は左腕がなくなっていることに気付き、悲鳴を上げる

「グアアアアア!!」

喰い千切られた左腕から大量の血が流れ出ており、スカーレット・ソルは喰い千切った陽弥の左腕を食べ尽くすと、爪から赤黒い炎が出てきて、その爪を陽弥に突きつける。

「お前の左腕を喰ろうた……………後はお前の体を喰えば……………私は完全体に……………」

スカーレット・ソルが赤黒き炎の爪を切り下げようとしたとき、スカーレット・ソルの首もとにラルフの剣が近づいていた。

「止めるんだ……………」

「ほお、ヴァナ神族 フレイの息子が……………面白い……………」

スカーレット・ソルはラルフの剣を爪で振り払い、とてつもないスピードでラルフの首を掴む。

「コイツ!……………強い!」

ラルフの首が徐々に締めていく時、左腕が陽弥が言う。

「待てラルフ……………ソイツは……………俺が倒す!」

「だが、お前!そんな状態でどうやって?!」

「腕が……………亡くなっても……………負けない!……………」

太陽はいつも無限の光を放つ!!……………例え光が消えても……………心の魂の光は消えない!!……………だ

から俺は……………どんな状態に陥っても立ち上がる

!!……………俺はヴェクタ人 シン・ギデオンとメイルライ

ダー ヒルダの息子!!……………そして……………ミッドガン



「ドの護星神だ!!」

陽弥は叫ぶと右腕が光だし、スカーレット・ソル赤黒き炎の腕と異なる巨大で光の爪に変化した。

「右腕が…………… 我と異なる光に!？」

スカーレット・ソルが陽弥の光の右腕に驚くと、陽弥は光の爪をスカーレット・ソルに向けると同時にスカーレット・ソルへ向かっていった。

「はあああああつ!!!喰らえ!!!」

陽弥の光の爪とスカーレット・ソルの闇の爪がぶつかった直後、二つの力が二人を包み込んだ。最初に陽弥が目を覚ますと、何処か知らない空間にいた。

「何だ?!」

陽弥は辺りを見渡していると、目の前にスカーレット・ソルがいた。

「お前のその強さ…………… 認めよう…………… 我の…………… 極限の闇の力を存分に使うがよい!!」

するとスカーレット・ソルの体が赤黒い粒子になり、陽弥の無くなった左腕に集まると、赤黒い粒子が光だし、陽弥の左腕に変わった。そして陽弥は念じると左腕がスカーレット・ソルと同じ闇の左腕に変異した。(左腕はテイルズオブベルセリアの主人公 “ベルベット・クラウ” の赤黒い左腕が、陽弥の場合、両腕が光と闇に別れている感じです。)

「俺の食いちぎられた左腕が…………… スカーレット・ソルと同じ闇の腕に変わった……………」

すると闇の左腕からある記憶が頭に流れ込んできた。そして陽弥は左腕見て、言う。

「感じる…………… この腕から…………… コイツの記憶が流れ込んでくる…………… そう言う事だったんだな…………… ダーク・シン…………… その進化がスカーレット・ソル…………… 嫌、生まれ変わった邪神皇ドウム…………… お前の闇の力! 存分に使用わせて貰うぞ!!」

陽弥は光と闇の腕を出し、舞うように、振り上げたり、下げたりし

ていた。その光景にシエパード達は驚く。

「白き太陽と……………黒き太陽が揃った……………！」

陽弥は舞うのを止め、シエパードに問う。

「さあ！次の護星神の試練……………始めてくれ！」

陽弥はやる気満々の姿を見せ、早速、第2の試練を実行した。

陽弥は第2の試練 アルブヘイムの巨大な食人蟲を千匹を相手し、第3はムスペルヘイムの獄炎を噴く火山を鳴り止めさせ、第4のスヴァルトアルブヘイムに潜む ダークフェアリーの駆逐、第5の小人の世界 ニダヴェリールに存在する数万匹いる龍を倒していった。

それから……………1000年後……………ユグドラシ

ル9で開催される護星神同士との戦いで5人の護星神を全て気絶や場外に押し倒せば、勝ちと言う祭があり、陽弥はそれに参加していた。そして闘技場で実況者が叫ぶ

「では、これより、護星神の……………最後の試練……………5人の護星神と相手してもらいます！」

五つの入口から白銀の鎧を着用したラルフやバルト、キャリー、小人のドミニカ、そして……………赤いロングヘアをして、黒と白の鎧を着ており、紅いマントを拵げ、右目に黒い眼帯をしている成長した陽弥が出てきた。試合を観に来た観客達が喜びと興奮の叫びを上げ、陽弥はラルフ達を見る。そしてラルフ達も陽弥を見る。

「掛かってこい！陽弥！俺らも本気で相手になるぞ!!」

ラルフ達はそれぞれの武器を抜刀し、構えると陽弥も構え、光の右腕と闇の左腕を出し、叫ぶ。

「じゃあ、遠慮なく…………… 出てこい！陽光神龍 アポロドラゴニス！黒陽神龍 アポロ ドレイク!!」

右腕からかつて陽弥の銀河七聖龍だった太陽神龍と左腕から銀河七聖龍になったドウームの化身が出現した。それを闘技場外の観客から見ていたアース神族の主神オーデインが見ていた。

「光と闇の紅き護星神か…………… 面白いことになりそうだな……………」

「ええ、」

その横にシエパードもおり、オーデインの問いに答える。

そして陽弥は抜刀してきたラルフ達に向かって行った。

「見せてやる…………… 新しくなった俺の力!!」

すると2体の銀河七聖龍が合体し、全てを超越している神々しい龍神へと変わり、陽弥に纏い、試合開始のゴングを鳴った。

### 第30話：聖騎士 シグムント復活

試合に勝った陽弥は護星神の試練の中で最も難易度が高く……危険な世界……死者の国 ヘルヘイムでの試練を受けていた。

「ハア、……ハア、……ハア、……ハア、……ハア、……これは……ちよつときついかもなあ……」

陽弥の周りに無数のヘルヘイムに堕ちた亡者の群れに囲まれていた。亡者は呻き声を上げ、陽弥の周りに浮いており、彼の魂を狙っていた。

「悪いがなあ……あいにく俺の心臓は人工心臓だから……奪えないぞ!!」

陽弥は左腕の闇の爪で亡者を切り裂いたが、相手は霊体で斬れなかった。

「チッー」

陽弥は舌打ちすると、右腕の光の爪を展開し、亡者を風ぎ払うと、亡者は陽弥の光の右腕に脅える。

「ん？……ああ、なるほど……死者の国はいつも夜……こいつらは夜行性になってるんだったなあ……だったら……この光で永遠に脅えていろ……罪人共が!!」

陽弥は光の爪を振り返し、亡者を追い払っていた。亡者は陽弥の光に耐えられなく、岩影や洞窟の中に隠れる。陽弥は振り回している内に亡者の群れがいなくなっていることに気付いた。

「あれ？……もう、おしまい？」

陽弥は光の右腕を出したまま、ヘルヘイムの奥へと進んでいった。その時、後方の岩影に黒い影が陽弥を睨んでいた。

陽弥はその奥へ進んだ先に一つの黒い扉が目の前にあつた。

「ここが目的の場所か……………」

陽弥は早速、光と闇の腕を発動し、黒い扉を壊そうとしたその時、黒い影が陽弥に飛び付いてきた。

「何っ?!」

陽弥は背中にしがみついている黒い影を振りほどこうと、暴れ、ようやくその黒い影を闇の左腕で掴み、引き剥がすとその黒い影の正体は……………」

「妖精……………」?

それは翡翠の色で美しい髪をした女の妖精だった。しかし、仮面が取り付けられているため、素顔が分からなかった。すると陽弥はその妖精に尋問する。

「何でここにいるんだ?」

しかし、その妖精は喋らなかつた。

「何だ?……………」 お前喋れないのか?」

すると妖精は陽弥の問いに応じ、首を上下に動かし、顔に取り付けられている仮面に指を指して、ジェスチャーする。

「その仮面のせいで喋れないって言うことか?」

すると妖精は強く首を上下に振る。

「分かつた……………」!

陽弥は早速、妖精の顔に取り付けられている仮面を引き剥がそうとしたが、仮面はびつしり顔に貼り付いており、光と闇の腕の力でも、取れなかつた。

「う〜ん……………」 困つたなあ……………」 仮面が取れなきや、何を言っているか分からないなあ……………」 ここは一端、試練を中断して、シエパード艦長に相談してみるか……………」

陽弥は女の子を連れ、本部へと帰還する。その途中、陽弥が壊そうとした黒い扉が少し開き、その隙間から誰かが陽弥を睨み覗いていた。

陽弥は本部に戻り、女の子に付けられている仮面を検査していた。

「こんな材質は見たことがないなあ……………」

「見たことがない?…………… どういう事なんですか?」

「この仮面の材質は今までの金属より硬く、さらに何か喋ろうとしたら仮面から電流を流すシステムなんだ……………」

「そんなあ…………… !!酷すぎる……………」

「念のため、さらに調べておく…………… お前はその子の世話をしなさい…………… 良いかね?」

「分かりました!」

陽弥は女の子と一緒にラルフの家へ帰ろうとしたら、シエパードが陽弥を呼び戻した。

「後……………」

「はい?」

「今月の給料だ……………」

シエパードが封筒に入った給料を陽弥に渡すと陽弥は深く頭を下げる。

「あ!ありがとうございます!」

陽弥は女の子を家に連れ帰り、考えていた。

「さて……………どうすれば……………！」

陽弥は何かを思い付き。倉庫へ行き、何かを探していた。

「確か……………この辺りに……………あつた！」

陽弥が見つけたのは頭に被るような装置が二つあつた。

「脳波電子読み取り翻訳機……………これを使って、この子の脳波を読み取り……………何を言っているのか分かるかもなあ、」

陽弥は翻訳機の装置を頭に被り、女の子にも翻訳機を被らせる。そして翻訳機の電源をオンにし、頭の中で念じる。

「ねえ、君……………」

「？」

「何か……………思い込んでみて？」

「……………わ……………た……………し……………」

は……………」

「良しー」

「わ……………た……………し……………は……………」

女の子が念じている直後、とてつもない爆音が鳴った。

「っ!?!……………何だ!?!」

陽弥は外を見に行くと、高層ビルから煙が上がっていた。

陽弥は女の子を連れて、本部に行くと、サイレンや警報が鳴り響いていた。

「緊急事態発生!!緊急事態発生!!ヘルヘイムから極悪の脱獄霊が脱走しました!住民は速やかに!!自宅に避難してください!!繰り返し!まず!ヘルヘイムから……………」

陽弥は民間人を安全な所へ誘導している保安局の隊員に声を掛け

た。

「何が起こったのですか!?!」

「分かりません!陽弥さんが受けていたヘルヘイムから名のある悪霊が女神ヘルの目を盗んで、霊界からこの域へ脱走したんだ!」

「脱走……………?!」

「目的は恐らくですけど……………誰かに対しての復讐だと思います……………もし奴がこの域を出れば……………」

「その人は殺されると……………」

「そうなのです!……………それだけは断固として、阻止しなければならぬ!……………陽弥さんのガルドメイルは用意している!今すぐに行けるか?」

「勿論だ!……………それとこの子も頼む!」

陽弥は急いで、保安局の格納庫へ向かっていった。

その頃、Nヴェクタシティの上空を飛行しているクラゲのような黒紫の物体をした脱獄霊は保安局のガルドメイルに追いかけられていた。

「その脱獄霊!!止まれ!……………止まらないと撃つぞ!」

しかし、脱獄霊は保安員の警告を無視していた。

「隊長!どうしますか!?!」

「やむ得ん……………撃て!」

隊員達は隊長の命令に従い、ガルドメイルN搭載されているビームバルカンで追撃し、ホーミングミサイルを放つと、脱獄霊に直撃した。「やったか?!」



煙が晴れる直後、煙の中から触手が出てきて、保安員のガルドメイ  
ルを破壊した。そして脱獄霊が怒りながら、叫ぶ

「ヴェクタ人!!皆殺しいいいいい~~~~!!!!」

そして叫んでいる脱獄霊を数キロ離れているビルの最上階で陽弥  
は眺めていた。

「アイツ…………… 何であんなに暴れてるんだ!? まあ、良い! 行くぞ  
!!」

陽弥は、ガルドメイ “サラマンダー” で向かい、脱獄霊にビー  
ムバルカンを乱射する。脱獄霊はビームバルカンを乱射する陽弥の  
方を向く。

「ヴェクタ人!」

「ホラホラ!!どうした!……………」

「ちよこまかとおおおお!!」

脱獄霊は怒りだし、背部から無数の刺が出てきたと思いきや、その  
刺がミサイルとなって陽弥のサラマンダーに襲い掛かる。陽弥はミ  
サイルを回避するが、ミサイルの弾数が多く、一機のミサイルがサラ  
マンダーのレフトウイングに直撃したと同時に陽弥はサラマンダー  
から脱出した。

「ヤバッ! ガルドメイが壊された……………!」

陽弥はパラシュートで高層ビルが並ぶ市街地に着地すると後方か  
ら脱獄霊がビルを破壊して、陽弥の前に現れた。そして陽弥は脱獄霊  
に質問する。

「お前! 何でそんなに怒ってるんだ?」

「黙れ! 小汚ないヴェクタ人が!!…………… それにお前のその  
髪…………… あの小娘に似ているなあ……………」

脱獄霊の語った言葉に陽弥は疑問を持つ。

「あの小娘?…………… 母さんを知っているのか?」

「母さん?…………… そうか…………… そう言う事

か…………… フフフフフ…………… アハハハハ!!!」

脱獄霊は陽弥の目を見て、急に笑いだした。

「何がそんなに可笑しいんだ……………?」

「いやあ、お前のその目…………… やっぱりあのガキに似ているなあ…………… そうか、そうか…………… アイツの子か…………… お前！名は？」

脱獄霊はさらに陽弥に問う。

「え？…………… 陽弥・ギデオンだが……………」

陽弥が名を言った直後、脱獄霊が触手を陽弥に降り下ろしてきた。「っ!？」

「ギデオン家の末裔めええええ!!! 見つけたぞ〜〜!!!」

脱獄霊は怒声を上げ、おぞましき触手で陽弥を攻撃してくる。

「何だ!? お前！急に襲い掛かるは意味分からない事を語るはお前誰なんだ!？」

「俺は…………… かつてお前のクソ親父に敗れた…………… ケビン……………」

陽弥は回避しながら、ケビンの名を思い出す。

「ケビン?…………… あれ?…………… 何処かで聞いたような……………」

そしてようやく陽弥はケビンの事を思い出す。

「あ!…………… そうか…………… お前が俺の祖父を殺した犯人で…………… 母さんをずっとストーリーカーしていた挙げ句、無理矢理結婚させようとしたあのロリコンケビンか?!」

陽弥の言葉にケビンは切れ、黒紫の触手を振り回す。

「それを言うなあああああ」

次々とケビンは市街地を破壊しており、陽弥は光の右腕を発動させ、光の爪でケビンの巨大で滑らかな皮膚を切り裂くとケビンは悲鳴を上げる中、陽弥は笑いだす。

「ハハハハハハ！ やっぱり！ 父さんの言われた通りだ…………… 直ぐ”かつ!”となりやすく、偉そうな事を言う…………… お前父さんに破られた事で今もあの世で悔しがっていたんだなあ」

「そうさ！ 俺は死んだとき…………… 復讐を誓ったんだ！ いつかあの世から脱走し、貴様の一族を皆殺しにして！ 新ヘルガスト連盟帝国を築き上げ！ 偉大なるドゥーム様を！ 復活させるのだ!!!」

ケビンの下らない計画に陽弥は呆れた。

「…………… 本当に…………… 馬鹿だな…………… !!」

「何だと?!」

「てめえのその下らない計画は…………… 永遠にないね!」

陽弥は左腕から闇の爪をだし、ケビンに向かって走ったが、ケビンは触手で陽弥を捕まえ、叫んだ。

「黙れえええええ!」

そしてケビンは陽弥を地面へ降り下ろすと、陽弥は地下まで吹き飛ばされた。

「痛てえ…………… ?」

陽弥は目を覚ますとそこはQ人の古代神殿で目の前に石化したままシグムントがあつた。

「ここまで、吹き飛ばされたか……………」

すると陽弥が吹き飛ばされて来た穴が壊れ、ケビンが現れた。

「シンの息子おおおお!! 覚悟しておけ!!」

ケビンは怒りながら、触手で古代神殿の柱を壊していた。

「おい、おい…………… 神殿で暴れたらバチが当たるぞ……………」

「!!」

「覚悟おおおお!!」

ケビンが触手から刺が現れ、陽弥の頭上に触手を降り下ろし、陽弥は防衛体制をすると何かが、陽弥を守った。

「っ!」

陽弥は眼を開けるとそこには石化している筈のシグムントが陽弥を守っているかのように手首からサーメットブレードを展開し、ケビンの触手から守っていた。その光景にケビンと陽弥は驚く。

「何!」

「シグムント?!」

すると誰も乗っていない筈のシグムントはサーメットブレードで触手を切り裂き、ケビンに向かって蹴り上げた。

「ゴブツ!!」

ケビンはシグムントの蹴りで通って来た穴から逆に吹き飛ばされ

た。

するとシグムントのコックピットハッチが開き、ジエスチャーする。  
る。

「乗れって言うのか？」

陽弥が問うとシグムントの眼が強く光だした。

「何で動いたのかは知らないが……………行くぞ！」

陽弥はシグムントに乗り込むと、シグムントは背部から緑光を出す虫の羽を展開すると、その4枚の羽を羽ばたかせ、ケビンのいる地上に向かって飛んだ。

その頃、本部ではシェパードとラルフが状況を問う。

「状況はどうなっている!?!」

「脱走霊は現在、地下神殿で陽弥・ギデオンと交戦中です！」

「神殿だと!?!」

シェパードがその事に驚くと、下からケビンが現れる。

「!?!」

皆はケビンの方を向くと、下からも何かが現れた。

「あれは……………!!」

それは石化したままのシグムントがケビンの前に現れ、シェパード達は驚く。

《シグムント!?!》

皆は驚き、ラルフが言う。

「何故、シグムントが起動しているんだ!?まさか……………」

ラルフがシグムントに乗っているパイロットが分かると同時に、陽弥はシグムントのサーメットブレードをケビンに突き付けた。

「グッ!!パンドラメール シグムント!!何だあの機体は!!」

するとシグムントは羽を飛ばたかせ、突進してきた。ケビンは口から粒子砲を放つが、シグムントはそれを読み取ったかのように、粒子砲を回避した。

「は!?!.....速い!」

シグムントはケビンの脇腹に回り込み、サーメットブレードで切り裂いていく、ケビンは触手を伸ばして、シグムントを捕まえようとした。

「そこだ!!」

すると、シグムントの装甲が突然、光輝きながら2体に増え、触手を回避する。

「あれ!?!」

ケビンは驚き、また触手で2体に増えたシグムントを倒そうとすると、2体の装甲がまた光輝きだし、4体に増えた。

「何だ?!?分身?!?!.....小生意気な!!」

ケビンは怒鳴ると同時に背部からミサイルを一斉発射し、シグムント4体のシグムントに直撃するが、今度は8体に増えた。

「クソ!攻撃が当たる度に増えていやがる!!」

ケビンは触手から拡散粒子砲を放った直後、シグムントが次元跳躍を発動し拡散粒子砲を回避したと同時にさらに増える。

「次元跳躍だ?!」

そうしていくうちに、増えたシグムント達により、ケビンの触手が斬られていくと同時にケビンはこの世とは思えない光景を目の当たりになった。

「何だ.....この数.....!?!」

数百体いるシグムントがケビンを囲み、手首からサーメットブレードを展開し、数百体のシグムントがケビンに向かって突撃し、ケビンを切り刻んでいく。

「グアアアアアアアアア~~~~~!!!」

ケビンは悲鳴を上げる。その光景はまるで、数百匹の蜂がスズメバチを取り囲んで攻撃している様に見えた。そしてシグムントに乗っ

ている陽弥……………嫌、数百人の陽弥達が叫ぶ。

《これで終わりだ!!》

数百体のシグムントがサーメットブレードの刃がケビンの体中にとどめを刺す。

「コイツらは……………化物なのか!」

ケビンは苦しみながら、それを言い終わると同時に体が破裂した。戦闘が終わると数百体いたシグムントが消えていき、元の一機になり、市街地に着陸した。そして陽弥はコックピットの中で汗をかきながら、息を荒く吸ったり、吐いたりしていた。

「ハア!……………ハア!……………ハア……………」

「ハア……………フ……………」

陽弥は落ち着くと、何かが落ちる音がした。

「ん?」

下を見るとそれはシグムントの装甲が散らばっていた。陽弥はシグムントの頭部を見て驚愕する。それは、機体の筈なのに、フレームは生物のような皮膚を持ち、背部には羽根があり、陽弥が最も驚いたのは、頭部であった。甲殻虫の角と鋭い顎と何かの生物のような口と牙と舌、そして眼が4つもあった。(分かりやすく答えますと、エヴァンゲリオンの初号機のような感じです。)するとシグムントの4つの眼が陽弥の方に向くと、喋りだした。

「……………何奴だ?」

「え……………!?!」

陽弥はシグムントが喋りだした事に驚くと、シグムントが陽弥を掴んで、下に放り投げた。

「うわっ!?!」

陽弥は背中を強打し、背中を擦りながら、シグムントに怒る。

「痛つつつ!何するんだよ!?!」

「貴様の様な貧弱なヴェクタ人は……………我の主に対応しくもない……………」

シグムントがそれを言い終わると、羽を飛ばたかせ、何処かへ飛んでいった。その光景に陽弥は目を光らせながら、言う。

「あの機体……………むかつく……………でも絶対にあの機体と言う  
より……………あの生物を乗りこなしてやる……………！」

陽弥は拳を握り、急いで保安局へ戻った

その頃、シグムントは家に送還された女の子と何かを話していた。  
するとシグムントは女の子へ手を差し伸べると、女の子に引っ付いて  
いた仮面が取れた。

「これでよし……………」

シグムントは羽を羽ばたかせ、また何処かへ行った。

「ありがとう♪」

女の子は笑顔でシグムントが去るのを見送る。

数時間後、陽弥は家に戻った。

「帰ったよ〜」

陽弥は疲れた体で椅子に座った。

「フウ、疲れた……………ん？」

ふと、テーブルの上に仮面が置かれていた。

「仮面？……………え?!」

よく見ると、それは女の子に引っ付いていた仮面であった。それが  
テーブルの上にあることに驚く。するとドアが開き、中から女の子が  
姿を現し、陽弥に挨拶する。

「お帰り♪」

「……………え?!」

女の子は目を光らせながら、陽弥を見て、挨拶する。

「お帰り♪」

「……………た……………ただいま……………」





突然の事に陽弥は天高くまで大声を上げた。そして陽弥の育児生活が始まった。

### 第31話：真実

マナが来てから、三日目……………陽弥は何度も保安局や本部にマナのDNA検査した結果……………正真正銘マナは未来から来た陽弥の实の娘だった。本人はどうやって未来から過去へ飛んだのかは分からないらしく、しばらく過去の陽弥（父親）が未来から来た実の娘”マナ・ギデオ”を育てることになった。

朝日が登り始め、陽弥はマナに朝食を作っていた。すると、階段からパジャマ姿のマナが寝ぼけながら、下りてきた。

「お！……………マナ、おはよう……………」  
「……………（ポケッ）？」

マナは首をかしげ、今度は、椅子に座り、寝た。

「あく、こころこら……………こんな所で寝ちやったらダメでしょ？」

陽弥はマナを仕付けると、マナは分かったかのように階段へ上がっていく、勿論、陽弥がマナが階段から転げ落ちないように、優しく支えていた。陽弥はマナを寝かし付けると、未来から来た可愛い娘を見て、考える。

「父さんも母さんも……………こんな風に俺とルナを育てていたのかなあ？……………」

「陽弥？」

するとドアの方からラルフがひよっこり現れた。

「ラルフ？」

「あ……………！マナちゃん寝てる？」

「うん……………」

ラルフはマナの寝顔を見て、微笑む。

「しかし、驚いたなあ……………仮面を付けていた女の子がまさか未来から来た陽弥の娘だったなんて……………」

「ああ、正直……………俺もビックリだよ……………何度も保安局や本部にDNA検査したが、やっぱり俺の遺伝子が入っていたんだ……………最初はどうなるかと思っていたんだが、案外……………」

子育ても悪くないなあ……………」

「そうか……………」 頑張れよ……………」 ミッドガンドの護星神パパさん♪朝食は俺が作つといてやるから……………」 お前はその子の傍にいろ……………」

「すまん……………」

ラルフは陽弥の方を叩き、朝食を作りを下へ下りた。

「でも……………」 何でマナは未来からここへ来たんだ？」

陽弥はマナの目的について考え込むと、段々と眠気が陽弥を襲う。

「……………」 まあ、良いや……………」

そして、陽弥は睡魔に襲われ、マナと一緒に寝てしまった。

そして数分後、

「ん？……………」

陽弥は目を覚まし、時計を見ると、午前8時を過ぎていた。

「ヤバッ!!マナ!起きて!起きて!」

「うくん?」

「もう保育園に行く時間だよ!」

陽弥は急いで、マナの保育園の服に着替えさせ、朝食を済み、マナを電動自転車のチャイルドシートに乗せ、保育園へと向かっていった。

保育園の入り口にはたくさんの児童が保育園へと入っており、園長でもある護星神のキャリーが児童に挨拶していると、  
「すみませ〜ん!!」

「あら！陽弥さん！……」

自転車に乗ったまま、息が荒々しくなった陽弥が寝ているマナを連れて、現れた。

「キヤリー！今日もマナを頼む！」

「ええ、何せ陽弥さんの娘ですからねえ…… さあ、マナちゃん？」

マナは元気良く目を覚まし、保育園へ入っていった。

「うん！」

するとマナが陽弥を見て、可愛い笑顔で、手を振る。

「パパまた後で〜♪」

陽弥は心配そうにマナを見送ると、空を見上げる。

「さあて！やるか！」

陽弥は元気良く、拳を手につけ、本部へ向かった。

陽弥はシグムントが眠っていたQ人の古代神殿へ行くと、ケビン（悪霊体）によって、中は荒らされており、壁には亀裂が出ていた。  
「…………… あの糞ケビンの奴…………… ここを何だと思っているのやら……………」

陽弥は神殿の辺りを見回していると、支柱の影から声がした。

「またお前か……………」

「っ!？」

陽弥は振り向くと、装甲が取り外されたシグムントと言うより、ア  
ンノウンが現れた。

「何度も言った筈だ…………… 我の主に対応しくもないと……………」

「それより、聞きたいことがある…………… そもそもお前は何者  
で…………… 何でシグムントの装甲を着けていたんだ？」

「……………それを聞いて……………どうする?」

「お前を乗りこなす……………相応しくも、何も関係ない……………俺はお前を乗りこなして……………今も時が止まっている俺の世界にいる父さんや母さんやルナ、皆や仲間達……………そしてエミリアや未来に生まれてくるマナを助けたいんだ……………!!」

陽弥はそう言うのと戦闘体制をした。

「ほお……………?」

「良いだろう……………なら……………来い!!お前の覚悟を……………我に見せろ!我を楽しませろ!思いさせろ!そうすれば我の真の名と何者かのか……………どうしてシグムントの装甲をしていたのか……………教えてやる!そしてお前を真の主と認めようではないか……………!!」

そしてそのアンノウンのも戦闘体制をすると、陽弥は光と闇の腕を発動し、鋭き爪を突き付ける。

「上等だ!!」

神殿の中が静になり、天井から水滴が集まり、それが雫となり、滴り落ちた瞬間、一体と一人は叫ぶ。

「いざ!尋常に……………勝負!!!」

すると、神殿が光だし、青い空間に変わった。

「ここは?」

「我の造り出したバーチャルルームだ……………神聖な神殿を壊すわけにはいかないだろ?」

「そりやそうだな!」

陽弥がアンノウンの隙をついて、掛かり殴るが、生命体は陽弥の鉄拳を片手で受け止めだした。

「ほお、極限の光の力を持つ右腕とドゥームの極限の闇を持つ左腕か……………面白い!」

するとアンノウンの左手から、ライフルが出現し、陽弥に向けて、発砲すると、陽弥のアーマーが酷く溶けていく。

「何だ!……………あの武器は?」

「超高周波荷電粒子収束突銃……………覚えやすくするため”ハイ

「パーノバビームライフル」と名付けよう……………」

アンノウンはそれを言うと、陽弥に乱射した。陽弥は回避するが、ビームが陽弥を追尾してくる。

「あのビーム……………追尾してくるのかよ!?!」

ハイパーノバビームの粒子レーザー陽弥を追尾してきて、陽弥はなんとか支柱の影に隠れるが、アンノウンのハイパーノバビームが行く手を阻む。

「どうした……………来ないのか?」

「来ないわけないだろ!」

陽弥が怒ると、ビームの弾道を読み取り、アクロバティックな動きで、ビームを回避しながらアンノウンに近づく。

「ノバビームの弾道を読み取っただと……………!?!」

陽弥はアンノウンに近づくと光と闇の腕と体から龍を召喚する。

「陽光神龍!・アポロドラゴニス!・黒陽神龍アポロドレイク!・太陽神龍!・アポロブレイブ!」

3体が召喚されると陽弥は叫ぶ。

「龍装光!」

陽光神龍は光の右腕に憑依し、黒陽神龍は闇の左腕に、太陽神龍は胴体に憑依していく。

「三体の龍を纏った護星神か……………」

「そして!」

すると陽弥の背中から、もう一体の龍を召喚した。それは太陽神龍とよく似ているが、神々しい純白の鎧をしており、光と闇の羽翼を拡げており、エメラルドのような美しく、鋭い目でアンノウンを睨み付けていた。

「何……………!?!」

「銀河七聖龍には隠された存在がいたその名を……………超神星煌龍帝ノヴァ……………そして……………超龍装光!」

陽弥が叫ぶとノヴァが咆哮を上げ、体中が虹色に輝きながら、龍装光をした陽弥に憑依していく、そして、陽弥の全身が赤とオレンジと黒から、白と赤の装甲へ変わり、スーツはオレンジから白と黄金へと

変わり、黒だった左腕も白と黄金へと変わった。

「ノヴァは…………… 銀河七聖龍の中で最も古き存在……………  
古の銀河七聖龍の帝王龍とも言っても良い…………… こいつを手  
に入れるのは…………… 凄く大変だった…………… 過酷だっ  
た…………… 苦しかった…………… それでも、俺  
は…………… だが、こいつは今も荒々しくなっている……………  
だから俺も全力でやる…………… !!こいつを使いこなし、  
皆を護れる最強の守護者に…………… 護星神になるんだ!!」

陽弥が決心すると、とてつもないスピードで生命体へ向かい、両腕  
がドラゴンの腕へと変わった。そして陽弥のドラゴンクローがアン  
ノウン体のに炸裂する。

「クッ!!」

アンノウンは防御するが、陽弥のドラゴンクローにより、吹き飛ば  
された。しかし、アンノウンは体制を整え、陽弥に拳を構え、陽弥も  
構える。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

一体と一人の拳がぶつかり、それによって衝撃波が古代神殿にある  
倒れた柱や瓦礫が粉々に消えた。煙が晴れると、陽弥の拳から血が垂  
れて出てきており、力を使い果たし、倒れた。

「…………… クッ…………… !!」

陽弥は悔しがりながら、涙を流す。

「やっぱり…………… これでも勝てないか……………」

そしてアンノウンは自分の手を見て見ると、微かだが、指の根の間  
から緑の血が滲み出てきていた。

「…………… 己の弱さに気付いたか、今ではあのジュリオ超越  
することは出来ない…………… だがなお前のその護りたいと言卯  
思いが…………… 我の心を大きく揺さぶった……………  
守りたいものか…………… 合格だ……………」

アンノウンの突然の言葉に陽弥は驚く。

「え!」

「合格だと言ったんだ……………！」

「……………つまり?!」

「お前は…………… 我の主に対応しい…………… だからだ」  
「……………」

陽弥はアンノウンに選ばれた事に唾然と茫然していた。

「どうした?」

「…………… あーいやあ…………… 驚きすぎて、何て言えばと……………」

「ハハハ…………… まあ、それは置いておいて…………… 我の正体  
について教えよう…………… それからお前の娘と他の護星神達  
とシエパードも連れてきなさい……………」

「え!?何で……………!?」

「知りたいんだろう?…………… 我が何者かのかを?」

「…………… 分かった。」

陽弥は皆を神殿に連れに向かった。

そして、陽弥はアンノウンの言われた通りにラルフ、キャリア、ド  
ミニカ、バルド、ヨトウンヘイムの護星神で女巨人ダーマとスヴァル  
トアルブヘイムの護星神で闇妖精デュランとシエパード、マナを連れ  
てきた。ラルフはアンノウンを見て、陽弥に問う。

「まさか、シグムント自ら陽弥を選ぶなんて……………」

「ビックリ?」

「ああ……………」

するとアンノウンが陽弥達に話しかける。

「集まったな?」

するとアンノウンが陽弥達が立っている地面に手を翳すと、地面が  
凹み、エレベーターとして下へと降りていく。



《っ!?!》

皆は驚き、キャリーが質問を問います。

「シグムントよ!何なのですかこれは?!」

「シグムントではない…………… 我の真の名はコードネーム”001”だ」

次にデュランも質問してくる。

「001…………… じゃあ、お前は人工生命体なのか?」

「そうだ…………… そして我はかつて、クアンタ人によって創られた原初の異次元生命体だった…………… 何億年前、クアンタ人はあらゆる世界に生命を作り出し、それを遺してきた。」

すると光が現れ、皆は目を眩み、光が晴れるとそこは草原や山々や森林や、湖、川があり、さらに古城や、遺跡、崩れているが昔の建物が存在する大地だった。

「ここは!?!」

「お前達の第三の故郷ユグドラシル9は…………… 9つの世界だけではないのだ……………」

「え!?!」

陽弥を乗せたエレベーターが謎の大地に着陸すると、陽弥達は足を踏み入れ、辺りを見渡す。そして001は言う。

「もう一つの世界…………… その名も『ルミナス』」

「ルミナス?」

「この世界はかつて…………… 光の意思を持つクアンタ人の故郷とも言える。」

「と言うことは!ここが…………… !?!」

「そうだ…………… かつてここで…………… 光と闇に別れたクアンタ人が3つの力と無限の力を巡って争いが起こった…………… 彼等は2体の双神を召喚し、闇を封印した…………… だが、両種族との争いで、惑星ルミナスは環境汚染により、死の星へと変わり果て、生き残った光の意思を持つクアンタ人は新たな故郷を探す事になった……………」

「それから?」

「……………しかし、彼らの移民船に恐ろしい宇宙病が広まった。移民船に乗ったままその病に縛られ、死んでいった……………」

「じゃあ!?クアンタ人は絶滅?!」

「絶滅ではない……………ラルフと言ったなあ……………お前はあの時見ていなかった……………陽弥がジュリオに殺されかけた時、傍にいたあの黒いギムガルムに乗った奴を……………」

「黒いギムガルム?」

皆が首をかしげると、陽弥は驚いた表情で001に質問する。

「ちよつと待て001!……………何でお前がそれを知っているんだ?!」

「我は過去や未来を透視する能力がある……………黒いギムガルムは……………陽弥……………」

001は陽弥を見て頷くと、陽弥は冷静に答えた。

「ああ……………彼女は、絶滅になったクアンタ人の末裔……………」

エミリア・ヴァルネア・クリーフなんだ……………」

《え?!》

「そして……………俺の恋人で……………俺が一番護りたい人なんだ!……………」

その事にラルフは謝罪する。

「そうだったんだ……………すまん!陽弥!……………俺がある時、あの黒いギムガルムにお前の恋人が乗っていた事に気付いていれば……………!!」

ラルフは深く頭を下げ、陽弥が止めようとするマナが陽弥の裾を掴む。

「ん?……………どうしたのマナ?」

陽弥はマナに話し掛けると、マナは悲しそうに表情で陽弥に言う。

「ママ……………」

陽弥は冷静な表情でマナの頭を撫でる。

「……………大丈夫」

「?」

「エミリアは絶対に助ける!だから安心してくれ、マナ……………」

「うん！」

「マナが元気良く答えた直後、マナの体から陽弥も驚く物が現れた。  
「ん？」

「こ！……これは！」

それはジュリオに奪われた筈のインフィニティソウルであった。

「インフィニティソウル!? …… 何でマナが!？」

「なるほどー！ そう言うことだったんだ！」

ラルフが分かった様な表情で言うと、ドミニカが首をかしげる。

「何が…… そう言う事なんだ？」

するとラルフは001を見て、言う。

「001…… お前なんだな？」

「え?!」

ドミニカが驚くと001は素直に答えた。

「そうだ…… 口封じの仮面を壊したのは…… 紛れもなく、

この我だ。」

「でも、何で?!」

「さつきも言うように…… 我は過去や未来を透視する能力があ

ると言ったが…… さらに私は未来のお前と交信する事も出

来る。」

「つまり!？」

「ああ、その通りだ…… そして時空通し出来る能力を得た未来

のお前が過去の自分を救うように頼まれ、インフィニティソウルを受

け継いだ自分の娘を過去に送ったのだ……」

「未来の…… 俺が…… !？」

「そして、今、人工心臓で動いているお前を覚醒するために、幼い娘が

過去の父親であるお前にインフィニティソウルを貸してやろうとし

ているのだ……」

陽弥はその事に戸惑い、マナを心配する。

「マナ…… お前はどうかなるんだ?」

するとマナは元気良く答えた。

「大丈夫！ マナ、ちゃんと命あるからいつでもどこでも動けるよ！ だ

から、パパが使って……………」

マナが陽弥にインフィニティソウルを渡そうとすると、陽弥の目に涙が溢れていく。

「マナ…………… お前……………！」

すると陽弥はマナを優しく抱き、溢れてきた涙が落ちていく。

「パパ？」

「ありがとう……………！、やっぱり…………… お前は未来の

自慢の娘だ……………！」

陽弥はマナからインフィニティソウルを受け取り、それを胸に近付けると、インフィニティソウルが陽弥の胸の中にスウツと入った直後、陽弥の体が光だした。そして陽弥はインフィニティソウルが見てきた記憶を見る。すると陽弥が見た物は……………

「そうだ…………… 思い出した……………」

それはまだ幼い頃の自分とルナが山の中に入っていく姿だった。

「ルナと俺がまだ3歳だった頃…………… 崖の下に見たことのない綺麗な花が咲いて…………… ルナはそれが欲しいと言って、代わりに俺が取りに行つたんだ…………… そしてその花を採つた直後……………」

すると幼い陽弥が足を崩してしまい、断崖絶壁の崖の闇へ落ちていった。そして落ちた陽弥は腕や足の骨が折れており、頭から大量の血が流れ出ていた。

「あれは痛かったなあ…………… 体中が動けなく、頭もぼおっつ

として……………」

すると幼い陽弥の死体に虹色に光る人物が近付いてくる。

「そうだ…………… 死んだ俺に誰かが来たんだ……………」

すると虹色に光る人物は胸からインフィニティソウルを取りだし、幼い陽弥の死体に近付けると、インフィニティソウルが幼い陽弥の死体の胸に飛び付き、体の中へ入っていくと、あちこち折れていた骨が元の状態へ再生し、頭の傷もたちまち治り、息を吹き返した。すると陽弥を助けに、救助隊が崖の上から来ると、虹色に光る人物は急いでその場を立ち去ろうとしたとき、陽弥はその人物の顔を見て、驚く。

「お前は……………！」

その直後、今度は惑星ホライゾンでの映像が現れ、陽弥がジユリオに戦いを挑んでいた。すると陽弥と2つの剣を持つシグムントの装甲をした001とその他にテイラノ、プテラ、プレシオ、最後にネオ・ミスルギ皇国の移動要塞ギガンテスより、6倍大きな巨大ロボット数機がヴァルヴァートル帝国に進攻してくるギガンテスを踏み潰そうとしていた。すると、001に乗っている陽弥とマナが光だし。001を包み込んだ。影で分からなかったが、新しい姿だと分かった直後、映像が消え、陽弥は目を覚ました。

「ハッ!?」

その時、陽弥が急に起きた事に皆は驚く。

「良かったあー！」

「生きてるー！」

陽弥は頭を抑え、状況を確認する。どうやら、インフィニティソウルが陽弥の中に入った時、陽弥とマナが倒れていたと、皆は慌てて、中央病院に輸送されて、現在陽弥とマナを治療していた。幸いにも二人の命は今も健全だったらしいと、

「あれ?……………俺は確かマナからインフィニティソウルを……………そうだ!マナは……………?!」

「ここにいるよ……………」

陽弥の布団の上にマナはスヤスヤと寝ていた。

「陽弥より先に目が覚めて、ずっとお父さんの事を心配していた……………その後、寝ちゃったの……………」

「そっか……………ん?」

陽弥は棚の上にある花瓶を見た。それはかつて陽弥が死んだときに離さず持っていた白い花であった。

「その花……………」

「ん?……………ああ、あれね……………あれはさつきクアンタ人の

故郷ルミナスにしかない花なんだって……………001が言っていた……………」

「そっか……………」

「それと……………信じられないかも知れないが……………お前が眠っている間……………残りのヘルヘイムとアースガルズの護星神が選ばれたんだ……………」

「残り二人の護星神!?……………誰!?」

「実は……………」

すると、ドアから数人の足音が聞こえてきた。そしてドアが開き、二人の男性が現れた。陽弥は二人の男性を見て、驚愕する。

「嘘っ!?!」

「陽弥!?!……………こんな形で会うのは初めてだろうなあ……………」

その人物はかつてケビンによって殺されたシンの実父であり、陽弥の祖父のサム・ギデオンとシンの前世の実兄のアルベルトであった。陽弥はサムを見て、大声を上げる。

「じいちゃん!?!?!」

### 第32話：シンセシス

陽弥は死んだ筈の実祖父のサムを見て、驚愕する。

「じいちゃん！………何で生きてるの!!!?」

「ハア………ヘリオスとセレーネに頼まれたんだ………貴方の御孫さんは次元の狭間にいるって………だから私はお前の見舞いに来たんだ………アルベルトは………現世で活躍している弟に会いたいと………」

サムが説明していると、陽弥はサムの話を受けて、さらに質問する。

「それより！じいちゃんとアルベルト叔父さんが護屋神ってどういうことなんだ!?!」

「詳しく事は私が説明する………時が来たのだ………邪神軍団の復活が………」

アルベルトの言葉にシエパードは驚愕する。

「何だと?!」

「奴等は十分にエネルギーを蓄えつつ復活しようとしていてる………」

「エネルギーを?………何の?」

「人から出る………あらゆる憎しみと怨み、そして怒り、哀しみ、欲望、暴力なんだ………ジュリオはまだその存在に気付いていない………」

「じゃあ！ドウームはそれを分かってダークマターを渡して!?!」  
するとデュランは答える。

「いいえ、それはありません………ドウームが何故ジュリオに大事なダークマターを渡したのでしょうか………」

陽弥達は深く考え込むと、ラルフは分かった様な表情でアルベルトに言う。

「………!」

「何か分かったようだな………」

「なるほど、そう言う事か………俺達は大事な事を忘れてい

た…………… ダークマタージュエルには邪神達の力が封じ込められて  
いる結晶体…………… だけどコントロールは言っていないかつた……………  
つまり、」

陽弥は具体的に答えた、

「…………… クアンタ人であったドウームをダークマタージュエル  
自身が…………… ドウームをコントロールしていたと？」

「そうだ…………… だいたい、残り499体の邪神達をどうやって、  
封じ込めたのかは分からない…………… だけどこれだけは言える……………  
今もジュリオは…………… ダークマタージュエルの呪縛に取り付か  
れていると言っていることだ…………… 」

「確かにそれは言える…………… 」

「アルベルト叔父さん…………… 貴方が言っていた邪神軍団は一体  
何なのですか？」

ラルフが質問するとアルベルトは答えた。

「…………… かつて、各宇宙や銀河、時空、次元には…………… 異  
次元生命体、暗黒生命体、宇宙生命体があらゆる星々を支配してい  
た…………… そして彼らは『旧支配者』と名乗った…………… その旧  
支配者達を率いてきたのは…………… 原初の邪神皇…………… その名  
はクトウルフ…………… 奴には4神柱とも呼ばれる名のある邪神  
皇を従えていた。”傲慢のナトラータホテプ”、”生きる炎のクトウ  
グア”、”漆風のアスター”、”絶海のガタノトア”…………… そして  
名のある他の邪神達と邪神尖兵ロイガーと暗黒生命体イング族、超大  
型要塞魔獣ケートスを引き連れて、あらゆる星々を支配し、旧支配者  
大銀河帝国を樹立した。」

「だ…………… だ…………… 大銀河帝国…………… ？！」

陽弥は驚くとアルベルトは続ける。

「旧支配者大銀河帝国によって、宇宙は滅びの寸前であった時、初代旧  
神…………… 護星神タイタニスが降臨し、たった一人で大銀河帝国に挑  
んだ。」

「たった一人で…………… ？！」

「そして護星神タイタニスは奥の手として、有機生命体と機械生命体



の力を一つにし、神も許されぬ、禁断の生命体……………邪神の天敵『シンセシス』と言う総合生命体へと変わり、クトウルフ達を圧迫させた。」

「シンセシス……………総合生命体……………人間から例える……………と……………人造人間と言うことか？」

ラルフが言うのとサムは頷く。

「その通りだ……………」

「邪神達は護星神、シンセシスを恐れた。そしてタイタニスはシンセシスの全能力を解放し、己の存在ごと消し、超新星の光周波で旧支配者大銀河帝国を滅ぼした。クトウルフ達は光周波によって、一つの結晶体に変わり、タイタニスの超新星で誕生した星『ルミナス』で生まれた原初の種族“クアンタ人”にクトウルフの力が封印されている。ダークマタージュエルを託した。」

「結果……………クアンタ人は間違った使い方をしてしまった……………と……………？」

「ああ、そこからは……………知っているだろ？」

アルベルトの言葉にドミニカが言う。

「何か……………ぶっ飛んだ話になったなあ……………邪神軍団が復活しようとする人のマイナスエネルギーを蓄えているって……………」

「その為に、俺達はヘリオスとセレーネが一時的に生き返らせ、ここに……………アースガルドの護星神である私とヘルヘイムの護星神であるアルベルトと共に復活する邪神軍団……………旧支配者大銀河帝国に対抗するために……………」

するとバルドが左手に右の拳をぶつけると暑くなりながら、興奮していた。

「よっしゃー！これで護星神が9人揃った！」

「だが、まだだ……………一刻も早く、各次元にいるユグドラシル船団を集合させ、大銀河帝国とクトウルフの復活を打開策と阻止しなければ……………それと……………ホライゾンにいるシン達マーメルディア人と同盟を結ばねば……………」

その直後、ユグドラシル9全体に揺れが起きる。

「何だ!?!」

すると揺れがさらに起こり、陽弥達は慌てる。

「一体何が起こったのだ!?!」

その時、病院内の灯りが消え、赤い点滅ランプに変わり、緊急放送が流れる。

『コンデイションコードレッド!!コンデイションコードレッド!!ユグドラシル9に未確認生命体が内部に侵入、保安局及び、各戦闘員は直ちに生命体を排除せよ!繰り返し!コンデイションコードレッド!.....!』

「どうやら、先に奴等が復活したのかもしれない.....」

「奴等?」

陽弥が問うとアルベルトが説明する。

「邪神尖兵ロイガーと暗黒生命体イング族が護星神の力を嗅ぎ付けて襲来してきたのかもしれない.....皆のもの行くぞ!」

《了解!》

陽弥は立ち上がり、アルベルトに敬礼し、直ちにロイガーとイングの討伐へ向かった。

現場に向かうと、戦車型のガルドメイル『ベヒモス』数機がシヨックカノン砲を放ちながら、退避していた。陽弥達はベヒモスが退避する前の場所を見ると、多数のベヒモスと量産型サラマンダーの残骸が散らばっていた。

すると残骸の先に大きく上がる煙の中に巨大な黒い影が浮かび上がり、煙が晴れると、陽弥達は驚愕した。

「こー!.....これが.....邪神尖兵ロイガー.....!?!」

それは他の機体より数十倍大きく、怪鳥の如き翼と鋭い牙と爪を輝かし、大きく不気味な一つ目を持つ、巨大なタコであった。陽弥達は唾然しながら、考えながら思い込む。

「ば！……… 化物だ!!……… こいつが大銀河帝国の兵隊!!  
いくら何でも……… !!」

「巨人達よりデカすぎやろ!？」

「精々、34.3メートルだな……… ありや、」

「考えても仕方がない！殺るぞー!」

《おう!》

陽弥達はそれぞれの武器を取りだし、陽弥はデュアルブレード、ラルフはロングソードとマグナム、キャリーはレイピア、デュランは二丁のボウガン、バルドはギガントアックス、ダーマは両手にミサイルランチャー、ドミニカはランスとシールド、サムはガンブレード、アルベルトはロッドを抜刀し、ロイガーに向かって行くと、ロイガーは口から黒い液体と霧を吐いた。すると液体と霧から三本足と巨大な目を持つ黒い生命体が現れ、陽弥達に威嚇する。

「イング族!」

アルベルトがロッドを振り回しながら、イングを吹き飛ばし、ロイガーへの道を開いた。すると開いた道を閉ざそうとイングが妨害するが、ドミニカのランスがイングの目を突き刺すと、ドミニカはシールドを上にとげると、陽弥とラルフ、キャリー、デュランがシールドの上に飛び上がり、イング達の群れに突っ込んでいった。陽弥のデュアルブレードの刃がイングを切り裂き、ラルフのロングソードから放出される高周波ビームがイングを焼き付くし、マグナムで後方から来るイングを撃ち抜き、キャリーの迅速の如く、レイピアでイングをラッシュし、上空から来る羽を持つイング達に向けて、デュランは光の矢でイングの羽を焼き付くす。

「二番槍！行きませす!」

ドミニカは呪紋で自分のランスとシールドを強化し、光のシールドで迫り来るイングの群れを押し出し、その隙に、バルドのギガントアックスがイング達を風ぎ払い、ダーマのミサイルランチャーから発

射されるミサイルがイング達に炸裂し、サムは呪紋を唱えているアルベルトの邪魔をしようとするイング達をガンブレードで切り裂き、撃ち抜いていた。しかし、ロイガーは黒い液体を吐き、イングを増やす。「数が多すぎるー！」

陽弥が叫ぶと、ロイガーは雄叫びを上げ、威嚇してきた。陽弥達は飛び上がり、急いでビルの屋上の影で身を隠すと、デュランがメソメソになる。

「情けない……………護星神に選ばれた俺があんなデカ物にビビるなんて……………」

デュランは涙を流していると陽弥が怒る。

「デュラン弱音を吐くなよ……………殺る相手を間違えてる……………殺るんなら、イングじゃなく……………奴等を出しているロイガーの方を殺るんだ!……………イングは……………炎、氷の巨人族やエルフとダークエルフ、ドヴェルグ族とアースガルドの兵隊とヴェクタ保安局に任せよう……………!」

「二つだけ考えがあります……………」  
キャリーが良い考えを思い付き、陽弥が問うと、キャリーは説明した。

「何?」

「陽弥さん……………貴方の銀河七聖龍とインフィニティソウルの力を解放し、私達に力を分け与えるのです」

驚愕な事に陽弥は反対した。

「……………ちよつと待て!そんなことをしたら、インフィニティソウルの強大な無限の力でお前らの体が持たなくなるぞ、本気で言っているのか!」

「俺は本気だ……………試して見ようじゃないか?インフィニティソウルの力を!」

バルドがギガントアックスを持ち上げた。

「それが出来るなら、私も賛成!……………とつととやってかき氷食いたいよ!」

ダーマはミサイルランチャーを持ち上げるとデュランもラルフ、ド

ミニカ、サム、アルベルトも立ち上がった。

「良し！やろう！」

「良いんじゃないか？確かにインフィニティソウルの力……………俺も見てみたいからなあ……………」

陽弥は呆れながら、立ち上がった。

「お前ら……………本気で掛かるぞ!!」

陽弥は皆に右手を差し伸べた。

「俺らは……………九つの護星神!!」

皆は陽弥の右手の上に手を重ねていき、叫んだ。

《ガーディアンズ・オブ・タイタニース!!》

陽弥達は武器を抜刀し、ロイガーに向かっていった。

「行くぞ！皆！」

皆はそれぞれの位置へ行くと、陽弥は心の中で念じた。すると陽弥の体の中から、インフィニティソウルが出てきた。するとインフィニティソウルから9体の光の龍が現れ、ラルフ、キャリー、バルド、ドミニカ、デュラン、ダーマ、サム、アルベルトに憑依すると、皆の体が虹色に光だし、全員叫んだ。

《陣形！トリシューラ！》

9人の陣形が星の形を作り出し、光の槍へと変わり、イングの群れを焼き付くし、ロイガーの体を突き抜けた。ロイガーは苦しみの咆哮を上げると、溶けていき、やがて、骨へと変わっていった。陣形トリシューラを終えた陽弥達はインフィニティソウルの方に耐えれなく、倒れていった。

「ざまあ、見ろ……………！」

陽弥はロイガーの骨へ指をグーを出し、そのまま倒れた。

それから二日後、病院内にいる陽弥達は……相変わらず、元気であった。

「いやあ、あれは超痛かったー♪」

全身包帯だらけのダーマは笑っていると、陽弥が怒り出す。

「いやあ、じゃっないだろ?! スゲエ痛かったんだぞー!」

「でも、インフィニティソウルの力が彼処まで来るとは、想像以上だよ! 何かこう、全身に力がみなぎるって感じだよ!」

「幸いに、じいちゃんとアルベルト叔父さんが耐えていたから、倒れた俺らを救助してこうやって7人揃って、病院行きになったからなあ、」

「ハハハ、確かに……でもしようがないよ、ああでもしなければ、ユグドラシル9は壊滅だったよ……」

包帯だらけのラルフは光が指す窓を見て、言うと言陽弥も言う。

「確かに、と言うか邪神尖兵があんなにデカイなんて聞いてないぞ、001は知っていたの!?!」

見舞いに来た001が陽弥の質問してきた事に知らん顔で、ごまかす。

「……………何のことやら?」

「お前一瞬! にやけたろ!?!」

「知らない……………」

「テメエ!、あつ!……………」

陽弥は立ち上がると、何処かボキリと言う音が鳴り、倒れた。サムは陽弥の姿を見て、呆れる。

「やれやれ、バカ孫が……………ん?」

すると陽弥の目の色と肌が一瞬、緑に光る電子コードが浮かび上がった、

「今のは……………まさか!?!」

サムは陽弥を見て、驚く。

その頃、何処か知らない闇の空間で、四つの結晶体は何かを話していた。

※注意……ここからは彼等の言葉が分からなくなりますので、翻訳します。

「……………ザナ……………ボルガ……………ロイガー……………イング……………ギデバデイ……………タ……………イ……………

タ……………ニ……………スウウウウ……………タ……………!!!」

(ロイガーとイングがタイタニスに殺られた!!!)

「アギー!!……………シラクタモール!!……………タ……………イ……………ニスウウウウ……………!!!」

(あの忌まわしき護星神!!憎い!!タイタニス!!!)

「タイ……………タニス……………シヤラソー……………

ザ……………ガーディアンズ……………!？」

(と言うことはタイタニスを受け継ぎし、護星神たちか?!)

「ザムザザ……………ギグラ……………ゴブウーグ……………

ル……………ジガザヤードウ……………アヴァロン……………

(そうだ……………一刻も早く、復活しアヴァロンに行かなければ……………)

「ポストル……………クトウグア……………?」

(どういう事だ、クトウグア?)

「マシーナ……………ウイズリー……………ジュリオ……………

オ……………イル……………ダークマタージュエル……………

バドソ!!」

(アヴァロンにいるジュリオが我々の源であるダークマタージュエルを持っているのだ……………!!)

「『ダークマタージュエル!!』」

「ボドマズイール……………ヤード……………クトウルフ……………」  
クトウルフ・ダーバ・エンペラー!!」

（原初の邪神皇クトウルフ様を復活するには、必ずダークマタージュエルが必要だ!……………クトウルフ様の為に!）

「クトウルフ・ダーバ・エンペラー!!」  
（クトウルフ様の為に!!）

闇の空間で蠢く四つの結晶体の中に潜む影は何やら不気味な事を考えていた。

数日後、ユグドラシル9に次々と各ユグドラシルが集まってきた。陽弥はそれを見て、啞然する。

「こんなに集まるんだ……………」

「ユグドラシル9は各次元に調査をしていたユグドラシル船団の一つなんだ……………そして……………」

すると最後にワープして現れたのは各ユグドラシルと違い、数百倍大きく、惑星型要塞アヴァロン並のシリンダー型の要塞が現れた。

「デカツ!」

「あれがユグドラシル船団の中央センターで、これから俺達の総本部……………『ユグドラシル1』だ……………」

「惑星並みのデカさを持つてるじゃん!」

すると各ユグドラシルがユグドラシル1に集まり、エンジンの付け根の部分に連結していく。

「連結し始めている!」

「ユグドラシル1が来たことで、各ユグドラシル船団がユグドラシル1に連結していき、そして大型惑星型要塞にも負けない超大型シリンダー型の要塞になる」



「完全に総戦力の結晶体が集まった塊だな、こりゃ……………」

「おつと、そろそろ、大統領の演説が始まる……………」 陽弥、俺達も聞こう」

「ああ、」

陽弥達はユグドラシルの大統領の演説を聞いた。内容は、これからユグドラシルはこの次元を離れ、ネオ・ミスルギ皇国の本拠地『アヴァロン』へと向かい、原初の邪神皇クトウルフの復活を阻止すると、  
「とうとう……………」 この次元を離れることになるなんてなあ……………」

ラルフと陽弥は空を見上げながら、語り出す。

「そうだな、俺はいつ頃ここに滞在していたんだろう？」

「1668年……………」 現在の陽弥さんはその歳だよ？」

「そうかなあ、お前だって、2200歳だろ？」

「まあね……………」

「ここにいて色々あったなあ……………」

「そうだね、陽弥が来てから、凄いことになるし、シグムントの正体がクアンタ人によって作られた人造生命体、そして未来から陽弥の娘が来る……………」 どれも信じられないことだよ……………」

「ハハハ」

二人は仲良く、笑っていると、001が陽弥を呼んだ。

陽弥は001に連れられ、惑星ルミナスの大地に連れてこられた。

「陽弥……………」

「シグムント？」

「来てもらいたい場所がある……………」

「何だ？」

苔で生い茂っている遺跡の門が開き、陽弥は遺跡の中へ入った。

「シエパードはなあ……………こここの存在に薄々気づいていたのだ……………」

「シエパード艦長が!？」

「ああ、そして……………」

明かりが見えてくるとそこには、湖がポツンとあり、その湖のど真ん中の上に台座に突き刺さった青と赤に別れた2本の剣が突き刺さっていた。

「あれは!？」

「かつて……………旧護星神タイタニスが遺した2本の剣だ……………名を七星剣と魔剣グラムだ……………」

「七星剣と魔剣……………」

「さあ、抜き取るが良い……………シンセシスの覚醒に誓く、誰かを護りたいお前なら……………タイタニスの剣を使える……………」

陽弥は疑心暗鬼になったが、心の中で覚悟を決めた。

「……………分かった……………」

陽弥は湖を歩き、七星剣とグラムが突き刺さっている台座に辿り着くと、陽弥は2本の剣を持つと、二つの剣の刃が光だし、陽弥陽弥渾身を込めて、引き抜き、七星剣を天高く掲げた。すると陽弥の瞳の色が緑に染まり、001は2本の剣が抜けたことに驚く。

「剣が……………主と認めた……………」

すると001の体が光だし、001の皮膚が機械へと変わり、虫のような角が生え、純白と深緑のプロテクトアーマーと袖付きの装飾が装備され、半分機械、半分生命体の持つ、生命に満ちた者へと生まれ変わった。

「シグムント?」

陽弥が声をかけた瞬間、001は膝をついた。

「マスターよ……………我に新たな名を……………」  
「え?!」

「七星剣と魔剣を抜きし時、我はお前に忠誠を誓い、封印する力から滅びの力に変わる……………陽弥……………いえ、マスターよ……………我に新たな名を……………」

「新たな名……………分かった……………」

陽弥は考え、良い名前を思い付いた。

「お前の名は……………シグムディア……………今日からお前の名は001ではなく、新しい名……………その名もシグムディアだ……………!!」

すると台座が急に変形し始め、巨大なコンテナになると中が開くと同時に、何かのパーツが陽弥の方に流れ込み、陽弥の体に纏い、シグムディアと同じ色を持つ西洋の鎧を着た様な姿になった。（鎧は『デイメンシヨン・ゼロ』と言うカードゲームに出てくる『聖騎士ホーリー・レイピア』の甲冑を陽弥が装着している感じです。）手には何かチップを持っていた。

「それはかつて、クアンタ人が遺した聖なる鎧だ……………マスターが身に付けていて下さい……………」

すると森の方から、木が倒れる音がすると、森の中から、機械の体をした竜の王者と空から翼竜が降りてきて、湖から首長竜が現れ、陽弥は驚く。

「何だあれは?！」

「古の龍たちよ……………今ここに……………2代目タイタニスが誕生した!……………旧支配者大銀河帝国からの混沌の支配を断絶し、真なる平和と自由と解放の為に共に戦おう!!」

シグムディアが背部に収納していた陽弥と同じ剣を引き抜き、上に掲げると、三体の古代機龍達は吼える。

「何か……………凄いいことになったなあ……………」

シグムディアが飛翔形態に変形し、陽弥はフェイスガードとバイザーを起動し、シグムディアに乗り込み、三体の古代龍達と共に皆の所へ戻った。

数時間後、陽弥達はそれぞれの機体に乗って待機していた。バルドとダーマは巨人族専用のバトルアーマースーツを着用しており、ドミニカは小人専用のバトルスーツを着用していた。

「全員！配置に付いて!!」

陽弥達はカタパルトに発進準備できる様、待機された。

「システム！オールグリーン！」

陽弥は最後にシグムディアのシステムチェックを行うと、持っていたチップを取りだし、陽弥の耳元にあるパーソナルデバイスに差し込むと、バイザーにアクセスされ、現れたのは、緑色に発光している赤いプロテクトアーマーを装備したプロセアン人のAIであった。

「どうも、陽弥様…………… 私はヴィクトルー…………… プロセアンの祖先に作られし、VIAです。」

「ヴィクトルー、これからの任務について、教えてくれ」

「はい、現在、多民族次元革命連合はホライゾンの民衆が囚われている銀河牢獄ゾル・ドゥーに向かっております。」

「よし、出来るだけ、シグムディアと俺の援護と敵の情報やシステムへのハッキングと情報収集を頼む」

「分かりました、陽弥様」

ヴィクトルーは陽弥のバイザーのシステムに入り込んだ。陽弥はシグムディアの後部座席に座っているノーマルスーツを着用したマナを見て、安全確認する。

「マナ…………… are you ready? (準備は良い?)」

「all right♪ (大丈夫♪)」

「天才だな、マナちゃんは……………!?!」

五歳児なのに英語をペラペラと喋るマナを見て、陽弥は啞然する。

「本当にマナをゾル・ドゥーに連れていかせるのか？」

「そうです……………ゾル・ドゥーにはまだ、マスターの仲間が幽閉されているのです……………」

「誰なんだ……………？」

「アジマス人を造りし……………その者はアヴァロンと呼ばれています……………」

「アヴァロン!?……………あれの創立者?!」

「そうであり、そうでないのです……………彼は今も銀河牢獄に囚われているのです……………アヴァロン……………ですが、真の名はこう呼ばれています……………機械生命体の神……………」

『機神』オ

メガプライムス』と……………」

「オメガプライムス……………」

そして、各ユグドラシルを連結したまま、ユグドラシル1は次元の狭間から消え、地銀河牢獄ゾル・ドゥーに向けて、ワープした。

### 第33話：新たなる預言と黙示録

その頃、陽弥達が次元の狭間から出た影響により、各宇宙やホライゾンの時の流れが動き始め、シンはペルシウスを起動し、ペガシオーネスに乗馬し、陽弥を助けに行こうと次元跳躍を発動するが、  
「うおおおおおお〜!!!」

次元跳躍を発動するたびに、元の位置に戻されていた。シンは何回も次元跳躍をしていた。

「お父さん！もう止めて！」

「何故だ!?……………何故だ!?何故だあ!?!」

そして、ペガシオーネスの次元跳躍に使うエネルギーがとうとう、空になってしまいシンは絶望した。

「何故……………次元跳躍を発動しても……………元の位置に戻されるんだ……………?!」

シンを慰めにヒルダが駆け寄る。

「大丈夫……………そう簡単に死ぬような息子じゃない……………」

「じゃあ！何なんだよ!?!」

「え?!」

「ジュリオは言ったんだ！陽弥は死人だって！」

「どう言うこと!?!」

「何か知っているんだ……………！陽弥の事を……………」

するとシンの表情が変わった。

「……………ひよつとしたら!」

「何を？」

「15年前……………陽弥が崖に落ちた事は知っているよな!?!」

「ああ、確か……………ルナが知らせてきて、急いで救助隊に応援要請をして、陽弥を救出して、マジギーに検査した結果……………何も以上がないと……………まさか?!」

「そのまさかだよ!……………」

「じゃあ……………陽弥は崖に落ちた時点で……………死んでいたって言うことか?」

「……………」

「まさかあ?!…………… そんな訳……………」

その直後、シンはある人を思い出す。

「どうした?」

「…………… 提督!」

シンは急いでジャヴィックがいるグラシオン連合へ向かった。

ジャヴィックは部屋の窓からグラシオン連合の景色を眺めているとシンが怒鳴りながら、ドアを破壊して、現れた。

「ジャヴィック提督!」

シンはジャヴィックに近付き、胸ぐらを掴む。

「お前!最初から分かっていたのか!?!」

「……………」

「答えろ!」

「…………… そうだ」

「っ?!」

「君の息子、陽弥は…………… 確かに崖に落ちて死んだ……………」

シンはジャヴィックに殴ろうと拳を振り上げろうとしたとき、

「クッ!」

「止めて!お父さん!」

ルナが止めに入ると、ジャヴィックは話の続きをした。

「だが……………」

「っ!?!」

「まだ…………… 陽弥は生きている……………」

「何!?!」

「陽弥はまだ生きている……………」

「…………… 今、陽弥は…………… 俺の息子は何処にいる!?!」

「銀河牢獄ゾル・ドウーだ……………」

「そうか！そこに行けば陽弥に！」

「いや、駄目だ……………」

「っ!……………何故なんだ!?陽弥は……………あの白いヒステリカ

に連れ拐われて、牢獄に……………!」

「それは違う……………」

「え!？」

「彼はもう……………人間でも死人でもない……………何故なら彼

は……………シンセシスになつたからだ……………」

「シンセシス……………?!」

「総合生命体と言っても良い……………来なさい……………見せた

いものがある……………」

シンはジャヴィックに連れられ、ある場所へと向かった。

ジャヴィックに連れてこられた場所はグラシオン連合の研究所であった。するとそこに現れたのは、白衣を着たリュウガであった。

「提督、お久し振りで御座る」

「うむ、リュウガも知っているだろうな？」

「ええ、」

するとジャヴィックは白いシートで隠された物を見せ、するとジャヴィックがシートを剥がすと出てきたのは、

「これだ……………」

「これは!？」

それはかつてエミリアの祖父が乗って来たときされるクアンタ人のマザーシップであり、あちこちに損傷していた。

「エミリアと言う姫君のその実の祖父が乗ってきたときされるクアンタ人のマザーシップだ……………そのデバイスにアクセスしたところ……………彼が語った預言には続きがあつたのだ……………」



見なさい……………」

ジャヴィックがマザーシップのコックピットのシステムをオンにすると、画面から何かの絵文字と絵が映像として、映し出された。

「銀河が旧支配者の混沌の闇に覆われしとき、9つの世界からそれぞれの世界や星を護りし、神々が降臨する……………」古の龍を纏いし、シンセシスとなつた星を護りし光と闇と無を司りし神と禁断の人造生命体と古の三大龍……………」そして天掛ける要塞機神と共に、旧支配者の帝王を滅ぼすだろう……………」

「それと陽弥がどういう関係なんだ？」

「さつきも言ったように、陽弥はシンセシスとなつた……………」そして……………」

ジャヴィックの言葉にシンは驚く。

「神になつた……………」?!」

「その通りだ……………」今の陽弥はもう……………」人間でも死人でもない……………」言えることは一つ……………」神なのだ……………」

「陽弥が……………」神……………」?!」

「そうだ……………」そして陽弥はかつて旧支配者に立ち向かつた先代旧神の使命を継いでいるのだ……………」二代目として……………」

シンはジャヴィックの語つた言葉に啞然する。

「どうだ?……………」私の知っていることはこれだけだが?」

「あ……………」つまり、今、陽弥は銀河を護る神として、ゾル・ドゥーに向かつているのか?」

「そうだ……………」究極の仲間達を引き連れて、」

そしてシンはさらにジャヴィックに質問した。

「思つた事がありますが……………」旧支配者つて何だ?」

「それは……………」

ジャヴィックはシンに奴等の事を説明し、数時間後シンは研究所から出ると暗い表情で言う。

「嘘だろ……………」!?!」

するとシンの元にヒルダとルナが駆け付ける。

「シン！何か分かったか!？」

「ああ、…………… 陽弥は今、ゾル・ドゥーにいるって……………」

「よし！今すぐ、ペガシオーネスの次元跳躍のエネルギーが回復したら、すぐに！」

「待ってくれ……………！」

「?!」

「陽弥をそのままにしてくれ……………」

「は!？」

「あんた何言い出すんだ!？」

「提督が言ったんだ…………… アイツには、俺らよりもデカイ使命を果たそうとしている……………」

「どういう事なんだ!？」

「…………… アイツはもう…………… 神なんだ……………」

シンの放った言葉にヒルダとルナは驚愕する。

その頃、各ユグトラシルは銀河牢獄ゾル・ドゥーのメインベースを取り囲んでいた。

「さあて……………！各ユグドラシルは銀河牢獄の本拠地を囲んだ!…………… 全艦！作戦開始!」

各ユグトラシルから多数の戦艦がメインベースへと向かうと、ベース付近の地面から対空砲が起動し、革命連合艦隊に向けて、発砲を開始した。

「対空砲が起動したわ!」

「全艦！ウルティマ砲発射!」

艦隊の主砲から黄色く輝く光線が発射され、対空砲を破壊している。

「対空砲！沈黙確認!」

「ガルドメール隊！出撃!」

各艦の艦長達が命令すると、艦隊のカタパルトから数十機のポッドが射出され、それに続き、核爆弾を乗せた輸送船も発進した。すると射出されたポッドがシリンダー形状になり、中から数百機に及ぶガルドメイユルが大型シールドとトライデントランサーを構え、”陣形ファランクス”を作った。すると陣形ファランクスの横に陽弥のシグムディアが通り過ぎ、メインベースへと向かっていった。

「ゾル・ドゥーの地下までの高さは800kmもある！蜂の巣のようになっており、牢獄の数は500億以上に達しており、囚われている種族や奴隷及び、囚人含めて約1億5万人いる！阻害する敵を排除し、大型救助船や小型救命艇で、囚われている人達を救助した後は、ゾル・ドゥーを小型の时限核爆弾で、破壊する！」

そして陽弥がガルドメイユル隊に命令した。

「第一歩列！第二歩列！撃てえ!!」

ガルドメイユル隊のトライデントランサーから無数のビームがベースに目掛けて発射され、付近で警戒していたネオ・ミスルギ皇国艦隊と兵隊及び戦闘機や量産型ギムガルムが破壊されていくが、ネオ・ミスルギ皇国も反撃を開始した。陽弥はシグムディアのハイパーバビームライフルを手に、次々とギムガルムを破壊していく。すると上空や地上から多数のネオ・ミスルギ皇国軍の戦車や戦闘機が陽弥を攻撃してくる。

「ヴィクトルー！ターボレックス！プレライザー！プレジスタクセラ！ラー！を起動してくれ！」

「了解！」

ヴィクトルーの目が光だすと、旗艦アンブロシアのカタパルトから、三体の龍達が降下してくると、ターボレックスが背部にある二問のメガビーム砲を戦車に向けて、発砲した。

「オラア!!陽弥様を邪魔する奴は、俺等が許さんぞ!!チーム ダイノシグナルズ！駆逐形態に変型し、陽弥様を御守りせよ!!」

「おう！」

「OK！」

「チーム ダイノシグナルズ！フォートレス形態!!タイプー！」

ターボレックスは二問の巨砲を持つ戦車に変形し、プラライザーは高速大型戦闘機へととなり、プレジストアクセラーは潜宙艦へととなり、陽弥を阻む敵に向ける。

「砲撃！用意！」

そして陽弥のシグムディアがサーメットブレードを展開して、敵がいる方向に向けて叫んだ。

「撃てえ！」

ターボレックスの巨砲とミサイルコンテナからメガビームとミサイルとプラライザーのウィングレーザーとプレジストアクセラーの潜宙魚雷が一斉に発射され、メインベースのシャッターごと敵を破壊すると、メインシャッターに巨大な穴が空いた。

「ゾル・ドゥー牢獄に繋がる出入り口へ突入！囚われている人達を解放し、救助せよ！」

陽弥のシグムディアに続き、ラルフとサムとアルベルトのプロトヒステリカとキャリー達がメインシャッターの中へ入っていく。中に入るとそこは蜂の巣のように様々牢獄が下の奥まであった。

「何処まで通じてるんだこれは……………？」

するとマナが大声で陽弥を呼ぶ。

「パパ！あっち！」

「!？」

マナの指差す方向に陽弥はマナを見て、確かめる。

「あっち？」

「あっち！」

「良し！」

陽弥はシグムディアの出力を最大に上げ、マナの差すエリアに向かい、到着すると、シグムディアは陽弥とマナを下ろした。陽弥は「ブーストライフル」レヴナント”を持って、ヴィクトルーに命令する。

「ヴィクトルー、建物内をスキャンしてくれ、」

「了解」

ヴィクトルーは命令通りスキャンし、数秒後で終えた。

「建物内に、多数の生態反応を確認」

「全く、この施設には妨害電波も放っているのかよ……………此方は最新式で、良かった……………」

陽弥とマナが歩いていると横の牢獄から猫の亜人の男性が陽弥に叫ぶ。

「あんた！どうやって出られたんだ!?!」

「ん?」

「助けてくれ!俺達は、ネオ・ミスルギ皇国軍によって、新しい奴隷されるんだ!頼む!助けてくれ!」

「俺達も!助けてくれ!」

「子供や老人もいるの!助けて!」

「助けてくれ!」

それぞれの種族達の大声が奥からも響き渡ると、マナが陽弥を見る。

「パパ!」

「ああ!言われなくても、分かっている!ヴィクトルー!このエリアの牢屋をハッキングしてくれ!」

「了解!」

ヴィクトルーの体が緑色に強く発光し、陽弥が地面に手をかざすと、緑のコードが辺り全体に侵食した。すると牢獄の扉が開き、収容されていた種族達が喜びを上げる。

「開いた!開いたぞ!」

「アタシ達!助かるんだわ!」

「自由だあああ!!」

するとさっきの猫の亜人の男性が陽弥に握手してくる。

「本当にありがとう!私はアニマノイド星の住む、ラークです!」

次に頭が魚で体が人間のような種族も陽弥に握手してきた。

「俺等は惑星オーシヤルスに住む、ホルディオだ!」

次は昆虫の様な虫人も握手してきた。

「私はルトル星のビルトルスと申します」

最後に、鳥人の種族が陽弥に深く御辞儀する。

「俺達は、イーグル星雲にある惑星フェニキスに住む、オルトリスで

す」

「俺は陽弥・ギデオン、訳あつて種族銀河同盟から多種族次元革命連合に入っている………で、こっちが俺の娘のmanaだ………向こうに俺たちの仲間が救助船や救命艇が待機されている。そこに行け………！」

「ありがとうございます！」

陽弥が入ってきた所から救助船がハッチを開け、待っていた。たくさん種族達は急いで救助船へと向かっていった。

「さて、そろそろオメガプライムスを探すぞ………つて、mana?」  
manaが牢獄の壁をじつと見ていた。するとmanaが奥の壁に指を指す。

「パパ!………ここ!」

「え………?!」

陽弥は壁に触れると微かだが、壁の表面の温度が低かった。

「この壁の向こうに………オメガプライムスが………?!」

「どうやら、この壁には特殊な擬装システムとスキャンされないジャミングを放っております」

「そして………この壁自体がフォドラニウムで、できている………」

陽弥が壁に集中していると、manaが壁の隅っこから穴を開け、配線を繋いでいた。

「何やってるの、mana?」

「前にパパが直結の仕方を教えてくれたの、」

「嫌々、いくらなんでも子供にそれは無理………」

「出来た!」

すると壁が変形し、下へ繋がるエレベーターに変わった。陽弥はあっさり出来た事に目が飛び出たまま、驚いた表情でmanaを見て、茫然と唾然をしていた。

「………嘘だろ………」

「?!?!」

ヴィクトルも驚き、陽弥は唾然しながらmanaの頭を撫でる。

「スゲエ………mana、お前………もしかして、超天

才……?!」

その時、陽弥の後方から、誰かが走ってきた。

「っ?……誰だ!」

するとフードで顔を覆い隠している女性がレーザーナイフで陽弥に斬り付けてくる。陽弥はその人の姿を見て、思い出す。

「お前は!」

「あの時の!」

すると少女の背中から緑の羽が出てきて、陽弥は少女の羽を見て、さらに思い出す。

「羽がある!………と云うことは、お前がネオ・ミスルギ皇国で噂になっていた羽を持つ少女か!」

すると少女はレーザーナイフを構え、突進してきた。

「死ね!」

陽弥は腰部から高周波ビームナイフ 通称『ランボー』を抜刀し、少女のレーザーナイフを防御する。

「パパ!」

「マナ!隠れてろ!」

マナは柱の影に隠れた。陽弥は少女を振り払い、戦闘ポーズをする。すると少女は高速球並の速さで陽弥に攻撃してきた。

「ゴイツ!………速い!」

幸い、陽弥が装着していた聖なる鎧がレーザーナイフの刃からを護ってくれたいた事だ。すると少女は舌打ちをし、陽弥に近付くと、手から緑の粒子球が出てきて、それをゼロ距離で陽弥に目掛けて、放った。

「貫ったあ!」

粒子球が爆発し、少女は笑うが煙の中に影が見えてきた。

「何っ?!」

煙が晴れると陽弥の手元に、魔剣グラムが抜刀されており、少女の粒子球を防御していた。

「危ない、危ない………主神オーデインの神槍をも立ち斬ったこの魔剣グラムが無かったら………」

少女は陽弥が持っている魔剣グラムを見て、驚く。

「魔剣グラムだと!?……………と云うことはお前が!？」

「何だ?……………魔剣グラムを知っているのか？」

陽弥が質問を言い返すと、少女はレーザーナイフをしまうと、陽弥に向かつて、走ってきたと思いきや、スライディングして、とてつもない土下座をしたまま、深く陽弥に謝罪する。

「すいませんでした〜!!」

「……………え?!」

「まさか、お前が護星神だったなんて……………!」

「護星神!?……………知っているのか……………?!」

「ああ……………!何故なら私は……………」

少女は顔を覆い隠していたフードを脱いだ。その少女は深緑に満ちた綺麗な髪で、エミリアと同じ翡翠の瞳を持っており、エミリアと同じ面影があった。

「深緑の髪の毛……………エミリアと同じ瞳……………まさか!？」

「私はエスメラルダ・レグレシア・クアンタ……………クアンタム帝国第102世の女帝の第一皇女でもある。」

「レグレシア・クアンタ!?……………と云うことはお前……………エミリアの?!」

「エミリアは……………私の実の妹だ……………そして私はエミリアの……………優位の実姉だ……………」

陽弥はこの時、目の前にいる少女……………エスメラルダがエミリアの本当の姉であり、家族だと実感した。

「……………マジかよ?!」

そして陽弥はエスメラルダに質問をした。

「何でエミリアの実姉が……………ここに……………?!」

「家の糞親父を止める為だよ……………」

「親父を!?お前のお父さんも……………もしかしてクアンタ人?」

「ああ、名前はエヴァン・レグレシア・クアンタだ……………」

その名に陽弥は混乱した。



「……………え?……………ちよつと待つて、今なんて?」

「だから、エヴァン……………」

「エヴァン……………エヴァン……………嘘!?!」

陽弥はエヴァンの名で心当たる人物を思い出す。

「エヴァンつてまさか……………四將軍の一人『永遠のエヴァ』の事か?!」

陽弥が答えた直後、エスメラルダの後方から、別の返事が来た。

「その通りだ……………!」

「っ!?!」

陽弥とエスメラルダは振り向くと、エヴァと漆黒と紫のプロテクトアーマーを装着したエミリアがいた。

「親父!?!」

「エヴァ!?!……………何故ここに?!」

「銀河牢獄が襲撃されていると聞いて、四星騎士達と共に駆け付けた……………そして、」

その時、エミリアが消え、陽弥の後方に回り込み、両腕に装備されている紫に発光するレーザーブレードを斬り付けてきた。

「パパ!後ろ!」

マナが叫び、陽弥は魔劍グラムでエミリアのレーザーブレードを防御する。

「まさか……………生きていたとは……………」

するとエヴァは既に陽弥の右方に回り込んで、陽弥の横腹目掛けて、渾身を込めた左の拳をぶつけてきた。

「勝負あ……………」

「残念だが!」

陽弥の横腹を見ると、エヴァの渾身を込めた筈の拳に亀裂があり、段々と左手が崩れていった。エヴァは左手が無くなったことに、驚愕する。

「何っ!?!」

「もう、そんなちやちな攻撃は効かないぞ!」

陽弥は腰部から七星剣を口で抜刀し、エヴァの右目を切り下ろし



!!……………あの二人の父親としての、恥を知れ!!」

陽弥はエヴァから離れ、戦闘体制をすると、エヴァも戦闘体制をかまえた。

「面白い……………来るが良い!!」

陽弥は手のひらを太陽に翳し、叫んだ。

「シグムディア!!」

すると太陽の日光から飛翔形態のシグムディアが飛来し、陽弥はシグムディアに乗り込み、駆逐形態へと変形すると、エヴァの後方から黄金のギムガラムが現れ、乗り込み、二人は叫んだ。

「決着を付けるぞ……………陽弥・ギデオン!!」

「挑むところだ!!……………エヴァアアアア!!」

シグムディアの腰部から七星剣と魔剣グラムを抜刀し、エヴァはデュアルビームソードを展開し、二人の戦闘が始まった。

### 第34話：新たな力

旗艦アンブロシアでは、シエパード艦長が全艦隊指示を出していた。

「状況はどうなっている!?!」

「全種族及び、奴隷や囚人の保護と輸送が完了いたしました!後は小型核爆弾を基地内に設置するだけです!」

「良し!」

すると右翼からとてつもない爆音が響いた。シエパード達は双眼鏡で見た。

「何だ..... あれは?!」

その方向にいたのは、シグムディアとエヴァが互いの剣を振り回している光景であった。

「グッ!!」

陽弥は怒鳴りながら、エヴァに質問する。

「エヴァ!何であんな糞皇帝に味方したあ?!自分の娘があんな風になっっているんだぞ!」

エヴァは陽弥の言葉に切れる。

「今の言葉を取り消せ!!..... 私にとって、ジュリオ皇帝は..... 恩人なのだ!!」

「恩人?!..... あんな奴の何処に優しさがあるんだよ!..... 奴は母さんや仲間達をサラマンディーネさん達を殺すための道具に使用していた!さらにメイルライダーではない者は皆殺しにしようとしていた!..... 子供も含めて!!..... エヴァ!今ならまだ間に合う!..... だか

らエミリアやエスメラルダさんの所に戻ろう！……………  
な、？」

「……………出来ない」

「え……………?!」

「私も……………お前と同じ死人だから……………」

エヴァがシグムディアを蹴り飛ばすと、シグムディアは間一髪の所で、体制を整え、陸に着地した。

「死人?!……………どういう事なんだ!？」

「私の体の中にある臓器は全部ジュリオ様によって作られた人工臓器だ……………アヴァロンが再起動時に凍り付いて眠っていた私は目を覚ましたが、同時に体内の宇宙病の侵食が再稼働し始めたのだ……………既に私の臓器は死んでいる……………残っているのはジュリオ様によって作られた人工肺と心臓と肝臓だけだ……………そんな俺を助けたジュリオに私は忠誠を誓ったのだ……………」

「……………それだけか？」

「何？」

「それだけの理由で、二人をあんな危険な目に会わせて……………エスメラルダさんが言っていたぞ……………糞親父を止めに来たって……………結果!……………エミリアはダークマタージュエル……………嫌、クトウルフの力で操られている!……………エミリアを見てみる!……………自分の娘があんな風に無口で、瞳の輝きも失って、綺麗な髪も緑から、黒に変色した!……………お前はそんなんで良いのか!!？」

「ああ、それで良いとも……………!」

エヴァの下らない戯れ言に陽弥の頭の何かが取れ、そしてその取れた物が弾けとんだ。

「仕方ない……………本気で俺を怒らせてしまったようだな……………  
陽光神龍! 黒陽神龍!」

陽弥が叫ぶと、それぞれの腕から、陽光神龍と黒陽神龍が現れ、陽弥は手のひらを空高く、掲げた。

「見せてやる…………… シグムディアの新たなる力……………」  
「フォルムチェンジを!!」

二体の龍は咆哮をすると、シグムディアに憑依した。右腕と左腕が陽弥と同じく、光と闇の腕になっており、背部から虫の羽の様な光と闇のビームウイングを放出していた。

「極限の光と極限の闇を一つに…………… シグムディア・イレイザー」

その光景にサムは驚く。

「陽弥の左腕に宿っているドウームの極限の闇と、陽弥の右腕に宿っている極限の光が一つになった……………!」

するとシグムディアがエヴァに話し掛けてきた。

「もう…………… お前は我に付いてこれなくなる…………… さらに手も足も出なく…………… なる!!!」

シグムディアがとてつもないスピードで消えた直後、エヴァの目の前に現れた。

「っ!?!」

エヴァは目でも、気配すら分からなかったシグムディアに驚くと、シグムディアが光の腕から複数の閃光の稲妻を発生させ、エヴァに放った。

「ライトニング・プラズマ!!」

複数の閃光の稲妻はジグザグに移行し、エヴァに直撃した。エヴァは上空に舞い上がり、シグムディアのライトニング・プラズマを回避した直後、シグムディアが闇の手を地面に掲げた。

「スカーレット・イーター!!」

するとエヴァの真下から黒い穴が現れ、その穴から赤黒い無数の手や口が伸長してきて、エヴァの足に掴んだり、食らい付くと、赤黒い無数の手や口がエヴァを地面に叩き落とした。

「何っ!?!」

「まだ終わらないぞ!!…………… 俺の力と怒りは…………… こんな物じゃないぞ!!」

するとシグムディアの装甲が段々と変色し始めた。

「フォームチェンジ!!」

陽弥が叫んだ直後、シグムディアから蒸気が発せられ、エヴァは蒸気のせいで、目に水が溜まる。エヴァは目に付いている水を払い落とした直後、払っていた手に付着していた水が凍り付いた。そして、エヴァの目の前にいる陽弥は天高く手を上にあげ、叫んだ。

「ムスペルヘイム!!……… ヨトウンヘイム!!」

右の装甲から、火炎の波と左の装甲から雪の結晶を運ぶ吹雪が発生すると二つの環境がシグムディアの装甲に憑依し始めると、ダイノシグナルズのターボレックスがシグムディアに走ってきた。するとターボレックスの体が分離し始め、シグムディアの肩や頭部、胴体、腕、脚や背部に合体した。そして合体し終わると、陽弥はエヴァを睨む。

「業火と凍結の巨人の世界を一つに……… シグムディア・クロスタイタン!!」

シグムディアの右の装甲が炎のような紅とオレンジに変色し、左の装甲が雪原のような、白と水色に変色し、シグムディアの肩にはターボレックスの頭骨、胴体にはターボレックスの胴体であるディフェンスプレート、腕や背部にはターボレックスのメガビーム砲、脚にはターボレックスのキャタピラ、そしてターボレックスの尻尾の先端部に付けられていた粒子バルカンがシグムディアの頭部の左右に付けられていた。エヴァやテスト達は驚くと、シグムディア・クロスタイタンのキャタピラが動きだし、エヴァに向かって、突撃してきた。

「ギガントフレイムトマホーク!」

シグムディアの両手に変形し、火炎を放ち、装飾をした斧が展開され、エヴァに降り下ろしてきた。エヴァは防御するが、シグムディアの圧倒的なパワーに押されていた。

「コイツっ!……… さっきとパワーが違う!?!」

エヴァはシグムディアに攻撃するが、何も反応がなく、まるで攻撃が全く効いていないような感じでもあった。

「ギガントフリーズランチャー!」

シグムディアの肩に装着されているターボレックスの頭骨の口か

らフリーズミサイルが放たれ、エヴァは着弾する前に回避した直後、エヴァの左足が凍り付いた。

「グッ!!」

エヴァはシグムディアのフリーズミサイルを回避しながら、シグムディアに近付き、腕を潰そうとシグムディアの腕に触れた直後、エヴァの手が段々と溶け始めていく。

「俺の体に触れて見ろ!..... 燃え盛る程の5000万度の炎と凍てつく程のマイナス50万度零度の両方がお前に地獄の激痛が待っているぞ.....!!」

「ほぎけえええ!!」

エヴァはシグムディアから離れ、六本の腕を展開し、ビームバスターを撃ちまくる。

「フォルムチェンジ!!」

陽弥が爆炎の中で、叫んだ。

「アルブヘイム!!..... スヴァルトアルブヘイム!!」

シグムディアの体から、黄緑と深緑に別れた粒子が集まると粒子から風が吹き荒れる。そして合体していたターボレックスがシグムディアから離れ、今度はプテライザーが飛んできて、シグムディアに合体した。エヴァはビームバスターの攻撃を止め、煙の中を確認しようとしたその時、風が煙を払い、煙の中から現れたのは.....

「エルフの聖なる疾風とダークエルフの墮落した疾風を一つに..... シグムディア・トルネイザー!!」

シグムディアの装甲が深緑と黄緑に別れており、ビームウイングを放出するバーニアにはプテライザーの巨大なウイングが付けられており、頭部にプテライザーの頭骨が装備されていた。そしてシグムディア・トルネイザーの腕からサーメットブレードを展開すると、陽弥は叫んだ。

「ハリケーンストラッシュ!!」

シグムディア・トルネイザーは回り始め、エヴァがシグムディア・トルネイザーに向けて、ビームバスターを撃とうとしたその時、回っているシグムディア・トルネイザーから吹き荒れる竜巻が起こり、エ



ヴアのビームバスターを弾き返えしながら、徐々にエヴァに近付き、そして、緑に光っているサーメットブレードをエヴァに斬り付ける。「エレメンタルスパークング!!」

サーメットブレードの刃からビームの刃が飛んできて、エヴァのレーザーブレードを切り裂き、胴体に傷を入れていく。

「グアアアアアアッ!!」

エヴァはシグムディアの攻撃に吹き飛ばされ、なんとか体制を整えた。

「こんな筈…………… あり得ない!!」

「止めだ!」

陽弥はプテライザーを分離させ、シグムディアでエヴァに突撃した。

「そうは…………… させんぞ!!」

エヴァの頭上からビームリングが出現し、エヴァは突撃してくるシグムディアに向けて、ビームリングを放った。

「分身発動!!」

陽弥が叫ぶと、シグムディアが光だし、ビームリングに直撃したと思いきや、シグムディアが2体を増えた。

「何!?!」

エヴァとテスト、ミラーナ、オルトは驚く。

「増えた?!」

2体が増えたシグムディアは一気にエヴァへ向かっていく。エヴァはシグムディアにビームバスターを撃つが、直撃をすることで、さらに増えていく。

「汚い手を使ってえ!そこかあ!!」

エヴァは六本の腕から拡散ビームバスターを放つが、シグムディアは、どんどん増えていき、エヴァを翻弄する。

「クソッ!…………… コピーに直撃して更に増えていく!」

「まだまだ!シグムディアの能力はこんな物じゃないぞ!」

陽弥が叫ぶと、シグムディアから粒子が放出され、さらに加速した直後、一瞬だがシグムディアに続くように残像出していた。

「何!?!」

同じく、シグムディアのコピー達も残像を出していいた。

「分身も質量粒子の残像だすのか!?!」

「分身と言っても……………ただのコピーを作っているのではない……………コピーも全部……………本物だ!!」

「何だと!!!?」

エヴァが驚くとシグムディア達が七星剣と魔剣グラムを抜刀し、エヴァに襲い掛かった。

《エヴァアアアアアア!!!》

数百体いるシグムディアにエヴァは翻弄され、徐々に四肢を斬られていった。

「何だあの機体は?!?!……………化物なのか?!グアツ!?!」

今度は背部のウイングが切断され、エヴァのギムガルムは墜落していった。

「ウアアアアアアアアアアアア~~~~~!!!」

さらにシグムディアはサーメットブレードを展開して、エヴァのギムガルムの首を切断し、エヴァのギムガルムが地面に激突すると、ギムガルムは爆発した、

「エヴァ様!!」

テスト達が叫び、煙が晴れると、傷だらけのエヴァが大破したギムガルムから脱出してきた。

「グツ……………ウツ!……………ゴボオツ!!!」

エヴァの頭部に付いていた仮面がはずれると、口から大量の血を吐き出した。

「馬鹿な……………こんなこと……………っ!?!」

するとエヴァの後方から殺気を感じ、振り向くと光の右腕と闇の左腕を展開して、大破したエヴァのギムガルムの装甲に闇の爪を砥らし、怒りの表情でエヴァを見ていた。

「っ!!」

エヴァは陽弥の怒りの表情と野獣のように輝く瞳を見て、恐怖を感じた。『このままでは、殺される!』”と分かり、急いで逃げよう



やミラーナ、オルトも……………許してあげて……………」  
「エミリア……………」

すると陽弥の怒りが収まると同時に、エミリアの髪が元の黄緑の髪に戻っていった。傷だらけのエヴァは陽弥とエミリアの光景に驚愕していた。

「これが……………クアンタニウムハートの力……………怒りで満ちた陽弥を……………慈愛で和解したのか……………!?!」

そして倒れていたテスト達も驚きくと彼等は自分の胸に触れる。  
「……………感じる……………陽弥のインフィニティソウルとエミリア騎士団長のクアンタニウムハートの温もりが……………」  
テストが語っていると、目の前にテストの父親が笑っていた。

「お父さん……………」  
誰もが心穏やかになっっている直後、陽弥とエミリアに目掛けて、一筋の光線が発射された。

「っ!!」  
エヴァは陽弥とエミリアに近づく光線を自らの体で二人を庇った。  
《っ!!?》

謎の光線の攻撃でエヴァは、倒れた。その光景に陽弥とエミリアが叫ぶ。

「エヴァ!!」  
「イヤアアアアアア~~~~!!お父様!!」

陽弥とエミリアは倒れたエヴァの所へ駆け付けると、上空から、不気味な声が聞こえてきた。

「下らん……………観賞だなあ……………」  
上空から現れたのは、五体もいる邪神尖兵ロイガーとロイガーと一緒にいる魚人の様な邪神が浮いていた。

「お前は?」  
「我が名は……………旧支配者大銀河帝国第11界邪神皇　ダゴンと申す……………我が帝国軍に刃向かう愚かな護星神や革命連合の下等生物共が……………行け!ロイガー!イング達よ!この星の生命を喰らい尽くすのだ……………!!」

ダゴンが手を差し伸べると、ロイガーの口から次々とイング族の大群が出てきた。テスト達はイングを見て、陽弥に問う。

「何だあれは?!」

「……………旧支配者大銀河帝国」

「え!?!」

「大昔に……………全宇宙を支配していた邪神軍団達の巨大国家だ……………と言う事は……………原初の邪神皇クトウルフの復活が近いって言う事か……………」

陽弥はダゴンを睨み、シグムディアの名を呼んだ。

「行くぞ!シグムディア!ダイノシグナルズ!」

「「おう!!」」

シグムディアとターボレックス、プテライザー、プレジストアクセスラーが現れ、陽弥はシグムディアに乗り込み、イングの大群へと向かっていった。

シグムディアのハイパーノバビームライフルの閃光が輝き、イングを倒すが、五体のロイガーが一気にイング族を増やしていった。

「クッ!……………五体のロイガーがいるから出てくるイング族も倍になっている!」

陽弥が苦戦していると、通信回線が開く。

「パパ!」

「マナ!どうした?!」

「今から、助けに行く!」

「え?!」

通信回線が切れた直後、ベースの方から、大きな音が鳴り響いた。すると土の中からロイガーよりも数千倍大きな巨大なロボットが現れた。

「分かりやすく言えば、”マクロスF”に登場した戦艦『マクロスFロンティア』に通常のマクロスFの肩に装備されているバスターキャノンと合体させた物です。さらに全長はマクロスFロンティアが2隻を積み重ねた感じですよ。」

「あれが……………?!」



ラルフが啞然しながら言う。

「俺達が苦戦したロイガーが………本のアツサリと?!」

ダゴンは焦りながら状況を確認する。

「己え!!これ以上戦力を減らされては困る!退け!退けええ!!」

ダゴンは残りのイングと3体のロイガーを連れて、ゾル・ドウーから脱出した。

戦いを終え、早速牢獄に小型核爆弾を設置していると、テストが陽弥達と話していた。

「で、………どうする?もうすぐ、この銀河牢獄は爆破する………今の内に逃げろ………それともまだ戦闘を続けて、俺と一緒に爆死するか?」

「嫌………止めておく………一刻もアヴァロンへ戻って、エヴァ様の治療を最優先にする………エミリア騎士団長………」

テスト達がエミリアを見る。するとエミリアは笑顔でテストを励ます。

「大丈夫です………これが本当の私ですから………そして、貴方達は他のミスルギ人とは違う心を持っているのですから………テスト」

「はい………」  
「それとジュリオを監視してください………アポカリプスにはくれぐれも注意することです………」

「分かりました………」  
テスト達はエミリアに敬礼すると、陽弥がテストにお願い事を言う。

「それとテストタ……………お願いがあるんだ……………」

その後、銀河牢獄ゾル・ドゥーの基地が爆発し、陽弥達は星から脱出した。テスト達は負傷したエヴァを治療するため、急いでアヴァロンへと戻って行った。

陽弥とエミリアはオメガプライムスからゾル・ドゥーを見ていた。

「大丈夫かな?……………エヴァは」

「大丈夫です……………きつとお父様も……………心の中で反省してると思いますよ……………」

エミリアが笑顔で陽弥を見ていると、陽弥の後方からマナが元気良く走ってきた。

「パパー!」

「おお、マナ……………」

マナが陽弥に抱き付いていると、エミリアの表情が一変した。

「……………」

「ん?どうした……………エミリア?」

「……………う!」

「う?」

「う!……………う!……………浮気しているのですか!!!」

怒ったらエミリアが陽弥に平手打ちすると陽弥は倒れ、涙目で、エミリアに言う。

「痛あつ!!……………違う!これは深い事情があつて……………!!」

陽弥はオメガプライムスの艦橋でエミリアやエスメラルダにこれまでの事を説明した。

「え?!……………マナちゃんは……………未来から来た私と陽弥様の子供?!」

「ああ、未来の俺が……………わざわざ、自分のインフィニティソウルをマナに託し、それを今、俺がこややって借りているんだからなあ……………おかげで人工心臓のエネルギーが空にならなくて済んだ……………」

「未来からですか……………」

エミリアは納得すると、エスメラルダは自分の頬とマナの頬をスリ



スリし始めた。一方マナはエスメラルダに頬をスリスリされるのを嫌がっていた。

「お前が私の姪っ子だなんて……………さすが、私の妹と義理の弟で護星神の子供だ！、う〜♪」

「やめてよ〜！エスメラルダ叔母ちゃん〜！」

二人の光景に陽弥とエミリアは笑う

「それにしても……………オメガプライムス……………相変わらず、デカイなあ……………」

陽弥はオメガプライムスを見てみると、コンソールから何かが出てきた。

「ん？」

陽弥はコンソールから出てきた物を取り出すと、首をかしげた。

「何だこれ？」

それは平行四辺形の形をした機械であった。すると陽弥の左腕の手甲が展開され、陽弥は驚くとあることに気付く。

「変だなあ……………何で凹っているんだ？それにこの機械と同じ形をしている……………」

すると機械が急に磁石のように手甲に装着された。

「ちよっ?!、何だこれ?!」

陽弥は引き剥がそうとするが、機械は完全にガッチリと装着されており、外せなかった。

「どうしたの？」

するとそこにマナを連れたエミリアがやって来た。

「この機械が……………俺の左腕の手甲に！」

「パパ、貸して♪」

するとマナは陽弥の左腕の手甲に装着されている機械を見た。すると何をしたのか、機械から立体映像式のコンソールが浮かび上がり、マナは立体映像式のキーボードを打ち始めた。

「凄いです……………流石、陽弥様と私の娘です！」

「システムログイン♪……………ID”タイタニス”♪」

すると機械が光だすと手甲の中へ収納された。陽弥は啞然しながら

ら、マナに問う。

「パパが使えるように、”コスモバイル”を起動させたの！次いでに”スペクトロブス”達も♪」

「二……………スペクトロブス???’二

マナの謎の言葉に陽弥とエミリアとエスメラルダは首をかしげた。

その頃、アヴァロンに戻ったテスト達は……………

「この役立たずがああ!!!」

ジュリオは怒りながら、ウィングラスをテストの頭に投げ付けてきた。

「おめおめとよくも帰ってきやがったな!!?……………おかげでク

アンタニウムを取り出す装置の出番がないじゃないか!!おまけにエヴァはボロボロで、クアンタの姫も奪われた!」

テストの頭から、血が流れており、その状態で説明した。

「しかし!……………新たな敵が襲来したのは仕方なかったんです……………傷付いたエヴァ様を救出しなければと!」

「言い訳は言うな!!」

ジュリオがテストに怒鳴り上げた。ジュリオは数分後に冷静になるとテストに問う。

「で、その新たな敵は何だ?」

「分かりません……………ですが、もう一つの方は……………名を……………旧支配者大銀河帝国と名乗りました……………」

「旧支配者大銀河帝国?……………そんな連中も存在していた

のか?」

「ええ、」

「……………実に素晴らしい事ではないか！」

「「え?!」」

ジュリオの言葉にテスト達は疑問に思い込む。

「旧支配者大銀河帝国！彼等と同盟を結めば、種族銀河同盟も大混乱する！ありがたき味方がまさか……………いたとは……………アポカリプス！」

「はい、陛下……………」

「今すぐ、その旧支配者大銀河帝国とやらにメッセージを!!これ……………忌まわしきアンジュリーゼを消せる!!」

ジュリオのおぞましき企みと不穏な微笑みがテスト達の目と心に焼き付けた。

そして、謁見が終わるとテスト達は自室で待機していた。そこにはミラーナとオルトがおり、テストは壁を蹴り上げた。

「クソツ！何が結ぶだ!……………」

「落ち着いて……………テスト君……………」

「これが落ち着いていられるか!?!」

「ヒイツ!!」

「まずいぞ……………まずいよ……………これ……………このままだと……………皆が死ぬ!……………何かいい考えは……………」

テストとミラーナが深く考え込むとオルトが何かを思い付き、テストとミラーナに話す。

「そうだ！」

「何か案があるのか？」

「いい考えだが……………アイツ等と同じ技術を応用するんだ……………」

「アイツ等？」

「前に陽弥が潜入していたとき……………フォドラニウムで作られたジャミング装置だ……………それを使って、あることをす

る……………」

「あること?」

「…………… 囚われの元皇帝…………… アジマスだ……………」

オルトの言葉にテストタとミラーナは言う。

「なるほど、囚われのアジマスを救出して、銀河同盟の基地に送るのね?」

「そうだ……………」

「けど、…………… アポカリプスが見張っているんだよ…………… どうやって?」

「心配するな…………… 俺を誰だと思っている?」

「…………… 星刻の番人」

「そうだ…………… そしてアポカリプスの部下でもある…………… アポカリプスは4日間アヴァロンにはいないらしい、ジュリオの旗艦エンペラージュリオ二世と護衛艦と共に、旧支配者大銀河帝国のダゴンと同盟を結びに、エルダードウークと言う、暗黒宇宙域に行くらしいんだ……………」

「つまり?!」

「アポカリプスが留守をしているため、4日間アヴァロンの警備が無く、防衛システムが作動しないらしいんだ…………… だから、チャンスでも言える……………」

「で、その隙にアジマス陛下を救出し、」

「ホライゾンにいる種族銀河同盟の基地に届ける、ついでに旧支配者大銀河帝国も来ていると……………」

「よし…………… 明日作戦を決行するぞ……………」

「了解……………」

オルトとミラーナはテストタに敬礼した。

### 第35話：二人の決断

陽弥はエミリアにユグドラシルの事や、新しい仲間を紹介していた。

「じゃあ、紹介するね？先ずはラルフだ」

「どうも、ラルフ・フレイです。」

「彼は、俺が死にかけた時に助けてくれた者で、俺と同じヴェクタ人で俺の従兄に当たる人物で、別世界であるヴァナヘイムの護星神の一人……ラルフは8人兄弟の中で一番しっかりとした長男なんだ……で、次はキャリー、」

「はい、キャリー・シアローゼです。初めまして、エミリアさん……」

キャリーがエミリアに御辞儀するとエミリアは慌てて御辞儀をする。

「あ、こちらこそ……」

「彼女も俺と同じヴェクタ人だけど、父親がアルブエイムのエルフ族で母親がヴェクタ人のハーフエルフなんだ、で、アルブエイムの護星神の一人……次は、スヴァルトアルブヘイムの護星神の一人、ダークエルフのデュラン・シユヴァルツアーだ……ええ、つと次は？」

「俺だ♪」

巨人族のバルトが元気良く、エミリアに挨拶した。

「彼はムスペルヘイムの護星神のバルト・フェルド……母親が炎の巨人族で父親がヴェクタ人のハーフタイタンなんだ……そして彼と同じく、ヨトウンヘイムの護星神のダーマ・フォツセン……バルトと同じ父親がヴェクタ人で、母親が氷の巨人族だ……そして、」

「ドミニカ・シエレンツだ……！」

「彼女は小人の世界ニルヴァーナの護星神で、ドヴェルグ族と言う小人なんだ……最後に……この二人は……」

するとサム・ギデオンが陽弥を押し退け、エミリアの前で膝ま付き、御辞儀をした。

「どうも姫殿下…………… 私はサム・ギデオンです。訳あって霊界から来まして、アースガルドの護星神を務めております。いつも孫がご迷惑掛けております。」

「おい！迷惑ってどう言うことだ?!」

「迷惑掛けているではないかあ…………… こんなに綺麗な美少女を1650年も待たせて…………… それでも姫殿下の恋人なのか?」

サムの言葉に二人は顔を赤くする。

「／／?!」

「それと、マナの両親でもないのか?……………」

「あ…………… 嫌…………… その……………」

陽弥が焦っている、エミリアがマナを抱き、陽弥の腕に自分の腕を組むとはつきりとサムに答えた。

「え!?!」

「いいえ、マナは確かに私達の子供です♪」

陽弥はアースガルドの護星神に張り合った事に驚いた。するとサムは鼻で笑った。

「フツ…………… 頑張れよ、次世代ギデオン夫婦…………… ♪」

サムはそれを言い終えると、何処かへと消えた。

「つて、おっすい!!」

陽弥が呼び止めるが、遅かった。

「つたく、爺いめ…………… 後で覚えておれよ……………」

「あく、良いかな?」

アルベルトが陽弥に問い出す。

「良いですよ」

「私はアルベルト…………… ヘルヘイムの護星神だ…………… サムと同じ霊界の者で、陽弥のお父さんに会いに来たんだ。」

「まあ！御義父様を?!」

エミリアが陽弥の父親の事を急に御義父と言った事に驚愕した。

「御義父様!?!」

「アイツは頑固な弟ですからねえ…………… 私とサムがいると知ったら、涙目で、私や実父であるサムに抱き付くでしょう。」

「え?!父さん…………… 泣くの!?!」

「ああ、リベルタスを終えた時、ちよつと顔を見せたら、涙目になっていたよ……………」

アルベルトが困った表情をすると、陽弥の表情がちよつと笑顔になった。

「…………… 見てみたいなあ…………… 父さんの泣きわめく所…………… 前は泣きながら、笑っていたんですよ…………… 自分の過去と母さんの事でちよつと……………」

「そうか、多分…………… 私とサムがいたら号泣するだろうなあ……………」

「…………… そうですねえ」

その後、陽弥はラルフが教えてくれたアパートに引っ越した。

○△月□◎日…………… 陽弥とマナは調査兵のボリスの頼み事

に、オメガプライムスがある発着場に来ていた。

「デケエなあ…………… !」

「オメガプライムスの事ですか?」

「ああ、こんな馬鹿デカイのを一体どうやって造ったんだろうなあ?」

「確かに…………… クアンタ人は謎の種族だからなあ……………」

「…………… あ!そうそう、オメガプライムスの事であることが分かったの!」

「何が?」

「このオメガプライムスの艦橋以外の内部から、膨大な熱量とエネルギー

ギーが確定されたの！」

「…………… どう言うこと？」

「オメガプライムスの内部には、森や水と空気で溢れており、街があるんだ！」

「つまり？」

「つまり！このオメガプライムス自体が…………… 巨体なコロニーを要塞戦艦にしたと言う事だ…………… だが、それを開けるためのコードと最悪な事に、レーザー指紋スキャナーとアイ・スキャナーも備えられている……………」

「アイ・スキャナーって？」

「簡単に言うと、目の遺伝子コードをスキャンすると言う事だ……………」

「なるほど、それに手こずっている？」

「そうなんだよ！見てみたいんだよ！オメガプライムスの内部が！！」

陽弥が考え込むと一緒に来ていたマナが陽弥に言う。

「パパ♪」

「ん？」

「それなら…………… 開かれるよ♪」

「…………… マジッ？」「…………… 嘘っ!？」

陽弥は何度も体験しているから、ちよつと驚き、ボリスは驚く。

陽弥はボリスに連れられ、巨大な扉で閉められた場所にいた。

「未来の。パパは何でも出来ちゃうから…………… それが私にも遺伝しちゃったの……………」

「へ〜」

「嫌々、レーザー指紋スキャナーとアイ・スキャナーもあるんだぞ



?.....そう簡単に.....」

「アスカさん.....その不可能はやがて可能になるんですよ.....」

陽弥が話していると、マナが端末を開き、キーボードを打ち始め、数秒で終わった。

「出来たよ♪」

「嘘.....だろ?!」

ボリスが啞然すると、開かずの扉が開き、中から光が見えてきた。

「開いたあ♪」

中は高層ビルが建つエリアや、住宅エリア、商業エリア、工業エリア、浄水場、大きな公園、さらに豊かな森や山々、林、草原、複数もある農場エリア、綺麗な湖、地球に存在するナイアガラ見たいな滝が見えていたが、陽弥のいる商業エリアの周りに、無数の白骨死体が転がっていた。ボリスは無傷の建物を見て、興奮していた。

「これほどのテクノロジー.....素晴らしい!!」

陽弥が道を歩いていると、足下に何かを踏みつけた。

「ん?」

陽弥の足下に、大きくて一冊の本を抱えた白骨死体があった。陽弥は、お経を唱え白骨死体から本を抜き取り、中を開くと、年月日と長文が書かれていた。

「日記?.....っ!」

陽弥はその日記を眺めていると、陽弥の片方の目が緑に光だし、日記から映像が飛び出る。

「どうなってるんだ.....!」

それはかつて、クアンタ人達があらゆる生命体や、恐竜、種族、動物、そして人類を造り上げている映像や、クアンタ人の母星がダークマタージュエルによって変わり果てたドゥームに襲われ、巫女姫が魔方陣からヘリオスとセレーネを召喚し、ドゥームを封印している映像が見終わった直後、陽弥がいる街に転がっていた白骨死体が消え、急に明るくなった。

「(っ)は?.....一体何処なんだ?」

陽弥が辺りを見回していると、目の前に緑に光る人々がいた。

「あの！すみません！ここは一体……… え？」

陽弥がその人に触れようとしたが、あっさり陽弥の体ごと、透き通った。

「透けた?!……… ひよつとして……… これって………  
ホログラム映像?!……… にしては街が綺麗だ  
なあ………」

街には灯りが灯っており、人々が盛んに店を見て回ったり、ペットと散歩をしていた。

「マナー……… ボリス！」

陽弥は二人を呼ぶが、返事はなかった。

「ん？」

陽弥のいる歩道からガードレール見たいな物が出てきて、路線に道を避けるように、人々は歩道へ移った。すると歩道橋の奥から、白と緑の装甲をした戦車が通過してきて、またその奥から、今度は陽弥が着用している鎧と異なる鎧を着た兵士と、ユニコーンに乗っている騎馬隊や重装備をしたドラゴンに乗っている龍騎隊、さらにシグムデアに似ている虫の様な機体が現れ、コックピットから、パイロット達が、機体の手のひらに乗り、パレードを見ている民達に敬礼を見せていた。すると隊長クラスの機体の背部から、ビームの旗を放出しながら行進していた。

「パレード？」

すると、今度は高貴な二人を乗せた大型のオープンカーの様な乗り物が現れた。女の方は大きなお腹を撫でながら、民達に手を振っていた。

「あの人は………？」

陽弥がパレードを見ている直後、映像が切り替わり始めた。

「っ!？」

今度は、何かの施設へと転移され、陽弥は辺りを見回していた。

「ここは……… 空気清浄施設?……… ん？」

陽弥の目の前に、空気清浄のメインシステムのコントローラーに触

れている者がいた。

「あの人は……………誰だ？」

するとコントローラーから、緊急のスイッチが出てきて、その人物は関係なく押した。するとその人物は腰部のポーチからマスクを取りだし、それを顔に装着し、何処かへと逃げた。陽弥は急いでコントローラーを見ると、画面上に『ガス排出』と映し出されていた。

「ガス!?!……………まさか!?!」

陽弥は急いで街へ戻った。

陽弥が街へ戻ると、既に多くの人達が、ガスで苦しみながら死んでいた。

「アアっ!!」

兵隊や動物がガスでもがき苦しんでいた。

「何て事を……………」

すると高家に乗せたオープンカーが民を見捨てるかのように、防護シヤッターの中へ避難していった。すると段々と空間が捻れて行き、陽弥は空間から追い出され、目を覚ました。

「うわあっ!?!」

陽弥の目の前に、ボリスとマナが気を失った陽弥を心配していた。

「大丈夫か？」

「大丈夫……………大丈夫」

「本当に……………？」

「それより、真相が分かった……………」

「何の？」

陽弥はボリスに日記を見せた。

「前にシグムディアが言っていた……………」  
「クアンタ人の移民船で恐ろしい宇宙病が出たと……………」  
「でも、違う……………」  
「これは誰かが遺した日記なんだ……………」  
「ホログラム映像でしか分か

らない空間で……………で、内容は……………シグムディアが言った宇宙病と言うのは、あれは空気清浄施設で誰かが艦内に猛毒ガスを撒き散らして、それでクアンタ人は絶滅したんだ……………王家の者を除いては……………」

「つまり、誰かがオメガプライムスの艦内にガスを撒き散らし、……………お前の恋人であるエミリアの先祖だけを生かしたと?」

「そして、この日記には……………その犯人の行動を知っていたクアンタ人が最後に記録したんだと思う……………」

「その日記が……………一番の鍵を握っていると?」

「ああ、もしかしたら……………クアンタ人が俺のインフィニティソウルと……………エミリアのクアンタニウムハート、ジュリオのダークマタージュエル、クロウさんのアークで何をしようとしたのかも記されていると思う……………」

「とにかく、それを持って戻ろう。」

「ああ……………ほら、マナ帰るよ」

「はい!」

陽弥達はオメガプライムスの内部を後にし、家へ帰った。

マナと一緒に家に帰ると、エミリアが出迎えてくれていた。

「陽弥様、お帰りなさい♪」

「ただいま、エミリア♪」

「ママ!」

マナはエミリアに飛び付いてきた。

「マナちゃん♪」

エミリアはマナの頭を優しく撫でると陽弥に言う。

「あ!陽弥様、今日私、キャリー様と御姉様と一緒に料理を作ってみた

のです♪」

「本当に？」

「ええ、将来マナちゃんのお母さんになると思い、早くも花嫁修業してみました♪」

「へえ、」

「良ければ、私が作った料理を食べてみませんか？」

「良いよ……♪」

陽弥は早速、エミリアが作った料理を食べに、家の中へ入っていった。台所のテーブルの上に豪華な料理がズラアと並んでおり、陽弥とマナは豪華な料理に目を光らせていた。

「おっっ!!」「わっっ!!」

陽弥達は早速椅子に座ると、サムが祈つてながら、神様に謝罪した後、全員で言う。

「「「「いただきます」」」」

陽弥とマナはエミリアの料理を食べるとエミリアが問う

「二人とも、お味は？」

「おいしい!!♪」

マナが元気良く返事をした。

「良かった！陽弥様は？」

「美味しいよ!……父さんと母さんの作った料理の味とそっくりだ……」

「まあ！私の料理の味がお義父様とお義母様の味とそっくりなのですか？」

エミリアが驚いているとサムが言う。

「ああ、これなら充分花嫁らしくなってるよ……流石、俺の馬鹿孫の将来の嫁さんだ……我らギデオン家に相応しき女性だ」

「それと……ここに、父さんと母さん……ルナと婆ちゃん……ココ叔母さんやミランダ叔母さんがいたら……この食事も……もつと賑やかになっていただろうなあ……」

「そうですねえ……」

二人の雰囲気のエスメラルダが話を交える。

「まあ、それは置いといて！……………陽弥、今日の出来事は？」

「ん？、これ……………」

陽弥は皆にオメガプライムスで見つけた日記を見せた。

「『『日記？』』』」

「ボリスさんと共にオメガプライムスの内部を調査していたんだ……………運の良いことに、マナの超知識のおかげで扉が開いたんだ……………中に入るとそこは、」

陽弥は皆に日記に書かれている事を話した。エスメラルダは陽弥の話に問う。

「誰かが……………私達の仲間を猛毒ガスで？」

「そう、きつとシグムディアが言った事は、多分……………誰かに記憶を書き換えられたと思う……………明日もボリスさんと共にオメガプライムスの内部調査をすると思う……………」

「あおう、陽弥様……………その時は、私も一緒に同行させてください……………」

「……………いいのか？危険だと……………思うけど、」

「でも、知りたいのです……………私達のご先祖様の事を……………」

「良いよ、連れて行ってあげる……………」

陽弥とエミリアは明日に備え、早く寝た。

翌朝、陽弥とエミリアはマナを連れて、ボリスと共にオメガプライムスの最深部……………街から見えた草原へと向かっていった。

「『この通路は……………まだ有毒ガスが充満しているから、二人とも、ガスマスクを付けてね……………」

陽弥達はマスクを装着し、通路を歩いていた。

「ヴィクトルー……………建物内に生態反応は？」

「ありません……………ですが、この通路の奥に微かですが、未知の生命体のエコー（音波）を確認しました。」

「未知の生命体？」

ヴィクトルーの言葉に陽弥は疑心暗鬼になると、巨大な扉が見えてきた。

「また、扉だ……………」

マナは扉に触れるが、反応しなかった。

「ダメ、パパ……………開かない」

「マナでも、ダメかあ」

誰もが諦め、陽弥が扉の装甲に触れた直後、何処からか、女性の声がかしてきた。

「称号確認……………0085269……………DNAスキャン開始」

すると緑に発光するスキャナーが展開され、陽弥達をスキャンした。

「DNAスキャン完了いたしました……………シンセシスと判明……………」

スキャナーが消えると、巨大な扉がゆっくりと上へと開き始めた。

「ようこそ、シンセシス 陽弥・ギデオン様、エミリア・ヴァルネア・クリーフ様、マナ・ギデオン様……………及びボリス様……………架空の大地ウィーテラに……………」

扉が開き、曙光が陽弥達の目を眩ませた。そして曙光が消えた直後、陽弥達の目の前に神秘的な絶景が見えた。街から見えた通り、緑溢れる草原が広がっており、驚いたことに、空に雲があり、風も吹いていた。

「スゲエ!……………要塞なのに……………どうしてこんな大地が?!」

マナは草原を走り出しながら興奮していると、陽弥の足下に石化した動物の化石が転がっていた。

「ん?……………化石?」

「陽弥様…………… ここにもそれに似た化石らしき物がありました」

「こつちも！メチャクチャいっぱい転がっている！」

ボリスのいる所に行くと、あちこちに化石が転がっていた。

「何なんだ…………… これ……………?!」

するとマナが化石を持ってきて、陽弥に見せた。

「スペクトロブス！」

「スペクトロブス?…………… この化石が……………」

「パパ！コスモバイルを起動して！」

「え?!…………… おう、分かった……………」

陽弥は左腕のアーマーに収納していたコスモバイルを起動すると、広範囲レーダーが現れた。

「そして、スペクトロブス達を起こして！」

陽弥はマナの言う通りに、答えた。

「起きろ…………… 起きろ!!…………… 起きろ!!」

するとあちこちに転がっていた化石達が光だし、陽弥が持っていた化石から赤色のししこまが現れた。

「何だこれ…………… ししこま?!」

「コマイヌー！」

マナが言うと、エミリアがオレンジ色の子獅子を抱いていた。

「陽弥様…………… こちらのは猫みたいな動物です」

「あの子はリグルス！」

「こつちは、そつちの猫と同じだけど、オレンジじゃなく、青いぞなあ、しかも身体中が刃物だ……………！」

ボリスの足下に、全身が刃物だらけの、ヒョウ見たいな子供の動物がいた。

「青いのはライザー♪」

「ねえ、マナ…………… 思ったんだけど、スペクトロブスってなんだ

？」

「ん?…………… スペクトロブスは、銀河と生命を護りし星獣なの♪」

「星獣……………」

「そして！」



マナが草原の彼方へ指を差し、陽弥達は指を差している方向を見ると、空の彼方から、γ以上に美しき白き龍が舞い降りてきた。

「何だ?!……………あの龍は?!」

「スペクトロボスの王様!……………白き獣王……………極幻王だ

よ、パパ!」

マナが言うのと、白き獣王……………極幻王が陽弥に話し掛けてきた。

「例を言う……………私も含めて……………同胞達を呼び覚ましてくれて……………我等、星獣スペクトロボスはお主との契りを交わそう……………」

すると陽弥の目の前に、虹色に輝く結晶が現れた。

「これは?」

「ここにいる幼体のスペクトロボス達を……………進化させるクリスタルだ……………それに触れるのだ……………」

陽弥は極幻王の言う通りにクリスタルに触れた直後、クリスタルが光だし、クリスタルから複数の光が飛び出し、幼体のスペクトロボスに当たると、陽弥の側にいたコマイヌ、リグルス、ライザーが光だし、コマイヌは巨大な角を生やした巨大な獅子駒へ、リグルスは鬣が生え、鋭い牙を生やした百獣の獅子へ、ライザーは全身に生えていた刃物がさらに増え、頭や翼と腕や脚や尻尾にもブレードが生えている蒼きヒョウへと進化した。

他にも幼体のスペクトロボスが進化して、完全体になったスペクトロボスや成体のスペクトロボス、進化しなかったスペクトロボス達もいた。陽弥は進化したコマイヌやリグルス、ライザーを見て、驚く。「デカツ!」

その時、極幻王や、スペクトロボス達が陽弥の前で頭を下げた。

「我!極幻王カイオウは!……………汝をスペクトロボスマスターと認め!……………全ての星々の生命を護るために!……………汝に仕えよう!」

「この者に!極幻王カイオウ様の祝福あれ!!」

極幻王とスペクトロボス達が雄叫びを上げると、陽弥とエミリアの

上から、シグムディアが飛来してきた。

「マスター、エミリア姫様……………」

「シグムディア」

「え?……………はい」

「貴方方にある人からの贈り物があります……………」

シグムディアが地面に手を翳すと、陽弥とエミリアが立っていた地面が下へ降りていく。

降りて着いた場所は、オメガプライムスの格納庫であり、目の前に2体の一角を生やした白銀のペガサスがおた

「このスペクトロブスは…………… 貴方の祖父が使用していたスペクトロブスです……………」

「私の…………… お爺様が!?!」

「貴方の祖父は…………… 誇り高きクアンタの皇帝でした…………… 彼はマスターのパンドラメール”シグムディア”と同じ未来視できる能力をお持ちで、二人の為にこの2体の天掛けるスペクトロブス…………… ニールを造られたのです。さらに……………」

シグムディアが側にあつたレバーを引くと、2体のニール後ろから、シャッターが開き、現れたのはシグムディアと同じ装甲をした女性型の機体だった。陽弥とエミリアは驚く。

「こ!…………… これは!?!」

「シグムディアの妹機…………… ”002”です……………」

「002……………?!」

エミリアが002を見てみると、002のメインカメラが光だし、言葉を発した。

「シグムディア……………」

「久しいなあ…………… 002よ……………」

「貴方もですねえ…………… 001…………… それで?…………… この小娘が私の新たな主人なのですか?」

「…………… そうだ」

002はエミリアを見る。

「フツ…………… 貴方はそのヴェクタの若造を主人にしたのですね…………… まあ、良いでしょう」

002が納得すると、エミリアに話し掛ける

「エミリア姫様……………」

「は!…………… はい!」

「この私に…………… 新たなる名をお付けください……………」

「え…………… !?」

「あくそつかあ、エミリアは知らないだった……………」

陽弥はエミリアにシグムディアの事ややり方を教えた。

「ああ、なるほど…………… 意外と簡単な事なのですね?」

「うん、」

「それじゃあ……………」

「決まったのか?」

「ええ…………… 貴方の新たなる名は……………」 ”シグニュー

”です……………」

するとシグニューがエミリアの前で膝間付き、頭を下げた。

「貴方をマスターとして、このシグニュー…………… 命を張って貴方を御守りします……………」

するとシグニューが収納されていた場所の左右からシャッターが開き始め、中から陽弥が見たクアンタ人の機体がたくさん収納されていた。

「あ!…………… あれは!?!」

「マスター…………… あれは、クアンタ帝国の遺産です……………」

かつてクアンタ人は膨大なエネルギーの他に、圧倒的な未知の科学力で自分達の国家を築き上げてきました…………… その一部

が……………シンセシスに覚醒したマスターとエミリア様にか使えない支援機……………ガーディアンビットなので……………」

「ガーディアンビット……………」

「マスター……………これで、準備が整いました……………」

「え？」

「惑星ホライゾンで起こる悲劇……………第三次惑星間戦争での

準備です……………我々はいつでもどこでも貴殿方二人に付いて

参ります……………」

シグムディアも陽弥の目の前で膝間付き、頭を下げた。その時、陽弥の左目の瞳が緑に光、エミリアの右目の瞳が桃色に光った。

そして陽弥は皆にその事を話すと、急いでホライゾンでの戦に向けて準備していた。

陽弥は疲れを癒しに温泉に入っていた。

「何だか……………ぶっ飛んだ事になってきたなあ……………」

陽弥は星を眺めながら、考え込む。

「第三次太陽系外惑星間戦争か……………前にあつたヴェクタとヘルガストの第一次、第二次の戦争と同じ運命になるんだなあ……………」

陽弥は温泉で心を安らいでいると、後方から戸が開き、誰か入ってきた。

「ん？」

陽弥は振り向くとそこにいたのはタオルで体を隠しているエミリ

アであった。陽弥は赤くなり、驚く。

「ブツ!!? エミリア?!」

「失礼します……………」

エミリアは温泉に入り、陽弥の側に近付く。陽弥は慌てながら、答える。

「なななな!!? 何でエミリアが!」

「たまには、混浴もしてみたいと思ひまして…………… それに、未来の旦那様でありますからね♪」

その後、二人はお互いに背を向けて、シグムディアが言った事を語っていた。

「陽弥様は…………… シグムディア様が言った事に…………… 賛同しますか?」

「え…………… ?」

「私は…………… アジマス人を殺したくないのです…………… 彼等も私たちと同じ生命体…………… ちゃんと生きようと頑張っています…………… 新しく産まれてくる命や尽きる命を正しい方向に導きたいのです。陽弥様は何を決断しましたか?」

「俺は…………… 全ての星の生命を護る…………… 16  
50年前から、決めている…………… それ…………… ミッドガンドの護星神の使命だから…………… それに……………」

陽弥はエミリアに自分の右腕と左腕を解放して、おぞましき姿を見せた。

「俺はもう…………… 人間じゃない…………… 俺の右腕に宿る光の龍と左腕に宿る生まれ変わった元邪神皇の力を持つ闇の龍と…………… 古の銀河七聖龍と太陽神龍…………… そしてスペクトロブスの王…………… 極幻王カイオウやスペクトロブス達はコスモバイルの中に入っている…………… しかも、シンセシスだ…………… もしかしたら、皆は俺の事を本物の化物って言うのかもしれない…………… それでも、皆の事が…………… 好きだ…………… 知り合った仲間や、必死に頑張ろうとする人達…………… スペクトロブスのような穏やかな心でいろんな星々を護っている…………… 俺な

んか…………… 1650年も皆をほったらかしにしてきた最低な奴だ…………… 誰も俺なんて……………」

陽弥が悲しき表情をするとエミリアが言う。

「そんなことはありません…………… ! 私は…………… 貴方の事が好きなのです!…………… 今も愛しています!」

「…………… 知ってるよ」

「え!」

「お前がエヴァに拐われたときに、ルナが教えてくれたんだ…………… 俺も、お前を愛してる…………… エミリア」

「陽弥様……………」

陽弥とエミリアはお互いの唇を近付け、星が出ている夜空でキスをした。

調度その頃、格納庫に収納されているシグムディアとシグニューが謎の言葉を発していた。

「この愛が全てを超越する…………… そして二つの愛が一つに成りし時、大いなる禁断の姿へと覚醒する…………… その力は…………… どんな災いを持つ終焉と混沌をもたらす者も凌駕してしまう…………… さらに…………… 総合生命体“シンセシス”の…………… 真の力を発揮する事になるだろう……………」

### 第36話：奴隷解放

一方、アヴアロンにいるテストダ達はジュリオとアポカリプスが居ない今、行動を開始していた。

現在、テストダ達は最下層エリアの牢獄を一つ一つ調べるが、

「こちら、テストダここはいない…………… ミラーナ、オルト…………… そっちは？……………」

「此方もいない」

「此方もだ」

「一体何処にいるんだろう？アジマス陛下は……………」

ミラーナがテストダに問い掛けると、ある提案を言う。

「分からない…………… アヴアロンに来てから、5ヶ月だからなあ…………… どんずまりだ…………… アジマス人に聞いてみよう……………」

「でも、皆アポカリプスにジャックされているよ？」

「嫌、ジャックされてない者達がいる……………」

「え？」

二人はオルトの提案を聞く。

「…………… 反アジマス連邦政府だ…………… 彼等のフレームは旧式だから、アポカリプスもジャック出来なかった…………… 彼等に接触して、アジマス陛下のいる場所を特定し救出、さらにここに囚われている奴隷…………… 嫌、ホライゾンに住む人やエルフ達を無事にホライゾンに滞在している同盟軍に保護してもらおう…………… それと……………」

「それと？」

「ジュリオは旧支配者と手を組んで何をするか…………… 俺にとっては嫌な予感しかしない……………」

「確かに……………」

「私も…………… 何か…………… ジュリオのやっている事が正義じゃなく…………… 完全に悪いことをやっている…………… 私なら、ジュリオの部屋に忍び込めることができる。」

「よし、俺も一緒に行く。オルトは反アジマス連邦政府に接触し、アジマス陛下の救出…………… 良い？」

「分かった」

「よし、行くぞ」

「ええ、」

テストとミラーナは最上層の宮殿へ、オルトは反アジマス連邦政府がいる場所へ、二手に別れて行動を開始した。

テストとミラーナは宮殿の中の隠し通路を通り、ジュリオの部屋に辿り着いた。

「ここがジュリオの自室かあ……………」

「何処かに秘密の場所があると思う……………ん？」

ミラーナがジュリオのデスクの上や中にある資料を浅くついていると、デスクの一ヶ所だけ色が違うことに気付き、ミラーナは違う所を押すと、テストの近くにあった棚が移動し始め、中から隠し通路が現れたが、入り口の前にレーザーで守られていた。

「やっぱり……………だが、レーザー指紋スキャナーで塞がれている……………」

「テスト君……………それなら、私に任せて」

ミラーナがポーチから取り出したのはメイク道具だった。その事にテストは呆れる。

「ここでお化粧?!……………そんなもので!?!」

「知ってる? テスタ君、お化粧道具は……………色んな事に役立つ事が出来るって言うの……………どれどれ? まだ、指紋が残っている筈……………」

ミラーナはポーチから、パウダーとブラシを取りだし、それをレー



ザー指紋スキャナーに塗り付ける。

「最後に…………… 毛穴パックを…………… 開いた！」

パウダーが付着している指紋スキャナーにパックを貼り付けると、スキャナーがパウダーが付着している指紋に反応して、レーザーが消えた。

「流石だ……………」

テストは感心しながら、ミラーナと共に中へ入っていった。

出口が見えてくると、そこは謎の空間だった。

「こんな所に秘密の場所を隠していたんだ……………」

テストは辺りを見回していると、レバーがあり、それを引くと、空間が明るくなった直後、二人の目の前に、巨大な容器があり、その中に生命体らしき物体が入っていた。

「何だこれは……………?!」

「テスト君！あれ！」

ミラーナの指す方向に、牢獄に入っているアジマスが倒れていた。

「あれは…………… アジマス陛下！」

「陛下！」

「うう…………… お前達は……………？」

「僕達は貴方を助けに来ました…………… ジュリオとアポカリプスの目を盗んで……………」

ミラーナが牢獄の鉄棒を溶切し、アジマスを救出した。

「駄目だ…………… そんなことをしたらお前達は……………」

「約束したのです…………… 彼と……………」

「彼とは？」

「ジュリオにインフィニティソウルを奪われた者との約束です……………」

「インフィニティソウル…………… まさか!？」

「陽弥・ギデオン…………… 彼こそ、俺達、新人類に正しき道へ導いてくれる者です。マナを頼らない事で、そこから新しき人生を与えてくれる…………… 星を護りし神…………… 護星神なのです……………」

「何と!…………… 彼が?!」

「ええ、……………ゾル・ドゥーで会い、彼は僕に言いました……………必ずあなた方アジマス人とミスルギの人達……………そして、全種族を和解させると……………」

「テスト君！」

「どうした？」

「大変よ！オルトが反アジマス連邦政府と接触して、オメガが代わりに通信してきたの！」

「僕が話す。」

テストはミラーナの通信機を受け取り、通路回線を開いた。

「こちら、テスト……………どうぞ」

「こちらオメガだ…………… たった今、入った情報によると、ジュリオは暗黒宙闖で封印されている四神柱を解放した……………そして今、ジュリオの旗艦がアヴァロンへ帰還しているとの情報が入った。」

「何だって!？」

「これから我々反アジマス連邦政府は、オルトと共に奴隷達を解放し、アヴァロンからホライゾンに滞在中の同盟軍基地へ移行する……………アジマス陛下を救出したなら、急げ！」

「了解しました」

テストはオメガの命令に従う。

「ミラーナ、アジマス陛下を連れて、反アジマス連邦政府と合流して、アヴァロンから、脱出するぞ！」

テストとミラーナはアジマスを抱え、脱出しようとしたその時、出入口から女性の声がした。

「ふくん……………無事に脱出できたら……………良いわねえ♪」

「っ!!」

出入口にγがテストの道を阻んでいた。

「γ!!」

「勝手に、アジマスをも同盟軍に渡すなんて……………愚か者ねえ♪……………それとあのヴェクタ人の青年……………今度は神になって、皆を和解させるなんて……………アホみたい……………そしてあなた達の行動は最初っからお見通しなのよ♪」

「γ!!聞いてくれ!旧支配者は危険すぎる!.....特にクトウルフは復讐の怒りに燃えている!皆死ぬぞ!」

「なれば、良いじゃない.....理想の世界になれるなんて、素晴らしいわ♪」

「あなたは何を言っているんだ.....!?!」

「何もお?.....ああ、それと.....私.....元からγじゃないけど♪」

「え?!」

「γは仮の姿.....私の本当の姿は.....」

するとγの装甲とフレームが段々と崩れ落ち、フレームの中から醜くおぞましき植物が生えていき、頭部から、巨大な華が生え、触手の先端には今まで殺してきた女性達を取り込まれており、花の中から生身の体を持つγが鋭い目付きでテストアを見て、答える。

「旧支配者大銀河帝国第7界邪神ヴルトウームですよ♪」

「嘘.....でしょ.....!!?!」

「γが.....邪神皇の一人.....!!?!」

「正確に答えると”原初の華”と言って下さい.....私.....自分より綺麗な物を見るとつい私のコレクションに入れなくなっちゃうの.....」

ヴルトウームが触手を降り下げた。テストア達はヴルトウームの触手を見て驚愕した。

「っ!!!」

触手にまだ生きている女性が掠れた声で、叫んでおり、女性達の体にヴルトウームの根が何カ所か刺さっており、血を吸っていた。

「このコレクションはみ〜んな.....私より綺麗な女達よ.....どお、綺麗でしょ?でも.....一番気に食わない美貌を持つ女性.....ソフィアは私のコレクションに加えない.....あの女は剥製にしてやるから.....オホホホホ♪」

ヴルトウームが笑っているとミラーナが言う。

「.....あなたは人を殺して、それで楽しいのですか?」

「ええ、そうよ.....私より綺麗な女は皆、私のコレクションか

道具……………それか私のこの美貌を保つための食料当然ですわ……………勿論……………あの女も……………」

「あの女……………?」

「クアンタの姫君……………あの子の美貌は実にビューティフルだと……………だけど、私より一番綺麗だわ……………絶対にあの女の皮を剥いで、私があんな女になりましたよ……………」

「クツ!!!」

二人は同時に怒り、高周波ソードを展開して、ヴルトウームに斬りかかった。しかし、触手から刃が飛び出しテストとミラーナの高周波ソードを防御した。

「あらあら〜?……………このヴルトウーム様に逆らうなんて、良い度胸してるじゃない?」

「黙れ!化物!!」

「私達はずっとエミリア姫様に支えてきた!そして目が覚めた!……………本当の敵はノーマでも、同盟軍じゃない!あなた達旧支配者だよ!!!」

「ウフフ……………殺れる者なら……………殺ってみろ!!」

ヴルトウームの衝撃波がテスト、ミラーナ、アジマスを襲い、三人は宮殿の外へ吹き飛ばされた。

「カハッ!!」

「テスト……………君!!」

すると吹き飛ばされた穴からヴルトウームが現れ、三人を見る。

「全く……………頑固な下等生物なこと……………テストはデザートとして……………ミラーナとアジマスはオードブルとメインディッシュにしましょう……………ウフフ♪」

「ミラーナ!逃げろ!!」

「それじゃあ……………♪」

ヴルトウームは素早い動きで、ミラーナに近付き、ヴルトウームの生身の口が裂け、ミラーナを食べようとしていた。

「いただきます♪」

「クツ!」

ミラーナはアジマスを庇ったその時、別の方向から、ミサイルが飛来し、ヴルトウームに直撃した。

「っ!？」

テスタはミサイルが飛来した方向を見ると、赤と黒のフレームをしたオメガとミサイルランチャーを構えたエヴァがいた。

「二人とも……………下がっている……………!」

「オメガ!エヴァ様!」

オメガはガンブレードを展開し、ヴルトウームに刃を向ける。

「γ……………ようやく本性を現したなあ……………」

「ウフフフ、オメガじゃありませんか……………お久しぶりですねえ?」

「黙れ、γ……………嫌、ヴルトウーム……………貴様は何れだけ何も罪もない女性達の呑み込み……………そして女性の美貌のエキスを搾り取って……………若返りよって……………この化物がっ!!」

オメガが叫び、ガンブレードを構える。

「行くぞ……………オメガ!」

「ああ!」

エヴァもビームソードを展開して、ヴルトウームに突撃した。

「良いでしょう……………相手になって殺りますわ!」

ヴルトウームは触手を前に出すと、取り込まれている女性達の腕が伸長し、鋭い突起状に変わり、エヴァとオメガに襲い掛かるがエヴァとオメガは上手く回避する。

「呑み込まれた女性達が攻撃している!」

「だが、俺のパルスキャノンが彼女等に当たったらまずい!」

「俺に任せろ!」

エヴァがビームで突起状を防御しながら、突撃すると、エヴァの目からビームを発射してきた。

「見えているぞ!」

エヴァはアクロバティックな回避でヴルトウームのビームを回避し、空高く飛び上がり、アームキャノンから翠の粒子光線がヴル



「ジクス！キサナドゥ！」

2体の元にオメガ達 came。

「リーダー！此方はもうホライゾンの人達を収用しました！」

「こっちもだエルフ達やメトロの人々も収用した！いつでも脱出出来るぞー！」

「よし！全艦はこれより、アヴァロンを脱出し、ホライゾンに滞在中の同盟軍基地へ向かう！」

オメガ達は急いで、命令し、巡洋艦20隻、戦艦、駆逐艦合わせて30隻がアヴァロンから脱出した。

オメガの旗艦”プロヴィデンス”に乗り込んだテストタとミラーナとオルトは疲れていた。そこにエヴァが優しく声をかける。

「お前達、大丈夫か？」

「二はい……………！」

「そうか、良かった……………」

「僕達……………どうなるのですか？」

「分からない……………それと言い忘れていたが悲しい知らせがある……………ジュリオが邪神に体に乗っ取られた……………」

「え!？」

突然の出来事に三人は驚く。

「理由は簡単な事だ……………同盟を組んだ後、ダゴンはジュリオをタブラかし、最悪の四神柱、ナトラータホテプ、クトウグア、ハスター、ガタノトアを復活させた直後、ダークマタージュエルを強奪し、邪神皇の一人である旧支配者大銀河帝国第8界アイホートがジュリオの体に入り込み、体と脳を支配し、アイホートはジュリオになった……………」

「そんな……………！」

「アポカリプスは!？」

「……………多分、殺されたと思う……………」

「すると…… アヴァロンに戻ってきているジュリオは……」  
「恐らく、アイホートだ……」

エヴァは悲しい表情をすると、オメガが言う。

「これより！ 大気圏突入を開始します！」

「捕まっておれ！」

「はい！」

反アジマス連邦政府の艦隊が大気圏に突入していく。

そして数時間後、宮殿では、戻ってきたジュリオ…… 嫌、アイホートは暴れまくるヴルトウームを見て、呆れる。

「…… 全く…… お前と言う奴は……」

「クソツ！クソツ!!クソツ!!あのガキとエヴァめえ!!」

「何を喚いているのだ？ヴルトウームよ……」

突然の声に二人は振り向くと、黄色いフードをした黒い男…… 漆風のハスターと、アンモナイトのような貝殻をしたタコ…… 絶海のガタノトアが姿を現した。

「ハスター様！ガタノトア様！」

「お前の強欲は当たり前前の事だ…… それだから、油断してしまうのですよ……」

「も…… 申し訳ございません…… ハスター様」

ヴルトウームがハスターに敬礼すると、ガタノトアがハスターに怒る。

「…… ハスターよ、そうヴルトウームに甘やかすな、今、こうして我々はジュリオのアホのおかげで復活できたからなあ…… そうだろう？アイホート」

するとジュリオの口から、蜘蛛のような足を持った黒き物体が出て



きた。

「キシキシシシ…………… 全く人間は愚かで、欲深く、傲慢で暴力と差別で解決しようとする…………… ガタノトア様の言う通りで御座います……………」

「うむ、それで……………」 傲慢のナトラータホテプ”と” 生きる炎のクトウグア”は？」

「…………… 二人とも…………… どちらが皇帝代理になるか、言い争っています。」

「ハア…………… 全く、あの二人はまた喧嘩か…………… まあ良い…………… クトウルフ皇帝が復活すれば…………… このアヴァロンの本当の力が出せるのだが……………」

「そうだろ？アポカリプス」

「ガタノトアの後ろにアポカリプスが来た。」

「ええ、」

アポカリプスは不気味な微笑みで、ジュリオに憑依したアイホートを見ていた。

一方、日が沈むホライゾンに滞在中の同盟軍本部では、トゥーリアン兵士が管制塔から見張っていると、

「ん？…………… あれは？」

上空から何かが降下してくる影が見えた。そして徐々に影がうつすら現すと、トゥーリアン兵士は叫ぶ。

「ネオ・ミスルギ皇国艦隊!!？」

複数の艦隊が同盟軍本部へと飛来してきた。トウーリアン兵士は直ぐ様本部に通信を入れた。本部では、軍艦や対空パルスキャノンが起動し、ネオ・ミスルギ皇国艦隊を警戒していた。そして本部に、アンジュとサラのヴィルキスと焰龍號、そしてシンのペルシウス、タスクのヘラクレス、リュウガのヤマトが武器を構えていると、シンの通信機から、デルタの声がした。

「いいえ！待ってください！……あれは……」

すると今度は、飛来してきたネオ・ミスルギ皇国艦隊から通信が入る。

「デルタ様！」

「オメガ！キサナドゥー・ジクス！」

デルタの言葉に、シンは驚く。

「オメガ……!!?とすることは?!」

「はい！反アジマス連邦政府です！貴方達の味方です！」

シン達は急いで、警戒体制を解除し、オメガの艦隊を本部の港に着させた。

そしてオメガの艦隊から、たくさんの人々が出てきて、ようやくホライゾンの人々と再開できた。メトロの子供達もやっと両親との再開を果たした。その中にアジマスがデルタに駆け寄る。

「デルター！」

「兄様！」

二人は抱き合っている中、オメガはシンにこれまでの事を報告する。

「ええっ!!?ネオ・ミスルギ皇国が旧支配者大銀河帝国に占拠された?!」

シンが驚くと、アンジュが問い掛ける。

「何？その旧支配者って？」

「旧支配者大銀河帝国……俺が倒したドゥームを異形の邪神に変えた邪神軍団国家だ……」

「どう言うことなのですか?!」

サラが問い正すと、シンは答える。

「言つての通りだ……あの時、本当の敵はドゥームではなく、

「奴等と言うことだ……………」

「その通り……………」

シン達の前に現れたのは、陽弥を痛め付けたエヴァであった。

《エヴァ!!?》

「奴等是对にジュリオからダークマタージュエルを強奪し、そのジュリオは今、アイホートが成り済ましている……………」  
我々は何とか  
「奴隷解放をし……………」 『エヴァアア!! 貴様!』……………」 ?」

エヴァの前に怒りの表情をしたヒルダが現れた。

「よくも陽弥を!! 私の子を!!」

するとヒルダは腰部からナイフを抜刀し、エヴァに突撃してきた。

「お母さん!」

「この鉄屑野郎がああつ!!」

ヒルダは渾身を込めたナイフでエヴァの顔を斬った。

「ヒルダ!」

「お母さん!」

シンとルナは叫ぶと、ヒルダは体を起こし、荒い息を吐いていた。

「ハア……………ハア……………ハア」

するとエヴァの仮面が真っ二つに割れ落ちるとエヴァの額から、血が流れ落ちる。

「……………」

ヒルダはエヴァの素顔を見て、驚く。

「っ!!」

それに続き、タスク達も驚く。

「……………ハッ!」

「嘘っ!」

「まあ!」

「え……………!!?」

「マジっ!」

シン達が驚いていると、エヴァは頭部に装着していたプロテクトアーマーを解除すると、アーマーが外れ落ち、深緑に満ちた長髪とトパーズの様な黄色い瞳をしたもう一人のシン・ギデオンであった。

「シンが!!..... 二人!?!」  
「どういう事なんだ.....:?!」  
「.....:?!」

オメガも驚くと、シンとエヴァは互いの同じ素顔を睨み合っていた。

### 第37話：邪神覚醒

オメガプライムス内部の飼育エリア『架空大地ウィーテラ』にいる陽弥は、スペクトロボス達の強さを確かめていた。

「さくと、スペクトロボス呼び出してみるか……」

陽弥はコスモバイルを起動し、上に掲げ、それぞれの名前を叫ぶ。

「出てこい！ガルデイオラ！アレグレオン！ライパルド！ガーデイホーク！マヤダイノス！ブレスパイク！」

コスモバイルから巨大な牙と角を持つガルデイオラと紅蓮の鬣と体に紅炎を放つアレグレオンと翼のブレードと鋭い爪を持つライパルド、色彩な翼で羽ばたくガーデイホーク、巨大な角と古代マヤ文明の体をもつマヤダイノス、角と巨大な三本爪と巨大なスパイクハンマーである尻尾を持つブレスパイクが現れた。

「お前達の方……俺にぶつけてこい！」

陽弥は自分に指を指すと、スペクトロボス達は雄叫び上げ、陽弥に攻撃してきた。陽弥は回避するとブレスパイクが尻尾のスパイクハンマーを降り下ろした。

「ブレスパイクの尾は無茶苦茶だなあ……何と言つてもこのスパイクハンマーだ……」

陽弥はブレスパイクのスパイクハンマーを素手で受け止め、振り回し投げると、今度はガーデイホークとアレグレオンが陽弥を挟み撃ちを仕掛ける。

「来たな、アレグレオン、ガーデイホーク……!!」

ガーデイホークの鉤爪から竜巻状の刃が飛び散り、アレグレオンは口から炎のレーザーを放つ。陽弥は飛び上がり、2体の攻撃を回避した。

「アレグレオンは炎のレーザーを吐くことが出来るのかあ……そしてガーデイホークはあの鉤爪からカマイタチを放つ事が出来るのかあ……ん？」

陽弥の頭上から、ガルデイオラが噛み付いてきた。陽弥は急速でガ

ルディオラの噛み付き攻撃を受け止める。

「ほお、ガルディオラはその巨大な牙で敵を噛み殺すって訳かあ……………だがっ!!」

陽弥は筋力を使い、ガルディオラを持ち上げた。

「どっせえええええい!!!」

陽弥はガルディオラを持ち上げながら振り回し、向かってくるブレスパイクに投げ付けた。ブレスパイクは飛んでくるガルディオラを受け止めた。

「ふうく……………」

陽弥が呑気に2体を眺めていると、後方から、ライパルドがウィングブレードを降り下げてきた。陽弥は急速で魔剣グラムを抜刀し、ライパルドのブレードを防御する。さらに防御している陽弥の後方からマヤダイノスが尖らした角を見せつけ、突進してくる。陽弥は七星剣を抜刀し、マヤダイノスの突進を防御した。

「ライパルドは翼のブレードで相手を切り裂き、マヤダイノスはその自慢の角で相手を串刺しが出来るのかあ……………なら!」

陽弥は体から衝撃波を放ち、ライパルドとマヤダイノスを吹き飛ばした。

「これは……………受け止められることが出来るかな?」

陽弥はグラムと七星剣を収納し、光の右腕を展開した。すると光の右腕に粒子が集まっていき、小宇宙が浮かび上がる右腕に変わった。

「森羅万象……………コズミックフィンガー!!」

陽弥は小宇宙の右腕でスペクトロブス達へ止めを刺そうとした時、スペクトロブス達の体が赤、青、緑、黄色、黄土色に変色し、陣形を整え、ガルディオラが咆哮を放つ。すると虹色に輝く粒子光線が陽弥のコズミックフィンガーに直撃する。

「何っ!?!」

陽弥のコズミックフィンガーが微かだが、削れており、陽陽弥はスペクトロブス達の放つ技に興味を持つ。

「コイツら……………火、水、草、土、天……………五つの属性の巨大なエネルギーの集合体を作って、それをガルディオラが放つって言う

「事かよ……………」

スペクトロブス達のパワーさらに上がり、陽弥のコズミックフィンガーが押されていく。

「クッ！ビッグバンフィンガーが押されてる……………?! スペクトロブスの力って合体するとこんなに強いのか?! 嫌、神に近い力だろ!!」

スペクトロブスの力に押される陽弥は突然、笑う。

「グッ！なら……………これならどうだ!!?」

すると陽弥は闇の左腕を展開し、コズミックフィンガーと合わせる。

《っ!》

スペクトロブス達は驚くと、陽弥は言う。

「ドゥームの闇の指……………その名も、”ネビュラフィンガー”だ!!」

するとコズミックフィンガーとネビュラフィンガーが合体し、黄白き光と赤黒き闇の紅炎を放った黄金に輝く、親指が二つある手に変わった。

「光と闇を一つに……………ゼロ・プロミネンスフィンガー!!!」

陽弥のゼロ・プロミネンスフィンガーがスペクトロブス達の技を押し始め、そして、近付いた直後、爆発し、陽弥とスペクトロブス達は吹き飛ばされたが、陽弥は体制を立て直し、決めポーズをした。

「……………見たか！これが俺の実力だ！」

するとスペクトロブス達は負けたことに落ち込んでいた。陽弥は落ち込んでいるスペクトロブスを励ました。

「お前らも良く頑張ったなあ……………スゲエよお前達は……………あんな技が使えるなんて……………」

するとガルディオオラが長い舌で陽弥の頬を舐める。

「ハハ！分かった！分かったって!……………今日は休んどけ……………もしかしたらホライゾンに着いたら、戦闘開始かもしれないから……………お前ら……………力を貸してくれよ?」

ガルディオオラ達は元気の良い返事をした。すると陽弥は自分の手を胸に触れた。

「110体の星獣スペクトロブス達…………… 極幻王カイオウ、陽光神龍アポロドラゴニス、黒陽神龍アポロドレイク、太陽神龍ヘリオスドラゴン、そして超神星煌龍帝ノヴァ…………… さらに……………」  
すると陽弥は右目の眼帯を外した。

「この右目は…………… 最後の手段として取っておこう……………」  
俺の心の闇で生まれたもう一つの姿……………」

スペクトロブス達は陽弥のおぞましき右目を見て、陽弥を慰めようとする。

(具体的に答えますと現在の陽弥の右目は『東京喰種(グルル)』の主人公“金木”のような黒く赤い瞳を持つ眼になっており、右目の回りに赤筋、青筋が見えている状態です。)

「お前ら…………… これからお前らに見せたい姿がある…………… 怖かったら…………… 目を瞑って良いぞ……………」

すると陽弥は眼帯をポーチに入れると叫んだ。

丁度その頃、架空大地ウィーテラまでやって来たエミリアが陽弥を探しにやって来た。

「陽弥様!…………… 陽弥様!…………… もう、何処へ行ってらっしやったのでしょうか…………… あら?」

地平線の彼方に”ポツン”と赤黒く輝く炎が見えていた。

「何でしょう?あの赤黒い炎は……………?」

エミリアは赤黒く輝く炎が出ている場所へ向かっていった。

そして陽弥はに右目を解放し、スペクトロブス達にそのおぞましき姿を見せていた。右目の半面が黒くなり、髪の色が赤から黒く染まり、髪の上に赤い高周波を放ち、鎧は白から、黒へ変色した。

「これが…………… 俺のもう一つの姿だ…………… 怖いか……………?」

陽弥はスペクトロブスに問い出すと、スペクトロブスは無表情で、陽弥のおぞましき姿をじつと見ていたその時、



「陽弥様〜!」

「ヤバッ!」

陽弥は急いで、右目を隠そうとしたが、遅かった。

「陽弥さ……………ま?」

「エミリア……………!!」

陽弥はとっさに思いつき、ガルディオラの後ろに隠れ、ガーディオラの翼で顔を隠した。

「ぐ……………ぐめん!!この姿はえくつと!その……………怖かった

ら目を瞑って良いんだぞ!だから!」

「何を言ってるっしやいますの?」

「え?」

「前にも言いました……………陽弥様がどんな姿でも、私は貴方を愛していますと……………!」

「ごめん……………」

陽弥は隠れるのを辞め、エミリアの前に出た。

「一体どうやったたらそんなお姿に?」

「色々あつて……………身に付けた……………この姿は俺の闇の

姿と言つても良い……………俺が右目に眼帯を付けていたのは……………この姿を皆に見せたくなかったから……………

理由は子供達が俺がこの姿を見て怖がつていたこと……………話にならないくらいなんだよ……………」

「まあ、そんなことが……………」

するとエミリアは陽弥の体をあちこち見て回った。

「何?」

「確かに……………これはちよつと……………子供も怖がるのも当然ですねえ……………」

エミリアの放つた言葉に陽弥は悲しむ。

「当然って!……………ハア……………オーディンやツールを含め

るアース神族やラルフ達も俺の姿を見て、ビビって逃げていたんだよ……………優位つ怖がらなかったのがスペクトロブスとエミリア

だけだよ……………これマナや爺いに見せたら……………どうなるんだ

ろうかあ？得に厄介なのは爺いだ……………」

「呼んだか？」

「あゝ、呼びました…………… って!？」

「あらまあ！お義祖父様！」

エミリアの側にサムがいる事に二人は感じ取れなかった。

「全く…………… 俺の知らない間に…………… こんな姿を隠して……………」

サムは怒りながら、陽弥に言う。

「…………… わっ!…………… 悪かったな!……………」

「その姿…………… どうやって身に付けたんだ？」

「500年前だよ…………… 普通に試練をやっていたら、これに覚醒したんだよ…………… 使った結果…………… 余りにも強大すぎて、暴走して…………… ラルフ達が俺を取り押さえていた…………… 幸い、俺の中に眠る超新星煌龍帝ノヴァが力を貸してくれた…………… そのお陰で何とかこの力を扱えることが出来たんだ…………… でもやっぱりこの姿はちよつと怖いなあつて……………」

陽弥が頭をかいていると、サムは陽弥に言う。

「…………… 陽弥」

「？」

するとサムは胸元から、何かを取り出した。

「これを…………… 大事に持っておけ……………」

サムが取り出したのは、胸元に付けるパーツの一部であった。

「これは？」

「我等、ギデオン家の由緒正しき者にしか与えられない物だ…………… お前のその指輪と腕輪を近づけてみる……………」

「え？」

「良いから……………」

陽弥は恐る恐る父親から貰った赤い宝石が付いたペンダントと銀河七聖龍の腕輪をサムから貰ったパーツに近付けたその時、陽弥のコスモバイルから極幻王が現れた。

「カイオウ?」

するとカイオウは雄叫び上げ、陽弥が持っている3つの装飾品に入り込んだ。すると3つの装飾は1つの装飾になり、陽弥の胸元にガツチリと装着された。(分かりやすく言うとカラータイマー見たいな感じです。)

「これは!?!」

「ジオだ……………」

「ジオ?」

「その姿のまま、ジオに触れてみる……………」

陽弥はサムの言う通りにジオに触れた。

すると陽弥のおぞましき姿が翡翠色に発光し、みるみると姿が変わっていく。

頭から角のような突起が三つ生えており、腰には深紅の炎の模様が描かれている黒きマント、体中にはたくさんの装飾を赤と黒と黄色のアーマー、最後に右目が赤黒く、左目に傷があり、蒼く輝くジオが陽弥の胸元に張り付いていた。後頭部には陽弥の紅き長い髪を侍のように整えており、最後に三つの角の真ん中が前へ引つ張られるように移動し、甲殻昆虫の様になった。

二人は陽弥の姿を”聖魔王”とも呼べる存在でもあった。

(分かりやすく答えますと、仮面ライダー鎧武に登場したチームバロンのリーダー”駆紋戒斗”がオーバーロード化した姿『ロードバロン』の亜種であり、コーカサスのような頭部になっています。)

「これは!?!」

陽弥はその姿に驚愕する。

「これなら邪神の力を……………崩壊させることが出来る……………」

その名も”アナザー・モード”だ……………」

「アナザー・モード……………」

「その力がかつての先祖も成し遂げなかった姿……………誰かを護りたいと言う姿だ……………」

第38代目ギデオン当主 シン・ギデオンの後継

ぎ……………第39代目当主 陽弥・ギデオンだ……………」

「ギデオン家当主……………か……………分かったよ  
爺い……………それも成れば良いって事だろ？」

「ああ、」

するとサイレンがウィーテラにも鳴り響くと、サムは言う。

「ホライゾンがある宙域に着いたようだ……………」

ユグトラシル船団がワームホールから出ると、目の前に、ホライゾンとアヴァロンが見えていた。陽弥とエミリアはユグトラシル9のステンドグラスから、眺めていた。

「戻って来れたんだ……………皆の所に……………」

「ええ、」

「生きて皆の元に戻ろう……………エミリア……………」

するとエミリアは陽弥に言う。

「不思議ですね……………こんなこと……………」

「え？」

「最初は何が何だか知らなかった私で……………気付いた時

は……………凄く物知りになっていたので……………不思議だと感じま

した。」

「そっか……………」

二人は星を眺めていると、陽弥はある事を思い出す。

「あ！そうだった！……………これ……………」

陽弥が取り出したのは小さな木箱であった。

「これは？」

「開けてみて……………」

エミリアは陽弥からの贈り物を開けてみた。

「っ?!」

それは翡翠の宝石が付いた指輪であった。

「陽弥様……………これは……………!!?」

エミリアは陽弥に質問すると、陽弥は顔を赤くして、答えた。

「その……………左の薬指に……………はめて……………くれな  
いか?……………」

陽弥はそう言うと、エミリアの表情が笑顔になり、陽弥に言う。

「……………はい♪」

「え?……………」

「”はい”と言いました♪」

「つまり!」

「私も……………陽弥様とずっと一緒にいたいです……………」

「ありがとう!」

プロポーズに成功し、陽弥は大喜びを上げ、二人は、優しく抱き合っ  
た。

そして陽弥の後方で遠くにある柱の影からサムはタバコを吸いな  
がら、喜んでいた。さらに、エミリアの後方にはエスメラルダが隠れ  
ながら、ハンカチを持って泣いていた。

「こりや……………邪神達も怯えるだろうなあ……………さてと、そ  
ろそろジャヴィックに連絡するか……………」

サムは携帯用デバイスを持ってジャヴィックに通信を入れる。

『誰だ?』

「俺だ……………サム・ギデオンだ……………」

『サム!?!……………何故お前が!?!』

「その件は後だ……………これより革命連合は……………同盟軍本部  
へと向かう……………そちらの政府や銀河連邦にも連絡しておいて  
くれ……………」

「分かった……………」

「それと……………」

「何だ?」

サムは微笑み、ジャヴィックに言う。

「……………息子、娘……………シンと……………ココ……………俺  
の愛妻……………アリアを呼んでくれ……………アイツ等  
に会いたい……………そしてエミリア姫さんの育て親も  
だ……………彼女に会わせるよう連れてきてくれ……………」  
「分かった……………」

ジャヴィックはそう言い、通信を切ると、サムはアヴァロンを見て、  
独り言を言う。

「さて、帝国と合同軍……………どちらが勝つのだろう  
か……………」

一方、星を眺めながら愛し合っている陽弥とエミリアの身に付けて  
いる指輪から紋章が浮かび上がる。陽弥の真紅の宝石が付いた指輪  
には昆虫の羽の紋章が浮かび上がり、エミリアの翡翠の宝石が付いた  
指輪には蝶の羽の紋章が浮かび上がった。

### 第38話：再会

陽弥達はホライゾンに滞在中の同盟軍本部に向けて、オメガプライムスにシグムディアやシグニュー、サムとアルベルトのプロトヒステリカ、ガーディアンビット格納庫に収納し、アニマノイド、ルトル、フェニキス、オーシャルス人達を移住させていた。陽弥は自室で、エミリアとマナと一緒に楽しみにしていた。

「あく…………… 1650年ぶりだ……！ホライゾンに戻ってくるのは！」

「そうですねえ」

陽弥とエミリアは窓から、星を眺めていると、マナがエミリアに問い出す。

「ママ♪」

「ん？」

「これから何処に行くの？」

「これから？…………… ん…………… 私達のパパとママに会いに行くの…………… マナちゃんにとってはお祖父様とお祖母様かしらねえ」

「じいじとばあば！」

「会うのが楽しみ？」

「うん！」

マナは元気良く返事をする、陽弥が突然笑い出す。

「フフ……………」

「どうしたのですか？急に笑い出して……………？」

「嫌…………… マナがいると…………… 本当に家族だと思って…………… 面白いなあ、と思つて……………」

「確かに…………… マナちゃんは本当に不思議な子ですね…………… 私達の未来の娘なのに…………… あんな事やこんな事も出来るのですから……………」

「そうだな……………」

陽弥とエミリアは笑っているマナを眺めていると、サムが陽弥を読んでいた。

「陽弥」

「ん？」

「ちよつと来い……………」

陽弥は自室から出ると、陰でサムと何か話しており、本人は驚く。

「そんな事をするの?!」

「良いだろ?…………… アイツ等にお前の変わった姿を見せてや

れ…………… ビックリ仰天するぞ♪」

「けど、爺い…………… この力結構キツイんだぞ?」

「心配するな…………… ジオはその力を存分に使いこなすことが出来るようになっていく…………… つまり、その闇はもうお前の物だ…………… きつとドウームは誰かにこの力を使いこなすことが出来る人物を探していたと思う…………… ジュリオの馬鹿皇太子と違って……………」

「それなら良いけど……………」

陽弥は納得すると、サムはあることを話した。

「それに…………… 私がこの世に来る直前に…………… ある二人から

約束されたんだ……………」

「約束?」

「…………… 家の馬鹿息子を助けてやって来れと……………」

「それって…………… ジュリオと…………… アンジュさんの両親?」

「そうだ…………… 彼は今もエンブリヲの呪縛に捕らわれている…………… だから彼等にならなくてこの私がジュリオを解放する…………… お前はクトウルフの復活を阻止しておくのだ……………」

「分かった……………」

サムの頼みを受け入れた陽弥は自室へ戻ると、サムは彼等の事を思い出す。

あの世で、アンジュの父親”ジュライ・飛鳥・ミスルギ”と、アンジュの母親”ソフィア・斑鳩・ミスルギ”がこの世へ行こうとしてい



るアルベルトとサムと話をしていた。

「サム・ギデオンさん……………アルベルトさん……………」

「何だ?……………」

「貴殿に……………頼みたいことがあるのです……………」

「頼み?」

「どうか……………どうか私達の息子……………ジュリオを救つ

てやって下さい……………彼は今も、エンブリヲの呪縛に取り

付かれています……………エンブリヲの呪縛の連鎖

をこれ以上続けさせてはなりません……………そうなつてしまえ

ば……………私達の娘……………アンジュリーゼとシルヴィア

の様に絶望の悲劇が繰り返させてしまいます……………」

「サム・ギデオンさん……………どうか、この通り……………!」

そして、二人は頭を深く下げた。

「……………」

「私達の息子……………ジュリオ・飛鳥・ミスルギを……………エ

ンブリヲの呪縛の連鎖から……………絶ち切つて解放してやっ

てください……………!!」

サムはその事に、思い浮かべる。

「……………飛んでもない事を頼まれたなあ……………でも、や

るしかないか……………」

サムは喫煙所でタバコを吸いながら、灰皿の吸い付きたタバコの灰  
を見ていた。

陽弥はオメガプライムスの艦橋から、ユグドラシルの発着港から、  
見送っているラルフ達に手を降っていた。

「それじゃ!行ってくる!」

「困った事があれば、俺等と呼べ!……………いつでもどこでも、革  
命連合が援軍に入るから!」

「おう！その時は、ちゃんと借りを返すからなあ！」

陽弥は見送っているラルフ達に敬礼し、ラルフ達も陽弥に敬礼した。オメガプライムスがユグドラシル船団から離れると、船団は光学迷彩を起動し、姿を隠した。

「さてと……………そろそろ大気圏突入しますかあ！」

オメガプライムスは光学迷彩を起動したまま、出力を上げてホライゾンに向けて発進し、大気圏を突入した。

一方、シン達はジャヴィックに指定された座標に来ていた。

「ジャヴィックはこの辺りに、おかしな周波数が出ていたと言つて……………こうやって、ココも、ミランダも、母さんも、ヒルダも、ルナも……………後、ヴァルネア夫妻とマリア姫殿下や、カトリーヌとセバスチャンも連れてきたが……………関係あるのか？」

「っ?」

カトリーヌは、目を瞑っているセバスチャンに話し掛ける。

「どうしたんだ……………セバスチャン？」

「空から……………何かが、降りてきている……………」

《え?》

セバスチャンの言葉で皆は疑問に思っていると、シンも空から何か気配を感じた。

「本当だ……………確かに……………だが、何だろう?この感じ……………空から……………」

「おい！シン！何を言ってるんだ!?!」

ヒルダが怒鳴りながら、シンに問い掛けると、シンは答えた。

「空から二つの力を感じるんだ……………その二つから……………何か懐かしい様な物が……………」

すると、突風が吹き荒れていく。

「風が強くなりましたねえ……………」

「嫌、さつきから……………段々と強くなっていますよ?!」

「そう言えば……………」

ココやミランダ、アリアが言うと、ルナは空を見て、叫ぶ。

「お父さん!あれ!」

ルナの指す方向を見ると、とてつもない程の雲が稲光をしていると、雲の中から、物凄く大きな戦艦が出てきた。

「な!……………何だあれは!!?」

超巨大戦艦はいろんな色を発光しながら、シン達の頭上を通りすぎていき、シンは余りの大きさに驚愕する。

「でっ!……………でっ!!……………でかあああつ!!!!」

オメガプライムスの艦橋にいる陽弥は、オメガプライムスに命令した。

「オメガプライムス!……………フォートレスモード!!」

オメガプライムスの目が光出すと、脚部ブースターが変形し、台に変わり、先端が割れ分かれていく、ヴァルネア夫婦は変形していくオメガプライムスに驚く。

「何だあの戦艦は!……………変形するのか!!?」

すると脚部のブースターから、キャタピラが出てきて、陸に着陸し、巨大なキャッスル級の要塞へと変形し終えた。

「……………要塞に……………なった!!」

するとオメガプライムスのあちこちから、蒸気が噴出すると、シャフトが徐々に、開いていく。

「要塞から……………誰かが出てくる……………この感じは……………」

《……………》

中から現れたのは、邪神覚醒でアナザーモードになった陽弥が姿を現した。

「この感じ…………… ドウム!!!」

《え!?!》

ヒルダ達は驚くと、アナザー陽弥は叫ぶ。

「還ってきたぞおおお!!」

「何故ドウムが!!?」

「しかも、極悪な姿になっている!?!」

ヒルダが言くと、アナザー陽弥の後ろから、ダイノシグナルズ達が現れる。

「行け！我が僕達よ！そして邪神軍団を滅ぼし！ホライゾンに乗つて  
るのだ!!」

「クツ！何て言う数だ！」

「こんなの相手出来るかつつうの!?!」

「ジャヴィックめ!…………… 俺たちをここに呼んだのはこう言う事  
なのか!?!」

「シン・ギデオーン！先ずはお前から血祭りに殺る！」

アナザー陽弥は鞘からロングソードを抜刀し、シンに突撃してく  
る。

「クツ！止む得ない！」

シンはビームセイバーを連結させ、構える。

「押し通くる!!!」

アナザー陽弥のロングソードがシンのビームセイバーに斬りか  
かった。

「でやあああああ!!!」

刃と刃が当たった直後、アナザー陽弥のロングソードが風船の様に  
割れ、中から、ビラが散らばる。

「え!?!」

シンは何が起こったのか、さっぱり分からなくなると、急に陽弥が  
笑い出す。

「…………… プツ!…………… アハハハハ!!」

「え?!…………… どういう事なんだ?!!」

「引っ掛かった♪邪神覚醒解除！」

陽弥はアナザーモードを解除し、普通のオリジンへと戻った。

「お前は?」

「俺だよ!俺!..... 陽弥・ギデオン♪」

陽弥は聖鎧の兜を脱いだ。

「..... 陽弥?!」

「お兄ちゃん!!」

「アハハハハ!!..... 皆、引っ掛かり方が凄いや!」

「..... は!」

シンはようやく、自分達の現状に気付く。

「あく!クソツ!ジャヴィックに騙された!..... グル  
だったのかあ!!!」

「どういう事なんだ!」

ヒルダがシンに問うとシンは答える。

「俺たちは、まんまとジャヴィックの嘘に騙されたしまったと言うわけだよ..... 嘘だろ!?!」

シンは頭を押さえながら、ガツクリとなる。するとヒルダは陽弥の髪を見る。

「陽弥..... あんた髪型変わったなあ」

「父さん、母さん、ルナ、ココ叔母さん、ミランダ叔母さん、婆あちやんも..... ゴメン!」

陽弥はシン達に深く頭を下げ、謝罪した。

「大変皆に心配かけました!」

謝罪し終わると、今度は敬礼した。

「陽弥・ギデオン!ここに復帰しました!痛っ!」

すると、シンは陽弥の頭を殴ると、いきなり陽弥を抱いた。

「復帰しましたじゃねえよ!..... 俺らが何れだけ心配したか!?..... お前今まで、何処に!」

「てつきり私達はお兄ちゃんが死んじやったかと!」

「その事は、後で良いから..... それより..... 彼が父さんに会いたいって.....」

「え?」

陽弥はシンから離れた直後、陽弥の後方から現れたのは、なんと、父親であるサム・ギデオン本人であった。これは流石のシンとアリアも驚愕した。

「シン……………」

「そんな…………… けど、その声…………… 間違いない！」

サムはバイザーを解除し、素顔を見せる。

「親父…………… !?」

「久しぶりだな…………… シン……………」

「貴方…………… !?」

「…………… アリアも…………… 元気そう良かった……………」

「お父さん？」

「ココも……………」

そして、本人との再会に驚いたシンは目から大粒の涙が溢れ、叫んだ。

「…………… う…………… う！…………… うう！……………」

ハア、ハア！…………… ううう…………… つ！親父いいい！！」

「シン…………… !!」

二人は嬉し泣きしながら、抱き合った。

「また…………… 逢えた…………… そうだ…………… この匂い…………… 間違

いない！親父だ…………… !」

「シンも良く頑張った…………… 何とかアルベルトと共に、ヘリオスとセレーネに頼んで、この世に留まらせているんだ…………… アリ

アもココも…………… 無事で良かった…………… !」

するとシンの元にアルベルトがひよっこりと、現れた。

「弟よ……………」

「アルベルト兄さん…………… !?」

「…………… 元気そう良かった……………」

アルベルトはシンをそっと抱いた。陽弥はその光景に見とれておると、ヒルダが陽弥の頭を撫でる。

「…………… 母さん」

「あんた…………… シンにお義父さんを会わせるつもりだったんだな？」

「うん…………… ルナは、写真しか見てないから、初対面だったね？」  
「うん……………」

ルナは返事をする、サムがルナに近づく。

「ルナ……………」

「お爺ちゃん……………」

サムはルナを優しく抱くと、陽弥は次に、アストラッド王に話し掛ける。

「アストラッド王……………」

「陽弥君……………」

「実は…………… 会わせたい人は…………… 他にもいるのです……………」

アストラッド王は陽弥が手を指す方向にオメガプライムスのシャフトが見えた。すると中から、現れたのは、自分達の義理の娘でもあるエミリアが姿を現した。

「……………」

「御父様…………… 御母様…………… マリア…………… カトリー

又…………… セバスチャン……………」

「…………… エミリア!!……………」

「お姉様!」

ヴァルネア夫婦、マリア、カトリーヌ、セバスチャンは急いでエミリアに抱き付いた。

「ああ!無事で良かった!」

「心配かけてごめんなさい……………」

「嫌、良いんだ!…………… お前が無事で良かった!本当に良かった!」

「エミリア…………… その方とその娘は?」

アストラッドはエスメラルダとマナを見て、問う。

「あ!」

「紹介する!この人は……………」

「私は…………… エスメラルダ・レグレシア・クアンタ…………… ク  
アンタ帝国の女帝で…………… エミリアの…………… 実の姉で  
す……………」





「ああ、…………… ちよつとややこしくなるから、簡単に説明する…………… あれは1650年前だ……………」

「1650年前!?!」

「そう、驚くなよ父さん、母さん、ルナ……………」

「嫌!驚くぞ?!何があったんだ……………?!」

陽弥は、これまでの事をシン達に話した。

「生き残りのヴェクタ人…………… 多種族次元革命連合『レボリユード』…………… 最後のパンドラメール”シグムント”今は、シグムディアか…………… 9つの世界を護りし、護星神…………… ドウムが陽弥に闇の力を与えた……………」

「既にドウムの闇の力はもう、俺の物になったからなあ…………… こんな風に」

陽弥はアナザー陽弥になり、闇の左腕をシンに見せた。

「そのおぞましき力でクトウルフの復活を阻止するの?」

「違う…………… 阻止するんじゃない…………… 完全に滅ぼす……………!!」

陽弥の言葉にシンとサムは驚く。

「…………… ガチで……………?!」

「今の俺の力なら…………… 封印、阻止…………… そして滅ぼす事が出来る……………」

「それなら…………… 革命連合で一気にアヴァロンに奇襲を仕掛ければ早いじゃないか?」

「嫌、奇襲を仕掛けられたら、奴等の思う壺だ…………… そこで、こう言う作戦を考えてきた。」

陽弥はブリーフィング様の立体映像を映し出した。

「おお!これがクアンタのテクノロジーか!?!」

「そうだよ」

「読めるのか?」

「ああ…………… 1650年間ずっとユグトラシル9で勉強していたからなあ…………… クアンタ語は完全にマスターした…………… この際だから、父さん達の言語にする…………… オメガプライム

ス」

陽弥がオメガプライムスの名を呼ぶと、オメガプライムスはシステム音で返事をし、クアンタの字が普通の地球の言語に切り替わった。

「何!？」

「シン……………ヒルダ……………見ておけ……………お前らの息子の成長した姿を……………」

「分かっている……………」

「先ず、オメガプライムスでロイガーの軍団を殲滅し、そこから同盟軍とモーフィス、ザンダー共和国艦隊がホライゾンとアヴァロンでの惑星間宇宙域で戦闘を開始する。」

赤のアイコンが合同軍で、紫とグレーのアイコンが大銀河帝国とネオ・ミスルギ皇国として表示された。

「次に、父さんのペルシウスのセレーネモードを使って、時空の狭間から、昔のヘルガストの核ミサイルを取りだし、アヴァロンのメインシャフトに風穴を開ける……………その穴に突撃していく。恐らく各惑星にいるアジマス人が援軍に来ると思う。」

ワームホールのアイコンから、赤色のミサイルが映し出され、大銀河帝国とネオ・ミスルギ皇国軍を通過し、アヴァロンに大穴が空く。

「そこで革命連合の出番だ……………各ユグトラシル1〜9がアヴァロンを取り囲み、ワープしてくる援軍を妨害する。」

青のアイコンで表示されているユグドラシル1〜9がアヴァロンを取り囲むと、ワームホールから来る援軍を妨害している。

シンは陽弥に質問する。

「だが、奴等はきつと残存兵を使って、ホライゾンの各国に向かうと思う……………恐らく、衝突して自爆すると思う……………そこは考えているのか?」

「それなら、もう既に考えている」

「何と……………早すぎる!？」

「ロイガーの自爆衝突を防ぐには、父さんの仲間でもあるヒカリさんの傭兵団とスペースパイレーツ、新ヘルガスト軍、モーフィスのEn II、オーシャルス人、フェニキス人、ヴェクタ防衛軍、マーメルディ

ア人、そしてアンジュさんの妹のシルヴィアさんが率いるレジスタンスと共に、ロイガーの自爆衝突を食い止める。各国の民間人は革命連合の大型移民船を配備させる。」

紫で表示されているロイガーが三大国家に落下を阻止するため、緑のアイコンで表示されている合同軍は各国家に配備されている。

「なるほど…………… 戦況が酷くなると同時に、戦域も広がってしまふ…………… 考えたな……………」

「ああ…………… これも生きて新しい人生を歩む為でもあふ…………… 勿論、ネオ・ミスルギ皇国の民間人もだ」

アヴァロンの内部が映し出され、合同軍のアイコンは一斉に最上層へと上がっていった。

「各ユグトラシルに民間人収容後、全勢力でネオ・ミスルギ皇国最上層に強襲し、ジュリオを拘束及び、旧支配者の四神柱を撃退し、ダークマター・ジュエルを破壊する……………」

「…………… だが、問題が一つだけある…………… アポカリプスだ…………… アイツは”AI”だ…………… 多分、アジマス人を盾にするつもりだろう……………」

「良い手がある…………… ヴィクトルーをシンセシス化するんだ！」  
その言葉にシンは驚く。

「ちよつと待て……………?! プロセアンのAIを総合生命体にするのか……………?! 普通シンセシスは神にしか……………」

「それがなれるんだよ…………… USBチップにヴィクトルーにインプットさせた後…………… 俺の遺伝子とデータをヴィクトルーに取り組むんだよ」

その事にサムは納得した。

「名案だ!…………… シンセシスは…………… 言わばオーバーロード並の力…………… AIは全てを管理できるシステム…………… つまふり、お前の考えは……………」

「そっちが支配なら、此方は解放…………… シンセシス化したヴィクトルーでアヴァロンのデータにハッキングして、アポカリプスに戦うって事か?」

「そうだ…………… さらに有利にするには何か踏み台が欲しいなあ……………」

「マスター…………… それなら良い案があります……………」  
「何だ？」

「シグムディアとプレジスタアクセラーと合体すれば、チップにインストールすれば、ウイルスチップになれます。さらに、ミュー、デルタのデータを陽弥様とシグムディアと同じくウイルスチップにインストールさせ、アポカリプスのファイアーウォールを破り、アヴァロンのマザーコンピュータをハッキングします。途中、アポカリプスが妨害してくると思います。」

「その時は…………… お前がアポカリプスと交戦すると……………」

「はい…………… マスター、ミュー、デルタがマザーコンピュータをハッキング後、私は……………」

「まさかお前…………… !?」

「そうです…………… アポカリプスのデータにハッキングし、自らのデータを犠牲に、アポカリプスをブレインジャックした後、アポカリプスをチップにインストールさせ、チップに閉じ込めます。そしてマスターは現実世界に戻り、私ごとチップを破壊してください……………」

「そんな事が…………… 出来る訳ないだろ!？」

「私は…………… 覚悟の承知です……………」

「…………… 分かった…………… 続きを話す……………」

「アポカリプスの支配から解放されたアジマス人はアジマス陛下の情報をキャッチさせ、残存勢力と共同する。以上だ……………」

作戦内容が終了すると、シンは満足した笑顔で陽弥を見ていた。

「…………… 陽弥…………… 成長したな…………… だろ？…………… ヒルダ……………」

「ああ…………… 私達のバカ息子が…………… こんなに逞しくなっちゃって…………… 流石だよ……………」

「父さん…………… 母さん……………」

「さて、そろそろ…………… 着くぞ……………」

ようやく陽弥達を乗せたオメガプライムスはヴァルヴァートル帝  
国に着いた。

本部では、軍人や隊員がオメガプライムスを見て、啞然していた。  
得にヴィヴィアンとメイは興奮していた。

「何だあの馬鹿デカイ戦艦は……………?!?」

「スゲエ!スゲエ!スゲエエエエ!!!」

「こりや、整備や修理するの大変になるなあ……………!」

「何千キロメートルなんだ……………これ……………?!」

「しかも、これ……………クアンタ人が使っていたらしいぞ……………」

「誰が持ってきたんだ……………これ?」

「ギデオン大将の御息……………しかも神だって……………」

「嘘つ!!!」

隊員達が話している場所の別の方では、生還した陽弥を見に、ソ  
フィア達が陽弥を見て、驚いていた。

「あんた……………変わっちゃたねえ?!」

「そうか?……………俺はてつきり、髪型が変わったかと……………」

「嫌々!ちよつとイケメンになった?!」

ソフィアは陽弥の体型を見る。

「右目に眼帯はしてるや、左腕は黒く染まってるわ……………それと  
左目が緑になってるよ?!」

「ん?……………ああ、シンセシスの事かあ……………」

「シン……………え?……………何?」

「シンセシス……………総合生命体……………有機生命体、機械生  
命体の融合した新しき神人類と言うことだ……………」

「何それ?」

「さらに……………俺には頼もしい仲間……………スペクトロブス達も  
いるー!」

陽弥は左腕に装備されているコスモバイルを見せる。

「スぺ……何?!」

「ハア……仕方ない……コスモバイル起動!」

コスモバイルが起動し、陽弥は叫んだ。

「良し!皆、出てこい!」

コスモバイルから、スペクトロボス達が流星の様に現れた。

「な!!?…何よ!この動物達は!」

「言っただろ?…スペクトロボスって……銀河を守りし伝

説の星獣……それがスペクトロボスだ……」

ガルディオラが陽弥の所に来て、スリスリする。

ちょうどその頃、アヴァロンの王座の間にアイホートがホライゾンにいる陽弥を映像で見っていた。

「来たなあ……我等を封印した護星神の後継者めえ……」

そう言うと、アイホートは国民達に知らせるために、臨時ニュースを流し込んだ。

「国民に告げる!……我等ネオ・ミスルギ皇国に新たな脅威が出た!」

国民は映像に映し出されているジュリオを見る。

「それはこいつだ!!」

映像が切り替わり、映し出されたのは、陽弥の姿であった。

「コイツの名は、陽弥・ギデオン……我々ネオ・ミスルギ皇国に終焉をもたらす……邪神帝でもある!よって我々は一刻も早く、この終焉の者を倒さなければならぬ!……さらに!この戦闘で、陽弥・ギデオンの首を私の元に届けば……この無限の力と言えるインフィニティソウルを与えよう!!」

ジュリオは手元から、陽弥の物でもあるインフィニティソウルを国民に見せた。

「インフィニティソウルとは、かつてクアンタ人によって生み出された無限の力……………それを自分の体の中に入れることで、マナの光は絶対的に成り変わり、ノーマに触れてもマナ光は崩れない！……………そして永遠の不死の力を持つている！……………正に！神から与えられた黄金の果実でもある！勇敢なる民達よ！戦場を駆け巡れ！そして我等ネオ・ミスルギ皇国に栄光なる光を照らしたまえ！」

国民達の目が、インフィニティソウルに目を付け、大喜びを上げた。ニュースを終えて、アイホートは永遠の命を求めに義勇軍に志願している国民を見て、嘲笑う。

「馬鹿な連中だ……………まんまとこのインフィニティソウルの為に、義勇軍に配属と志願しやがって……………」

すると、アイホートの横から、黒い触手で人型の形を作っており、真っ赤な目をした邪神が現れた。

「アイホート……………」  
「これは、これは……………代理皇帝”傲慢のナトラータホテプ様”……………」

アイホートはナトラータホテプに御辞儀をする。

「口を慎め……………アイホートよ……………愈々、全宇宙が我々旧支配者大銀河帝国の支配かに置ける事が出来る……………その暁には、我等の皇帝……………クトウルフ様を復活させるのだ……………」

「はい、ナトラータホテプ様……………仰る通りです……………」  
すると王座の間から、複数の邪神達が現れた。

「……………聞け！、同胞達よ！……………我等旧支配者大銀河帝国は……………これより、ホライゾン侵略作戦を開始する！」

「ハスターはヴルトウム、ツアトウグと共に、ヴァランドール皇国を攻め落とせ！」

「ハッ！」

「ガタノトアはゴルゴロス、シアエガ、ダゴンと共に、グラシオン連合

を潰せ!..... 無にして還らせろ!!」

「了解!!」

ナトラータホテプはハスター、ガタノトアに命令すると、一人、顔と手がタコで、悪魔の翼を広げており、体中から炎を纏った邪神を見る。

「そして、クトウグアは..... ヴアルヴァートル帝国をお前一人で殺れ..... 国中やその国民をお前の獄炎で焼き尽くすのだ.....」

「.....」

「聞こえているのか？」

「はい、ナトラータホテプ様.....」

一人廊下を歩いているクトウグアは舌打ちした。

「我だけ一人か..... グッ!」

クトウグアは柱に渾身を込めた拳をぶつけた

「馬鹿にしおって..... ナトラータホテプ..... !!代理皇帝になつて良い気になるなよ..... !!我が愛刀『ムラマサ』と呪滅刀『魂喰』と妖刀『悪喰』の贄にしてやるっ!!」

クトウグアは怒りながら、ムラマサと悪喰を抜刀し、顔の周りの触手で背部に収納されている魂喰を抜刀し、柱を切り裂いた。



### 第39話：真の力

陽弥はオメガプライムスの内部にある格納庫でシグムディアと会話していた。するとそこに、シンがやって来た。

「父さん？」

「陽弥…………… ちょっと来てくれないか？」

「良いけど……………」

陽弥はシンに連れられ、本部にあるパラメイル試験場まで来た。

「ここで何をするんだ？」

「お前のシグムディアの性能が見てみたいんだ…………… パンドラメイルのオリジナルでも言える…………… 何て言ったら？」

「人造生命体だろ？」

「…………… それだ」

「良いよ…………… 別に、そう言えば父さん達はシグムディア…………… と言って良いのか…………… シグムントの性能と機動力を見るのは始めてだからなあ……………」

「ありがとう」

試験場にて、陽弥はシグムディアに乗り込んだ。

「行くぞー！シグムディア!!」

「応ー！」

シグムディアは答え、起動し、テスト用の180mmバルカン砲台がシグムディアにターゲットロックし、乱射してきた。

「シグムディアの性能と機動力をお手並み拝見だ……………」

シンやタスク、リュウガは観覧席から、シグムディアのデータと性能を調査していた。シグムディアはバルカンの弾道を読み取るかのように、素早い行動で、回避していた。その速さに、シン達は驚いた。「速いッ!？」

「あれが最後のパンドラメールで御座るか!？」

「本当にあれはパンドラメールなのか……………?」

タスクがシンに問うと、シンは冷静に答えた。

「そうだ…………… 陽弥が言うんだ……………」

話している途中、シグムディアの手首と肘から、サーメットブレードが展開され、バルカン砲台を切り裂いていく。

「手首や肘からブレードを展開して、相手を切り裂く…………… と言うサブウェポンもあるのかあ…………… なら、これはどうかな?」

シンは何かのスイッチを押すと、模擬のビルの中から、無人型ドロイド『ゲオルギー』が銃剣型のアサルトライフルとグレードランチャーを乱射してくるが、シグムディアの頭部から粒子キャノンが発射され、ゲオルギーは溶解した、

「頭部の粒子キャノンはプロセアンの粒子ライフルと同じく、敵の装甲を溶解することが出来るのかあ…………… 便利だな」

そしてシグムディアは飛び上がり、左右に別れているそれぞれの高層ビルの屋上に、バルカン砲台がシグムディアを狙っていたが、シグムディアは七星剣と魔剣グラムを抜刀し、二台のバルカン砲台を破壊した、

「あの二刀流は陽弥と同じ武器…………… とてつもない程の切れ味を持っている……………」

最後にシグムディアの後方からバルカン砲台がシグムディアに乱射した。するとシグムディアから、ハイパーノバビームライフルが展開され、バルカン砲台を破壊した。

「何だ!?あのビームライフルは!!」

「今までのビームライフルとは違うで御座る…………… !？」

「二体…………… 何の粒子を!？」

「…………… もしかしたら、」

シンは陽弥に言う。

「よし、陽弥…………… 今から、フェイゾンの特殊装甲防壁「フェイザイト」を展開する…………… それを破壊してみろ」

「え？、分かった……………」

シンはスイッチを押すと、シグムディアの目の前にある模擬ビルが下へ収納され、現れたのは、フェイゾンジェルが張られている防壁だった。シグムディアはハイパーノバビームライフルをフェイザイトに射つが、フェイザイトはハイパーノバビームライフルの粒子を吸収し、無力にしまった。

「父さん！やっぱり破壊出来ないよ！だってフェイズンの特殊装甲防壁だよ！」

「うくん…………… あれを使うときが来た！」

シンは何かを思い付いた。

「あれって？」

「今から、お前のバイザーをアップグレードする…………… 一時降りて、休憩だ……………」

「分かった」

陽弥はシンにフェイスガードとヘルメットを渡した。

数十分後、陽弥はシグムディアのコックピットで和んでいた。

「父さんは一体何をしているんだろう？…………… 俺のフェイスガードとヘルメットを持って……………」

和んでいたその時、シンがヘルメットを持ったまま、現れた、

「出来たぞー！」

「何が？」

「被ってみろ……………」

シンは陽弥にフェイスガードを装備したヘルメットを返し、陽弥はヘルメットを被った。

「そして脳波でXレイバイザーと言ってみる」

「Xレイバイザー……………？」

すると画面が切り替わり、周りの物が透けて見え、それに映っているシンは骨が見えていた、

「何これ!？」

「エックス線仕様のシステムをお前のフェイスガードとバイザーに組み込んだ……………これなら、ステルス状の敵も見え見え……………さらに体温が物凄く赤くなっている所を狙えば、強大な敵もあつという間に倒せる……………フェイザイトもそうだ」

「ふ……………」

「……………信じないのか?なら、試しにやってみろ……………」

陽弥は言われた通りにシグムディアに乗り込んだ。

陽弥はXレイバイザーを使用したままフェイザイトを見ると、右上の所だけ、赤く光るアイコンが出ていた。

「あ……………この部分だけ赤くなっている……………よし!」

陽弥はシグムディアを起動させ、手に持っていたハイパーノバビームライフルをスナイパーライフルモードに切り換えた、陽弥はハイパーノバビームライフルの長距離スコープを使い、集中しながら狙いを定め、赤く光るアイコンにノバビームを放った。ノバビームが赤く光るアイコンを貫通すると、フェイザイトのジェルが溶け始めた。

「おお……………」

「よし、次はこれだ」

シンはまたスイッチを押すと、今度は、メイルよりも大きく、四足歩行できる巨大なロボットが現れた。

「パワー重視の無人機だ……………存分に戦え」

巨大なロボット通称『アルゴス』は主砲から、高出力プラズマ弾を放つと、シグムディアはアクロバットな動きで、回避する。陽弥はXレイバイザーを起動させ、アルゴスの弱点を知った。ハイパーノバビームライフルをマシンガンモードに切り換えると、ライフルのバレルが縮小し、ショットバレルに変わった。シグムディアはマシンガンモードのハイパーノバビームライフルを乱射しながら、アルゴスの四足の関節にビームを撃ち込む。ビームは見事に、関節部を貫通し、爆破した。

するとアルゴスは体制が崩れ、倒れ込み、主砲の上から、コアユニットが展開された。陽弥はハイパーノバビームライフルをライフルに切り換え、コアユニットに目掛けて、ビームを撃った。そしてコアユニットを失ったアルゴスは大爆発を起こした。

「終わったよー!」

「よし…… シグムディアの機動力は確かに、凄い……… ただ、一つ言えることは……… シグムディアはその装甲を装着しているせいで、本来の力を発揮できていないみたいなんだ………」

「と言うと………?」

「このシグムディアはまだ”不完全体”なんだ……… 武装と機動力と性能は完璧だがなあ………」

「どうすれば良いの?」

「シグムディアの推力を最大値にする……… そうすれば、運動力、反動力もお前に追い付けると思う……… 俺とメイがシグムディアを改造する……… それが終え次第、ちよつと話がある……… フィーリとタスク、リュウガもだ!」

「拙者も?」

「俺も?」

「ああ、だからタスク……… 俺の代わりにフィーリを呼んでくれないか?」

「俺が!」

「何?……… 嫌なのか?……… 20年前のあの入れ代わった事件で……… 俺はまだお前を目の仇にしているからなあ………」

「嫌……… その……… あれは誤解で!……… 俺は疚しいことなんて!」

「じゃあ、何故、アンジュの体で俺の妻の裸を見た、さらに見事な股間ダイブをしたのかなあ?」

「……… それはごめんなさい………」

「……… まあ、良いや………」

タスクは悄気ながら、フィーリを呼びに行った。

ファイリーが集まり、陽弥達はそれぞれのパンドラメールに乗っていた。

「皆集まったか？」

「「「ああ……………！」「」」」

「よし……………今から説明する……………これより俺達は……………ドッキングシーケンスを開始する！」

「「「え!」「」」」

「ちよつと父さん！それどういう事……………?!」

「言った通りだ……………この5機でそれぞれの合体を試みるんだ……………」

「ああ……………前にエリシアやアウラの都の防衛でシンさんリュウガさんとタスクさんでやったあれか!」

「そうだ……………俺のペルシウスとリュウガのヤマトが合体したら、ウロボロスに……………」

「そして拙者のヤマトとタスク殿のヘラクレスでは、鳳凰に……………」

「ファイリーと陽弥のジャンヌとシグムディアでは、どんな機体へなるんだろうかあ？」

「だから、一回やってみようと思うんだ……………もしかしたら、戦力が増えると思う……………最初は、俺とファイリーだ……………」

シンとファイリーはペルシウスとジャンヌをそれぞれの位置に並んだ。そして二人は叫んだ。

「ドッキングシーケンス!!」

二人は叫んだ直後、ペルシウスとジャンヌが光始め、粒子へ変わり、二機は一つになった。

「これは!？」

光が晴れると、ペルシウスとジャンヌの装甲を纏った鎖鎌になっていた。

「ジャンヌとペルシウスが巨大な氷の刃を持った鎖鎌になった!」

「これ…………… 凄いなあ!?…………… それじゃ、次!」

次はタスクのヘラクレスとファイリーのジャンヌであった。

「ドッキングシーケンス!!」

二機が一つになり、現れたのは、ジャンヌ上半身がヘラクレスの肩部に装着されたキャノンになっており、脇には、ジャンヌの下半身が、二問のガトリングランチャーになっていた。

「バックパックにキャノンに、脇部にアイスビームガトリング!!」

「次!」

次は陽弥のシグムディアとジャンヌで試してみた。

「ドッキングシーケンス!」

今度は、シグムディアの肩部にジャンヌの装甲が取り付けられており、手元に、氷の刃を持つ、ジャンヌの装甲をした大剣を持っていた。

「巨大な氷の刃を持った大剣!!」

「じゃあ今度は、タスクと俺だ!」

次は、シンのペルシウスとタスクのヘラクレスを合体してみた。

「ドッキングシーケンス!!」

現れたのは、胴体が、ヘラクレスで頭部と背部のカノン砲がペルシウスになっている一角獣であった。その機体を見て、陽弥達は興奮する。

「うお〜! かつこいい!!」

「タスクさんのヘラクレスが一角獣の胴体に変形して!」

「ペルシウスが一角獣の頭部になって、背部にリボルバーカノン砲が装備されているで御座る!」

「次!」

今度は、リュウガのヤマトと陽弥のシグムディアを合体させてみると、大剣型のチェーンソーになった。

「巨大なチェーンソー!」

パンドラメールの合体を試し尽くした彼等は、疲れはて、シンはパンドラメールのデータを作成していた。

「ふむ…………… なるほど、その機体に生かして、様々な形態になると言うことかあ……………」

「ねえ、もういいか？」

「何がだ？」

「これ以上、合体をするのを…………… 疲れてきました」

「良いよ、休んで」

「あゝ、疲れたあゝ！」

陽弥達は、それぞれの位置に戻ろうとすると、陽弥はタスクに問う。

「父さんの仕事って…………… いつもあんなの？」

「そう…………… 仕事熱心なんだ……………」

「ふくん……………」

そう言いながら、シンは、データを作成しながら、燃えていた。

陽弥は基地の地下にある独房室に足を踏み入れた。そしてそこを見張っている隊員に頼み、面会することを許された。そしてその面会する相手は……………

「調子はどうだい？」

陽弥が話している人物は、仮面を外し、シンと瓜二つのエヴァであった。

「何だ……………？」

「嫌……………」

「……………」

空気が静まり返った直後、突然エヴァが立ち上がった。

「っ!？」

「どうした？」

「…………… 来た」

「え？」

その直後、施設内に警告音が鳴り響いた。

「っ!？」

「緊急命令!…………… 総員に告ぐ!総員に告ぐ!ホライゾン成層圏に多数の熱源反応を確認!なお、多数の熱源体はそれぞれの三大国家に分



担し、突入しています！至急ライダー隊はこれを迎撃せよ！繰り返し返す！」

「熱源体……!?……まさか?!」

「そうだ……しかも、この国へ来ている邪神は……只者ではない……」

陽弥は急いで、シグムディアの所へ向かっていった。

ヴァルヴァートル帝国から数十キロ離れた山奥……猛吹雪が降るなか、積もっていた雪や凍っていた湖が激しく溶け始め、地面は熱気に溢れ変えり、溶けた湖が激しく干上がり、森が燃え始めた。そこにクトウグアが体から炎を出しながら、周りを見ていた。

「さあ……私の1000億℃の高熱に耐えられる者は……何処だ？」

クトウグアが周りを見てみると上空から、危険信号の彩光弾と照明弾が見えた。

「こっちか……」

クトウグアは照明弾を頼りに、ヴァルヴァートル帝国へと向かっていった。

そして、ヴァルヴァートル帝国付近で、同盟軍は警戒体制をしていた。

「ルナ！」

「お兄ちゃん！」

「何が起こっているんだ!?!」

「分からない！けど、お爺ちゃんが言うには邪神だって！」

「何だって!?!」

すると、陽弥達が踏んでいた地面に積もっていた雪が一気に溶け始めた。

「何だ!?!」

「雪が溶けて!?!…………… 熱い!!!」

ルナが突然、悲鳴を上げた。

「え!?!」

他の人達や、軍人が急いで、ヴァルヴァートル帝国の電磁シールド内に避難した。(陽弥だけを置いて……………)

「え……………!?!皆…………… 何で熱がってるの?」

「お兄ちゃんは平気なの!?!」

「何を?」

ネオ・アウローラにいるシンはその光景を見ると、βがシンにあるものを見せた。

「シンの旦那!?!これを見てくれ!」

それは、ネオ・アウローラの艦外の現在の気温が表示されているデバイスであった。シンはデバイスに表示されている気温を見て、驚愕する。

「気温が…………… 1000億°Cだと!?!」

「来ました!」

アウローラのオペレーターが言うと、陽弥の目の前にある森林から、火が吹き出し、中から赤く燃え上がる邪神が現れた。

「お前が邪神か!?!」

「そうだ…………… 我が名はクトウグア…………… 旧支配者大銀河帝国第1界四神柱の一人…………… 『生ける炎のクトウグア』……………」

お前は何者だ?」

陽弥はクトウグアに名を答えた。

「ヴェクタ人 シン・ギデオンとメイユライダー ヒルダの息子 陽弥・ギデオン!ミッドガンドの護星神だ!」

「陽弥・ギデオン…………… 覚えておこう…………… 今回はナトラータホテプの命により、一人だ…………… ここはお互い……………」

「一騎打ちと行こうか？」

「分かった……………」

陽弥とクトウグアは共に近付き、クトウグアはムラサメを抜刀し、陽弥も魔劍グラムを抜刀した。

「伊座……………尋常に！」

両者武器は陽弥の剣とクトウグアの刀と言う……………二種類の最強の武器を構えた。

「参る！」

「勝負！」

二人は共に叫び、剣と刀の刃がぶつかり、最大の戦いが幕を開けた。

## 第40話：神々の戦い 前編

一方、ヴァルヴァートル帝国から離れた大国…………… ヴァラランドール皇国では、ザンダー共和国の対艦スターファイターがヴィルキスに乗っているアンジユ達と共に警戒していた。するとタスクは上空から、邪悪な気配を察知した。

「来た!!」

タスクが叫ぶと、上空から、多数の隕石が落下し、衝突した。

「全機！衝撃に備えて！」

全機はアンジユの命令に従い、衝突に備えた。そして煙が晴れると、巨大なクレーターが出来ており、中から、無数のイング族が雪崩れ込んできた。

「何なの!!」

「陽弥から言うには、アイツ等が邪神尖兵から出てくるイングっていう闇の種族なんだ!…………… そして、」

「な!…………… 何なの…………… あれ?!」

「あれが…………… 邪神尖兵ロイガーだ!」

タスクが説明すると、ロイガーがアンジユ達を睨んでいた。

「ちよつと待ってタスク!これ…………… デカ過ぎでしょ!!」

「でも、殺らなければここが危ない!!」

「ちよつと待ってタスク!」

「パパ!」

タスクはルミナスブレードを抜刀し、イングを斬撃していく、アンジユはミカエルモードでラツイーエルから高周波エネルギーブレードを放出し、バスターランチャーでイングやロイガーを切り裂いたり、撃っており、ソフィアはエリザベスのビームライフルでイングを撃っていた。しかし、またしてもロイガーの口から闇の症気を吐きながら、イングを増やしていった。ザンダー共和国のスターファイターやヴァラランドール皇国兵士もイングの膨大な数に圧倒されつつあった。

「切りがないわ!こんな数!!」

「さらに上空から熱源が来る!」

「数は!？」

「三体!!」

ソフィア達は上空を見ると、三つの隕石が落下した。

「「っ!?」」

煙が晴れると、現れたのは黄色いフードで覆った者と紫の華を持つ化物と悪魔の翼で羽ばたいている巨大なヒキガエルであった。

「アイツ等は!？」

「分からない!……………だけど……………普通の邪神じゃない!!」

すると黄色いフードで覆った邪神に続き、2体の邪神も名を名乗り出た。

「我が名はハスター!!『漆風ハスター』……………旧支配者大銀河帝国第1界四神柱の一人でもある!」

「そして!私の名はハスター様に仕える旧支配者大銀河帝国第7界邪神ヴルトウムですわ……………」

「同じく!旧支配者大銀河帝国第9界邪神ツァトウグと申します……………」

ハスターの名を聞き、タスク達は警戒体制をした。

「「っ!!」」

「こいつが!」

「ギデオンさんが言っていた!……………四神柱にだけは気を付けろって……………!!」

するとヴルトウムはソフィアを見て、話してきた。

「あくら、まさかここでまた会えるなんて♪」

「え?」

「ソフィア、あなたアイツと知り合い……………!？」

「嫌!ママ、全然知らない!」

「まあ、そりゃ、そうよねえ……………流石にこの姿だと無理もない♪」

そしてソフィアはヴルトウムがアイツと分かり、驚いた。

「……………嘘っ!? 貴女……………γ?!」

「御名答ー、γは私の仮の姿……………これが私の本当の姿……………原初の華とも言えますわ♪」

するとハスターはヴルトウームを叱る

「ヴルトウーム……………その姿を見せびらかすのは程々にしろ……………」

「はい、ハスター様♪」

「お前達は何の為に戦う?……………何故こんな低レベルの文明を持つ下等種族の為に戦うのだ?」

ハスターの言葉に、アンジュは切れだした。

「ホライゾンの人達が低レベルの文明を持つ下等種族……………!? ぶざけるな!! アンタ達は間違っているわ!!」

「……………何を?」

「何も罪もない人達を傷付けて……………そんなに滅ぼしたいの!? そんなこと私は許さないわ!!」

アンジュはヴィルキスの出力を最大に上げ、高周波エネルギーブレードを展開した。

「アンジュ!!」

「ママー!」

アンジュはアリエルモードでハスターの目の前まで跳躍した。

「ハアアアアアッ!!」

アンジュは渾身を込めて、エネルギーブレードを降り下げたその時、ツアトウグがエネルギーブレードの刃を掴んだ。

「そんなっ?!」

「塵へ変えれ……………」

ツアトウグの口から、紫の閃光が輝いた直後、タスクがヘラクレスの出力を最大に上げ、アンジュを助けた。

「アンジュ!!」

「タスクー!」

「よくもアンジュを傷付けてたな!! 許さん!!」

タスクはビームシールドとルミナスブレードを展開、ハスターに

突っ込んでいった。

「パパー！」

「ハイパーモード起動!!！」

タスクはヘラクレスの背部に装備されているPEDシステムを起動すると、ヘラクレスから高周波のフェイゾンが放出される。

「ほお、フェイゾンか……………」

するとガーディアンイングが立ち塞がったが、タスクはルミナスブレードでガーディアンイングを切り裂き、ハスターに近付き、ハンドブラスターを構える。

「貫ったあ!!！」

タスクはハンドブラスターをハスターの顔面に近付けた直後、ウルトウームの触手がヘラクレスの腕を掴み、ハンドブラスターの弾道をそらした。

「何?！」

「貴様……………ハスター様を傷付けようとしたな……………身の程を知れえ!!!雑魚がつ!!！」

ウルトウームはヘラクレス掴んだまま振り回し、投げ飛ばした。

「グアッ!!！」

「パパー！」

ソフィアがタスクを助けようとした時、ウルトウームが邪魔をする。

「おっと!……………貴女の相手は私ですよ♪ウフフフフ」

「ウルトウーム……………!!！」

するとヴァランドール皇国の城門が破られ、イング達が入り込んでいく。

「このままじゃ!ヴァランドール皇国が!!！」

「仕方ない!！」

アンジュはそう言うと、ヴィルキスの体制を立て直し、上空へと舞い上がった。

「タスク!あれをやるわよ!！」

「あれって?……………まさか!？」

「ええ！そのまさかよ！」

「分かった！」

タスクは急いで、ザンダー共和国の兵士に伝えると、アンジユは永遠語り”光の歌”を歌い始めた。

「♪♪♪」

「ほお、……………永遠語りか……………なら、来るがよい!!」

ヴィルキスの肩が展開して、ハスター達に向けて、収斂時空砲を放った。イングやロイガーが収斂時空砲によって、粒子分解され爆発した。

「やったか!」

収斂時空砲を終えて、アンジユ達は確かめようとした時、煙の中から、影が見えてきた。

「「っ?!」」

「こんな程度か?」

収斂時空砲が効かないことにアンジユ達は驚愕する。

「そんな!」

するとアンジユの通信機から、サラが映し出される。

「どうしたの!?サラ子!」

「そちらも収斂時空砲を!」

「ええ!?!けど全然効いてないわ!」

「そんな!?!私の所も同じです!」

「何ですって?!」

サラの言葉に、驚くと、今度はタスクが出る。

「なら!今度は俺がっ!!」

「タスク!「パパ!」」

ヘラクレスの肩が展開され、超収斂時空砲を放つ。手応えがあったと思っただ、ハスター達は無傷であった。

「超収斂時空砲とは……………愚かな、それではイングの大半を消したに過ぎんぞ……………」

「何っ?!」

「では……………今度は此方のターンです……………」



するとハスターの肩の肉が裂け、アンジュはあることに気付き、驚愕した。

「あれってまさか!?」

「嘘でしょ?!」

「我等、四神柱はクトウルフ皇帝陛下より、授かりしこの『デイスコード・ネビユライザー』を放つことが出来るのですよ……………」

そしてハスターの肩部から、漆黒の粒子が集まっていた。

「まずいよ!タスク!」

「仕方ない!ヴィルキスの収斂時空砲と俺のヘラクレスの超収斂時空砲で防ぐしかない!!」

「分かったわ!ソフィア、貴女は逃げなさい!」

「でも、ママとパパは!」

「私達なら、大丈夫……………」

「ママ!」

アンジュはそう言い、タスクと共に収斂時空砲を展開した。

「2体1なら勝てるわ!」

ハスターはアンジュとタスクを見て叫ぶ。

「下等種族よ……………我等、四神柱の贄となれ……………!!!」

「塵に変えれえええええ!!!」

ハスターはデイスコード・ネビユライザーを発射し、アンジュとタスクもハイパーデイスコード・フェイザー、デイスコード・フェイザーを放ち、時空砲同士の不つかり合いが始まった。

「グッ!!」

しかし、明らかに、ハスターのデイスコード・ネビユライザーの方が上回っており、アンジュとタスクの時空砲を押していく。

「何!?!」

「嫌!パパ!ママあああ!!!」

ソフィアがアンジュとタスクへ叫んだ直後、上空から、紫と黄色の螺旋状のビームがハスターに直撃した。

「何!?!」

「あれは!?!」



「貴方方にこれを渡します……」

ラルフ達はアンジュ達にアナイアレイタービームライフルを渡した。

「これは？」

「アナイアレイタービームライフルです………存分に撃つちやつていいですよ♪」

ラルフはそう言うと言いつつロイガー殲滅へ向かっていった。アンジュ達は試しにアナイアレイタービームライフルをロイガーに向けて撃つと、光と闇の螺旋状のビームがあのだ巨体であるロイガーを撃沈させた。アンジュはアナイアレイタービームライフルを見て、タスクに言う。

「本当っ!?これ気に入ったわ!」

「これなら、イングとロイガーを倒せる!」

「さあ!反撃よ!」

アンジュ達はアナイアレイタービームライフルでロイガーやイングを蹴散らしていく。

そしてラルフはハスター達と相手をしていく。

「小生意気な護星神の後継者めが!!」

ツアトウグが長い舌を伸ばし、ラルフを捕まえると、いつの間にかキャリアとデュバルのプロトヒステリカが高周波エーテル粒子ソードをツアトウグに突き刺そうとしたが、捕まえられない。

「そんな物で私に勝てるっても?」

「勝てるさ!!」

するとラルフは捕まったまま、ツアトウグに突進し、渾身を込めた蹴りをツアトウグの腹にぶつけた。

「っ!!」

捕らわれていたキャリアとデュバルは立ち上がるとラルフはハスターを睨んだ。

「見せてやる………俺達護星神にしか使えないを!………行くぞ!デュバル!キャリア!」

「ああ!!「分かりました!!」」

すると三人の体が緑色に光だした。

「行くぞ!..... オーバーロード」「発動!!」「!!」

ラルフ達の体が見ると変わり、陽弥と同じアナザーモードへとなり、三人の両目は緑に発光していた。

「何!?その姿は?!」

「陽弥のアナザーモードの細胞から、俺達に分けたんだ.....  
つまり俺達も..... ”シンセシス”だ!!」

いつの間にかラルフはツアトウグの腹に近づいていた。

「速いっ!!?」

「遅い!!」

ラルフの手首からビームソードが展開され、ツアトウグの腹を突き刺した。

「ゴフツ!!」

「ツアトウグ!!」

「..... ハスター様!..... お逃げえ!!..... つ  
!!!」

ツアトウグの体が段々と膨れ上がり、そして爆発した。

「ツアトウグ!!..... 糞っ!!」

するとハスターの頭の中からガタノトアとクトウグアがテレパシーで通信してきた。

『此方!ガタノトアだ!!此方も護星神に襲われている!!』

『此方もだ..... 奴等を甘く見すぎていた..... 撤退するぞ!!』

『クッ!..... 分かった..... !!』

ハスターは命令に従い、ヴルトウームと残存したロイガーとイングを連れて、アヴァロンへと逃げていくのをアンジュ達は見ていた。

「逃げていった.....?!」

ソフィアは唾然したまま、逃げていくヴルトウームを見ていた。

「勝っちゃったんだ..... 私達.....」

## 第41話：神々の戦い 中編

グラシオン連合の方では、リヨウマ達はモーフィスと共に警戒体制をしていた。

「来たー！」

モーフィスの兵士が大声で言うと、空からロイガーがグラシオン連合付近の陸地に衝突した。そして巨体なクレーターから、ロイガーが起き上がり、口から闇の疝気と共にイング達を放出してきた。

「あれが…………… 旧支配者大銀河帝国の尖兵ロイガー……………」

「油断するなよ…………… リヨウマ」

エイルマツトがリップパーのレーザーサイスを構えた。

「はい！師匠！」

リヨウマはそれに答え、鋼龍號の腕部の轟雷を展開した。

「魔法障壁を展開せよ！」

そしてグラシオン連合の砦から魔法障壁が展開され、国を覆った。

「魔弾砲を用意！」

グラシオン連合製の砲台がイングに向けられ、指揮官が命令した。

「射てえ！」

砲口から、蒼の閃光が輝く魔導弾が発射せられ、イング達を蹴散らしていった。それに続き、モーフィスの移動要塞“E n II”から、モーフィス戦闘機が発進していき、イング達を殲滅していく。

「鉄鋼部隊！構え！」

リユウガは前線部隊にいるドラゴレイド人やドラゴンに命令した。

「放てえ！」

ドラゴレイド人の装甲兵士達の2点バースト式ライフル”N-7ウルキユール”の弾がイング達に貫通していき、ドラゴン達は上空から、魔法陣を展開し、ロイガーを攻撃していた。

「龍装光！！」

リヨウマは雷光神龍で龍装光をし、稲妻の如く迅速で、イング達を倒していくと、波の様に押し寄せてくるイングを睨み、地面に手を翳

し、叫んだ。

「雷龍破!!」

地面に張り付く様に陣が浮かび上がり、陣から、電光を放つ龍達が召喚され、一斉にイング達に襲い掛かった。

「孔龍破!!」

エイルマツトも手から赤黒く輝く、龍を召喚し、イングに襲い掛かる。

「紫電一閃!」

リュウガのヤマトとサラの焰龍號が叢雲と天雷を展開し、疾風のような速さで、イングを切り裂いていった。するとロイガーは口から闇の症気を吐き、イングを増やしていった。

「陽弥の言った通りだ……… イングを倒す度にロイガーが増やしてしまう……… こうなったら、ロイガーを優先して………」

リュウガとサラは共にバスターランチャーをロイガーに狙いを定めたその時、リュウガとリョウマの角から、何かを感じ取った。

「っ!」

「どうなされたのですか!」

「上から……… 禍々しい殺気を感じた……… 数は」

すると上空から、落下してくる隕石が見えてきて、リュウガは叫んだ。

「四!」

そして四つの隕石は衝突し、グラシオン連合兵士達は警戒した。

「警戒せよ………!」

すると巨体なクレーターから、水が溢れ出てきて、グラシオン連合兵士達の足を覆っていった。

「水!」

グラシオン連合兵士が驚くと、エイルマツトはリップパーの手でその水を掬い上げ、口にするとその水を吐き出した。

「ペッ!……… 違う……… 海水だ………!」

「海水!……… 何故この様な場所に?!」

サラが驚いているとリュウガとリョウマは言う。

「来る！」

その直後、海水で覆われているクレーターから、触手が飛び出し、ヤマトを吹き飛ばした。

「リュウガ！「父上！」」

サラとリュウマは叫んだ直後、また触手が飛び出し、今度はリツパーと焰龍號も吹き飛ばした。

「師匠！！母上！！」

すると巨体なクレーターから、古代貝の甲羅を纏ったタコが水しぶきを上げながら現れた。

「お前は!?」

「我が名はガタノトア……………旧支配者大銀河帝国の四神柱……………第1界邪神……………」絶海のガタノトアだ!!」

ガタノトアが名を答えた直後、それに続き、他のクレーターから、三体の邪神が姿を現した。まず、ツアトウグと似ているヒキガエルの邪神が名を言う。

「我は旧支配者大銀河帝国第3界邪神ゴルゴロスと申します……………」

次に、ロイガーと同じ姿をした黒き邪神も名を名乗る。

「旧支配者大銀河帝国第2界邪神シアエガ……………」

最後に半魚人の邪神が名を名乗った。

「そして私は旧支配者大銀河帝国第1界邪神ダゴン……………宜しく……………」

するとガタノトアは大声で三体の邪神に命令した。

「さあ！野郎共……………下等生物を血祭りに挙げよ!!」

「「御意！」」

シアエガ、ゴルゴロス、ダゴンはグラシオン連合兵士やドラゴレイド人、そしてドラゴン達に襲い掛かっていった。

ガタノトアは触手を伸ばし、グラシオン連合の砦を破壊しよとするが、魔法障壁のお陰で、ガタノトアの触手を弾き返した。

「フン!……………魔法障壁か……………だが、これならどうだ？」

するとガタノトアは無数の触手を地面に這いつくばると同時に、陸

地を覆っていた海水がガタノトアに引かれていく。

「ヌウウウウウウウウウウ!!!」

するとガタノトアに引かれていた海水が段々と上に競り上がっていく。

「か！海水が!!」

「……………まさか!!!」

「もう遅いわ!!ルルイエの嘆き!!」

ガタノトアが競り上がった海水を押し出すと、海水は津波に変わり、

「全機！上へ上がれ！」

リュウガが命令し、ドラゴレイド人は何人かのグラシオン連合兵士を持ち上げ、上へ飛び上がると、津波はグラシオン連合国を取り囲んだ。

「クソオオオオ!!」

その津波で逃げ遅れた沢山の兵士達が死んでしまい、リュウガは叫んだ。

「奴め!……………その為に海水を撒き散らしていたのですね……………!!」

「何て事だ……………グラシオン連合の周りが海になっている!!」

「しかも！グラシオン連合の兵士を溺れ死させようとしている!!」

皆が悔やんでいたその直後、海中から、紫のレーザーが飛んでいるドラゴンに直撃すると、ドラゴンは石へ変わり、海中の中へ沈んでいった。

「っ!!」

すると海中からガタノトアが現れた。

「ガタノトア！」

「ほお、我の攻撃を回避するとは……………面白い!!」

するとガタノトアから出ている触手の先端から石化光線を乱射し、飛んでいるドラゴレイドとドラゴンを石に変えていった。

「石化だと?!」

「皆！散らばれ！奴が水中から石化してしまうビームを出している



！」

リュウガの命令に従い、ドラゴンや、ドラゴレイド人は散らばった。  
「こうなればー！」

サラが叫ぶと、永遠語り”風の歌”を歌い始めた。

「♪♪♪」

サラの額にある紅い宝石が光、焰龍號の装甲が金色へと変色し、肩部が展開し、収斂時空砲をガタノトアに放った。

「永遠語りか……………！」

するとシアエガ、ゴルゴロス、ダゴンは巨体なバリアを展開して、ガタノトアを守ると同時に大爆発が起きた。

「殺ったのか……………!?」

煙が晴れると、ダゴン、ゴルゴロス、シアエガはバリアを解除し、ガタノトアは笑っていた。

「フハハハハハハ!!!……………そんな古臭い兵器に敗北など……………有り得ないなあ!!!」

収斂時空砲が効かないことに皆は驚愕した。

「そんな?!」

サラはすぐにアンジュと通信する。

「はっ!……………念のためアンジュに通信します!」

サラはアンジュに通信回線を開くと、アンジュも苦戦していた。

「どうしたの!?サラ子!」

「そちらも収斂時空砲を!」

「ええ!?けど全然効いてないわ!」

「そんな!?私の所も同じです!」

「何ですって?!」

するとガタノトアが焰龍號目掛けて、石化光線を放った。

「危ない!サラ殿!」

リュウガのヤマトが焰龍號を押し出した。

「リュウガ!」

「グッ!」

よく見ると、ヤマトの左脚部が石化していた。

「リュウガ！ヤマトの足がっ!!」

「先程の石化光線に当たったのかあ……………」

焰龍號がヤマトを支えたとリヨウマの鋼龍號とエイルマツトのリッパーがやって来た。

「父上！母上！」

するとガタノトアがリヨウマ達に語った。

「ほお、お前ら親子か……………なら、」

するとガタノトアはまたしても、海水を呼び集め、津波を作り出した。

「親子一緒に……………無に変えるが良い!!」

ガタノトアは津波を押し出し、リヨウマに襲い掛かった。

「グッ……………ここまでで御座るか！」

津波がリヨウマを呑み込もうとしたその時、上空から、ミサイルが飛んできて、津波に直撃すると、一瞬にして、津波が凍り付いた。リヨウマは凍り付いた津波を見て、驚く。

「何っ!!」

「え!!」

「津波が……………凍り付いている?!」

さらに上空から、光の槍が凍り付いた津波を貫通し、ガタノトアの甲羅に突き刺さった。

「こ……………この槍は?!……………まさか!!」

「おうーおうー派手に暴れてるじゃないかあ！」

上空から、現れたのはバトルスーツを来た巨人族のバルドとダム、そして小人族のドミニカが来てくれた。

「ったく！あのアホガキが！あたいらを呼べって言ったのに……………呼ばないなんて……………」

「ま！それは置いといて……………」

「お前が絶海のガタノトアか？」

「そうだと言ったら？」

「あたい等護星神は……………あんたを倒す!!お前ら！ビームフラッグを掲げろおおお!!」



バルドはギガントアックスを地面に突き刺し、念じると、地面が割れ、中から、マグマが吹き出し、毒の霧を浄化した。

「何っ?!」

「ウオオオオオ~~~~!!!! 焼き焦げろー! ゴルゴロス!!」

バルドが叫ぶと、ゴルゴロスの体中の皮膚が段々と乾燥していき、黒く焦げていく。

「あ!..... ああ?!..... 何だ!これはあああ!!」

「無限地獄!..... 『獄焰の呪縛』!! 猛毒の霧と共に浄化せよ!! ゴルゴロス!!」

そして黒く焦げた場所から火が吹き始め、目や口、そしてあらゆる所から火が吹き、ゴルゴロスは断末魔の悲鳴を上げた。

「アアアアアアアアアアアア~~~~!!!!」

そしてゴルゴロスは燃え尽き、灰へと変わった。その光景に、ガタノトアとダゴンは褪せる。

「まずい!.....!」

「どうしますか!ガタノトア様?!」

「ハスターとクトウグアに連絡だ!」

ガタノトアはヴァランドール皇国にいるハスターとヴァルヴァートル帝国にいるクトウグアにテレパシーで会話をした。

「此方!ガタノトアだ!!此方も護星神に襲われている!!」

「此方もだ..... 奴等を甘く見すぎていた..... 撤退するぞ!!」

「クッ!..... 分かった.....!!」

彼等は、同じ事に賛成し、残存兵と共に、アヴァロンへと戻っていった。

「撤退..... して行くぞ.....?!」

リヨウマが啞然していると、巨体のバルドとダーマ、そして、並の人より小さいドミニカがこっちに近付くとリユウガはバルド達に質問した。

「貴殿方は一体何者で御座るか?」

「あたい等はあるた達の仲間、陽弥・ギデオンと同じ..... 護星神

だ！」

「俺はバルド・フェルド！炎の世界ムスペルヘイムの護星神だ！」

「あたいはダーマ・フォツセン、氷の世界ヨトウンヘイムの護星神だ……………」

「そして私はドミニカ・シエレンツ！小人の世界ニルヴァーナの護星神だ！」

「……………」

リヨウマ達はさらに啞然すると、バルド達は困った表情で、話し掛ける。

「え？……………そこ乗ってよ、?!」

「え!?……………ああ、すまぬ……………ちよつと啞然していて、協力、

感謝いたします！」

リヨウマ達はバルドに敬礼すると、ダーマは驚いた表情になった。

「あたい等……………崇められてない?」

「確かに……………」

その後、バルド達はグラシオン連合防衛担当になった。

## 第42話：神々の戦い 中編

そして同じ頃、ヴァルヴァートル帝国では、陽弥とクトウグアだけの一騎討ちが始まっていた。剣と刀……………最強の武器同士の刃がぶつかり……………燃える森林から、暴風が吹き荒れ、嵐が起こり、稲光を発していた。その光景にヴァルヴァートル帝国の電磁シールド内にいる皆はその光景に啞然、茫然、そして驚愕していた。

「おい……………おい……………」

アレクトラが陽弥の戦いに一言を言う。

「何だよあの戦いは!？」

「これが……………神と神の戦い……………神々の戦いなのか……………!？」

シンもヒルダとルナと共に陽弥の戦いを見て、茫然する。

そして陽弥はクトウグアに苦戦していた。

「チッ！仕方ない……………奴に対抗するため……………フォルムチエンジするか！」

陽弥は光と闇の腕を発動し、叫んだ。

「極限の光と極限の闇を一つに……………シグムディア・イレイザー!!」

シグムディアは陽弥と同じ、光と闇の腕を持つ姿に変わり、七星剣と魔剣グラムの二刀流を抜刀した。シン達はシグムディアの姿を見て、驚愕した。

「何なんだ?!あの姿は!？」

「お兄ちゃんの光とドウームの闇が融合した!!？」

陽弥は二刀流を持ったまま、腕をクイクイっと水を救い上げるように、クトウグアを挑発した。

「さあ、掛かってこい……………!」

すると、クトウグアは怒りだし、陽弥に斬りかかったが、二刀流を収納し、光と闇の腕でクトウグアの刀を掴み止め、クトウグアごと振り回し、雪山であった場所まで吹き飛ばした。吹き飛ばされたクトウグアは体制を立て直し、何故か笑っていた。

「曙光と宵闇を一つにただけで、こんなにパワーとズル賢さが出ているとは……………面白い！……………先代護星神タイタニス以上に面白い奴と出会えるとは！……………これぞ運命！」

クトウグアは一気にスピードを上げ、陽弥に接近した。

「良いだろう！……………どちらが弱肉強食の世界に生きるものに相応しいか……………狩りの時間だ！陽弥・ギアオン！！」

クトウグアが背部から呪滅刀”魂喰”を抜刀し、陽弥に斬りかかった直後、上空から、メガ粒子砲が飛んできた。現れたのは、シエパード艦長の旗艦”アンブロシア”がユグドラシル7、9を連れて、現れた。

「チツ！邪魔が入ったか……………だが！」

クトウグアは手から、拡散ビームをユグドラシル船団に放った直後、陽弥が二刀流で防御した。

「っ!!？」

煙が晴れ、シグムディアの姿が見えた直後、シグムディアの後ろに赤黒い影とオーラが現れ、影はルビーの様に輝いている眼を開き、そして嘲笑い、クトウグアに語りかけ、威圧させた。

(……………去れ……………クトウグア……………)

「!!?!」

クトウグアは威圧感に圧迫され、武器を構えながら、下がった。クトウグアは荒い深呼吸をし、冷や汗をかきながら、シグムディアの後ろにいる影を見る……………

「……………今、一瞬だが……………私の心臓が危険と表した……………！何だったんだ今のは!?!……………さっきまであやつは何処に行ったのだ?!……………だが、これだけは言える……………私の攻撃を弾き返したのは別の何かだ……………奴の体の中に……………別の何かがある！……………しかも我々を含めた邪神とクトウルフ陛下以上の獄闇（ゴクアン）だ！……………ここは一端退却した方が良さそうだなあ……………」

クトウグアが別の場所にいるガタノトアとハスターにテレパシーをすると、2体は叫んでいた。

『此方！ガタノトアだ！！此方も護星神に襲われている！！』

クトウグアは冷静に答える。

『此方もだ…………… 奴等を甘く見すぎていた…………… 撤退するぞ！！』

『クッ！…………… 分かった…………… !!』

ハスターも確認すると、クトウグアはテレパシーを解除し、陽弥を見る

「陽弥・ギデオーン！覚えておけ！…………… 何れかお前の首を…………… 刈り取る！」

「お前もな…………… クトウグア……………」

両者は互いの瞳を睨み、クトウグアはアヴァロンへ去っていった。電磁シールド内にいるシンの所にβが走ってきた。

「シンの旦那！見てくれ！」

シンはデバイスを見ると、シールド外の気温が段々と正常に戻っていった。

「クトウグアが退却したから、気温が正常に戻っている…………… っ？」

ヴァルヴァートル帝国の電磁シールドを解除した時、空から、雪が降ってきた。

「雪だ……………」

「綺麗……………」

ユナとアレクトラが降ってくる雪を眺めていると、ヴァルヴァートル帝国にユグドラシル船団が近付いてくる。

「あれが…………… お兄ちゃんが言っていた？」

ルナが問うと、陽弥は答えた。

「そう…………… ユグドラシル9とユグドラシル7だ…………… あれが革命連合だ……………」

一方、退却していくクトウグアは陽弥の事を考えていた。



「あの時、陽弥・ギデオンの後ろにいたあの黒い影は………  
体………それと………」

クトウグアは陽弥の後ろにいた影が放った言葉を思い出す。

『(………去れ………クトウグア………)』

「我の名を知っていた………あれはドウーム?………嫌、

ドウームにしては、力が極大過ぎる………だが、あれ

は………ドウームも、クトウルフ様の力も含まれてい

る………何故だ?………」

クトウグアはそう考えながら、アヴァロンへと帰還した。

## 第43話：陽弥の闇

陽弥はホライゾンに来たラルフへと向かっていた。

「ラルフ！、バルド！、キャリー！、デユラン！、ドミニカ！、ダーマ  
！」

「「「陽弥！」「」」」

陽弥は皆に問う。

「皆！どうしてここに?!」

「お前が、何時まで経っても呼ばないから、此方から来たんだよ！」

「ゴメン！」

「ゴメンで済むなら………と言つても俺等は神か………」

陽弥とラルフ達は仲良く笑っていると、ソフィアが来る。

「ちよつと陽弥！」

ソフィアは陽弥を連れていくと、陽弥はソフィアに問う。

「何……ソフィア？」

「ちよつと！あの人紹介してよ！」

ソフィアの視線の先はラルフであった。

「何で？」

「何でって………あくもう！／／／」

すると、ソフィアの頬が薄々と赤くなり始めた。陽弥はソフィアがラルフに好意を持ち始めたことに気付いた。

「お?………ひよつとして、ラルフの事が好きになったのか？」

「ええっ!?!／／／そ!………そんな事ある分けないでしょ!?!」

ソフィアは怒りながら、陽弥の頭を殴り続けた。

「痛い！痛い!………お前!?!俺、一応神だぞ!?!神をボコボコにする  
なんて、無茶苦茶だよ〜！」

「問答無用!!／／／／／」

ソフィアはさらにヒートアップし、陽弥を追いかけ回す。その光景にラルフは笑っており、バルドは呆然していた。

「仲の良い二人ですねぇ………」

「あ………… ああ…………」

ソフィアにボコボコにされている陽弥の所にサムが来た。

「陽弥…………」

「何？爺ちゃん？」

「話がある…………… 来てくれ…………… 勿論、皆にもだ……………」

「分かった……………？」

陽弥はラルフ達とシンも連れて、医務室に連れられた。

医務室に連れられた陽弥は台に寝かせられていた。

「で、爺ちゃん話って？」

「あの時、クトウグアの攻撃をした時…………… お前、一体何をしたんだ？」

「え？、普通に防御して、跳ね返したと思ったら、クトウグアが突然、怯えた表情になって、逃げた…………… それが？」

「…………… やっぱり、覚えていないかあ」

「何が？」

陽弥が頭を傾げると、シンが質問する。

「親父…………… 一体どういう事なんだ？」

「…………… シン達は護星神ではないから、見えなかったかも知れないが…………… 陽弥の後ろに何かが取りついていたのだ……………」

「え……………?!」

「ソイツが、クトウグアの攻撃を跳ね返し、さらに威圧させて、退却させたのだ…………… たが、あの黒い影は普通ではなかった…………… この私と、アルベルトも威圧していた……………」

「そんなに…………… まずいのか？」

「そうだ……………早いところ、検査と状態、そして取り出さないと……………大変な事になるかもしれない……………」

「だけど、どうやって?!」

「8人の護星神……………つまり、我々が、ドミニカ力でナノマシン化し、陽弥の体内にあるそれを除去する……………ドミニカ……………やって来れ、」

「分かった……………!」

「じゃあ、行くぞ……………」

ドミニカが得意の錬金術でサム達を眼では見えないほどの微生物並みのサイズになり、陽弥の手に付いている点滴から、入っていった。

「爺ちゃんやラルフ達……………大丈夫かなあ?」

「大丈夫だ……………親父がそう簡単に負ける筈がない……………絶対に……………」

「そうだな……………」

「何か買ってこようか?」

「嫌、良いよ……………俺大丈夫だから、」

「嫌、患者は絶対に何か必要とするだから買ってくる……………タスクにお前の好きなカプチャーノを頼んでくるからな……………」

「あ……………それで良いよ」

「分かった」

「爺ちゃん……………どうしているかなあ……………」

陽弥がそう思っている一方、サム達は、陽弥の体内の中心部にたどり着いた。

「見つけたぞ……………」

サムが言うと、目の前に、紅炎なのか、砂なのか、水なのか赤黒い物が、赤黒い塊の周りを這い回っていた。

「あれが?」

「そうだ……………陽弥の後ろにいた黒い影の正体だ……………行くぞ」

サム達は赤黒い塊に近付こうとした次の瞬間、彼らの横を何かが通り過ぎた。

《?!!》

「今……………誰かが俺の肩に触れた？」

「俺じゃない」

「私も」

「あたかも……………」

皆が焦っているなか、さらに皆の後方からとてつもない殺気を感じた。

《っ?!!》

「皆……………それぞれ自分達の後ろに何かいるみたい……………」

「いるみたい？……………バカな？……………お化けじゃあるまいし、」

「じゃあ、何で……………俺達神なのに……………」 ”こんなに

震えて、脅えてるんだ？”……………」

デユランが言うと、皆の手が震えていた。

「私のデバイスから……………え？」

キャリアーがデバイスを開くと、そこに映っていたのは……………

「これって……………俺達……………!?」

デバイスを除き混んでいる皆の姿を後ろにいる誰かが写した写真であった。

「さらに後方から、複数の気配が……………こつちを……………」

アルベルトが持っていた広範囲レーダーに赤のアイコンがどんどん増えていった。

「後ろに……………滅茶苦茶いる……………数は……………4奥以上!!」

上!!」

皆が脅えているなか、後ろから、ヒタツ、ヒタツ、ヒタツ、と何かの音が聞こえてきた。

《?!!》

「何かの……………足音だ……………」

「しかも音から判断して……………裸足で……………子供の様だよ……………」

サムは歯を食い縛り、勇気を持って、振り替えた！

「……………クッ！」

しかし、後ろには、誰もいなかった。

「誰も……………いない……………」

「さっきの気配が消えた……………」

「レーダーにはもう映ってないよ……………」

レーダーに表示されていた赤のアイコンがいつの間にか消えていた。

「ほお……………」

サムはホツとしたのか、落ち着きを取り戻し、前へ向いた直後、目の前に、髪は銀色、肌はドス黒く、体中に紅い刺青、両肩には牛の頭部と野獣の頭部の鎧が装備しており、悪魔王の様な禍々しき翼を持った者がサム達の目の前にいた。

「っ!!!」

サムは驚き、フリーズガンに向けた。

《え?》

皆は、サムの行動を見て、前へ向いた。

「あ……………ああ……………!!」

「で！」

「で！」

「で！」

「で！」

「で！」

「で！」

「で！」

《出たあああああ!!!》

皆はフリーズガンを抜き取り、一斉に赤黒い人物に向けて、アイスビームを乱射した。フリーズガンの銃撃音と皆の断末魔の悲鳴が、陽弥の体内に響いた。

その頃、医務室のベッドでアストラッド王から貰った古文書を読んでいると、ドアが開き、現れたのは、婚約者であるエミリアと未来の娘マナであった。

「あのう……………陽弥様？」

「ん？エミリア……………」

「パパ♪」

「おおく、マナ……………」

マナが陽弥に抱き付くと、エミリアは心配そうに陽弥に言う。

「御父様から聞きました、陽弥様が病室にいると、」

「うん……………何か爺ちゃんが言うには、俺の体の中に何かがいるって……………それで皆が小さくなって、除去すると、俺の体の中に入って……………」

「まあ、そんな大変な事に？」

「うん……………もしかしたら、未来……………生まれてくるマナにも影響が出ると思ってやったんだろう……………」

二人はマナを見てると、またドアが開き、タスク特製のカプチーノを持ってきたシンが現れた。

「陽弥、カプチーノ持ってきたぞ」

「ありがとう!!!」

突然陽弥が口と腹を抑え、ベッドから、転げ落ちた。

「どうした!?!」

「陽弥様?!」

「パパ!」

「グアアアアアアアアアア!!!」

陽弥は腹を抑えながら暴れた。

「どうしたんだ陽弥?!」

「体の中で!!……………何かが暴れている!!!ウプツ!!!」

そして陽弥は口を抑えると、何かを吐き出した。

「ウツ!……………ウツ!……………ゴベエエツ!!!」

陽弥の口から吐き出てきたのは、サムであった。

「親父?!」

「お義祖父様?!」

「じいじー」

シンがサムに近付き、立ち上がるのに手を貸してやった。

「大丈夫か!」

「はあ…………… はあ…………… はあ…………… 強い……………!」

「え……………?」

「陽弥の体の中にいたアイツが…………… あまりにも強すぎる…………… しかも……………」

陽弥も落ち着きを取り戻し、頭を押さえ込んでいるキャリアードダーマに声をかけた。

「お前らも大丈夫 「嫌あ!!こつち来ないで!!触れないで!!」 つ!!!?」

突然キャリアードが陽弥から遠ざかろうと、抗っていた。

「見ての通り…………… キャリーとダーマは奴の力で、トラウマになつてしまった……………」

「何で……………?」

「奴の素顔が…………… ”お前” 自信なんだ……………」

「俺……………?!」

すると、サムはポーチから小型のカメラを取り出した。

「この小型携帯カメラで奴の顔と映像を映してある…………… 見てみる……………」

陽弥はシンに頼み、小型カメラからアクセスし、映像を再生した。映し出された場所は、陽弥の血管内であった。

「これが俺の体内……………?」

「呼吸、体温は感じなかったが、体内の細胞は生きていた…………… これもインフィニティソウルのおかげかな……………」

「…………… 見えてきた」

よく見ると、虹色に輝くインフィニティソウルが陽弥の人工心臓にエネルギーを分けていた。

「これが……………」



「お前の力の源……………インフィニティソウルだ……………ここからが本当の修羅場だった……………始まるぞ……………」  
すると、インフィニティソウルの横に赤黒い塊の様な物が見えてきた。

「何だ……………これ……………?!」

「これは明らかに、インフィニティソウルに似ていたが獄炎の様な物だから……………安っぽいネーミングを付けたら……………『インフィニティ・インフェルノ』……………頭文字を使つて”ダブル・アイ”と名付けたんだ……………そしてここからなんだ……………」

サムが見渡していると、何か黒い人物が映った。

「今、カメラに何か写っていた!?!」

「あちらにも……………!?!」

そしてこれまでの様に黒い人物と出くわし、戦闘が始まった。黒い人物はあまりにもすばしっこく、フリーズガンが直撃したが、氷結した氷の塊がみるみると溶け始めた。

「!!!!」

「フリーズガンが効いていない!?!」

「言っただろ?、奴自体が獄炎……………嫌、無限の獄炎を放つ……………だから、フリーズガン見たいな初歩的なサブウェポンすら……………赤子の肌を捻るかのようにあっさり溶かしたんだ……………つまり、あれだけフリーズガンのアイスビームが溶けるとしたら……………お前が体内から奴を解き放てば……………」

「……………大地は……………焦土化して……………生命が朽ち果てていく……………」

「そうだ……………」

そしてサム達は、一旦、体内から逃げ出すことになると、

午前1時…………… 陽弥は天井から星を眺めていた。  
「俺の体の中にいる闇を解き放てば大地は…………… 焦土  
かあ……………」

陽弥が考えているその時、誰かの声が聞こえてきた。

『まだ悩んでいるのか?』

「っ?!…………… 誰っ?!」

しかし、医務室には誰もいないすると、また声が聞こえてきた。

『ここだ…………… ここ……………』

すると、陽弥の胸から、赤黒い症気が飛び出し、段々と形を整え、映像で見た黒い人物になった。

「お前はっ……………?!」

すると、黒い人物は陽弥に御辞儀をし、挨拶した。

『御初に申し上げる…………… 我はアプス…………… そ

う…………… 3000奥年前までは、闇の皇神帝

”…………… 原初の極限大の獄闇王と呼ばれていた者だ……………』

「つまり…………… 最初の闇の王で…………… 多次元宇宙

の中で最強最悪災禍を呼ぶ者って言うことか……………!!!」

『御名答…………… ♪流石、私の一部…………… 我妻、光の皇女帝ニケ

と…………… 我の子孫だ……………!!』

アプスの言葉に陽弥は驚愕した。

## 第44話：アプスとニケの祝福

陽弥はアプスと名のる闇の神が自分の先祖である事に驚愕していた。

「お前が……………俺の先祖!？」

『その通り……………我アプスと我妻ニケは光と闇……………一心同体……………お前の使っている光の力は元々、ニケの力……………そしてその闇はドウームと我の物でもある……………』

「じゃあ、あの時クトウグアを威圧させたのは……………」

『勿論……………我だ……………彼にはちよつと退散して貰ったよ……………邪魔だからなあ……………』

すると、アプスは医務室から出ると、陽弥に言う。

『付いてこい……………』

「え……………?」

陽弥は起き上がり、アプスに付いていくと、アプスは床に魔方陣を描き、陽弥と共に何処かへ転移された。

そして転移された場所は何処か知らない神殿で、中にはあらゆる銀河系がずつしりと円卓の様に並んでいた。

「ここは……………!？」

『ここは……………全ての宇宙の中心点……………始まりの宇宙と呼ばれている……………創造主は混沌のカオス……………彼はその体全てがダークマターで覆われている……………つまり、宇宙全てが暗いのはカオスの体の中にあるのだ……………そしてカオスの体から、超新星が起こり、新たな星々が誕生し、そこから生命が生まれ、やがて死ぬ……………』

「それが……………俺達、有機生命体なのか？」

『そう、その反対のもいる宇宙は広くても……………多次元にはこことは異なる文明を持った世界もある……………例えばこれもその一つだ……………』

アプスが陽弥達のいる銀河系の右からから35番目の銀河系を覗くと、アウラの都が見えており、アンジュのヴィルキスとサラの焰龍號が黄金に輝いており、見たことのない2機の機体が、銀色に輝いていた。

「あの機体は？」

『極限の名を持つ機体だ……………』

アプスはズームして、2機の機体を見る。

「あの2機はパンドラメールと同じ凄い機体なのか？」

『まあね……………あの2機は異次元生命体を駆逐するほどの力持っている……………他にもあるぞ……………龍の名を持つ機体や、異なるラグナメールや多次元宇宙や世界から来た機体や戦艦も……………多次元に存在するのだからなあ……………見ろ』

今度はすぐ横にある銀河系を覗くと、地球で何かの争いをしていた。

「あれは？」

『……………愚かな地球人の一部が樹立した独裁連盟国家『大朝鮮連邦』はソウルの他、お前らが言うアウラの都またの名を日本を強制的に自分達の領土にし、日本を支援してきたアメリカ東北部、東南部を占領しちゃったからなあ……………見ろ、まだ幼い子の目の前で父さん、お母さんを銃殺しやがって……………全く……………性根腐った連中だよ……………』

「結局、アメリカって言う国はどうなったの？ずっと大朝鮮連邦に占領されたままなのか？」

『嫌、アメリカの反乱組織とオセアニア連邦、アフリカ共和国、中国、ロシア、ヨーロッパ連合の手によって大朝鮮連邦は亡びたよ……………結果日本はアメリカの領土になってしまい、朝鮮の民は全員銃殺の刑……………皮肉な物だよ……………』

「それと……………俺らの世界に何の関係が？」

『お前の先祖、我にとつては子孫が造り上げたギャラリック・リングの機能でドゥームの星リイボラが、さつき話した世界を食い付くしちやっただよ……………見ろ』

よく見ると、さつきまで青かった地球が溶岩で赤く染まった地球に変わり果てていた。

「え〜……………!？」

『だからギャラリック・リングを起動する時はちゃんと設定してくれよ？連帯責任なっているから……………全く、我の子孫は困った事をしてくれたよ』

「ごめんなさい……………先祖様……………」

『嫌、お前らは良いんだ……………ちゃんとギャラリック・リングを良い方の使い道にしているから……………』

「うん……………」

『それと、大馬鹿な連中も動き出している……………』

アプスはそう言うと、元の銀河系を覗いた。すると、アヴァロンが映し出され、中では何やら市民が武装をしていた。

「これは……………？」

『アヴァロン内でネオ・ミスルギ皇国の愚民共が、義勇隊に志願しているんだ……………』

その事に陽弥が慌てる

「跳んでもない！そんな事したら、助けられなくなる！何とかしないと！」

『そうしてくれ……………アイツ等は君の首を持ち帰ろうとしているのだからなあ』

「え?!」

『実は……………我が君の前に現れたのは、これを知らせる事なのだ……………馬鹿皇太子……………嫌、アイホートがお前から奪った

インフィニティソウルを愚民共に見せびらかして、さらにお前の首を持ってくれば……………不死の力を持つインフィニティソウルをその者に与えると……………嘘を吐いたんだ……………見ろ』

さらにズームし、ネオ・ミスルギ皇国の民の目を見してみると既に目の輝きがインフィニティソウルのような虹色に変わっており、皆は不気味な微笑みをしていた。

『もう、コイツ等の目はインフィニティソウルだけに集中していない…………… さらにこの愚民から凄まじい欲望を放出している…………… そして欲望をエネルギーにしている……………』

義勇隊に志願している市民から、黒いオーラが溢れており、ダークマタージュエルが人々の欲望のオーラを吸収していた。

『ダークマタージュエル!?!』

『ナトラータホテプめが…………… 最後の手に乗ったのか……………』

『最後の手?!』

『人々から出ている、欲望のエネルギーをダークマタージュエルに吸収させ、クトウルフを復活させようとしているんだ…………… それに もう遅いだろう……………』

『どういう事!?!』

『既に、欲望がダークマタージュエルに染み渡っている…………… この状況だと…………… 数時間だ……………』

『困るよ! そんなことになったら皆死んでしまうよ!』

『だが、一つ手ならある……………』

『何?』

『復活したクトウルフを一気に倒すことだ……………』

『冗談じゃない! それも無茶苦茶過ぎる!』

『まだ話は終わっていない……………!』

『うっ……………!』

『復活したクトウルフを倒すためには…………… シグムディアの本当の力を解放せねばいけない…………… 先ず、極幻王カイオウを解放し、お前の銀河七聖龍4体も解放する…………… そこからが……………』

俺の出番だ……………』

『え?』

『俺を解放するんだ……………』

衝撃な言葉に陽弥は驚く。

「そんな!? そんなことをしたら大地は!?」

『大丈夫…………… カイオウで我の力を押さえ込んでくれるはずだ…………… そして我、皇神帝アプスの無限の闇とドウームの無限の闇…………… さらにお前の極限の光とニケの無限の光……………』

カイオウ、銀河七聖龍…………… シグムディア…………… 最後  
に…………… お前の娘…………… マナと融合するんだ……………』

「どういう事なんだ!!…………… それ!？」

『奴等はまだ…………… シグムディアの本当の力を知っていない…………… ならば、強制的に思い知らせるんだよ…………… ある世界ではこんな言葉もある……………』

「?」

すると、アプスは剣を取りだし、地面に突き刺し、仁王立ちで叫んだ。

『恐怖こそ自由!、君臨こそ解放! 矛盾こそ真理!と…………… だから邪神達の目の前で…………… クトウルフが殺られる姿を目に焼き付かせるのだ…………… 一生消えない永遠の悪夢として!!そして愚民共に現実から背けるなど教え刻ませるのだ!!もう立ち上がれ、マナはお前たちを愚かな姿に変えるエネルギーと!そして本当の敵は誰なのか!?それは逃げている自分達の事だと!もう逃げはしない!生きるために立ち上がろうじゃないか!!そして再び希望の光を照らそうと!!』

すると、アプスの後ろから、シグムディアが現れ、全身の装甲が吹き飛び、本当の姿を現した。

「これが…………… シグムディアの本当の力…………… 真の姿…………… ザ・オリジン……………!!」

『心に宿る…………… 第三の剣を解き放ち!!…………… 民の歪んだ心を斬れ!……………』

アプスが心の中で陽弥に語りかけると、陽弥は呪文を唱え始めた。

「無限の光と闇、無限の聖と魔、生と死を司る龍神の王の力が宿りし裁きの龍神剣…………… 召喚!ウルティメイト・バハムディアアアアアア!!」





陽弥はルーを見た。

「起きてたか！急ぐぞ!!」

「え？何を？」

「邪神達が……… 全勢力で動いた………！」

「何だって!?!」

そして敵勢力は真っ直ぐと大艦隊を引き連れて、ヴァルヴァートル帝国に進行していた。旗艦”エンペラージュリオ二世”に乗ったジュリオ（アイホート）とナトラータホテプが一緒にいた。

「これより……… 神の鉄槌を下そうぞ……… 下等生物共………！」

## 第45話：邪神皇帝VS獄闇の皇神帝

陽弥はブリーフィングルームに連れられると、そこにクロウとエイルマットがいた

「クロウさん！エイルマットさん！」

「陽弥！」

「ルーから聞きました！邪神達が全勢力で此処に向かっていると！」

「ああ、シンとジャヴィック提督とサム提督が各国にいるモーフィスとザンダーや各国の兵達に応酬要請を出した……間に合えば良いんだが……」

「大丈夫です……俺とラルフ達で全力で時間を稼ぎます……」

「そうか……ありがとう……俺もアークを使って皆を支援する……！できる限り、お前達の援護もする……」

「分かりました……！ルー行くぞ！」

「ああ！」

陽弥とルーは格納庫へと向かっていった。

格納庫に行くと、メイがシグムディアの整備をしていた。

「メイさん！もう出れますか？」

「うん！……シグムディアのライフルに新たな武装を施してみたの、それがこれだ！」

メイの指差す方向を見ると、ハイパーノバビームライフルの下部にアサルトライフルに装着されていたグレネードランチャーが取り付けられていた。

「銃下部にロケットバズーカを装備させてみたの……しかも、

フレイゾン粒子を含んだミサイル……つまりハイパーミサイルを射つことが出来るよ♪」

「スゲエ………こんなの貰っちゃって良いですか？」

「良いよ良いよ、相手は邪神族だからこれぐらいの武器は造っておかないと………あーそれと」

メイが陽弥に渡したのは、右肘のプレートに装着されたライフルであつた。

「これは？」

「最新式の三点バースト式ライフルだよ♪パルスバレットの代わりにヘルガンで採れるペトルサイト粒子をパルスライフルに組み込んだの………アームに装着すれば何時でも射つことが出来る！………さらに」

陽弥がライフルを扱っていると。銃口からバレルが伸長し、スナイパーライフルへと切り替わつた。

「おおっ!？」

「銃身が伸縮出来るチャージ式レールガン………ドットサイト式のスコープにメーターを表示させているから分かりやすいよ！」

「ありがとうございますー！」

陽弥はメイにお礼をして、シグムディアに乗り込み、発進した。

上空は既に、セイクリッドメールや戦闘機、艦隊が囲まれていた。「来ましたー！帝国軍ですー！」

空から、多数のロイガーが衝突してきた。そしてロイガーは口から、イングを出し、迫ってきた。

「おうおう………早速ロイガーを前線に出してきや………ん?」

アレクトラとルチルがイングの群れの中に何かがいた事に気付いた。

「あれってえ……………アジマス人!？」

「どういう事なんだ!？」

「まさか……………アポカリプス!」

「そんな!?アイツ邪神側に寝返ったのか!？」

「そうかも知れない……………アジマス人がああなっている  
と……………まずいぞ……………」

「え?!……………どういう事なの?」

「本当は彼らも助ける筈だったんだよ……………だが、見ての通りだ奴  
等はずいこの手段まで来たんだ……………この場合だと……………次  
は」

次に現れたのは、ネオ・ミスルギ皇国艦隊が出現し、着陸し、中か  
ら現れたのは、武装したネオ・ミスルギ皇国の民であった。

「そんな!？」

「嘘でしょ!？」

「奴等……………ここまで殺るのか!!」

「迂闊に手が出せん……………!!奴の狙いは……………俺のインフィ  
ニティソウルだ……………つまり、それを手に入れるため  
に……………”俺の首”を持ち帰ろうと義勇隊に志願したん  
だ……………」

陽弥の言葉に、皆は驚く。

《ええ!!!》

「そんな!?お兄ちゃんの首を!？」

「んなことさせつかよ!!」

ヒルダがアーキバスの出力を最大に上げ、迫り来るイングとアジマ  
ス人、ネオ・ミスルギ皇国の民へ向かった。

「待って母さん!!」

「この野郎!!うちの息子に指一本触れたら承知しないぞ!!」

ヒルダは怒鳴りながら、アサルトブレードを抜刀し、イング諸とも  
アジマス人やネオ・ミスルギ皇国民兵を風ぎ払った。

「母さん!!あゝゝ!何て事をつ!!」

「陽弥!奴等を助けるのは無理だ!見ろ!」

シンは陽弥にネオ・ミスルギ皇国民兵の目を見た。彼等の目は、虹色に輝いており、薬物を使用した様な不気味な表情になっていた。

「あの表情……………間違いなくお前に目を付けている……………彼等を助けるのは無理だ……………諦めろ！」

「クッ！……………仕方ない……………(ご)先祖様……………すみません！！」

陽弥はシグムディアを起動し、イングに撃破していく、各国の衛兵が押し寄せてくる敵に苦戦していた。すると今度は、移動要塞ギガンテスが陽弥の前に立ち塞がった。

「邪魔をするなあああ！！」

陽弥は叫び、シグムディアの出力を最大に上げ、ギガンテスの前足を押し上げていく。するとシグムディアを狙いに、人型のデストロイアが向かって来た。

「新型か！」

陽弥はギガンテスを押し上げたまま、旋回し、ギガンテスをデストロイアに投げ付けた。デストロイアはあっさりとギガンテスの巨体に押し潰された。

「何が要塞だ！……………ただのタートル型のロボットじゃねえかあ！！」

すると無人機、有人機のギムガラムとデストロイア、戦闘機、大型アジマス兵がシグムディアを取り囲んでいた。

「クッ！完全に俺をターゲットにしてやがる！」

そして、戦っている最中のラルフが取り囲まれた陽弥を見て、言う。

「おい！まずいぞあれ！」

「お兄ちゃん！！」

「皆！陽弥を助けに行くぞ！！」

「陽弥！！ルナ！！」

ラルフやルナ、シン達も陽弥を助けに向かった。

「こんなの……………効かんぞ〜！！！！」

陽弥はハイパーノバビームライフルのロケットランチャーを使い、ハイパーミサイルでデストロイアやグラムでギムガラムを切り裂き、

頭部の粒子キャノンで、戦闘機を撃墜していくと、地上から民兵達が、武器を構えていた。流石の陽弥ももう駄目かと思いきや、陽弥のコスモバイルから、ガルディオラが出てきて、民兵に襲い掛かった。

「ガルディオラ?!」

ガルディオラは巨大な牙でアジマス人に噛み付き、体から炎を放出しながら、敵を近寄らないようにする。

「お前も……………俺を助けるために……………」

さらにコスモバイルから虹色の角をした金色の鹿のスペクトロブス”ライウーン”と薔薇の花弁で敵を翻弄するスペクトロブス”フレグラーン”が現れ、ライウーンは空から雷をアジマス人へ落とし、フレグラーンが癒しの力で、シグムディアと陽弥を回復させてくれた。

「お前達も……………!!」

次々とコスモバイルから陽弥を助けるために、スペクトロブスの超体が現れた。鋼鉄の鎧を持つテツカリオンが空から、量産型のギムガルの攻撃から護っており、魚竜で頭部や尻尾に大剣を持ったザックズバーンが敵を風ぎ払う。

旗艦エンペラージュリオⅡ世に乗っているナトラータホテプが怒鳴る。

「フン……………役立たずがつ!!もういい……………俺が出る!」

ナトラータホテプはクトウグア、ハスター、ガタノトアを引き連れて、戦場へと向かっていった。

「ナトラータホテプ様……………お氣よ付けて下さいませ……………」  
アイホートはクトウルフに敬礼した。

陽弥は次々にぬる敵に苦戦していた。

「この数……………ヤバイ……………っ!？」

その時、陽弥の頭上から、4つの隕石が、落下してきた。

「グッ!!？」

そして4つの隕石は衝突すると、息なり、ナトラータホテプ、クトウグア、ハスター、ガタノトアが襲い掛かって来た。

「会いたかったぞー！ミッドガンドの護星神!!」

陽弥は緊急回避し、体制を立て直す。

「今度はこの私！ナトラータホテプ様とクトウグア、ハスター、ガタノトアで相手する……………お前ら！」

すると、上から、4つの柱状のデストロイアが陽弥とナトラータホテプ達を取り囲んだ。

「柱状のデストロイア!？」

すると、デストロイアからビームロープが他の柱状のデストロイアと連結し、格闘試合のリングへとなった。

「ここを覆ったデストロイアから離れると……………完璧に」

ナトラータホテプが自分の指をビームリングに触れると、あつという間に指が分解されたが、指を離すと、再生し始めた。

「分解されるぞー♪」

ナトラータホテプは嬉しそうな表情を陽弥に見せた。

「貴様ら……………卑怯だぞ!!4体1で!!」

「フッフ……………我はなあ……………そう言う卑怯な事が大好きなんだよお!!」

ナトラータホテプが叫ぶとクトウグア、ハスター、ガタノトアが一斉に襲い掛かった。陽弥はアクロバットとマトリックスな回避と戦法で互角に戦っていると、リングの周りに民兵が叫んでいた。

「殺っちまええ!!」

「袋の鼠だ!!」

「八つ裂きにしろ!」

「邪神の首を刈り取ってしまえ!!」

「そんな！……… 酷いよ！」

その光景に、シン達は驚愕する。

「完全に民は陽弥を邪神と勘違いされてやがる……… !!」

シン達が陽弥へ近付いた直後、植物のつるの鞭がシンのペルシウスを吹き飛ばした。

「何だ!？」

「お久し振りねえ」

現れたのは、ダゴンとヴルトウームであった。

「ヴルトウーム!？」

ソフィアが言うと、ヴルトウームはダゴンに言う。

「ウフフフ、殺りますわよダゴン♪」

「ああ、出よ！……… 我が下僕、ヴリトラ!!レヴィアタン!!」

ダゴンの後方から、翠の鱗を持った大蛇と海竜が召喚された。

「神も抗う不死の龍と深海の悪魔は恐ろしいぞ……… 龍装光!!」

《っ?!》

ダゴンの放った言葉に皆は驚くと、ヴリトラはヴルトウームのつるの鞭に纏い、大蛇の様な強靱な鱗に変わり、レヴィアタンはダゴンの腕と背中に纏い、猛毒を持つ刺と背鰭になった。

「さあ、掛かってこい……… 下等生物!!」

ダゴンが言うと、2体はシン達に襲い掛かった。

「チツ！殺るしかないか!!」

シン達も、龍装光したダゴンとヴルトウームに挑んだ。

「殺れ、ガタノトア！」

「おう！我の石化光線を受けてみろ!!」

ガタノトアの触手から拡散石化光線が放つと、陽弥は七星剣の刃で、石化光線を弾き返した。

「ほお、鏡の様に磨いた剣の刃で光線を弾くとはなあ………」

クトウグアが三刀流を抜刀し、陽弥に斬りかかった。

「面白いー！」

「クトウグアー！」

陽弥は魔剣グラムを抜刀し、クトウグアの三刀流を防御し、頭部の



粒子キャノンで目眩ましすると、ハスターが体から音速の突風を放った。

「食らえ！スパイラルソニック!!」

ハスターの音速の突風は真つ先にシグムディアに向かっっていくと4枚のシグムディアがビームウイングを展開し、ばたつかせ始めた。

「何!？」

すると周りから粉塵が吹き荒れ、ハスターのスパイラルソニックを払い消した。

「考えたな……………羽から出る風圧と音で粉塵を起こし、我のスパイラルソニックを払い消すとは……………愚かな事をする」

すると見物していたナトラータホテプが言う。

「それじゃ……………そろそろ仕上げとするか……………」

ナトラータホテプは手から、赤黒いオーラを放つダークマタージュエルを取り出した。

「ダークマタージュエル!？」

「見せてやる……………」「我等四神柱の本当の姿を!!」

ナトラータホテプ、クトウグア、ハスター、ガタノトアが叫ぶと、ダークマタージュエルが光だした。4体の邪神を取り込み、ダークマタージュエルから黒い物体が出てきだし、ダークマタージュエルをコアを中心に、形を整えていく。そしてダークマタージュエルの光が消え、陽弥は驚愕した。

「お……………お前は!!」

「そう！我等四神柱は元々、クトウルフの4つの力が集結した姿……………ナトラータホテプの土の力、クトウグアの火の力、ハスターの風の力、ガタノトアの水の力……………だが、この場合、フォドラニウムから出るマナの光と愚かな下等民族の欲望の闇もある……………これぞ我……………邪神皇帝クトウルフの

覚醒した真の姿だ!!」

タコのような触手と頭、強靱な肉体、6枚の悪魔の大翼、龍のような鋭い牙と爪、闇の中で輝くルビーの瞳、そして凍てつく冷気を放つ尻尾を持つ邪神……………クトウルフへとなった。陽弥はシグムディ

アの出力を最大に上げ、ハイパーノバビームライフルを乱射した。するとクトウルフは手を伸ばし、叫んだ。

「マナの極限なる障壁よ！」

クトウルフの手から、緑に発光するマナの大障壁が展開され、シグムディアのハイパーノバビームライフルのビームエネルギーを取り込んだ。すると、6枚の大翼がさらに大きくなり、クトウルフの額から、ガーネット結晶で出来た角が飛び出し、胸からダークマタージュエルが出てきて、クトウルフはさらに進化した。

「ビームを吸収しただよ！」

「素晴らしい！素晴らしい!!これがマナの光か…… エンブリヲも愚かだ!…… 自分が造り上げたシステムがまさか我の為に貢献してくれていたとは…… だが、今は…… 我がマナの光で管理しているがな!!」

するとクトウルフは手を掲げた直後、空…… 宇宙から亀裂ができて、ガラスが割れ、中には紅く燃える空間が浮かび上がっていた。

「何だあれは?!」

「出よ！我が僕…… ケイトス！」

クトウルフが叫ぶと、紅い空間の中から現実とは思えない程のどの惑星よりも大きすぎる超巨大な白鯨が出現した。

「何だ!?!」

「大きな…… 白鯨?!」

「で…… デカ過ぎだろ!?!」

「どうだ!…… ケイトスは霊獣でもあり、それ自体が我が大銀河帝国の首都でもあり、ソル級の大要塞でもある!!さらに!…… 我が旧支配者の始まりの惑星でも言える…… バロツクダークも呼び出せば、我等、旧支配者大銀河帝国…… 嫌、『ネオ・グリゴリア大銀河帝国』が復活する!」

「何だって!?!」

するとクロウはクトウルフの放った言葉に違和感を感じた。

「(バロツクダーク?!…… クトウルフは…… まさかコイツらは…… この世界の!!?)」

「そして始まるのだ…………… 種族存亡を掛けた大戦…………… 怒り、怨み、憎しみ、悲しみ、暴力、欲望、残虐、絶望に満ちた戦争…………… 第二次銀河大戦がなあ!!」

陽弥はクトウルフの目的を知り、剣を突き付ける。

「そんなこと…………… 俺が許さん!!」

するとクトウルフは陽弥に接近し、手からアメズヤクラを抜刀し、刃同士のおつかり合いが始まるとクトウルフは語る。

「それに…………… 我はお前の心が見える能力を持っている…………… お前は今も…………… 闇の神 アプス”を解き放つ事を恐れている…………… !!」

陽弥はクトウルフの言葉に負けないよう歯を食い縛っていた。

「そして…………… !」

クトウルフは陽弥を払いのけ、とてつもない言葉を放った。

「お前は…………… ” 自分の中に潜む快樂も恐れている”!」

すると陽弥の表情が一変し、クトウルフはそれを確認すると笑った。

「見せてやろう…………… 心の刃が何れだけ恐ろしいのかを…………… その目に…………… 焼き付けてやる!」

クトウルフは手から閃光を放ち、陽弥の目を眩ませると、クトウルフの斬撃が陽弥を宙に舞い上げ、叩き落とした。陽弥は立ち上がろうと、剣を突き付けると、クトウルフがまた語り出してきた。

「人間を斬りたいと闇の声が今も囁いている…………… だが、理性と感覚は否定している…………… 哀れだなあ、星を護る神が生命を刈り取るなんて……………」

「違う!俺の力は生命を分ける物だ!」

「嘘だな…………… 本当は斬りたくて溜まらない…………… そうだ交渉をしよう……………」

クトウルフは陽弥の耳に近付け、言う。

「我等、ネオ・グリゴリア大銀河帝国に入れ…………… そうすれば、皆を生かしてやろう…………… 勿論他の種族もなあ……………」

「何?!」

衝撃の事に、シンは驚く。

「何だど?！」

陽弥は混乱し、否定している直後、

「そんなこと……………俺が鵜呑みにするわけ「なるっ!」っ?!!」

「お前は絶対になる……………やがてお前の闇が我等の仲間になれと囁くだろう……………!!」

クトウルフは微笑みを返すと、陽弥は否定しながら叫んだ。

「黙れ!黙れ!黙れ!黙れ!黙れ!黙れえええええ!!」

陽弥は魔剣グラムを振り回し、クトウルフに攻撃するが、クトウルフは回避し、距離を保つ。

「俺は……………絶対に……………お前達の仲間に入らん!!  
ハアアアアアアアアアア!!!」

陽弥は七星剣も抜刀し、クトウルフへ突っ込んだ。

「フツ……………なら、これはどうだ?」

するとクトウルフは謎の微笑みを交わすと、体から黒い霧を放出したが、陽弥は迷わず斬った。その直後、黒い霧が晴れ、陽弥が斬ったのはクトウルフではなく、15年前に死んだ自分の姿が倒れていた。!!?」

シン達はその光景に驚愕し、陽弥は後退りながら、悲鳴を上げた。  
「……………あああああつ!!」

「こーこれは?!」

サラマンディーネが問うと、陽弥は恐る恐る答えた。

「……………ああつ……………これは……………あの時の俺の……………俺の死んだ姿……………!!」

「お兄ちゃん……………!?!」

「陽弥……………」

ルナとヒルダが陽弥の表情を見て一変していると、シンが陽弥を落ち着かせる。

「落ち着け!陽弥!こんな物はクトウルフの幻だ!!」

すると死体から黒い霧が放出され、クトウルフが再び姿を現し、語り始める。

「こんなのは酷いなあ……………それは陽弥・ギデオンの本当の姿なのになあ……………」

「これが……………本当の……………俺……………?!」

さらに陽弥の表情が一変し始めているとシンが大声で言う。

「陽弥！コイツの話を……………グアツ!!」

クトウルフがシンに向けてブラスターを撃ち、ペルシウスを吹き飛ばした。

「父さん……………!」

「外野は黙っている……………これは神々の問題でもあるのだからなあ……………」

シンは吹き飛ばされながらも立ち上がり、クトウルフに抗議した。

「違う！お前は神でも何でもない！醜い心を持った悪魔だ!!」

「醜い?……………それは我の事なのか?……………それとも……………貴

様の息子の事なのか?」

「違う！陽弥は……………醜くなんて!」

「違う……………ない……………違わない……………」

「!?」

「だって……………俺の心に宿る闇は……………代々、受け継いでき

た闇の力……………それは闇の皇神帝……………アプスと……………」

光の皇女帝……………ニケの力でもあるから……………それを使って

俺は……………人々を助けようとしただけ……………」

「だがお前は……………自分の罪を覚えていないのか?……………たくさ

んのアジマス人や……………偽りの地球人を……………」

陽弥は泣き崩れながら、謝罪した。

「……………殺してしまった……………」

「さらにアヴァロンでたくさんの人々を陥れた……………」

「町も……………家も……………焼き付くしました……………」

「それなのに……………お前は神にもなって……………さらに人々を恐

怖に陥れるのか?」

「ごめん……………なさい……………ごめんなさい……………」

「言っておく……………お前は神でも何でもな

い……………醜く、禍々しく穢れた死者……………  
嫌、正真正銘君こそが……………”化物”……………真のノーマ  
だ……………!!”

クトウルフの言葉に、陽弥はさらに絶望の淵へと落とされた。

「……………そうだ……………俺が……………真のノーマだった  
んだ……………」

「だが、我等はネオ・グリゴリア大銀河帝は……………お前の様な可哀  
想な化物も歓迎するぞ……………新しき邪神……………今日

からお前の新たな名は”獄闇のブラム”だ」

「うん……………俺の新たな名前は……………嫌、兄さんの名  
は……………ブラム……………」

その時、陽弥の周りから赤黒い魔方陣がヴァルヴァートル帝国の大  
地を覆った。さらに青かった空が闇のように黒くなり、雲も白から赤  
く変色した。シン達は驚愕していると、絶望している陽弥から赤黒い  
影が現れ、陽弥の体を覆うと、影は不気味な微笑みを見せる。そして  
陽弥から紅い波動が放たれ、シン達は波動の風圧と圧迫感に押し負け  
る。

「っ!？」

「このオーラと気迫は!？」

「超危険!!」

「陽弥!」

「お兄ちゃん!」

「陽弥様!」

砦からエミリアが名を呼ぶが、陽弥の返事は来なかった。さらにシ  
グムディアの装甲が全て剥がれ落ち、両生類のような緑の肌が黒くな  
り、鋭い牙と爪を輝かせ、ガーネットの様な宝石の煌めきを持つ4つ  
の眼、そしてその瞳は獲物を狩る時になる獣の様な鋭くなっていた。  
「遂に……………覚醒したか……………ブラムへの覚醒と共に…………  
シグムディアの装甲が剥がれ落ち……………そして漆黒の闇の色に染  
まった!」

「シグムディア……………ブラム・ザ・アビス!」

「あれが……… シグムディアの……… 本当の姿なのか………?!」

シンが恐る恐る言うのと、シグムディアの胸から出ている宝石の中に強制的にアナザーモードに変身した陽弥が笑いだした。

「フッフッフ!!……… アハハハ!!……… 我等はブラム……… 下等民族よ!我はこの器から解き放たれたぞ!!!」

ネオ・グリゴリア大銀河帝国第0界邪神!!……… 陽弥・ギデオンの二重人格として、兄弟的存在!!……… 獄闇の皇神帝 ブラム・ギデオン様だ!!」

シグムディア自体と融合したブラムと名のる邪神は漆黒に染まった七星剣と赤黒いオーラを放つ魔剣グラムを抜刀し、クトウルフに襲い掛かった。

「良いぞ!!掛かってこい!」

クトウルフも邪心剣アメズヤクラとクトウグアの呪滅刀”魂喰”を体の中から抜刀し、ブラムの斬撃を防御した直後、大地が抉れ、剣と刀の刃から放つ衝撃波が敵味方も関係なく吹き飛ばした。

「おお!!これが皇神帝の力か!」

「ガアアアアアア!!」

ブラムは話している隙にクトウルフを蹴り飛ばし、ヴァルヴァートル帝国の電磁シールドを突き破り、帝国内へ吹き飛ばされた。ブラムは鋭い牙を長い舌で舐め回すと、吹き飛ばしたクトウルフを追っていった。そしてクトウルフは壊滅した住宅街の瓦礫に埋もれていると、ブラムが瓦礫の中に埋もれているクトウルフに目掛けて、踏み潰していく。クトウルフはブラムの足を掴み、捻り上げ、ブラムを転倒させた。クトウルフはブラムの片足を掴み、一気に振り回し、投げた。だがブラムはシグムディアの両腕を伸長させ、クトウルフの頭を掴み、シグムディアが一気に突っ込み、強烈な頭突きを喰らわせた。これは流石のクトウルフものろけてしまい、倒れた。ブラムは倒れたクトウルフの隙を見て、ボロボロの家を掴み、持ち上げ、起き上がろうとしているクトウルフに投げつけた。クトウルフは飛んできた家と直撃し、苦戦する。その光景にエミリア達は息を殺していた。





ブラムは思いつきり、軽々と持ち上げた上にクトウルフを帝国城壁外へ投げ飛ばした。

「バカなっ?!……………」 我が押されているだと?!ふざけるなああああ!!」

クトウルフが叫ぶと、クトウルフの肩部が裂け、デイスコード・ネビュライザーを展開すると、ブラムは言う。

「ほお、貴様のは…………… デイスコード・ネビュライザーか…………… だが!」

ブラムが叫ぶとシグムディアの肩部の肉が裂け、デイスコード・Z・フェイザーを展開した。両者は究極兵器を放とうとしていると、シンのペルシウスが究極兵器のパワーを測定し、危険のアラームが表示された。

「あかん!こんな場所で次元兵器を放ったら大地が焦土化する!」

「私に任せてください!!」

エスメラルダが神託用の杖を持って、エミリア達の前に出た。

「御姉様!」

「エスメラルダさん!」

エスメラルダは呪文を唱えると、ヴァルヴァートル帝国全体に翡翠の結界が張られた。全兵士や艦隊や邪神達も急いでクトウルフとブラムから離れると、クトウルフから紫の竜巻状の光学兵器とブラムから赤黒い竜巻状の光学兵器が放たれ、光学兵器同士がぶつかるのと、とてもない衝撃波と爆風と閃光がヴァルヴァートル帝国に襲ったが、エスメラルダが張った結界が何とか守ってくれているが、結界に沢山の亀裂ができてはじめていた。するとエスメラルダは今度は何かの呪文を唱え始めた。

「グッ!」

「全機!全艦!衝撃に備えろ!!」

シンが叫ぶと、今度はマグニチュード5の地震と風圧が襲い掛かった。

そしてその地震はリチャード陛下のいるヴァランドール皇国まで伝わった。リチャード陛下は城の窓から空を見ると、大きな茸雲が見

えていた。

「何だ……… あれは………?!」

爆風と風圧と地震が納まり、シン達は安否を確認した。

「皆大丈夫か？」

「ええ！」

「終わっ……… たのか………？」

「邪神たちは？」

「知らん………」

辺りを見渡していると、ルチルが空に指を指す。

「見て！」

皆はその方向を見ると、沢山のイングとロイガー、艦隊やギムガラム、ギガンテス、デストロイアとウルトゥームとダゴンに支えられた左半分失ったクトウルフがアヴァロンへと去っていくのが見えた。

「クトウルフが……… 去っていく………」

そしてクトウルフ達の影が見えなくなると、突然アヴァロンが光だし、ホライゾンから猛スピードでケイトスと共に何処かへ去っていった。

「アヴァロンとケイトスが……… ホライゾンから遠ざかっていくぞ………!?!」

そして煙が晴れると、目の前にエスメラルダが倒れていた。

「御姉様！」

エミリアが急いで、エスメラルダの所へ向かうと、ルナが陽弥がいないことに気付く。

「……… そう言えば、お兄ちゃんは!?!」

辺りを探してみるが、何処にもいなかった。

「皆で手分けして探そう！」

「陽弥！」

「陽弥！」

大勢の人達が陽弥を探していった。さらに自分達が踏んでいる所が、クトウルフとブラムの次元兵器によってできた巨大なクレーターだと知らずに……… オメガプライムスも消えてい

た……………

その頃、陽弥は何処か知らない西部劇の様な黄昏時の砂漠で倒れていた。

「ここは……………？」

陽弥は起き上がり、水を求めに歩いた。

「水……………水……………」

しかし、ボロボロの体でまた倒れた。陽弥は顔を上げると、シグムディアとオメガプライムスがあった。

「シグムディア……………オメガプライムス……………」

「マスター……………」

シグムディアが陽弥をコックピットに乗せると陽弥は掠れた声でシグムディアに命令する。

「頼む……………水がある場所へ……………」

陽弥はそういうとコックピット中で気絶した。シグムディアは急いでオメガプライムスへ向かっていった。

「……………」

オメガプライムスの大きな医務室ではオメガプライムスのシステムが陽弥を看病していた。すると陽弥は夢の中で魘されていた。

「ハア……………ハア……………ハア……………」

皆……………父さん……………母さん……………ルナ……………エミ

リア…………… マナ……………」

「……………?..」

陽弥は目を覚まし、辺りを見渡した。

「ここは……………?」

「此処はオメガプライムスの内部にある医務室です…………… マスター」

「マスター……………?」

「どうかされたのですか?」

ヴィクトルーが陽弥に問うと陽弥は答えた。

「君は…………… 誰?」

「っ!!?」

陽弥の放った言葉にヴィクトルーとオメガプライムス、格納庫で話を聞いていたシグムディアが驚く。

「僕は…………… 誰……………?」

「まさか…………… 記憶喪失!」

ヴィクトルーが陽弥が記憶喪失になっていることに、焦った。

「シグムディアの事は?!皆さんの事は!」

ヴィクトルーがさらに質問すると、陽弥は答えた。

「…………… 分からない…………… 何も思い出せない……………」

すると陽弥は頭を抑え、屈む。

「ああ…………… 頭が…………… ボオーツとする……………」

ヴィクトルー達は何とも言えない表情で陽弥を見てるしかなかった。

## 歴史の始まり編 第46話：軍事施設

ヴィクトルーとシグムディア、そしてオメガプライムスは記憶喪失になってしまった陽弥に困っていた。

「困ったなあ……………マスターがこの状態では、」

ヴィクトルーが考え込むと、オメガプライムスがシステム音で、話しかける。

「どうする?」って……………とにかく、一刻も早くこの荒野を脱出しなければなりません……………その前に先ずはマスターの記憶を戻さなければなりません……………」

するとオメガプライムスがシステム音で、何か話してきた。

「近くにゴーストタウンがある」と?」

「よし、オメガプライムスの艦長代理として、至急ゴーストタウンへ向かってくれ、オメガプライムス」

ヴィクトルーが命令すると、オメガプライムスはシステム音で返事をし、ゴーストタウンに着陸した。

「シグムディア……………ガーディアンビットを展開して、調査してくれ、後……………シン・ギデオン様から受け取ったゲオルギードロイドも……………」

「了解した。」

オメガプライムスから、複数のガーディアンビット、シグムディア、ゲオルギードロイドが発進した。

シグムディアはゴーストタウンの小屋をスキャンした。

「見るからに、3年放棄された感じだ……………ん?」

スキャンしている最中にある雑誌に目に入った。

「あの雑誌も調べてみよう……………」

シグムディアは小屋の中にある雑誌を調べると、それは水素核爆弾の事が載っていた。

「なるほど、此処は1956年の地球か……………と云うことは、地球で起こった、第二次世界大戦が終戦し、人類が人工衛星を打ち上げた時期でもあるか……………どうやら、我々は過去の地球に来てしまったようだ……………」

シグムディアの話に、ヴィクトルーが割り込んできた。

「そうですか……………何としてでも、我々も元の時代に還らなければ……………」

「それと……………この辺りから、複数の熱源反応が来ている……………」

シグムディアのレーダーに、複数の赤く光るアイコンが表示されており、オメガプライムスにも、表示されていた。

「何?……………全機!警戒体制!」

ゲオルギードロイドやガーディアンビットが機銃を構え、オメガプライムスは脚部の副主砲を展開すると、シグムディアは施設の外にある発電所を見る

「彼処からだ……………全機……………構え」

全機の機銃が発電所の前へ構えると、発電所の扉が開き、中から軍人らしき人達が現れ、銃を構えていた。

《っ!!》

軍人達はガーディアンビットとゲオルギードロイドに囲まれていた。

「何だコイツらは?!」

「待つてください……………!」

すると、発電所の奥から、軍服を来た司令官らしき金髪の女性が冷酷な表情で現れた。

「私達は、あなた達の味方です……………武器を下ろしてください……………」

「全機……………武器を下ろすんだ」

ヴィクトルーはガーディアンビットとゲオルギードロイドに武器を下ろすように命令した。

「私の名はミラ……………ミラ・バークティン……………この基地の最高

責任者です」

「私はヴィクトルだ……… 超大型次元戦艦オメガプライム  
スの最高責任者…… 陽弥・ギデオンの代理を務めている…… 現  
在マスターはこの世界に来て、記憶喪失になっている………」

「まあ、それは気の毒な事に………」

「率直に言う…… お前らは、何故この施設を造り上げたん  
だ……… 何が目的なんだ………?」

「私達は、人々の幸福の為に、宇宙の超科学が必要なのです。決して大  
地を汚す事のない完全な力が必要なのです………」

「つまり…… 核見たいな、野蛮な力がない物を造り上げようと、  
我々の技術が必要と?」

「はい、……… この星が蒼く輝く大地にするために…… 貴方  
達の技術が必要なのです………」

「そうか……… なら!」

シグムディアが突然、ミラにハイパーノバビームライフルを突き付  
けた。

「その穢れ腐った心を棄てよ………」

ガーディアンピットとゲオルギードロイドの機銃とオメガプライ  
ムスの主砲が軍人達に向けられた。

「え?何をですか?!」

突然の事にミラは慌てる。

「気付いていないと思っていたか?……… お前の心には、支配

と言う文字が心の中で見えた……… やはり過去の地球人は傲慢  
で欲深き種族だ……… 我がマスター側の地球人の方がまだ良い  
方だ………」

「そうですか……… なら、私も考えがあります………」

するとミラは自分の指を鳴らすと、オメガプライムスの脚部の影か  
ら、台に寝かされた陽弥が連れられていた。

「マスター!!?……… 貴様!どうやってオメガプライムスの内部に  
侵入した?!」

「私達を甘く見ないで欲しいですわ……… この施設は捕らえた異

星人のテクノロジを解析しているので、貴方達の戦艦のセキュリティも簡単に掻い潜れます……………貴方達のマスターが酷い目にしたくなければ……………大人しく貴方達の持つ強大な力を貸してください……………」

狂気に満ちたミラはシグムディアを睨むと、シグムディアは鼻で笑った。

「それは無理だな……………」

「何がですか？」

「お前達は分かっている……………マスターの持つ力は余りにも強大、そして時空をも変えてしまう力がある……………それを取り出す方法はマスターの婚約者……………エミリア様が必要だからなあ……………」

「何ですって?!」

「婚約者にもマスターと同じ、強大な力を持っている……………そう！時間を操作することが可能なのだ！……………だが、お前らはその様な技術を持っていない……………大人しく諦めろ……………それとも……………」

ガーディアンビット達のビームライフルが陽弥を連れていく軍人に突き付けられた。

「この施設全員を皆殺しにされるかだ……………さあ、どうする？」

シグムディアは余裕満々に言うと、突然ミラの口元が、傾き、にやける。

「仕方ありません……………」

すると施設を取り囲んでいるフェンスから、電磁波が流れ、シグムディアやガーディアンビット、ゲオルギードロイド、オメガプライムスの機能停止した。

「っ!!」

「異星人の拘束に使うための電磁パルスオーブと言う物ですわ……………貴方達の技術をじっくりと解体して、我々の兵器にしますわ……………ああ、それと貴方のマスター”陽弥・ギデオ”でし



たっけ…………… 貴方達が抗わないよう、人質にしますわ……………  
強大なエネルギーを取り出すために…………… ウフフフ♪」

軍人達がシグムディアを取り囲み、ネットランチャーを発射し、抑えていた。

「クツ！…………… 覚えておけ！何れお前らは過ちを犯してしまおう！それがこの星の最後だと思え!!ミラ・バークティン!!」

「まさかあ?…………… 我々の頭脳さえあれば、この実験体の力を容易く取り出す事が出来るでしょう…………… そしてあなた言ったわねえ?…………… 貴方達の住む世界に時間をも操作できる力が…………… その彼女のも取り出して、時空をも支配します…………… ”地球人こそ神に祝福された種と言うことを!!ウフフフフ！アハハハハ!!」

「クツ……………！」

そして、シグムディア達は、軍事施設に連れられ、ガーディアンピットやゲオルグードロイドの解体、研究、開発されていった。

あれから…………… 一年…………… 記憶がまだ戻っていない陽弥は部屋の壁に絵を描いていると、扉からノックがした。

「誰?……………」

「僕だ…………… クラウス・バークティンだ」

「クラウスさん?」

「この子等の部屋の移転が決まったんだ……………」

扉が開くと、銀髪で眼鏡をかけた男性が小さな姉弟を連れてきた。「君の細胞で改造させられた子供なんだ…………… 仲良くしてやってくれ……………」

クラウスが二人の子供の頭を撫でると、ピンクの髪の毛のロングヘア―

で元気な女の子が陽弥に挨拶し、それに続き水色のか弱い男の子も挨拶してきた。

「こんにちわ!」

「こ、こんにちわ……………」

「やあ、シャーラちゃんに、ラファイ君♪」

陽弥は既に二人の名前を知っていた。クラウドス・バークティン……………この施設の最高責任者 ミラ・バークティン”の元夫……………彼は彼女様な冷酷な性格と違って、気が優しく、陽弥の事を実の子供の様に扱っていた。そしてクラウドスが連れてきた小さな姉弟……………シャーラとラファイは幼少の頃に軍人に拉致され陽弥の細胞を摂取し、実験体にされていおり、軍人やミラに牙を向くが、クラウドスと陽弥の前ではまるで子犬の様になつており、クラウドスを実の父親、陽弥を実の兄と思ひ込んでいる。

「ねえねえ!ハルヤ兄って何処から来たの?あたい等と同じ異星人なの?」

「コラ……………シャーラ、ハルヤ君は……………記憶が無いんだから……………余り無茶な質問はしちゃダメだよ……………」

「はーい!」

「ラファイも……………シャーラの事を見ていてね、」

「うん……………」

「ねえねえ!ハル兄い何して遊ぶ?……………そうだ!」

すると、シャーラはポケットからクレヨンを取りだし、それを壁に書き出した。

「何しているの?」

「お絵描き!」

「ふくん……………僕もやって良い?」

「良いよ!」

「おいで、ラファイ……………」

「うん……………」

陽弥も、シャーラとラファイと一緒に、絵を描き始めた。

「わあ〜!」

シャーラとラフィは陽弥が描いている絵に興味していた。

「出来た……………」

それはある大地…………… 巨大な城の周りに、黒い海月と黒い夕  
コ…………… そして白い天使とその前に赤と黒で塗られている半身  
馬のような龍が描かれていた。

「凄くいいねえねえ！これどうやって思い付いたの!？」

「うーん…………… 分からない…………… 何だろう…………… 僕に  
も分からないんだ…………… この絵を見ていると…………… 何  
か、大切な事を忘れているような……………」

「これは?」

シャーラが赤と黒に塗られた半身馬の龍に指差す。

「何でだろう…………… この赤黒い龍を見てると……………  
「恐ろしく見えるだろう?」っ?!」

突然、部屋内からおぞましき声が響き渡ると、陽弥は意識を失うと  
同時に、何処か知らない獄炎の空間にいた。陽弥は辺りを見渡してい  
ると、後方から強大な恐々がを感じた。

「誰?」

「ったく、これだから俺の弟は……………」

すると、一つの獄炎が出現し、中から上半身が龍神…………… 下半身  
が四足の赤黒い龍が現れた。そう壁に壁の絵に描かれていたあの龍  
その物であった。

「き、君は……………?!」

「俺はブラム…………… 獄闇の皇神帝だ…………… まあ、分かり  
やすく答えると、そうだなあ…………… ”宇宙生命体”、”異  
次元生命体”と並ぶ…………… ”暗黒生命体”かな?」

「暗黒生命体…………… ?」  
「そうだ…………… それとお前には、記憶を戻してやらなければ  
なあ……………」

すると、ブラムの手のひらから緑に輝く発光体が現れ、発光体は透  
き通るかの様に、陽弥の頭の中へ入っていくと、陽弥の頭の中で今ま  
での事を見せる。

「これは?!」

「これが…… お前が今まで見てきた…… 記憶だ」

自分の宿命…… ネオ・グリゴリア大銀河帝国…… すべてを思い出した。

「そうだ…… 思い出した…… 俺は何もかも…… 全て……」

「それはどうかな?」

するとブラムはマナの光で映像で現すと、そこに映ったのは、今も陽弥を探している皆の姿であった。

「今もお前の仲間や家族…… そして、愛するものがお前を探しているぞ……」

「だけど…… きつと皆は恐がる…… 俺の闇に……」

するとブラムは陽弥の戯れ言に怒り出した。

「…… メソメソするんじゃねえ!!!このタコ!」

「っ!」

「俺の闇で恐がる?…… ハッ!、バカかお前は!!」

「けど、皆はきつと」

「言い訳は聞きたくないなあ!、お前は神だ!…… 神はどんな苦難も乗り越える事が出来る…… だが、お前は自分の闇……」

つまり、俺の闇にびびっている!!なら、俺の闇を抱き締めてみろ!それか、自らの手で闇を消し去るのか!……」

「…… すまん…… 考えさせてくれ……」

陽弥の情けなさに、ブラムは舌打ちをする。

「…… ケツ!…… 腰抜けがっ」

すると、獄炎の空間が光だし、陽弥は意識を取り戻した。陽弥は起き上がり、深呼吸をした。

「…… スウ…… ハア……」

そして陽弥を心配するシャーラとラフィは陽弥の名を呼ぶ。

「ハル兄い?」

「ハル兄さん?」

すると、陽弥は瞑ると、語り出した

「……………時は……………満ちた……………！」

その直後、施設内、全てから警報が鳴り響き、赤いランプが点滅し、複数の部屋の扉のロックが解除されていった。

「?!」

「ハル兄い、これは?」

「シャーラ……………他の子供達は?」

「ほえ?」

「俺の細胞が入っているんだ……………俺の脳波は強すぎて、あの子等の脳を破壊してしまう……………ライイもお姉ちゃんと一緒に手伝ってやって来れ……………」

「うん!」

シャーラとライイは一緒に、頭の中で念じた。シャーラとライイの頭の中で雫が滴り落ちると、波のように広がった。

「感じる……………201と222の部屋から……………ハル兄いと  
同じ物が……………」

「よし、出てこい、ザックスバーン!」

左腕から、コスモバイルが起動しながら体内から出現し、コスモバイルからザックスバーンを召喚した。

「おおく!」

「ザックスバーン!俺等を邪魔する奴等を風ぎ払ってくれ!」

ザックスバーンは壁ごと切り裂き、陽弥達を外に出すと、部屋の中から囚われていた異星人や人造生命体や陽弥の細胞によって改造させられた子供達が出てきた。

「さあ!出て!」

「皆!こつちこつち!」

「ハルヤ兄さんの所に!」

陽弥、シャーラとライイは急いで子供達を集めていた。

「よし、26人いるね?」

「兄い兄い!まだレイナちゃんが!」

「え!?!」

陽弥は、コスモバイルでテツカリオン、ザックスバーン、狐のよう

なスペクトロブス”ライズレッツ”、デューハホーク、ヨコヅナの様なスペクトロブス”シマソイヤ”、ライパルド、全身サボテンの様な恐竜型のスペクトロブス”ダイグランザー”、猛牛のようなスペクトロブス”ドブルカーゴ”を呼び出し、シャーラ、ラファイ、子供達を守るように命じ、陽弥はレイナちゃんを探しに向かった。

「レイナちゃん!... レイナちゃん!」

陽弥はあちこちの部屋の中を見るが、レイナちゃんはいなかった...:~:~:~: 辺りを探している直後、右の通路から、女の子の悲鳴が聞こえた。陽弥は急いで駆け付けると、茶髪のポニーテールの女の子が軍事施設で造られた合成生命体 通称”キマイラ”に襲われていた。

「レイナちゃん!」

「ハルヤお兄ちゃん!」

「ガアアアアアアア」

キマイラは、山羊の頭がある左腕と鳥の頭がある右腕を伸ばし、レイナちゃんの横の壁に突っ込んだ。

「キヤアツ!助けて!」

「糞!~:~:~: 改造させられた合成生命体かよ!」

陽弥は光の右腕と闇の左腕を展開し、左右の腕でクロス字を作り、叫んだ。

「邪神覚醒!!」

アナザーモードに変身した陽弥は、レイナの前に出ると、レイナに言う。

「怖かったら...:~:~:~: 目を積むって良いよ...:~:~:~:」

レイナはコクリと頷き、目を積むった。陽弥は光の右腕から、閃光の稲妻を放った。

「ライトニングプラスマ!!」

稲妻は複数に別れ、天井や床、壁を弾くようにキマイラへ突き進み、キマイラに直撃した。

「逃げるよ!」

陽弥はキマイラがライトニングプラスマの電撃によって麻痺して

いる隙にレイナを連れて、逃げようとしたその時、横の部屋から、何やら不思議な気を感じた。

「ん?」

「あの部屋……………何か感じる」

陽弥はそつと、扉を開いた。

「こ…これは……………?!」

陽弥が見たのは、紅炎を放つ白き鎧を見に纏った鮮やかな色彩の羽毛を持つ鳳凰と土もないのに鉄の床から草花が生えており、その草花を生やしているのは金色の体毛と数本の角を生やした白き鎧を見に纏った金色の鹿であった。

「火の鳥と……………金色の鹿?!」

するとコスモバイルから、極幻王”カイオウ”が出てきた。

「極幻王?」

「久しいなあ……………極幻帝”エンオウ”……………極幻皇”シン

オウ”……………」

カイオウがエンオウとシンオウを名を言うと、2体の獣王は陽弥の輝く紫と黄色のオツドアイを見る。

## 第47話：もう一人の英雄

陽弥は部屋の中にいる2体の獣の王に驚愕していた。するとカイオウが2体の名を言う。

「久しいなあ…………… 極幻帝”エンオウ”…………… 極幻皇”シンオウ”……………」

「お主もなあ…………… 極幻王”カイオウ”……………」

エンオウが言うと、シンオウも言う。

「我等、三極幻獣…………… この次元に捕らわれ…………… 下等種族の実験台にしようとしたが……………」

「我等の力は膨大…………… 奴等はそれを分かって逃がさないようにしていた……………」

「だが、ここにスペクトロブスマスターが降臨成された……………」

「よって、我等、三極幻獣は…………… マスターの力に成ろう！」  
エンオウとシンオウが光輝く球体へと変わり、陽弥のコスモバイルに入ってしまった。

「三極幻獣…………… なるほど、空（エンオウ）、陸（シンオウ）、海（カイオウ）…………… 生命には必要な理だな……………」

陽弥はコスモバイルを見つめていると、側にいるレイナが言う。

「ハルヤお兄ちゃん…………… ！」

「ん？」

扉の前に数体のキマイラが待ち構えていた。

「下がっていて……………」

陽弥はレイナを後ろに付かせると、陽弥のオッドアイが光、キマイラに威圧させた。

「失せろ…………… この愚か者共がっ…………… !!」

キマイラの表情が一変し、キマイラが陽弥の恐々に怯え、扉から下がる。

「行……………」

陽弥はレイナを連れ部屋から出た。陽弥はキマイラ達を睨みなが



ら、威圧させる。

陽弥は、シャーラとラファイ、子供達を守っているスペクトロブス達と合流すると、頭の中で念じ、シグムディア、ヴィクトルー、オメガプライムスを呼ぶ。

「さて、……………シグムディア、ヴィクトルー、オメガプライムス……………そして我が僕達よ……………聞こえるか？」

「マスター?!……………記憶が戻られたのですね?!」

ヴィクトルーの声が聞こえると、陽弥はヴィクトルーに言う。

「心配かけてすまない……………生き残っているガーディアンビットとゲオルギードロイドの事を教えてくれ……………」

「はい!……………現在生き残っているガーディアンビットは30機の内10機が解体され、ゲオルギードロイドは70機の内17機が解体されてしまいました……………」

「なら、話が早い……………生き残っているガーディアンビットとゲオルギードロイドをオメガプライムスに搬送させろ……………解体されてしまったガーディアンビットとゲオルギードロイドは即時自爆させろ!データも残すな……………奴等に俺達のテクノロジーを使わせないようにする……………」

「かしこまりました!」

ヴィクトルーは陽弥の命令に従い、オメガプライムスのシステムへと入っていった。

「さてと……………シャーラ、ラファイ……………」

「何?」

「お兄ちゃんは……………クラウドさんを探しに行ってくる……………お前達は皆を守ってくれ……………」

「けど、ハル兄がいなかったら、私達死んじゃうよ……………!」

「心配するな……………俺が嘘を付いたことがあるか？」

「ううん……………」

「そうよね？……………皆！」

陽弥はスペクトロブス達を呼んだ。

「お前達は、シャーラ達を連れて、オメガプライムスの所まで、誘導してやってくれ！」

スペクトロブスは吠え、子供達をオメガプライムスへ誘導させた。陽弥は急いでクラウドを探しにいった。

「クラウドさん……………！一体何処に！」

陽弥が通路を走っていると、向こうから、腹を抱えたクラウドが壁に這いずりながら歩いていった。

「クラウドさん?!」

「やあ……………陽弥君……………君がここにいると言うことは……………彼等も出ていると思う……………」

「何を言っているのですか?!……………しっかりと捕まってください……………！」

陽弥走っていると直ぐにクラウドの体を支えた。

「すまない……………本当にすまない事をした……………陽弥君……………君に頼みたいことがある……………」

「何ですか？」

「ミラの所まで……………連れていつてくれないか？……………決着をつけたい……………」

陽弥はクラウドの指示に従い、ミラの所まで同行する。

「陽弥君……………君が……………私達の息子なら……………こんな風に優しさを持っていただろう……………ミラは……………私達

の息子……ケビンを亡くしたことに……狂気に満ちた……者に変わってしまった……これが力なき者に与えられる欲望と言うものだ……他人の物を自分達の力に変えようと言うのは……絶対にしてはいけない事なんだ……」

「……クラウドさん……」

陽弥は次の角を左に曲がると、巨大なシャフトが見えてきた。

「ここだ……開けてくれないかな？」

「分かりました……」

陽弥はアナザーモードに変身し、光と闇の腕でシャフトを強制的に持ち上げ、クラウドを中に入れた。そして陽弥がみた物は、

「何だ?!……あの輝きは?!」

反応炉から、とてつもない電流が流れており、空間が少し捻れていた。

「マスター、あれはエクサリチウム結晶です！」

ヴィクトルーが反応炉の中枢部にある結晶体を見る。

「何だつて?!」

「あの様子では、もうすぐ反応炉がとてつもない大爆発を起こします！急いでくださいー！」

「けど、クラウドさんが！」

しかし、そこにクラウドはいなかった。すると、何処からかオカリナの音が聞こえてきた。

「？」

オカリナの音が聞こえてくる所に、クラウドがおり、クラウドが何らかの装置を起動すると、目の前の壁が開き、中から猫耳の少女や小さな女の子、金髪の男性と日本風の女性、緑色の髪をしたエルダーの少年や、サイボーグ男性のモーフィスが出てくると、クラウドが猫耳の少女に声を掛ける。

「ここだよ……メリクル」

「……ハカセー！」

メリクルは急いでクラウドの所へ走ってきて、クラウドを抱いた。

「メリクル……無事で良かった……元氣そうで嬉しい」

よ……………」

「ハカセは何だか少し痩せちゃったね？」

「……………」 そうか」

するとクラウスは持っていたオカリナをメリクルに渡すとメリクルから離れる。

「……………」 ハカセ？」

「さあ……………」 宇宙に帰りなさい……………」 メリクル……………」 新しい仲間達と一緒に……………」

「それなら……………」 ハカセも一緒にいいよ！」

「私は行けないよ……………」

クラウスはエレベーターの装置を起動し、下へ降りていく。

「彼女に……………」 言わなきゃいけないことがあるんだ」

「……………」 ハカセ？」

メリクルはクラウスに手を差し伸ばしたが、金髪の青年に引き止められる。

「……………」 待って……………」

「ハカセ！」

メリクルが叫ぶと、クラウスは陽弥に言う。

「陽弥君……………」

「……………」 はい」

「シャーラと……………」 ラファイ……………」 子供達の面倒を……………」 頼む」

「分かりました……………」

陽弥はクラウスの指示に従うと、片方の眼から涙が溢れていった。

「ハカセ！ハカセー！ツ！」

メリクルはずっと、クラウスを呼んでいると、金髪の青年は反応炉を見る。

「……………」 ツ!？」

そして金髪の青年はメリクルに言う。

「……………」 逃げるよ メリクル」

「嫌だ！離して！ハカセも一緒に！ハカセも一緒に行くんだミヤツ！」

「逃げるんだ…… 逃げるんだよっ！」  
青年はメリクルと皆と一緒に逃げる。

そして下へ降りて、暴走している反応炉の所にいるミラ をそつと抱いた。

「クラ…… ウス……？」

「もう良いんだよ ミラ…… ケビンの事は 君のせいじゃない……」

「あ…… ああ……」

「君が一番辛い時に逃げ出してごめんよ…… でも、きっとあの子はこんな事を望んではない……」

「私は思うんだ…… 陽弥君は…… あの子の生まれ変わりだと……」

「私も…… 初めて会ったときは…… 驚いた…… でも、間違いなく…… あの子は……」

「次はあの子の夢を叶えよう…… 全ての異星人と仲良くできるよ…… 人の手に余る力になど手を出さず、私達自信が生み出した力で……」

「ええ、クラウス…… そうすれば陽弥君…… いいえ…… あの子どもきつと喜んでくれると思うわ……」

クラウスとミラ は暴走する反応炉の影響に粒子変換され、消滅した。

その頃、金髪の青年や仲間達とメリクルと一緒に逃げている陽弥は心の中で二人の事を思い始めた。

「何でだろう…… こんな気持ち…… 初めてじゃない…… 何でこんなに悲しいんだろう……」

「急ぐぞ！皆！」

「ハカセ……！」

通路を走っていると、巨大なシャッターがある部屋を見つけた陽弥は彼らに言う。

「君達！先に行ってくれ!!」

「え?!何を言っているんだ!?もうすぐここは!」

「やり残したことがある!頼む!先に行ってくれ!」

「……………ッ!」

金髪の青年は急いで逃げて行くと、陽弥はシャッターに向かって大声を出した。

「さてと…………… シグムディアーーツ!!」

シャッターの中から、巨大な手が突き出て、シャッターを破壊し、中からシグムディアが出てきた。

「マスター!」

「シグムディア!もうすぐこの星は消えてしまう!急いでオメガプライムスの所に!」

「了解!」

シグムディアが駆逐形態へ変形し、陽弥は乗り込むと、コックピットの中に一枚の写真を見つける。

「ッ?」

陽弥は手にし、よく見ると、それはクラウドとミラの写真であった。

「この写真……………」

さらに、クラウドとミラ の間に小さな子供が写っており、驚いたことに、小さい頃の陽弥とそっくりであった。

「…………… クッ!」

陽弥は写真をポーチの中にしまい、シグムディアを起動させた。

「一気に突破するぞ!」

陽弥はハイパーノバビームライフルの出力を最大値に上げ、壁に向けて、ハイパーノバビームライフルを撃つ。ビームは基地の外まで貫通し、陽弥はそれに乗り、基地から脱出した。

「マスター!オメガプライムスが見えてきました!」

アナザーアース成層圏にオメガプライムスが待機していた。

「オメガプライムス！ハッチを開いて！」

オメガプライムスがシステム音で返事をする、格納庫のハッチを開き、猛スピードで来たシグムディアを収納させると、急いでハッチを閉める。

「行け！行け！」

オメガプライムスは急いで、旋回し、ワープした。そしてアナザーアースが反応炉の暴走により、縮小し、そして木っ端微塵にアナザーアースは消滅した。

数分後、陽弥はシグムディアのコックピットで目を覚ました。

「あれ？……………俺等何処に？オメガプライムス状況を教えてくれ……………」

「了解しましたマスター」

突然オメガプライムスが音声を発した事に、陽弥は驚愕した。

「……………え？オメガプライムス?!」

「はい、どうやら先の大爆発で起こった磁場が私の音声システムを復旧させたのでしよう……………」

「なるほど、ツじゃなく！お前の女だったの?!」

「ええ、」

「……………まあ、良いや……………それよりオメガプライムス……………ここは俺等のいた次元か」

「いえ、どうやらまた別の次元に飛ばされてきました様です……………」

「そうか……………」

すると、ヴィクトルーが陽弥に何かを報告してきた。

「マスター、12時の方向に複数の高エネルギー反応を確認しました……………艦籍は……………エルダー、人類の船です。後は……………」

突然、ヴィクトルーが話を溜める。

「後は？」

「他は……それが……クトウルフと同じエネルギーです」

陽弥は驚いた。この次元に、クトウルフのネオ・グリゴリア大銀河帝国の追撃部隊がいると言うことに、

「何?!…… オメガプライムス！今すぐそこへ向かってくれ！」

「分かりました」

オメガプライムスは陽弥の指示に従い、そこへむかっていった。

丁度その頃、USTA所属 SRFスペースシップ三号機「カルナス」は赤黒く染まった同型船に追われていた。

「第13独立機甲部隊が戦っている隙に逃げろと言われても……!!」

エルダーの青年が報告すると、カルナスの後方から赤黒いスペースシップ三機が追撃してきた。

「三機！追撃してきます！」

敵のスペースシップからショックカノン砲が発射され、カルナスに直撃する直後、別の方向から青い閃光のビームがショックカノンのエネルギー弾を破壊した。

《ツ!?!》

カルナスの船員は、驚くと、カルナス上方から、オメガプライムスが光学迷彩を解除し、三機の敵機の前に立ち塞がった。陽弥はカルナスに通信を入れると、カルナスの船員が、陽弥の通信をキャッチし、モニターを展開すると、陽弥の顔が映った。

「きー君は?!」

金髪の青年は陽弥を見て、驚く。

「良いから、早く離れとけ……… 巻き浴い食らうぞ………」

カルナスの船員は陽弥の指示に従い、オメガプライムスの戦域から





「……………」

エツジと言う青年は黙っていると、副船長のレイミが判断した。

「船長代行 レイミ・サイオンジ……………」 同行を許可します!」

「感謝する……………」

オメガプライムスのハッチが開き、カルナスを中に招き入れた。

エツジ達は、オメガプライムスの農場エリアに到着すると、農場エリアの光景に皆は息を飲む。陽弥が連れてきた子供達が、スペクトロブスと遊んだり、一緒に寝ていた。

「凄いや……………」 要塞艦なのに……………」 ここは……………」 居住エリア?」

「ほよよ……………」 何だか……………」 綺麗で、空気もおいしいよ」

「驚いた……………」 要塞の中なのに、空も雲も、風が吹いている……………」 これは所謂」

「架空大地?」

すると、向こうから陽弥が現れた。

「さつきはありがとうございます」

エルダーの少年“フェイズ”は陽弥に礼をした。

「自己紹介がまだだッなあ……………」 俺は陽弥……………」 陽弥・ギデオ  
ン……………」 ヴェクタ人 シン・ギデオンとマイルライダー ヒルダ  
の息子……………」 この可変式要塞艦オメガプライムスの責任  
者だ……………」 お前達は?」

「私はレイミ・サイオンジです」

「僕はフェイズ・シツファー・ベレスです……………」 フェイズと呼んで  
ください……………」

「自分はバツカス D―79……………」 気楽にバツカスと呼んでく  
れ……………」 ミスタ ハルヤ」

「リムなのよ……………」

「メリクルは知っている……………クラウドさんが……………言っていた……………君の事も……………全部……………」

「うん……………」

「そちらの男性は？」

陽弥はエッジの方に目をやると、

「エッジ・マーベリック……………」

「そうか……………ヴィクトルー」

「はい、マスター」

「客人を、おもてなししてくれ……………」

「かしこまりました……………では、皆さんこちらへ」

エッジ達は、ヴィクトルーに連れられ、客室へと案内した。そして、陽弥はシャーラとラファイの所に走ってきた。

「シャーラ……………ラファイ」

「あ！ハル兄い！」

「ハル兄さん……………！」

二人は陽弥の足元に抱き付くと、シャーラが質問してくる。

「クラウドさんは？」

「……………クラウドさんは……………向こうでやり残したことがあるから行けないって……………でも、また会えると思うよ♪」

すると、陽弥は二人をそっと抱いた。

「？」

「大丈夫……………俺がお前らを守ってやるよ……………絶対に」

「ハル兄い？」

「ハル兄さん？」

「……………絶対に守ってやるから……………」

陽弥の目から、大粒の涙が溢れていき、やがて、こぼれていった。

## 第48話：惑星ローク

陽弥は客室にいるエッジ達と面会していた。

「さてと、率直に話そう……………あの反応炉にあったエクサリウム結晶は……………あれはお前達の物か？」

すると皆の表情が厳しくなり、固まる。

「ハア……………やっぱり……………」

「やっぱり」とは、どう言うことなんですか？」

フェイズが問うと、陽弥は答える。

「お前達は……………未来から来たって言っていたなあ……………」

皆は驚くと、レイミが言う。

「まさか…………？」

「そのまさかだ……………俺も未来から来た人間だ」

《っ!!》

「僕たちの他にも……………あの地球にあなたも?!」

「そうだ……………正確に答えると、君の達がいる宇宙ではなく、さらに遠くの未来から来た……………別の宇宙の者だ」

「別の宇宙から?!」

フェイズが驚くと、陽弥は説明した。

「今……………俺の宇宙には……………邪神軍団国家『ネオ・グリゴリア大銀河帝国』があらゆる星々を食いつくしている……………それを打破するのは、俺の宇宙に存在する多民族同盟国家がある……………その中で俺は、護星神と呼ばれる、かつて邪神軍団を滅ぼしたかけた神の後継者……………人間世界を護るミッドガンドの護星神でもある」

《っ!!?》

陽弥が神と言うことに、驚愕した。

「ミヤミヤ!!ハルヤって……………神様なの?!」

「そーいやあ、言っただけであ……………まあ、それは置いといて……………俺らの世界にも、エクサリウム結晶がある……………何故あいつらに渡した?」

「それは「俺のせいだからだ……」」

レイミが答えようとした直後、落ち込んでいるエツジが説明した。

「地球を消滅させた……全部は俺の……判断が……」

「そうかあ……」

すると客室の扉が開き、現れたのは皆の分の紅茶をティーワゴンごと持ってきたレイナであった。

「ハルヤお兄ちゃん」

「ん？」

「お茶持ってきたよ♪」

「お、ありがとう……レイナ」

レイナは紅茶を皆の所に届けると、レイミがレイナを見る。

「妹さんですか？」

「まあ……正確に答えると、あの地球で軍に拉致されて実験台されていたんだ……それで俺の事を実の兄と思っているんだよ……この子もたぶん……親がいたと思うんだ」

「ごめんなさい……私、つい」

「いや、良いんだよ……レイミさん……向こうにも面倒見の

双子の妹がいるので、大丈夫です……」

すると今度はリムルが陽弥に質問してきた

「ねえ？ハルたんはどこから来たの？」

「第二の地球でもある」ヴェクタ星「ともう一つの」地球「だよ」

陽弥は自分の世界の事を説明した。

「地球は……環境汚染で文明は滅んだが、僅かな地球人達は、自らの姿を遺伝子操作で巨大なドラゴンへとなり、環境に適し、汚染物質の浄化し、色んな異星人と交流し、和解していった。ヴェクタ星は超科学で地球の文明を再生すべく、努力している……」

「だけど？」

「一部は……それを認めない者達がいるんだ……」

「認めない者達？」

「……嫌……これは話さない……話すとややこしくなる

から……それに、」

するとヴィクトルーが現れ、陽弥に報告する。  
「マスター、まもなく惑星ロークに着きます……。皆様準備をしてください」

惑星ローク……。橙色に染まった星だが、オメガプライムスは光学迷彩のまま着陸すると、青い海、青い空、白い雲、緑の大地があり、オメガプライムスは森の奥に着陸した。

「ここが、惑星ローク……。」

レイミがロークを眺めていると、バツカスが惑星ロークの情報を報告してきた。

「うむ、文明のレベルは……。君達の地球で言えば中世紀といったところだろう……。無論、この惑星の人類にとって、我々の科学力は在りえない存在となる。」

「もう……。干渉は……。したくない……。」

エツジはまだ、アナザーアースの件でネガティブになっていた。

「ミスタ・エツジ。その点は配慮し、カルナスとオメガプライムスは光学迷彩によって姿を隠しておいた。自分も同様に姿を見せないでおこう。」

「ああ……。頼むよ……。」

「俺も、この惑星に馴染むために、服装を替えよう……。このアーマーは目立ちすぎる」

すると陽弥は指を鳴らすと、アーマーが粒子変換し始め、朱に染まった銃士の制服へと変わった。

「服が一瞬で替わった！」

レイミが驚くと、フェイズは陽弥のテクノロジーに納得する。

「流石、僕達のテクノロジーを遥かに超越しています……。」

「越えているか………こんな物が………」

「？」

陽弥の言葉にエツジは首を傾げる。

「さ、さあ、周辺の調査に行きましよう！」

レイミが気を取り直そうと、掛け声をした。下り道を歩み、海が見えてきた。皆は感動していた。だがエツジのネガティブは晴れなかった。陽弥は惑星ホライゾンに存在するヴァランドール皇国の海を思い浮かべた。陽弥達は坂道を歩いていっていると、後方からピンク色をした大きなウサギが上がってきて、そのウサギの後ろに黒いマントを来た銀色の少女が笑顔で陽弥達に手を振っていた。

「あれ 何だろ？」

レイミが問うと、陽弥が答える。

「ウサギ？」

「大きなウサたん………なのよ？」

リムルも言うのと、メリクルは何やら口元から涎が垂れていた。

「丸々太って美味しそうだねエ」

「おい、止めろ………ウサギが可愛そう………」

陽弥がメリクルに注意すると、レイミはうらやましそうな表情をしていた。

「でも、あれなら山道も楽し うらやましいかな………ねっ そう思わない？エツジ」

「……… ああ」

エツジは素直に答えると、リムルとメリクルはウサギを追って行く。

「……… ウサたん 待つのよ〜」

「待つてよ〜ほんの一口だけでいいから〜！」

「だから、止めろ………ウサギが可愛そ過ぎる」

陽弥はリムルとメリクルの後を追っていった。

「エツジさん？」

フェイズがエツジに声を掛けたが、エツジは黙り混んだままフェイズと一緒に追っついていき、レイミも続いて行こうとした直後、

「きゃっ！……何？」

突然、レイミが脚を抑えたが、エッジ達の後を追っていった。

坂道から橋を渡り、その先に町が見えてきた。陽弥達は町に入ると、たくさんのお店街が並んでおり、メリクルに似た種族もいた。

「商店街は……アウラの都と同じ風景だなあ……」

「アウラの都？」

フェイズが問うと、陽弥は説明した。

「ああ、俺の世界の地球にある大きな都なんだ。そこには多くの種族が皆平等に暮らしているんだ……」

陽弥は商店街を眺めていると、エッジが後方からくる何かに反応した。

「？」

出入り口のほうから不気味なフードを着た3人が何やら念仏を唱えていた。

「何だ？」

エッジが首を傾げる。

「またずいぶん奇妙な風体ですね」

「(町の者達は気にしてないようだが)」

フェイズや光学迷彩で姿を隠しているバツカスは不気味な集団の事や、辺りにいる町の人も見るが、皆は気にしていない様子であった。

「別にいいよ 僕たちが関わることじゃない」

「……ええ」

陽弥達は道から下がり、集団は陽弥達を横切った直後、陽弥の瞳が黄色と紫色から緑に変色し、光出すと、不気味な集団から禍々しきオーラが漂っていた。



「……………?! (何だ…………… この感じは?)」

そして気が付くと、陽弥の瞳は緑から、元の黄色と紫に別れたオツドアイになっていた。

そして皆は町を散会し、レイミも行こうとした直後、また脚を抑えた。

「つう…………… つ!？」

それに気づいたエツジはレイミに声を掛ける。

「…………… 大丈夫か？」

「ううん 平気」

「気をつけるよ」

そして、エツジは皆の所へ行く。

「…………… しつかりしなくちやね」

レイミは前を向き、エツジの後を追う。

そして陽弥は店で食料確保の為、ビタミン系の多い果物を買っていた。

「え〜つと…………… 林檎、蜜柑、桃…………… 「あと! 苺!」 うん 苺を箱ごと…………… え?」

突然の割り込みに、陽弥は後ろを見ると、オメガプライムスで留守番しているシャーラ、ラファイ、レイナがいた。

「シャーラー! ラファイ! それにレイナも…………… 何でここに?」

「シャーラちゃんがお兄ちゃんがいなかつまんないからと言って……………」

「付いてきちやったんかあ…………… しょうがない…………… それを箱

ごとくれ……………」

「あいよー!」

購入した食料を陽弥は呪文を唱えたり

「転送」

たくさんの箱の下から魔方陣が浮かび上がり、オメガプライムスへの倉庫へ転送された。

「果物系はOKとして、残りは肉類、野菜…………… それと医薬、後…………… 本だ…………… ラファイは本を読むのが好きだよな?」

「うん」

「よし、それも買ってあげよう……………」

陽弥達は辺りを見回している直後、

「きや〜」

何処からか、間抜けな悲鳴が聞こえてきた。

「何かしら？」

「きや〜って言っているから 悲鳴じゃないかな？」

「悲鳴にしては いささか緊張感に欠けますね」

「はわわわわ やめてください〜 だーれーかー お助けください〜」

さらに助けを求める声が聞こえてくると、光学迷彩で隠れていたバツカスが現れ、奥の角道を見る。

「これより奥に 声の発生源を確認した その周囲には複数の生命反応も感知」

陽弥とシャーラ、ラファイ、レイナも自分達の脳波を使い、確かめると、

「本当！いっぱいいる！」

「確かに複数いる……………」

「やっぱり悲鳴だミヤツ！」

「エツジ！」

「……………」

しかし、エツジは黙り混んだ。

「………… 理由はどうあれ、助けを求める声を見ることができないわ」

レイミが皆と共に奥へ向かていき、一人残されたエツジは悔やんでいた。

「僕は…………… 僕はっ……………！」

奥の角を曲がった先に、複数の黒い服装をした兵が翼を持つ少女を

連れ拐おうとしていた。

「誰か、助けてください〜」

そしてそこにレイミ達が駆け付ける。

「その人を話さない!」

すると黒い服装をした兵達は、鞘からククリ刀を抜刀し、少女の首に突き付ける。

「ひゃあっ」

《ッ!》

「なんと卑劣な」

流星の皆も、黙って見てるしかないと思い、黒い兵達が人質を連れて行くこうとしたその時、

「くっそおおおおおおおっ!!」

後方からエツジが叫び走りながら、ソードを振り回し、翼を持った少女を救出した。

「わ わ わ!?!」

エツジは飛び上がり、倒れた黒い兵達に突き付ける。

「こんなこと…………… 本当はするべきじゃない! なのに……………  
くそっ!」

エツジはそう言いながら、黒い兵達に怒鳴る。

「…………… さっさと行くんだ…………… いいから早く行けよ! 行ってくれ!!」

黒い兵達は怯えながら、逃げていった。すると陽弥がエツジに問う。

「逃がして良かったんか? せめて、この惑星の治安機構に引き渡すべきでは?」

「何をしてんるだ僕は…………… ! 関わらない…………… 干渉しない…………… そう決めたのに……………」

「エツジ……………」

レイミがさらにネガティブになるエツジを見ていると、リムルがエツジに言う。

「助けてって言われたら、えーたんは助けるのよ、あたりまえなのよ

なのに どうして泣きそうなのよ？ えーたんは全然悪いことはしてないのよ」

「…………… エッジさんも、君のように単純に考えられればいいんですがね」

リムルはフェイズの言葉に頬を膨らます。

「むうう…………… バカにされてる気がするのよ」

すると翼を持った少女が慌てる。

「はわわ なんとしたことでしょう」

翼を持った少女は皆の前で、名前を言う。

「わたくしときたら、助けていただいたお礼も申し上げずに……………」

サラ・ジェランドです。危ないところをありがとうございます」

するとサラの背中にある翼が動いた。それを見たリムルは驚く。

「う 動いたのよ！本物の羽なのよ！」

しかし、メリクルの方は……………」

「鳥…………… 鳥…………… おいしそうだね…………… じゅるる……………」

「コラ、止めなさい」

「ミヤツ!？」

サラを鳥と勘違いして、さらに涎を垂らしている所を陽弥に見られ、怒られた。

「いえいえいえ。鳥ではないのですよ。おいしくないのですよ」

「でも…………… この世界にはいたんだな…………… 翼を持っている種族なんて……………」

陽弥はサラの翼と展開してはいないが、自分の虫の羽を見る。そして、陽弥達は事情を説明すると、サラはあっさりと納得した。

「そうですか。皆さん 旅の途中でしたか。でもでも 本当におかげさまで助かりました」

「…………… やめてください」

「はい？」

エッジは突然、サラの礼に否定した。

「僕はあなたを助けるつもりも…………… 関わるつもりも……………」

「でも結局助けてくださいました〜 ですから、やっぱりありがとうございます〜」

「……………」

エツジは黙り混むと、サラが何かに気付く。

「…………… あら？」

突然、サラがエツジとレイミの顔を確認する。

「ふむふむ……………」

「あ ああ 私の顔に何か ……………？」

「まあまあ、わたくし思い出しました〜」

「思い出したって…………… いったい何をです？」

フェイズが聞くと、サラは答える。

「はい レイミちゃんとエツジ君…………… でしたっけ？お二人の顔を何処かで見た気がしたのです…………… そうです パージ神殿で見たことがあるんです〜」

「ほう それはなかなか興味深い話だ」

光学迷彩を解除したバツカスが興味津々になる。

「はい〜 パージ神殿はこの大陸の北西にある最も歴史のある神殿です〜」

サラはようやくバツカスの存在に気付く。

「まあ こちらのの方は巨人さんですか〜？なんと大きいんでしょう〜」

「むっ…………… しまった」

バツカスは急いで、光学迷彩で姿を隠し、陽弥が呆れた表情をしなから、言う。

「消えた……………」

「あらまあ 突然消えてしまわれました〜」

「反応が遅すぎます…………… お二人とも」

フェイズも呆れながら、バツカスとサラに言う。そしてレイミはサラの言葉に興味を持つ。

「それで、私たちを見たことがあるっていうのは？」

「パージ神殿の石像です〜…………… ムーア人の石像なんですけど、お二

人によく似ているんですよ〜」

「ムーア……？」

「ムーア人はわたくしたちの祖ともいわてますが、今や存在するするかも分からない 幻の種族なのです〜…… ！この歴史を語る上で決して外せず、その名を冠した大陸もあるのですよ〜」

「ムーア…… ああ、思い出しました」

「……………」

するとレイミの表情が一変した。

「確かカルディアノン人が、エツジさん達をムーアの末裔と」

「…………… ああ」

「ムーア人と地球人に繋がりがあるのなら、このロークとも、何らかの関連があるのでは？」

「なるほど それは確かに考えられる…… ミスタ・フェイズの言う通りならば、地球とロークの起源に近付けるかもしれないな」

「ええ 考えるだけでワクワクするじゃありませんか」

フェイズとバツカス、そして陽弥も元の世界にいるソフィアの父”タスク”の母親の事とサムのもう片方の先祖の事を考える。

「ムーアかあ…… (タスクさんのお母さんや爺いのもう1つの先祖…………… ！どんな種族なのか、調べてみよう…………… これは良い土産話になりそうだな)」

「フェイズが何だか…… えーたんみたいなのよ」

リムルがフェイズがまるでエツジ見たいになっている

「どうでしょう？ そのパージ神殿とやら 調査する価値があるかと」

「……………」

エツジはともかく、レイミはムーアの事で、焦っていた。

「エツジさん…………… レイミさん？」

二人を見ていた陽弥は考える。

「(エツジはともかく…………… レイミは何かを隠している)」

「そう…………… ですね…………… 向き合わなきゃ…………… いけな  
いですね……………」

「皆さん…… パージ神殿に行かれるんですか？ ならわたくしもお仲間に加えてほしいです、助けていただいお札に道案内をさせてくださいませんか？」

「えっ…… サラたんも一緒に来るのよ？わーい！」

「鳥…… じゃない、サラが一緒だとあたしも嬉しいよ」

「はう、リムちゃんはともかく、メリちゃんは少し怖いです」

リムルとメリクルはサラと一緒に来ることに喜んでいた。

「どうでしょう？ 現地の方が一緒と言うのは 何かと助かりますが」

「ええ そうですね……」

「ダメだ！」

突然、エツジが断固両断した。

「この星の人間と一緒に行動なんて…… 絶対にダメだ！…… たとえ今…… 僕に指揮権がないとしてもそれだけは絶対に認められない！」

「エツジ……」

「僕達はこれ以上…… 君達と深く関わる気はない…… だから…… 用がないならもう…… どこかに行ってくれ……」

「エツジさん…… それは少し言い過ぎじゃありませんか？」

「……」

フェイスが注意するが、エツジはまた黙り混む。

「理由はどうあれ、先に接触したのは僕たちです、それにサラさんはあくまでも厚意で……」

するとサラが優しい声で、励ます。

「いえいえ お気になさらず…… ですが、一つだけお節介させてくださいね…… バーニイちゃんに乗らないと、パージ神殿には行けませんよ」

「バーニイ……？ 何ですかそれは？」

「今、町の外にちようど遊牧民さん達が来てます…… 詳しいことは彼等に聞いてくださいな」

サラはそう言うと、何処かへと向かって去っていった。

「…… 行きましよう」

陽弥達は、町の外にいる遊牧民のキャンプへ向かった。

町から出た陽弥達は、遊牧民のキャンプでバーニイについて話し合っていた。

「ここまで来ては見ましたが……… バーニイとは何なんでしょう？」

「そうですね……… 乗ると言うからには乗り物だと思いますけど」

「あたし、知ってるよ！……… バーニイはフサフサで丸っこくて………

美味しそうなんだよ！」

「フサフサ？」

「もしかして、あの山道で会ったウサギ見たいな動物のことかしら」

「うん！それぞれ！」

バーニイが山道で見たウサギだと分かり、レイミはキャンプの外で座っている老人に尋ねた。

「す・み・ま・せ・くん！バーニイについて、教えていただけませんか？」

すると老人は皆も分からない言語を話し出した。

「むー、何言っているか全然分からないのよ」

「メリクルさんはどうですか？ここが故郷だとしたら、あるいは………」

「ダメダメ、全然分かんないよ」

「(モーフィスの翻訳機も役に立たない、言語のシステムが相当に古いようだ)」

「困りましたね………」

皆が困っていると、キャンプのドアが開いた。

「お客さん？……… あら？あなたたち………」

現れたのは、バーニイに乗っていた黒いマントを着ていた少女であつた。

「あなたは、あの時の………」



「ええ、不思議な格好していたからよく覚えているわ……」

少女はそう言い、レイミは事情を説明すると、少女は祖父の話を話した。

「ごめんなさい…… おじいちゃんは古代語しか使えないの……でも私が通訳できますから何でも聞いてください」

「実はパージ神殿に行きたいのですが…… 街で出会った方にバーニイに乗らなければ行けないと言われて」

「確かに流砂の砂漠はバーニイでなければ越えられないわ……」

「じゃあ、ちようだい 食べないから」

突然の発言に、皆は慌てる。

「たっ!…… 食べるなんてとんでもない?!」

「ごめんね…… バーニイはあげられないの……」

「何故ですか?」

陽弥は質問すると、少女は答える。

「あの子は赤ちゃんの頃からずっと一緒に私たちにとっては大切な家族だから…… 家族を人にあげるなんて できないでしょ?」

「家族……」

陽弥が突然暗い表情をし、エツジは陽弥の言葉に首を傾げる。

「?」

「確かにそうですね…… 非礼な申し出を許していただければ幸いです」

フェイズが代わりに謝罪すると、少女は怒らなかつた。

「真面目なのね あなたは…… 大丈夫 おじいちゃんも私も怒っていないから」

「そうですか」

「じゃあ、これからどうすればいいのよ?」

リムルが言うのと、少女はある提案を思い付く。

「そうね…… 野バーニイを捕まえてみたら?」

「野バーニイ?」

「その森とかに住んでいる野生のバーニイよ…… 捕まえて あなたたちだけのバーニイにするの」

「そんな事ができるんですか？」

「勿論よ、だって私のバーニイも 野バーニイだもの……今、見せてあげるね」

少女はキャンプから数メートル離れた所に手を翳すと、紋章が浮かび上がり、ピンク色の体毛を持つバーニイが出てきた。

「きゃっ！」

「この子が私のバーニイよ 普段は野に放しておいて、必要な時に呼ぶの…… 私が子供の時に初めて捕まえたバーニイで今も大事な友達…… さあ、もう少し遊んでらっしゃい」

少女はそう言うと、また手を翳し、バーニイを元の場所へ転送した。そしてレイミ達は、あることに気付く。

「…………… これって、リムちゃんを使う召喚呪文……………？」

「(いや、これは少し違う ミス・レイミ)」

突然バツカスが話だし、少女は辺りをキョロキョロした。

「あれ？ 今の声は？」

話を剃らそうとフェイズが説明した。

「え ええとですね レイミさん…… 召喚とは、いわば契約なんです」

「契約？」

「別世界の特定少数の者のみが その対象となります…………… リムルも特定の魔物しか呼び出せないでしょう？」

「そう言えば、いつもケルベロスばかり……………」

「俺のは、スペクトロブス……………」

「陽弥さんも使えるのですか？」

「ああ、俺はこのコスモバイルを使って、オメガプライムスから彼らを呼び出しているんだ……………」

陽弥は左の籠手に収納されているコスモバイルを見せると、フェイズは地面に描かれている紋章を見る。

「だとしたら、彼女の技は 実は召喚と言うよりも……………むしろ転送…………… 不特定多数の物体を自由に移動させる事ができるんです…………… 例えばワープならば、空間の距離を伸縮する事で移動にかか

る時間自体を短くはできても……その距離によつてかかる時間は大きくなります」

ワープの事で、エッジの表情がさらにネガティブになり、レイミはそれに気付き、フエイズを止めようとする。

「ダメですよ……ワープだなんてそんな事……」

「けれど 転送はそうじゃありません……タイシヨウブツノデータを分解し 任意の場所に移動させ、その地点で再構築を成し遂げる……つまり、限りなく0に近い時間で 瞬間的に物質の移動が可能なんです！エルダーでも、まだその域に到達していません、しかも、質量が大きい物体よりも、小さい物体の方が 調整は難しいんです……それを考えれば、こんな紋章だけで転送を実現してしまうなんて素晴らしい……としか言えません」

「確かに……俺も転送するときには魔方阵だが、紋章は初めてだ……今度元の世界に戻ったら、ココ叔母さんに教えて貰おう……」

陽弥とフエイズが興味津々になっていると、少女は笑いだす。

「フフ……この術でここまで夢中になる人 初めて見た」

「あなた方は皆……この術を？」

「この術は私達の一族にずっと伝えられてきてこれからも伝えていかなきゃいけないものなの」

「何か、理由でもあるんですか？」

「それが……誰も知らないんです」

「知らない？」

「古くから私達の一族は『開く者』と呼ばれ 代々この術を受け継いできた事ぐらいしか……」

『開く者』……ですか？

「今となっては 何でそう呼ばれているのか、おじいちゃんたちも知らないんだけどね……」

少女はポケットから、変わった手綱を見せる。

「これは？」

「野バーニイを乗りこなす為の手綱よ……これがあれば バーニイ

を手なずけられるわ」

「そんな大事な物……貰っても良いんですか？」

「はい♪また作ればいいんですから」

「助かります　ありがとうございます」

　フェイズはバーニー用の手綱を受け取ると、

「では、先程の術については……」

「あれはダメです　あなたが私達の一族になるなら別ですけど」

「……　少し考えさせて下さい」

「それでは失礼します　色々ありがとうございます」

　レイミは少女に礼をし、野バーニーのいる森へ向かった。

「バイバーイー！」

　メリクルが手を振ると、少女も手を振った。

「あ！それと……」

　突然、少女がフェイズを呼び止める。

　それから数分後、フェイズは少女から貰った黒いマントを着て、様子を見に行つたリムルと一緒に戻ってきた。

「お……　フェイズ、そのマント、似合っているぞ」

「レイミさんからも言われました」

「そうか……」

　陽弥は皆と一緒に、野バーニーがいる森へ向かっていった。

　そして森の奥にたくさん野バーニーがいた。

「野バーニー、めっちゃ居るなあ」

「よーし、捕まえるのよー！」

「まるまる太って美味しそう」

　リムルはともかく、メリクルは何処に絞まっていたのか食事用のナイフとフォークを取り出した。

「お前、何処からナイフとフォークを?!」

陽弥は驚きながら、フェイズ達と一緒に野バーニイを捕まえている直後、後方にいたエツジが叫ぶ。

「どうしたんだ レイミ!?…………… レイミ!」

陽弥達は倒れているレイミの所に駆け付ける。

「れーたん どうしたのよ? ねえ」

メリクルがレイミの額に手をやった。

「わっ!………… どうしよう! す すごい熱だよ!」

「レイミ おまえこんな体で……………」

「大…………… 丈夫…………… たいしたこと…………… ないから……………」

レイミは立ち上がろうとしたが、その場で気を失う。

「一旦タトロローイへ戻ろう あそこなら医者もいるはずだ!行くぞ!」

陽弥達は、野バーニイを捕まえるのを中断し、レイミをタトロローイの宿屋へと運んでいった。

## 第49話：感染

タトロローイの宿屋でサラは寝ていると、ある夢を見ていた。タトロローイやドロップ、村が魔王に焼き付くされている所を……………その時、魔王がある方向に目をやった。魔王の視線の先に、地面から赤黒い魔方陣が現れ、赤黒い人馬龍が大咆哮を上げ、魔王に襲い掛かった

「う……………ん……………」

サラは夢から目が覚め、起き上がった。

「またあの夢ですか……………さすがに何度も見ると、答えますね……………」

するとサラが泊まっている部屋の隣から複数の足音が聞こえてきた。

「?……………お隣さんも、悪い夢でも見ているのでしょうか?」

その隣に、レイミが寝ており、悪夢に魘されていた。

「う……………うあ……………ああ……………」

「レイミ……………」

「ごめ……………んなさ……………い……………」

「えっ?」

「許して……………ください……………おねが……………い……………ごめんなさい……………ごめんな……………さい……………」

「何を……………何を言っているんだレイミ!?……………お前が謝ることなんて何一つないだろ!」

「だから……………見ないで……………そんな目で……………見ないで下さい……………」

「レイミー……………おい……………」

エツジがレイミを揺さぶると、フェイズがエツジを止める。

「落ち着いて下さい エツジさん……………レイミさんは僕達に謝っ

ているんじゃないありません」

「恐らく夢の中の対象に謝罪しているのだろう……このうなされ具合からすると 酷い夢だと見える」

「しつかり レイミ…… あたしたちがついているから……」

「れーたん」

メリクルとリムルがレイミの手を握った直後、二人はレイミの異変に気付く。

「エッジ…… 何だかおかしいよ？」

「れーたんのおてて、カチカチなのよ」

「え……!？」

エッジ達は驚き、レイミの腕のプロテクターは外すと、レイミの手が石になっていた。

「まさか、これは……」

「バカラス病…… なのか？」

「バカラス病?…… 何だそれ？」

フエイズが陽弥にバカラス病の事を説明する。

「バカラス病…… グリゴリが放出する異常なエネルギーにより、周囲の人々を異常な進化させたり、全身を石化してしまうのです……」

最悪の場合…… 他人や知人も襲います…… 所謂、対象を暴走させてしまう…… 恐ろしい病のことです」

「それって…… ヤバイんじゃないか?！」

「れーたんも…… じーちゃんみたいになっちゃうの!？」

リムルは過去に祖父が石化してしまった事を思っていると、バツカスがあることを言う。

「…… いや、違う これはこのローク独自の風土病だ」

「…… ローク独自の？」

「見た目の通り、これは『石化病』と言う…… 石化は四肢の末端から内臓にまで及び、やがて死に至る」

「なぜ そんなに詳しいのですか？」

「自分も若い頃は色々あったのだよ…… だが安心したまえ、石化病には…… 「はい 特效薬があるから大丈夫ですよ」その通りだ、か

つては不治の病だったが現在は特効薬が存在している」

突然、サラが説明すると、皆はサラの存在に気付かない。(因みに優位つサラに気付いているのは、陽弥だけです。)

「運河船でアストラル城に行きましょう あそこなら確実に特効薬があるはずですよ」

「そうなんだ…… よかった…… え？」

エツジ達がようやくサラの存在に気付くと、陽弥は呟いた。

「皆…… 気付くの遅い……」

「…… サラたん？」

「な！なんでこんなところにいるの!？」

メリクルが驚くと、サラが訳を話した。

「実はわたくし、お隣の部屋に泊まっているんですよ、何かと思って見に来たら、素敵な再会ですね」

するとサラは、レイミの脚部のプロテクターを外すと、足も石化しており、サラが容態を確認すると同時に、エツジ達は驚く。

「ふむー」

「なっ!…… そんな所まで……」

「やっぱり、まずいんじゃないか…… これ?!」

「そうですねー これはかなり症状が進んでいますねー……」

「な 治るの？」

「はい 先程も申し上げた通り、特効薬さえあれば直ぐに治っちゃいますー」

「よかったのよ……」

皆はホッとすると、サラはサラの発症原因も話した。

「どうやら、心身共に疲労がたまっていたようです、こんなに可愛いのに 無理する人ですねー……」

「心身の…… 疲労……」

エツジは惑星ロークに着いた時から、いつもレイミに任せており、レイミをこんな風にしたのは自分のせいと気付く。

「また…… 僕のせいだ…… 僕がすっかり知らないから、今度はレイミが……」



「悔やむぐらいなら行動あるのみですよ」

「……………えっ?」

すると、サラがエツジにある教訓を教える

「悔やんでも 楽になるのは結局自分だけですー……………でも、何か行動すれば 救われる人はいるはずですよ……………なくんて、わたくしが尊敬する人の受け売りですよ」

「行動……………救われる……………」

陽弥は自分のこれまでの行為を考え思い込んだ。

「フェイズ……………」

フェイズがエツジの肩に触れる。

「レイミさんが申し訳が立たないと思うのなら、今こそ決断すべきだと思いますよ」

「……………行こう アストララル城へ レイミの病気を治す 特効薬をもらいに……………」

エツジが以前の前向きに戻りかけた直後、陽弥のデバイスから通信が入る。

「ん?……………どうしたヴィクトルー……………え?……………何だつて?!……………分かった……………今からエツジ達とアストララル城にいつて特効薬を貰いに行く……………それまで石化病の進行を抑えてくれ……………」

「どうしたのよ?」

リムルが問うと、陽弥は答えた。

「オメガプライムスで留守番している子供達も……………石化病になっているって……………ヴィクトルーが……………」

「っ!」

エツジ達は驚くと、陽弥は皆の前で、深く頭を下げた。

「頼む……………俺も一緒にアストララル城に連れて行ってくれ……………エツジ」

「分かった……………お前にとっては、あの子達は家族だからなあ……………」

「……………ありがとう」

エッジ達は急いで、レイミや子供達をロークの人達と協力し、運河船に輸送し、アストラル城へ向かった。

アストラル城行き運河船上でサラはレイミの容態の事を言う。

「レイミちゃんの具合はいかがですか？」

「船室で、グツスリ寝てるよ……勿論、子供達の数人も……リムルとバツカスとシャーラとラフィとレイナが付いていてくれる」  
「あたし達と交代したの」

「容態も安定していますし リムルはともかく、バツカスさんが見ていてくれるなら安心です……」

「後、シャーラ、ラフィもな……あの姉弟申し訳いざというときに口から放つ『ソニックボイス』や光の障壁でサポートしてくれるからなあ……」

「そうですね、それはよかったです」

「サラさんには本当にお世話になります……あなたの助言がなかったらレイミは……先日 あんな酷いことを言ったのに……」

エッジはサラに謝罪すると、サラは気にしてなかった。

「別に気にしなくても良いですよ、それと、わたくしのことはサラで構いません」

「ありがとう……サラ」

「ねえねえ サラ……サラ見たいな鳥って、他にもいっぱいいるの？」

「と 鳥ではありません」  
「フェザーフォルクですか？」

「フェザーフォルク？……それがサラさんの種族なのですか？」

「そうです 時々『聖なる翼』とも呼ばれます 里の皆はお空をフワフワしてますけど、わたくしは ちっとも飛べなくて ですからこれは、ただのお飾りなんでよー 『聖なる翼』が泣いてますよね あははー」

サラは何気なく笑い、メリクルも笑う。陽弥とエッジとフェイズは

寄り添って、語る。

「お飾りって……」

「フェザーフォルクと言う種族は皆、こうなのでしょうか？」

「…… どうだろう？」

「わたくしたちフェザーフォルクは代々の王様と仲良くしているんですよ…… アストラル城にいたら、王様にお願ひしますね…… 王様はお優しいから直ぐに特效薬をくれますよ……」

「王が薬を管理しているんですか？」

「はい、昔…… 特效薬は高値で取引されていたんです…… それで、貧しい人たちが皆石になって、この大陸は滅亡の危機を迎えてしまったんです…… それを教訓に、今は王様が管理して、誰にでも安く売ってくださるんです」

「へえ、偉い王様なんだね！」

「はい、とつても偉い王様です。ほら、あれが王様のお城ですよ」

すると、徐々に小山から大きな邸らしき建物が見えて来はじめた。

「よかった これでレイミは…… 僕はまた 取り返しのつかないことになるかと……」

「エツジ君達はパージ神殿に行くんですよ」

「その予定でしたが……」

「それでしたら、トロップに立ち寄ってはどうか？」

「トロップ？」

「この大陸にある港町です。わたくし、元々はトロップに行つてとある人に会うつもりだったんです…… ここしばらくお会いしていませんでしたし、ご相談したいこともありまして」

「それは、どんな方向ですか？」

「イレーネ・ファールレンスさんです」

「イレーネ・ファールレンスだつてミヤツ!?」

メリクルが彼女の名前に反応した。

「それって…… 偉大なる賢者 聖女イレーネ様のこと!？」

「偉大なる?…… 賢者??」

「ずっとずっと小さい頃 絵本で読んだ事があるの『イレーネと食いしん坊のシャム猫』」

「何ですか……………それは……………？」

「食いしん坊のシャム猫を連れて聖女イレーネ様が、大いなる力で悩める人々を救うお話なの」

「……………」

「イレーネ様は……………美しくて、優しくて聡明で、清らかで、世のため、人のために一生を捧げたんだよ」

「……………どう思う？」

「正直、なんとも……………あくまでも絵本の話で実在の人物かどうかは……………」

「違うもん！イレーネ様は本当にいたの！多くの僕をを導いて、世界を救ったのよ！」

「ま ますます眉唾と言いましようか……………」

「なんにしても、そのイレーネさんとやはまだ生きているみたいだよ？」

「む？むうううく」

「イレーネさんは 先見の明がある占い師さんですく、道に迷ったたくさんの人たちが、進むべき道標を示して貰ったんですよく」

陽弥は元の世界にいるクロウ將軍の事を思う。

「……………(さすが、クロウさんの奥さんだ……………)」

「……………道に……………迷う……………」

「エッジ君も会って見てはどうですか？ 少しは、気休めになるかも知れませんかよく」

「完璧だミヤッ！ 聖女イレーネ様は未来を見通すって絵本に書いてあったミヤッ！」

「…………… まあ、それはともかくとして…………… せっかくのご厚意ですし、心にとめておきましょう…………… 全てはレイミさんが完治して

からと言うことで……………」

「…………… ああ、そうだね」

エッジはそう言つと、

「道標……………か」

そして運河船は、アストラル城の城下町に到着し、付近の人達が、子供達を宿屋に運んでくれた。

そしてエツジは城下町の宿屋でレイミをレイミをベッドに寝かせた。

「特効薬が手に入れたら、直ぐに戻るから……………」

「……………うん、ありがとう……………でも、無理しなくても良いからね……………」

「お前は……………どうしてこんな時まで……………」

「本当に……………平気なんだよ?……………だって私、これくらいじゃ、……………」

レイミが不吉な事を言うと、エツジはさらに心配する。

「死ねないって……………変なことを言うなよ……………!」

「ふふふ……………ごめん……………ね……………」

「レイミ……………」

エツジがレイミの事を思っていると、サラがあることに気付く。

「……………おかしいですねえ?」

「何がだね?ミス・サラ」

「石化病の進行具合が少し気になるのですよ……………潜伏期間がほとんどないまま発症したのに、その後の進行は異常に遅いのです、陽弥君の子供達も、それと同じなのです……………」

「確かに、通常の石化病は潜伏期間が長く発症したら進行が早い筈だ……………」

サラとバツカスは潜伏期間の事で語っていると、サラは気にしなかった。

「けどまあ、どっちにしても治せば良いことですし……………」

「…………… だったら、言わないでほしいものですね……………」  
フェイズが恐れながら言うと、

「まあまあまあ…………… それでは、王様のお城に行きましよう〜」

「おー!」

「おー」

「「おー!」」

メリクルやリムル、シャーラ、ラファイ、レイナは掛け声を上げ、エツジ達と一緒にアストラル城へ向かった。

アストラル城に入る前に、衛兵がいたと思ったら、サラがおったお陰でパスされ、陽弥達は、国王と謁見した。

「ようこそおいでになられた『聖なる翼』里の皆様は息災かな?」

「はい、みんなパタパタしています〜♪」

「ははは、サラ殿は相変わらずですな♪」

アストラル国王とサラの友好差に陽弥達は驚いていた。

「何やら、予想以上に友好的ですね?」

「それだけ、フェザーフォルクと言う種族…………… いや、サラ自信が特別なのかもしれない……………」

「俺は両方だと思っぞ……………」

陽弥達が呟いてながらも国王は語る。

「時に、此度の来訪の目的は、この者たちに石化病の特効薬を、と言うことでしたな」

「はい、わたくしのお友達さんです〜」

「ほう、サラ殿の」

エツジと陽弥は国王に名を名乗る。

「エツジ・マーベリックと申します 陛下」

「同じく、陽弥・ギデオンと申します 陛下」

「石化病に倒れた仲間や子供達のため、陛下のお力をお借りしたく、参上しました」

「かしまる必要はない、特效薬は全ての民に平等に与えられる物だ……薬の精製に取りかからせるのだ」

「かしまりました」

兵士は国王を命に従い、特效薬の精製に取り掛かった。

「精製には少々時間がかかる……すまないが、今しばらく待っていてほしい」

「ありがとうございます 陛下」

「感謝します 陛下」

「ところで王様……少しお聞きしたいことがあるのですが」

「何かな？ サラ殿？」

「最近……変わったこととかありませんか？」

「変わったこと……とは？」

「そうですね、”古の魔王さんが目を覚まして、ひっそりと悪いことをしているとか？”

突然サラの言葉に皆は呆れる。

「魔王って……人気の○○○○クエストに出てくる……あの？」

陽弥は何気なく元の世界に存在するゲームのタイトルを言い、

「何を言い出すかと思ったら……」

「この人の行動は、本当に読めませんね……」

「でも、ひっそりと悪いことをする魔王がいたらちよつと見てみたいなあ」

「うんうん……それで、魔王ってなんなのよ？」

リムルは分からないまま魔王が何なのか答えると、陽弥はガクツとなり、フェイスが注意する。

「知らないくせに調子を合わせるんじゃないやありません」

「んべー」

「サラ殿のお仲間が倒れたように、このところ、石化病に流行のきざしが見える…… このアストラルも既に幾人か発症しており、特効薬の消費量が例年よりも増えそうなのだ……」

「それは困りますね〜」

「そのうえ、海が荒れて船も運休続き、特効薬精製のための原料もいささか不気味でな…… 加えて言えば、近頃怪しげな集団が国内に出没しているとのことだ……」

「エツジ君達のことでしょうか？」

「ええ……?!」

「…… そう言う目で僕たちを見ていたんですか？」

「それが、先程のサラ殿の冗談と少しばかり繋がりがあるのだ」

「はい〜？」

「…… ”アスモデウス”」

突然、国王が魔王の名を口に出すと、回りの空気がどよめき

「そう、かの古の魔王を崇拜する者達がいる…… その者らはシユドネイ教を名乗っているがな…… 魔王を崇め、魔王の復活こそが世界を救うと民を煽っているらしい…… 灰色のローブとフードを纏った者達なのだが、見たことはいかぬ？」

「しかも、これが魔王を崇拜するだけで、あからさまに法に触れることをするわけでもない」

「魔王…… 復活……」

「サラ？」

「何だか…… お顔が悪いのよ？」

「それを言うなら、顔立ちだって、」

「顔色です」

「話が過ぎたようだな…… 特効薬の精製が終わるまで、皆は別室で休むといい…… 誰か、サラ殿達を客間へお連れしろ」

王様の命に、メイド達は、陽弥達を客間に案内させた。



「サラさん」

「あら、陽弥君…… わたくしに何かご用ですか？」

「さっきの…… 魔王の事なんだ…… どうやって知ったんだ？」

「時々、夢で見るとです…… 古の魔王さんが、村や町も、王様のお城に襲い掛かり、全部を燃やしていたのです」

「魔王か…… (父さんが倒したドウームの下級レベルの存在か…… 復活しても、倒すから良いか……)」

「後、王様には話していませんが…… 赤黒い龍も出てきたのです」

「赤黒い龍？」

「はい、魔王さんが悪いことをしているとき、地面の中から赤黒い炎が出てきて、その中に、人馬みたいな赤黒い龍が現れて、悪いことをしている魔王さんを凝らしめていたのです」

「それが本当だったら、町も村も逆に焼き付くされてしまうぞ……」

「どういう事なんですか？」

「たぶん…… サラさんがいったその赤黒い龍は…… 獄闇の皇

神帝ブラムかもしれない」

「ブラム？」

「俺の世界で…… いや、全宇宙で最も恐れてしまうほどの、邪神達を束ねる皇帝をも簡単に超えてしまう邪神なんだ…… 所謂、邪龍ってことかな？」

「邪龍ですか…… 陽弥さんの世界にはサラさんが言う魔王似たような者が存在しているんですね」

「そうなんだよ…… まあ、俺の父さんは…… 邪神を倒した英雄でもあるんだ……」

「へえ」

サラとフェイズは陽弥の世界に興味津々している中、エツジはテラ

スで庭園を眺めていた。

「……………」

すると、庭園外から背中に鷲の入れ墨が付いた大男が現れた。

「……………」

エツジは直ぐに隠れると、大男はテラスの方を向いた。誰もいないと分かった大男は何処かへと姿を消した。エツジはもう一度、庭園を見たが、そこに大男はいなかった。

「……………誰だ？あの身のこなしは素人じゃないぞ……………僕には関係ないことだ……………」

エツジは関係ない事と判断すると、そこにフェイスが声をかけ、そろそろ特効薬が精製し終えたと思い、謁見の間へと向かった。

だが、この時……………思いもよらぬ事に陽弥達は知る良しもしなかった……………」

## 第50話：フォーチュンベイビー計画

陽弥達は謁見の間に行くと、アストラル王が何やら吠えていた。  
「よいかライアス！、何としてでも『黒鷲』めを捕らえるのだ！」  
「御意！」

ライアスという騎士団長は兵士を引き連れて、謁見の間から出た。  
「これはサラ殿、お見苦しいところを。」

「どうしたんですかー？何やら騒がしいようですけれど……」

「実は…… 城に忍び込んだ賊に特効薬を奪われてしまったのだ。」

突然の事に、陽弥達は驚いた。

「何だつて!?!」

「なんと詫びるべきか、言葉もない……」

王は陽弥達に謝罪する。

「お薬がないとれーたんが大変なのよ！」

「あ！あのまま石になっちゃうの？」

「その賊と言うのは？」

フェイズが問うと、王は返答した。

「『黒鷲』と言う通り名を持つ、以前よりアストラルを騒がせている凶悪な賊だ」

「『黒鷲』……?」

「相当の手練れでな、ただ一人で警備の兵を倒し、特効薬とその原料を根こそぎ……」

「何て事を……!」

「少量ではあるが、あれだけで何百人分にもなる。このままでは多くの石化病患者が……」

「…… 陛下、一つ御伺いしても？」

「うむ？何であろう？」

「その賊の特徴を教えてくださいませんか？」

「盗賊とは思えぬ屈強な大男と聞く。後は…… そう、入れ墨だ。奴の背には大きな鷲の入れ墨がある、それゆえに『黒鷲』という通り名を

持つ。」

「黒い鷲の、入れ墨……………」

エツジは客間のテラスから見た人物を思い出す。確かに背中に鷲の入れ墨があったことに、悔やんだ。

「くっ……………！またか…………… 僕はまた…………… くそっ！」

エツジは悔やみながら、決意する。

「陛下、その賊は僕が捕らえます」

「…………… なに？」

「それだけは、絶対に僕が捕らえなければいけない…………… いけないんです！」

エツジは謁見の間から走り去り、陽弥達も後に続いた。

「それでは、私も行ってきますー♪」

「サラ殿、彼等は一体……………？」

王はサラに返答すると、サラが優しそうな笑みで返答する。

「優しい優しい、お友だちですよー♪」

サラはそう言い、陽弥達の後を追った。

陽弥達は情報を集める事に、黒鷲の入れ墨をした大男が闘技場に行ったと耳に入り、皆は闘技場に入った。

「うわー みんな強そうなのよ…………… えーたん こんなのと戦うのよ？」

「だって、エントリーしなきゃ、薬を盗んだ奴に会えないんだもん……………」

「普通に戦えば大変かもしれませんがね。ですが、エツジさんが本気で戦えば敵ではない。この意味、分かりますよね。 エツジさん？」

「この星の者ではない体術、剣術、戦術…………… その全てを出し切れば、僕は絶対に負けない」

「(それは全て、この星の住人にとって未知の技術体系…… 戦いが終わった時、全ての観客は知るだろう。ミスタ・エッジが自分たちとは違う存在だと)」

「…… ああ、その通りだ。戦いが終わった時点で僕たちはロークの未来に影響を与える劇薬となりかねない。あの、もう一つの地球の時のように…… それを思うだけで体が震えて、今にも逃げ出したくなってしまうよ……」

「では、レイミさんを見殺しにすると?」

「誰が!…… けど、僕の行動のせいで想像もつかない事が起こるかもしれない…… それが怖いんだ……」

エッジは心の中で落ち込んでいると、フェイズは言う。

「…… 分かりました。僕がエントリーします」

「えっ?」

「フェイズが戦うのよ?」

「ええ、仲間の命がかかっていますからね。リムルなら分かるでしょう? 仲間を失う辛さが」

「…… うん」

「私にも…… 分かるよ。仲間がいなくなるのは、とっても悲しい……」

「…… つ」

「クラウスさん……」

「何が正しいかなんて、僕にはわかりません。でも、何もせずに悔やみ続けるのはごめんです。だから、僕は本気で戦います。そして、その結果の全てを受け入れてみせます。」

「フェイズ……」

「エッジさん、僕がこう思えるようになったのもあなたの背中を見て歩いてきたからですよ。」

「エッジ君に何があったのか私にはわかりませんー、でもですねー…… 見えない何かを恐れ、大切なものを失うぐらいなら、泣きながらでも前に進んだ方がカッコいいですねー。まあ、これも イレーネさんの受け売りですがー」

「…………… バツカスにも、そんな事言われたっけ」

エツジはバツカスが言ったことを思い出すと、光学迷彩で姿を消しているバツカスが言う。

「(そうだったかな?)」

エツジは心の中で決意し、胸はつてエントリーする。

「いいんですか? エツジさん。」

「これからの事を考えると、やっぱり怖いし 正直、今もまた逃げたいよ…………… けど、レイミを失う事はもつと怖い…………… レイミは大切な仲間で、大事な幼なじみなんだ…………… だから行く!」

「…………… ご武運を、そして、忘れないでください。あなたの進む道には 共に行く仲間がいることを」

エツジはあらゆる敵を薙ぎ倒し、連勝していくうちに、最終試合の相手である黒鷲がいた。観覧席から見ている陽弥は楽しそうな表情をしていた。

「エツジ…………… お前の本気…………… お手並み拝見させてもらおうぞ」

エツジは得意な戦法で黒鷲めを追い詰め、さらに華麗なステップで黒鷲を攪乱し、追い討ちを仕掛ける。そしてエツジはハング・スラッシュを使う、見事に黒鷲を倒し、剣を突きつける。

「返して貰おうか、お前が城から盗み出した薬とその原料を」

「ははは! 何の事だ? 証拠でもあるのかよ?」

黒鷲は落ちていた剣を拾うと手を伸ばした直後、エツジがそれに気づき、黒鷲の剣を破壊した。

「ひっ!…………… ひiiiiiiii!」

「返すのか返さないのかそれを聞いているんだ」

「か! 返す! 返すよ! だから殺さないでくれ! 前金しか貰ってねえけ

ど、殺されるよりマシだ！」

黒鷲は特効薬の原料と薬が入った袋をエッジに投げ渡すと、エッジは黒鷲の言葉に疑問を持つ。

「前金？誰かに盗むよう頼まれたのか？」

「あ、ああ…… そいつらは何者か知らねえ。ただ、特効薬の流通を止めたいとしか聞いてねえよ」

「……………」

エッジは考え込むと、門の方から何やら騒がしい声が聞こえてきたと思つたら、謁見の間であつた騎士団長と兵士が現れた。

「…………… あなたは、確かアストラルの……………」

「王国騎士団所属ライアス・ウオーレン。エッジ・マーベリック殿でしたな？…………… 賊を引つ立てろ！」

ライアスと名乗る騎士団長が兵士に命令し、黒鷲を引つ捕らえた。

「後は我らにお任せください」

「お願いします。それと、賊は金で雇われたと言っていました。余計なお世話かもしれませんが、少し詳しく調べる必要があると思いません。」

「なんと、そこまでつかんでおられたか…………… 流星は『聖なる翼』のご友人我ら凡庸なる者など足元に及びませんな」

「そ、そんな…………… 別に僕は何も……………」

「ご謙遜めさるな…………… 闘技場に『黒鷲』が潜伏しているとの情報を受け馳せ参じましたが…………… 貴殿は我らよりも早く、この場に辿り着いていたのですから」

「申し訳ありません。差し出がましいまねを……………」

「なぜ謝罪など？救国の英雄に、謝罪などされては困りますな」

「え！英雄!？」

突然の言葉にエッジは驚き、観覧席から見ていた陽弥千倍の聴覚で二人の会話の内容を聞いていた。

「(うわぁ…………… ちよつとそれは……………)」

「今この時も石化病に苦しんでいる多くの者が貴殿の活躍で救われるのです。同時にこれからも石化病を患うかもしれぬ者達も、まさに英

雄の名にふさわしき働き、我が主君であつても、同じことを言うでしょう。」

「く……薬と原料です！お受け取りください！」

エッジが特効薬をライアスに渡すと、ライアスは袋から薬をエッジに渡した。

「こちらはエッジ殿と陽弥殿に、薬は最優先で渡すようお願いいつかつております。」

ライアスはそう言い、闘技場を立ち去つた。エッジが陽弥に二個の特効薬を渡した。

エッジ達は急いでレイミが寝ている宿屋に戻り、特効薬を飲ませた。するとレイミの首の後ろから紋章が浮かび上がり、光だした。さらに窓の外からも光輝きだした。

「何ですか、これは……!?」

「見て！」

メリクルの指差す方向を見ると石化していた左足、右手が光輝き、元の肌へ戻つていった。

「ぶにぶになのよ！れーたん、かちこちからぶにぶにに戻つたのよ！」

「治つたというのか？」

するとレイミが目覚め、エッジを見る。

「エッジ……」

「ああ、僕だよレイミ」

するとドアが開き、

「エッジ……此方も皆治つた……」

「そっか……」

「エッジ……本当にありがとう……あの子達を助けてくれて……」

「……」

「エッジ……何か、辛いことがあつたの？」

「な、何を言っているんだよ？そんな辛いことなんてレイミが治つた



だけで僕は……………」

「……………」

「サラ……………」

「はい、お仲間にしてもらいましたー元気になって良かったですーと  
ころで……………」

「なんで治つちやつたんですかー？」

「え？」

「……………」

「ちよつと待つて！それつてどういう意味なの!？」

「れーたんが治つたのはお薬飲んだからなのよ」

「はいー確かに特効薬で石化病は治りますーでも、こんなすぐに治る  
ものではないのですー」

「むう……………」

「此方も皆、直ぐに治つた……………」

「あついえ、治つたのは私も嬉しいですよーただ、その、知的好奇心と  
言うやつなのですよー。レイミちゃんは石化病の潜伏期間から発症  
までその全てが通常と違っていたのですー。だから気になってし  
まつて……………」

「……………」

「レイミ?」

「エツジ……………」

「……………」

「それは……………」

「……………」

「……………」

レイミは皆に話した。エツジ達の故郷とも言える地球は第三次世  
界大戦の大規模な放射能汚染で大地は焦土化し、普通の人間では生き  
てはいけない星になったと……………」

過酷な環境に適するため、多くの

科学者によって、様々な実験が行われた。その中の一つが、『フォーチュンベイビー計画』があり、どのような環境でも生きられる超人類を人工的に想像と……驚異的な生命力を持つ、太古の人類の遺伝子。その情報を持って生まれ成功した3人の子供がエッジ、レイミ、そしてクロウだと……人間と変わらないが危機的状況時、紋章が発動し、超常的な力が発揮されると、どうやらレイミは順応能力に反応があり、どんな環境や病も適応してしまうと……薬を飲んですぐに治ったのは適応力で治癒力が活性化したと、レイミは言った。その話を聞いたフェイズはカルディアノンの言葉を思い出す。「カルディアノン人が言っていた”ムーアの直径”とはそう言うことだったのですね？」

「……はい」

陽弥はムーアの事を知り、考え込む。

「なるほど……父さんがムーアの力に発動出来たのも……危機的状況になっていたからか……だとすると、タスクさんやソフィア、爺とアルベルトさん、ココ叔母さん、ルナも……そして、俺と……俺の遺伝子で改造されたあの子達も……」

するとサラが謝罪してきた。

「ごめんなさいですー、お話を聞いてもわたくし、全然わかりませんが、でも、これだけはわかりますー、軽々しく聞いてはいけないことだった……って」

「いえ、おかげでスッキリしました。」

レイミはサラを慰めると、リムルがレイミの手を優しく握る。

「リムちゃん？」

「……リムもね、お話、全然わからないのよ。でも、れーたんはれーたんなのよね？ずっと一緒にいたれーたんのままなのよね？」

レイミは優しい笑みで返した。

「じゃあ、別にいいのよ。難しいこと言うからどうしようかと思ったのよ。」

「ハハ、エッジもレイミも仲間以外の何者でもないよ、助けてもらった時から、ずーつとね」

「メリちゃん……………」

「自分もさして言うべき事はないな……………君たちと共にいることで、鋼のこの体を熱く感じたのはたしかな事実なのだから」

「バツカスはそう語ると、部屋から出ていった。」

「どうやら照れている見たいですね。では僕も失礼します……………照れた顔を見せたくないのです、何も言いませんよ」

「じゃあ、わたくし達も失礼しますねー」

「おやすみなよー」

「俺はあの子達の面倒があるから戻る♪」

「ゆっくり休んでね♪」

陽弥達は部屋から出ていった。

陽弥は子供達がいる宿屋に入ると、

「へい、ただいまー」

「ハル兄い！」

「ハル兄さん！」

「ハルお兄ちゃん！」

「兄ちゃん！」

「お兄い！」

「兄貴い！」

26人の子供達が陽弥に飛び付いてきた。

「おー！皆元氣バリバリじゃないか？」

《うん！》

「ハハハ……………スウー……………ハア……………極幻王、」

陽弥が極幻王カイオウを呼び出した。

『どうした？』

「ちよつと力を貸してくれないかな？」

『何をだ？』

「この子達が安心して寝れるよう……………子守唄を」

『分かった……………』

『それと、』

『ん?』

「俺も聴いてみたいんだ…………… 極幻帝と極幻皇の歌を…………… そして  
ブラムのも」

『ハ?俺の歌もかよ』

極幻帝エンオウと極幻皇シンオウに続き、ブラムも現れた。

「良いだろ?この子達の為でもあるから」

『つたく、仕方ねえなあ』

『私も混ぜてほしいです。』

陽弥のデバイスからオメガプライムスが通信してきた。

「オメガプライムス……………」

「私は…………… 機神…………… 伝承歌”機の歌”を歌えるのです。」

『我は伝承歌”火の歌”』

『私は伝承歌”森の歌”』

『我が伝承歌”海の歌”』

『俺はアプスとニケの二人から授けられた伝承歌”星の歌”…………… お

前は?』

『…………… エミリアの歌…………… ”時の歌”だ』

陽弥と三獣王、ブラム、オメガプライムスと一緒に、”永遠語り”

『生命のEL Ragna』を奏でた。すると子供達は彼等の歌を聞

き、眠りに付いた。

「眠ったね……………」

『どうだ、俺の美声は?』

「中々良い歌だったよ」

『…………… まあな』

「それとブラム……………」

『…………… 何だ?』

『…………… あの時の事…………… 本当にごめん…………… ごめんな』

陽弥がブラムに謝罪すると、ブラムの表情が変わり、喜ぶ。

『…………… 陽弥』

「ん？」

『何時でも、俺の力を使っても良いぞ』

『ありがとう……』

『それと……自分の伝承歌を作れ……多分、役に立つと思うぞ』

♪

「何で？」

『何で？って……ハア、いつか分かる……』

「ん？」

そう言つて、オメガプライムスは通信を切り、三獣王はコスモバイルに戻り、ブラムも陽弥の影の中へ戻っていった。

翌朝、陽弥はタトロローイの書房に寄り、ラフィの為の本を何冊か購入した。

「今日も良い天気だなあ……」

陽弥は太陽を見て、感心していると、向こうからエッジが慌てながら走ってきた。

「陽弥！」

「どうしたんだ皆。そんなに慌てて？」

「サラが拐われたんだ！」

「ハッ!?サラが!?!」

「ミスタ・フェイズが言うにはサラが連れ拐われる所を見たと言う人がいて、それでもってサラが落としていった羽を頼りにそこへ向かっているんだ！」

「分かった！」

陽弥は本札をオメガプライムスに転送し、羽根を頼りに後を追ったけど

ちょうどその時、月からロークを見ているクトゥルフと付き添いのヴォルヴァドスがいた。

「見つけたぞ……………ミッドガンドの護星神 陽弥・ギデオン……………この時代の運命は……………お前に掛かっている。」

「良いのですか？クトウグア様。」

「何をだ？」

「四神柱と合体と戦闘でかなりの力を消耗してしまったせいで、クトウグア様のパワーが半分まで回復していません。それに現皇帝であるナトラータホテプ様の命令を背いていることになります。」

「構わん……………我はあの若造の人生と思いに興味を持った……………分からぬか？ヴォルヴァドス」

「え？、私には分かりません……………」

「それもそうだ……………元々お前はムーア人とレムリア人、アトランティス人、クアンタ人の強欲を見てきたからなあ」

「ええ。やはり、我々は他種族と友好的にはなれない……………そう思っております。」

「……………守護神に仕える使徒と言うのは知っているか？」

「え？はい、知っています。子供の頃、かか様が話してくれた……………おとぎ話ですよね？」

「守護神が26人の使徒を引き連れ、魔族と妖精族と古の種族……………プロセアンの戦争を終わらせた……………話だろ？」

「はい……………まさか!？」

「そのまさかだ……………あのクアンタの女帝め……………」

「ですが、おとぎ話では何千億年前の話を元に語られています！いくらなんでもあの護星神が、どうやって過去に？」

「まあ、見れば分かる……………おとぎ話には伝説や神話と違って、世間や噂で知ってはいけない真実があるのだからなあ……………特にこの惑星ロークの魔王と言う奴もその一部だ……………」

バルコニー達はサラが落としていた羽根を頼りに、後を追っていくと、着いたところはパージ神殿であった。

「これは……………」

扉の前に、サラの羽根がまた落ちていた。

「ええ、サラさんの羽根で間違いないようです。」

「これまでで得た情報通り、ミス・サラはここにいると言うことか」「手分けして、サラの手がかりを探そう」

「なら、こいつの出番だ」

陽弥はコスモバイルを起動し、呼び出した。

「ニール」

コスモバイルから現れたのは翠の光を放つ光の天馬であった。

「それが陽弥の？」

「うん。名前はニール……………この子もスペクトロブスなんだ。本来ならうちの婚約者のエミリアのニールも一緒に居たら、簡単に探せたんだけどねえ……………ニール、一緒に探して。」

陽弥の問いにニールはコクリと頷き、皆と一緒にサラを探した。するとレイミがあるものに目に入る。

「もしかしてこの像がサラさんの言っていたムーア人なのかしら？私とエツジによく似ていた……………って」

レイミが見たそれは二人組のムーア人の男女の石像であった。

「ムーア……………か、僕たちの遺伝子に組み込まれていると言  
う……………」

「これがムーアか……………似てるな」

陽弥は頷くと、フェイスがあることに気付く。

「なるほど、確かに少し面影はありますね。でも、二人に似ていると言  
うよりは、地球人に似ている……………そんな感じですね」

「地球と遠く離れたロークに同時に存在するなんて、ムーア人って何

なのかしら？おかしいよね……その遺伝子が自分の中にあるって言うのに」

「レイミ……」

エツジはレイミを心配しているとリムルが大声で呼んできた。

「みんな、こっちにくるのよ」

陽弥達はリムル達のいる場所に向かうと、バツカスが何やら壁を押していた。

「このへんで、ちよつとだけサラの匂いがしたの」

「でも、行き止まりだわ」

「……まあ、そううまくいかないか」

「皆退いて、俺がやる。」

陽弥は光と闇の腕を発動し、壁を押した。すると微かに少し動いたがダメだった。

「ダメだ……神である俺でもこじ開けられない」

「うう、自信なくしちゃうよ」

「さて、この先どうする？いつまでもここにいてもしょうがあるまい」

「サラがいるのはここじゃないのか……？」

「だけど、微かだが開く感じだった。間違いなくここだろ？」

皆の意見が食い違っている中、フェイズはデバイスで壁の周辺を見回していた。

「（……間違い……絶対……絶対ここにいるはず」

なんだ……）」

「フェイズ……」

エツジがフェイズを心配していると、

「ひらめいたミャクツ！」

メリクルが急に叫ぶ。

「どうしたのメリたん？」

「ナイスなアイデアが浮かんだんだよ。分からないなら、聞けばいいの！」

「聞くって、誰に？」

「もちろん！トロップのイレエネ様だよ！」



「…… イレーネ様？」

レイミがイレーネの名を聞き、首を傾げる。

「…… サラさんのお知り合いの占い師ですか……」

「イレーネ様ならきつとなんでも知ってるよなんて、賢者様で聖女様だもん！」

「ふう…… それはあなたの読んだおとぎ話でしょう？」

「だってだって！サラも会いに行くって言ってたよ！絶対、サラの事も知ってるはず！」

「リムも行ってみたいのよ、面白そうなのよ」

「どうするの、エツジ？」

レイミがエツジに問い、エツジは言う。

「…… 行ってみよう。他に手がかりもないし」

「そのイレーネなる人物を信頼できる根拠は？」

バツカスはエツジの判断を疑う。

「サラが言ったんだ。道に迷ったら、会ってみたらどうか……」  
「て。根拠なんてないけど…… サラを信じよう。」

エツジはイレーネのいる港町トロップへと向かった。

## 第51話：聖女イレーネ・ファーレンス

陽弥達は港町トロップに立ち寄ると何やら民衆が広間に集まっていた。

「何だ？何かの集会か？」

広間の像の前に何やら不気味なローブをした二人とその真ん中に紫の宗教の服装をした男性”タミエル”が民衆に何かを語っていた。

「善良なる人々よ、我が声に傾けなさい。待ち望みし救世の時が、訪れようとしているのです。そう！我々罪深き者を救いし、至高の存在……………全能の王 アスモデウス。その復活の時がー」

「アスモデウスだつて!?まさかあんたたち……………」

「シユドネイ教……………魔王崇拜者なのか!？」

老人が問うと、タミエルは返答した。

「いかにも我々はシユドネイ教徒、しかし……………さて、何を戸惑っておられるのやら？アスモデウスこそがこの世を救うというのに。偽りの平和から目を背け、さあ、ご覧あれ、さすれば、ほら、見えるではありませんか……………愛すべき家族、友人、隣人、恋人が冷たき石となり、恒久の闇と苦しみに囚われる姿が、我々は救う妙薬は一部の特権階級が独占し、一般の民に届くことにはないのです。間違っています……………そうは思いませんか？」

「た、確かに……………」

「そう、この世は今、過ちの中にあるのです。心清らかなる弱き者達が喘ぎ苦しみ、心浅ましき者達が欲望の器を満たす。そのような世界を、浄化の炎をで焼き尽くす者こそが、偉大なるアスモデウスなのです。」

その様子に陽弥は心の中でブラムと会話する。

「(どう思う？ブラム)。」

『……………狂信者が』

「(そっか……………」

『(魔王アスモデウス？笑わせるなあ、俺の方こそが獄闇の力を統べる

皇神帝だ。魔王なんざ、ひよっこレベルの下級以下だよ!」

「(ハハハハ、魔王を下級以下つて……)」

陽弥は彼らの話の続きを聞くと、老人が問う。

「待てよ、魔王はこの世を炎で焼くんだろ? だったら、俺たちまで焼かれてしまうじゃないか!？」

「はい、あなたのおっしゃる通りです。アスモデウスは、我々もろともこの世を焼くのです。」

「そ! そんなことになったら俺達も死んじまうよ!」

民衆が慌て出すと、タミエルは言う。

「ああ、並ば、共に焼かれようではありませんか」

「え……?」

「『はっ……!?!』」

突然のタミエルの言葉に民衆とそれを聞いていた陽弥とブラムが啞然する。

「アスモデウスは、従う者に大いなる慈悲を与えます。醜く卑しい世界を焼き尽くしてのち、アスモデウスによって想像された新たな世界。その世界において永遠の幸福を得られる者こそすなわち、我々なのです。全能の王を愛しましょう! さすれば我々もまた、王の愛に包まれるのです。浄化の炎で焼かれる苦しみは一瞬……。されど、新たな世界で得られる幸福は永遠……。そう! 永遠なのです。」

タミエルは民衆に御辞儀で返し、左右の腕を振りながら、ロープの男二人を連れ、出ていった。陽弥達は邪魔にならないよう道をあげ、タミエルが横を通り過ぎた直後、またしても陽弥の頭から痛みが走ってきた。

ーピーキツ!

「うっ……!?!」

『どうした? 陽弥』

「…… 何でもない」

陽弥の様子を心配するかのようブラムは陽弥に問うと、光学迷彩で姿を消しているバツカスが言う。

「(あれが魔王崇拝者…… シュドネイ教か。なんとも凄いものだな)」

「あれだけ絶対の確信を込めて語られれば、付き従うものも多そうですね。もつとも、彼の言葉がデタラメであることを僕たちは知っているワケですが。」

フェイズも彼らの事を語ると、バツカスは特効薬の流通の事を語る。

「(うむ、特効薬が行き渡らなくなったのは原料が手に入りづらくなつたせいだからな)」

「あと、エツジさんが倒した賊の背後にいるその流通を阻害しようとする者たちですね。ですが、それも騎士団が動いてしますし…… どううせ魔王なんて存在しないんです。遅かれ早かれ、ああいう人は消えていきますよ。」

「どうかした?」

メリクルがエツジを心配する。

「いや、ちよつと引つ掛かつただけなんだ。そうなつた時、彼らはどうするのかなんて…… 僕には関係ないことだ…… 行こう。」

エツジは何事もなく、イレーネのいる家へ向かう。陽弥は心の中でブラムとの会話を楽しんだ。

『陽弥…… お前はあの狂信者の語り方、誰に似ていると思つた?』

「…… ジュリオ・飛鳥・ミスルギ。通称“アホ皇帝”」

『フフ、お前もそう思つたか……』

ブラムが笑うと、陽弥も笑い出す。

陽弥達はイレーネの家にたどり着き、エツジがドアをノックした。「イレーネさん、いらつしやいますか? サラに紹介されて来たのですが」

しかし、まったく反応がなかった。

「返事なし……………」

「留守なのかな?」

エッジがドアノブに手を差し伸ばした直後、リムルがあっさりドアを開けた。

「鍵、開いてるのよ。お邪魔しますのよ」

「仕方ない、僕たちも入らせてもらおう。」

陽弥達は構わずイレーネの家に入った。だがこの時、陽弥の後ろに何者かの影が忍び寄っていた。

陽弥達は部屋中探すが、イレーネらしき人物は全く見当たらなかった。

「どうだった?」

「残念ながら、イレーネさん本人も消息をおわせるものも発見できませんでした。」

「私も」

「リムも見つけられなかったのよ、かくれんぼが上手なのよ。」

「さすがはイレーネ様! あたしたち程度じゃ、見つけられないんだね」

メリクルが感心していると、突然メリクルが辺りを匂いだす。

「くんくん……………? 何だか焦げたにおいがするよ」

「そう言えば……………」

陽弥も薄々気づき始めた直後、

「見て!」

レイミが窓がある指す方向を見ると、窓の辺りが炎に包まれている。バツカスが姿を現し、メリクルが別の部屋に行く直後、部屋から業火が吹き荒れ、フェイズがメリクルを助けだし、後方に下がる。

「キャッ!」

「誰かがこの家に火を付けたのか……………!」

皆は慌てていると、床から緑に光る紋章が浮かび上がる。

「こ、これは……！」

「転送紋章……!?!」

陽弥達は謎の転送紋章によって何処かへ飛ばされ、皆のいた所の上から燃え盛る柱が落ちてきた。

飛ばされた陽弥達は何処か知らない洞窟にいた。

「ここは……？」

「確かにイレーネさんの家だったのに……」

すると奥の方から誰かの足音が聞こえてきた。

「……誰かが、来る……！」

現れたのは、ランタンを手に深緑と白衣服を着た女性だった。

「貴様らが来ることは分かっていた」

「……え？」

「サラの友人ということも、貴様らごと家が焼かれようとしたこともな」

「あ、あの……」

「だから転送呪紋を用意しておいてやったのだ。感謝しろ、小僧」

「えっ？あつはい、ありがとうございます……」

エツジはお礼をし、陽弥は頭の中で彼女だと判明した。

「（……まさか、この人がクロウさんの……）」

「何をブーツとしている？貴様らも感謝しろ」

「は……は、はい！ありがとうございます！」

「では、続いて遠慮なく喜べ。私こそが貴様らの会いたがっていた。その名もイレーネ・ファーレンスだ。」

陽弥とブラムは彼女がイレーネ・ファーレンス名に驚き、想像描いていたイメージが砂のように崩れ落ちた。

『(……………嘘くん!?)』

「来い、呼んだ覚えはないが、茶ぐらいは出してやる。」

「あ!あの、待ってください!あなたは本当に、サラが言っていた……………」

「二度は言わんぞ小僧、来い」

「は、はい!」

「では、行くぞ」

「あれがイレーネさん……………か、サラから聞いた話とはずいぶんイメージ違うな」

「乱暴な女性だ……………」

陽弥達はイレーネの後に続くと、一人だけしょんぼりした人がいた。リムルはその人に声をかける。

「メリたん、どうしたのよ?なんか元気がないのよ」

「おそらく、心に描いていた聖女イレーネと同じ名前の彼女とのギャップに衝撃を受けたのかと」

「聞こえているぞ」

地獄耳を持つイレーネは”聖女”と言う言葉に興味を持つ。

「だが、聖女と言うのは悪くない響きだ。明日からは聖女イレーネと名乗るとしよう。」

「や!やめて〜!あたしの夢をこれ以上壊さないでよ〜!」

「くつくつく、あんまり褒めるな、照れる♪」

「褒めてないよ〜!うわ〜ん!」

メリクルは悲しみ、エツジ、レイミ、陽弥は言う。

「……………イジメツ子だな」

「……………イジメツ子ね」

「……………イジメツ子だ」

三人は語っていると、イレーネが指を鳴らし、壁に並んでいたランタンを一齐に付けた

「けれど、占い師としての力は確かなようですね僕たちの訪問やサラさんとの関係だけでなく、火災についても正確に把握しているなんて」

フエイズがイレーネの占いに納得すると、

「だったら、もっと早く助けてほしかったよ」

「それではありがたみがないだろうが、愚か者。命を助けつつ、その大切さも教えてやったのだ。礼を言われこそすれ、非難される覚えなどない。」

「絶対違う…… 違うよお、イレーネ様は美しく賢く優しい人なんだから……」

「なんだ、やはり私のことではないか」

「フ~~~~ッ！」

メリクルがイレーネに威嚇すると、リムルがイレーネに問う。

「ねえ、いーたんのお家はこっちなよ？」

「くくく、いーたんかあ…… それも愉快だ。聖女いーたん…… ふむ、こっちの方がいいな♪」

「だからもうやめて~~~~~！」

「この先には私の隠れ家があるのだ。チビ助」

「隠れ家？」

「私を狙う身の程知らずどもが多くてな、ほら、着いたぞ。」

目の前に怒鳴るが見え、イレーネがドアに近付くと、

「そのデカイの、いい加減に出てこい。」

イレーネがバッカスの存在に気付き、バッカスは姿を現した。

「ふむ、そんな姿をしていたのか」

「…… いつから気付いておられた？」

「私をなめるな、会う前からに決まっている。」

「おー」

リムルは興奮すると、バッカスは頭を深く下ろし、感心した。

「…… おそれいった。ミス・イレーネ」

「貴様はそこで待っている。入れんことはないが、デカイ図体が邪魔だ。」

「承知した。では、自分はここで待機している。」

バッカスはドアの横にある大きな石の上に座った。

「バッカスさん。いいんですか？」



「問題ない。中での会話はここからでも聞き取れる。」

「貴様ら、間抜け顔で突っ立ってないで、早く入れ」

陽弥達はイレーネの隠れ家にお邪魔した。

その頃、隠れ家のもう一つの隠しドアに、三人のローブを着た戦闘員達がたいまつを持って、隠しドアに火を付けようとした直後、後方から紫のクロークとスペルスタッフを身に付けた紅色のロングヘア―した美しき女性が現れた。

「家を焼いたばかりか、隠れ家まで襲うの？次から次へと、いい女は休み暇はないのね」

三人の戦闘員はその女性に攻撃をするが、女性は華麗なステップで回避した。

「そんなに魔王を崇拜しているのなら、今すぐ魔王の元に送ってあげるわ！」

女性はスペルスタッフを天高く上げると、上空から雷の呪紋ライトニングブラストが三人の戦闘員直撃し、服に引火した。三人の戦闘員は悲鳴を上げ、海の方へ飛び込んだ。

「魔王復活の阻止……か、本当にジオットは面倒な仕事ばかり回すわね。」

女性は隠し扉に耳を近付けると中からエッジ達の声が聞こえてきた。

「この声は……」

女性はじつくりと耳をすます。

そして、エッジはイレーネに問うり

「本当にイレーネさんは全てを知っているんですか？」

「サラさんはパージ神殿に捕らわれているのですか？だとしたら、どうやって入ればいいんですか？」

一気に話を薦められ、イレーネは二人を落ち着かせる。

「焦るな、ものには順序がある。」

「……」

「今、この地に暗躍する者達がいる。貴様らも知っているのではないか？シユドネイ教とかいうあの趣味の悪い連中だ。サラを連れ去ったのは奴等だ。」

「何で、魔王崇拝者がサラさんを……？」

レイミは問うと、イレーネは厳しい目で返答する。

「正真正銘の大バカ、いや、特上の愚か者たちだよ。幾千幾万の勇者が命がけで撃退した魔王を何千年と飽きもせず崇拝し、讃える。これまでは密かに信者を勧誘していただけだが、ここ最近、突然動きが活発になった。まるで得たいの知れない何かに突き動かされているかのように、な。」

イレーネは魔王アスモデウスを語る。

「太古の昔、魔界よりこの地に降臨した魔王。その名をアスモデウス……あの連中の目的は当然、魔王アスモデウスの復活だ。私の力を欲し、同志として迎えたいと誘われたが、答えは言わずとも分かるだろう？」

皆はいわかに信じられない表情になる。

「信じられない馬鹿げた話……そんな顔だな」

「えっ？そ、そんなことは決して……」

「私は別におかしいとは思わんがね。なにしろ、私の目の前にいる貴様らは……星の海を渡って、この地にやって来たのだからな」

イレーネの言葉に陽弥達は驚いた。

「なっ!？」

「えっ!？」

「私に言わせればどちらも馬鹿げた話だよ。外のデカイのにも言ったはずだ……私をなめるな……とな。」

「それがあなたの占い……と言うわけですか？」

「正確には少し違う。」オラクル”…………… 神託と言うやつさ。消耗は激しいが、占いよりよく当たるぞ。今回も見事に当たったじゃないか、サラが面白い客を私の元に導く…………… と。な。くくく、確かに面白い客だ。」

「…………… 何がおかしいんですか？あなたはサラさんの友人なのでしょう？彼女が、心配ではないのですか!？」

「…………… あれは私の妹みたいなものだ、心配に決まっている。」

「ならば、何故？」

「神託を受け、待っていたのだ。貴様ら、星の海を渡って来たものたちと、時空の海を渡ってきた神を…………… な」

「僕たちを…………… 待っていた？」

「ああ…………… サラを救い、魔王復活を阻止できるのは貴様らとお前と…………… お前の体の中に潜む…………… 魔王を喰らう混沌の龍神

の皇帝…………… ”ブラム”」

「ブラム？」

エッジが首を傾げると、陽弥が返答する。

「流石、聖女…………… そこまで分かっていたとは……………」

「なめるなよ…………… それと、ブラムと話してみたいからなあ……………」

「…………… 良いだろう」

すると、陽弥の目が白くなり、倒れた。

「陽弥!？」

「陽弥さん!？」

すると陽弥の体から赤黒い粒子が溢れ、形を整えていった。

「…………… !？」

形を整え、現れたのは陽弥の姿をしているが、龍のような角と目、牙、爪、尻尾をした赤黒い龍人であった。ちょうど陽弥が起き上がり、ブラムを紹介する。

「痛てて、紹介しよう…………… こいつが魔王をも喰らう混沌の龍神の皇帝…………… ” 獄闇の皇神帝 ブラム” だ」

「初めまして諸君……………」

ブラムはエッジ達に礼をする。

「…… 確かに神を越えた存在だな、心が底無しの間で埋め尽くされているな。」

「そこまで見え見えとは…… とんでもない奴だ…… それで、俺らなのか？ 魔王の復活を阻止できるのは……」

ブラムは問うと、イレーネはエツジ達やドアの外にいるバツカスや女性に言う。

「今、この場にいる、星の海を渡ってきたものたちと、時空からの神に重ねて言う。パージ神殿で進められている魔王復活の儀式を貴様らで断固阻止するのだ。今、魔王が復活してはならない。また、早すぎる。」

「まるで、この先復活するように聞こえますが……」

「復活するさ……」

「えっ？」

「いずれ魔王は必ず復活する。だが…… 今少しあとのことだ。」  
「その時が来れば、魔王に引導を渡す者が現れる。それはさすがに、貴様らではないがな。」

「…… それも、神託というやつですか？」

「そういうことだ。まあ、そんなことより、重要なのは、今、魔王を復活させてはならないこと。そして何より、魔王復活のためにさらわれたサラを救うことだ。」

「ちよつと待つてください！ ですから、なぜ魔王の復活にサラさんが!?」

レイミが慌てて言う、陽弥が言う。

「…… 生け贄か」

「…… そうだ。魔王復活には、聖なる生け贄がひとつとなる。サラは聖なるフェザーフォルク 魔王に捧げられる価値は十分にある。サラ救出と、魔王復活阻止は同義。つまりはそう言うことだ。」

「…… もしも、僕たちに出来なかったら、この星はいつたい、どうなってしまうんですか？」

「それは…… だな。」

するとイレーネが気を失うと、彼女の周りから白き光が満ち溢れて

きた。

「えっ？」

「この光……これが」

「これは……」

皆が驚くとイレーネは起き上がり、語り出す。

「白き聖なる乙女が、祭壇への道につきました……」

「いーたん、どうしちゃったのよ？」

「まもなく道は開かれ、散らされし純白の翼が、朱に染まり……目

覚めるは、闇深き世界より来たりし魔王。白き聖なる乙女の朽ちた身

を引き裂き喰らい……この地を滅ぼす、先触れとしますのです。」

「イレーネさん……さつきまでとは全然違う……」

「もしやこれが……神託《オラクル》……」

「抗えず、逃れず、世界は包まれます。何者をも灰とする破滅の業火

に、全ては、美しく滅びを迎えることでしょう」

そしてオラクルを終えたイレーネは荒い息を吐く。

「……ガアッ！、ハア……ハア……ハア」

「イレーネ……様？」

「見せてやった方が、早いと思ってな。今のが神託だ、貴様らが失敗し

たときの、な。サラは死に、この地は滅びる……そこには一切

の妥協も希望もない。何度やろうとも、この神託は変わらない

い……滅びは、確実に訪れる……だが、サラを助けられれば変

わるかもしれない。私は……それを賭けてみたいのだ……」

イレーネは体制を立て直し、陽弥達を見る。

「……稀代の占い師とたたえられてもこのザマだ……神託を受

け入れるだけで体は悲鳴を上げ……他人の手を借りねば、友も救

えぬ……」

イレーネはエツジを見て、言う。

「頼む……サラとこの星を滅びから救ってやってくれ……この

通りだ。」

「イ、イレーネさん……!?……や、やめてください……」

星の運命だなんて、そんなことに僕を関わらせないでくださ

い……………！」

「エツジさん……………」

「そんなこと言われても、困りますよ……………！サラどころか、この星の運命まで……………！また……………そんな……………僕に……………だつて僕は……………！」

「……………愚か者……………が」

イレーネはそのまま体制が崩れ、気を失なった。

「イレーネさん!？」

「しつかりしてください！」

イレーネをベットに寝かせても、全然起きなかった。

「何やつても起きないのよ」

「……………行きましょう、パージ神殿に」

「……………フェイズ」

「正直、魔王復活なんて僕には眉唾ものですが、サラさんに危機が迫っているのは確かなようです。」

「けど……………イレーネさんは目を覚まさないわ。それに神殿に入口はないんですよ?」

「だが、あの壁は微かに動いた。間違いなくあそこが入口だ……………」  
「それなら作ればいいんです。たとえば、神殿全てを破壊しようとも……………」

「ダメだ!そんな乱暴な手段は認められない!」

「では、どうしろと言うんですか!？」

「待つんだ……………イレーネさんが起きるのを」

「何を悠長なことを!」

「彼女は僕たちにパージ神殿に行けと言った。けれど、かの神殿はあれ以上、奥には行けない。イレーネさんがそれを知らないわけがな

い。彼女は奥に入る方法を知っている……僕は………そう  
思う………」

「分かっているんですか？このままではサラさんが……！サラさん  
を……… ロークを見捨てるんですか!？」

「そんなことは言っていない!」

「言ってるも同じです!今までのエッジさんなら!……… こんなと  
ころでしり込みなんかしなかった。僕たちが出会った。あのエイオ  
スから、レムリック、そしてカルデアアノンでも……… エッジさん  
は、臆することなく走っていた。前だけを見て、走っていた!だから、  
僕はついて行こうと決めたんですよ!」

「その僕が!……… 何も考えていなかったその僕が、地球を滅ぼした  
!また、同じことになるんじゃないかって……… 怖くて、怯えて、体  
も心も動かなくなるんだよ!」

「でも、レイミさんを助けるために、あなたは戦った!」

「戦ったさ!それでも、あの恐怖は消えないんだ……… !」

「二人ともやめて!」

レイミがエッジとフェイズの喧嘩に怒鳴る。

「!………」

「一つだけ聞かせて、サラさんを見捨てる気はないのよね?」

「……… 当たり前だ」

「仲間を思うフェイズさんの気持ちは分かります。でも、私たちの  
リーダーは……… エッジだわ」

「……… はい」

「れーたん、すごいのよ………」

「怒らせると怖いミヤ………」

二人はレイミを感じしていると、陽弥は言う。

「……… やっぱり、あの話の続きを話しとければ良かったなあ」

「話の続き?」

「前に俺が”それを認めない者達がいるんだ”と言ったのは覚えてい  
るだろう?」

「ええ、」

「……」 偽りの民」…… かつて俺の一族と父さんと母さんを差別してきた傲慢な人類の事だ。」

陽弥は彼らの事をエッジ達に説明した。陽弥が使っている”マナ”とは…… かつて人類が進化の果てに得たとされる魔法の様な技術であり、それを扱う人間達は創造主であるエンブリフからホムンクスと呼称されていた。念動力のように物質を浮遊・移動させたり、光や熱を発生させたり、魔法陣のような拘束・防護用の結界を張ることも可能、統合システムへのアクセスによってマナ使い間での情報共有が可能であるため、相互理解を深め合うことが容易になり、これにより、人々は互いに繋がることによって相互理解を深め合い、戦争や貧富の差も消滅したとされ、貧困や格差の存在しない、平和で穏やかな理想郷を築きあげた。

しかし、マナの力を持たない人間「ノーマ」に対して、忌み嫌われ、嫌悪され、蔑まされ、差別されていた。

ノーマとは、エンブリフが作り上げたホムンクス達と異なつてマナの力を持たない人間達に与えられる蔑称。であり、産まれながらにしてマナが使えない突然変異体で、マナによる干渉も受け付けない性質を持ち、結界などによる直接的な捕縛はできない。ただし、マナで動かした物による拘束は可能。 マナを否定する「退化した人間」と見なされ、社会システムを破壊しかねない危険な存在として人々から忌み嫌われて、差別されている。

何故か女性体しか発生しないが、その理由は一切解明されていない。

日々検疫官がその存在を取り締まっており、ノーマと判明した者は発見後は速やかに社会から隔離され、ノーマ管理法に基づき認定番号が与えられて拘束され、アルゼナルへ送られて名前を取り上げられ、対ドラゴン用兵器として訓練され、ドラゴンと戦い、一度も外の世界に戻ることも無く死んでゆくことが使命とされるなど、人類社会の防人として強制的に軍務に使役される。

その為、彼女達の活躍は功績も献身も一般に喧伝されることはな



く、実質的な奴隷であったが、ラストリベルタス開戦後、勝利し、ノーマと古の民には自由を勝ち取り、マナを使っていた人類は混沌の世界で抗争をする運命になっていったが、陽弥が18歳の時に突如、陽弥の婚約者でもあるエミリアがやって来た。彼女はこの惑星ローク並の文明レベルの星“惑星ホライゾン”に機械生命体国家アジマス連邦が侵攻してきた。しかしその正体はかつて、マナの光が使えなくなつた人類の一人“新星国家ネオ・ミスルギ皇国”率いる現皇帝ジュリオ・飛鳥・ミスルギの陰謀であつた。彼はラストリベルタスを起こした自分の妹アンジュに復讐の怒りに燃えており、惑星ホライゾンのエネルギー『フォドラニウム』を強奪し、民を強制にアジマス連邦の故郷でもある恒星要塞“アヴァロン”へ移住し、ついにアジマス人を奴隷に納めた。だが、ジュリオはさらに余計なことをした。かつて先代護星神タイタニスよつて封印された邪神国家“グリゴリア大銀河帝国”と邪神達を復活させてしまい、ジュリオは邪神の配下になつてしまった。それから俺達次第護星神やホライゾン民、父さん達は今も奴等と戦っている……………」

陽弥の話聞いたエツジ達は、

「陽弥の世界も……………あの地球と同じ運命を辿ろうとしている星が……………」

「あなたも……………僕達と同じ運命を……………」

「ああ、だけど俺もエツジとフェイズの食い違いが全くもつて俺の状況が同じなんだ……………偽りの民とアジマス人全員生かすと言うのが……………また裏切られると……………それに、文明レベルが近かつたヴァルヴァートル帝国の帝都を壊滅寸前までに追い込んだ俺を……………ホライゾンの民はこれを許すのかを……………俺は怖くて逃げた……………だけど、ブラムが教えてくれた。お前の生存を待っている家族や、仲間、友人、そして愛する人がお前を待っている……………俺目が覚めたんだ……………逃げていた自分を殴りたかつた……………もう考えることや、迷うことは止めた！俺はヴェクタ人 シンとメイルライダー ヒルダの子 陽弥！と……………ミッドガンドの護星神として、エミリアの騎神と……………」

陽弥は決意し、拳を握りしめ胸に当てた。エッジ達は陽弥の勇姿に興奮していた。

「……………」

「はるたん、なんかかつこいいよ。まるで絵本に出てくるナイトなのよ」

「僕も思いました……………」

するとイレーネが目を覚まし、レイミが気が付く。

「あ……………、イレーネさん?」

レイミは体を起こすのを手伝った。

「イレーネさん……………よかった」

「……………私はどのくらい意識を失っていた?」

「もう、朝みたいです」

「それほどか……………歳はとりたくないものだ」

イレーネはエッジとフェイズ、陽弥を見る。

「……………何があった、小娘?」

「パージ神殿の奥に行く方法で、その意見の食い違いがありました……………けど、陽弥さんが何とかしてくれました。」

「なるほどな……………それは私が迂闊だった。」

イレーネは胸元から何かを取りだし、レイミに渡した。

「こいつを先に渡しておけば、問題はなかったな」

イレーネが取りだしたのはカードキーであった。

「これは……………?」

「カードキー……………なのか?」

「この惑星の文明レベルで、なぜそんなものが……………?」

「パージ神殿の奥に行く方法は、その『導きの灯火』が必要なのだ。それがなければ、奥に行けん。破壊などしようなら、奥のサラが危険だ。」

イレーネの言葉にエッジの言葉が正しかった。

「エッジの判断が正しかったのね」

「……………ああ、」

「……………」

「カードキー、いえ……『導きの灯火』をどこで？」

フェイズが問うと、イレレーネは返答した。

「昔、ムーアの血を引く奴から預かった。」

エッジ達は驚くと、イレレーネは言う。

「さあ、もういい。急いでサラを頼む。」

「…… 行きましょう」

フェイズは急いで隠れ家から出た。

「おい、そのどら猫。確か……メリクルと言ったな」

「な、なに？また私の夢を壊す気なの？」

「暇になったら遊びに来い。聖女とやらの話、今度は笑わずに聞いてやる。」

「……… き、気が向いたら来て上げる！それと、私はどら猫じゃないよ！」

メリクルは頬赤くして、バッカスとリムルと一緒に出ていった。するとイレレーネは落ち込んでいるエッジを見る。

「…… 小僧、貴様が何を恐れているのか、私は知らないし、興味もない。だが、これだけは言っておく……… 自惚れるな！このバカめ！」

「………！」

「！………」

「……… おお！」

イレレーネが怒鳴った事に三人は驚いた。

「星の海は果てしなく、世界は途方もなく広い。それを貴様ごときが背負えると思うな……… 愚か者。栄えるも滅ぶも、それは全て星の選択だ。これは……… 運命と言ってもいい」

「ですが、」

「もしや貴様、運命すら操れると思っているのか？なら、増長しすぎだ、この戯けが」

「そ、そんなつもりは」

「貴様にできることも、貴様が与える影響も、たかが知れている。貴様が契機となったものが、いずれ巨大な波となり、星を飲み込むことに

なるかもしれない。それこそが、星の命運になることだろう。だが、そこまで至るには、貴様の力だけでは不足、様々な要因が絡み合い、最後の運命を帰結するのだ。」

「イレエネさん……」

「悩め！恐れるろ！泣け！されど止まるな、おぼることなく真つ直ぐひたむきに、前へ走れ。そうすれば、自分にできることが見えてくる。ちっぽけな自分にしかできないこともな…… それこそ、貴様が真に成さねばならないことだ。」

「…… それも、神託ですか？」

「嫌、単なるご託だよ…… それに貴様には、その小娘がついているだろう」

「えっ？わっ、私ですか？」

「辛いことも、苦しんだこともあつたろう。だが、貴様の中のムーアは、必ず意味があるだろう。」

「私の…… 中の……」

「この小僧と共にあれ、ムーアの加護を受けて生まれた、幸福の子よ……」

「はい…… はい……！」

エッジとレイミはお互い、心の中で決意し隠れ家から出ていった。陽弥も出ていこうとしたとき、  
「待て、お前に渡すものがある……」

陽弥はイレエネからある本を3冊貰った。

・ ” 守護者と26人の使徒 ” という絵本

・ ” 時間と空間 ” の書物

・ ” 生きる ” という小説

隠れ家から出た陽弥は3冊の本をポーチの中にしまった。

「こんな貰って、何になるんだ？」

すると陽弥達の前に女性が話し掛けてきた。

「やれやれ、夜が明けてしまったわね。行くんだったら、早く行きましよう。」

「あ、あなたは……… 何でここに!?!」

「言ったでしょう。この星でなすべき事があるって、どうやら、その目的まで坊やと一緒にみたいね。アスモデウスの復活を阻止すること。それがモーフィスの私に与えられた今回の任務よ」

「君もモーフィスの一員なのかね?」

「あなたの噂は聞いているわ、バツカス。こんなところで会えて光栄……… と言っておくわ。その坊や以外に初めて名乗るわね、私はミュリア・ティオニセス。カルディアノン母艦であった子もいるわね」

「あなた、あの時の………」

「なぜ、あなたがロークに………!?!」

「それは私が知りたいわ。カルディアノンの時といい、このロークといいなぜあなたたちは事の核心にいるの?」

「……… まあ、いいわ。取り合えず、一緒に行きましょう。」

「そんな、勝手に………!」

「……… やっぱり、あいつを狙っているんですか?」

「もちろんよ、それまでは、坊やのそばを離れてあげないから」

レイミはミュリアとエッジの関係に疑心暗鬼になる。

「……… どういうことなの、エッジ?」

「……… 簡単な事だよ、あの人はクロウを殺すために仲間に加わったのさ。」

エッジの言葉に陽弥達は驚いた。

「ええっ!?!」

「大丈夫、そんなことはさせない。きつと、分かってくれるから………」

「それじゃ、よろしくね」

ミュリアは投げキッスで挨拶し、皆と共にパージ神殿へと向かっていった。

## 第52話：運命

陽弥達はサラが消えた壁に止まり、早速”導きの灯火”を使うと、壁があつさりと開き、奥へ通じる道が見えた。

「おー！開いた！」

リムルは感心し、奥へ歩む。

「どうやったらこんなカラクリを造れるんだよ……ムーア人は……」

「それほど、ムーア人のテクノロジーが上だって言うことが分かる。」  
「ふくん……」

ムーアのテクノロジーに陽弥達は感心した。陽弥は心の中にあるブラムに話し掛ける。

「どう思う？」

『分からん』

「そっか……」

「そう言えば、陽弥さんの中にいるブラムと言うのはどういう者なんですか？自己紹介しただけなので……」

「……元邪神かな？正確に言えば邪神の王の王とも言える。ブラムは俺の先祖アプスとニケが作った俺の二重人格でもある。見た目は怖いかもしれんが、話したら結構良い奴だから……」

すると、陽弥からブラムが出てきた。

「見た目が怖いとは何だ？見た目は……」

「良いじゃないか、ブラム。お前のことを話してやってんだから、」

「……ケッ！」

ブラムは頬を膨らます姿にエツジ達は笑う。

「まるで兄弟だね、陽弥とブラムは」

「っ?!違〜う……！」

「ミヤッ!？」

陽弥とブラムが怒り、メリクルが驚く。

「三人とも静かに……！」

レイミが注意し、扉を開けた矢先に蒼く輝く獣が威嚇していた。

《っ!!》

「何だこいつは!？」

「この神殿の守護獣か……、準備体操するにはちょうど良い相手だ…… お前ら、先に行け……」

陽弥とブラムはそれぞれの腕を展開し、構えた。

「だけど!」

「良いから行け! サラを救出し、魔王復活阻止するんだ!」

「…… 分かった!」

エッジ達は陽弥の言われた通りに、先へ行こうとするとガーディアンビーストがエッジの方を向き、襲い掛かってきた。陽弥は光の腕を伸ばし、ガーディアンビーストを掴み投げた。

「彼等を追いたければ…… この俺を倒してからにせつ!!」

陽弥がガーディアンビーストに光の爪を突き付け、コスモバイルを掲げた。

「ガルディオラ! ライパルド! アルグレオン!」

コスモバイルからガルディオラ、ライパルド、アルグレオンが召喚され、ガーディアンビーストに攻撃する。ガルディオラがガーディアンビーストの突進を受け止め、ライパルドが翼に付いている鋭い刃を斬り付ける。仰け反るガーディアンビーストにアルグレオンが烈火のレーザービームが直撃した。

「叩きのめせ!」

3体のスペクトロブスはガーディアンビーストの首と前足に噛み付いた。するとどのんびりしていたブラムが闇の腕を突き付けてきた。

「俺も混ぜてくれよ♪」

「ブラム?」

「俺がいれば…… 百人力だ」

ブラムが陽弥に笑顔を見せると、陽弥は七星剣と魔剣グラムを抜刀した。

「フツ…… 剣を持って!」

「ああ!」

陽弥がブラムに魔剣グラムを投げ渡し、二人は神速の如く斬撃で

ガーディアンビーストの四肢の間接を切り、最後に二人揃って、  
「必殺！ダブル！プロミネンスフィンガーーツ!!」

二人の指から同時に、紅炎が放たれ、ガーディアンビーストを撃破した。

「中々、やるな…… ブラム」

「そつちもな、陽弥」

「早いところ、エツジ達に追い付かないと…… 戻れ！」

陽弥はガルデイオラ、ライパルド、アルグレオンをコスモバイルの中に戻り、ブラムも陽弥の体の中に入った。

陽弥は神殿の奥へ進んでいた。

「だいぶん導きの灯火で進んでいるようだなあ…… ん？」

すると、陽弥は横の扉に明かりが照らされていることに気付き、中に入ってみると、それは何らかの薬品や容器、資料や、ブラツクコロドロン（黒い釜）があった。

「これは？」

陽弥は水色の液体が入った容器を見ると、突然ブラムが陽弥に話し掛けてきた。

「……なるほど、そう言うことか」

「何がだ？」

「……これは、石化病を広めるための薬だ」

「石化病を広めるための薬?！」

「あの魔王崇拜者達が風土病を広めていたんだ…… それにこれも見ろ」

ブラムの目線にあるものがあつた。それはあの黒鷲に頼んで、渡すはずだった報酬金と手紙であつた。

「これは?！」

「あの若造が取っ捕まえた賊に頼んだのはコイツらだ…… なんと卑劣な奴等め……」



「クソッ……！」

陽弥は拳を壁にぶつけ、歯を食い縛っていると、ブラムが箱の上にあるものを見つけ、驚愕した。

「……………嘘だろ」

「え？」

ブラムがそれを持って陽弥に見せた。

「そ……………それは!？」

それは……………。パージ神殿の行き方を教えてくれた遊牧民の黒いマントだった。しかもマントに赤黒い血痕が残っていた。

「嘘だろ……………遊牧民も……………！」

「こりゃ……………生かしては置けん……………！」

ブラムは黒いマントを自分の心の中に入れてしまうと、拳を握り締める。

「……………許さん！俺はあの狂信者がっ！れ」

「絶対に許さねえっ!!」

陽弥とブラムの瞳が同時に緑へと変わり、シンセシスを発動した。

そして奥の間ではエツジ達がようやくサラを見つけると同時に、魔王崇拜者のリーダー、タミエルがおり、エツジ達はタミエルの言葉を否定したその時、扉が木っ端微塵に吹き飛び、緑の炎を纏った陽弥とブラムが鬼神の表情になっていた。

「タミエル!!」

《っ!?!》

「陽弥！ブラム！」

「お前だけは……………絶対に許さねえ！罪を償ってもらおうぞ!!」

鬼神の如く陽弥は七星剣をタミエルに突き付けると、タミエルは語り出してきた。

「さてさて、貴方は何を仰っておられるのですか？それに仰っている意味が分かりませぬが……………」

「何っ!?」

「惚けても無駄だ。君達が人為的に石化病を広めたことを、自分達は既に認識している。」

バツカスがああの部屋で見たものを証言した。

「ふむ……………その何処が罪だというのですか?」

《!?》

タミエルの言葉に陽弥達は驚愕する。

「世界は緩やかに滅びの道へ進んでいるのす。我々はその流れに、少し差し伸べただけ、あなたの友人はその礎となる存在……………友人であるあなたが何故それを祝福しないのか?……………私には理解できません。」

「当たり前だ!この世界を滅ぼしたいだなんて、サラはそんなことを望んでいない!!」

「いやはや、本当におかしなことを言う人だ。彼女は、それを望んでおります。私は知っているんです。ええ、知っているんです。私だけは知っているんですよ……………!」

タミエルの語り事とその眼差しにエツジ達の心を揺さぶった。

「ミスタ・エツジ!この男は何だ!?今……………自分達の目の前にいるこれは……………!?!」

「これが……………狂気……………底無しの闇がこの獄闇の皇神帝を飲み込もうとしている……………!」

ブラムが鬼のように威嚇する。

「この姿をとったことでよく分かりました……………人間の欲望とは限りないものです。今あるものではなくに満足できなくなり、また新たな幸福を求めるようになっていっているのです……………しかし、今のこの世界はそうできていない、限界があるのです。でもね、私は足りないんです。地位、名譽、金……………いくら手に入れようとも、もうこれ以上はこの世界では、手に入らないんです。でも、私はもつともつと欲しいんですよ……………そう、たとえ今、この身が朽ち果て滅びようとも、人間の欲望とは限りないものなのですよ!」

タミエルの下らない目標に、ついにエツジと陽弥とブラムの頭のネ

ジが取れた。

「ふぎけるな……ふぎけるなよ！お前！」

エツジは拳を握り締め、タミエルに怒鳴った。

「そんな下らない理由で……サラを……この星に住む人々を!!」

「護星神として……俺はお前を……倒す！」

その時、エツジの左手と陽弥の首もとからムーアの紋章が浮かび上がり、光輝き始めた。

《……!》

「これが……エツジと陽弥さんのムーアのカ……エツジと陽弥の中にあるムーアカ……」

「綺麗な……光」

「なんとも、熱い……」

「戦おう！俺達の手で！エツジ！」

「ああ！ちっぽけな存在の僕に、今、できることはそれだけだ！そして、僕はやって見せる！ロークはこんな滅びなんか望んでいない！」

陽弥達はそれぞれの武器を取りだし、タミエルに突き付ける。

「サラを救い！魔王アスモデウスの復活を阻止する！」

《応!!》

皆は掛け声を出すと、タミエルは杖を取り、戦闘体制をとる。

「分かりました……では、貴殿方に新しき世界のために……滅びをさしあげましょう」

するとタミエルの後ろから転送呪紋が現れ、数十人の戦闘員を召喚してきた。

「愚かな人々よ！欲望の渦に沈むが良い!!」

タミエルの目が赤黒く染まり、戦闘員達も一斉に襲い掛かってきた。

「行くぞ！ブラム！」

「おう！」

陽弥とブラムは七星剣と魔剣グラムを振りかざし、呪紋を唱えた。

「ライトニングプラズマ！」

「スカーレットイーター！」

七星剣から閃光に輝く無数の稲妻が放たれ、グラムから赤黒い禍々しい手のような形をした口が襲い掛かり、二人の合体技で撃破したと思いきや、あちこちからシユドネイ教の戦闘員が現れてきた。

「どんだけ増えるんだ！コイツら！」

グラムが戦闘員の仮面のしたの目を見ると狂喜に満ちた眼差しであった。

「死を覚悟してやがる目だ…… そんなに崇拜したいなら蓮獄の業火に包まれた地界に叩き落としてやる！」

グラムの手から赤い球体が現れ、地面に押し付けると、グラムは叫んだ。

「ヘルブレイザー!!」

グラムを中心に地面から裂け目ができ、中から暗黒生命体の兵隊達が戦闘員に襲い掛かかり、グラムと陽弥を守るように囲んだ。陽弥とブラムの戦闘にエツジ達は驚いていた。

「凄い……」

「これが…… 神の力……」

「俺達も行くこう！」

エツジ達も陽弥とグラムを助けるべく、戦闘員の大軍に飛び掛かった。

「紅時雨！」

レイミは弓矢を取りだし、前方の戦闘員に向けて紅く輝く七つの矢を放った。

「ファイアボルト！」

「ディープフリーズ！」

リムルとミユリアは得意の呪紋攻撃で敵を焼き付くしたり、凍らせていった。

「スキッター・コメット！」

メリクルは爪武器を使い、引つ掻き、そして渾身の猫パンチを戦闘員の顔にいれる。

「ジャステイス・セイヴァー!!」

バツカスが両腕から二門のガトリング砲を呼び出しを戦闘員の大

群に向けて乱射する。

「シャドウニードル！」

「グラン・ザッパー！」

フェイズがエッジに迫ってくる戦闘員に闇の針を撃ち込み、エッジが光の刃を発した剣を地面に叩き付け、戦闘員に衝撃波で撃破する。その光景にタミエルは慌てながら、陽弥に言う。

「何故です!? 何故分かっておられないのです!? アスモデウス様こそ、この世界の救世主! なのに何故っ!? 貴殿方は偉大なる魔王アスモデウス様の復活を邪魔をなさるのですか!？」

「未来に生きる者達の世界のためだ！」

「っ!？」

「生まれてくる新しき命! それは、未来への希望を託す! それが命なんだよ! お前のような勝手に世界を創り直すなんざあ…… つまらん! 例えいろんな神様や仏様が許しても! この俺と！」

「ブラムが！」

「許さねえ!!」

陽弥とブラムのそれぞれの腕が虹色に光だし、腕を掲げる。

「地に堕ちれ! タミエルウウウツ!!」

二人はその腕をタミエルに突き付け、飛び掛かった。

「必殺! ビックバン! フィンガー!」

陽弥とブラムの光と闇の指から、虹色に輝く波動が放たれた。

「偉大なる邪神よ! 我に力を! ダーククイーター!」

タミエルは自信の体から怨念の塊を呼び出し、口へと変わり、陽弥とブラムのビックバンフィンガーの押し合いが始まった。

「うおおおおおっ!!」

すると二人の体が金色に輝き、ビックバンフィンガーの波動が大きくなる。

「そんなんっ!？」

「止めだあああっ!」

タミエルのダーククイーターがビックバンフィンガーの巨大な波動によって碎け、タミエルに直撃した。

「ギャアアアアアツ!!……………アスモデウス万歳くく!!」

ビツクバンフィンガーで全身がボロボロになって倒れたタミエルは語り始めた。

「申し訳ございません、アスモデウスよ……………我が欲望が足りぬゆえ、復活はなりませんでした。ああ、偉大なる我らが魔王よ……………彼らに滅びと……………そして、新たな世界で祝福を……………」

タミエルはそう言って絶命すると、倒れている地面が割れた。

《っ!?!》

皆は驚くと同時に地面は崩れ、タミエルの死体は落ちていった。

「何者だったのだ……………あの男は?」

バツカスが問うと、エツジは返答した。

「分からない……………でも、最後の最後まであの男は……………狂信者のままだった。あれは……………まるで……………」

エツジはあの地球のミラ・バークタインの光景を思い出す。

「……………」

陽弥もポーチからクラウドとミラ、そしてケビンの写真を見て、胸を押さえる。

そして、陽弥達はサラを起こす。

「サラ……………」

サラは目が覚め、周りの状況を見る。

「エツジ君?……………それに皆さんも……………えくつと、おはようございますく♪」

その能天気差に陽弥達は笑った。するとサラがエツジの顔を見る。

「ん?」

「ど、どうかした?」

「どうやらイレーネさんに会ったみたいですね。ちょっとだけ良い顔になってますよ。うんうん、良かったですく♪」

サラはそう言うと、エツジの頭を撫でる。

「サラ…………… 僕…………… 僕は……………」

「はい？」

エツジの目に涙が溢れた。

「ありがとう…………… ありがとう…………… 今度は…………… 今度は間違えなかったんだ…………… サラも…………… ロークも…………… 生きて……………」

エツジは自分の過ちを繰り返させないよう決意するが、フェイズの方はもう一つの台の崖の下にあの子の髪飾りが落ちていたことを誰も知るよしもなかった。

陽弥達はサラと共にパーヅ神殿から出ると、ロークの太陽が陽弥達を照らしていた。

「何だか、久しぶりに青空を見た気がするよ」

「うん…………… そうだね」

「えー、それでは皆さんにお知らせです。魔王さんが復活しなかった事を私、イレエネさんに報告してきます。皆さんにはいっぱいお世話になりました。♪それでは行ってきます。♪」

サラはそう言い、崖から飛び下りた。

《!?!》

皆は驚くが、下はそんなに深くはなく、サラは翼を使い、地面に下りた。

「ミヤツ?! 突然の事で、何も言えなかったミヤツ!」

「サラたん、行っちゃったのよ」

リムルとメリクルはサラに手を振る。

「サラた〜ん!」

するとサラもメリクルとリムルに手を振る。

「随分と…… 呆気ない別れだったなあ……」

「サラさんらしいけど、ちよつと寂しいね」

「…… さて、そろそろ俺も行くわ。向こうであいつらが泣きべそ掻いていると思う。エッジ」

「？」

「そつちも頑張れよ！」

「ああ、陽弥も…… 向こうの世界でも頑張るんだ！」

陽弥とエッジは互いに握手を交わした後、陽弥は指輪を天高く掲げ、名を呼んだ。

「…… 来い！シグムディア！」

陽弥の指輪が紅く光、目の前からシグムディアが次元跳躍で現れた。

「そんじゃー！」

陽弥はシグムディアに乗り込み、皆に手を振った。

「ハルた〜ん！」

リムルやメリクル、エッジ達も手を振り、彼らの姿が見えなくなるまで陽弥は手を振った。

エッジ達と別れを告げた陽弥はオメガプライムスに乗り込み、ロークから離れると、陽弥はオメガプライムスにあることを問う。

「…… オメガプライムス」

『何でしょうか？』

「…… 前から思ったんだけどよ、」

『？』

「お前には仲間がいたのか？」



『……はい?』

『陽弥……一体どういうことなんだ?』

ブラムが問うと、陽弥は言う。

「嫌、だから、今さっきもいった通りのことだよ。エツジ達のような仲間を見て……それで、オメガプライムスにも仲間がいたのかなあ……」

『ハア……あのなあ、陽弥。オメガプライムスは“機神”。いくら何でも機神が何体かおるなんてー』

『………いました………』

『何!』

突然の言葉にブラムは驚く。

『機神には……必ずやそれぞれのエレメントを持っております。火、水、風、土、光、闇、機がありまして、私は機のエレメントを司る機神であります。そもそもオメガプライムスと言う名は、7つのエレメントを司る機神が一つとなった機神の呼び名です。ですからアヴァロンを造られたのは私含めて、7体の機神のおかげです。』

「ふうくん……」

『………会って見たいですか?』

『………会って……見たいかな………クトウルフにはケイトスがいる………何なら、それを超越してしまうほどの戦力が必要だ。それに………」

陽弥はポーチからイレーネから貰った絵本を取りだし、オメガプライムスに見せる。

『何ですか?その絵本は?………”守護者と26人の使徒”』

「知ってるの?」

『はい、何千億年前の話です。ある惑星に住む魔族と妖精族とプロセスアの合同軍がプロセアンに似た謎の種族“コレクター”との戦いをモチーフにした物語です。その話に、何処から途もなく現れた一人の守護者……所謂“導師”が26人の使徒を引き連れて、コレクターから守ったと言うお話です。』

「コレクター?」

『ご存じなかったのですか？コレクターと言う種族は謎多き種族なのですよ』

「…………… そのお話に、7つのエレメントも出てくる？」

『はい、何せ7つのエレメントはその話から始まったのですから、』

「…………… オメガプライムス」

『はい』

「今すぐ、残りの6体の機神の所に会わせてくれ、そしてそのお話の通り…………… 過去に行く！」

『ええ、もちろんですとも、何かお考えがあるのですか？』

「ああ、クトウルフの野郎に…………… リベンジする！それと、格納庫に武器や資料、道場見たいな施設はあるか？」

『ええ、ありますよ』

陽弥は絵本を閉じると、決意する。

「…………… アイツ等を、みっちり鍛える！」

オメガプライムスとヴィクトルーは陽弥の目が、物凄く輝いていた事に驚いていた。

陽弥はオメガプライムスの各施設から武器や資料、道具を揃え、さらに道場を作った。

「よし、これだけあれば充分だ。」

『何をなさるんですか？』

ヴィクトルーが問うと、陽弥は心の中で自分の夢を言う。

「…………… 俺、憧れていたんだ。教師や師匠になりたい…………… いつも父さんと母さんに英才教育されていたから、やってみたいなと思っただ。皆にこれからのことやいろんなことを教えてみたいって。まさかそれが叶うなんて……………」

『びつくりと？』

「うん…………… それと何人か教師が必要だな。ブラム、お前もなれ」

『嫌だ……』

「そんな固いことを言わずに……それに、あの子達に黒魔術も教わった方が良いと思うぞ。もちろんお前のためでもある」

『………考えておく』

ブラムは頬を紅くし、オメガプライムスやヴィクトルも賛同した。そして陽弥はシャーラやラファイ達がいる教室に入り、教卓の前で笑顔を見せて言う。

「さてと……皆、席について………授業を始めるよ♪」

《はい！》

皆は元気よく挨拶し、陽弥の出題を学んでいった。たくさんの生き物との触れあい、学び、強くなるための武器の使い方や、扱い方、スポーツ、個性の育成、乗り物、パラメールとセイクリッドメールの操縦の知識を学んだ。

それから16年……うつすらと顎に髭が生えた陽弥は小説を読んでいると、成長したシャーラとラファイ達が話し掛けてきた。

「お前らも成長したなあ……」

「はい！先生のおかげです！」

金髪のロングヘアをしたシャーラが興奮していた。

「ラファイも……しっかりと白魔術士としての勉強も身に付けた。」

金髪のツープロックをしたラファイは片手に本を持っていた。

「はい、すべてはハル兄さんのおかげです。それとパラメールの操縦や技術の基礎も……」

「シャーラは銃士、ラファイは白魔術士、レイナは治療士でエミリーとリカとユミは看護兵、アレンは魔法戦士、ユーマは精霊戦士、アスカとロト、ユースケは聖騎士、ココルとシャルルは俺が生み出した猪神と

大神、猿神を出すことが出来る召喚士、ローゼは呪術士、シュヴァアルツは黒魔術士、トレーネルは吟遊詩人、シエリアは錬金術、そしてアスベル、サーヤ、ミカは突撃兵、ララ、ライト、フレッド、ヒロキは狙撃兵、シエリー、ダステイは機甲兵士…………… 本当にお前らは…………… 成長したなあ……………」

「当たり前だよ！兄貴！俺達をここまで強く、賢くしてくれたのは兄貴のおかげっすよ！」

「何を言ってるのよアスカ、兄さんは私達の先生でもあるんだから、もっと丁寧に言いなよ」

「良いよ、ローゼ…………… 俺はここまでお前達を強くするために、鍛えてやったんだ。普通に言っても構わんぞ。」

「ですが、」

「それと…………… 今回いく場所は怖がつているのか？」

「惑星セレス…………… 魔族と妖精族が暮らす半分エメラルドグリーン、半分ダークパープルで覆われた星…………… 大気はほぼ僕たちが16年前にいた地球とロークの大気と一致している。僕たちはそこで最終試験及び、その魔族と妖精族を助けるのです。」

ローゼの変わりにラファイが説明した。

「そうだ。もちろん俺も一緒に行くぞ…………… 最近、授業で鈍っていたからなあ…………… 気分転換に言うことだ」

「アハハハ……………」

ラファイは笑うと、陽弥は本を閉じ、大声で言う。

「…………… お前達！準備は出来ているか!？」

『『『『『『『『』』』』』』』』』』

オメガプライムスの回りにそれ以上に巨体な要塞六機が返答した。

「全員席につけ！シートベルトもしろー！」

シャーラ達は乗席につき、シートベルトをした。

「…………… シートベルトはしたな、良し！オメガプライムス！ドッキングを開始してくれ！」

『ドッキングシーケンス！開始！』

『オメガプライムス！』

『マーズプライムス!』

『ネプチューンプライムス!』

『ジュピタープライムス!』

『サターンプライムス!』

『ウラヌスプライムス!』

『プルートウプライムス!』

七機の要塞がオメガプライムスを中心として合体し始めた。マーズプライムスが変形し巨大なブラスタ砲へとなり、オメガプライムスの右腕と合体した。次に母艦型のネプチューンプライムスがオメガプライムスの左腕と合体し、ジュピタープライムスとサターンプライムスはオメガプライムスの右足、左足と合体した。次にプルートウプライムスがオメガプライムスの背部に合体し、巨体なビームウイングを放出した。最後にウラヌスプライムスがオメガプライムスの胸部に合体し、さらに腰部に合体し尻尾へとなり、オメガプライムスの頭部が大きく変形し始め、ドラゴンヘッドへと変わり、赤きツインアイを光らせ、叫んだ。

『極限龍機神帝! オーバー・ザ・ワールドプライムス!!』

決めポーズをする機神のその姿に男達は興奮するが、女性達は呆然していた。

「…………… なんか、スーパーロボットの感じがになりましたね。」

「…………… それを言うな。」

陽弥が注意すると、ヴィクトルーが報告してきた。

『マスター、そろそろ……………』

陽弥はオーバー・ザ・ワールドプライムスに命令し、移動しながらスターシップ形態へなり、惑星セレスへワープした。ワープして、陽弥達の目の前に半分緑と半分紫色に染まっている星に見とれる。

「あれが…………… 惑星セレス…………… この絵本の通りになるのか……………」

陽弥は絵本のタイトルを見て、惑星セレスへと向かった。

## 第53話：小さき戦士達

惑星セレスに到着した陽弥達は、シャーラに言う。

「よし、全員着席！」

シャーラ達は、着席した。

「シグムディア」

陽弥はシグムディアを呼び出すと、今度はプレジストアクセラーも呼び出し、叫んだ。

「プレジストアクセラー…………… フォルムチェンジ」

シグムディアとプレジストアクセラーが光輝き、現れたのはロッドとシールドを持ったシグムディアであった。

「ニルヴァーナ…………… ヘルヘイム…………… 錬金術と黄泉転生の力を一つに！」

するとシグムディアの腰部から光のマントが放出され、陽弥はシグムディアの名前を言う。

「シグムディア・シード」

するとシグムディアはロッドを掲げ、呪紋を唱えた。

「フェアリー・ワールド」

ロッドから黄色と紫の粒子がシャーラを覆うと、シャーラ達が段々と小さくなっていった。(サイズは2cmです。)

《!?!》

「何だこれ!?!」

「私達…………… 小さくなっちゃった!?!」

アレンとレイナは自分達の体が小さくなったことに、驚いていると、そこに小さくなった陽弥が現れ、説明した。

「シグムディア・シードはドヴェルグの錬金術とヘルヘイム死者の力が同時に使えるようになっており、錬金術で俺達を小さくしたんだ。後ろを見てみる。」

皆は後ろを見てみると、月ぐらいの全長があるオーバー・ザ・ワールドプライムスも見事に小さくなっていた。(分かりやすく答えます)

と東京スカイツリーの並みの高さです。」

「見ての通り、オーバー・ザ・ワールドプライムスもあんなに小さく  
なった。」

「…… うわあ、まさかあんな大きさになるなんて…… ちよつと  
心配……」

「でも、力は影響してないから、結果オーライかな？」

《……》

「…… ハア、それは置いといて、今回お前らが受ける最終試験  
は…… この惑星セレスに存在する2種族”リーフマン”と”ダー  
クリーフマン”だ」

「あれ？確かその絵本では魔族と妖精族って書かれてましたよ？」

「そうなんだよ。リーフマンはこう…… 緑を愛した種族なん  
だ。つで、ダークリーフマンと言うのは、ネズミやコウモリの毛皮を  
被った種族で、中身はリーフマンに似ているけど、リーフマンと違っ  
て耳が尖ってるんだ。」

「なるほど、つまりダークリーフマンはダークエルフ的な感じなので  
すね？だから魔族と呼ばれているんですか」

「そう…… それにどういうわけかその2種族は互いに睨みあって  
いるんだ。」

「それで、先生と僕達で2種族を和解させよう？」

「そうだ…… いくら俺が神でも一人じゃどうすることもできない。  
けど一人で悩むより、俺も含めて皆で考えた方が良いと思った。お前  
達にとってはこれももう一つの授業でもある。」

《なるほど〜！》

「さて、お喋りはここまで、最終試験を行うぞ！一同起立！」

《はい〜》

陽弥達は樹林の中を歩み始めた。

シャーラ達は二人1チームに別けられ、アレンとラファイはリーフマンとダークリーフマンの拠点を探していた。

「まったく、兄貴は無茶苦茶だよ。最終試験1限目がリーフマンとダークリーフマンの搜索だつてよ〜！」

「僕に言われたつて、13チームに別れて搜索になっているから、」

「ハア……兄貴はオーバー・ザ・ワールドプライムスから軌道衛星を使つて監視している。危険になったら駆け付けるつて言われても……」

「小さくなつた僕達をどう探すのか……？」

「そんなもん、俺らのムーアの力を使えば分かるっ!？」

するとラファイがアレンの口を手で抑え、葉っぱの裏に隠れた。

「隠れて！」

「何すっ!？」

「静かに……！」

ラファイの目線にあるものが写つた。それは何百メートルもあるニシキヘビがゆつくりとアレンとラファイの横を通つていた。

「デカツ!？」

それから数分後、ヘビが通りすぎ、ラファイとアレンは葉っぱから出てきた。

「危ないところだつた……」

「しかし、小さくなると蛇があんなにデカイなんてなあ。」

「それほど、僕達は小さくなつたつて言うことだよ」

「だな、とにかくリーフマン達を探そう」

ラファイとアレンはリーフマン達の搜索を続けた。その頃、シャーラとレイナは……。

「疲れた〜！ちよつと休憩〜！」

シャーラが手で風を葵ながら、バテていた。



「歩いて15分だけだよシャーラ」

レイナはシャーラのだらしなさに呆れていた。

「でも、へとへと〜」

「もう、しょうがないわね。」

レイナは近くに大きな川を見つけ、水筒を取りだし、水を汲もうとしたとき、あるものに目が入った。

「……?」

苔が生えた土に足跡があった。

「足跡……?」

さらに確かめると、足跡に鳥の紋章が描かれていた。

「紋章?でもこれ……」

レイナは辺りを見回した。

「まだ新しい……!」

「何が?」

ちょうどそこにシャーラが来ると、レイナは答えた。

「この足跡…… 私たちが数分前にここへ来る前の足跡なのよ!」

「ええっ!!」

「まだ近くにいるみたい…… それか、私達をずっと見てると思う……」

シャーラとレイナはカーニフェックスハンドキャノンを取りだした。レイナは警戒しながら、陽弥に通信を入れる。

「こちらレイナ…… 先生、応答をお願いします。」

『……こちら、陽弥…… どうした?』

「実は、近くの川でリーフマンの足跡を発見しました。この足跡から行き先は……」

レイナはバッグからコンパスを取りだし、針と足跡が指している方向を見て、報告する。

「北北東に指しております。」

『よし、全員に知らせしておく。良くやったぞレイナ』

「ありがとうございます」

『念のため、お前達のスカウターの使用を許可する。黄色いアイコン

がお前達、緑ならリーフマン、紫がダークリーフマン、赤がエネミー、白が俺と表示している。以上だ。』

レイナは通信し終わると、シャーラに言う。

「行くよ、シャーラ。北北東に向かうよ」

「まだ歩くの?!?」

「早いとこ皆に追い付かないと、遅れちゃうよ」

レイナとシャーラは荷物をまとめて、北北東へ向かった。

ちやうど同じ頃、シュバルツアとローゼはレイナが見つけた足跡と同じ足跡を見つけた。

「どう? シュバルツア君?」

「…………… 近いなあ、この足跡…………… 北北東の方向を示している。ん?」

シュバルツアは葉っぱの中の何かに気付いた。

「何それ?」

それは葉っぱを使った盾であり、その盾にも足跡と同じ鳥のような紋章が描かれていた。

「分からない、でも形で表すと…………… 盾のようだ。しかも丈夫な葉っぱと繊維を使っている。見事な盾だ…………… それとこの紋章見て」

シュバルツアは盾に描かれている鳥の紋章に目が入る。

「鳥?」

「正確に言えばハチドリを象徴した紋章だ…………… このハチドリの紋章が…………… つまり…………… リーフマンの国旗だ!」

ローゼが今度は落ち葉を使った盾を見つけた。その盾にも紋章が描かれていた。しかし、ハチドリではなく、雉の紋章であった。

「するとこの落ち葉を使った種族は…………… ダークリーフマンの国旗…………… つまりダークリーフマン達の物だ!」

シュバルツアが驚くと、ローゼは葉っぱの中に隠れていた物を見つけた。

「じゃあ、これは？」

取り出したのは何らかの機銃であった。

「え？」

「これって……………何？」

「銃？」

「そんな筈はない……………文明レベル物凄く低い筈……………」

その直後、ローゼが間違つてトリガーを引き、銃口からビームが放出された。

「っ!!？」

ビームにあたった葉っぱが段々と枯れていき、さらに燃えた。

「……………直射粒子ビーム砲!!？」

シュバルツァが驚くと、ローゼは急いで陽弥に通信を入れる。

「はい、こちらローゼ」

『こちら、陽弥。お前らそのライフルを上に掲げろ。軌道衛星で見る。』

陽弥は衛生軌道上のカメラをズームしてシュバルツァが掲げている機銃を見る。

『……………見るからに、プロセアンの粒子ライフルに似ている……………それにこのプレートは……………隕石か……………小惑星の岩石のも使っている。岩石をプレートにするテクノロジ―を持つ種族がこの惑星セレスにいるのか？それとも……………考えられるとしたら……………」

コレクター!!？」

その言葉に二人は驚く。

「っ!!？」

「コレクターって!!……………先生!」

『間違いない……………この光学兵器はコレクターの粒子ビームガンだ……………これがあるとしたら……………何処かに死体がある筈!』  
シュバルツァとローゼは辺りを探しだした直後、茂みから音が聞こえた。

「……………っ!!？」

「誰か……………来る!!？」

ローゼは怯えながらシュバルツアの後ろに隠れる。すると茂みの中から現れたのは、

「あれ!? シュバルツア! ローゼ!」

現れた四人。ユーマとヒロキ、コゴルとシャルルであった。

「ユーマ! それにヒロキ! コゴル! シャルル! 何でこんなところに!?」

「それはこっちの台詞だよ! あっ! それと、歩いている途中、変な死体を見つけたんだ。」

ヒロキが背中に背負っていた包みを下に置いた。

「死体!」

ヒロキが背負っていた死体を皆に見せた。それは人間と同サイズで二足歩行の羽を持っている昆虫型ロボットであり、巨大カブトムシに似ていた。

「……………何だこれっ!」

「虫のようなロボットなんだ、」

「化け物じゃねえか……………」

するとシュバルツア達の所から転送紋章が浮かび上がり、陽弥が転送紋章から現れた。

「お前達……………」

《先生!》

「コイツが……………コレクター」

陽弥はコレクターの素顔を見て、自分の世界にいるプロセアンのジャヴィック提督を思い出す。

「確かに……………俺の世界にいるジャヴィックとヴィクトルーのような容姿をしてやがる……………と言う事はリーフマンとダークリーフマン達は……………今、コイツらに襲われているのか……………するとそろそろ……………」

その直後、何処からか轟音が響いた。

《……………!?》

「あれ見て!」

シャルルが指指す方向を見ると数多の艦隊が出現してきた。

「あれは!？」

「あれが…… プロセアン帝国の艦隊……」

陽弥達はプロセアン帝国艦隊が来たことをブラムや皆に報告した。

一方、プロセアン帝国艦隊 ヴアルキュリア級総旗艦ブリュンヒルデの艦橋ではプロセアン総司令官ウエルビスが言う。

「この原子惑星の情報は?…… ヴェンデッタ……」

「報告します。惑星358―420―009の文明レベルは他の惑星より非常に低く、0.36%です。さらにこの惑星から以上なエネルギー数値を感じしました。」

「以上なエネルギーだと?…… 文明レベルが無いのに、エネルギー数値が?……」

ウエルビスはエネルギーデータを見て、ヴェンデッタに言う。

「探索をするぞ」

「え?」

「そのエネルギーの痕跡を探すのだ。我等、”流浪の逆徒の民”の新天地になる場所かもしれない…… 我等、プロセアン帝国の為に……」

「プロセアン帝国の為に」

ヴェンデッタは直ちに乗組員に知らせた。

その頃、シャーラとレイナは別々に別れて行動していたアレン、ラフィとロト、サーヤと合流した。

「うくん…… まずいことになっちゃったねえ……」

「うん、僕達…… 迷っちゃったね、姉さん。」

「ロト…… あんたの索的な力で陽兄いの居場所を突き止められない?」

ロトは眼鏡をハンカチで拭きながら、シャーラに言う。

「……アホかお前は、俺の索的は敵の居場所を見破る為の物だ。いくら人探しでも、これは無理だ。」

「……まあ、良いか！どうせ、陽兄いは軌道衛星を使って見ているから、私等の居場所も分かるか！」

「言い訳ないでしょ！シャーラ！私達完全にこの森の中で迷子になっちゃったのよ！もっと真剣に考えてよ！」

シャーラの言葉にサーヤは怒鳴った。

「大声出すなよ、サーヤ！レイナが言うにはこの森の中にはリーフマン達がウヨウヨしてると思うよ！きつと……もうあんたの後ろにいるんじゃない？」

「っ!!何、言ってるの!!もう！」

サーヤは頬を膨らますと、シャーラが突然匂いを嗅ぎ出す。

「どうした？」

「何か……とても甘い匂いがする……」

「え？」

皆は不自然に思うと、ラファイも言う。

「……本当だ！」

「ごつちだ！」

シャーラが走りだし、ラファイ達も後を追っていくと、シャーラ達目の前にニメートルもある苺があった。

「苺デカッ！」

「僕達から見たら対したことはないのに……こんなにデカイなんて……」

「まあ！良いや！ちようど私、腹減ってたんだ！こんだけありや、腹を満たすのに十分な量だ♪」

「ちよつと待って！姉さん！いくら何でも苺からこんな甘い匂いがつて!!」

シャーラが巨大な苺にかぶりつこうとした瞬間、シャーラ達の足元から丈夫な蔓で出来た網が出てきて、シャーラ達を捕まえた。

《あああああっ!!?》

罨に引つ掛かったシャーラ達は焦る。

「だから言つたのに……」

「何やってんのよ！シャーラ！」

「ごめん！」

「とにかく、ナイフ！ナイフ！」

サーヤが言うどラフィはレーザーナイフを取りだし、蔓を切つた。

シャーラ達はラフィが切つた直後に落ちた。

「イテツ！」

「ふにゅっ！」

「ギャツ！」

「キャツ！」

「いつっ！」

「大丈夫？」

すると、シャーラ達の周りから、弓を構えた兵士達が現れた。

《っ!?!》

さらに、上空からハチドリに乗つて現れた騎士達も刀と槍と弓を構えた。

「あく……もしかして、この人達がリーフマン？」

シャーラ達は手を挙げて、降参した。そしてシャーラ達はリーフマン達に捕まり、何処か知らない場所に連れられた。周りには様々な植物や花をモチーフにした妖精達が集まっており、シャーラ達を見ていた。

「にしては、飛んでもない歓迎だなあ……」

「どうしよう……僕達」

「こうなつたのも、シャーラ……あんたのせいだからね！」

「私!?!」

「あく……お話の途中だが失礼……あれ」

《?》

見えてきたそれは水であり、水中にたくさん見たことのない肉食魚が口を開けていた。

「嘘……嘘！嘘！嘘！嘘！嘘！嘘っ!!私達処刑されるの!?!嫌だ！」

嫌だ！嫌だ！嫌だ！嫌だあゝゝゝ！！

「落ち着いてサーヤ！」

「だって！だって！だって！だって！うわゝゝん！私まだ彼氏出来てないし！恋もしてない！結婚もしてない！子供もない！幸せな生活を送っていないのにゝゝ！」

「無茶苦茶……言うねえ」

「嫌だゝ！まだ死にたくないよゝゝ！」

そして処刑人が刀でシャーラを吊るしていた縄を切った。

「うわーっ！！」

サーヤは悲鳴をあげた直後、誰かに捕まれた。

《っ!?!》

「……っ！」「……」

「……え？」

サーヤ達は振り返ると、サーヤの足を掴んだ陽弥がいた。

「間に合って良かった！お前ら！俺の生徒に手を出しやがって！！」

「……先生！／＼陽兄い！／＼陽兄いさん！／＼兄貴！」「……」

すると陽弥達の周りから衛兵が集まる。

「ヴィクトルー、翻訳システムを」

『了解』

ヴィクトルーは翻訳システムを起動すると、陽弥は大声で言う。

「お前ら！聞け！俺の名は陽弥！陽弥・ギデオーン！ミッドガンドの護星神だ！訳あってこの世界に参った！指導者よ！姿を現せ！」

すると扉が開き、現れたのは、睡蓮の花のようなドレスを着ておる金髪の美少女であった。

「お前か？」

「そうです。私はこの聖緑の地の女王 クイーン・リリーと申します。」

「(リリー…… 睡蓮の花の名前を使っているのか)」

「貴方達は、異界より襲来してきた”魔蟲人”の仲間ですか？」

”魔蟲人”……？。」

「アヤツ等は空から我々の世界より現れ、小さくなって襲ってきた。」



奴等は慈悲がなく、我等の国を穢れた業火によって焼き付くされた……そして結界が張られているこの聖緑の地で我等は身を隠している……」

「……………何で戦わんのだ？」

「お主も見たじやろ…………… 奴等の武器を…………… 火を噴く大砲と弓矢、剣を……………」

「火を噴く武器…………… (光学兵器の事か……………)」

「お主が神なら頼みがある……………」

するとリリーは頭を下げ、頼み事を言う。

「どうか…………… この森を護ってほしい……………！」

するとリーフマン達や民も女王に続くように、頭を下げ、さらに土下座もした。その光景にシャーラ達は茫然し、陽弥は言う。

「…………… 良いだろう。但し、条件がある……………」

リリーは頭を上げ、陽弥の頼み事を聞く。

「お前達リーフマンと…………… ダークリーフマンと…………… 手を組め……………」

「っ!？」

「教えてやろう…………… お前達が何故、奴等を怖がっているのかを…………… それは”力を合わせなかったからだ”…………… 前の敵だろうと関係ない、とにかく!二種族が手を取り合えば、どんな強敵や山!津波!強風も乗り越えられる!護星神である俺が言う!…………… 森の為に立ち上がるうじやないか!ダークリーフマンと共に手を取り合おうじやないか!奴等に目に物を見せようじやないか!戦おう!俺達の意味で!不可能を可能にする!生きるために!コレクターが何だ!ぶっ飛ばして、追いついて、未来へ生きるために!立ち上がれ!!」

陽弥の言葉に、兵士や民達が言う。

「…………… やる!やってやる!」

「俺もだ!」

「俺も!」

「私も!」

「おいちもー」

「やってやる！俺達のことを思いっきり奴等にぶつけるんぜ!!」

そのやる気に、リリーは驚き、陽弥に言う。

「…………… わかりました。貴方の言う通り…………… 私達リーフマンは……………」

リリーとリーフマン達は敬礼する。

「貴方に忠義を尽くします」

リリーはまた頭を下げると、陽弥が言う。

「顔を上げよ。クイーン・リリーよ…………… 俺は貴方達を信じている。二種族が共に解り会えることを……………」

陽弥はリリーに事情を話、シャーラ達を置いて何処かへと向かった。

その頃、プロセアンの兵隊達が粒子ライフルを構えて、前進していると、

「動きがある…………… 全員止まれ！何か来る……………」  
「……………」

辺りが静けさがました直後、茂みの中からオレンジに光るレーザービームが飛んできて、プロセアン兵士の胴体を貫通した。そして茂みの中から現れたのはプロセアンに似た種族“コレクター”がビームガンとビームアサルトライフルを乱射してきた。

「コレクター!!」

プロセアン兵士も応戦するが、敵の数に圧倒されていた。

「全員！撤退！撤退！」

プロセアンの隊長が負傷した兵士を連れ、撤退しようとした直後、コレクターの兵士が撃ったレーザービームが真っ先に隊長に目掛けて飛んできた。

「っ!？」

その直後、隊長の前に光の柱が現れ、それと同時に飛んできたレーザービームが蒸発した。そして光の柱から現れたのはパルスライフ

ルを持った陽弥であった。

「間に合って良かった……」

「お前は!？」

「ミッドガンドの護星神…… 陽弥・ギデオンド」

陽弥はペトルサイト粒子のパルスバレットを乱射し、コレクターがペトルサイトにより体ごと破裂した。

「失せろ!ゴキブリ共が!!…… シグムディア!」

陽弥はシグムディアを呼んだ。そして陽弥の前にシグムディアが現れ、ハイパーノバビームライフルを撃ち、コレクターを追い払った。コレクターがいなくなったことを確認した陽弥はプロセアンの隊長に安否を確認する。

「大丈夫か?」

「ありがとう…… 我はウイジルだ。訳あってプロセアン帝国から抜け出した流浪の民の3番隊長だ……」

「流浪の民?…… 抜け出したのか?」

「イエスであり、ノーでもある。我々はプロセアン帝国の掟を破った。」

「掟を破った?」

「…… 他種族に加戦したからだ…… 我等プロセアンには必ず掟がある。それを破った我々は帝国から追放された……」

「…… 良いじゃないか、それで」

「何?」

「だって、他の種族を助けたんだろ? 良いじゃないかそれで…… 掟がなんだって? そんなのただの呪いにしか見えんわ!」

「……」

「まあいい…… お前達の艦隊は?」

「…… !? あ、はい…… 軌道上で待機しております。」

「案内させろ…… オーバー・ザ・ワールドプライムスの発着を許可させる。」

陽弥が呼ぶと、巨大な戦艦が現れ、ウイジルや兵士達は驚く。

「つ!!デカイツ!!」

「準備しろ……………」

「分かりました……………！」

ウィジルは総旗艦にいる総司令官ウエルビスにほうこくした。

その頃、シャーラ達はリーフマン達に案内され、宿屋のそれぞれの部屋にいた。その部屋にアレンとラファイが話し合っていた。

「先生は今、何してるんだ？」

「何だか、プロセアンの人達の艦隊をオーバー・ザ・ワールドプライムスへ移住しているらしいよ」

「ふくん……………」

するとアレンは突然のあることを言い始めた

「これからどうなるんだろう」

「何が？」

「何がって…リーフマンやダークリーフマン、プロセアン達と一緒にコレクターと戦うし、俺達にとっては初の実戦でもあるやん？」

「確かに……………陽兄さんの考えは俺達でも分からないことばかりだから……………悪い考えか良い考えか……………迷うんだ。」

「もしかしたら、俺達とリーフマン、プロセアンは先生の運命に従っていると思うんだ……………」

「何でそう思うん？」

「だって、あの絵本に書かれている26人の使徒って……………完璧に俺達の事だろ？」

「……………確かに」

「……………俺は思うんだ。あの本の最後には……………何か書かれていると、」

「……………調べて見る？」

「だと、良いんですが……………」

ラファイは無駄なことを言うと、

「お前達……」

「先生!」

突然、アレンとラファイの前に陽弥が現れてきた。

「あの!先生!これには……!」

「聞いていたぞ、全部……」

「……」

「……あの絵本……見せてやる。」

すると陽弥は絵本を取りだし、アレンとラファイに見せた。

「っ!!」

「但し、彼奴等とプロセアン、リーフマン、ダークリーフマンには絶対に知られるな……」

陽弥の言葉と絵本の描かれている内容に驚愕した。

「っ!!」

「嘘……だろ……!」

「もし、この絵本の通りなら……」もうすぐその現実が起こる

”……!」

ラファイの言葉に陽弥は首を縦に振った。

## 第54話：黒き民族達

その頃、シュバルツア達は洞穴で一休みしていた。

「先が長くなりそうね」

「ああ、」

すると茂みの中から、シュバルツアを追って、アスカとユースケが現れてきた。

「よう！」

「アスカ！ユースケ！」

「お前達もダークリーフマン達を？」

シュバルツアはアスカとユースケに問うと、二人は返答した。

「ああ、先生とシャーラから連絡があつてな、リーフマン達の隠れ家を見つけたって」

「よかつた。後はダークリーフマンの隠れ家だ！…… たぶん探している残りの皆も、シュバルツアのビーコンを頼りに来るだろう。」

それからエミリー、リカとユミ、トレーネルとシエリア、アスベルとミカ、ダステイとララ、シエリー、ライト、フレッドが団体でシュバルツアの所に来た。

「良し！皆集まったな？」

「シャーラ達は？」

「シャーラ達はリーフマン達の隠れ家にある宿屋で疲れを癒しているらしい。先生も女王と対面して話をしてきたと、俺たちもダークリーフマンの隠れ家を見つけたら、師匠（ブラム）が話を付けてくるって……」

すると洞窟内に入ったダステイが皆を呼ぶ。

「皆〜！」

「どうしたダステイ？」

「この洞窟、まだ先があるぞ！」

《え？》

シュバルツア達は荷物をまとめて、洞窟の中へ足を踏み入れた。天

井から水が滴り落ち、壁から出てきている紫の水晶が洞窟内を照らしていた。

「紫の水晶だ……」

「それはアメジストって言う水晶だよ」

「綺麗……」

奥へ進んでいくと、目の前に壁が見えてきた。

「あれ？行き止まりだ」

「何だよ、ダステイ……先ないじゃないかあ！」

「ごめん」

「とにかく、早くダークリーフマン達の隠れ家を探そう」

シユバルツアは外へ引き返そうとした直後、トレーネルの足元から何か“ポチツ”と音がなった。

「？」

「あー……トレーネル……あんた今……何か踏んだ？」

「……」

「何か”ポチツ”と……」

トレーネルは足元を見てみると、何かが凹んでいた。

「皆……ごめん」

トレーネルが謝った瞬間、シユバルツア達の足元が割れ、真っ逆さまに落ち、さらにスライダーのような通路を滑り落ちていった。

《うわああああ……っ!?!》

そして出口から光が見え、シユバルツア達は山積みになってた。そして皆はトレーネルを睨む。

「何やってんだよ！」

「ごめん！まさか落とし穴があるなんて思わなかったから！」

するとフレッドが目の前の光景を教える。

「……あゝ、皆……前方からお客さんつすよ……」

《え……!?!》

黒い鎧を身に纏った兵士と土竜に乗った騎士が現れ、シユバルツア達を囲み、槍を突き付けてきた。

「これが……ダークリーフマン達？」

「ヤバイ状況だよ……………これ」

「戦う?」

「嫌、ダメだ……………迂闊に彼らを刺激しちゃダメだって……………先生や師匠にも言われた……………」

絶対のピンチになったその時、

「下がれ!下がるのだ!」

突然の大声に兵士達が武器を終い、下がり始めた。

「何だ!?!」

「急に……………兵達が……………」

すると、兵士達が整列し、向こうから黒いマントを着た貴族のようなダークリーフマンが現れた。

「あれが……………ダークリーフマン達の当主か……………」

するとダークリーフマンの王はシュバルツアに問いかける。

「何奴だ?」

「……………先に、あんたの方が言うだろ?」

「ちよつとシュバルツア!あんたねえ!」

「おつと、これは失敬……………我はバカルルデイ・キング。我はこの地

脈の聖地の長でもある。」

「……………俺はシュバルツア……………訳あってこの世界にやって来た。

神様に支える26人の使徒達だ……………」

「使徒だと?……………魔蟲人”の仲間ではないのか?」

”魔蟲人”の仲間?……………それって、こいつのことか?」

ヒロキが背負っていたコレクターの死体を取り出すと、ダークリーフマンの兵士達が怯える。

《っ!!》

「大丈夫、こいつは死体だ。」

「そんな筈がない!こいつらは我々の武器が通用しなかったのだぞ!!」

兵士の言葉にシュバルツア達は驚愕した。

《え……………!?!》

「……………(通用しなかった?と言うことは……………(まさかっ!?!)」



その直後、コレクターの死体が光だし、生き返り天井に這いつくばった。

「皆！殺るぞー！」

《応！》

シュバルツア達はカーニフェクスハンドキャノンを取りだし、コレクターに目掛けて、撃ち始めた。しかしコレクターの動きがとても早く、狙いが定められなかった。

「待てっ……………！」

シュバルツアが前に出た瞬間、コレクターがシュバルツアに飛び掛かり、鋭い爪でシュバルツアを刺し殺そうとした。

「クッー！」

コレクターがシュバルツアに爪を突き刺そうとした瞬間、赤黒い炎がシュバルツアの頭の上に現れ、炎の中から禍々しい手が出てきて、コレクターの首を掴んだ。

「つたく……………こんな奴に押し負けていると……………死ぬぞー」

炎が消え、現れたのはブラムであった。

「師匠！」

《ブラム先生！》

ブラムは掴んだコレクターをそのまま握り潰した。コレクターが死ぬと、ブラムはバカラルデイ・キングに挨拶する。

「始めまして、ダークリーフマンの方々……………我はブラム……………獄閻の皇神帝ブラム・ギデオンと申します……………」

「獄閻の皇神帝……………!?!」

「早速ですが、キング。我から頼み事がございましたね……………」

陽弥は槍を構えている兵士を見て、要件を話した。

「我らは……………コレクターを倒すために……………リーフマンと……………お前達ダークリーフマンの合同軍を結成するのだ……………」

「なっ!?!お主……………何をっ!?!」

「何をつて?……………我はお前達のために言ったのですよ。お前達の民族はコレクターに滅ぼされようとしているのではないか……………だが、我の片割れが、リーフマンと接触し、彼ら突き

動かした。今のリーフマン達は本気で戦う覚悟も決めている。お前  
らもやる気出せば?」

「……………」

「まあ、時間はまだ余裕がある。お前達の決断力…………… 見ているか  
らな…………… それから、この子等に暖かい部屋と暖かい食事を……………  
それじゃあ♪」

ブラムはそう言って、消えた。

バカラルディ・キングはシュバルツア達を直々に客室へ案内してい  
た

「先程は失礼なことをした」

「いいえ、俺たちも思っていますでした。まさかコレクターが死ん  
だフリをしていたなんて……………」

「…………… 君達は本当に恐れ知らずだな」

「え?」

「我々ダークリーフマン達は…………… 夜にならなければ行動できな  
い…………… 況してや君らが言うコレクターと言う魔蟲人が現れ、我が  
妻ヴァイオレットは殺され…………… その悲劇に我が娘ヴァイオラ  
は……………」

「…………… 娘さんがいるのですか?」

「ああ、部屋で引きこもっている……………」

するとシュバルツアが王に言う。

「…………… その、ヴァイオラって言う姫様に会えませんか?」

「ええ、是非ともお願いします。」

シュバルツア達はヴァイオラと言う姫のいる部屋に案内された。

「ヴァイオラ…………… 私だ」

「近寄らないでっ!」

「……………」

「あんなに言うなんて、よっぽどショックが大きかったんだね」

「無理もない。私が守ってやる筈だった。結果、この様だ……………」

バカラルデイ王は悲しい表情になると、シュバルツアは決意する。  
「……バカラルデイ王……ここは俺とヴィオラだけに任せてくれませんか？」

「シュバルツア？」

バカラルデイ王はシュバルツアの瞳を見て、言う。

「……分かった。ヴィオラお前に会いたい人物がいるそうだ。ドアを開けてくれ……」

シュバルツアがドアをノックすると、そおくとドアが開いた。すると隙間からヴィオラの目が現れ、シュバルツアの顔を見た。

「何……？」

するとヴィオラの頬が赤くなり、ドアを全開し、シュバルツアだけを強引に引きずり入れた。

「うわっ!!」

引きずり込まれたシュバルツアは驚き、ヴィオラは直ぐにドアを閉め、さらに鍵をかけた。

「えっ!？」

「早っ!？」

「一瞬でシュバルツアが消えた!」

「おーい!シュバルツア〜!」

ローゼ達がシュバルツアを呼んでいた。そしてシュバルツアの方は……黒髪のロングヘアーで装飾や冠、紫のドレスを着た少女ヴィオラがシュバルツアに挨拶する。

「いらっしやい♪え〜つとあなた様のお名前は？」

「シュバルツア……です。」

「じゃあ、シュバルツア君……私とあなた様……二人だけで話しましょう♪」

ヴィオラはウキウキな表情になった直後、ドアから皆の騒ぎ声が聞こえてきた。

「うるっせえ〜!ちや〜ちやうるさいっ!糞共がっ!」

ヴィオラが怒鳴り、皆を黙らせた。

「ヒイツ!!」

シュバルツアはヴィオラの怒鳴りに不安を持った。

「ごめんね、お父様やあなた様のお仲間がうるさくて……♪」

「……は……はい（ガタガタ……ブルブル）」

シュバルツアは震えながら、ヴィオラの話し相手になった。

その頃、ヴィオラの外では、

「一瞬だけだったけど、あのお姫様の顔を見たぞ。そしたらシュバルツアの顔を見て顔が赤くなったんだ。」

「……要するに、あのヴィオラって言うお姫様……」

「まさか……」

《二目惚れ……!!?》

ローゼや皆は心の中で思った。

そして話し相手になったシュバルツアは陽弥の事やブラム、住んでいた世界や陽弥の世界の事を教えていた。それを興味津々に聞くヴィオラはシュバルツアに見とれていた。

「それで？」

「それから、先生……嫌、正確に言ったら俺等の義兄であり、ブラムは……もう一人の陽弥義兄さんで俺に黒魔術を教えてくれた師匠なんだ……どうだ？」

「……要するに、シュバルツア君は元々の姿は大きいと？」

「そう、訳あって小さくなり、いま義兄さんの最終試験を行っているんだ。」

「最終試験？」

「実戦だよ……それより、話に戻るぞ。何でお父さんを嫌っているんだ？」

「……」

「……………何か訳でもあるのか？お父さん言っていたぞ……………お母さんが目の前で殺されたって……………」

「お父様は子供の頃約束したのです。お前とお母さんは必ず守ってやるって……………なのに……………なのに……………破った……………！」

ヴィオラは拳を握りしめるついでに歯を食い縛った。その姿にシユバルツアは言う。

「……………分かるよ……………その気持ち」

「え？」

「俺は……………嫌、俺達は自分のお父さんとお母さんの顔を知らないまま生きているんだ……………覚えていと言ったら、軍事施設で実験をされていたことだ……………そこにクラウスさんと陽弥義兄さんが現れて、クラウスさんは死んじやったけど、陽弥義兄さんは俺等にとってたった一人の家族なんだ。最低な事だけど、俺にとってヴィオラの方が一番ましだ。しっかりとしたお父さんを持っているのが……………きっと天国にいるお母さんは娘であるお前に生きてほしいと思っっている。」

シユバルツアの言葉にヴィオラは泣き出した。

「泣くなよ……………」

シユバルツアはヴィオラの目から溢れ出ている涙を手で拭き取った。

「女に涙は似合わない……………まあ、これは……………師匠の受け売りなんだが……………」

シユバルツアがニッコリ笑った瞬間、息なりヴィオラがシユバルツアにキスを仕掛けてきた。

「っ!!？」

突然の事にシユバルツアは慌てた。するとヴィオラはキスを止め、顔を赤くして、シユバルツアに言う。

「ありがとう……………私の未来の旦那様♪」

「未来の……………旦那様……………」

シユバルツアは今もヴィオラの唇の感触が残っていると、自分の唇に触れた。

その頃、陽弥はプロセアンの民達をウラノスプライムスの居住区に  
来ていた。そこはオメガプライムスと違って、森や湖があり、さらに  
雪山が存在していた。

「どうだ？お前達の新しい故郷だ。」

「確かによい場所だ…… 空気が新鮮…… そして壮大で穏やか  
だ…… 我々プロセアンの故郷プロセアン星と同じだ……」

「気に入って貰えて感謝します。このウラヌスプライムスの待機濃度  
をプロセアンの環境に設定致しましたので。」

「…… 良し、我々流浪の逆徒の民は…… ここに新しき帝国を建国  
する…… その為に」

するとウエルビスやプロセアンの民達が陽弥に膝をつき始めだし、  
陽弥に言う。

「我々プロセアンは…… あなたの支柱に…… なる……！」

その光景に陽弥は驚き、語り始める。

「顔を上げよ…… プロセアンの民よ」

「未来…… 俺の世界は強大な邪神国家の危機に迫られてい  
る…… そこには、最後のプロセアン人も戦っている……」

「最後のプロセアン!？」

「そう…… お前達の種族は…… 未来、絶滅種族に認定されたの  
だ…… 種族繁栄のため、君達が必要だ…… それと、邪神国家

に立ち向かうため、共に戦う者達を探している。それが俺の目的  
だ……」

すると今度は陽弥がプロセアン達の前で土下座をして、頼み出た。

「だから、頼む……！多数の犠牲が出るかもしれない…… この  
通り！俺に力を…… あんた達の過去のテクノロジーと俺の未来の  
テクノロジーで共に戦う者達！仲間達！絆を持つも者達……」

緒に探してくれ!!頼む!」

「……分かった……我々プロセアンはあなたの支柱でもある。」  
ウエルビスが陽弥に手を差し伸べる。陽弥はウエルビスの手を掴み、握手で交わした。

「共に戦う仲間を……!」

「……ありがとう」

「その為には……国旗と国家名が必要だな」

「心配するな……もう、決まっている……」

陽弥が指をならすと、モニター画面が現れた。それに映っていたのは、何かシートで隠された物であった。

「これが……」

「そうだ……今から、俺達の国家……」

陽弥はまた指をならすと、ゲオルギードロイドがシートを剥がした。

《おおー!!》

それは左に一角馬、右に一角獣、下に紅き龍と上に白き天使が両手に戦乙女の剣を二刀流で持ち、真ん中に黒と赤で塗られた角が生えている頭蓋の両目に突き刺していた。さらに特徴的だったのは、頭蓋の後ろに黄金の果実とその周りに七つの星が並んでいた。

「国家の名は……」種族大銀河連邦船団国家「ヴァルキュリアス」だ……!」

「左に一角馬……右に一角獣……下に龍……上に天使……真ん中には二刀流の戦乙女の剣を悪魔の頭蓋の両目に刺している……これは悪を潰していると言う意味か……そして、その悪魔の後ろには……果実か?」

「ただの果実ではない……」知恵の実」だ……俺の住んでいるところには必ず林檎がある……知ってる?林檎は知恵の実のモデルにもなった……善悪の種族も関係ない……皆が手を取り合っついていける絆の連邦共和国国家だ」

「素晴らしい……そして林檎の周りに描かれてあるあの七つの星……まるで……」セブンスター」だ……!」

「セブンスター?」

「セブンスター……我々プロセアンに伝わる七つの星の事だ……七つの龍が星になり、北斗七星の図を描くのだ。」

「七つの龍……銀河七聖龍の事か!」

陽弥が銀河七聖龍の言葉を言った直後、ウエルビスが銀河七聖龍の事に驚愕した。

「え!? 銀河七聖龍の事を知っているのですか!？」

「ああ、ちょうどこの腕輪の中に太陽神龍が眠っているんだ……残りの6体は今、俺等の世界にいる」

「……知っていますか? 本当の銀河七聖龍を……」

「え? 知らない……」

「……力(太陽神龍)、知恵(月光神龍)、轟(雷光神龍)、愛(妖精神龍)、魂(双頭神龍)、勇氣(時空神龍)、絆(聖光神皇龍)……それぞれの役割が一つになりしとき、八番目の龍が現れ、真なる姿を現す……」

「銀河七聖龍の……本当の姿……太陽神龍……月光神龍……雷光神龍……妖精神龍……双頭神龍……時空神龍……聖光神皇龍……そして八番目の龍は……”超神星煌龍帝”……」

すると、陽弥の目の前の風景が急に真っ白になり、目の前に鎧を外したシグムディアの本当の姿が現れた。

「シグムディア ザ・オリジン……」

するとシグムディアが陽弥に何かテレパシーを送った

「全ての銀河七聖龍達と……全てのエレメントを一つに? そして……インフィニティソウルと星獣スペクトロブス達のも……含めて……」

陽弥の中に眠る2体の銀河七聖龍と残りの6体が現れ、シグムディアの体の中へ入っていった。

「うおおおおっ!!!」

陽弥は叫び、唱えた。

「……真!……極龍裝光!!」



8体の銀河七聖龍達やスペクトロブス、三獣王達が雄叫びを上げると、シグムディアの姿が一変した。四足で尻尾、首が長くなり、翼もあり、それはまさに全ての宇宙の力を司る龍皇の姿そのものであった。そしてその瞳は陽弥と同じ、緑と赤色であった。

「シグムディア……………嫌!……………このドラゴンが……………俺とお前の……………」

陽弥はそのドラゴンの正体を分かった直後、ドラゴンは大咆哮や威圧で、陽弥を吹き飛ばした。そしてその衝撃に陽弥は目を覚ました。

「陽弥!陽弥!」

「っ!」

「大丈夫か!」

ウエルビスやプロセアンの民達が陽弥を心配していた。

「……………あ……………うん……………大丈夫……………」

「本当にか?」

その時、要塞全内に警報が鳴り響いた。

「この警報は!」

「……………ついに来たか……………コレクターが……………」

陽弥は鞘から七聖剣抜刀し、剣を見続けた。

## 第55話：禍々しき真実

陽弥達はオーバー・ザ・ワールドプライムスを最終防衛ラインに置き、プロセアンやリーフマン、ダークリーフマンの兵士達と共に攻撃体制をしていた。すると空が黒くなり、中からコレクターやソヴリン、戦闘機、戦艦が現れた。

「来ました！コレクターです！」

「あれが……コレクターの戦艦……」

船なのか隕石なのかも分からないその戦艦は幽霊船と思わせるように見せていた。

「全員！構え！」

プロセアンが粒子ライフル、リーフマンやダークリーフマン達、シャーラやラファイ達もパラメイルに乗り込み、アサルトライフルを構えた。

「一斉射撃！開始！」

全員が一斉に武器を放ち、コレクターやソヴリン、戦闘機が撃墜されていくと、コレクターも応戦してきた。プロセアン兵が粒子ライフルで追い討ちをかけているとソヴリンがアーマーの周りにバリアを展開し、粒子ライフルを拡散、無効化していき、頭部拡散ビーム砲を放ち、次々にリーフマンやダークリーフマン、プロセアンを倒していくと、陽弥がソヴリンの前に出てコスモバイルを起動した。

「コスモバイル起動！出てこい！ジェットアラン！マリンスナイプ！ギランガー！」

コスモバイルの中から紅蓮の炎を見に纏った龍、ジェットアラン、背中に凍てつく氷の結晶を持ったワニ、雷の光輪を放出する雷寅、ギランガーが呼び出された。三体のスペクトロブスは頭部や口、光輪から炎、水、雷のレーザーを放ち、ソヴリンのバリアを含め、装甲を破壊し倒した。さらに陽弥は鞘から七星剣を抜刀し、掲げた。すると三体のスペクトロブスは七星剣に向けてレーザーを放つと、七星剣の刃に炎、水、雷が纏い、陽弥は渾身を込めて、七星剣を降り下ろした。

七星剣から炎、水、雷の波動がコレクター、ソヴリン、戦闘機、戦艦を薙ぎ倒し、モーゼのように道が開いた。

「良し！行け！お前ら！」

《はい！》

シャーラ達はパラメイルを飛翔形態へととなり、開いた道を突き進んだ。するとシャーラ達の前にソヴリンが立ち塞がった。

「シグムディア！」

陽弥がシグムディアを呼び出し、命令した。

「彼らを！」

シグムディアがプレジストアクセラールと合体すると、杖を掲げ、唱え始めた。するとリーフマンとダークリーフマン達が大きくなり、コレクターに斬りかかった。その様子をオーバー・ザ・ワールドプライムスの艦橋から見ていた艦長代理のウエルビスが驚いていた。

「なるほど、リーフマンとダークリーフマン達を体長を大きくすれば、コレクターのアーマーを破る事ができるのか……………我等も負けてはいられないな！」

ウエルビスがオペレーターに命令し、オーバー・ザ・ワールドプライムスの主砲やイオン砲を放ち、戦艦や戦闘機を撃墜していった。陽弥はシャーラ達を守るように、シグムディアの能力を発動し、分身でコレクターやソヴリンを尻ぎ払っていた。

「マスター、第二陣来ます！」

「っ!？」

すると三隻の戦艦がハイメガ粒子砲をシグムディアに向けていた。

「今度は直接戦艦で相手か……………良いだろう。目に物を見せてやる！オーバー・ザ・ワールドプライムス！」

オーバー・ザ・ワールドプライムスとドッキングしているマーズプライムスから巨大な砲口が出てきた。

「殺れ！」

するとマーズプライムスの砲口からたくさんの粒子が集まってきた。

「16年間……………マーズプライムスのデータに組み込んだ最強の兵器

を見せてやる！」

粒子が溢れ出た直後、陽弥は叫んだ。

「対ケイトス破壊兵器……………通称”ロマノフ”……………射  
てえっ!!」

「対ケイトス破壊兵器 ロマノフ”!射ちます!”」

オーバー・ザ・ワールドプライムスが言い、マーズプライムスの砲  
口から光と闇、さらに炎、水、雷、風、土の七つのエレメントエネ  
ルギーを一気に放出し、複数の戦艦や戦闘機、ソヴリンを撃墜した。す  
るとコレクター陣の奥に他の戦艦よりも大きな母艦がタワー形態と  
なって聳え立っていた。

「あれです!あれが……………魔蟲人の本拠地です!”」

ウエルビスが言うと、シグムディアは飛翔形態へとなり、シャーラ  
達に言う。

「全軍!我に続け!”」

《yes! my Master!》

シャーラ達は返事をし、陽弥に続いた。

「ギガントミサイル!!」

シグムディアのハイパーノバビームライフルのロケットラン  
チャーの砲口に取り付けられていたミサイルが発射され、コレクター  
の母艦の外壁に直撃し、中が露になった。陽弥達はその隙に母艦内に  
突入し、機体から降り、内部を歩いていった。

「何だ……………これは……………!?!」

着いた場所は貯蔵庫で壁や天井に無数のポッドが並んでいた。

「これがコレクターの船内……………」

「何て……………不気味……………」

「このポッドで捕らえた獲物をステイシス化(燃料)させていたの  
か……………くっ!”」

「見ろよ……………天井にもズラ〜つと……………」

「気味が悪いわ……………」

皆はコレクターのテクノロジーに不安を抱くと、陽弥が作戦を通達  
する。

「良し、作戦を通達する。リーダーを俺とブラムに別れて編隊を組む。シャーラ達は俺と来い、シユバルツア達はブラムと行け……！」

「でも、先生とシャーラ達じゃ戦力が……」

「心配するな……念のために」

陽弥が取り出したのは、青く発光するコスモバイルであった。

《コスモバイル!?!》

陽弥は人数分のコスモバイルをシャーラ達に渡すと説明する。

「お前達用に開発した量産型のコスモバイルだそのコスモバイルの中に入っているスペクトロブス達は俺のスペクトロブスの超体に進化する前の成体スペクトロブスが入っている……そしてブラム！」

次に取り出したのは、陽弥と違って、黒く、紫に発光するコスモバイルをブラムに投げ渡した。

「おっと!……我専用のコスモバイルか……しかし、お前のコスモバイルと違って黒いな……」

「そのコスモバイルの中にはあなたのDNAを使って生み出したそれぞれの闇の力を持った新種のスペクトロブス6体が入っている。しかも、コスモバイルからソードを展開するようにしたぜ……」

ブラムは装着すると、コスモバイルから黒い粒子がブラムの手を覆い尽くし、ガントレットになった。

「あんがとよ、陽弥」

「それじゃ、行動開始!」

《yes! my Master!》

陽弥とブラムは二手に別れ、搜索を開始した。

シャーラとサーヤはカーニフェックスハンドキャノンを構え、場所の安全を確認していた。

「クリア!」

奥へ進み、扉が開くとそこにはコレクター製の武器がズラツと並ん

でいた。

「ここは武器庫か……………」

「見てー!」

その中にシユバルツアが見つけた粒子ビームガンがあった。

「やっぱり、この粒子ビームガン…………… 同じだ」

「だが、俺はこの武器を…………… 回収する…………… データも含めて、」

「え!?!陽兄い、この武器を全部取るの!?!」

「全部は言っていない。コイツらが一体どうやってこんなテクノロジーや兵器を手にしたのか…………… それに何千億年も前に…………… どうしてコイツらが存在していたのか、どうして俺らの未来には忽然と消えたのか…………… それを調べるんだ…………… それに……………」

「それに?」

「あの絵本に描かれていた事が本当なら…………… 早くしないと」

「……………?」

陽弥達はさらに奥へ進むと、監視カメラやデータデバイスがあった。

「ここは…………… 監視室か?」

「そう見たいなだなあ……………」

陽弥はデータデバイスと監視カメラの映像をダウンロードしていた。

「それにしても、こいつらの技術は飛んでもないな…………… 白兵専用のビーム兵器や物体を燃料にしたりするなんて……………」

アレンがのんきに語っていると、陽弥は悲しい表情し、報告してきた。

「…………… ダウンロード…………… 終わった。」

「終わったのですか?…………… 兄貴?」

アレンが陽弥を心配すると、陽弥は言う。

「このデータに飛んでもない物が映っていた……………」

陽弥はダウンロードした監視カメラの映像を再生した。するとそれに映っていたのはコレクターではなく、プロセアンであった。

「これは?…………… プロセアン!?!」

「どうやら何百年も前に撮された監視カメラの映像だ……………もうすぐ始まるぞ……………」

すると艦橋エレベーターから多数のコレクターが現れ、プロセアンに襲いかかってきた。プロセアンは何とか応戦していると、不思議な事に一人のプロセアンが消えた直後、残りの三人のプロセアンが光だし、コレクターへと変わった。

《っ!!?》

そして、襲いかかってきたコレクターはコレクターになったプロセアンをタコ殴りにし、最後は一齐に粒子ビームガンで殺した。それから映像はここで途切れた。

「映像はここまでだ……………」

「兄貴……………あれはどういうことなんだ!?!」

アレンの問いに陽弥は返答した。

「見ての通り……………プロセアンが急にコレクターに変貌を遂げた……………つまり、」

「俺らが今……………相手しているコレクターの正体は……………」プロセアン”……………!?!”

”元は”っな……………だけど、何でプロセアンが突然コレクターに?……………っ!」

陽弥は考えているとあの時、デルタの言葉を思い出す。

「待てよ……………あの時デルタは……………そうか!そう言うことだったのか!」

「何が……………そう言うことだったんだ?」

「……………この船には……………間違いなく”あれ”がある……………」

陽弥は天井を見上げた。

一方、二手に別れたブラムの方は待ち伏せしていたコレクターと交戦し、コスモバイルに入っていた闇のスペクトロブスである2体。双頭の番犬、獄炎のスペクトロブス『オルトルロス』と凍てつく冷気を放つ一角馬獄氷のスペクトロブス『フロスティア』を召喚し、コレクターを焼き付くしたり、凍死させていた。ブラムはオルトルロスとフロスティアを戻し、部屋の中に入った。そこには色んな機材やリーフマンとダークリーフマン、さらにコレクターの死体が台に乗せられていた。

「ここは……研究室か？」

「ここで浚ったリーフマンとダークリーフマンを研究していたのか………ん？」

ブラムは台に乗せられているコレクターの死体を見る。

「どういうことだ!? あり得ない! 自分の同胞もか!？」

「一体どうなっているんだ………!? 何なんだよ………コレクターって………!？」

「とにかく、このデータや情報を集めるのだ………」

《はい!》

ブラムとシュバルツア達は散会し、研究室のあらゆる物を根こそぎ探っていた。

「この死体………明らかに同士討ちしていやがる………何があつたんだ………ここで………」

「師匠!」

「シュバルツア、どうした？」

「データを調べているうちに………こんなデータがありました………」

シュバルツアがコレクターのコードをアクセスし、データを見るとそこには興味深いタイトルがあった。

「導きの啓示?………何だそれは?」

「はい、どうやらアイツ等は導きの啓示って言う兵器で………何かを



しようとしたのでしよう……」

シユバルツアが導きの啓示と言うやらの情報を見ていくと、ブラムはあるものに気づいた。

「ん？……シユバルツア！さっきのに戻れ！」

「え?!」

「良いから！」

「え!?はい！」

「そんな!……あり得ない!……何故!?……何故あれが……ここに!?」

シユバルツアはブラムが見た情報を検索し、そのデータを開くと、「これですか!？」

「……間違いない……この結晶体……そうとしか思えん！」

そのデータに入っている写真を見て驚くブラムと別れた陽弥も同じことを思う。

「間違いなく……この船には……ダークマタージュエルがある!!」

ブラムが見つけたその写真は確かにダークマタージュエルだが、元の世界よりも数倍大きく、中に隕石の欠片が入っており、普通のダークマタージュエルよりも輝いていた。

「ダークマタージュエル?……何ですかそれ？」

「ダークマタージュエル……かつてクアンタ人が作り上げた万能の力の一つ……その名の通り……”暗黒物質の力を秘めた宝石”……確かドウムはその力で禍々しき姿へと変貌を遂げた……と言うことは今回の敵は……クトウルフと繋がっている！」

ブラムはさらに検索すると、ダークマタージュエルが船の最上層部にあると分かった。

「あるとしたら……必ず、この船の艦橋か指令部にある筈……！」

「お前達！ブラム達と合流するぞ！／お前ら！陽弥達と合流するぞ！」

「！」

《はい！》

陽弥とブラムは別れたチームと合流した。

「お！陽弥！」

「ブラム！」

「ひよつとして、お前も同じか？」

「え？お前も!？」

陽弥とブラムはそれぞれに得た情報を再度確認し、間違いなくここにダークマタージュエルがあると判明した。

「そうとしか考えられん……………」

「だろうな……………だが、サムの言った言葉とは違うな……………」

「確かに、爺の語った護星神の伝説とはちよつと違う……………もしかして、伝説から消された真実があるのかな？」

「行ってみなくちゃ分かん……………」

「……………最悪の日になりませんように……………」

陽弥達は艦橋に繋がるエレベーターに乗り込んだ。艦橋に着き、ドアが開くと確かに映像の通り、コレクターの死体があちらこちらに転がっていた。

「艦橋もメチャクチャだ……………っ！」

「っ！」

その直後、陽弥とブラムは艦橋の後ろの奥にある部屋から禍々しき力を感じ取った。

「今の感じたか？、ブラム……………」

「ああ、俺の髪の毛がピリピリしてやがる……………間違いない……………あの部屋から、ダークマタージュエルを感じる……………」

しかも、クトゥルフが持っているダークマタージュエルよりデカイ……………！」

「俺も感じる……………扉から禍々しい靄と黒く染まった怨霊が溢れ出てきていやがる……………!!」

その時、陽弥のコスモバイルが突然起動し、中からガルデイオラが出てくると、奥の部屋を見る。

「ガルデイオラ?」

するとガルデイオラが急に威嚇し始めた。

「……………ソイツが威嚇するほど、ヤバイって事だ……………」

「……………行こう」

陽弥は決意をし、奥の部屋へと向かうと、ブラムがシャーラ達に命令する。

「お前達は……………オーバー・ザ・ワールドプライムスに戻れ……………」

「え!?でも!」

「分かっている……………けど、いくら強くても、子供を戦わせるのは好きじゃないんだ。」

「しかし!」

シャーラ達はそう否定すると、ブラムがシャーラ達を転送呪紋を起動した。

《師匠!／先生!／兄貴!／陽兄い!／陽兄さん!》

転送呪紋でシャーラ達がオーバー・ザ・ワールドプライムスへ転送されると、陽弥はホツとしていた。

「……………良い判断したな」

「当然の事だ……………それに……………そろそろ彼らにもあの計画を伝えておけ……………」

「分かった……………」

陽弥はオーバー・ザ・ワールドプライムスにいるウエルビス達に通信する。

「お前達、そろそろリーフマンやダークリーフマン達を引き連れてオーバー・ザ・ワールドプライムスに移送せよ……………!」

陽弥は通信を切ると、ブラムがあることを問う。

「あの絵本……………ヤバイことが描かれていたんだろ?」

「ああ、結局セレスは滅びる……………けど、最後のページはラファイとアレンに見せちゃった……………」

「はあ……………まさか、こんなことになるとは……………惑星セレスの太陽が巨星化し、惑星セレスは太陽の業火に焼き付くされ、生命は朽ち果てる飲み込まれる……………お前……………この事を分かっ

て、この星の動物達を移送させたのか？」

「仕方ないだろ……あの動物達も生きる運命がある……！だから生かしたんだ……」

「そうか……」

「……そろそろ着くよ」

部屋のドアが開き、奥に巨大なダークマタージュエルがゆらゆらと浮遊していた。その横に形状が違ったコレクターがいた。

「お前がコレクターの司令か!？」

そのコレクターは人型ではなく、完全な虫で、言語で陽弥とブラムに言う。

「護星神ダナ?……ダガ、遅イ……我々ワ……サイクルヲ続ケ……進化スル……!」

コレクターの指令が狂信な事を語った直後、ダークマタージュエルから白い粒子が放出された。

「っ!!」

「まさか……!？」

「そんな……!？」

白い粒子に取り込まれたコレクターがみるみるうちに姿が変わっていく。

「我々等ワ……ダークマタージュエル……嫌、”グリゴリ”ヲ使イ……進化スル!!」

コレクターの前足が蟲人だったはずのコレクターが巨大なカマキリへととなり、巨大な羽で羽ばたき始めた。

「進化しただど!？」

『我の名は冥蟲帝！アルマロス！異次元生命体である!!』

アルマロスの頭部からダークマタージュエルが現れ、陽弥とブラムを睨んだ。陽弥とブラムはアルマロスの巨大さと気持ち悪さに我慢できなかった。

「……やっぱり逃げた方が良い思うぞ……!」

「……そうだな、」

陽弥とブラムは逃げようとした直後、アルマロスが巨大な鎌を降り



「ワープ準備！」

オーバー・ザ・ワールドプライムスが出力全開で惑星セレスから離れようとしたその時、アルマロスが惑星セレスから離れようとしているオーバー・ザ・ワールドプライムスを見て、叫んだ。

『逃がさんぞおおおつ!!』

アルマロスは巨大な鎌が伸長し、オーバー・ザ・ワールドプライムスを捕まえる。

「アイツ！オーバー・ザ・ワールドプライムスごと引きずり落とそうと  
しているのか!？」

『グオオオオオオくッ!!』

「チツ！仕方ない！シグムディア！」

陽弥は転送呪紋を使い、シグムディアに乗り込み、アルマロスの前に出た。

「ブラム！力を貸してくれ！」

「おう！」

ブラムがシグムディアに憑依し、赤黒いシグムディアへと変わった。

「シグムディア ブラム・ザ・アビス!!」

シグムディアはアルマロスに向けて、頭部粒子キャノンを放ち、それからアルマロスにキックした。

「どっせいっ!!」

『ガアアアアアアアアッ!!』

「とつとと離しやがれ！この化け物がっ!!」

陽弥はアルマロスのダークマタージュエルに拳を叩きつけるが、アルマロスは全く平気な表情をしていた。

「しようがない…………… 彼等に座標と時代と伝言だけでも送らないと  
！」

陽弥は艦橋にいるウエルビスにメッセージを送る。

「良し…これで…………… 送信！」

陽弥はメッセージを送信し終わると、サーメットブレードを展開し、アルマロスの腕を斬った。



陽弥は次元の波を航空中、下から何か影が見えた。  
「ん？」

下の方を見るが、何もなかった。その直後、下の奥の方から段々と影が見えてきた。

「何だ………?」

段々と見えてくるその影は陽弥の方へ迫っていき、そして、次元の波を貫き、現れたのはサファイアのような蒼海の色とラピスラズリのような輝きをもった海賊船が出てきた。

「うわあっ!」

海賊船は次元の波の渋きを上げ、陽弥に向けて対空高出力拡散レーザービーム砲を撃ちまくる。

「何だあれは!」

「あれは!」

「シグムディア!あのバカデカイ船の事を知っているのか!」

「あれは……… ”時空賊” だ!」

「時空賊!……… 何だそれ!」

「時空の大海原を駆け巡る無法者の異次元人の海賊だ!クアンタ人もかなり苦戦していた………」

「ふくん」

すると時空賊の船は陽弥を無視して、何処かへと向かっていった。

「アイツ等……… 何処行くんだ!」

「多分……… オーバー・ザ・ワールドプライムスだと思う……… 狙いは物質と武器だ!」

「チツ!せっかくの武器を取られるわけには困るんだよっ!」

陽弥もオーバー・ザ・ワールドプライムスに追い付くために、次元跳躍を使った



その頃、巨星化した太陽から禍々しき黒い手が現れ、紅蓮の炎の中からさらに進化したアルマロスが巨星化した太陽と融合し、太陽自体がアルマロスへと変貌を遂げた。そしてアルマロスは禍々しき目を光らせた。

「己ええええ………護星神………!!この怨み………晴らさ  
で措くべきかあああ………!!」

太陽から黒い手の他に星を手のひらにした巨大な両手、肘にした両足、尻尾、背中には無数の隕石の山が積み木のように重なっており、太陽を体としてアルマロスはずっと陽弥の名を叫び続けた。

そして時空賊の船はオーバー・ザ・ワールドプライムスの装甲を貫き、中から時空賊が出てきた。

「おうおうおう!!お前ら!何もんだあ!?!俺らの海に土足で入り込むとは!良い度胸してんじゃねえかよ!!」

「何よ!先に仕掛けてきたのはアンタ達の方じゃない!この宇宙海賊が!」

サーヤは船長らしき銀髪の男性に反発していた。

「俺らはあんなちっぽけな銀河を渡るような荒くれ者じゃねえわ!」

「何だどつ!」

両者胸ぐらを掴むと、陽弥が二人の喧嘩を見て、怒鳴った。

「お前ら!!何やってるだあああ〜!!!」

《っ!!?》

「つたく、もつとまともに交渉もすることができないのか?」

「………すみません。先生………」

「………つで、お前ら時空賊は何が狙いなんだ?物質か?武器か?

それとも?」

時空賊の船長は用件を言う。

「オリハルコン（黄銅金）だ！」

「……………は？ たったそれだけ？」

「あつたり前だ！ 俺らにとつてオリハルコンは希少なレアメタルだからな！ 後、プラチナやインジウム、パラジウム、エレメントゼロ、そして史上最大のエネルギーを持つエネルギー鉱石がある！」

「エネルギー鉱石？」

「エクサリチウム結晶って言う鉱石だ……………俺らにとつてあれは「あげようか……………？」……………何!？」

陽弥は転送呪紋で倉庫から、たんまりのエクサリウム結晶を船長の頭上に浮かせ、落とした。

「どわっ!!？」

「漂っていたから、色々回収していたんだ……………まさかこんな形で取引になるなんてな」

大量のエクサリウム結晶から船長が現れ、感心する。

「いやー、まいったまいった！ まさかこんなにたくさん貰えるなんて、アンタ達何もんなんだ？」

「……………遠い先の未来から来た解放軍だ……………」

「……………よければ、俺らの諸点に来るか？」

「良いのか？」

「こんだけの鉱石を貰ったんだ！ 礼は必ず受けて返す！ それが俺たち時空賊の流儀だ！」

「……………案内してくれ……………後、良い忘れてたけど俺の名は陽弥だ。よろしく」

「俺のはキャプテン・ザンジグだ！ よろしくな！ 陽弥！」

二人は共に握手で交わり、ザンジグに頼み案内してもらった。

「お、見えてきたぜ！ あれが俺らの諸点だ」

ザンジグの指す方向にあらゆる船やガラクタが小惑星やアステロイドが合わさった巨大な基地が見えてきた。

「あれは……………海賊船か？ にしては色んな戦艦を妙に合体しちゃってるじゃないか……………」

「まあ、そう言うな友よ。あれでも立派な海賊要塞なんだぜ！」

「……………まあ、良いや」

陽弥はそう言って、時空賊の要塞に招き入れられた。だが、この時……………恐るべき存在が来るとも、陽弥本人も知るよしもなかった……………。

## 第56話：グランドスファイア

陽弥とザンジーグは何かを話していた。陽弥は自分の世界の事や指命を話し、ザンジーグはこの時空の何処かにあると言う大秘宝”グランドスファイア”を探しているのと、

「つまり、お前らは別の宇宙の何処かにその”グランドスファイア”を探しているの？」

「そうだ、俺達はあらゆる宇宙や次元を全て探したが、何処にもなかったよ……っで、ここが最終宇宙だ。」

陽弥はグランドスファイアの事に興味が湧く。

「思ったんだけど、グランドスファイアってそんなにヤバイ秘宝なのかな？」

「秘宝と言うより、大秘宝だ。俺は見たことはないが、初代先祖が言うにはそれは物凄く大きく、何千光年もあると言うからな………確かになのは、大きすぎて何れぐらいあるか分からなくなるらしい。」

「まるで恒星移民艦だな、それと本当なのか？そのグランドスファイアって………機械生命体って？」

「ああ、確かだ。俺達の親つさんが言うんだ。」

「……… 本当にか？」

「本当だ！俺と親つさんと御先祖を信じろ！」

「……… 分かった。但し、一緒に探す条件がある。」

「言ってみろ」

「そのグランドスファイアって言う大秘宝の一部を貰っていくぞ」

「分かった。俺からも条件がある。」

「言ってみろ？」

「もし、お前らの世界で邪神軍に勝ったら………俺らはあんたらの仲間にな……… 種族大銀河連邦”ヴァルキュリアス”の傘下に入るぜ！兄弟分国家としてな！」

「約束……… 守れよ………」

「ああ！」

陽弥とザンジグは握手で契りを交わした。

陽弥はシグムディアの後部座席にザンジグを乗せ、グランドスファイアが在りそうな宇宙のコアの近くに来ていた。

「ここから、次元反応がおかしくなったのか？」

「ああ、この宇宙の核とも言える『コア』にあると分かった……だが、問題点があるんだ。」

「言ってみろ」

「核を護ろうと変な化物達が出てくるんだ」

”変な化物”？」

「今まで見たことのない化物だ……ほらッ！あれだ！」

コアから現れたのは、黒く、翼から赤いビームウイングを放出する機械龍であった。

「あれって……”ドラゴン”……か!？」

「ドラゴン？何だそれ？」

「神にも抗う空想上の化物だ……だが、このドラゴンから……感じる……分かるか？ブラム」

陽弥は胸の中にいるブラムに問い掛けた。

「ああ、俺もだ……こいつも”ダークマタージュエル”を感じる！だが……」

「だが？」

「だが、こいつの中にあるダークマタージュエルから僅かだが、光を感じるぜ……間違いないぜ！こいつはシグムディアと同じ……主を探してやがる！」

さらにコアから紫の暗黒物質の体を持つ黒い小型のドラゴン達が無数に出てきた。

「……要するにあのドラゴンや無数にいるシタツパはノヴァ見た

いで…………… 銀河七聖龍と？」

「そうだ…………… 見つけたぜ！」偽りの銀河七聖龍「を！」

ブラムは心をウキウキすると、陽弥は笑う。

「ははは…………… 偽りの銀河七聖龍か…………… よく見てみると、あのドラゴンはちよつとブラムに似ている…………… 安っぽいネーミングだが、『紅蓮龍騎神 クリムゾンドラゴン』と名乗ろうぜ！」  
「だなー！」

陽弥はクリムゾンドラゴンに近付いた直後、

『ようやく来たか……………』

クリムゾンドラゴンが突然陽弥達に話し掛けてきたことに驚いた。すると陽弥からブラムが出てきて、クリムゾンドラゴンの前に入る。

「!?」

『貴様は？名を申せ……………』

「俺の名はブラム…………… 獄閻の皇神帝ブラム・ギデオンだ！」

『ブラム・ギデオン…………… 我はアプスの命により貴様を待っていた。この…………… グランドスフィアと共に…………… ！』

するとコアが急激に光だし、中から他の星やケートスの数十倍の全長を持ったの球体型のマザー級要塞が姿を現した。

「あれが…………… グランドスフィア…………… !!？」

「デカツ！」

「こりゃ、ヤバイ戦闘資産になりそうだな…………… 見ろよ」

球体の周りに機械の衛星が9隻あり、グランドスフィアを囲っていた。

「グランドスフィアを囲っているのって…………… 馬鹿デカイデス・スターだ!?…………… しかも9隻を…………… こんな次元を超越しちゃった兵器があればもうクトウルフ率いるネオ・グリゴリア大銀河帝国なんか怖くなくなってきた……………」

「だな、」

『嫌、違う…………… クトウルフを含め、邪神達は奴の一部だ。』

クリムゾンドラゴンが突然の言葉に陽弥とブラムを首を傾げた。

「え…………… !？」

「今こそ話そう…………… 今から15億年前…………… 護星神の真実を……………」

「護星神の真実……………」

クリムゾンドラゴンは護星神の過去を語り始めた。

「かつて…………… 全ての宇宙”グランドギャラクシー”には…………… 混沌の存在カオスが存在した。だが、カオスは…………… 消えた。奴の力の大半にされた。」

「奴？」

「超次元生命体アルマロスによって……………」

「超次元生命体アルマロス!? 奴が!？」

「奴は…………… 遠い未来からやって来た存在なのだ。」

「遠い未来!？」

「未来からやって来た奴は、カオスを吸収し、巨大な存在へとなった。その危機を察知した先代護星神は一人でアルマロスに挑んだ。だが、その護星神の力でも敵わなかった。何故なら奴の力はカオスの力…………… エターナルソウルハートは元々カオスの魂…………… 魂が封印されればカオスは甦れない…………… そう思っ護星神はある決断をした……………」

「シンセシス……………」

「そう…………… 彼は禁断の融合化を使い、神と機械のハイブリッターへと変貌を遂げ、何とかアルマロスを撃退した。だがその時アルマロスは死ぬ直前自らの一部を残した……………」

「それが…………… クトウルフ……………」

「アルマロスの一部であるクトウルフはアルマロスとの戦闘で傷付いた護星神に追い討ちをかけようとした……………」

「そこからは爺に聞いた…………… 護星神はクトウルフを倒すために自分の力を解放してクトウルフ達を封印したんだろ？」

「…………… その通りだ。だが決して忘れるな……………」 真なる影法師は目の前にいる。ソイツは必ず隙を狙っている……………」

「え？」

「この意味が…………… 分かるか？」

陽弥は考えるが、思い付かなかった。

「う〜ん…………… やっぱり分かんない」

陽弥がそう言うと、クリムゾンドラゴンはブラムの体の中に入り、胸に陽弥と同じ赤い宝石が付いているジオへと変わった。

「陽弥と同じだ……………」

陽弥はグラランドスフィアから何かを感じた。

「それにあのグラランドスフィアには俺にとって、特別な修練場が在るらしい…………… 俺はそこで己の限界を超えようと思う。瞑想だけで……………」

陽弥は早速グラランドスフィアを起動した。要塞内はとてつもなく広く、居住区や商業区、工業区、さらに森や海もあって時空族とリーフマンやダークリーフマンの居住地になった。さらにグラランドスフィアには他の種族がおり犬座に存在する種族”アヌビス人”と鏡の世界に住む”異次元の民”、宇宙を放浪し、錬金術に得意とした宇宙魔族、グラランドスフィアに住むパラメイル並の体長を持った機械生命体”星機兵”がいた。陽弥はそこで宇宙魔族の錬金術とアヌビスの瞑想で集中力、判断力を鍛え、さらにプロセアンの技術でシグムディアを改造し、プロセアンの心読みとプロセアン流のバイオテクスを得た。勿論ブラムやシャーラ達も共に…………… そして陽弥は自分の愛馬を見つけた。それは空想上の幻獣”ユニコーン”であり、普通の馬よりも大きかった。陽弥はそのユニコーンに名前をユニゴルディアンと名付けた。(体長2.5m、体重1470kg)ブラムも自分の騎乗できる獣を見つけた。”ティアマト”と言う魔獣であり、名前をザガンと名付けた。

二ヶ月後、陽弥は新しい鎧を着用していた。和の甲冑と洋の甲冑、



陽弥のアーマーを組み合わせ、表裏紅白のマントを靡かせており、マントにヴァルクリアスの国旗が描かれていた。手元には一角が付いたヘルメットを持つていた。

「役者は揃った様だな……………」

ブラムも陽弥と同じアーマーをしており、手元に2本の角を付けた兜と鬼が牙を牙を向けた面頬を付けていた。

「うん……………」

「髭…………… 剃ったんだ」

ブラムは陽弥の顎に生えていた髭が剃られていたことに気づく。

「恥ずかしいからな……………」

「早く演説しろ…………… 皆お前の指示を待っている。」

「分かった。」

陽弥は外に出ると、鎧や武器を持った数億人の兵や平民が待っていた。陽弥は緊張を和らげ、演説した。

「我が民よ…………… ヴァルクリアスの兄弟、姉妹達よ…………… 真なる決戦の時は来た…………… ！。我等、異次元の民、プロセアン、星機兵、妖精族、時空賊、アヌビス人、宇宙魔女族、暗黒龍達はこれよりクトウルフ率いるネオ・グリゴリア大銀河帝国を打ち破るためにホライゾンへ進攻する！ここまで来れたのも全て皆のお陰だ！だからこれからの決戦もさらにとてつもない戦争になる。もう少しだけ俺に皆の力を貸してくれ！我等、種族大銀河連邦ヴァルクリアスに宵闇の男神アプスと曙光の女神ニケの加護と祝福を！今こそ！皆の力を一つに！」

陽弥は鞘から七星剣を抜刀し、上空に掲げると、兵隊達も剣や槍、メイス、銃剣、オムニブレード、さらにセイクリッドメール、パラメイル、インゼクテイアメール、も手を掲げた。

《一つにつ！！》

「作戦名『トゥルーストリベルタス』！！目的は…………… 影法師を引きずり下ろさせることだ！全軍！出撃だ！」

陽弥の命令に、ヴァルクリアス兵士達は掛け声と共に陽弥に向かって、信念のある敬礼をした。

《yes! we fuhrer!!》(了解!我等の総統!!)

陽弥はグランドスファイアの時間跳躍システムを起動し、元の時代へ戻った。しかし、陽弥が見た光景は……

「何だ……これ……!?!」

美しかったホライゾンが何もなかったかのように荒れ果て、大破した機体の残骸や廃墟化したヴァルヴァートル帝国であった。

「皆は?……ホライゾンの人達は?」

「……もしかしたら……あのエスメラルダさん……

これを分かって……」

陽弥は地面に膝を付き、悲しい表情をするとブラムが言う。

「陽弥……予定変更だ。さっきの時代へ戻ってワールドスリープするぞ」

「え!?!何を?」

「多分……エスメラルダはこれを分かって俺達を過去に送ったのかもしれない……だからグランドスファイアはステルスモードで姿を消しておこう。そしてネオ・グリゴリア大銀河帝国が来たら……俺達は再びこの地に舞い戻ろう……」

陽弥達はグランドスファイアに戻り、時間跳躍を使い、文明が発達する前のホライゾンのある太陽系にワープし、兵士や民達は直ぐ様ワールドスリープへと入る。

「ヴィクトール……」

「何でしょうか?マスター」

「念のために、ホライゾンに俺らのビーコンと石碑とデータをポッドに送っておいてくれ…… IDコードは『解放』……」

「かしこまりました。」

ヴィクトルーはホライゾンに向けて、ポッドを射出した。それから1000年後、皆がゴールドスリープで人工冬眠中、カプセルが開き、中に寝ていた陽弥が目を覚ます。

「すまん…………… ブラム…………… 俺は待ってられないんだ。」

陽弥は冷めないようシャワーを浴び、アーマーを着用し、シグムディアの所へ向かうと、カプセルの中で寝ているブラムに言う。

「俺には…………… もう一つの役目があるんだ……………」

陽弥はブラムの寝ているカプセルの横に置き手紙を置いた。

陽弥はシグムディアに乗り込み、次元跳躍を使い、アルマロスを探していた。その間に、陽弥は何やらメツセージを残し、それを終わると、シグムディアに話し掛ける。

「シグムディア……………」

「何だ？」

「…………… ありがとう。ここまで付き合ってくれて……………」

「良いのだ。我はお前の僕だ…………… 死ぬときも一緒だ。」

「フフ…………… 死ぬときも一緒か……………」

シグムディアが笑うと、後方から3つの光が追い掛けてきた。3つの光の正体はなんと、カイオウとシンオウとエンオウであった。陽弥は驚き、三体へ怒鳴る。

「カイオウ…………… シンオウ…………… エンオウ…………… !?お前達！何やってるんだ！早くグランドスフィアで眠れ！これは俺の問題だ！奴は普通の次元と呼べるものじゃねえ！超次元生命体なんだぞ！」

するとカイオウ、シンオウ、エンオウが言う。

「そうはいかん…………… 我々、三獣王はあなたと契約した古のスペクトロブス。シグムディアの言葉通り、我々も死ぬときはあなたと一緒にす！」

「そうです。私達にはあなたに借りがあります…………… だから、私達も付いていきます。」

「主は何時だつて一人で生徒や仲間を集めてきました。そして今も、背負った運命もまた一人で……だから決意しました。一人より皆で殺れば……アルマロスに勝てます!」

三獣王達の決意に、陽弥は呆れ、泣き崩れる。

「クッ!……お前等……分かった……分かったよ!

!三獣王は俺のシグムディアに新たな力を与えてやってくれ!」

「Yes! my Master!」

三獣王は陽弥の命令に従い、次元を越えた。

「シグムディア……お前の力を解放する……モードチェンジ

!……シグムディア ザ・オリジン!」

シグムディアの体中に装備されていたアーマーが強制的に外され、

本来のシグムディアへとなった。

「来ました!アルマロスです!」

シンオウの目先に、惑星セレスを照らし、巨星化した太陽を取り込

んだアルマロスが現れてきた。

「ッ!」

三獣王達はその大きさや気迫に押されるが、陽弥は七星剣とグラム

を抜刀し、叫んだ。

「アルマロスウウウウツ!!」

「1000年ぶりだなあああ!!護星神タイタニス!!!」

アルマロスは巨大な口を開け、雄叫びを上げ、陽弥に襲い掛かった。

アルマロスの体から流星群と拡散レーザーを放つ。陽弥はシグム

ディアの出力を最大に上げ、回避する。

「カイオウ!シンオウ!エンオウ!」

三獣王達はそれぞれに別れ、アルマロスの部位を破壊していく。カイオウは口から光輝く水圧のレーザーを放ち、シンオウはたくさんの角から光の球体を生み出すと、球体からビームが放たれる。エンオウは自身の紅蓮の羽を撒き散らすと、羽がビームの刃を持ったフェザービットへと変り、突撃する。陽弥はシグムディアのハイパーノバビームライフルで撃ち続け、グラムで切り裂いていくと、陽弥はカイオウを呼ぶ。

「カイオウ！」

するとカイオウが陽弥の元へ向かい、シグムディアと融合した。

「海よ……今こそ我に力を！」

するとシグムディアの頭部や肘、背中、から青白い鱗が出てきた。さらに尻尾も生え、尾びれへと変わった。手元にはカイオウの力が宿った三又槍を持って、アルマロスを睨んだ。

「シグムディア ザ・リヴァイサン！」

陽弥はそう言うと、三又槍を上に掲げ、叫んだ。

「ビツクバンウエーブ！」

すると陽弥の後方に光の球体が現れ、大爆発を起こした。後方の彼方から大爆発により、次元の波動が津波となり、アルマロスを飲み込んだ。しかし、アルマロスは次元の津波を受けても、歯応えがなかった。陽弥は仕打ちをし、カイオウとの融合を解除し、次に移った。

「シンオウ！」

シンオウが雄叫びを上げ、陽弥と融合した。

「森よ……今こそ我に力を！」

シグムディアの頭部にシンオウと同じく何本もある角が生えており、山羊と羊のような瞳、足が槌爪になっていた。

「シグムディア ザ・ケリユネイア……！」

陽弥が叫び、シグムディアの目が光るとアルマロスの体から木々や植物が生えてきた。

「ッ!!？」

アルマロスの太陽で燃えようとも、木々と植物は無限に生えていき、太陽の炎も関係なく、アルマロスの身動きを止める。するとアルマロスが怒り出した。

「クソオオツ！化物がつ！調子に乗りやがつて！」

アルマロスは口から獄炎を吐き、体中に生えている木々や植物を全て燃やし尽くし、獄炎を陽弥に向けた。

「グッ！」

陽弥はすぐに防御体制を取り、シンオウとの融合を解除した。

「エンオウ！」

次にエンオウが炎の翼を羽ばたかせながら、陽弥と融合した。

「炎よ……今こそ我に力を！」

シグムディアの背部からエンオウと同じ炎の翼が4枚生え、さらに孔雀のように羽を広げた。

「シグムディア ザ・フェニックス！」

陽弥は羽から羽を撒き散らし、大型、小型を含め264機のフェザービットを展開し、アルマロスに攻撃を集中する。

「小賢しい事を！」

アルマロスは怒り出すと、自身の体から闇の波動が放たれ、シグムディアとエンオウが離れ、強制解除された。

「っ!!？」

さらに陽弥や三獣王達も身動きが取れなくなり、アルマロスは動けなくなった三獣王に手を翳す。

「混沌よ……三獣王を石に変えよ！」

アルマロスの手から赤黒い光線が放たれ、三獣王達は赤黒い光線を浴び、石になっていく。

「主よ……逃げて……！」

「カイオウ！シンオウ！エンオウ！」

するとカイオウが最後の力を使い、口から水圧のレーザーを放った直後に石へと変わり、放った水圧のレーザーがアルマロスの左目に傷を付けた。

「ッ!？」

アルマロスはその痛みにも耐えることもなく、左目を押さえ付ける。

「お前達の……思い……無駄にはしない！」

陽弥は決意し、呪紋を唱え始める。するとシグムディアの周りからアルマロスを多い囲む程の光の紋章が浮かび上がってきた。

「はあああああつ!!……イサリ！ ザリス！ イエザラフ！」

イファリス！ ザファリス！ イエザラス！我が元に来たれ、時空を駆け巡りし聖なる一角馬よ！ユニゴルディアン！」

すると紋章から純白の装甲と黄金の装飾、そしてエメラルドのような瞳と一角を持った一角聖馬ユニゴルディアンが陽弥の前に現れ、陽

弥はユニゴルディアンに乗った。

「今こそ！………有機生命体と機械生命体を………一つにつ！」  
シグムディアとユニゴルディアンが強く光始め、アルマロスは2体の放つ光に押されていた。

「何だッ!?この光は!?」

光の中、ユニゴルディアンがシグムディアの周りを駆け巡ると、バラバラになり、シグムディアの鎧として装着されていく。そして陽弥も邪神覚醒すると、皮膚の表面に、緑色に輝くコンピュータ回路が浮き出てきて、陽弥の両目が緑へと変わった。

「シグムディア ザ・シンセシス……！」

シグムディアも緑色の瞳を輝かせ、胸に手を当て、陽弥は呪文を唱え始めた。

「無限の光と闇、無限の聖と魔、生と死を司る龍神の王の力が宿りし裁きの龍神剣………召喚！ウルティメイト・バハムディアアアアアアッ!!!」

陽弥の叫びに、シグムディアの胸から、白い穴が開き、シグムディアはその穴に手を突っ込むと、中から、紫と黄色の高周波の刃を放ち、龍の頭部が付いた剣を抜刀し、さらに高周波の刃の出力が最大に上げ、アルマロスよりも巨大な刃になった。

「何ッ!?」

「はああああああああああッ!!!」

陽弥はウルティメイト・バハムディアを手に、渾身を込めて、アルマロスへ降り下ろした。刃がアルマロスに直撃し、アルマロスはウルティメイト・バハムディアの刃により、左半分を失った。

「どうした!!護星神が憎いだろ!」

「ほざけええええええ!!!」

アルマロスは大咆哮を上げ、シグムディアを吹き飛ばした。するとアルマロスの体から光の鎖が出てきて、シグムディアを捕まえる。

「グッ!………ッ!!」

「グオオオオオオオッ!!!」

アルマロスは鎖で縛られているシグムディアに巨大な足で踏み潰

しまくった。何十回も踏み潰されていると、シグムディアが八卦でアルマロスの足を砕いた。その隙に陽弥は鎖を断ち切り、頭や両目、鼻口、体からかなりの量の血が流れ落ちていた。

「ハア……ハア……ハア……ハア……ハア」

陽弥の両目から出る血がまるで、赤く満ちた涙の様であった。アルマロスも最後の力で巨大な拳を握りしめ、陽弥に攻撃してくる。

「止めだ……！護星神タイタニス！」

陽弥も、シグムディアの出力、パワーを全開にし、叫んだ。

「滅びよーアルマロス！」

「グオオオオオオオツ！！／ウオオオオオオオツ！！」

2体の拳がぶつかり合い、そしてアルマロスの拳に亀裂ができて始めた。

「馬鹿なっ!?!」

そしてアルマロスの体が崩れていき、断末魔の悲鳴を上げ、沈黙した。

「どうだ……!?!」

するとアルマロスの中からダークマタージュエルが現れ、中から無数にいるロイガー、イング、邪神軍団、そしてクトウルフと、ケートスが出てきた。

「そう簡単に行くわけないか……クトウルフ……」

「護星神iiiiiiiiiiiん!!!」

クトウルフが叫び、邪神軍団が一斉に攻撃してきた。

「殺つてやるぞ……！」

陽弥は決意をし、拳を握りしめ、気を貯める。

「ハア……」

「ブラム……シャーラ、ラファイ、皆……そして父さん、母さん、ルナ、エミリア、マナ、皆……向こうで、また会おう……！」

シグムディアに気が貯まった直後、シグムディアからとてつもない程のビックバンが放たれ、ケートスや邪神軍団が異次元へ、クトウルフは四つのエレメントの結晶体に別れ、散っていった。そしてダークマタージュエルは小さくなっていく。





「……………仕方ない、こうしよう……………」

蛾のような種族はテレキネシスでシグムディアを宙に浮きあげ、山を登り始めた。山頂に着くと、目の前に火山が見えてきた。溶岩も煮えたぎっており、いつ噴火してもおかしくもない現象であった。そして火口に到着し、蛾人間は言う。

「火の山に投げ入れる。」

蛾人間はシグムディアと陽弥を火口の中へ落とした。溶岩が陽弥とシグムディアを飲み込んだ。その様子にもう一人の蛾人間が言う。

「何故入れた？まだ助かる見込みはあったのに……………」

「この神には、エネルギーが足りない。だからこの火の山のエネルギーを含め、海、大地、森のエネルギーで回復させる。」

「なるほど……………」

もう一人の蛾人間は納得した。

「だが、時間が掛かる。精々……………約6800億年後だ……………」

「ここに神殿を建造しよう。この星の守り神として……………」

「そうだな……………」

「残りの4体の石像は？」

「この神殿を中心として、各地域に神殿を築く。東西南北の守護獣として、そしてこの山に結界を張ろう……………他の種族に悟られないように……………」

蛾人間はそう言って、山を降りていった。

6800億年後、シン達はクトウルフとの戦いで消えた陽弥を捜索していた。

「陽弥！陽弥！」

「お兄ちゃん！何処に行ったの!?!返事をして！」

シンとルナが陽弥を呼び掛ける。

「陽弥様……………」

エミリアも必死に心配する。

「見つかったか!？」

「嫌、何処にもいない!」

ラルフとリヨウマ、ローレライも必死の捜索をしたが、跡形もなかった。

「そんな!？」

「…………… こんなにも探してもいないなんて…………… まさか、陽弥は……………」

タスクが言うと、ヒルダが怒鳴った。

「んな事ある分けねえだろ!? アイツは神だぞ! 私等の馬鹿息子がそう簡単に死ぬわけねえ!」

「ヒルダの言う通りだ。陽弥は絶対に生きている…………… それを信じよう……………」

するとマナの通信機から身元不明のメールが着信してきた。

「じいじ……………」

「ん?」

「これ……………」

「何だそれは……………?」

シンはマナの通信機を見て、身元不明のデータを確認すると、中にビデオメッセージが入っていた。

「何かの…………… 映像記録?」

シンはビデオを再生すると、そこに映っていたのはシグムディアに乗った陽弥であった。しかし、シン、ココ、ルナ、ジャヴィック、ルー、クロウ、サム、アルベルト、マナタスク、ソフィア、ラルフ、キャリア、デュラン、バルト、ダーマ、ドミニカにしか見えない映像であり、他の人が見たらただのノイズで塞がられている映像にしか見えなかった。

「っ!？」

「これは!？」

「彼らに眠るムーアの血管が起動して、我々には見えない映像を見て

るんだ……………」

『やあ、皆……………映像を使っているけど、久しぶり……………』

「陽弥!？」

シン達は驚き、映像に映っている陽弥は話を続ける。

『このメッセージを見ているなら……………たぶん……………私はいないと思う……………これから、超次元生命体アルマロスを倒すために三獣王と共に向かっているんだ。後のスペクトロブスやオメガプライムス、ブラム、生徒や仲間達は俺の要塞グランドスファイアにいる。だけど、俺は違う……………父さん達に告げる……………アヴァロンとクトウルフを決して……………逃してはいけない……………奴等の狙いは……………本体の復活……………つまりクトウルフはその本体の一部なんだ……………』

「何?!？」

「何だどっ!？」

『今から何千億年前……………初代護星神はクトウルフではなく、アルマロスを倒していたんだ。そしてその初代護星神は……………』  
「この俺……………ミッドガンドの護星神”なんだ……………」

「嘘ッ!!？」

『そろそろ着きます。主よ!』

シンオウが陽弥に報告してきた。

『そう言うことだ……………だからこれだけは言っておく。クトウルフの他にもう一体の一部がいるんだ。ソイツだけには気を付けて……………それから……………う……………う……………!』

映像に映っている陽弥が突然泣き崩れる。

『今まで……………俺を……………愛してくれて……………ありがとう

!!!』

『来ました!アルマロスです!』

『行ってくる!』

陽弥はメッセージを切った直後、シン達は叫んだ。

「待て!陽弥!」

「お兄ちゃん!？」

「お前ら、一体何を見たんだ……?!」

「……… 陽弥」

「……… そんな……… そんな!」

「嘘だといってくれよ………」

皆の表示が不安になつていると、突然シン達の後方にエミリアがおり、もう一人のシンセシスの力で陽弥のメッセージを見てしまったのだ。

「……… エミリアさん?」

エミリアは泣き崩れ、断末魔の悲鳴を上げた。

「……… 陽弥……… 様……… 死ん……… だの……… 死んだの

?……… 陽弥様……… アアア……… アアア……… アアアツ

!!!……… アアアアアツ!!」

するとエミリアの心の中で、初めてクトウルフと言う。存在を目の敵にした。

「怨んでやる………!」

するとエミリアからおぞましき闇の波動が溢れ出てきた。

「ツ!」

シン達は驚くと、今度は地面から黒い棘が出てきた。

「妬んでやる………!」

アストラッド王も驚くと、エミリアの体から棘が出てきた。

「ツ!」

「嫉んでやる………!」

棘は徐々にエミリアを包み囲む。

「ツ!」

「憎んでやる………!」

すると棘から赤と紫、黒、ストロベリーピンクに別れた薔薇の花が咲いていく。

「ツ!」

「呪ってやる………!」

そしてエミリアを包んだ棘から赤黒い薔薇で体を多い囲った闇のドラゴンが現れた。ドラゴンは雄叫びを上げ、棘の中にいるエミリア

へ入っていった。

「ッ!?!」

「クトウルフを……………殺してやるううっ……………!!!」

そして棘の中にいるエミリアの額に黒と赤に満ちた瞳が開き、姿が変わっていく。

「エミリアさん!」

「ママ!」

「離れろ! マナ!」

シンがマナを守ろうと、エミリアから離れると、棘の中から別の声がした。

「やっと解放してくれたよ……………この女……………」

《ッ!?!》

すると棘が燃え上がり、中から現れたのは、スカーレットに満ちた大きな薔薇の花が頭にあり、赤に満ちたドレス、さらに体の周りに棘のタトウー、緑の髪が赤く染まっており、額に第三の眼を持ったエミリアであった。

「誰だ!?!お前は!?!」

シンはビームソードを抜刀し、名を訪ねると、その女性は不気味な笑顔で答えた。

「知りたい? 知りたいよね♪……………教えてやるよ、私の名はイザベル!」イザベル・ヴァルネア・クリーフ!!」私の婚約者である ”ブラム・ギデオン” と並ぶ第0界邪神 獄闇の皇女帝ですわ♪アハハハハ!!」

イザベルと名乗る暗黒生命体はシン達に微笑みを返した。

《ッ!!》

シン達は直ぐ様、武器を構えた。ガンシップや戦車の機銃がイザベルへ向ける。

「嘘だろ……………!?!」

「ブラムの次は……………コイツ!?!」

「暗黒生命体は……………一体、何体いるんだ……………!?!」

「さあ、楽しい楽しい処刑のお時間ですわ!」

イザベルは腕から棘でできた細剣を作り出し、シン達に向かっていった。

## 第57話：来るべき備え

「エミリアの闇から生まれた暗黒生命体“イザベル”は棘の細剣を取り出し、シン達に突き付ける。」

「さあ、楽しい楽しい処刑のお時間ですわ!」

「イザベルは細剣を突き付け、シン達に襲い掛かった直後、突然イザベルが動きを止めた。」

「と言いたいところですが、今は止めておきます。」

「……っ!?何故だ!」

「貴方に報告しようね、………陽弥・ギデオンはまだ生きてる」

《え!》

「イザベルの放った言葉に、シン達は驚く。」

「本当か!」

「ええ、けどね……あの青年、今も酷い状態なのよ、アルマロスとの戦いで四肢や五感を失っちゃたのよ」

「何だって!」

するとイザベルの話にヒルダが割り込んできた。

「おい!アンタ……陽弥が四肢と五感を失ったってどういうことなんだよ!?!それと何だよそのアルマロスって!?!」

「良いでしょう♪」

「イザベルはそう言うと、体の中からエミリアを解放し、起こす。」

「ほら、起きなさい……」

「エミリアは目を覚まし、イザベルは微笑みで陽弥の安否を報告する。」

「大丈夫よ、アンタの未来の旦那様は生きてるよ」

「本当にですか……!?!」

「本当よ……♪」

するとエミリアの目からみるみる内に涙が溢れ、その場で泣き崩れた。



「イザベルと言ったか…… 教えてくれ…… 陽弥に何があったのか、そして陽弥も言っていたアルマロスとは一体？」

「これで見せてあげる」

するとイザベルは背中から光の触手が出てきて、シン達の額に触れた。その直後、シン達の頭の中、映像が浮かび上がる。

《っ!?!》

「何だこれは？」

皆が慌てる中、イザベルが説明する。

「陽弥が見てきた記憶を映像で表してるの、彼はクトウルフとの戦いの最中、エスメラルダが別次元にある過去の地球”アナザーアース”へ飛ばした。彼はその時に強いショックを受け、記憶喪失になっていた。しかし、ブラムが彼の記憶を呼び覚まし、彼のDNAで遺伝子改造された26人の子供達を引き連れて、エッジ・マーベリックが起こした次元反応炉の爆発を免れ、アナザーアースは消滅しました。」

その映像に映っている陽弥やエッジ達の姿を見て、クロウは呟く。

「陽弥は…… エッジ達と会ったんだ……」

「その後、彼はエッジと交流し、惑星ロークに着陸し、物資を集めていましたが、ロークで流行っていた石化病が26人の子供達に発症した。治療は済んだものの、今度は魔王崇拜者の狂信者タミエルの撃退に成功し、魔王復活を阻止しました。」

惑星ロークの出来事に、シンは驚く。

「陽弥…… 俺がロークに飛ばされた日のその前にそんなことが……」

「それから、彼とブラムは26人の子供達を習練、教練し、彼らを26人の使徒として、惑星セレスに向かいグリゴリによって以上の進化を遂げた種族”コレクター”と交戦……」

その映像の中に、プロセアンや小さな妖精がコレクターと戦っている映像を見て、ジャヴィックやソフィアが驚く。

「あれは!?!我等の同胞であるプロセアン!?!」

「あつちは妖精!?!」

「コレクターに勝利した彼らはプロセアン、時空賊、妖精族、星機兵、



「あれがシンセシス……………」

「シンセシスになった彼は勢い良くアルマロスを圧倒しました。」  
「っ！」

シンセシスとなった陽弥はアルマロスと互角な戦いになり、巨体な足で陽弥、シグムディアを踏み潰した。そしてアルマロスの足から光が溢れ、波動が放たれた。アルマロスの足は砕け、現れたのは全身血だらけの姿になった陽弥であった。その姿に目を背けるものや、食べたものを吐くものが続出するが出ていたが、シン達は冷静な表情で見ている。

「陽弥……………」

「陽弥様……………」

「パパ……………」

「しかし、アルマロスは消滅する直前に、一部を残したのです。」

「それが……………クトウルフ率いる邪神軍団国家”ネオ・グリゴリア大銀河帝国”って訳か……………」

「その通りです。そして陽弥はシンセシスの全てを解放し、次元爆発でクトウルフを封印したのです。ですがその爆発によって彼は致命傷を負い、ユニゴルディアンと三獣王石化したままの状態になっておられます。」

「……………それが……………護星神タイタニス……………馬鹿孫”陽弥・ギデオンの誕生だったのか……………俺が知った伝説は今見た真実と違う……………。これが陽弥の運命だったのか……………」

「……………陽弥、陽弥はどうなった!?!」

「心配はない。今、陽弥はこのホライゾンの何処かにいる。石化したままの三獣王とユニゴルディアンを呼び覚ませ。」

「どうやるんだ!?!」

「アンタだよ。エミリア……………」

「私!?ですか!?!」

「ああ、そうだ……………もう一人のシンセシスに覚醒したアンタなら三獣王とユニゴルディアン……………グランドスフィアを再起動する事ができる……………そこに陽弥のダチである副総統ブラム・ギデオ

ンと時空賊の船長で突撃総大将ザンジーク、プロセアン総司令官ウエルビス、星輝兵の参謀総長 ブリンガー、アヌビス人の大佐であるモルド、リーフマンの女王リリーとダークリーフマンの女王ヴィオラ、異次元の民の指揮官ザーン・グリム、宇宙魔女の大魔女ウルカが眠っている。彼らを起こしなさい。まあ、起こしたら襲い掛かってくるかも知れませんが…… 陽弥・ギデオンの仲間や御親族と報告すれば、仲間になりますから」

「分かった……」

「念のために、この惑星にヴァルクリアスのデータポッドが昔から贈られているから、一つでもデータを解読か起動したらグランドスファイアは再起動しますわ」

「ありがとう…… イザベル…… 感謝する。」

「当然ですわ、グランドスファイアには愛しのダーリン（ブラム）がいるのですから♪それと……」

イザベルはルーを睨んだ。

「いい加減、正体を現したらどうです？ルー…… 嫌、次元警察さん♪」

「何？」

「ハア、仕方ない。隠すつもりはなかったんだ…… 俺の本名ルーカス ルーカス・ケラン…… 200年後の未来から俺の世界を破壊したアルマロスを追って来た次元警察だ。」

ルーはオムニツールで自分の手帳を見せた。

「お前…… 次元警察だったんだ…… 通りで時空神龍や見たことのないセイクリッドメール”ジークフリード”を使えるって訳か……」

「すみません……」

「…… まあ、良い。」

「とにかく、お兄ちゃんが無事だから安心したけど、」

「問題は一つ…… 『陽弥は今、何処にいるのか？』だ……」

「さつきも言うように、答えられるのは種族大銀河連邦『ヴァルクリアス』…… ソイツ等なら陽弥のいるところを知っている……」

！」

「けど、そのデータが見つからなければ探せないのでは？」

「確かに、今のテクノロジーじゃ見付からないと思う。どうすれば……」

「それなら、私の双頭神龍の土の力で地脈やビーコンを見つければ良いと思うぜ」

「本当か!? なら、やって来れアレクトラ……！」

「はいはい。行くよルチル」

「うん」

アレクトラとルチルは並び、互いのガントレットを翳し、唱えた。

「龍装光!!」

一つの体へと変身したアレクトラとルチルは地面に手を差し伸べ、唱えた。

「グランロケーション！」

すると手から波動が放った。

「感じる……聴こえる……北北西 2時の方角 10度からビーコンが鳴っている……」

「北北西と言ったら、エルシュリア王国付近じゃないか？」

「確かに……もしかしたらその付近にヴァルキュリアスのビーコンとデータが入っているポッドがあるかもしれない……」

シン達は急いでエルシュリア王国へ向かった。

エルシュリア王国の廃墟に着いたシン達は辺りを汲まなく探した。

「見つかった？」

「ダメです……どの付近を探したり、穴を掘っても見つからない……」

「アレクトラ……あんた間違えたじゃないの？」

「んなこと言われても……」

「もう！」

ソフィアとアレクトラが喧嘩するなか、ルナが落ち込んでいるエミリアに声をかける。

「エミリアさん？」

「……………」

「…………… 大丈夫、お兄ちゃんは生きています。お兄ちゃんがそう簡単に死ぬような人じゃないから…………… それにマナちゃんがここにいるから、それが証拠にもなるよ♪」

「ルナ様……………」

「それと、エミリアさんがお兄ちゃんのお嫁さんになるから私の事は普通にルナって呼び捨てしても良いのよ♪だってエミリアさんの義妹になるから♪」

「お嫁さんだなんて！…………… そんな……………！」

エミリアの顔が赤くなり、ルナは笑顔で返すと、タスクがシンに言う。

「駄目だ……………！見つからない……………」

「でも、確かに地脈はこの付近を現してんだ…………… 普通に間違えるのか？」

「だったら何で見つからないんだよ！」

ソフィアとアレクトラがまた喧嘩するとシンが割り込み、怒鳴った。

「止めろ！お前たち！ここで喧嘩しても意味がない！」

「……………」

二人が黙り込むなか、エミリアの左目が桃色に輝く。

「…………… エミリアさん？」

「……………」

エミリアの頭の中、黒い空間から何かのシグナル音が鳴り響く。するとエミリアの下から光が現れ、意識が戻った。

「っ!？」

「エミリアさん…………… どうしたんですか？」

「…………… ある」

「え？」

「………ここにゐる」

「何がですか？」

「………城の真下………今、私が踏んでいる地面の真下に………ビーコンが鳴っている………」

「え?!」

「本当か!？」

「はい！」

「掘るぞ！」

シン達は急いでブルドーザーやショベルカー、プラズマドリルを使って掘っていると、

『ガンツ!!』

プラズマドリルから奇妙な金属音が鳴った。

「………！」

その音に驚き掘ってみると、中からシグナル音が鳴っており、ヴァルキュリアスの国章が付いたポッドが見付かった。

「あつた!!あつたよ!来て!」

それを見つけたのはエルシュリア王国の子供であり、シン達はポッドの所行った。

「多分、知らない内にここにエルシュリア王国が建つたんだよ………」

「ビーコンが鳴っているからまだエネルギーが僅かに残っている………」

シン達はポッドを取りだし、基地へ運び、ポッドにこびりついていた泥を洗い流し、研究していた。

「このポッド………プロセアンのスリープポッドを使っている。多分このポッドなら私にも開けられる………」

ジャヴィックはそう言うと、ポッドのキーボードを打ち始めた。

「我々の原語とプロセアン、サラリアン、アサリイ、クローガンの文語を組み合わせてデジタル式にしている文語だ………興味深い、これがヴァルキュリアスの文字か………。(分かりやすく申しますと

流星のロックマン2に出てくる文明『ムー』の文字とインド文字とウガリット文字、古代イタリア文字を組み合わせているような感じですよ。）」

「勉強好きのルナなら興味出来るかもな♪それにこの原語と文を作ったのは陽弥だな……………」

「確かに、お兄ちゃんが作った文は興味がある……………」

シンとルナは感心していると、ジャヴィックが言う。

「おっと、これは?」

ジャヴィックが見つけたのはボイス認証システムであった。

「何かの…………… ID?しかもそのコードを言えば分かる……………」

「もしかして、これが起動認証!」

「あり得る…………… !アイツめ…………… 敵に覺られないようIDを掛けたのか……………」

「試しにやってみよう。」

「じゃあ”ヴァルキュリアス”」

エルシャの問いにジャヴィックが答える。

”ヴァルキュリアス”……………」

しかし、ポッドは起動しなかった。

「あら?」

「違うなあ……………」

「それじゃあ”家族”は?」

今度はハンクの問いにジャヴィックは答えた。

”家族”……………」

しかし、何も起きなかった。

…………… 何も起きないなあ……………」

するとクロウがあることを言う。

「ヴァルキュリアス…………… 戦乙女……………」

「え?」

「ヴァルキュリアスって戦乙女を意味してるよね?」

…………… 確かに……………」

「もしかして、戦乙女にヒントが!」



シン達は深く考え込んだ。

「ヴァルキユリアスが戦乙女を意味しているから、革命…………… 勝敗…………… 死を呼ぶ…………… うくん。他には…………… ??」

ジャヴィックは混乱していると、エミリアがある言葉を言う。

「もしかしたら陽弥様なら『解放』って言いますわ……………」

皆は『ハッ!』し、納得した。

「そうか! アイツの事だ…………… 争いを好まなくなっていると思う!」

「何で!?!」

「あのメッセージを見る限り、何か考えていたのかもしれない……………」

「とにかくやってみよう…………… ダメでもやってみなくてはわからない……………」

い…………… システムログイン ID”解放”……………」

ジャヴィックはIDを答えたが何も起きなかった……………

「やっぱり駄目か……………」

するとポッドの割れ目から光が漏れた直後、ポッドが大きな音を発

て、開いた。

「うわあっ!」

「開いた!」

「IDが”解放”…………… アイツ……………」

ポッドから様々な情報がオーロラになって浮かび上がる。

その頃、暗黒宙域にてアヴァロンとケートスが補給をしていると、アポカリプスがアラムに気づく。

「この反応は?」

「どうした? アポカリプス……………」

「ホライゾンから未知のビーコンが標示されているのです……………」

アポカリプスがホライゾンから発しているビーコンと国章を表示させると、クトウルフは驚く。

「これは……………！」

「知っているのですか？」

「…………… ”ヴァルキュリアス” …………… ！」

「え？」

「アポカリプス…………… 全軍に告げろ…………… ホライゾンとビーコンを破壊せよ！奴等がホライゾンに来る前に！今すぐだ！それと秘密兵器もだ！」

ケートス格納庫から新型のデストロイア数機の目が光だした。

そしてホライゾンでは、起動したヴァルキュリアスのポッドが起動したことに皆は慌てていた。

「…………… 起動したの？」

ソフィアが問うと、ポッドが喋りだした。

「リブート反応あり、耐熱、耐水、欠陥はなし、起動音声を開始します…………… 貴方方ですね？再起動させてのは？」

「喋ったぞ！しかも我々の原語を！」

「原始的原語を確認し、今こうやって会話しているのです。」

「お…………… 俺らが原始的!？」

「我々ヴァルキュリアスは総統 陽弥・ギデオンの命により、存在しております。現在総統 陽弥・ギデオンはこのホライゾンのコアで眠っており、まだ復元されておりません。さらに私を再起動したことにより、グラランドスファイアは再起動し、コールドスリープ状態であった民や兵達は目覚めました。現在グラランドスファイアは真つ直ぐホライゾンへ来ております。」

「間近よ……………」

「待て、その前にお前の名を聞きたい」

「私の名はコードネーム”ウルズ” 種族大銀河連邦国家グラランドス

ファイアのメインコンピュータであり、サブコンピュータである”アイリス”を管理しています。」

惑星エリシアにあるアイリスのマザーブレインと言うことに、アイリスは驚いた。

「何だつて!?!」

「私は宵闇の男神アプスと曙光の女神ニケによつて生み出された存在。また、アプスとニケは初代ギデオンの総大将であります。総統陽弥様はアプスと対面し、我々を最終兵器とし、扱われています。奴等に備えて……………」

その直後、基地内から警報が鳴り響く。

「何だ?!」

「奴等が私のビーコンに気付きました。恐らくグランドスファイアをここへ来させないように私を破壊しようとしているのでしよう……………急いで準備をしてください。」

「どうする!?!」

「……………ちよつと待て! 良い考えがある……………グランドスファイアが来る前に……………我々だけで出来る限り奴等の戦力を減らそう!……………」

「え?」

「時間稼ぎしながら、嵌めてやるんだよ!……………陽弥のシグムディアと俺たちのパンドラメールとギャラリック・リングを使って、ユグドラシルとグランドスファイアでアヴァロンとケートスを袋のネズミにするんだ!……………ウルズ、グランドスファイアには何か特殊なビームはないのか?」

「スーパートラクタービームがあります。デブリや鉱石、隕石、金属に態様されており、アヴァロンとケートスをグランドスファイア内に入れることができます。」

「それだ! それを使ってアヴァロンとケートスを閉じ込めてくれ! お前らの技術ならアポカリプスのブレインジャックを妨害できるだろ!?!」

「可能性は曖昧ですが、やってみましょう。我々の技術によつて総統

陽弥様とトレーネル様、エミリー様、シエリア様によって造られた兵器「サウンドボイサー」を使えば、アポカリプスによって操られているアジマス人をブレインジャックから解放し、解放したと同時にアヴァロンの指揮権を私にしましょう。アポカリプスを代用の体の中へ閉じ込めます。」

「やって来れ！」

「分かりました……………」

「それから、陽弥が何処に居るか教えてくれ…………… 奴等に勝てる方法は…………… グリゴリアキラである馬鹿息子が必要なんだ……………！」

「雪山の…………… 頂上に…………… 彼は眠っています。」

「雪山…………… ヴアルヴァートル帝国にあるあのデカイ雪山か！」

「そうです。エミリア姫殿下とマナ様を連れていきなさい…………… 彼を復活させれるのは姫殿下の愛が必要なのです。」

「分かっ

## 第58話：復活せし太陽

夜になり、ヴァルヴァートル帝国付近では既に戦闘体制に入っていた。一方エミリア、マナを乗せた輸送機護衛はアンジュ率いる第一中隊とルナ達に任されていた

「お前ら！準備は出来てるか!？」

《応!》

「いいか！何としてでも、ヴァルキュリアスが来るまでウルズを護衛だ！そして家の馬鹿息子の復活するまで死守するぞ！」

《応!!》

そしてサーチライトが照明され、上空を照らすと、雲の中から複数のロイガー、ネオ・ミスルギ皇国艦隊が降下してきた。

「全機！砲撃開始！」

同盟軍の対空砲やウラノス、ネオ・アウローラ、アンブロシアや全艦隊が一斉に砲撃を開始し、ヴァルヴァートル帝国のクリスタルが光、電磁シールドがヴァルヴァートル帝国を被い包み込み、さらにクオリアン達がヴァルヴァートル帝国の広場にシールド発生装置とアサリイのバイオテイクス能力を使い、バリアを張る。電磁シールドの下にシールドとバリアを発生し、多重壁となった。

早速、ネオ・ミスルギ皇国艦隊がヴァルヴァートル帝国目掛けて砲撃を開始するが、ヴァルヴァートル帝国を被い包み込んでいるバリアとシールドが攻撃を吸収無効化していた。シンはペルシウスでライトソードビットを展開し、前線の敵を一掃していた。

「雑魚が……！」

シンは前方最奥にいるクトウルフ目掛けて、デイメンジョン・ヴァルキュリアを放ったが、クトウルフはマナの障壁を展開し、シンの攻撃を遮断した。

「クッ！やはりマナのシールドを使うか……！」

一方、アンジュ達は森林の中に隠れており、クトウルフ率いる艦隊が見えなくなるのを待っていた。

「糞っ！早く……………早く……………早く此方から背いてくれ……………！」

「グツ！仕方ない！タスク！リユウガ！フィーリ！ウイル！このままでは埒が空かない！率いている部隊と小隊を連れて、敵本陣へ突撃する！」

シン達は全員駆逐形態へ変形し、さらに歩兵やガンシップ、戦車、巡洋艦、駆逐艦が揃った。

「お供するぜ！大将！」

ガトリングランチャーを持ったβとビームチャクラムを持ったΣも来てくれた。

「β、Σ……………よし！全機！一斉突撃!!」

シンの命令に、全機が突撃しに行った。艦隊が前列の義勇軍を一掃していくと、ロイガーが巡洋艦に襲い掛かり、撃沈された。

「グツ！怯むな！クトウルフの本陣で戦力を減らすぞ！」

駆逐艦のミサイルが一斉発射され、イングを一掃していく。さらに先頭に追いついたパラメール、セイクリッドメール部隊や戦車、ガンシップ、戦闘機が次々に撃破されていく。

「ぐあああゝっ!!」

グレイブ type 01に乗っていたアサリイ兵士が叫ぶと、ボロボロになり、火を吹くサイクルプスに乗ったトゥーリアンが全身血だらけになりながらも背部のグレネードランチャーを射ち続けていた。そして通過し、一気にクトウルフへ突撃していった。

「あと少し……………あと少しっ!!」

だが、クトウルフを前にヴルトウームが立ち塞がり、サイクルプスを真っ二つにした。そしてシン達も通過すると、イングがウイルのカタストロフに襲い掛かってきた。

「邪魔だ!!」

「ウイル！」

「先に行け!!」

今度はギムガラム（無人機）がタスクのヘラクレスに襲い掛かってきた。

「タスク！」

「俺の事は良い！陽弥の為だ！」

さらに、ギムガラム（有人機）がファイリのジャンヌに襲い掛かった。

「ファイリ！」

「行ってください！シンさん!!」

シンはペルシウスの出力を最大に上げ、ライトソードビットとダークビットレーザー、リフレクタービットを展開し、さらに二丁拳銃のデイメンジョン・ヴァルキュリアを射ちまくった。

「くっ……… うおおおおおっ!!!」

前方にクトウルフが見えてきた直後、上からロイガーが襲い掛かってきた。

「っ!？」

その直後、別の方向からロイガーに向けて攻撃してきた。シンはその方向を確認すると現れたのは銀河連邦艦隊とシルヴィア率いる闇組織“シャドウブローカー”艦隊であった。

「遅れてスマン！」

「ようやく来てくれたか！銀河連邦！シャドウブローカー！」

シンはペルシウスを起こし、デイメンジョン・ヴァルキュリアを天高く翳した。

「全艦隊！艦砲射撃開始！シン・ギデオン大将を含む5人と同盟軍を援護せよ！」

「イエス！サー！」

全艦隊から多数の艦砲射撃が一斉高攻撃され、シンは別動隊のアンジュに命令する。

「アンジュ！行け！」

「分かったわ!!第一中隊!!全機出撃！」

《イエス！ママ!》

アンジュ達はエミリア、マナを乗せた輸送機と共に陽弥が眠っている火山へと向かっていった。そしてシンはクトウルフ率いる邪神達と戦っていた。

「ようやく対等出来るぜ！クトウルフ！」

「フフフ…………… 来たな、ヴェクタの英雄、古の民、フィリジス人、ドラゴネイル人、ヘルガスト人…………… そして8人の護星神……………」

シンの元にタスク、リュウガ、フィーリ、ウイル、ラルフ、バルト、キャリー、ダーマ、ドミニカ、デュラン、サム、アルベルトが到着した。

「シン…………… 一緒に戦うぞ……………」

「親父……………」

「弟の息子…………… 私にとつては甥っ子に手を掛けたことを…………… 今、後悔させてやる!!」

「馬鹿め…………… ヘルヘイムの護星神…………… 我には取っておきの秘密兵器があるのだ…………… ！」

「何っ!?!…………… つ!?!」

その直後、シンの真上からドス黒い影が舞い降りてきた。それは紫色をしたデストロイアで他と違って、仮面が付いていた。

「ゴイツ…………… デストロイア!?!けど…………… 何だ?…………… この感覚…………… !?!姿は違うのに!?!」

「構うことなんかねえ! 殺るぞ!」

ウイルのカタストロフが先攻した。

「待て! ウイル!」

「おんどりやあああッ!!」

ウイルはビームアックスを降り下ろした直前、黒いデストロイアはそれを受け流すような回避行動を取り、カタストロフの後方へ回り込み、大型クローアームを叩き付けた。

「何っ!?!」

「あんな動き方…………… 始めてだ!?!」

「新型!?!」

その時、黒いデストロイアから聞き覚えがある声で笑い始めた。

「フフフ…………… アハハハハハ!!」

「っ!?!その声は…………… まさか…………… !?!」

「感じる! これが神を超越した存在…………… シンセシス!」



その声はなんと…… アイホートによつて支配された筈のジュリオであった。

《ジュリオ!?》

「アイツ……… 何で!？」

シン達は慌てているとクトウルフが説明する。

「コイツにはシンセシスであった陽弥・ギデオンの戦闘データを組み込み、機械と人間の体を融合した完璧なデストロイア………」  
「クライシス」………  
「簡単に言えば、”擬似シンセシス”と言っても良い!!」

「クツ!」

「あの小僧のインフィニティソウルがこんな形でエネルギー源なるのは!素晴らしい!これぞ私が探し求めていたマナ復刻に必要なエネルギーだ!これさえあればドラゴニウム、フォドラニウムの充填しなくてもよい!後はクトウルフ様のダークマタージュエル、アーククリスタル、クアンタニウムハートを取り戻せば、アヴァロンの時間跳躍を使い、アルゼナル襲撃からまた戻れる!それがアンジユが産まれた直後に殺そう!」

ジュリオの言葉にサムは呟く。

「ゲスだな………!」

「ふぎげんな……… テメエ!そんな理由でアンジユや未来へ生きる者達の人生を……… ぶち壊さん!!」

シンとタスクの手にムーアの紋章が浮かび上がった。

「行くぞ!皆!」

《応!》

シンとタスク、リュウガ、ファイリは空高く舞い上がり、ハイパーデイスコード・フェイザーを展開した。

「これで……… 終わりだ!!」

シンの掛け声と共に4機のパンドラメールの肩からハイパーデイスコード・フェイザーが放たれ、ロイガーやイング、敵艦諸とも吹き飛ばした。煙が舞い上がり、晴れていくと、不気味な笑い声が響き渡った。

「フッフ……」

「何!!?」

「超収斂時空砲（ハイパーデイスコード・フェイザー）で倒せると思ったのか？」

煙が晴れるとジュリオがおり、しかもあの攻撃が直撃した筈なのに無傷であった。

「馬鹿なっ!? 無傷だと!?!」

するとジュリオが消え、いつのまにか後方にいたデュランとダーマを撃破した。

「キヤアアアアアアッ!! / アアアアアアアアッ!!」

「デュラン！ダーマ！……グッ！」

今度はバルトにジュリオが襲い掛かってきた。バルトはギガントアックスで防御するが、大型クローアームの銃口から放出しているビームサーベルにより、ギガントアックスが斬られた。

「何っ!? グアアアアっ!!!」

バルトは驚き、ジュリオのビームサーベルの斬撃で切られた。バルトが倒れると、サムがバスターランチャーを構えていた。

「この化け物が!」

そしてバスターランチャーのトリガーを引くと、銃口から集束型のビームが発射された。

「喰らえ!」

それに続き、キャリーとラルフ、ドミニカはアナイアレイタービームライフルをチャージし、ジュリオに放つ。

「アナイアレイターチャージショット!」

タスクはヘラクレスのハイパーデイスコード・フェイザーをもう一回放った。

「ハイパーデイスコード・フェイザー!!」

シンはペガシオーネスとドツキングし、双剣のデイメンジョン・ヴァルキュリアを連結し、弓形態へと変り、弓糸を引き、叫んだ。

「ホーリー・アロー!」

弓糸を引くと、無数の光の矢がジュリオに向かって爆発していく。

ファイリもジャンヌの背部に搭載されているガトリングキャノンを展開して、叫ぶ。

「ハイパーアイスビームガトリング!!」

銃口から凍てつく冷気を放つビームがジュリオに直撃する。

「ペトルサイトブラスタ―!」

ウイルのカタストロフの肩部から銃口が展開されて、ペトルサイトビームを放った。

「ヘルブレイザー!」

アルベルトは杖を地面に突き付けると、地面から地獄の番犬が現れ、3頭の口から獄炎のレーザーを吐いた。

「ディバインシュート!!」

エイルマツトは持っていたエナジーサイズがライフルへ変形し、銃口から集束型のプラズマビームを放つ。

「リュウガ流奥義!!波状次元斬!!」

リュウガはヤマトの叢雲を展開し、叢雲の刃からエネルギーの刃を飛ばしてくる。皆の攻撃がジュリオへ集中していくとまたしてもジュリオが言う。

「無駄だ!すべての攻撃は私の糧と力になる!!」

煙が晴れると、ジュリオの姿がさらに変わっていた。ウイングが展開し、漆黒の羽を放出し、大型クローが生き物の様に鋭い爪へとなっており、そして仮面が外れ、半分火傷を負ったジュリオの顔が出てきた。

「エネルギーを吸収して形状が変わっただど!?!」

「今度は私のターンだ!アンデッド!!」

すると地面からたくさんの黒い人影が出てきた。

「何だ!?!」

無数のアンデッド達はシン達に取り付いていく。

「コイツらは!」

シンがアンデッド達の顔を見た。それは先のラストリベルタスの時空融合によって融合死した人々の慣れ果てだった。その中にヒルダの両親や元友人の姿が見えた。

「ラストリベルタスで時空融合によって死んだ亡者達！」

「止めだ……………デッドインパクト!!」

すると死者達の体が赤く光始めた。

《ツ!!?》

その直後に死者達が大爆発を起こし始め、シン達は爆発に巻き込まれた。

《グアアアアアアッ!!!》

その様子を見ていたサイとクリスが拡大して見ており、驚きを隠せなかった。

「そんな!？」

「……………嘘……………皆が!」

そしてジュリオはヘラクレスの頭部を掴み上げ、アポカリプスによつてその映像を生中継していた。

「ハハハハハハ!見たか下等なヴェクタ人!これが新人類の力だ……………お前らみたいな下等な超人類と違って……………高貴な存在である!まず最初に……………反乱分子である古の民を処刑する!」

ジュリオはヘラクレスのコックピットハッチをこじ開けた直後、アンジュの通信が入ってきた。

『タスク!今、見えないバリアを潜って火山に着いた!エミリアも無事よ!』

アンジュからの通信の内容を聞いたジュリオは、とてつもない怒りを上げ、アンジュの名を叫んだ。

「この声は……………アンシユリーゼエエエエツ!!」

ジュリオは無線に使われた電波を辿り、アンジュとエミリアのいる火山をアヴァロンの衛生カメラを使って、捕らえた。そしてジュリオは出力を最大に上げ、アンジュの所へ向かっていった。

「マズイ!!ヒルダ!」

シンは傷だらけになりながらも、ヒルダに通信を入れる。

「どうした!？」

「急いで姫殿下を陽弥の所へ!早く!ジュリオが猛スピードで向かっている!」

「え!!？」

するとヒルダ達のいる真上からジェットエンジン音が聞こえてきた。ヒルダは上を見た。

「おいおい！冗談だろ!?!到着が速すぎだろ!?!」

現れたのは赤い目を光らせたジュリオがビームサーベルを放出し、アンジュ達の前に立ち塞がった。その姿にロザリーとバンが驚く。

「デカ過ぎだろ!?!」

ジュリオは咆哮を上げ、アンジュの名を叫んだ。

「アンシユリーゼエエエツ!!」

するとアンジュの目が鋭くなり、ヴィルキスを駆逐形態へ変形させ、バスターランチャーを構えた直後、ジュリオはビームガンを乱射してきた。

「お前だけは！お前だけは！この世で最も目障りな存在だ！」

ジュリオの大型クローアームがヴィルキスの右腕を破壊し、ヴィルキスを掴み上げ投げ飛ばした。

「「アンジュー!」」

ヒルダ、サリア、サラマンディーネは互いのラグナメールと龍神器で応戦した。

「「姫様!／母上!」」

ナーガ、カナメ、リヨウマはサラマンディーネを助けに援護しに行く。

「ママー!」

「お袋!」

ソフィアとアレクトラも自分の母親を助けに向かっていった。

「お母さん!」

クロウとルーもジュリオの所へ向かっていき、ルナも助けに向かうと、ソフィアがルナの行く手を阻んだ。

「ルナ!行きなさい!」

「ソフィアさん!?!でも!」

「良いから!ここは私達が食い止める!」

ソフィアはルナに命令し、急いでエミリアとマナを連れて、火山の

火口へ向かっていった。ルナとエミリア、マナは火口に着くと、真下に奥へ通じる道があった。

「熱いー！」

「この溶岩の中に……………陽弥様が……………」

その直後、後方からクロウのアーキバスⅡが飛ばされてきた。

「っ!？」

「グアッ！」

「クロウさん！」

クロウは必死に立ち上がろうとしたが、機体が損傷していて、うまく立ち上がれなかった。

「奴は……………強い」

すると後方からジュリオがエリザベスを引きずって現れた。

「見つけたぞ。クアンタニウムハートを渡してもらおうか」

「エミリアさん！早く！」

ルナはセイレーンで応戦する直後、ジュリオの大型クローアームが襲い掛かって来た。

「キャッ！」

「ルナ様！」

「さあ、渡してもらおうか……………」

エミリアはマナ庇うように抱いた直後、上空からビームが飛んできた。

「ッ!!」

「何っ!？」

エミリアの前に現れたのは、ビームライフルを持ったエヴァであった。

「?……………御父様!？」

「俺の……………家族に手を出すんじゃないやねえ！この屑野郎が！」

エヴァは腰部からエナジースピアを取りだし、ジュリオに構える。

「行け!……………婿さんの元へ……………」

「けど！」

「……………ローラーナ」

「え？」

「お前の本当の母親だ…………… 本当に、妻に似ている……………」

エヴァは決意を決め、ジュリオに攻撃する。

「行け！」

「はい！」

エミリアはマナを連れて神殿の奥へ向かった。

「エヴァ！この裏切り者が！」

「どの口がそれを言う…………… 最初から良い忘れていたけど…………… お前、自分の家族をどう思っている？」

「フンッ！どいつもこいつも這いつくばる虫だ！それが何だ!？」

「なら、お前を殺す！」

「恩知らずが！」

エヴァはエナジースピアでジュリオのビームサーベルの攻撃を受け流し、カウンターを仕掛けると、上空からパルスライフルを乱射してくるテスト達がそれぞれのセイクリッドメールに乗って現れてきた。

「お供します！」

「テスト！ミラーナ！オルト！」

「お前達……………！」

「久しぶりですね…………… ジュリオ殿下…………… 嫌、屑皇帝が！」

「ほざけ！孤独だったお前達を救ってやったのは誰のおかげだ!？」

「そんなのもう俺らには関係ない！」

「俺達は自分の道を自分の足で歩むと決めたんだ！エミリア騎士団長いいえ…………… 姫様や！俺たちのリーダー”陽弥・ギデオン” 見たいに！」

「黙れええ!!」

「それに比べてお前は何だ!？何時まで現実から逃げて、まだあの生活に戻りたいって言うのか!？いい加減逃げるな！」

エヴァはジュリオに説教し、彼にとつともない蹴りを喰らわせた。吹き飛ばされたジュリオはエヴァを睨む。

「それが出来ないって言うことは…………… 臆病者と同じだ！」

「黙れノーマめ！」

「テメエにノーマと呼ばれたくないな！…… お前の様な”悪魔”に！」

その時、ジュリオの装甲が剥がれ落ち、中から禍々しきオーラが溢れ満ちていた。

「本気でこの私を怒らせたようだな……！」

するとジュリオは内部から赤黒い液体が入った瓶を取り出した。そして瓶のコルクを開け、赤黒い液体を飲み干すと、ジュリオの体が見るみる内にな変わっていく。

「来る！」

液体によって醜く残酷な姿へと満ちたジュリオは激しい怒りをこみ上げ、叫ぶ。

「アナザーモード！」

すると化け物の姿になったジュリオが紫色の発光を放ち、体の破片が飛び散り、虫の化け物へと変わった。

その頃、エミリアはマナを抱き連れ、神殿の奥へ進むと、目の前に四体の獣の王の石像が東西南北としてそこに置かれていた。

「着いた！」

そして四体の獣の王の石像の中枢に光の繭が浮いていた。

「光の繭？」

エミリアはそつと繭に触れた。すると手のひらや心、体に優しい暖かさを感じた。

「熱い……… けど、何だか…… 傷んだ心を和らげてくれるこの暖かさ………」

すると繭の糸がエミリアとマナを優しく包み込み、繭の中へ入っていった。

繭の中は白い空間であり、辺りを見渡しても、向こうは果てしなく、白く染まっていた。

「……は？」



「…………… 久しいなあ、姫殿下。」

「っ!？」

エミリアの後ろに装甲を外した本来あるべきの姿をしたシグムディアがいた。

「シグムディア!？」

「はい、6800億年ぶりです。」

「陽弥様は!…………… 陽弥様は何処!？」

「彼方です……………」

シグムディアがそう言うのと下からワームホールが開き、中にアナザーモードでさらに禍々しき姿に変わり果てた陽弥が岩石に座っており、その側にインフィニティソウルがあった。

「陽弥様!?!彼はどうしたの!？」

「アルマロスとの戦いによりシンセシスの持てる力を全て使い果たしてしまい、本来あるべきの死者の姿へ戻ってしまったのだ……………」

それと、インフィニティソウルが死者である陽弥を拒んでいる。」

「…………… 分かりました」

「え?」

「私が行き!陽弥様を元の陽弥様へと戻します!」

「しかし!」

「大丈夫です!」

「私は…………… ミッドガンドの護星神”陽弥・ギデオン”の許嫁!勇氣があれば、誰にも負けません!」

「…………… 分かった…………… では、貴女にこの鎧を授けます。」

シグムディアは手のひらから光を放出させ、その光はエミリアの周りを浮遊していくと。光が段々と形を整え、エミリアの部位に取り付けられていく。純白の鎧と表裏”白と赤”のマント、マントにはヴァルキュリアスの国章が浮かび上がっており、特徴的なのは、兜に翠のフルフェイスと左右に白き羽と光の羽と言う派手な装飾が付けられていた。

「これは?」

「ヴァルキュリアスの鎧です…………… お美しいですよ」

「ありがとう…………… シグムディア」

「ママ……………」

「マナちゃんも行く?」

「うん!」

エミリアはマナを抱き上げ、背中から虹の色の模様が付いている羽を飛ばたかせ、ワームホールの中へ入った。

ワームホールの中は薄暗く、冷たく、水の底にいるような感じで、エミリアは陽弥の前に立つ。

「陽弥様…………… 聞こえますか?」

エミリアの声に陽弥は顔を上げた。

「…………… エミリア?」

陽弥は他にマナがいることに気付き目を会わせないように隠す。

「見ないでくれ!…………… 墮落した俺の姿を…………… 見ないでくれ!」

「何を仰っているのですか!?あなたは立派に戦った!どんなものも背負った!愛するものを守るために戦ってきた!」

エミリアの言葉に陽弥はもがき苦しむ。

「だから!今度は…………… 私達が陽弥を守る番!…………… 戻ってきて…………… あなた!」

すると陽弥の体から黒いオーラが溢れ出て、一点に集まり、アルマロスの形を作り出す。アルマロスは赤く目を光らせると、陽弥に憑依し、エミリアに襲い掛かってきた。

『己ええ!クアンタの姫ええ!』

エミリアは陽弥の腕掴み、回避行動を取る。

「これが…………… アルマロスの闇!」

陽弥の口が裂けていき、鋭い歯が舌や喉の奥へと続いていくのが見えた。

「ガアアアッ!!」

陽弥はエミリアに襲い掛かりエミリアの肩に噛み付いた。

「アアアッ!!」

「ママ!」

エミリアの肩から血が噴き出し、陽弥はエミリアの血を啜っていくと、エミリアが陽弥を抱き締めた。

「クアンタニウムハート力で…………… あなたの本来あるべきの姿へ戻します！」

陽弥は抱き締めてきたエミリアから強引に離れようとした直後、エミリアの体から緑に光る粒子が溢れ出て、陽弥を包み込んだ。すると陽弥の姿がみるみる内に、変わっていき、元の姿へと戻った。陽弥は倒れると、負傷したエミリアが陽弥を起こした。

「エミリア……………」

「陽弥様……………」

陽弥はエミリアの頬に触れ、謝罪した。

「ごめん…………… 俺また落ち込んでいたよ……………」

「良いですよ……………」

「パパ！」

心配していたマナが陽弥に抱き付くと、陽弥はマナに謝る。

「マナ…………… ゴメンな…………… 怖かっただろ？」

「ううん！パパがどんな姿でもマナは気にしない！」

「ハハハ」

「マスター……………」

さらにシグムディアも陽弥の事を心配しに駆けつけた。

「シグムディア…………… 世話を掛けたな……………」

「いいえ、対した程ではありません。それと現在グランドスフィアがホライゾンへと移動しております。」

「そうか…………… なら、早めちやうかな」

「早めるとは…………… あ！やるのですね？」

「ああ、ギャラリックリングを強制的に起動する！お前達！何時まで寝ているんだ!?!とつとと起きろ！奴等に俺らからのお仕置きを殺るんだろ!?!なあ！カイオウ！」

すると白い空間の外ではカイオウの石像が木っ端微塵に破裂し、中から白く気高く美しい鱗と蒼海に満ちた水生龍 “カイオウ” が吠えた。

「シンオウ！」

次に北の方角に置かれていたシンオウの石像が木っ端微塵に破裂し、中から黄金の角と翠の体毛を持つ金色の鹿“シンオウ”も吠えた。

「エンオウ！」

次に、南の方角に置かれていたエンオウの石像が木っ端微塵に破裂し、中から六枚の翼、紅蓮に染まった炎を発する不死鳥“エンオウ”も吠えた。

「ユニゴルディアン！」

最後に西の方角に置かれていたユニゴルディアンの石像が木っ端微塵に破裂し、中から純白の体毛、頭に翡翠の結晶の角を持つ一角馬“ユニゴルディアン”が吠えた。

「今こそ奴等に……… 本当の忌むべき恐怖をトラウマとして遺そうぜ！」

四体の獣が同時に吠え、火口に向けて、それぞれの色を発光する柱を出した。

「ユニゴルディアン！」

ユニゴルディアンは繭の中に入り込み、有機生命体の体から、巨大な機械の体を持つ一角馬へと変わり、シグムディアの周りを駆け巡る。

「今こそ……… 有機生命体と機械生命体を……… 一つにつ！」

陽弥はシグムディアに乗り込み、ユニゴルディアンと融合した。

「シグムディア ザ・シンセシス!!」

純白の装甲と、体表面上に浮かび上がる緑に発光するコード、そして陽弥とシグムディアの両目が緑に発光していた。陽弥はシグムディアのコックピットを開け、エミリアに手を差し伸べる!!

「行こう！エミリア！皆が待っている！」

「はー！」

エミリアは陽弥が差し伸べた手を握り、マナと一緒に乗ると、繭が燃え落ち、中からシグムディアが現れ、三獣王と共に火山の外へ飛んだ。

その頃、エヴァ達はリーパーエクスによって化け物へと変貌を遂げた。ジュリオに負けていた。

「これ程……とは……！！」

「私を怒らせた罰だ……」

「まさか……リーパー・エキスを飲んでさらにパワーアップするなんて……」

「お前達が弱い理由を教えよう……それは権力が足りないからだ！私の世界のように、ドラゴニウム……”アウラ”がいなければ私の世界は平和であった。何故だか分かる？権力があつたからだ！力無ければ何れ滅びる運命！お前達は我々の下で働いておれば良い存在なのだ！ノーマも！ドラゴンも！」

ジュリオの戯れ言に、エヴァは笑い始める。

「ハハハ……お前の言葉は……完璧に違うな……大間  
違いだ！」

ジュリオは首をかしげると、エヴァは話を続ける。

「人はな……確かに偉そうな事を言う。暴力、欲望、支配……直ぐに物を頼る愚かな存在だ……だがな、人つてのはとてつもない特技がある……”力を合わせる事だ”！力を合わせれば、どんな壁やどんな高山も乗り越えられる。間違つた道を歩めば、仲間が呼び戻してくれる……お前のような奴には……その生まれてくる意味があつた！親はお前を間違つた方向へ歩ませないよう、心から叫んでいたのだ！エンブリヲのような愚かな人間見たいな傲慢な奴にしないために！」

するとジュリオがエヴァの頭に指を突きつけると、エヴァの頭から激しい電磁波が襲った。

「ガアッ！」

「愚かなクアンタの元皇帝が……戯れ言を言うな！この恩知らず

が……………」

「エヴァ様……………！」

「頼む…………… エヴァ様を……………！」

「助けてくれ……………！」

テスト、ミラーナ、オルトが必死に助けを求める。

「さらばだ。裏切り者エヴァよ……………」

ジュリオはビームサーベルを放出し、エヴァに突き刺そうとした。

「クッ！ここまでか……………！」

エヴァが諦めかけた次の瞬間、火山から一気に噴火した。

「ッ!!？」

「何だ!？」

その後、溶岩から緑に発光する集束ビームがジュリオに直撃した。

「ゴヘッ!？」

ジュリオはビームでの攻撃により、数キロメートル吹き飛ばされた。

「今のは!？」

すると火山から青、赤、緑、黄色に発光する柱が現れた。

「火山から、青の光の柱?」

「赤い光の柱?」

「緑の光の柱?」

「黄の光の柱?」

すると噴火する火山から声が聞こえてきた。

「我流第一究極奥義!流星獄炎!!」

すると火山から、真っ赤に染まった岩石が炎を発して、ヴァルヴァートル帝国へと飛んでいった。そして火山付近で倒れていたアンジュヤルナ達が噴火する火山を見る

「来たか!」

「おせえんだよ……………！」

「お兄ちゃんが…………… 甦ったあああ!」

「陽弥……………」

そして噴火する火山の中からゆっくりと影が見えてきた。その影の正体を見たジュリオは驚愕した。

「そんな?!……………馬鹿な?!」

段々と影や形も露になり、さらにジュリオは驚く。

「お前は……………インフィニティソウルを抜かれ……………死んだ筈だ!?!」

「死んだ?……………俺が?」

陽弥はジュリオの言葉に呆れた。

「馬鹿か貴様?!」

緑に発光するビームウイングを展開し、名を言う。

「俺を誰だと思っている?」

そして魔剣グラムと七星剣を抜刀し、ジュリオに突き付ける。

「俺は……………全ての銀河を守りし究極にして、全知全能!真のシンセシス!」

その直後、火口から溶岩が溢れ出てきて、辺りを照らし出した。

「……………その名も!陽弥・ギデオン”だ!!」

名を言った直後、火山が噴火し、上空から火の雨が降り注ぐ。

「殺れ!デストロイア達よ!」

すると量産型のデストロイア達が陽弥にビームガン突き付けてきた。

「やれやれ……………派手に来るか……………サンバースト!!」

その直後、陽弥の体から高熱を持つ波動が広がった。するとビームガンを構えていたデストロイア達が機能停止していき、上空から墜落していった。

「何?!」

よく見ると、デストロイアの女神像が赤くなっており、オーバーヒートして動けなくなつたと分かると、ジュリオは驚いた。

「あり得ない!!」

ジュリオは舌打ちをし、体の中にある陽弥のインフィニティソウルとフォドラニウムを使い、ビームサーベルが虹へと変色した。そしてジュリオは陽弥に突き刺した。

「どうだ!? フォドラニウム3年分のエネルギーを高出力の刃に変え! さらに私のインフィニティソウルのエネルギーで火力を無限にしたのさー!」

「何が無限だと?」

「え!?!」

煙が晴れると、陽弥が高出力の刃を小指と親指を挟んで、受け止めていた。陽弥は笑顔で、ジュリオに言う。

「……………俺が持っていたインフィニティソウルよりも……………俺はもつとでかいインフィニティソウルを持っているんだがね〜♪」

「あ……………ああ……………!」

「戯け者が!」

シグムディアの腕から炎の鞭が展開され、ジュリオに叩きつける。

「がっ!!?」

「何がシンセシスだって!?!……………笑わせんじゃね!!このタコ!」

陽弥は炎の鞭でジュリオを縛り上げると、あちこちの溶岩や地面に叩き付けまくる。

「お前が擬似シンセシスなら……………こっちは本当の真のシンセシスなんだよ!!」

「あああああ〜〜!!!」

縛り上げられたジュリオの顔は異形になっており、この世とは思えないほどの顔へと変貌した。

「お前には……………インフィニティソウルは重すぎる……………返してもらおうぞ!!」

すると鞭の先端がフックへと変わり、ジュリオの胸に突き刺し、奪われた陽弥のインフィニティソウルを取り出した。

「あああああ〜〜ッ!!!」

その直後、ジュリオの体が段々と変わり始めてきた。虫の姿だったのが元の姿へと変わり、さらに金髪だったのが、白くなり、皮膚が老化し、ヨボヨボの老人へと変わった。

「へえ〜……………俺のインフィニティソウルか奴のダークマタージュエルの力を使って若返っていたのか……………まさか本当の姿



は老いぼれた老人なんだなあ…… 覚悟はできてんだらうなあ？  
ジュリオ!!」

陽弥はシグムディアから降り、邪神覚醒した姿へと変身し、拳の骨を鳴らしながら、ジュリオの所へ歩いていく。

「まつ待ってくれ！私が悪かった！早まるな！要求は何でも聞く！そうだ！全軍に降伏信号を出しておく！お前らの勝ちだ！だから…… 殺さないでくれええ〜！お願いだ!!」

ジュリオが必死に土下座もすると、陽弥は感心し、ジュリオを後にする。

「そうか…… なら、良いだろう。一刻も早くクトウルフを八つ裂きにしないとな……」

陽弥が背を向けると、ジュリオは僅かな力でビームサーベルを展開した。

「お〜！そうか！なら…… 私も…… お前を殺す!」

ジュリオはビームサーベルを突き刺したが、陽弥は回避行動を取り、ビームサーベルを空手チョップで腕ごとへし折り、魔剣グラムを突き付けた。

「グアッ!」

「人間としての心も捨てたのか?」

「己れ、化け物めええ!」

「化け物は貴様だ!ジュリオ!」

「え?」

ジュリオは陽弥の言葉に疑問を持つと陽弥の目が緑に輝き、ジュリオを睨んだ。

「今からお前をあの世へ行かせる…… これは…… ジュライ・飛鳥・ミスルギとソファイア・斑鳩・ミスルギの意思だ!」

すると辺りで流れている溶岩が陽弥の手に集まっていき、半径20メートルの球体へと変わった。

「地獄の炎よ…… 今こそ奴の血肉を贄として捧げよう!」

「まつ待ってくれ!…… 待ってくれえつ!」

「死んで親に詫びろおおつ!このつ!糞痛皇子があつ!!!」

陽弥が溶岩の球体にエネルギーを注ぎ込み、紅炎を放出する紅蓮の球体へと変わった。

「アアアアアアアアアアアアツ!!!」

「ヘリオス流秘奥義!!」

陽弥は掛け声と共に、燃え盛る大地に脚を踏み込み、渾身を込めて、紅蓮の炎を放つ球体をジュリオに投げ付けた。

「『ガイア・ボール!!!』」

紅蓮の球体は燃え盛りながら、ジュリオに向かっていく。ジュリオは応戦するが、ビームガンが拡散・無効化され、泣きながら謝罪した。「アアアアアアツ!!!許してください!許してください!ごめんなさくいつ!!!アアアアア

~~~~ツ!!!」

ジュリオは断末魔の悲鳴を上げ、紅蓮の球体に呑み込まれ、地獄の業火で焼き付くされた。その様子を見ていたアンジユは語る。

「今度こそ、さよなら……………」 ”お兄さま” ………………」

そしてジュリオの姿が段々と薄れていき、体は崩れ、灰へと変わった。すると陽弥は魔剣グラムを抜刀し、ジュリオの燃え広がっていない首を切断し、首を持ったまま、倒れているテスト達に手を貸した。

「お前達…………… よく頑張ったな♪」

「陽弥さん……………」

すると陽弥は倒れているエヴァに近づく。

「エヴァ……………」

「……………」

「なに拗ねてるんだ……………?」

エヴァは無言のままであった。

「手を貸そうか?」

陽弥はエヴァに手を差し伸べる。

「…………… フツ、お前に言われたくない言葉だ……………」

エヴァはそう言うと、自分で立った。

「さて、クトウルフに挨拶しますか…………… 先に行く!」

陽弥はシグムディアに乗り、融合を解除し、ユニゴルディアンに騎

乗し、シンのいるヴァルヴァートル帝国へと向かった。

「やっぱり………陽弥はこうでなくては………」

エヴァは飛び去っていく陽弥を見て笑い、アンジュ達を救助し、火山を降りていった。

## 第59話：闇の根源

一方、ヴァルヴァートル帝国戦場では、シン達が必死に立ち上がるうとしていた。するとクトウルフが笑い出す。

「フハハハ！……痛むか？ヴェクタの英雄よ」

「黙れ……！陽弥をそっちの戦力へ引き寄せようとするなど……！」

「引き寄せる？……我は……アヤツの迷いに手を貸しただけだよ」

「何!？」

「いくら神とて、悩みはある……己の使命を抱いて、何になる？……欲望は儂い……直ぐに新しいものに興味が湧く……神も欲望に満ちる……彼らは世界の秩序を正そうとしているが、欲望の為に秩序を汚している……お前達護星神もそうだ。太古の昔……私の本体でもあるアルマロスはこの宇宙……嫌、全てを正そうとしていた。進化しなければならぬ欲に……アルマロスの欲望は限り無く、全てを支配できる……支配すれば、穢れた欲望を浄化できる。お前達のような偽物の秩序がやることではない。」

するとシンはクトウルフの言葉に呆れ、笑い出した。

「……プツ、ハハハハハ」

「？」

「アハハハハハハハハ！」

「何が可笑しいと言うのだ？」

「まあ、確かに可笑しいよ……あんたの言っている事の意味が……結局はお前……”一人だと何も出来ないんだ”……秩序を護ろうとしているけど、内心はどうだって良いと思っっている。結局、お前も欲望に満ちてるじゃないか……自分勝手の正義感と言う欲望に……」

クトウルフは自分の胸に手を当て、返答した。

「……分らない……でも、そうみたいだな。」

クトウルフは手からアメズヤクラを抜刀し、シンに突き付ける。  
「よって、お前を殺すことに決めた……………！あの世で悔い改め！」  
クトウルフはシンに突き刺そうとしたその時、

ドゴオオオオオンツ!!!

「っ!」

何処からともなく響いた轟音、クトウルフは上を見上げると、空から蓮獄の炎を発する無数の溶岩石が降り注いできた。

「……………あれは?」

溶岩石はネオ・ミスルギ皇国義勇軍や艦隊、さらにロイガー、イングに直撃していった。朝日が昇り、大きな影が写った。クトウルフは影の正体を見ると、陽弥が七星剣を上に掲げ、ユニゴルディアンと共にポーズをしていた。(分かりやすく言えば、リンクとエポナ様なポーズです。)

「燃え盛る溶岩石を流星群として使ったか……………ミッドガンドの護星神よ……………」

そして陽弥はユニゴルディアンで駆け巡り、倒れているシン達の前に立つ。すると陽弥がクトウルフに話し掛ける。

「久しぶりだな……………クトウルフ」

「見てきたのだから?もう一つの地球と惑星ロークでの出来事、そしてアルマロスと護星神誕生を……………」

「全部見てきた……………エスメラルダさんが……………」

「ふん、やけに素直を話すではないか……………人間は弱い……………直ぐに新しい者に目が入る……………あらゆる世界や星の理も同じことだ……………そのせいで生命がもがき苦しみながら散っていく……………」

「確かにお前の言う通りだ……………あの地球やロークでの下らない欲望、信念、狂喜、無差別、強欲、権力、絶望……………全ての理が揃ってできたのが”進化”と言う救済……………お前は全ての種を進化させ、世の中の理を正そうとしたんだろ?」

「その通りだ、護星神よ。我々は以上なテクノロジーを持った種を排除し、未だに文明が発達していない種に……………我々の力を分け与える。それしか方法はないのだ。」

「ふくん……………お前の場合はそう言う事を考えていたんだな……………なら、話が早い!!」

陽弥は七星剣とグラムを抜刀し、クトウルフに向ける。

「俺は……………全ての命を護る!例えそれが厄祭の理を持っていても!それでも!守って見せる!」

「陽弥様……………」

エミリアが陽弥の言葉に感心すると、クトウルフが怒鳴った。

「ふざけるなツ!!何が『守って見せるだ』っ!?こんな腑抜けた種に、未来を託すと言うのか!?!いい加減に我々の仲間へ入れ!!護星神!!」

「フンツ!その願い、願い下げだな!」

するとシンは陽弥の言葉に笑う。

「フフフフ、アハハハハ!」

シンは立ち上がり、デイメンジョン・ヴァルキュリアを抜刀した。さらにサムやタスクやリュウガ、フィーリ、ラルフ達も次々と立ち上がっていく。

「いやあ、本当に俺の馬鹿息子は……………性悪な事を考えたな!」

「色々持つて無茶な人……………嫌、無茶な”神”」

「でも、それが陽弥君ですから♪」

「そう!俺達はどんな種でも助ける!……………それが、護星神だ!」

すると陽弥の元にルナ達も駆け付けてきた。さらにエヴァやシグニューも来てくれた。

「僕達も!」

「私達も!」

「銀河を守る守護者だ!!」

勇敢なる戦士たちが勢揃いし、クトウルフは拳を握り、陽弥を睨んだ。

「クツ!9人の護星神と銀河七聖龍に選ばれた7人の守護者が!」

「皆!行くぞ!」

「龍装光!!」

《龍装光!!》

陽弥達は龍装光を展開した。

「掛かって来な! 邪神軍団!」

陽弥がクトウルフに指をクイクイツと挑発させた。

「小生意気な神々が! 殺れ!」

クトウルフ率いる軍隊が一斉に陽弥達に襲い掛かってきた。すると陽弥とルナ、リヨウマ、ソフィア、アレクトラ、ルチル、ルー、クロウはそれぞれの必殺技を発動した。

「超・剛火炎!」

「絶対零度!」

「雷龍破!」

「火鱗粉!」

「鋼山掌覇!」

「シユーンテイングスター!!」

「デイバインセイバー!!」

7人の必殺技が合体し、イング及び義勇軍、艦隊、イングの大半が吹き飛ばされた。その勇ましさにラルフ達も驚いていた。

「中々やるなあ、銀河七聖龍に選ばれた守護者は!」

「そうだな! 俺達も負けてられないな!」

「皆! 行くぞ! 陣形! トリシユーンラ!」

陽弥とラルフ、キャリー、バルト、ラルフ、サム、アルベルト、ドミニカ、ダーマ、デュランが陣形を組むと陽弥に宿る二つのインフィニティソウルの光が8人の護星神達に力を与えた。そして陣形トリシユーンラが発動し、陽弥達の体が光の槍へ変身し、ロイガー達に向かっていった。光の槍がロイガーの目を貫き、あっという間にロイガーが全滅した。

「インフィニティソウルを使って、他の護星神達を強化しているだど!? 糞がっ!」

すると今度はクトウルフに向かって突撃してきた。

「マナの大障壁!!」

クトウルフはマナの光を使い、防御すると、陽弥が叫ぶ。

「ファイアアアアアアツ!!」

「グッ!」

「いつまでその力に頼っているんだ!」

陽弥の波動がクトウルフのマナの障壁を押し出していくと、矢先に直撃しているマナの障壁に亀裂が入った。

「何っ!?!」

そしてマナの障壁がガラスのように砕け、光の槍がクトウルフの左目半分を破壊したり

「グアッ!」

「クトウルフ様!!」

ヴルトウームがクトウルフを助けに行こうとした時、ルナとソフィア、アレクトラ、そしていつの間にかシグニユーに乗ったエミリアが立ち塞がった。

「おっと! 貴方の相手は…… 私たちよ! ヴルトウーム!」

「クッ!」

そして同じ頃、リヨウマとセイレーンに乗ったローレライもクトウルフを助けに行こうとしていたダモンを相手していた。

「ここを通りたければ、この拙者! ドラゴレイド当主リユウガ・ネイルとフレイヤの一族サラマンディーネの子 リヨウマ・ネイルと!」

「マーメルド共和国第一王女 ローレル・ウルド・ネプチューンがお相手になります!」

「チッ! 龍と人魚の皇子と姫が! 凶に乗るな!」

2体の邪神が守護者に襲い掛かった。

そしてこちらも、クロウはアポカリプス、ルーはヴォルヴァドスを相手していた。

「決着を付けるぞ…… アポカリプス」

「そちらも…… 本気で掛かって来なさい。クロウ・F・アルメデイオ!!」



アポカリプスがマイクロロボットでクロウに攻撃する。ルーとヴォルヴアドスは互いの武器を抜刀し、話していた。

「お前は？」

「ヴォルヴアドスと申します…………… クトウグアに支える第3界邪神でもあります。そなたは？」

「ルーカス…………… それが俺の名だ…………… こいつは俺の機体…………… ジークフリードだ。ここでは兵士を巻き込んでしまう。どうか？ ここではなく、別の場所で一騎討ちするのは……………」

「それもそうですね……………」

ルーはジークフリードを飛翔形態へ変形し、ヴォルヴアドスと共に何処かへ向かっていった。

一方、クトウルフは9人の護星神に苦戦していた。

「グッ！」

「どうした！俺等9人の護星神じゃ荷が重すぎたか！」

「ほぎけええええっ!!」

クトウルフが叫ぶと、クトウグア、ナトラータホテプ、ハスター、ガタノトアへ分離した。

「4体に分かれた！」

「良し！ラルフ、キャリー、デユランはハスターを！」

「分かった！」

「ええ！」

「了解！」

「バルト、ダーマ、ドミニカはガタノトアを！」

「応！」

「分かったぜ！」

「あいよ！」

「爺とアルベルトと父さん達はナトラータホテプを！奴は再生する力を持っているから注意してくれ！」

「分かった！」

「任せろ！」

「陽弥、お前は？」

「俺は……クトウグアとイプシロンを相手する！殺るんなら、出して  
いなかったが4分の1の力を解放する！」

陽弥達はそれぞれの邪神を相手して行った。

「陽弥！」

「来い！陽弥・ギデオーン！」

「クトウグアツ!!!」

クトウグアは三刀流、陽弥も二刀流で相手した。

「以前より腕が上がったな！」

「当たり前だ！家の生徒達と鍛えていたからなあ！」

「フンツ！26人の使徒のことか……その様な腑抜けた者達と共に  
我々は倒されぬぞ！」

クトウグアの呪滅刀、ムラマサ、アメズヤクラが炸裂し、陽弥が吹  
き飛ばされた。

「クツ！やっぱり今までじゃ、駄目か……ならば、奥の手！」

陽弥はコスモバイルを起動し、三獣王達を召喚した。

「カイオウ、シンオウ、エンオウ！」

コスモバイルからカイオウ、シンオウ、エンオウが召喚され、そし  
て陽弥はユニゴルディアンと共に合体し、シグムディア ザ・シンセ  
シスへと変わった。

「今こそ、俺達が身に付けた特技を…… 奴等に見せようじゃないか  
！」

陽弥は七星剣とグラムを地面に突き立てると、シグムディア、カイ  
オウ、シンオウ、エンオウを多い囲むほどの紋章が浮かび上がった。

「天地人を司りしアプスとニケよ！今こそ、陸空海の獣の王と共に、仇  
なす者を滅する。我に常しえの天界、地界、人界を統べる力を与えよ  
！」

三獣王が雄叫びを上げ、シグムディアに憑依していく。

「何だ!?この光は!」

光がさらに強くなり、シグムディアの姿がみるみる内に変わっていった。そして光が消えクトウグアがシグムディアの姿を見て驚いた。

「っ!？」

シグムディアの角がさらに大きく伸びており、腕が四本、ドラゴンの様な鉤爪、尻尾、そしてビームウイングの形状がトンボとドラゴンを合成させた翼へと変わっていた。

「シグムディア…………ザ・タイタニス!!…………そして!」

陽弥はシグムディアの胸に手を当てると、シグムディアの胸からホワイトホールが出現し、その中へ手を入れた。そして陽弥はホワイトホール中からウルティメイト・バハムディアを取り出した。

「無限の光と闇、無限の聖と魔、生と死を司る龍神の王の力が宿りし裁きの龍神剣……………召喚!ウルティメイト・バハムディアアアアアアツ!!!」

「龍神剣か!」

「さらに!」

陽弥はまたホワイトホールの中へ手を入れた。

「何っ!？」

バハムディアのように引き抜くと、出てきたのはオレンジと赤黒い炎を発する妖刀であった。

「仇なす者の刃を無に変え、全ての命と我の常しえの魂よ!今こそ出でよ、影を切り払う永久の炎神刀 鬼羅丸っ!」

七星剣、魔剣グラム、ウルティメイト・バハムディア、鬼羅丸を手にする。シグムディアの下半身が変わり始め、ブラムと同じ四本足へと変わり、クトウルフを超える巨大な生命体へと変わった。

「これが俺の心に宿る……………二つの剣と刀と七星剣と魔剣グラムだ!」

シグムディアの背中から目映い光輪を展開すると、クトウグアは驚愕する。

「四刀流だと!!?」

「まだあるぞ!カイオウ!シンオウ!エンオウ!」

シグムディアの体からシグムディア ザ・リヴァイアサンになった  
カイオウ、シグムディア ザ・ケリユネイアになったシンオウ、シグ  
ムディア ザ・フェニックスになったエンオウが現れた。

「何っ!? 4体に増えた!?!」

「俺が炎の力を持つなら、カイオウは水…………… シンオウは土……………  
そしてエンオウは風の力を持っている…………… この意味が分かるか  
?」

陽弥の言葉に疑問を持つと同時にクトウグアはあることが解り、驚  
く。

「…………… つ!? まさか!?!」

「そのままかだ! シグムディア ザ・リヴァイアサンはガタノトアに  
抗戦しているバルトを援護!」

「応!」

「シグムディア ザ・ケリユネイアはナトラータホテプの動き封じろ  
!」

「畏まりました!」

「シグムディア ザ・フェニックスはラルフ達を援護せよ! フェザー  
ビットで奴の体を蜂の巣にしてしまえ!」

「了解!」

三獣王達はそれぞれの邪神と護星神の所へ向かっていった。

「お前…………… わざと我々を分断させているのか!」

「当然! こういう手段も使わなければ本当の戦いとは呼べない! それ  
とも? お前…………… もしかして俺達やヴァルキュリアスにビビっ  
ているのか?」

「っ!!」

「やっぱり、前の戦いで、僅かだが、ダークマタージュエルに亀裂が出  
来てるんだろ? あの時、俺がインフィニティソウルをジュリオに奪わ  
れた直後、ラルフが放った攻撃で、ジュリオの半分が火傷を負い、そ  
の神経を通じてダークマタージュエルに亀裂が出来た。つまり、ダー  
クマタージュエルは段々と諸刃の剣となっていく! 嫌、今もなってい  
る! そうなれば、お前達はクトウルフにもなれない!!」

「クソッ！」

クトウグアは三刀流を突き付け、陽弥もシグムディアの四刀流で防御体制をとった。

正にその頃、邪神覚醒で応戦しているラルフ達がハスターの暴風に苦戦していた。

「クッ！強い！」

「どうした？掛かって来い…… 豊穰の神フレイの血を惹いたヴェクタ人よ」

「まだだ！」

ラルフがアナイアレイタービームライフルを撃つがハスターの暴風によって無効化されていた。

「無駄なことを、そんなちんけな武装では勝てないぞ！」

「チッ！」

ラルフが舌打ちしたその時、

「ならー！これはどうかかな？」

何処からともなく、炎の羽が飛んできて、ハスターの暴風を貫いた。

「っ!？」

「何っ!？」

ハスターは驚き、フェザービットを回避した。

「この羽は!？」

ハスターは上空を見ると、腕を組んだシグムディア ザ・フェニックスになったエンオウが浮遊していた。

「貴様は!？」

「シグムディア ザ・フェニックス……… またの名を風を司る空の獣の王”エンオウ”だ………」

「何だと!？」

「ヴァナヘイムとアルブヘイム、スヴァルトアルブヘイムの護星神よ、我、エンオウがお主達に力を貸そう。」

エンオウはそう言うと、熱風を起こした。するとラルフ達の機体のサブカラーに炎と風のマーキングが付けられた。

「暖かい……この熱風……」

「心が……安らいでいく……」

「綺麗な……風……」

そして機体の背部のウイングがエンオウと同じフレアウイングへと変わった。

「これは？」

「我が力が宿った翼だ……存分に使うとよい」

「……分かった！」

ラルフ、キャリー、デュランは炎の翼を羽ばたかせながら、ハスターを囲んだ。

「『フェザービット展開！』」

エンオウ、ラルフ、キャリー、デュランのそれぞれの機体のウイングから1054機のフェザービットが展開され、砲口、銃口をハスターに向けた。

「グッ！」

ハスターは急いで回避し、フェザービットを撒こうとしたが、無数のフェザービットはハスターを追撃していった。

「しつこい武器だ！」

ハスターはフェザービットに向けて、真空斬を放った。しかしフェザービットがソードモードになり、ハスターの真空斬を斬った。

「何っ!？」

そしてソードモードになったフェザービットは一気にハスターへ向かっていった。

「何で!?!何でだ!?!我の風は全てを切り裂く鎌鼬の筈!それなのに何故斬れないんだ!……っ!」

気づいたときには、キャノン、ライフルモードのフェザービットのレーザー、ビームがハスターを襲い、ソードモードのフェザービット

がハスターの死角から突撃し、ハスターの四肢を断ち切った。

「グアアアアアアッ!!!」

「止めだ!」

ラルフがアナイアレイタービームライフルをキャノンに切り替え、ハスターをロックオンした。

「ヴァナヘイムの護星神よ…… お前に力を分け与えよう。」

エンオウがアナイアレイタービームライフルに炎の力を分け与えた。

「俺達の風は全てを突き通す!」

ラルフはライフルの引き金を引いた。銃口から紅炎を発する光と闇のビームが発射され、ハスターの顔や心臓を貫いた。

「ギアアアアアアアアアアッ!!!」

ハスターは悲鳴を上げ、消滅した。

そしてハスターが消滅したことにより、ヴルトウームが苦しみ出す。

「ガアアアアアッ!!!」

「何!」

ソフィアがヴルトウームの様子に不可思議に思い込んでいると、ヴルトウームの体が見ると枯れていき、鮮やかな色が黒く散り、老けていった。

「まさか!? ハスター様が! …… 嫌 …… 嫌 …… 嫌、嫌、嫌、

嫌、嫌、嫌!!!」

老けて苦しむヴルトウームが標的をエミリアの方へ向き、襲い掛かった。

「アタシこそが! 原初の華の筈! 何で!」

するとエミリアの前にソフィアが立った。

「教えてやるわ! ヴルトウーム!」

「っ!？」

「美しさの秘密はね……………」 ”愛” なのよ」

”愛” っ!？」

「心の中にある愛って言うのは…………… 無限の可能性を持っているの、貴方のような美貌しか持たぬ欲望では、美しいとは言えない…………… 言える事はただ一つ……………」

ソフィアはエリザベスのラツィーエルを抜刀した。するとラツィーエルの形状が変わり、細剣へ変わり、その刃から緑に発光するエネルギーブレードが放出された。

「…………… 貴女は…………… 既に”枯れた華” だったのよ……………」

ソフィアは渾身を込めて、細剣と化したラツィーエルをヴルトウムの顔面に突き刺した。ヴルトウムは悲鳴を上げず、絶命し、灰へととなった。そしてあちこちにヴルトウムによつて哀れな姿となった少女や女性の死体が転がっていた。

「可哀想に…………… この子達も…………… 未来へ行きたかったでしょう……………」

ルナは目を開けたままになっている死体をそつと目を閉じらせた。

「仇は…………… 取ります!」

ルナは拳を握り、空を見上げた。

その頃、クトウグアを相手している陽弥がハスターの気配が消滅した事に気付く。

「どうやら、ハスターが殺られた見たいだなあ」

「クッ…よくもハスターを!」

クトウグアはムラマサを降り下ろしたが、陽弥がムラマサを口で白羽取りで受け止め、ムラマサの刃を歯でへし折った。そしてそのへし折ったムラマサの刃をクトウグアの左目に口で吹き飛ばし、ムラマサの刃がクトウグアの左目に突き刺さると、陽弥は八卦でクトウグアの顔面にぶつけた。



「どうした？動きが鈍っているぞ！」

「ガアツ!!」

ふらつくクトウグアはムラマサを失い、二刀流になってしまった。

「俺はお前らを倒した後、アイホートに用がある」

「何!？」

「アイホート…………… ジュリオに寄生していた邪神だ…………… 寄生していた筈のジュリオが、どうして疑似シンセシスになり、どうしてジュリオを殺したのにアイホートがないんだ？」

クトウグアは陽弥の問いに返答しなかった。

「…………… お前…………… 何か隠しているだろ？」

陽弥がクトウグアの顔に近付いた瞬間、呪滅刀がクトウグアの腹から出て、陽弥は慌てて回避した。

「隙が見えすぎだ！」

クトウグアがアメズヤクラも突き刺そうとした時、陽弥はシグムディアの腰にぶら下げていたジュリオの首を取りだした。

「っ!？」

そしてジュリオの首をクトウグアの顔に近付け、力一杯でジュリオの首を潰した。飛び散った血がクトウグアの目に掛かり、苦しむ。陽弥はその隙に防御体制を取る。

「ジュリオの首を潰して!…………… 飛び散った血で目眩ましか!! 己えええっ!!!」

クトウグアは血を拭き取り、怒りながら二刀流で陽弥に襲い掛かった。

ちょうどその頃、アヴァロン最上層宮殿では、ジュリオの部屋に隠された謎の部屋…………… そこにアイホートが巨大な容器に入っている生命体を見る。

「さてと、そろそろコイツを使う時が来たぜ…………… !」

アイホートは容器ごと生命体を呑み込んだ。

「ガッ！……………ウグッ！……………グアッ!!」

アイホートはもがき苦しみながら、段々と姿が変わっていった。そして容器が割れ中から現れたのは女性を彷彿させるスラリとした人型で、巨大な翼のような形状の頭部が特徴。ラインは紫、鋭い鉤爪、鋭く尖った先端の尻尾を生やしていた。

「これで……………あの姿に戻らなくても十分な究極体へ進化出来た……………これが究極の人造生命体”00”のパワーか……………」

アイホートは壁に触れた。その直後、壁がみるみる内に溶けていった。

「ほんの触れただけなのに、これほどの力が発揮されるとは……………アポカリプス！」

「はい」

「今からお前を私のデータにインプットする。良いな？」

「はい、アイホート様」

「よせ、アイホートは私の仮の名前だ……………そうだなあ、前と違い、この姿と力は壮絶なパワーが発揮される……………最早陽弥・ギデオンの他、護星神達や銀河七聖龍、全ての敵勢力も……………赤子の頬を捻るくらいだ……………今度からこう名乗ろう！」

アイホートはそう言うと、宮殿外から出て、叫んだ。

「我が名は……………新・超次元生命体!”アルマロス”と呼べ！」

「分かりました……………アルマロス様……………」

「フフフフ……………時は……………満ちた！」

アルマロスは最上層と上層へ繋がるハッチを破壊し、貴族の住む上層へ降下した。

《ツ!!?》

市民や貴族達はアルマロスを見て、警戒する。

「フフフフーアハハハハ!!」

「何だ!?!」

「化け物!?!」

「アポカリプス…… 全ての配線をジャックし、生中継させる。それと、ナトラータホテプは調子に乗りすぎだ…… 始末しろ。残りの邪神軍団は用済みだ…… そしてコイツらは……」  
アルマロスが市民を見る。

《っ!?!》

「一部であり、欠片はナトラータホテプが持っているが、本体であるこのグリゴリの力がまだ起動出来るか試してみよう……」

するとアルマロスは手から何十メートルもあるグリゴリを取り出した。

「時は来た！ 我の復讐が…… 今！ 幕を開けた！ さあ、目覚めよ…… 我の力で生まれし子供達よ！」

するとグリゴリから白い胞子が放出され、市民や貴族に襲い掛かった。

「これで…… 我の計画が起動出来る！」

市民や貴族の悲鳴が鳴り響くなか、アルマロスは不気味な微笑みを浮かべた。

## 第60話：アルマロス再来

ある一方、ヴァランドール皇国に近い砂浜では、あるスターシップが不時着していた。そのスターシップにエツジとレイミ、リムル、バツカス、メリクル、ミユリア、サラ、エイルマツトが乗っていた。「イツツツ…… どうやら、無事にワームホールから出られたみたいだな、」

「そうね…… 良く耐えてくれたわ……」

レイミが心配そうにエツジ達やカルナスを見た。エツジ達は皆を呼び集め、任務を通達する。

「…… これより僕達はこの未開惑星を探索、そしてはぐれたケニー司令と合流する。」

《了解！》

レイミ達はエツジに敬礼し、外に出た。エツジは不時着したカルナスを見る。

「不時着した所が海岸で良かった……」

エツジはホツとすると、レイミが言う。

「エツジ！」

レイミの指差す方向に港が見えていた。

「港か…… 行ってみよう！」

エツジ達はヴァランドール皇国の港町へ向かっていった。中に入ると、たくさんの商店街や屋台が並んでいたが、人々は店を後回しにして、何やら救援活動をしていた。

「ここは…… 港町か…… だけど、」

兵士や市民の体のあちこちに包帯が巻かれていた。するとバツカスがある電波をキャッチした。

「ん？」

「バツカス、どうしたんだ？」

「この国から複数の電波を感知した。」

「え!？」

「文明レベルは惑星ロークと略一致している筈なのに、」

「つまり、この星にもあの地球の様やレムリックと同じ事になってい  
る…………… そう言いたいのか?」

「その通りだ…………… だが、」

「だが?」

「この惑星の至るところから複数の電波が流れている…………… まるで  
暗号を送信しているのだ。分かる暗号は…………… 『援軍を要請』と  
言う知らせなのだ…………… 』」

「…………… ?」

その時、何処からともなく変な音が聞こえてきた。するとエイル  
マツトがヴァランドール皇国の東門に目を向く。エツジ達も東門の  
方を向いた。

「何だろ? 行ってみよう!」

エツジ達は急いで東門へ向かった。そこにはたくさん包帯だら  
けの兵士やブルーシートで覆い隠している遺体が並んでいた。

「何だ!? この大勢の人達は?」

するとバツカスがあるものに目が入る。それはヴァランドール皇  
国市民と違う服装をした市民が搬送されていた。

「服装はこの国にいる人達と違う…………… 包帯が巻かれて治療されて  
いると言うことは…………… !」

「避難民か…………… 』」

「何が起こっているんだ…………… この惑星で…………… ?」

エツジ達は考えていると、また変な音が聞こえてきた。

「…………… 何の音だ!?!」

「エツジ!」

「…………… !?!」

レイミの指差す方向を見ると、同盟軍のクルーザーやセイクリッド  
メイル、パラメイルが現れ、中から同盟軍兵士が搬送されてきた。

「あれは…………… 異星人!?! でも、何でこの星に!?!」

「聞いてみましょう!」

エツジ達は見張っているザンダー兵に話し掛けた

「すみません！」

「君達は？」

「僕はエッジ・マーベリック。SRF所属スペースシップ“カルナス”の船長です。」

「副船長のレイミ・サイオンジです。」

「リムなのよ」

「自分はバツカス・D-79と申す。」

「メリクルだよ」

「ミユリア・ティオニセスよ」

「サラ・ジェランドと申します」

「…………… エイルマツトだ」

ザンダー兵士はエッジ達の名前に驚く。

「っ!? SRFとエイルマツト將軍!？」

「?…………… どういう訳だ」

「あ! いえ、まさか現在ヴァルヴァートル帝国で戦っているエイルマツト隊長がここにいることに驚いたのです!」

「ヴァルヴァートル帝国で戦っている?…………… ソイツは容姿も

俺と似ているのか」

「え? はい…………… もしかしたら、貴殿方は彼が言っていたエッジさんと…………… レイミさん…………… バツカスさんですね?」

ザンダー兵士の問いにエッジ達は首をコクリと降った。

「っ!!…………… やっぱり! まさかあなた方が救援に来てくれるなんて

! 感激です!」

「救援? どういう事なのだ?」

「はい、現在ヴァルヴァートル帝国付近での戦争があっているのです。邪神軍団と護星神達の最終戦争が起こっているのです。」

護星神と言う名にエッジ達は“ハッ!”と気付く。

「護星神…………… っ!? エッジ!」

「ああ! 間違いない!…………… 僕達は陽弥の世界に飛ばされてきたんだ!」

「なるほど、すると自分達がいるこの星が…………… ミスタ・ハルヤが

言っていた”ホライゾン”か……………」

「僕達も、陽弥のいるヴァルヴァートル帝国へ行ってみよう！」

エツジが言うとは皆は決意し、輸送機を借りてヴァルヴァートル帝国へ向かっていった。

その頃、バルト、ダーマ、ドミニカと交戦しているガタノトアはカイオウであるシグムディア ザ・リヴァイアサンに苦戦していた。

「グッ！何て言う強さだ！」

「どうだ！この我、シグムディア ザ・リヴァイアサンの力は！」

カイオウは三又の矛槍を振り回しながら、ガタノトアに槍先を突き付ける。するとガタノトアが独り言を始めた。

「あり得ない！あり得ない！…………… 絶海であるこの我が…………… 武者震いしている!？」

「どうした?…………… 壮絶な荒波は出さないのか？」

カイオウはさらにガタノトアを挑発する。

「こうなれば！」

ガタノトアは巨大な触手とタコ足、鋼の鋏を出すと口から黒い障気を吐き出し、塊を作り始めた。

「受けてみる！我が最大の力を全て注ぎ込んだ究極奥義！」

黒い障気から紫に発光する粒子が溢れ、叫んだ。

「全て…………… 石に変われえええっ!!」

ガタノトアは黒き塊を放出し、カイオウ目掛けて投げ付けた。

「そう来ると思ったぞ……………」

するとカイオウは矛槍を地面に突き刺すと、槍先から水が溢れ、一気に荒波へと変わり、ガタノトア目掛けて直撃した。そしてガタノトアが放った黒き塊が波によって吸収され、ガタノトアに直撃した。

「何っ!？」

「お前の石化ビームには弱点があった…………… 海水に含まれる塩分が粒子をタンパク質に変えることだ。そんなことになったら、石化

ビームを通じて、お前も石に変わってしまう……だからあの時、下は絶海……上空には石化ビームと言う戦略に出た。奥義を出したのが間違いだつたな……」

カイオウが説明している中、ガタノトアの足が顔まで徐々に石化していった。

「クソオオツ!!」

「さて、止めを刺すか……… フンツ!」

カイオウが次元跳躍を発動し、ガタノトアの近くまで移動し、ガタノトアを天高くまで蹴り上げた。そして同じ頃、リヨウマもダモンを切り上げ、吹き飛ばされたダモンは蹴り飛ばされたガタノトアとぶつかった。

「グアアアアアアツ!!」

ガタノトアとダモンが怯んでいる隙にローレイが父親からの秘奥義を放った。

「ウルトラ・マリリン!!」

セイレーンの手から巨大な渦潮が放たれ、ガタノトアとダモンを呑み込んだ。

「ドミニカ! お前の錬金術で私の海水に灯油を巻いてくれ!」

ドミニカはカイオウに言われた通り、錬金術で灯油を作り出し、ローレイのウルトラマリリンに流し込んだ。

「次にダーマ! お前の氷結で奴等の手足を突き刺せ!」

「おう!」

ダーマは手から氷の玉を出し、ウルトラマリリンに投げ入れた。するとウルトラマリリンが凍りつき始め、ガタノトアとダモンの四肢に氷柱が刺さっており、2体は身動きが取れなかった。

「何をっ!?!」

「バルト! お前の炎をリヨウマの刀に!!」

「分かったぜ!」

バルトは手から炎を出し、それをリヨウマの刀にやる。

「そして……… 我の聖水をその刃に!」

カイオウは手から光輝く聖水を取りだしリヨウマの刀に掛けた。



するとカイオウの聖水とバルトの炎、そしてリヨウマの雷が合体し、3つの属性の力を持つ光の刃へと変わった。

「斬れ！リヨウマ！」

「承知！」

リヨウマは刀を鞘に収め、雷の翼を羽ばたかせ、ガタノトアとダモンへ飛んでいった。そしてリヨウマは渾身を込めて刀を抜刀し、叫んだ。

「ネイル秘奥義！天雷旋龍斬！」

リヨウマの斬撃の速さがガタノトアとダモンを襲い、2体の体がどんどん消えていく。

「馬鹿な…… 我がこんな下等生物に殺られる!?…………… 嘘だあああああつ!!!」

「ガタノトア様あああああつ!!!」

最後の一振りでガタノトアとダモンの欠片を無くし、塵と化した。その様子を見ていたリュウガとサラマンディーネが見ており、リュウガはバスターライフルを掲げ、叫んだ。

「我が息子リヨウマ・ネイルが護星神と共に邪神”ガタノトア”とダモンを討ち取ったぞおおお!!!」

《おおおおおお~~~~!!!》

ドラゴンとドラゴンレイドの兵士達が勝鬨の声を上げるそれを聞いていたクトウグアは歯を食い縛り、悔しがる。

「グッ！」

「どうやら、ガタノトアが倒されたようだな！」

「クッ！」

クトウグアは二刀流で陽弥に襲いかかるが、陽弥の四刀流で弾き飛ばされた。

そしてシン達が応戦しているナトラータホテプはハスター、ガタノトアが殺られた事に怒り狂っていた。

「クソオオツ！クソオオツ！糞っ！糞っ！糞っ！糞おっ！！あの2体……………しくじりやがったな！！」

するとウィルがトマホークを降り下ろしてきた。ナトラータホテプは間一髪でトマホークを防御すると、ウィルがナトラータホテプに言う。

「ざまあねえなっ！」

「っ!？」

「あんなに風に殺られているんだ！お前らひよつとして……………本当は弱いんじゃないか？」

「グッ！」

ナトラータホテプはウィルを蹴り飛ばし、怒鳴った。

「黙れ！ヘルガスト人がっ!!我はナトラータホテプ！皇帝でもあるんだぞ!!お前らのような下等生物に負ける気がしない!!」

するとナトラータホテプの周りから植物や木々が生え、ナトラータホテプに襲い掛かった。

「何だ!?!この植物は!?!」

ナトラータホテプの部位が木々によって削られると、自信の再生で修復するが、襲いかかる木々が妨害する。

「っ!？」

「我……………シンオウの力だ……………」

シグムディア ザ・ケリユネイアになったシンオウが紅き瞳を光らせ、植物を操っていた。

「小生意気な獣の王が！」

ナトラータホテプはビームバスターを発射しようとした直後、ナトラータホテプの周りからセイクリッドメール、パラメール、インゼクティアメール、ガルドメール部隊が一斉射撃してきた。

「何っ!?!」

ナトラータホテプは防御するが、相手している勢力差に押されていった。

「貴様等！邪魔だ！」

「さてと、時間稼ぎはそろそろ終わりにしますか……………」

シンオウが言うと、謎の轟音が世界に響いた。

「何!?……………っ！しまった!!」

ナトラータホテプは本来の目的を思い出した直後、真上からステルスで移動してきたグランドスファイアが現れた。

グランドスファイアが現れたことにより、クトウグアは慌てる。

「クツ！グランドスファイア！貴様！この為に我等を分担させていたのか！」

「その通りだ、クトウグア…………… そうすればお前らを糸も容易く倒せる…………… まあ、アンタ達をグランドスファイアが来るまでの時間稼ぎの為に利用させて貰ったし、おまけに準備体操の相手になってくれたからな♪」

「っ!?…………… 準備…………… 体操…………… だどっ!？」

「グランドスファイアが来たことだ…………… 良いものを聴かせてやるぜ！」

陽弥はグランドスファイア内にいるトレーネルに通信を入れる。

「トレーネル…………… 準備は出来てるか？」

『何時でも、響かせられますよ!』

「良し！バハムディア！モードチェンジ！」

陽弥は七星剣、魔剣グラム、鬼羅丸を収納すると、ウルティメイト・バハムディアを投げた。するとバハムディアが光だし、剣からエレキギターへ変形した。

「エレキギター!？」

「カイオウ！シンオウ！エンオウ！戻ってこい！後、ついでにナトラータホテプを此処まで吹き飛ばしてくれないかな？」

「分かりまし…………… った!!」

シンオウはナトラータホテプをクトウグアの方まで蹴り続けた。そして渾身を込めた蹴りが炸裂し、クトウグアに直撃した。

「グエッ！」

「ナトラータホテプ!？」

カイオウ、シンオウ、エンオウが揃うと、三体は手からそれぞれの楽器を取り出した。陽弥はエレキギター、エンオウはバイオリン、カイオウは三又の矛がフルート、シンオウはトロンボーン。陽弥は三獣王達に言う。

「皆！用意は出来ているか!!？」

するとグランドスフィアから赤黒い流星が降りてきた。その流星から現れたのはブラムであった。

「俺も混ぜろよ」

「ブラム！」

「つたく、一人でアルマロスに挑むとは、この…… 馬鹿たれがつ！」

ブラムが陽弥の頭に拳骨し、陽弥は頭を抑えながら謝罪する。

「痛てっ!?悪かったな！」

ブラムは呆れ、ドラムを出すと、今度は上空からオメガプライムスが降下してきて、体のあちこちから音響スピーカーを展開し、グランドスフィアも装甲から無数の音響スピーカーを展開した。

「行くぜ！俺等の歌と爆音のメロディを耳の穴をかつぽじって聴け！」

陽弥はそう言うと、ギターの弦を弾き始めた。それに続きをブラムもドラムを叩き始め、カイオウやシンオウもフルートとトロンボーンを吹き、エンオウもバイオリンを弾き、オメガプライムスとグランドスフィアが音響スピーカーでアヴァロンに音楽を響かせた。

「何だ!？」

するとクロウと交戦しているアポカリプスに異変が起きた。

「っ!?グアアアアアアアアアっ!!!!何だこの音楽は!？」

アポカリプスは頭を抑えながら苦しみもがき、他のアジマス兵達や義勇軍も頭を押さえ始めてきた。クロウにはさっぱり分からなかったが、陽弥の音楽で心が高ぶってくるのを感じた。

「この音楽を聴いていると…… 何か力が湧いてくるぞ!？」

するとホライゾンの人達が次々に立ち上がり、気合いが入り込み、

雄叫びを上げ始めてきた。

「皆！恐れるな！陽弥さんのこの爆音と歌が俺達に力を与えてくれるんだ！」

「つまり!？」

「このメモロデイが鳴り響いている間……俺達は”無敵”状態ってことになるぜ！」

「マジかよ!？」

「なら、素手で相手しても良いって言う事だな！」

兵士達は一斉に義勇軍とアジマス兵に突撃してきた。義勇軍は苦しみながらも、陣形を取り、攻撃体制へ移った。義勇軍は一斉に射撃し、兵士に直撃した。だが、その兵士達の周りに次元バリアが展開されており、義勇軍は迫り来る兵士の圧迫差に怯え、逃げ始め出した。その光景にクトウグアは陽弥を睨む。

「グッ！卑怯だぞー！」

「ハッ!?お前が言うか……よっ!!」

陽弥はギターを振り回し、クトウグアの顔面にぶつけた。

「グアッ!!」

「諦める！もう大銀河帝国は壊滅寸前だ！そんなに抗っても無理だ！」

「黙れええええ!!」

クトウグアとナトラータホテプは最後の力を振り絞り、不完全のクトウルフへ合体した。

「仕方ない……使いたくなかったけど、行くぞブラム！」

ブラムは陽弥の体の中に入り、闇の腕を展開した。

「くたばれ!!陽弥・ギデオオオオオンツ!!」

クトウルフは肩部を露出展開し、デイスコード・ネビユライザーを発射しようとした。

「この技は俺とブラム直伝の技だ……受けてみるが良い！」

すると闇の腕が右腕に移植し、左腕が無くなり、変わりに右腕が白く輝く巨大な爪を持つ腕へ変わった。

「超・神羅万象！ゴッドイーター・フィンガアアアアアッ!!」



マロスであった。

「アイツは!？」

「我が名は……新・超次元生命体アルマロスだ！」

「……………アルマロス！」

陽弥はモニター画面に映っているアルマロスを睨む。

「復活した我はこれより……………役立たずである邪神達を……………皆殺しにする！」

《っ!!?》

突然の言葉に皆は戸惑う。

「……………アイツ、今なんて?」

「クトウグア……………ナトラータホテプ……………もう良い……………この役立たずが……………」

突然、陽弥の後ろから声がし、急いでその場から離れると進化したアルマロスが立っていた。シン達がアルマロスがいることに驚く。

「お前は!？」

「何だ!? アイツは!?! 今までの邪神より、遥かに超越しているぞ!？」

「……………久し振りだな、ミッドガンドの護星神……………」

「……………お前もな……………アイホート……………嫌、”超次元

生命体 アルマロス”!!」

陽弥の言葉に皆は息を飲み、警戒した。

《アイツが……………アルマロスっ!!》

「何時から、我がアルマロスだと分かった?」

「……………最初からだ……………クトウルフが封印されるとき、お前の姿が見えた……………ドウムを邪神にしたのも……………リーパーズを造ったのも……………クアンタ人を毒ガスで皆殺しにしたのも……………全部お前だろ……………」

「……………まさかそこまで知られていたとは……………感服だよ♪」

「それより、何だ、その体?……………新しい依代?」

「これか?……………これはお前の乗っている001”シグムディア”とそこのクアンタの姫さんが乗っている002”シグニュー”と同じ……………クアンタ人が造り上げた究極の超・人造生命体”0

00”だからなあ!!”

アルマロスの衝撃な事に陽弥は驚いた。

「何っ!?”

《000っ!!?》

「000!?!?.....つまり!?”

「その通りだ.....この生命体は最初にして最強.....全時空と宇宙.....嫌、全知全能を統べる事ができる生命体だからな.....」

陽弥は七星剣とグラムを合体しバスターソードでアルマロスに斬りかかった。

「ここで倒す!?”

「無駄だ.....」

アルマロスは手を陽弥に差し伸ばした時、陽弥の動きが止まった。

「グッ!!”

「そんな!?”

「無駄だと言っているだろう.....我と000は完全に適合し、お前の武器の出力、火力をも遥かに超越している.....この合金はその姫さんの持つクアンタニウムハートの半分でもあり、クアンタ人のエネルギー源”クアンタニウム”を使っている。シグムデアのハイパーノバビームライフル等の近い威力を持つ兵器も無効にすることが出来る.....そしてあらゆる対象の時間を操ることもできる.....」

《陽弥!／陽弥さん!／陽弥殿!／お兄ちゃん!／陽兄い!／陽兄さん!／兄貴!／先生!／マスター!／陽弥様!／パパ!》

シン達が陽弥を助けに向かおうとした直後、アルマロスの頭部左右に付いている翼がリングを作り、リングの中枢から集束ハイパーノバビームを放った。シン達は吹き飛ばされ、陽弥が叫ぶ。

「皆!グアッ!!”

「長きに渡たる意味がなかったなあ、ヴェクタの若造.....だが、今日もこれまでだ.....そうだなあ、今日からコイツの名は.....”『零(ゼロ)』”と名付けよう.....そして我、ア



ルマロスとゼロはこれより、全ての存在をリセットする……」

アルマロスは陽弥を放り投げた。

「ガハッ！」

「陽弥・ギデオンよ……我を止めなければ、エンブリヲが造り上げた偽りの地球へ来い……我はその星を巢にする。」

アルマロスはそう言うと、ナトラータホテプを睨らんだ。するとナトラータホテプの頭からとてつもない程の電流が流れ込んだ。

「グアアアアアアッ!!!」

ナトラータホテプは苦しみながら、叫ぶ。

「ナトラータホテプ……貴様に我のグリゴリの力に頼りすぎだ……よって、貴様等邪神どもは我の手で駆除する……」

アルマロスは手のひらから光の槍を作り、ナトラータホテプ目掛けて投げた。光の槍がナトラータホテプの頭部に突き刺さり、消滅した。

「アアアアアアアアアアッ!!!」

塵と化したナトラータホテプが消えると今度はクトウグアを睨む。

「次は……貴様だ。生ける炎のクトウグア」

アルマロスはまた光の槍を作り、構える。

「グッ！」

すると陽弥がクトウグアを守ろうと前に出た。

「ん？」

「ふぎけんな！お前！自分の一部なのに殺すって言うのか!？」

「下らん感賞だ……我から出た擦り出た垢は処分……それは生命としての本能だからだ……」

アルマロスはそう言うと、クトウグア目掛けてハイパーノバビームを放つ。陽弥はクトウグアを抱え、回避した。

「グアッ!!」

「今だけは生かしてやろう……だが、次に合間見えたときは……必ずクトウグアとヴォルヴァドスを殺す……あ、それから……」

次元跳躍よりも速いアルマロスはシグニューに乗っているエミリ

アに近付き、エミリアを次元跳躍で空間転送でアルマロスに捕まった。

「っ!!」

「……………まさか!?……………っ!!」

「この姫さんとアヴァロンは人質だ……………」

「エミリア!!」

「陽弥・ギデオンよ……………愛する姫君を助けたければ偽りの地球へ来い……………我は待っているぞ……………行くぞアポカリプス……………」

アルマロスはエミリアを連れて、アヴァロンへ戻ろうとした。

「了解……………クロウ・F・アルメディオ……………覚えておけ、それからイプシロン……………あなたはもう用済みです……………」

アポカリプスはイプシロンの頭部に付けられている王冠を解除した。イプシロンはグラリと倒れ、アジマスとデルタが駆け付ける。

「っ!!」

「「イプシロン!／兄様!」」

「……………う……………う……………私は……………一体何を……………?」

イプシロンが目を覚ますと、アルマロスはワームホールを開いた。

「それでは、あらゆる種族よ……………偽りの地球で」

「待てっ!!」

陽弥はシグムディアから降り、羽を広げ、ワームホールに入ろうとするアルマロスへ飛んでいった。同じくエミリアも必死に抵抗するが、アルマロスの力が強大で身動きが取れなかった。二人とも互いの手を差し伸ばし、叫んだ。

「陽弥様あああああっ!!!」

「エミリアアアアアアッ!!!」

しかし、アルマロスはエミリアを連れてワームホールの中に入り、消えた。陽弥は後一步の所で間に合わず、地面へ転げ落ちた。そしてアヴァロンが義勇軍を置き去りにして、何処かへと去っていった。

「お兄ちゃん!」

ルナが心配すると陽弥は地面を叩き付け、悔しがった。

「……クソオツ！……クソツ！クソツ！……エミリアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!」

戦火の中、陽弥は彼女の名を叫び続けた。

一方、アヴァロンは偽りの地球におり、偽りの地球を眺め、宮殿内にいるアルマロスが言う。

「さて、救済を始めよう……」

アルマロスは指を鳴らすと、偽りの地球の後方から黒紫の天体が次元跳躍して現れた。

「血の種よ……アヴァロンと偽りの地球……そしてバロツクダークを融合させ……これより、”MP（ミッシングプロシージェ）”を放出し、及び我の計画”終焉融合”を開始せよ……」

黒紫の天体”バロツクダーク”から赤黒い触手が出現し、偽りの地球の地表に直撃すると、大地が砂漠化し、植物は枯れ、青かった海が血のように赤く染まった。

「さあ、目覚めよ……情報を取り組み、生命を狩りし我が眷属よ……ファントム！」

アルマロスが言うと、全体黒い海で覆われたバロツクダークの中から、赤黒いカラーをした艦隊が無限に湧いてきた。

「これで……我が望んだ理が完遂出来る……」

アルマロスは台に寝かせている巫女服を着たエミリアを浮かび、呪文を唱え始めた。

「エミリア・レグレシア・クアンタ……この姫巫女に宿るクアンタニウムハートと我とグリゴリを一つにせよ……」

アルマロスの体からグリゴリが飛び出し、白き胞子がエミリアとアルマロス、そしてグリゴリを包み込んだ。

「残るは……アーククリスタルと……奴のインフィニティソウルだけだ……」

白き胞子の中で謎の物体が紅き目を光らせた。

## 最終決戦編

### 第61話：大戦前夜 前編

ルナは陽弥を探していると、シュミレーションルームの窓越しにシンがいた。

「お父さん…… お兄ちゃんは？」

ルナの間にシンは首で窓の方をジエスチャーする。

「？」

ルナはシュミレーションルーム内を見ると、そこにいたのは全身傷だらけで汗まみれになってまで500トンの鋼鉄の模擬刀を振り回していた。

「あんなに必死になった陽弥は…… 始めて見たかもしれない」

「よつぽど、エミリアさんの事を心配していたんだね……」

「…… ジャヴィックの言う通りになってしまった…… 今回の戦いは…… 先のラストリベルタス以上の戦況になるって…… 正にこれだな……」

「クトウグアは？」

「マギーやモーティン…… 医療班やヒーラー、陽弥の生徒であるエミリーとリカとユミが治療している…… まさか今まで戦って来た邪神全員がアルマロスの道具にされていたとは…… 皮肉だ……」

「考えても仕方がない…… 種族銀河同盟とアジマス連邦、ホライゾンの民、ネオ・ミスルギ皇国義勇兵、銀河連邦、シャドウブローカー、モーフィス、ザンダー、未来からルーカスが所属している次元連邦警察、多種族次元革命連合『レボリユード』」、そして陽弥の種族大銀河連邦を結成した巨大共和国国家『多種族大銀河連合』が樹立された…… もうこれは、俺等だけの問題じゃない世界…… 嫌、正確に言えば別世界や次元を巻き込んだ最終戦争になりそうだ……」

「………… そうだね」

ルナとシンは陽弥を心配そうに見る。そして陽弥は一息し、タオルで汗を拭いた。

「ふう〜…………… クツ！」

陽弥は歯を噛み締め、壁に拳をぶつけた。

「(あの時…………… もっと早くアイホートを殺しておくべきだった…………… それなのに…………… 俺は…………… )…………… チクシヨウ  
!!」

陽弥は悔やんでいると、デバイスから通信が入ってきた。

「ん？」

陽弥はデバイスを開くと、モニターに映ったのはラファイだった。

「ラファイです。陽兄さん……………」

「どうした？」

「はい、陽兄さんに会いたい人物が8人もいまして…………… その……………」

ラファイが突然小声で陽弥に話し掛けてきた。

「…………… 何だ？言ってみろ」

「その8人の中に……………」 エッジ・マーベリック「さんがおりました……………」

ラファイの言葉に陽弥は驚いた。

「エッジ・マーベリック？…………… エッジ・マーベリック……………」

エッジ…………… つ!!? エッジ・マーベリック達が!？」

「ええ」

「…………… 分かった。直ぐにそちらへ向かうと伝えてくれ…………… それから父さんとクロウさんも連れてくる……………」

「分かりました」

陽弥はラファイとの通信を終了すると、急いでシャワーを浴びた。

その頃、本部のフロントでは、ラファイが陽弥との通信を終えると、フロントの前で立っているエッジ達に報告する。

「陽兄さん自ら来てくれるって……それと陽兄さんのお父さんや……彼も……自ら……」

「彼？」

それから数分後、私服に着替えた陽弥がエッジの所に駆け付けてきた。

「よお！エッジ！」

「陽弥！」

陽弥とエッジは腕を組み、再会した。

「久し振りだな！」

「そつちも！」

すると陽弥はもう一人の仲間がいないことに気付く。

「フェイズは？」

すると皆は黙り混むと、エッジが説明する。

「……実は」

エッジ達はこれまでの事を話した。フェイズはあの時、惑星ロークで黒き民族が救えなかった事に、ミッシングプロージュエがフェイズを選んだ。そしてフェイズを苦しみから助けようとしたが……

それを聞いた陽弥は真剣になっていた。

「……そうか、フェイズは己の罪悪感に吞まれて……自分自身がミッシングプロージュエになってしまったのか……」

「だけど……フェイズは自分のやったことに責任を果たした……」

「……まあ、誰にだってあるんだ……残酷な運命って物の……」

「それより、この状況は何だ？物凄い怪我人だらけじゃないか……」  
陽弥があちこちにいる怪我人を見て、陽弥に問う。

「無理もない……俺が復活した時はもっと酷かった……」  
「え？」

陽弥の言葉にエツジは驚く。

「戦いが終わっていないってどう言うこと!？」

「…………… エツジ達が来る前、奴が姿を現したんだ……………」

「奴?」

「…………… ” 超次元生命体 アルマロス” だ」

「超次元生命体 アルマロス?」

陽弥もこれまでの事を話した。超次元生命体アルマロスの事や、護星神誕生の事、先の戦闘、そしてエミリアが拐われた事も……………

「そんなことが!？」

「結果がこれだ…………… アヴァロンにいるネオ・ミスルギ皇国の民達はやアジマスの民も含めて人質になっている…………… その中にエミリアも……………」

「だけど…………… それで良いのか? ホライゾンの人達は君たちの…………… 「分かってる!!」っ!？」

陽弥はエツジが立ち上げた条約『未開惑星保護条約』の事を破っている事に……………

「分かっている!…………… けど、彼等はアイツ等に奴隷として働かせられ、奴等のテクノロジーを見てきた…………… お前達の世界での規則を破っている…………… もう巻き込まれてしまっているんだ…………… でも、彼等は武装と言うより、防壁だけを作っている…………… 相手を容易く殺す兵器を造らないよう各国の王達には約束している……………」

「…………… 本当だな?」

「大丈夫…………… この戦いが終われば、兵器を没収する…………… もう、二度とあの地球のような事は起こさせない……………」

陽弥の決意にエツジは感心した。するとそこにシンが来た。

「…………… 成長したな、陽弥……………」

「父さん……………」

「初めまして、私の名はシン・ギデオン…………… 陽弥の父です。」

シンはエツジに握手で交わした。

「あ、どうも……………」

「息子からあなた方の事を聞いていました……………そして彼からも「彼？」

シンはそう言うのと下がり、シンの後方にクロウが立っていた。

「……………」

《ツ!!?》

「嘘……………!?!」

「ミスタ・クロウ……………!?!」

「クロウ……………何でここに!?!」

「……………理由があつて、彼等と共に戦っているんだ……………それと、ケニー司令やU S T Aの船員達も全員無事だ。」

「ケニー司令達が!?!」

「ああ」

クロウの所に金髪の男性やU S T A隊員が集まった。

「マーベリック君」

「ケニー司令!」

「君達も無事で良かった……………我々は彼等との話を聞き、協力することになった。」

「協力? 一体何の?」

「その事は彼に聞くと良い……………」

すると陽弥の所に黒い体毛をしたアヌビス人とトゥーリアンのブリマーチがテレポートしてきた。

「御初に申し上げます。アヌビス総督のザーン・グリブナグと申しませす。」

「同じく……………惑星連合加盟種族トゥーリアン代表 フェドリアン・ブリマーチです。」

「早速ですが、ケニー司令 恐らく、貴方方が仰られた以上なワームホールと言うのは恐らく“タイムトンネル”でしょう。きつとアルマロスの影響で、我々の世界と貴方方の世界……………と言うより、正確に申しますと過去の別の世界と繋がった……………言うことです。」

「その事は、我々も戸惑った。それより、今起こっていることを報告してくれないか?」



ケニー司令がザーン・グリブナグに注意する。

「失礼しました。良い報告と悪い報告の内容は我々が偵察ドロイドを送った結果、飛んでもないことになっていました。良い報告では幸いなことに、偽りの地球に残されていた偽りの人類は全て、ヴェクタ星に移住させ、残りの大半はアヴァロンにいらっしゃると思われます。次に悪い報告はただ一つ。これです。」

するとザーン・グリブナグが手のひらから、モニターを映し出した。「何だこれ!?!」

それに映っていたのはバロックダークの触手が青かった偽りの地球を真っ赤に染めていた。そしてバロックダークを本拠地として、偽りの地球、アヴァロンと言う惑星直列が出来ていた、

「バロックダークが偽りの地球を飲み込み……見ての通り、真っ赤な星へと変貌を遂げたのです。さらに、アヴァロンが露出展開したのです。」

アヴァロンが露出展開し、黄金ではなく、紫の巨大な花の形になっていた、

「あれが……アヴァロン!」

「紫色の……花?」

「アヴァロンの花卉にはしっかりとコロニー用のガラスがされているため、安心ですが、中枢や花卉に砲台らしき物が確認されました。」

画面が拡大され、砲台を見る。すると陽弥が何かに気付いた。

「ん?」

「お兄ちゃん……どうしたの?」

「嫌、あれ……何処かで見たような気がして……」

陽弥が首をかしげた直後、クロウとルー、シンが思い出す。

「……まさか……あの砲台は!?!」

「……収斂時空砲!?!」

《ツ!!!》

皆は驚き、シンはその数と大きさに驚く。

「花卉が六つ……そして中枢にも!……もしあんなデカイ収斂時空砲を発射されたら!」

「しかも、今やっと分かってきた！奴が言っていた”全ての存在をリセット”と言うのは!!」

「それに！エツジ達がここへ来たのも、影響って言っていたけど、本当の意味は！」

「じゃあ！この巨大な惑星型の収斂時空砲は……!!」

陽弥が言うと、ザーン・グリブナグは言う。

「過去、現在、未来へ繋がるタイムトンネルを開くテスト……そしてタイムトンネルによってあらゆる全世界と全時空に収斂時空砲を放つ。そんなことをしたら……私達……嫌、関係ない世界が巻き込まれる……」

《!?!?》

「嫌！ちよつと待て！それマズインじゃないか?!?!」

「そうだよ！そんな事をしたら！」

「ええ、間違いなく……あらゆる時空が乱れ……消滅するでしょう……さらにあらゆる世界の過去、現在、未来を破壊される……その前に、アヴァロンのメインコンピュータを奪還しなければなりません。だが、戦況は五分五分になります……そこで、」

ザーン・グリブナグから陽弥がもう一つの作戦を通達する。

「アポカリプスをジャックする……最も有効な手段で相手するんです。」

「有効な手段？」

「父さん……俺が戦略ゲームやバーチャルゲーム、FPS系のゲームが得意と言うことは分かるよな？」

「ああ、それで？」

「これです」

陽弥が取り出したのは昔のゲームのカセットであった。

「なるほど、ゲーム内に閉じ込め、誰かがワクチンプログラム（プレイヤー）になって戦うのか……面白い！」

「その案……良いと思います！」

「多分、アルマロスとアポカリプスは真つ先に収斂時空砲を使うと思

うんだ……………」

シンは考え込むと、それを聞いていたフィーリが割り込んできた。「良い考えがあります！僕達ファイリジス人と異次元の民の技術、ホライゾンの魔法やエッジ達の呪紋の加護を使って、強力なミラーシールドを展開できないかな？そうすれば、ミラーシールドを上手く屈折させて、敵の艦隊に直撃する。どうかな？」

「名案だ！恐らく、アヴァロンの収斂時空砲は多分、永遠語りを奏で始めたとしても、あれだけのデカさだ…………… チャージに時間が掛かると思う。」

「その前やその隙に、アヴァロンの収斂時空砲の砲台を先に破壊するんだね？」

「そうです。収斂時空砲を失った隙に、陽弥総統や皆さんの艦隊がアヴァロンへ突入し、アポカリプスを排除、そして一気にバロックダーク中心部を叩き込むのです。我々も無人戦闘艦隊や戦闘機を使い、援護します。」

「なるほど、優位つシンセシスである彼をバロックダーク中心部に行かせるのですね？」

「面白い！やろう！」

エッジが気合いを入れる。

「どうするんだ？ヴァルキュリアス総統……………」

皆の視線が陽弥の方を向く。

「そんなの…………… 最初っから決まっているじゃないか！」

陽弥はスーツを起動し、口回りにマスクを付けた、

「俺を何者だと思ってる？俺は…………… ミッドガンドの護星神！ヴェクタ人シン・ギデオンとメイルライダー ヒルダの子！陽弥・ギデオン！太陽神龍、超神星煌龍帝ノヴァに選ばれし守護者にして、エミリアの騎神だ！超龍装光!!」

陽弥は超龍装光を発動し、ヴァルキュリアスの兵士へ叫ぶ。

「ビームフラッグを掲げろおおおっ!!」

陽弥の命令にヴァルキュリアスの兵士達や民、スペクトロブス、三獣王達が雄叫びを上げる。

《おおっ!!》

その光景にシン達はその圧迫差に驚く。

「アイツが……別の国家の主導者になるなんてな……」

「ビツクリだよ……」

シンとヒルダが自分の息子に驚かされた。

その夜、ルナは一人で呪紋を勉強していると、陽弥がやって来る。

「ルナ……」

「お兄ちゃん？」

「ちよつと……来てもらいたい場所があるんだ……」

陽弥はルナを連れて、何処かへ転移された、ルナは気が付くと、何処かの山頂におり、大きなクレーターがあつた。不思議なことに、山頂は寒いはずなのに、全く寒くなく、辺りには湖と緑溢れる森、そして桜の樹が並んでいた。

「ここは？」

「アテナイ共和国にある呀麗山って言う所で、その山頂の中心部だ……普段は山で多い困われているが、中心部だけはこうやって湖や桜の木がそこらに生えているんだ……そしてこの呀麗山には……”山の主”がいるんだ」

「山の主？」

陽弥は湖に入りながら説明する。

「滅多に姿を現さない獣……まあ、分かりやすく言うと”霊獣”だ……その霊獣は俺のユニゴルディアンと同じ、乗り手を探している……」

「何で？」

「山の主にも……相棒が必要って言う事だ……」

そう言うと、風が吹き、桜の花弁が宙に舞う。そして雲で隠れていた月が現れ、月光で湖や桜を照らし出す。

「出てきたぞ……………」

陽弥の目線の先に何か光るものが写った。

「あれが……………霊獣……………」

桜の樹の影から、月の光のように輝いており、蹄が二つ、鬣は長く白く光っており、不気味な事に左右に人面が二つある馬の神獣が現れた。神獣は青白く光る体毛からオレンジに光る紋章を浮かばせながら、陽弥とルナに近付く。すると陽弥の全身にもオレンジと緑に発光する。

「お兄ちゃん！体の表面から紋章が!？」

「そう言うルナも表面から紋章が浮かび上がってるぞ」

陽弥の言葉にルナは体のあちこちを見る。足や手、嫌、陽弥と同じ全身から紋章が浮かび発光していた。

「っ!？」

「ルナはセレーネの加護を貰っているから、青紫の紋章が浮かび上がるんだ……………俺はシンセシスとヘリオスの加護を貰っているから、オレンジと緑も混ざっているんだ……………」

そう言っている内に、神獣が陽弥の近くに来た。陽弥は神獣の神を撫でる。すると神獣は陽弥の体から発光している紋章を見て、拗ねる。

「どうやら、同じ仲間と勘違いされているようだな……………」

ルナは恐る恐る、神獣に触れた。すると神獣は何もしなく、大人しかった。

「ルナ……………乗ってみな♪」

「えっ?無理よ!私お兄ちゃん見たいな神様じゃないのよ!確かに愛馬は欲しいかも知れないけど……………」

「ルナ……………♪」

「……………もう!分かったわよ!」

ルナは陽弥の指示通りに神獣に乗った。

「……………どうやって、移動するの?」

「鬣を引くんだよ、本当は手綱と鞍があれば、操作が簡単なんだが……」

「(こ)う?」

ルナは思いつきり、神獣の鬣を引っ張った。すると神獣の眼が変わり、陽弥は唾然する。

「あ……」

「えっ!？」

神獣が急に暴れだし、水面の上を駆け巡った。

「うわああああ~~~~!!?」

ルナはしっかりと鬣を掴み、落ちないようにしていた。

「…… 思いつきり引っ張ったな…… アイツ……」

「助けて!お兄ちゃ~~~~んっ!!!」

「仕方ない…… ユニゴルディアン」

陽弥は叫ぶと、空からユニゴルディアンが来てくれた。

「乗るよ♪」

陽弥はユニゴルディアンに乗り、なだめながらルナを追いかける。

「行け!」

ユニゴルディアンが超速を使い、神獣に追い付いた。陽弥はユニゴルディアンから神獣に乗り移り、なだめる

「どうどう……」

落ち着いたのか、神獣が暴れるのを止め、大人しくなった。

「つたく、人の話を最後まで聞けよな?……」

「はい……」

ルナは反省し、陽弥の指示通りに神獣を乗りこなす。最初は落ちたり、振り回されることもあったが、ルナは諦めなかった。そして数時間後……

「大分、乗りこなすことが出来たじゃん!」

ルナは鬣を少し引っ張りながらなだめ、神獣をコントロールしていた。

「私…… 神獣に乗っている!」

ルナが走らせるのを止めると、神獣はルナの方を向き、拗ねりはじ

めた。

「多分、神獣は乗り手をお前に決めたらしいな！」

「月のように光っているまるで神秘に満ちた聖霊だわ…………… そうだ！ 貴方の名前は” ミステイック”！ 今日から貴方の名前は” ミステイック” よ♪」

「ミステイック…………… 良い名前じゃないか♪それからルナ……………」  
「何？」

「エミリアの代わりに…………… シグニューに乗ってくれないかな？ — 応、シグニューには頼んでいるし……………」

「分かったわ……………」

陽弥とルナはミステイックを連れ、本部へ戻った。

翌日、ホライゾン上空に無数の艦隊、地上には部隊が揃っていた。  
エッジ達はその数に驚く。

「うわぁ…………… スゲエ数だ！」

「あらゆる全部隊や全艦隊を招集していますからね…………… これからの戦闘で死傷者が出るのは間違いないでしょう。それに、もしバロックダークが他の星へ次元跳躍されたら終わってしまいます。よって7体の機神を前線基地として、グランドスフィアとE n IIを最終防衛ラインにします。陽弥総統…………… よろしいでしょうか？」

「良いよ…………… もしアルマロス何か仕出かして来たら、デススターとレッドダスト（核ミサイル）を発射しろ……………」

「分かりました。」

「エッジ…………… 援護してくれ」

「分かった」

「父さん達も…………… 頼む」

「分かった…………… それと陽弥…………… 格納庫に来てくれ  
「うん」

陽弥はシンに連れられ、格納庫にいった。

「俺のシグムディアを完全装備!？」

突然の事に陽弥は驚く。

「ああ、俺のARSスーツに搭載されていたシステム……通称”Blade”をハイパーノバビームライフルに組み込んだ……元々のシステムはユグドラシルにあった惑星……”ルミナス”の滅んだ文明とテクノロジーを使つて、やっとハイパーノバビームライフルに組み込むことができたんだ。ライフルがアサルト、ショット、マシンガン、スナイパー、キャノン、そして精密射撃モード用のスコープとストック、グリップ、バレルを追加させた……さらにハイパーノバビームライフルの弾の能力を切り替えることもできる。」

「完璧だな……」

「まだあるぞ」

次のコンテナを開けると、中に入っていたのは二門のランチャーが装備されているジットブースターやアーマードバパック、ミサイルコンテナ、更に剣の刃が積み込まれていた。

「それは？」

「シグムディア専用のパック……その名も”フォーミュラ”だ。このパックには3年分のペトルサイト粒子を注ぎ込んだ兵器”カルネージ”が装備されている。さっきのハイパーノバビームライフルと連結すれば、カルネージがハイメガランチャーと化する。さらにフリーズランチャーや対艦ミサイル6隻を肩のブースターパックに付けてみた。」

シンは早速シグムディアにフォーミュラパックを付けてみた。シグムディアの姿に啞然していた。

「ゴツくなったな、」

「まだあるぞ、シグムディア専用のシールドだ!」

シグムディアの両腕に実体盾が装備されていた。

「何これ?」

「両腕に一つずつ装備された対アルマロス対策として開発した兵器の一つ。”ビームガーター”だ。」



「…… ガーター？…… ボウリングの間違いじゃ？」

「違う、違う…… これもクアンタ人のテクノロジーを使って造り上げた実体盾及び、光学障壁を展開することができるシールドだ。実体盾がビームの衝撃を吸収し、光学障壁があらゆる攻撃を拡散無効化できるんだ。」

シンの言葉に陽弥は不可思議に思う。

「…… 強力な光学兵器も？」

「…… そうだね、」

「…… 収斂時空砲も？」

「アヴァロン見たいなバカデカイあれは無理だな……」

「…… そこはおいしいとこないんだな……」

「無理言うな…… 収斂時空砲をも無効化してしまうんだぞ…… ありがたく使ってやれ」

「…… ハア、分かったよ…… 父さん」

「最後に…… お前の新兵器を見せてやる」

最後のコンテナを開くと、巨大な兵器と黄金の装飾が付けられている突撃銃が入っていた。

「それは？」

「ハイパープラズマビームライフルと」エクセリオンライフル」

だ…… お前が前に使っていたプラズマビームライフルを回収して、大型兵器へ改造したんだ。以前のプラズマビームライフルと違って、火力や出力が大幅に上がったが、オーバーヒートするから冷却してから使え…… そしてエクセリオンライフルはあの姫さんの祖父が乗っていた船から得たデータを修復し、やっと復元できた兵器だ。存分に使え……」

「分かった…… 俺のシグムディア、滅茶苦茶武装されるなあ」

腰部にハイパープラズマビームライフル、そしてハイパーノバビームライフル、エクセリオンライフルを脚に付ける。

「さて、これだけの装備だ…… 名前も凄いのにしないと……」

「シグムディア・アサルトベクターは？」

「…… いまいち」

「……………ブレイドシグムディアは？」

「……………断固」

「何で？……………名前も完璧な筈なのに……………」

「ダサすぎる。だいたい、思ったことがある。お前……………機神の名前が長すぎる！短縮せい！」

「えく、カツコいいのに……………」

「でも、長い！最短縮して完璧な『あっ!!』っ!?……………何だ？」

陽弥が何かを閃く。

「思い付いた！シグムディアの名前！」

「何だ？……………言ってみろ」

「今さっき、完璧って言ったよな？」

「ああ、」

「完璧……………パーフェクトだよ……………だから、このシグムディアは言わば完全な武装、最終決戦使用！名付けて……………シグムディア・パーフェクターだ！」

「シグムディア・パーフェクター……………完全なシグムディア……………悪くないな」

「だろ!？」

「良いんじゃないか？それと機神の名前を短縮しろ……………オススメは……………インフィニットプライムスだ……………」

「その名前貰いました！」

「なら、インフィニットプライムスだ……………あの機神は……………」

陽弥とシンの親子の話し合いを盗み聞きしていたプライムスが、自信のバーチャルアバターで笑顔になる。

そして艦隊や部隊、兵士が終結し、陽弥の演説が始まる。

「我が同士よ!……………解放を決意した友よ!……………俺は!ここに

宣言する！超次元生命体 アルマロスは我々の世界……嫌、君たちの世界を焦土化しようとは迫っている！だが、我々はそんなものを恐れない！我々は強い！我々達の思いは無限だ！……暗黒と光明に分けられた理の12柱の男女神に……我々に勝利が導かれるだろう！同士よ！立ち上がれ！今こそ！我々の意思を一つに！」

「多種族大銀河連合と共に!!」

《yes! we fuhrer!!》（了解！我等の総統!!）

ヴァルキュリアス兵士は掛け声と共に整列し、艦船に乗っていく。そして陽弥の演説を聞いていたシン達は唾然していた。

「総統って…… ヤバイ主導者だなあ……」

「今の陽弥の演説…… あの頃のジルに似ていたよ……」

「陽弥…… 変わったな♪」

すると数多の艦隊が次々にホライゾンから離脱していく。

「どンドン！打ち上がれええっ！」

「さて、俺らもウラノスに乗って行くか！」

陽弥はウラノスに乗り、最後の方となったが、ウラノスが打ち上がると、席に付いていた陽弥が何かを察知する。

「……………っ!？」

「ん?…… お兄ちゃんどうしたの?」

「え?何でもない…… ちょっとトイレに行ってくる……」

陽弥はルナにトイレに行くフリをして、ウラノスの後部ハッチを開いた。

「テメエツ!!何処までしぶとい奴なんだよ!?!お前は!!」

陽弥の目の前に、首だけでこの世とは思えない程の異形（想像絶する顔面）になったジュリオが裂けた口で、追いかけてきた。

「カアアアアッ!!」

「もうお前の計画は消えていつてるのにまだ諦めないか!？」

「ノーマ根絶ううう!ノーマ根絶うううっ!!」

するとジュリオの後ろからエツジ達に乗っているカルナスが駆け付けてきた。

「陽弥！」

「エッジ！」

「っ!?何だこいつは!?」

「前にも話しただろ!こいつがジュリオだ!」

エッジ達はジュリオの姿を見ると、突然頭の中にジュリオのこれまでの記憶が流れ込んできた。

《っ!?》

記憶を全て見終えたエッジ達……中にはジュリオがやって来た事に怒っているものもいた。

「今のは……!?」

「たぶん……あの、ジュリオの記憶かもしれない……」

「最低ね……」

ミュリアが言うのと、補助座席に座っていたリムルが杖を持ち構えていた。

「アイツ、悪いやつなのよ!悪い子にはバチが当たるのよ!」

「皮肉なものだ……あのミスタ・ジュリオはまだ現実から逃れようとマナの光に頼っているのか……」

「ノーマだって同じ人間なのに……これが、エンブリヲの洗脳によって変わり果てた人間の末路か?……」

「洗脳された人を治すには、霧シズカと言う花を使った特効薬が効くと思いますよ♪え〜つと……特効薬は今ありませんでした〜」

♪

「ないなら……撃ち落とすまでだ……」

エイルマツトがマニュアル操作で、ジュリオの後ろにつき、ロックオンする。

「待ってくれ……エイルマツト」

「何?」

「コイツの始末は……俺が殺る……」

陽弥はそう言うと、ハッチの奥へ向かった。

「今回は……シグムディアを使うのは止めておく……最終決戦に使うから燃料を消費したくない……だから、代わりの機体を使う。」



「已ええッ!!陽弥・ギデオオオオオンッ!!この怨み!晴らすまで  
行き続け……………っ!?!」

落ちていくジュリオの後ろにレールガンのチャージを終えたカル  
ナスが待っていた。

「その怨みが……………この死神の呪いに消される運命だ……………墮ち  
ろ狂皇が!」

エイルマツトがトリガーを引き、レールガンが発射された。レール  
ガンの電磁弾がジュリオに直撃し、燃えながらワープの空間に飲み込  
まれた。

「そんなっ!!馬鹿なああああっ!!!」

そしてジュリオの叫び声が消えると、陽弥はハッチを閉め、コック  
ピットから出る。

「今度こそ終わりだ……………元新生ミスルギ皇帝……………ジュ  
リオ・飛鳥・ミスルギ……………お前の存在その物が……………民達を  
狂気へ曝していたんだよ……………」

陽弥はそう言い、自室に戻ろうとすると、アンジュがいた。

「フウ……………ん?」

「……………付けたようね?」

「アンジュ伯母さん……………」

「ありがとう……………お父様の仇を取ってくれて……………」

「当然の事をしたままで……………これでエンブリヲからの呪縛も  
解ける事でしょう……………」

アンジュは笑い、陽弥は自室に戻る。

自室に戻った陽弥はクアンタ人の日記を読んでいた。するとマナ  
が陽弥の袖を引っ張る。

「どうしたの……………マナ?」

マナの瞳が赤色から虹色を持つ獣の瞳へと変わり、辺りが白く包ま  
れた。

「っ!?!……………ここは!?!」

陽弥が目覚めた所は白い空間であった。すると前方から足音が聞こえてくる。

「誰だ!？」

現れたのは青白く光る女性であった。

「私はローラーナ・レグレシア・クアンタ……………長女エスメラルダと次女エミリアの母です……………」

「え!？」

「訳あって……………孫であるマナに憑依していました」

「憑依?……………どういうことなんだ?」

「覚えていませんでしょうが……………この子に付けられていたあの仮面……………あれは、私を封じ込める為の口封じの仮面です……………」

陽弥はマナに付けられていたあの仮面の事を思い出す。

「口封じの仮面?……………誰が!？」

「彼……………アルマロスです」

「っ!!そう言う事か!」

「そうです。彼は……………未来から貴方の娘マナが来る事を察知し、私とこの子にアルマロスの呪縛を掛けられました。ですが、運良く再起動したシグムディアのお陰で、私とこの子に掛かっていた呪縛や口封じの仮面が解放され、今、こうやって貴方に話すことが出来るのです……………では、改めて話します……………義子よ……………アルマロスを絶対に、逃してはなりません……………」

「それは分かっている……………」

「いいえ、もつと別の意味があるのです……………」

「え?……………別の意味?」

「アルマロスはかつて、コレクターであり、元プロセアンの兵士と言うのは知っておりますね?」

「ああ、コレクターの母船で飛んでもない大きさのグリゴリがあった……………あれのせいで変わったんだろ?」

「確かに……………ですが、あれは……………」感情の一部なので  
す。」

「感情の一部?」

「日記を見なさい……………」

「あれ？文書が変わっている……………これは!？」

「そう……………それは日記と言うより、我々が造り上げた兵器の一部……………」  
「クアンタムシーカー」と言う……………  
「分かりやすく言えば、”過去と未来を見透すことができる予言の聖書”なのです……………」

「予言の……………聖書」

「グリゴリはあらゆる世界に複数存在します……………ですが、貴方達が相手しているグリゴリは何か違います……………」

「……………エッジの世界に存在していた……………グリゴリ?」

「そう……………彼の世界での戦いにより、何かの原因でこの世界に跳んできたのでしょうか……………」

陽弥は考え込んでいると、ある言葉に疑問を持つ。

「……………そう言えば、アルマロスが感情の一部って言うだけ……………  
誰の感情なんだ?」

「……………実は」

ローラーナが言うとした直後、陽弥を呼ぶ放送が流れた。

『陽弥・ギデオン総統……………  
グラントスファイアに参加してください。これから全評議会との作戦会議があります。』

「分かった」

「時間がありません……………  
貴方に私達クアンタ人の力全てを授けま  
す。」

「やって来れ……………」

するとローラーナの後ろから亡くなったクアンタ人の魂が現れた。

「準備して……………」

ローラーナはそう言うと、魂に変わり、ローラーナを含めクアンタ人の魂が次々に陽弥の体の中へ入っていった。すると陽弥の体から緑に発光する膜が浮かび上がる。

「私達クアンタ人達の加護その名もクアンタムシールドです。私達の  
思いと意志が貴方を必ず守ってくれるでしょう……………  
それか  
ら……………私達クアンタ人の兵器のセーフティを解除させまし



た……………これで彼等にクアンタの兵器を授けることができま  
す……………」

「ありがとう……………」

「最後に一つ……………」

「ん？」

「エスメラルダと……………エミリアを……………護ってください……………」

「言われなくても……………分かっておりますよ……………お義母さん♪」

陽弥はローラーナに笑顔で返しすと、白い空間が急激に光だし、陽弥  
は自室で目を覚まし、作成会議室へと向かった。

会議が終えるとロバートが駆け付けてきた。

「陽弥！」

「どうしたの？」

「見ろ！クアンタ人の遺物が動き出したんだ！どうなっているんだ  
!?!」

ロバートが陽弥にルミナスの遺跡を映像端末を渡した。そこに  
映っていたのは、次々とクアンタ人の遺した遺物や兵器、さらにガー  
ディアンビットが起動していった。

「……………合戦の為……………俺らの為に動いたと思う……………父さん達  
やソフィア達、爺達にもクアンタ人の兵器を取り付けておけ……………  
初っぱなから来ると思うから」

「何が？」

「……………アルマロスの攻撃が……………」

「……………？」

ロバートが首を傾げると、陽弥は何処かへと向かった。

## 第62話：大戦前夜 中編

陽弥が向かった先に待っていたのは、ヴァルキュリアスの各総大将達であった。

時空族のリーダーである ザンジークとプロセアンの ウエルビス、リーフマンとダークリーフマンの女王 リリーとヴィオラ、異次元の民代表 ゲオルグ、アヌビスの ザーン・グリブナグ、宇宙魔女の大魔女 ウルカ、そして暗黒龍の大将 ブラムとイザベル、星輝兵のリーダー オライオンが待っていた。

「陽弥！」

「遅れてごめん！色々と準備していた！」

「各代表も集まったことだ…………… ついでに彼等も招き入れたぜ♪」

「彼等？」

ブラムはそう言うところにはいたのは、ルナ達であった

「皆も!」

「そう…………… 総統の御親族、友人も我々の仲間…………… だからお招き入れました♪」

「…………… ハア、まあいいや…………… とつとと野郎。」

陽弥はそう言い、円卓の儀式を始めた。

「俺を含め、ヴァルキュリアスの総大将、護星神、守護者、時空を駆け巡りし戦士達よ……………」

《……………》

「今ここに…………… コスモバイルを授ける！」

陽弥の手から灰色のコスモバイルが出てきた。コスモバイルはヴァルキュリアスの総大将やルナ達、ラルフ達に手渡された。

「お前達に似合ったスペクトロブス達が入っている…………… 俺のはガルディオラとカイオウ、シンオウ、エンオウ、そしてユニゴルディアン、ウエルビスはアルグレオン、ザンジークはライパルド、リリーとヴィオラはブレイス、パイクとダンダババ、ザーン・グリブナグはディーハホーク、オライオンはマヤダイノス、そして…………… ルナのスペクトロ

ブスはユキデイベ、リヨウマはライウーン、ソファイアはフレグラーン、アレクトラとルチルは二人でジャキジャック、ルーはハヤテ、クロウさんやエツジ達はジェットアラン、マリンスナイプ、ボムザボムザ、カラペスタ、ギランガー、ラルフはドブルカーゴ、キャリーはダイグランザ、デウランはドドンガドラム、バルトはテカリオン、ダーマはグランクルーザ、ドミニカはビリバリット、アルベルトはブランパブル、爺はアイアイアーンを使ってくれ……」

皆は首をコクリと動かし、陽弥が隣にいるザンジークに命令する。

「そして……ザンジーク」

「ああー！」

ザンジークはそう言うのと、置いていた酒を取り出す。

「最高の酒だ！親つさんが飲むの許してくれたぜ！」

「フツ……最後になるかもしれないからなあ♪」

陽弥はそう言い、陽弥を含むヴァルクュリアスの総大将達が盃を取りだし、酒を入れ注ぐ。

「ヴァルクュリアスの総大将よ……アプスとニケの加護と共に！」

陽弥は盃に入っている酒を飲み干し、総大将達も酒を飲み干した。

「この酒を飲み交わしたことに！俺達は盃の兄弟だ！」

《応!!》

「兄弟の見に何が起きれば！必ず助ける！死が近いときは共に死ぬ！情けは無用だ！ヴァルクュリアスの名の元に、奴等に死と言う恐ろしさを味あわせてやれ！」

《応!!》

陽弥の勇ましさにヒルダは唾然する。

「独裁者見たいになっただい……アイツ」

「母親に似たんじゃないのか？」

「うっせい！」

ヒルダが怒り、シンの頭目掛けて拳骨する。

陽弥はシグムディアが収納されている格納庫に到着すると、シエリーとダステイがシグムディアに何かを取り付けていた、

「お前ら何やっているんだ？」

「先生のシグムディアの腕や脚や背部をさらに改造しました！それとダイノシグナルズ達も！」

陽弥は改造されたダイノシグナルズを見る。腕部にギガントガトリングキャノンと背部に二刀流のバスターソード、ビームソードを装備した”ターボレックス フルアサルト”と高機動ブースターとバーニアパックを装備した”プテライザーフルバーニアン”、と超大型リフレクターシールドと弾薬コンテナと榴弾砲、重装砲を装備した”プレジストアクセラ― フルバースト”が並べられており、シグムディアの腕と脚が大きくなり、爪もさらに追加されていた。

「何か……………デカくなつてないか？」

「それが良いのですよ！」

「これは？」

陽弥はシグムディアの背部に付いている突起に気づく。

「クアンタ人の遺物に尻尾のような武器がありまして、取り付けて見ました！」

すると陽弥がシグムディアの頭部が展開されていることに気づく。

「後頭部に付けられているあのスラスタ―は何だ？」

「それが分からないのです」

「分からない？どういふことなんだ？」

「さつき言った尻尾のような武器を取り付けた時、シグムディアの頭部から変なスラスタ―が展開されたのです。解析しようとしても、内部に入れなくて……………」

「何だろう？」

陽弥は考えていると、

「陽弥……………」

陽弥の所に気が付いたエスメラルダが現れた。

「エスメラルダさん？体の方は大丈夫ですか？」

「大丈夫です……………それと母様が夢の中で私に話し掛けて来まし

た。最終戦争が始まると……その事で貴方に渡したい物があります。」

「渡したい物?」

エスメラルダは背負っていた盾と剣を渡した。剣の方は刃が黄金、美しい黄金の装飾を、鍔に翡翠と太陽の様な色を持つ宝石が付けられており、盾の方は装着すると眼の形をした盾へ展開され、エネルギーシールドを放出する。

「剣と盾?」

「これは……アストラル王から貴方にへと……先代クリーフ王家から代々、受け継がれてきた剣『ガイアブリンガー』とクアンタ皇家代々受け継がれてきた盾『ブレイブリフレクター』です。」

「ガイアブリンガー」と「ブレイブリフレクター」

陽弥はガイアブリンガーとブレイブリフレクターを持つ。

「綺麗な剣と盾だ……」

陽弥はガイアブリンガーとブレイブリフレクターの美しさに、感動していると、エスメラルダが説明する。

「そのガイアブリンガーを見たときは驚かされました……その剣に使われている鉱石はかつて……先代クアンタ人によって使われたクアンタニウムと私達も知らない未知の鉱石を使って加工した物なのです。そしてこの剣から途轍もない程の力を秘めています。もしかしたら先代クアンタ人の伝説で語られてきた八つの剣の一つかも知れません」

「八つの剣?」

「はい……先代クアンタ皇帝は八人兄弟で八人はそれぞれの剣で数多の世界へ飛び立ちました。その先代の一人が私達の先祖だと思います、恐らくガイアブリンガーをホライゾンの民に託したのです。ガイアブリンガーの他にも残りの七つの剣が数多の世界に隠されているのです……そして兄弟の長男が使っていた剣“エンペラー”があり、その剣が全て揃いし時、星を指す程の光の柱現れ、導こう……」

「導く?……何の?」

「先代クアンタ皇帝が造り上げた存在……………『ザ・コア』へ辿り着くための道標なのです。」

「ザ・コア？」

「時空族ならザ・コアの事を聞きましよう」

陽弥とエスメラルダは早速ザンジークに聴く。

「ザ・コア？……………知っているぜ、ザ・コアと言うのはどんな望みも叶えてくれる……………親っさんやその前の先代も探したが見つからなかった。ま、俺はそんな簡単な方法で望む物を頼むってのは苦手でね。望み物は自力で探す……………グランドスフィアが見つかったのは紛れもなくあんたのおかげだ♪」

「そのザ・コアってどんなって言ったよな？生き返らせることは出来ないかな？」

「それは分からない……………だけどザ・コアは限度何てない存在だ……………お前を生き返らせることは不可能ではないと思う……………そう望みたいなら望め、それじゃないなら他のを望め……………」

「……………望みか……………」

陽弥はガイアブリンガーを見つめる。

陽弥は船内を歩き回っていると、誰かの声が聞こえてきた。  
「ん？」

陽弥は道角に隠れ、様子を見る。そこにいたのはラファイとルナがいた。

「ラファイ？……………」

「貴女が好きです！」

「……………!？」

ラファイの突然の告白にルナは驚く。そしてラファイはルナに手紙を渡すと、顔を赤くしながら、何処かへ走って逃げた。

「え？ちよつと……………」

ルナは止めようとするが、遅かった。

「どうしよう……………これがお父さんとお母さんとお兄ちゃんに知ら

れたら……」

「ムフフ♪」

陽弥はにやけながら、ルナを見る。

「え？」

「見ていたよ……ルナ♪」

「お兄ちゃん!？」

「まさかラファイの奴……ルナを選ぶとは、アイツ歳上好みがタイプなんだなあ♪」

「もう！笑わないでよ！」

「嫌、俺は感動してるんだよ……アイツが人を好きになるって事によ……」

「むう〜」

「……この戦いが終わったら、ラファイに言ったら？」

「……考える」

ルナは顔を赤くしながら、頬を膨らませる。

「何頬を膨らませてんだ？」

「お兄ちゃんのバカアアアーツ!!」

ルナのドロップキックが陽弥に炸裂した。

「げぼおらっ!!」

二人のケンカとラファイの告白をコツソリ聞いていたシンは笑っていた。

## 第63話：大戦前夜 後編

その頃、カルナスではトレーニングルームでは、エッジが剣を決戦に備えて特訓していると、クロウが入ってきた。

「エッジも準備していたんだな」

「クロウ……」

「まだ怒っているのか？」

「…… 嫌、お前が生きていたことに…… 喜んでいたんだ…… 正直驚いた、あの戦いでお前がバロックダークに特攻して、俺達の為に道を切り開いてくれた……」

「俺も…… 死を覚悟していた…… アキュラと共に行動していた仲間達が死んで、その思いを奴にぶつけた。だけど、神はそんな俺を生きる事を許してくれたと思う。仲間の分まで生きろって…… そしてロークへ辿り着き、イレーネと恋に落ち、家族ができた…… だけど、いつの間にかここでまたこうやってエッジと再開できた♪」

「御互い…… 最後の戦いで勝ち取ろう…… 未来を！この世界や俺達の世界を守るために！」

「ああー！」

エッジとクロウは決意を決め、握手する。

そして仲直りした陽弥とルナは、陽弥から髪を切ってくれと頼まれ、ルナが慎重に陽弥の髪を切っていく。

「本当に良いの？」

「ああ、構わん……」

陽弥はそう言い、数分後、



「ふう、スッキリした！」

陽弥の髪型がロングヘアーから、ユグドラシル9に滞在する前の髪型へなった。

「良いの？髪型変えて……………」

「良いんだ…………… ロングヘアーも悪くなかったけど、やっぱり俺は昔の髪型の方がやる気が出るからな♪」

陽弥は親指を立てルナにグーサインをすると、マナが来た。

「パパ！」

陽弥はマナを抱き上げ、問う。

「髪切った。パパどう？」

「カッコイイ！」

「ハハハ、マナは正直だな♪」

「うん！マナも一緒にママを助けに行く！」

「ダメだよ、マナはエスメラルダさんと一緒にウラノスで待っていてくれ……………」

「でも…」

「陽弥……………」

するとそこへエスメラルダが来た。

「エスメラルダさん？」

「その子の言う通りだ…………… 私とマナを、エミリアの所へ連れていてくれないか？」

「え!?!でもエスメラルダさん…………… マナは」

「危険を承知なのは分かっている。だけど、マナのシンセシスと陽弥のシンセシスの力を使えば、多分囚われのエミリアのものものことのためなんだ…………… お願い……………」

「……………」

「お兄ちゃん…………… 私からもお願い」

「……………」

「パパ……………」

3人の決意と瞳に陽弥は決意した。

「…………… 分かった、俺がマナを乗せて、ルナはエスメラルダを頼

む……」

「分かった!」

「マナ…… ママを助けるためにもう少しだけ力を貸してくれないか?」

「うん!」

陽弥は二人を連れていく事をシンとヒルダに話す。

「マナとエスメラルダを連れていく!? 正気かお前!」

「正気だよ…… もう覚悟は出来た! もしエミリアが大変な事になつていたらどうなる?…… 自力で解放できるか!」

「…… つ!、それは……」

「もうこれはあのラストリベルタスじゃない! トウルーラストリベルタスなんだ!……」

「つ!」

「父さんが弱音を吐くなら、支援なんて要らない!」

陽弥の決意にシンとヒルダも決意する。

「…… 分かったよ! 俺もヒルダやココ、ミランダと共にお前を全力で援護する! もう時、義理の娘になるあの姫さんを助けるためなら、何だろうと相手してやるぜ! だろ? ヒルダ」

「ああ! 私もクリスのラグナメイルを借りて、斬りまくって道を開いてやるから、囚われの姫さんを連れ戻せ! 連れ戻さなかったら、いくらお前が神でも容赦ないからな!」

「分かってる!」

陽弥は拳を握り締める。

ワープした艦隊は、次の宇宙に出ると、目の前に奇妙な残骸が浮遊していた。

「ん?」

「あれは……!!?」

シンは驚いた。何とそれは数多の種族の遺物であり、無数の死体が宇宙空間を漂っていた。

「恐らく、アルマロスに歯向かった種族の艦隊の残骸でしょう……それとこの遺物……元々ここに星があっただろう……」

「酷い残骸になっている……収斂時空砲と特異点によって破壊されたかもしれない……」

「きつと何も考えずに挑んだんだと思う……この種族が最初の犠牲か……」

中には赤ん坊を抱いた者や老人、妊婦、子供、障害者、動物が空間を漂っている死体もあり、陽弥は眼を反らす。

「クッ！」

「……考えても仕方がない、お前はお前の意志で、未来を勝ち取れ……」

「ああ」

陽弥はそう言い、大戦準備をした。



艦隊は陣形を組み、目の前にあるアヴァロン、偽りの地球、そしてその後ろに暗黒の星”バロックダーク”が見えた。そしてアヴァロンの前に無数のフアントム艦隊が立ち塞がっていた。

「俺の合図で撃て……… fire!! (撃てっ!!)」

陽弥の合図に全艦隊の主砲やミサイルが発射された。数多の艦隊の攻撃がフアントム艦隊に炸裂する。そしてフアントム艦隊も反撃してきた。

「アヴァロンから膨大なデイメンジョンエネルギー波を確認!!」

アヴァロンの6つの花卉の主砲から収斂時空砲がチャージされていく。

「来るぞー！超大型リフレクターシールド展開！」

巨大な装甲板を装備した防壁艦隊が連結し、巨大なりフレクターシールドを展開した。そしてアヴァロンから巨大な収斂時空砲が放たれたが、超大型リフレクターシールドが受け止める。

「ゆっくり反らせ！」

連結した防壁艦隊がゆっくりと屈折させ、フアントム艦隊に向けた。

「上手くいった！」

アヴァロンの収斂時空砲がフアントム艦隊を塵に変え、連合艦隊の攻撃が一気に収斂時空砲台へ集中攻撃し始める。

「全艦隊！収斂時空砲口部に集中攻撃！」

次々に収斂時空砲口部に直撃し、大爆発を起こす。

「目標砲口部に命中！」

陽弥達は兵士の言葉を素早く聞き、機神を発進させた。

「インフィニットプライムス！前進します!!」

インフィニットプライムスが発進され、腕部や脚部からヴァルキュリアス艦隊が出撃した。

「よし！全機、発進準備！」

ヴァルキュリアス艦隊から次々と空間戦用のパラメイル、セイクリッドメイル、ガルドメイル、ラグナメイル、パンドラメイル、インゼクテイアメイル、ギムガラムが発進していき、陣形を組む。

「アヴァロンを抜けた先に偽りの地球があり、奴等はバロツクダークを最終防衛ラインとして偽りの地球を星ごと基地にしている！我々インフィニットプライムス所属部隊は新型核ミサイル『レツドダスト』を各前線基地へ爆撃、露出化させる！」

陽弥の命令を聞いた兵士達は緊張する。するとバロツクダークがフロントム艦隊を生み出すと、今度は情報を読み取り、パラメイルに見せ掛けた機体を生み出した。

「第一歩列！撃て！」

全機の武器から無数のビームが撃ちだし、フロントム艦隊やフロントム機に直撃する。そしてフロントム機も反撃してきた。陣形を組んでいた一機が破壊され、一機、また一機が破壊されていき、陣形を崩し、散会し攻撃を仕掛けていく。陽弥のシグムディアがハイパーノバビームライフル、ハイパープラスマビームライフルでの二丁でフロントム艦隊やフロントム機を撃墜、さらに、背部に武装した尻尾武器”ソードテイル”が伸縮できるビームワイヤーを使い、フロントム艦を貫き、そしてそのフロントム艦を貫いたまま、別のフロントム艦にぶつけた。

「第一艦隊！全機を援護せよ！」

ヴァルキュリアス艦隊の主砲からクアンタ人の兵器”ノバビーム砲”で撃ち、フロントム艦隊に直撃した。

「無人戦闘機！発進!!」

艦隊から無人の戦闘機が発進され、ザーン・グリブナグの遠隔操作でフロントム機を撃墜していく。

「前方からケートスとカルディアノン戦闘艦隊を確認!!」

ウエルビスが言うと、アヴァロンの影からケートスがゆつくりと現れた。

「眼にもものを見せてやれ！インフィニットプライムス!!」

『了解!』

インフィニットプライムスが要塞形態から駆逐形態へ変形し、マーズプライムスのロマノフを構えた。

「ロマノフ！発射！」

『発射！』

インファイニットプライムスのロマンオブが発射され、ケートスに炸裂した。

「インファイニットプライムス！行くぞー！」

陽弥はインファイニットプライムスへ向かい、叫んだ。

「アスガルド!!ヴァナヘイム!!」

するとインファイニットプライムスの胸部からハッチが展開し、陽弥はシグムディアと共にインファイニットプライムスと合体した。

「神々の力を……一つに!!」

その時、インファイニットプライムスの背部のプルトウプライムスのビームウイングがさらに放出され、インファイニットプライムスの後頭部から粒子帯が放出された。

「シグムディア アバランシェプライムス!!」

インファイニットプライムスのマーズプライムスの砲口から超大型ビームソードを放出し、出力を上げ、斬りかかった。

「うおおおおおおつ!!!」

悲鳴を上げるケートス、獣と機神の各主砲が火を吹き始めた。

「止めだ！ケートス!!」

陽弥がインファイニットプライムスの出力を上げると、マーズプライムスに変形し始め、先の超大型ビームソードよりも数十倍の粒子剣へと変わった。そして陽弥は渾身を込めて、粒子剣を降り下ろし、ケートスを真っ二つにした。ケートスは悲鳴を上げ、爆散した。

「凄……惑星並の大きさを持っているケートスが…… たった一太刀で……」

「これが…… シグムディアとインファイニットプライムスが合体した力……!!」

インファイニットプライムスの胸部のハッチが開き、七星剣を持ったシグムディアが剣を上掲げ、命令した。

「全軍！我に続け!!」

《yes! we fuhrer!!》

誇り高きヴァルキュリアス兵士は敬礼し、ルナ達を引き連れて、ア

ヴァロンへ向かった。その頃、バロックダークから戦場を見物していたアルマロスは……

「あんなものまで隠していたのか…… まあ、良い♪我には最終兵器があるのだからなあ……」

アルマロスはそう言うと、アヴァロンの方を向き、笑っていた



## 第65話：時空大戦 中編

アヴァロンの外壁を貫いたインファイニットプライムスはそのまま突撃していく。それに続き、陽弥達もアヴァロン内を突き進んでいた。

「ヴィクトルー！内部に生体反応を確認してくれ!!」

陽弥はヴィクトルーに生体反応を確認させると、ヴィクトルが報告してきた。

「マスター、下層と中層から生体反応を確認しました!」

「下層と中層?..... 上層は?」

「不明です。」

「なら、直接確認するしかないか!!」

「インファイニットプライムス!ウエルビス達に通達してくれ!これよりヴァルキュリアス艦隊はネオ・ミスルギ市民を避難!そして移民艦隊をホライゾンにメトロに滞在中の各ユグドラシルなへ移送する!!」

「了解しました。」

インファイニットプライムスは陽弥の命令を聞き入れると、ヴィクトルーが報告してきた。

「マスター!そろそろ突き破ります!」

インファイニットプライムスがアヴァロンの内壁を突き破り、下層、中層まで突き破った。下層スラムや中層大都市に暮らすミスルギ民間人が慌てる。

「良し!インファイニットプライムス!分離して、オメガプライムスを警護してくれ!それと民間人をアヴァロンから脱出させる!」

《yes! we fuhrer!!》

インファイニットプライムスが分離し始め、オメガプライムス、マーズプライムス、ネプチューンプライムス、ジュピタープライムス、サターンプライムス、ウラヌスプライムス、プルートウプライムスのハッチが開き、中から移民艦や救助船が発進された。

「お兄ちゃん！」

「っ!？」

ルナの指す方向に複数のフアントム艦が現れた。

「フアントム艦隊！」

「マーズプライムス！支援頼む!!」

「了解！」

「ウラヌスプライムスも！」

「了解！」

マーズプライムスとウラヌスプライムスやカタパルトから無人戦闘機が発進され、迎撃を開始した。

「ヴィクトルー！シグムディアのリミッターを解除してくれ！」

「しかし！」

「このアヴァロンを奪取するためだ！脳が焼け焦げても俺は再生できる！やって来れ！」

「……………どうなっても知りませんから!!」

陽弥はシグムディアのコンソールの横にあるレバーを引いた。するとシグムディアの目が緑から赤へと変色し、マスクが開き、中の裂けた口が牙を剥き出し、卵なり声を上げた。

「キシヤアアアアアアアアッ!!!」

そしてシグムディアは出力を上げ、フアントム艦隊に襲い掛かった。巨大な腕の装甲が開き、サブアームが展開され、腰部のエクセリオンライフルを持ち、二丁ライフル及び、エクセリオンライフル、肩部のカルネージランチャーを乱射した。するとシグムディアが戦っている最中、上層へと繋がる門が開き、中から複数の影が卵なり声を上げた。

「!？」

それを察知したりヨウマが開いた門に気付く。

「陽弥殿！あれを!!」

「っ!？」

門から現れた影の正体は吸血種”リーパーズ”で、濁流のように押し寄せてくる。

「リーパーズ!？」

「しかも上層から!?……………まさか!!」

「上層の貴族全員!!」

「……………リーパーズにされたってのかよ!？」

「遅かったか!!」

「……………考えても仕方がない! 奴等が出てきているあの穴へ集中攻撃だ!!」

全プライムスの主砲や兵士がリーパーズが出てきている門へ一斉集中攻撃を開始した。しかし、その数に溢れ満ちており、集中攻撃をしても押さえきれなかった。

「撃つても! 撃つても! 出てくる!!」

「チツ! ならば!!」

陽弥はシグムディアを駆逐形態へ変形させ、門へ突撃していく。

「陽弥! どうするつもりだ!!」

「ガーター展開!」

シグムディアの左右の腕に装備された防御兵器を展開した。

「フォトンリング! 展開!」

さらにシグムディアの頭部の装飾の宝石が光、シグムディアを囲むようなビームリングが上下左右360度回転した。

「ザーン・グリブナグ! 数百機の無人戦闘機を頼む!!」

「総統!？」

「良い考えがある!!」

陽弥はそう言い、ザーン・グリブナグは陽弥の言葉に従い、数百機の無人戦闘機を護衛として向かわせた。

「アイツ! 何をするつもりだ!？」

シンが陽弥の行動を考えていると、陽弥は無人戦闘機と陣形を組み、シグムディアを守るように無人戦闘機はシールドを展開して、シグムディアを取り囲み、攻撃してくるリーパーズの群れを無人戦闘機の攻撃を使い、潜り抜けていく。

「そうか! 陽弥の奴! 釘になっているんだ!!」

「え!？」

サムは陽弥の行動を皆に説明する。

「装備している防衛兵器と無人戦闘機のシールドを使って、釘を打ち込むようにしているんだ！」

「ガーディアンビットも頼む!!」

陽弥の元にガーディアンビットが飛来し、無人戦闘機と共に陽弥を守り、ライフルを乱射する。するとそこにエッジのカルナスとクロウのNーアキュラ、イプシロンとミューが駆け付けてきた。

「陽弥！援護する!!」

「エッジ！クロウさん！ミュー！イプシロン！」

エッジやクロウ、イプシロンとミューの攻撃がリーパーズを焼き付くしていくと、無人戦闘機とガーディアンビットが螺旋状に回転し始め、ドリルのようにリーパーズの群れを突き通していく。

「行けえっ!!陽弥あああっ!!」

「ハアアアアアアアアッ!!」

飛翔から駆逐形態へと変わったシグムディアが二刀流で目の前の敵を突き刺していった。そして、上層の壁を破壊した。

「見えました！アホカリプスです!!」

上層の広間にアホカリプスが待っていた。

「来たな…… 銀河の守護者が…… 少し早ければ間に合っただろうな」

「何ッ!」

「あの姫殿下の力はアルマロス様の物になった。もう手は付けられんぞ！」

アホカリプスの言葉に陽弥は怒鳴った。

「クッ!!バカがっ!!」

陽弥は七星剣とグラムでアホカリプスに斬りかかったが、アホカリプスのマイクロロボットが防壁を作り出し、防御した。

「無駄だ！私を倒せる者など…… この世にいない！」

「チッ！」

陽弥は体制を整えると、クロウがビームセイバーを持って、陽弥の前に出た。

「陽弥……ここは、俺とエッジ達で任せてくれないか？」

「え!？」

「心配するな……お前のゲームを使って戦う……お前はその隙に偽りの地球へ突入してくれ……」

「無茶だ!？」

「良いから!……」

エッジもアルカナソードを抜刀し、さらにレイミ、リムル、バツカス、メリクル、ミュリア、サラ、エイルマツトイプシロン、ミューも自分達の武器を取り出し、アホカリプスに立ち向かう。

「……陽弥、背中を任せろ……」

「……皆、頼む!」

陽弥はポーチからゲームのカセットをクロウに渡し、シグムディアに戻る。

「行かせるか!」

アホカリプスが陽弥を追撃しようとマイクロボットを放ったが、龍装光したクロウが陽弥を助ける。

「お前の相手は俺達だ!アホカリプス!」

「クロウ・F・アルメディオオオオツ!!エッジ・マーベリツクウウウウツ!!」

「この戦い!今度こそ私が勝たせてもらうぞ!!」

クロウが陽弥のゲームを起動すると、ステージが変わり、廃墟が並ぶ市街地になった。

リーパーズを殲滅し終えたルナ達は陽弥の帰還を待っていた。すると門からシグムディアが飛んできた。

「お兄ちゃん!クロウさん達は!？」

「クロウさんがアポカリプスを殺るって、それでクロウさんとエツジ達やイプシロン、ミューがアポカリプスと戦っている隙に偽りの地球へ突入してくれて……」

「分かったわー！」

陽弥達は急いで避難民をオメガプライムスに乗せ、アヴァロンから脱出し、偽りの地球へと向かっていった。

「ヴォルス爆撃艦隊！発進せよ！」

「バッテリー駆逐艦隊！発進！」

「ヴォーチャー遊撃隊！出撃！」

地上部隊率いる艦隊が次々と発進し、偽りの地球へ大気圏突入していく。

「全艦隊！大気圏突入用意!!」

「全機！クアンタムリング展開！」

全機のコックピット先端からクアンタのビームフィールドが展開された。

「偽り地球から膨大な熱エネルギーを確認!!」

「拡散ビームフェンス砲が来るぞ！」

「堪える！」

「そつちもな！」

そして地上から無数の拡散レーザーが放たれ、ビームフィールドを纏った数機がフェンスの威力に耐えれず、撃墜されていく。

「第一番隊が全滅！第二、第三隊4分の1が撃墜されました！」

残った部隊が大気圏突入し終わると、ビームフィールドの展開を止め、偽りの地球へ突撃していく。

「四番隊は俺と来い！」

《了解！》

四番隊のセイクリッドメールやパラメールが陽弥に付いていくと、前方からカルディアノン戦闘機を似せて造り上げたファントムが現れた。

「ファントム！」

「テスト！ミラーナ！オルト！出番だ！」

テストが乗っているターボレックスがギガントガトリングを乱射し、ミラーナが乗るプラライザーが戦闘機を翻弄し、オルトが陽弥を守る。

「道を開けろおおおおおっ!!!」

陽弥がハイパーノバビームライフルのバレットをディスプレイターに切り替え、戦闘機のシールドを打ち砕いていく。

「絶対零度!」

「雷龍破!!」

ルナとリヨウマの合体技が炸裂し、絶対零度で凍りついた戦闘機にリヨウマの雷が感電し、爆発する。

「前方にフアントムに浸食されたギガンテスを数隻確認!」

前方から、赤黒い植樹で埋め尽くされたギガンテスの慣れはてがゆっくりと迫ってきた。

「デカイが相手だと……………味方にも不利があるなあ……………」

「なら! コイツらの出番だ!」

ウイルが叫ぶと、後方からペトルサイト粒子砲を持ったモウラー数隻が現れた。

「モウラー!?!」

「一発噛ましてやれええっ!」

モウラーの砲口からペトルサイトが放たれ、ギガンテスを破壊していく。

「ヘルガストの底力を見せてやれ!」

ヘルガスト軍が一斉に前進し、ギガンテスを撃破していく。

「爆撃艦隊! レッドダストを投下!」

ヴォルス爆撃艦から複数の核爆弾が投下され、ギガンテスが無数に出てくる巣へ直撃した。

「全艦隊衝撃に備えろ!!」

陽弥達はビームフィールドを展開し、核の爆風を防いだ。辺りが灰になり、ミスルギ皇国の廃墟は跡形もなく、塵へとっており、その光景に陽弥達は驚く。

「スゲエ……………!」

「流石、レッドダスト……………核の4. 3倍の威力を持つ禁断の兵器だ」

「ほら！早くバロックダークに向かうぞ！」

アレクトラが先頭に立ち、陽弥も後へ続く。

着いた場所は赤黒いビームの柱で偽りの地球とバロックダークを行き来するテレポーターにいた。

「バロックダークと偽りの地球に繋がっているこの赤黒い大柱……………まるで星と星を繋ぐ大橋だな……………」

「周延からファントムソルジャー及び、ダークソルジャーを確認！」

ヴィクトルーが報告すると、地面から黒い粒子が溢れ、形を整え、黒い兵隊を作り出した。

「ここからは白兵戦で言うことか……………迂闊に生身で相手したら、間違ひなく終わりだ……………」

ラルフは呟くと、何かを決意するかのようには、プロトヒステリカの腕部ビームソードを展開した。

「陽弥……………ここは俺達に任せてくれないか？」  
「ラルフ？」

「俺達護星神なら、大幅に時間を稼げれる……………陽弥達はその間にバロックダークにいつて、エミリアを助けに行くんだ……………」

ラルフの目を見た陽弥はラルフの肩に触れ、言う。

「……………死ぬなよ」

「分かってる……………」

「爺……………」

「ん？」

「……………皆を頼む……………」

「……………言われなくとも、わかっている」

サムもビームソードとアナイアレイタービームライフルを取り出し、叫んだ。

「陽弥！行けえっ!!」



サムの言葉に陽弥達はビームの柱に入り、バロックダークへ向かった。そして柱へ通さないように、護星神達とシンを含むアンジユ達が武器を構えた。

「おっとー行かせるかつ!!」

バルトがギガントアックスでダークソルジャーとファントムソルジャーを風ぎ払う。

「さあー掛かってこい！奈落に堕ちた亡者があ!!」

気合いを入れたシンがデイメンジョン・ヴァルキュリアを乱射する。

柱に入った陽弥達はバロックダークに到着した。

「ここが……バロックダーク……」

バロックダークの大地に足を踏み入れた陽弥達は目の前の光景に緊張していた。闇で空は黒く、毒の沼があり、地面には無数の白骨死体が散らばっていた。その光景を見ていたソフィアが呟く。

「何だろう……暗く怖い場所なのに……綺麗……」

陽弥は拳を握り締め、その様子をルナが見ていた。

「お兄ちゃん……」

陽弥は目の前にある大きな巨大な穴を見る。奥を見ると、機体も通れる階段が下まで、続いていた。

「……この下に……エミリアが……」

「皆！行くぞー！」

《応！》

皆は一斉に、階段を下りていった。

数十分後、陽弥達はまだ階段を下りていた。

「うわあー！どんだけ続くの!?!この階段は!?!」

「分からない……でも言えることが一つ……バロックダークを覆っているあの黒いあれは……海だ……そうになっていると言うことはバロックダークは塔のような形状で黒い海で全体を囲み、天体に見せかけているんだ。だいたい今俺らがいる場所は中心部で

例えると……半径の4分の1位かな？」

陽弥の計算を耳に聞き入れたソフィアが啞然する。

「半径の……4分の……1……だと!？」

するとイライラしていたアレクトラがとうとう、

「もう嫌!何ならこれで!」

クアンタの兵器“ノバビームライフル”で階段を撃ち始める。そしてアレクトラはビームで大穴を空けながら突き進んでいき、陽弥達もアレクトラに付いていく。

「これなら!早く着く!」

「マスター!まもなく、中心部に着きます!」

階段を突き落とすと、目の前に紫に発光する神殿が聳え立っていた。

「ここがバロックダークの中心部……」

「……綺麗」

「陽弥……中心部にあるあの紫に発光する宮殿からグリゴリの反応が放出されている……」

エスメラルダが報告すると、陽弥は皆に命令した。

「全機……突撃するぞ!」

《龍装光!!》

皆は龍装光を使い、立ち塞がるダークソルジャーとファントムソルジャーと蹴散らしていく。するとルナが前方から来るソルジャーに驚く。

「お兄ちゃん!」

陽弥が目にした光景は壁や地中からソルジャーやリーパーズが這い出てきており、その数はなんと四億以上になっていった。

「っ!?!」

その光景に陽弥はヴィクトルーに命令する。

「ヴィクトルー起動!!自立モードで援護してくれ!!」

「お任せください!!」

フォーミュが変形し、身長4メートルもあるプロセアン型のスマートなロボットが現れ、腕部のビームマシンガン、パルスライフルを展

開し、四億以上の敵をロックする。そしてヴィクトルーは四億以上のソルジャーを含めてリーパーズに向けてパルスライフルとビームマシンガンで乱射した。

「早くー急いでくださいー!」

ヴィクトルーはさらにサブアームを展開し、カルネーランチャーを乱射する。陽弥達はヴィクトルーが戦っている隙に、宮殿へと向かっていく。

「ヴィクトルー!」

陽弥は敵に囲まれたヴィクトルーを見ると、ヴィクトルーが最後の通信をしてきた。

「マスター…………… 陽弥…………… さん…………… 必ず姫様を……………」

次々とヴィクトルーに襲い掛かるソルジャーとリーパーズ陽弥は今まで支援してきたAIの名を叫ぶ。

「ヴィクトルー!!!」

そしてヴィクトルーの武器が弾切れになり、ボロボロになっていき、爆発した。ヴィクトルーが殺られた陽弥は拳を胸に当て、決意する。

「…………… スマン…………… お前の死、無駄にはしない!!」

陽弥はそう言うと、シグムディアの各パックを展開し、ミサイルを一齐に発射した。ミサイルで塵へとなっていくソルジャーとリーパーズ、陽弥達は道を切り開きながら宮殿へ突き進んでいくと、ルーが巨大なファントムガーディアンに気付く。

「っ!!陽弥!」

「!?!」

するとファントムガーディアンの中から、強力なハイメガ粒子砲を放ち、陽弥達に直撃した。

《うわあああああああつ!!!》

陽弥達は何とか体制を立て直す<sup>!</sup>が、ソルジャーとリーパーズ、ファントムガーディアンが追撃してくる。

「チッ!倒しても!倒しても!増える!陽弥!ルナ!あたしらを置いてさっさとエミリアの所へ行け!」

「だけどアレクトラ！いくら何でもソフィアとリヨウマだけだと勝てないぞー！」

「心配するな！私を誰だと思ってる？」

アレクトラはそう言うと、アナイアレイタービームライフルのロケットランチャーを放ち、ファントムガーディアンを駆逐しながら、言う。

「私は！次期ヘルガスト帝国の女帝！アレクトラ・ヴィサリだ！ヘルガストの誇りを汚すわけには行かないんだよ！」

「そうよ！あんた達は私達の導師！ここにくたばる訳には行かないのよ！」

「拙者も同じである！導師は……必ず民を導かなければならぬい…… だから拙者も！全力で貴殿を守る！」

ソフィアとリヨウマが高出力エネルギーブレードを抜刀したらツイーエルと高出力粒子刃を放出した腕部固定武装剣“天雷”を展開し、ファントムソルジャーとリーパーズを切り払っていく。

「そう言ってるんです！陽弥！ルナ！…… 使命を全うしてくれ!!」  
ルーもフラップとビットを展開し、遠隔操作で三人を援護する。

「…… 行くぞ、ルナ…… 走れ!!」

「ええ!!」

陽弥とルナ、エスメラルダ、マナは宮殿の中に入った。宮殿内は迷宮になっていたが、迷うことなく突き進み、ようやくグリゴリを感じる塔へ辿り着いた。陽弥達は一気に塔の階段をシグムディアで駆け上がる。すると星の中心部なのに、風が吹く。

「っ!!」

吹き荒れる中、何処からか、美しい女性の歌声が聞こえてきた。

「……… っ!?!」

マナを除いて三人は歌声が聴こえていることに気付くと、塔の最上部へ目をやる。

「歌?……… エミリア?」

陽弥はそう言うと、ルナと共に一気に掛け上がる。

(エミリアー!)

彼は必死に彼女の事を思った。

(エミリア!!)

彼は彼女を愛し、守ることを胸に…………

(エミリアアア!!)

最上部に近づくと、そこにエミリアの姿がぼんやりと見えていた。

「エミリアー！」

「エミリアさん！」

「エミリアー！」

「ママー！」

最上部に辿り着いた陽弥達はエミリアの名を呼んだ。彼女は時の歌を歌いながら、舞い踊りていると、段々と姿が一変し、現実の姿が見えて気だした。

「ッ!!」

「そんな……………！」

「クツ……………」

その姿に三人は目を反らした。そしてエミリアが歌を歌うのを止め、ゆっくりとこちらを向き、彼の名を言う。

「陽弥様……………」

そして眩い光がエミリアを射し込み、現実の姿へと変貌した。その姿は白と黒の色に別れており、剣と槍、16個の魔法石が目になっており、エミリアの顔だけが、女神の胸に侵食していた。女神は赤と白の色を持つ8枚の翼を広げ、後ろの光輪を展開した。胸に侵食されて、眠りにについているエミリアの姿に陽弥達は心を

## 第66話：時空大戦 後編

そしてそこに遅れて現れたのは、下での戦闘とアヴァロン宇宙域で戦い終えたソフィア達とブラム、イザベルが駆け付けてきた。

「「「「っ!!」」」」

ブラム達は目の前にいるエミリアの姿に驚くと、女神は微笑みながら、名を名乗る。

「我が名は…………… 無謀生命体 アルマロスゼロ…………… 全ての、世界を、真なる秩序に、戻す者…………… 神よ…………… 我に膝間付くのだ……………」

アルマロスゼロと名乗る女神は剣を突きつけてきた。

「ひでえ……………」

「カオスのエターナルソウルハートとグリゴリ、クアンタムニウムハートとエミリアの血筋で最悪の敵かよ……………」

「銀河の守護者よ…………… この混沌となつていく宇宙を作り替えるために…………… 贄となれ!!」

「悪いが…………… 俺達はそんな風に臨みたくないなあ!!」

陽弥は七星剣とグラムを抜刀し、ブラムを体の中へ憑依させると、戦闘ポーズをする。

「今…………… 助けてやるぞ! エミリア! 殺るぞ! 皆!」

《重龍装光!!》

六人の守護者から銀河七聖龍が現れ、それぞれの守護者の機体の鎧となった。リョウマの鋼龍號が雷の刃を放出した天雷を降り下ろすが、

「コカビエルビット……………」

アルマロスゼロの周りから、虫のように飛ぶ光の天使が召喚され、リョウマに襲い掛かった。次にアレクトラのレイジアが両腕のガンレット同士をぶつけ、アルマロスゼロに殴りかかった。だか、

「サハリエルランチャー……………」

アルマロスゼロの肩からドラゴンの顔を似せた砲台が召喚され、ア

レクトラに向けて獄炎弾を発射し、アレクトラを襲った。今度はソフィアとルーが二人で掛かるが、

「バラキエルバンカー……」

アルマロスゼロの背中から紋章が浮かび上がり、氷のパイルバンカーが飛び出し、二人を弾き飛ばした。そして陽弥とルナが太陽神剣と月光神剣を抜刀しアルマロスゼロに斬りかかったが、アルマロスゼロの剣と槍で防御され、さらに魔法石からレーザーが放たれ、二人は吹き飛ばされた。

「クソッ！」

「これが…… 陽弥殿が相手したアルマロスの力…… 恐るべき相手だ……！」

「だけど！ 負けない！」

陽弥は太陽神剣を突き立て、立ち上がる。

「聴け！ アルマロス！」

陽弥は上空に舞い上がり、歌を奏でようと準備する。

「マナ…… 力を貸してくれ！」

「うん！」

「私も！」

ルナがエスメラルダを連れてきた。

「エスメラルダさん！」

「私も混ぜてくれないかな？」

「ええ…… シグムディア、俺が勇気の歌を奏で、アルマロスゼロの意識の中に入り込む。勿論エスメラルダさんとマナとブラム、イザベル連れていく。」

「分かった……」

陽弥とブラム、イザベル、エスメラルダは永遠語りを奏でようとした。

「勇気の歌と星の歌か…… なら、」

アルマロスゼロが微笑むと、胸に侵食していたエミリアが突然“時の歌”を奏で始めた。

「時の歌！」

陽弥達の歌とエミリア歌の衝動が激しくぶつかり合う。だが、  
「グッ！」

陽弥達の歌がエミリアの歌に押し負けていた。

「共鳴。パルス！尚も増大中！」

「恐らく、アルマロスゼロのグリゴリとカオスのエターナルソウル  
ハートとエミリアのクアンタニウムハートが次元共鳴で、時の歌のパ  
ルス波を増加させているに違いない！」

「クソッ！ここまで来たのに！」

誰もが絶望になるそのとき、

「困っているようだな……………」

後方から傷だらけのクトウグアがヴォルヴァドスに支えながら、  
やって来た。

「クトウグア！それにヴォルヴァドスまで?!」

「………… 勘違いするな、我は奴に………… 借りを返しに來ただけ  
だ……………」

クトウグアはアメズヤクラを取り出し、アルマロスゼロに突き付け  
る。

「生ける炎のクトウグアとヴォルヴァドスか…………… 駒である貴様  
らに用はない……………」

「そうか…………… なら、お前を殺す。」

「手伝おうか？」

さらに、後方からエヴァが陽弥のアーキバスIIに乗って現れた。

「クアンタの皇帝か……………」

「俺のアーキバスII!」

「ちよつと借りるぞ……………」

「奈落に堕ちたクアンタの皇帝と用済みの邪神2体で…………… 我に楯  
突くことが出来るか？」

「…………… 出来るさ！」

クトウグアとエヴァがアルマロスゼロに応戦する

「無駄だ…………… フンッ!!」

アルマロスゼロは自身の髪を伸縮させると、クトウグアとエヴァ、



ヴォルヴァドスに向けて、剣化した髪を胸部を貫き通した。

「ウツ!!」

「カハツ!!」

「やっぱり……………この機体では、推力不足か……………ガハツ!!」

口から血を吐くエヴァ、そして身動きが取れないクトウグアとヴォルヴァドスがアルマロスゼロに抗い、それを見ていたエスメラルダが言う。

「お父様! 「来るなっ!!」っ!!」

「……………この戦い!……………嫌! 私の戦いでもある! 自分の娘を戦いに巻き込んだ罪を……………告ぐなわなければならぬのだ!!」

エヴァは必死にアルマロスゼロの髪を自力で引き抜こうとすると、陽弥の方を見る。

「……………陽弥・ギデオン」

「!?」

「……………エスメラルダと……………エミリアを頼む……………」

「エヴァ! まさか!!」

「クトウグア……………行けるか?」

「言われなくとも、ヴォルヴァドス!」

「はい」

クトウグアとヴォルヴァドスの体が急激に強く光だした。

「?」

そして2体の邪神がアルマロスゼロに向けて、大爆発を起こし、アルマロスゼロの左半分の顔に火傷を負わせた。

「2体の邪神が……………自爆したか……………ん?」

アルマロスゼロは突き刺さっていたエヴァがいないことに気付く。

「何処へ?」

アルマロスゼロがエヴァ探し始めた直後、肉が避けるような音が聞こえてきた。

「っ!!?」

アルマロスゼロは胸の所を見ると、そこにいたのは胸に風穴が空いたアーキバスIIがダーインスレイブでエミリアを引き剥がしていた。



「アルマロスウウウウツ!!」

陽弥がアルマロスの名を叫んだ直後、緑に発光する粒子が陽弥の前に現れた。

「っ!!?」

そして輪は陽弥の体の中に入っていく。

「この光は…………… エヴァの!」

「お兄ちゃん!」

ルナが陽弥を呼んだ直後、アルマロスゼロが、マグナムを突き付け、陽弥の胸に直撃した。

「ウツ!!」

「死ね…………… 護星神が……………!」

アルマロスがマグナムを6発を撃ち、その一つが陽弥の頭を貫いた。陽弥は倒れ、死ぬ直前に占いの事を思い出す。

「あれ?…………… これって、占い婆さんが言っていた…………… そうか!」

その時、陽弥が身に付けている鎧が光だす。

「っ!!」

「…………… まだ俺は…………… 死ねない!!」

陽弥の鎧に見に纏っているクアンタムシールドが展開する。

「クアンタ人の皆!…………… 俺に巻き戻しの力を!!」

鎧が閃光のように輝き、アルマロスを目を眩い光が襲う。

「何だ!?この光は!!?」

「お兄ちゃん……………」

陽弥は時空を駆け巡り、辿り着いた場所はなんと、アルマロスに倒される数秒前に来ていた。

「っ!!?この場面…………… 時間が巻き戻されたのか!?!と言うことは!」

陽弥は目の前にマグナムを突き付けたアルマロスを睨み、ガーターを展開した。そして時が動きだし、アルマロスのマグナムを防御した。

「何っ!!?」

「シグムディア ザ・タイタニス!!」

陽弥は4本の腕で七星剣とグラム、バハムディア、鬼羅丸を抜刀し、アルマロスと応戦する。

「マナー!お願い!」

「うん!」

マナの体が光だし、陽弥と共に叫んだ。

「マテリアライズ!!ブラストファンネル!!」

空気中で造られたのは、煙突状の兵器でブラストファンネルが早速アルマロスにハイパーノバビームを放つ。

「小賢しいガキがつ!!」

アルマロスはハイパーノバビーム砲を放つが、陽弥はビームの軌道を見切り、受け流すかのように、アルマロスの攻撃をあっさり回避した。

「フンツ!!」

「何んだと!?!」

アルマロスが何度も攻撃を与えるが、陽弥は次々と回避していく。

「何故だ!?!何故だ!?!何故我の攻撃が当たらない!?!……っ!!」

戸惑っている最中、アルマロスが油断し、陽弥はその隙にアルマロスの目の前まで接近した。アルマロスはシグムディアの装甲を見ると、緑に発光する膜が覆われている事に気付く。

「まさか!!クアンタムシールドか!!」

アルマロスは緊急回避し、陽弥を睨む。

「通りで、我の攻撃を免れていたのか……」

陽弥とアルマロスが戦っている中、エミリアが目覚めます。

「……う……う……う……?」

「あ!気が付いた!」

「ここは?」

「エミリア!」

「御姉様?」

「ああ!」

エスメラルダは心配すると、エミリアが言う。

「……そうだ!陽弥様に伝えないと!!」

「え？」

「お兄ちゃんなら、アルマロスと戦っている！あそこで！」

ルナの指す方向に陽弥とアルマロスが戦っていた。

「早く！陽弥様に伝えないと!!」

「え？何を？」

「アルマロスは……彼は……」

エミリアが語る衝撃の言葉に皆の背筋が凍りついた。

一方、陽弥はブラストファンネルでアルマロスを追い詰める。

「ファントム！」

アルマロスがカルディアノン戦闘艦型のファントムを召喚したが、陽弥は四刀流でカルディアノン戦闘艦型のファントムを切り裂いた。

「邪魔だ!!」

次々にアルマロスはファントムを召喚するが、あっさりと倒される。

「ブラストファンネル！」

陽弥がブラストファンネルに命令し、アルマロスを追い詰める。

「ガアアアアアアアアッ!!」

しかし、アルマロスも負けておらず、回転しながらハイパーノバビーム砲を拡散させ、ブラストファンネルを破壊した。すると陽弥はコックピットから出てきて、腰に付けていたガイアブリンガーを鞘から引き抜いた。

「ガイアブリンガーッ!!」

黄金に輝く刃にエミリアは驚く。

「あの剣は！代々クリーフ王家が使用していた……」

「そんな小さなまくらな剣で何が出来る!!」

アルマロスが鋭い爪で襲い掛かった直後、陽弥はガイアブリンガーを構える。すると、ガイアブリンガーから黄金のオーラが溢れ、アルマロスの腕を切り裂き、そして顔面に深い傷を付けた。

「ッ!!」

簡単に切られた事にアルマロスは悲鳴を上げる。



モニターに映っていたのは傷だらけのアルマロスであった。

《アルマロス！》

「見て！アルマロスの尻尾の所！」

《陽弥！》

「己ええっ！！陽弥・ギデオーン！」

「アルマロスウウウウツ！！」

陽弥は四刃流で応戦するが、アルマロスの尻尾攻撃が炸裂し、アヴァロンの外壁にぶつかつた。そしてアヴァロン上層内ではクロウ達がアポカリプスを追い詰めていた時、アヴァロン全体が揺れる。

「っ!?何だ!?!」

「………… どうやら、アルマロス様が外へ出られたようですね…………」

「アルマロスが!?!」

するとアポカリプスはあることを話す。

「知っているか?………… アルマロスの正体を…………」

「アルマロスの………… 正体…………?」

「そう、私も彼の素顔を見たときは驚きましたよ………… そうですねえ、少し………… 彼の昔話をして差し上げましょう。」

アポカリプスはアルマロスの過去を語り始めた。

「彼はかつて、偉大な王でした………… 国と平和と秩序を正しい方向へ導こうと………… だが、先代国王は彼の心を見抜いたので。いつか自分の息子は大変なことをしでかそうとしていることに………… 娘を王位継承者に認付けしました。王位継承者に選ばれなかった彼は、絶望し、ある手段へ移った………… 娘が化物だと言うことを………… 民に、全国民へ暴露した。結果………… 妹は辺境の地に追いやられ、彼は王位継承者に選ばれ、ひたすら化物であった娘を守ろうとした愚かな国王を絞首刑にした…………」

エツジは分からなくなり、怒鳴る。

「それが何だっっていうんだ！アルマロスは元は“人間”って言いたいのか!?!」

だが、アルマロスの言葉の意味が分かつたクロウが言う。

「…………… まさか!?!」

陽弥は四刀流でアルマロスの爪攻撃を防御する。

「ググググググ!!!」

「死ねえっ！陽弥・ギデオオオオン!!」

「まだだっ!!」

陽弥はアルマロスを蹴り飛ばした。

「っ!!」

「せいっ!!」

七星剣の一撃がアルマロスの顔を斬った。

「っ!!?」

「っ!!?」

《ッ!!!》

陽弥達はアルマロスの顔に驚愕する。

「そんな……!!?」

「嘘……… だろ……… !!?」

「お前は………」

アルマロス……… 嫌、かつて神聖ミスルギ皇国皇帝だった者。  
その彼の名は………

《ジュリオ!?!》

アルマロスの正体があのジュリオと分かり、陽弥はさらにジュリオに問う。

「何でだ!?! 確かお前はあの時!?!」

「その通り……… 私はお前に敗れた……… だかあの時、燃え盛



る私は次元の力で、グリゴリになったのだ!!」

「何だって?!」

そして丁度同じ頃、アポカリプスもジュリオの過去を話していた。「彼は、陽弥・ギデオンに負けた直後、ワープによる時間誤差で、お前達の世界へやって来た。隕石となってな……………」

「隕石……………っ?!」

エッジは思い出す。惑星エイオスへ向かっている最中に、亜空間で見た隕石の事を……………

「つまり、グリゴリはジュリオであったのか!!」

バツカスが答えると、アポカリプスはさらに問う。

「その通りだ……………ジュリオは惑星エイオスへ落下し、そこでSRFの隊員に回収された……………そこからは分かるだろう? エッジ・マーベリックよ……………」

リムルの故郷”惑星レムリック”で起こったバカラス病での事件……………カルディアノンが言う”導きの啓示”での異常な進化……………そしてSRF隊員が異常な進化で他の隊員を襲われたことを……………全てを思い出す。そして……………フェイズがグリゴリに呑み込まれたことも……………

「クソッ! 全てはジュリオの計画だったのか!!」

それを本人から聴いた陽弥も怒鳴る。

「全部お前の計画だったのか!! ジュリオ!!」

「そうだ! だが、あの若造のせいであるの世界を征服するのは失敗した。だけど! それが全ての始まりでもあった。あの若造にも負けた私は……………また過去に飛ばされたのだよ」

「えっ!!」

「ループと言うのは知っているだろ? 正にそれだ! 私は絶滅する前のクアンタ人の時代へ飛ばされ、体を維持するためにプロセアンをコレクターに変えた。これで私を邪魔するものはいない……………と思っていたが……………お前と26人の使徒が邪魔をしてきたっ!!!」

「じゃあ、あの巨体なグリゴリは!」

「そうだ! 私だ! 結果お前とお前と瓜二つの暗黒生命体に負けた! 絶

望した私に残された道はただ一つ……… 全次元！過去！現在！未来の理を壊し！新たな世界に作り替えることに！私が新時代の皇帝として君臨するために！！」

ジュリオの今までの過去と下らない野望を耳にした陽弥は怒りを込み上げた。

「……… けるな………」

「？」

「……… ふぎけるなよ……… お前っ！！ たったそれだけの事で……… クアンタ人を……… エンブリヲも……… ドウームも……… ミスルギやエンデラント！、マーメリア！、ヴェルダ王朝！ローゼンブルム！ガリアー！そして過去の自分！！ 全ての時空に生きている者達を！！ 手のひらで踊らせるかのように弄びやがってええええっ！！！！」

！！その時、シグムディアの頭部のスラストーから紅蓮の炎を纏った粒子帯を放出する。

「ジュリオッ！！ テメエだけは……… この世やあの世とは思えないほど！ 絶対に赦さんぞおっ！！ 俺は！！ 完全に切れたぞおっ！！！！」

「フハ！ハ！ハ！ハ！ハ！ハ！ハ！そんな体で何が出来るんだ！！？ 陽弥・ギデオン！！ それに私は知っているんだぞ！ 未来のインフィニティソウルと現在のインフィニティソウルの力が弱まっていることに！！」

《えっ！！？》  
「そうなれば……… もうお前はこの世にいない存在！ つまり、天界へ行かなければならないのだからなあ！！！！」

「だったら！！」

陽弥はシグムディアと共に手を翳し、叫んだ。

「あの世に行く前に……… 貴様を倒す！！ だからインフィニティソウルよ！ 俺に最後の力を……… 貸してくれ！！」

陽弥の那賀の二つのインフィニティソウルが強く共鳴し、光だす。

「スペクトロブス達か！」

ルナ達に渡していたそれぞれのスペクトロブスや、

「銀河七聖龍達が！」

銀河七聖龍も陽弥の所に集まり、融合していく。そして陽弥は唱えた。

「真！極龍装光!!」

陽弥に宿る銀河七聖龍や星の獣、ブラムとイザベル、マナが融合し、白く光る龍へとなった。そして特徴だったのが龍の両目が陽弥と同じ目をしていた。

「ほお……それがお前の最後の姿か……」

「俺の名は……超・護星神 バハムディア！全ての宇宙と生命を守りし守護者だ!!」

「面白い……ならば、私も！」

するとジュリオの体から黒い粒子が溢れだし、体を包み込む。そして粒子が消えると、ジュリオの姿が黒く染まっていた。

「お前?!その姿は?!」

「フフフフ……我が名は 創破主 ジュリオ……」

去、現在、未来の理と秩序を真なる光に、導く者だ……」

赤き目を光らせ、赤黒いビームウイングを展開して、語る。

「何だと?……何が真なる光だ!!そんな世界!誰も想像したくないなあ!!!」

「フハハハハハハ!!我に、仇なす神が…… 我にどう楯突こうと言うのか?」

「強制的にな!!行くぞ!ジュリオオオオオオツ!!!」

「死んで抗うが良い!!!ミッドガンドの超・護星神!!!」

光の龍へとなった陽弥と闇の墮天使となったジュリオの……最後の戦いが幕を開けた。

## 最終話：銀河の守護者

闇の墮天使になったジュリオの姿にシンやアンジユ、タスクは息を飲む。

「あれが……………ジュリオ!？」

「もう彼の面影がない…………… あれは天使と言うより…………… 天使の面を付けた悪魔その物だ!」

「哀れな……………ジュリオの奴……………」

ジュリオは旋回しながら陽弥の爪攻撃を回避し、ファントムトゥルーパーを召喚した。

「行け!ファントムトゥルーパー!!」

見た目はギムガラムであったが全身が赤黒く、腕に禍々しい銃剣を構えていた。無数のファントムトゥルーパーは銃剣は陽弥に向ける。

「まずい!いくらなんでもあの数を倒せるなんて無理だ!」

「フツ!」

すると陽弥はガイアブリンガーの刃をした尻尾を振り回し、口からホーリーブレス放ちながら、回転し始め、無数のファントムトゥルーパーを一撃で塵と化した。その光景にシン達は唾然していた。

「えっ!？」

「凄……………俺達も苦戦したファントムが……………秒殺で……………」

「!？」

「中々、やるではないか……………」

陽弥は攻撃を止め、ジュリオに問う。

「今だけか?」

「……………嫌♪」

するとジュリオはバロックダークに手を翳す。その時、バロックダークの周りにある黒い海が集まり、巨大な闇のドラゴン”ヨルムンガルド”を造り出した。

「喰らえ!超・護星神!!」

ヨルムンガルドの口から膨大なエネルギーが集まっていることにシンは急いで皆に報告する。

「マズイ!!全艦隊!緊急ワープに入れ!!巻き込まれるぞ!!」

連合艦隊は急いで緊急ワープを開始し、偽りの地球から離れた。そしてヨルムンガルドの口から特大の破壊光線を発射した。

「ガアアアアアアアッ!!!」

陽弥は急いで魔法障壁と光学障壁を展開し、さらに次元バリアを展開した。破壊光線が陽弥もろとも、偽りの地球を破壊した。

「偽りの地球が!!」

そして破壊された偽りの地球を中心からブラックホールが出現し、崩れた偽りの地球を吸い込んでいく。

「おいおい……………偽りの地球を……………一撃で!?!」

「お兄ちゃんは!?!」

「まだ彼処に!!」

よく見ると、肩から血を垂れ流す陽弥がいた。

「うっ!」

「痛むか?……………そうだろうなあ、もうじきお前はあの世へ行かなければならないのだからなあ……………」

「っ!!!」

ジュリオの斬撃が襲い掛かり、陽弥はなんとか回避するが、ジュリオの超速攻撃が陽弥のスタミナを減らしていく。その直後、アヴァロンから、アポカリプスが現れ、それを追って、クロウ達がやって来た。

「おやおや、陽弥・ギデオンか……………」

「アポカリプス……………!」

「え!?お前!陽弥!?!」

「アポカリプス……………まだいたのか?」

「これはこれは陛下……………上々コイツらに手こずっていませんか、」

「まあ、よい……………プランBに移るぞ……………」

「はい、陛下」

するとアポカリプスは自身の体を捨て、ジュリオの体の中へと入っていった。

「アイツ！何をするつもりだ!!」

するとアヴァロンが動きだし、ジュリオを後方に備えた。

「何が起ころうとしているんだ!!」

「見てー!」

レイミがアヴァロンの方を指す。するとアヴァロンが変形し始め、バロックダークもジュリオと合体していく。

「アヴァロンが!!」

さらに変形し始め、各部位に黄金の装飾品が付けられており、背中にフォドラニウムの大結晶石の山で埋め尽くされており、頭部はジュリオの顔を思わせるような機械の顔になっていた。

「ジュリオ!!」

「呼び捨てはよせ！この下級生命体が！今の私は……………」

するとグリゴリの力で背中から禍々しい巨大な悪魔の翼を展開した。

「創破主!!ジュリオ様だ!!」

その姿はまるで黄金に輝く悪魔王そのものであった。

「あれは……………もうジュリオではない！悪魔そのものだ!!」

「何をするつもりだ!?ジュリオ!!」

「決まっているだろ？アヴァロンに貯蔵していたフォドラニウムと私のグリゴリをオーバーロードさせ、タイムトンネルを展開する！そして!!忌まわしき過去……………アルゼナルを消滅させる!!ミスルギ皇国を……………不滅の国家にし、エンブリヲを殺し！私が調律者となるのだ!!それとミスルギの民たちや全国の民も奴隷にする！ミスルギこそが！この宇宙を制する者としてな!!」

ジュリオのとてつもない野望に全艦隊にいる隊員やミスルギ皇国の民も背筋が凍りついた。するとヴィルキスに乗っているアンジュがジュリオの前に出て怒鳴った。

「そんなこと！私が許すとも思っているの!!ジュリオ！聴きなさい!!」

アンジュは永遠語り”光の歌”を歌い始めた。

「♪～♪～」



「何が起こったんだ!？」

「エミリアの涙が弾け飛んで、そこからクアンタの血がエミリアに真の力へと覚醒させたんだよ!」

「良く分からないが…… エミリアのご先祖さんが力を貸してくれたんだ。礼を言つとかなきゃなあ」

ヒルダはそう言うと、シンや皆と一緒に宇宙を見上げ、亡くなったクアンタ人へ祈った。そしてエミリアは皇家の服で舞踊り、永遠語り”時の歌”を歌い始めた。

「♪♪♪」

「?」

陽弥は後方にいるインフィニットプライムスを見る。そこには陽弥を必死に応援歌するエミリアが舞踊っていた。

「今度はあの姫の歌だ?!?己ええっ!!」

ジュリオは怒りを上げ、インフィニットプライムスへ接近しようとした。

「邪魔はさせんぞ!!」

陽弥は尻尾でジュリオを叩き飛ばす。

「っ!!?」

「ハアアアアアアアアッ!!!」

ジュリオは陽弥の攻撃を防御するが、パワーで押し負けていく。

「そんなバカな!?!インフィニティソウルのパワーが………上がっているだど!?!?」

すると、陽弥の体からジュリオと同じグリゴリが現れた。

「それは!?!グリゴリ!?!」

「クリムゾンのな!!」

さらにクロウの体からアークが飛び出し、陽弥の体の中へと入っていった。

「アーク!?!」

最後に舞踊るエミリアの体からクアンタニウムハートが飛び出し、陽弥の体の中へと入っていった。

「クアンタニウムハート!?!」



すると、陽弥のインフィニティソウルとエミリアのクアンタニウムハート、クロウのアーククリスタル、クリムゾンのグリゴリが未来の陽弥のインフィニティソウルを中心に回転し始め、五つのエネルギーが融合し、虹色に光るメビウスの輪ができた。

「そ!!その力は!!」

陽弥はジュリオの目でも追いつけない程の超神速を使い、長い尻尾でジュリオの胸に突き刺した。

「変えさせてもらおうぞ!!カオスのエターナルソウルハートを!!」

陽弥は渾身を込めて、ジュリオの体からカオスのエターナルソウルハートを取り返した。

「ガアッ!!」

するとジュリオと合体していたアヴァロンが崩れ始め、中身の黒い液体が見えていた。

「まだまだ!!まだ私には!グリゴリがある!!」

するとジュリオは最後のヨルムンガルドを発射しようとしていた。

「ジュリオの口腔部から膨大なダークマターエネルギーを確認!!」

「アイツ!勝負付けるつもりだ!」

そしてジュリオの口からヨルムンガルドが発射された。

「こんな世界ごと消えろ!ウジ虫共めえっ!!」

赤黒い粒子砲が発射された時、陽弥がヨルムンガルドの前に出た。

「何時まで、甘ったれた事を言ってるじゃねえ!!」

陽弥も、口からホーリーブレスをチャージする。

「喰らえええええっ!!」

「テメエが消えろおっ!!」

そしてチャージし終えた陽弥もホーリーブレスを放ち、ヨルムンガルドと衝突した。

「グウウウウウツ!!」

「クッ!... ハアアアアアアアッ!!!!!!」

五つのエネルギーが一つになった陽弥のホーリーブレスがヨルムンガルドを吸収していく。

「ヌアッ!!?」





陽弥とエミリアはそれぞれの鎧を着用し、マナを守ろうと二刀流とランスと盾を抜刀した。

「来い!!」

その時、ルーがポーチから手錠を取りだし、ジュリオに向けてブーメランのように投げた。

「ガアッ!!」

手錠がジュリオの手首にガツチリと付けられ、ナイフを落とした。すると上方から次元警察の艦隊や旗艦らしき戦艦がタイムジャンプしてきて、サーチライトでジュリオを照らした。

「降伏しろ!ジュリオ!お前の野望は終わった!!もう逃げられないぞ!!」

「次!次元警察だと!!」

戦艦が着陸し、ハツチが開くと、次元警察隊員がライオットシールドとハンドブラスターを構えて、ジュリオを追い詰める。

「止まれ!!」

さらにゲオルグードロイドで逃げ場を封鎖し、ジュリオを取り押さえた。

「うあああつ!!後、一歩だったのにつ!!離せ!私は偉大なる神聖ミスルギ皇国皇帝 ジュリオ・飛鳥・ミスルギだぞ!無礼者がああ!!」  
すると上官らしき人が現れ、怒鳴る。

「何が無礼者だ!!外道が!ジュリオ・飛鳥・ミスルギ!歴史破壊未遂罪及び、終末融合未遂罪、未開惑星保護条約違反、民間無差別奴隷により!お前を逮捕する!!」

上官らしき警察は最新型の手錠を使い、ジュリオを拘束し、レーザープリズンボックスの中に閉じ込めた。

「クソオオオオオオオオツ!!」

ジュリオは大声を上げ、悔しがる。ルーは上官に敬礼する。

「シンクレア長官!!」

「良い……………ご苦労であった。ルーカス君」

「ハッ!!」

するとシンクレアが陽弥に近付く。



するとルナがあることを思い出す。

「あれ？て言うか、お兄ちゃん死んでないの？」

「え？」

「ほらー！」

陽弥は自分の体に触れる。

「本当だ!!」

「おい！シンー！」

「どうした？」

「これ見てくれ!!」

マギーが持つてきたのは、陽弥のバイタルであった。シンはバイタルゲージを見て、驚愕する。

「……………これは!!」

「ちよつとー！」

マギーが陽弥の体のあちこちを触り、脈も調べる。

「え？」

「動いている……………体温も……………呼吸も……………脈拍も！生きています!!」

「え？どう言うこと??」

「つまり！インフィニティソウルとクアンタニウムハートとクリムゾンのグリゴリとアーククリスタルが一つになったことで！お前は！生き返ったんだよ!!」

マギーの言葉に皆は喜びを上げ、陽弥は生き返ったことに驚きを隠せなかった。

「え!?本当に!!」

「その結果！心臓が動き始めたんだよ!!」

陽弥は自身の胸に触れると、心臓が動いていた。

## エピローグ：未来へ

その後、地球に帰ってきた陽弥達は祝勝会を開き、皆で5日間祝った。そして陽弥はエッジとの約束を守ろうと、ホライゾンの王達やアジマス連邦、ヴァルキュリアス、銀河連邦、銀河同盟との友好条約と共に、文明レベルが低い惑星に未知のテクノロジーを明け渡してはいけない条約『未開惑星保護条約』が決行された。幸いにも、ホライゾンに生きる人達はクアンタのテクノロジーを干渉したことにより、銀河連邦及び、メトロ人、新生アジマス連邦も連合国家の加担種族として認定された。

それから皆は何をしているかって？

ルナはあれから時空紋章の事で猛勉強している。将来、俺が建てた呪文を使った学校の先生になると言っていた。勿論ラファイのプロポーズも受け入れ、現在付き合っていると。

ソフィアは相変わらず、ラルフが気になっている。アイツもそろそろ春が来るといいな♪

リヨウマはドラゴレイドとマーメルド共和国との合同軍を結成し、ローレイと結婚した。サラマンディーネさんもよく人魚姫との結婚を許したのが凄いと思っている。

アレクトラはヴァルヴァートル帝国の新皇帝ルチルと結婚し、ヘルガストとの共同で暮らしている。サリアさんは娘が一人前の女性になったことで嬉し泣きしていた。勿論曾祖母のヘラ・ヴィサリ女帝も……………

ミューはヴァルキュリアスで俺専属の助手になった。凄く早さで問題を片付いたから、総統の俺でもビックリしたよ。

テスタ達はヴァルキュリアス星騎士団を結成し、ミスルギ皇国の義勇軍はミスルギと言う名を捨て、「ヴァルキュリアス人」へと名前を変えた。どうやら、俺の事を真の神様と思ったんだろう。

父さん達は……………相変わらずブラブラしている。戦いが終わったから、疲れているだろう。

爺とアルベルトさんは役目を終えて、天国へと帰っていった。二人

は臨時護星神だった為、ヘリオスとセレーネに頼まれていたらしい。そしてアースガルドとヘルヘイムの次期護星神はラフィとシユヴァルツに認定された。

俺達の戦争…… 「トウルーラストリベルタス」 通称 「ソロモニア戦記」 が終戦して5ヶ月後、陽弥はヴァルキュリアスのテクノロジで再建されたエルシュリア王国に勲章を貰いにホライゾンに到着した。皆は陽弥を歓迎し、さらにエミリアとの婚約パーティーも始まっていた。そんな陽弥は城外へ出て、夕陽の色に染まった草原を眺めていた。

「…………… スウ…………… ハア…………… やっぱり良いなあ…………… ここは…………… 』」

「陽弥様…………… 何をしていますのですか？」

陽弥の所にエミリアが近づいてきた。

「エミリアか、エルシュリア王国の草原を眺めていたんだ。」

「御側に座ってもよろしいでしょうか？」

「良いよ……………」

エミリアは陽弥の横に座り、一緒に草原を眺める。

「本当…………… ここは綺麗な場所だな……………」

「ええ、先代クリーフ王が見つけた聖地ですもの……………」

「…………… ジュリオは、どうしてこんな平和な世界を自分の物にしたかったんだろう……………」

「…………… きつと、彼は”寂しがり”と思いますよ……………」

「え？」

「囚われているとき、彼の意識が見えたのです。親に認められなかった事に…………… 反発したと…………… けど、本心では独りぼっちだったのです……………」

「それだけの理由でか…………… やっぱり、エンブリヲの呪縛は簡単には解かれないんだな……………」

「ええ、」

エミリアは悲しそうな表情になると、陽弥がエスメラルダの事を話



す。

「エスメラルダさん……嫌、御義姉さんの方は？」

「旅に出ると……もしかしたら、生き残りのクアンタ人がいるとの情報を付かんで、あちこちの星を探索し始めたの……」

「見つかるの良いな♪」

「そうですね♪」

二人は互いの顔を見つめると、城の方からアストラッド王とアリシア王妃、マリアが陽弥とエミリアを呼ぶ。

「おい！エミリア〜！陽弥君！」

「お姉様〜！お義兄様〜！」

「皆が呼んでる……そろそろ戻ろうか」

陽弥は皆の所に戻ろうとすると、エミリアがあることを思いだし、陽弥を呼び止める。

「あ！大事な事を忘れていました！」

するとエミリアは陽弥の手を握り、自分の下腹部に当てる。

「えーちよっ!？」

陽弥は顔が赤くなり、慌てた直後、エミリアの下腹部から鼓動を感じる。

「え……え!？」

陽弥はエミリアのお腹の中の”命”を感じ、エミリアに問う。

「マジっ?」

「はい♪大マジです♪」

エミリアが満面な笑顔で返すと、陽弥は大興奮する。

「よっしやアアアアアアアっ!!!ふおく〜っ!!♪♪♪♪♪」

アストラッド王は興奮する陽弥を不思議に思ったが、気にしなかった。

「早速、皆に知らせようー！」

「待ってください！これは……式当日に知らせてください……所謂、逆サプライズと言うことです♪」

「……分かった♪」

陽弥とエミリアは互いに手を繋ぎ、エルシュリア王国へと戻ってい

た。

## 外伝：二人からの祝福

陽弥達が終わらせたソロモニア戦記から6ヶ月後、ホライゾンや各惑星で最高の祭りが開かれていた。それは全国民が待望していた陽弥・ギデオンの総統とエミリア・ヴァルネア・クリーフ姫殿下の結婚式が開かれていたのであった。

先ず、式場に行くためにヴァルキュリアスのパレードがあると、そしてウエディング用の馬車には陽弥が白のタキシードを着ており、ルナと父親のシンがいた。

「いよいよだねえ！お兄ちゃん！」

「う……………うん……………滅茶苦茶、緊張する……………」

「らしくないぞ……………陽弥」

「父さんも……………」

「一樣、エスメラルダに話して、呼び戻している。彼女も急いでドレスに着替えながら、向かっているって、」

「そうか……………しかし、これは……………」

馬車を引くための馬がパレード用の装飾品を身につけた陽弥の愛馬ユニゴルディアンとルナの愛馬ミスティックが並んでいた。さらに陽弥の膝に愛犬のガルデオラが幼体のコマイヌに戻っており、陽弥の顔を見ながらワクワクしていた。勿論、コマイヌにも黒のタキシードを着ていた。

「派手じゃない？」

すると、向こうから純白のウエディングドレスを着たエミリアがやって来た。

「お待たせしました♪」

陽弥はエミリアのウエディングドレスを見て、魅了されていた。

「じゃあ、俺らは、この辺で♪」

「先に式場で待っているから♪」

ルナとシンは式場に向かう。そして馬車の中でパレードが始まるの待つ陽弥とエミリア。すると陽弥はオムニツールを起動し、あるディスクを見る。

「本当に……これ見せるの?」

「はい♪きつと、陽弥様のお義父様とお義母様やルナさん達もきつと、大喜びですよ♪」

「だけど……これはちよつと……そうだ!!」

「エミリア!ちよつと付いてきてくれないか!」

「え?ええ……」

陽弥は馬車から下り、叫んだ。

「シグムディア!」

するとシグムディアが次元跳躍で現れ、陽弥に問う。

「陽弥様……結婚式なのに、何故、我を?」

「ちよつと、行きたい時代があるんだ!」

「?」

陽弥はエミリアのコックピットの後部座席に乗せ、何処かへと時間跳躍した。数秒後、元の時代に戻ってきて、シグムディアを急いで隠し、そのまま馬車の中で待つ。そして数分後、パレードが始まり、陽弥とエミリアを乗せた馬車がエルシュリア王国の街道を通っていく。前列に吹奏楽団が楽器を鳴らし、ヴァルキュリアス兵士やエルシュリア王国兵士が華麗な行進を見せ、さらにセイクリッドメール、パラメイル、ガルドメール、インゼクティアメールでの行進があり、国民が興奮に満ちていた。

《おおおお~~~~~!》

「キャハハ!うるさ〜い♪」

子供が花火の音や吹奏楽団の音楽、耳を塞ぎながら、喜ぶ。

「陽弥・ギデオーン!バンザイ!!」

「エミリア様!おめでとうございます!!」

「お美しいですよ♪」

陽弥とエミリアは国民の笑顔を見ながら、言う。

「ふう、何とか間に合った……」

「良いのですか?その映像をサプライズプレゼントの中に収めて……」

「良いんだよ♪ちよつとした…… 礼だ♪」

そしてパレードが終わり、陽弥とエミリアは式場に着いた。中ではギデオンの一家を含め、ソフィア達やラルフ達、ラファイ達と各国の王達が集まっており、座っていたとして、

「新郎、陽弥・ギデオン、貴殿は新婦エミリア・ヴァルネア・クリーフと共にどんな時でも苦難を乗り越え、愛し合うことを誓いますか？」

「はい、誓います。」

「新婦、エミリア・ヴァルネア・クリーフ、貴殿は新郎陽弥・ギデオンと共にどんな時でも苦難を乗り越え、愛し合つて行く事を誓いますか？」

「はい、誓います。」

二人は誓いの言葉を言い、神父が言う。

「それでは、指輪の交換と、誓いの口づけを。」

陽弥はエミリアのマリアヴェールを上げ、誓いのキスをした。それに皆から大きな拍手が送られてきて、シンとヒルダは陽弥とエミリアの結婚式を見て、若かった頃の事を思い浮かべる。

「昔のあんたとの結婚式…… こんなんだったねえ♪」

「ああ、思い返すなあ…… 立派になりやがって、スツカリ一人前の男になりやがって……」

シンは陽弥の姿に納得していた。

式の後、披露宴でアリシアが今までの事をスピーチにし、皆や二人の前で泣きながらスピーチしていた。

「本当に！幸せです！私たちが育て上げてきたエミリアが…… こんなに美しく！さらにイケメンの陽弥・ギデオンと結ばれることが！本当に嬉しいです！」

「オーバーだなあ…… お義母さんの方は……」

アリシアのスピーチが終わると司会者がアリシアからマイクを預かる。



ていたのは、まだ若き頃のサムとアリアであった。  
「っ!？」

そしてアリアが産まれたシンを抱き上げ、嬉し泣きをする。そしてそこに心配で駆けつけたサムが大喜びする。

「あーそうだ！私、シンを産んだ時、こんなだった！」

次に赤ん坊であったヒルダがシュリーフオークト夫妻が映っていた。

「私も映っているぞ!？」

次にアリアがココを生み、嬉し泣きをし、子供の頃のシンがヒルダの家の近くの林檎の木と一緒に上っている姿が映っていた。

「まさか!？」

「フフ♪」

「子世代が生まれる前は……こんな人生を送っていたなあ……」

「懐かしい……」

そして今度はアンジュの若き頃や皆の笑顔、そしてサリアの親友の”アン”の姿が映っていた。それを見たサリアが思わず泣く。

「アン……!？」

さらに、赤ん坊のエミリアの姿も映っていた。

「そうだ……赤ん坊の頃のエミリアもこんな風に輝いていた……」

「忘れていたわ……あの思いで……」

そして映像が終わると、陽弥とエミリアが映る。

『最後に……父さん、母さん、ルナ、ココ叔母さんにミランダ叔母さん、婆ちゃん♪』

『お義父様、お義母様、マリア、お姉さま♪』

二人は互いの顔を見つめ、カメラの方を向き、言う。

『『これを見てください♪♪』』

映像が変わり、映ったのは……

《ツ!!?》

何とそれは、現在妊娠6ヶ月のエコー写真であり、皆は驚き、特に

ギデオン一家やクリーフ王家はさらに驚いていた。

「まさか!!?」

「そう……エミリアは……俺の子供を身籠っているのです！  
しかも、女の子を！」

陽弥とエミリアのサプライズプレゼント及び妊娠報告が来たこと  
により、シン達は興奮する。

《ふおっくっ!!!》

「あ………気付かなかった………」

「孫おおおおお!!♪♪♪」

ルナが唾然し、アリシアが発狂しながら、興奮する。

「く………初孫!………しかも女の子………こんな嬉しい  
サプライズは初めてかもしれない!!♪♪」

「最後の最後で……あの二人からのダブルクリティカルが来るな  
んてなあ♪」

シンとアストラッド王が涙目で呟く。その時ドアが開き、現れたの  
はドレス姿のエスメラルダであった。

「ゼエ!……ゼエ!………ゼエ!………終わっちゃった  
!?!」

「え?いいえ………まだ続きますよ………」

「はあ、よかつた………ん?」

エスメラルダがモニター画面に映っているエコー写真を見る。

「あれって………まさか!?!」

「♪」  
エスメラルダがエミリアに問うと、エミリアは満面な笑顔で返す。

「………」

エスメラルダはポカーンとなり、唾然する。

「あのく、エスメラルダさん?」

司会者が唾然したままのエスメラルダに手を降るが、反応しなかつ  
た。

「完全に硬直していますね」

会場に笑い声が響き、陽弥とエミリアは幸せな思い出を作った。



## 外伝：許し

次元歴84年 惑星ヴェクタ ヲクタ連邦裁判所 そこに裁判員達が並び、ある被告人を裁判していた。名はジュリオ……………

「判決を言い下す。ジュリオ・飛鳥・ミスルギ…………… 全次元を揺るがした罪及び、数多の種族を奴隷により、有罪と見なす。よって終身刑に処する！」

裁判員の下った言葉にあらゆる種族の議員が静かになる。

「これにて、閉廷！」

その後、ジュリオはヴェクタの警察庁の牢獄に入れられた。するとそこにシンクレア長官が現れ、ジュリオに話す。

「どうだ？…………… これがお前がやろうとした結果だ…………… もう王家なんて関係なくなつたんだ。ジュリオ……………」

「…………… 私は…………… 私は…………… いつもの生活に戻そうとしたかっただけなのに…………… 何故？」

「…………… 時間は絶対変えてはならない理なんだ…………… これは神達も禁じた法でもある。」

その時、ジュリオの表情が怒りに変わり、怒鳴った。

「元に戻せ!! 悪魔どもめ!! 何が守護者だ!! 自分達の存在を守ろうとした腑抜け共がっ!!」

するとシンクレアが言う。

「…………… 私ではない…………… お前の両親からの…………… 願いだ……………」

「っ!？」

シンクレアは陽弥・ギデオンがやろうとしてきた事と、ジュライ・飛鳥・ミスルギとソフィア・斑鳩・ミスルギの願いを話す。彼の語った真実にジュリオは泣き崩れる。

「これが真実だ……………」

「私は…………… 取り返しのつかないことをしてしまった…………… どうすれば……………?」

「……………最後まで……………罪を償い続けるんだ。ジュリオ……………きつと死んだとき、お父さんとお母さん、そしてアンジュリーゼとシルヴィアは……………お前の事を許してくれるだろう……………」

シンクレアはそう言うと、去っていった。警察庁から出ると、ルーカスが車の中で待っていた。

「終わりました？長官……………」

「うん……………それとルーカス……………爺ちゃん達の所へ送ってくれないかな？」

「はい……………」

ルーカスはシンクレアの指示に従い、何処かへと向かった。

シンクレアが着いた場所はギデオン家の遺骨が入っている墓場であった。シンクレアはマテリアライズで花を作り出し、墓に供える。

「三人の英雄……………第47代目当主 サム・ギデオン……………48

代目当主 シン・ギデオン……………そして49代目当主 陽弥・ギ

デオン……………凄いですねえ♪」

墓石に三人の英雄の名前が刻まれていた。

「だろ？」

二人は念仏を唱え終え、帰ろうとすると、シンクレアが大空を見上げる。

「爺ちゃん……………頑張ってるよ……………自分は……………」

シンクレアは満面な笑顔空を見続けた。

Lost Souls 編  
after story 01：選ばれし者

次元歴84年ヴェクタ連邦警察本部では

「シンクレア長官！大変です!!」

「ん？」

「報告します！シンクレア長官の先祖……………陽弥・ギデオ  
ンが……………行方不明に!!」

部下が持つてきた情報の報告にシンクレアは驚く。

「何……………!?詳しく言ってくれ!」

「はい！彼はある星へ航行中、突如襲来してきた謎の武装集団に襲  
われ、シグムディアと共に……………」

「嘘だろ……………」

「ですが、御安心を！必ず全力で捜索します!」

部下が去ると、シンクレアは窓から差し込む夕日を見る。

「武装集団……………(まさか……………奴等だったら)」

その頃、ある場所で機械から蒸気が溢れており、その奥に神殿のよ  
うな間があった。そこに一人の半身半機の指導者と指導者と同じ顔  
を持った半身半機の集団が目の前にある黒い剣に何か念仏を唱えて  
いた。

「傀儡の剣よ……………傀儡の剣よ……………我等に創破主様の御加護を  
与えたまえ……………」

その直後、黒い剣の刃に縦側で装飾されていた部分が目玉に変わ  
り、指導者や集団を見る。そして目玉から禍々しい黒いオーラを指導  
者や集団に与えた。

「これが！世界に救世をもたらす力……素晴らしい！これなら！創破主様の偉大さを証明できる！！皆の衆！我等、マンティカル教は創破主様の御加護に選ばれた！！さあ！皆の衆よ！共に創破主様に祈りを捧げるのです！」

《おおく！！》

不気味な集団が指導者の言葉を受け入れ、大声を上げる。

ここはとある世界の空港……そこにある水色のワンピースを来た金髪の少女が泣きながら、何かを訴える。

「やだ！やだ！勇人と一緒にじゃなきゃ、嫌！！私日本に残る！」

そして女の子と一緒に泣く男の子もいた。

「そんなことを言われても、親が決めた事だし……そうだ！」

勇人はポケットから何かを取り出した。

「これ！」

勇人はそれを女の子に見せると、息なりキスをしてきた。

「っ!？」

勇人は慌て、女の子は両親の所へと向かって行く。

「絶対に帰ってくる！それまで待っていて！」

女の子はそう言うと、両親と共に国へ帰っていった

そして9年後、勇人は空を見上げていた。

「あの娘……今頃、どうしてるかな？」

空を見上げる最中、勇人の耳から誰かの声が勇人の名を呼んだ。

『勇人……』

「え？」

それと同時に、先生が授業中に注意してきた。

「何をぼおくとしてるんだい？（こ）、読んでくれ」

「え!?!はい!」

僕の名前は新川 勇人…… 17歳で、冴えない高校生です…… 趣味は読書や釣り、ゲームが得意ですが、体育が苦手です。好きな教科は数学と歴史、あと技工です。そんな俺にも嫌いな人がいます。根岸 洋介…… 腰巻きを連れた酷い虐めっ子…… 僕がバイトで稼いだお金を何円か取り上げる酷い奴。でも無理だよ…… アイツの父親がこの街の御曹司。逆らう者は容赦なく罰則されるし、助けを求めようとしても無視される。

勇人はバイト帰り、ある廃墟に侵入していた。その奥の部屋にある書斎室の本を読んでいた。

「どうして僕…… こんな世界に生まれちゃったのかな……」

勇人は眠り姫の本を読んでいた。

「ヒーロー（英雄）に…… なってみたい……」

勇人は読み終わると、本棚に終おうとした。

「何でこんなに詰まっているんだ?……」

本を押し込めようとした時、奥に何かがあることに気付く。

「ん?…… 何だこれ?」

勇人は奥の本を取り出そうと、邪魔な本を退かし、奥の本を取り出した。それは機械で出来た分厚い日記でもあった。

「こんなメカメカしい本…… いつからあったんだ?」

その時、本に装飾されている緑の水晶が強く発光し、勇人を目眩ませた。

「っ!?!」

勇人はあまりの光に思わず本を落としてしまう。その時、何処からか声がしてきた。

『我を起こしたのは…… 貴様か?』

「誰!?!」

「我が名はシグムディア…… 人造生命体である。」

「何なの!?!」

「この世界に…… 蔓延る…… 傀儡を滅ぼせ…… 護星神を解放せよ」



勇人の悲鳴は天高くまで届いたのであった。

a f t e r s t o r y 0 2 : 留 学 生

翌日、僕はこの左目を見せないために眼帯をした。勇人は休み時間で寝ていると、生徒の話を密かに聞いていた。

「ねえ、知ってる？このクラスに留学生が来るって噂！」

「嘘っ!?マジで?」

「何でも、カナダのご令嬢だつて!」

勇人は9年前の幼馴染みの事を思い出す。

「…………… (カナダか…………… そう言えば、あの子の出身国でもあるなあ……………)」

するとドアが開き、先生が来た。

「は〜い!皆静かに!静かにすると言ったら静かにするっ♪」

皆は静かにし、先生の話聞く。

「え〜、ご存じの通り、今日このクラスに留学生が入ってきます!皆仲良くしてね〜♪」

「イッケナ〜イ!チコク!チコク〜!オハヨウゴザイマ〜ス♪」

突然のどじっ子な留学生に皆は啞然する。

「あ?あなた…………… それどうしたの」

先生が留学生の口に加えているパンに疑問を持つ。

「日本デハこれが”伝統” っど、トモダチから聞きましたですネ♪」

「絶対…………… 騙されている……………」

「あ!申し遅れましたですネ♪カナダのアルバータ州から来ました。シンディ・マリーシエです♪」

「それじゃ、シンディさん…………… あなたの席は勇人の横ね♪」

シンディが勇人の名前に反応し、勇人の方を見て、ビックリする。

「あ!」

「え?」

「勇人〜!」

急にシンディが勇人に抱き付き、興奮する。

《ええ〜!!??》



皆が驚くなか、勇人はシンデイの巨乳に埋もれ、苦しんでいた。

「会いたかった！会いたかった！会いたかったですヨ〜！」

勇人はシンデイの声と性格を思い出す。

「え!?もしかしてシンデイ!?」

「yes♪」

「見違えた！前は僕よりも少し背が小さかったのに!？」

「勇人、お前はその外人と知り合いなのか!？」

「え?うん、8歳の頃の幼馴染みで……」

するとシンデイが勇人の話に割り込み、仰天する程の言葉を放った。

「my darling♪結婚を誓いあつた仲で〜ス♪」

突然”結婚”と言う<sup>や?</sup>や?とに、勇人や皆が大声を上げた。

《ええええ〜〜〜っ!!??》

授業が終わり、勇人とシンデイは一緒に帰っていた。

「でも、びつくりしたな〜!!まさか留学生がシンデイだったなんて、「ワタシもビツクリするネ、留学先の学校に愛しの勇人がいるなんて知らなかったよ〜。そう言えば、勇人のdaddy、mummyは元気にしてる?」

シンデイの問いに、勇人は悲しそうな表情になる。

「……………お父さんとお母さんは……………死んだ。」

「えっ!？」

「……………交通事故で死んだんだ……………根岸洋介の父の会社に逆らつた事で……………僕は悪人呼ばわりされている……………」

勇人は落ち込むと、シンデイが励ます。

「……………でも!私は勇人の事が好きデス!勇人のdaddyとmummyが悪人になつても、信じてます!」

「フフ……………ありがとう……………こんな気持ちになつたのは本当久しぶりだよ……………最近……………変な夢を見るようになって、魘されていたから……………」

「夢?」

「うん……………何か、光の羽を持った妖精みたいな人が……………黒い何

かと戦っていたんだ。何かは分からないけど……」  
「ふくん♪」

シンデイは勇人に抱き付きながら話を聞いていた。

「所でシンデイ……何でそんなに抱き着いているの？」

「だって、久しぶりの勇人に会えたのですから、いっっぱい抱き着いてユウトニウムを補充しないと♪」

シンデイのやんちゃぶりに勇人は呆れる。

「ユウトニウムって……アハハハ。ニウムと言えば……根岸御曹司が見つけた新エネルギー『EFS』……あれもエネルギーだったなあ。」

”EFS”二年前……根岸 隆弘御曹司が見つけた新時代を照らすエネルギー。核よりも膨大なエネルギーを持つており、そのエネルギーは驚いたことに、天然で、無限に使える。街のあちこちに”オーダー”つまり、給油所を建て、それを粒子に変え、空へ放出している。そしてばらまいた粒子が市民に付着し、こうやって立体化が出来るシステムを得られた。だが、その勇人はそのEFSが使えない世界でたった一人の最初の”イレギュラー”と認定され、差別されていた。

すると勇人とシンデイの真上に、エイの用なステイングレー型の戦闘機が飛んでいく。

「ソルジャーか……」

”ソルジャー”各町を護衛する起動兵器 地上や空中、水中戦に特化しており、皆はソルジャーの事を”守護者”と呼んでいる。大型の実弾兵器やレールガンを用いているから、犯罪もお手上げの状態。

「あのお、そろそろ離してくれないかな……シンデイ？」

「嫌です♪久しぶりの勇人デスから、思う存分ユウトニウムをジュウデンします♪」

「トホホ……」

勇人は困りながら、シンデイと一緒に帰っていくのであった。

そして勇人達の知らない、その場所……地球の軌道上宇宙ステーションが何者かに爆撃された。すると爆撃されたステーション

から光学迷彩で隠していた複数の艦隊が姿を現した。

「奴の”あれ”はここに居るのか？」

「そうか、ならば改修せよ……………我々にとって”あれ”は奪取すべき存在だ……………」

「旗艦 オルドラスより、全艦隊に告ぐ！我等グリニア帝国はこれより、この下等文明を持つ惑星”地球”を破壊し、民間を皆殺しにする！そしてこの惑星に隠れ住んでいる”目的”を奪取する！！全艦隊！大気圏突入用意！！」

グリニア帝国と名乗る彼等は艦隊は大気圏に突入していくのであった。

「これで……………我等の皇帝”マンティカル教”に勝利の道が懲り開かれようぞ……………」

艦船の中にいる半身半機の兵隊が輸送船に乗り込み、待機していた。

## afterstory03：起動

勇人は帰った後、FPSゲームをしており、余裕でステージをクリアした。

「はあく……」

勇人はゲームのコントローラーを放り投げ、ベッドに寝転がる。すると勇人が本棚に終っているあの日記を見る。

「どうせ、夢だろ……」

勇人はそう思い、日記を開いた。だが、開いた先は何もない白紙であった。

「何で白紙なんだろう？」

勇人は念のため、鉛筆を取り、年数や名前を書いた。すると書いた文が消えてなくなる。

「っ!？」

勇人は思わず、日記に自分の名前を書く。

「僕の…… 名前は…… 新川 勇人です……」

勇人の名前が載った字を書くと、また消え、今度は別の文が表示された。

『初めまして、新川 勇人…… 私の名は陽弥・ギデオンです。』

「っ!？」

陽弥・ギデオンと名乗る人物からの返答は勇人をさらに導く。

「あなたは…… あの”シグムディア”と言う声の主の事を知っていますか？」

『知っている。何故ならシグムディアは私の機体だから……』

陽弥からの言葉に勇人は驚く。

「シグムディアって…… ロボットなんだ……」

勇人は次にある言葉を書く。

「シグムディアが言う…… 傀儡とは…… 何ですか？」

『…… それだけは、言えません。』

「はあ、」

勇人は書くのを諦めた直後、

『ですが、見せることはできません、』

「え?」

その直後、白紙が風で開かれるかのように移動し、最後のページに近い15枚の所で止まると、表示された。

『「ソロモニア戦記」終戦から8カ月……………」』

謎の文に勇人は驚くと、書かれていた文字が急激に光だし、勇人を包み込んだ。光が消えていき、場所が変わっていた。そこは機械や黄金の装飾で満たされている謁見の間でもあった。そして謁見の間に赤髪の男性が立っており、驚いたことに、勇人と同じ、赤と黒の色を持つ左目を持っていた。

「すみません!」

しかし、赤髪の男性は返事をしなかった。

「陽弥・ギデオン?……………あなたが陽弥・ギデオンさんですか?」

すると謁見の間が開き、現れたのは白髪の男性であった。

「総統!何故ですか!?何故この計画に賛同してくれないのですか!」

「何が賛同だ!!ネザーツ!」

「え!」

「テメエは……………もうすぐ生まれてくるあの子を……………オーバーロードにして、”スカイネット”にするだど!?ふざけるのも程々にしろおっ!!!」

「しかし!それを為し遂げれば、どんな対象物でも簡単に!何卒お許しを!御賛同を!!」

「断固拒否だ!」

すると陽弥は鞘から黄金の剣を抜刀し、顔に切り傷を付けた。

「アアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!」

ネザーは悲鳴を上げ、転がる。すると謁見の間に犬の様な大使と陽弥と瓜二つの黒い人物、ロボットと魔女が駆け付けてきた。

「何事だ!?!」

「陽弥総統!?!これは!?!」

「皆……………こいつを追放してくれ、」

「え!?!」

「こいつは……生まれくる俺の娘を……オーバードロードでスカイネットにするつもりだったんだ……」

「何だって!?!」

「どう言うことなのですか!?ネザー!?!」

そして彼等はネザーを取り抑え、連行していく。

「離してくれ!この計画は!本当に必要なのです!何卒お許しを!」

「残念だがネザー……お前を次期ヴァルキュリアス総統にするわけにはいかない……よってお前を惑星外へ追放する!」

「お許しをおおおおつ!!!」

そして謁見の間の扉が締め、勇人は夜中に目を覚ます。

「うわあつ!!!」

勇人が日記を見る。

「今のは……陽弥・ギデオンの……記憶?」

汗ばんだ姿になっている勇人の所に、窓から叩く音がする。

「ん?」

勇人は窓を開けたが、誰もいなかった。すると上から急に顔が出てきて、勇人は驚く。

「つ!?!」

現れたのは、リスザルで、目の色がエメラルドの様に輝いていた。

「リスザル?……でも、何か……」

するとリスザルが急に勇人の左目に付けていた眼帯を剥がした。

「ちよつと!?!」

その時、地鳴りが響いた。

「何だ!?!」

勇人は急いで窓の方を見る。その目先に煙が立ち上っていた。

「火事?」

今度は煙が立ち上っている場所の近くが爆発する。

「何なんだ!?!」

するとリスザルが勇人の肩に乗り、火事が起こっている場所へ指を指す。

『彼処に行け』って言うのか?」

リスザルは鳴き声で返答し、今度は日記とリュック、そして何処から持ってきたのか、マガジン×6とそれに装填できるハンドガン、スカウター、防弾チョッキ、アーミーナイフ、変形式ショートライオットシールドがあった。

「それを持って、彼処へ行ってくれと?」

勇人は問うと、リスザルは鳴き声で返答した。

「……………分かった!」

勇人は急いで私服に着替え、日記とショートライオットシールドをリュックの中に入れ、防弾チョッキとスカウターを装着、ハンドガンにマガジンを装填し、残りのマガジンをポケット中に入れる。そしてスカウターを電源を入れ、周りを見る。

「良し!」

勇人は電動式キックボードを持ち、火事が起こっている場所へ向かうと、リスザルが肩に乗る。

「お前も一緒に来るか?」

リスザルは鳴き声で返答する。

「フフ、それじゃ……………行くよ!」

勇人はキックボードを蹴り、火事が起こっている場所へ向かっていった。

一方、火事が起こっている場所では、街が火の海で包まれており、ソルジャーと謎の武装集団との銃撃戦が繰り広げられていた。

「こちら、第7小隊!未確認体と交戦中!」

しかし、謎の武装集団のアーマーに弾丸が直撃するが、奴等のアーマーを守っているシールドで無効化されていく。

「俺たちの武器が効いていない!」

「SFじゃあるまいし!!じああ、アイツ等は……………宇宙人って言うことかよ!!」

「うおっ!!」

「ガアッ!!」

「地球人………皆殺し!」

グリニア帝国兵士がそう言うと、ソルジャーの胸を蜂の巣状態にした。今、各国でもグリニア帝国軍が襲来し、混乱に墜ちていた。そして勇人は火事が起こっている現場に辿り着き、目の前の光景を目の当たりした。

「ああっ!!」

お店や住宅街が燃え、辺りにはソルジャーや民間人の死体が転がっており、大破したステイングレー型の戦闘機が家に衝突していた。勇人は目の前の光景に脅えた直後、火の中からアサルトライフルを持った2体のグリニア帝国兵士が現れた。

「っ!!」

「まだいたのか………地球人」

2体のグリニア帝国兵士がアサルトライフルを突き付ける。

「(どうすれば………!?)」

グリニア帝国兵士の指が引き金を引こうとした直後、家のガスが爆発し、グリニア帝国兵士を包み込んだ。勇人はその隙に瓦礫の陰に身をかくす。

「糞っ!」

「何処いった!?!」

グリニア帝国兵士がアサルトライフルを乱射する。勇人はハンドガンを取りだし、決意する。

「大丈夫………FPSと同じだ………!集中してやる!そうだよね?父さん!」

勇人はグリニア帝国兵士の頭に狙いを定め、ハンドガンの引き金を引いた。銃口から電磁を発するバレットが射出され、グリニア帝国兵士の頭に直撃する。

「っ!?!」

「当たった!」

勇人はスカウターを頼りに、グリニア帝国兵士のアサルトライフル



から出る弾の弾道を確認し、ゲームでのスキルを特有し、応戦する。

「何だあの地球人!？」

「我々の弾が何処に飛んでくるのが分かっているのか!？」

グリニア帝国兵士は焦りながら乱射すると、勇人の弾がグリニア帝国兵士のマスクごと、貫通した。グリニア帝国兵士は倒れ、一人が言う。

「何だと?! 糞がっ!」

グリニア帝国兵士がアサルトライフルのグレネードランチャーを撃つてきた。勇人は急いで、ソルジャーの戦闘機の中へ隠れると、グレネードが爆発し、瓦礫の破片が飛び散る。

「どうだい!？」

爆煙が晴れた直後、ナイフが飛んできて、グリニア帝国兵士の頭に突き刺ささり、倒れた。

「危ない、危ない………」

勇人は2体のグリニア帝国兵士の死体を見ると、

「え!？」

何と、二人の顔が全く同じ顔であった。さらにその顔は日記で見た陽弥が追放したネザーでもあった。

「皆……… 同じ顔!? どういう事なんだ!？」

勇人は訳が分からなくなり、帝国兵士のアサルトライフルとマガジンを拾い、包帯や消毒薬を店から取ると、シンデイの所へと向かっていった。

一方、シンデイとシンデイの両親が民間人と共に、避難用のシェルターへ入ろうとしているが、

「何では入れないのよ!!」

「ふざけるな! 根岸家だけのつて!」

「守護者なんだろ!?何とかしてくれよ!!」

「落ち着いてください!」

暴動が起こっている直後、上空からグリニア帝国軍装甲巡洋艦が飛来し、左右のハッチが開き、グリニア帝国兵士がワイヤーを伝って降下してきた。グリニア帝国兵士はアサルトライフルやロングブラスタ―、ヘビーマシンガンさらに女性のグリニア帝国兵士がジェツトバックを使い、スナイパーライフルで狙い撃ちをする。民間人の悲鳴が聞こえ、シエルターに押し込もうとするが、ソルジャーがシエルターの非常用ドアを閉め、逃げた。

「おい!!開けろ!!」

「私たちを置いていくつもりか!!」

二人の組の男女がシエルターを叩くが、向こうは無視し、奥へと逃げた。そしてグリニア帝国女性兵士のスナイパーライフルの弾丸が男女の頭を狙い撃ちをする。民間人の悲鳴が段々と薄くなり、聞こえなくなった。グリニア帝国軍は装甲巡洋艦の主砲でシエルターを破壊し、グリニア帝国兵士達が前進して行き、シエルター内で銃声や悲鳴が響いた。装甲巡洋艦がシエルターから戻ってきたグリニア帝国兵士達を収容し、去っていくと、シエルター前の無数の死体に動きがあり、出てきたのは全身返り血を浴びたシンデイであった。シンデイは娘を庇った父と母の死体を揺さぶる。

「起きて…………… 起きて…………… d a d d y…………… m a m m y……………」

シンデイはあまりのショックに放心状態へとなった。ちょうどそこにキックボードで移動している勇人が駆け付けてきた。

「シンデイー!」

「……………」

「おい!」

「……………」

「っ!」

勇人は幼い頃お世話になったシンデイの両親の死体を見て、驚いた。

「とにかく、ここは危ない……………」

勇人はそう言うと、シンデイをおんぶし、辺りを見渡す。

「何処かに隠れる場所…………… そうだ！」

勇人はシンデイをおんぶし、歩いた。そして着いた場所は勇人の隠れ家でも言えるあの廃墟であった。リビングルームのソファにシンデイを下ろす。

「見てくれないか？」

勇人は連れてきたリスザルに頼み、タオルとバケツを持って、外にある蛇口へと向かった。数分後、勇人は濡らしたタオルでシンデイのあちこちについている返り血を拭く。白かった制服は血で真っ赤に染まっており、親を失ったことで、サファイアの様な綺麗な瞳も、輝きを失っていた。

「シンデイ……………」

「……………」

「辛いことは分かっている…………… だけど、君が死んだら、君を守った両親の思いはどうなる？」

「…………… ワタシは……………」

シンデイの瞳の輝きが徐々に取り戻していく直後、ライトが照らされた。

「…………… つ!？」

勇人は隠れて、外を除き混むと、グリニア帝国兵士達が巡回していた。

「マズイ! もうここまで来たのか!」

勇人はシンデイを連れて、書斎室へ向かった。勇人が書斎室のドアの鍵を閉め、さらに柵を倒し、出入り口を塞ぐ。すると音に察知したのかグリニア帝国軍が書斎室に押し掛けてきた。

「どうしよう……………!」

勇人と肩に乗っているリスザルが威嚇する。シンデイは後方に下がると、何かが足に引っ掛かかり、転んだ。

「キャッ!？」

「どうした!？」

「何か足に……」

シンデイが転んだ足元を見てみると、何かデコつている部分があり、勇人とシンデイは一緒に引つ張る。すると一ヶ所の床が開き、地下室へ通じる階段があった。

「勇人！」

「うん！」

勇人とシンデイは一緒に地下室へと入り、地下室の扉を閉めた直後、書斎室が破られ、グリニア帝国兵士達が押し掛けてきた。しかしそこには誰もいなかった。

勇人とシンデイは懐中電灯で何処までも続く階段を照し、下りていく。

「書斎室に地下室があったなんて…… 気が付かなかつたな……」

そして階段の段数が終わり、目の前に扉があった。勇人はアサルトライフルを構え、扉を開いた。

「真つ暗ですワ……」

辺りは暗く、懐中電灯で先の方を照らすが、何も見えなかった。するとすぐそばに電灯用のスイッチがあり、シンデイは構わずスイッチを押した。すると辺りが明るくなり、そこにあったのは……

「これは?」

「beautyfour……!! (綺麗……!!)」

それは戦闘機なのか虫の様な形態をしており、綺麗な黄金の装飾、純白と深緑の装甲、先端に武器らしき重火器が装備されていた。

「ソルジャーの新型かな?」

勇人はその機体に触れると、突然機体が喋りだした。

『待っていた……………』

「っ!!?」

すると機体の変形し始め、人型へと変わった。

『我が名は、シグムディア……………』

「え!?!……………じゃあ君が!?!」

勇人は日記やあの声に聞き覚えがあり、シグムディアに問う。

『そうだ……………廃墟でお前に喋っていたのはこの私だ……………』

「……………あの声の主の正体は……………陽弥さんの機体だったんだ……………」

「!?……………貴様、我が主の事を知っているのか!?!」

「え!?!だって日記が教えてくれたんだ……………」 私は陽弥・ギデオンの……… ”………”

『我が主……………持ち込んでいたのか……………クアンタムシーカーを……………』

「クアンタムシーカー?」

『クアンタムシーカー……………それは原初の種族“クアンタ人”によって造られた預言の書の事だ……………だが……………』

「だが?」

『クアンタムシーカーがお前に語る事は……………他の誰でもいない筈なんだが……………』

すると勇人の肩に乗っているリスザルがシグムディアの前に出た。シグムディアはリスザルを見て、驚く。

『あ!貴方様は!!』

するとリスザルが鳴き声や指を使って、ジエスチャーする。

「勇人……………あの可愛いリスザルは?」

「あれ?何故か僕の家に来たんだ……………それで僕にこう言う装備を渡したんだ。」

シグムディアとリスザルの会話にシンディは勇人に問う。

「何を話しているのでしょうか……………?」

『そう言うことか……………』

「何が？」

『嫌、この小型の猛禽類は別の惑星からやって来た”知能を持った種族”でな、それで君をナビケートとして、グリニア帝国から身を守ってやると……………』

「グリニア」

「帝国？」

『お前達を襲ってきた連中の事だ…………… 奴等もこの猛禽類と同じ別の惑星からやって来た種族でな、狙いはこの我だ……………』

「ええっ!!？」

その時、揺れが起きた。

「何!？」

『どうやら、グリニア帝国は地球人を絶滅させたと、この星を破壊する準備に取り掛かっているようだ。』

「破壊!？」

『時間がない…………… 破壊される前に、この星から脱出するとするか……………』

シグムディアはそう言うと、駆逐形態から飛翔形態へ変形し、コックピットハッチを開いた。

『お前達…………… 死にたくなかったら我に乗れ……………』

勇人は勇気を出して、シグムディアの前方の座席に乗り込み、シンデイも後方の座席に乗り込むと、コックピットハッチが閉じ、全周囲に覆われたモニター画面が起動した。

『トリガーを引け……………』

勇人は操縦桿を握り、トリガーを引いた。シグムディアの先端に装備されているハイパーノバビームライフルが発射され、壁を破壊し、出力を上げ、外へ出た。

そしてグリニア帝国軍旗艦 オルドラスでは、

「艦長!!北緯17度、11時の方角から未知のビーコンを確認!」

「モニター画面に映せ……………」

艦長の命令に従い、グリニア帝国兵士がモニター画面を起動した。

そしてモニター画面に飛翔形態のシグムディアが映った。

「ついに、見つけたぞ!..... 陽弥・ギデオンのパンドラメール!各艦!ドローンを射出させろ!これよりシグムディアを捕獲する!」

艦長の命により、各艦隊のカタパルトからカブトガニ型の無人戦闘機が射出された。

『前方から、ドローンを確認!!』

勇人は操縦桿を握り、ドローンを回避した。シグムディアと通り過ぎたドローンは旋回し、機銃を展開して発砲してきた。しかし、シグムディアは駆逐形態へ変形し腕部サーメットブレードを展開し、ドローンを切断していく。

「凄い.....!ソルジャーでも勝てなかったグリニア帝国軍を.....一撃で!」

その光景を見ていた艦隊が一斉に艦砲射撃を開始してきた。

『遅い!』

シグムディアは艦隊の攻撃を回避しながら接近する。そしてオルドラスの艦橋から見ていた艦長は驚く。

「クッ!あれを使う!」

「ですが艦長!あれは!」

「構わん!まあ、あれは試作段階だ..... 試すにはちようど良い.....」

艦長の表情がニヤリとなり、命令する。

「メデューサを使え!!」

艦長の命により、兵士達が直ちに”メデューサ”を起動させる。

『ん?』

シグムディアは前方のオルドラスの異変に気付く。

「どうした!?!」

『..... まさか!?!』

するとオルドラスが変形し始め、巨体な主砲へと変わった。そして主砲の砲口部に粒子がチャージされていく。そして艦長は叫んだ。

「メデューサー!射てえっ!!」

叫びと共に主砲から収束メガ粒子が放たれ、シグムディアに直撃し

た。収束メガ粒子が終えると、シグムディアは跡形もなく消えていた。オルドラスや艦隊が周囲をスキャンし、報告する。

「こちら、アルマダ…… 目標物の消滅を確認」

「よし、この星を破壊する」

「了解」

兵士達は一斉に地球から脱出し、設置していた反応炉爆弾を起爆し、地球を破壊した。その光景をオルドラスの陰に隠れて、見ていたシグムディアと勇人とシンデイが見る。

「地球が！」

「そんな……」

『無理もない…… 次元跳躍を使わなければ、我も”ああ”なりかけた…… 気の毒だが、君達の故郷は消滅した。』

「……………」

シンデイは泣き崩れ、勇人はシグムディアに問う。

「これから何処に行くの？」

『見ろ……』

シグムディアの目線の先にシグムディアも収容できるほどのコンテナが積み込まれていた。

「これは？」

『いらなくなったデプリの残骸が入ったコンテナだ…… これに入って、ヴァルキュリアスに報告する。』

シグムディアの言う通りに、勇人とシンデイはシグムディアと一緒にコンテナの中に入り、捨てられるのを待っていた。するとシグムディアは先の兵器の事を考えていた。

『あのメデューサ…… あれはヴァルキュリアスの試作兵器の筈…… 何故奴等がメデューサを？…… それに我が主…… 陽弥様は……』

シグムディアはそう考えながらも、冷静にしていた。

そうこれは、絶望への予兆に過ぎなかった



新章『クロスアンジュ 銀河の守護者』after story  
L  
ost Souls” (囚われし魂) chapter 00 『beginning』  
ENDING

## afterstory04：ザーコフセクター

グリニア帝国軍旗艦アルマダが廃墟惑星クシテイ：通称”ザーコフセクター”に到着すると、後部ハッチが開き、輸送ドローンがデプリが入ったコンテナを次々と捨てる。そしてアルマダがオルデランから去っていくと、コンテナからシグムディアが出てきて、コックピットハッチが開き、最後の地球人である勇人とシンディが出てきた。

「行っちゃったね」

『ああ、早速ヴァルキュリアス本部に連絡だ……』

シグムディアの頭部からアンテナが展開され、ヴァルキュリアス本部に通信するが、

『ん？』

「どうしたの？」

『電波が何者かによって妨害されている………』

「ええ!」

『困った………』

するとシグムディアは勇人とシンディを見る。

『勇人とシンディ……… お前達に頼みがある。ここから北西にあるデプリの山からレムニウムと言う紫色に輝く結晶を取ってきてくれないか？それを使えば電波妨害されなくなる。』

勇人とシンディはシグムディアに言われた通りに北西にあるデプリの山へ向かった。

「何で自分で取りに行かないんだらう？」

「きつと燃料がemptyなのですよ……… どんな機械だって、燃料無かったら、ハングリーな気分♪」

「……… 良かった、いつものシンディに戻って………」

勇人がほつとするとシンディの手に七つのビー玉が付けられたブレスレットを付けていた。

「そのブレスレット………」

「oh!このブレスレット、幼い頃に勇人がプレゼントしたブレス

レットです♪ワタシの家族は代々、16歳の誕生日に恋人からのプレゼントを貰い、それに告白したら、交渉成立として、結婚するのです♪」

「え?..... と言うことは..... あの時、教室で言ったあれは.....」

「yes♪勇者の将来のお嫁さんはワタシなのです♪」

「ええっ!?!」

勇者は天高く叫ぶ。そうしている内にデプリの山に着いた。勇人とシンデイは早速レムニウムを探し出す。

「見つかった?」

「no!」

シンデイが英語で返答すると、二人の知らない場所で誰かがレムニウムと手紙を置いた。シンデイが辺りを探していると、レムニウムを見つけた。

「あつた!」

「見つけた?」

「勇者!見つけたよ!」

「よく見つけたな!何処にあつたんだ?」

「ここにありました!後、手紙も!」

「手紙?」

勇者はその手紙を読み始めた。

『ヴァルクュリアス本部に到着し、陽弥・ギデオン総統に出会ったら、壺と黄金の剣と盾を手に入れる。』..... え?」

「剣と盾?しかも壺を?どう言うことですか?」

「分からない..... でも、頼みならやるしかない..... さ、シグムディアの所へ戻ろっ」

勇人とシンデイはシグムディアに戻る。するとデプリの山の陰から両足がバツタの足のような骨と一体化した錆び付いた義足、両腕も骨と一体化しており、左半分の肉が露出し内臓も機械でカバーされており、心臓も露出しておりケーブルと電気で動いていた。顔は右半分が潰れ、縫い傷で覆って、髪の毛も火傷で燃え付き、変わりにケーブルを髪の毛代わりにしており、左半分は眼を除き、火傷の後があり、包

帯で火傷の所を覆っていた。首に泥で汚れたマフラーをしており、微かだが、王家の家紋があつた。謎の旧式のサイボーグはシャーマンスタッフを持ち、勇人とシンデイの後を追う。

シグムディアの所に戻った勇人とシンデイはレムニウムを渡す。するとシグムディアはレムニウムのエネルギー粒子を吸収し、アンテナを展開した。すると通信が入った。

『此方、ヴァルキュリアス本部 どうぞ。』

『此方、シグムディア…… 救助を要請します。』

『シグムディア!? そうか! 一年半も行方不明だと聞いて、大変でした! 陽弥・ギデオンの総統も心配していますよ!』

『主が!? そうか…… それと緊急事態だ。連れている別次元の地球人の地球がグリニア帝国と言う武装組織に滅ぼされた。』

『分かりました!』

相手がわは通信を切り、シグムディアは二人に報告する。

『救助が来ると……』

二人は喜ぶと、シグムディアが何かを索的し、勇人とシンデイのここから数十キロ離れている地点に何かが追い掛けてくる。シグムディアはズームし、確認すると、追ってきたそれはおぞましき姿をしたこの世とあの世と思えないほどのサイボーグであった。

『接近者あり!』

「っ!!?」

勇人はシンデイを守り、アサルトライフルを構える。謎のサイボーグは勇人達に近づくと、リュックの方に指を指す。勇人はリュックからクアンタムシーカーを取りだし、ページを開いた。すると謎のサイボーグが勇人の額に触れた。

「っ!!?」

勇人の意識とクアンタムシーカーが共鳴し、陽弥の記憶を見る。そこは何処かの庭園で噴水に綺麗な緑の髪をしておる美しい女性が座っていた。

「エミリア……………」

「何？」

「お腹の調子は？」

「もう生まれても可笑しくないと……………」♪

エミリアと言う女性はホッコリ膨らんだお腹を撫でる。

「そうか……………」

陽弥が笑顔になっている直後、

「っ!!」

突如エミリアが急にお腹を抑え、苦しむ。陽弥はそれを見て様子を問う。

「どうした!？」

「っ……………!……………う……………」

「う?」

「生まれ……………ます!」

「えっ!!？」

突然の言葉に陽弥は驚く。さらに、

「あ!」

「今度は?」

「破水……………した見たい……………です……………う!……………やっぱり生まれま  
す……………!」

「ああ、マズイ!誰かあ!」

陽弥は急いで助けを呼ぶと、意識が途切れ、勇人は目を覚ました。

「っ!」

「勇人!」

シンデイが途中で倒れた勇人を心配しながら問う。

「シンデイ?」

「良かった!」

シンデイは泣きながら勇人に抱き付いた。

「……………」

さらにシグムディアや謎のサイボーグも心配していた。

『見たのか、陽弥様の記憶を……………』

「うん。陽弥さんの奥さん…………… エミリアって言う人が庭園で座つてて、そこで陣痛が来たところ……………」

『そうか…………… あの日だな。』

「あの日?」

『今こそ話そう…………… 97年前…………… 何があつたのかを……………』

97年前…………… エルシュリア王国、王室から赤ん坊の泣き声が聞こえてきた。中では産まれたばかりの小さな赤ん坊が泣いており、エミリアが赤ん坊を抱き、落ち着かせる。

「良し♪良し♪…………… 良し♪良し♪」

赤ん坊は泣くのを止め、エミリアの方を見て、笑う。

「あう〜」

そこに陽弥の双子の妹のルナと両親であるシン・ギデオンとヒルダ・ギデオンや親族が集まっていた。

「うわあ〜、可愛い♪」

「ほら♪あなた似で可愛いよ♪」

エミリアは赤子を陽弥に渡す。陽弥は赤子の顔を見て、言う。

「そうか?…………… おい、チビ…………… お前の名前はマナだ…………… このホライゾンの大地から溢れる灵力の源から産まれたんだ。これからはずっと一緒に…………… お前を守ってやるからな♪」

「ふわあ〜」

赤ん坊はあくびをし、ルナが抱きたいと言う欲に抑えきれず、

「わあ〜!今度は私にも抱かせて〜!」

「気いつけるんだよ♪」

ヒルダが興奮するルナに注意する。陽弥はマナを抱き移すと、オムニツールから通信が入る。

「ん?」

「あら?こんなに可愛い子と美人な奥様を置いて、仕事に行く陽弥

様…………… 酷いパパだねえ♪」

「ハハハ…………… でも、これが最後の仕事なんだ…………… あの星系にある惑星マントラの未開惑星保護条約を守らなければならぬ……………」

「そうね♪気を付けて、あなた♪」

「じゃあ、行ってくる♪」

「気を付けて、お兄ちゃん」

「分かってる…………… 母さんと父さんも…………… 体壊さないようにね♪」

「言われなくとも、壊さないよ♪」

「そうだ♪」

その別れが…………… 後に悲劇を招いた。突如、惑星マントラに向かっていている最中、陽弥の部隊が謎の敵機に奇襲を仕掛けられた。陽弥はシグムディアを旋回させ、赤黒いビームを回避するが、ビームが屈折し、陽弥を追撃する。

「糞！何だあのビームは!!?」

陽弥はシグムディアの次元跳躍を使い、振り切る。

「次元跳躍なら、ここまでは…………… 何っ!!?」

何と、次元跳躍を使ってもあの赤黒いビームが追ってきた事に驚く。陽弥は急いで次元跳躍をから出て、別の星系へ辿り着いた。陽弥はハイパーノバビームライフルをマシンガンモードに切り替え、赤黒いビームに向けて狙い撃ちをする。

「何処まで追ってくるんだ!!このビームはっ!!」

次々と来るビームを爆破していくと、全周囲から複数の戦艦がステルスを解除し、現れた。そして艦隊から赤黒いホーミングレーザーを発射し、全周囲 360度からもくる赤黒いビームがシグムディアに直撃した。

「うああああああああああああつ!!!」

陽弥は爆熱に巻き込まれ、突如発射したブラックホールの中へ消えていった。そしてブラックホールの中へ吸い込まれる最中、シグムディアは再生能力を使い、コックピットを見る。だが、コックピットハッチが開いており、中に陽弥の姿が見えなかった。そして97年

前……………別の次元にある地球……………そこでは第二次世界大戦が勃発しており、シグムディアは旧日本軍に改修され、大日本帝国の秘密兵器として扱われていたが、乗る相手が陽弥ではなくど素人でさらに高家の血筋を持たない者であったため、日本軍は負け、あの廃墟の地下室に置き去りにされていた。

『そして我は陽弥の遺品であったクアンタムシーカーをあの手で書斎室の本棚に置き、主の代わりに乗り手を待っていた。』

「そして僕が……………クアンタムシーカーを見つけ……………シグムディアの乗り手に選ばれたと？」

『そうだ……………だが、我が主はヴァルキュリアスに改修されていたと聞いて、安心した。』

「良かったじゃん……………持ち主が無事で♪」

『ああ、』

すると勇人はサイボーグの方を見る。

「なあ、シグムディア……………君はこの星の事を知っているのに、どうしてこのサイボーグが居るって言うことは知らないんだ？」

『分からない……………このサイボーグから発している暗号や電波……………全てが旧式であるため、何を言っているのかも分からないんだ。ただ、このサイボーグはかなりの優れものだと思う。陽弥様に近い何かを持っている……………』

シグムディアがそう言っていると、何処からかエンジン音が聞こえてきた。

「あれは!？」

シンディが上の方に指を指すと、母艦や艦隊数隻がワープしてきた。

『ヴァルキュリアス艦だ……………』

シグムディアの言葉に勇人とシンディは喜ぶ。そして巡洋艦が着陸し、シグムディアが搬送される。そして勇人とシンディはプロセアン兵士に部屋をご案内される。勇人とシンディは部屋の窓から、遠ざかっていく謎のサイボーグに手を振る。だが、サイボーグは途中で暗号音を発した。



「2<sup>^</sup>・0、4<sup>⊠</sup>2\*・9、……」

サイボーグはデプリの山に戻り、勇人とシンデイがレムニウムを見つけたデプリの残骸の山を崩し始めた。すると中に巨大なバトルアーマーが隠されていた。

「7. 4<sup>⊠</sup>43. 4\*・1<sup>^</sup>・9、……」  
7. 204. 1<sup>^</sup>・7  
、5、」

## after story 05：ヴァルキュリアス

ワープ終わると、目の前に太陽並の大きさを持つ超巨大要塞が見えてきた。

「あれが？」

『そうだ………あれが種族大銀河連邦ヴァルキュリアスの本部  
グランドスファイアだ………』

勇人とシンデイ、シグムディアを乗せた艦隊がグランドスファイアの内部へ入り、発着場に着陸した。勇人達は降りていくと、重力の影響で体が浮く。

「体が浮いてます〜♪」

「ちよつとシンデイ、勝手に行動しちやダメだよ〜」

勇人が喜ぶシンデイに注意していると、そこに藍色の髪をしたロングヘアーの女性がやって来た。

「あなた達ね、お兄ちゃんのシグムディアを改修してくれた彼方からの最後の地球人と言うのは？」

「あなたは？」

「私はルナ・ギデオン。陽弥・ギデオンの双子の妹よ………要件は？」

「あ、はい！僕とシンデイが暮らしていた地球がグリニア帝国と言う武装組織に滅ぼされ、シグムディアと一緒にここへ来ました。」

「うん。シグムディアの報告通りだね………今、お兄ちゃんはその事で会議をしているの、だから待っていて♪」

「あ、はい！」

勇人はルナの美しさに惚れ、シンデイがその様子に問うの

「勇人、何か顔がホットですよ？」

「ええっ!？」

シグムディアは格納庫に搬送され、勇人とシンデイは客室で待つ。勇人はポケットから謎の手紙を見る。

『剣と盾を………取ってこい』って誰が書いたんだろう？まさかサイボーグ？嫌々、彼一人で何が出来るんだろう………』

勇人はそう考えていると、肩に乗っているリスザルが手紙を見る。するとドアが開いた。

「?」

現れたのは、藍色制服、胸にジオを付けており、赤い髪をした陽弥・ギデオン本人であった。

「いやあ、すまない…………… 会議に手間取っていた。あ、座つてくれ……………」

「はい……………」

勇人はシンデイの横に座る。

「早速だが、率直に言う。君達の要件を受け入れようと思う。」

陽弥の言葉に二人は喜ぶ。陽弥は次にグリニア帝国の事を説明する。

「グリニア帝国は、今から一年半前に私が追放した元ヴァルキュリアスの科学者ネザーが設立したクローン軍事組織なんだ。」

「だから、グリニア帝国の兵士達皆は同じ顔をしていたんか……………」

「それだけじゃないんだ。彼は私と私の娘に宿るインフィニティソウルとアーククリスタル、グリゴリ、クアンタニウムハートを狙って”

スカイネット” と言う恐ろしい人体実験をしているんだ。」

「スカイネット?」

「スカイネットと言うのは、人を人工能に変える事だ…………… そしてあらゆるサイバーを操る事が出来るんだ。私はそれに反対したんだ。」

「僕が見たあの記憶…………… そう言うことだったんですね……………」

「その通りだ…………… その為、我々が開発した新しい技術、通称『プリズンウォール』を皆の首にはめている。あれを付けていけば、グリニア帝国の秘密兵器やジャミングパルスの影響を受けなくなるんだ。良ければ君達も使ってみるか?」

「はい!」

勇人とシンデイは早速プリズンウォールを首にはめる。すると視覚にVRでの情報が映し出された。

「凄!」

「それで敵の情報を知ることにも出来る。皆付けているからなあ……………ただ、家の嫁さんは着けないって……………視覚で情報を覚えるのは苦手って……………」

「エミリアさんの事ですか？」

「ああ、今はホライゾンのエルシユリア王国でマナと一緒に暮らしている。ホライゾンの皆もこれ使っているからなあ♪」

「シグムディアの方は？」

「大丈夫、ちゃんと修理しているよ♪」

勇人は笑顔の陽弥を見て、何かに怯える。

「……………（何でだろう……………陽弥さんは優しくカッコイイ……………代表として皆を導いている……………だけど何でだろう……………彼の瞳の奥は……………この世とは思えない復讐の炎に包まれており、他人の心を透き通らせるかのような黒い影が純粋な心を支配しようとしている……………」

「どうかしたか？」

「え!?!いいえ……………」

「そうか、私は自室に戻っておるぞ……………何かあったらこのオムニツールを使うんだ。」

「はい……………」

陽弥はそう言うと、部屋から出ていった。勇人とシンデイは他を見て回った。住んでいた世界と違って高層ビルや市街地、住宅街、そして遊園地も明るく輝いていた。特にヴァルキュリアスのお菓子”ロトスの花”と言う睡蓮の花をモチーフとしたケーキが美味しかった。

シンデイがトイレに行くと言い、待っていると、

「ロトスの花はいかがですか？」

「うん♪」

勇人はシンデイの知らない間にロトスの花を食べようとしたその時、何処からか女性の声が勇人の耳に囁いてきた。

『ダメよ勇人君……………その花を食べてはいけない……………』

「え?」

『食べれば、感覚が鈍くなって……………あなたの本来の目的を狂われ

るのよ…… 目を覚まさない……」

勇人はロトスの花を食べるのを止めた。すると左目から激しい痛みが走ってきた。

「うっ!!」

勇人は思わず眼帯を取り、目を開くと……

「っ!?!」

遊園地の周りにいる人々の後ろに邪悪な黒い蛇が赤い目を光らせ、巻き付いていた。

「何だこれは!?!」

『それは傀儡の蛇…… ロトスの花を食べた者は、人には見えないあの黒い蛇によって、感覚が鈍くなって…… 目的を狂わせてしまうのよ…… 私の育ての親や私の夫である陽弥様の御家族も……』

ロトスの花を食べてしまい、本来の目的を忘れているのです……』

「どうすれば!?!」

『私の所へ来なさい…… そして陽弥・ギデオンと一緒にいたあの場所…… 皆さま方が眠ったらあなたの部屋から右へ直進し、床に妖精の絵があります。そこから右の扉があります。そこに入って階段を上り、扉を開けなさい……』

謎の声はそう言うって聞こえなくなる。

「待って! あなたは誰なの!?!」

「勇人?」

「?」

するとそこにシンデイが心配そうにしていた。

「どうしたの?」

「……… 一緒に来て!」

勇人はシンデイを連れ、陽弥の家へ帰って寝る。そして辺りが薄暗くなり、夜な夜な寝静まると、勇人とシンデイは作戦通りに動いた。勇人は早速、あの声の主の言う通りにする。

「本当に信用するの?」

「やるしかない……」

「あった……… 妖精の絵……… となると次は右に……… これだ。」

勇人は扉を開けると、円形の階段になっており、上まで続いていた。勇人とシンディは階段を掛け上り、そして……………」

「開けるよ……………」

勇人が扉をそつと開けた。中にいたのは

「っ！」

緑のロングヘアーが風で揺らぎ、純白に満ちた白きドレス

がグランドスフィアの人工衛生で輝き、その瞳は左目がピンク、右目が驚いたことに、勇人と陽弥と同じ赤黒い目をしていた。

「貴女は？」

「よく来ましたね…………… 次期ミッドガンドの護星神。私はヴァルキュリアス総統 陽弥・ギデオンの妻……………」

彼女はゆつくりと二人の方を向き、答えた。

「エミリア…………… エミリア・ヴァルネア・ギデオン。」

「貴女が…………… 陽弥さんの!? え!？」

「どう言うこと!? だって陽弥さんが、奥さまはここにはいないと……………」

「…………… 彼は、私の知る夫ではありません…………… あれは別人です。」

「別人……………?」

「一年半前…………… この子が生まれて間もない頃、あの悲劇が来たのです……………」

一年半前…………… エルシュリア王国にて

「アストラッド王!!」

「どうした!？」

「大変です! 陽弥様が! 陽弥様が行方不明に!!」

「何だっつて!!？」

それを聞いたシン達やソフィア達、ラルフ達も驚く。

《ええっ!!!?》

全国や全惑星の民達はそのニュースを聞き、ざわめいている直後、ザーン・グリブナグが報告してきた。

「アストラッド王!!新たに、グリニア帝国と名乗る組織からの映像です!」

すると各国の上空からモニター画面が現れ、映し出されたのは、深紅の皇服を着たネザーであった。

『私は、ネザー・マンティカル!新星独立軍!グリニア帝国皇帝である!』

「こーこいつはっ!!!」

『墮落したヴァルキュリアスの虫共よ!見よ!』

すると、ネザーが空間から出て、さらにあるものを取り出した。

《ツ!!!》

何とネザーが全身血だらけの陽弥の首を掴んでいた。

「あ………… ああ…………」

「陽弥様!!」

「お兄ちゃん!!」

「アイツ!………… 何をするつもりだ!?!」

『お前たちに………… 私からの復讐の矛をこの愚かなヴァルキュリアスの総統に鉄槌を………… 下すっ!!』

ネザーはそう言うと、血だらけの陽弥を空間に放り投げた。

『スペースハーピーとキュラドラスを放て!!』

艦隊のハッチが開き、中から人面鳥とコウモリ見たいな魔獣の大群が現れる。

《ア…………ツ!!!》

《キシヤ…………ツ!!!》

そのおぞましき魔獣に国民が恐怖する。

「アイツ!まさか!!」

シンがすぐにこれから先の事を読む。

「さあ、血と肉に飢えし魔獣達よ………… お前達の餌は、彼処にある!!」

スペースハーピーの大群とキュラドラスの大群が一斉に陽弥に襲い掛かった。皮膚に噛みつき、肉を食いちぎり、内蔵を抉り取られ行く姿に、失神するものや叫び声を上げるもの、食べたものや食べてな

いものもあまりの惨さに吐いていく。シン達は息子が食い殺される姿に叫ぶ。

「止めろおおおおっ!!!」

皆は悲鳴を上げ、エミリアはあまりの惨さに目を反らしてしまう。そしてスペースハーピーが小腸をくわえたまま、飛び散り、内蔵を引きちぎる音が鳴り響く。すると陽弥は喰われながらも、必死にネザーを睨み、手を差し伸ばす。

「…………… してやる!…………… 殺して…………… やる!…………… 殺してやる!…………… 殺してやる…………… !殺っ!!」

その直後、差し伸ばした手が真つ二つになる。食いちぎられ陽弥にネザーが展開した無数のソードビットが陽弥の体を突き刺していった。

「フッフ…………… これなら再生も間に合わないだろう♪」

ネザーは致命傷になってもまだ息がある陽弥の頭を掴む。

「ネ…………… ザーッ!!」

「さよならです…………… 生意気な総統よ…………… ヴアルキュリアスの総統の座は私が受け継ぎますから♪」

すると掴んだ手から直射粒子砲が陽弥の顔の皮膚を焼き付くした。

「グ!アアアアアアアッ!!!」

《ッ!!!》

全惑星の民達があまりの悲鳴を上げる。そして陽弥の息がなくなったのを確認し、ネザーは陽弥を棄てる。

「あ、そうだ…………… 念のため」

するとネザーの戦艦が変形し、叫んだ。

「スーパーブラックホール砲…………… 殺れ!」

戦艦から黒い球体が発射され、陽弥を包み込み、段々と小さくなって行き、消滅した。

「見よ!全惑星の民よ!我が最大の敵である陽弥・ギデオンは!死んだあぁっ!!!」

グリニア帝国艦隊が狂喜の勝利の雄叫びを上げる。その時、シンの怒りが頂点を越し、ペルシウスを呼び、次元跳躍を使い、ネザーのグ



リニア帝国艦隊にデイメンジョン・ヴァルキュリアを突き付ける。

「そうはさせんぞ♪」

するとグリニア帝国艦隊のハッチから無数のプリズンウォールが溢れ出てくる。

「何だ!?!」

プリズンウォールを次元跳躍を使い、シンの首に装着された。

「グッーなんだこれ!?!」

さらに各惑星の民や仲間達の首にプリズンウォールが装着されており、アンジユやタスク、サラマンディーネやリュウガ、さらに今まで戦ってきた友や家族にも、さらに神聖なるアウラにもプリズンウォールが強制的に装着され、皆は引き剥がそうとしていた。

「フッー奴隷共よ!!今からお前達は我等グリニア帝国の傘下だ!良いな?」

ネザーが命令を言い出すとプリズンウォールが光だし、注射針のような物に刺され、皆の視覚、聴覚、全ての神経を伝って毒が入り込み、皆の目の色が、深紅に染まった。

《yes my road!》

皆やシンがネザーに忠誠を誓い、敬礼する。ネザーは狂喜の笑い声を発する。

「ヒヤハハハハハ!!全ての宇宙は私の物だ!!」

するとネザーは手を顔に触れると、何と陽弥の顔へと変わった。

「誰も……………彼が死んだことに気付かないだろう……………ん?」

だが、赤子であるマナを抱いているエミリアには何故かプリズンウォールが付けられていなかった。

「どう言うことだ?」

そしてネザーはエミリアとマナをあの塔に幽閉し、一年半も閉じ込めてられていた。部屋は広かったが、本当は狭く、部屋から開けることなく、食事を渡され、窓は開いていたものの、塔は高く、さらに窓の横に監視カメラが付けられており、飛んで逃げようとしても、窓にある対象捕獲用システム通称“棘”が発動され、伸縮可能なエネルギーワイプがエミリアを追尾し、捕獲され、さらに鞭打ちと言う残

忍な刑罰が下された。

エミリアの語った一年半の出来事を聞いていた勇人とシンディは口を抑えたり、拳を強く握り、指の隙間から血が滲み出るまで怒りを込み上げていた。

「じゃあ、あの時あった陽弥は！ネザーだったのか！畜生！」

「何が平和だよ…………… 全面的に奴隷にしてるだけじゃないですか」

「そう…………… 逆らった者は私しかないの…………… 幸いに時空族の皆さまは別の宇宙を旅をしていて、プリズンウォールから免れましたが…………… 私は……………」

するとエミリアが急に服を脱ぎ始めた。シンディは慌てて、勇人の目をエミリアの裸を見る前に手でしっかりと隙間を残さないように隠す。

「うわあっ!!?」

エミリアの胸や背や脚にも酷く鞭の跡があり、さらに背中に剣で斬り付けられ、グリニア帝国の国旗を描いており、下腹部にグリニア帝国の国旗に焼き印が付けられていた。シンディはエミリアの体中の傷や刻印に首に付けていたプリズンウォールを外した。もちろん勇人も外した。そしてエミリアは服を着替え、語る。

「あなた達はプリズンウォールの影響を受けない何かがあるのね……………」

「yes！勇人は私の大事なお婿さんです！」

「ちよっ！ちよっとおくー！」

「フフ♪二人を見ていたら二年前の私と陽弥様に似てますわ♪」

二人は照れると、赤子の泣き声がする。

「あらあら、」

エミリアはベビーベッドで夜泣きしているマナを抱き上げ、落ち着かせる。

「良し良し♪良し良し♪」

すると勇人の肩に乗っていたリスザルがエミリアの方に移動し、寝ているマナを見る。

「ん？」



ることができた。感謝する。それよりエミリア……………ザンジークの空族艦隊が迎えに来ている。」

「ザンジーク様が!？」

「ああ、それと26人の使徒……………ラファイ達も来ている!彼等はプリズンウォールの影響を受けない体質を持つていたからなあ……………」

エミリアは早速ヴァルクキュリアスへ出る準備をする。

「勇人……………シンデイ」

「ん?」

「お前たちに武器を渡しておく」

エスメラルダがプレターボウとアサルトショットガン、さらにスタングレネード、マグナムを持ってきてくれた。

「あなた、弓使える?」

「え? yes、スクール時代にクラブに入っていました!」

「よし、あなたは……………あ、そうか……………あの時、私があげたハンドガンとナイフで二人殺したなあ……………あなたはアサルトショットガンを持って、」

「はい!」

シンデイと勇人はお互いの武器を持ち、防弾チョッキを着る。念のため、エミリアも我が子を守るために腰にシールド展開装置を取り付ける。さらにエミリア様の擬似ドラゴニウムを液体に変えた薬を飲み干し、マナの光を発生させる。

エスメラルダはオムニシールドを展開し、ファランクスを持つ。

「勇人君とシンデイちゃん……………エミリアを守って上げて、」

「はい!」

「yes!」

「ネザーにとってエミリアとマナは殺しもできない。何故なら分かるわね?」

「はい……………スカイネットに必要な人材だからですね?」

「そうよ……………もし死んでしまったら、最悪……………全宇宙の崩壊に繋がるわ……………二人とも、頼りにしてるわ♪」

エスメラルダはそう言い、エミリアとマナを連れて、塔から出る。

そして見張りや監視カメラの死角を盗み、物音を立てずに発着場へと向かう。

その頃、グラウンドスフィアの前方からワームホールが出現した。それに気付いた艦隊が警戒体制を取る。そしてワームホールから現れたのはストライカーパックと言う前装面にハイメガ粒子砲と高起動ブースター、さらにフルバーニアパックを装備しており、サイボーグと合体しているガンシップ形態の超大型バトルスーツであった。

であった。すると両腕部アームキャノン式プラズマビームキャノン二連装砲”デュアルブラスタースターキャノン”から収束速射プラズマビームが発射され、巡洋艦の連装砲だけを破壊した。そして警戒体制を取っていた艦隊が攻撃を開始した。超大型のバトルスーツを着たサイボーグが次々と艦隊の砲台を破壊していった。そしてサイボーグはハイメガ粒子砲を使い、発着場のハッチを破壊し、要塞内へ侵入した。サイボーグはまた暗号音を発する。

「1\*・2<sup>^</sup>・2<sup>^</sup>・1……2・7・2・2<sup>⊗</sup>↑！」

サイボーグは暗号で何を思い詰めているのか、目の前の装甲シャフトを腕部高出力ヒートアンカーソードを展開し、ドリルの回転し、装甲シャフトを破壊し突き抜ける。

その頃、洋館から脱出したエスメラルダ達は銃を突き付ける。

「そう言えば、エスメラルダさん！実は惑星クシテイでこんな手紙を貰ったんです」

「見せて……………」

エスメラルダは勇人から手紙を受け取り、内容を読む。

「陽弥の剣と盾……………そして壺？」

「はい、壺の意味が分からなく、どうしたらいいと思ひまして……………」  
「……………陽弥様のガイアブリンガーとブレイブリフレクターは何処に在るかは分かりますけど……………壺は初耳です。」

「だけど、それも頼むって言うことは、何か理由があるんだろう……………先に脱出するつもりだったが、予定変更だ。先に陽弥のガイアブリンガーとブレイブリフレクターと壺を盗みに行くよ！」

「はい！」

勇人とシンディはエスメラルダに敬礼し、エミリアの言う通りに、ガイアブリンガーとブレイブリフレクターがある格納庫へと向かった。

「ここです！陽弥様はもう使わないと、ガイアブリンガーとブレイブリフレクターを収納したのです！」

辿り着いた場所は巨大なシャフトで守られた格納庫であった。エスメラルダは非常用のレバーを引く。するとシャフトが上がり、中から只ならぬ風が吹いてきた。

「入るぞ……………」

エスメラルダ達は格納庫の中に入ると、前方に黄金に輝く剣と青く光るエネルギーシールドを展開した盾が並べられていた。

「あれだ……………」

エスメラルダは銃をホルスターに入れ、ガイアブリンガーとブレイブリフレクターを取る。すると勇人の右目が緑に輝き、あるものが映った。それは誰かの視点で手元に赤黒い壺を持っていた。すると

壁の方に近付き何かの暗証番号を唱えた。すると壁から金庫が出てきて、壺を金庫の中に入れた。そして映像はそこで終わり、勇人は急いで、エスメラルダに報告した。

「エスメラルダさん！壺もここにある！」

「え？」

「壺が!？」

「ここに!？」

「はい！」

勇人は映像で見た通りに壁に近づく。そして唱えた。

「開け……黄昏と傀儡の定めに従え……」

すると壁が変形し始め、金庫が出てきた。勇人は金庫を開けると中に赤黒く輝く壺が入っていた。

「これだな……」

エスメラルダが壺を取り、運び出そうとした直後、金庫内の上にセンサーがあり、ビーコンを発した。

「しまった!!」

気付いたときには遅く、警告音が鳴り響いた。

「急いで！通気孔から発着場へ向かうわよ！」

エスメラルダ達は勇人やシンデイ、マナを抱き抱えたエミリアを最優先に通気孔に入らせ、後にエスメラルダが通気孔を締める。

通気孔は長く、もし、音を立てしまったら、バレると皆は不安に思い、急いで通気孔から出る。

「急いで！」

エスメラルダ達は発着場に着いた直後、数機のゲオルギードロイドが立ち塞がった。

「糞！」

さらに上空からセイクリッドメイユやパラメイユ部隊が飛来してきた。そして部隊の中にルナとソフィア、リヨウマ、アレクトラやシン達やラルフを含む6人の護星神達もいた。するとゲオルギードロイドが下がり始め、現れたのは陽弥の姿を真似ているネザーだった。

「おやおや、何処へ行くこうと思っているのかね？お義姉さん？」

「気安く呼ぶな！ハイゼンベルグの悪魔め!!」

「ハイゼンベルグの悪魔?.....私か?ハハハハハハ！面白いことを言うねえ♪それよりエミリア姫殿下.....あなたは何を考えて脱走したのでかな?」

ネザーはおぞましき笑顔でエミリアとマナを見る。エミリアはマナを守るように、ネザーを睨む。

「それより、勇人君とシンデイちゃん.....ダメじゃないか、プリズンウォールを外しちゃ、」

「うるさい！僕たちの地球を滅ぼした張本人が!!」

「そうよ！あなた見たいな、badな人にはバチが当たりますよ!!」

「フフフフ.....そんな武装で歯向かうことが出来るのですか?」

全機体が持っているビームライフルが勇人達に向けられる。

「くっ！こまでか!」

ネザーがエミリアとマナを連れ出そうとした瞬間、発着場から超大型バトルスーツと合体したサイボーグが現れた。

《っ!!!?》

その衝撃音でマナが泣いていると、サイボーグがエミリアの方を向く。サイボーグはバトルスーツを自動自立モードに切り換え、バトルスーツと分離し、ルナ達を相手する。サイボーグは勇人達に近付くと、ネザーが笑い出す。

「アハハハハ!!やっぱり君は最高だよ!!まさかあんな状態でも生きていたなんてなあ!」

するとサイボーグは顔を被っていた包帯を取り、素顔を現した。

「っ!!」

「嘘っ!!」

「.....」

「まさか!」

サイボーグが今度は、暗号音ではなく、言語で話す。

「久しぶりだなあ.....ネザー.....」

「此方もですよ.....元ヴァルキュリアス総統.....ミッドガンドの護星神.....英雄のヴェクタ人.....陽弥・ギデオ



ン……」

何と、サイボーグの正体は陽弥・ギデオンであった。しかも、陽弥は心配そうにエミリアとエスメラルダに言う。

「大丈夫か？…… エミリア……」

「陽弥様も…… お体……」

「これか？…… 酷いもんだろ…… 完璧なフランケンシュタインだ。これじゃ、」

その直後、ネザーが陽弥の後ろから攻撃しようと、ブロードソードを振りかざしてきた。それに気付いた勇人が知らせる。

「危ない!!」

「っ！」

陽弥は間一髪の所でネザーの攻撃を白羽取りで受け止め、ネザーを蹴り飛ばした。陽弥は笑顔で愛する妻と娘に近付く。するとエミリアの方が陽弥の方に走っていき、鋼鉄のアーマーに抱き付く。

「陽弥様！」

「…… すまない」

「一年半も心配したのですよ！」

「俺もだ…… 一年半、ずっと寂しい思いをさせて悪かった……」

すると泣いていたマナが陽弥の顔をまじまじに見ていた。

「マナ…… お父さんだよ♪」

マナはフランケンシュタインのような顔になっている陽弥を見て、笑顔になる。

「ばあば……」

「マナ……」

陽弥の片方の目から涙が溢れ出てきて、エミリアと一緒に抱き合う。一年半の家族との再開に三人は感動していると、吹き飛ばれたネザーが出てきた。

「痛つつ…… 覚悟はできているんだろうなあ!? 紛い物が!!」

「どの口がそれを言うんだ? 紛い物はお前の方だ!! 屑野郎!!! 何千億人の民やルナ、父さんと母さんや皆を奴隷にして、この二人の星を武力

行使で滅ぼさせた…………… ヴァルキュリアスの掟は分かっているだろう……………」

「連邦条約第一条 未開惑星保護条約、連邦条約第十七条奴隷禁止条約…………… 私はそれを破った…………… けど、グリニア帝国の傘下になったヴァルキュリアスはそんな法律を無視しても良いとなっているが？」

その直後、陽弥のアップパーカットが炸裂した。

「そんなのテメエの理想だろ……………」

陽弥は戦っているバトルスーツに命令をする。

「EMPフィールドを発動せよ!!」

するとバトルスーツの背部から電磁衝撃波が放たれ、グランドスファイアまで広がった。

各機能やシステム、さらに皆の機体全てが停止した。陽弥は勇人達の方を向き、言う。

「あ…………… 急いで大型バトルスーツ内部の緊急大型カプセルに入ってください！」

勇人達は急いで大型バトルスーツの内部のカプセルに入り込み、陽弥はバトルスーツと合体、ガンシップ形態へ変形し、猛スピードでグランドスファイアから脱出した。そして陽弥とエミリアは叫ぶ。

「シグムディア!! / シグニュー!!」

格納庫に配備されて、無理矢理拘束されていたシグムディアとシグニューが拘束用の鎖を崩し、次元跳躍で陽弥とエミリアの元へ駆け付けた。シグムディアとシグニューが次元跳躍で陽弥とエミリアの所に現れた。

「シグムディア！」

『主よ、何と言うお姿に…………… ですが、良くご無事で』

「一年半も心配かけたな……………」

『姫様も、お体の傷は大丈夫ですか？』

「ううん…………… 平気、マナを守るなら、どんな痛みも耐えますから……………」

それから、エスメラルダはザンジークの時空賊船隊に回収された。

ドックに新アースガルドの護星神のラファイと新ヘルヘイムの護星神のシユバルツアやシャーラ達とザンジーク達が駆け付けた。

《陽弥！／陽兄さん！／先生！／陽兄い！／兄貴！／陽弥兄さん！》

「皆……………すまなかつたな、心配かけて……………」

「ヤバイ姿になつても！俺たちの兄貴だ！やっぱりすげえよ！」

「陽弥……………フランケン見たいになつたなあ」

「悪かつたなあ、ザンジーク……………前の方が良かったか？」

「違う……………驚いているんだ。肉を喰い千切られても、生きていることに……………」

「……………酷かつたんだぞ……………」

「何があつたんだ？一年半も……………行方不明で……………」

「……………あれは……………そう、ネザーのスーパーブラックホール砲に吸い込まれた直後だつたんだ……………」

一年半前……………年中雨が降り続ける惑星……………ウオタンVIIの首都ラステル上空……………雷雲から稲光が発生と同時に黒い球体が現れる。そして消え、中から足の骨が丸見えで上半身が喰い千切られた陽弥が落ちてきた。街の人々が悲鳴を上げ、避ける。だが、人々は陽弥の姿を見て語る。

「ひでえ、至るところを喰い千切られている。」

「だけど、死んでないよこの人？」

「苦しそうだ……………助けてやろう！」

人々が警察や救急車を呼び、致命傷を負った陽弥を病院へ搬送し、改造手術が開始された。そして三日が達ち、朝陽が陽弥を照らす。陽弥は朝陽の光の眩さと機械の音で目を覚ます。

「う、うくん……………ここは？」

陽弥は眠気を覚まそうと、顔を洗いに洗面所へ向かう。

「はあく……………何だろう？何か妙に金属音や機械の音が鳴る

なあ……」

陽弥は冷たい水で顔を洗い、タオルで顔を拭き、目の前にある鏡を見る。それは何と喰い千切られた場所が機材で縫い付けられていた。

「は？…… はあ〜っ!!?」

陽弥は驚き、慌てた。その後、医師から説明を聞いた。どうやら俺は、各内蔵が喰いちぎられ、絶命寸前の危機に瀕していた。それであらゆる医者達が集まり、世紀で初の大緊急手術が行われた。手術に掛かった時間は何と一日が過ぎて、4時間まで続いたらしく、医者達は交代しながら作業をしていたと、そして手術を受ける前に陽弥は誕生日にエミリアから貰った手製のマフラーを肌身離さず持っていたと…… 早速、陽弥はマフラーを首に巻き、ウオタンの街を歩いた。リハビリは完璧で、周りの人から変な目で見られることもあつたが、構わなかった。俺は何としてでも、グランドスファイアへ戻る対策を考えていると…… この豊かな星にも…… 悲劇が訪れた。突如ネザー率いるグリニア帝国軍が…… 惑星ウオタンに進撃してきた。ウオタン防衛軍も立ち向かったが…… 相手の戦力で押し負け、惑星ウオタンや星に住む人々は…… 絶滅した…… 俺は火の海で燃え盛る街を見上げ、決意した。一刻も早く皆の所に戻り、ネザーを叩こうと…… 俺は残骸を拾ってスペースシップを造り、グランドスファイアへと向かった。だが…… 戻ってみれば、皆がネザーの傘下に入っていた。俺はグランドスファイアとの発着の許可をしようとした直前、ルナ達が立ち塞がった。

「嘘だ!!ルナー！ソファイア！リヨウマー！アレクトラ！ルチル！ローレライ！ラルフ！キヤリー！バルト！ダーマ！デュラン！ドミニカ！父さん！母さん！アンジュさんにタスクさん！サラマンディーネさんにリュウガさん！ナーガさん！カナメさん！サリアさんにウィルさん！どうしたんだよ！皆！」

彼らのセイクリッドメールやラグナメール、パンドラメール、龍神器が襲い掛かり、スペースシップは破壊された。だが、陽弥は脱出した直後に父親のペルシウスに捕まっていた。そしてそこに陽弥の姿を真似たネザーが現れた。

「まさか生きていたなんてなあ…………… 総統♪」

「ネザー！父さん達に何をした!?!」

「黙りなさい！ネザーめ！」

「えっ!!?」

「この裏切り者が！お兄ちゃんに仇なそうとするなんて、許さない！あなたの計画を阻止する！マナちゃんを奪わせない!!」

「そんな…………… 違うんだ！ルナ！お前達は騙されている!!ソイツがネザーなんだ!!」

「陽弥殿に罪を擦り付けようとは！この外道が！」

「そ、そんな……………」

「…………… 孫娘を道具にしようとしたことを…………… 償って貰うぞ」

さらに父親にも疑われ、陽弥は絶望する。上から人工衛星のカメラでその光景を撮しとる。するとネザーがポーチからある小型のモニターパッドを陽弥に見せる。

「総統に良いものを見せよう♪これ何くだ♪」

「ッ!!!?」

モニターパッドに映し出されたのは、何と鞭で全身傷だらけのエミリアが吊り上げられていた。

「エミリアッ!!」

「何故かその女…………… 僕が作ったプリズンウォールが効かないのよ…………… ま、その事は関係ないけど、あなたに私に対する怒りを…………… さらに出そうと思っっているんだ。」

アレクトラが陽弥の口にマスクを付ける。

「あなたの龍装光やスペクトロブス達を使わせないようにしますから、」

「つゝゝ！(何をするつもりだ!?!)」

すると陽弥が瞬間移動し、吊り上げられているエミリアの所に現れた。そしてエミリアにも陽弥と同じマスクを着けさせると、ネザーは陽弥の姿を真似るのを止め、元の姿へと戻った直後、ネザーがブレード抜刀し、エミリアの背中を切り始めた。

『ツゝゝゝゝ!!!』

エミリアは悲鳴を上げ、それを見ていた陽弥は皆に取り抑えながらも、抗う。

「ツ~~~~ツ~~~~!!! (ネザアアツ!! 貴様あああつ!!)」

『フウ~~~~ツ~~~~!!... フウ~~~~ツ~~~~!!... フウ~~~~ツ~~~~!!』

エミリアの背中にできたものは、グリニア帝国の国旗であり、ネザーは高笑う。

『アヒヤヒヤヒヤヒヤ!! 見ろ! グリニア帝国の国旗だ! うまいだろ~~~~♪』

「~~~~ツ~~~~!!! (殺してやる! 殺してやる! 殺してやる!!)」

『さあて♪、お次は.....』

グリニア帝国兵士が持つてきたのは、高温に熱した金具で二人のグリニア帝国兵士がエミリアの脚を押さえ付ける。そして、熱した金具をエミリアの下腹部に押し付けた。

ジュウウウウウウウツ~~~~!!!

『~~~~ツ~~~~!!!』

エミリアはあまりの熱さ!! と痛みにも、断末魔の悲鳴を上げる。そして陽弥がさらに抗い出した。!!!

「~~~~ツ~~~~!!! (ネザーツ~~~~!!! 貴様あああつ!! 貴様あああつ!! 絶対に殺してやるつ~~~~!!!)」

そしてエミリアの下腹部にグリニア帝国の国旗の烙印が印されており、エミリアの目には涙が溢れ出ていた。するとネザーはその表情を見て、笑い出す。

「アハハハハハハハハ~~~~!!! 良いね♪ 良いね~~~~♪ その苦しむ姿..... 最高だよ~~~~!!!」

そしてネザーが陽弥の所に戻る。

「今の見たか? 最高だろ?」

「~~~~ツ~~~~!!!」

陽弥の表情は鬼神以上の面になっており、今でもネザーを殺そうとしていた。そしてネザーは陽弥の愛用の剣“ガイアブリンガー”を



ケラ、カエルや蛇も食って腹を満たしていたから……」

皆の表情が段々と青ざめていく。

「あんた危ない男だな？命懸けでネズミとオケラを食ったのか？」

「当たり前前だ!!何時くる欠課品を何も食わずに待っておくのか!?そっちの方が餓死になるわ!!一回やってみろお前も!」

「嫌……聞かなかったことにしておく。て言うか、それだったら何で救援要請しなかったんだよ!」

「悟られない為だったんだ。もし生きていたら今度こそ、エミリアとマナの命が危ないと思って……」

「でも、無事に救出出来たじゃん……陽兄い♪」

「それもそうだな、それとエスメラルダさん……頼まれた壺は持ってきましたか？」

「あるよ」

「貸してください。」

エスメラルダは持っていた壺を陽弥に渡す。

「では、ジュリアアン!ビィアアン!!!」

陽弥は変な呪文を叫び、壺を投げた。壺が砕け、勇人達が驚く。

「あぁっ!!?」

すると壺から禍々しい二つの黒い影が現れ、一つは陽弥の方に、もう一つはエミリアの方に取り付いた。すると陽弥とエミリアの影から瓜二つの人物が現れた。

「クツ!ネザーめ、」

「不意を突かれましたわ。」

「ブラム……」

「イザベル……」

「陽弥!」

「エミリア!」

ブラムとイザベルは陽弥とエミリアの体中の傷を見て、驚く。

「どうしたんだよお前……その体……」

「どうしたのその傷……?」

「実は……」



陽弥とエミリアはそれぞれの事を話す。それを間に聞いたブラムとイザベルが怒りを露にする。

「糞がつ!!ネザー……………あの裏切り者が!次会ったら今度こそ息の根を止めてやる!!」

「ごめんね、エミリア……………私たちが封印されている間に、助けてやれなくて……………」

「良いのですよイザベル……………あなたも悪くも何もありません……………マナ、イザベル叔母ちゃんだよ♪」

「いゝ♪、いゝ♪」

マナがイザベルの頬に触れると、イザベルが泣き崩れる。

「とにかく、地球に行ってみよう。」

「嫌、地球やユグドラシルや各惑星にもプリズンウォールやロトスの花の影響で洗脳されている。下手に動けばアイツの思い通りになる……………惑星クシテイに寄ってくれ……………武器を回収したいんだ。」

そして行ける場所といたら彼処しかない……………」

「何処だ?」

「惑星エーテル……………」

陽弥達を乗せたザンジークの船隊は先ず、惑星クシテイに向かい、武器を回収した。

「ヤバイな……………この多さ……………」

たくさんのコンテナに入っている武器や弾薬、支援兵器、さらに修理用品もあらゆる部品をザンジークの船に積み込み、シグムディアの能力で惑星エーテルへ次元跳躍し、辿り着いた。

「ここが……………惑星エーテル……………」

荒れ果てた神殿が並んでおり、このエーテルの先住民でクアンタ人から受け継いだ技術を受け継いでいる光の種族”ルミナス”に救援要請し、ザンジークの船隊を広大な森林地帯である”トーバス”に着陸し、ルミナスの族長に事情を話す。

「なるほど……………逆賊の狙いはあなたの持つインフィニティソウルとグリゴリ、アーククリスタル……………エミリア様のクアンタニウムハート……………そしてその子に宿る全ての力……………」

身長4メートルで翅の小さい蛾のようなルミナスの族長がマナを見て、言う。

「こんなに幼い子を、人工知能の人体実験にしようだなんて……………」  
族長はマナの頬に触れて、決意する。

「貴方方の要請を許可しましょう。愚かな逆賊に銀河を好きないようにはさせませんから♪」

陽弥達は喜ぶと、族長が陽弥に問う。

「陽弥さん………… 貴方の体は既に機械化していますね？」

「え？はい…………」

「貴方を戦線復帰にするために、我々のメディカルカプセルで、元の体に戻すことができます。」

「そうか、感謝する。」

陽弥はそう言うと、ルミナスの浮遊要塞ホレイトに移動された。さらにシグムディアとシグニューも連れて、勇人とシンデイに適用するための人造生命体を改造や開発すると言い、搬送された。それから2日後、勇人とシンデイがマナの遊び相手をし、それを見守るエミリアの元に、回復した陽弥が戻ってきた。

「待たせたな♪」

勇人とシンデイとエミリアは驚く。あの機械化していた体がルミナス人の技術で完全に生身の体や綺麗な赤髪を取り戻しており、さらに腰に七星剣と魔剣グラム、そしてガイアブリンガーとブレイブリフレクターを装備していた。

「陽弥様…………」

「エミリア…………」

陽弥とエミリアは近付き、互いの額をくっ付ける。

「ただいま♪」

「………… お帰りなさい、あなた♪」

するとマナが走ってきて、陽弥の足に抱き付く。

「ばあばー」

「マナ…………♪」

陽弥がマナを抱き上げ、頭を撫でる。その光景を感動していたシン

デイが嬉し泣きする。

「良いなあ♪良いなあ♪ワタシもあんなhappyなファミリーが欲しいわ♪」

すると陽弥がこちらを見ている勇人とシンデイの方を向く。その後、勇人と陽弥の左目に電気が走った。

「っ!？」

勇人の眼帯が取れて、赤黒い目が露になる。その目を見た陽弥はあることに気付く。

「もしかしたら……………」

すると陽弥はマナを下ろし、勇人に近付く。

「お前……………シンセシスに覚醒しているのか？」

「シンセシス？」

「…………… 勇人、俺の弟子にならないか？」

「え？」

「嫌、無理を言っつてスマン…………… ただ、お前のその目を見て、言ったんだ…………… お前のその赤黒い目は何れ、暗黒生命体が生まれると…………… 絶望の淵まで叩き込まれた寸前に、自分と瓜二つの者が生まれ、共に和解し、共に戦い…………… そして絆を得る…………… 俺とブラム…………… エミリアとイザベルはそうやって絆を得られた…………… やってみるか？」

勇人は心の奥底で、今までの自分を思っていた。父と母が他界し、暴力と権力で叩き込まれ、もしかしたら今度はシンデイにも悪影響を及ぼしてしまうと考え、決意する。

「…………… やる」

「やるよ…………… 陽弥さん…………… 嫌…………… 師匠と呼ばせてください!!」

「…………… 良いだろう♪……………」

陽弥が笑顔で返すと、シンデイも決意する。

「あのー!」

「？」

「ワタシも、あなたの事をteacherと呼んで良いですか？勇人

だけ強くなるのは良いんですが、ワタシも強くなりたいです！daddyとmummyの敵を取りたい！」

「……………好きにしろ♪」

勇人とシンデイは喜び、陽弥と共に次元の狭間に連れていかれ、約2000年間修業し、時間が止まっていた世界のため、ザンジーク達からは数時間惑星エーテルに帰ってきた。そこには陽弥の大型バトルスーツとシグムディアが合体した姿、シグムディア・リベリオン”と”シグニュー・リベリオン”そして二機のデータ元にして作られた勇人とシンデイのパンドラメール『クーフリン』と『エリン』が搬送されていた。

「これが……………」

「ワタシ達の……………」

「二機体……………」

そして勇人とシンデイの目にはシンセシスの証しでも言える緑と桃と赤黒い目が浮かび上がっていた。勇人とシンデイはそれぞれの暗黒生命体『鮮血のベリト』と『赤蛇のサマエル』を宿していた。ブラムとイザベルは悪魔と墮天使の名を持つ2体の暗黒生命体を歓迎した。

「よく来たな、ベリト……………」

「サマエル……………久し振りね♪」

「ブラムとイザベルか……………随分と冷静になっっているなあ、」

「ああ、イザベルが妊娠している……………だから、イザベルは戦えない……………お腹の子に影響が出ると、エミリアの体の中で待機すると……………」

「それで私たちを？」

「そうだ……………」

「分かった……………お前の友の国家を奪い返せるなら、俺もそのつもりでグリーンアだけを滅ぼしてやろう♪」

「感謝する。」

すると聖なる鎧と紅きマントを装備した陽弥とエミリアが現れた。「少数で掛かる。だから、弟子の勇人とシンデイを助けてやってく

れ……………二人とも。」

「ああ、」

「勿論ですよ♪総統……………」

2体の暗黒生命体は笑い、勇人とシンデイの中に入っていった。そして陽弥達はザンジークの船に乗り込み、グランドスファイアへ進軍した。

客室にいる陽弥はベッドに寝転がり、窓から見える星を眺めながら、ガイアブリンガーを手入れをしていた。そしてその横にエミリアがマナを寝かし付けていた。

「やれやれ、一年半も待たせたな……………皆や父さん達を相手するのは怖いなあ」

「それは、私も同じです。育ての親も相手しなければなりませんから、それに……………この子を守るなら、どんな相手でも相手しますから♪」

「はあく……………相変わらず俺の嫁は度胸あるなあ……………」

「あら？そう言うあなたも私たちを助けに行ったとき、皆を相手してましたよね？」

「あれは仕方がなかったからなあ、今度は容赦なしで相手するよ♪」

陽弥はそう言うのと奥の間でエミリアにキスをし、抱きしめ合い、互いの深い愛へ入っていった。

一方、別の部屋では勇人とシンデイが互いの手を繋いでいた。シンデイが勇人の肩に頭を乗せ、星を眺めていた。

「綺麗な星だね♪」

「うん……………子供の頃、地球で夜空を眺めていたなあ……………懐

かしいなあ♪」

「勇人は綺麗な星空を眺めていると、シンデイが問う。」

「ねえ、勇人……」

「ん？」

「ワタシ達……これからどうなるんでしょう……」

「誰にも分からないよ……未来は知らない方がいいって、師匠は言っていたから……それに運命は自分で変えるんだ。だから、僕も師匠見たいに運命を変えてみようと思うんだ……」

「勇人……」

「それから……シンデイ」

「？」

「勇人の顔が赤くなり、そしてシンデイに言う。」

「この戦いが終わったら……その……俺と結婚してくれ！」

「この先、何年後、嫌、何十年もずっと一緒に居よう！二人で！」

「シンデイの目に涙が溢れ、返答した。」

「yes！勿論です！ワタシも勇人と一緒に居たい！離れたくない！これからもずっと幸せに暮らしたいです♪」

「勇人とシンデイの決意に、二人はキスをする。」

## a f t e r s t o r y 0 7 : 罨

数日後、ザンジークの船隊がワープを繰り返し、グランドスファイアがある宙域に到着した。

「敵艦隊補則!!」

既に格納庫には陽弥が仮面を付けて、皆に宣言していた。

「同志よ! 今日……………俺達はこれから、グランドスファイアの主導権を奪還し、皆に取り付いているプリズンウォールの制御を壊し、解放した同時に逆賊であるネザーの首を捕る。多勢に無勢の戦いになるかもしれないが、これは俺たちにとって、秩序と名誉を取り戻す戦いにもなる! あんな野郎に好き勝手されたくないだろ? 戦う! 俺たちの絆を…………… 奴にぶつけるんだ! 作戦名「リベリオン」を開始する!」

《おお〜!!!》

そしてグランドスファイアから、ヴァルキュリアス艦隊及び、全機体がかたパルトから発進されていく。その中にルナ達もいた。その頃、ネザーはグランドスファイア内部にある司令塔から前方のザンジークの船隊を見て、笑う。

「さあて、そんな数でどう叩こうと言うのかね? 総統……………」

するとザンジークの船からシグムディア・リベリオンに乗った陽弥が前に出る。

「笑っていられるのが……………これで最後だと思え、ネザー……………」  
すると陽弥はシグムディアを操作し、七星剣と魔剣グラムを抜刀した。

「見せてやろう……………これが、アイツ等と2000年間の修練で叩き込んだ俺の新たな力だ!!」

2本の刃から光のオーラが溢れ、陽弥は渾身を込めて、七星剣と魔剣グラムを振り回し、何かを斬った。ネザーは何が起こったのか分からなくなる。

「何だ!？」

陽弥は七星剣と魔剣グラムを収納し、剣を収める時と同時に音が鳴り響いた直後、ヴァルキュリアス艦隊を含め、ルナ達の神経に電気が走り、気絶していく。その光景を見ていたネザーが慌てる。

「お前達!? どうしたんだ!!」

すると陽弥がネザーに説明する。

「ネザー! 観念しろ! お前とクローン兵以外のプリズンウォールを付けている者達は、俺の技で心を切った! 数時間は動けないぞ!!」

「チッ! …… 小数以来ると思つて甘く見ていた! ……」

ネザーが舌打ちすると、命令を下してきた。

「ヴァルキュリアス以外のクローン兵に告ぐ! 何としてでも、私の元へ奴等を来させるな! お前らの命がどうなるうとも、絶対にだ!!」

クローン兵士達はネザーの命令を聞き入れ、グランドスフィアからグリニア帝国艦隊が発進してきた。その様子をザンジークの船から見ていたザンジークは叫ぶ。

「陽弥! 来やがったぞ!」

「セイクリッドメール隊! 全機出撃!」

《yes! we fuhrer!!》

カタパルトから陽弥のシグムディア・リベリオン、エミリアのシグムニュー・リベリオン、さらに勇人のパンドラメール『クーフリン』とシンデイのパンドラメール『エリン』が発進し、後からラファイのブレイブとバンシー、サイクルプス、時空賊のアーキバスⅡも続いていく。そして動けなくなったヴァルキュリアス艦隊を抜け、シャフトが閉じられているグランドスフィアの発着場に辿り着く。陽弥は非常用スロットルを回し、シャフトを開けた。

「突撃!」

全機がビームライフルを構え、目の前に防衛網を貼っているグリニア帝国艦隊が待ち構えていた。グリニア帝国艦隊のカタパルトから複数のドローンが発進し、発着場での交戦が始まった。陽弥のシグムディア・リベリオンの背部のバインダーから4対の剣型エネルギー弾”ルミナスビット”を展開し、ドローンやグリニア帝国兵士の死角から襲う。エミリアもシグムニューの高出力エネルギーランスとビーム



シールドの他に6対の銃型エネルギー弾“ルミナスファンネル”を展開し、グリニア帝国艦を撃沈していく。そして勇人のクーフリンはハイパーノバビームライフルを構え、狙い撃ちしていく。するとドローンが背後から迫ってくると、シンデイのエリンが脚部から光の剣“クラウ・ソラス”を抜刀し、ドローンを切り裂いた。そしてラファイ達も、グリニア帝国軍を打ち倒していく。そしてシグムディアがルミナスビットで街に繋がるシャフトを切り裂き、セイクリッドメイルも通れるくらいの巨大な穴を開け、侵入した。すると陽弥の目の前に司令塔が見えた。

「見つけたぞ!!」

シグムディアが先進し、司令塔の内部をスキャンする。

「あれ!？」

しかし、司令塔には誰もいなかった。

「師匠!」

「アイツ………逃げたな!まだ遠くには言っていないと思う!探せ!!」

全機が二組を組み、ネザーを搜索する。

陽弥とエミリアは城内を調べ、勇人とシンデイが商業エリアの辺りを探す。勇人とシンデイは機体から下り、商業エリアの街道を歩いていた。

「何処にいるんだ?………アイツは………」

「teacherは城内にある研究室………ネザーの部屋を探すと言っていました。」

「ネザーの?」

「yes、きつと部屋の何処かに隠れていると思っただけでしょう………」

勇人とシンデイがそう考えていると、背後から黒い影が迫ってきた。

「っ!？」

運良く勇人がシンデイの背後から迫る黒い影に気づき、フルオートライフル『ハリヤー』を構えたが、黒い影が勇人を撥ね飛ばした。

「勇人！」

すると黒い影が姿を現した。

「くっ！……ネザー！」

ネザーがシンデイを捕まえ、人質にすると、ネザーが勇人を睨む。

「愚かなあの地球人の生き残りか……子ネズミが……」

「うるさい！僕たちの故郷を壊し、そしてシンデイの両親を目の前で殺しやがって……」

勇人が陽弥に通信を入れようとした直前、ネザーがシンデイの顔にブレターピストルを突き付ける。

「おっと、あの紛い物に連絡してみろ♪このお嬢さんの顔に穴が開くぞ♪ヴァルキュリアスの勇者が……」

「糞……卑怯者が！」

「卑怯？……私が？フフ♪やっぱり地球人は可笑しな事を言う。」

「どういう事だ!？」

「私は……何日も待ち続けた。不安を抱き、滅びを避けるために、私は“あれ”を研究した！」

”あれ”？」

「だが!!研究した結果……陽弥・ギデオンに追放され、私は絶望の淵をさま迷っていた。私は信じていたのに!!私の研究が上手く行けば!陽弥・ギデオン!嫌……先生に認められると思っていた!!私の頭脳がヴァルキュリアスの未来を照らす光だと!だが、先生に裏切られた!……そんなさま迷っていた私に……”あれ”を渡し……”あの方”が私にクローン兵の作り方と、未来を照らす計画を引導してくれた……」

ネザーは自信の過去を勇人とシンデイに語り始めた。

一年8か月前…… 辺境惑星ヴォルダンにて、ビリビリに破れか

けの白衣を着ているネザー・マンティカルが雨の降る中を泣き崩れながら、絶望の淵へ落ちていた。

「う……………うう……………何ですか？何故、認めないのですか」

ネザーは地面に拳を叩きつけながら、悔やんでいた。

「糞……………糞！糞！……………糞！糞！糞おつ!!!」

その直後、ネザーの元に禍々しい怨念の巨大な塊が近付き、ネザーを呑み込んだ。すると闇の中からある人物が現れ、名を言う。

『私の名は……………』 “エンブリフ”。君の失意は無駄ではない♪彼は分かっているだけだよ……………私の無限の憎悪を受け取りなさい……………完璧な兵士と……………この”傀儡の剣”を使い、君の叶えたかった野望を果たしなさい♪そして彼を……………ヴァルキュリアスの紛い物を消し去りなさい♪……………』

彼の言葉を聞き入れたネザーが放心し、そして軍事組織を造り上げた。それを聞いた勇人とシンデイが怯え、ネザーは狂喜に満ちた笑い声を上げる。

「アハハハハハハハハ!!!……………そして私の望みはただ一つ……………!!!……………”傀儡と黄昏の全てを……………一つの闇に!!!”」

ネザーはそう言うと、シンデイを人質にしたまま勇人に襲い掛かった。勇人は間一髪ネザーの攻撃を回避するが、シンデイを人質しているため、撃てなかった。するとネザーがまた不気味な笑顔を見せ付けてくる。

「そろそろ……………私は退散しよう♪」

「何?!!」

「私は……………ずっとこのお嬢さんを見てきた。今も黄昏の心を持っており、前向きであると……………そして決めた。このお嬢さんを”私の妻”にしようと思っている♪」

「二つ!!!?」

「それに、私は知っているのだからなあ……………君の……………」

勇人はネザーの放った言葉に驚く。

その頃、城内のネザーの研究室では、陽弥がネザーを探していた。

「アイツめ！何処にいった!？」

「陽弥様!」

「ん?」

「これを!」

エミリアがある資料を持ってきた。陽弥はエミリアと一緒にその資料を見る。さらに陽弥が端末を開き、名簿リストを見る。

「っ!!」

陽弥が名簿リストに載っていた人物に驚き、発着場を確保したザンジークに通信を入れた。

「どうした?」

『ザンジーク! マナは無事か!?!』

「え?ちゃんと世話役に回してあるけど……」

『っ!!今すぐマナを助けに行ってくれ!ソイツはネザーのスパイ!プリズンウォールを付けられている奴だ!』

「何だっつて!!」

ザンジークや時空賊達が急いでマナのいる部屋に向かい、ドアを開けようとしていた。

「おい!開ける!!」

しかし、ドアは向こう側から鍵を掛けられていた。

「退いて!」

丁度そこに、次元跳躍で飛んできた陽弥とエミリアが現れ、ハンドガンを取り出し、ドアの金具を破壊した。

「せーのっ!!」

ザンジークと陽弥がドアを破壊すると、倒れているプリズンウォールを付けられている時空賊の女性を救助する。そして磁場を発生する黒い穴が陽弥の目の前にあり、中からパラメイル並の大きさを持つ手が現れており、手のひらにコールドスリープカプセルを持っている。陽弥はコールドスリープカプセルの中にマナが寝ていると分かり、ヘビーマシガン”レヴナント”を取り出し、巨大な手を撃ち始めた。

「このおおおおっ!!!」

しかし、巨大な手が手のひらからマナの障壁を展開し、防御する。すると黒い穴からネザーの音がする。

「ハハハハハハ!!! マナ・ギデオンは貫ったぞ! 陽弥・ギデオン!」

「マナアアアアアッ!!!」

そして巨大な手がマナを連れて消えようとする。すると陽弥はハンドガンを取り出す。それを見たエミリアが止めようとする。

「止めて!」

「発信器だ!」

陽弥は巨大な手に発信器を撃ち込んだ。巨大な手が黒い穴と同時に部屋から消えた。そしてエミリアが泣き崩れ、陽弥が壁に拳を叩き込むと、壁ごと貫いた。

「糞!..... まんまとネザーの手のひらで踊らされていた..... これは俺の責任だ.....」

一方、勇人の方ではネザーの放った言葉に怒り出し、ライフルを撃つ。

「この野郎!!」

「無駄だ..... 今の私はエンブリヲの力を宿している。それに彼方の方は目的達成したようだし、だから♪」

するとネザーが手から衝撃波を放ち、勇人に直撃した。

「勇人!!」

「未来の花嫁は頂いたぞ、新川 勇人!!」

「シンデレイイイイ!!!」

「勇人おおおお!!!」

二人は互いの名を叫びつつ、シンデレイはネザーに連れ拐われた。勇人は彼女を守れなかったことに、悔やむ。

「糞!糞!..... 糞おおっ!!」

勇人は燃え盛る町の中でシンデレイの叫び続けていた。

## after story 08 : 大いなる旅立ち

その後、グランドスフィアの主導権を奪還し、プリズンウォールの制御を破壊した。皆の首に取り付けられていたプリズンウォールが外れ、正気に戻ると同時に陽弥が皆の神経にアクセスし、今までの記憶を皆の頭の中へ流した。

そして正気に戻ったウィルとバンが怒鳴っていた。

「あの野郎……俺たちを奴隷のように扱いしやがって！」

「次の戦いで勝ったら、生皮を打ち剥いでやってやるぜ!!」

そしてシンとヒルダ、ルナやアストラッド王とアリシアが陽弥の前で土下座し、謝罪していた。

「すまん!!俺らのせいだ!俺がもつと早く奴を始末すればこんなことには!!」

「私も!..あんたを撃つて本当にごめん!.....母親として最低な奴だよ!!私は!!」

「私も.....お兄ちゃんに悪口を言つて本当にごめんなさい!..ごめんなさい!!」

さらにアンジュ達も陽弥の前で土下座する。皆の目には悔し涙が溢れていた。その光景に陽弥は慌てる。

「もう、良いんだ皆.....この件は俺の責任でもある。皆には関係ないことだ.....」

「だけど!..お前を殺そうとしたんだ!頼む!共に戦わせてくれ!」

シンが必死に陽弥に抗議する。陽弥とエミリアが話し合いをし、決断する。

「分かった.....でも、これは俺の責任でもある。だから、一緒にマナを助けよう.....」

シンの中から涙が溢れ、その場で泣き崩れる。

その頃、射撃訓練場では勇人がショットガンでの的を狙い撃ちしていた。そこに陽弥がレヴナントを持って現れた。

「勇人……」

「師匠？」

陽弥は勇人の隣に立ち、レヴナントを乱射する。

「すまなかった……君の彼女を守れなくて……」

「良いんです。師匠のせいでもありませんから……」

勇人はそう言いながら、的を狙い撃ちする。

「師匠……」

「ん？」

「僕って……本当は何者なんですか？」

「え？」

「……あの時、ネザーが言ったんだ。『私は、お前の父親の事を知っている……そしてお前の本来あるべきの力は覚醒していない……』と言ったのです。」

「勇人の父親……本来あるべき力……どういう事なんだ？」

「分かりません……ただ、ネザーはエンブリフって言う人物にその傀儡の剣を受け取って、あんな力を手に入れたようです。」

「エンブリフ!？」

「知っているのですか!？」

「ああ、俺が生まれる20年前に、父さん達を苦しめた変態ナルシストだ……そうか、アイツ怨念となってネザーに近づいたのか……でも、傀儡の剣とは、何だろう？」

「だったら、アイツの研究室の資料で調べれば、傀儡の剣の事が分かるのではありませんか？」

「なるほどーその手があった!」

陽弥と勇人は早速ネザーの研究室に入り、本や資料と研究データを調べ尽くす。

「何処だ?……何処に……」

その直後、陽弥と勇人の左目が疼き始める。そして二人の体からブラムとベリトが現れる。

「ブラム……お前も感じるか？」

「ああ……こんな感じ、創破主以上だ……」

「ベリトも?」

「……こんな禍々しい怨念……多分、初めてかも知れない……」

四人の目線にある分厚く赤黒い本を指していた。陽弥はそつと、本を取り開いた。内容は何かの聖書で、クアンタの歴史や文明が書かれていた。その中で一番目に入った内容が……

「厄災の剣『ディザスター』?」

「何それ?」

「数千億年前……古代クアンタ帝国を襲った剣らしいんだ。その剣はありとあらゆる種の怨念を取り込んで成長し、星の核を食べていたらしいんだ……」

「え!?!」

「何だよ、それ!?!」

「7人のクアンタの皇帝が駆使してその剣を封じていたらしいんだ。 ”アースセイバー”、”エクスカリバーン”、”エンジエリックナイツ”、”ヤトノカミ”、”スパード”、”トワイライトサーガ”、”ガイアブリンガー”……その剣の中でも恐ろしいのが長男が使っていた剣……それが”ディザスター”だ。」

「7人で封印した剣……そんなにヤバイものか?」

「ヤバイにも程はあるが、ディザスターはそれ以上だ……何せディザスターには、星をも喰らう事が出来る蛇皇ギガオロチの骨を加工して作られているからなあ……それにこの本には残りの7人剣の在りかを示している……」

「そんなことまで!?!」

「ガイアブリンガーは今俺が持っている、と言う事は残り6つの剣と言うことになる。」

「二つ目のアースセイバーはもう既に俺達と異なる世界で『レオン・マクライト』と言う人物がアースセイバーを持っていると……」

「じゃあ! その人にアースセイバーを借りよう!」

「だけど、剣は新たな持ち主でなければ、強大な力を発揮できないらしいんだ。」



「そんな……………」

「だから、ネザーをレオン・マクライトの所に行かせては行けない！」

陽弥達は、本を持って、シグムディアとクーフリンが整備されている格納庫へと向かった。

格納庫に向かうと、シンがいた。

「父さん！」

「陽弥…………… 丁度良いところに♪」

「どうしたの？」

「実はお前に渡したい船があるんだ。」

シンは陽弥を奥の格納庫へ連れてた。そしてライトが照らされた。

「これは!？」

それはシンのNーアキュラやNーバレーナ、Nーダンデリオン、Nーオリオン、Nーエレミアと同じく、青のカラーリングをしたスペースシップであった。

「私のアキュラと皆のスペースシップ元に造られたスペースシップ…………… その名も『Nーカルナス』だ！」

それはなんと、エツジが乗ってきたスペースシップであり、殆んどの辺りが改造されていた。

「前にエツジ達のカルナスのデータを入手して、お前専用に取り上げたんだ…………… まあ、高速戦闘艦や高速王座艦と言っても良い♪それとインフィニットプライムスやアンドロメダ級超大型戦闘艦も準備万端だ……………」

陽弥達は26人の使徒と勇人、多数の兵士達を引き連れて、インフィニットプライムスに乗り込んだ。そしてワープを繰り返して、辿り着いた先にシリンダー型のアンドロメダ級超大型戦闘艦が待っていた。インフィニットプライムスが搬送され、陽弥は艦橋のブリッジに座っていた。

「ここが……ブリッジ……」

円形ピラミッドのように上下左右に多数のオペレーターが並んでいた。そして陽弥が出航式を始め、皆は盛大な拍手をしてくれた。陽弥がブリッジのデスクに触れながら、考える。

「今日からこのアンドロメダ級超大型戦闘艦艦長は俺か……それならこの戦闘艦に名前を付けなきゃなあ……そうだなあ……何にしようか？」  
するとドアから勇人が現れる。

「師匠」

「ん？」

「何してるんですか？」

「いやあ、この艦……正式名証があるかも知れないが、呼び名がないじゃない？だから、この戦闘艦に名前を付けようと思ってるんだ。」

「それなら、丁度いい名前がありますよ♪」

「何だ？」

「この戦闘艦の名前は……『シタデル』。意味の通り……種族大銀河連邦ヴァルクリアスを守る城塞……シタデルは皆を守る城塞と言うことです♪」

「ほお、良い名前だな……そうか、よし！今日からこの戦闘艦の名前はシタデルだ！」

陽弥と勇人は喜び、皆を集め、そして数多の世界へ旅立った。

『クロスアンジュ 銀河の守護者 after story』Lost

Souls” (囚われし魂) Chapter 01『rebelli

o』END

## a f t e r s t o r y 0 9 : 空の世界

陽弥達は先ず、レオン・マクライトのいる時空へ来た。

「ここが……似て異なる別の宇宙……この宇宙にも、俺の母さんがいるって言うことか……一目見てみたいなあ」

「きつと叶いますよ♪でも、先ずグリニア帝国の進行を止めなければなりませんから。」

「そうだな、頼りにしてるぞ！ヴァルキュリアスの勇者♪」

陽弥は勇人の頭を撫でる。

「ま、取り合えず……真実の地球にシタデルは目立ちすぎる。よつて、この世界の偽りの地球の山奥に着陸する。良いな？」

「イエス！」

勇人が陽弥に敬礼し、持ち場へと戻った。陽弥はパソコンを開き、レオン・マクライトの情報を見る。

「さて、『レオン・マクライト』本名は牧田 玲央と言う別世界の地球人。エンブリヲのラグナメイルの実験により生まれた異次元生命体『ドレギアス』を倒した英雄でアースセイバーに選ばれし者……お前の腕、じっくりと観察させてもらおうぞ♪」

陽弥はそう言いながら、パソコンを閉じた。

シタデルが壊滅した旧ミスルギ皇国に近い森林に光学迷彩で着陸した。ハッチが開き、中から陸上戦艦が走行する。そして陸上戦艦の艦長はアースガルドの護星神であるラファイが指揮を取っていた。ラファイが作戦室で勇人を含む数多の種族の兵士達が集まっていた。

「ええ、先ず僕たちの目的はレオン・マクライトに関する情報入手。つまり、レオン・マクライトの師匠であったヒュウガ・トウジの生徒達に彼の情報を聞き出す。何か質問は？」

ラファイが問うと、アサリの兵士が返答する。

「もし、私たちが異星人とバレて、さらにこの世界の民と交戦してし

まったらどうするのですか？」

「その時は、”迷わずシールドを張って、話し合いをする”  
すると今度はエルフの男性が問う。

「でも、それが駄目でしたら？」

”迷わず撃て”……………以上♪」

その直後、陸上戦艦が揺れた。

「っ!!?どうした!?!」

「何者かの地雷による攻撃です!」

「さっきの話の通り、皆!シールドを張って外に出るよ!」

《イエス!キャプテン!》

兵士達はシールドとエネルギーアーマーを展開し、外に出た。

外には、先の地雷の爆破で戦艦の巨体なタイヤに穴が空いており、周りに複数の盗賊達に囲まれていた。ラファイ達はドーム型のシールドを展開し、警戒した。

「陸上戦艦『ガルベロス』艦長 ラファイ・ギデオンド。君達とあまり交戦したくないんだ。ここは黙って無視してくれないかな?」

その直後、ドーム型のシールドに弾が直撃した。

「仕方ない……………手荒な真似はしたくないが、」

ラファイが手を上げると、陸上戦艦の主砲が別の方向へ向けて放った。砲弾が着弾し、火が吹き荒れる。それを見た盗賊達が一目散で逃げた。

「はあく……………僕たちのいる彼らの方がまだ良い方のような気がする。さあ、皆!」

ラファイの掛け声と共に、兵士達はタイヤを修理し、陸上戦艦を再起動させた。そしてラファイ達はレオン・マクライトとその仲間達が修練していた道場を見つけた。

「わあ、この道場……………完全に潰れていますね。」

「無理もない……………時空融合でこうなったんだから仕方がないよ……………きつと、この道場をまた見に来るものが居ると思う。」

ラファイと勇人はそう思っていると、別の場所から足音がした。

「!?」

そこにいたのは籠手を装着している青年であり、腰に太刀を背負っていた。ラファイと勇人は警戒しながら、彼に近付く。

「すみません!..... レオン・マクライトと言う人物を知っていますか?」

「!?」

すると青年が走ってきて、ラファイの肩をガツチリ掴む。

「え!?!」

「お前!レオンを知っているのか!?!」

「え!?!」

ラファイは青年に事情を話した。青年の名はエリオ・デイキンソンでかつてレオンや四人の友である”ジユン”、”コモン”、”アラド”、”リアース”と共に、ヒュウガの道場で一緒に修練をしていたと言う。彼の話によれば、レオンがノーマだと判明され、アルゼナルへ輸送されたと、それから数日後にあちこちの世界で変な物が出てきて、人々が石の中に埋められていく光景を見た、そしてそれが消えたのが二年前と判明した。

「二年前..... 人々が石の中に.....」 時空融合だ!他には?何か、時空融合が起こっている上空で機体のようなロボットが戦っていた?」

「ん、分からなかったが..... その中に白と青と黒の3色もある機体が綺麗な刀を持ってピレスドロイドを倒していたからなあ..... はあ、俺もあんなカッコいいロボットに乗ってみたいなあ」

「そうですね、」

それから、エリオの長話に付き合わされ、エリオは仲間の所へ戻る。

そしてラファイと勇人はエリオの話していた機体の事を考えていた。

「エリオさんが話していたその機体..... もしかしてレオンさんが乗ってたかもしれない.....」

「確定だね..... 彼がその後、何処かへ消えたと言うのは、僕達も知っているね?」

「はい、もしかしたらレオンさんやその仲間達は今も……」  
「可能性は十分高い……」

そう言うトラフィは通信機で、シタデルに連絡する。陽弥はラフィの情報を聞き入れ、早速その機体のデータを調べ、報告してきた。

「恐らく、その白と青と黒の3色を持った機体は”ヴェルトサーガ”と言うオメガメイル一号機かもしれない。しかもヴェルトサーガにはアーティファルソードと言うアースセイバーと同じ武器を持っている。この意味が分かるかな？」

「はい、陽兄いさんと同じガイアブリンガーと同様の力を発揮できている。それが出来ると言うことはクアンタの意思を知らずに継いでいるって言う事になる！」

「けど、待ってください！それ本人は知っていないと言うことは………っ!!」

「っ!!」

「まずい!!」

二人の考えが一致し、急いでシタデルに戻り、レオン達のいる真実の地球へと向かった。格納庫では武装したシグムディアやクーフリンが待っていた。

『主よ!』

「シグムディア!」

「マスター!」

「クーフリン!」

「シグムディア!グリニア帝国が真実の地球に進行しているのか!」

『奴等は宇宙魔獣スペースハルピュイアとスペースハーピー及び、ドラキュラスの大群を連れてきている。彼らの戦力では元もこうもない………だから、』

「軌道上で奴等の進行を食い止める………そうだろ?」

『ああ、』

「クーフリンは?」

『同感だ………』

「良し!」

陽弥達はそれぞれの機体に乗り込み、空間へ出る。シタデルが旋回し、インファイニットプライムスも警戒体制をとる。

「来ましたー！グリニア帝国艦隊です!!」

兵士が報告してきた直後、ワームホールが出現し、グリニア帝国艦隊がワープしてきた。

「おや？まさかこんな所まで追ってくるとは……… 私はグリニア帝国軍第5将軍ケラ・デ・ジャム。我が軍に逆らうとは愚かなもの達です♪さあ！魔獣達よ！レオン・マクライトの持つアースセイバーを奪ってきなさい！」

《ア》~~~~~ツ!!!》

艦隊の檻から血肉に飢えた待っていた達が出てきた。

「全機！構え!!」

ヴァルキュリアス兵士やシタデル、インファイニットプライムスが武器を構える。そして陽弥が命令を放った。

「撃ちまくれ!!」

銃口や砲口からビームやパルス弾が発射され、魔獣達の胴体を貫通していく。だが、魔獣達も応戦してきた。口から魔方陣を発生させ、超音波攻撃をしてきた。陽弥はシグムディアのルミナスビットを展開し、魔獣達を切り裂いていく。勇人はクーフリンの槍武器“ゲイボルグ”を振り回し、ハルピユイアやドラキュラスの頭部を突き刺していく。ラファイ達もそれぞれの特性を生かしつつ、魔獣達を撃破していく。

「シャイニングランサー！」

光の槍が上から降り注ぎ、グリニア帝国艦隊突き刺さる。

「シャドウニードル！」

空間から黒き影が闇の針を射ち続ける。

「押しきれええ!!」

陽弥がガイアブリンガーを抜刀すると、シグムディアの手から陽弥のガイアブリンガーと同じ武器“デメテルブリンガー”が現れ、シグムディアはデメテルブリンガーでハルピユイアの顔を切り裂いた。裂け傷から赤い血が吹き出し、シグムディアに付着する。そしてハイ

パノバビームライフルでグリニア帝国装甲巡洋艦3隻を一撃で撃沈させた。その光景をケラ・デ・ジャムは楽しそうに見ていた。

「ほお〜……中々、殺りますねえ♪だが、」

ケラ・デ・ジャムが指を鳴らすと、陽弥の後方からワームホールが出現した。

「何っ!!?」

現れたのは何と、グリゴリア帝国の邪神尖兵ロイガーであった。

「おい！おい！嘘だろ!!?」

すると、ロイガーの目が真実の地球に目が入り、猛スピードで向かっていった。

「マズイ!!」

陽弥は急いでロイガーの後を追う。

「師匠！」

勇人もそれに気づき、陽弥に追い付く。ロイガーは既に軌道へ入り、大気圏を突入し始めた。

「ヤバイ！大気圏突入を開始しやがった！」

ロイガーの体から岩石が出てきて、隕石状態へと変わった。

「勇人！先回りするぞ！」

「え!?!」

「良いから！俺の後を付いて来い！」

陽弥と勇人は機体を旋回させ、軌道上を回るかのように大気圏を突入していく。真実の地球に暮らしている人々が上空から赤く輝く流れ星に見とれる。そして大気圏を突入後、辿り着いた場所はアウラの都に近い廃墟となった旧市街地であった。

「最悪な場所に降下してきたなあ……」

そして目の前にロイガーが衝突したと見られるクレーターがあり、中から無数のイングが湧き出てきた。陽弥と勇人はシグムディア、クーフリンから降りると、互いの武器を抜刀した。

「剣を抜刀せよ！」

陽弥は七星剣と魔剣グラムの二刀流、勇人はフォトンソードとオムニシールドを抜刀し、イングの大群へ突撃していった。



正にその頃、謎の隕石が落ちてきた場所へレオンや此方の世界のサラマンディーネ、アンジュ、タスク、サリア、ヒルダ、そしてジュン達やロザリー達が向かっていく。

「何なんだよ、今のは!?レオン、あれ何なんだ?」

「分からない…………… だけど、父さんと母さんが隕石らしき物体が落ちるのを確認したって言っていたけど…………… 隕石らしき物体って……………」

レオンは頭の中で隕石の中からエイリアンが飛び出てくる妄想を思い浮かぶ。

「まさかあ……………」

「見えてきた!」

すると目の前に衝突した場所から煙が舞い上がっていた。レオン達は断崖絶壁になっているクレーターの近くで降りる。

「何だ、あれは!?!」

クレーターの中心点からグンタイアリののようにイングが出てきており、レオン達はその光景を目にする。

「何じゃ、ありや!?!」

「気味が悪いよ…………… あれ……………」

「たくさんいる〜!」

ロザリーとクリスはイングのおぞましき姿に怯え、ヴィヴィアンはイングを見て興奮していた。

「あれは一体、何なんだ!?!…………… ヴェルトサーガ、アイツ等は一体…………… 『まさか!?!…………… イング族!?!』…………… え?」

ヴェルトサーガが突然、イングの名を言う。レオンはヴェルトサーガに問う。

「ヴェルトサーガ、アイツ等を知ってるのか!?!」

『ああ、奴等は異次元により生まれし、邪悪な生命体だ。だが、何故だ？』

『どう言うこと？』

すると今度はエクゾディアスも喋り出す。

『本来なら、この世界にはいない筈……………それが何故……………』

「ここに、と？」

タスクがエクゾディアスに問う。

『そうだ……………』

その時、サリアが何かに気付く。

「ちよっと、あれ！」

サリアの指差した先に、二つの影がイングの大群へ突撃していく。

そして陽弥と勇人は襲い掛かってくるイングに攻撃した。

陽弥の二刀流が複数のイングを切り裂き、勇人も師である陽弥に遅れをとらないようイングを倒していく。その光景を見ていたレオン達が驚く。

「凄…………… たった二人で、あの大群を……………」

その時、ヴェルトサーガとエクゾディアスがあるものに気付く。

『あの二刀流の使い手…………… あの赤髪…………… そしてあの国旗は!!』

『間違いない！あれはヴァルキュリアスの国旗だ!!』

「ヴァルキュリアス？」

「何ですか、それは……………？」

サラの問いに2機が説明する。

「“ヴァルキュリアス”我々のいるこの星より遠く離れた別の世界に存在する大銀河連邦共和国の事だ。」

「大銀河連邦共和国……………それって!!？」

レオンが分かったような表情になり、ヴェルトサーガがまだ説明する。



ハイパーノバビームライフルを取り出すと同時に、背部に装着されているPEDを起動させた。フェイゾンがアーマーに注ぎ込まれ、青白く光る触手が出てくる。

「遅れを取るなよ、勇者！」

「はい、師匠！」

2機がハイパーモードでイングの大群に襲い掛かった。シグムディアの両腕部からサーメットブレードを展開し、青白く光るフェイゾンの刃がイング切り裂き、クーフリンの両腕部の二問のバレットバズーカを乱射する。たった2機のパンドラメールが無数のイングを次々と消滅していく光景にレオン達は驚きも隠せない表情をしていた。

「凄い……………！あんなにいたイングが……………あつという間に……………」

その時、クレーターの中心点にいるロイガーが目覚めた。

『主よ！ロイガーが！』

「来たか！」

ロイガーは巨体を動かし、真っ直ぐシグムディアとクーフリンの方を向く。さらに奥にいるレオン達のヴェルトサーガを見る。

「っ!？」

『ロイガーだ!!』

「ロイガー!？」

『邪神尖兵だ!』

「え……………!？」

レオンは首を傾げると、ロイガーが吼えた。

『ガアアアアアアアアアッ!!!』

ロイガーの咆哮で高層ビルが崩れ、窓ガラスが次々と割れていく。レオン達はあまりの高音で耳を塞いでしまう。それを楽しむかのように、陽弥は笑っていた。

「勇者……………」

「はい」

「今から俺は……………シグムディアとブラムを融合させる……………だか



手を伸ばしてきた。シグムディアは伸ばしてきた触手に噛み付き、鋭い爪で切り裂くが、触手が絡まり、シグムディアが捕まる。

『ガアアアアアアアアッ!!!』

ロイガーが咆哮を上げ、直後、触手がバラバラになり、中からサーメットブレードを展開したシグムディアが出てきた。シグムディアは鋭い牙でロイガーに噛み付いた。

『ガアアアアアアアアアッ!!!』

『ウオオオオオオッ!!!』

ロイガーが悲鳴を上げ、シグムディアも卯なり声を上げた。高層ビルの高台から見ている勇人は心配するが、レオン達から見たシグムディアに唾然していた。シグムディアがロイガーの首を掴み上げ、そのまま投げ飛ばした。そしてシグムディアは腰に装備されているデメテルブリンガーを抜刀した。

『あれは……デメテルブリンガー!』

『ガイアブリンガー?』

『レオン……落ち着いて聞け、あのデメテルブリンガーは私のアーティファクトと同じ武器なのだ……つまり、レオンの持つアースセイバーと彼の持つガイアブリンガーは同じ剣なのだ……』

レオンはシグムディアのデメテルブリンガーを見ると、デメテルブリンガーの黄金の刃からエネルギーブレードが放出され、渾身を込めて、降り下ろされた。ロイガーがデメテルブリンガーによって斬られ、溶けながら消滅した。そして同じ頃、軌道上でグリニア帝国艦隊と交戦していたラファイ達はPEDを発動し、ハイパーモードでグリニア帝国軍を圧倒していた。ケラ・デ・ジャムは驚きながら、叫んだ。  
「クッ!……小癩な真似をおおおおっ!!!」

そしてケラ・デ・ジャムの戦艦だけが撤退していった。  
「良し!何とか追い払った……」

ラファイはガッツポーズをし、シタデルへ戻る。

そして陽弥達の方では、シグムディアが元の姿へと戻り、陽弥が降りる。

「ブラム……久しぶりの戦いはどうだった？」

「まだ足りないなあ……しかも、奴等がロイガーを使ってきたから、それに驚いたぞ。」

「ハハハ♪俺もだよ……これもギガオロチの影響なのかな……」

ブラムと陽弥は話していると、勇人がクーフリンに乗って、降下してきた。

「師匠！」

「勇人、心配かけたな♪で、そちらの方は？」

勇人の後方からレオン達が降下してきた。

「君は……一体何者なんだ？」

「俺？……俺の名は陽弥。ヴェクタ人の陽弥・ギデオン……ミッドガンドの護星神で種族大銀河連邦共和国ヴァルキュリアスの総統だ。それで、」

「新川 勇人です。陽弥・ギデオンは僕の師匠で、27人目の見習い使徒です……」

「あ、どうも、俺の名は「レオン・マクライト、だろ？」……え？」

「知ってるよ♪二年前、異次元生命体ドレギアスを倒した英雄……そしてサラマンディーネの夫と言うこともな♪」

「え!?何でおまつ、じゃなく、ヴァルキュリアスの総統が知っているんだ!?!」

「俺の世界にも、サラマンディーネさんがいるからだよ♪」

レオン達は驚き、今度は此方のアンジュが問う。

「じゃあ!私は!?!」

「いますよ♪相変わらず旦那さんであるタスクさんをボコボコにしていますよ♪」

アンジュとタスクが驚き、今度はサリアやヒルダが問う。

「それじゃ、私は!?!」





「レオン！早く戻ってきて！ヒュウガ君が今さつき喋ったのよ、  
「ばあっ♪」って！」

「本当に!?サラ！」

「ええ！」

「お子さんがいるのですか？」

「ああ、名前はヒュウガ…… 生後9ヶ月だからなあ、」

「9ヶ月…… (マナよりちよつと年下だ……)」

陽弥は考え、行動を開始した。

「俺も、付いていって良いかな？実は仲間達が軌道上で待機している  
からなあ……」

「良いぜ♪」

「良かった……」

陽弥はラファイに通信する。

「ラファイ、地球に降りてきても良いぞ。」

陽弥は通信を切ると、カウントダウンを言い始めた。

「3…… 2…… 1……」

すると上空から黒い何かがどんどん見えてきたと思いきや、  
巨大な戦艦がゆっくりと降下してきた。その大きさにレオン達は驚  
く。

《デカツ!!!》

「なんちゆう大きさだ!?!」

「スゲ〜っ!!!」

「これが俺の旗艦…… シタデルだ！さあ、乗っけてってやるぜ！  
アウラの都までな！」

レオン達はシタデルに乗り、アウラの都へ向かっていった。

## afterstory10：来るべき厄災

陽弥は総統らしい服装とマントを着用し、レオン達がいる格納庫へ向かった。

レオンは格納庫に整備されているパラメイル、セイクリッドメイル、ガルドメイル、インゼクティアメイル、そして陽弥と勇人のパンドラメイルのシグムディアとクーフリンを見て、驚いていた。

「凄い……俺達の技術力を遥かに上回っている！」

整備班達や兵士はヘルメットで異星人であることを隠していると、陽弥がレオンの元にやって来た。

「レオン、どうだい？」

「いやあ、あまりにも凄すぎて……言葉が出ないよ……」

「ま、そりゃそうだろうな♪何せ色んな種族が協力して造り上げた戦艦だからな。」

「種族？」

レオン達が首を傾げると、陽弥が周りにいる整備士や兵士に言う。

「皆！顔を出して良いよ♪」

すると皆はヘルメットを外し、顔を露にした。

《っ!?!》

レオン達は確信した世界には僕達だけではないと言うことに、ヴァルクキュリアスの兵士や整備士がニッコリと微笑む。

「さらに種族には、こんな大きな種族もいる♪」

陽弥がシャフトを開けると、インフィニットプライムスを整備しているアジマス連邦整備士やムスペル Heim とヨトウン Heim の巨人達が浮遊していた。

「こんな大きな種族や機械生命体もいる♪」

それからレオン達はシタデルの艦内を見て回り、客室にいた。

「はあく……ヤバイ……ヤバすぎだろ」

レオンがデスクの上でぐったりしているが、コモンは感心していた。

「無理もないよ、僕達より遥かに上回っている技術だから……それ

に、あのアサリやプロセアンやヴァルキュリアスの整備士が使っているあのバイオテイクスっていう能力が凄いい！あれだったらマナの光がなくても対象物を浮かせたりすることができるから、学びたい！」  
「俺も同感だ。」

さらにアラドも言うのと今度はジウンが問う。

「でも、宇宙専用のパラメイル……………あれ、名前何だっけ？」

「アーキバスⅡ」

「そう、それ！あれはカッコいいなあ……………一般機や隊長機に分けられているから！しかも装備も色々あつて楽しそう！」

ジウンはどうかやらアーキバスⅡにフレームに興奮していた。するとドアが開き、陽弥が現れた。

「まあ、気軽に座ってください♪」

「あ、これはどうも……………」

レオン達はソファに座ると、テーブルから紅茶が出てきた。

「あおう、総統……………あなたの目的は？」

「……………率直に話そう。レオン・マクライトさん……………並びにジウン・マコフィッシュさん、コモン・ストラードさん、アラド・J・マサドさん、リアース・ホルスさん、そしてフロンティアの方々に……………娘を……………マナを助けてくれ。」

「え？娘さんを？」

「はい、まだ一歳6ヶ月で……………私が目を離れた際に、ヴァルキュリアスの逆賊であるネザーに……………誘拐されたのです。」

「誘拐……………何があつたんだ？」

「はい、あれは……………一年半前の事です。」

陽弥は一年半前の過去を語る。ネザーの事と目的、陽弥やマナに宿る全ての力、旧クアンタ帝国が遺した七つの覇道を統べる剣、呪われた聖剣デイズター、そしてティザスターに宿る大魔獣“蛇皇 ギガオロチ”の事も……………それを聞いたレオン達は腰に付けているアースセイバーを見る。

「アースセイバーが……………七人の皇帝の剣で、俺を選んだ。」

「そう、そして二つ目の剣である……………このガイアブリンガー

も……………」

陽弥がガイアブリンガーを取り出した直後、二本の剣が突然震えだした。

《っ!!?》

すると剣のアースセイバーのはばきに埋め込められている赤い宝石と、ガイアブリンガーのはばきに付けられている赤と緑の宝石が光だした。

「剣同士が…………… 共鳴しあっている!?!」

さらに何処からともなく地鳴りが鳴り響く。

「この音…………… 何処からだ!?!」

陽弥は何かに気付き、客室の窓を見る。そこに写ったのは煙が舞い上がる富士山であった。

「山からだ!つまり、山が泣いている!厄災が復活すると!」

それから数秒後、山から地鳴りが聞こえなくなっていく、静かになった。

「治まった?」

「だが、これではつきりしたことが言える。厄災デザイナーとギカロロチはの復活が近い…………… 一刻も早くマナとシンデイを救出しなければ、手遅れになる……………」

「…………… 分かった、総統。」

「レオンさん、俺の事は陽弥って呼んでも良いですよ♪互い、剣に選ばれた者ですから♪」

陽弥はレオンと握手で交わり、四人は宇宙へ出ることを決意した。

アウラの都に到着した陽弥はレオンの両親であるジェームズ・マクライトとミライ・マクライトに事情を説明し、レオンとジュン、コモン、アラドは明後日の出発の準備をする。レオンは来るべき備えで、自分で建てた道場で竹刀を振って修練していた。

「レオンさん、いますか？」

「ん、陽弥？」

「実は、レオンさんの腕が見たくて、……………手合わせを願いたいのです。」

「え、俺と……………？分かった。」

レオンと陽弥は手合わせの準備をし、合間見えた。レオンの手にアースセイバー、陽弥の両手にガイアブリンガーとブレイブリフレクターを装備していた。

「陽弥は剣と盾を使うんだ……………」

「これですか？普通は二刀流ですが、アースセイバーですから、ここはガイアブリンガーで相手してみたいと……………」

「そっか、」

レオンも納得し、両者は武器を構える。

「行くぞ、陽弥！」

「手加減はしませんよ、レオンさん！」

両者は突撃し、レオンのアースセイバーと陽弥のガイアブリンガーの刃がぶつかった。

「これが……………アースセイバー／ガイアブリンガーの力！」

二人は互いに剣を受け流しながら、防衛体制を整える。

「レオンさん、俺の世界ではこんな事も出来るんですよ♪」

「ん？」

「龍装光！」

陽弥が叫ぶと、赤い宝石が埋め込まれている腕輪から太陽神龍が現れる。

「ええっ!？」

太陽神龍が舞い上がり、陽弥を包み込み、太陽神龍を元になっている鎧へと変わり、ガイアブリンガーの刃から紅炎を放ち、陽弥は武器を構える。

「これが、銀河七聖龍の力！その名も”龍装光”だ!!」

陽弥が突撃し、レオンを圧倒する。

「凄い！この力……………先生並だ！」

レオンはアースセイバーで風ぎ払い、奥義を出す。

「奥義！突風斬!!」

アースセイバーが振り下ろされ、強烈な風が吹き荒れる。

「そうか、なら……こつちも!」

陽弥はガイアブリンガーを鞘に収め、居合体制に入った。強烈な風が迫り、陽弥は轟き叫んだ。

「奥義！烈火斬!!」

陽弥は鞘からガイアブリンガーを抜刀し、居合切りをした。刃から火の如く炎刃を放ち、強烈な突風と烈火の炎刃が激しくぶつかり合う。そして二つの技が融合し、炎刃を纏った烈風へと変わり、二人を襲った。

「あ、」

「え、」

そして道場内で大爆発が起こり、周りにいた人達が驚く。勇人達が大爆発の音を聞き、サラ達も聞こえ、急いでレオンと陽弥のいる道場へ向かった。

「師匠〜!」

「レオン〜!」

皆が急いで駆けつけると、道場の扉の隙間から煙が出てきていた。勇人が急いで開けると、中から真っ黒に染まったレオンと陽弥が咳き込みながら出てきた。

「どうしだんだ!?!」

「いや、俺と陽弥の奥義が同時にぶつかり合って……」

「二つの技が一気に合体して、暴走したんだ……ゴヘツ」

陽弥の口から煙が吐き出た。結果、レオンはサラに叱られ、陽弥は皆に迷惑を掛け、二人とも朝まで土下座と言う罰を与えられた。そして明後日……荷物を纏めたレオン達は愛する人に一端の別れを告げる。

「それじゃ、サラ……行ってくるよ」

「ええ、レオン……気を付けて、」

レオンとサラがキスをするとサラの背中におんぶされているヒュ

ウガがレオンを見る。

「だあだ〜！」

「行つてくるよ、ヒュウガ♪」

「たあ〜♪」

そしてジュンはロザリー、コモンはメイや整備班達、アラドはエルシャ、リアースはクリスに別れを告げていく。レオンはアレクトラを抱いているアンジュとタスクに言う。

「タスク、サラや皆を頼む。！」

「分かってる。死ぬなよ。……」

「ああ！」

レオンはバッグを持ち、シタデルに行くと、ヒュウガが大きな声で言う。

「たあしやん！」

「っ!？」

サラやジェームズとミライが驚き、レオンは拳を上げ、叫ぶ。

「行つてくるー！」

レオンはそう言い、ジュン達と共にシタデルに入った。中に入ると、ヴァルキュリアスの兵士や整備士、オペレーター、勇者、陽弥が歓迎してくれた。

「ようこそ、シタデルに♪ 私たちはあなた達を大歓迎します♪ レオン・マクライトさん、ジュン・マコフィッシュさん、コモン・ストラードさん、アラド・J・マサドさん、リアース・ホルスさん」

「こちらもな、陽弥♪」

陽弥とレオンは互いに握手で交わり、シタデルが浮遊し、アウラの都を離れようとしていた。アウラの都で見送っているサラ達が祈っていた。そしてシタデルが大気圏外へ突入し、レオン達は宇宙へ入り、シタデルのシャッターが開いた。

「おお〜!! スゲェ〜！」

「凄いー!これが……宇宙……」

レオンの眼に写ったのは、あらゆる星々や大星雲、太陽系とは違って、見たことのない星があった。

「全ての宇宙には……………俺達も知らない強い戦士がいると言うことか……………」

レオンはそう考えていると、陽弥がやって来た。

「レオンさん」

「……………早速だな。」

「……………進路！グリニア帝国本拠地！惑星ヴォルダンへ！」

陽弥は命令し、シタデルはグリニア帝国本拠地である惑星ヴォルダンへ進路を取り、戦いの準備をする。

その頃、惑星ヴォルダンでは黒い雨が降る赤い大地に聳える機械の城……………その内部の研究所に大きな容器の中に背中や頭にケールが取り付けられているマナがいた。周りにグリニア非戦闘員であり、グリニア研究員がマナに宿るインフィニティソウル、グリゴリ、アーククリスタル、クアンタニウムハートの研究や解析をしていた。そしてそれを見物していたネザーがワイングラスを持って、喜んでいった。

「フフ、ようやくスカイネットが完成する。完成するば……………もう、何も怖くない♪」

ネザーの腰に禍々しいオーラを放つ禍太刀“ディザスター”（厄災）があり、その後ろに純白なスーツと赤い発光部を光らせ、あらゆるところを改造されており、両目の眼の輝きが、無くなったシンディが立っていた。

「さて、我妻よ……………もうすぐ、ここにガイアブリンガーを持つ愚かな大統領とアースセイバーを持つ戦士が来る。彼らにスカイネットの力を見せてやろう。」

「……………yes my road……………」

シンディがネザーに敬礼すると、マナが入っているカプセルが機械の中へ収納された。すると収納した中心点から緑に光る発光ライン



が浮かび上がる。

「我妻よ、君をスカイネットの生体ユニットとして役立ってくれよ♪」

「yes my road.....」

するとシンデイはネザーに抱き付く。

「私の愛する夫..... 偉大なるネザー様だけです.....」

「ハハハハハ!!これで..... 私の復讐が完遂する!私の研究が間違っていない事と、創破主の力を証明できる!!」

するとネザーの後方のシャフトが開き、黒い機体が収納されており、デザインスターと同じ禍太刀を持っており、もう一つ、大刀を背負っていた。そしてマナが入っている機械をその機体の頭部の中に装着され、シンデイが機体の胸にある結晶体に吸収され、全身がメタルへと変わった。

「さて、行こうではないか!我が体の一部と働いてくれよ!ゼロ!」

その時、稲光が内部を照らした。ゼロの色は赤黒く、両目の眼は血に染まって輝いており、裂けた口を開かせ、禍々しき吐息を吐く。

『ハア~~~~』

ネザーはゼロの額にある結晶体..... つまりコックピットに入り、動かす。

「さあ、ゼロよ..... お前とスカイネットに宿る四つの力を..... 奴等に見せつけるのだあああつ!!」

『ガアアアアアアアアアツ!!』

「オロジャーク!!」

「そして回収したドレギアスのディアブロに搭載されていたダイダイトウよ!」

ゼロがオロジャークやダイダイトウを持った直後、オロジャークの刃から赤い触手が伸び、ダイダイトウを包み込む。そしてダイダイトウが中央の刃に沿って、6本の枝状の突起を持ち、禍々しい赤黒い大刀へと変わった。

「行こう..... 愚か者達を血祭りに.....」

「yes my road」

シンデイとゼロ、そして子供の混ぜ合わさったような声を発し、ネ

ザーはグリニア帝国艦隊共に行く。

## afterstory11：目覚めし厄災

陽弥達はシタデルで惑星ヴォルダンに突入後、グリニア帝国艦隊と交戦していた。インフィニットプライムスのロマノフが多数のグリニア帝国装甲巡洋艦を撃沈していく。そしてレオンのヴェルトサーガがアーティファルソードで迫り来るドローンを切り裂く。

「はあああああつ!!!」

レオンは次々と襲い掛かってくるドローンを尻ぎ払い、ハイパービームライフルで遠距離からくるドローンを撃墜していく。さらにジユンのダッシュライザーとコモンのウイングライザー、アラドのアースライザー、リアースのシャークライザーがレオンを援護する。同じ頃、陽弥のシグムディアがデメテルブリンガーを抜刀し、さらに胸から鬼羅丸を取り出し、双方の刃から高出力エネルギーブレードを放出し、奥義を放つ。

「奥義！ウルフファンク!!」

陽弥は二刀流でクロス字を描き、狼が噛み付き攻撃しているかのように艦隊を切り裂き、撃沈していった。

「ルミナスビット!!」

シグムディアの背部のバインダーから剣型のエネルギー弾を射出し、遠隔操作でドローンを撃墜していった。陽弥の戦闘を見ていたレオンは感心していた。

「あれが…………… 陽弥とシグムディアの連携…………… 俺達も負けてられないな、ヴェルトサーガ!」

『応!!』

ヴェルトサーガは返答すると、シャイニングウイングを展開させ、猛スピードでドローンを破壊していく。陽弥もレオンのスピードに感心する。

「やるなあ〜♪」

『主よ、前方にネザーの旗艦を確認!』

陽弥はその方向を見ると、最終防衛ラインにネザーの旗艦が浮遊し

ていた。

「見つけたぞ!!行くぞ、 勇人！」

「はい！」

陽弥と勇人はシグムディアとクーフリンの出力を上げ、突撃した。艦隊の猛攻を回避しながら、ハイパーノバビームライフルでカウンター攻撃をし、敵艦を次々と撃沈。そして、旗艦の艦橋に接近し、シグムディアは二刀流、クーフリンはゲイボルグで旗艦の艦橋を破壊した。

「どうだ?」

陽弥は様子を伺い、旗艦が地面に激突して大爆発を起こした。

「やったか!」

勇人が言うと、爆炎の中に黒い影が見えた。

「っ!」

黒い影は持っていた剣で爆炎を切り払い、姿を現した。

「ッ!!」

「どうしたのですか!」

「まさか…………… あれは?」

陽弥が驚くと、ネザーは答えた。

「その通りですよ、総統…………… この人造生命体は貴方が倒した…………… ジュリオが使っていた”ゼロ”ですよ♪」

陽弥は驚き、ハイパーノバビームライフルをネザーに向ける。するとネザーは手に持っているオロジャークを突き付けた。

「殺れ、カースギガオロチ……………」

オロジャークの刃から禍々しいオーラを発し、段々と形を変え、禍々しい角が長く、鋭く長い牙を持った大蛇へとなり、陽弥に襲い掛かった。カースギガオロチはシグムディアに巻き付き、強靱な筋肉で締め付ける。

「グアッ!何て、パワーだ!!」

「さらに!」

カースギガオロチが口を開けると、長い牙から黒い液体が出てきた。



マガダイトウが10メートル以上伸びると、惑星ヴォルダンの雲が赤く染まった。その直後、赤く染まった雲から赤黒い稲妻が降り注ぎ、マガダイトウに直撃した。

「何っ!？」

レオンは驚くと、降り注ぐ赤黒い稲妻が雷電を放つ赤い大蛇へとなった。

「見よー！これが進化した私の力だ！」

ネザーはマガダイトウを一気に振り下ろす。

「常しえの蛇龍よ、この愚か者達に断罪を下せ！」

ネザーが叫んだ直後、稲妻の蛇龍達がレオン達に襲い掛かった。

「クッ!!」

レオンはビームシールドで防御するが、蛇龍が集中攻撃で襲い掛かり、ビームシールドが碎け散る。

「っ!？」

その直後、レオンの目の前にネザーが居合い体制をしており、レオンは急いでアーティファルソードで防御体制をした。

「馬鹿め……」

ネザーは小声で吐くと同時に、オロジャークを引き抜く。レオンはアーティファルソードで防御体制をした直後、ネザーの居合い切りが炸裂し、アーティファルソードの刃が簡単に折れた。

「っ!？」

折れたアーティファルソードの刃がゆっくりと地面に落ち、金属音を立てる。さらにネザーの居合い切りでコックピットを簡単に切り裂いており、レオンの左腕を断ち切った。

「ぐあああああああああっ!!!」

血しぶきを上げる左腕に、レオンは叫ぶ。

「!!!レオン！／レオンさん！!!!」

レオンは左腕を抑えながら、折れたアーティファルソードを見る。

「馬鹿なっ!？」

ネザーはオロジャークでレオンに突き付けてくる。

「どうだ?レオン・マクライト……此がクアンタ最強にして厄災

を呼ぶ剣…………… そんな古くさい剣よりも強いんだぜ♪それに…………… お前の腕はかなり落ちている……………」

「違う！俺の腕は！」

「だが、見ての通りだ。お前の左腕はもう使えない…………… オロジャークの刀身には無限毒を出している。下手に手術で治療しても戻らない♪」

ネザーは喜んでいると、ジユン、コモン、アラド、リアースがネザーに集中攻撃をする。

「貴様！」

「よくもレオンを!!」

ジユンのダツシユライザーとアラドのアースライザーがロケットワイヤーでネザーを締め付け、身動きを止める。

「喰らえ！」

リアースのシャークライザーがブリティアルアローでゼロの頭部に直撃し、コモンのウイングライザーがプラズマウィップでゼロの頭部に炸裂した。

「どうだ!？」

「…………… で?」

「何っ!？」

よく見ると、シャークライザーのブリティアルアローの矢がゼロのマナの障壁で防御され、ウイングライザーのプラズマウィップを裂けた口で押さえ付けていた。

「今度は…………… こちらの番です♪」

ネザーはプラズマウィップを加え、アラドやジユン、コモンを振り回し始めた。

「ぐあああああああ!!!」

ダツシユライザーとアースライザーのロケットワイヤーがゼロの遠心力に耐えきれず、千切れてしまい、二機は吹き飛ばされた。そしてウイングライザーをさらに振り回し、地面に叩き付けた。その後、ネザーが次元跳躍でリアースに接近した。

「っ!!」

リアースは驚き、プラズマダガーで応戦するが、掴まれた。

「クソッ！」

リアースは何か振りほどこうとした直後、ネザーがシャークライザーをさらに掴み、ゼロの口から強力な酸を持つガスを吐いた。

「あああああああつ!!!」

「!!リアース!!」

コックピット内にガスが蔓延し、リアースの右半分の顔の皮膚が焼けただれていた。リアースは気絶し、ネザーはシャークライザーを放り投げた。すると陽弥が無限毒に侵されながらも、ハイパーノバビームライフルを持ち、ネザーを射つ。

「まだ生きていたのか……………」

ネザーは陽弥に近付き、蹴り上げる。

「ゴヘッ！」

そしてネザーはシグムディアの首をつかむ。

「そうだ…………… 良いものを見せてやろう♪」

ネザーはそう言うと、ゼロの頭部が開き、中からマナが入っている容器を見せる。

「ぎ、貴様あつ!!」

「ハハハ♪そうだよ、マナ・ギデオンをスカイネットにし、ゼロの生体ユニットとして役立つているのだよ！」

「マナを…………… 娘を返せ！」

「それともう一つ♪」

するとゼロの胸の結晶体からメタル化したシンデイが出てきた。

「シンデイ!!？」

「彼女も生体ユニットに使ったんだよ♪本当に素晴らしいよ、我妻は♪」

「ネザー！よくも！よくもおおお！」

勇人の怒りが沸き上がり、ゲイボルグを構え、突撃した。

「はあああああつ!!!」

勇人のゲイボルグがゼロの腕に突き刺した直後、メタル化したシンデイや容器の中に入っているマナが悲鳴を上げる。



「あああああああああつ!!!」  
《っ!!?》

陽弥達は驚くと、ネザーは笑う。

「アヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ!!!無駄だよ!ゼロとシンディとマナは一心同体……………だからゼロからくる痛みは全て、シンディとマナ・ギデオンに来るのだよ!」

「何っ!?!」

「己れ!!ネザーアアアアアツ!!!」

陽弥が怒り、何としてでもマナを助けようとした直後、勇人が言う。

「……………さん」

「ん?」

「……………許さんぞ……………」

「は?」

「……………許さん……………許さんぞ、ネザー!!!」

すると勇人の体中が光輝き、クーフリンから飛び出た。すると勇人の身体が大きくなり、黄金の装飾、純白の皮膚、白銀の模様を持つ光の巨人へと変身した。

《っ!!?》

レオン達は驚き、陽弥は巨人となった勇人を見て、言う。

「やはり、勇人は“荒神”であつたのか……………」

勇人が戦闘体制を取ると自分の姿を見て、驚く。

「っ!?!」

「それがお前の本当の姿だ……………」

ネザーが突然、勇人に語り始める。

「10億年前……………あるクアンタ人が対ギガオロチの為に自らの体を犠牲にし厄災を封印した……………その名も“荒神”。そしてお前の父親があのお父親に逃れ、女の地球人と結ばれ、子を遺した。つまり、お前はクアンタ人と地球人のハーフだ……………まさかクアンタのハーフが荒神だったとは……………これは良い研究材料になる♪」

ネザーはオロジャークを突き付けると、勇人は戦闘体制を取る。

「勇人……………」

陽弥が心配したその時、ネザーが先進した。勇人はネザーのオロジヤークを受け流す化のように回避し、カウンター攻撃をする。勇人の拳がゼロの頬に直撃した直後、

「あれ?」

ネザーの頬に痣が付く。

「何で?」

ネザーが戸惑っている隙に勇人のアツパーカットが炸裂した。ネザーが上空に吹き飛ばされ、勇人は飛び上がり、ゼロの腹に百烈蹴りを喰らわせる。

「ぐああああああああつ!!!」

ネザーが悲鳴上げた直後、最後の蹴りがゼロの顔面に炸裂し、それに通じてネザーの顔面に痣が付き、激痛が走ってきた。

「痛いっ!?!」

ネザーが痛みで、苦しんでいる隙に勇人はヴェルトサーガとシグムディアを担ぐ。アラドも負傷したりアースを担ぎ、軌道上で待機しているシタデルへ撤退した。

メデイカルカプセルに入っている陽弥とレオンとリアース……それを心配する勇人とジユンとコモンとアラドはただそこで指をくわえて見ているだけであった。

「クソッ!あのネザーめ、絶対に許さん!!」

「同感だ……… だけど、レオンや陽弥、リアースもあの通りだ。迂闊に刺激すれば、間違いなく俺達は殺られる………」

「クッ………」

「あもう、良い案があります。」

「「ん?」」

「前に師匠から聞いたんですが……………」古の銀河七聖龍なら、レオンさんのヴェルトサーガやリアースの怪我を治せるかもしれせん……………」

「古の銀河七聖龍？」

ジュン達は首を傾げ、勇人は説明する。陽弥は古の銀河七聖龍『超神星煌龍帝ノヴァ』に選ばれており、他に劍聖龍騎神、天空龍皇、紅蓮帝、呀龍王、靈峯山魔龍帝、狼極龍皇が別の時空にいと、彼らの力ならレオンさんやリアースさん、そして師匠を助けれると……………」

「よし！早いところソイツ等を見つけよう！」

「待て待て、一体どうやって見つけるんだ？こんな広い宇宙で……………」

「あ……………そっか、」

「早くしないと、僕たちの世界や陽弥さんの世界が……………」

三人は考えていると、勇人が言う。

「僕の……………荒神の姿なら、彼らを呼べると思いますが……………」

「……………え？」

勇人は早速、自分の力を発動する。

「荒神化……………」

すると勇人の体が光、光の巨人へ変身した。それを見ていたヴァルキュリアス兵士達やジュン達も驚く。そしてハッチが開き、勇人は空間へ出る。そして呪文を唱え始める。

「数多に散りし古の龍の長達よ、僕の名は荒神……………仲間が怪我を負っている……………どうか、彼らを……………師匠を……………助けて！」

勇人は祈っている直後、六つのワームホールが現れ、六体の龍が現れた。体中に刃を見に纏った”劍聖龍騎神”、六つの白き翼を純白の鳥龍”天空龍皇”、紅蓮の炎を見に纏いし牙獣龍”紅蓮帝”、凶刃な牙と顎、そして体中が岩石で覆われている土龍”呀龍王”、他の龍達より数千倍大きく、巨大な牙を持つ鯨龍”靈峯山魔龍帝”、狼のよう

な外見と金色の体毛を持つ狼龍”狼極龍王”、そして陽弥の体から神々しい純白の鎧、光と闇の羽翼、エメラルド瞳を持つ龍帝”超神星煌龍帝ノヴァ”がシタデルから現れた。すると紅蓮帝が勇人に話し掛ける。

「クアンタに作られし巨人か……………危機に瀕している人間界を守護する護星神は何処に？」

「彼処です……………」

古の銀河七聖龍達は透視光線でシタデルの内部を見る。すると7体の龍達が光だし、3つの光の球体を生み出した。そしてそれをメデイカルカプセルに入っている陽弥とレオン、リアースを包み込んだ。

「本当に治るんか？」

ジュンが問うと、勇人は言う。

「大丈夫…………… 師匠が言っていたんだ。間違いない。」

するとメデイカルカプセルのガラスが我、中から解毒された陽弥と左腕が元の状態へ戻ったレオン、顔が元の状態に戻っているリアースが出てきた。

「はあ…………… はあ…………… はあ…………… はあ……………」

「…………… 元に戻っている……………」

「ケホッ！ケホッ！…………… はあ〜」

三人は互いの状態を確認すると、勇人達が駆け付けける。

「師匠！」

「二レオン！リアース！」

陽弥、レオン、リアースは皆に言う。

「皆、心配かけたな♪」

「本当、心配したぞ！」

「兄貴！無事で良かった♪」

「一体何が？…………… 確か、俺はオロチの無限毒に……………」

「勇人が荒神化して、古の銀河七聖龍達を呼んだんだよ！」

「ええっ!?!」

陽弥は窓の方を見るとノヴァを含む六体の古の銀河七聖龍達がい

た。陽弥は龍達の前で膝を付き頭を下げる。

「感謝する……俺も含め、レオンとリアースを命を助けてくれて……」

「顔を上げなさい……ミッドガンドの護星神……」

天空龍皇が陽弥に言う。

「私達、古の銀河七聖龍は……貴方達に力を与えましょう……そしてレオン……」

「ん？」

「貴方に天・龍装光を……」

さらに、狼極龍王がジュン、劍聖龍騎神がリアース、呀龍王がコモ、靈峯山魔龍帝がアラドに近付いた。

「お前に狼・龍装光を」

「我は劍・龍装光を」

「俺はお前に呀・龍装光を」

「我からは峯・龍装光を」

「二」受け取れ……我等古の銀河七聖龍の力を！そしてクアンタの皇帝より預かりし劍を!!「三」

五体の銀河七聖龍達はレオンの体の中へと入った。するとレオンのスピリットリングが光だし、天空龍皇のように白く、羽が付いた腕輪へと変わり、ジュンの釵が赤とオレンジ、そして黒の色を持つ二刀小太刀。クアンタの皇帝が使っていた『スパーダ』へと変わる。

「俺の釵が!？」

そしてリアースの弓に刃が付き、クアンタの皇帝が使っていた劍『エクスカリバーン』へと変わった。

「僕の弓が!？」

コモもヌンチャクが二刀流の蛇腹劍へと変わり、クアンタの皇帝が使っていた劍『ヤトノカミ』へとなる。

「僕のヌンチャクも!？」

アラドも棒が変わり、両端に劍が付いた劍へとなり、クアンタの皇帝が使っていた劍『トワイライトサーガ』へと変わった。

「これが……俺の棒……嫌、劍か……」

ジウン達のそれぞれの武器が剣へと変わり、大喜びする。

「一気に6人揃ったな♪お前は？」

陽弥が残っている紅蓮帝に問うと、紅蓮帝は言う。

「その必要はない……………既に選んでいる♪」

「え？」

「その者は……………この次元にはいない戦士だ……………」

「この次元にはいない……………あるとすれば、エツジ達の世界か!?」

「そうだ。それからは分かるだろう?」

「え？」

陽弥は考えるとある人物が頭に浮かぶ。

「まさか!？」

「そうだ……………それと急いだ方が良い、ネザーの艦隊が最後の剣『エ  
ンジェリックナイツ』を探している。」

紅蓮帝の体から白く、黄金の装飾が付けられている細剣を見せた。

「これが……………エンジェリックナイツ……………」

「ミッドガンドの護星神よ……………惑星レムリックへ向か  
え……………彼が待っている。」

陽弥は急いで、エツジ達の世界にある惑星レムリックへと向かって  
いった。

## after story 12：エルダーの誇り

陽弥達はエッジ達の世界にある惑星『レムリック』に着陸した。雪山がある森林の中を歩いている陽弥達は、雪景色を楽しんでいた。「へっくしゅっ!! あく、寒い! 何で上着持ってこなかったんだろうか?」

「仕方ない、こう言うのを想定していなかったからなあ。」

アラドが寒がっているジユンを見て言う。レオンは先頭の陽弥に質問してきた。

「陽弥、最後の剣に選ばれし者は誰なんだ? さっきの表情で何か知っているような表情していたから……」

「最後の剣に選ばれし者は…… エルダー人だ……」

「エルダー人?」

「外見はエルフに似ているが、高度な技術力を持っていて、呪紋と言う紋章術を使っている……そしてこれから、エルダーの総司令であるガガン総司令と会い、彼の所在地を探す。彼の名は……」

「フェイズ・シツファア・ベレス」……非常に論理的な思考の持ち主で、非論理的な人には厳しい口調や態度を取ってしまうが、基本的には人懐っこくて純粋な性格なんだ……けど、」

「けど?」

「アイツは……己の正義感の欲に取り込まれ……散った。だけど、紅蓮帝がの言葉でフェイズが生きていると分かった……アイツにもう一度……チャンスを与えようと思う。」

陽弥はエンジェリックナイツを決意する。そして陽弥達はエルダー人の集落があるコロニーへと足を踏み入れた。木の家や釜戸、そして風車小屋が並んでいた。

「何か……長閑すぎるなあ……」

「そりゃ、そうだ……陽弥の話聞いていただろ? エルダー人は技術を封印してしまったと……」

すると集会所の前にエルダーの総司令であるガガン総司令や評

議員達が待つていた。陽弥達はこれまでの事と目的を話した。

「なるほど、紅蓮帝と言う龍がフェイズを選んだんですね……」

「ええ、無理な事と思いますが……俺の娘や勇人の恋人を救出するために、フェイズの捜索に協力してください！」

すると陽弥がガガーン総司令や評議員の前で土下座する。

レオン達は陽弥が土下座をしていることに驚く。

「「「ええっ!!? (神様が土下座している……)」「」」」  
「……………」

評議員達が困った表情になると、ガガーン総司令はある決断をした。

「分かりました…………… 貴殿方々の要求を受け入れましょう。但し、未開惑星保護条約を守っている事を忘れないでください……………」

「…………… すまない、ガガーン総司令……………」

その日の夜、陽弥達はエルダー人と協力し、フェイズを搜索していた。

「なあ、陽弥」

「ん?」

「ネザーが使っていたあの”ゼロ”ってお前のシグムディア土下座で勇人のクーフリンに似ていないか?」

「そうだ…………… ゼロは旧クアンタ人によって造られた人造生命体零号機それに続いて造られたのが壱号機である”シグムディア”、式号機である俺の嫁さんが使っている”シグニュー”、勇人が使っているのはパンドラメール9号機でも言える人造生命体参号機”クーフリン”と10号機でも言えるシンデイの人造生命体四号機”エリン”…………… その五体の人造生命体の中で恐ろしいのが”ゼロ”なんだ。二年前のソロモニア戦記で騒がせた生命体だから



なあ……………」

「どんぐらい強いんだ、ソイツ？」

「……………俺も含め…………… 8人の護星神でも苦戦する程だ……………  
何せ、超収斂時空砲でも全く通じない、あれこそ…………… 悪魔と呼べる  
生命体だ……………」

「悪魔ねえ…………… それと、勇人が荒神だと知っていたのか？」

「信じたくはなかったけど、あの子は間違いなく”荒神”だ……………  
無理に戦い続けたら……………」

「戦い続けたら？」

「…………… 荒神化には持てる時間があるんだ。勇人はまだ17だ  
し、まだ荒神化の耐性に特化していないだ。荒神化を持てる時間は1  
0分…………… 8分30秒経過すると、胸のジオ…………… つまり”カラ  
ータイマー”が赤く点滅するんだ…………… それが消えると勇人  
は…………… ”人ではなくなる”……………」

「え!? どういう事なんだ？」

「すまんが、ここから先は自分の目で見るんだ…………… そこからは本  
当に無理なんだ……………」

「……………」  
レオンが後ろにいる勇人を心配そうに見ると、草むらから音がし  
た。

「っ!？」

「どうした？」

陽弥が問うと、レオンは言う。

「今、微かに音が！」

「フェイズか!？」

「見てくる！」

勇人が先頭に出る。

「勇人！」

「俺が行く！陽弥は皆と居てくれ。」

「分かった！」

レオンが勇人の後を追う。森林の中を走る勇人は影を追う。そし

て、

「っ!!」

勇人が森林を抜けた先は、月の光で照らされている花畑で、目の前に黒いマントで顔を覆い隠している人物がおり、腰から細剣を抜刀し、勇人に襲い掛かってきた。

「っ!!?」

勇人は急いでライオットシールドを取り出し、黒い人物のレイピアの突き攻撃を防御した。華麗な戦法で攻める黒い人物は勇人を圧倒する。

「クッ!」

黒い人物がライオットシールドを貫き、勇人から引き剥がした。

「あっ!!」

勇人がライオットシールドを取りに行こうとしたが、黒い人物は勇人の顔にレイピアを突きつける。

「……………」

勇人は怯え、絶対絶命になった直後、

「突風斬!!」

レオンがアースセイバーを抜刀し、奥義を放つ。烈風が黒い人物に向かっていくが、黒い人物はレオンの突風斬を回避した。

「大丈夫か!?!」

「レオンさん!」

その直後、黒い人物がレオンの背に向けて、レイピアを突き刺そうとしていた。

「クッ!」

レオンはアースセイバーでレイピアでの攻撃を防御する。

「ゴイツ…………… かなりの剣術を使っている!」

両者は一旦離れ、攻撃体制取る。

「……………」

そして二人は剣を突き付け、突撃すると、森林から光の右腕とブラム力が宿る闇の左腕を使い、それぞれの爪で二人の剣を受け止める。

「そこまでだ!!」

「っ!!」

「師匠!」

二人は互いの剣を鞘に収めると、陽弥が黒い人物の方を向く。

「久しぶりだな…………… フェイズ……………」

すると、黒い人物がマントで顔を覆い隠していた部分外し、顔を露にした。緑の髪で微かだが顔に赤黒い痣が残っているフェイズであった。

「陽弥さん……………」

「エツジから聞いたぞ…………… お前、あの子を助けられなかったんだな……………」

「……………」

「ブラム……………」

陽弥の体から黒き民のマントを着ているブラムが現れる。

「ブラムさん…………… それ……………」

「これか?あの部屋で見つけたんだ…………… 彼らの分も生きていこうと……………」

「……………」

「…………… やっぱり、まだ思っているのか?あの娘……………」アミナ  
”の事を……………」

「え?」

「…………… ようやっと知れたんだ…………… あの娘の名前を……………」

「…………… アミナ…………… あの娘の……………」

「辛いのは分かる…………… もう、誰も傷付けたくないんだろ?」  
「……………」

「分かるよ…………… 世界を変えたいくらい、苦痛のない世界を創ろう  
としてるのは…………… だけど、助けてくれ……………」

陽弥はフェイズにこれまでの事を話すと、フェイズは驚いた。

「そんな事が起こっているのですか!」

「ああ、娘が…………… マナが死ねば…………… 俺はこの世から消えること  
になる。だから頼む……………」

「……………出来ません。」

フェイスが突然、陽弥の要求を否定した。

「……………もう、誰かを傷付けたくありません……………それに僕は……………この通り、グリゴリの影響で毒を浴びているんです……………僕は本当は弱いんですよ……………」

「……………フェイス」

「？」

ドゴオツ!!

「ツ!!」

「ええっ!!」

突然、陽弥がフェイスの頬を殴った。

「何時までマイナス思考になっているんだ!!!ど阿呆っ!!」

「あの子や他の同胞を助けられなかった?それで因果を変えようとしていた!?甘ったれてんじゃねえぞ、ゴラアツ!!」

「……………何が、分かるんですか、」

「……………」

「何が分かるんですか!あなたに!!僕は必死に同胞の為に戦いました!だけどっ!」

「それなら守れよ!必死に!己の恐怖から背けるな!エルダーは……………そんな事で死ぬような種族ではねえ!!」

陽弥の言葉にフェイスは驚くと、通信が入ってきた。

「どうした?」

『兄貴!ネザーの軍勢が来やがった!』

「分かった……………直ぐ行く。それまで持ちこたえてくれ!」

『分かったぜ!!』

アレンが通信を切ると、レオンと勇人に報告する。

「レオン!勇人!急いでジュン達と合流するぞ!奴が来やがった!」

「分かった!」

レオンは急いでジュン達の所へ戻る。陽弥がフェイスに言う。

「誰かを守りたい……………だつたら新しい仲間やエルダーを助け

ろ……………」

陽弥はそう言うとエンジニアリックナイツをフェイスに渡した。

「これは？」

「八人のクアンタの皇帝が遺した剣だ…………… 戦いたいなら戦い抜け、守りたいなら守り抜け…………… エルダーの誇りを汚すな……………」

陽弥は急いでレオンの後を追うと、勇人が言う。

「師匠はフェイスさんの事を心配しているのです…………… 今のフェイスは臆病者扱いとしていますが、心のそこではあなたの事を必要としているのです……………」

勇人も急いで陽弥達の所へ戻る。フェイスはエンジニアリックナイツを見つめる。

「……………」

## after story 13：復活のD

惑星レムリック軌道上で陽弥達は侵攻してくるグリニア帝国艦隊と交戦し、エルダー人とレムリック人を死守していた。レオンのヴェルトサーガの修理及び改造され、『ヴェルトサーガ イグナイテッド』へとなり、高機動ブースターやコックピットが変わり、さらに頭部ヴァリアヴル・バルカンが追加されていた。そして折れたアーティフルソードの変わりに長短2本の刀『高周波プラズマブレード』でドローンを切り裂いた！

「やっぱり、アーティフルソードと違って重いなあ………っ!!」  
レオンは後方から来ていたドローンの攻撃をビームシールドで防御し、ハイパービームライフルで応戦する。

「ジュン達のライザーメールも空間戦闘用に改造されていた。  
「スゲエゼー俺のダッシュユライザー!!ふお~~~~っ!!」

「ジュンの新たなダッシュユライザー」ダッシュユライザー Xウイング」がX状のレーザーブレードウイングを展開させ、頭部ヴァリアヴル・プラスターを乱射し、逃げているドローンを撃墜していく。  
「やつほ~~~~っ!!」

ジュンが興奮していると、コモンが言う。

「ちよつと、ジュン！興奮してしないで手伝ってくれよ~~~~!」

コモンもウイングライザーの改造機『ウイングライザー ジャステイスセイバー』がドローンを回避しながら後方に回り込み、翼に付けられているガトリングキャノンで追い撃ちを仕掛けた。アラドやリアースの方もそれぞれの連携でドローンを撃墜していく。アラドの『アースライザー ジュラシッカー』がビーストモードへ変形し、背部に追加された超兵器『スーパーカルネージ』を乱射する。リアースの『シャークライザー ハンターズ』も駆逐形態へ変形し、腰部のアンカーショットを撃ち込み、ドローンに突き刺さる。

「良し〜!」

ドローンがシャークライザーを引っ張り、リアースはブリティアールアローから両前腕部に装着された新兵器『ボルテッカー』の光の弓絃



「総統！シタデル第4ブロックに複数のデストロイアが侵入してきました！」

「何っ!!?ネザー、貴様！」

「アヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ♪引っ掛かったなあ！通信で少し時間を稼いでいたんだよ！それにあんたはやっぱり、”御人好し”なんだよ！」

ネザーはそう言うのと、通信を切る。そしてネザーが立ち上がり、クローン兵達に言う。

「ゼロを出せ！私自らシタデルを潰す！」

ネザーはニヤリと笑い、格納庫へと向かった。

一方、シタデルの艦橋で陽弥は悔やんでいた。

「クソツ、やられた！まさかネザーの奴…… デストロイアを管理していたなんて……」

「総統！デストロイアと交戦しているとの報告が来ています！」

「……… 俺も行く、ブラム！」

「分かっている、指揮は任せろ！」

ブラムが変わり、陽弥はガイアブリンガーとレヴナントを手に侵入してくるデストロイアの排除へ向かった。

第4ブロック貯蔵庫ではデストロイアとヴァルキュリアス兵士達が交戦していた。パラメイルやセイクリッドメイルでデストロイアを抑え込むが他のデストロイアに襲われる者もあり、グレネードランチャーで応戦する者もいるが、返り討ちにされた。さらにデストロイアが侵入している破損した大穴から、グリニア帝国輸送艦が突進し、ハッチが開き、クローン兵と相手になる。陽弥がそこへ到着し、デストロイアを睨んだ。そして瓦礫の影に身を潜めているアヌビス人の兵士に状況を把握する。

「状況はどうなっている？」



「奴等は第4ブロックの外壁に穴を空け、そこから侵入しています！  
ですが修理班や破壊工作大部隊と護衛を向かわせましたが、敵の輸送  
艦隊の対空砲台に殺られています！」

陽弥は輸送艦の16基の対空砲台を見る。

「あれか…………… 良し！」

陽弥が瓦礫から飛び出し、輸送艦へ突撃していく。3基の対空砲台  
が此方へ向かってくる陽弥に気付き、迎撃してきた。陽弥は砲台の攻  
撃を回避しながらレヴナントを乱射する。しかしレヴナントのよう  
なヘビーマシガン威力では、対空砲台を破壊することはできな  
かった。陽弥は瓦礫の中に隠れ、舌打ちした。

「チツ！輸送艦にも装甲を付けられているのか、厄介だなあ」

陽弥は考えていると、側に破壊工作兵士の死体が転がっており、背  
にブーメランボムを背負っていた。陽弥は砲台とブーメランボムを  
見て、閃く。

「そうだ！」

陽弥はそう言うと、ブーメランボムを持って砲台へ突撃していっ  
た。砲台は陽弥が来たことに射ち始めた。華麗なアクロバティク  
で回避する陽弥はブーメランボムを紐に付け、回し始めた。

「オラアツ、行けっ!!」

ブーメランボムにつけた紐が真っ先に砲台に絡み付き、爆発した。  
そして陽弥は光の爪を展開し、爆発で装甲がボロボロになっている砲  
台を抉じ開け、輸送艦の中へと入り込み、内部のクローン兵を薙ぎ倒  
していき、砲台を奪い、デストロイアに向ける。

「喰らえ！」

砲口からビームが発射され、デストロイアに直撃する。デストロイ  
ア達も砲台の中にいる陽弥を発見し、攻撃体制へと入った。

『目標確認…………… 消去する！』

デストロイアのアームからビームが放たれ、砲台が爆散した。する  
と中から光の腕とさらに至る所が龍化している陽弥が飛び出し、光の  
爪でデストロイア二機を切り裂いた。

「っ！」

陽弥を殺そうと、グリニア帝国のクローン兵が銃を構えるが、陽弥はバイオティクスを使い、広範囲にいるクローン兵を宙に浮かせた。そしてレヴナントを取りだし、宙に浮いているクローン兵に向けて発砲した。するとデストロイアの増援が来て、陽弥は囲まれた。

「チッー！」

デストロイアがビームガンを発砲しようとした直後、デストロイアの後方からエルダーの小型艇である”ソル”がシタデルに入り込み、ホバリングで二問のフェイズキャノンを使い、デストロイアを破壊していく。

「あの小型艇……… やっぱり！」

陽弥はソルに乗っているフェイズに気付く。

「僕だつて！……… 僕だつて！今度こそ、守って見せる!!」

フェイズは決意し、デストロイアを殲滅した。そして急いで修理班が来て、空いた大穴を塞ぎ始めた。フェイズはソルから降り、陽弥と出くわす。

「決心したようだな♪」

「はい、僕も陽弥さんと共に行かせて下さい。もう一度、守りたいのです………」

「分かった♪」

陽弥が笑顔でフェイズにヴァルクリアスの軍服を渡す。すると軍服が粒子になり、フェイズの服を変えてくれた。

「行こう、レオン達の所へ！」

陽弥はマスクを被り、エルダー製のチャージ式プラズマキャノンを持ち、ソルに乗り込む。

「はいー！」

フェイズもソルに乗り込み、レオン達がいる宙域へと向かっていった。

その頃、レオン達は迫り来るデストロイア達に苦戦していた。

「コイツら、ハイパービームライフルが効いていない!」

レオンがハイパービームライフルで応戦するが、デストロイアの合金がヴェルトサーガのハイパービームライフルを拡散、無効化されていた。レオンは何とか高周波プラズマブレードで受け流しながら回避するが、時間の問題でもあった。

「クソッ!アーティファルソードがあれば……!」

するとレオンに通信が入る。

「レオンさん!新しいアーティファルソードが完成しました!今から、コンテナにロケットブースターを付けてそちらへ送ります!」

シタデルのカタパルトからブースターが付けられた縦長いコンテナが射出された。レオンは高周波プラズマブレードで時間を稼ぐ。そして、

バリイインツ!!

とうとう、高周波プラズマブレードが折れてしまい、絶対絶命になった直後、レオンの方にコンテナが向かって来た。

「あれか!」

そしてコンテナが開き、中から銃剣と化した改装されたアーティファルソード。その名も”アーティファルソードⅡ”へと変わり、レオンはヴェルトサーガに言う。

「ヴェルトサーガ!」

「応!」

ヴェルトサーガの装甲の色が青へ変色し、次元跳躍した。そしてレオンはアーティファルソードⅡを掴み取る。

「行くぞ、デストロイア!!」

レオンはアーティファルソードⅡをライフルモードに切り替え、ハイパーノバビームを放つ。ハイパーノバビームの高周波荷電粒子がデストロイアの装甲を溶かし、さらに掠れただけで、装甲巡洋艦を撃沈した。

「凄……!」

そしてアーティファルソードⅡをソードモードに切り替えた。アーティファルソードⅡの金色の刃から高周波エネルギーブレードを放出し、デストロイアを両断していく。それと同時に他のデストロイア達がビームガンで応戦してきた。レオンはアーティファルソードⅡをライフルモードに切り替え、さらにハイパービームライフルでの二丁で向かってくるデストロイア達に目掛けて、ハイパービームとハイパーノバビームを乱射する。

「早速、試して見るか！」

レオンはそう言うと、ヴェルトサーガに言う。

「ヴェルトサーガ、陽弥と同じ…… 龍装光を使う！」

レオンは心の中で念じ、唱えた。

「俺も…… 皆を守る力を…… 天空龍皇よ、俺に力を！」

「天・龍装光!!」

レオンが叫ぶと同時にスピリットリングが強く輝き、ヴェルトサーガが光だした。

「何だ?」

ネザーが強く光る物を見る。そして光が消え、現れたのは美しい純白の装飾、六つの翼であるシャイニングウイングが展開し光輪を描き、背部に連装型大出力エネルギービーム砲『スーパーオメガブラスタークャノン』搭載されたヴェルトサーガがいた。

「決めるぞーヴェルトサーガ！」

「応ー」

すると背面のスーパーオメガブラスタークャノンが肩部に肩部のセンサー内蔵マウントと連結し、さらに肩部のオメガブラスターが展開され、発射形態へと変化する。背部のシャイニングウイングがレムリツクを太陽光でチャージする。そしてレオンはデストロイアに向けて叫んだ。

「くたばれえええっ!!!」

オメガブラスターとスーパーオメガブラスタークャノンから大出力の竜巻状のビームが発射し、デストロイアを含め、ネザーの艦隊が原子分解されていく。ネザーは間一髪所で回避し、慌てる。

「何だ、あの兵器は!？」

その時、ネザーの所にクーフリンがゲイボルグを突き付け、突撃して来た。

「ネザーアアアアッ!!」

ネザーはオロジャーグとマガダイトウで防御する。するとコックピットが開き、勇人が出てきた。

「アイツ……………まさか!？」

「変身!」

勇人の体が光だし、光の巨人へとなり、ゼロの頬を殴る。

「グッ!!」

「痛いだろ!僕から受けるダメージは!!」

「ほざけええええ!!」

ネザーがゼロの四つの目でフラッシュバンを使い、眩い閃光で勇人を目くらませた。

「うっ!!」

閃光が終わった直後、ネザーは勇人を蹴り付け、小惑星に衝突した。

「憎いか!?私か!……………憎いだろぅなぁ♪」

「クッ!」

「貴様には、俺を殺せない……………何故なら、生体ユニットとなっている我妻とスカイネットがあるからなぁ♪」

「ネザーアアッ!!」

すると勇人のジオが赤く点滅する。

「え!?まだ10分も経っていないのに!？」

「簡単な事だ……………フラッシュバンを使用したときに、オロジャーグから出るオーラで、お前の活動限界を7分早めたんだ♪」

ネザーは笑い、マガダイトウから赤黒い雷撃を放った。

「うああああああっ!!」

勇人は倒れ、起き上がろうとするとネザーが踏みつける。

「グッ!!」

ジオの点滅がさらに加速し、勇人の姿が段々と変わっていく。頭から角が生え始め、鋭い爪と牙、野獣のような瞳になっていく。

「クツ!...: グルルルルルツ!!」

「良いね! 良いねえ! その眼差し♪」

「ガルルルルツ!!」

勇人が段々と獣に変わっていく姿に陽弥達は驚く。

「あれは!?!」

「マズイ! フェイズ、頼む!」

「はい!」

フェイズが急いでソルの出力を上げ、勇人の所へ向かうと、ネザーがオロジャークからギガオロチを呼び出し、此方に向かってくるソルに襲い掛かった。フェイズはソルを旋回させ、ギガオロチの攻撃を回避した。

「さあ! 荒神よ!...: その勇ましき獣の目で、真の姿を現すが良い♪」

「グツ!!...: ガアッ!...: ガアアアアアアアッ!!! (嫌だ!...: 止めてくれ!...: 止めてくれええええつ!!)」

勇人の体から禍々しき闇が溢れ、勇人を包み込んだ。そして勇人の意識が封印され、光の巨人から禍々しきワイバーンレックスへと変わった。漆黒に染まった外殻、赤黒い縞模様、背中には鋭く尖った棘が並んでおり、目は血で赤く染まっており、血の涙が流れていた。

「あれは!?! 一体何なんだ!?!」

ジュンが問うと、陽弥は答える。

「”暴龍...: その名の通り” 血肉を求めし喰らう、荒ぶる魔神龍 だ」

「ガアアアアアアッ!!」

勇人は大咆哮を上げた直後、オロジャークとデイザスターに異変が起こった。

「ん?」

ネザーがオロジャークとデイザスターを見た直後、デイザスターから禍々しく血に染まった蛇達が出てきて、ゼロやネザーに取り付く。

「止める! 止める! 何なんだこれは!?!」

蛇がネザーを締め付け、蛇の大群の中から角が生えた大蛇が現れ、

ネザーの頭ごと飲み込み始めた。

「助けてくれええええっ!!」

ネザーは断末魔の悲鳴を上げながら、大蛇に喰われた。そして胃袋の中で骨が砕かれる音が響く。

バキバキッ!!ビキビキッ!!ベキベキッ!!

《ツ!!!?》

陽弥達は骨が砕かれる音を聞き、驚く。

「蛇剣が……ネザーを喰った!」

するとマガダイトウが黒い大蛇へと変わり、ゼロの入れ墨になる。すると入れ墨が喋りだした。

「我、ここに復活を果たせん!」

「その声は!!」

レオンがその声に聞き覚えがあった。さらにジュンやコモン、アラド、リアースも驚く。

「「まさか!」」

「久し振りだなあ、レオン・マクライト……」

「「ドレギアスツ!!」」

「ハハハハハ!!これがギガオロチの力、怨念か!体中に数多の世界に存在し、敗北したエンブリヲ達や全ての怨念が伝わる……」

ドレギアスはゼロを動かす。

「このゼロと言う生命体も悪くない♪」

ドレギアスはゼロの体を馴染ませていると、暴龍化した勇人がドレギアスに襲い掛かった。

「?」

ドレギアスはゼロの力でマナの大障壁を展開した。しかし、暴龍化した勇人の力が強く、マナの大障壁が崩れた。

「何?」

ドレギアスは驚き、勇人がゼロに噛みついてきた。

「血肉を求めし龍か……なら、」

ドレギアスはそう言うと、オロジャーグを取り出す。

「常しえの蛇龍よ、この荒神を眠らせよ……」

するとオロジヤークからギガオロチが現れ、口から強力な催眠ガスを吐く。勇人はギガオロチの催眠ガスを浴びてしまい、睡魔が襲ってきて、倒れた。

「この小僧は貫っていくぞ……………」

「待てえっ!!」

陽弥がエルダー製のプラズマキャノンを構える。ドレギアスは勇人を抱え、何処かへ連れ去ろうとした。そして陽弥がプラズマキャノンでドレギアスをロックオンする。

「墜ちろ!!」

陽弥はプラズマキャノンのトリガーを引き、プラズマキャノンで追撃すると、ドレギアスはゼロの口から光の玉を吐く。するとプラズマ弾が光の玉に直撃し爆発した。

「フレアか!!?」

爆煙が晴れると、ドレギアスが指から黒い球体を出現させた。

「お前達に良い狭間がある……………そこへ吹き飛ばせ！」

ドレギアスが黒い球体をシタデルへ投げつけた。するとシタデルを含む陽弥達が黒い球体に呑み込まれ、宙域から消えた。

「飛んだ先は……………天国か、地獄か……………それとも……………」

ドレギアスはそう言うのと、勇人を連れて、何処かへ消えた。

『クロスアンジュ 銀河の守護者 after story』Lost

Souls” (囚われし魂)』chapter02『revenge』

END



a f t e r s t o r y 1 4 : ドレギアスの野望

勇人は夢を見ていた。

「あれ?.....ここは?」

すると赤子の泣き声が聞こえてきた。

「何だ?」

勇人がその泣き声が聞こえてくる場所へ向かうと、扉があった。

「この扉.....確か、」

勇人は扉をそっと開けると、中にいたのは勇人の父親と母親、そして生まれたばかりの勇人であった。

「あなた、この子の名前.....決めたの?」

「そうだなあ.....」

勇人の父親は息子の名前を考える。

「そうだ!.....勇人はどうか? 勇気ある者.....そして自分は強いと.....」

「勇人.....良いですね♪」

「だけど、勇人と名付けたから、真名もあるんだ.....」

「真名?」

「そう、勇人だから.....」

すると光が強くなり、勇人は目を閉じてしまう。そして勇人は何処か知らない部屋で起きた。

「ハア.....ハア.....ハア.....ハア.....ここは?」

勇人が辺りを見渡す。王室のような部屋で、テーブルに勇人が普段着ていた私服が置かれていた。勇人は私服に着替えると、光指す窓を見る。そして窓の外を見ると勇人は驚く。

「.....何で!」

そこは何と、グリンニア帝国によって破壊された筈の勇人とシンディが住んでいた地球であった。

「何で、地球が!」

すると後ろの方で花瓶が割れる音がした。勇人は後ろを振り向く

と、そこにいたのは……………

「……………え!?!」

何と、ゼロの生体ユニットにされた筈のシンデイがいたのであった。

「シンデイ……………?」

「勇人!!」

シンデイは嬉し泣きしながら勇人に抱き付いてきた。

「良かったです!良かったです!」

「シンデイ……………」

勇人はシンデイの頭を優しく撫でる。その後、シンデイは今までの事を話した。ネザーに拐われた後、目が覚めたら、部屋のベッドの上に寝ており、側に teacher の娘であるマナもいた。そして窓を見るとそこが間違いなくあの地球だと分かり、廊下を歩いていると、ドレギアスと言う人物が二人やマナをゼロから解放し、ネザーを始末し、そして住んでいた地球と皆を生き返らせたと仰っていたと……………

「それで、そのドレギアスは?」

「多分、書斎室にいます……………後、ワタシの daddy と mommy が生き返っていたのです!」

「ええっ!?!」

シンデイはマナや勇人を連れて、シンデイのお父さんとお母さんに会った。

「久し振りだね、勇人君……………♪元気にしていたかな?」

「ええ……………お久し振りです。」

「まさかシンデイの boyfriend がユウト君だなんて、ワタシは心から幸せよ♪」

「あ……………ありがとうございます。」

「それと、この子は?」

「あ、この子はマナ……………僕の師匠の娘さんで、預かるよう頼まれているのです♪」

「ほお、勇人君の師匠の娘さん。いやあ、まさか勇人君に師匠と呼べる

人がいるなんて……………」

「いえいえ、呼べる処かそうでもありませんから、アハハハハ♪」  
「ま、とにかくここで立ち話は何だか、邸に入りなさい♪お茶を入れておくから♪」

勇人はシンデイの家にお邪魔し、紅茶を飲みながら、これまでの事を話す。異星人とのファースト・コンタクトと師匠であるミッドガンド（人間界）の護星神 陽弥・ギデオンの事、色んな科学力も……………（因みに自分がクアンタ人と地球人のハーフクアンタで荒神だつて言うことは秘密にしている。）全て話した。二人はにわかには信じられない表情をしていたが、シンデイの父親であるダニエル・マリ―シエと母親のエイダ・マリ―シエは勇人の言葉を信じる。

「異星人とのファーストコンタクトかあ…………… ワタシも会つてお礼がしたい、勇人君の師匠さんに…………… 勇人君とシンデイがお世話になったと……………」

「ええ♪」

「ところでダニエルさん…………… どうやって生き返つてたのですか？」

「…………… ワタシも分からない、シンデイを守ろうと二人で庇つたところまでは覚えていて。気が付いたら椅子に座っていたんだ……………」

「ワタシはベッドに寝ていたわ…………… 後、御近所さん方々も……………」

「…………… ドレギアスが皆や地球を元に戻した…………… そんな事が出来るのか？…………… （それに、『ドレギアス』…………… 何処かで聞いたことがある名前だ……………） 他には？」

「後、根岸 英二 御曹司が逮捕されたのよ…………… 民間人をシエルトー内に入らせなかったことで、行政府から逮捕されるようになったのよ……………」

「なるほど…………… 僕が眠っている間にそんな事が……………」

「それで、世界を束ねる代表者はワタシ達を生き返らせたドレギアスになったの……………」

「……………（やっぱり、聞いたことがある名前だ。でも、何でだろう……………この感じ……………ドレギアスの名を聞くだけで、胸騒ぎがする。それに……………」

勇人は自分の手を見る。

「（こんなに震えがくるなんて、起こる前の虐め以上かもしれない……………！）」

勇人は考えていると、シンディやダニエル、エイダは勇人を心配する。

翌日、勇人とシンディは普通に学校へ登校した。クラスの皆も同じことを言っており、根岸 洋介はあの襲撃で責められ、退学になった……………恐らく、権力者が居なくなったことを良いことに……………マナはマリーシェ邸に預けている。放課後、勇人とシンディは一緒に帰っていた。

「本当に何も覚えていないの？」

「yes♪」

「うくん、僕もなんだ……………ネザーが僕に襲い掛かって、そこから意識を失ったんだ。気が付いたら、ドレギアスの邸にいた……………そうだ！師匠やレオンさん達……………大丈夫かなあ……………」

「大丈夫ですよ！teacherが負ける筈がありません♪」

「そうだな、師匠は護星神だから……………」

勇人はそう考えていると、前方からボロボロのカーディガンを着た男性が歩いてきた。

「ん？」

その時、男性はポケットからナイフを取りだし、勇人に突き付けた。シンディは慌てていたが、勇人はそんな脅しに恐怖しなかった。陽弥直伝の格闘技で回避し、さらにカウンター攻撃をする。最後に陽弥から教わった最強奥義『粒子発勁』を喰らわせた。男性は数

メートル吹き飛ばされ、転げる。勇人は落ちていたナイフを折り、そこらに捨てると、男性の胸ぐらを掴み上げ、問う。

「何で僕に襲ってきた？」

「クッ！」

すると男性はカーデイガンのフードを外し、素顔を現した。その男性の素顔に勇人は驚く。

「洋介!？」

「ケッ！」

「何でお前が!？」

「何でって? フンツ! 此方は家も全て無くなった! そうなったのはお前のせいだ! お前が居なくなればいつもの生活にもどっ!!」

勇人は洋介の下らない復讐に呆れ、洋介の顔面を殴り、一発で洋介を気絶した。

「ごめん…… 洋介……」

陽弥は気絶している洋介に謝り、シンデイの手を繋いで走る。それぞれの家に帰った二人はスマホで通信していた。

「大丈夫？」

「…… 大丈夫じゃないと思う……」

「そう……」

「それに、洋介の奴は殴って正解だったかもしれない。いつもアイツにバイトで稼いだお金を取られていたから、あの一発で十分だったかも……」

「そうだね、」

勇人がホツとしていると、何処からか声が聞こえてきた。

「……」

「？」

「ウト……」

「誰？」

「ユウト……」

「その声は!？」

「勇人……」

「師匠!?!」

『良かった……無事に暴龍化が解けたんだな……』

「師匠!何処に!?!」

『分からない……何処か暗い、未知の領域の中に閉じ込められている……フェイズ、皆も無事だ……だが、レオンだけが……』

「……………」

「して、お前は一体何処に?」

「師匠、僕がいる星は僕やシンデイが住んでいた地球なのです!」

『何だと!?!』

「何でも、ドレギアスって言う人物が皆を生き返らせて、地球を元に戻したのです……」

『ドレギアスだと!?!』

「え?師匠……ドレギアスを知っているのですか?」

『まずいぞ、ソイツは!ソイツは人間じゃない!レオン達の世界のエンブリフが生み出してしまった”異次元生命体”だ!そしてレオンのいた地球を壊し、偽りの地球と真実の地球を時空融合で”ザ・コア”で全てを滅ぼそうとしている!』

「ええっ!?!」

『何て事だ……奴は一体、何を企んでいるんだ?クソツ!早くマナを助けないと……』

「あく、その事なら……大丈夫だと思います……」

『え?』

「勇人は陽弥にマナの無事を知らせる。」

「……………事なのです。」

『ハア、良かった……無事じゃなかったら母さんに殺されると思ったよ……だが、注意しろ。ドレギアスは……絶対に信用してはならない……多分、何処かにゼロを隠している……』

「分かりました……」

「勇人はそう言うと、陽弥の声が聞こえなくなった。」

「ドレギアス……一体、何を企んでいるんだ?」

その頃、とある研究所では…… 格納庫に収容されているゼロが改造されていた。そしてそこにドレギアスがいた……

「もうすぐだ…… もうすぐ我の復讐が終わりを遂げる…… そのうだろ？レオン・マクライト…… 嫌、牧田 玲央……」

ドレギアスの目の前に電磁ワイヤーで締め付けられたレオンがいた……

「ハア…… ハア…… ハア…… ハア…… ハア…… ドレギアス……！」

「憎いだろ？我が……」

「黙れ！どうやって生き延びた!？」

「…… 簡単な事だ…… あの時、お前の奥義に敗れた我は、一部をダイダイトウに移した…… そしてそこにネザーがやって来て、ダイダイトウを回収した…… それだけの事だ」

「クソツ…… あの時か、」

「我の計画は勿論…… 分かっているだろ？」

「当たり前だ…… 偽りの地球と真実の地球を時空融合で破壊し、アンジュとサラの永遠語りでザ・コアを出現させて、完全体になるつもりだろ!!」

「その通りだ…… だが、ザ・コアと並ぶ存在を…… 見つけた……」

「何っ!!？」

「マナ・ギデオン…… あの小さな娘に宿るインフィニティソウル、クアンタニウムハート、グリゴリ、アーククリスタル…… 我はネザーを取り込んだ後、マナ・ギデオンから四つの力を奪い取った。そしてその四つとザ・コアを融合させると究極の力『永遠の命』が生み出される…… それを手に入れば、我は完全体以上の究極体へ覚醒

し、不死身の生命体……… 嫌！神を超越した破邪神へと神化する  
！」

するとドレギアスの背面から白く輝く光輪を放つ。

「っ!!」

レオンはドレギアスの神々しさに驚く。



## a f t e r s t o r y 1 5 : 思 い

一方、陽弥の世界では、エミリアを含むギデオン一家達は消息不明となったシタデルを大搜索していた。

「見つかったか!？」

シンがNーアキュラでアレクサンドルス及艦隊と通信し、問い掛けるが、否定されていた。

「そうか……………」

シンは落ち込み、補給しにグランドスフィアに戻ると、ヒルダやルナが待っていた。

「シン、どうだった?」

「駄目だ………… 何の痕跡もない」

「シタデルが一瞬で消えちゃうなんて………… ひよつとしたらお兄ちゃんは……………」

「んなわけねえだろ!」

「ごめん、お母さん……………」

「…………… 考えても仕方がない。銀河連邦やアジマス連邦も協力して搜索する……………」

そしてシンは補給を終えたNーアキュラに乗り込み、陽弥の搜索を続けた。

「こんなとき………… 陽弥の指輪にビーコンを取り付けていたら…………… どうすれば……………」

シンは一人で悩み、頭を抱える。するとあることに閃く。

「閃いた!」

シンが何かを思い付き、銀河連邦軍に通信をする。そして銀河連邦司令官であるカストール・デーン司令官にあることを話した。

「アルキメデスの残骸を調べるだど!」

「ええ、連合軍の新型強襲艦であったアルキメデスにまだ、試していません。それがオーバーロードすれば、シタデルの所在が分かると判明いたしました……………」

「だが、アルキメデスにはフェイゾンで生まれた生命体がうようよといるのだぞ！前のガフラー星系にある銀河連邦戦艦ヴアルハラも……………まさか、」

「ええ、そのままかです……………」

そしてシンは通信を切り、空間を漂うアルキメデスの残骸に到着した。

「この強襲艦を見るのは……………16年前か……………」

シンはARSスーツを着用し、空間から出る。そしてアルキメデスの非常口から侵入し、粒子ライフルを構えながら通路を歩いていく。この時、シンはNーアキュラから誰かが出てくるのも気付いていなかった。

第3ブロックを抜けると、そこは機関室であった。目的は機関室のメインシステムを再起動させ、オーロラユニットを回収しなければならぬ。

「え〜つと、機関室のメインシステム、メインシステム……………」

シンが迷っていると、後方から別の人が解説した。

「4Fにある動力炉」

「うわあああああつ!!???!」

突然の声にシンは悲鳴を上げる。そして後ろを振り向くと、そこにいたのは赤色のアーマーと酸素マスクを身に付けているヒルダであった。

「何でここにヒルダが!?!」

「あんた一人じゃ、何も出来ないだろう?」

「まあ、確かに……………」

シンとヒルダは4Fの動力炉へと繋がる階段を下りていく。するとヒルダがあることを語ってきた。

「ねえ、覚えてる?」

「何が?」

「私が……………シンをデートに誘った事を……………」

「ああ……………覚えてるよ、」

時が遡ること21年前…… 雪が降るクリスマスで、午後の5時が過ぎており、ネイビー色のコートを着ているシンがアウラの塔で誰かを待っていた。

「ハア〜寒い〜」

ヒルダと結婚して二ヶ月語、19歳になったシンはヒルダとデートすることになっていた。シンは凍える手を自分の吐息で暖めながら、ヒルダを待っていた。すると赤いコートを着たヒルダが走ってやってきた。

「シン♪」

赤いコートとヒルダの綺麗な赤い髪がとても目立っていた。

「おー」

「待たせた？」

「全然♪行こうか？」

「うん……♪」

二人は仲良く何処かの店へ行く。そして二人の仲を後ろの陰から見ている母親の aria と実妹ココと義妹ミランダが変装して二人を観察していた。

「あの二人…… 良いね♪ハッピーやわ〜♪」

aria の目が二人のラブラブ感に興奮しており、ココは呆れていた。

「お母さん、良いの？シンお兄ちゃんとヒルダお姉ちゃんを観察して？」

「良いのよ！二人のあの行動を観察し！そしてクライマックスの…… 『チューー！』を見たいのよー！」

どうやら aria の狙いは二人の熱々のキスシーンを写真で収めると分かり、ココとミランダは aria の狙いに呆れる。

「お母さん／義母さん…… ただのストーカーか変態にしか思えない……」

一方、シンとヒルダは様々な店に寄り、存分に楽しむ。デイナーや洋菓子、さらにクリスマスケーキも買い、最後にリュウガ達が建てた新生ドラゴレイドの国家『百夜国』の万象の塔（東京スカイツリー見たいな塔）の展望フロアで雪が降る夜や下の方では街灯が街を照らしていた。

「綺麗だな」

「うん」

二人は外を眺めていると、シンがあることを言う。

「これから先…… どうなるんだろうか？」

「どうなるって？」

「連合や同盟以外の種族と会って…… このまま平和になってくれれば良いんだけど……」

「そんなの気にするなって、もし来たらぶっ飛ばしや良いんだから♪」

「そうか？」

「あ！忘れていた！」

「何を！」

「目を瞑って♪」

「え？うん……」

シンはヒルダの言う通りにする。するとヒルダはシンにキスをしようとして接近する。そして陰からカメラをスタンバっているアリアが小声で興奮していた。

「よおしくしっ！今だ！そこだ！年貢に収めろ♪」

アリアがカメラのボタンを押そうとした直前、ココが何かに気付く。

「ん？」



「ヒルダアアア!!でかしたっ!!いやあ、本当に驚いたよ!」

シンが慌てて、母子手帳を見る。

「ん?」

よく見ると、母子手帳に何か重なっていた。よく見るとそれも母子手帳であった。

「二つ……………?」

「二つ……………?」

「ハハ! やつと気づいてくれたよ…………… そうだよ! 私…………… 双子を身籠ったんだよ! シンの子供を♪」

「…………… まじ?」

「マジのマジ♪大マジだ!」

「…………… oh my god !! (マジかよ!!)」

ギデオン一家は笑顔に包まれ、その九ヶ月後に二人の子供 命名“陽弥”と“ルナ”が生まれた。

昔話を聞いたシンは忘れていた思い出を、思い出す。

「あの時は、本当に驚いたよ…………… いきなりの妊娠報告、しかも双子…………… 本当にヒルダは俺らに爆弾を落としてくる♪」

「褒めてるのか?」

「…………… 嫌、最高の愛妻だから言っているんだ♪」

「フフ、ありがとよ…………… 愛しの旦那様♪」

「さて、そろそろ着くぞ……………」

階段を降りると、目の前に巨大な容器があり、中に巨大な脳ミソが横たわっていた。

「オーロラユニット…………… まだ、生きていれば良いんだが」

シンはオーロラユニットにUSBを接続すると、オムニツールにオーロラユニットが遺した情報が入ってくる。

「もうダメと分かっていたが、ラッキーな事に陽弥のDNAがあった。これがあれば陽弥の奴が今、何処にいるか分かる!」

すると今度はオーロラユニットからの最後のメッセージが入ってきた。

「『長月の日、血に染まりし、紅き月…………… 闇に染まりし、漆黒の太

陽が現れしとき、因果を捕食する厄災の大蛇…… 黄昏の巫女姫と  
永遠の命を喰らい、真なる絶望へと覚醒する。我、因果の防人……  
ここに来世の防人達に警告を伝えたり。』

その不気味な文章に寒気が来た。

「何だろう？この文章……」

「気味がわりいなあ……」

「だけど、オーロラユニットが遺したメッセージだ…… アサリイ人  
とプロセアン、アヌビス人に解読させよう……」

シンとヒルダはノーアキュラに戻り、グランドスファイアへと戻って  
いった。

だがこの時、シンが入手した文章がこれから起こる預言と言うこと  
を誰も知るよしもしなかった。

## a f t e r s t o r y 1 6 : 幽 霊 要 塞

早速シンは研究者達と共に陽弥のDNAを解析し、ビーコンを開発した。

「よし！これなら陽弥達が今何処にいるのか分かるぞ！」

シンは早速ARSスーツに陽弥のDNAが入ったビーコンを組み入れる。

「あれ？」

しかし、何も起きなかった。

「どうなっているんだ？」

誰もが失敗だと思った直後、シンの目の前からワームホールが現れる。

「何だ!？」

ワームホールは稲光を発し、不気味な深緑のオーラを放つ。

「成功かな？」

「分からない……だが、行ってみるしかない……」

シン達は準備をする。さらに第一中隊や第一部隊、さらにファイリヤリヨウマ、ウィルもそれぞれのスターシップをネオ・アウローラに連結する。

「準備よし！」

「此方もOKだ！」

「……ネオ・アウローラ、発進！」

ネオ・アウローラが離陸し、シンはARSスーツに陽弥のDNAが入ったビーコンを組み入れ、ワームホールを出現させ、中へ突入した。辿り着いた場所は不気味な深緑を持つ星雲、そこから放つ稲妻、そしてたくさんの船の残骸や小惑星が浮遊していた。

「何だここは……？」

すると目の前に巨大な影が見えてきた。

「？」

影は段々と近づいており、ネオ・アウローラを横切った。それは何



と、陽弥が乗っていたシタデルであつた。

「シタデルだ！でも何か変だぞ？」

「航宙方がおかしい!?」

するとシタデルの艦橋からライトでモールス符号で救援要請を知らせてきた。

「救援要請を発している！」

シンは急いでNーアキュラに乗り込み、シタデルへと向かつていく。そして徐々に近付き、艦橋を確認する。

「っ!!?」

シンは驚く。何故なら艦橋の周りに無数の魔獣及び、魔蟲が襲っていた。艦橋を守る対空砲が艦橋にへばりついている魔獣や魔蟲を駆逐していた。

「何てことだ！この宙域は奴等の巢だつたのか！」

シンはNーアキュラを旋回させ、艦橋にへばりついている魔獣と魔蟲を駆逐していく。

「ネオ・アウローラ、応答せよ！タスク！」

「分かつてる！」

ネオ・アウローラも対空パルスキャノンで援護する。そして魔獣と魔蟲を駆逐し終えたシン達は、陽弥に状況を確認する。

「何が、あつたんだ？」

「奴が…… ドレギアスが復活したんだ……」

「ドレギアス？」

陽弥はシン達に分かりやすく説明した。

「まさか…… ネザーの奴が喰われたのか……」

「皮肉だね、」

ロザリーとクリスがネザーの事を話していると、ジュンとリアースは驚いていた。

「あれが…… 陽弥の世界のロザリーと……」

「クリス？」

「「めちやめちや超美人じゃねえか!!?」」

「あれが…… 陽弥の世界のエルシャ…… 美人過ぎる……!」

ジュン、リアース、アラドは三人の美しさに見とれていると、陽弥があることを話してきた。

「そう言えば、この星雲に変な要塞があるんだ……」  
「変な要塞？」

「うん、あの魔獣や魔蟲の巢を拠点としているんだ…… 中に入りたいんだが、見ての通り……」

陽弥はシタデルを見る

「なるほど、潜入したいが魔獣達によつて邪魔されていると？」

「そう……」

「…… それなら良いものがあるぜ♪」

「？」

陽弥は首を傾げた。

謎の要塞内部、シンがペルシウスのシステムに新たなチップを組み入れて転移することが可能になった。

「名付けて、『超次元跳躍システム』だ！これならどんな防衛網だって、あつという間に転移出来る優れものだ！」

シンの発明にコモンは興奮する。

「凄い！いつか教えてください！」

「良いとも♪これでドレギアスを倒せるなら、喜んでお前達のライザメールに組み込んでおくぞ♪」

「父さん、レオン達の世界に進化した技術を提供したらいけないって分かるだろ？」

「だが、どうする？」

「……」

陽弥はいじけていると、指令センターに着いた。

「広いなあー！」

ジュンが指令センターを眺めていると、後方からヒートサイズを降り下ろそうとする影が狙っていた。

「ん？ ジュン!!」

アラドがジュンを狙う影に気付き、トワイライトサーガを振り回し、影を斬った。影は倒れ、アラドが恐る恐るフードを剥がすと、影の正体はグリニア帝国の老兵であった。

「っ!!」

するとグリニア帝国老兵が陽弥達に語り始めた。

「長月の十五夜、血に染まりし紅き月と闇に染まりし漆黒の太陽が会い間見えた時、大厄災へと覚醒し、全てを喰らおうぞ……………」

「あれ?…………… それ、何処かで聞いたことが…………… つ!!」

シンはオムニツールでオーロラユニットのメッセージを確認する。

『長月の日、血に染まりし、紅き月…………… 闇に染まりし、漆黒の太陽が現れしとき、因果を捕食する厄災の大蛇…………… 黄昏の巫女姫と永遠の命を喰らい、真なる絶望へと覚醒する。』…………… 似ている!」

「父さん、何それ?」

「破壊したアルキメデスのオーロラユニットに、このメッセージが残されていたんだ…………… そしてこの老兵が語った言葉と、全く同じなんだ……………」

「お前達は知らない…………… ギガオロチの、本当の恐ろしさを……………」

老兵は陽弥に言う。ここはグリニア帝国軍が造ったクローン製造工場や訓練所、魔獣と魔蟲の飼育施設があると言う。さらにその奥にクアンタ人が遺した遺跡があり、そこでデイザスターを祀っていたと、そして老兵はクローン達を製造するための宿主とされていた……………」

「それじゃあ、アンタはネザーが造った最初のクローンなのか?」

「…………… 全て、奴の為……………」

老兵はそう言うのと、絶命した。陽弥達は遺体を寝かき、奥にある遺跡へ向かい、遺跡のあらゆる石碑を見る。

「魔獣の巣にこれだけの遺跡が残っていたんだなあ……………」

「読めるのか?」

「多少はな…………… だが、これは古い文字だ。エスメラルダ義姉さん

でも読めないと思う。」

陽弥は考えると、あることを思い付いた。

「そうだ！スペクトロブスだ！」

「……………そうか！彼らは“星獣”……………古代のクアンタの文も読めるって言うことか！」

「ああ、三獣王や他のスペクトロブス達は遥か彼方の銀河へ旅立って困ったが、一匹だけ、俺の元に残ったんだ！」

陽弥はコスモバイルを起動し、叫んだ。

「出てこい、コマイヌ！」

コスモバイルが光だし、転送紋章が浮かび上がり、コマイヌが出てきた。コマイヌは嬉しそうに舌を出し、陽弥に抱き付いてきた。

「よしよしー！」

陽弥はコマイヌを撫でながら、古代石碑を見る。

「さあ、コマイヌ……………お前の出番だ♪」

するとコマイヌが石碑を臭い始め、陽弥の頭の中に石碑に書かれている文が解読されていく。

「何々？『古来の伝承、全てを喰い尽くす大蛇“ギガオロチ”……………我等の最終兵器 荒神”……………七つの剣を持ち、八塩折で弱らせ、真なる剣と共に首を切れ……………』これは……………ギガオロチの倒し方？」「ギガオロチの倒し方かよ!?……………それは良い情報だ！それを本部に送ろう……………」

陽弥は石碑に書かれている文を解読、そして保存した。

「ふう〜、良い情報を手に入れた♪」

陽弥が背伸びしながら皆と共にフロントに到着した直後、ゲートの前から、声が響いてきた。

「それは良い気分だろうなあ……………」

《ツ!!!》

ゲートから現れたのは、漆黒の鎧を身に纏い、闇のマントをそれぞれの両肩に付けており、大太刀へと変わったディザスターを持ったドレギアスであった。

「まさか、護星神の父親が助けに来るとは……………想定していなかつ

た……………」

「クツ!!」

陽弥はドレギアスを睨み付け、二刀流を抜刀する。そしてジュンやコモン、アラド、リアース、フェイズもそれぞれの剣を抜刀した。

「父さん……………ジュン達を連れて、レオン達の世界に行つてくれ……………そしてギガオロチの倒し方が入っているデータも守つてくれ。」

「陽弥!お前、まさか!?!」

「ドレギアスは異次元生命体……………今、奴と互角に戦えるのは……………俺と、コイツだ……………」

するとコマイヌが進化し、ガルディオラへとなった。

「ガアアアアアアアツ!!」

ガルディオラは鋭い目でドレギアスを睨み付け、威嚇する。陽弥はオムニツールでシン達を強制転送した。

「陽弥!!」

「……………勇人を……………皆を頼む♪」

陽弥が涙を流しながら、満面な笑顔で返す。

「陽弥あああああつ!!」

シン達が強制転送され、待機していたシタデルやネオ・アウローラがレオン達の世界へとワープした。

「……………愚かな、護星神が……………」

ドレギアスはディザスターを突き付けてきた。陽弥も七星剣と魔剣グラムを構える。

「勝負だ、ドレギアス!!」

陽弥が二刀流で先進した。陽弥は二刀流を同時に振る。ドレギアスディザスターで防御した直後、刃が衝撃波が放たれ、フロントの防護ガラスが一気に割れた。空気が空間へ持つていかれると、陽弥はすぐにマスクを付ける。ドレギアスの方はマスクを使わず、空間でも呼吸が出来るのであった。

「マスクを付けずに呼吸出来るのかよ!?!アイツ……………化け物か!?!」

陽弥がドレギアスの特性に驚いている直後、ゲートから烈風が吹き荒る。

「っ!?この技は!?」

するとゲートから現れたのは、皮膚が黒く、赤い瞳、深紅に染まった髪を持ったレオンであった。

「レオン!生きていたのか!」

するとレオンの様子がおかしかった。ビームセイバーを抜刀し、陽弥に襲い掛かって来た。

「レオン!」

陽弥は急いで二刀流で防御する。その時、ドレギアスが笑いながら、陽弥に言う。

「フハハハハ!!お前が戦っているソイツはレオンではない♪」

「何っ!」

「ソイツはレオンのDNAで造り上げ、我の持つグリゴリとインフィニティソウルで改造した……………完璧のクローンなのだ!」

「何だっ!?インフィニティソウルとグリゴリ!?と言うことは!」

「そうだ……………お前の娘から奪ったのだ。安心せ、マナ・ギデオンは無事だ……………」

「……………レオンは?」

「レオン・マクライトの方は管理している……………数百倍の電磁カプセルの中に閉じ込めている♪」

ドレギアスの言葉に、とうとう陽弥は切れた。

「殺す!!」

陽弥の体からブラムが現れた。

「陽弥……………共に戦ってやるぞ!」

「ああ!!」

「ほお、暗黒生命体か……………面白い!」

するとドレギアスの左腕が黒紫の腕へと変わった。

「何っ!」

陽弥も光の腕を解放し、ブラムも闇の腕を解放する。

「何でアイツあの腕を解放出来ているんだ!」







「…………… 要塞ごと、あの地球に持ち出せ、クローンは良い道具になる」

「ハッ！」

ボウ將軍はドレギアスに敬礼し、艦隊がトラクタービームやビームワイヤーを要塞に撃ち込み、要塞ごと巢を持ち帰った。要塞内の研究所にいるドレギアスはクローン製造用の人工カプセルを見る。

「さて、…………… 今度はお前達が復活するんだなあ♪」

ドレギアスが取り出したのは、誰かの血液が入っている三つの試験管であり、名前が書かれていた。

” ガイラス ”

” シエレナ ”

” カロル ”

そしてドレギアスは試験管をカプセルに入れた。カプセル内に人工バイオ液が入り込み、試験管から三人の血が混ざる。するとドレギアスは呪文を唱え始めた。

「空の守護者達に倒されし勇敢なるフェメシスよ…………… 復讐の時は来た!!」

ドレギアスはディザスターを抜刀し、天へ掲げる。その時、要塞の周りに赤黒い雲が現れ、中から無数のギガオロチが現れる。

「ギガオロチよ! このフェメシス三人に命を戻したまえ!!」

ギガオロチは口から蛇のオーラを放ち、三つのカプセルに入り込む。すると人工バイオ液が水色から血のように真っ赤に染まる。そしてドレギアスは体からインフィニティソウルとクアンタニウムハートを出すと、その一部をそれぞれの三つのカプセルの中へ入っていく。

「甦れええええっ!!!」

その直後、カプセルのガラスから手がへばりつく

「今こそ! 甦れえええええ!!!」

ドレギアスの大声と共に、カプセルが割れ、人工バイオ液が出てくる。そして三つのカプセルの中から、素肌の色が黒く染まったカロル、シエレナ、ガイラスが出てきた。そしてガイラスはレオン達の世

界に生きている三人の名を言う。

「待っている…… アストラ！」

次にシエレナも名を言う。

「アイリス…… 貴女のその顔に…… 風穴を空けて殺るから！」

最後にカロールも名を言う。

「ベイボルス…… 私は戻ったぞ!!」

するとドレギアスが三人に鎧を渡す。カロール達はそれぞれの黒い制服に着替える。ガイラスの戦闘服は鎧龍であり、全身が完璧な鎧で包んでおり、アンカー状の尻尾を動かす。

シエレナは蜘蛛の様なスーツで下半身が完全に蜘蛛の原型としたアーマーを装着しており、背中に蜘蛛の足を取り付けられた。

最後にカロールは足に鷲の様な巨大な爪が装備されたレッグと6枚の漆黒の翼、そして黒鷲と思わせるマスクを装備した。

そして三人はドレギアスに膝間付く。

「新生グリニア帝国、銀河皇帝ドレギアス陛下…… 我等、新生フェメシス騎士団に御命令を……」

「カロール…… 手始めに、我が作ったレオンのクローンと共に、龍の姫巫女とアンジュリーゼを捕獲せよ…… そして裏切り者達であるアストラ達を…… 抹殺せよ！」

「イエス、マイ ロード」

カロール達はボウ將軍率いる艦隊と共に、レオン達の世界へと向かっていった。

その頃、惑星ホライゾン エルシユリア王国では、双子を身籠ったエミリアと生まれたばかりのゴスペルを抱いているイザベルが紅茶を飲んでいると、二人のカップが割れた。

「っ!?!」

二人は驚いていると、ゴスペルが泣く。

「うぎやああああ！」

「あらあら！」

イザベルがゴスペルを落ち着かせようとすると、エミリアが突然、胸を抑える。

「どうしたの？」

「何ででしょう？……病気も何もないのに………何故か

”心に穴が空いた”様な感じです………」

エミリアとイザベルは陽弥とブラム………それぞれの愛する夫を心配するのであった。

## after story 17：侵略

幽霊要塞から脱出できたシン達は、急いでレオン達の世界へと向かっていった。

「間もなく、到着いたします!」

ワープを抜けた先にアウラの都が見えてきた。シン達は早速、下り、アウラ・ミドガルディアに危険を知らせる。

「ドレギアスが復活しただど!?!」

大巫女や他の巫女、さらにサラやアンジユも驚く。

「急いで迎撃体制をしてくれ! 奴等はたぶん…… アンジユと姫さんを狙っている!」

ジユンも賛同する。

「分かりました! 御主らと同盟を結び、グリニア帝国艦隊を追い払いましょう……!」

シン達は大巫女に敬礼する。

「感謝する!」

そしてシタデルの指揮はシュバルツアに変わり、陸上戦艦や各世界に散らばっていたフロンティアが集結していた。

そしてレオンの世界の第一中隊と陽弥の世界の第一中隊が合間見え、協力することになった。そしてアウラを守る近衛騎士団に所属しているアストラ、ベイボルス、アイリスも向かっていく。そして数時間後、上空から何かが接近してきた。皆は迎撃体制をし、武器を構えると、現れたのはボウ將軍の戦艦一隻だけであった。

「一隻だけ?」

すると戦艦から四機の機体がカタパルトから射出された。

「何だ!?!」

現れたのは、オメガメール“ヴェルトサーガ”によく似ている黒い機体と、ガイラスと同じテールアンカーが装備されたイントウルとシエレナと同じ蜘蛛の足へと変わったシャバシテイ、そしてカロルのゼストバーンは脚部がコンドルレッグへとなっていた。すると四機

のコックピットが開き、ライダーが姿を現した。

「アストラ！ベイボルス！アイリス！」

「「っ!!」」

ガイラスはヘルメットを外し、顔を露にする。

「お前は!？」

「そうだアストラ……………俺様だああああ!!!」

それに続き、カロールとシエレナもヘルメットを外し、顔を露にする。

「久し振りだな……………ベイボルス……………」

「……………カロール！」

「アイリス……………久し振りだねえ♪」

「あなたもね、シエレナ……………」

三人はそれぞれの宿敵を睨み付ける。すると黒いヴェルトサーガに乗っているライダーもヘルメットを外す。

《レオンツ!!!》

「何で、レオンが!？」

「レオン・マクライト……………ああ、アイツか……………アイツなら、ドレギアスの元で拘束されている……………」

「何っ!？」

「そして俺はそのレオン・マクライトから採取されたDNAから生まれたもう一人のレオン・マクライトだ♪」

「もう一人のレオン!？と言うことは！お前、クローンか!？」

「そうだ……………そして俺は新生グロシア帝国皇帝であるドレギアスの右腕でもある！」

「何だっ!？」

「そして俺達は、ドレギアス陛下によって復活したんだ！新生フェメシス騎士団としてな！」

「新生フェメシス騎士団だと!？」

「そして！何と言っても我等の偉大なる皇帝陛下！ドレギアス皇帝である!!!」

すると戦艦から、黒い影が射出された。

「っ!!!お前は!？」

それは紫の装飾、赤黒い装甲、手にはオロジヤークとマガダイトウを持ったゼロであった。そしてゼロの頭部に何かが付けられていた。「ッ!!」

それは何と、オパール鉱石化した陽弥であった。

「陽弥あ!!?おい!ドレギアス!!お前!陽弥に何をしたんだ!!?」

「コイツか?コイツはインフィニティソウルとクアンタニウムハーフト、グリゴリ、アーククリスタルを守るために自らの体を鉱石に変えたんだ。そのせいで力は取り出せなく、変わりにゼロの飾りとして役立つているんだよ♪」

レオンのクローンが笑いながら説明すると、シンとヒルダの怒りが頂点に達した。

「き、貴様あああああつ!!!」

シンは、**デイメンジョン・ヴァルクユリア**を取りだし、構える。

「貴様等!!死ぬ覚悟は出来ているんだろうなあ!!!」

するとヒルダが怒り狂っているシンを止める。

「ダメ!!撃つちゃダメだ!!陽弥に当たる!」

「だが!陽弥が!!」

その直後、ドレギアスが指を鳴らした。

《っ!!?》

皆がドレギアスの方を向いた直後、地面から巨大な赤黒い植物が生えてきて、レオン側のサラとアンジュ、アストラ、ベイボルス、アイリス、タスクを除く皆が植物に絡まり、身動きが取れなくなる。

「クッ!!これは!」

「な!?!何なんだよこれ!?!」

サラとレオン側のロザリーが絡まった植物を切ろうとするが、再生していく。

「シン!これってまさか!?!」

「間違いない!これはドウームの力だ!」

「よりにもよって、あの邪神皇の力かよ!?!」

皆がドウームの植物に身動きが取れない間、ドレギアス達はレオン側のアンジュとサラ、タスク、そしてアストラ、ベイボルス、アイリ



そしてタスクはエグゾディアスのグランジヤベリンでクローンレオンが使うヴェルトサーガの偽機体”ヴェルトバーサーカー”との互角な戦いをしていた。

「古の民の生き残りが………それだけか？」

「クツ!!」

するとヴェルトバーサーカーの後方にアンジユとサラが回り込む。アンジユがラツイーエルを抜刀し、ヴェルトバーサーカーへ突撃する。しかし、

「甘い!!」

ヴェルトバーサーカーの脚部からビームサーベルを展開し、アンジユの攻撃を防御する。

「嘘ツ!」

「甘いぞー!アンジユが!!」

するとヴェルトバーサーカーがビームサーベルでアンジユを弾き飛ばした。

「アンジユ!」

「貰ったあつ!!」

ヴェルトバーサーカーの6枚の闇の翼『ダークネスウイング』を展開し、機動力を上げた。さらにダークネスウイングから闇のビームウイングを放出し、推力も上げ、タスク達を翻弄する。

「は、速い!!?」

その直後、秒速でも計れない程の鎌鼬が起こり、エグゾディアスの両腕をバラバラにした。

「エグゾディアス!!」

『グアツ!!』

「止めだ!!」

クローンレオンが腕部のビームソードを振り下ろそうとした直後、陽弥側のタスクがヘラクレスの超次元跳躍で、転移し、レオン側のタスクを助けた。

「っ!」



陽弥側のタスクはルミナスブレードでクローンレオンを払い除ける。そしてヘラクレスの再生紋章を発動し、バラバラになったエグゾディアスの両腕が再生していく。

「凄い！流石陽弥の世界の俺！」

「気を抜くな、俺！」

二人のタスクはそれぞれの武器を構える。その光景にシンは感心する。

「おお!!これぞ、Wタスクか！」

「感心してんじゃねえ!とつと私たちも行くよ!!」

陽弥側のヒルダが超次元跳躍で植物から脱出し、皆を植物から解放した。

「行くぞ！皆！」

《おおく!!》

皆がそれぞれ散会し、ガイラス、シエレナ、カロルの討伐へと向かっていった。二人のロザリーとクリス、バン、ジュン、サイ、リアースは苦戦しているアストラの方へ、二人のエルシャ、ヴィヴィアン、カズ、アラド、ヒカリ、はベイボルスの元へ、陽弥側のゾーラ、ハンク、コモン、フェイズはアイリスの元へ、陽弥側のアンジュ、サラ、ヒルダ、サリア、リユウガ、フィーリ、ウイルがクローンレオンに苦戦している二人のタスク、レオン側のアンジュ、サラを助けに向かった。そしてシンはペルシウスとペガシオーネスと合体し、人馬形態へととなり、ドレギアスを相手する。

「ライトソードビット、ダークビットレーザー、リフレクタービット、展開!!」

ペガシオーネスの翼からライトソードビット、ダークビットレーザー、ゾディアック・ミラージュからリフレクタービットが展開され、ドレギアスを追い詰める。しかしドレギアスはゼロの体からバリアを展開し、ソードビットとビットレーザーの攻撃を防御する。

「確かに、ゼロは強い……………だが！最初に造られたパンドラメールなら、互角に戦える!!」

シンはディメンジョン・ヴァルキュリアをソードモードに切り替

え、ドレギアスに振り下ろした。

「舐めるな！小虫が!!」

ドレギアスがオロジャークとマガダイトウを取り出し、デイメン  
ジョン・ヴァルキュリアを防御する。

「クツ!!」

「まだだっ!!」

デイメンジョン・ヴァルキュリアに追加されたバーニアから火が吹  
き、ドレギアスを押し出す。

「何っ!？」

「こつちも！俺等の世界の技術、舐めるんじゃねえっ!!」

シンのパワーがドレギアスを圧倒する。そしてライトソードビツ  
トがマガダイトウを払い除けた。

「っ!!」

シンはその隙に腕部ワイヤーショットでゼロの首を締め付ける。

「クツ!!」

「グウツ!!」

するとドレギアスは笑みを浮かばせて、ワイヤーを握る。

「っ!？」

ドレギアスはシンを引っ張り、回しまくる。

「グアアアアアアッ!!」

そしてゼロの手からワイヤーが放され、シンはペルシウスごと放り  
投げられた。そして倒れたシンを踏みつける。

「グツ!!」

そしてドレギアスはオロジャークを突き付けながら、戦っている戦  
士たちに言う。

「貴様等!!動くな!!」

《っ!?!》

「コイツを殺されなくなかったら、皇女とドラゴンの姫巫女を引き渡  
せ……………」

《っ!!》

「俺に構うな!!コイツを止めなければ、次元と時空が破壊される!!」

「黙れ……」

ドレギアスはさらにシンを踏みつける。その光景に陽弥側のヒルダが叫ぶ。

「止めろおおっ!!」

するとシンはペルシウスの背部のヴェスバーを起動し、狙いを定める直前、クローンレオンがヴェスバーを破壊した。

「…… そんなに死にたいのか?…… 良かろう、望み通りにしてやるぞ……」

ドレギアスがオロジャークを突き刺そうとする。

「さらばだ……」

ドレギアスがオロジャークを突き刺そうとした瞬間、星獣ザックズバーンが頭部のスラッシュブレードで防御する。

「っ!!」

その時、ゼロの腕が何かに掴まれ、ゼロの頭部目掛けて、尻尾のスパイクハンマーが炸裂した。ゼロは吹き飛ばされ、現れたのは星獣ブレイスパイクであった。そして空の彼方から流星の様に星獣達が現れた。その中にガルディオラもいた。レオン側のアンジュ達が星獣を見て、驚く。

「うっほ〜!カッチョイイ〜!」

「な!?!何じゃあの怪物は!?!」

ヴィヴィアンは興奮するが、ロザリーは怖がる。すると陽弥側のロザリーが説明する。

「星獣スペクトロブスだよ!」

「星獣?」

「ああ!陽弥のペットと言って良い!」

陽弥側のロザリーが解説する中、ライウーンが雲を呼び出し、稲妻を落とす。そしてその稲妻がガイラス、シエレナ、カロールに直撃する。

「グアアアアアッ!!」

「ああああああああっ!!」

「何だ、この稲妻は!?!」

三人の動きが鈍くなり、さらに稲妻の直撃で体の一部が溶けてい

く。

「なっ!?何だこれはああっ!!?」

ガイラスが溶けていく右腕に驚く。ドレギアスは叫ぶガイラスを見て舌打ちをした。

「チツ!やはりクローンにも制限があるか……………L!、ガイラス! シエレナ!カロール!作戦は失敗だ!退くぞ!!」

「クソツ!覚えてやがれ、アストラ!」

「アイリス……………今度会ったら、次はないよ……………」

「ベイボルス……………フェメシス騎士団を裏切った罪は重いぞ…………… 覚悟しておけ……………」

「……………」

ガイラス達は急いでボウの戦艦へ戻っていく。そしてドレギアスはシンを見る。

「ヴェクタ人…………… 我的計画は終わらない、全ての時空と次元を破壊するまで…………… そして我はお前も知らない空間にいる……………」

ドレギアスはそう言い、ボウの戦艦に戻っていく。

「待てっ!!」

スペクトロボース達が逃げているドレギアスに向けてレーザーを放つ。しかしドレギアスが糸と簡単にスペクトロボースのレーザーをバリアで弾く。

「弾いただと!!?」

シンが驚くと、ドレギアスはゼロの体を動かす。

「徐々にゼロの体に馴染んできたようだ…………… さて、あの荒神を誘うとするか……………」

ドレギアスはそう言い、何処かへと消えた。

その後、レオン側の世界にルナ達やヴァルキュリアス軍が駆け付けてきた。ココやミランダ、さらにアジマス連邦軍も援軍に来てくれた。

「お父さん!お母さん!」

「ルナ!」

ルナはシンとヒルダに抱き付く。するとレオン側のヒルダがルナをまじまじに見る。

「……………」

「えっ!?……………お母さん!?」

ルナはもう一人のヒルダに驚くと、レオン側のヒルダが言う。

「アンタがもう一人の私の子なんだな?」

「え?……………はい」

「……………~~そんな~~胸じゃモテないよ、アンタ♪」

「え……………!!?」

ルナの胸の差をバカにされ、シンと陽弥側のヒルダは笑う。

そしてレオン側のココやミランダも陽弥側のココとミランダと会い間見えた。

「はわわわわわ!!」

「どうしたの?」

「い!いえ!別の世界の私があまりにも綺麗で……………その……………すると陽弥側のココは恥ずかしがるココの頭を撫でる。

「?」

「ありがとう……………別世界の私♪」

「っ!!」

陽弥側のココの綺麗な笑顔にココの顔が真っ赤になり、倒れた。

「あ……………!!ココッ!!」

レオン側のミランダが慌てると、陽弥側のココとミランダは笑う。

するとレオン側のサラがシンに言う。

「大将シン殿よ……………」

「ん?」

「我々アウラの民とフロンティアは、あなた方種族大銀河連合との同盟締結を求めます。」

「っ!?!同盟……………」

「あなた達も知っている通り……………ドレギアスは油断大敵生命体です……………そして復活した新生フェメシス騎士団は我々の龍神器やラグナメール、ローガストメールをも上回っております……………そして

あなた方の息子さんやお孫さんと勇人、レオンを助けたいのです、」  
「…………… 確かに、ドレギアスは以上だ…………… だが、アイツを倒したお前たちなら、戦略、頭脳に適している。良いだろう、同盟を結んでも……………」

「分かりました…………… では、アウラの都が再建した後、明後日に、」  
「…………… 分かった」

レオン側のサラとシンは握手で同盟を結び、ヴァルキュリアス軍、アジマス連邦軍と共にアウラの都の復旧に手伝う。

その頃、勇人達は学校から帰っていた。

「…………… 虐められている時期と虐められない時期の違いってこんなのかなあ？」

勇人は考えながら歩いていると、また洋介が現れ、今度は大勢のチンピラを連れていた。勇人は人気のない廃鉱に連れていかれたが、2000年も次元の狭間で陽弥に修業されていた勇人は大勢のチンピラや洋介を糸も簡単に、ノックアウトした。

「痛てえ…………… 何でだ……………」

「もう止めよう…………… こんなこと…………… 無理だって、僕の実力を知らないまま殺そうとするなんて……………」

「うるせえっ!!お前の様な奴がいるから目障りなんだ!!お前や親を殺したと思つたとら、お前だけがノコノコと生き残りがつて!!」

洋介の言葉に勇人は驚く。

「ノコノコと生きて!?!…………… おい!あの時、俺も乗っていたのか!?!」

「そうだよ!!お前の病気が出たことをチャンスに殺したんだよ!車は爆炎し、中から火だるまになった女が叫びながら無傷の赤子を抱いて死んだ!俺はそれを知って、親父に逆らった悪人とお前を悪人の子としてマスコミに流したんだよ!!」

「…………… (何処まで、腐った心を持っているんだ…………… コイ

ツは………」

事実を知った勇人は決意した。

「……… ベリト、頼む………」

勇人の体から暗黒生命体ベリトが現れ、深紅の剣を突き付ける。洋介は驚き、恐怖する。

「な!? 何だコイツは!?」

「テメエのその穢れ腐った心……… 地獄の炎で洗い流しやる!!」

ベリトの剣から火の玉が放たれ、洋介に引火した。

「あああああああああああつ!!!」

洋介の体中が燃え盛り、髪の毛が燃え散り、皮膚が焼き付くされていく。ベリトが勇人の体の中へ戻り、転送紋章で邸へと帰っていった。

「勇人……… 大丈夫か?」

ベリトが勇人を心配すると、勇人は泣きながら笑顔で返した。

「これが……… 大丈夫に見える?」

ベリトは驚き、泣き崩れる勇人を優しく撫でる。

そして火だるまの様になっている洋介が地面を這いずりながら、苦しむ。

「グウツ!……… フツツ!……… この怨み……… 張らさで措くべきかあつ!!」

すると火だるま状態の洋介の前にドレギアスが現れる。

「この世界の秩序が憎いか?」

「!?……… 誰だ?」

「我が名はドレギアス……… 新生グリニア帝国の皇帝である……… お前を新生フェメシス騎士団の傘下に招こう………」

ドレギアスがそう言うと、グリニア帝国医療班が駆け付け、火だるまの洋介を運んでいく。ドレギアスは廃鉱から街を見る。

「さて、明日に荒神を……… 誘うとするか………」

ドレギアスはそう言い、何処かへと消えた。

## after story 18：孤独の少女

今日は○○高校の学園祭が開かれており、店やゲーム、歌、さらに○○高校の演劇部が行う『荒神伝説』。ストーリーは荒神”スサノオノミコト”と蛇龍”ヤマタノオロチ”の伝説を再現した演劇らしいと、勇人とシンディは楽しみにしていた。

「色々あるな〜♪」

勇人は一人でたこ焼きを食べながら歩いていると、薄暗い物置部屋から光が漏れていた。

「ん？」

勇人は開けると、それは複数のダンボールや鉄棒で作られたダンボールハウスであった。

「何でこんな場所に？」

勇人はダンボールハウスの周りを見る。すると下に通気孔らしき出入り口が見えた。

「出入り口が何故ここに？」

勇人は通気孔らしき出入り口に入る。

「狭いなあ……………」

そして出入り口のハッチがあり、勇人は開けた。

「よいしょつと……………ん？」

「え……………!？」

勇人の周りに大きなテレビとパソコン、そして目の前に露出が多い服、ボサボサした赤い髪、口にはトッポをくわえた少女がいた。（イメージ姿は『革命機ヴァルヴレイヴ』”連坊小路アキラ”）

「……………あの〜、どちら様？」

勇人が少女に問うとした直後、少女が突然、散らかっているゴミやぬいぐるみを投げってきた。

「痛っ?!?痛い!痛い!」

さらに勇人の腕に番犬の様に噛み付いてくる。

「痛っ!痛っ!痛っ!痛っ!痛っ!!」

そして数分後、少女が落ち着くと勇人は少女に話し掛ける。



「何でこんな所にいるの？」

「……………」

「…………… クラスは？名前は？」

すると少女は小声で言う。

「理亜……………」

「ん？」

「真理亜…………… それだけ……………」

「真理亜…………… (何処かで聞いた名前だ……………)」

勇人は考えていると、今度は真理亜が勇人に問う。

「アンタ…………… 新川 勇人でしょ？根岸 洋介による虐められていた……………」

「……………」

「…………… それで？アイツを殺した気分は？」

「っ!？」

勇人は昨日の事を真理亜が知っていることに驚く。

「そんなに驚かないですよ、私もアイツに散々虐められていたからねえ、あの廃鉱で奴が火だるまになっているのを見ていたからねえ♪」

「見ていた!？」

「私が夜中に街の彼方此方に付けた内蔵カメラよ♪」

「…………… !?」

勇人は周りのパソコンの映像を見ると、見覚えのある場所や知らない場所にまでそれが映し出されていた。

「それに♪アンタの体から出てきた化物…………… 何？」

「!!」

勇人は考える陽弥（師匠）に言われた事を……………。

「(どうしよう!?!どうしよう!?!こんなの…………… シンデイはサマエルを宿しているから良いけど、これが皆に知られたら……………)」

勇人は慌てていると、真理亜は返答する。

「誰にも言わないよ」

「え？」

「…………… だって、この存在…………… 誰も知らないから」

「え?..... ああ、うん..... 分かった」

勇人はそう言うのと、体の中にいるベリトに話し掛ける。

「ベリト.....」

「何だ? うつつせえなあ?」

「ちよつと出てきてくれないか?」

勇人の言葉にベリトは勇人の体から出てきた。

「ゲツ!!」

「?」

するとベリトが勇人の胸ぐらを掴みながら怒ってきた。

「勇人、お前! 陽弥とブラムの言いつけを破るのか!!」

「大丈夫だよ、この子は誰にも言わないって約束したんだ..... それにこの子は多分、引きこもりだ.....」

「..... ま、それだったら良いけど..... ん?」

ベリトは頬が赤くなっている真理亜を見る。すると真理亜が言う。

「素敵..... カッコいい..... イケメン.....」

「は?」

「見つけちゃった! 私の王子様!」

「はあ!」

勇人は真理亜の瞳がベリトだけに指していることを知り、心の中で思う。

「(なるほど..... 青春だなあ♪)」

すると校舎内で放送が流れる。

『お知らせします。新川 勇人様。新川 勇人様。直ぐに職員室にお出でください。繰り返しします.....』

「職員室に、何だろう?」

勇人は真理亜のダンボールハウスから出て、職員室に向かう。

「ちよつと!! 俺は!」

「ベリト♪」

置いていかれたベリトは抱き付いてくる真理亜に苦戦していた。

勇人は職員室に向かうと、待っていたのは演劇部のメンバーであった。どうやらスサノオノミコト役の友人が交通事故で病院に搬送されたと、

「それで?.....僕にスサノオノミコト役の代わりを?」

「そうなるの.....だからお願い!!時間はたっぷりあるから、最終練習やるから!そこんとこ、よろしく!」

「ええっ!!?そんな息なり!」

勇人は急いでスサノオノミコトの服に着替える。

「この服サイズが合わないなあ.....そうだ!」

勇人は何かを思い付く。学園祭での演劇が始まった。体育館には大人や子供、生徒たちでいっぱいおり、シンディは勇人を探していた。そして演劇が始まり、シンディは勇人を探すのを止め、一人で見ることにした。

物語は急展開へととなり、ついにスサノオノミコトとヤマタノオロチの戦いが始まった。

「オロチだあ!オロチが来たぞおお!!」

村人役の者が逃げるその後ろから八つの首をうねらせる大蛇が現れた。そして大蛇の前に現れたのは、人間サイズの荒神化した勇人であった。演劇部はちよつと驚き、その様子を内蔵カメラから真理亜のダンボールハウスで見ていたベリトは驚く。

「何っ!!?」

勇人は荒神化した状態で、演劇し、それを見ていた観客達は歓喜を上げた。しかしどういう事か10分以上過ぎたのに、暴龍にならなかった。そして演劇部の出し物が終わると、勇人の周りに子供や他のクラス、そしてシンディと一緒に写真を撮る。演劇部からはちゃんとこの姿を持ってきたコスプレとして誤魔化した。その後、真理亜のダンボールハウスに置いてきぼりしてしまったベリトの所へ向かうと、勇人はベリトに怒られていた。

「全く！お前は何を考えているんだ!!? 人前で荒神化するなんて、バカか!!?もし、その場で暴龍化してみる!!? 事態は大惨事になっていたんだぞ!!?」

「ごめん……………」

「…………… ハア、10分以上の暴龍化にならなかったのは驚いたが、今度は絶対に荒神化を使うなよ!…………… 良いな!!?」

「…………… はい……………」

勇人は反省すると、真理亜が言う。

「アンタ何者?愛しのベリトと瓜二つだし、変な姿にもなるわ、人間とは思えない能力だよ?」

「……………」

二人は黙り混むと、真理亜は言う。

「…………… ま、とにかく…………… 私はこの世界の事実を調べないと……………」

「事実?」

「前に私達は謎の宇宙人に殺されたって言う噂が広まったじゃない?」

「それが?」

「実は他にも、こんな噂も広まったの…………… 『謎の失踪事件』、『神隠し』、『夢に出てくる赤髪の男の幽霊』が出ると言う噂があつて、夜な夜な夢の中から話し掛けてくるのよ…………… 「お願い、助けて」や「この宇宙を守って」や「俺を解放してくれ」って…………… 耳元に近づいて囁くの……………」

真理亜の言葉に勇人は考え込む。

「赤髪の男性…………… 宇宙を守って…………… まさか!?!」

「どうしたの?」

「その赤髪の男性つて、胸に変な物が付けていなかった!?!それと、腰に三つの剣を鞘に納めていた!!?」

「ん?分らない……………」

「そっか……………」

勇人は落ち込むと、ベリトが言う。

「おい」

「はい！」

「(何で俺が声をかけると、元気になるんだよ!?)…………… この世界の事実を知りたいか？」

「ほえ？」

「知りたければ俺の傘下に入れ、」

「っ!!…………… はい！」

「良いのか？ベリト……………」

「…………… こいつの天才的な頭脳があれば、ドレギアスが率いているグリニア帝国軍の軍用最新式暗号回線やカメラにもハッキングすれば、ドレギアスに対抗できる。」

「なるほど〜」

勇人は納得すると、ベリトは真理亜に言う。

「良い?…………… そんなに俺の事が好きなら、俺と協力してくれ…………… 協力してくれたら、結婚前提で付き合っただけでやるぞ♪」

「け、け、け、結婚前提!!」

真理亜の顔が真っ赤に染まり、頭から蒸気が出る。

「やります!絶対によります!」

「フフ、良い子だ♪」

ベリトが真理亜の頭を撫でる。真理亜は笑顔になり、早速軍の暗号回線に入り込み、ハッキングをする。

「何か分かったらこれで通信してくれ…………… それと、もし…………… 俺や勇人の身に何か起こったら、シンディ・マリーシエと彼女に宿るサマエルに助けを呼べ……………」

ベリトが真理亜にスカウター型のオムニツールで真理亜の耳に装着させた。

「それなら、ハッキングのサポートができる。」

ベリトはそう言い、勇人の体の中へと戻っていった。

「そう言う訳だ、もう僕は戻っておくよ♪」

「うん……………」

勇人はダンボールハウスから出て、シンディの所へ戻ると、校門の

前に人が集まっていた。目の前に漆黒の鎧と新生フェメシス騎士団達が集まっていた。

「皇帝陛下、ここにいますか?」

カロルが問うと、ドレギアスは答える。

「…………… そうだ。」

ドレギアスは目の前にシンディと一緒にいる勇人を見つける。

「いたぞ……………」

ドレギアスはゆっくりと勇人の方へ歩いてくる。そして勇人の方では体の中にあるベリトが言う。

「マズイぞ、アイツはドレギアスだ……………!」

「え!?!」

「だが、迂闊に動いたら…………… ここにいる人達が殺される…………… ここは黙って奴に従おう……………」

「…………… 分かった」

そして勇人の所にドレギアスが来た。

「待っていたぞ…………… 新川 勇人」

「…………… お前が…………… ドレギアス」

「如何にも、我が名はドレギアス…………… この世界を統治している者だ……………」

「…………… 何のようだ?」

「率直に言おう…………… お前を、我が新生フェメシス騎士団の一員に入りたい……………」

「は?」

「ここで立ち話はいけないから、我の基地へ案内しよう……………」

校門の前に黒いリムジンが待っていた。勇人はリムジンに乗ると、何故か運転席に防風ガラス張られていた。

「!?!」

すると送風機から催眠ガスを出してきた。

「しまった!!」

勇人は急いでリムジンから出ようとしたが、ドアがなかった。

「何?!?!」

さらに体の中のベリトも苦しむ。

「糞っ！催眠ガスだ!!」

勇人は必死にリムジンの外にいるシンディに知らせようとしたが、シンディ及び、皆は気付いていなかった。

「シンディ……………」

そして勇人はその場で意識を失い、催眠ガスが効いていないドレギアスが笑みを浮かばせる。

「さあ……………撤収だ……………」

そしてリムジンがリムジンが走りだし、勇人を連れて、何処かへと向かった。シンディが勇人を心配する。

ちょうどその頃、リムジンの内蔵カメラにハッキングした真理亜が拐われたベリト（勇人）を心配する。

「どうしよう!? どうしよう!? どうしようくくく!!??」

真理亜が必死にあちこちに取り付けた内蔵カメラや監視カメラを駆使して、リムジンを捕らえる。

「何処へ向かうんだろう……………あのリムジンは……………?」

すると、リムジンが山奥にあるあの廃鉱へと入っていった。そしてリムジンが廃鉱の出入口に止まる。

「あの廃鉱がアジトだな……………ん?」

その時、廃鉱の出入口から黒いワームホールが現れ、ベリト（勇人）を乗せたリムジンが入っていき、消えた。真理亜は目を擦りながら、驚く。

「ど……………どうなっているの!?」

真理亜はどうするか、迷う。外に出て助けを呼ぶか、ここで監視するか……………

「どうしよう! どうしよう! どうしよう! どうしよう! どうしよう! どうしよう! どうしよう!!」





「そうか……………」

レオンはため息をし、二人は異空間の上を見上げ、愛する者や友の事を祈る。

「サラ、アンジユ、タスク、ジュン、コモン、アラド、リアース、父さん、母さん……………気を付けろ……………」

「エミリア、ルナ、父さん、母さん、勇人、シンディ……………気を付けろ……………」

# after story 19：囚われし魂

催眠ガスによって気絶していた勇人が目を覚ます。

「ここは…………… 何処だ？」

勇人が目を覚ました場所は、大きなコンテナの中であった、  
「コンテナの中？」

勇人は立ち上がり、辺りを調べるが、何もなかった。

「はあく…………… そうだ！ベリト!?!」

勇人が体の中にいるベリトに話し掛けるが、ベリトの返事が全く返ってこなかった。

「どうしよう…………… 真理亜と通信ができるのはベリトだけだし…………… ん…………… ???？」

勇人は深く考えていると、突然コンテナが大きく揺れた。

「うわあっ!!」

勇人は倒れると、コンテナの片側の壁が上へ上がり、その隙間から光が漏れてきだした。

「ん？」

コンテナが開き、現れたのは何とグリニア帝国軍の兵士や科学者であった。

「っ!!」

グリニア帝国軍兵士がアサルトライフルやヘビーマシンガンを突き付けてきた。

「出る」

勇人は黙って、グリニア帝国軍の兵士の言うことに従い、何処かに連れられる。長い通路、長いエレベーターで行き来し、辿り着いた場所は、謁見の間であった。扉が開門され、目の前に玉座に座っているドレギアスがいた。

「待ちくたびれたぞ…………… 新川 勇人……………」

ドレギアスが不気味な笑みを勇人に見せつける。勇人はドレギアスを鋭く睨み付ける。

「ドレギアス……………！」

「…………… お前達は下がれ。」

「「イエス、マイ エンペラー」」

グリニア帝国軍の兵士達が謁見の間から出て、勇人とドレギアスの二人きりになった。

「さて、勇人よ…………… 君は我をどう思う？」

「…………… 悪き敵……………」

勇人の言葉にドレギアスが笑い出す。

「フハハハハハハハ!!!!」そうか、お前は我をそう呼ぶか……………」

「それともう一つ…………… ここは何処なんだ？」

「…………… 何処って？フフフ…………… 分かった」

ドレギアスはその言うのと、勇人に言う。

「付いてこい…………… お前がいた世界と、ここが何処なのか…………… 教えてやる。そして彼らがどうして健在しているかを……………」

ドレギアスは勇人を連れ、何処かへと案内された。

勇人が連れられた場所は何と黒く染まった亜空間であり、勇人の元いた場所が多数のハニカム型のコロニーが取り囲み、球状を形成していた。

「あれは!?」

「見ての通り、蜂の巣だ…………… 我が作った労働国家”プリズン・ソウル”だ」

「…………… 地球じゃない、僕とシンデイがいた世界は……………」

「そう…………… 我が庭だ…………… そして彼らは、私の次元の力によって生き返り、それまでの記憶をインプットさせた完璧なクローンでもある……………」

ドレギアスの放った言葉に勇人は驚く。

「ええっ!!?」

「我はネザーによって皆殺しにされた彼らのDNAをかき集め、彼らの遺伝子を改造し、逆らうものを自由自在に操ることが出来る…………… 言わば働き蜂のようにな……………」

「ドレギアス!..... お前は、生き返らせた人類を奴隷にして..... 何が狙いなんだ!? 師匠やレオンさんを何処にやったんだ!!?」

「..... 二人の事か? 心配するな..... レオン・マクライトはともかく、陽弥・ギデオンなら我々の為に良い貢献を果たしている。そろそろ着くぞ♪」

すると星雲から巨大な影が見えてきた。

「何だあれは!!?」

それはプリズン・ソウルやグランドスフィアよりも数百倍大きく、赤と紫色の発光を放っている超大型の球状要塞であった。

「あれこそが我の帝国..... ”デススフィア”だ」

ドレギアスはそう言い、プリズン・ソウルとデススフィアを繋ぐ軌道上エレベーターでデススフィアへと向かう。

「何処へ連れていくつもり?」

するとエレベーターが中枢まで上がり、勇人はそこで思わぬものを目にする。

「っ!!」

巨大な容器の中にオパール化した陽弥が入っていた。そして容器の上下にたくさんのチューブが繋がっており、陽弥からインフィニティソウル、クアンタニウムハート、グリゴリ、アーククリスタルのエネルギーを抽出していた、

「お前! 師匠に何をした!!?」

「見ての通りだ..... 奴は我に全ての力を渡さないために、自らの体を結晶に変えた。だが、奴は愚かなことをしてしまった。結晶体から全ての力のエネルギー波を放出していたことだ.....」

「何だって!?!」

「エネルギー波を放出してくれることにより、ネザーによって皆殺しにされた地球人を生き返らせ、さらに彼らの文明も保たれている..... そしてこのデススフィアやプリズン・ソウルも建造できた。それにこの亜空間の狭間では誰も助けには来れない.....」

その直後、勇人がドレギアスに怒鳴り出す。



デススファイア内部下層エリアにある闘技場である。勇人は新生フェメシス騎士団の新入りを相手することになった。周りの観客席はグリニア帝国兵士で満席になっており、大声を上げていた。そして競技場の門が開き、中からグリニア帝国兵士から借りたアサルトライフルとハンドガンとアーマーを着た勇人が出てきた。そして向こうの門も開門され、現れたのは全身黒マントで覆われた者であった。開場は盛り上がり、開始のゴングが鳴った。

「試合開始!!」

勇人はアサルトライフルを黒マントに向け、乱射した。一方黒マントが勇人が乱射してくるアサルトライフルの弾道を予測し、回避する。

「ゴイツ………!」

勇人は掛けながら、アサルトライフルを撃ちまくる。しかし黒マントに弾が当たっていないく、撃っている内に弾が切れた。

「しまった!」

その直後、黒マントが襲い掛かかり、とてつもない速さで横蹴りをしてきた。

「っ!!」

勇人は急いで防御体制を取った直後、黒マントが別の方向に、横蹴りをしてきた。勇人はその方向に防御体制をしていなく、吹き飛ばされた。

「カハッ!!」

勇人は蹴られた所を抑えると、まさかの目の前に黒マントが粒子発射の構えをしていた。

「まさかそれは!!」

「粒子発射!!」

黒マントの発射が勇人の腹に炸裂し、吹き飛ばされた。

「グッ!!」

勇人は腹を抑え、黒マントに問う。

「その奥義……… 何処で………!?!」

「フッフ…………… ハハハハハハ!! どうだ勇人！俺の粒子発射は!!」

「っ!? その声…………… まさか!!?」

黒マントはそう言うのと、顔を覆っていたフードを取り外した。勇人は驚く、何故ならあの廃鉱でベリトの獄炎で火だるまになった洋介がグリニア帝国の技術で半身サイボーグ化していた。

「この時を…………… 待ちわびたぞ!」

洋介は不気味な笑みで勇人を睨んでいた。

「何でここにいるんだよ!!? ここは危ないんだ!!」

「危ない?…………… 何でだ?」

「何でって!…ここはドレギアスが造り上げた国家なんだ! 皆を生き返らせたのは奴隷にするつもりなんだ!!」

「…………… それが何だ?」

「ええっ!」

「あの蜂の巣で働いている奴等の光景…………… そしてここから高みの見物…………… 正に俺が求めていた理想! 弱者は強者に喰われる運命!」

「何を言ってるんだ!」

勇人は洋介の狂気に満ちたその表情に恐怖した。すると高みから見物していたドレギアスが言う。

「さて、新川 勇人よ…………… 嫌、荒神…………… どう、動く?」

ドレギアスは勇人を見ていると、洋介が止めを刺そうと、鉋を取り出した。

「死ねええええええっ!!」

洋介が鉋を振り下ろした直後、勇人の体が光だし、荒神化した。

「何っ!」

洋介が驚いている直後、彼の頬に勇人の拳が炸裂した。

「ッ!!」

吹き飛ばされた洋介は体を起こし、勇人を睨み、勇人も洋介を睨む。その光景を見ているドレギアスは勇人を見る。

「あれが荒神の力…………… 荒神化したクアンタ人の血を惹く者にしかできない力……………」

そして二人は互いの粒子発射を打とうと体制を整え、突撃した。

「はあああああああ~~~~~!!!」

「そこまでだ!!」

ドレギアスが試合終了の合図を出し、クアンタニウムハートの力で両者の動きを停止させた。

「もうよせ、二人とも……………今ここで粒子発射がぶつかり合えば起動してしまう事になっていた……………」

「だけど、コイツを!」

「黙れ……………」

ドレギアスが怒鳴る洋介に威圧で黙らせた。

「…………… チッ!」

洋介は舌打ちをし、競技場から立ち去る。そして観客席にいた兵士達は一斉に去り、持ち場へと戻った。ドレギアスは勇人を部屋で待機するよう命じられた。勇人はベッドに寝転がり、これからの事を考える。

「さて、どうやってレオンさんや師匠を助けて、他の皆に知らせれば良いんだろうか…………… う~~~~ん????」

勇人は深く考えていると、何処からか声が聞こえてきた。

「…………… うと」

「ん」

「…………… うと…………… ゆうと…………… 勇人……………」

「師匠!?!」

「良かった…………… 無事で……………」

「師匠も、あんな風になって……………」

「あんな風?」

勇人は陽弥の見に何が起こっているのか、説明した。

「ええっ!!?俺がアウラみたいなデススフィアの発電機代わり!!?」

「そんなんです…………… それと僕を虐めていた洋介も新生フェメシス騎士団に入っていて、ベリトは目覚めなく…………… とにかく!大変な事なんですよ~~~~!!」

「ん~~~~…………… 実は俺もレオンと一緒にいて、ブラムがドレギアス



に吸収されてしまったから……… 本来あるべきの力が発揮できないんだ………」

「そんなく！」

勇人は落ち込んでいると、陽弥がある提案を用いてきた。

「あ、そうだ！タイムだ!!」

「タイム？」

”タイム”……… 獣を手名付け、自分のパートナーにし、成長することによって絆が深まり、主を守ってくれる特技。

「そんなのがあるのですか!？」

「あるよ、前に俺がタイムした獣はユニゴルディアンでブラムはティアマトであったからなあ……… 多分、デススフィアにはまだ幼体である魔獣や魔蟲がいると思う。手名付けてみるよ♪」

「分かりました！」

勇人は陽弥の指示通りに従い、最下層にある魔獣や魔蟲が飼育されている施設へと忍び込んだ。巨大なフェンスの中にハルピユイアやパーピー、キュラドラス、ビッグス等の魔獣や魔蟲が飼育されていた。「うわあ、グリニア帝国はヤバイ奴等を飼育しているんだなあ………」

勇人は隠れながら歩き回っていると、何処からか異様な臭いが漂ってきた。

「うっ!?何だ、この臭い!？」

勇人はその臭いがする方向へと向かうと、何やら気になる鋼鉄でできた扉があった。

「あれだな………」

勇人は監守の目を盗みの鋼鉄の扉の奥へ入った。中は暗く、寒く、それでも勇人は電気を付けるスイッチを探す。

「寒くっつ！何でこんなに寒いんだ？おまけにあの異様な臭いがさらに増しているよく!？」

勇人が壁を頼りに沿って歩いていると何かのスイッチに触れた。

「ん？これか……？」

勇人は構わずスイッチを押す。すると上の照明が付き暗かった部

屋が明るくなる。勇人が部屋の中を見ようと振り替えた直後、彼の背筋が一気に凍り付いた。

「ツツツ……」

勇人が見たそれは、男女全裸で首がなく、足首に深い切り傷、それを縄で宙吊りにしていた。

「何だこれは?」

勇人はたくさんある死体に驚くと、陽弥から学んだ事を思い出す。

「あの足首の深い切り傷……… 血抜きの後……… と言うことは!! 食肉加工!!」

勇人はたくさんの死体を見ていると、外から誰かの足音が聞こえてきた。

「ヤバイー!」

勇人は急いで電気を消し、山積みの麦が入っている袋の中へ潜り込み、身を潜める。冷凍庫のドアが開き、現れたのは………

「本当に危なかった〜!」

「ダイジョウブですよ〜! 何とか忍び込めましたから!」

それは何と、あのコロニーにいる筈のシンディと天才的頭脳を持つ少女”真理亜”、そして他のクラスの中で超人並みの実業家である生徒会長を務めている”新井 雄二”と世界でたった一人の最強剣士である”五十嵐 知彦”と国際宇宙センター局長の娘であり発明家の”星川 志歩”と最高の新聞や雑誌を作るジャーナリストの”西園寺 瑠璃”とあらゆる医学を駆使して、患者を救う”瓜生 彩乃”と世界最強の剣士である五十嵐 知彦と並ぶ最強の格闘家”上野 玲二”がいた。

「(シンディに真理亜!? それにあれって雄二と知彦に志歩、瑠璃に彩乃、玲二も!!? 何で皆がデススフィアに!?)」

シンディや真理亜、さらに勇人の友達であった六人が来ていることに、勇人の頭の中がこんがらがった。

## after story 20 : 皆の決意

時は遡ること21時間前……………シンデイの元に真理亜がドレギアスに誘拐されたベリト（勇者）の助けを求めに来た。

「お願い！……………助けて！」

「え……………!?何ですか!?!」

「ベリトが……………ベリトが拐われたの!!」

「え!?!……………ベリトが!?!」

シンデイは驚くと、シンデイの体の中にいるサマエルが出てくる。

「やっぱり」

「サマエル!?!」

「ヒイツ!?!」

「怯えるな、小娘……………お前、ベリトの事を知っていたなあ……………アイツが拐われたって……………どうということなの?」

サマエルが怯える真理亜に威圧と恐怖を与えてくる。するとシンデイがサマエルに注意する。

「サマエル!そんなことをしたらこの子怖がっちゃう！」

「すまない、この小娘がベリトの事を知っていたからドレギアスの仲間かと思ってしまった……………」

その後、真理亜は落ち着きながらシンデイに話す。

「ええっ!?!勇者が拐われたの!?!」

「うん……………リムジンの内蔵カメラのシステムにハッキングして、見ちゃったんだ……………車内にガスを撒き散らして……………」

真理亜の話聞いていたサマエルがドレギアスの事を言う。

「厄介な敵に目付けられたねえ……………」

「あの、そのドレギアスって誰なのですか?」

「シンデイは……………ドレギアスの本性を知らなかっただけ?アイツは……………人間じゃない……………あらゆる時空や次元を終焉へと導く”異次元生命体”だよ」

「異次元生命体!?!」

「そう、かつてレオン・マクライトとその仲間達がドレギアスの野望を



「はあ、学園祭も終わっちゃったね？」

「ああ、三年に進学すれば、最後の学園祭になる。」

「それに勇人の奴、学芸会のあのコスチューム凄い派手でカッコ良かったね！」

「でも、一体どうやってあのコスチュームを持つてきたのでしょうか？」

「まあ、それは置いておいて、今度……勇人に謝らないか？小3の頃からアイツと達で……高校で再会したら、根岸の奴に虐められていて、助けに行けなかった……だから、今度……アイツに謝らないか？」

《うん！》

数人の男女は勇人件の事を話していると、ダンボールの山積みの中から、物音がした。

「シッ！誰がいる……誰だ!？」

少女は愛用の刀を抜刀し、積み荷のダンボールや真理亜のダンボールハウスも切った。ダンボールや物が塵へと変わり、中から抱き合っ

て怯えているシンディと真理亜が出てきた。

「お前たちは!？」

「はわわ……わわわ……わわわわわわわ!!!」

《勇人が拐われた!?!》

「ええ、真理亜が教えてくれたのです！」

「ドレギアス……突如、俺達の前に現れた謎の人物。まさか異次元生命体だったなんて……」

「俄に信じがたいが、勇人の為だ……シンディ殿や真理亜殿を信じよう！」

数人の男女が決意すると、シンディと真理亜はホツとする。

「俺は生徒会長の新井 雄二だ、よろしく♪」

「拙者は五十嵐 知彦と申す。」

「星川 志歩です♪」

「西園寺 瑠璃だよ！」

「瓜生 彩乃です♪医学の専門家ですから、安心してください♪」

「玲二…… 上野 玲二だ…… 困った事があれば直ぐ言え……  
ソイツを叩きのめしてやるからな！」

六人は自己紹介を終えると、早速、廃鉱へ向かっていった。八人は岩の陰に隠れると、トラックが来た。

「あれに忍び込むんだな？」

「うん……」

そしてトラックが廃鉱の洞窟の出入口で止まると、運転席から人の姿に化したグリニア帝国のパイロットが出てきた。

「あれって!?夢で見た敵に似ていない!？」

瑠璃が驚くと、シンデイが呟く。

「グリニア帝国軍…… やっぱり……」

《グリニア帝国軍?》

するとグリニアパイロットがトラックのコンテナからタイヤを取り出した。どうやら、左前輪のタイヤがパンクしたらしく、新しいタイヤに取り替えようとしていた。

「今だ……!」

シンデイ達は開いたままのコンテナの中に忍び込み、積み荷の中に入り、身を潜める。そして数分後、新しいタイヤを変え終えたグリニアパイロットはトラックに乗り、洞窟内で異次元ポータルでデススフィアへ転移された。そしてトラックが倉庫外に辿り着き、フォークリフトカーがシンデイ達が身を潜めている積み荷を入れ終え、シャフトが閉じた。そしてシンデイ達は積み荷から出てくる。

「本当に忍び込めた！」

「まさか…… 私達の世界の裏に、こんな施設があるなんて……」

すると瑠璃が通気孔を見つける。瑠璃は小柄の体で通気孔に入り込み、倉庫外へ出て、シャフトを開けた。

「開いたよ♪」

「ナイス瑠璃！」

雄二は瑠璃にグーサインを出して、奥へと向かう。そしてシンデイ

達が辿り着いた場所は魔獣と魔蟲が飼育されている場所であった。

「なあ……………俺達、夢でも見ているのかな？」

玲二が凶暴な魔獣を見て、驚く。

「これがグリニア帝国軍の軍用魔獣……………ん？」

シンデイが冷凍庫のドアを見つける。

「一旦、彼処に隠れましょう……………！」

シンデイ達は、兵士の目を盗み、冷凍庫に入る。

「本当に危なかった〜！」

「ダイジョウブですよ〜！何とか忍び込めましたから！」

「何か真っ暗だね？」

「電気を付けよう……………」

知彦が冷凍庫の電気を付けると、吊るされている首がない死体に皆は驚く。

《ツ————!!!》

「何……………これ……………!？」

志歩は口を抑えていると、彩乃が死体の足首に付けられている傷を見る。

「深い切り傷……………明らかに血抜きの後だわ……………ん？」

彩乃が突然、足元を見る。

「……………皆……………この足跡なんだけど……………まだ新しい

わ……………」

「えっ!？」

「この冷凍庫の中に……………誰かがいるのか？」

皆は辺りを探すと、山積みの麦が入っている袋の中にいる勇人が焦り出す。

「(どうする!?ここで『やあ♪』って出てきたら、話にならないじゃん!?!落ち着け!僕……………!)」

勇人はそう考えていると、雄二が山積みの麦の袋に目を付ける。

「まさかな……………」

雄二はそう思い、一袋を除けた。

「……………」

勇人と雄二が互いの顔を見て、驚く。

「や……………やあ♪」

「……………え？……………ええっ!」

皆も雄二の反応に気付くと同時に、袋の中に隠れている勇人を見て、驚く。

《勇人!》

「……………皆……………久しぶり……………♪」

勇人は袋の中から出てくる。

「何で勇人がここに!」

「事情があつてここに来たんだ」

「そっか、それと勇人……………」

「ん?」

すると雄二達が勇人に深く礼をする。

《ごめん!!》

「……………」

「あの時は、勇人が洋介に虐められているのを黙って見ていて……………本当にごめん!」

「……………良いよ♪僕は、友達である雄二達を恨んでいない……………それに、こうして僕の事を心配してくれる雄二がデススフィアまで来てくれるなんて……………考えもしなかった……………」

《勇人……………》

雄二達は勇人の優しい言葉で目に涙を浮かばせる。

「さて、早いとここの魔獣をタイムしないと……………見つかってしまう……………」

《タイム?》

「シンディはタイムの事を知っているね?」

「ええ、勇人と一緒に teacher に学びましたからね♪」

「うん、雄二達は知らなかったなあ……………タイムと言うのは、獣を手な付けることなんだ。」

「え?つまり、あの檻の中にいたあの化物を?」

「そうしたいんだけど……………人面鳥や吸血獣だと力不足かな?多



分……………何処かにヤバイ魔獣をタイムしようかなあと……………」

「それって……………大丈夫なの？」

「大丈夫、大丈夫♪」

皆は不満に思いつながらも、彼に従う。そして冷凍庫から出る。

「コイツ等……………一体こんな化物を飼育して、何を相手しようとして  
いるんだ？」

知彦が魔獣を見てみると、勇人が解説する。

「師匠やレオンさんの世界を壊すつもりだよ……………このデススファイア……………僕たちが住んでいたこの牢獄であらゆる時空と次元を破壊するつもりなんだよ……………」

「時空と次元を……………!？」

「破壊……………!？」

「そんなことをしたら、どうなるの!？」

「意味もその通りだ……………何もない虚無の世界……………もうドレギアスに刃向かうものなどいない……………僕たちは、奴の家畜か魔獣達の餌にされるかだ……………師匠が教えてくれた、それがドレギアスの本性だ……………アイツは『ザ・コア』て言うどんな願いも叶えることが出来る力で完全体になるつもりらしいんだ……………そうなる前に……………」

「ソルジャーに知らせて、奴を倒す!て訳か……………」

「嫌、軍の戦力だけでは、赤子の頬を捻られる様な感じだ……………だから、師匠やレオンさん達の勢力との連合軍でドレギアスを討つ!その為にはこの空間から出ないと……………」

「え?空間からでないとして……………どう言うことなんだ?」  
「……………実は、」

勇人は皆に真実を話した。勇人とシンディを除いて、他の地球人はドレギアスによって生き返ったクローンで住んでいた世界は地球ではなく、ドレギアスが造り上げた監獄世界、そして今いる場所は誰も寄せ付けることができない暗黒の狭間と言う場所にデススファイアと言う強力な巨大要塞国家に在ると言うこと……………勇人からの真実を聞いた雄二達は、言葉も返すことが出来なかった。

「言いたくなかったんだけど…… 事実だ…… 師匠を助けた直後に、雄二達は消滅する…… どうすれば良いのか、迷ったんだ…… どうやれば皆を生存率を上げるか、どうやって師匠を助けるか……」

勇人が落ち込んでいると、彩乃があることを閃く。

「そうだ！『ザ・コア』なら!? 『ザ・コア』にクローンである私たち地球人をオリジナルに書き替えれば！」

「勇人の師匠を助けられる！」

「なるほど、そうすれば……！」

「ドレギアスは完全体になれなく、敗北する！」

「その為には、この空間から出て、皆に知らせないと……」

皆の決意が纏まった直後、デススフィア内部にサイレンが鳴り響く。

「マズイ！僕がいないことがバレた！急いでタイムする獣を探さないと！」

すると勇人の頭の中から、おぞましき声が鳴り響く。

『若輩の荒神よ…… 聞こえるか?』

「っ!？」

「どうしたの?」

瑠璃が勇人に問うと、横の巨大なシャフトから禍々しきオーラを放っていた。

「皆…… 付いてきて……」

《?》

雄二達は勇人に付いていく。そして勇人が巨大なシャフトの暗証番号を解読し、入力する。すると数人のグリニア帝国兵士が暗証番号を入力する勇人を発見し、慌てる。

「っ!!お前!!その大型シャフトの中にある失敗作“超魔龍”を出してはいかんっ!!」

「え?」

そして大型シャフトが開き、暗闇の奥から唸り声が響く。

「っ!？」



勇人はカオスドレイクの額に触れると、カオスドレイクの額に剣の紋章が浮かび上がる。そしてカオスドレイクが勇人を見て、叫ぶ。「承知した……マイ マスター……それと、あのシャフトの中に三獣王達とユニゴルディアンとティアマトが封印されている……」

「分かった！」

勇人はもう一つの大型シャフトを開けた。中から白く輝く陽弥の愛馬”ユニゴルディアン”、ブラムの愛獣”ティアマト”とカイオウ、シンオウ、エンオウが姿を現した。そして雄二達は勇人の指示通りに従い、酸素マスクを付け、カオスドレイクにしがみつく。

「しっかりと捕まっておけ！」

カオスドレイクは口から収束エナジービームを放ち、大きな風穴を開けた。そして勇人達を乗せたカオスドレイクやユニゴルディアン、ティアマトと三獣王達がデスファイアから脱出した。この時、別のシャフトが開き、中から水色の衣を着た美しい女性の聖霊が勇人達を追う。

そして最下層部の牢獄に全身傷だらけのレオンが囚われており、カオスドレイクが外壁を突き破る。

「うわあっ!!?」

レオンは驚くと、カオスドレイクの背中に乗っている勇人が手を差し伸べる。

「レオンさんー早く!!」

レオンは持っていたアーティファクトを持ち、カオスドレイクの頭に跳び移った。カオスドレイクがゆっくりと動き、今度は上層の方へ向かう。一方、ドレギアスは指令室から状況を確認をとっていた。

「状況はどうなっている?」

「荒神が三獣王達や失敗作を解放し、デスファイアから脱出されてしまいましたーそして捕獲したレオン・マクライトも連れてー!」

「レオン・マクライト……… 因縁の敵!!」

ドレギアスはそう言うと、ディザスターを持ち、ゼロがある格納庫

へと向かう。そしてフェメシス騎士団や洋介、クローンレオンが動き始めた。

afterstory21:もう一人の異次元生命体

デススファイア軌道上にて、カオスドレイクに乗った勇者達は解放した三獣王達やユニゴルディアン、ティアマトと共に、巡回していた艦隊を次々に撃沈していく。その光景に勇者達は驚いていた。

「凄い……………」

「これが、異世界の力……………」

彩乃と玲二が五体の獣の力に見惚れていると、デススファイアの発着場から、黒い影が出てきた。

「あれは!!」

勇者にとつて、それは見覚えがあつた。それはかつてネザーが使っていたゼロであつた。

「何……………あれ……………!?!」

志歩がゼロを見て驚くと、勇者が言う。

「ゼロ……………」最凶にして最悪を招く人造生命体だ」

《っ!?!》

皆が驚くと、ゼロに乗っているドレギアスが言う。

「察しの通りだ……………」新川 勇者……………そしてレオン・マクライト」

「ドレギアス!!」

「ゼロは完全に私を受け入れた……………最早、貴様達の力では勝てないぞ」

その直後、カオスドレイクが咆哮を上げ、ドレギアスに襲い掛かった。ドレギアスはカオスドレイクの噛み付き攻撃を受け流すかのように回避しながら、カオスドレイクに言う。

「久し振りだなあ、失敗作……………」

「ドレギアス!!!」

「貴様の処分はまた今度だと思つたが……………今からでも良いか……………」

ドレギアスは笑うと、オロジャークを抜刀し、振り上げた。

「危ない!!」

レオンが前に出て、鞘からアーティファルソードを抜刀し、巨剣を受け流す。

「グッ!!」

オロジャークの刃から放出する禍々しき人の憎悪と怨念のオーラがレオンを苦しむ。

「これが厄災の力!..... まともになんかこれを受けていたら、いくら俺でも身が持たねえ!」

レオンは力を振り絞り、オロジャークをはね除けた。

「レオンさん!!」

レオンの体中にギガオロチの入れ墨が浮かび上がる。

「ハア..... ハア..... ハア..... ハア..... ハア.....」

レオンは苦しみながらも、アーティファルソードを構える。

「苦しいか、レオン・マクライト..... 我の怨みは?」

「..... ああ、効くよ..... この痛み..... この苦しみ..... だがな、先生の修業の方がもつと痛いなあ!」

レオンは鼻で笑い飛ばし、アーティファルソードを突き付ける。

「オメガメールもない貴様に何が出来る?」

ドレギアスがレオンに問うと、勇人が言う。

「出来るさ!」

すると勇人の体が光だし、荒神へと変身した。雄二達は勇人の姿に仰天する。

「あれってコスチュームじゃないの!?!」

「でも..... 綺麗な、光.....」

「勇人.....」

シンディ達が勇人を見守っていると、ドレギアスの元に、ガイラス、シエレナ、カロール、洋介が飛来した。

「荒神..... ついに本当の姿を現したか..... クアンタ人の末裔よ.....」

「勇人は精神を研ぎ澄ましながら、陽弥直伝の舞い躍りをする。  
「ハア.....」

その直後、洋介はドレギアスから受け継いだローガストメイル『ディアブロZ』で勇人に襲い掛かった。

「ごちゃごちゃと何やっているんだよ!!」

洋介が10メートル以上伸びたダイダイトウを降り下ろした直後、勇人の掌底打ちがダイダイトウの刃に炸裂した。ダイダイトウの刃に亀裂ができ、ダイダイトウが粉々に砕け散った。

「はあああああ!!? 砕けたあああああつ!!」

洋介が慌てている隙に、勇人は上空に舞い上がり、ダイダイトウが展開した雷が勇人の足に纏う。そして勇人は蹴り技の一つ“雷刃落とし”をし、真っ先にいる洋介へと向かってくる。ドレギアスは驚き、ガイラス、シエレナ、カロールに命令する。

「お前達!!」

ガイラス、シエレナ、カロールはビームライフルで応戦するが、勇人の足に纏っている雷が電磁波を放出し、ビームを拡散してしまう。

「バカなツ!!」

ガイラスは前に出て、防御体制を取る。

「喰らえっ!!」

勇人の雷刃落としがガイラスの両腕の鎧に直撃し、鎧も粉々に砕け散った。

「何だど?」

そしてガイラス達は勇人の蹴り技の衝撃波により、フェメシス騎士団全員を吹き飛ばした。その光景にドレギアスは勇人を鋭く睨んだ。

「まさかここまで力が覚醒していくとは…………… 勧誘と言ったが、気が変わった…………… やはり、抹消すべき敵であった!」

勇人は元の姿に戻り、皆の元に行くと、

「スゲエよ! 勇人! 今の技は何だ!!」

「…………… 師匠直伝の技…………… かな?」

「でも、凄いよ! あの姿見るだけで血が騒いできたぜ!」

皆は勇人の力に興奮していると、シンデイが勇人に抱き付く。

「シンデイ?」

「……………」



「ごめん……………」

勇人が謝罪している直後、ドレギアスがハイパーノバビームライフルで勇人の方に狙いを定める。

「荒神…………… 我の復讐と野望に終焉をもたらず存在！今ここで排除してやる!!」

「…………… あなたの思い通りにはさせませんわ」

「何ッ！貴様は!!?」

するとハイパーノバビームライフルの銃身に水色の衣を着た女性が勇人に撃たせないよう、反らしていた。

「貴様…………… 誰だ!？」

「あの子は未来を切り開く大事な巫…………… それに貴方のような穢れに満ちた者だと、あの子は止められませんよ」

「邪魔をするな!」

ドレギアスは謎の女性から離れようとするが、女性は長い髪でライフルにまとわりつく。その様子にレオンが言う。

「誰だあの女性は?」

「けど、ドレギアスの邪魔をしているよ!」

「あの女性…………… 敵か味方か?」

すると、女性は勇人に問う。

「勇人…………… あなたが住んでいるあのコロニーの一部を切り離しなさい…………… 今こそ、革命を起こす時です」

女性はそう言うと、勇人に青く輝く刃を持つ剣を渡した。

「これは!？」

「"ザ・シード"です……………」

勇人はザ・シードを手に、ハニカム型のコロニー（勇人の世界）を繋いでいる連結柱を一振りで両断した。そして勇人は荒神化し、雄二達を手に乗せ、コロニーへと向かう。

「雄二達は急いで学校に戻って、放送室で演説して、真理亜はこのコロニーの主導権をハッキングして!」

「分かった!」

「僕はこのコロニーを動かす!」

勇人はそう言い、コロニーを押し出す。

「動かすって……まさか!？」

「このコロニーを……惑星ホライゾンへ飛ばす! エミリアさんにマナちゃんの無事とドレギアスの野望の事を知らせないと!」

勇人はさらに出力を上げ、コロニーを動かす。

一方、ドレギアスの方は謎の女性に苦戦していた。

「何故、私の邪魔をする?! 人間などまた過ちを繰り返すだけだ!」

「人間は確かに愚かです……ですが、彼らにも生存本能があります。過ちを犯せば、間違った事に気付く。貴方のような間違った権力で何も解決しない!」

「黙れええ!!」

ドレギアスがマガダイトウを伸ばし、天へ掲げる。

「ギガオロチよ! この女を抹消せよ!!」

赤黒い蛇のオーラが謎の女性に襲い掛かかる。すると謎の女性が呪紋を発動した。

「フオース!」

その直後、異空間の時間が止まり、全てが停止した。

「貴方は……ザ・コアを手に入れて何がしたいのですか? ……それで良いの?」

謎の女性が手から青く輝く剣を取り出し、ドレギアスに降り下ろした。

「いいえ……そんなの良くない……貴方が悪なら……私は善……あの子の為に、最後まで戦う! リブート!」

女性が叫んだ直後、時間が動きだし、攻撃した波動がドレギアスを襲った。

「バカなツ!! 異次元生命体である貴様にこんな力などないはず!」

「覚えておきなさい、ドレギアス……私の名は、フェイト……正しき運命に導く者! そして貴方と同じ……エンブ

リヲによって誕生し、ザ・シードの力で完全体へとなった異次元生命体ですわ!!」

謎の異次元生命体フェイトの言葉にドレギアスが驚く。

「ザ・シードの力だど!?するとアイツに渡したあの剣……………グッ!!!異次元生命体フェイト……………覚えたぞ、その顔、その形……………その力……………!!!ザ・シードの存在……………絶対に手に入れてやる!!」

ドレギアスはそう言い、新生フェメシス騎士団やクローンレオンと共に、デススファイアへ帰還した。フェイトは剣をしまい、勇人のコロニーを押し出す勇人の所へと向かう。

一方、雄二達はコロニーの制御室に入り込み、真理亜と志歩が回線を直結したり、ハッキングし、全ネットワークに繋いだ。

「良いよ!」

「繋がったよ、雄二君!」

志歩が雄二に放送室にいる雄二に知らせる。雄二は全国に真実を告げた。

「皆さん、こんばんわ……………新井 雄二です。皆さんは知つての通り……………」

「よし!後は皆の声明を待つだけだ!」

知彦と玲二が安心してしていると、非常口から複数のグリニア帝国兵士が襲来してきた。

「放送を止めろ!」

知彦と玲二は身を隠し、刀とグローブを取り出し、迫り来るグリニア帝国兵士を倒していく。知彦が素早い剣技でグリニア帝国兵士のアーマーも切り裂き、玲二の拳が機銃の如く速さで、グリニア帝国兵士をノックアウトしていく。すると二人の危機にレオンも駆け付けた。

「俺も混ぜてくれないかな?」

「良いですとも!!」

レオンはアースセイバーを鞘から抜き、奥義を発動した。

「真空斬!!」

アースセイバーから風が巻き上がり、後方にいるグリニア帝国兵士達も巻き込まれる。

勇人もコロニーを押し出す為に全力を尽くしていた。

「頼む!もつと動いてくれ!」

するとデススフィアから対空ブラスタが狙い撃ちをしてきた。

「クソツ!ドレギアスめ!!」

絶体絶命の時、駆け付けたフェイトが勇人の体に入り込む。

「勇人:..... ザ・シールドの力を使いなさい:.....」

「どうやって!?!」

すると勇人の背から6枚の羽が展開され、それと同時にカオスドレイク、ユニゴルディアン、ティアマト、三獣王達が一緒にコロニーを押し出す。

「皆:..... 良し!!」

勇人は6体の獣達と共に、とてつもない勢いでコロニーを押し出す。それを見ていたドレギアスと言う。

「逃がすな!」

デススフィアから対空ミサイルが発射されるが、フェイトが次々とミサイルを破壊していく。

「邪魔を:..... するなあああつ!」

フェイトは手から光の球体を出し、デススフィアへと投げつけると、光の球体が超新星を放ち、デススフィアの4分の1が破壊された。その光景にドレギアスやグリニア帝国兵士達も驚く。

「そんなバカなツ!!」

フェイトは大破したデススフィアを睨み、その隙に、ザ・シールドを取り出す。

「ザ・シールドよ!勇人達を惑星ホライゾンへ導きたまえ!!」

フェイトの応えにザ・シールドが強く光出した。コロニー前方に特異点が出現し、向こうに惑星ホライゾンが見えていた。そしてコロニーはそのまま特異点を通過し、追っ手が来ないよう特異点特異点を閉じた。大破したデススフィア指令室でドレギアスは勇人達を逃がしたことに怒り、デイザスターを抜き取り、機材を切り刻んでいった。そのせいか、巡回する兵達も見えないふりをして、去っていくのであった。

勇人は変身を解き、コロニー内部へ帰還すると、雄二達の放送を聞いていた人々が賛同し始め、次々とグリニア帝国兵士を牢に入れていく。

「勇人！俺達の言葉が皆に聞いてくれた！」

「分かっている……皆よく頑張った！」

雄二達は感心すると、レオンが勇人に言う。

「今のは立派であった……… だけどスマン……… 陽弥を助けられなくて………」

「実は僕も考えていたのです…… ザ・コアならここにいる人達の遺伝子を改造して、師匠の力が無くても、自由に生きることができるようになります。」

「そうか……… それと、あの女性………」

「私の事ですか？」

すると勇人の体の中からフェイトが出てきた。

「お前…… さつき、異次元生命体フェイトって名乗っていたな……… あの力…… 『ザ・シールド』って何だ？」

「……… 『ザ・シールド』、ザ・コアと言う存在のもう片方に存在する

力…………… ザ・コアがどんな願いを叶えてくれるなら、ザ・シードは運命の時を動かすことが出来る…………… 私はそれを手に入れ、完全体へと覚醒したわ……………」

「覚醒へと、まさか時空融合じゃないだろうなあ!？」

「まさか? 私はそんな野蛮なことをしませんわ…………… 借りているだけですよ♪」

「借りている?…………… 誰からだ?」

「それは言えませんわ、彼は素晴らしき武術の者ですから…………… それに、」

するとフェイトは勇人にしがみつくと、衝撃的な言葉を放った。

「家の息子が大変な事になっていましたから、神様が異次元生命体に転生してくれたのです♪」

フェイトの言葉に皆は驚愕した。もちろん勇人本人も。

《う、う、家の息子……………》

「フェイトが…………… 僕の母さんが転生した人物!?!?!?!」

その頃、シン達はレオン側のサラ達を乗せたシタデルやグランドスファイアが惑星ホライゾンのある星系に辿り着いた。

「やれやれ、ここに戻ってくるのは何時ぶりだ?」

シンはそう考えていると、謎の通信を傍受してきた。

「通信です! モニターに出します!」

『…………… レオ…………… マ…………… ライ…………… ト…………… 誰

か…………… 聞いてくれ! こちらレオン・マクライト!』

《っ!!》

「レオン! 良かったです!」

『サラ!?何でシタデルに!?』

「我々アウラの民とノーマ、フロンティアは大銀河連合と同盟を結び、ドレギアスに反抗するレジスタンスを結成したのです。」

「それで、シタデルに……………」

レオンは納得していると、サラに抱っこされているヒウガが父が帰ってきた事に笑顔になる。するとレオンの足元からマナが映る。

「じいじーばあばー！」

《マナ!!》

ギデオン一家は孫娘が無事であることに、驚いていた。

「良かった…………… マナが無事で……………」

シンはその場で泣き崩れると、ヒルダとルナが慰める。するとヒルダが陽弥がいないことに気付く。

「あれ?…………… 陽弥は?」

するとレオンの表情が暗くなると、勇人が代わりに説明した。

「何だ?!陽弥がアウラみたいにデススファイアの発電機扱いされているのか!？」

「僕も驚きました…………… デススファイアの動力炉が、まさか師匠で、他のコロニーにいる人達を閉じ込めているのです。さらに、ドレギアスは師匠の体からブラムを吸収して、自分の闇にしているのです……………」

「ブラムも…………… 何てことだ…………… 分かった、グランドスファイアにコロニーを回収して、ホライゾンへ向かう…………… ハア、二人の姫さんに叱られるか、殺されるか、罰を受ける覚悟しておかなければ……………」

「殺される」は流石にないでしょ」

勇人は呆れ、コロニーをグランドスファイアに回収された後、雄二達やレオン側のサラ達と共にホライゾンへ突入した。

## after story 22：見学

エルシュリア城 謁見の間

シン達はアストラッド王と再会した。

「1ヶ月前ぶりですね…… アストラッド王よ」

「いえいえ、ギデオン夫妻やルナさんやココさん、ミランダさんも御疲れでしょう?」

《いえいえ♪》

ギデオン家とクリーフ家の仲にレオンは勇人に問う。

「何か凄く仲良くない?」

「ああ言う家系なので、師匠の御家族は♪」

すると、別の通路からゴスペルを連れたイザベルと双子の男の子を抱えているエミリアが無事であるマナを見て、駆け付ける。

「マナちゃん!」

「ママ!」

マナがエミリアに抱き付く。マナがエミリアに抱っこされている二人の赤子を見て、首を傾げる。

「マナちゃん、あなたの弟と妹 オリバーとライラよ♪」

マナは二人の弟と妹を見て頭を撫で始める。エミリアは皆の中に陽弥がいないことに気付く。

「陽弥様は?」

皆が黙り混むと、シンが言う。

「…… 陽弥は「まだドレギアスを追っている」」

突然勇人がエミリアに虚言を吐くと、エミリアは勇人の嘘を信じた。

「そう、陽弥様…… まだ戦っているのですね……」

「ええ、」

勇人は何とか、エミリアを安心させると、シンが小声で言う。

「どうして嘘を言った?」

「…… 師匠から言われたのです。もし、俺やブラムの身に何か起これば、エミリアは悲しみ、永遠に植物状態になるだろう……」



から、嘘を言ってくれ……、と」

「陽弥が…… そんなことを……」

勇人は頷き、シンはため息を吐く。そして謁見が終わり、勇人は雄二達連れ、エルシュリア王都を見物していた。

「ほえ、外観は西洋風の街だけど、魔法を使用して生活しているんだなあ」

雄二は感心していると、勇人が解説する。

「昔はソロモニア戦記でエルシュリア王国は陥落していたけど、師匠が全勢力やボランティアでエルシュリア王国を再建させたんだよ」

「へえ、そう言えば勇人…… お前が言う師匠って、もしかしてシンさんやエミリア姫が言っていたその陽弥って言う人物？」

「そう、彼はヴァルキュリアス総統で、エミリアさんの夫♪」

「何で彼のことを師匠って言うんだ？」

「…… 僕を強くしてくれた恩人だから♪」

「強くねえ…… そんなに凄い人なのか？」

「そりゃ、そうだよ！ 何せ彼は9人の護星神を束ねる超・護星神だから♪」

「…… 陽弥ってまさか神様!？」

「そうだよ、見た目は20歳だけど、僕とシンディを次元の狭間で2000年間も教練していたから、4020歳かな？」

「4020歳!!…… 待てよ? その場所で2000年間と言うことは?」

「そう、僕の年齢”2017”歳だ」

勇人の言葉に雄二達は腰が抜けた。

《…… 2017歳》

「何なら、戦いが終わったら今度、師匠と一緒に次元の狭間へ行ったら?」

「嫌、いいよ…… これ以上解説されると、付いてこれなくなる……」

「そっか♪」

すると知彦と玲二が言う。

「拙者も、その次元の狭間に行きたいでござる。そこならば歳はとらなく、時間も止まっているのか？」

「うん」

「そうか、なら……存分に修業が出来るなあ♪」

「知彦に似合った人物と言えば、師匠の友人であるリヨウマさんに稽古付けて貰ったら？」

それから勇人はホライゾンのあらゆるところを案内した。科学と魔法が結晶化した連合国家『グラシオン連合』とエルフ族やダークエルフ族が共同する国家『アテナイ共和国』。アレクトラさんが住んでいるヘルガストの援助されている機械帝国『ヴァルヴァートル帝国』。交易が盛んな海の国『ヴァランドール皇国』の建物や美味しい料理を食べべたり、見て回っていった。

## after story 23 : 虚無の空間

勇人達が各国へ見学中、陽弥を除いたギデオン一家は……

「お爺ちゃん達だよ〜♪」

シン達はエミリアに抱き付いている陽弥とエミリアの新たな双子“オリバー”、“ライラ”に微笑ましい表情を浮かべていた。

「可愛いなあ〜♪」

その光景に、レオン達は呆れていた。

「シンさん……キャラ……全く違う」

「まあ、御孫さんが出来ればそうなりますよ♪」

「あうー！」

サラとヒュウガは頷くと、シンがレオンに言う。

「さて、レオン・マクライトよ……お前に頼みがある」

シンはそう言うと、レオンだけを連れていく。その様子を見ていたサラとエミリアは後を付ける。そして小部屋でレオンはシンからの頼み事に驚く。

「ええ!!?俺が臨時総統を!!?」

「頼む!陽弥がいない代わりにお前が代わりに皆を指揮してくれ!」

「そんなこと、できるわけありませんか!!」

「……………君がやらなければ、他の誰がやる?」

「!?!」

「他の誰がやれば……戦況が酷くなる。だから頼む……優位津ドレギアスを討伐したレオン・マクライトなら……皆を導ける……お前なら、できる」

「……………」

「そうですよ、」

「!!?!」

小部屋の出入り口に、シンとレオンの話を聞いていたエミリアとサラがいた。

「サラ!?!」

「姫様!!?」

「嫌!これは色々あつて……」

「御義父様……嘘はいけませんよ」

「!？」

衝撃の事にシンが驚くと、エミリアは言う。

「……気付いていませんと思いましたが?……それに、陽弥様の言う通りですわ、御父様は嘘を言うの苦手……♪」

エミリアは満面な笑顔を見せる。

「……さすが、陽弥の嫁さんだ……あの馬鹿息子め……俺が嘘を言えない事を嫁さんに見切るように教えたんだな……今度アイツが戻ってきたら、お説教しないとな……」

「フフフ♪」

するとサラがレオンの肩に触れる。

「レオン……」

「……わかったよ、」

レオンは決意し、シンに言う。

「シンさん……いえ、シン・ギデオンさん……臨時総統を慎んでお受けします!」

するとシンはポーチから青い装飾が付けられたインカムを渡され、レオンはインカムを耳に付ける。それをサラに見せる。

「どう……かな?」

「似合うと思いますよ♪」

サラに褒められ、レオンは照れる。そしてシンは小部屋の窓から見える空を見上げる。

「(陽弥……生きていろよ……お前が死んだら、あの子等やお前の弟子の勇人の面倒見ないといけないからな……)」

シンは空を見上げながら、陽弥の事を思っていた。

その頃、ここではない何処かの異空間……ドレギアスによってデスファイアのエネルギーコアとして囚われている陽弥がアナザーモードとなつてその異空間にいた。

「ここは……一体?……確か俺は……」

陽弥はあの時の事を思い出そうとした時、背後から気配がした。「っ!?!」

陽弥は振り向くが、誰もいなかったその直後、胸部を誰かに突き刺された。

「ゴヘッ!!」

つが、陽弥は目を覚まし、自分の胸部見るが何も突き刺さっていなかった。

「どうなっているんだ?!」

「やはり……護星神の称号を獲得しているか……若輩者」

「誰だ!?!」

陽弥は後ろを振り向くと、そこに陽弥よりも小さい少女がいた。陽弥は警戒すると、少女は長い杖を持ち、陽弥の頭を叩く。

「この若輩者があのアプスとニケの子孫か?……ただの下級神ではないか」

「いででっ!誰?!」

「妾は”テミス”【掟の女神】じゃ」

「掟の女神?」

「我等、【ティタン神族】はお前の曾祖父と曾祖母の命によって、この領域に立ち入れることを許しているのじゃ……」

「アプスと……ニケが……?」

「そうじゃ……付いてこい」

テミスはそう言い、陽弥を案内する。そこは門であり、扉が開くと、中には複数の男女が集まっていた。

「テミス「口を慎め」あ、テミス様……彼等は?」

「さっきの話を聞いていただろ?……【ティタン神族】じゃ……」

中には巨人達よりも大きな巨神が陽弥を睨む。そして奥の間に、玉座が見えていた。

「何が始まるのですか？」

「口を慎め」

「え？」

するとティタン神族が一齐に静まると同時に、玉座から歪んだら空間が現れる。そしてその空間から漆黒の鎧、紫のマント、顔に複数の傷が付いた男神が現れ、玉座に座る。

すると今度はその男神の横に別の玉座が現れると同時に、背部に太陽の光を照している神とそれに類似の服装をした神々が現れた。

すると一人の神官が二人の神族や長の名を確認する。

「ギリシア界の神族【ティタン神族】とそれを引き連れている長”クロノス”殿下」

「フント」

クロノスが鼻で笑い飛ばすと、神官は次の神族を言う。

「エジプト界の神族【エジプト神族】とそれを引き連れている長”ラー様」

「どうも♪」

太陽の神であるラーはおっとりとした表情で挨拶する。そしてクロノスとラーの横に別の玉座が複数出現し、それぞれの神族を引き連れてきた神々の長が現れる。アステカ神族を引き連れた”テスカトリポカ”、アルメニア神族を引き連れた”アラマズド”、インカ神族を引き連れた”パチャカマック”、ウガリット神族を引き連れた”アーシラト”そして陽弥の世界を束ねているアースガルド神族の王”オーデイン”達も来た。そして最後に、

「星空界の神族【タイタニス神族】の長”陽弥・ギデオン”総統」

神官が陽弥の名前を言った直後、全神々の視線が陽弥の方を向く。

「うっ!」

皆の鋭い眼差しと威圧に陽弥は抑え込まれる。すると陽弥の目の前から玉座が現れ、陽弥は静かに座り込む。すると玉座が移動し始めると、大きな円卓のテーブルが出現する。そして神々の玉座が円卓に

添って並びぶと、一つの玉座だけ、とても大きかった。

「あれは？」

陽弥は首を傾げると、ラーが説明する。

「あれは……」

その時、大きな玉座からとてつもない異空間が出現した。

「っ!!?」

陽弥は驚くが、他の神々は平然としていた。徐々に異空間の形状が変わり、人へと変わった。その人物は陽弥も知っている人物であった。

”カオス（混沌）”……”

そう、かつてジュリオによって、エターナルソウルハートを奪われ、陽弥によって助けられた全ての神々の議長『混沌の存在』……”カオス”であった。圧倒的な威圧が全神々を圧倒しながら、玉座に座る。するとカオスが指を鳴らすと、テーブルの上に紅茶が出現した。

「これより、第3872回全時空会議【母なる大地】を開廷します。」

神官の御言葉に、全神々はそれぞれの時空の治安や状況、解決を報告したり、提案していく。そして、

「では、次に……陽弥・ギデオン総統♪」

「(ギク!ギク!ギク!!?)」

全神々の視線がまた陽弥に向けられる。陽弥は緊張するが、思いついてあることを話す。

「はい、現在……我等の世界に、於曾ましき生命体が襲来しました。」

『ほお〜?生命体……何だその生命体は?』

カオスが問うと、陽弥の目が真剣な眼差しへとなり、全神々を威圧させた。

「【異次元生命体 ドレギアス】です。」

陽弥の放ったドレギアスの名に、神々の空気がざわめく。陽弥はドレギアスの野望の事を全て、全神々に話す。

「ドレギアスだ?!俺等や全神々の次元を荒らし回ったあの生命体か!!?」

「ええ、自分はドレギアスによって、本来の体が囚われており、今は精神状態で活動しております。」

「なんと…… 神も怖れないのか……」

「なんとじゃない!!」

クロノスが立ち上がると、神々に言う。

「奴は【ザ・コア】とか言うおかしなエネルギーを狙って、我等の世界を壊していったのだぞ!!」

「まさか、ドレギアスが復活するなんて…… 今度は何処の時空が壊されるんだ」

「奴がいなくなつて精々したのに！またかよ!!」

状況が荒々しくなり、喧嘩や暴動をする神々もいた。

「(もしかして…俺のせい?)」

陽弥がそう思っていると、カオスが言う。

「静粛に……静粛に……」

しかし、神々はカオスの言葉すら耳を傾ける様子はなく、カオスは仕方なく腕部を変形させ、ブズドニウムブラスターを天へ射つ。ブズドニウムブラスターの銃声が鳴り響くと同時に、喧嘩や暴動を起こしていた神々が静まる。

「現、ドレギアスは何時、何処で”ザ・コア”、”ザ・シード”を狙っているか分からぬ。全神々よ……気をつけるのだ……。」

カオスはそう言うのと、神官に命令した。

「これにて、第3872回全時空会議【母なる大地】を閉廷します。」

神官が言うのと、全神々が一齐に消え、カオスと陽弥だけ残っていた。「久しぶりだな……ミッドガンドの護星神……。」

陽弥はカオスに礼儀が良いお辞儀をする。

「こちらもです…カオス様」

「元々は、お前が招いてしまった事だ。責任……取れるか?」

「………御意」

「……いい応えだ。それと、お前に恩を返していなかったなあ」とするとカオスは掌からある物を取り出す。

「これは…我の力である”銀河の翼”だ」

虹色に輝く神々しき悪魔の翼が陽弥背中に取り憑く。

「それと……」



カオスがまた何か取り出す。それは不気味な第三の眼と白い羽の装飾を持つ仮面であった。陽弥はその仮面を着けると、

「~~~~~っ!？」

突然、仮面から触手が陽弥の顔を覆い、赤黒であった色が白と赤へ変色していく。そして見る見る内に彼の姿の形状が変わっていく。その姿は銀河の翼を拡げ、悪魔と思われる尻尾、鋭い牙に爪、仮面が生き物のような皮膚へ変わっており、第三の眼が動く。

「行け…Sonne Ritter（太陽の騎士）よ……」

「……キヒヒヒヒヒヒヒ」

陽弥が不気味な笑い声をする、虚無の空間から消えた。

まさにその頃、とある惑星が黒い球体に飲み込まれた。その隣の惑星や遠くの惑星、別の宇宙にも、同じ黒い球体に飲み込まれていく惑星があった。そしてその惑星の住民達が船団で故郷を脱出していくと、船内の画面にドレギアスが映る。

『数多の種族よ…我は新星国家グリニア帝国皇帝“ドレギアス”である。見ての通り……お前達の星を滅ぼしたのは、紛れもなくこの我である。刃向かうも、逃げ出すのも自由……我が欲しいのは……ザ・コアとザ・シード。この二つを手に入れれば、次に狙う星を止めておく。さあ、探せ……ザ・コアとザ・シードを……』

放送が終わると、各宇宙の軍や政府が血眼にザ・コアとザ・シードを探したのであった。

## after story 24：忍び寄る影

一方、ジユン、コモン、アラド、リアース、フェイズは陽弥が使っていたトレーニングルームでこれから起こる戦闘に備える為、トレーニングしていた。DARPA社の社長であるシンに頼み、高機動ゲオルギードロイドを相手していた。ジユンはスパルダを振り、ゲオルギードロイドの銃弾を弾いて行き、接近し切り裂く。コモンもヤトノカミの蛇腹刃を伸ばし、中距離のドロイドを切り裂いた。アラドもトワイライト・サーガを振り回し、先端部の剣でドロイドのモノアイを刺した。リアースもエクスカリバーを駆使し、相手の急所を狙い射貫く。フェイズはエンジェリック・ナイツでドロイドを切り付けた後、呪紋でアースグレイブを発動し、地面から尖った岩を突き上げ、ドロイドを破壊した。すると室内にブザーが鳴り響き、それと共にシンの声が聞こえてきた。

『よし！五人のバイタリテイが激しく膨張してきた！後は中に眠っている龍達と契約を交わせば、龍装光が発動できる！』

シンのアDBイスを聞いていたジユン達は休憩を摂る。

「いや〜！まさか陽弥のトレーニングルームがこんなに広く、凄い設備だったなんて!？」

「びっくりだよ」

ジユンが陽弥が使っていたトレーニングルームの広さに興奮していると、シンが来る。

「どうだ、陽弥が使っていたトレーニングルームを使用した感想は？」  
《最高♪》

「陽弥の奴はソロモニア戦記終戦後…ここでよく体を鍛えていたからなあ…あちこちの壁や床、天井にも傷が付いているだろ？あれが陽弥がトレーニング中に付けた傷跡だ♪」

《へえ〜》

「そこでだ、お前達の相手をしてくれる奴等が来るんだ。」  
「奴等?。」

するとトレーニングルームのドアから数人の男女が入ってきた。

一人はルナで、もう人はアンジュと同じ、金髪の女性、もう一人は龍の尻尾と翼を持っており、車椅子に乗っている人魚と人魚の胸の所に小さな赤ちゃんを抱いていた。もう二人はサリアと同じ青い髪のポニーテールをした女性と高貴な服装した男性。最後は全身が金属で覆われている生命体であった。

「私の娘と仲間達だ♪」

シンが紹介すると、ルナ達はジュン達にお辞儀で返す。

「シン・ギデオンの娘『ルナ・ギデオン』いつも双子のお兄ちゃんの陽弥がお世話になっていきます♪」

『ソフィア』よ、あつちの世界のママとパパと会うのは本当にビックリしたけど、あの赤単細胞がピンチな為、来てやったわ」

『リヨウマ・ネイル』と申す。こちらは妻のローレライと娘のレイネシアで御座る♪」

「アレクトラ……アレクトラ・ヴィサリよ」

「僕はヴァルヴァートル帝国新皇帝のルチル・ヘリツドです。よろしく♪アレクトラさんは僕の妻です♪」

ルナ達は自己紹介を終えると、シンが説明する。

「彼等は新世代の銀河の守護者で、陽弥と共に戦った仲間達だ。ルナ…彼等に”龍装光”を見せてやりなさい」

シンがルナに言い、ルナ、ソフィア、リヨウマ、アレクトラ、ルチルは整列し、銀河七聖龍の宝石が付いている腕輪、刀、イヤリング、ガントレットを取り出し、叫ぶ。

《龍装光!!》

ルナ達が叫ぶと同時に四人の身につけている宝石が光だし、宝石から月光神龍、雷光神龍、妖精神龍、双頭神龍が現れ、ルナ達の体に纏い、光の鎧へと変わった。

「スゲエ!!」

「これが…龍装光」

「格好いい…」

ジュン達が感心すると、シンが説明する。

「今から、お前等とルナ達を戦わせる。そして、お前達の龍装光を解放

させる。そこで、姫殿下とヴァルキュリアス星騎士団の四星騎士達を呼んだ。本来なら、四星騎士達を束ねている星騎士団の団長は陽弥だが、ここは副団長である義理の娘が務めると…」

するとトレーニングルームのドアが開き、中からヴァルキュリアスの鎧を着用したヴァルキュリアス星騎士団の副団長『槍を持つて進む冥王の姫騎士』”エミリア・ヴァルネア・ギデオン”、そして騎士団の一人。『轟かす流星の戦士』”テスト”、『軍勢の戒める黒星の魔術師』”ミラーナ”、『軍勢の星刻の番人』”オルト”が武装して現れた。  
「テスト：久し振りだな」

「お久しぶりです…シン大将」

「うむ♪ミラーナとオルトも…537星系の任務から帰って来た所をすまないことをしたな…」

「いえいえ、帰っても暇でしたから♪」

「その通り、我等ヴァルキュリアス星騎士団団長『勝利へ導く太陽の騎神』”陽弥・ギデオン” 団長の名誉と人権、治安の為に尽くしていますから♪」

テスト、ミラーナ、オルトがシンに礼儀正しく挨拶すると、アストラ、ベイボルス、アイリスが言う。

「へえ〜、あたし達に似た騎士団もいたんだ」

「だな、」

「だが、あの四人…明らかだが、凄まじい殺気を感じる…」

するとこちらを見ているアストラ達に、テストは気付く。

「何か用？」

テストが問うと、アストラ達はテスト達に言う。

「…お相手…してくれんか？」

アストラの言葉にシン達は驚く。テスト、ミラーナ、オルト、エミリアは頷く。エミリアはベイボルスに手を伸ばす。

「喜んで♪」

エミリアは微笑み、アウラ近衛騎士団とヴァルキュリアス星騎士団の試合が始まるのであった。アストラ、ベイボルス、アイリスは大剣、槍、細剣を持つ。テスト、ミラーナ、オルトも巨大な斧、巨大な鎌、巨

大な二つの盾

：そしてエミリアは愛用のランスと盾を持つ。そしてトレーニングルームの地形が変わり、荒野に変わった。

エミリア、テスト、ミラーナ、オルトとアストラ、ベイボルス、アイリスは武器を取り出す。

『これより、アウラ近衛騎士団とヴァルキュリアス四星騎士の試合を開始する。”相手をゼロにするか”、時間が立ち、”どちらが多く生き残っているか”の試合だ：。』

エミリア達とアストラ達はそれぞれの武器を構える。観覧席から見ているジュン達とルナ達はそれぞれのチームを応援する。そしてシンが試合開始のブザーを鳴らした。

『始め!!』

開始と共にエミリア達が先攻してきた。

「速いっ?!?!」

アストラ達は思わず驚いてしまい、先頭のエミリアがランスを突き、エミリアの後方にオルトが盾を構え、後左右後方にいるミラーナとテストを守っていた。そしてエミリアはフォーメーションアタックをする。

『トライデント!!』

エミリア、テスト、ミラーナが槍の矛先の様に描き、突進してくる。アストラ、ベイボルス、アイリスはエミリアのフォーメーションアタックの衝撃波により、回避ができなかった。観覧席から見ていたジュン達は驚く。

「…ヤバッ?!?!」

煙が晴れると、エミリアがアストラの首元にランスを突き付ける。

「立てますか?」

エミリアがランスを納刀し、アストラに手を差し伸べる。アストラは言葉を返せなかったが、エミリアの手を掴み、立ち上がる。するとエミリアのオムニツールからメロディーが鳴る。

「ほい」

『姫様!大変です! マナ様とオリバー、ライラ様が中々寝付けません

!!アストラッド王様やアリシア王妃様、マリア姫様、エスメラルダ様が何とかあやしているのですが、嫌っているのです!!』」  
「あらら!？」

エミリアは急いで愛する子の元へ駆け付ける。

マナ、オリバー、ライラがいる子供部屋では、メイド達や祖父と祖母であるアストラッド王とアリシア王妃、姉と妹であるエスメラルダ姫殿下とマリア姫殿下が三姉弟等をあやすが、さらに泣く。

「何でだろう!?!さつきまではニコニコ笑っていたのに。」

「こんな時……陽弥君（お父さん）が居れば……。」

アストラッド達はそう考えていると、ドアが開き、愛する我が子の元へ、エミリアが駆けつけて来た。

「マナ、オリバー、ライラ」

「あゝっ!良かった!やっと来てくれた!」

アリシアが安心して、エミリアは三姉弟達をあやす。三姉弟は泣くのを止め、ぐっすり眠る。

「何があったのですか?」

「分からないのよ、突然……この子達が急に泣き出したのよ……。」

「え……?」

「まるで……何かに察知したように……。」

不安が高まり、エミリアとアストラッド王達は部屋から出て、衛兵に見張りを頼んだ。そして……その数分後、見張っていた衛兵が何かに首を噛まれ、気を失う。部屋の天井裏から、体長一メートルもあるイモムシ。グリニア帝国隠密軍用魔蟲「ドラガワーム」五匹が天井裏から現れ、寝ているオリバー、ライラに迫る。ドラガは口から糸を吐き、オリバーとライラを連れ去らおうとしたその時、鋭く尖った尻尾が物音を立てずにドラガの腹を突き破った。

「ギチギチギチギチ!!」

ドラガ達は牙を鳴らしながら威嚇すると、ドラガを刺したままの尻尾がゆっくりと、動く。すると天井裏から体長二メートルもあり、白、

赤、黄の色をした怪物……『Sonne Ritter(太陽の騎士)』  
が、第三の目を光らせ、牙を向く。

「キシヤアアアアアアア！」

陽弥はカオスから授かった銀河の翼を拡げ、ドラガ達に威嚇する。  
「グルルルルルル!!(俺の子達に……手を出すな!!)」

陽弥がドラガを掴み、頭ごと喰らいついた。残り4匹になったドラガは威嚇し始める。

「ガウウウツ!!」

陽弥は威嚇し、銀河の翼から手が出てきだし、マナ、オリバー、ライラを持ち上げ、翼で三人の子を守るようにする。

「ガアアアアツ!!」

その直後、天井からドラガの成虫体が陽弥に襲い掛かってきた。蠅のような体格であり、口から毒液を吐いてきた。陽弥は間一髪の所で回避すると、毒液で壁が溶ける。

「(硫酸!?)」

陽弥はドラガの首元に噛み付き、窓や壁を壊し、外へ出た。4体のドラガワームも追い掛ける。

物音がして、メイドが倒れている衛兵に驚き、子供部屋を開けると、巨大な大穴空いていて、ベビーベッドにマナ、オリバー、ライラがいないことに叫び、知らせに行った。

## after story 25：新たな勢力

森の中へ逃げ回る陽弥は愛する我が子をドレギアスが送って来た魔蟲から守っていた。

「(ここまで逃げれば……もう、追ってこないだろう。しかし……)」

陽弥は翼の中で守っていたマナ、オリバー、ライラを見る。三人共ぐっすり寝ていた。

「まさか……双子の姉弟ができていたなんて……そうか、マナはもう、お姉ちゃんか……)」

陽弥がそう思っていると、寝ていたオリバーが泣く。陽弥はそっと頭を撫でると、オリバーが泣くのを止め、キョトンとした表情で陽弥を見つめる。

「？」

「あう？」

陽弥が首を傾げ、オリバーも首を傾げる。陽弥はそっと顔を近づけると、オリバーがはしゃぐ。

「あ~~~~!!」

オリバーが陽弥の頭に乗っかかり、陽弥はそっと見守る。すると今度はライラが起き、陽弥の手にしがみつく。

♪

陽弥は笑顔になると、長女のマナが陽弥の顔をまじまじと見る。

「(……何?)」

「(………ぱあぱあ? (…パパ?)」

「(何っ!? ……マナ! 俺の声が分かるのか!?)」

「う〜! (うん!)」

突然の事に陽弥は驚く。

「(何で俺の声が分かるんだ!? ……って言うか、マナ……ベラベラ喋るなあ……)」

「たあ〜……(分からない……何でかなあ♪)」

「(………これが親子の絆……か……)」

陽弥がマナの天然に呆れると、オリバーとライラが泣き出す。



「(ありや……腹が減ってんのか……)」

陽弥は今、ここにエミリアがいない事に困る。

「(困ったなあ……エミリアの”あれ”がないと……。)」

「(パン♪)」

「(パン!?お前もう離乳食を得られたのか!!?)」

「(うん♪)」

「(俺が居ない間……成長したな……アハハハ……ん?)」

すると陽弥が匂い嗅ぎ始める。

「(この匂いは……ムニエル?)」

陽弥は匂いのする方向を探り、茂みから顔を出す。

「(あれは……)」

茂み乗っかかり先に見えたのは、交易が盛んな『ヴァランドール皇国』であった。

「ヴァランドール皇国……ちょうど良い、粉ミルクを買うのに……」

よく考えたら俺、金なかったああああ!!!どうしよう!?!?」

陽弥が焦っていると、マナがある事を言う。

「……(……勇人お兄ちゃんとシンディお姉ちゃんの気配がするよ。)」

「(勇人が!?)」

「(うん)」

「(ナイス!)」

陽弥は銀河の翼の中に泣いているオリバーとライラ、マナを隠し、粉ミルクと哺乳瓶を買うために勇人とシンディを探しに、ヴァランドール皇国へと入った。

その頃、エルシユリア王国城内……荒れ壊された子供部屋を取り調べている兵士達。マナ、オリバー、ライラ……三人が子供達が行方不明に、エミリアは絶望していた、

「……ごめんなさい……ごめんなさい……マナ……オリバー……ライラ

……」

絶望するエミリアに、レオンやサラ、ルナが励ます。シンとヒルダは行方不明の孫達の手掛かりを探っていた。すると、崩れた天井の木柱の下に一メートルもある幼虫の死体を見つけた。

「ドルガワーム…!?!」

シンは頭部が何かに握り潰されたドルガワームを見る。

「……やっぱり」

「何がですか？」

レオンが問うと、シンはドルガの事について、説明する。

「このドルガワーム………ドレギアスの軍用魔蟲だ…。」

「え!?!」

「恐らく、オリバーとライラにも……陽弥と同じインフィニティソウル、クアンタニウムハート、アーククリスタル、グリゴリが宿っていたかもしれない……となると、目的は……」

「……拉致」

レオンの返答にシンが頷くと、レオンが壁に向かって拳をぶつけた。

「クソツ!!ドレギアス!!」

「……悔やむのは後だ。ドルガやワーム達はそこまで遠くへ行っていないと思う。」

「何ですか?」

「恐らく……ドルガやワーム達は輸送船に乗り込む。そこがある場所は大抵ヴァランドール皇国の宇宙港なんだ。だとしたら……」

「したら…?」

「うん………私の予測だと思うが……ヴァルキュリアスの内部に……スパイがいると思う。ソイツが、ヴァルキュリアスの輸送船にオリバー達を収納して、逃げるつもりだと思う。」

「なら、急ぎましょう!!」

レオンはアーサセイバーを持ち、ヴァランドール皇国へと向かった。シンはドルガワームを見ていると、口からあるものが落ちた。

「ん?」

それは、5ミリの小型遠隔装置であった。シンはオムニツールで小型遠隔装置を拡大して調べると、遠隔装置に会社のマークが表示されていた。

「コーパス？」

『コーパス』と言う名を知ったシンはこの時、新たな勢力がいることに気付きもしなかった。

その頃、ヴァラントール皇国を観光している勇人達は飲んだり食ったりの観光していた。

「色々見て回ったなあ…」

「Yes♪」

「(師匠もいたら……)……考えても仕方がない、久し振りに、師匠が教えてくれた雑貨屋に行くか♪」

勇人は雑貨屋に行き、中に入る。中には色んな物が置いてあり、さらに護身用兵器までも売られていた。

「あーこれが良いなあ♪」

勇人が目を付けたのはマグナムと綺麗な刀身をしており、火焰のような刃紋を持った異形な刀と短刀であった。

「おばさーんー！これいくらう？」

勇人は雑貨屋の店主に聞き、買おうとしていると、店のドアが開く。現れたのはマナであった。勇人はマナが来てる事に、驚く。

「あれ？マナちゃん!？」

「あー！」

そして勇人は雑貨屋の外で待っている怪物(陽弥)と再会し、勇人に頼み、泣いているオリバー、ライラの為にミルクを作り上げた。オリバーとライラは美味しそうに哺乳瓶のミルクを飲む。勇人は現状を把握する為に、陽弥に問う。

「……本当に師匠?」

陽弥は首で頷く。

「え〜っ!？」

勇人は驚く。凜々しく逞しい陽弥が、こんな醜く穢れた化物になっていた事に……。すると陽弥が唸り声をする。

「も、もしかして、怒っていますか？」

勇人がそれを言うと、陽弥がさらに唸り声を上げる。

「ごめんなさい！無意識で嫌気が出てしまつて！」

その直後、陽弥が勇人に飛びかか、爪で顔を引つ搔く。

「痛い!?（かなり…怒っている〜!!）」

勇人は引つ搔かれた顔を擦ると、勇人の所に二人のスーツの者達が近付く。

『もし？新川 勇人さんですね？』

「え？…はい…」

『ああ！良かった〜♪実はエルシユリア王国でオリバー様とライラ様が誘拐されたのですよ』

「え!？」

勇人が驚くと、もう一人が陽弥の翼の中にいるオリバーとライラを見て、微笑む。

『おや？その怪物の翼の中にいられるのは……もしや、オリバー様とライラ様？』

「え?…」

『おおーそれは良かったです♪……勇人さん、率直ですがあなたにお願いがあります……』

「はい…?…」

勇人は首を傾げ、陽弥は二人を警戒していると、勇人と陽弥の所に直方体形をしたヘルメットを被っているスーツの者達が集まる。その手にはレーザーライフルやレーザーハンドキャノン、レーザースナイパーライフル、レーザーミニガン、照射ライフルを持っていた。さらに一人に二体ずついる二足型歩行戦闘ロボット『モア』や領域制御と捕縛攻撃に特化した防衛型の『バーサ』、飛行するロボットユニット『オスプレイ』が配備されていた。

そして勇人の目の前にいた二人のスーツの者がレーザーハンド  
キヤノンとレーザーライフルを突き付ける。

『オリバー様とライラ様を……我等“コーパス”に引き渡してくれま  
せんかね？』

「っ!?!」

勇人は警戒し、周りの人々が悲鳴を上げ、逃げていく。

「お前らー! グリニア帝国か!?!」

『グリニア帝国? いえいえ、我々はそんな野蛮な武装集団国家ではあ  
りません……そう、我等コーパスはあらゆる貿易、商業、工業利益の  
為に立ち向かう商業崇拝者……』

「つまり……武器や奴隷などの貿易品を商売している商人か!」

『ええ、我々はクアンタ人のテクノロジーを見つけ、色んなロボットも  
開発しているのです。その為には……ヴァルキュリアス総統の陽弥・  
ギデオンの妻“エミリア・ヴァルネア・ギデオン” 婦人と姉の“エス  
メラルダ・レグレシア・クアンタ”、そしてマナ・ギデオン、オリバー・  
ギデオン、ライラ・ギデオンの身柄の確保します。後、グリニア帝国  
皇帝からクアンタ人である新川 勇人の抹殺を依頼されているので  
すよ。』

「屑が!」

勇人が刀を抜刀しようとした直後、後方にいた陽弥が尾を伸ばし、  
鋭く尖った先端でコーパスクルーマンの腹部を貫通した。そして  
持っていたレーザーライフルを奪い取る。

「あく……言っておくけど、お前たちはここで終わる……何故なら、こ  
こにその話を聞いて切れている人物がいるから……。」

「ガアアアアアアアアアアア!!!」

陽弥が吼え、レーザーライフルを乱射する。

『新川 勇人とあの怪物を殺せ! 何としてでも、マナ・ギデオンとオリ  
バー・ギデオンとライラ・ギデオンを捕獲せよ!!』

コーパスクルーマン達が攻撃を開始した。ヴァランドール皇国内  
での戦闘により、国民が逃げ惑う。シンディや真里亞、雄二、知彦、志  
歩、瑠璃、彩乃、玲二は押し寄せる民に巻き込まれ、流される。

「勇人おおお!!」

コーパスクルーマン達は標的である勇人の抹殺とマナとオリバー、ライラの身柄の確保に必死であった。勇人は異形な刀を抜刀し、スタンロッドを持ったクルーマンが迫って来た。勇人はスタンロッド振り下ろして来たクルーマンの攻撃を防御する。

「クッー」

勇人はクルーマンを蹴り飛ばした直後、二人のクルーマンが勇人を抑える。するとスタンロッドを構えたクルーマンが言う。

『抑えておけ!』

クルーマンがスタンロッド振り下ろそうとした直後、頭部にレーザー弾が炸裂した。

『!?!』

そこにはレーザーライフルを構えた陽弥がいた。

「ガウウウウツ!! (俺もいるって言う事……忘れんな!!)」

陽弥は吼え、抑えて付けているクルーマンにドロップキックを浴びさせる。つとそこにシンディ達が駆けつけて来た。

「勇人!」

「シンディー!」

すると陽弥がシンディ達に近付き、銀河の翼の中に隠していたマナ、オリバー、ライラを預ける。

「oh!?!」

そして陽弥は戦いに戻り、クルーマンを叩き付ける。

「ガウウウツ!! (借りるぞ!!)」

陽弥は二人のクルーマンの腰に収納していたスタンロッドを奪い、得意の二刀流の構えをする。

「グルルルルル!! (護星神陽弥・ギデオーン!!再臨!!)」

陽弥がスタンロッドを二刀流でクルーマンに打つ。華麗な戦法、アクロバティックかクルーマン達を翻弄する。

「!?!」

ボデイカラーが青の射撃精度の高いレールガンを搭載した”レー

ルガン モア”とボディカラーがグリーンの最も一般的なタイプのモアがレーザー砲を構えていた。

「フンッ！（フッ！ドロイドで相手するつもりか？甘すぎる!!）」

陽弥はそう言うと、口から大出力のプラズマビーム砲を放った。

「グウウッ!!（終わったな!!）」

陽弥がそう思った直後、領域制御と捕縛攻撃に特化した防御型のオレンジのバーサ。”デイナイアル バーサ”6体と青緑色の小型オスプレイ”シールド オスプレイ”がデイナイアル バーサ12体が集まり、シールド オスプレイからシールドエネルギーが放出され、デイナイアル バーサに付加させる。そして陽弥のプラズマビームがバーサに直撃したが、オスプレイのシールドとバーサの防壁により、プラズマビームが吸収されていく。

「ッ!?!（シールド!?!そんな膨大なエネルギーを放出出来るなんて……あっ!）」

陽弥はシールドエネルギーが自身のエネルギーとマナのエネルギーが使われていることに気付く。するとクルーマンの一人がスタンロッドを振り下ろし、陽弥の背中に炸裂した。

「ガアッ!」

陽弥はスタンロッドの電磁波により、倒れる。

「師匠!」

勇人が刀を振り回し、クルーマンを薙ぎ払い、ホルスターからマグナムを取り出す。

「師匠から、離れる!!」

勇人は陽弥を襲っているクルーマンに向けて、マグナムを発砲する。クルーマンを撃ち殺すし、陽弥に駆け寄る。

「師匠!大丈夫ですか!?!」

「ウ……ウウ……」

すると陽弥と勇人の周りにクルーマンやロボット、マナとオリバーとライラを拐おうとしたドルガワームとドルガ成虫体が現れる。さらに、コーパス キャリア2隻が現れ、コーパスの戦闘機”ローカストドローン”が展開され、レーザーマシンガンが向けられる。

「クッ！」

「グルルツ!! (どこまでか!)」

二人が諦めた直後、キャリアの外殻にビームが炸裂する。

『何だ!?!』

『シン・ギデオンだあぁー!!』

コーパスクルーマンの叫びと共に、ヴァランドール皇国城壁外からシンのパンドラメール”ペルシウス・オーバーライズ”がデイメンジョン・ヴァルキュリアを構える。

「貴様等!家の孫達に手を出した事、後悔せ!!」

シンは精密射撃で正確にドローンを撃墜していく。

「ライトソードビット!」

ペルシウスからライトソードビットが射出され、陽弥と勇人を取り囲んでいたクルーマンとロボット、ドルガワームとドルガ成虫体を駆逐した。

『マズイー!退け!退けえ!!』

恐れたクルーマン達はキャリアに乗り込み、ヴァランドール皇国から立ち去り、ホライゾンを出した。

新たな勢力『コーパス』と言う商業教団を知った勇人達は、グリーンア帝国やコーパスの警戒宣言を発令。幸いな事に、ヴァランドール皇国の民達全員に怪我人はいなく、陽弥がスタンロットで気絶させたクルーマンを捕らえることに成功。

「誰の命令だ……」

冷酷な表情を浮かべるシンとヒルダは捕虜のクルーマンに尋問する。

『し、知るか!お前らの様な呑気な軍に!』

その時、ヒルダがナイフを取り出し、身動きが取れないクルーマンの足に突き刺した。

『アアアアアアアアアアアッ!!!』

クルーマンは余りの痛さに悲鳴を上げると、ヒルダがクルーマンの



胸ぐらを掴み上げる。

「ザツけんなよ!!この悪党が!!アタシ等の孫達を拉致して殺そうとしたじゃねえか!!」

「とつと吐いた方が良いぞ……ヒルダの奴、お前達を殺す気満々だから……。」

「言え!グリニア帝国の中の雇い主は誰だ!!」

『……フッフ、教える事はないよ♪』

すると捕虜のクルーマン達が笑い、歯を噛みしめた。シンは彼らの行動直後に気付いた。

「コイツ等!!おいつ!!」

他の兵士達がクルーマンの顎を抑えつけるが、クルーマンが死んでいく。

「ど、どうなってんだ!?!」

「遅かったか……、コイツ等……口封じに歯の中に毒薬を組み込まれていたんだ……。」

事実を聞かされたヒルダは死体を蹴り飛ばした。

「クソ!!」

ヒルダが悔しがっている中、勇人はヴァランドール皇国から去ろうとしている陽弥を止めようとする。

「師匠!」

「teacher!」

勇人とシンデイの呼び声に、陽弥は振り向く。

「……………」

「……………」

二人の緊張が高ぶっていると、陽弥が勇人とエミリアに近付き、耳元で話す。

「勇人……シンデイ………エミリア達を頼む……俺はまだ……やり残した事がある……。」

陽弥は小声でそう言うと、銀河の翼を拡げ、飛び立った。

惑星ホライゾンの成層圏まで来ると、陽弥の目の前に太陽神ラーと  
時空神クロノスが龍の姿で待っていた。

「ラー様に…クロノス様？お二人は何用で？」

陽弥は問うと、クロノスが言う。

「ミッドガンドの護星神…アステカ神族が守護するテスカトリポカ  
の世界に…グリニア帝国が現れた」

「何っ!!？」

クロノスの言葉に陽弥は驚く。そしてラーが説明する。

「他の神族達がテスカトリポカの世界へ援軍として、向かました…  
陽弥・ギデオン…あなたの能力の一部を解放します。」

太陽神ラーは持っていたスタッフを掲げ、呪紋を唱える。すると陽  
弥の体が光だし、姿が変わっていくと共に大きくなっていく。そして  
陽弥の姿が怪物から、バハムディアと同じドラゴンへと変身した。

「行きましょう」

太陽神ラーがそう言い、陽弥はクロノスと共にテスカトリポカの世  
界へ向かっていった。

その頃、テスカトリポカが守護する世界……あらゆる星の生命がドレギアスのデススファイアによって、地獄へと変わっていた。その危機を感じたアステカ神族達は直ちに応戦するが……。

「カハツ!!」

血だらけのテスカトリポカの首を掴み上げているドレギアスが操るゼロ、手にはオロジャークを握っていた。苦しむテスカトリポカはドレギアスを睨む。

「ドレギアス……!」

「フン……アステカの神々が、このざまか……」

「ドレギアス……お前は一体何を……!?!」

「貴様のエネルギー……貰うぞ」

ドレギアスはディザスター構えた直後、上空から光の柱が現れ、そこから陽弥とエジプト神族、ティタン神族、アースガルド神族が現れた。

「ほお、これはこれは……神々共が……」

ドレギアスはそう言うと、ディザスターでテスカトリポカにとどめを刺した。

《!!》

「アアアアアアアアアアア!!!」

テスカトリポカが悲鳴を上げ、粒子へととなり、ドレギアスに吸収された。

「テスカトリポカ!」

「無駄だ……テスカトリポカが消滅したと同時に……テスカトリポカの加護は消え、この次元はもうすぐ消滅する……そしてアステカ神族は滅びる。」

その事実を知った陽弥はドレギアスを睨む。

「何て事を!!」

「おや? お前は陽弥・ギデオンではないか? 何故ここに……」

「カオス様の力で……知的生命体になっている」

陽弥の説明を聞いたドレギアスは納得し、鼻で笑い飛ばした。

「フン、なるほど……カオスカ……あの混沌を司る原初神か……。」

「……お前に話したい事がある。お前……オリバーとライラの力を奪おうしただろ?」

「……あゝ、あれか……コーパスの事だろ? あれは……我ではない。」

「この俺だ。」

名乗り出たのは新生フェメシス騎士団のひとりであり、勇人を虐めていた洋介であった。

「アイツ等は俺が頼んだんだ♪結果……良い関係になつて、同盟を結んだ。」

「何の為に……?」

「……コーパスは元アジマス連邦男爵『メビテス帝王』が率いており、あらゆる貿易品を支配している星間帝国。議論は『財力こそが正義』。

さらに、グリニア帝国に協力する勢力が増えた。別銀河を支配している皇帝『銀河皇帝バルクデイオス陛下』が率いている”ネブラ銀河帝国”は知能に優れていて、あらゆる戦況を予測できる。

議論は『知力こそが切り札』。

別銀河を暴力で支配している皇帝『グレゴリー天皇』が率いる”

シャンドウア”を担当している。戦争で全てを解決しようとする傭兵国家。

議論は『暴力こそが和解』。

シエレナは欲望と権力を我が物にする残忍な王『ダナス王』が率いる”ゼルトラン帝国連合”を担当している。議論は『権力こそが栄光』。

そして……俺達のグリニア帝国を含んでの最凶国家枢軸国である五大宇宙帝国”ディアヴオリアス”を束ねているのが、我らの総大将『大宇宙皇帝 ドレギアス』陛下が牛耳っている……。」

「……それが何だ?」

「つまり……お前たちの様な上から目線な奴等にも対抗できているんだよ!!」

するとドレギアスの後ろから、デススファイアがワープしてきて、グ



## after story 27：龍装光の試練

シンとモーディン、DARPA社の研究者がジェームズとミライ、アークガーディアンの研究者と共に、コーパスやにドレギアス対抗する為、レオン達のコスモバイルとそれぞれの専用のスーツ、そして勇人とシンディの為にある計画が進められていた。シンはレオン達のコスモバイルを開発していると、ジェームズが話しかけて来た、「そつちのは完成しましたかね？」

「ええ、後は星獣であるスペクトロブスをそれぞれのコスモバイルに入れば、戦闘になった時、何時でも召喚できる」

「流石、守護神のお父上だ…」

「そして…」

すると研究室のハッチが開き、未完成のフレームが開発されていた。

「後、もう少しだ……」

「ああ、我等の世界の全パンドラメールとシグムディア……」

「私達の世界のオメガメールのヴェルトサーガとエグゾディアスのデータとローガストメールのデータを一つにした対ドレギアス完全究極兵器……」

「"インフィニットメール"」

シンとジェームズはその名のフレームを同時に言う。

「この機体が……勇人をどう、導くのか……」

シンはデスクの上にある虹色に光る結晶体を見て、心配するのであつた。

その頃、レオンは、自室でサラと一緒に我が子であるヒュウガをあやしていた。

「よっよっよっよ」

「あう〜」

レオンはヒュウガの頭を撫でていると、アースセイバーの宝石が光りだす。

「っ!？」

すると光る宝石から、レオンと契約した天空龍皇である『スカイア』が出てきた。

「え!？」

レオンとサラは驚くと、スカイアがレオンを見る。

「?」

『レオン…』

「っ?」

『窓から出て、龍装光を……』

スカイアがレオンの頭の中で語り掛けるのを光へとなり、窓から見える草原へと出た。レオンは窓を開け、飛び下りる。そして…レオンがスカイアに近付くと、スカイアが語り掛ける。

『…邪悪な存在”ドレギアス”を討ちし、空の空の勇者”レオン・マクライト”よ……そなたに天風の鎧を授けましょう……さあ、アースセイバーを…』

レオンはスカイアの言う通りに、アースセイバーを持ち、鞘から引き抜く。

『叫ぶのです……”天・龍装光”と!』

スカイアのアドバイスに従い、レオンは深呼吸する。

「スウ〜…ハア〜…」

息を整えたレオンは、アースセイバーを空へ掲げ、叫んだ。

「天・龍装光!!」

叫んだその時、アースセイバーの刀身から天空龍皇スカイアが現れ、咆哮を上げる。

「ピイイイイイイーッ!!」

スカイアは六枚の翼を拡げ、下にいるレオンへ突っ込んだ。羽の一枚一枚がレオンの身体に纏わり付いていき、全身に白のスーツへととなり、その上に白黄金の甲冑が装着させる。すると白黄金の甲冑の装飾が白黄金から青空のような美しい青へと変色し、背中から白黄金に輝

く小翼羽と小雨覆、ズラリと並ぶ純白金で覆われている羽、そして頭部が天空龍皇の頭部をモチーフとした鳥龍の兜が装着されると同時に、青いバイザーとマスクで顔が覆た。龍装光を得たレオンは、アースセイバーを振り、周りに吹き荒れていた風を払った。

「レオン……」

サラが心配していると、シンやジエームズ、ジユン達が駆けつけて来た。シンは龍装光しているレオンを見て、驚く。

「おお！龍装光に成功したんだな！」

レオンは頭部のバイザーとマスク、後頭部を解除し、鎧を見る。

「これが……龍装光……」

レオンは手を握り、龍装光を解除する。するとシンが言う。

「龍装光をついに得たか……」

「はい」

「……よろしい……では、アストラ、ベイボルス、アイリスを呼んで……お前達に渡すものがある」

シンがそう言い、レオンは自室で待機しているアストラ達を呼び集めた。するとシンがレオン達にコスモモバイルが装着されたガントレットを渡した。

「シンさん、これは？」

「陽弥とエミリアやルナ達が持っているコスモモバイルのデータを元に開発した……新たな携帯端末機”コスモブレスター”だ……」

「コスモブレスター……」

「これって……コスモモバイルと何が違うんだ？」

「それは、これからお前達が行くそれぞれの修行場所に行けば、分かる」  
♪

シンの言葉に、レオン達は、首を傾げた。

《修行場所？》

するとシンがオムニツールでレオン達にそれぞれの修行場所である護星神の世界を見せる。

レオンが”風属性”『ミッドガンド』担当：(陽弥・ギデオン↓エミリア・ヴァルネア・ギデオン、テスト、ミラーナ、オルト、シン・ギ



デオン、ココ・ギデオン)

「ジュンが”獣属性” 『ヴァナヘイム』担当：(ラルフ・フレイ)

「コモンが”地属性” 『ムスペルヘイム』担当：(バルト・フェルド)

「アラドが”昌属性” 『ヨトウンヘイム』担当：(ダーマ・フォツセン)

「リアースが”刃属性” 『アースガルド』担当：(ラファイ・ギデオン)

「アストラが”金属性” 『ニルヴァーナ』担当：(ドミニカ・シエレン

ツ)

「ベイボルスが”幻属性” 『スヴァルトアルブヘイム』担当：(デユラ  
ン・シユヴァルツァー)

「アイリスが”花属性” 『アルブヘイム』担当：(キャリー・シアロー  
ゼ)

「フェイズが”闇属性” 『ヘルヘイム』担当：(シユバルツ・ギデオン)

それぞれの修行へ行く惑星を知ったジュン達は頷くが、レオンだけ  
担当が多い事に疑問を持つ。

「何で……俺だけ、担当が多いんだ……？」

「理由は簡単……馴染ませることを含めさらに強くする。君だけは超  
特訓だ♪」

「え……でも、相手はシンさんでは？」

「……何を言ってるのかね、君は？……陽弥は本気出すと……容赦ない  
からなあ、それに……陽弥の嫁さんも♪」

「……え？それって……つまり……」

「姫さんは……ヒルダ以上に怖い人だ♪」

「そう、義理の娘が西のオーク達にブチ切れた時の言葉が…」やめろっ!!この糞豚共がっ!!!」だったなあ♪」

ヒルダはそう言うと、エミリアが慌てる。

「ちよーお義母様!!」

「良いじゃないか♪昔の話は…それに、それを聞いた陽弥が啞然していたじゃん?」

「そうですけど……」

エミリアは落ち込みながら、人差し指通しを回す。するとヒルダがエミリアの背中をポンツと叩く。

「シヤンとせいっ!!3児のママー!」

「はい……」

エミリアがそう言う中、シンがヴェクタの超兵器であるギャラリツクリングを起動した。

「この先が、君たちが修行する世界へ繋がっている…」

そしてジュン達はそれぞれの修行する世界へ入っていった。そしてレオンだけになると、シン達がおすすめな修行場所である”呀麗山”へ転移された。

「ここは?」

「呀麗山だ……」

辺りには湖と緑溢れる森と桜の樹が並んでいた。レオンは龍装光を発動し、アースセイバーを抜き取り、アースセイバーを湖に刺す。するとアースセイバーが光だす。

「暖かい……湖がアースセイバーを清められていく……」

そして、レオンは清められ、光っているアースセイバーを鞘に収めると、風が吹き、桜の花弁が宙に舞う。レオンの周りに桜の花弁が舞う。レオンは風を感じ、気力を集中する。そしてレオンは懇親を込めて、鞘からアースセイバーを抜刀し、空へ向かって技名を轟き叫びながら振り下ろした。

「斬空・霸王刃!!」

アースセイバーが風を切ると同時に、稲妻を発する大竜巻が起り、湖の水を吸い上げていく。そして、竜巻が消え、上から吸い上げ







陽弥がとどめを刺そうとした瞬間、

ドスッ!!

「ウツ!？」

陽弥の背中に、紫に光る槍が刺さっていた。その槍を投げたのは、ゼロに乗っているドレギアスであった。陽弥は地面に膝を付き、ギガオロチを離してしまい、ギガオロチは逃げる。

「クソ……ドレギアスー!」

陽弥がそう言うと、ドレギアスはオロジャグを持ち、ギガオロチに向ける。

「ギガオロチよ! 五大帝国軍の絶望を吸収し、再生せよ!!」

ドレギアスが叫ぶと、オロジャグから赤い血が大量に滴り落ち、蛇のように動き始め、ギガオロチの右首と左首に纏わり付く。するとギガオロチの右首と左首が元に戻り、再生した。

「クソ……余計なことを……!」

「フン……まだまだ……」

するとドレギアスはディザスターを抜き取り、轟き叫ぶ。

「亡者の強者達よ!! 我と蛇龍に黄泉の力を!!」

するとギガオロチの体が溶けていき、赤い血へとなる。そしてその血がゼロに向かって飛んでいくと、ゼロの体に纏わり付く。そして血が段々と形状を変え、赤黒い蛇の鎧へと変わった。

「嘘だろ!!!」

「そう……ギガオロチも星龍の一種、そしてこれが……邪龍装光だ!!!」

ゼロの周りから紫に光る波動が広がると、消えた。

「消えた!? 何処だ!? ……何処に!?!」

その直後、目の前に現れて右ストレートが胸に炸裂した。

「ぐおええっ!!!」

陽弥は吐くと同時に、吹き飛ばされ、凸っている岩石に直撃した。陽弥は胸を抑えながら、ドレギアスを睨む。

「無様だな……ミッドガンドの護星神……」

「クッ!」

するとドレギアスの背中から四つ首の大蛇が展開され、陽弥の四肢

に襲いかかる。

「グアッ!!」

身動きが取れなくなった陽弥に、ドレギアスがある事を問いかけた。

「率直に言おう…ミッドガンドの護星神、時空族は何処にいる?」

「は!? 知らんな! そこ行って、何をするんだ?」

「…………『ザ・コア』の居場所だ」

ドレギアスの言葉に、陽弥はおかしくて笑い飛ばした。

「…………プツ!? …アハハハハハハハ!! 馬鹿かお前!? 星を融合させないと出てこないんだぞ! どうやって? 言っておくけど、あっちの世界のアンジュさんとサラさん、こっちの世界のアンジュさんとサラさんは絶対に拒否すると思う! ……無駄だ! それにレオン達のフロンティアと種族大銀河連合がいるから、お前達の野望なんて打ち消されることができる!」

「…………何も、我はそんな傲慢な事はしない…………ただ、ちよつと簡単な事をするまでた…」

「え?」

ドレギアスの言葉に陽弥は首を傾げると、ある物が頭に浮かんだ。

「っ!? まさか!!」

「そのままかだ…………先代時空族が見つけた『ザ・コア』…………それを指し示す時空図『インペリアル アイ』が必要だからなあ…………」

「止めろ!」

「既に時空族の根城がある所在は掴んでいる…………恐らく、時空族達は防御体制を取るだろう…」

「止めろ! 止めろ!!」

陽弥が必死に抵抗するが、四肢に喰らいついている大蛇によって動けなかった。そしてドレギアスがデススフィアへと戻っていく。

「待てええ!!」

特殊な鎖で縛られている陽弥は必死になるが、デススフィアはザンジクにいる時空族の根城『カリユプソ』へ進軍する準備をする。玉座に座るドレギアスはボウ將軍に命じる。

「星を壊せ……」

「御意」

ボウはデデススファイアの兵器ハイメデューサを起動し、陽弥を縛っている衛星やその星諸元、破壊した。縛られている陽弥は星が破壊され、その爆発と炎に巻き込まれた。すると爆炎の中から、黒い影が陽弥を助けた。そしてデデススファイアはカリユプソを目指し、進軍していくのであった。

テスカトリポカが守護していた宇宙からドレギアスが去るのを確認したその黒い影は、腕に陽弥を抱えていた。

「……ドレギアス、見つけたぞ……」

その黒い影は陽弥を抱えたまま、姿を消した。



## after story 28 : 獣の闘心

その頃、龍装光を習得する為にヴァナヘイムへ修行へ言ったジューンは…。

「うわあああああゝゝゝゝつ!!!」

何と、巨大な人食い猪に追い掛け回されていた。その様子を高台から見ているラルフは腕を組んでいた。

「ほら！シヤンと立ち向かえ！」

「そんな事言われても！俺の攻撃が通用してないんだぞ！」

「……男は度胸！お前が狼極龍王に選ばれた戦士なら、名前の通り… 獣の覚悟に目覚めろ！」

「あああゝ！仕方ねえ!!」

ジューンは腰から皇帝の第七の剣の一つ”二刀小太刀『スパーダ』”を抜刀し、構える。巨大な猪は鋭い牙を向け、突進して来る。

「来い!!」

ジューンは巨大な猪に奥義を放った。

『ストレイジフォームス!!』

小太刀から赤い斬空刃が放たれ、猪に直撃した。

「良し!……何っ!!?」

ジューンが喜んだと思いきや、煙から巨大な猪が怒りながら突進し、ジューンは猪の突進攻撃に直撃した。

「ガアツ!!」

ジューンはそのまま猪の突進に押され、後ろの岩に激突しようとしていた。

「やばい!!」

ジューンがピンチになると、ラルフが急いで飛び、ジューンを助け出す。そして猪は岩に激突した。ラルフはジューンを抱えながら、消えた。

夜になり、ラルフとジューンは巨大な猪のそれ以上もある超巨大な猪

の亡骸の下でキャンプをしており、取ってきた魚や猪の肉を焼いていた。

「それ、食べ」

ラルフは焼いた猪の肉と焼き魚をジユンに渡す。

「お、ありがとうー！」

ジユンは肉にかぶり付きながら食べる。

「しかし、あの突進をまともに受け止めれないとは……余程の覚悟が足りないか、緊張……それか、お前は覚悟の本当の心得をしていない……」

「え……」

「……それがなければ……敵に情けを向く様な感じただ……」

「……俺の……本当の覚悟……」

ジユンは落ち込むと、ラルフがある事を言う。

「……昔の陽弥も、そんなだったぞ……」

「陽弥も!？」

「ああ……アイツはかなりの覚悟がないまま攻めていたからなあ……アイツが護星神の修行の為、このヴァナヘイムに巢食う巨大な猪の群れを倒そうとしていたよ……結果、ズタボロにされて後退して来た……その時、陽弥は言ったんだ……「こんなにビビっていると言う事は……よっほどの覚悟を決めていないって事か……」って……そことんこは、叔父さん（シン）や叔母さん（ヒルダ）の正確に似ていた……」

「陽弥も……今の俺と同じ状況に……」

「それで俺は言ったんだ……「人間性を捨てて、野獣みたいに本能でやってみたら？」と……その結果……陽弥はヤバイ事に、巨大な猪の群れを全て、その本能で狩り尽くした……」

「へえ……」

「今、俺等がここにキャンプを張っているこの馬鹿デカイ骨……これがその猪の群れのリーダーなんだ……」

ラルフがそう言うと、ジユンがその骨を確認し、上に登ると、辺りが猪の骨で広がっていた。ジユンは陽弥の本能に腰が抜けた。

「ハハ……ハハハハハ……ヤベエな、こりゃ」

その翌日の朝、ジユンは先日の巨大人食い猪を相手していた。

「来い！」

ジユンはスパーダを構え、猪の突進を回避し、直ぐに構える。

「(自分に抗え!!……獣の様に!!)」

するとジユンの目が光、猪の突進を防御し、動きを止めた。

「!!?」

猪は驚くと、ジユンの表情が獣の様に、猪を睨み付け、牙を向く。そしてジユンが猪の鼻に跳び移り、スパーダを斬り付ける。猪は悲鳴を上げ、暴れる。高台から見ているラルフはジユンの荒々しさに、感動する。

「そうだジユン……それが本能だ。獣の様に自分に抗い、そして本能に目覚めよ。陽弥が虎なら……お前は狼だ……」

ラルフが感心している中、ジユンのスパーダが光だし、狼極龍王が現れ、猪を吹き飛ばした。すると狼極龍王がジユンに語り掛ける。

『自分の本能を思うがままにしたか……』

「ああ！俺はもう獣の様になった！」

『そうだ……恐怖の事を考えず、獣の本能を呼び覚ませ！』

狼極龍王はそう言うと、スパーダに戻る。

「狼・龍装光!!」

ジユンが叫ぶと同時にスパーダの刃を同時に掠り合わせた。スパーダが光だし、狼極龍王が出てくると、狼極龍王が光だし、ジユンの体に纏わり付く。青く光る甲冑、肩や肘、背中や膝には野獣の如く金の鬣を思わせる部分、そして兜は、狼と思わせる外見と後頭部に金色の獣毛を使用した飾りが垂れていた。ジユンは自分の姿を見て、驚く。

「これが……俺の……」

ジユンは感心していると、猪が赤い目をして怒りながら突進してきた。ジユンは猪の突進を素手で受け止めた。

「行くぞ!!」

ジュンは猪を殴り飛ばし、飛び掛かる。さらに尻尾を持ち、振り回す。

「オラー・オラー・オラー・オラー・オラー・オラー・オラー!!」

ジュンは興奮しながら、猪の尻尾を投げ飛ばした。そしてスパークを取り出し、叫ぶ。

「ジュン・マコフィッシュユ! 荒れるぜ!!」

ジュンは名を言い、高みへ目指すのであった。

a f t e r s t o r y 2 9 : 生きる希望

一方、陽弥はとある防空壕の中で目を覚ますのであった。

「う……………ここは…？」

薄暗い洞、古い電球が闇を照らしていた。陽弥はボロボロの布団から起き上がり、辺りを見渡すと…。

「氣い付いたか？」

「？」

陽弥に声を掛けたのは、ボロボロの布切れで全体を覆っている老人であった。さらに良く辺り見渡すと、血だらけの患者や全身が焼け爛れた患者が寝ていた。

「何なんだここは？」

「……………ここはかつて、良い星だった……………お前の故郷と同じ、豊かで平和であった……………しかし、ドレギアスが率いる宇宙帝国軍ディアヴォリアスが攻めてきた…」

「!!」

「そして奴等は……………この星を荒廃させるために、次元反応弾を投げ入れた……………付いてこい…」

老人は置いていた剣を持ちつ。陽弥は起き上がろうと立った直後、ある事に気付いた。それは右腕と左脚が無くなっており、包帯を巻かれていた。老人はしようがなく、看護師から車椅子を借り、陽弥を乗せて、連れて行く。防空壕の出入口から光が漏れ、陽弥の目を眩かせた。そして陽弥の目が馴染み、目の前に写った光景に、陽弥は息を殺した。

「……………」

辺りは何も無く、瓦礫や廃墟があり、黒い煙が立ち昇っていた。空は青いのに、地は地獄であった。陽弥は老人に問う。

「……………何なんだ……………これ…？」

「三日前だ……………奴等は慈悲などない……………」

「……………」

老人はそう言うと、陽弥は車椅子のリモコンを使い、移動する。

「何処行く……」

「……向こうまで見てみる……」

「そうか……氣い付けろ……それと……」

老人はポーチからおにぎりとおにぎり乾パンを陽弥に分けて、防空壕に戻る。陽弥は荒廃した大地を進む。

数日前、少女はお母さんと一緒に家でご飯を食べていた。

その時に、空が真っ赤に染まり、その少女を庇うかのように母親は子を守り、辺りを死の星へ変えた。

次元反応弾により、娘を庇った母親は右腕が引き千切れ、ガラスの破片が右脚にも刺さっていた。

母親は全身血だらけで呻いた声を吐きながら、守っていた我が子と一緒に歩いていった。

母親は瓦礫の上に腰を掛け、娘を安心させる。娘は大好きな母親の折れている腕を抱き、眠りに付く。

翌朝、母親と娘の周りに蠅が飛び回る。

少女は母親の死体に飛び回る蠅を追い払おうと手で払うが、母の目や耳、鼻の穴、口から蛆が大量に落ちた。少女は母親の死体をそのままにし、歩き始める。

その夜……少女は瓦礫の中でボロ布を被せて、朝になって起きて歩き、夜は寝て、朝は歩く日々であった。そして昼に廃墟になってしまった市場に足を踏み入れた。すると車椅子に乗っている男性が昼食のおにぎりを落としてしまった。

「あ……」

その男性は落としたおにぎりの代わりに別のおにぎりを食する。

丁度そこにその男性が落としたおにぎりを少女はやつと食べ物に有り付け、おにぎりを拾う。

つと、その少女はその男性の右腕を見て驚く。自分を庇って死んだ母親と同じ事に……。



「今日から、俺がお前のお父さんだよ……♪」

陽弥は満面な笑顔で返すと、ヨーコの頭から何かが落ちてきた。

「ん？……あらら」

落ちてきたのは、大量のシラミであった。陽弥はヨーコを移民艦のシャワールームを借り、左手で少女の髪に付いているシラミや身体に付着している汚れを洗い流す。そして傷がある所は医師に頼み、傷薬を貰った。移民は各自の部屋へ移動していく。陽弥もヨーコを連れてベッドに寝かせると、ヨーコは話し掛ける。

「お話して……」

「……そうだね、そうだ……愛と勇気、希望に満ちた国のお話はどうかかな？」

「愛と勇気と希望に満ちた？」

「うん……ヨーコも驚く、平和な世界♪」

陽弥は話す。その国には色んな人達全員が家族のように慕う平和な国で、皆に愛されている太陽の王が戦乙女達を引き連れて、悪い悪党を懲らしめてくれると……

「わく……その国……本当にあるの？」

「……あるよ♪」

陽弥はヨーコにそう言うと、それを聞いていた男性が問いかける。

「本当にあるのか？……戦乙女の名を掲げる連合国家が!？」

「よく知ってるね？」

「ああ……噂で聞いたことがあるんだ……龍の鎧を身に纏い、邪悪な闇を光で切り開いてくれると……名は”ヴァルキュリアス”……神話だと思っていたが……アンタの言葉でヴァルキュリアスが存在するって……」

「……フフ♪」

陽弥は鼻で笑い、ヨーコが寝た事を確認すると、立ち上がる。

「どこ行くんだ？」

「ちよつとね……スマンがヨーコを見てくれ♪」

陽弥はそう言い、ブリッジへ向かった。



ブリッジに到着した陽弥は移民艦の船長に頼み、格納庫にある共和国戦闘機の提供及び、改造の許可を申し入れた。船長は深く考え、許可を入れ、格納庫にある共和国軍の主力戦闘機『ジスタード』の改造を開始する。そして数日後、陽弥専用改造されたジスタードが収納される。

(わかり易く言えば外見はVF-27 ルシファーが変型しない機体になっており、フレシキブルブレードアームが追加されている感じです。)

「本当にこれで良いのですか？色もあんな目立ちやすい鮮やかな赤とオレンジで…それに高火力のプラズマビームやバーニアをフル、推力を大幅に上げるなんて、しかも白兵戦時に機械弓やデュアルレイピアや神経増強義手と義足を着けるなんておかしすぎるよ！アンタ何者?!」

「……名乗る程ものではない…私は只の”騎士王”です♪」  
「騎士王？」

整備長は首を傾げると、陽弥はヨーコのいる部屋へ行こうとした直後、警報が鳴り響く。

「今度は何だ？」

『11時の方向にディアヴォリアス艦隊が接近!…数は500隻!!』

オペレーターが放った言葉に艦隊の軍人や民間人が驚く。

「500隻?!そんな数…我ら共和国艦隊や移民艦を含めて57隻!」

「500隻か…俺一人で充分か♪」

「え!?!」

陽弥はそう言い、共和国軍のパイロットスーツに着替え、ジスタード 陽弥・カスタムに乗り込む。座席には陽弥にしか使えないヘルメットを装着し、右腕と左脚にある連結部に義手と義足が連結する。そして格納庫に収納していた自立型高速無人戦闘機「リッター・オブ・バード”LOB(ロブ)”」を12機を脳波で動かす。

「シールドゲートを開けてくれ!」

陽弥が12機のロブを引き連れ、宇宙空間へ発進した。そして11時の方向からディアヴォリアス軍のシャンドウア艦隊であった。す

るとシャンドウアの傭兵艦隊の旗艦の船長がこちらに向かってくる  
13機の戦闘機を見て笑う。

「捻り潰せ…グレゴリー天皇陛下と大宇宙皇帝ドレギアス陛下に名誉  
と秩序を！ハイルオブディアヴォリアアスウウ!!」

《ハイルオブディアヴォリアアスウウ!!ハイルオブディアヴォリ  
アアアスウウ!!》

シャンドウア兵達と艦長はドレギアスに敬意を払うと、オペレー  
ターが報告して来た。

「艦長！敵機が陣形張り、膨大な熱エネルギーが発生しています！」  
「エネルギーを？」

その直後、シャンドウア艦隊に眩い閃光が照らされるのであった。

## after story 30 : 熱と金と決意

灼熱の炎が吹き出る世界『ムスperlヘイム』：コモンは上半身裸で50キロもある溶岩石を引っ張っぱりながら山山路を走り登っていた。ムスperlヘイムの高熱に身体から大量の汗が流れており、気温は80℃以上まで上っていた

「ハア！ハア！ハア！ハア！ハア！ハア！」

コモンと共に登っているバルトはコモンの先頭を走っていた。

「オラア！どうした!!? 疲れたか!!?」

元気澆刺なバルトにコモンは啞然する。こんな熱い中で張り切るバルトの姿を見て、どうも思わないのかと…。コモンは毎回水分補給をしながら、山路を歩き、ようやく山頂まで登り着くと、バルトが待っていた。

「お〜！ようやく戻ったか！対した奴だなあ♪」

バルトはそう言い、山から見えるムスperlヘイムの景色を眺める。

「そう言えば…陽弥の奴もお前と同じ屁ばっていたからなあ…この熱さ、どうにかならんのか？って…俺に質問して来やがったんだよ」

バルトが陽弥の過去の出来事を話すと、コモンが問う。

「陽弥さんが？」

「そう…それからアイツは、幾段の修行を乗り越え、対にはこの灼熱のムスperlヘイムや極寒のヨトウンヘイムの熱さと寒さも全く感じなくなってしまうんだ…：それ程にとてつもないハードなトレーニングをやったと思う。そうしなければ、こんな熱い中をどうやって軽々登ることが出来る？」

「…：精神を清めたから？」

「そう！アイツはあそこにある山」

バルトの指差す方向に水が溜まっている山を見る。

「あれって…：温泉!？」

「そう、此処には温泉があつて…陽弥の奴はそこでサウナのように熱さを完全克服するまで粘ったんだろ…：因みにあそこの温泉は温か

いがサウナはここより20℃も高くなっている♪」

「それってつまり……」

「つまり……この山の気温は80℃。彼処の温泉と言うよりサウナの気温は100℃と言う事になる。…付いてこい！温泉へ行くぞ！」

バルトはそう言い、コモンも一緒に山を下りていき、温泉のある温泉郷へと向かった。

温泉用の水着に着替えたコモンは温泉に漬かる。

「ハア〜！一汗かいた後に風呂に入るの……何日振りなんだろう………ん？」

コモンは、巨人用の温泉に漬かるムスペルヘイムの巨人達を見る。「皆、デカイなあ……僕もあんな風に巨大化できたらなあ……」

コモンは巨人に憧れ、温泉の温かい泉に癒やされるのであった。

一方、アストラは小人の世界“ニルヴァーナ”でドミニカにこつこつ扱かれていた。

「オラアツ!!どうした！動きが鈍いぞ！」

ドミニカは小さな体で槍と盾を駆使し、大剣を構えたアストラを翻弄する。さらに槍と盾、大剣がぶつかり合う。

「クツ！速すぎる！しかも頑丈だ……！」

アストラの額に汗が流れ、慎重にドミニカの動きに気を付ける。

「何処だ！……出てこい!!」

アストラが叫んだ直後、3時の方向からドミニカが目にも止まらぬ速さで、槍を突き付ける。

「フツ!!」

アストラはそれに気付き、回避する。鋭く尖った槍の矛先がアストラの頬を掠り、傷から血が流れる。

「ヤバイなあ……これ……カロスの野郎やベイボルス以上だ！」

そしてドミニカの槍がアストラの目の前にまで来ており、大剣で何

とか振り切るのであった。

その頃、別の宇宙では……

「バカ……な……… たった……13機の機……体に……俺達シャンドウア艦隊が全滅ツ!!!」

艦長が死に際に言おうとした直後、ジスタードのフレシキブルブレードアームが、艦橋を突き刺し、撃沈した。500隻も浮遊していたシャンドウア艦隊が、火を吹きながら、爆発する。そして爆炎の中から12機のロブを連れて飛翔する陽弥のジスタードが出てきた。それを見ていた共和国艦隊の兵士達が陽弥の戦闘を見て啞然していた。

「嘘だろ……」

「シャンドウア艦隊が……全滅？アイツ……あのジスタードと無人戦闘機を操っているの……一体何処の誰なんだ？」

誰もがそう思い、陽弥のジスタードが格納庫へ戻って来た。陽弥はジスタードから下りると、共和国兵士達が喜びながら陽弥を持ち上げ、胴上げする。

「何何何何?!?!」

すると陽弥の所に共和国移民護衛艦隊を率いて、共和国旗艦アネモネス級二番艦『ウンディーネ』艦長”アリマルド・ヘルツ”が現れた。「先程の戦闘、見事でした。貴方は……一体？」

「艦長……民間人リストによれば、名前は”ゾンネ・シュリーフオークト”と名乗っていました。」

「ゾンネ・シュリーフオークト……まるで貴族の様な名前だな……まあ、良い、民兵として君に頼みたい事がある……我々、共和国軍の力を貸してくれ。」

「……ええ、謹んでお受けしましょう」

陽弥はそう言い、共和国本部がある惑星ライラックへと向かうのであった。

## a f t e r s t o r y 3 1 : 陽弥とエミリア

惑星オールドリンの人々を銀河共和国首都でもあり、本部の惑星ライラックに移民を終えた艦隊は総本部へ帰還する。陽弥は養子であるヨーコを連れて、共和国軍総本部に入る。そこには数多の種族の司令官達や将軍がおり、鋭い目線で陽弥を睨んでいた。

「ゾンネ・シユリーフオークト：貴官を共和国軍特務大佐に任命する…。」

「はい、謹んでお受けしましょう。」

佐官服を着用している陽弥の胸に特務大佐の階級章がつけられた。陽弥は共和国によって作られた黄金のマスクと髪を赤から白銀に変え、呼び名を『仮面を付けた白銀の守護者』”ズイルヴァーン”と名乗り、養子であるヨーコも名前を隠し、仮名”リーラ”と名付けられた。帝国によって占領された星の住民を避難したり、共和国軍の部隊を派し、次々と帝国を圧勝していくのであった。その為、共和国政府や軍から、”白銀のコンダクター”と呼ばれた。そして共和国によって造られたコルベット級隠密特殊戦闘艦”ハバキリ”の艦長である陽弥は、宇宙帝国によって壊滅寸前であった残存部隊を集結させ、共和国独自の隠密部隊と共に、ディアヴォリアスの動きを探っていた。

「シユリーフオークト艦長！」

共和国兵士が報告と共に敬意を払う。陽弥は艦長席から立ち上がり、義足を付けたまま立ち上がり、兵士に問う。

「何用だ？」

「前方、東経一時の方向にて、所属不明機6機を確認しました。」

「所属不明機？」

陽弥は首を傾げると、兵士が外空間衛星カメラで撮られた写真を見せる。そこに写っていたのは、オメガメールであるヴェルトサーガイグナイテッドとエミリアのジグニューーリベリオン、テストのターボレックス、ミラーナのプテライザー、オルトのプレジストアクセスラー、そしてオメガプライムスが写っていた。

陽弥はそれを見て笑い、格納庫へと向かう。

「ジスタードと2機のロボを出せ…。」

「所属不明機の…所へですか？」

「ああ♪」

「大丈夫ですか？もし彼らが帝国の者でしたら…。」

「…心配はない、あれは帝国者ではない…だが、一人は『家系の者』だから♪」

「はあ…？」

兵士が陽弥の言葉に首を傾げ、陽弥は格納庫に向かった。

格納庫では、共和国兵士達がジスタードの最終調整し、コックピットの中にいる陽弥が黄金のマスクを付け、口元をマウスマスクで正体を隠す。

「さて…アイツ等にちよつと喧嘩を売ってくるか…特に嫁さんに、久し振りにアイツと遊んでやるか…♪」

陽弥はそう言うと、声変換器を喉に付け、声を調整する。(ズイルヴァーンでの声優は近藤隆です。)

「初めまして皆さん♪」…。」

そして調整し終えると、叫ぶ。

「ズイルヴァーン…出る！」

陽弥：ズイルヴァーンのジスタードがカタパルトから射出され、2機のロボを引き連れてレオン達がいる宙域へとつもないスピードで向かう。

数分前…：勇人達は、シンが急用な仕事の為、地球に戻るといい、代わりに勇人を担任にした。指示はエミリアから報告してあると、そして勇人達は、レオンとヴェルトサーガ イグナイトッドの天・龍装光の稼働テストを行う為、別の宇宙と繋がっているテルミナス宙域へ来

ていた。

「天・龍装光!!」

レオンは叫ぶと、ヴェルトサーガ イグナイトッドが光だし、白黄金のアーマーを身に纏う。

「それじゃ、私も龍装光をします……イザベル!」

エミリアがイザベルを呼び出すと、イザベルが深紅の薔薇の龍へと変わった。

「龍装光!!」

エミリアが叫び、イザベルがシグニューに纏わり付く。両肩に薔薇の形をしたレドムパーツが付けられており、後頭部に粒子帯を放出していた。

「さて、レオン・マクライトさん……手加減しませんよ♪」

「こちらですよ、姫様……」

レオンはアーティファクトIIを抜刀し、エミリアもエネルギーランスとビームシールドを構える。

「いぎー!」

「お相手して貰いますわ!!」

両者は機体を動かさそうとした直後、コックピット内部全体にアラームが鳴り響き、突然モニター画面にノイズが出た。

「何!?!」

「何だこれは!?!」

そのノイズはオメガプライムスのモニター画面にも出ていた。艦内にいた勇人とシンデイ、雄二達は慌てる。

「何!?!」

「っ!?!?」

その時、勇人とシンデイは何かを感じ始める。

「どうした、勇人?」

「……来る」

「え?」

「分かる……この感じ、普通じゃない!」

それと同時に、レオンとエミリア、テスト、ミラーナ、オルトがい



る空間では、辺りを警戒する。そしてエミリアがこっちへ飛んでくる物に反応した。

「回避!!」

エミリアが叫び、レオンは散らばった直後、赤いパルスレーザーが通り過ぎた。

「今のは!?!」

レオンが驚くと、赤い戦闘機と護衛の2機が通り過ぎて行く。

「速いっ!!」

赤い戦闘機はフルバーニアやスラスターを利用し、アクロバティックな旋回をして、レオン達の方へパルスレーザー砲を連射する。レオンはビームシールドで防御し、戦闘機が通り過ぎて行くと同時に、アーティファルソードIIをライフルモードに切り替え、ノバビームを放つ。

「クソ!!」

しかし、赤い戦闘機と護衛機はビームの軌道を読み取り、とてつもないスピードで回避する。

「飛んでくる所が分かっているのか!?!」

「所属不明機! 応答せよ! 貴官の所属名と名前を要求すしろ!」

テストが戦闘機のパイロットに通信するが、応答はしなかった。

「無視か!」

テストがそう言った直後、それを聞いていたズイルヴァーンは密かに言う。

「フン……相変わらずおバカさんだな、テストよ♪さて、そろそろ本題に入るか……。」

ズイルヴァーンは鼻で笑い、ジスタードのフレシキブルアームを動かす、指をエミリアの方に向ける。

「私?」

そしてジスタードの指がクイクイっと動かす。

「勝負しろ?……」

パイロットの挑発にエミリアは頬を膨らまし、勝負を受ける。エミリアはエネルギーランスとビームシールドを構え、脚部装甲内にある

高出力バーニアと腰部の長距離ブースターの出力を上げる。シグニュー高機動形態へとなり、赤い戦闘機に接触回線を開く。

「私はヴァルキュリアス総統 『陽弥・ギデオンの妻！エミリア・ヴァルネア・ギデオン!! 貴殿の名は！』」

エミリアは名乗ると、聞いていた陽弥は声変換器を使い、通信する  
「私は……ズイルヴァーン」

陽弥は呼び名で答え、パルスレーザー砲を構える。

「勝負!!」

陽弥とエミリア、互いに愛し合う夫婦は、今まさに最大の夫婦喧嘩を始めた。エミリアは高機動を活かし、ジスタードを追う。するとジスタードを守りに2機のロブが立ち塞がる。

「邪魔を！するなああっ!!」

エミリアはシグニューの頭部に搭載されている粒子キャノンで応戦する。そして陽弥は船体上部に取り付けられている高火力プラズマビーム砲を放つ。エミリアはビームシールドでプラズマビームを拡散し、エネルギーランスに搭載されている長距離レールガンを放つ。しかしジスタードからフレアを放出され、レールガンが無効化された。

「フレア!?!」

エミリアは驚くと、ジスタードの底部ハッチが開き、中からマイクロミサイルが一齐に発射され、エミリアの方に向かってきた。

「クッ…3児の母親はここで負けません!!」

エミリアは全身全霊を掛け、マイクロミサイルを回避していく。

「ハハハ…さすが、俺の嫁さんだ♪」

マイクロミサイルの雨を駆け抜けるシグニューはエネルギーランスを突きつける。

「貫ったあああああーっ!!!」

エミリアが叫んだ直後、ジスタードのフレキシブルアームが展開され、収納されていた特殊超硬合金剣『ランドグリーズ』を抜刀し、突き攻撃を受け流した。

「っ!?!」

それと同時に、ズイルヴァーンは声変換器を切り替え、接触回線でレオン達にも聞こえないように、エミリアの通信した。

『勝利へ導く太陽の騎神”…♪』  
「!?」

ズイルヴァーンはそう言い、エミリアの横を通り過ぎた。ズイルヴァーンはもう一つ収納されていたランドグリーズを抜刀し、片方ずつ攻撃体制、防御体制の構えをする。

「その構えは!!」

「そうだ……ファランクスの構えだ!」

ズイルヴァーンはそう言い、二刀流を突き付ける。エミリアはズイルヴァーンの攻撃を回避しながら、ズイルヴァーンを見る。

「まさか…あの構えを必ずやるのは陽弥様だけ、だとしたらズイルヴァーンは……陽弥様?!いいえ、そんな筈は、陽弥様はドレギアスの所に囚われている筈?!」

「何を考えているんだ?……そう思っていると、あの子らに負担を掛けちゃうぞ♪」

「っ!」

人の心を読まれていたのか、しかもあの子等と言う言葉によって、ズイルヴァーンの正体が陽弥本人と分かった。

「嘘!?!だって、体は囚われている筈!」

「義体があるんだよ、カオスと全世界の神々の会議場である……虚無の空間”で、義体を得た……そして、お前が去った時に3人等を誘拐しようしてきたコーパスからアイツ等を守っていたからなあ……」

「ええっ!?!」

陽弥の言葉に、エミリアは驚く。

「それに忠告しておく……もう奴らはグリニア帝国ではなく……五大宇宙帝国、ディアヴォリアスだ……」

「ディアヴォリアス?」

「コーパスを含む数多の宇宙を支配しようとしている帝国が同盟を結んだ銀河帝国の集まりだ……数多の宇宙を守護している神々が殺られている……俺も負けてしまった……」

「陽弥様が!？」

「だからエミリア……お前に伝えておく……早急に彼らの龍装光を急がせろそして時空族の根城”カリユプソ”にいる連中に伝えてろ『帝国がお前たちの所に向かっている』……俺と銀河共和国、残存している神々で生命を守るついでに時間を稼ぐ……」

陽弥の言葉に、エミリアは聞き入れる。

「……分かりましたわー!」

すると陽弥はポーチから、ある物を取り出し、コンソールに差し込むと。データがエミリアのシグニューに送信された。

「これは?」

「レオン達の為に、俺が秘かに設計した機体のデータだ……それじゃ、芝居をやって来れ♪」

陽弥とエミリアは武器をしまい、陽弥に言われた通り芝居をやる。

「さて、姫様……私には任務があるので、これにて失礼致しました♪」  
「ま!?待ちなさい!!」

エミリアはそう言うが、ズイルヴァーンは2機のロブを引き連れて、宙域から去る。エミリアは遠くへ去る愛する夫へ深く祈る。

「(御父様(エヴァ)、御母様(ローラーナ)……陽弥様をお守り下さい……)」  
そして陽弥も見送るエミリアへ深く祈る。

「(エミリア……皆を頼む!)」

陽弥はそう深く祈り、ハバキリへ戻っていった。

オメガプライムスへ戻ったエミリアは陽弥から貰ったデータを解析する。そのデータの中にはこれから、レオン達のパートナーとも言えるスペクトロブスのデータやレオン達に新たな改造用のパーツや設計図が入っていた。特にレオンの場合はそれ以上なのであった。それを見たエミリアと勇人とシンデイは驚く。

「嘘でしょ!?!/おい!?!マジ!?!/I can't believe it! (信じられない!)」

それは……ヴェルトサーガ、エグゾディアスやライザーメール、ローガストメールに新たな力を与える事になる設計図でもあった。

## after story 32 : 究極の機体

惑星ホライゾンに戻った勇者達は、直ちにヴェルトサーガとタスクのエグゾディアス、それぞれの世界で修行しているジュン達のライザールとローガストメールの改造を急いでいた。

「姫様…良いんですか？レオンさん達の機体を勝手に改造しちゃって……」

研究者の間にエミリアは答える。

「ですが、陽弥様がこれを渡した時点でもう一大事なのです……帝国はあらゆる銀河を支配している帝国と同盟を結んでいます。そしてあらゆる神々や陽弥様も負けています……」

「けど、もし…負けたら？」

「負けたら希望はありません……希望を失えば、二度と見ることはありません……」

「……」

研究者が深く考えていると、エルシユリア王国兵士が来た。

「あ…姫様…王国城外で、問題が発生しました。」

エミリアは兵士の報告を聞く。内容はホライゾン軌道上に移民船団と此方へ迫っていると、エミリアと星騎士団達は、急いで向かっていった。

軌道上には連邦艦隊と衛星軌道上に浮かぶ連邦総司令部から連邦空港まで、移民船団を検問していた。その移民船団はドレギアスによって、故郷を滅ぼされた種族であり、ヴァルキュリアスに助けを求めに来たと……。移民船団の各国の首相達がヴァルキュリアス大統領と話がしたいと、押し掛けてきた。そして本部ではレオンが貴族の様なスーツを着ていた。

「本当に俺がやらなきゃダメ？」

レオンはタスクやアンジュに問う。

「レオン、落ち着いて…今、ヴァルキュリアス大統領を演じられるのはレ



は心を落ち着かせ、船団の首相達との会議を始めていく。そして数時間後……会議を終え、入港の許可を得た移民船団は、一先ずグラランドスフィアへと入っていった。一方、レオンはと言うと……。

「くくく……」

会議のせいかな、自室のベッドに寝転がっていた。サラが疲れて寝転がっているレオンの背中をマッサージする。

「陽弥の奴……こんな凄い事をいつもしているんだな……」

「凄い事ですよ、さすがこの世界のヒルダさんの御子息です。」

「はあく……この王様代理……いつまで続くんだろう」

レオンがそう嘆いていると、ヒュウガがレオンの背中に乗り、お父さんの背中を踏み台にして遊ぶのであった。するとレオンは散らばってそれぞれの修業をしているジュン達の事を心配する。

「アイツ等……今頃、どうしてるんだろうか……」

レオンがそう思っていると、サラがある事を言う。

「あ、そう言えば、ルナさんがロザリーさん達を連れて、それぞれの世界で修行しているジュン達の所へ見学へ行くそうですよ♪」

「えっ!」

「はい♪」

レオンとサラはヒュウガを連れ、タスクもアンジュとアレクトラを連れて、エミリアとルナに頼み、ギャラリック・リングを起動し、それぞれの世界にいるジュン達の所へと向かった。

先ずはヴァナヘイムにいるジュンの方であった。ヴァナヘイムの荒野に辿り着いたレオンは、辺りに広がる巨大な猪の骨を見て、驚く。

「何だこの馬鹿デカイ骨は?」

レオンがその骨を見て驚くと、ルナが説明する。

「お兄ちゃんもここで修行していたからね、このヒビがある骨は……お兄ちゃんので、そしてまだヒビも入っておらず、少し傷がある骨は……ジュンさんのですね」

「ジュンの!?!」

ロザリーが驚くと、何処からか物凄い音が聞こえた。

「何だ?」

レオン達は辺りを見渡すと、3時の方角から煙が立ち昇る。レオンは望遠鏡で煙が上がっている方向を見る。

「あの煙……しかも凄い砂埃だ……」

その時、煙の中から数十メートルもある猪で、その上に狼・龍装光をしたジュンであった。

「ジュン! アイツ、龍装光が使えるようになったんだ!!」

「マジ!?!」

ロザリーがレオンが持っていた望遠鏡を取り上げ、覗く。

「本当だ!!」

「ハハハ! アイツあんなハードな修行していたんだなあ♪」

ジュンの成長に感心したレオン達。ロザリーはもう少し、ジュンの様子を見てみると残り、レオン達は、次にコモンが修行しているムスペルヘイムへと移動した。

灼熱の炎と火が吹き荒れる火山があり、辺りを焼き尽くしていた。山の近くにバルトが筋肉がちよっと増えたコモンへ大岩を投げた。コモンはヤトノカミを抜刀し、叫んだ。

「呀・龍装光!!」

コモンが叫ぶと同時にヤトノカミの刃がチェーンのように伸びコモンを覆う。その刃から呀龍王が出てくると、呀龍王が光だし、コモンの体に呀龍王が纏わり付く。赤く光る甲冑、両手と手首に円盾とヤトノカミ、背中や足に様々な武器を装備していた。コモンは足に装備されているヌンチャクを取り出し、コモンの方へ転がって来る大岩を破壊した。さらに背中からトンファーを持ち、大岩を次々と破壊していく。それを見ていたレオンは驚く。

「スゲエ……アイツも、龍装光を……」



レオンは感心し、今度はヨトウンヘイムにいるアラドの方へ移動した。

凍てつく大地、吹き荒れる吹雪の中、アラドがいた。全身が緑の甲冑で覆われており、霊峯山魔龍帝の牙が兜の角になっており、鬼面を浮かばせ、トワイライトサーガを振り回す。

「来い!!」

アラドが叫ぶと、雪の中から雪の吸血鬼と言えるスノーエルフ達が牙を向き、アラドの血を吸おうと襲い掛かって来た。

《シヤアアアアアアツ!!!》

「フンツ!!」

アラドはトワイライトサーガを振り回しながら、スノーエルフ達を薙ぎ払う。その様子にエルシャは心配するのであった。

「アラド君……」

エルシャはアラドが帰ってきたら、エルシャ特製のクリームシチューを調理すると心に決めるのであった。

次に、リアースがいる神界アースガルドでは、ラファイがアースガルドの子供達の先生をしており、リアースは修業と言うより、ラファイからの知識や医学、そして技能を学ぼうと努力していた。たまに弓の修練やエクスカリバーンのアローモードからソードモードに切り替え、剣術も学んでいた。

「リアース……」

クリスもリアースの逞しさに頬を赤くする。

次は、アストラが修行している小人の世界『ニルヴァーナ』では、アストラは相変わらずドミニカに苦戦中であった。そのせいか、身体中に傷だらけで、筋肉も成長していた。

「オラアッ！」

ドミニカが突撃をした時、アストラの目が変わった。

「その手には……もう、乗らんど!!」

アストラはそう言うと、ドミニカの突撃を受け流す様にドミニカの回り込み、大剣を振り回す。

「何っ!？」

「貫ったああああ!!!」

アストラの大剣が目の前まで来ると、ドミニカは得意の錬金術で緊急障壁を展開した。

「クッ!!」

ドミニカは吹き飛ばされたが、体制を立て直し、鼻血を拭き取る。

「やるじゃねえか！」

「そっちもな!!」

ドミニカとアストラは戦闘を再開し始めたのであった。

ダークエルフの世界『スヴァルトアルプ Heim』では、ベイボルスが高速で動くデュランを相手していた。

「聞いて……感じる……考える……」

ベイボルスは槍を持ったまま、瞑想を続ける。

「お前を狙う鷹は……何時どこで来るか分からない……だから、相手の軌道と波動を見極める……」

デュランは高速中にベイボルスに教える。そしてボウガンを向け、

矢を放った。

「……………」

ベイボルスは瞑想したまま、ここへ飛んでくる矢の波動と軌道を感じる。

「!」

そして感じると同時に、瞑想したまま矢を回避する。次々と来る矢を回避しつつあるベイボルスの後ろからデュランがナイフを突き立てていた。ベイボルスは波動と同時に鼻で相手の臭いを嗅ぎ分けた。「…デュランの臭い、奴は…ん?…これは、鉄の臭い?…そして鉄の臭いと同時に汗が……そうか!!)」

ベイボルスはデュランの行動を読み取ると同時に目を開け、背後から襲うとしたデュランのナイフを素手で弾き飛ばした。

「っ!?!」

そして持っていた槍をデュランの首に突き付ける。

「チェックメイト♪」

「……………見事です♪」

デュランとベイボルスは握手で交わり、修行を続ける。

次に、エルフの世界であるアルブ Heim では、キャリアとアイリスと一緒に滝行をしていた。自分の雑念を浄め、信念と精神を統一させ、自然と向き合い自然と一体化していた。キャリアとアイリスの近くに木霊達が集まっていた。

最後に、ヘル Heim にいるフェイスはシュバルツの闇呪紋を教わられていた。

「イーゼラー!」

地面から闇の亀裂ができ、そこから闇の波動が放たれた。

「これが、究極の闇呪紋『イーゼラー』だ…フェイズさん、やって見て♪」

「あ、はい」

フェイズはエンジエリックナイツを抜刀し、呪紋を唱えた。

「深淵の闇よ、地のそこから波動を起こせ！」

地面から亀裂が出ると同時に、霊達が出てきた。シュバルツはそれを見て驚く。

「あれ？」

「イーゼラー!!」

フェイズが唱えた直後、亀裂から膨大な波動が放たれ、ゴースト達が溢れる。その膨大な呪力に、シュバルツは唾然していた。

「……」

「あのう…これはイーゼラーと言うより…ゴーストバーストだと思うんですが……」

「……え!? ああ、いや…OKです。多分フェイズさんが発動した呪紋はネオ・イーゼラーと思います…」

「ネオ・イーゼラー…イーゼラーと同じく、闇の波動の増加に、幽霊の追加…良いですね♪」

純粋な心と前向きな性格は、変わっていなかった。

それぞれの世界で修行しているジュン達を見終わったレオン達の所に、研究者の一人が駆け付けた。

「マクライトさん! ついにできました!」

「できたって…何が?」

「貴方のヴェルトサーガ イグナイトッドを改造して、さらにパワーアップさせたのです!」

レオンはヴェルトサーガ達が収納されている格納庫へと向かい、そこで目にした物は…

「これが…あのヴェルトサーガ!？」

レオンは驚く、ヴェルトサーガの頭部脇に羽が付いており、顔を覆い隠していた。さらに装甲が滑らかになっており、新たなヴェルトサーガ：『ヴェルトヴィンガー』へと変わっていた。コックピットも座席式からトレースシステム搭載の全天周囲モニターへと変わっていた。

「これ、どうやって動かせば良いんだ!？」

レオンが困った表情をすると、シンが説明する。

「心配するな、この機体は君のあらゆる動きをトレースをして、モーションキャプチャーと思え♪」

「モーションキャプチャーって……」

レオンが呆れていると、レオンの新たなパイロットスーツを渡された。赤と白のツートンカラーで、手甲にヴァルキュリアス星騎士団のヘルメットもコンバットから正式な全天周囲バイザーへと変わっており、肩にPEDが装着されていた。

「このスーツ…先生から貰ったスーツだ」

「そう、そのスーツを応用して、シールド発生装置やオムニツール、装弾ポーチ、そして軽量化に成功したダイヤモンドも使用した複合合金装甲板を加えた」

「複合合金!？」

「もし、モニターの破片が腹部に突き刺さってみろ?……気絶するぞ♪」

「何でそんなことが言えるんですか?」

「……その破片が俺の腹部に突き刺さって、危うく死にかけたからだ……」

「……それって、大丈夫なんですか!？」

「大丈夫♪大丈夫♪複合合金だから破片が突き刺さったり、敵の近接攻撃でも防げるから、死にやしないから♪」

「……（絶対死ぬ）」

レオンはそう思っていると、ヴェルトサーガが何かに反応する。

《レオン、通路から複数の生体反応を確認した》

「え？」

「だが、この反応……スペクトロブスだ！」

「スペクトロブス!？」

「あ、そうであった……」

通路から現れたのは、漆黒の体毛、純白の鬣、ヴェルトサーガと同じ6枚の翼、そして頭部に黄金の角が生えており、全高二メートル以上もある天巨馬であった。

「デカっ!？」

「そう、お前の相棒でありスペクトロブスでもあり騎馬……『デバストーム』だ!!」

「デバストーム……《吹き荒れる嵐》という事か……」

するとデバストームが巨大な足を動かし、レオンに近づき、その紅い瞳でレオンの目を見る。

「ソイツは陽弥の愛馬であるユニゴルディアンの双子の兄で、気性が荒すぎる七頭のスペクトロブスの一番だ……」

「頭?」

「レオンがデバストーム(黒天馬)、陽弥がユニゴルディアンの一角馬)、ルナがミステイック(霊獣)、ジュンがベオウルフ(獅子王)、コモンがイブリース(怪獣)、アラドがグレゴリアス(恐暴龍)、リアースがアークエンジェルが(巨怪鳥)、フェイズがメタトロナス(鳥獣)、アストラがヘルハウンド(猛虎)、ベイボルスがワイビック(翼龍)、アイリスがウルドラ(水龍)、エミリアがグロリアス(白羊)、テストダルクス(フェンリル)、ミラーナがジオット(ズー)、オルトがアバランツェル(牡牛)……」

「それが……俺等に与えられるスペクトロブス?」

「そう……皆、騎乗できるスペクトロブスだ……どうだ、念の為、デバストームに乗馬してみるかね? 騎乗に慣れるために?」

「良いんですか? 勝手に乗っても……」

「良いんだ♪念の為だ、ハッチを開いてくれ」

シンはそう言うと、格納庫のハッチを開く。シン達はデバストームに手綱と鞍を取り付け、レオンをデバストームに乗せる。

「この手綱を引いたり、このブーツの踵に付いている拍車で蹴れば、デバストームは動く…」

「こうか？」

レオンは手加減もしないまま、デバストームを蹴った。

「いかん！そんなに激しく蹴れば！」

するとデバストームが暴れ、レオンを乗せたまま空へ飛んだ。

「うわあああああつ~~~~~~~~!!??」

レオンは暴れまくるデバストームの手綱を必死に握り、上空から振り落とされない様にするが、余りの気性が荒すぎるまデバストームから叫んでいた。

「レオ~~~~シン!!」

サラは飛び回るレオンを心配する。シンはレオンの行動に困っていた。

「……もう、どうして素人は一気に蹴るんだろうか？」

シンはそう思いながら、レオンの特訓を続けた。

## after story 33：曙光の祝福

その頃、勇人達はグランドスファイアによって保護されているコロニー内にいた。お世話になってるシンディと雄二達の両親や家で久し振りのFPSゲームをしていた。するとドアからベルが鳴る。

「は〜い？」

勇人はゲームをポーズさせ、ドアを開くと、お土産を持ってきた雄二達とシンディがいた。勇人は部屋に招き入れ、皆でお土産のお菓子を食べながら、話し合う。その内容はと言うと……。

「雄二達もメールフレームを操りたい!？」

雄二達の言葉に勇人は驚くと、雄二が言う。

「俺達は今まで、勇人を見て見ぬフリをしていた……だから、それを償う為に、一緒に戦おうと思うんだ!」

「私も!慣れない戦闘かもしれないけど、それでも!勇人の力になりたいの!」

志歩も言い、勇人は深く考え込む。

「う〜ん……」

「しちやったら?」

すると勇人の体の中から勇人の母の生まれ変わりであるフェイトが現れた。

「母さん……」

「雄二君達は貴方に物凄く反省してるのよ……」OK”出したら?」

「……母さんが言うから、仕方がないなあ」

雄二達は興奮すると、勇人が真里亞がいないことに気付く。

「あれ?……そう言えば、真里亞は?」

「真里亞は、確か……」

その頃、真里亞は……グランドスファイアの格納庫にある勇人のパンド





こもった……ただのスーパーハッカーよ。」

「スーパーハッカー？……やつぱり何処かで聞いたことがある……!!?!、アンタまさか!!根岸真里亞!!」

真里亞の姓名に勇人達は驚く。

《ええっ?!?!?》

「そう……私のはあの根岸 英二の長女で……クソ兄貴である洋介の妹よ……」

真里亞はハッキングしながら、勇人達に自分の過去を話す。

中学の時、何時も嫌味な笑みを浮かばせる兄である洋介から、生まれ付き天才的な頭脳を持った真里亞に、高校の試験の答案のデータをハックし、答案を盗んで来いと命令された。真里亞は言われた通りに、洋介が受ける高校へハックし、試験の答案を盗んだ。その翌日、洋介は答案を暗記し、見事に高校へ受かると同時に、実の妹である真里亞をハッカーだと、警察にばら撒いた。兄に売られた真里亞は絶望し、周りの人から酷い目で見られ、友達からとてつもない程の虐待を受けた。父に頼んだが父からも知られ、真里亞はそのまま試験も受けず、こっそりと校舎の使われていない部屋にダンボールハウスを建て、こっそりと生きていたと……。

真里亞の過去を聞いた勇人達は拳を握り締める。

「そう言うことだったんだ……クソ！」

「街の権力者であった英二の立場を利用して……さらに妹の頭脳を道具の様に扱うとは……許さん!!」

「……勇人、こんな時にも何だが……根岸 英二に面談してみないか？」

「……そのつもりだよ」

勇人は鋭い目付きのまま、コロニーにある警務所に監禁されている根岸 英二の所に会うことになった。だが、彼らは真里亞がハックしていたデータに奇妙なデータを受信した事に気づいていなかった。

警務所の地下にある監禁施設、勇人は面談室で根岸 英二と話して

いた。

「まさか、君があの人物の息子さんだとは……」

「ビックリか？」

「ああ……それで？私に話したい事は何かね？」

「率直に言おう……洋介の野郎のしつけがなってねえぞ……アンタの悪い教育のせいで、実の娘である真里亜は兄貴や友達から卑劣な虐めを受けて引きこもりになったんだぞ……おまけに一般市民をシエルターに入らせらず、のうのうと生きようとした！……自分が恥ずかしくないのか？」

勇人が責めると、英二は口を開く。

「……恥ずかしい？何故だ？」

「!!」

英二の平然とした態度に、勇人は笑う。

「……フ、フフ……フフフ……笑わせんなよ……クツ!!」

勇人は怒りを爆発させ、ガラスに拳をぶつけた。ガラスにヒビが入り、拳から血が滲み出てきた。

「ふざけるなよ……お前！」

勇人は英二を睨む。そして怪我をした拳を抑え、エに言う。

「一生、刑務所にいろ……アンタのクズ息子を……目の前で殺してやるから……」

「……」

勇人はそう吐き、面談室から出た。

勇人はマギーに手の傷を治療してもらい、訓練所で日本刀を持って、構えているとレオンが入ってきた。

「相手……良いか？」

「どうぞ♪」

勇人とレオンは一緒にアースセイバーと日本刀を抜刀し、向き合う。

「行くぞ、勇者……真剣勝負！」

「こちらもですよ！レオンさん！」

二人は互いを睨み、そして……。

「!!」

両者は互いに向かい、刃同士がぶつけるのであった。

一方、何処かの密林の惑星…傷だらけのグリニア帝国兵士がよろめきながら必死に何かから逃げていた。

「あんなの…無理だ!!義足と義手をしてやがるのに、何であんなに早く動けるんだ!!」

兵士が逃げている一方、共和国隠密部隊兵士四人とジェットスラスターパックを装備している陽弥が追っていた。

「逃がすか…」

「頭領、何故あの基地へ奇襲仕掛けたのですか？これでは帝国に宣戦布告を出しているかの様になっていますよ…」

「心配するなカイエン…あの基地に奇襲を仕掛けたのには訳があるのだ…奴らの今後の作戦と計画、そして…各宇宙にまだ、帝国に抵抗する組織のリストの確認だ…。」

「それなら、心当たりのある軍と組織があります♪」

「あるのか？」

「ええ、”宇宙秩序軍”、”反乱同盟軍”、”銀河連合自由同盟国”、

”惑星連邦”、”聖府軍”、”星間国家連合”、”汎銀河統一帝国”、

”フアウンダー軍事盟約連邦”、”還星系共和国”の9つの勢力があります♪」

「ほお、詳しいな？」

「色々と知りましたから、貴方が本当は種族大銀河連合をまとめる総統『陽弥・ギデオン』様ですから♪」

「ハハハ♪」

「私は貴方に救ってくれたこの命……全力で貴方に忠誠を尽くしますよ♪」

「そうであれば、今逃げているグリニア帝国兵士をとっ捕まえるの最優先にしろ……行くぞー!」

「はい!」

陽弥はカイエンと隠密部隊と共に追う。そして追い付いて行くと、陽弥がカイエンを連れて、残りは後を追わせる。

「何処へ?」

「挟み撃ちだ!」

陽弥はそう言い、密林の中を駆け巡り、グリニア帝国兵士が来るのを待つ。そして……

「来た……」

徐々に、足音とアサルトライフルの銃声が聞こえてきた事を確認し、葉の陰から陽弥が飛び掛かった。

「捕まえた!!」

追い付いた隠密部隊も駆け付け、グリニア帝国兵士を縛り付ける。そして陽弥は基地を占拠し、情報を見る。

「帝国め、予想以上に星々を支配下に置かれている……ザ・コアを手に入れる為、逃げ場を無くしているのか……」

「まずいですよ……一刻も早く共和国政府に知らせないと……」

「だな……ん?」

すると陽弥が奇妙なデータを見つける。それは文字がルーン文字や像型文字で描かれていた。

「なんて書いてあるのですか?」

カイエンが陽弥に問うと、陽弥はカイエンに言う。

「……」我々はいかに、曙光の女神　ニケとザ・コアを出現させる種族”歌の民”の居場所を示すクアンタの遺跡を見つけた……場所は第二宇宙の惑星サイロックス”で……南緯8時の方向の洞窟内と……」

「どうするのですか?」

「カイエン…私はサイロックスへ一人で向かう。お前たちはこの基地で帝国に偽の補正情報を送れ……。この基地の安否を確認されてはまずい……。よって、この基地を隠密部隊の前線基地にする。良いな…。」

《はい!!》

隠密部隊は陽弥に敬礼し、陽弥は長距離ブースターを取り付けたジスタードでクアンタの遺跡がある惑星サイロックスへとワープし、ジスタードをステルスモードにして、着陸した。陽弥はギリースーツと赤外線ジャミングシステムを起動し、木々の上から洞窟入口付近にいるコーパス兵とゼルトラン帝国連合兵が彷徨いおり、その中に新生フエメシス騎士団の洋介とシエレナがいた。

「あのガキとシエレナ……」

するとシエレナと洋介は多数の兵士達を連れて、洞窟内に入っている、陽弥も物音を立てずに兵士の目を盗みながら洞窟内に入っていた。洞窟内にはかなり古い石柱や寺院、そして神殿が目の前にあり、陽弥は恐れなく入る。すると目の前に光輝く玉座があり、座っていたのは一見して少女のような人物だった。彼女の印象を説明するならば、とにかく“白い”肌は森護府の外壁と並ぶほど白く、髪に至っては半ば透き通っている。開いた瞳の奥が銀色の瞳であるとわかったとき、あまりに人間離れた色彩に陽弥は抑えがたい違和感に襲われた。自然の色合いに倣った鮮やかな色彩を特徴とする巫女の服装。彼女はその上に薄い紗のかかった白い布を幾重にも重ね着ている。それは彼女に草木の上に積もった新雪のような儚さを与えていた。

「あれが……俺の、曾祖母……曙光の女神　ニケ……」

陽弥は恐れなくニケに近付くと、頭の中から弦の調べのように耳に心地よい声が響いた。

「何奴だ……?」

「!？」

「まあ、落ち着け……ソナタは……あゝ、陽弥か……妾とアプスの可愛い曾孫よ……こちらの元へ」

ニケの言う通りに、陽弥はニケの元に近付くと、バリアがニケと陽

弥を包み込んだ。

「!?」

「……出てこい帝国共よ」

すると陰から多数の帝国兵士達が現れ、洋介とシエレナも現れた。

「俺を誘き出す罠か……」

「へっ！まさか生きていたなんてなあ、護星神様よ！」

「……」

「……陽弥よ」

「？」

「ソナタに各宇宙に散らばるクアンタの全てをその頭に注ぐ、向こうでソナタの弟子の為に……」

するとニケの体が光だし、光子へと変わると、陽弥の頭の中へ注ぎ込まれる。

「あああああああああっ!!?!」

陽弥はニケから与えられたクアンタの全てのデータにより頭を抱えると、彼の皮膚に緑に光るコンピュータ回路が浮かび上がり、左右の目も緑に光る。そしてバリアが消え、兵士達は陽弥に武器を突き付けてきた直後、陽弥の体から強力な波動が放たれ、前列の兵士が破裂死した。

「何が起こった?!?!」

洋介とシエレナが驚いていると、陽弥の周りに緑色に発光するクアンタの亡霊兵士達が現れ、陽弥が亡霊兵士達に命令する。

「殺れ」

命令と同時にゴースト達が持っていた粒子ライフルを乱射し、帝国兵士を溶解していく。

「なんだと!?!」

「これが……光と勝利を導くニケの力なのか!?!」

洋介とシエレナはディアブロとシャバシテイが現れ、武器を乱射する。

「どうだ!」

洋介が安心した直後、砂埃から緑に光る刃が伸び、洋介のディアブ

口のコックピットを貫き、洋介の左肩を貫通する。

「何!?!」

シエレナはシャバシテイのガトリングキャノンを向けた直後、陽弥がシエレナの方を向き、シャバシテイの頭部を掴む。

「愚者が…」

陽弥はシャバシテイを投げ飛ばすと同時に、シャバシテイに襲いかかる。

「グアツ!!クソ!」

シエレナは立ち上がろうとした直後、シャバシテイのシステムが切られる。

「え!?!何で動かないんだ!?!」

シエレナが戸惑う中、陽弥がシャバシテイの背部に収納されていたバッテリーを抜き取られていた。陽弥はバッテリーを放り投げ、ジスタードへ戻る。負傷した洋介は待機している艦隊に通信を入れる。

「洋介だ…バケモノが情報を盗んだ!直ちに追撃を開始しろ!」

洋介は怒鳴りながら通信を切り、空を睨み付ける。

「俺も…あの力があれば…そうだ!」

この時、洋介はやってはならない事を企んでいたのであった。



## afterstory34：数々の勢力

帝国軍艦隊から逃げている陽弥は、ジスタードを使いこなし、帝国軍を翻弄する。コーパス艦隊とゼルドリアン艦隊のメガ粒子砲が同士討ちになり、仲間割れをしていた。陽弥はその隙に隠密部隊がいる前線基地へと戻り、共和国政府に報告していた。

『情況を報告してくれ、隠密部隊特務大佐　ズイルバーンよ…。』

「最高議長、惑星サイロックスにて帝国軍がクアンタの遺物を調査していました。現在は密林惑星の帝国基地を、我々隠密部隊の前線基地にて奴等の行動を偵察しております。」

『なんと、帝国の基地をズイルバーン直属の前線基地にするとは……。それより、その”クアンタ”とは何なのだ？』

「……数十億年前に存在し、我々の様な種と生命を誕生させた…最初の種族でございます。彼等の技術力は遥かに優れており、コーパスはクアンタの遺産を欲しがっております。」

「むくく……クアンタの遺産か…それは凄い物か？」

「ええ、とてつもなく……」

「クアンタの遺産か……」

「……（家の嫁と義姉さんはそのクアンタの王家の末裔だけど…未開惑星保護条約の為、会わせませんよ♪）」

「よし、ではズイルバーン特務大佐よ…君に新たな任務を命ずる。帝国よりも先にクアンタの遺産や遺物を先に見つけ、こちらの戦力にせよ。」

「仰せのままに……」

陽弥は最高議長にお辞儀で返すと同時に通信を切る。そして前線基地のラボでニケから授けられたクアンタの技術を見る。

「凄い……曾祖母は、ずっとこれを守っていたんだ……クアンタ人の主力武器のほとんどが未知の光学兵器で、とてつもない艦艇を持っていたのか……。しかも放射能除去装置や衛星超兵器、自動光学障壁もか……ん？でも待てよ……」

陽弥は前線基地での受信メールを思い出す。

『我々はついに、曙光の女神 ニケとザ・コアを出現させる種族”歌の民”の居場所を示すクアンタの遺跡を見つけた……。』

「曾祖母はともかく、ザ・コアを出現させる種族”歌の民”……何のことだ？（これはじっくりと調べる必要があるなあ……）」

陽弥はそう言い、クアンタのデータの解読を始めるのであった。

正にその頃、第一宇宙の治安維持国家”宇宙秩序軍”の方では、207宙域で、帝国艦隊と抗戦を開始していた。帝国艦隊を指揮していたのは、フェメシス騎士団の一人 ガイラスであった。

「フンッ！弱すぎる……秩序を守る気あんのかあ!？」

ガイラスは笑い、帝国の制式量産型ローガストメイル『ウンブラー』と重量級量産機『サングイース』と共に秩序軍を圧倒していく。秩序軍アドバンス級駆逐艦やその外殻に取り付いて防衛している秩序軍の簡易型途戦術兵器が誘導ミサイルやバルカン式レールガンを乱射するが、サングイースのビームメイスによって破壊されると同時に、駆逐艦も撃沈されていく。さらに秩序軍の汎用宇宙戦闘機で応戦するが、帝国の無人戦闘機により、撃墜されていった。その中にガイラスの操るイントウルが標準型巡洋艦の艦橋に向けて、ギガントメイスを振り下ろされた。一方、秩序軍の方ではオペレーター達から次々と報告されていく。

「UOA第一艦隊！EEA第二艦隊が援軍要請！」

「第三、第四部隊が、全滅！」

「13番機！偵察機に接近！」

偵察機からの映像にガイラスのイントウルが接近し、映像にノイズが浮き出る。

「偵察機！破壊されました！」

「見れば分かる！」

秩序軍リブラ級三番旗艦 アレイオスの艦長がデスクを叩くと、彼の元に白銀の甲冑を身に纏い、表裏が白と赤のマントと真紅のスカートマントをなびかせるパールゴールドのロングヘアの女性が現れた。

「これは！アリアード大公殿下！」

「気にするな……私は只の流れ者の聖女でございます。」

「しかし！貴方様の存在は……我々秩序軍や全銀河の希望でございませぬ！」

「……ジアートを出してくれ、私が自ら奴等に相まみえる……。」

アリアードはそう言い、格納庫へ歩いていく。

ガイラスは残りの秩序軍を一掃していくのであった。

「オラアツ!!もつとマシな奴はいないのかあぁっ!!」

ガイラスは吼えながら、ギガントメイスを振り回していると、旗艦のカタパルトから何かが飛び出した。

「……?」

ガイラスが目を疑いながらも、確認しようとした直後。

「ツ!!」

神速の如く速さと共に現れたのは、ガイラスのイントウルや帝国機体よりも大きな機体であり、白銀と緑の色をして、イントウルの肩に騎兵銃槍が突き刺さっていた。

「何っ!?!」

「見せて貰いましょう……帝国の方々よ……」

アリアードはトリガーを引き、彼女の機体『ジアート』の騎兵銃槍『アブソーバー』の銃口からノバビームが放たれた。イントウルの肩や腕が破壊されると同時に貫通したノバビームが後方に待機してい

た帝国艦隊にも被害を出した。

「ノバビームだと!? あんなの使える奴が三人もいたのかよ!!?」

ガイラスの言葉を接触回線で聞いていたアリアードは、ガイラスの言葉を疑う。

「三人?」

ガイラスはギガントメイスを振り下ろし、アリアードから距離を取る。

「それを使えるのは……クアンタ人の筈……お前は……まさか!!?」

「そう……私はアリアード……いいえ……『アリアンロード・ヴェルデ・クアンタ』……」

アリアードの本名にガイラスや帝国兵も驚く。

「何だと!?!」

「率直に言う……ノバビームを使えるのが三人とは?」

「うっせえっ! 俺等に抗う護星神とクアンタの姫とレオンの事を言っ  
てんじゃねえ!!」

「なるほど、つまり私達のいる宇宙の他に……クアンタ皇家の生き残り  
がいるのか……なら!」

アリアードはアブソーバーを上空に突きつけ、叫ぶ。

「クアンタ一族ヴェルデ皇家の名においてこの我! 鋼のアリアード”  
が貴様らに万死を与える! 秩序軍! 前進せよ!!」

《うおおおおおおおおおお~~~~~!!!》

アリアードの言葉に、秩序軍は声を上げ、陣形を組み、突撃してい  
く。圧倒出会った筈の帝国艦隊が次々に秩序軍に圧されていくので  
あった。

「クソッ!! こんな筈では!!」

ガイラスは怒鳴り、ギガントメイスで敵艦の攻撃から防御する。

一方その頃、第三宇宙での452宙域では、カロール率いるネブラ銀河帝国強襲艦隊がファウンダー軍事盟約連邦と汎銀河統一帝国の同盟国の総旗艦艦内で交戦していた。ネブラ銀河帝国兵が軍用魔獣であるクブロウが艦内を走り抜ける。そしてカロールは複数の帝国兵を連れ、阻害してきた統一帝国兵と連邦兵に容赦なく、ビームブロードで斬り裂く。すると統一帝国兵と連邦兵の中から側頭部に羽飾りをした兜、白銀の甲冑を身に着け、両手にブロードソードとシールドを持った茶髪の美少女が剣を突き付けてきた。

「貴様は？」

「私は『メリダ・イスリーフ・クアンタ』……クアンタ一族のイスリーフ皇家の姫よ」

「クアンタの？……あの宇宙にいるレグレシアの姫の従姉妹と言う事か……」

「レグレシア？私の従姉妹？どういう意味ですか？」

「知りたければ……この私……グリニア帝国直属新生フェメシス騎士団団長 カロールを倒してみろ!!」

カロールは紅い瞳でメリダを睨み、黒い翼とコンドルレッグを展開し、神速の如く速さでメリダに襲いかかる。

「ええー！そうさせてもらいますわ！私の実力……この”神速のメリダ”の名を……その頭に刻み込みなさい！団長さん!!」

メリダはそう言い、神速の如く速さで駆け抜け、カロールのビームブロードとブロードソードの刃がぶつかり合う。

また、第八宇宙でも同じことが起こっていた。シャンドウア傭兵軍団とゼルドリアン帝国重装甲部隊が、熱帯雨林の惑星に先住民族を奴隷にしようとしたが、側頭部に羽飾りを付けた兜、ポニーテールのド

ミ・ミドル、白銀の甲冑を身に着けた長身の女性が、手に矛槍を持つたまま、帝国兵の死体の山の上に立っていた。

「やれやれ……また、つまらん羽虫共を殺してしまった……。」

すると女性は後ろでまだ生きていた帝国に向けて、ハルバードを投げ付けた。ハルバードの矛が帝国の頭部に突き刺さり、絶命した。女性性はハルバードを抜き取り、名を轟かせる。

「この我！『シーラ・レスヴァリス・クアンタ』様に！膝魔付け！！虫ケラがあっ！！」

シーラは怒鳴りながら、天に向かって叫ぶ。

そして第十一宇宙でも……抗戦で市街地が崩れ行く中、孤児を守るうとしている白銀の甲冑を身に着けた女性が孤児に言う。

「いい……私に付いてきて」

女性はそう言うと、腰部に収納していた弓を持ち、矢を引き絞り、天に向けて放った。すると矢が拡散し、グリニア帝国兵士の頭上に突き刺さる。安全確認し、孤児達を連れて行こうとすると男の子が訪ねる。

「お姉ちゃん……名前は？」

「……♪エルネア……『エルネアス・ケルビス・クアンタ』♪」

妖艶なエルネアは孤児達を連れて、高速大型揚陸艇に乗り込み、星から離れる。

その頃、ホライゾンでは……サラとアンジユ、エミリアが

子供達と一緒に入っており、それぞれの日常生活の事を楽しく話しかっていた。

「ええ!? アンタの名前って義理の名!」

「はい、本名は『エミリア・レグレスシア・クアンタ』と申しまして、クアンタ一族のレグレスシア家の姫だったのですが、今ではギデオン家の夫人です♪」

「へえ、」人は見かけによらぬもの” って言うことね」

「ええ…その身分のせいか、王家や貴族が膝間づいちゃうのです…」

「え!? こっちの私とサラ子も!」

「いえ、御二方は私にとって大切な家族なのですから♪」

エミリアは微笑み、アンジュとサラが感心していると、エミリアの背後からヒルダが現れ、突然エミリアの胸部を揉み始めた。

「んひゃあっ!?!」

「ったく! アンジュやドラ姫も含めて、このアホ姫はこんな良い豊満な胸部をしやがって〜!!」

ヒルダはさらにエミリアの胸部を揉む。

「ひええっ、あちらのお義母様! 勘弁してください〜!」

エミリアは悲鳴を上げ、ヒルダはエミリアの豊満な巨乳の情報を知るのであった。

その頃、陽弥はクアンタのデータを読み取り、次々とユニークなデータベースを開発していった。

「なるほど…このデータベースは熱源を含み、妨害電波を阻害、敵の思考を読み取る事が出来るとは…凄いなあ…。」

陽弥がクアンタの情報を検索していると、あるウィンドウが浮き出た。

「ん？……これは……」

それは、全宇宙の星図であり、ザ・コアとザ・シードの場所が赤と青のアイコンとして、点滅していた。さらに、グレーとシアンに点滅するアイコンも表示されていた。

「これは……ザ・コアとザ・シードの場所を指している……ザ・シードはホライゾンに……ザ・コアは……リイボラ!!?」

陽弥は驚く。リイボラとは、かつて陽弥の父であるシンによって、地に堕ちたクアンタの慣れ果であるドウームと共に、消えた筈の闇の意思を持つクアンタの星でもあった。

陽弥はポーチからパッケージングされている栄養素が入った密封パックドリンクゼリーを飲む。

「うえ……これが共和国軍の飯か……」

陽弥は味気の無いドリンクゼリーで落ち着きを取り戻し、リイボラの座標を見る。

「何で事だ……惑星リイボラは……まだ消えていないのかよ……」

陽弥が混乱していると、緑に光るアイコンが各宇宙に表示される。

「これは……?」

するとアイコンから、ある名前が名表された。

『ヴェルデ家』

『イスリーフ家』

『レスヴァリス家』

『ケルビス家』

『レグレシア家』

それぞれの姓の中にエミリアの本姓であるレグレシアも表示されていた。

「何故エミリアが?……それに残りの五人は……まさか!? (残りのクアンタ人!?!……今まで、エスメラルダ義姉さんが探していたクアンタ人が……あつさりとこれで座標されるなんて!?)……ん!?!」

その時、陽弥があるデータメモリが表示されていたに気づき、その名前に陽弥は驚く。

『Victor』



「!!」

陽弥は心を高ぶった。かつての戦友のメモリがクアンタの遺物に保存されていた事に……。陽弥は歓喜に満ち溢れ、早速作業に取り掛かるのであった。

a f t e r s t o r y 3 5 : Q u a n t a m c o n  
t a c t

第一宇宙……見事にアリアードが率いる秩序軍は見事にガイラスの艦隊を撤退へ追いやり、秩序軍万能戦闘母艦『スペースノア』では、アリアードがスペースノアや護衛艦を指揮をしていた。

「通信を見失うな！信号をブーストしろ！」

そしてモニター画面にノイズが酷いが、銀河大統領が映る。

「何処からともなく現れた！……宇宙帝国ディアヴォリアスと名乗る軍事組織の侵略だ!!……秩序軍加勢の組織がことごとく潰されて行く……それ程長くは持たない！」

「銀河大統領！」

「第九宇宙へ向かえ！そこに帝国に抗う共和国が存在する！」

大統領の言葉を聞き入れたアリアードは敬礼し、そして映像が途切れた。

「第九宇宙に……奴等に抗う共和国が……」

一方その情報は、第三宇宙や第八宇宙、第十一宇宙にまで広がっていた。

第三宇宙で、カロルの部隊の侵攻を防いだメリダは、行政府から第九宇宙への航行せよとの命令がくだされていた。

「私が貧相な第九宇宙へ行けど？言っておきますが、私はあんな貧相な軍に、そんな戦力があるとは思いませんわ！」

「ですが、その共和国に……500隻のシャンドウア艦隊がたった一気の真紅の機体によって全滅したとの情報もありまして……」

「500隻のシャンドウア艦隊が？」

メリダが兵士の言葉に興味を持つと同時に、兵士の顔に近付くと……。  
「フンッ！余裕だね！500隻の艦隊なんて！だいたい、何で共和国にそんな力がありますの？」

「何でも、その500隻の艦隊を沈めたのが……『仮面を付けた白銀の守護者』」ズイルヴァーン」と名乗ってしまして……」

「ズイルバーン？誰ですか？」

「ええ、ズイルバーンと言う方は……あらゆる戦況を打破し、帝国によって故郷を奪われ、行き場所を失った戦士達を拾い、隠密部隊を引き連れている謎の人物なのです。ズイルバーンにはリーラと言う女の子を養子として育てていると……。」

「へえ、結構普通な人物ですね、そのズイルバーンと言う人は……。」

「ええ、ですが……中には彼についての噂が広まりつつあるのです……。」

「……噂？」

メリダは首を傾げ、兵士の話を聞くのであった。丁度それは、第八宇宙にいるシーラも聞いていた。

「奴には元の宇宙に愛する妻子と家族」がいると……なるほど、一度相手したいものだ……。」

シーラはそう言い、狩りを終わると洞窟内に隠していたシーラの機体『ルティエラ』が空の彼方へと舞う。

第十一宇宙……孤児を引き取り、親代わりを務めるエルネアは被災地での救護ボランティア活動をしていた。すると彼女の元に聖府軍直属諜報員が、情報を持ってきた。

「各部のエリート兵士が第九宇宙の共和国へと向かっている……何故ですか？」

「何でも、そのズイルバーンと言う方は26人の孤児を一人で、弟妹の様に育てたとの……。」

「まあ！それは本当ですよ！それだったら、同じ親代わりとしての血

が高ぶりますわ♪こうしてはおれません！私達も急いでそのズイルバーンと言う方がいる宇宙へ行きましょう♪」

エルネアは急いで荷物をまとめる準備をすると、諜報員がある事を言う。

「後、もう一つ……そのズイルバーンには妻子がおりまして、その妻子が……エルネア様と同じ”クアンタ人”との不確かな情報を見つけたのです。」

「ええっ!?!私と同じ……クアンタ人!?まあ！もしかしたら、生き残った従姉妹かもしれませんね！」

「あ……はく……」

その頃、隠密部隊前線基地では……陽弥がある物の開発に取り込んでいた。

「よし、後はこのチップをニューロデバイスに取り付けければ、コイツは蘇る……」

陽弥はそう考えていると、扉からノック音聞こえ、カイエンが入ってきた。

「頭領、第一宇宙の秩序軍艦隊から通信が入りましたよ」

「秩序軍が？」

「はい、何でも……アリアードと名乗る人物が貴方様と話がしたいと……」

「誰だろう？……」

陽弥は仮面を付け、客室へと向かう。客室にアリアードや彼女の側に秩序軍の護衛もいた。

「お前がズイルバーンか？」

「……そうだ、他に誰が言うか？」

「いえ、失礼……本人なのか確かめたかったので……」

「言われなくとも、私は真正銘『仮面を付けた白銀の守護者』ズイルバーンですよ♪」

「そうか……なら、率直に貴殿に言う、隠密頭領……我々秩序軍の傘下に入ってくれないか？」

「……何故、我らにそのような事を？」

「無理を言つてすまない……だが、共和国政府から許可は下りている。」  
「別に構いませんよ、同じ宇宙帝国を打倒する同士となら、喜んで尽くしましょう♪」

「おお！なら、共に戦つてくれる……一つだけ、お伺いしてもよろしいでしょうか……？」

「アリアードは首を傾げると、陽弥は言う。

「何故……貴女の機体は……私の”001”（シグムディア）と同じ外見なのでしょうかねえ……アリアンロード・ヴェルデ・クアンタ姫殿下♪」

「え？」

すると陽弥から異常な電磁波が放たれ、空間が歪んでいく。

「これは!？」

アリアードは驚くと、護衛や隠密部隊の人の動きが止まる。

「っ!？」

「さて……この空間なら、お互いの知っている事が話せるでしょう♪」

「ズイルバーン、お前は……一体何者？」

「ズイルバーン……この名は偽名であり、姫殿下の従姉妹のレグレシア家の夫でもあります……」

陽弥はそう言い、仮面を取り外した。

「お前は……？」

「俺の本名は陽弥・ギデオン……レグレシア家の次女『エミリア・レグレシア・クアンタ』の夫であり、護星神だ!!」

「護星神!?それにレグレシア家の夫と言うことは!？」

「俺はアンタの従姉妹であるエミリアの夫で、アンタの従弟であるんだ。そしてアンタの先祖と言うより、クアンタの遺物を調査している種族大銀河連合の王様と言う事になるな……」

「種族大銀河連合の…王」

「まあ、星を守る神様と言ってもいいが、この空間内では普通に”陽弥”と呼び捨てても良いぞ」

「……」

「？」

陽弥はアリアードに手を振る。

「もしもくし？」

「!?……すまない、貴殿の言葉が衝撃すぎて、何と言えは……」

「仰天？」

「ええ……無理もない、本来なら本当の姿で話したいんだがな……」

「本当の姿？」

「ええ、カオスが宇宙帝国に囚われている俺の為に……擬似体を生み出してくれたんだ……」

「囚われている？何故？」

「アリアード姫殿下…帝国はどうやってあんな戦力を維持できているのか、知っていますか？そしてどうやって兵隊達を増殖させる事が出来るのかを……」

「え？」

「かつてクアンタの祖先が作り出してしまった四大エネルギー…”インフィニティソウル”、”クアンタニウムハート”、”グリゴリ(ダークマタージュエル)”、”アーククリスタル”は俺やエミリア…三人の子供にも宿っている……」

「何ですって!？」

「俺のその力は……宇宙帝国軍の本拠地でも言える『デススフィア』のエネルギーコアとして囚われているんだ…そして宇宙帝国の大皇帝であるドレギアスは、俺の娘であるマナの力を奪い、ザ・コアを探し、完全体へなろうとしている……そうなれば、全神々でも……打つ手が無くなってしまふ。しかも奴は…ギガオロチの力も手にしている…」

「ギガオロチ!?かつて私の祖先や……」

「エミリアの祖先や残りの王家の祖先が必死に封印した災禍の超魔獣…一回相手したけど、あと一步のところでドレギアスに邪魔をされた

……既に多くの種族や神々が消されて行っている……今、残っている神はエジプト神族とティタン神族、オリュンポス神族、アースガルド神族となってしまうた……共に刃向かっていた神族達はドレギアスに吸収された……その中にはブラムと微かだがベリトの力も感じた……一刻も早く、囚われている俺と一緒に囚われている勇人の世界の地球人を本来あるべきのオリジナルに戻さなければ、全宇宙が滅びる……。」

「どうすれば!？」

「……解決策は一つ、奴より先にザ・コアに願いを叶える。先ず、勇人の世界の地球人をクローンからオリジナルへと遺伝子を書き換え、次に暗黒の狭間から囚われている地球人をグランドスフィアに保護する。最後に俺の体とこの体、そしてブラムとベリトを解放させ、ブラムと融合し、スペクトロボス達や仲間を呼び、一気に宇宙帝国を叩く。」

「ザ・コア?」

「アリアードは知らないのですか?ザ・コアと言う存在が……かつて俺と共に戦ってくれる友の世界で、聞いたのだ。『星と星が融合し、二人の歌奏でる時、ザ・コアは姿を現すと……』それが現れし時、願いを叶えられる……その友の名は、レオン・マクライト……ドレギアスを一度倒した戦士だ」

「一度倒した!？」

「倒した、が……奴は死ぬ前に大破した武器に、一部を残し、俺が追放したマッドサイエンティストに拾われ、復活したんだ……分かるのは俺の善良な心と不注意のせいで、アリアードの住む宇宙や全宇宙に生きる種族、あの娘の親を殺してしまったと言う事だ……犯してしまった罪の罰、それを償う為に、カオスから神の称号を没収され、こうやって隠密頭領として活動しているんだ……。」

「そんな事が……」

「やり直せるんだ……俺の体が戻れば、戦況が大きく流れを良くなり、俺達の国家連合軍が動きだし奴等へ反抗の狼煙を上げてやる!」

「おお!何か陽弥が遅しく見えて来た!良し!私も全力で支える!」

「ありがとうございます、アリアード姫殿下…それともう一つ、各宇宙から……クアンタ皇家の末裔達が集結しようとしています」

「真か!？」

「ええ、そして……」

陽弥はモニター画面に映し出された全宇宙の星図をアリアードに見せた。

「これは!？」

「俺の祖先やクアンタの祖先達が残した”オムニバース”だ……コーパスの奴等やドレギアスはこれを欲しがっていたんだ。そして……」

陽弥がザ・コアがある『惑星リイボラ』のアイコンが表示され、まだ時空の狭間に存在と判明した。

「クアンタ皇家の末裔達が集まり次第、クアンタのテクノロジーでここへ向かいます……良いですか？」

「ええ」

陽弥とアリアードは互いに握手で交わり、客室に戻ると、オムニバースからある文書が表示された。

『長月の十五夜、血に染まりし紅き月と闇に染まりし漆黒の太陽が会い間見えた時、大厄災へと覚醒し、全てを喰らおうぞ、因果を捕食する厄災の大蛇…… 紅き月と漆黒の太陽を解放する黄昏の歌姫と共に核と種を喰らい、真なる絶望に覚醒し、究極にして最凶の混沌へと進化を遂げる……古の如く荒神、無限の体を得て、本来の姿へと覚醒し、大蛇を討ち取る……。』

その頃、デススファイア中心部の核融合炉で……洋介が囚われている陽弥を近づく。



「テメエの力……俺の物にしてやる！」

洋介はそう言い、陽弥に触れる。すると洋介の触れた手が黒く変色していく。

「グッ!!……ううっ!!……」

力と強欲を求める洋介の遺伝子が書き換えられいき、姿が急速に変わっていくのであった。

## after story 36 : 家族

その頃、ホライゾンでは……

「は〜い♪あんよが上手♪あんよが上手♪」

ヒルダは孫のオリバーとライラが歩いている姿に癒やされ、ヒルダの方へ誘導して行く。そしてシンも孫の可愛らしさに翻弄されていた。

「ん？……!!」

するとシンは気が付く、カーテンの陰からじっと見ている孫娘のマナに……。そして……

「大っ嫌〜い!!」

二人の弟妹に祖父と祖母を取られて、嫉妬したのか、マナは泣きながら外へ出ていった。シンとヒルダはオリバーとライラを抱え、マナを心配する。

「お姉ちゃん!!」

「お〜い!!マナ!悪かったよ〜!」

シンとヒルダがマナを呼び戻すが、遅かった。その後、シンとヒルダはエミリアにキツチリと叱られるのであった。

一方、エルシュリア城を出たマナは街で迷子になっていた。

「ジイジとバアバなんて……」

マナは石を蹴りながら街道を歩いていると、エミリアがマナを追いかけて来た。

「マナちゃん! やつと追い付いた!」

「ママ……」

するとマナが悲しい表情でエミリアに謝る。

「ごめんなさい……ママ……」

「…良いのよ、ジイジとバアバにはしっかりと怒ってきたから♪」

「ホント?」

「本当の本当♪さて、お買い物しよっか?」

「うん！」

エミリアとマナは一緒に、エルシュリア王都であるラダマンティスの街道を歩くのであった。そして路地裏から黒マントの男が、二人を監視していた。

エミリアとマナはたくさんの店を見て回り、美味しいお菓子を食べて行った。そしてこのラダマンティスで一番美味しいスイーツがあるお店に寄っていた。そしてテーブルの上にはエミリアにとってのお気に入りのカプチーノが置かれており、マナにはエルシュリア王国付近で採れる特産品「克蘭チエリー」と「ストロアツプル」のミックスジュース、そして陽弥の好物とも言えるアップルパイが置かれていた。

「いただきます」

「いただきます♪」

エミリアとマナはアップルパイを一口サイズに切り、口に入れた。

「美味しい〜！」

「フフ♪……（思い出すわ、この味……確かこの店……私が陽弥様と結婚して七日経っていた頃……）」

エミリアは懐かしのアップルパイを見て、思い出す。

2年前……マナとオリバー、ライラがまだ生まれていなく、陽弥とエミリア結婚してから二ヶ月後……二人は王都でデートすると事に。妊娠八ヶ月のエミリアは安静の為、車椅子に座っており、陽弥が車椅子を押しながら再建されたエルシュリア王都を歩き回っていた。

「お腹の方は大丈夫か？」

「ええ、大丈夫ですわ♪」

「……無理しなくても良いんだぞ、もう妊娠八ヶ月だから、それに……」

「それに？」

「俺と護衛や車椅子無しで、街を歩いていると……俺とお前や……アストラッド王を暗殺し、妹のマリアとその身内と政略結婚させ、政権を握ろうとしている貴族がいるから……前の新婚旅行で、俺に毒が入っているスープを出してきたからなあ……」

「大丈夫ですよ♪いざという時に、私のキュアコンディションと私達のスペクトロブスのリグルスと陽弥様のコマイヌがいるから安心して♪」

エミリアは何気なく陽弥に笑顔を見せると、陽弥が呆れてしまい、返せる言葉もなかった。陽弥とエミリアはそれからデートを楽しんでいた。そして……あるスイーツが美味しいと言う店に入り、コーヒーを飲んでいると……

「動くな!!」

突然ドアから武装した人達が現れ、天井に向けてヴェクタ製のアサルトライフルを乱射する。

《キヤアアアアアアア!!》

客達が一斉に悲鳴を上げ、頭を隠す。エミリアは頭を隠すも、陽弥は頭を隠していなかった。するとテロリストの一人が店の前に集まった衛兵や騎士に言う。

「聞けえええつ!!愚かなる愚民共よおおつ!我々エルシュリア革新連盟はここに!新生エルシュリア王国に宣戦布告及び、エルシュリア王国国王アストラッド・ヴァルネア・クリーフ殿下のお命を頂戴する!!」

テロリストが宣戦布告を宣言すると同時に、各部の街から煙や火が吹く。陽弥は手を上げる振りをしながら、テロリスト達の心を読み取る。

「(よし!上手く行ったぜ!)」

「(ハハ!これが銃…スゲエ武器だ……これが前金と共に配られるなんて、バルクレス伯爵様は偉大だなあ♪)」

「(ヴァルキュリアス大統領は暗殺し損ねたが、ここにいる人質がいれば、善良な大統領や国王も流石に……)」

テロリスト達の心を読み取った陽弥はバルクレス伯爵の事を思い出す。バルクレス伯爵はかつて、陽弥とエミリアの結婚式に招待されており、身長は陽弥よりも少し低い。痩せ型でマツシユルムカットの男が口の端を吊り上げて笑っており、全身ラメの入った服に高級そうなスカーフ、金ピカのブーツを履いていた。陽弥はバルクレス伯爵の事を思い出すと、呆れていた。

「(あく、アイツか……あんなキモくて、ニヤニヤしてて、30も過ぎたのに15であるマリア(義妹)の許嫁になろうとは……面白い!)」

陽弥はそう思い、魔剣グラムを抜刀しようとしたその時、テロリストの一人がエミリアの後頭部にアサルトライフルを突き付ける。

「おおおいつ!!この孕んだ雌豚を殺されなくなかったら!今すぐに總統と国王にマリア姫殿下を連れてくるように伝令しろ!!」

テロリストの放った言葉に、陽弥の心に地獄の如く怒りの炎が、吹き荒れる。

「おいつ……今なんて言った……?」

「あ?」

「今……なんて言ったか質問しているんだ……」

「は?このっ!!」

テロリストが話しかけた直後、陽弥の右ストレートが顔面に直撃し、テロリストもろとも壁を壊し、隣の建物へ吹き飛んだ。陽弥は最新製の防弾マントをエミリアに被せ、魔剣グラムを抜刀する。

「お前ら……未開惑星保護条約を破ろうとした事と産まれてくる新しい命と嫁さんに銃を突き付けようとした事を……身の程を知れっ!!」

陽弥はテロリストに向かって行き、次々と切り裂いて行く。

数分後、衛兵と騎士がテロリストを逮捕し、連行していく。幸いに、

陽弥はテロリストの銃を切っており、取り押さえていたと…本人が報告してきた。

陽弥はエミリアに謝罪していた。

「ごめん…：せつかくのデートを台無しにしちゃって…：」

「もう、陽弥様だったら…：知らずらしいんだから♪」

エミリアが笑顔で陽弥の肩を叩きまくる。

「痛たたたたたっ!!?」

「さっきの陽弥様…：カツコ良かったわ♡」

『未開惑星保護条約を破ろうとした事と産まれてくる新しい命と嫁さんに銃を突き付けようとした事を…：身の程を知れっ!!』

数分前の陽弥の台詞にエミリアはメロメロ状態になっていた。

「まあ…：流石に妊婦には手を出さんと思ってたんだが…：アイツ等、まさかのエミリアに銃を突き付けてきたときは、本当にガチ切れしてしまっただけであ…：」

「良いのですよ♪私達はもう…：♪」

エミリアはそう言うと、陽弥の腕に抱きつく。

”家族”であり、”夫婦”なのですから♪」

エミリアはそう言い、陽弥は呆れて言葉も返せなかったが、愛する妻の為にしようがなく頭を撫でた。その後、陽弥は早速悪事を企てようとしていたバルクレス伯爵や取り巻き達を捕らえ、エルシユリア革新連盟は滅びたのであった。

そんな出来事を思い出すエミリアは無事にマナやその後に生まれてきたマナの双子の弟妹であるオリバーとライラが生まれてきた事に、嬉しく思っていた。そしてエミリアとマナが寄っているこの店は陽弥の援助によって、再建された店であった。するとドアが開き、入ってきたのは勇人とシンディであった。

「あれ？エミリアさん？」

「あら、勇人君にシンディちゃんも♪」

「こんにちわ！」

勇人とシンディは椅子に座り、この店で陽弥とエミリアの思い出を話すのであった。

その頃、陽弥は集結したクアンタの末裔と共に、アリアードの旗艦であるスペースノアに乗っていた。

「それで、ズイルバーンよ……どうやって時空の狭間に行くのであるか？」

「答えは簡単……コイツを使うんだ♪」

陽弥がポーチから取り出したのは、クアンタの技術で作り上げた小型のギャラリック・リングであった。

「それは？」

「フッフ……見よ、これが俺の祖先達が開発に成功した次元操作兵器だ！ギャラリック・リングよ！時空の狭間の扉を開いてくれ！」

陽弥が叫ぶと、ギャラリック・リングが空間へと突き抜け、手のひらサイズであったリングが、旗艦も入れるほどの大きなテレポーターへと変形した。それを見ていたメリダが啞然する。

「うわあ……メチャクチャカッコよすぎですわ……これ何なのですか？」

「これがヴェクタの超兵器だ……本来なら、見せるつもりはなかったけど、緊急事態な為だから起動した……」

陽弥はそう言い、進路を時空の狭間へと変え、ギャラリック・リングの異次元の穴へと入っていくと同時に、ギャラリック・リングが消える。しかし、その一部始終を見ていた帝国軍の偵察機がデススフィアへと帰還して行くのであった。

## after story 37：カリユプソ騒乱

陽弥：…またの名をズイルバーンからの警告を聞き、エミリアの話を聞いたザンジークが率いる時空族の移動要塞“カリユプソ”は別の異次元へと逃亡していた。

「ここまで来れば……もう追ってこないだろう」

時空族達が安心したその直後、要塞が衝撃音と共に揺れる。ザンジークは急いでオペレーターに現状を聞く。

「何が起こった!？」

「船長!! シヤンドウア艦隊とコーパス艦隊! そしてドレギアスの旗艦です!!」

「何っ!？」

ザンジークが目の前にドレギアスの旗艦及び、シヤンドウア艦隊とコーパス艦隊が主砲を放っているのが見えた。

「何でだ!?! 確かに俺らは全次元を移動していたのに!?!」

ザンジークは戸惑いながらも、目の前の敵に集中する。

「仕方がない! 各自は直ぐに迎撃体制を! カリユプソのリフレクターシールドを展開し、誘導ミサイルの準備だ!! ブラッド中隊とレヴィアス中隊はドレギアス旗艦と抗戦する! 全艦隊はブラッド中隊とレヴィアス中隊の援護を!」

《了解!!》

時空族達はそれぞれの持ち場に付くと、カリユプソの各部のハッチが開き、中から長距離弾道ミサイルや対空四連バルカン砲が展開され、迫り来る量産型ローガストメイルを駆逐していく。ガルドメイルがビームライフルを乱射し、ローガストメイルもビームライフルで応戦する。そしてドレギアスの旗艦である“ガルメリアス”の艦橋に王座に座っているドレギアスが見ていた。

「フンッ……時空族め、往生際が悪いぞ……」あれ”を使い……」

ドレギアスの命にグリニア兵が敬礼する。ガルメリアスのカタパルトから背部に特殊な武装をしたウンブラーが射出され、陣形を組



み、背部に装備されているキャノン……”アヴァドウン”を構える。

「ん?……何だ?」

ザンジークが目の前にいるウンブラーを見て、警戒すると、ドレギアスが立ち上がり、腕を上げて、叫んだ。

「アヴァドウン! 放て!!」

ドレギアスが腕を下ろすと同時に、アヴァドウンの砲口から大出力の黒い電磁波を放つ弾頭が超高速で発射され、一瞬でカリユプソを覆っていたリフレクターシールドが破れた。

「リフレクターシールドが!!」

一瞬の出来事に、ザンジーク達が驚くと、ガルメリアスのカタパルトから数百機の新型ローガストメイルが飛び出して来た。

「!?!」

モニター画面に映ったのは、脚部が存在しなく、長い腕部の拳からジェットを吹いていた。

「あれは……一体!!」

すると新型のローガストメイル”フルーレディア”が艦艇に向けて特攻を仕掛けてきた。

「特攻機!!?!」

「乗っている奴らは死を恐れないのか!?!」

「無茶苦茶だろ!!?!」

その直後、グリニア突撃上陸用ポッドが艦艇の目を盗み、要塞に炸裂した。

「今度は何だ!?!」

「船長! カリユプソ内部に侵入者! グリニア突撃上陸用ポッドから出ています!」

「何!?!」

オペレーターからの報告を聞いたザンジークは驚愕し、急いでライフルとサーベルを持ち、エレベーターで降りる。

一方、第八格納庫では、侵入してきたグリニア兵と時空族の激しい戦いが繰り広げていた。銃声、悲鳴、弾丸が地面に落ちる音が響いており、根城内部は戦場と化した。エレベーターからザンジークが現れると、格納庫はあまりの悲惨を受けていた。

「なんてことだ!!」

するとグリニア兵がこちらへ接近してくるのが見え、ザンジークはライフルを構え、頭部めがけて撃つ。ライフルから発射された弾丸が、グリニア兵の頭部諸共粉碎していく。

「絶対に……インペリアルアイは渡さん!!」

ザンジークがそう言った直後、後ろからテレポートしてきたグリニア兵がデュアルヒートブレードを振りおろしてきた。

「グッ!!?」

ザンジークの背中に大きな切り傷と火傷ができ、サーベルを抜刀し、グリニア兵の喉をし殺す。

「ハア……ハア……」

ザンジークは息を荒くし、指令室や各ブロックにいる時空族に伝える。

「…ザンジークだ……総員…グランドスファイアへ…」

ザンジークの伝言が艦内や内部に響き渡ると、時空族は移民艦や輸送船に乗り込む。

「船長の言うとおりにしろ!」

「女性と子供、老人が最優先だ!!急げ!」

そして移民艦がや輸送船が発進し、護衛艦も後に続く。

要塞内に一人取り残されたザンジークは残っていた時空族の強襲装甲艦『ハンマーヘッド』に乗り込み、ドレギアス艦隊へ突っ込んで行く。それを見ていたドレギアスは鼻で笑う。

「殺れ」

艦隊の主砲から数多の収束ビームが放たれたが、ハンマーヘッドの艦首部分に取り付けられた巨大な前面装甲が収束ビームを拡散する。

「何？」

ドレギアスはハンマーヘッドの耐ビーム装甲の耐久度に興味を持つ。そしてハンマーヘッドの主砲が展開され、ハイメガ粒子砲を発射してきた。

「ここで食い止めねば……仲間や陽弥に……表に顔を上げれん!!」

ザンジークはレバーを押し、ハンマーヘッドの出力を最大にする。

「敵艦、高速度でこちらへ接近しています!」

「なら、望み通りにしてやろう……アヴァドウン隊を出せ……」

ガルメリアスの前にアヴァドウンを装備しているウンブラーが陣形を組む。

「アヴァドウンを放て!」

アヴァドウンから一斉に弾頭が射出され、ハンマーヘッドの前面装甲に突き刺さる。

「クッ!」

艦内に火が吹き荒れ、艦橋内も赤く照らされていた。ザンジークは額から血を流し、あるボタンを押す。

「まだまだ……ドレギアス……俺達時空族には、お前用に作り上げた最終兵器があるんだよ♪」

すると前面装甲が割れ、中から出てきたのは無数に並んだ砲口であった。そしてエネルギー充填が200%までに達し、轟叫んだ。

「ディメンストリーム砲を喰らえええ!!」

ザンジークはレバーのトリガーを引くと同時に、砲口から拡散ディスクコード・フェイザーが放たれ、ドレギアス艦隊に直撃した。

「チッ!!」

シャンドウア艦隊、コーパス艦隊が拡散したディスクコード・フェイザーにより、塵へと変わり、ドレギアスの旗艦であるガルメリアスも塵へと変わる。

「どうだ……思い知ったか……ッ!!」

しかし、ザンジークの胸にディザスターの剣先が貫いていた。

「見事な物であったよ……時空族の船長ザンジーク……」

「ドレギアスッ!!」

「……残す言葉は……あるか？」

「あるとも……お前には……陽弥や勇人……レオン達に勝てない……だつてあいつ等は……全宇宙の中で皆の希望を背負った戦士だ!!……お前のような化け物には負けねえ!!」

「そうか……」

ドレギアスはデイザスターを引き抜こうとした直後、ザンジークが何かを引き抜いた。

「？」

ザンジークの胸元に何かを巻き付けており、ドレギアスはそれを確認しようとした直後、

「悪い……陽弥……」

ザンジークが陽弥に謝罪した直後、大爆発を起こし、ドレギアスを吹き飛ばした。

「グッ!!」

それと同時に、ハンマーヘッドも大爆発し、ドレギアスを道連れにした。しかし、ドレギアスは待機していたゼロで脱出し、上空で眺めていた。

「どうやら……無駄死にであったな……ウツ!？」

突然ドレギアスが右脇腹を抑えつける。よく見ると、ドレギアスの横腹から光が漏れていた。

「あの時空族め……せめてのついでに我に一生消えない傷を与えたのか……グウツ!!」

ドレギアスはザンジークが与えた傷の痛みを苦しむ。

「……速く、完全体にならねば……」

ドレギアスはそう言い、カリユプソ内部に侵入する。そして時空族が残した宝物庫の扉をデイザスターで破壊した。辺りは金銀財宝ばかりであり、目の前の台にボール型の物体が浮いていた。それが……先代時空族が遺した時空図『インペリアルアイ』であった。

「見つけた……」

ドレギアスは右脇腹を抑えつけながら、インペリアルアイを手にし、時空図を見る。そしてザ・コアが先の戦いで破れた場所である時

空の狭間に閉じ込められている惑星リイボラのあると分かり、ゼロの空間転移でデスファイアに戻り、治療されるのであった。

正にその頃、陽弥は焦土となったリイボラの大地に立つ。

「ここが……父さんが滅ぼしたリイボラ……」

全てが灰で包まれており、惑星自体も酷く掛けており、上を見ると、あらゆる世界が広がっていた。

「ここでエンブリフは……1000年も生きていたのか……」

すると割れた大地の隙間から、光が漏れていた。

「あれは……」

陽弥は光が漏れている隙間を見る。そして……

「この中に……ザ・コアが……」

陽弥は勇気を出し、大地の中へ入った。

「陽弥……」

アリアードやメリダ、シーラ、エルネアも陽弥の後に続く。そして陽弥は惑星リイボラの中心部に辿り着き、目の前にある巨大で光の結晶体が浮いていた。

「あれが……ドレギアスが永年欲していた……どんな望みも現実には叶えてしまう程と言われている力……『ザ・コア』……」

陽弥達はザ・コアの輝きに見惚れるのであった。

その頃、とある緑と海で覆われた惑星……そこには美しい羽の生えた人魚達が穏やかに暮らしていた。すると辺りが急に暗くなり、人魚

達は上を見上げた。



彼女達は惑星上に浮かび上がるデススフィアに怯えると、ゼロが転移してきた。

「見つけたぞ……歌の民共……我が永年の物を手に入れる為に……貴様らの歌を貰うぞ！」

ドレギアスはオロジャーグを地面に突き刺すと、ゼロの口が裂け開き、咆哮を上げる。

「有り難く使わせてもらおうぞ!!」

ゼロの眼が赤く光ると同時に、彼女達に異変が起きた。急に喉を抑え付け、藻掻き苦しむ。すると彼女達の口から光の玉が出現し、ゼロの口から体内へと運ばれていく。そして数分経つとゼロの口が閉じ、デススフィアへ帰還する。デススフィアに帰還後、偵察機が帰ってきており、陽弥と5人のクアンタの末裔が既に惑星リイボラにいるとの報告を聞き、王座に座ったドレギアスは進路を惑星リイボラへと変えた。

「さあ、お前達……彼処には、まだ最後の足掻きをしている護星神がいる……奴を捻り潰せ！我を完全体へために……そして、黄昏の姫巫女の歌を捕らえるのだ！」

新生フェメシス騎士団はドレギアスに敬礼し、惑星リイボラへと転移するのであった。

afterstory38：完全体、その名は……

惑星リイボラの中枢部に眠っていたザ・コア……陽弥とアリアード達はその輝きに見惚れていた。

「これが……ザ・コア……」

その輝きに圧倒されるアリアード、陽弥はそつと近づき、ザ・コアに触れると、ザ・コアから光の触手が伸び出てきだし、陽弥を包み込む。その時、陽弥は白い空間にいた。

「ここは？」

「よくぞ、ここへ参られたなあ……陽弥よ……」

「その声はー！」

すると陽弥の目の前から闇の瘴気が現れると同時に瘴気から、陽弥も知る人物”宵闇の男神 アプス”であった。

「アプス!？」

「フフ……それとニケよ、隠れてないで出てこい……」

アプスの声に導かれるように、陽弥の体から光が溢れ出て、現れたのは”曙光の女神 ニケ”であった。

「久しぶりだな、ニケよ……」

「お主もね、アプス……ここへ来た理由は分かっているよね？」

「ああ……陽弥よ」

「はい……」

「ドレギアスが此方に来ている。」

アプスの言葉に、陽弥は驚く。

「え!?ザンジークは!？」

「……………」

二人は無言のまま、首を左右に振る。

「……………そんな……」

「……嘆いても、変わらない……ザンジークは立派に戦った……誇りに思うべきだ……奴は最後に、ドレギアスに深手の傷を持ったまま、この星にやって来ようとしている。今の奴の状態ならば、解放できるか

もしれない……」

「……ブラムとベリトだな」

「その通り……さあ、陽弥よ……ザ・コアに願いを叶えるのだ……」  
アプスの間に、陽弥は望みを言う。

「聞いてくれ、ザ・コアよ……ドレギアスに囚われているブラムとベリト……そして 労働国家”プリズン・ソウル”に囚われている人達を解放し、記憶を残したまま元ある人間に戻してくれ……」

陽弥が望みを答えた直後、ザ・コアが光りだす。

一方、デススファイアでは、ドレギアスに異変が起きた。

「グウツ!!?!」

突然ドレギアスが胸を抑え付け、玉座から立ち上がったと思いきや、地面に膝を付く。

「まさか!?!」

その時、ドレギアスの体から、赤と黒の闇と地獄の炎が外に飛び出し、ドレギアスの前から消えた。

「ブラムの闇とベリトの獄炎の力が消えた!………陽弥・ギデオンめえええつ!!!」

ドレギアスはあまりの悔しさに、吼える。

そしてザ・コアの側にいるアリアード達はザ・コアが突然光り出した事に眩き出す。



「何だ!？」

「眩しい！」

光は数分も経たないうちに弱くなると、ザ・コアから影が浮かび上がる。

「「「?」」」

現れたのは影は…赤髪で毛先が白銀をした断髪、しなやかな表裏赤と白の色をしたマントと赤と黒のスタビライザーマント、マントにはヴァルキュリアスの王家の紋章が縫い付けられていた。そしてヴァルキュリアスの胴体と足と腕に黄金の装飾、純白の鎧、ガントレット、脛当てが付いており、兜は頭頂部に付けられているクリスタルで出来ている角と、さらに頭の両脇に羽飾りが付けられており、後頭部に赤い毛の帯が結び付けられていた。そして背中には黒と白の色を持つスラスターウイングが大きく展開し、光と闇の翼を展開していた。ザ・コアから現れた人物にアリアードは問う。

「お前……陽弥?……陽弥か?」

「そうだが……それと、もザ・コアに頼んで、お前達に新しい装備をお願いしてやった……」

するとザ・コアから光の粒子が現れ、四人を包み込む。アリアードは白く透き通った肩部のシールドーマント。

メリダには羽飾りが付いたガットレットと腰部のスラスターブレード、シーラには背部に2本のアームとハルバード、エルネアには腰部にスラスターブレード、背部にスラスターウイングが装備されていた。

「ブラム…用意は出来ているか?」

陽弥が体の中にいるブラムに問う。

「当たり前だろ!俺は充分に準備万端だよ!」

「フフ♪」

陽弥はそう言うと、新しく進化したグラムと七星剣……双剣銃グラム、双剣銃セブンスター、そして皇帝の剣とも言えるガイアブリンガーを口で啞える。すると惑星レイボラが暗くなり始めた。

「?」

真上を見ると、ザ・コアを狙いに来たドレギアスが率いる帝国軍と、デススフィアが存在していた。そしてリイボラの大地にドレギアス及び、新生フェメシス騎士団達が転移してきた。ガイラスは至る所に重装甲をしており、カロールも腰部にジェットブースター、手にはブロードソードからロングソードへと切り替えており、シエレナも両腕がアームキャノンへと変わっていた。そして洋介は恐ろしい事に、囚われていた陽弥の力により、ディアブロと同化、そして脳らしき機関がむき出しになっており、容姿が正に悪魔へと変わっていた。するとドレギアスに続くかの様に、グリニア帝国兵、コーパス兵、ネブラ銀河帝国兵、シャンドウ親衛隊、ゼルトラン帝国連合兵も現れ、五大宇宙帝国が揃った。

「等々、来たか……」

「貴様か……陽弥・ギデオン!!」

「ああ……だが、ここまでだぞ……お前の野望はここで終わる……俺を本気で怒らせたからなあ……リミッター解除と全身全霊のフルパワーで駆逐してやるから……」

「ほざけ!!我はまだ終わらないぞ!たった五人で何ができる!」

「嫌、できる……何故なら……」

陽弥は双銃剣グラムと双銃剣セブンスターをライフルモードからブレードモードに切り替える。セブンスターは青く光り輝くエネルギーブレードへ、グラムは赤く光るチェインソーブレードを展開する。そして……

「クロスエアレイザー!!」

陽弥は二刀流でクロス字を描くように真空を斬る。そしてグラムを腕にぶつけ、音を立てた直後、兵士達の首が吹き飛び、血が噴水のように噴き出した。

「ッ!!」

首が無くなった兵士達はかかしの様に次々と倒れていく。つまり、陽弥は先の技によって、僅か0.02秒で地上にいる兵士達を全滅させたと言うことになる。ドレギアスや四大皇帝達が陽弥を見て、恐怖する。

「ば、化け物おおー!!!」

「あんなの勝てるわけがねえ!!」

「こんなんゴメンだぞ!!悪いが俺は退却する!今すぐに!!」

「お、お!俺もだ!!」

暴力と欲望で支配するシャンドウアとゼルトランの勢力が一斉に尻尾を巻いて退散して行く。

「待てええ!おまえらああ!!逃げるつもりかああ!!」

ドレギアスは逃げていくシャンドウアとゼルトラン帝国連合に咆える。

「どうやら、コーパスとネブラ銀河帝国はお前の味方らしいなあ♪」

「何をした!?!」

「決まっているだろ……切っていない奴には……心を斬ったんだ……奴らに恐怖を与えたのだ……それが戦乙女の流儀『戦場において死を定め、勝敗を決する』……」

「死神め!!」

ドレギアスはディザスターを抜き、陽弥に突き向ける。

「貴様を倒して、ザ・コアで完全体になる!!」

「殺れるものなら……殺ってみろ!!」

陽弥は三刀流を構え、バイザーを起動し、スラスターウイングやスカートマントの裏にある腰部のスラスターブースターを噴射する。アリアード達も騎兵銃槍を構え、メリダもブロードソードとシールド、シーラも2本のハルバード、エルネアもブレードアローを構え、上空目掛けて矢を放った。すると放った矢が無数に拡散し、帝国兵やコーパス兵に矢が突き刺さる。陽弥とアリアードは突撃し、メリダ、シーラ、エルネアは後方支援をする。陽弥は三刀流でコーパス兵を切り裂き、アリアードも騎兵銃槍で突進や突き攻撃、砲撃や銃撃を繰り返す。メリダもシールドから魔法障壁を展開し、シーラの後ろに立つ。シーラもハルバードを振り回し、矛先からエネルギーピアを放出し、向かってくる兵を武人の如く切り裂いていく。陽弥もブラムの力を解放し、ブラムと共に光の腕と闇の腕の爪で襲いかかる。すると陽弥の前にドレギアスと新生フェメシス騎士団が襲い掛かってきた。

カロールがコンドルレッグとロングソードを突き付けてきたが、陽弥はスラストーウイングから放つ光と闇の翼を広げ、膜を作るかの様に、翼で覆い尽くし、バリアを作った。そしてカロールのコンドルレッグとロングソードが意図も簡単に防御された。

「何っ!!?」

カロールが驚くと、シエレナが吹き飛ばされたカロールを蹴り飛ばした。

「退け！カロール！コイツはアタシが殺るよ!!」

シエレナも蜘蛛の脚の先端部に付いているガトリング砲とアームキャノンを乱射してきた。陽弥は三刀流を収納し、グラムとセブンスターをライフルモードに切り替え、それぞれ撃ち合いが始まった。銃弾が飛び散り、帝国兵を巻き込む。

「チッ！奴の火力強すぎる！なら……」

すると陽弥が持っていたグラムとセブンスターが変形していく。グラムは巨大な二門のガトリングキャノンへ、セブンスターは巨大なハイメガキャノンへと変形し、シエレナに向けて叫んだ。

「ジャステイス・セイバー!!」

二門のガトリング砲から弾丸が発射され、それを広範囲に撒き散らす。

「セイント・バスター!!」

砲口から収束荷電粒子が放たれ、ジャステイス・セイバーと共に回転しながら、シエレナに向かってきた。

「コイツ！ビームと弾丸を撒き散らしっ!!グアアアアアア!!」

シエレナは陽弥の二つの技により、各部位に風穴が開く。すると上空からガイラスがギガントメイスを振り下ろしてきた。

「この野郎!!」

陽弥は上空にガイラスがギガントメイスを振り下ろして来るのに気付き、グラムとセブンスターを連結させ、ロングライフルへとなり、ガイラスに向けて高エネルギービームを放った。ビームはガイラスのギガントメイスを溶解し、胸部に風穴を開けた。

「馬鹿な!!この俺が飛び道具に負けるなんて!!」

ガイラスは余りの悔しさと共に、消滅し、赤い蛇へとなり、消えた。  
「ガイラス!!糞おお!!」

カロールがガイラスが消滅した事に、陽弥を睨み、襲い掛かってきた。  
「よくもガイラスをおおっ!!」

カロールはロングソードを振り回し、陽弥を圧倒するが、アリアードが騎兵銃槍で突進してきた。

「陽弥!コイツの相手は私がやる!お前はドレギアスの方を!」  
「…分かった!」

陽弥はスラストーウィングの出力を最大に上げ、ドレギアスのいるデススフィアに殴り込む。デススフィアの外壁を壊し、内部をドリルが上へ上がっていくかの様に突き進む。そして終着点に到着すると、ドレギアスとブラツディレオン、洋介が玉座で待っていた。ブラツディレオンはビームセイバーを抜刀し、洋介も巨大なモーニングスターを持つ。陽弥はガイアブリンガーとブレイブリフレクターを持ち、飛び掛かってきたブラツディレオンと洋介に奥義を放つ。

「邪魔だ!!行くぞブラム!ベリト!」  
陽弥の体からブラムと解放されたベリトが現れた。

「おう!!」  
「行くぜ!!」

「「秘奥義!!」」  
陽弥はスラストーウィングからエネルギーソードビットを展開し、ブラムも闇の矛槍を持ち、轟叫んだ。

「光の剣よ!」  
「闇の矛よ!」

「獄炎よ!」  
「「光明と闇夜と煉獄よ混じりて、全てを滅せよ!!」  
「「ダイバイン・エクセルリオン!!」」

煉獄の炎を纏った剣と矛が螺旋状を描き、ブラツディレオンと洋介を吹き飛ばした。煙が舞い上がると同時に中から、陽弥が飛び出し、ドレギアスに斬りかかる。ドレギアスもダイザスターを抜刀し、陽弥の攻撃を防御した。

「ドレギアアアアアス!!」

「陽弥・ギデオオオオン!!」

互いは剣をぶつけ合い、王座の間や各ブロック、格納庫も破壊していった。

その頃、アリアード達は次々と帝国兵を薙ぎ払っていた。シーラがシエレナと交戦し、アリアードはカロールを相手していた。

「何でだ!? ギガオロチの力で復活し、パワーアップした俺達が、圧されているだど!?!」

その直後、カロールに隙きができ、アリアードは騎兵銃槍の引き金を引く。

「喰らえ!!」

銃槍の砲口から、炸裂弾が放たれ、カロールのロングソードが砕け、腕がなくなる。

「グアアアアアアアツ!!」

「秩序の名において! 民の無念! 晴らさせてもらうぞ!!」

銃槍の槍がカロールの胸部を貫き、砲口から爆裂弾が放たれた。

「クソオオオオオオオツ!!」

カロールの上半身から火が吹き、アリアードは地面に叩き付けた。するとカロールから青い蛇が出て来て、消えた。

「カロール!! クソオオオオオオオツ!!」

シエレナは最後の最後まで重火器を乱射する。シーラとアリアードはメリダが展開した魔法障壁内で身を保つ。

「これじゃ近付けない! エルネア!」

「ええ!」

エルネアが軌道を予測し、上空に目掛けて矢を放つと、矢が8本に増え、シエレナの蜘蛛の脚に突き刺さり、地面に付く。

「このっ! 何で壊れないんだよ!!」

シエレナは地面に突き刺ささって抜けなくなった矢を破壊しようとしたが、ビクともしなかつた。そしてシーラが前に出て、シエレナに突進する。

「ッ!!このおおおおおつ!!」

シエレナはアームキャノンを乱射するが、シーラがハルバードを回しながらビームを拡散・無効化させていき、背部のアームが持っているハルバードが伸び、シエレナの喉にハルバードの矛槍が突き刺さった。

「おおつ!おのれえええええつ!!」

シエレナは悲鳴を上げながら、消滅し、中から緑の蛇が出て来て、消滅した。アリアードは一息付き、残っている兵を睨み付ける。

《ッ!!》

兵達は怯え、武器を構える。アリアード達はデススファイア内で戦っている陽弥を見守るのであった。

闘技場エリアまで来た陽弥とドレギアス、両者はガイアブリンガーとデザイナーをぶつけながら戦っていた。

「よくも…よくも我が軍勢を!!」

「フンッ!アイツ等は意外と臆病者だったようだなあ、そうなるって言うことは”ドレギアス”と言う最強最悪の存在がいたからへつちやらだつたんじゃねえのか?」

「黙れええええ!!」

ドレギアスは怒りながらデザイナーで斬撃を繰り返す。陽弥はドレギアスの攻撃交わし、距離を取る。

「ふう…ここまで手強くなってきたなあ…ブラム、今こそ、”あの力”を使うか?」

陽弥はブラムに問う。

「ああ、奴には恨みがあるからなあ…倍返しにしてやれ!!」

「OK!、じゃあ…やるぞ、ブラム!」

「おう!!」

陽弥はガイアブリンガーを鞘に収めると、鞘を前に出し、ガイアブリンガーを引き抜くと同時に叫ぶ。

「白き曙光、黒き宵闇…勝利と淡水の二柱を一つに!!」

陽弥の体から現れたのは、なんとアプスとニケであり、二柱の神が陽弥と合体した。

「さらに……超・龍装光!!」

今度は超神星煌龍帝ノヴァ、陽光神龍アポロドラゴニス、黒陽神龍アポロドレイク、太陽神龍アポロブレイドも現れ、陽弥に身に纏った。ニケの羽衣、アプスの黒の猛牛と獅子の頭部が、肩に装備されており、天女の如く光の翼と闇の水龍の尻尾が目立っていた。陽弥の左右の目は虹色に輝いており、髪も断髪から長髪へと変わり、黄金のマスクを付けていた。

「これが……俺の全身全霊を込めた全力……その名も”レガシー”だ……」

陽弥はそう言い、ガイアブリンガーを構える。

「お前はもう……俺に追いつけなくなる……」

その直後、ドレギアスの目の前に陽弥の膝蹴りが飛んできた。

「ッ!!」

ドレギアスは陽弥の膝蹴りをくらい、吹き飛ばされたが立て直し、陽弥を見るが誰もいなかった。

「見えなかった!? 一体どこにっ!!」

今度は右から陽弥のガイアブリンガーが伸び、ドレギアスは急いでディザスターで防御する。

「速い!!」

それと同時に、陽弥は音速を鳴らしながら超高速でドレギアスを翻弄する。

「違う! パワーもスピードも遥かに我を上回っている!!」

「どうした? ……俺の動きに驚いているのか? ……それでも異次元生命体か!!」

陽弥はガイアブリンガーを伸ばし、ドレギアスに突進する。ドレギ



アスはデイザスターで防御した直後、デイザスターに罅が入る。

「デイザスターがつ!!?」

「どうやら、パワーによってその剣も保たなくなっているんだよ……所謂限度に耐えれなくなったと言ってもいい……フンツ!!!」

そして、陽弥のガイアブリンガーがデイザスターを折った。

「馬鹿なツ!!」

それと同時に奥義を放った。

「銀河最強奥義！ビックバンスラッシュ!!」

陽弥は黄金に光るガイアブリンガーを上へ振り上げ。ドレギアスの右脇腹にあるザンジークが付けた傷向けて、大きく斬った。

「ゴフェツ!!!」

ドレギアスは口や傷から血が吹き出し、デススファイアからとてつもない程吹き飛ばされ、外へ投げ出された。

「!!?!」

アリアード達は帝国兵を殲滅し、休息していた時に、物凄い音が鳴り響き、上を見ると、ドレギアスが吹き飛ばされた姿を目撃した。

「あれは……ドレギアス!」

そしてドレギアスはリイボラの大地に激突した。

「う……うう……」

デススファイアから、陽弥が舞い降り、ガイアブリンガーを突き付ける。

「降伏しろ……これ以上戦っても、無理がありすぎだ……」

「……フフ……フフフフフ」

「?……何が可笑しい?」

「取って置きは……最後まで取っておくって言うだろ?」

「何?」

その時、陽弥の後方にゼロが現れた。

「さあ！歌え！ゼロオオオオ!!」

ドレギアスが叫ぶと、ゼロがある歌を歌い出す。

「♪♪♪♪♪」

ゼロから禍々しいメロディーと歌が鳴り響く。

「っ!!」

陽弥がゼロから流れる汚れた音楽と歌に、耳を塞ぎ、苦しむ。ドレギアスは傷だらけになりながらも立ち上がり、苦しむアリアード達を無視し、ザ・コアに近付いた。

「ついに……この時を待っていた……我が永年の祝願が今……叶う!!  
ザ・コアよ!我は望む!!……我を、完全体へと覚醒し!!あらゆる次元や時空を……破壊する力おおお!そしてギガオロチも……本来あるべき超魔獣……”ギガタノオロチ”へ!!」

するとザ・コアの色が、禍々しい紫へと変わり、闇の瘴気がドレギアスを覆い尽くす。苦しむ陽弥はドレギアスを見て、悔しがる。

「スマン、皆……失敗だ……」

そして黒い瘴気から純白の天使の翼、漆黒の悪魔の翼がそれぞれ六枚ずつあり、翼を展開する。禍々しい鎧、野獣の如く脚部、鋭い牙に爪、龍の尻尾も生えていた。腰部には新たなダイヤスターを持っていた。完全体へと覚醒したドレギアスの姿は……正に悪魔と言っても良かった。

「我がマントラに抗う護星神が……」

ドレギアスはゆっくりと陽弥の方を振り向くと、手を差し伸べた。すると陽弥の首に何かに締め付けられ、ドレギアスの方に引き寄せられた。

「グッ!!このパワー……凄まじ過ぎる!!」

「悔しいか?……護星神よ……流石だ……」

「クッ!……ッ!」

「だが、我から全ての種族を守ろうとは……思い上がりもはだはだしい……奴等はいずれ、飽きもない争いを起こし、己の欲望に満ちる……お前達には全ての世界に生きる資格などない……勿論、神々もだ……」

ドレギアスはそう言いながら。陽弥を睨む。

「長き時を無駄にし、そして仲間の死も無駄死にってしまったなあ……ヴェクタ人よ……だが、もう終わりだ……黄昏の歌姫を喰らい、我はさらなる進化へと覚醒し、貴様らを破壊し尽くしてやろう……崇めよ、我が名は『ドレギアス・ゾーク』……全て消滅させる……破壊神

帝だ……」

するとドレギアスの顔を覆うかのように闇が溢れ、フルフェイスとマスク、そして紫の粒子帯と悪魔の角を出した。

「邪神皇の墓場であるこの星は……やがてお前の墓場になるだろう……」

ドレギアスはそう言い、陽弥を投げ捨て、ゼロに乗り込み、ザ・コアを奪ってデススフィアへ帰還する。そして残った兵もデススフィアに收容し、ワープ準備へと入った。

「先ず最初に……貴様の仲間達を八つ裂きにしてやろう……そしてレオン・マクライト……我が積年の恨みを晴らさせてもらうぞ!!」

再生した玉座に座ると、王座の間にブラッディレオンと洋介が敬礼すると同時に、ドレギアスは新たな戦力である異次元生命体軍団を召喚した。

「さあ、黄昏の歌姫をいただきに往くぞ……」

ドレギアスはそう言い、デススフィアと共に陽弥の世界へワープした。惑星リイボラに残された陽弥達は、絶望へと陥っていた。

「……大変だ!!」

陽弥は急いで脳波で……向こうにいる他の護星神達であるラルフ達に、警告サインを送った。

その頃、ホライゾンでは……夜空の上空に謎のサインが届いたのであった。それぞれの世界で修行を終えたレオン達は久しぶりにジュン達と共に夜空に浮かぶ警告サインを見る。

「あれは一体?」

レオンは問うと、ラルフやキャリー達が驚く。

「あれは……ルーン文字!!」

「しかも、陽弥君からだわ……『皆に……大至急警告する……』」

『クアンタの末裔と共に、ザ・コアを守っていたが……』

『ザ・コアは奪われ、ドレギアスは”ドレギアス・ゾーク”へと完全体へととなり……』

『デススフィアと共にここへ侵攻しようとして迫っている……』

『気を付けろ……今回のドレギアスは……俺だけでは勝てない……』  
…だと?!』

『……グランドスフィアやモーフィス……種族大銀河連合軍の総力をここに……大至急!!』

ラルフやシンが急いで各国に知らせるのであった。

一方、ヴァランドール皇国の砂浜に、勇人とシンデイがデートをしていた。

「綺麗な景色ですね♪」

「うん、……僕達のいた地球と似ている……」

二人は海を眺め、互いを見詰め合い、そつと唇を近づけようとした瞬間、ヴァランドール皇国から、警報が鳴り響く。

「!!?」

勇人とシンデイはヴァランドール皇国へと走っていくと、シンデイが砂浜に打ち上げられている綺麗な貝殻を見つける。

「わぁ……綺麗……」

シンデイは綺麗な貝殻にうつとりしていると、海面に何かが浮かぶ。

「?」

それは魚の死体であった。

「え……?」

すると海面に無数の魚の死体が浮かび上がり、辺り一面が魚の死体に埋め尽くされていた。

「!!?」

シンデイはその光景に恐怖すると、彼女の首に割れ目が開き、エラ

となるのであった。

## after story 39 : 超決戦 : 前編

陽弥からの警告サインを受け取った勇人達は、戦闘準備に取り掛かる。エルシュリア王国兵やヴァランドール皇国兵、アテナイ共和国の援軍やヴァルヴァートル帝国軍、グラシオン連合軍もエルシュリア王国に集結していく。グランドスファイアでも同じであった。各惑星の国家が複数の艦隊を連れて、グランドスファイアに集結していた。シン達もそれぞれのパイロットスーツを着用し、グランドスファイアの軌道に配置する。レオン達はエルシュリア王国上空の警護とされ、ジュン達と共に警戒する。

「ヤベエなあ……」

「何が？」

ジュンが突然怖気づいた事を言い、コモンが問う。

「まさか陽弥の奴があっさりど殺られるなんて、いくらこれだけの数を集めても……」

ジュンは冷や汗をかきながら言うと、ヒルダが怒鳴る。

「黙ってる!! どんなに集めてもアタシ等の世界を守らなきゃいけないんだよ! それに陽弥の事を……アタシの息子の事を馬鹿にするな!」  
「厳密に言ったら、こっちの世界のヒルダちゃんの子供なんだけどな……」

「うっせえ!!」

エルシヤが呆れながら説明するが、ヒルダは吠える。

「二人共! そこまでにして、今はこっちの任務に最優先して!」

サリアが二人の会話を止める。レオンは新たな機体：ヴェルトヴィンガーと機械化したデバストームに騎乗していた。するとレオンの元に、エルシュリア王国国王アストラッド王専用の国王騎セイクリッドメール『エリシオン』が現れた。

「レオン君、不満かい？」

「いえ……少し緊張しているだけです……」

「そうか?……なら、良いんだが……私は少し不満があるのだ……もし、この世界がドレギアスに滅ぼされたら、どうなるのかと……」

「分かりません……俺も想像したこともありません……まさか、こんな事になってしまうなんて、運命は……裏切るのでしょいか?」

「……陽弥君は言っていた……」運命は、自分で変えるもの」と……」

「運命は、自分で変えるもの……」

「陽弥はそう言い、私達の世界や銀河を守ってくれた♪」

「そうですか……」

レオンが頷くと、警告音が鳴り響く。

「!?」

「アステロイド帯に複数の艦隊を確認した!その数36メガです!」

「36メガ!」

ホライゾンでは、メガは1000万という訳で、約3億6000

万の艦隊が接近しているという事となる。

「来たのですか!」

「ええ…アステロイド帯で確認されたと言う事は、衛生攻撃機が全滅したことになる……レオン君、気をしっかりと持ちなされ!」

「分かりました!」

レオンはアストラッド王に敬礼すると、ヴェルトヴィンガーが報告してきた。

『レオン!来たぞ!!』

「っ!」

グランドスファイアを見ると、その前方に黒い靄が浮き出る。そう……それがドレギアスの艦隊だと言う事をレオンは見抜いた。

「来たか……」

すると黒い靄の中に、紫に光る何かがこちらへ急接近してきた。

「!?」

レオン達はそれを見ようとした直後、グランドスファイアの前線にいるシン達から通信が入る。

『すまん!ドレギアスが猛スピードでそっちへ向かっているぞ!!』

シンからの通信を聞いた直後、紫黒い流星がエルシユリアの草原に衝突し、草原を焼け野原にした。





オロジャークの刀身から大量の血が流れ落ちる。血は辺りを覆い  
尽くす。草や花が枯れ、空が黒く染まる。

「何だ!？」

「レオン！見て！」

サラがあるものに目を指し、レオン達も見ると、太陽が黒く染まっ  
ていた。すると赤く染まった積乱雲が現れ、血の雨が降る。それと同  
時に、ドレギアスやギガタノオロチの周りの血から何かが出てきた。  
それは、先の戦いで戦死した兵士達の醜い姿であった。さらに、時空  
融合で全てが混ざった死人やドラゴンによつて食い殺されたアルゼ  
ナルの者と異型の倒されたドラゴン達、そしてドレギアスの前に大破  
し、至る所から肉が浮き出ているヒステリカとヒステリカの頭頂部に  
肉が避けたエンブリヲが叫ぶ。

「アアンジュウウウウ………、アアンジュウウウウウ………」

エンブリヲは黄泉の界に堕ちても、ずっと今までアアンジュの事を執  
念深く想っていた。アアンジュはエンブリヲの悍ましき姿に嫌気が差  
していた。

「エンブリヲ！」

「アイツ……死んでもあんなに執念深くアアンジュの事を思うなんて  
!!」

「亡者の成れの果て」ですね……」

ジャンヌに騎乗しているフィーリと最新型のセイクリッドメール  
である『クルトルガ』に騎乗しているフェイズがエンブリヲを見る。  
フェイズはクルトルガの右腰に装備されている専用の宝剣『ワスピ  
ネーターサーベル』を抜き、構える。ルナ達も龍装光をし、ラルフ達  
も武器を構える。ジュン達も新たなライザーメールに騎乗していた  
ジュンは『ソニックライザー』『フェニックスライザー』『グリムライ  
ザー』『メガロライザー』が新たな武装を抜く。ジュンの新たなライ  
ザーメール『ソニックライザー』はビーストモードからヒューマノイ  
ドモードへと変形し、ツインアイを光らせながら、腰部に装備されて  
いる専用の双剣『オレイカルコスブレード』を抜く。コモンも『フェ  
ニックスライザー』をヒューマノイドモードへと変形し、両腕部に装備

されている蛇腹剣『ブローラーソード』抜く。アラドも『グリムライザー』を変形させ、背部に装備されている剣と剣が合体した薙刀『エグゼジャベリン』を振り回す。リアースも『メガロライザー』をヒューマノイドモードへと変形し、右肩部に装備されている専用の弓『エクシードアロー』を抜く。そしてアストラ達も新たなローガストに騎乗しており、それぞれの専用の武器を抜く。

「クッ！何でだろうかな？」

「何がだ？」

ベイボルスが震えているアストラに問うと、アストラが正直に答える。

「こんなに震えたのは初めてかもしれない……」

アストラは笑いながらベイボルスに返答すると、ベイボルスとアイリスが驚く。

「ええっ!？」

「はあ!?!何を言ってるんだ?！」

「嫌、マジで……」

恐怖に怯えるアストラはヴォーダンを改造した新たなローガストメール『ヴォルダン』の専用の大剣『イグリース』を持つが、操縦桿を握っていた手が震えていた。するとドレギアスが何かの気配を感じづく。

「フン……来たか……」

ドレギアスの後方上空からワームホールが出現する。

「何だ!?!」

レオン達は驚くと、ラルフ達がある力に確信する。

「帰ってきた!!」

「え!?!」

するとワームホールからハバキリとスペースノアを含む護衛艦隊が現れた。ハバキリのカタパルトが開き、ジスタードとロブが射出され、上空を舞い上がる。ジスタードのコックピットにいる陽弥は、復活したヴィクトルに命令する。

「ヴィクトル、ジスタードの操縦任せていいか?！」

「お任せください♪」

「それじゃ、俺は……」

陽弥が、コックピットハッチを開き、座席シートが陽弥を外へ押し出した。陽弥は双銃剣グラムとセブンスターを抜き、ヒーロージャンプしながら降下する。

「態々死にに来るとは、愚かな！陽弥・ギデオン!!ギガタノオロチ！殺れ!!」

ドレギアスはギガタノオロチに命令する。ギガタノオロチは背中  
の棘が対空ミサイルへとなり、陽弥目掛けて発射された。

「そう来るか……」

陽弥はグラムセブンスターをライフルモードに切り替え、迫り来る  
対空ミサイルを迎撃する。

「ヴィクトルー！援護頼む!!」

「了解!!」

ヴィクトルーは13機のロブを引き連れ、プラズマビームとパルス  
レーザーでミサイルを駆逐していく。陽弥はその間に通信する。

「シグムディア！出番だ!!」

陽弥はそう言うと、シグムディアが陽弥の所に飛んで来た。

「マスター!!」

久しぶりの再開を果たしたシグムディアと陽弥。陽弥はシグム  
ディアに騎乗し、ルミナスビットを展開する。

「さあ、行くぞ!!」

するとスペースノアのカタパルトからアリアードのクアンタメイ  
ル『ジアート』、メリダのクアンタメイル『ブリッツェン』、シーラの  
クアンタメイル『ローエン』、エルネアのクアンタメイル『フェルメー  
ラ』が射出された。

「アリアード！メリダ！シーラ！エルネア！用意は良いか？」

「ええ！」

「本気を出しますよー！」

「御意！」

「勿論♪」

四人は陽弥に応じると、エミリアに通信する。

「エミリア！皆！待たせたな！」

『陽弥様！／＼陽弥!!』

「しばらく見ない間に成長したな、エミリア…マナとオリバーとライラは無事…どうした？」

つとそう言った時にエミリアが泣き崩れる。

『いえ…無事に戻って来てくれたのが嬉しくて…』

「…ごめん」

陽弥がエミリアにそう言った直後、アリアード達が陽弥とエミリアの通信に入る。

『陽弥よ、女の人を泣かせるとは…』

『全く、これだから男は!』

『陽弥殿、最低です』

『陽弥さんて、大切な奥さんを悲しませちゃう人物なんですわええ』

「嫌々！そう言うつもりはなかったんだ！」

『陽弥様…』

「はい…」

『後で私の部屋に来て下さいね♪』

エミリアが突然怖い表情と上から目線で陽弥を凝視する。陽弥はそれに応じる。

「は、はい…」

《弱っ!?!》

レオン達が陽弥の情けない返事に驚くと、ギガタノオロチが吼える。

「おっと！今はコイツを倒すのに最優先だ!!」

陽弥はシグムディアの両肩部に装備されている魔双銃剣エクシードとヴェルデライズを抜くと同時に、ドレギアス・ゾークが宣言する。「そうするか…ならば、この星と共に奈落へ落ちろ!!」

ドレギアス・ゾークの周りに、無数のワームゲートが開き、中から異次元生命体軍団及び、ブラッディレオンと洋介が現れた。陽弥達は武器を構え、叫ぶ。

「行くぞー！みんなー！」

《応!!!》

レオン達は陽弥に続き、突撃していった。

一方、勇人とシンデイはクーフリンとエリンの出力を最大にし、急いでエルシュリア王国へと向かっていった。そして突然空が黒く染まったり、黒い太陽が現れたり、赤い雨が降るといふ現象に驚く。

「何で赤い雨が降るんだよ!? 一体どうなっているんだ!?」

勇人が慌てている中、シンデイは数時間前の出来事を思い返す。海辺の近く、海面へとがってきた魚達の死体に不満を抱いていた。

「あれは一体……何だったのでしょうか……」

シンデイはそう思いながら自分の右手を見ると、指間腔が広がっていた。

「っ!?!」

すると耳が尖り、そこからヒレが生え、ヒレ耳へとなる。

「っ!?!」

さらに腰からヒレや脚が美しい純白に満ちた鱗へとなる。

「キヤアアアアアアアアッ!!!」

「っ!?!」

突然、シンデイの悲鳴が聞こえ、エリンのスピードが落ちていく。

「シンデイ!?!」

勇人は急いで落ちていくエリンを抱え、地上に降ろす。勇人はエリンのコックピットの暗証番号を入力し、ハッチを開ける。

「シンデイー！大丈夫……夫……!?!」

勇人が見た物は、シンデイの手首や肩に純白の鱗がビッシリと生え、手には指間腔が広がっており、耳や腰に耳ヒレと腰ヒレがあり、そして一番勇人を釘付けにしたのは、シンデイの脚が魚の様に純白の鱗と虹色に輝く尾ビレであった。

「……シン……デイ……?」

「勇人……」

シンデイは勇人を見るのであった。

## a f t e r s t o r y 4 0 : 超決戦 : 後編

ヴァランドール王国とエルシュリア王国の国境の大平原に着陸している勇人は、エリンに騎乗しているシンデイの姿に驚愕していた。

「……………シンデイ?」

「勇人……………」

「……………あれ?……………」

勇人は考え込む。

「『あれ!?……………どういう事だ?え?シンデイが人魚!?だとしたら、地球人じゃない!?あれ……………あれえええ!』」

勇人は考え込んでいると、シンデイが心配する。

「勇人?」

「え?」

「私……………大丈夫だから……………」

「……………」

シンデイがそう言うと、勇人がシンデイを抱える。

「キャツ!」

勇人はシンデイを抱え、クーフリンに乗せる。

「い、良いのよ勇人……………」

「任せて……………エリン、悪いけど自動操縦で戦ってくれる?」

「かしこまりました。」

エリンはそう言い、コックピットが変形する。

「行こ、皆の所に……………」

「ええ……………」

勇人は急いで、エルシュリア王国へと向う。そして数分後、大平原の奥から煙が上がっていた。

「煙が!!」

勇人はクーフリンを上昇し、崖が上がっていくと、目の前の光景に息を呑む。

《オオオオオオオオオオオオオオ!!》





「だけど安心して、この戦場からあなたのお師匠がいます」

「師匠が!？」

「どうやら、彼はザ・コアで願ったのでしよう……」

「そうか……師匠、皆を人間に戻してくれたんだ………母さん……」

「？」

「シンデイをお願い……」

勇人はそう言うと、コックピットから出て、荒神へと変身した。

「行くのね……」

「うん……」

勇人はそのままクーフリンから降下し、戦場へと足を踏み入れた。

一方、陽弥はシグムディアのエクシードとヴェルデライズを乱射し、エミリアもシグニューのエネルギーランスでアンデッドや異次元生命体を突き刺していく。レオンもヴェルトヴィンガーのシャイニングウイングの武装プラットフォームに搭載されている12基の遠隔操作兵器『エールシュヴァルト』を展開する。

「エールシュヴァルト!」

レオンが命令すると同時に、エールシュヴァルトが一斉に飛び回り、向かってくる異次元生命体を射つたり、突撃し、斬り裂いていく。「切りがない!!」

レオンやジュン達も異次元生命体に苦戦する。

「ダメだ!数が多すぎる!」

「私に任せてください!」

「サラ!」

サラの焰龍號が空を舞い上がり、永遠語り”風の歌”を奏で始めた。

「♪♪♪」

それを聞いたアンジュとタスク、そして陽弥とエミリアは護衛に付

く。

「ルミナスビット！」

「ルミナスファンネル！」

シグムディアとシグニューからエネルギー形式のソードとキャノン砲が射出され、妨害しようとして迫り来る異次元生命体を落として行く。そして焰龍號の装甲が黄金に輝き、肩部が展開され、異次元生命体軍団に向けて、収斂時空砲を発射した。

「決まりました!!」

フェイズがそう言った直後、ギガタノオロチが立ち塞がり、巨大な口を開け、収斂時空砲を吸収する。

「そんな!?!」

収斂時空砲があつさりと喰われたことに、陽弥達は驚く。

「やはり、超魔獣には収斂時空砲など容易いって言うことか……くそっ！」

今度は陽弥がブラムと協力し、デイスコード・Z・フェイザーを発射した。光と闇の粒子が混合し、白と黒の竜巻状のビームが飛ぶが、ギガタノオロチはそれを意図も簡単に吸収していく。

「馬鹿な!?!クトウルフにも匹敵するほどの威力だぞ!?!」

するとギガタノオロチが7つの首から赤い光弾を放つ。

《うわあああああああああ!?!?!?!》

《ぐあああああああああ!?!?!?!》

ギガタノオロチの光弾の威力と爆発に巻き込まれる陽弥とレオン達は急いでエルシュリア王国城門へと下がろうとする。

「この化物が！畜生！」

ロザリーがアサルトライフルを乱射し、連装砲を放つ。砲弾が目に直撃するが、ギガタノオロチは無傷であり、ロザリーを睨みつけ、大咆哮を放った。

「ホワアアアアアアアアア!?!?!」

「ケラケラケラケラケラケラ!?!」

「ファイア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”アアアツ!?!」

「ガラ！ガラ！ガラ！ガラ！ガラ！ガラ！ガラ！ガラ！ガラ！ガラ！」



「？」

ドレギアスは確認すると、尻尾に荒神化した勇人が掴んで引っ張っていた。

「新川 勇人……クアンタ人と地球人のハーフが!!」

「ドレギアスー!」

勇人はドレギアスを睨み、腕に力を入れ、ギガタノオロチを投げ飛ばした。勇人は拳を構えた直後、9時の方角から変わり果てた洋介が殴り掛かってきた。

「洋介!?!」

「カアアアアアアアッ!!!」

洋介の巨大な拳が勇人に炸裂する。

「クッ!!」

勇人は防御体制を取るが、洋介の力の反動により、数十メートルまで吹き飛ばされた。

「この力……まさか師匠の!?!」

勇人は洋介の力の正体を知り、洋介を見る。彼の目は死んだ魚の様な目であり、口から唾液が垂れていた。その姿はまるで理性と心を失い、欲望と本性、そして野心と力に溺れた人間のなれ果て……『醜く穢れた怪物』そのものであった。勇人はすぐ様拳を構えると、ギガタノオロチが起き上がり、勇人を鋭く睨む。

「来い!!」

勇人の言葉と共に勇人と洋介の殴り合いが始まり、ギガタノオロチが勇人目掛けて走って来る。ドレギアス・ゾークはゼロ共に上空から勇人を見る。するとそこにブラツディレオンが騎乗しているヴェルトバーサーカーが来る。

「全く……貴方という方は、そこで眺めているだけですか?」

「フン……奴は下僕とギガタノオロチに任せる……本当の目的は……フェイトのザ・シードと……そして……」

ドレギアスはゆっくりとエルシュリア王国の城を見る。

「『黄昏の歌姫』である人魚姫は……あの城にいる……ブラツディレオン、行くぞ」

「了解」

ドレギアスとブラツディレオンはエルシュリア王国都内に侵入し、エルシュリア城へ向かっていく。

その頃、城内では多数の負傷者や機体の修理があっていた。軽傷を負ったレオン達は頭や頬、腕や腹に包帯が巻かれていた。

「くそっ！ドレギアスの奴、ギガタノオロチを使いやがって！」

アストラが拳を壁にぶつけると、陽弥が朝日の光が照らされている窓を見る。

「勇人が何とか相手しているんだが……俺達はただ……ここで見守る事しかできないのか………?」

陽弥は窓の外を見ているとそこにフェイトと人魚になったシンディを抱えていた。

「シンディちゃん!」

エミリアやレオン達は驚くと、陽弥が言う。

「やっぱりな……」

「何がですか?」

サラが問うと、陽弥は詳しく解説する。

「彼女は……かつてクアンタの始祖等に作られた第二の生命体……」

『歌の民』だ……」

《『歌の民』?》

「歌の民はかつて……クアンタの始祖達と深い交流があったんだ……彼等は歌で時空を宥め、ダークマターを浄化する能力があるんだ……だが、」

「だが?」

「ギガタノオロチ……嫌、正確に言えばギガオロチがダークマターの集合体として生まれ、全ての星を喰らい尽くしていった……そして奴はある物に目が入った……かつて歌の民には王と妃との間に八人の

娘達がいたんだ……ギガオロチは100年に一度ここへ参り、娘を一人一人食い殺して行くと言う享樂を楽しんでいったのだ……」

ギガオロチの本性にレオンとサラは怒る。

「罪も無い子供を、遊びや楽しみで食い殺すなんて……自分勝手すぎだなあ……」

「何と下劣な……」

「その為、多くのクアンタの兵士達を向かわせたが、返り討ちにされ、誰一人も戻ってくることはなかった……そして彼等は最後の手段に取り掛かった……八人皇帝及び……16人の龍の力を纏った鎧人を連れて……」

「荒神と共に封印した……」

「そこからなんだ……実は、その荒神の正体なんだ……彼は七人の弟達を纏め……国民からも信頼性持つ皇帝……初代クアンタ帝国皇帝 ローハン・ブリタニア・クアンタ……その人物こそが、勇人の先祖でもあるんだ……」

《ええっ!!!》

「彼は確かにクアンタ人かもしれない……だけど、自身が皇家の末裔だと言う事は知っていない……それに、この事は本人には言うなどあの人から言われている」

「あの人？」

アンジュが首を傾げると、柱の陰から黒いマントで覆われた人物が現れた。

「わしの事か？」

《っ!?!》

皆は驚くと、陽弥は老人に話し掛ける。

「色々世話になったな……あんだだろ、幼少の頃……俺にインフィニティソウルを渡し……マナを過去に送り……星の爆発から俺を助けてくれたのは……」

陽弥はそう言うのと左腰に装備していたガイアブリンガーを抜刀すると、黒マントの老人が鞘からガイアブリンガーを抜刀し、陽弥の攻撃を防御した。

《っ!?!》

レオン達は、黒いマントの老人が持つガイアブリンガーを見て驚く。

「ガイアブリンガー!?!」

「やっぱりな……その剣技、身のこなしさ……間違いなく俺の剣技だ……」

陽弥がそう言うと、老人はフードやマントを剥ぎ取り、姿を現した。そう……その老人こそ、年老いた陽弥本人であった。赤かった髪は白く、長髪、白い髭を生やしており、それはまるで、賢者如く勇ましいものであった。

「良く気がついたな……何時からだ?」

「あの時だよ……俺が死にかけている時に、あんたは輝きを発していたが、そのマントが一番目立っていたよ……」

「フフ……最初からか、まあ良いだろう……お前達に率直に言う……ギガタノオロチとドレギアスだけは、そのままのたばらしにはしていない……絶対に倒せ……塵も遺すな……」

「分かっている……それはとつくに「そう言う意味ではない……奴の狙いは、シンディ・マリーシェだ……彼女はそう……歌の民の……姫巫女でもある」何だっ!?」

「彼女は幼少の頃……マリーシェ家に拾われたんだ……DNA検査では身元も不明確認され、マリーシェ夫妻はその娘を育てる事にした……いつか自分が……孤児と言う事がバレないように……だが、結果……彼女はようやく成人の時が来てしまったのだ……」

「成人?」

「あの石碑に書かれていた事を忘れたのか?……『長月の日、血に染まりし、紅き月……闇に染まりし、漆黒の太陽が現れしとき、因果を捕食する厄災の大蛇……黄昏の巫女姫と永遠の命を喰らい、真なる絶望へと覚醒する。』と……」

「真なる絶望……ギガタノオロチではないのか?」

「違う……そもそも、永遠の命は何の事か知っているのか?」

「……まさか!?!」

「ああ…そのまさかだ…」

「何？何が分かったの？」

「これは、予言、だったんだ！しかもこの予言は…運命に逆らえない  
と言う法則でもあるんだ！」

「だから！その予言で何が分かったのですか！」

メリダは必死に質問するが、陽弥は無視する。

「ドレギアスは…まだ進化する！」

陽弥がそう言った直後、扉が破壊された。

《っ!!?》

扉から現れたのは、ゼロに騎乗しているドレギアスとヴェルトバー  
サーカーであった。

「ドレギアス！」

陽弥はドレギアスを睨み、

「ブラッディレオン！」

レオンはもう一人の自分を睨む。

「その通りだ…陽弥・ギデオーン…ギガタノオロチは今も空腹だから  
……」

ドレギアスはフェイトと抱えているシンディイを見る。

「歌の民の末裔と…フェイト…お前のザ・シードを超越せ……」

「嫌だと言ったら？…」

「……死んでもらう」

ドレギアスがそう言うと、陽弥達が前に出る。

「ここを通りたければ……俺達を倒せ！」

レオンやジュン達も前に出て、武器を構える。

「超・龍装光！」

「天・龍装光！」

「狼・龍装光！」

「剣・龍装光！」

「呀・龍装光！」

「峯・龍装光！」

「極・龍装光！」



陽弥達の武器から古の銀河七聖龍達が現れ、それぞれの鎧へとなる。

《龍装光!!》

ルナとリヨウマ、ソフィア、アレクトラとルチル、そしてアストラ、ベイボルス、アイリス、エミリアもそれぞれの龍装光へ変身する。

「そうか……なら、我も！邪・龍装光!!」

ドレギアスが叫ぶと、勇人が戦っているギガタノオロチがデイザスターに戻され、ドレギアスの鎧へとなる。ドレギアスはデイザスターを構え、陽弥達に言う。

「本気で来い……愚か者共め……」

陽弥達は剣を突き付け、ドレギアスへ向かって行くのであった。

一方、勇人は目の前にいたギガタノオロチが突然消えた事に驚くが、目の前の洋介を睨む。

「洋介……お前は何処まで堕ちてしまったんだよ……」

勇人は洋介に虐められていた事を全て思い出す。殴られたり、蹴られたり、使いパシリされたり、お金を取られたり、戯言を噂された事を……。

「できれば、話し合いで分かり合えたかった……だけど！」

勇人は粒子発勁の体制をする。

「お前が求めたのは……ただ当たり前の様に人を見下す生活、そしてプライドとエゴを取り戻す事だ!!」

勇人は渾身を含めて、洋介に粒子発勁を放ち、洋介も真似するかの様に粒子発勁を放つ。粒子発勁同士が炸裂し、勇人と洋介はラツシュへと突入する。

「僕には守りたい物がある！信じ合える友達、そして…愛する人を守りたい！」

勇人の心が熱く燃え盛り、格納庫に保管されている”ある

フレーム”の額部とマスク部に隠されたカメラアイが露出して真紅の輝きを放ち、6つの目を持つ神々しい姿へとなり、装備されなかった装甲が自動的に取り付けられる。胸部にX字型のジオと異なる合金を持った謎の異生体も融合しており、全体的に生物に近いシルエットとなっている。さらに8枚の翼から、放出される緑の粒子が翼のような形を成していた。フレームは格納庫のハッチをハックし、空へ舞い上がる。勇人はそれを見て驚く。

「何だ!？」

勇人はその機体を見ると、あまりの神々しさに見惚れていると、洋介が襲いかかる。

「カアアアアアアッ!!!？」

その直後、洋介の右頬にその機体の拳が炸裂、洋介は吹き飛ばされ

る。

「っ!？」

勇人は驚くと、神々しい光を放つ蒼世の機体はコックピットハッチを開く。

「……乗れって言うてるのか?」

勇人がそう思うと、蒼世の機体は首を縦に動かす。勇人は構わず機体に取り込むと、意識がその機体の目線となり、頭の中から声が響く。

『こんにちは、勇人様♪』

「うわあっ!何!？」

『驚かせてすみません、私は、パイロット支援啓発インターフェイスシステム(Pilot support enlightenment interface system) ”通称『ADAM』と申します。』

「ADAM…アダム」

「そうです、私はパンドラメールとオメガメールのデータを元に作られし究極のフレーム『インフィニットメール』であり、勇人の脳波をサポートいたします。」

アダムはそう言うのと、目の前に映る洋介が立ち上がる。

「……じゃあアダム、何か良い武器は?」

『左背部に専用のアドバンスドライフルが装備されております』

勇人はアダムの支持に従い、左背部に取り付けられている『H&K XM8』に似たアドバンスドライフルを持つ。

「格闘は?」

『両腕部にノバソードがあります』

両腕部からノバビームの高周波ビームサーベルが放出され、アドバンスドライフルを乱射する。洋介は強靱な肉体を盾にし、勇人に襲い掛かるが、アダムは全く惚気けず、反動していなかった。

「っ!？」

そして勇人の反撃が始まった。勇人はビームサーベルを振ると、刃から地水火風の四大元素の力を持つ刃が飛び、洋介の肉体もろとも切断した。

「カアアアアアアアッ!!!」

洋介は苦しみながら、火の刃から放つ炎に焼き尽くされ、灰へととなり、中から痩せ細くなってしまう洋介が出てきて怯える。と黄色の蛇が現れ、消滅した。痩せ細くなってしまう洋介は勇人に怯え、逃げる。

「凄い……これが、インフィニットメール……」

勇人はそう言い、急いでエルシュリア城へと向う。

その頃、エルシュリア城壁では龍装光した陽弥達がドレギアスとブラッディレオンと戦っていた。ドレギアスのデイザスターの突きや薙ぎ払いを回避するレオンと陽弥、ジュン達はブラッディレオンを相手しており、リアースがエクスカリバーンの弓弦を引き、矢を放つ。ブラッディレオンはビームソードで矢を薙ぎ払い、アラドの攻撃を防御する。後方から龍装光したアストラが大剣を振り下ろし、ブラッディレオンは受け止める。

「グッ!!」

「フフ……」

ブラッディレオンは笑い、アストラを蹴り飛ばし、槍を突き付けてきたベイボルスの突き技をヒラリとかわす。

「どうした?……突き技が鈍っているようだぞ♪」

「ッ!!」

ベイボルスはブチ切れ、さらに突きの速度を上げる。するとアイリスが細剣を構え、ブラッディレオンの左脇腹に突き刺す。

「ウッ!!」

ブラッディレオンは左脇腹を抑え、ビームソードを振り回す。

「猿が!!調子に乗るな!!!」

ビームソードから黒い嵐が吹き荒れる。

《グッ!!》

ジュン達はブラッディレオンの嵐を防御する。

「皆！ここからが正念場だ！！一気に畳み掛けるぞ！！」

ジユンがコモン達を指揮し、コモン達も応じる。

《応！！》

ジユン達は一気にブラッディレオンに畳み掛けるのであった。レオンと陽弥、エミリア、ルナ達はドレギアスを追い込んでいた。

「何故だ！？完全体になった筈の我が……お、圧されているだど!?」

ドレギアスはデイザスターで陽弥とレオンの攻撃を防御しており、レオンがアースセイバーをラッシュする。

「こうなれば!!」

ドレギアスは後方に下がり、デイザスターを掲げる。

「全てを滅ぼせ！ギガタノオロチ!!」

デイザスターが光、刃からギガタノオロチが出ようとした直後。

「そうはさせません！」

フェイトが光の鞭を伸ばし、ドレギアスの手に直撃した。

「ガアツ!!」

ドレギアスはデイザスターを離してしまうと、フェイトが鞭でデイザスターを掴み、エルシユリア王国城外へ投げ捨てる。城外の大平原にギガタノオロチが召喚された。

「クツ！フェイトオオオオ!!」

ドレギアスはフェイトに向かって殴り掛かってきた。ドレギアスの拳、蹴り技を受け流すかの様にフェイトは防御する。そしてドレギアスの拳を掴み、彼の顔面に発勁がぶつけられ、惚気けている隙にフェイトの蹴りがドレギアスに炸裂した。

「教えてやりましょう、ドレギアス……完全体になっても負ける理由を………」

「何!?!」

「貴方の右脇腹にはザンジークが付けた古傷がまだあります……その古傷からザ・コアの力が漏れ出ているのです。そのせいで貴方は完全体になってもまだ力が発揮できなくなっているのですよ……」

フェイトの話に、ドレギアスは右脇腹を見ると、古傷から膨大な光が漏れ出ていた。





ス、緑の蛇であるシエレナ、黄の蛇である洋介、そして紫の蛇であるブラッディレオンの魂が集まると、ドレギアスは5人の魂を喰らい始めた。それを見ていたジュン達や駆け付けた陽弥達は恐怖する。そしてドレギアスは魂を食べ終え、口元の唾液を拭くと、飛んでいったデイザスターを取り、ゼロに乗り込む。そしてドレギアスはデイザスターを持ち、ゼロもオロジヤグを持つと、ドレギアスとゼロ目掛けて二つの剣が貫く。

「グハアツ!!」

《っ!!!?》

「遅かったか!」

「フフフ……アハハハハハハ!!! どうやら形勢逆転と勝利の女神は……我に味方した!!」

するとギガタノオロチの様子がおかしくなるとみるみるうちに体が膨れ上がる。

「お……おい!あれ一体何が起ころうとしているんだ!?!」

ロザリーが問うと、未来の陽弥が説明する。

「災禍の蛇が……脱皮をするんだ……真の災禍へと……」

未来の陽弥はそう言うと、ギガタノオロチが破裂し、中から無数の蛇の尻尾が出てくる。ドレギアスはデイザスターを突き刺したまま、ギガタノオロチに言う。

「さあ、神帝よ……条件は果たした!!我を喰らえええ!!」

ドレギアスの叫びと同時に苦しみもがくギガタノオロチが走ってきて、ドレギアスを食べた。

「食べられた!!」

アイリスが言うと、ギガタノオロチから巨大で禍々しい腕が突き破って出てきた。ギガタノオロチがみるみると大きくなると同時に形が変わっていく。

「嘘……だろ!?!」

「まさか……」

「奴め……これが狙いだったのか……くそっ!」

左上に闇の大蛇、左に闇の龍、左下に灰の龍、右上に悪魔と思わせ



る異様な闇の怪物、右に水大蛇、右下に水の龍、六体の神帝の中樞に巨大な顔が存在していた。そして、7体の神帝の上に巨大な邪龍の首が陽弥達は睨んでいた。

『ハハハハハハ!!!フッフッフッフ!!!』

突然、邪龍からドレギアスの笑い声がした事に陽弥達は驚愕する。

《ドレギアス!!?》

『そうだ!……我だ!レオン・マクライト!!!』

「まさか……ドレギアス、なのか!!!?」

レオンは邪龍を見ると、左上の首であるアージュが言う。

『その通りだよ……ドレギアスは我々の取引し、神帝へと覚醒したのだ!』

『力を欲する彼に……我等の本来有るべきの力を授けたのだよ♪』

アナが説明するとスヴァが笑い声を上げる。

『ジャハハハハハハ!!!これこそ、真の災禍!!!』

スヴァの次にドレギアスが名を轟かせる。

『これが……これが……これが……これが、究極体!!!ドレギアス・ズアーク!!!我はついに、全神々にも匹敵し、全次元や時空、そしてオムニバースに終焉を齎す破壊神へとなったのだ!!!』

ドレギアスの無気味な宣告に、レオンは怒りを顕にする。

「そんなこと!!俺が許さん!!来い!ヴェルトヴィンガー!!!」

レオンのヴェルトヴィンガーが次元跳躍で現れ、レオンはすぐ様ヴェルトヴィンガーに乗り込み、ドレギアス・ズアークへと向かって行き、アーティファルソードIIを構える。

「よせ!レオン!!!」

「はあああああああ!!!」

レオンはアーティファルソードIIを構え、振り下ろした直後、ドレギアスが消えた。

「っ!?!」

レオンが驚くと、後ろから神帝マニの攻撃が炸裂する。

「ぐあああああああ!!!」

「レオン!!焔龍號!!!」

サラの額の結晶が光、焰龍號が飛んでくる。サラは急いでレオンの元へ急ごうとした直後、焰龍號の死角から神帝ヴィシユが襲い掛かる。

「きやあああああああああああ  
!!!!!!」

「サラ!!くそっ!!!」

レオンは神帝マニを払い除け、直ぐにサラの所へと急ぐ。

「レオン!俺達も行くぞ!皆!」

《おう!!》

陽弥達もそれぞれの機体に取り込み、レオンとサラの援護しに行くのであった。

## after story 42：破壊神帝 降臨：後編

エルシュリア城下町の上空を飛ぶ勇人は、アダムと共にエルシュリア城から見えるドレギアス・ズアークを見る。

「一体何が起こっているんだ!?!」

『ALERT!ALERT!』

「何!?!」

突然アダムが警告音を鳴らし、解説する。

『エルシュリア城上空を浮遊するドレギアスをスキャンしたところ、彼のパワーが膨大に上昇中、現在の勇人と私では、奴に勝利する確率は5.4%です』

「5.4%…それでも!?!」

勇人はアダムの出力を最大にし、エルシュリア城へと向かう。

神帝ドレギアス・ズアークは神帝アージュ、神帝ムーラ、神帝アナ、神帝マニ、神帝ヴィシユ、神帝スヴァ、神帝サハスでレオン達を苦しめる。ベイボルスが新型ローガストメール『ダイタロス』の槍『トリシューラ』を回転させ、ルナとリョウマを守る。

「クソ!」

しかし、スヴァがダイタロスを押し出す。その時、スヴァの死角から勇人のアダムが現れ、アドバンスドライフルを乱射する。

『ツ!!この力は……荒神か!!』

スヴァはアダムの方を見ると、アダムはビームサーベルを放出し、スヴァに攻撃する。

『グッ!!』

スヴァは勇人から離れ、体制を立て直す。

「勇人!」

「皆!大丈夫ですか!?!」

「ああ！おかげで助かった！」

「師匠は!？」

「お兄ちゃんは彼処に！」

ルナの指差す方向に、エミリアとアリアード、メリダ、シーラ、エルネア、レオン、サラ、アンジュ、タスクと共にアージュ、アナ、を相手していた。エミリアと陽弥がハイパーノバビームライフルを乱射するが、アージュとアナはハイパーノバビームすら全くビクともしなかった。

「ノバビームが効かない!？」

陽弥は驚いていると、アージュとアナが牙を向けて来た。

「クッー！」

もうダメだと思った時、勇人のアドバンスドラライフルのビームがアージュとアナに炸裂する。

『!!?』

アージュとアナが一斉に勇人の方を向き、口から赤黒い迅雷を放つ。

「アダム！」

『了解！障壁陣!!』

アダムを守るかのように、ドーム型の魔法障壁や二重シールドを展開され、迅雷を無効化する。

「師匠！」

「勇人！ようやくインフィニットメールを起動させたのか！」

「うん！だけど、このままじゃ勝てない！どうすれば!？」

「エルシュリア王国格納庫に対陸上アームド・ベース『アルカディア』がある！それを使い！」

「はい！」

勇人は格納庫へ急ぎ、中にある対陸上アームド・ベース『アルカディア』を装備していく。

「早く……早く……」

勇人は必死にアームド・ベースを装備していくと、勇人の後ろから瘦せ細くなつた洋介がレンチを持って近付いてくる。

「(コイツのせいだ!!……コイツのせいで俺の人生は!!)」  
憎しみと怒りで満ちた洋介は、レンチを振りかざすが、

「!!」

勇人はいち早く洋介の攻撃に気付き、渾身を込めた拳が、洋介の頬に炸裂し、吹き飛ばした。

「弱虫が!!」

勇人は暴言を吐き、取り付けに集中する。

『心拍数が上昇しています。大丈夫ですか?』

「……平気、大丈夫だから……」

勇人は冷静な事を言っていると、格納されていた白い装甲を身に纏った人工筋肉とオペレーティングシステムを保護する堅い外装をした虎型の機械獣が動き出す。

「あれは?」

『最新式の対話インターフェイスが搭載された新生アジマス連邦軍の軍用機械獣でしょう』

すると虎型の機械獣が勇人の方を向き、近付く。

『……勇人か?』

「え?……そうだけど……」

『俺は”WT-36k”対話インターフェイス搭載の自立型無人機だ……俺はかつて、お前の先祖に仕えていた……言わば”飼猫”だ……』

「……………」

『どうした?』

「……嫌、自分の事を”俺”って言うAIっていたんだなあ……と思つて……」

『問題あるのか?』

「……全く」

勇人は首を横に振る。

『俺はお前の為に戦う……敵はどいつだ?』

WT-36kは背部にマウントされている高周波チェンソーをマニピュレーター状の尾で振り回し、後脚部に取り付けられている六





陽弥はシグムディアで桶を運ぼうとする。たがその時、桶に彼が何かを持ってへばり付いていた事に、皆は気付いていなかった。

エルシュリア王国とヴァルヴァートル帝国国境付近：嘆きの渓谷で勇人は加速していた。それを追い掛けるドレギアスは勇人に向けて口から迅雷を放つ。

「クッー」

勇人はジャイアントガトリングキャノンと三連ミサイルランチャーを展開し、迎撃する。WT-36kも援護し、接近してくる無数の蛇の大群を高周波チェーンソーで薙ぎ払う。しかし、マニとスヴァとサハスの迅雷がキャタピラを破壊した。

「ぐあっ!!キャタピラが!!」

勇人やWT-36k、アルカディアが横転し、加速が止まった。

「く……………」

コックピットから投げ出された勇人は折れた左腕を抑え、立ち上がろうとした直後、アージユ、アナが勇人に襲い掛かる。

「ぐああああああああ!!」

折れた左腕をアナが噛み付く。ドレギアスは鋭い眼差しで迅雷を放とうとする。

『これで…終わりだ…?』

絶体絶命の勇人の所に、巨大な桶を持ってきた陽弥とスペースノアが来た。

「勇人!」

スペースノアからフェイトに支えられているシンデイが現れた。

「シンデイ!?!」

勇人は驚くと、陽弥がドレギアスに向かって轟き叫ぶ。

「ドレギアス!!お前に良い物を贈ってやるぞ!!」

『何?』

「これでも……………飲んでろ!!!」





急降下しながら一気に振り下ろして斬り込むが、ドレギアスがアーティファルソードⅡの刃を指で抑えつけていた。

「そんな!?!?」

『フフフ!?!?!もう貴様など、恐るに足らず!?!!』

ドレギアスはアーティファルソードⅡを掴み、レオンごと陽弥の方へ投げ飛ばした。

「ぐああああああああ!!!/ちきしよおおおおお!!!」

そしてドレギアスや神帝達が巨大な口を開け、轟き叫んだ。

『『『『我に楯突く愚か者共よ!塵に還れ!!!ラグナロク・オブ・ダウン(終焉の暁)!!!』』』』』

ドレギアスを含む神帝達から禍々しく神々しい迅雷が放たれ、陽弥やレオン、スペーススノアに炸裂した。機体がとてつもない程の損傷を受け、推力を失ったシグムディアとヴェルトヴィンガーやスペーススが墜落した。

「師匠!!!レオンさん!!!シンディ!!!母さん!!!皆!!!」

勇人は必死に叫ぶが、誰一人声に応じる者がいなかった。

『無駄だ……貴様にはもう、誰一人も味方など居らぬ……』

ドレギアスが勇人に語りかけ、迅雷を放とうとする。

『これで終わりだ……』

「クッ!!!」

勇人が目を瞑り、最後を迎えようとした。しかし、何も起こらなかった。

「?………っ!!母さん!!!」

勇人の目の前に、迅雷を抑えているフェイトがバリアを張っていた。

「勇人!諦めちゃ駄目!」

「だけど!もう皆は!」

「大丈夫!彼等は直ぐにエルシュリア王国へ転移させたは!けど、シンディちゃんが!」

「え!?!シンディがどうしたの!?!」

「瓦礫の中に埋まって救い出せないの!?!」

「何だって!!?」

勇人は驚くと、ドレギアスがさらに迅雷の威力を上げる。フェイトは必死に守ろうと、バリアを強くする。勇人はフェイトが守っている間、シンデイがいる瓦礫の山へと向かう。

「シンデイ！何処だ!!シンデイ！」

勇人は荒神へ変身し、スペースノアの破片や岩を退けていく。そしてシンデイが瓦礫に挟まっている姿を確認した。

「シンデイ！シンデイ！」

勇人は瓦礫を退け、シンデイを抱えると、フェイトが吹き飛ばされてきた。

「母さん!!」

「ハア…ハア…ハア…み、見事です、ドレギアス…貴方の勝ちですわ……」

フェイトが敗北を認めると、ドレギアスが言う。

『貴様も見事だ、フェイトよ……』

そしてドレギアスの巨大な口が開く。

「母さん!!」

勇人が手を差し伸べると、フェイトが振り向き、ある事を言う。

「勇人……私の可愛い子……皆を守って……お父さんの様に……貴方の本名は……」

フェイトはそれを告げた直後、ドレギアスに喰われた。

「っ!!!」

フェイトを喰らったドレギアスが、次にシンデイを見る。

「さあ……黄昏の歌姫を渡せ……」

「クッ!!」

勇人が前に出て、拳を構える。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!!」

勇人はたった一人でドレギアスに立ち向かうが、結果……覚醒したドレギアスに与えられず、倒された。倒れた勇人は意識が無く、軀となっていた。

『手こずらせやがって……さて、』

ドレギアスは気を失っているシンデイに近づくと、シンデイが気が付く。

「う……………う……………ここは？」

『気が付いたか、歌姫よ……………』

「ひっ!!!……………う？」

シンデイが驚くと、勇人が倒れている姿に気付く。

「勇人!!」

『無駄だ……………こやつはもう、死んでいる……………』

「……………え？」

『お前を守ろうと、必死になっていたよ……………左腕が無くなりながらも、必死にな……………』

「……………」

シンデイが勇人を揺さぶるも、勇人は起きなかった。

『黄昏の歌姫……………ナダ”よ……………我の為に礎となれ……………』

するとドレギアスの胴体であるサハスの口が開き、シンデイを吸い込もうとする。急激な吸引力にシンデイは必死に勇人にしがみつく。

「う……………う……………勇人……………私、信じているから……………勇人は絶対に諦めない……………私の！」

シンデイは何かを告げ、勇人から貰ったブレスレットを置き、勇人から手を離し、ドレギアスに吸収された。するとドレギアスの体が光だし、姿が変わっていく。神帝アージュ、神帝ムーラ、神帝アナ、神帝マニ、神帝ヴィシュ、神帝スヴァ、神帝サハス、そしてドレギアス。ズアークに黄金の装飾や角と牙が禍々しくなり、巨大な腕と脚が生えた。両腕にそれぞれの力を持っていた。右腕にザ・コア、左腕にザ・シード、そしてドレギアスの額にシンデイが結晶化して、囚われていた。

『我、大災禍の破壊神帝ドレギアス。ズアークは……………これより、全宇宙に裁きの審判を下す!!!手始めに……………我を裏切ったシャンドウアとゼルトラン帝国連合に我からの裁きを下す!!』

ドレギアスはそう宣言すると、紅い月が現れる。

『『『『『『今宵……………嫌、年中は黒き太陽と紅き月が全宇宙を照らすだろ



# Final Wars編

## after story 43：勇人の剣

全宇宙に紅い月と黒き太陽の出現により、全宇宙の行政府や王族達はパニックになっていた。

エルシユリア王国では再建が遊んでおり、負傷した兵士達を看病する者が多かった。包帯だらけの陽弥はオムニツールで全宇宙のニュースを見ていた。内容は分かっていたとおりであった。

『緊急速報です。ドレギアス率いる宇宙帝国軍が先日、加盟国であったシャンドウアとゼルトラン帝国連合を壊滅させ、彼等の住む銀河系を破壊しました。各政府はこの非常事態に全民に緊急移民が発令、各銀河の種族達が母星を離れる事になっております…』

ナレーターがそう言うのと、陽弥はオムニツールを切る。

「何で事だ……………」

「まさか、こんな事になるなんて……………」

各部に包帯や絆創膏が貼られているレオン達は落ち込む。

「すまん、皆…………俺がもっと早くにあのバカの仕掛けた爆弾に気づいていれば……………」

「良いんだ…………俺達も気付かなかったんだ……………」

「…………あの洋介を痛めつけておけば…………くそっ!!」

ジュンが怒りながら、血がにじみ出ている拳を壁にぶつけた。

「ジュン……………」

ロザリーが心配すると、エルシヤに看病されているアラドが言う。

「痛つつ…………それで、そのクソ野郎は何処に？」

「現在、嘆きの溪谷でお兄ちゃんの影響部隊が必死に搜索しているわ、それが非現実的なのか、指名手配された洋介の足跡が全く消えていたの…………まるで、闇の中に隠れているかの様に……………」

《……………》

「…………そう言えば、勇人は？」

レオンが問うと、ルナは首を振る。

その頃、勇人はあの後陽弥達に救出され、急いで緊急治療や回復魔法、さらに大量のアドレナリンや鎮痛剤、酸素カプセル、酸素マスク、メデイカルボットでの緊急手術、ナノマシン投与、輸血の提供もあり、現在は治療カプセルの溶液で、治療されていた。酸素吸入器や脳波測定器など様々な装置が勇人の体に付けられていた。面会ガラスの外にいる雄二達が、勇人を心配していた。

「勇人……」

雄二や真里亞、知彦、志歩、瑠璃、彩乃、礼二が悲しい表情になると、そこにベリトが現れる。

「ベリト……」

「……すまない、俺があの時…ドレギアスに吸収されてなければ……」

ベリトが自分を責めていると、雄二が慌てる。

「いえいえ！あなたのせいではありませんよ！」

「嫌！謝らせてくれ!!」

突然ベリトが、雄二達の前で土下座する。さらに頭を強く地面にぶつけ、額から血が出る。

「そこまでしなくても！」

「ベリト！」

雄二達はベリトの謝罪と土下座を辞めさせるのであった。

その頃、陽弥とエミリアはグランドスフィアに保護されているプリズン・ソウルの居住エリアにいるマリーシエ家を訪ねていた。養子であるヨーコと実子のマナとオリバーとライラはルナに任せており、陽弥とエミリアはマリーシエ夫妻と話していた。

「さて、聞きたいことが山程あります……」

「……ええ」

「シンディ・マリーシエ……彼女があなた方の娘ではないのは、確かで

すね?」

「……はい、私達の子は流産してしまい、それから子供ができなかったのです……だが、18年前の夜……その時、日本に滞在中に、古い館から赤ん坊の鳴き声が聞こえてきたのです。」

「それがシンデイなのですね?」

「ええ……子供が恵まれなかった私達夫妻にとって、シンデイが有いつの娘なの……だから、私達はあの娘を育てる事にしたので……」

するとダニエル・マリーシエがある木箱を持ってきて、陽弥に差し出す。

「これが……シンデイが赤ん坊の時に身に着けていた服とタオルと何かが書かれた紙切れなのです」

木箱を開けると、確かに見たことの無い幼児用の服とタオル、そして紙切れがあり、エミリアはその紙切れに書かれている名前を言う。

『「ナダ」姫を、お願いします』……と書いてあります」

「ナダ……それかシンデイの……あの娘の本当の名前……」

「後……彼女を育てて、何か変わってきた事はありますか?」

「変わってきた事?……あ……あります……あの娘は時々夜中、屋根裏で綺麗な歌を唄うのです。」

「歌?」

「余りに綺麗な歌だった為、翌日の夜に取ったのですが……」  
「ですが?」

「録音したそれが……聴こうとスイッチを入れたら、悲鳴だったので……」

「……悲鳴?」

エミリアが首を傾げると、陽弥がある提案をする。

「防水用カメラ……あります?」

「え?ありますけど……私が惑星アクアに行つて、録音しましょう……もしかしたら、あの娘は泣いたまま唄ったのでしょうか」

「泣いたまま?」

二人は首を傾げると、陽弥がそのラジオを借り、惑星アクアへ転移した。そして数分後、陽弥が濡れた状態で戻ってきたが太陽の力で服



がすぐ乾き、ラジオの音を録音したカメラのスイッチを入れる。

「念のため調整した結果、成功した……始まるぞ」

『…暁の遙か彼方に輝くあの大地

光もて世の幸満たす、恵みし実り

雲の明け行く、あの空の如く

たえなる調べは明日の扉開き照らし出す

母なる大地私は願う

陽は黄金の光で木々を飾る

永久に踊り続けよう

喜びを永遠に捧げよ

絶え間なく時の彼方に過ぎ行く思い出は

涯なく我が胸満たす清らかな夢に

思い馳せしは、あの星のごとく

たえなる調べは明日の扉開き照らし出す

父なる海私は祈る

乙女の笑顔は野を光で満たす

永久に歌い続けよう

喜びを永遠に捧げよ

永遠の愛を私は誓う

空と大地に報われしこの日々が

永久に続くこの時が永遠の幸せを繋ぐよ

永遠の幸せを繋ぎだすよ……』

シンデイの歌を聴いたダニエルとエイダが言う。

「そうーこれだ！」

「まさか……ようやく13年ぶりに聴けたわ……」

シンデイの歌を聴いた陽弥とエミリアは話す。

「エミリア……どう思う？」

「間違いないわ……テンポと音程が……私の永遠語りと同じだわ

……」

「だろ……あのゼロから流れた歌と、今聴いたシンデイの歌が一致した……奴は……歌の民の声を盗んだと思う……俺の推測だと、歌の民

は殺されていない……おそらく声を奪われただけだと思う……すまんがエミリア……歌の民の星へ向かってくれないか？三獣王とユニゴルディアンを貸してやる」

「ええ」

その後、陽弥とエミリア、ルナは子供達を連れて帰り、エミリアは歌の民のいる星へと向かい、陽弥はグランドスフィアの王座の間で、最後の修行をしていると、ヨーコとマナが話し掛けてきた。

「お父ちゃん！」

「お義父さん♪」

すると陽弥の周りに魔法陣が浮かび上がり、目の前に置いてある太刀が宙に浮く。そして陽弥は立ち上がり、鞘を付けたまま、華麗な剣技をする。そして日本刀から何かを感じた……。

「この太刀……多分……もしかしたら、勇人なら使いこなせると思う……だが、出来るのか？あれは使いこなせると思うが……」

陽弥は台に置かれている剣があった。剣先が禍々しく赤黒くなっており、刀身は神々しく光で満ちている赤き剣であった。

「光の炎と闇の焰が合わさった、真炎の聖魔剣……『シャイニングオブダーク』……そして、この太刀は……明らかに普通の剣ではない……？」

陽弥は心配そうに見ると、隠れて見ていたヨーコとマナに気付く。

「何だ？用があるのか？」

「お父ちゃん！勇人兄ちゃんが！」

「え!?!」

陽弥は台に置かれているシャイニングオブダークを持ち、急いで目を覚ました勇人の所へ戻る。

勇人はベッドの上でココア持っていた。

「勇人！」

「……師匠」

勇人は落ち込んだ表情で話す。

「すみません……僕……守れなかった……」

「……いいんだ、悪いのは俺の方だ……」

「皆は？」

「安心しろ、無事だ……それより、ドレギアスのいる所が分かった」

「何処です!？」

「禁断の地”混沌の狭間”だ……奴はそこにデススファイアと共に根城を建てている……俺達は全勢力を持って、そこへ叩き込む……」

「けど、全勢力を集めた所で、何も……」

「何も?……全勢力には彼等もいる♪」

「彼等?」

するとドアが開き、現れたのは残存している神々の長であった。流石の雄二達もこれには驚くのであった。

「貴方が勇人君ですね、私はラー……よろしく♪」

「クロノスだ、荒神の坊主」

「オーデイン……この宇宙を守護する神だ……中級の神である陽弥の弟子なら喜んで助太刀いたそう」

『天照大御神と申します〜♪』

心強い味方が来てくれたことに、勇人は涙を流す。

「お前は一人ではない、俺や皆……ここにいるお前の友達もいる」

雄二達は勇人を見て笑顔で返す。勇人は決意する自分を庇って死んだ母や愛するシンデイを助ける事に……。

「ありがとう……師匠……」

勇人は立ち上がり、強い眼差しで陽弥を見る。

「僕、嫌……俺……やる……やり遂げる」

陽弥は、勇人の眼の闘志の炎を見て、笑う。

「ハハハ……それでこそ、護星神に相応しいやつだ……」

「え?」

「言つての通りだ……今日からお前は、オムニバースを守護する者

……10人目の護星神だ」

陽弥からの衝撃の発言に、勇人や雄二達は驚く。

「どうした? 荒神の坊主」

「…え!? あ、いえ…あまりに凄く強烈な発言だったので…でも、何で俺が護星神に? それに護星神はそれぞれの9つの世界を護るために…」

「あの御方からの命ですから」

ラーが彼の名を言う。

「あの御方…」 混沌の存在 カオス”からです」

「カオス…」

「あの御方が何を考えているのかは分からないが、こう言える…」

するとクロノス、ラー、オーデイン、天照大御神、そして陽弥が膝まづく。

「オムニバースを守護する護星神…我等の”蒼世神王”…何なりと御命令を…」

突然の事に、勇人は動揺してしまう。

「そんな! そこまでしなくても!」

「俺は…お前を信じる何故なら」

陽弥は立ち上がり、背部に背負っていたシャイニングオブダークを抜く。

「お前を…凄く誇りに思う程の息子でもあるからな♪」

陽弥が満面の笑顔で返すと、勇人はシャイニングオブダークを受け取る。

「この剣は?」

「俺とブラムの力が宿った剣…言わばお前の為に作った剣だ…そして」

すると陽弥がある太刀取り出した。

「それは?」

「…話さなければならぬことがある。勇人…落ち着いて聞け、お前は普通のクアンタ人ではない…ブリタニア皇家の子孫なのだ…君は…」

「…知っています」

「え?」

「母さんが死ぬ際に教えてくれました…自分がクアンタ皇家の長男

の末裔と…そして本名も…」

「！」

「でも、俺は気にしません…全力持って戦います…大好きなあの娘を助ける為に！」

勇人の決意に、誰もが驚くと、陽弥が言う。

「愛の試練、頑張れよ！」

陽弥は勇人に太刀を渡す。勇人がその太刀を見て、ある事に気付く。

「あれ？この太刀って…雑貨屋で買った刀…」

「そう…不思議な事に、その太刀はかつてお前の先祖が使っていた八つの剣に隠されたもう一つの剣…『スサノオ』だ」

「スサノオ…日本神話に出てくる荒ぶる神…」

「今のお前にちようど良いだろう？」

勇人は鞘から太刀を引き抜こうとしても抜けなかったが、刀身には凄まじき覇道を感じ、青い宝石が輝く。

「これ抜けない…」

「気付いたか、そうなんだ…神様でもある俺も抜けなかったんだ…その太刀には何か不思議な力を感じたんだ…まるで何かを試しているかのように…ある説では、それを引き抜いた者は全宇宙の覇皇とされる…」

「何か聖剣エクスカリバーみたいだなあ…引き抜いた者は王となりてという感じみたい…」

《……………》

皆はそう考える中、天井裏に勇人達の話盗み聞きしていた洋介が笑っていた。

## afterstory44：皇家の覚醒

退院した勇人は格納庫にあるアダムを見る。

「大丈夫、アダム？」

『私は大丈夫です、シン・ギデオンとジェームズ・マクライト、ミライ・マクライトによって100.0%修復されましたので♪』

「そっか…」

『勇人は大丈夫ですか？ 貴方がブリタニア皇家の子孫であり、10人目の護星神に選ばれて……』

「……緊張する、このスサノオが抜けたら解れるんだが……」

『……怖いのですか？』

「え？」

アダムの間に、勇人は頷く。

「うん……正直に言うくと、まだ……ドレギアスの恐怖に圧されているんだ……それでも、乗り越えたいんだ」

『……私は、勇人を応援します。あなたが最高の『ヒーロー』になると……』

『『ヒーロー』か……（ヒーロー……憧れたなあ、子供の頃、あのスーツ……本当にカッコ良かったなあ）』

勇人は、自分の憧れのヒーローを演じている姿を、想像していた。

『思想力が上昇しておりますよ』

「……え!? そんなどこまでスキャンするの!?!」

「さらに心拍数が増えています」

「そこまでスキャンしないで!」

『何故ですか?』

「何故って……はあく……もういい……取り敢えず、スサノオをここに置いておくよ」

『見張っておきます』

勇人は整備用の道具が置かれているデスクの上に、スサノオを置き、格納庫を去る。

エルシュリア王国直属研究所『プランター』では、志歩がこの世界の技術を勉強しており、ある物を制作に成功した。

「出来た〜!! 私自作の強化剤! その名も”スーパーヤクト”!!」  
隣にいるシンが言う。

「何だそれ? 麻薬か?」

「いえいえ、これは飲んだだけで、自身のパワーやスピードか数千倍に上がるのです! まあ、後の二つは失敗作なんですけど……てへへ♪」  
「てへへじゃないだろ……結局麻薬だろ、見ろ」

シンはスポイトで液を吸い上げ、特殊なシートに落とすと、シートが青黒く染まる。

「こんなにな青黒くなるって言うことは今までの薬物の何千倍もあるってことだ!! 分かっているのか!？」

シンが志歩に怒鳴る。

「ごめんなさい」

「全く、気を付けろよ……っ!？」

突然室内が暗くなり、研究者達が動揺する。

「何だ!？」

「何が!？」

シンも志歩も動揺していた直後、背後からレンチを持った何者かがシンと志歩を打つ。二人が気を失うと、その影が持っていた薬を盗み出し、通気ダクトへと入る。

薬を盗んだ洋介は格納庫に到着し、アダムの側に置いてあるスサノオを見る。

「誰もいない……良し」

洋介は、盗んだスーパーヤクトを飲む。

「うー………うう……ウウツ!!!」

洋介の体が見る見ると大きくなり、皮膚が破け、強靱なオーガへと

変貌した。

「あの剣……オデのだ……」

洋介が徐々にスサノオに近付き、触れようとした直後、スサノオが光だし、金色の電磁波が放たれ、洋介に触れるのを拒む。

「っ!!?どうなってるんだ!?!」

洋介が慌てていると、何処からか勇人の声が格納庫内に響く。

「残念だったな!」

すると周りに隠れていた狙撃兵や衛兵達が現れ、スナイパーライフルや槍と盾を構え、洋介を囲む。すると兵達の中から勇人と陽弥達だが、それぞれの剣を構えていた。特に陽弥とシンとレオンが鬼の表情で洋介を睨み付ける。

「お前の企みなど、お見通しだったよ!先祖の剣を盗んで、それを引き抜いて王になるつもりだったんだろ!天井裏で盗み聞きしていた事は俺と師匠と全神々も知っていたんだからな!!」

「くそおお!!……くそおお!!……くそおお!!……くそおお!!」

洋介は怒鳴りながら、電磁波を放つスサノオを盗む。

「これはオデのだ!!オデが神になるんだああああ!!」

洋介は吼えながら、強靱な肉体で突進する。

「まずい!!狙撃班!撃て!!」

陽弥の号令と共に、狙撃兵達がスナイパーライフルを撃ちまくる。弾は麻醉弾で洋介の皮膚に注射針刺さるが、何ともなく、衛兵の防壁の陣を突破する。レオンとジュンがアースセイバーとスパルダを構え突き付け、洋介の腕に攻撃する。しかし、スーパーヤクトの効力のせいか、刃が通らなかつた。

「何っ!!?／嘘だろ!!?」

「邪魔だああああ!!」

洋介は剛腕でレオンとジュンを振り払う。

「待て!!!このクズ野郎!!!」

レオンがアースセイバーを構え、走り出す。陽弥もガイアブリングァーを構え、洋介の前に立ち塞がる。

「よくも八塩折仕込酒作戦を邪魔をして!!ただで住むと思うな!!泥棒



「がっ!!」

「うるせえ!!神の王に逆らうなアア!!」

洋介はそう言うと、大ジャンプして、陽弥の上を通り過ぎ、格納庫から出る。

「クソ!!」

陽弥達は急いで洋介の後を追うと、洋介の目の前に重装甲部隊や戦車、ガンシップ、セイクリッドメール、パラメールの部隊が立ち塞がっており、先頭に頭に包帯を付けたシンがオムニシールドとヘビーマシンガンを待っていた。

「逃げられないぞ、クソ野郎」

「テメエ！生きてたのか!!」

「あの娘もだ……欲に堕ちたな、化物が」

「化物じゃない！オデは王だ!!この国や全宇宙を支配者であるぞ!!」

「……殺れ！」

全部隊の銃弾や砲弾の雨が洋介に炸裂する。

「……（全く持って腹が立つ!!コイツの家系はどんな風に育てられたのか……人間を何と思っているのやら!!後でコイツを捉えて、父親と共に処刑してやるか、陽弥の弟子をゴミの様に差別した分を傭兵団『ブルーサンズ』の刑務所に引き渡して、奴隷の様に扱ってやる……あそこは犯罪者の溜まり場だからなあ……）……っ!!」

煙の中から洋介が突進してきて、シンは急いでオムニシールドで防御するが、吹き飛ばされた。

「クソ!!」

洋介はそのまま戦車の防衛網を突破し、エルシュリア王国城門を破壊する。

「まずい！ガンシップ!!追撃しろ!!」

シンがガンシップ部隊に命令し、洋介に追撃命令を下す。数機のガンシップがバルカン砲や乗組員と共に追撃する。

「こっち来んな!!」

洋介は抉れた岩を持ち上げ、ガンシップに投げ付ける。ガンシップは回避するも、後方にいたガンシップに直撃した。



陽弥達はただここで見ることに悔しがる。そして今も勇人はスサノオや洋介に痛ぶられる。

「どうした！どうした！その程度か？勇人!!」

「う!!」

勇人は洋介に殴られながらも、スサノオを離さなかった。

「(このまま、終わるのか……スサノオに命を削られ、洋介に殴り殺させる……シンデイも助けられないのか……)」

勇人がそう思っていると、ポケットから、ある物が出てきた。

「？」

それは、勇人が八歳にシンデイに上げた手作りのブレスレットであった。勇人はそのブレスレットを見て、将来の約束を思い出す。

『(この戦いが終わったら……その……俺と結婚してくれ！)』

『(!)』

『(この先、何年後、嫌、何十年もずっと一緒に居よう！二人で!)』  
『(yes! 勿論です! ワタシも勇人と一緒に居たい! 離れたくない! これからもずっと幸せに暮らしたいです!)』

二人の誓い合う言葉を思い出し、歯をくいしばる。

「俺は、まだ……死にたくない! こんなところで幼馴染を助けないまま……この太刀に命を喰われ、大嫌いな奴をぶん殴れないまま死ぬのは嫌だ!!」

勇人はスサノオを振り上げ、洋介の顔に炸裂させた。

「っ!!」

洋介が吹き飛ぶと、勇人は立ち上がる。

「父さん……母さん……俺はまだ、そっちには行かない! シンデイや皆が……仲間が俺を呼んでいるんだ!! こんなところで俺は……俺は……俺は!! まだ!! くだばらねええええっ!!!」

勇人が紅き月と黒き太陽が輝くホライゾンへ轟き叫ぶと、勇人の中にある何かが光、メビウスの輪を描く。すると、勇人の体が光だし、姿が変わっていく。

「何だ?……この不思議な光は?」

光が勇人の体に集まり、形を変えていく。それは和をモデルにした蒼い甲冑であり、黄金の装飾、兜の立てものが日輪と三日月の様な装飾になっており、勇人の面に禍々しく怒り表情を顕にする鬼面と面頬が付けられており、鬼神と思わせていた。

「これは？」

するとスサノオの鞆に銃の引き金とマガジンが装着されていた。

「抜けて言うのか？」

勇人は緊張しながら、刀を抜こうとすると、洋介が突進してくる。

「一か八か!!」

勇人はスサノオを持ち、勇人に向かって走り出す。勇人がスサノオを抜き取ろうとすると、何処からか声が聞こえてきた。

「まだだ!!」

「!？」

「相手の軌道と隙を見分ける!」

「相手の軌道…」

勇人は何故か目を瞑り、洋介の行動を読むと、勇人が足を止めた。そして洋介の拳が振り下ろされると、目を瞑ったまま、右に回避し、粒子発動を放つ。

「っ!!」

すると洋介の腕が、急に脱力すると、今度は足に粒子発動を放つ。

「な!!何でだ!?!…腕と足に力が!!」

そして勇人が洋介の前に回り込み、居合の体制を構える。

「プライドとエゴを守ろうとして…破壊神に魂を売った洋介…覚悟はできてるだろうなあ？」

勇人の鋭い眼差しと鬼面と面頬から放つ殺意と恐怖、そして勇人の笑顔が、洋介の心を震わせた。

「(!!、な…何だ!?!…コイツの眼差しを見ていると、何だ…何でこんなに震えてるんだ!?!…な…何なんだよ!?!)」

洋介が恐怖に溺れる最中、勇人は太刀の鞆の引き金を引いた。太刀が弾丸のように飛び出すと同時に、刀身が光り輝く、そして光が薄くなる、刀身がその輝きを顕にした。それは…刀身全てが宇宙であ



勇人が返事すると、シンが要請したブルーサンズの隊員とトゥーリアンのウォーダンと言う所長に言う。

「コイツを囚人収容船パーガトリーの監禁室にブチ込んどけ!!」

シンが怒鳴りながら命令し、ブルーサンズが輸送艇であらゆる拘束具で縛り付けられた洋介を運び、囚人収容船パーガトリーへとワープした。

「洋介の奴はどうなるんですか?」

礼二が問うと、陽弥が説明する。

「パーガトリーは徹底した管理と厳しい懲罰がある…だがブルーサンズは…裏では奴隷売買するのが目的で、行き先はエクリプスが管理しているトリリウム採掘場だ…そこで働かされる奴隷の大半が犯罪者奴隷で、ほとんど朝から晩まで強制労働が続くらしい。脱走も完璧に200%不可能な大要塞で物凄く厳しい監獄なんだ…」

「労働などしたことのない洋介にとっては地獄だろうなあ…しかし、そうでなくては。自分の犯した罪を身を持って味わわなければ、死んだ者や強姦された者達も納得しないだろう…」

「無理もない…薬で元の姿に戻されたあと、激しい精神苦痛と飲んだスーパージャクトの中毒症状がでる…たぶん、どの犯罪者奴隷よりも地獄だろう…」

陽弥はそう言い、エルシユリア城へ戻るのであった。

勇人は自室で鞘から抜けたスサノオの手入れをする。

「綺麗な刀…」

オムニバースの様に輝くスサノオに、勇人はさらに手入れする。その時、彼の自室の手前に、未来の陽弥が腰掛けて、タバコを吸っていた。

「ここまでの役目は終えた…わしはもう、自分の未来に戻っておくぞ…」

ワームホールを展開した未来の陽弥は、未来へと帰還したのであった。

## after story 45：戦の準備

洋介を逮捕した翌日、ギャラリック・リングのワームホールで、全宇宙にいるあらゆる勢力……宇宙秩序軍”、”反乱同盟軍”、”銀河連合自由同盟国”、”惑星連邦”、”聖府軍”、”星間国家連合”、”汎銀河統一帝国”、”ファウンダー軍事盟約連邦”、”還星系共和国”、”惑星連合”、”非加盟種族同盟国”、”人類銀河共和国”、”モーフィス”、”ザンダー共和国”、”多種族次元革命連合『レボリユード』”、”新アジマス連邦”、”銀河連邦”、”ホライゾン同盟国”、”フロンティア”、そして”ヴァルキュリアス”の全艦隊が集結しつたあった。

雄二達は全宇宙のあらゆる戦力に感心する。

「うわあ、すげえ数だ」

「あらゆる部隊や艦隊だから……デススファイアを完全に叩くなら、これだけの戦力もおかしくないって事だ……」

「この戦い……本当に勝てるのでしょうか……」

突然、彩乃が怖気づくような事を言い出し始めた。

「正直、怖いのです……多くの人達が苦しみながら絶命するのが……」

《……》

雄二達が考え込んでいると、スサノオとシャイニングオブダークを背負った勇人が現れ、声を掛ける。

「誰だって同じだよ……皆それぞれ違う覚悟を背負っている……俺もそう、現実や死から逃げたいと思ってる……だけど、俺にはかけがえない仲間や頼りにしてくれてる友達……そしてそれを支えてくれる愛する人がいる……この戦い、絶対に勝って……大好きなあの娘に……」告る”って！」

《おお〜！》

雄二達は興奮していると、レオンが呼ぶ。

「ほら！ボケつとしてないで、そろそろ陽弥の演説が始まるぞー！」

《は〜い！》

勇人達は、すぐにヴァルキュリアスの軍服に着換え、陽弥が演説する広間へと集まる。

広間にはたくさん兵と艦隊が列になっており、ホライゾンから、生中継で数多の勢力へと広がっていた。

「我が同士よ！……守ると決意した友よ！……俺は！ここに宣言する！我々の世界や全治を脅かす存在宇宙帝国軍ディアヴォリアスと、それを率いる破壊神帝ドレギアス・ズークは現在、混沌の狭間でデススフィアと共に根城を建てている！！チャンスなのだ！！奴らの兵器であるデススフィアを一気に叩き込めるのは！我等にはまだ生きる権利がある！我々の正義を奴をぶつけるのだ！我々はそのなものを恐れない！我々は強い！我々達の思いは無敵だ！……暗黒と光明に分けられた理の12柱の男女神に……我々に勝利が導かれるだろう！同士よ！立ち上がれ！今こそ！我々の意思を一つに！例え我々が地に堕ちいても、この翼は折れない！！！！」

《おおおおおおおお！！！！》

全勢力の戦士たちが、雄叫びを上げて、戦の準備に取り掛かるのであった。

演説が終え、勇人は一緒に連れて行くWT-36kと星獣契約したカオスドレイクと話していた。

「ごめんな……お前も戦わせることになっちゃって……」

「いえ……我はマイ マスターの行動と共に、役目を全うします」

「全うだなんて……止めてくれよ、死亡フラグみたいな宣告を……」

「お前はどうか？ 機械獣……」



『俺は…勇人の護衛だ…勇人が死ねば、ブリタニア皇家の血筋が決裂し、滅びを迎えるだけだ…』

「そんな役目、いいのに…WT…ダメだ…覚えにくいなあ、そんな名前よりいい名前があるんだ…」

勇人はWT-36kにいい名前を言う…その名は

”白瑛” ……白く透き通った心を持っているから、白瑛…」

『白瑛……分かった、これからは俺をそう呼ぶと良い♪』

「フフ……さて、行きますか、ドレイク、白瑛」

『「御意」』

カオスドレイクと白瑛が領き、シタデルへと向かう。

陽弥達はマナ達をアストラッド王に預け、エミリアとシン達と共に、シタデルへ転移し、レオン達もヒュウガとアレクトラ、そしてサラ達を自分たちの世界の真なる地球へ返し、戦へと向かう。グラントスファイアが管理する宙域で、数多の艦隊が集結しつつ、オリジナルのギャラリック・リングを起動した。

「ギャラリック・リング……禁断の地である混沌の狭間のゲートを開け!!」

シンの声と共に、ギャラリック・リングが起動し、巨大なワームホールへと変形した。

「各艦隊、総旗艦であるシタデルに続け!」

シタデルを先頭に、全勢力が続ぎ、ワームホールへと入るのであった。

## afterstory 46 : 暗黒大戦

シタデルの格納庫では、陽弥達に最終決戦仕様のアームド・ベースが装備されていた。それを見たレオン達が驚く。

「こ……これが!？」

「対ディアヴオリアス大型戦略殲滅兵器!？」

「ローグオリュンポス!？」

オリュンポスとは……かつてシンがドウムとの戦いに使っていた全長100メートルもある巨大サポートカスタムアーマーであり、巨大なウエポンコンテナと左右に大型ビーム砲とジェネレーターが二つずつ装備されており、下部に腕らしきアームが4本あり、大型ブースターが装備されている。謂わば『巨大な武器庫』と呼ばれていた。

それが、シンのペルシウスや陽弥とエミリアのシグムディアとシグニュー、レオン達のヴェルトヴィンガー達や勇人のアダムと合体していた。

「フッフ、まだまだ……さらにオリュンポスに強力な武装を取り付けた」  
♪

すると格納庫のフレキシブルアームが何かを搬送してきた。それは上半身が人型に近い形態を採っており、下半身に相当する部位は口ケットバーニアと両肩に大型の盾が装備されていた。さらに続々の武装が姿を現す。大型ミサイルポッド、多連装拡散レーザー、ロングカルネージランチャー、ハイメガシールドキャノン、超大型対艦ミサイル等の様々な重兵器が出てくる。

「これ……全部使っているのですか!？」

「良いよ♪良いよ♪……ドレギアスは相当な戦力で来る……だから武装のコストを最大値上げておいたから♪」

レオンや陽弥は興奮し、早速好きな武装を取り付ける。

レオンのは、両側面に超大型ソーテッドカノンと対艦ミサイル発射管、高エネルギー収束火線砲、A・B・C (Anti Beam C

oating) ジェネレーター、大型クローアーム、ハイメガシールドビットを備えたオリュンポス。

タスクのは、両側面にメガ・ビーム砲、誘導ミサイル発射管、高出カエネルギー収束砲、A・B・C ジェネレーター、大型クローアーム、ハイメガブラスタークャノンを備えたオリュンポス。

ジュンのは、両側面に3連装大型ビームガトリング砲、誘導ミサイル発射管、A・B・C ジェネレーター、ハイメガランチャー、大型クローアームを備えたオリュンポス。

コモンのは、両側面に高出力ビームワイヤーブレード、誘導ミサイル発射管、A・B・C ジェネレーター、ハイメガライフル、4連装マルチランチャー、大型クローアームを備えたオリュンポス。

アラドのは、両側面に高火力ノバビームガトリング砲、誘導ミサイル発射管、対艦ミサイルポッド、パルスレーザーキャノン、A・B・C ジェネレーター、メガ・ビーム砲、フォールディング・バズーカ、大型クローアームを備えたオリュンポス。

リアースのは、右側面に高出力対艦スナイパーキャノン、左側面中型ミサイルポッド、対空ガトリング砲、誘導ミサイル発射管、対空多連装拡散レーザー、A・B・C ジェネレーター、大型クローアームを備えたオリュンポス。

陽弥のは、両側面にハイメガ・ビーム砲とA・B・C ジェネレーター、ソーデッドカノン、そして12基のマニピレーターアーム、大型対艦ミサイルポッド、中型ミサイル発射管、有線式大型クローアーム、ハイメガライフルビット、対艦ソードファンネル、船首部ハイノバ粒子砲、シザービット12基、A・B・C ジェネレーター、小型含め246基を備えた最新式のオリュンポス。

エミリアのは、右側面に超大型ドリルランス、左側面に超大型エネルギーシールド、12基のマニピレーターアーム、有線式大型クローアーム、シールドビット134基、ランスビット14基、A・B・C ジェネレーター、船首部ハイノバ粒子砲を備えた陽弥同等のオリュンポス。

フェイズのは、右側面に大型タクティカルロッド、左側面にハイメ

ガシールド、86基のオラクルビット、A・B・C ジェネレーター、船首部ハイノバ粒子砲、大型クローアームを備えたオリュンポス。

アストラのは、右側面に大型ソード、左側面に大型ビームシールド、対艦ミサイル発射管、A・B・C ジェネレーター、

ベイボルスのは、右側面に大型スピア、左側面にパイルバンカー、大型ガトリングキャノン、誘導ミサイル発射管、A・B・C ジェネレーター、大型クローアームを備えたオリュンポス。

アイリスのは、両側面にフランクスポウ『大型ロングボウ』、対艦ミサイル発射管、A・B・C ジェネレーター、

大型クローアームを備えたオリュンポス

そして勇人のは、両側面に大型メガビーム砲とA・B・C ジェネレーター、対艦ミサイルコンテナ、対艦ミサイルポッド、誘導ミサイル発射管、有線式ワイヤーバンカー、マイクロミサイル、後方邀撃ミサイル、大型集束ミサイル、自衛用無人機『シド』が16基、船首部ハイメガ粒子砲、大型クローアーム、対空拡散レーザーを備えた大型のオリュンポスであった。

勇人はシンに問う。

「本当に良いのですか？」

「良いに決まっていますだろ、DARPA社はお前を全力で支援するぞ♪弾薬やエネルギーがガス欠になりかけたら、補給か武装追加しても良いからな♪」

「……あ、ありがとうございます」

勇人は呆れ、シタデルが率いる正規軍がついに、禁断の地である混沌の狭間へと辿り着く。

『全艦隊、ワームホール通過確認 戦域突入支援艇発信せよ』

オペレーターの指示に、ヴェクタの核兵器であるレッドダストを乗せた支援艇が母艦から発進されていき、それに続き、全艦隊やユグドラシルから機体や戦闘機が発進していく。その中にオリュンポス部隊も発進していた。全艦隊と共に、禍々しく揺らめく空間とデブリの中を突き進んでいくと、目の前に、デブリの小惑星帯を盾にしているデススフィアが見えた。そしてデススフィアの前に母艦並の大きさ

を持つ異次元生命体とネブラ銀河帝国とコーパス艦隊が立ち塞がっていた。

『全艦隊！艦砲射撃用意、撃てえ!!』

全艦隊の主砲や副主砲から、粒子砲や高エネルギービームが放たれる。攻撃が着弾と同時に、敵側も攻撃を開始した。先行のセイクリツドメイル、ガルドメイル、ギムガルム、戦闘機が敵機と交戦し、勇人達もオリュンポスの高機動ブースターの出力を上げる。

「行くぞ!!!」

レオンとタスクは両側面のソーデッドカノンから放出される巨大な高周波ソードで、敵艦に接近し、高出力エネルギーソードを振り回す。巨大なソードが敵艦隊を一刀両断し、さらに襲い掛かる敵を切り裂く。

ジュンとアラドが全武装で敵をマルチロックオンし、敵艦に向けて、乱れ撃つ。ジュンから放たれたビームとミサイルの雨が、敵機や敵艦を駆逐していく。

コモンもビームワイヤーブレードを蛇のような動きで伸ばし、敵艦の艦橋を次々と貫く。

リアースは前線基地であるEnIIや皆を支援する為に、大型スナイパーキャノンを構え、敵機を狙撃していく。

アストラとベイボルス、アイリスも次々と敵艦と敵機を撃沈していく。

陽弥も移動しながら、敵艦に向けて、ハイノバ粒子砲を放、接近してくる敵にマニピレーターアームの先端部に付いているビームマシガンや2基の対艦ソードファンネルとシザービットで迎撃していく。エミリアもドリルランスとエネルギーシールドを構え、突撃していく。

フェイズも大型タクティカルロッドを掲げ、敵艦の頭上に巨大な魔法陣を展開する。

「降り注げーシャイニングジャベリン!!」

魔法陣から光の投槍が降り注ぎ、敵艦を撃沈していく。

勇人は大型メガビーム砲で敵を撃墜し、大型クローアームから大型

ビームサーベルを展開し、敵艦の艦橋を切り裂く。さらに敵のミサイルを拡散レーザーで撃ち落とし、連結していたシドを起動する。

「シド！展開！」

シドが両肩のフレシキブルコートを構え、両腕のガトリングキャノンを乱射する。

「？」

すると奥にメデューサを発射しようとするボウ將軍の戦闘艦がおり、勇人は急いでシドに命令する。

「シド！フアランクス形態!!」

シド達がフレシキブルコートを構え、連結していく。そしてメデューサが放たれると、メデューサがシドのフレシキブルコートにより、拡散・無効化させ、ガトリングキャノンを乱射する。

「馬鹿な!!」

ガトリングの弾丸が艦橋や装甲を破壊し、ボウ將軍の戦闘艦が撃沈された。

「ん？」

勇人はモニター画面を見ると、ミサイルポッドとメガビーム砲の弾頭数とエネルギー残量が少ないことに気づき、巨大なデブリの裏に隠れている補給艦へと急ぐ。補給艦には戦闘で破損した機体や戦闘機が格納されており、勇人のオリュンポスを着艦させる。

「次の弾頭数とメガビーム砲の補給を急いで！」

《了解！》

勇人は整備員にまかせ、水分補給を摂る。

「このままだと戦力が減る……一か八か！」

勇人はさらに、オリュンポスの武装を追加する。

「レッドダスト4基と多連装拡散レーザーの追加を頼む！」

オリュンポスの両肩面武器コンテナに核ミサイルであるレッドダストとが装着されていた。

「もう出る！ありがとう！」

勇人はそう言い、出撃する。

戦況はとてつもなく酷く、正規軍が押し負けていた。陽弥は旋回しながらミサイルを発射し、敵機を撃墜していく。

「くそっ！倒しても倒しても切りがない!!」

陽弥そう言い、レオンがデススファイアを見る。

「やっぱり、ここは直接ドレギアスを倒したほうが!!」

レオンがそう言うと、異次元生命体達が立ち塞がる。

「クソ!!」

誰もがそう思ったその時、勇人のメガビーム砲が異次元生命体達を蹴散らした。

「師匠！レオンさん！」

「勇人!!」

そして勇人が、陽弥達に説明する。

「俺がレッドダストでデススファイアに穴を開けます！待機しているレッドダスト部隊にも伝えてください!!」

勇人はそう言い、デススファイアへと向かう。

「よし！みんな聞いてくれ！勇人がレッドダストでデススファイアに穴を開ける！待機しているレッドダスト部隊は、勇人と共にデススファイアに穴を開けてくれ!!」

陽弥の指示に、全艦隊が一斉に勇人の前を立ち塞ぐ艦隊に目掛けて、艦砲支援する。陽弥達も勇人の援護していく。

そしてケラ・デ・ジャムの艦隊が迫りくる正規軍に苦戦する。

「何をしている!!撃ち落とせ！っ!!」

つと、ケラ・デ・ジャムの前に勇人のオリュンポスが現れ、大型クローアームから大型ビームサーベルを放出し、艦橋を切り裂いた。

「邪魔だ!!」

勇人は撃沈したケラ・デ・ジャムの戦艦を盾に、防衛網を潜る。

「喰らえ!!」

マルチサイルが飛び、次々に敵機を駆逐していく。デススファイアが丸腰になると、勇人はレッドダストを発射し、勇人に続いていた部

隊も、レッドダストを発射し、デススフィアに直撃した。核の炎、閃光、衝撃、爆風がネブラ帝国軍とコーパス艦隊を襲う。煙が晴れると、デススフィアに大穴が空いており、オリュンポスも通れる通気口が開いていた。

「見えた!!」

勇人はブースターの出力を上げ、デススフィア内部へと侵入し、大型ビームサーベルやメガビーム砲で突き通して行くと、陽弥達が追いついて来た。

「勇人!!」

「師匠!レオンさん!皆!」

陽弥はデススフィアの全体をスキャンし、全体図を表示させる。

「この通気口の先に、デススフィアの中枢部がある……ドレギアスはきつと……この先にいる!」

「へへ!今の俺らの武装なら、互角に戦えるぜ!」

ジュンがそう言うと、リアースが言う。

「そう言つて、本人が叩かれると思うよ!」

「言つてろ!リアース!」

「二人共!無駄口はそこまでだ!」

アラドが注意すると、陽弥が報告する。

「間もなく……デススフィア中枢部に着くぞ、五秒前……3、2、1……!」

通気口の出口を抜けた先は、黒く染まった空間であった。

「……真っ暗だ、何にも見えん」

アストラはヴォルダンのツインアイでライトを付け、辺りを見渡した直後、闇の中から巨大な剣が現れ、アストラ目掛けて伸びた。

「アストラ!!」

壁に叩き込まれたアストラは、大型ソードで巨大な剣を受け止めていた。その時、中枢部全体が明るくなる。

《ツ!!?》

勇人達は驚く。禍々しい数千の眼球、巨大な両腕にはザ・コアとザ・ソードを持っており、破壊神帝アージュ・ズアーク、破壊神帝ムーラ・



ズアーク、破壊神帝アナ・ズアーク、破壊神帝マニ・ズアーク、破壊神帝スヴァ・ズアーク、破壊神帝ヴィシユ・ズアーク、破壊神帝サハス・ズアークの頭部に、剣と思わしき禍々しい角が生えていた。そして七体の破壊神帝の上に、四本の腕を生やした破壊神帝ドレギアス・ズアークが紅蓮のメイスと蒼海のソード、稲妻のチェインハンマー、疾風のアームキャノンと蒼海のソード、頭頂部に黄泉の禍太刀、背中に赤い珠である灼熱の珠、黄色の珠である災厄の珠、緑の珠である憤怒の珠、青い珠である虚無の珠、そして四つの珠の中枢部に紫の珠である憎悪の珠と、憎悪の珠の前に小さな黒い珠である混沌の珠が付いた黄金の光輪が輝いていた。

「で!!でかい!!」

ホライゾンで戦った時よりも大きく、全神々の全長を越えるほどであった。破壊神帝マニの攻撃を大型ソードで防いでいるアストラが言う。

「コイツ！本当にドレギアスか!?!もしかして、これが…ドレギアスの本来の力!?!」

するとドレギアスが疾風のアームキャノンを向け、禍々しい緑の閃光を発するビームを発射した。

「アストラ!!」

爆炎の中から、アストラのオリュンポスが出てくる。

「危ねえ!危ねえ!」

アストラは体制を立て直すと同時に、陽弥が号令を掛ける。

《おう!!!》

レオン達が一斉にオリュンポスの出力を上げて、突撃すると、数千の眼球から拡散レーザーが放たれ、アイリスとフェイズとコモン、タスクを吹き飛ばした。

「うおおおおおおおつ!!!」

陽弥はソーデッドカノンを振り下ろすが、破壊神帝アナ・ズアークがバリアを張る。ソーデッドカノンが弾かれたことに驚く。

「何?!?!」

その直後、破壊神帝アナ・ズアークが襲い掛かり、陽弥が吹き飛ば

される。

「陽弥！」

「陽弥様！」

「師匠!!」

皆は、吹き飛ばされた陽弥の方を向いた直後、破壊神帝が宙に浮かび、猛スピードでレオンとエミリア、勇人に襲い掛かる。ドレギアス・ズアークは蒼海のソードを振り下ろすと、エミリアがエネルギーシールドで抑える。

「今です!!」

エミリアが抑えている隙にリアースとアイリスが大型スナイパーキャノンとフアランクスポウで狙撃するが、ビームが着弾と同時に拡散される。

「硬い!!」

その直後、稲妻と電撃を発するチェーンハンマーとアームキャノンを放ち、リアースとアイリスに襲い掛かる。

「うわああああっ!!」

「リアース!!アイリス」

レオンと勇人、立て直した陽弥が、ソーデッドカノンを突き刺すが、アナ・ズアークとアージユ・ズアークのバリアによって、防御される。

「勇人!!」

勇人が大型ビームサーベルを振り下ろされ、バリアを破壊した。

「ジュンさん！コモンさん！アラドさん！フェイズさん！」

ジュン、コモン、アラドが誘導ミサイルを発射すると。破壊神帝マナ・ズアーク、スヴァ・ズアーク、ヴィシユ・ズアークが首を伸ばして襲い掛かってきた。

「クッ!!」

「突き上げろ、大地よ！」

フェイズが呪紋を唱えると、地面から巨大な岩の刃が突き出し、三体の破壊神帝の攻撃を防御する。

『何?』

すると岩の刃から、ベイボルスとタスクが飛び出し、大型スピアと

ハイメガブラスタークャノンを放ち、ドレギアスを吹き飛ばした。

『フンツ!!小生意気な羽虫共が!!』

ドレギアスや破壊神帝達の眼が光りだすと、ドレギアスの周りに、大樹が生える。

「何だ!?!」

「陽弥さん!あれを!」

フェイズの指差す方向を見ると、大樹の周りに巨大な紋章が張られていた。

「……まさか!?!」

そして大樹に向けて、曙光が照らし出され、大樹の葉から透き通った雫が落ち、ドレギアスに付着すると、ドレギアスや破壊神帝達の傷が癒やされていく。さらに大樹から、妖精達がドレギアスに力を回復させた。その現象を見た陽弥言う。

「フェアリースターだど!!?!如何なる状態や傷を完全に癒やす最高クラスしか使えない古の呪紋!!」

『その通り……我は全ての呪紋と奥義が使える……どんなに抗っても無意味だ』

ドレギアスは笑いながら、灼熱のメイスを地面に叩きつけ、無数の爆炎を撒き散らす。

《!!》

勇人達は爆炎に巻き込まれるが、オリュンポスを犠牲にし、無事に回避できたが、回復しまドレギアスに不安を抱く。

「くそっ!」

「そんな……」

「こんな奴……倒せっこねえ……」

「それでも!!」

皆がドレギアスの恐怖する中、勇人がアダムの背部に装備された神刀『クサナギ』を抜刀する。

「シンディを救い!ドレギアスを倒す!!」

陽弥達も、それぞれの武器を抜き、ドレギアス・ズアークに向かって行くのであった。

## after story 47：唯我独尊

その頃、真なる地球でレオン達の帰りを待っているサラ達は……。  
「レオン……」

愛する夫の帰りを待つサラとヒュウガの所に、アンジユとアレクト  
ラが声を掛ける。

「大丈夫よ、サラ子…レオンとタスクが負ける筈がない…」

「アンジユ……」

サラがそう思っていると、紅い月と黒い太陽の間に、星が光る。  
「？」

すると星が徐々に大きくなると思いきや、その正体は光の球体で  
あった。光の球体はサラとアンジユと接触すると、形を変える。

「…!?あなたは!？」

サラはその人物を見て、驚くのであった。

その頃デススフィア中枢部では、勇人達がドレギアス・ズアークに  
苦戦していた。レオンとタスクは破壊神帝アージユ・ズアークに挑  
む。

「エールシュヴァルト!」

『ブライングウイングリフター』

ヴェルトヴィンガーのシャイニングウイングから12基のエール  
シュヴァルトが一斉に射出され、タスクのエグゾディアスからリフ  
ターが分裂し、アージユ・ズアークにオールレンジ攻撃をする。

『何も、効かんぞ!!!羽虫が!!』

アージユ・ズアークがレオンとタスクに襲い掛かる。

「くっ!!」

レオンとタスクはアーティファルソードⅡとグランジヤベリンでアージユ・ズアークの攻撃を受け止める。

『ほお？この我を受け止めるとは……中々、やるなあ』

アージユ・ズアークが鋭い眼差しで、レオンとタスクに威圧する。

「グツ!!……こんな威圧、初めてだ!」

「っ!!……これまでの敵より、遥かに越えている!!」

レオンとがアージユ・ズアークに威圧されていると、隙きを狙ったのか、レオンとタスクの背後に回り込み、牙を向く。レオンとタスクはすぐにビームシールドで無限毒液が付いている牙での攻撃を受け流すのであった。

ジyunはオレイカルコスブレードで破壊神帝ムーラ・ズアークを相手していた。

『ハハハ!!強力な武装もないくせに!それで精一杯か?』

ムーラ・ズアークがジyunを挑発させながら、両眼から禍々しい収束レーザーを放つ。ジyunはオレイカルコスブレードを傾け、レーザーを屈折させる。

「このっ!蛇野郎!!」

ジyunはブチ切れ、龍装光を発動する。

「狼・龍装光!!」

オレイカルコスブレードから狼極龍王が召喚され、ソニックライザーのアーマーへとなる。

『狼極龍王とは……面白い!来るがいい!!』

ムーラは楽しそうに笑い、角を光らせる。

「ほざいてろ!!」

ジyunが狼極龍王の青いオーラを放つオレイカルコスブレードを付き構え、ムーラへ突進した。

コモンとアラドはフェニックスライザーとグリムライザーで破壊神帝ヴィシュを相手していた。

リアースとアイリスは破壊神帝マニに苦戦していた。

ベイボルスとアストラは破壊神帝アナ

フエイズは破壊神帝スヴァ

陽弥とエミリアは七体の胴体である破壊神帝サハスを相手する。

「奴らを支えているのは、胴体であるサハス・ズアークー!」

陽弥はデメテルブリンガーを抜き、サハスに攻撃した直後、サハスが持つていたザ・コアが形を変え、オレンジに輝く巨大な盾へとなり、デメテルブリンガーを防御する。

「何っ!?!」

『何も効かぬわ!!』

サハスが今度は、ザ・シードの形を変え、巨大な青き巨大な剣と化し、陽弥を薙ぎ払う。

「陽弥様!・っ!!」

エミリアが陽弥の所へ駆け付けようとした直後、サハスがザ・シードを振り下ろす。エミリアは急いでエネルギーシールドを展開し防御するが、叩き込まれる。

「エミリアッ!!クソ!!」

陽弥はハイパーノバビームライフルを乱射する。

『ハハハ!!我に刃向かうとは、威勢のいい神だ!』

サハスは眼からビームを放ち、無数の爆炎を放つ。

勇人はクサナギを持ち、ドレギアスへと掛ける。

「うおおおおおお!!」

『来るがいい、荒神よ!』

「ドレギアアアアアス!!!」

勇人はクサナギを振り上げ、一気に振り下ろす。ドレギアスも蒼海の剣でクサナギを防御する。

「くっ!」

『フハハハ!!我を、止めることはできない!全ての世界を破壊し、真の平和な世界に変える!』

「何が平和だ!!お前の作る世界は何もない世界だろ!!」

『それがどうした?お前達は散々命を弄んできたのではないか?我は

破壊神帝であり、”創造神王”でもある！」

ドレギアスは灼熱のメイスを振り下ろし、勇人を叩き落とした。そして稲妻のチェーンハンマーの鎖で、アダムの首を締め付ける。

「グッ!!!」

締め付けられた勇人がドレギアスに振り回される。そしてチェーンハンマーから電撃が流れる。

「うあ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ!!!」

電流が勇人の体を痺れさせる。

『フハハハ!! 潔く諦めろ! そうすれば楽にしてやるぞ!』

「!!……黙れえええええええ!!!」

アダムから閃光が輝き、ドレギアスを眩かせる。

「今だ!」

体制を立て直した勇人は逆に、チェーンハンマーを掴み、電流を流す。

『!!』

勇人とドレギアスの電流がぶつかり、チェーンハンマーが壊れる。

「まだ終わってねえ!!」

勇人はアドバンスドライフルを構え、下部のミサイルランチャーを構える。

「……っ!!」

するとドレギアスの額に、結晶化したシンデイが囚われている直後、衝撃が勇人を襲った。

「……あ……ああ……?」

モニターから紫の投槍が突き破っており、勇人の胸と心臓を貫いていた。そしてドレギアスは投槍を締め、勇人とアダムごと飲み込んだ。勇人が食われた所を昇っていた陽弥が叫ぶ。

「勇人おおおおおおお!!!」

一方、勇人はどこか知らない異空間の中を漂っていた。

「俺……死んだのか……」

勇人は自分の胸の風穴を見る。

「くそ……ん？」

すると何処からか、少女の歌声が聞こえてきた。

「この歌は？」

すると異空間の中から、一つの光が出てくる。

「これは？」

勇人は光を覗くと、そこに写ったのは今も破壊神帝と戦っている陽弥達であった。

「!!」

次に、混沌の狭間で敵艦を駆逐しているシンの姿があった。

「……皆ー」

すると今度は、ある男の子が公園で遊んでいた。

「あれは？……」

男の子はただ一人……砂場で遊んでいた。遊んでくれる友達や保護者もいなかった。すると何処からか、歌声が聞こえてきた。

「♪♪♪」

「？」

男の子は歌が聞こえてくる滑り台の方へ行くと、滑り台の上に白いワンピースの女の子が、涙を流しながら歌っていた。それを見ていた男の子が拍手をする。

「？」

女の子が滑り台を滑り下り、挨拶する。

「名前は？」

「……新川 勇人……」

「!!」

それを見ていた勇人は、自身の幼少の名前を聞き、気づく。

「(そうだ……これ、俺がまだ三歳の頃……公園で、”あの娘”の出会い



だ……)」

勇人はその二人を見てみると、別の光が現れ、全宇宙の人々の思い映像として映し出される。

「これ……全部、みんなの光……」

すると今度は、8人の兄弟クアンタ皇家の思い出が映し出される。8人は当たり前の日々を当たり前過ごしていた。一緒に御飯を食べたり、寝て、笑ったり、泣いたり、たまには喧嘩もしたり、そして……大事な人の側にいたり、民から愛されていた……平和な日々であった。

「クアンタ達は、こんなにも光を持っていたんだ……キガオロチを倒せたのも、みんなの光が彼等を支え、一緒に戦っていった!!」

すると、勇人の胸から緑に光るメビウスの輪が出てきた。

「この光は？」

その頃、アウラの塔で避難している民達の所に、サラ達が声を掛ける。

「皆！諦めちゃダメ！ここで希望を捨ててはいけません！私達には……まだ生きる権利があります！大切な人共に、未来へと！」

《！》

落ち込んでいた民達がサラの方へ顔を上げる。そしてそれは、陽弥の世界にも同じようなことがあっていた。

「諦めるな！」

アストラッド王やルナ達が民達に声を掛ける。

「私達はまだ負けていない！何もせず終わってしまうことなんてない！」

「まだ……できることはある……陽弥達殿は今も、戦っている！」

リヨウマも声を掛け……

「そうよ！私達は、あんな奴に良いように滅ぼされるゴミなんかじゃ

ない!」

ソファイアも声を掛け……

「諦めたら……そこで終わる!……希望を捨てんじゃね!!」

そしてそれは今も戦っている陽弥達も同じであった。

「まだ!……終わってねえ!!」

デメテルブリンガーを地面に突き立て、立ち上がる陽弥。

「人は……確かに過ちを犯してしまう生き物だ!!」

レオンもアーティファルソードⅡを突き立て、立ち上がる。

「だがな!人には……お前みたいな神よりも凄い事をする!!」

そしてジュン、コモン、アラド、リアース、エミリア、タスク、アストラ、ベイボルス、アイリスも立ち上がる。

「それはなあ……」力を合わせる事なんだ!!仲間を作るって事だ!!」

「仲間がいれば……勇気が湧く!」

「一人一人は弱くても……力を合わせれば、どんな強大な敵や神にも倒せる!!」

「何度倒されても立ち上がる!!」

「間違えてしまった事あつても、仲間達の声が導いてくれます!!」

「そう……俺達は、何度でも立ち上がる!!」

「どんな状況に陥っても!!」

「私達は、アンタみたいな破壊する事しか考えない神には!!」

《負けない!!!》

皆の言葉を聞いたドレギアスや神帝達が高笑いする。

《フハハハハハ!!!何が、仲間だ? いい加減、お前たちの現状を把握……っ!!?!?!?!》

すると陽弥達の体が、黄金に光る。

『何だ!!?この光は!!?』

そしてそれは、デススファイアの戦域や全宇宙でも起こっていた。正規軍艦隊や艦内にいる人達、それぞれの宇宙に生きる人達、全神々が

黄金に輝き始め、黄金のオーラを放つ。サラ達は黄金のオーラを放つ民達を見て、空を見上げる。

「彼」の言う通りでした……『人は……生きる希望の光になる』と……」

そしてサラやヒュウガ自身の体からも光が溢れる。

そして勇人は光るメビウスの輪を見てると、メビウスの輪が光の珠へとなる。すると光の玉珠から二つの珠が出てくる。

「炎と風……二つの力が一つになりし時、己の光が目覚める」

勇人がそう言うのと、ガントレットのコスモバイルからカオスドレイクが出てくる。

「マスターよ……」

「ドレイク……もし、俺がこれから先、凄い事を起こそうと思っているんだ……協力してくれる？」

「当たり前だ……我はどんな事が起ころうとも、マスターの命に従う」  
するとドレイクの体が青白く輝き、結晶の体を持つ美しきドラゴンへと覚醒した。

「……ドレイク、その姿!?!」

「今の我はドレイクではない……我の名は時空を統べる銀河七聖龍」  
時空神龍「だ!?!」

「……時空神龍」

「さあ、マスターよ! 轟き叫んでください!」

時空神龍の頼みに、勇人は光を手にし、轟き叫んだ。

「みんなの心を……一つに、龍装光!!」

時空神龍が雄叫びを上げ、大破したアダムや勇人に憑依すると、炎と風と光が勇人やアダムや時空神龍と融合し、光の卵へとなる。光の卵の表面にヒビがはいり、光が漏れ、卵が割れると、中から純白の頭部と胴体と脚と腕に兜と鎧と肩鎧と籠手と脛当て、白き陣羽織、六つの目の鬼面、背部に四本腕がそれぞれ二つずつアドバンスドライブ

ル、ソーデツドカノン、そしてシャイニングソードとダークブレードを持っていた。その姿はまさに、白き崇高な鬼神と言つてもいい姿であつた。勇人は自分の容姿を見て、驚く。

『これが…俺…』

鎧と籠手や掌にメビウスの輪が描かれており、右、左腰部にクサナギと思わしき太刀と巨大化したシャイニングオブダークがそれぞれ二つずつ装備されていた。勇人は太刀を引き抜くと、頭の中からアダムと時空神龍の声が響く。

『主よ…』

「時空神龍にアダム？」

『背中の大剣を引き抜いてください』

「背中の大剣？」

勇人は六本腕で背中の中央部に装備されている者を持つと同時に、高周波のノバビームの刃が放出される。

神々しいその大剣から、暖かいみんなの思いが体中に流れ込むと、ある奥義と能力を覚える。そしてアダムと時空神龍が大剣の名を言う。

『神刀 天叢雲牙（アマノソウウンガ）』

大剣の名を聞くと、アマノソウウンガの中央の空洞部のガラス状のプレート内に『極』と漢字で表示される。

「良し!!行くぜ!!」

勇人は兜のフェイスを付け、アマノソウウンガを突き付け、天に向けて、異空間を刺すと、<sup>突き刺した空間がひび割れた。</sup>

『おおおおおおおおおつ!!?』

ドレギアス・ズアークや<sup>!!</sup>神帝達が<sup>!!</sup>苦しみだした事に、陽弥達は不思議に思う。

「何だ!?!」

「ドレギアスが…苦しんでいる!?!一体何で!?!」

するとサハスに一線の光が浮き出ると、血が吹き出す。

『まさか!?!』

血が吹き出す傷から、巨大な手が出てきて、傷を広げ、中からアマ



「どうやら、二体が瞬殺されたことに警戒が強まったようだなあ」

レオンがアーティファルソードⅡを付き構える。

「だなー」

陽弥もデメテルブリンガーとビームガーターを付き構える。そしてジュン達も武器を構える。

『皆…良し!!』

勇人はアマノソウウンガや全ての剣を鞘から引き抜いて、ドレギアスに突き付ける。

『俺の名は、”新川 勇人”…ブリタニア皇家最後の末裔、真の名は…”フォルティア・ブリタニア・クアンタ”!!全てを滅ぼす破壊神帝ドレギアス・ズアークを！討ち滅ぼす者なり!!』

勇人の決め台詞と共に、陽弥、レオン、タスク、ジュン、コモン、アラド、リアース、アストラ、ベイボルス、アイリス、エミリア、フェイズが一斉にドレギアスと神帝達へ突撃して行くのであった。









スヴァが怒った直後、ローレイが呪紋を唱えた。

『ディープフリーズ!!』

スヴァの体から冷気が漂い、スヴァが凍り付く。そしてリュウガとサラが収斂時空砲と超収斂時空砲を構える。

「喰らうがいい!!」

リュウガのヤマトとサラの焰龍號の肩から竜巻状のビームが発射され、スヴァに炸裂した。再生が間に合わなくなっているスヴァは体制を立て直そうとしたその直後、アイリスのウルトヴァイスの矢が直撃した。

『馬鹿な……………』

最後にアストラの大剣が振り下ろされ、スヴァが真つ二つになった。

ちょうど同じ頃、ジュンとコモン、アラドとリアース、援護に駆け付けてきてくれたロザリー、エルシャ、クリス、そして陽弥の世界のハンク、ゾーラ、バン、カズ、サイ、フィーリ、ロザリー、エルシャ、クリスは神帝アナを迎撃していた。ジュンの斬撃とコモンの華麗なアクロバティックがマナを翻弄し、アラドが一突きがアナの額に炸裂する。

『グアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

アナが苦しんで油断しているところ、リアースが弓弦を引き絞り、最大の矢を放った。

『ッ!!?』

アナの頭上にリアースが放った光の矢が突き刺さり、最後にジュンとコモンの斬撃がアナの首に炸裂した。アナは目の輝きを失い、絶命

した。

エミリアもアリアード、メリダ、ジアート、エルネアと共に、サハスと交戦していた。サハスはザ・コアのシールドでエルネアの矢を弾く。そしてアリアードとエミリアが突き攻撃をしたが、ザ・シールドの剣が迫る。するとエミリアはあることに気づく。サハスの右脇腹に大きな古傷があることに、エミリアはシグニューの出力を最大に上げ、古傷に向けてエネルギーランスを突き付けた。

「行くわよ!!」

エネルギーランスが古傷に直撃し、アリアードも騎兵銃槍を古傷に向けて突き刺した。

『この野郎!!だが、こんなの痛くも痒くもないわ!!』

エルネアやメリダ、ジアートがエミリアとアリアードを援護する。

『フンッ!そろそろこの羽虫をはたき落とすか』

「はあああああああっ!!!」

エミリアとアリアードの槍が同時に古傷に突き刺さり、サハスの体内を削っていく。

『ま?!まさか?!?...このサハスがクアンタ人に...っ!!!』

サハスの額が爆発を起こし、中からエミリアとアリアードが飛び出てきた。サハスはザ・コアとザ・シールドを落とし、倒れた。

タスク達も疲れ果て掛けているヴィシュを追いつめる。

『ハァー・ハァー・ハァー!こんな筈ではない!我らは大厄災!破壊の神でもあるぞ!!』

ヴィシュがそう言っていると、天井が崩れ、ボロボロのアージュと



陽弥達が合流する。

《勇者!!》

「皆!」

その直後、ドレギアスの蒼海の剣が勇者の胴体を貫く。

『馬鹿が!!……っ!!』

よく見ると、勇者は蒼海の剣を掴んでおり、手から赤い血が滲み出ていた。

『馬鹿な!!』

ドレギアスは剣を必死に引き抜こうとした直後、勇者が言う。

『もう……お前なんて怖くない!!』

勇者の拳に緑色のエネルギーが纏い、ドレギアスの顔面に炸裂した。

『グアアッ!!!』

ドレギアスが吹き飛ばされると、陽弥達の剣が光だす。

「これは!」

陽弥達は驚いていると、剣から古の銀河七聖龍である『超神星煌龍帝ノヴァ』、『天空龍皇ルシエル』、『狼極龍皇アイゼンガルド』、『呀龍王マルス』、『霊峯山魔龍帝エンデ』、『劍聖龍騎神リユミエル』、『紅蓮帝テルスカ』、そしてルナ達やアストラ達、勇者の体から陽弥から『太陽神龍アポロブレイブ』と『陽光神龍アポロドラゴニス』と『黒陽神龍アポロドレイク』と『紅蓮龍騎神 クリムゾンドラゴン』と『聖光神皇龍ゴツドシャイニングドラゴン』、ルナの『月光神龍ルナティック』、リヨウマ『雷光神龍ライトニング』ソフィア『妖精神龍エンシェンター』アレクトラとルチル『双頭神龍ガルス』エミリア『蓮華帝レヴィアント』アストラ『金牛龍王モードロック』ベイボルス『殻将皇レギオンサー』アイリス『異海神ルクシオン』勇者の『時空神龍ビツクバイパー』が現れると、陽弥達の体が光り出す。陽弥が白、レオンが黄金、ジユンが青、コモンが赤、アラドが緑、リアースが紫、フェイズが深紅の珠へとなり、他の龍達もそれぞれの色を持つ珠へとなると、光輪へとなる。そして光輪は勇者の背部に付けられる。

『ハア~~~~~……!!!』

!!!!!!

勇人が体内のメビウスの輪の気を増幅し、光輪から古の銀河七聖龍の首が出てきた。それはまるで勇人の後ろに光り輝く崇高なオロチが君臨しているみたいであった。ドレギアスはそれに驚いていた。

『馬鹿なっ!!? 一体どうやってあんな力が!!? ……くそ!!』

ドレギアスは背中の中身の光輪の混沌の珠を使い、朽ちた神帝達を生き返らせる。破壊神帝達はデススフィアの外壁を破壊し、勇人と光る七体の龍を睨みつける。

『貴様……一体、何者なんだ!!?』

ドレギアスが勇人に問うと、七体の龍から陽弥達の声と共に勇人は返答する。

『私のことか? ……言っただろ? 我はクアンタ皇家” フォルティア・ブリタニア・クアンタ” だと……そして!!』

一瞬であったのか、ドレギアスの目の前に勇人が緑のエネルギーを纏った拳を構える。

『我の名は超神羅 オリジン・プライム!!!』

そして勇人の拳がドレギアスやサハスに直撃する。上空へ吹き飛ばされたドレギアス達のさらにその上にワームホールが現れ、吸い込まれる。

『我は全で! 我は生命!!』

勇人はそう言い、ワームホールの中に吸い込まれたドレギアスを追っていくのであった。

紅い月と黒き太陽で照らされている偽りの地球（レオン側の世界）では、レオンの友人達がボランティア活動をしていた。

「紅い月に黒い太陽……一体、どうなってるんだ？」

「分からない……何かと途轍もなく禍々しい邪気を感じますわ」

「あの……ランチ、ここに置いておきますわよ」

二人の元に勇ましくなったシルヴィアが声を掛けると、

「おい！何だあれ!？」

難民の一人が、崩れて廃墟になったアケノミハシラ上空に、突然現れた巨大なワームホールに指を指す。

「何だ……あれは?」

彼等や難民が不思議に思っている直後、ワームホールから白く輝く鬼神と黒く禍々しい蛇の化物が吹き飛んで来た。

「こつちに落ちてくるぞ!!」

難民達は急いでその場から離れ、勇人とドレギアスが転がりながら、戦う。

『グウウウウウツ!!死ね!!愚かなクアンタ人の様に!!』

ドレギアスはアージュ、アナに命令し、口から迅雷を放つが、龍になったレオンと陽弥が口からホーリーブレスを放つ。迅雷がホーリーブレスに消されると、レオンと陽弥がドレギアスに言う。

『そんな攻撃！一切通用しないぞ!!』

『お前の攻撃はもう、読んでいる!!』

二体の龍からレオンの声を聞いたレオンの友人達が驚く。

「今の声……レオン!？」

「嘘!？」

彼等は驚いていると、今度はジュン、コモンが言う。

『俺達は、お前みたいな破壊神には負けんぞ!!』

『そう！僕たちは八人の皇帝に選ばれた者!』

ジュンとコモンがムーラ、マニに噛み付くと、アラド、リアースが

近距離でスヴァとヴィシュに噛み付く。

『俺達は負けない!』

『僕たちは!生きる資格がある!』

そしてフェイズが光り輝く角でサハスの突き刺す。

『僕も!生きる資格がある!!大切な仲間達が待っている!!』

アマノソウウンガを持った勇人もドレギアスに言う。

「俺には!待ってってくれる仲間がいる!!帰る場所もある!!」

アマノソウウンガを振り回す勇人、ドレギアスもマガダイトウで応戦する。

『何を言っている!!所詮人間は争いの事しか考えない無能な虫けらだ!!!』

すると勇人の後ろに巨大なワームホールが現れ、ドレギアスと勇人を吸い込み、消滅した。

次に着いた場所は、プリズン・ソウルに囚われている勇人の世界であり、住んでいた街であった。勇人とドレギアスは上空で殴り合うが、ドレギアスが勇人を叩き落とすのであった。

『痛たたた...あの野郎!』

勇人が叩き落された場所は、勇人が通っていた高校であった。教室の窓から生徒達が覗いていると、ドレギアスがエネルギーをチャージし、口から禍々しい迅雷放った。

『『『『『我に楯突く愚か者が!!塵に還れ!!!!ラグナロク・オブ・ダウン(終焉の暁)!!!!』』』』』

勇人は急いで、全範囲にレイジングバリアを展開し、ドレギアス達の迅雷を防御する。

『クッ!!』

迅雷を終えると、学校にいる生徒達の安全を確認する。

『大丈夫か!?』





引き剥がした直後、ドレギアスや神帝達が苦しみだす。勇人はその隙にサマーソルトキックを繰り出し、ドレギアスを蹴り上げ、ワームホールの中に吸い込ませ、追い掛ける。そして勇人はワームホールの中でドレギアスを百烈蹴りで蹴り続ける。その時、勇人達は意識の中である物を感じる。

『この感じ……暖かい』

『何だろうか？皆の元気な声が聞こえてくる……』

『俺達……きつと、未来を見ていると思う！』

『それなら、この勝負！』

『俺達の勝ちだ!!』

『それにするためには!』

『この戦い……終わらせて!』

『皆で生き抜きましょう!!』

『……行こうぜ!!俺達の明日へ!!』

ワームホールを抜けると、混沌の狭間であり、勇人はドレギアスを蹴り上げ、真上にデスファイアが見えた。そして勇人がドレギアスをさらに蹴り続け、デスファイアごと蹴り上げる。その光景を見ていたシン達が驚く。

「凄い!!」

「あんなでかい要塞が吹き飛ばされていく!!?」

「スゲエエエエエエエ!!」

そしてデスファイアの真上に超巨大なワームホールが現れ、デスファイアごと何処かへとワープした。

そしてデスファイアが着いた場所は、宇宙の中心点であるオムニバースであり、勇人はメガボンバーナックルでドレギアスとデススファイアを吹き飛ばした。

『己れれれれれれれれれれ!!!この我がまた敗れるだ?!あり得ん!!あり!!!』

得ぬ!!!」

『『『『『今度こそ!!!塵に還れ!!!ラグナロク・オブ・ダウン（終焉の暁）!!!』』』』』

!!ドレギアスを含む神帝達から禍々しく神々しい迅雷が放たれると、  
勇人はアマノソウウンガを抜き、レオンと陽弥が本来あるべきのヴェ  
ルトヴィンガーとシグムディアへとなる。

『もう、俺は負けない!!ドレギアス！覚悟!!』

レオンはアーティファルソードIIに金色のオーラを宿らせて、レオ  
ンは上空に高く舞い上がり、奥義を放った。

『天空究極奥義!!!霸王龍王剣!!!』

急降下しながら一気に振り下ろして斬り込むとアーティファル  
ソードIIの刃から黄金に輝く真空の刃が放たれ、ドレギアスと神帝の  
ラグナロク・オブ・ダウンとぶつかる。

『俺も行くぞ!!』

陽弥もエクシードとヴェルデライズ、デメテルブリンガーに純白の  
オーラを宿らせて、奥義を放った。

『銀河最終奥義!!!轟炎獅子鳳翼翔!!!』

回転しながら、一気に三刀流を振り回し、燃え盛る鳳凰がラグナロ  
ク・オブ・ダウンと激突する。

『勇人！行け!!』

『あるんだろ？お前の奥義が!』

陽弥とレオンが勇人に言うと、勇人は笑顔のまま、アマノソウウン  
ガを上空に掲げる。

『見よ!!ドレギアス!!これが俺達の絆奥義!!』

するとアマノソウウンガが強く光だし、デススフィアをも越えるほ  
どの超巨大な剣へと変わった。そして勇人は渾身を込めて叫ぶ。

『行くぞ!!絆奥義!!!悪・即・斬ああああああん!!!』

巨大なアマノソウウンガの中央の空洞部のガラス状のプレート内  
に『無限』と漢字で表示され、一気に振り下ろされ、レオンの奥義と  
陽弥の奥義と共に、ドレギアスのラグナロク・オブ・ダウンを拡散し  
ながら、デススフィアごとドレギアスを真っ二つにした。そしてドレ



ンデイが目を覚まし、勇人達は驚く。

「シンデイー！」

「勇人!!」

シンデイは起き上がり、勇人に抱きつく。

「良かった〜！でも、何でキスしたら起きたのか？」

「おとぎ話であるだろ？『眠り姫』の話聞いたことあるだろ…愛する  
姫の呪いを解くには魔法のキスって♪」

陽弥がそう言っている間、勇人がシンデイを心配する。

「シンデイー！大丈夫!？」

「ええ♪」

「それじゃ…♪」

勇人が突然シンデイをを持ち上げてお姫様抱っこして、テラスの方  
へ走り出し、テラスから飛び降りる。

《っ!!?》

陽弥達が驚くと、下からアダムの肩の上で着地した勇人とシンデイ  
が現れる。

「師匠！ちよつくら皆を迎えに行ってきます!!」

勇人はそう言い、次元跳躍し、プリズン・ソウルごとこの次元に移  
送させたことは、誰も知る由もなかった。

## トウルルーエピローグ：それぞれの生活

3年後、ある家で女性が小説を書いていた。人気小説家の名前は真里亞……彼女は根岸家の長女で元ハッカーであったが、得意なことを良いことに活かし、ある小説を書いていた。

この物語には続きがあります、ドレギアスの戦いから七ヶ月後、陽弥総統の世界と天空の勇者レオン・マクライトの世界、あらゆる世界の行政府達は互いの存在を知りようになり、彼らとの友好、治安維持、未開惑星保護条約を結ぶようになり、至る問題を解決しました。

ドレギアスと共につるんでいたネブラ銀河帝国は終戦条約を結び、宇宙連邦の加盟国として平和条約を結びましたが、コーパスは相変わらず条約を断言しており、クアンタの技術を盗み出そうしています。組織が崩壊するのは時間の問題ではありませんでしょう。

陽弥総統は雄二を次期ヴァルクリアス総統に任命され、現在は宰相を務めており、優れた政策を打ち出すズバ抜けた政治手腕と実行力で問題を解決していくのであった。

知彦と玲二はリヨウマ・ネイルの元で修行を終え、現在は真なる地球で、愛する奥さん旦那さんと共に育児生活をしている。

志歩は陽弥の父の会社で、様々な物を開発し、ギャラリック・リングを使った宇宙港を開いたと言う。

瑠璃は超神級のジャーナリストであったため、多彩なメカで情報を新聞にしていくのであった。

彩乃はレオン・マクライトの世界にあるマギー医院長の病院で働く事になり、様々な医薬品開発していくのであった。

勇人とシンディ？……二人は一ヶ月後に結婚、そして二年後に二人の子供を授かり、宇宙連邦と共に新生クアンタ帝国を再建、勇人は新生クアンタ帝国皇帝『勇人・ブリタニア・クアンタ』と名を変え、シンディも新生クアンタ帝国皇妃『シンシア・ケラン・クアンタ』と名乗った。

陽弥総統は相変わらず、治安維持法を続けており、エミリア妃殿下と六人の子供と共に暮らしています。

レオン達もそれぞれの奥さんと子供達と共に幸せに過ごしている  
と……。

そして私も、ベリトと結婚して、シンディに続いてもうすぐママに  
なります。

海が見える丘で真里亞とベリトは、一緒に海を眺め、真里亞がゴム  
動力飛行機を飛ばす。

「私達の物語は続く…何時でも、何処でも……フフ♪」

真里亞はそう言い、ベリトの腕に抱き付き、青い海を眺めるので  
あった。

真里亞の小説である『ガーディアンズ・オブ・ユニバース』の最後  
にはこう書かれていた。

『万物を守り抜いた龍の光を持つ守護者達よ、未来を駆け巡り…血  
筋を持つ者達に思いを託せ…』と……。